岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 136

旦山遺跡
惣台遺跡
野辺張遺跡
先旦山遺跡
旦山古墳群
奥田古墳
水神ケ峪遺跡

岡山県北流通センター
建設に伴う発掘調査

1999

岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 136

旦山遺跡
惣台遺跡
野辺張遺跡
先旦山遺跡
旦山古墳群
奥田古墳
水神ケ峪遺跡

岡山県北流通センター
建設に伴う発掘調査

1999

岡山県教育委員会

1．惣台遺跡

2．先旦山遺跡

1．旦山 1 号墳

2．旦山 4 号墳

奥田古墳

1．旦山遺跡建物群

2．惣台遺跡段状遺構30出土土器

序

岡山県は、県北流通の拠点として真庭郡久世町と落合町にまたがる地区に、県北流通センターの建設を企画しました。

岡山県教育委員会では、建設予定地内における埋蔵文化財の取り扱いについて、関係当局と繰り返し協議を行いました。その結果、工事によってやむなく破壊される部分については、記録保存のための発掘調査を行うこととし、岡山県古代吉備文化財センターが平成６年度に確認調査に着手し、この年引き続いて全面調査に入り、年度の明けた平成７・８年度にわたっても全面調査を実施しました。

この報告書には、久世町中原に所在する旦山遺跡・野辺張遺跡・先旦山遺跡・旦山古墳群・奥田古墳・水神ヶ峪遺跡と、久世町三崎所在の惣台遺跡を収録しています。遺構は、竪穴住居・建物・土壙・古墳・土壙墓などがあり、遺物は、多数の土器に加えて、石器や鉄器なども掲載しています。弥生時代や古墳時代の遺構や遺物に限られることなく、縄文時代から江戸時代に至る各時代の貴重な資料を提供できたものと考えております。

この報告書が、地域歴史研究を一層深める資料となり、また文化財保護・保存のために役立つならば、幸甚に存じます。

発掘調査および報告書の作成にあたっては、岡山県埋蔵文化財保護審議会委員各位には幾度となく来跡いただき、多くのご教示とご指導を賜りました。さらに、岡山県商工労働部企業立地対策課、真庭地方振興局地域振興室、久世町企画課、久世町教育委員会、ならびに地元の関係各位から、暖かいご理解とご協力をいただきました。末筆ながら、記して厚くお礼申し上げる次第です。

平成11年３月

岡山県古代吉備文化財センター
所　長　**葛　原　克　人**

例　　言

1．本報告書は、岡山県北流通センターの建設に伴い、岡山県商工労働部企業立地対策課の依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センターが平成６年度から平成８年度にかけて発掘調査を実施した、旦山遺跡・惣台遺跡・先旦山遺跡・野辺張遺跡・旦山古墳群・奥田古墳・水神ヶ峪遺跡の発掘調査報告書である。

2．惣台遺跡は、真庭郡久世町三崎に所在するが、残る６遺跡は、いずれも久世町中原に所在する。

3．発掘調査にあたっては、岡山県文化財保護審議会委員の近藤義郎・水内昌康両氏より、ご指導をいただいた。また、現場において、地元の船津昭雄氏をはじめ、小林博昭・亀田修一・白石純の諸氏よりご助言をいただいた。そして、調査・整理を通して、久世町教育委員会の池上博氏より、ご教示・ご助力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。

4．本報告書の作成は、平成９年度に岡山県古代吉備文化財センターにおいて、センター職員の浅倉秀昭・福田正継・大森充宏が担当して行った。

5．本報告書の編集は、福田が中心となって行った。また、各遺構の執筆については、基本的には発掘調査担当者が分担し、文責は文末に明記した。

6．出土遺物の写真については、江尻泰幸氏のご協力・ご援助を仰いだ。

7．本報告書に関わる出土遺物のうち、一部のものについて鑑定・同定および分析を、下記の諸氏・機関に依頼して行った。

石器・石製品の石材鑑定	妹尾　護（倉敷芸術科学大学）
鉄滓分析	大澤　正己（九州テクノリサーチ株式会社）
出土土器の胎土分析・産地同定	白石　純（岡山理科大学自然科学研究所）

8．本報告書に使用した高度は海抜高であり、方位は磁北である。

9．第１章第２図と第２章第１図は、久世町作成の久世町全図NO.2（１：10000）を複製し、加筆したものである。

10．本報告書の遺構および遺物実測図の縮尺率は、下記のように統一して明記している。例外についても、縮尺率を明記している。

遺構

竪穴住居 1/80　段状遺構 1/80　掘立柱建物 1/80　土壙・土壙墓 1/30　溝 1/80

遺物

土器 1/4　土製品 1/2　石器・石製品 1/2　金属器・金属製品 1/2　玉類 1/1

11．遺物番号は、土器には番号だけを、土器以外のものには、材質を示すため、下記の略号を番号の前に付した。

土製品：C　石器・石製品：S　金属器・金属製品：M

12．出土遺物ならびに図面・写真などは、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）において保管している。

本 文 目 次

序
例　　言
目　　次
第１章　調査の経緯と経過 …… 1
　第１節　調査の経緯 …… 1
　第２節　調査の経過 …… 2
　第３節　調査の体制 …… 8
第２章　地理的・歴史的環境 …… 10
　第１節　地理的環境 …… 10
　第２節　歴史的環境 …… 11
第３章　旦山遺跡 …… 13
　第１節　調査の経過 …… 13
　　（１）確認調査 …… 13
　　（２）全面調査 …… 14
　第２節　調査の概要 …… 15
　　（１）遺　　構 …… 16
　　（２）遺　　物 …… 16
　第３節　縄文時代の遺構と遺物 …… 18
　　（１）落とし穴 …… 19
　　（２）縄文土器 …… 31
　　（３）石　　器 …… 31
　第４節　弥生時代の遺構と遺物 …… 33
　　（１）竪穴住居 …… 33
　　（２）段状遺構 …… 74
　　（３）柱穴群 …… 78
　　（４）土　　壙 …… 79
　　（５）　溝 …… 148
　　（６）遺構に伴わない遺物 …… 148
　第５節　古墳時代以降の遺構と遺物 …… 151
　　（１）古　　墳 …… 151
　　（２）建　　物 …… 152
　　（３）土　　壙 …… 156
　　（４）　溝 …… 158
　　（５）遺構に伴わない遺物 …… 158
　第６節　小　　結 …… 161

第４章　惣台遺跡 …… 167
第１節　調査の経過 …… 168
第２節　調査の概要 …… 169
第３節　縄文時代の遺構と遺物 …… 169
（１）土　　壙 …… 169
第４節　弥生時代の遺構と遺物 …… 172
（１）竪穴住居 …… 173
（２）段状遺構 …… 193
（３）土　　壙 …… 195
第５節　古墳時代の遺構と遺物 …… 204
（１）竪穴住居 …… 204
（２）段状遺構 …… 214
（３）建　　物 …… 232
（４）土　　壙 …… 235
（５）　溝 …… 237
第６節　時期不明の遺構 …… 238
（１）　溝 …… 238
第７節　遺構に伴わない遺物 …… 240
第８節　小　　結 …… 243
第５章　野辺張遺跡 …… 245
第１節　調査の経過 …… 245
第２節　調査の概要 …… 246
第３節　弥生時代の遺構と遺物 …… 247
（１）竪穴住居 …… 247
（２）土　　壙 …… 291
第４節　江戸時代の遺構 …… 311
（１）土　　壙 …… 311
第５節　時期不明の遺構 …… 311
（１）土　　壙 …… 311
第６節　遺構に伴わない遺物 …… 312
第７節　小　　結 …… 313
第６章　先旦山遺跡 …… 315
第１節　調査の経過 …… 316
第２節　調査の概要 …… 317
第３節　弥生時代の遺構と遺物 …… 319
（１）竪穴住居 …… 319
（２）段状遺構 …… 343
（３）土　　壙 …… 344

（4）　溝 …… 347
第4節　古墳時代の遺構と遺物 …… 349
（1）竪穴住居 …… 349
（2）建　物 …… 354
（3）土　壙 …… 355
第5節　平安時代の遺物 …… 356
（1）土師器 …… 356
（2）須恵器 …… 359
（3）鉄　器 …… 360
（4）土製品 …… 363
第6節　江戸時代の遺構と遺物 …… 364
（1）建　物 …… 364
（2）土　壙 …… 366
第7節　時期不明の遺構 …… 373
（1）土　壙 …… 373
第8節　遺構に伴わない遺物 …… 374
第9節　小　結 …… 375
第7章　旦山古墳群 …… 377
第1節　調査の経過 …… 377
第2節　調査の概要 …… 377
第3節　各古墳の調査 …… 380
（1）1　号　墳 …… 380
（2）2　号　墳 …… 384
（3）3　号　墳 …… 386
（4）4　号　墳 …… 391
（5）5　号　墳 …… 399
第4節　丘陵斜面出土土器 …… 400
第5節　小　結 …… 401
第8章　奥田古墳 …… 403
第1節　調査の経過 …… 403
第2節　調査の概要 …… 404
第3節　古墳の調査 …… 405
第4節　小　結 …… 425
第9章　水神ヶ峪遺跡 …… 429
第1節　調査の経過 …… 429
第2節　調査の概要 …… 430
（1）遺　構 …… 430
（2）遺　物 …… 438

第３節　小　　結 …… 441
第10章　結　　語 …… 443
第１節　流通センター建設予定地内に所在した遺跡の変遷について …… 443
第２節　縄文時代の遺構と遺物について …… 446
第３節　弥生時代の遺構と遺物について …… 447
第４節　古墳時代の遺構と遺物について …… 449
第５節　古代の遺構と遺物について …… 451
第６節　中世の遺構と遺物について …… 451
第７節　近世の遺構と遺物について …… 452

図　目　次

調査の経緯と経過

第１図　遺跡群位置図 …… 3
第２図　遺構確認調査地点位置図（1/10000） …… 4
第３図　発掘調査を実施した遺跡位置図（1/4000） …… 7

地理的・歴史的環境

第１図　発掘調査地点周辺遺跡分布図（1/20000） …… 11

旦山遺跡

第１図　旦山遺跡位置図（1/25000） …… 13
第２図　旦山遺跡調査範囲（1/2000） …… 13
第３図　トレンチ平面図（1/600） …… 14
第４図　トレンチ断面図（1/200） …… 14
第５図　旦山遺跡遺構全体図（1/600） …… 15
第６図　旦山遺跡２区全体図（1/500） …… 16
第７図　旦山遺跡２区横断面図（1/160） …… 16
第８図　旦山遺跡１区全体図（1/500） …… 17
第９図　旦山遺跡３区全体図（1/500） …… 17
第10図　縄文時代土壙配置図（1/600） …… 18
第11図　土壙１（1/30） …… 19
第12図　土壙２（1/30） …… 19
第13図　土壙３（1/30） …… 19
第14図　土壙４（1/30） …… 19
第15図　土壙５（1/30） …… 19
第16図　土壙６（1/30） …… 19
第17図　土壙７（1/30） …… 20
第18図　土壙８（1/30） …… 20
第19図　土壙９（1/30） …… 20
第20図　土壙10（1/30） …… 20
第21図　土壙11（1/30） …… 20
第22図　土壙12（1/30） …… 20
第23図　土壙13（1/30） …… 21
第24図　土壙14（1/30） …… 21
第25図　土壙15（1/30） …… 21
第26図　土壙16・17（1/30） …… 21
第27図　土壙18（1/30） …… 21
第28図　土壙19（1/30） …… 21
第29図　土壙20（1/30） …… 22
第30図　土壙21（1/30） …… 22
第31図　土壙22（1/30） …… 22
第32図　土壙23（1/30） …… 22
第33図　土壙24（1/30） …… 22
第34図　土壙25（1/30） …… 22
第35図　土壙26（1/30） …… 23
第36図　土壙27（1/30） …… 23
第37図　土壙28（1/30） …… 23
第38図　土壙29（1/30） …… 23
第39図　土壙30（1/30） …… 24
第40図　土壙31（1/30） …… 24
第41図　土壙32（1/30） …… 24
第42図　土壙33・34（1/30） …… 24
第43図　土壙35（1/30） …… 24
第44図　土壙36（1/30） …… 24
第45図　土壙37（1/30） …… 25

第46図　土壙38 (1/30) …… 25
第47図　土壙39 (1/30) …… 25
第48図　土壙40 (1/30) …… 25
第49図　土壙42 (1/30) …… 25
第50図　土壙41 (1/30) …… 26
第51図　土壙41出土縄文土器 (1/4) …… 26
第52図　土壙43 (1/30) …… 27
第53図　土壙44 (1/30) …… 27
第54図　土壙45 (1/30) …… 27
第55図　土壙46 (1/30) …… 27
第56図　土壙47 (1/30) …… 27
第57図　土壙48 (1/30) …… 28
第58図　土壙49 (1/30) …… 28
第59図　土壙50 (1/30) …… 28
第60図　土壙51 (1/30) …… 28
第61図　土壙52 (1/30) …… 28
第62図　土壙53 (1/30) …… 28
第63図　土壙54 (1/30) …… 29
第64図　土壙55 (1/30) …… 29
第65図　土壙56 (1/30) …… 29
第66図　土壙57 (1/30) …… 29
第67図　土壙58 (1/30) …… 29
第68図　土壙59 (1/30) …… 29
第69図　土壙60 (1/30) …… 30
第70図　土壙61 (1/30) …… 30
第71図　土壙62 (1/30) …… 30
第72図　土壙63 (1/30) …… 30
第73図　土壙64 (1/30) …… 30
第74図　土壙65 (1/30) …… 30
第75図　縄文土器 (1/4) …… 31
第76図　縄文時代の石器 (1) (1/2) …… 31
第77図　縄文時代の石器 (2) (1/2) …… 32
第78図　弥生時代竪穴住居・段状遺構配置図 (1/600) …… 33
第79図　竪穴住居 1 (1/80)・出土遺物 (1/4,1/2) …… 34
第80図　竪穴住居 2 ・25 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 35
第81図　竪穴住居 2 出土遺物 (1/4,1/2) …… 36
第82図　竪穴住居 3 (1/80)・出土遺物 (1/4,1/2) …… 37
第83図　竪穴住居 4 (1/80)・出土遺物 (1/2) …… 38
第 84 図　竪穴住居 5 (1/80)・出土遺物 (1) (1/1,1/2) …… 38
第 85 図　竪穴住居 5 出土遺物 (2) (1/4) …… 39
第 86 図　竪穴住居 6 (1/80)・出土遺物 (1/1,1/4) …… 39
第 87 図　竪穴住居 7 (1/80) …… 40
第 88 図　竪穴住居 7 出土遺物 (1/4,1/2) …… 41
第 89 図　竪穴住居 8 (1/80) …… 42
第 90 図　竪穴住居 8 変遷図 (1/120) …… 42
第 91 図　竪穴住居 8 出土遺物 (1/4,1/2) …… 43
第 92 図　竪穴住居 9 (1/80) …… 43
第 93 図　竪穴住居 9 変遷図 (1/120) …… 44
第 94 図　竪穴住居 9 出土遺物 (1/4,1/2) …… 44
第 95 図　竪穴住居10 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 45
第 96 図　竪穴住居11 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 46
第 97 図　竪穴住居12 (1/80) …… 46
第 98 図　竪穴住居13 (1/80) …… 47
第 99 図　竪穴住居13変遷図 (1/120) …… 48
第100図　竪穴住居13出土遺物 (1/4,1/2) …… 48
第101図　竪穴住居14 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 49
第102図　竪穴住居15 (1/80)・出土遺物 (1/4,1/2) …… 49
第103図　竪穴住居16 (1/80)・出土遺物 (1/4,1/2) …… 50
第104図　竪穴住居17 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 50
第105図　竪穴住居18 (1/80)・出土遺物 (1/4,1/2,1/1) …… 51
第106図　竪穴住居19 (1/80) …… 52
第107図　竪穴住居19変遷図 (1/120) …… 53
第108図　竪穴住居19出土遺物 (1) (1/4,1/2,1/1) …… 54
第109図　竪穴住居19出土遺物 (2) (1/2) …… 55
第110図　竪穴住居20 (1/80) …… 55
第111図　竪穴住居20変遷図 (1/120)・出土遺物 (1/4,1/2) …… 56
第112図　竪穴住居21 (1/80)・出土遺物 (1) (1/2) …… 57
第113図　竪穴住居21変遷図 (1/120) …… 58
第114図　竪穴住居21出土遺物 (2) (1/4) …… 58
第115図　竪穴住居22 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 59
第116図　竪穴住居23 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 59
第117図　竪穴住居24 (1/80) …… 59
第118図　竪穴住居25出土遺物 (1/2,1/4) …… 60
第119図　竪穴住居26 (1/80) …… 61

第120図　竪穴住居26出土遺物 (1)(1/2) …… 62
第121図　竪穴住居26変遷図 (1/120)・出土遺物 (2) (1/4,1/2) …… 63
第122図　竪穴住居27 (1/80)・竪穴住居27変遷図 (1/120)・出土遺物 (1/4) …… 64
第123図　竪穴住居28・29 (1/8)，竪穴住居28出土遺物 (1/4,1/2) …… 65
第124図　竪穴住居29出土遺物 (1/4) …… 66
第125図　竪穴住居30 (1/80)・出土遺物 (1/4,1/2) …… 66
第126図　竪穴住居31 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 67
第127図　竪穴住居32・33 (1/80)，竪穴住居32出土遺物 (1/4) …… 67
第128図　竪穴住居33変遷図 (1/120)・出土遺物 (1) (1/4) …… 68
第129図　竪穴住居33出土遺物 (2)(1/4) …… 69
第130図　竪穴住居34 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 69
第131図　竪穴住居35 (1/80)・竪穴住居35変遷図 (1/120) …… 70
第132図　竪穴住居35出土遺物 (1/2,1/1,1/4) …… 71
第133図　竪穴住居36 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 72
第134図　竪穴住居37 (1/80)・出土遺物 (1)(1/4) …… 72
第135図　竪穴住居37 変遷図 (1/120)・出土遺物 (2) (1/4) …… 73
第136図　段状遺構 1 ・ 5 ・ 6 (1/80) …… 74
第137図　段状遺構 1 出土遺物 (1/4,1/2) …… 74
第138図　段状遺構 2 (1/80) …… 74
第139図　段状遺構 3 (1/80) …… 75
第140図　段状遺構 4 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 75
第141図　段状遺構 7 (1/80) …… 75
第142図　段状遺構 8 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 75
第143図　段状遺構 9 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 76
第144図　段状遺構10 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 76
第145図　段状遺構11 (1/80) …… 76
第146図　段状遺構12 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 77
第147図　段状遺構13 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 77
第148図　段状遺構14 (1/80) …… 77
第149図　段状遺構15 (1/80) …… 77
第150図　段状遺構16 (1/80)・出土遺物 (1/4,1/2) …… 78
第151図　柱穴群 1 出土遺物 (1/4,1/2) …… 78
第152図　柱穴群 2 出土遺物 (1/4) …… 78
第153図　弥生時代土壙配置図 (1/600) …… 79
第154図　土壙101 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 80
第155図　土壙102 (1/30)・出土遺物 (1/2) …… 80
第156図　土壙103 (1/30) …… 81
第157図　土壙104 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 81
第158図　土壙105 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/2) …… 82
第159図　土壙106 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 83
第160図　土壙107 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 83
第161図　土壙108 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 84
第162図　土壙109 (1/30) …… 84
第163図　土壙110 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 84
第164図　土壙111 (1/30) …… 84
第165図　土壙111 出土遺物 (1/4,1/2) …… 85
第166図　土壙112 (1/30) …… 85
第167図　土壙113 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 85
第168図　土壙114 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 86
第169図　土壙115 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 86
第170図　土壙116 (1/30) …… 86
第171図　土壙117 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 87
第172図　土壙118 (1/30) …… 87
第173図　土壙119 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 87
第174図　土壙120 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 88
第175図　土壙121 (1/30) …… 88
第176図　土壙122 (1/30) …… 88
第177図　土壙123 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 88
第178図　土壙124 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 89
第179図　土壙125 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 89
第180図　土壙126 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 90
第181図　土壙127 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 90
第182図　土壙128 (1/30) …… 91
第183図　土壙129 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 91
第184図　土壙130 (1/30) …… 91
第185図　土壙131 (1/30) …… 92
第186図　土壙132 (1/30) …… 92
第187図　土壙133 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 92
第188図　土壙134 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/2) …… 93

第189図　土壙135 (1/30) …… 94
第190図　土壙136 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 94
第191図　土壙138 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 95
第192図　土壙139 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 95
第193図　土壙140 (1/30) …… 96
第194図　土壙141 (1/30) …… 96
第195図　土壙142 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 96
第196図　土壙143 (1/30) …… 96
第197図　土壙144出土遺物 (1/4) …… 96
第198図　土壙148 (1/30) …… 97
第199図　土壙149 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 97
第200図　土壙150 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 97
第201図　土壙151 (1/60)・出土遺物 (1/4) …… 98
第202図　土壙152 (1/30) …… 98
第203図　土壙153出土遺物 (1)(1/2) …… 98
第204図　土壙153 (1/30)・出土遺物 (2)(1/4) …… 99
第205図　土壙154 (1/30) …… 100
第206図　土壙155 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 100
第207図　土壙201 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 101
第208図　土壙202 (1/60)・出土遺物 (1/4,1/2) …… 101
第209図　土壙203 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 102
第210図　土壙204 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 102
第211図　土壙205 (1/30) …… 103
第212図　土壙206 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 103
第213図　土壙207 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/2) …… 104
第214図　土壙208 (1/30) …… 105
第215図　土壙209 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 105
第216図　土壙210 (1/30)・出土遺物 (1/2) …… 106
第217図　土壙211 (1/30) …… 106
第218図　土壙212 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 106
第219図　土壙213 (1/30) …… 106
第220図　土壙214 (1/30)・出土遺物 (1/2,1/4) …… 107
第221図　土壙215 (1/30) …… 108
第222図　土壙216 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 108
第223図　土壙217 (1/30)・出土遺物 (1/2) …… 108
第224図　土壙218 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 109
第225図　土壙219 (1/30)・出土遺物 (1/2,1/4) …… 109
第226図　土壙220 (1/30) …… 109
第227図　土壙221 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 110
第228図　土壙222 (1/30) …… 110
第229図　土壙223 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 110
第230図　土壙224 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 111
第231図　土壙225 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 111
第232図　土壙226 (1/30) …… 111
第233図　土壙227出土遺物 (1/4) …… 112
第234図　土壙227 (1/30) …… 113
第235図　土壙228 (1/30) …… 113
第236図　土壙229 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 114
第237図　土壙230 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 114
第238図　土壙231 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 115
第239図　土壙232 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 115
第240図　土壙233 (1/30) …… 116
第241図　土壙234 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 116
第242図　土壙235 (1/30) …… 116
第243図　土壙236 (1/30) …… 117
第244図　土壙237 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 117
第245図　土壙238 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/1) …… 117
第246図　土壙239 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 118
第247図　土壙240 (1/30) …… 119
第248図　土壙241 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 119
第249図　土壙242 (1/30) …… 119
第250図　土壙243 (1/30)・出土遺物 (1/2) …… 119
第251図　土壙244 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/2) …… 120
第252図　土壙245 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 120
第253図　土壙246 (1/30) …… 121
第254図　土壙247 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 121
第255図　土壙248 (1/30) …… 121
第256図　土壙249 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 121
第257図　土壙250 (1/30)・出土遺物 (1/2,1/4) …… 122
第258図　土壙251 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 122
第259図　土壙252 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 123
第260図　土壙253 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 123
第261図　土壙254・255 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/2) …… 124
第262図　土壙256 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 125
第263図　土壙257 (1/30) …… 125
第264図　土壙258 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 126

第265図　土壙259 (1/30) …… 126
第266図　土壙259出土遺物 (1/4) …… 127
第267図　土壙260出土遺物 (1/4) …… 127
第268図　土壙260 (1/30) …… 128
第269図　土壙261 (1/30) …… 128
第270図　土壙262 (1/30) …… 129
第271図　土壙263 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 129
第272図　土壙264 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 130
第273図　土壙265 (1/30) …… 130
第274図　土壙266 (1/30) …… 130
第275図　土壙267 (1/30) …… 130
第276図　土壙267出土遺物 (1/4) …… 131
第277図　土壙268 (1/30)・出土遺物 (1)(1/2) …… 131
第278図　土壙268出土遺物 (2)(1/4) …… 132
第279図　土壙269 (1/30) …… 132
第280図　土壙270 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 133
第281図　土壙271 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 133
第282図　土壙272 (1/30) …… 134
第283図　土壙273 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 134
第284図　土壙274 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 134
第285図　土壙275 (1/30) …… 135
第286図　土壙276 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 135
第287図　土壙277 (1/30) …… 135
第288図　土壙278出土遺物 (1/4) …… 135
第289図　土壙278 (1/30) …… 136
第290図　土壙279 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 136
第291図　土壙280 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 137
第292図　土壙281 (1/30) …… 137
第293図　土壙282 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 137
第294図　土壙283 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 138
第295図　土壙284 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 138
第296図　土壙285 (1/30) …… 139
第297図　土壙286 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/2) …… 139
第298図　土壙287 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/2) …… 140
第299図　土壙301 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 141
第300図　土壙302 (1/30) …… 141
第301図　土壙303 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 141
第302図　土壙304 (1/30) …… 142
第303図　土壙305 (1/30) …… 142
第304図　土壙306 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 142
第305図　土壙307 (1/30) …… 142
第306図　土壙308 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 143
第307図　土壙309 (1/30) …… 144
第308図　土壙310 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 144
第309図　土壙311 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 145
第310図　土壙312 (1/30) …… 145
第311図　土壙313 (1/30) …… 145
第312図　土壙314 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 146
第313図　土壙315 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 146
第314図　土壙316 (1/30) …… 147
第315図　土壙317 (1/30) …… 147
第316図　土壙318 (1/30) …… 147
第317図　溝 1 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 148
第318図　溝 2 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 148
第319図　遺構に伴わない遺物 (1)(1/1,1/2,1/4) …… 149
第320図　遺構に伴わない遺物 (2)(1/2) …… 150
第321図　古墳時代～中世遺構配置図 (1/600) …… 151
第322図　建物 1 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 152
第323図　建物 2 (1/80) …… 152
第324図　建物 3 (1/80) …… 153
第325図　建物 4 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 153
第326図　建物 5 (1/80) …… 154
第327図　建物 5 柱穴断面図 (1/80) …… 155
第328図　建物 6 (1/80) …… 155
第329図　建物 5 出土遺物 (1/2,1/4) …… 156
第330図　建物 6 出土遺物 (1/2) …… 156
第331図　土壙401 (1/30) …… 156
第332図　土壙402 (1/30) …… 156
第333図　土壙403 (1/30) …… 156
第334図　土壙404 (1/30) …… 157
第335図　土壙405 (1/30)・出土遺物 (1/2) …… 157
第336図　土壙406 (1/30) …… 157
第337図　溝 3 (1/60)・出土遺物 (1/4) …… 158
第338図　遺構に伴わない遺物 (1)(1/4) …… 158
第339図　遺構に伴わない遺物 (2)(1/4,1/2) …… 159
第340図　遺構に伴わない遺物 (3)(1/2) …… 160

惣台遺跡

第1図　惣台遺跡遺構配置図 (1/500) …… 167
第2図　惣台遺跡試掘トレンチ位置図 (1/2000) …… 168
第3図　T4遺構検出部分土層断面 (1/80) …… 168
第4図　縄文時代遺構配置図 (1/400) …… 170
第5図　土壙1 (1/30) …… 170
第6図　土壙2 (1/30)・出土遺物 (1/2) …… 170
第7図　土壙3 (1/30) …… 170
第8図　弥生時代遺構配置図 (1/400) …… 171
第9図　竪穴住居1 (1/80) …… 171
第10図　竪穴住居2・3 (1/80) …… 172
第11図　竪穴住居2・3変遷図 (1/120) …… 173
第12図　竪穴住居2 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 173
第13図　竪穴住居3 (1/80)・出土遺物 (1/4,1/2) …… 174
第14図　竪穴住居4 (1/80)・出土遺物 (1/4,1/2) …… 175
第15図　竪穴住居5 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 176
第16図　竪穴住居6 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 177
第17図　竪穴住居7～10・20・21，段状遺構8 (1/80) …… 178
第18図　竪穴住居7～10変遷図 (1/120) …… 179
第19図　竪穴住居7 (1/80) …… 179
第20図　竪穴住居8 (1/80) …… 180
第21図　竪穴住居9 (1/80) …… 180
第22図　竪穴住居10(1/80) …… 181
第23図　竪穴住居7～10出土遺物 (1)(1/4) …… 182
第24図　竪穴住居7～10出土遺物 (2)(1/2) …… 183
第25図　竪穴住居11～15・22，土壙19 (1/80) …… 184
第26図　竪穴住居11～15・22，段状遺構21変遷図 (1/120) …… 185
第27図　竪穴住居11 (1/80) …… 186
第28図　竪穴住居12 (1/80) …… 186
第29図　竪穴住居13 (1/80) …… 18
第30図　竪穴住居14・15 (1/80) …… 188
第31図　竪穴住居11～15出土遺物 (1)(1/4) …… 189
第32図　竪穴住居11～15出土遺物 (2)(1/4,1/2) …… 190
第33図　竪穴住居16 (1/80) …… 191
第34図　竪穴住居16出土遺物 (1/4,1/2) …… 192
第35図　段状遺構1 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 193
第36図　段状遺構2 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 193
第37図　段状遺構3 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 194
第38図　段状遺構4 (1/80) …… 194
第39図　土壙4 (1/30) …… 196
第40図　土壙5 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 196
第41図　土壙6 (1/30) …… 196
第42図　土壙7 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 196
第43図　土壙8 (1/30) …… 197
第44図　土壙9 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 197
第45図　土壙10 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/2) …… 198
第46図　土壙11 (1/30) …… 199
第47図　土壙12 (1/30) …… 199
第48図　土壙13 (1/30) …… 199
第49図　土壙14 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 199
第50図　土壙15 (1/30) …… 199
第51図　土壙16・17 (1/30) …… 201
第52図　土壙18 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/2) …… 201
第53図　土壙19 (1/30) …… 201
第54図　古墳時代遺構配置図 (1/400) …… 203
第55図　竪穴住居17 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 205
第56図　竪穴住居18・19変遷図 (1/120) …… 206
第57図　竪穴住居18・19 (1/80) …… 206
第58図　竪穴住居19カマド (1/30) …… 206
第59図　竪穴住居18・19出土遺物 (1/4) …… 207
第60図　竪穴住居20 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 208
第61図　竪穴住居21 (1/80) …… 209
第62図　竪穴住居22 (1/80) …… 210
第63図　竪穴住居22出土遺物 (1/4,1/2) …… 211
第64図　竪穴住居23・24 (1/80) …… 212
第65図　竪穴住居25 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 203
第66図　段状遺構5 (1/80) …… 214
第67図　段状遺構6 (1/80) …… 214
第68図　段状遺構7 (1/80) …… 214
第69図　段状遺構8 (1/80) …… 215
第70図　段状遺構9～11 (1/80) …… 215
第71図　段状遺構12 (1/80) …… 216
第72図　段状遺構13 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 218
第73図　段状遺構14 (1/80) …… 218

第74図　段状遺構15 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 218
第75図　段状遺構16 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 218
第76図　段状遺構17 (1/80) …… 218
第77図　段状遺構18～21 (1/80) …… 219
第78図　段状遺構21出土遺物 (1/4) …… 220
第79図　段状遺構22 (1/80) …… 221
第80図　段状遺構23 (1/80) …… 221
第81図　段状遺構24 (1/80) …… 221
第82図　段状遺構25 (1/80)・出土遺物 (1/4,1/2) …… 222
第83図　段状遺構26 (1/80) …… 223
第84図　段状遺構27 (1/80) …… 223
第85図　段状遺構28 (1/80) …… 223
第86図　段状遺構29 (1/80) …… 224
第87図　段状遺構30 (1/80) …… 225
第88図　段状遺構30出土遺物 (1) (1/4) …… 226
第89図　段状遺構30出土遺物 (2) (1/4) …… 227
第90図　段状遺構30出土遺物 (3) (1/4) …… 228
第91図　段状遺構30出土遺物 (4) (1/4) …… 229
第92図　段状遺構30出土遺物 (5) (1/4,1/6) …… 230
第93図　建物1 (1/80) …… 232
第94図　建物2 (1/80) …… 233
第95図　建物3 (1/80) …… 234
第96図　建物4 (1/80) …… 234
第97図　土壙20 (1/30) …… 235
第98図　土壙21 (1/30) …… 235
第99図　土壙22 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 236
第100図　土壙23 (1/30) …… 237
第101図　土壙24 (1/30) …… 237
第102図　土壙25 (1/30) …… 237
第103図　溝1 (1/80) …… 238
第104図　溝2 (1/80) …… 238
第105図　溝3 (1/80) …… 238
第106図　溝4 (1/80) …… 238
第107図　遺構に伴わない遺物 (1) (1/4) …… 239
第108図　遺構に伴わない遺物 (2) (1/4) …… 240
第109図　遺構に伴わない遺物 (3) (1/4) …… 241
第110図　遺構に伴わない遺物 (4) (1/2) …… 242
第111図　遺構に伴わない遺物 (5) (1/2) …… 242

野辺張遺跡

第1図　野辺張遺跡遺構配置図 (1/400) …… 245
第2図　野辺張遺跡試掘トレンチ位置図 (1/2000) …… 246
第3図　竪穴住居1～6，土壙1～8 (1/80) …… 247
第4図　竪穴住居1～6変遷図 (1/120) …… 248
第5図　竪穴住居1 (1/80) …… 249
第6図　竪穴住居2 (1/80) …… 249
第7図　竪穴住居3 (1/80) …… 250
第8図　竪穴住居4 (1/80) …… 250
第9図　竪穴住居5 (1/80) …… 251
第10図　竪穴住居6 (1/80) …… 251
第11図　竪穴住居1～6出土遺物 (1/80) …… 252
第12図　竪穴住居7～9，土壙9～11 (1/80) …… 253
第13図　竪穴住居7～9変遷図 (1/120) …… 254
第14図　竪穴住居7 (1/80) …… 255
第15図　竪穴住居8 (1/80) …… 255
第16図　竪穴住居9 (1/80) …… 256
第17図　竪穴住居7～9出土遺物 (1/4) …… 256
第18図　竪穴住居10～12，土壙12～17 (1/80) …… 257
第19図　竪穴住居10～12変遷図 (1/120) …… 258
第20図　竪穴住居10・11 (1/80) …… 260
第21図　竪穴住居12 (1/80)・出土遺物 (1) (1/2) …… 260
第22図　竪穴住居12出土遺物 (2) (1/4) …… 261
第23図　竪穴住居13～16，土壙16～20 (1/80) …… 261
第24図　竪穴住居13～16変遷図 (1/120) …… 262
第25図　竪穴住居13 (1/80) …… 262
第26図　竪穴住居14 (1/80) …… 262
第27図　竪穴住居15 (1/80) …… 264
第28図　竪穴住居13～15出土遺物 (1) (1/2) …… 264
第29図　竪穴住居13～15出土遺物 (2) (1/4) …… 265
第30図　竪穴住居16 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 265
第31図　竪穴住居17～19 (1/80) …… 266
第32図　竪穴住居17～19変遷図 (1/120) …… 266
第33図　竪穴住居17 (1/80) …… 267
第34図　竪穴住居18 (1/80) …… 267
第35図　竪穴住居19 (1/80) …… 267
第36図　竪穴住居17～19出土遺物 (1/4) …… 267

第37図　竪穴住居20・21 (1/80) …… 268
第38図　竪穴住居20・21変遷図 (1/120) …… 268
第39図　竪穴住居20 (1/80) …… 269
第40図　竪穴住居21 (1/80) …… 270
第41図　竪穴住居20・21出土遺物 (1/4) …… 270
第42図　竪穴住居22，土壙25 (1/80) …… 271
第43図　竪穴住居23～28 (1/80) …… 272
第44図　竪穴住居23～28変遷図 (1/120) …… 273
第45図　竪穴住居23 (1/80) …… 274
第46図　竪穴住居24 (1/80) …… 275
第47図　竪穴住居25 (1/80) …… 276
第48図　竪穴住居26 (1/80) …… 277
第49図　竪穴住居27 (1/80) …… 277
第50図　竪穴住居28 (1/80) …… 278
第51図　竪穴住居23～28出土遺物 (1/4,1/2) …… 278
第52図　竪穴住居29～33，土壙28～30 (1/80) …… 279
第53図　竪穴住居29～33変遷図 (1/120) …… 280
第54図　竪穴住居29 (1/80) …… 282
第55図　竪穴住居30 (1/80) …… 282
第56図　竪穴住居31 (1/80) …… 283
第57図　竪穴住居32 (1/80) …… 284
第58図　竪穴住居33 (1/80) …… 285
第59図　竪穴住居34，土壙31 (1/80) …… 286
第60図　竪穴住居34下層出土遺物 (1) (1/4) …… 288
第61図　竪穴住居34下層出土遺物 (2) (1/4) …… 289
第62図　竪穴住居34下層出土遺物 (3) (1/4,1/2) …… 290
第63図　竪穴住居34上層出土遺物 (1/4) …… 290
第64図　土壙1 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 291
第65図　土壙2 (1/30) …… 291
第66図　土壙3 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 291
第67図　土壙4 (1/30) …… 293
第68図　土壙5 (1/30) …… 293
第69図　土壙6 (1/30) …… 293
第70図　土壙7 (1/30) …… 293
第71図　土壙8 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 294
第72図　土壙9 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 295
第73図　土壙10 (1/30) …… 296
第74図　土壙11 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 296
第75図　土壙12 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 296
第76図　土壙13 (1/30) …… 296
第77図　土壙14 (1/30) …… 299
第78図　土壙15 (1/30) …… 299
第79図　土壙16 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 299
第80図　土壙17 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 301
第81図　土壙18 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 301
第82図　土壙19 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 302
第83図　土壙20 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 302
第84図　土壙21 (1/30) …… 302
第85図　土壙22 (1/30) …… 302
第86図　土壙23 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 304
第87図　土壙24 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 304
第88図　土壙25 (1/30) …… 306
第89図　土壙26 (1/30)・出土遺物 (1) (1/4) …… 306
第90図　土壙26出土遺物 (2) (1/2) …… 307
第91図　土壙27 (1/30) …… 308
第92図　土壙28 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 308
第93図　土壙29 (1/30) …… 308
第94図　土壙30 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 310
第95図　土壙31 (1/30) …… 310
第96図　土壙32 (1/30) …… 311
第97図　土壙33 (1/30) …… 311
第98図　土壙34 (1/30) …… 311
第99図　遺構に伴わない遺物 (1/4,1/2) …… 312

先旦山遺跡

第1図　先旦山遺跡遺構配置図 (1/500) …… 315
第2図　先旦山遺跡試掘トレンチ位置図 (1/2000) …… 316
第3図　2区の検出遺構と土層断面 (1/80) …… 316
第4図　2区の遺構変遷図 (1/120) …… 317
第5図　弥生時代遺構配置図 (1/400) …… 318
第6図　1区中央部分土層断面 (1/100) …… 320
第7図　竪穴住居1～6 (1/80) …… 321
第8図　竪穴住居1～5変遷図 (1/120) …… 322
第9図　竪穴住居1 (1/80) …… 323
第10図　竪穴住居2 (1/80) …… 324
第11図　竪穴住居3 (1/80) …… 325

第12図　竪穴住居4 (1/80) …… 326
第13図　竪穴住居5 (1/80) …… 327
第14図　竪穴住居1～6出土遺物 (1) (1/4) …… 329
第15図　竪穴住居1～6出土遺物 (2) (1/4) …… 330
第16図　竪穴住居1～6出土遺物 (3) (1/4) …… 331
第17図　竪穴住居1～6出土遺物 (4) (1/2) …… 332
第18図　竪穴住居7・8，溝4 (1/80) …… 333
第19図　竪穴住居7・8変遷図 (1/120) …… 334
第20図　竪穴住居7 (1/80) …… 335
第21図　竪穴住居8 (1/80) …… 336
第22図　竪穴住居7・8出土遺物 (1/4) …… 336
第23図　竪穴住居9 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 337
第24図　竪穴住居10・11，溝1 (1/80) …… 338
第25図　竪穴住居10・11，溝1変遷図 (1/120) …… 339
第26図　竪穴住居10 (1/80) …… 340
第27図　竪穴住居11 (1/80) …… 341
第28図　竪穴住居12 (1/80)・出土遺物 (1/4,1/2) …… 342
第29図　段状遺構1 (1/80) …… 343
第30図　土壙1 (1/30) …… 344
第31図　土壙2 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 344
第32図　土壙3 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 345
第33図　土壙4 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 345
第34図　土壙5 (1/30) …… 346
第35図　土壙6 (1/30) …… 346
第36図　土壙7 (1/30) …… 346
第37図　溝1～3 (1/80) …… 347
第38図　古墳時代遺構配置図 (1/400) …… 348
第39図　竪穴住居13 (1/80) …… 349
第40図　竪穴住居14 (1/80) …… 349
第41図　竪穴住居15 (1/80)・出土遺物 (1/4,1/2) …… 350
第42図　竪穴住居16 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 352
第43図　竪穴住居17 (1/80) …… 353
第44図　建物1 (1/80) …… 354
第45図　土壙8 (1/30) …… 355
第46図　土壙9 (1/30) …… 355
第47図　土壙10 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 355
第48図　竪穴住居1～6上面土器溜まり出土遺物 (1) (1/4) …… 357
第49図　竪穴住居1～6上面土器溜まり出土遺物 (2) (1/4) …… 358
第50図　竪穴住居1～6上面土器溜まり出土遺物 (3) (1/4) …… 360
第51図　竪穴住居1～6上面土器溜まり出土遺物 (4) (1/2) …… 361
第52図　竪穴住居1～6上面土器溜まり出土遺物 (5) (1/2) …… 362
第53図　竪穴住居1～6上面土器溜まり出土遺物 (6) (1/2) …… 363
第54図　江戸時代遺構配置図 (1/400) …… 364
第55図　建物2 (1/80) …… 365
第56図　土壙11・12 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/2) …… 366
第57図　土壙13 (1/30)・出土遺物 (1/2) …… 367
第58図　土壙14 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/2) …… 367
第59図　土壙15 (1/30)・出土遺物 (1/2) …… 367
第60図　土壙16・17 (1/30) …… 369
第61図　土壙16出土遺物 (1/2) …… 369
第62図　土壙17出土遺物 (1/2) …… 369
第63図　土壙18 (1/30)・出土遺物 (1/2) …… 370
第64図　土壙19 (1/30)・出土遺物 (1/2) …… 370
第65図　土壙20 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/2) …… 370
第66図　土壙21 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/2) …… 371
第67図　土壙22 (1/30) …… 372
第68図　土壙23 (1/30) …… 372
第69図　土壙24 (1/30) …… 372
第70図　土壙25 (1/30) …… 372
第71図　遺構に伴わない遺物 (1/4,1/2) …… 374

旦山古墳群

第1図　1～4号墳調査前周辺地形測量図 (1/300) …… 378
第2図　1～4号墳調査後周辺地形測量図 (1/300) …… 379
第3図　1号墳調査前周辺地形測量図 (1/150) …… 380
第4図　1号墳墳丘土層断面 (1/80) …… 381
第5図　1号墳調査後周辺地形測量図 (1/150) …… 382
第6図　1号墳葺石側面図 (1/150) …… 383
第7図　1号墳埋葬施設実測図 (1/30) …… 383
第8図　2号墳調査前周辺地形測量図 (1/150) …… 384

第９図　２号墳墳丘土層断面（1/80）…… 385
第10図　２号墳調査後周辺地形測量図（1/150）…… 386
第11図　３号墳調査前周辺地形測量図（1/150）…… 387
第12図　３号墳墳丘土層断面（1/100）…… 388
第13図　３号墳調査後周辺地形測量図（1/150）…… 389
第14図　３号墳埋葬施設実測図（1/30）…… 389
第15図　３号墳出土遺物（1/2）…… 390
第16図　４号墳調査前周辺地形測量図（1/150）…… 391
第17図　４号墳墳丘土層断面（1/80）…… 392
第18図　４号墳調査後周辺地形測量図（1/150）…… 393
第19図　４号墳石室上面実測図（1/40）…… 394
第20図　４号墳石室実測図（1/40）…… 395
第21図　４号墳石室内遺物出土状況（1/40）…… 396
第22図　４号墳出土遺物（1）（1/4,1/2）…… 397
第23図　４号墳出土遺物（2）（1/2）…… 398
第24図　５号墳調査後周辺地形測量図（1/150）…… 399
第25図　５号墳埋葬施設実測図（1/40）…… 400
第26図　丘陵斜面出土土器（1/4）…… 400

奥田古墳

第１図　調査前周辺地形測量図（1/150）…… 403
第２図　墳丘土層断面（1/80）…… 404
第３図　調査後周辺地形測量図（1/150）…… 405
第４図　石室上面実測図（1/50）…… 406
第５図　石室実測図（1/50）…… 407
第６図　石室内遺物出土状況（1/40）…… 409
第７図　石室内出土土器（1/4）…… 412
第８図　墳丘表土出土土器（1/4,1/6）…… 414
第９図　鉄器（1）（1/4）…… 416
第10図　鉄器（2）（1/2）…… 417
第11図　鉄器（3）（1/2）…… 418
第12図　鉄器（4）（1/2）…… 419
第13図　鉄器（5）（1/2）…… 420
第14図　耳環（1/2）…… 421
第15図　玉類（1）（1/1）…… 422
第16図　玉類（2）（1/1）…… 423
第17図　玉類（3）（1/1）…… 424
第18図　埋葬位置推定図（1/50）…… 425

水神ヶ峪遺跡

第１図　遺跡位置図（1/10000）…… 429
第２図　水神ヶ峪遺跡墓石配置図（1/80）…… 431
第３図　水神ヶ峪遺跡土壙墓配置図（1/80）…… 432
第４図　土壙墓１（1/30）…… 433
第５図　土壙墓２（1/30）…… 433
第６図　土壙墓３（1/30）…… 433
第７図　土壙墓４（1/30）…… 433
第８図　土壙墓５（1/30）…… 434
第９図　土壙墓６（1/30）…… 434
第10図　土壙墓７（1/30）…… 434
第11図　土壙墓８（1/30）…… 434
第12図　土壙墓９（1/30）…… 434
第13図　土壙墓10（1/30）…… 434
第14図　土壙墓11（1/30）…… 435
第15図　土壙墓12（1/30）…… 435
第16図　土壙墓13（1/30）…… 435
第17図　土壙墓14（1/30）…… 435
第18図　土壙墓15（1/30）…… 435
第19図　土壙墓16（1/30）…… 436
第20図　土壙墓17（1/30）…… 436
第21図　土壙墓18（1/30）…… 436
第22図　土壙墓21（1/30）…… 436
第23図　土壙墓22（1/30）…… 436
第24図　土壙墓19・20（1/30）…… 437
第25図　土壙墓23（1/30）…… 437
第26図　土壙墓24（1/30）…… 437
第27図　土壙墓25（1/30）…… 438
第28図　土壙墓26（1/30）…… 438
第29図　土壙墓12出土数珠玉（1/1）…… 439
第30図　出土遺物（1/2）…… 440

表　目　次

旦山遺跡

表－1　旦山遺跡新旧遺構名称対照表 …… 164

惣台遺跡

表－1　惣台遺跡新旧遺構名称対照表 …… 244

野辺張遺跡

表－1　野辺張遺跡新旧遺構名称対照表 …… 314

先旦山遺跡

表－1　先旦山遺跡新旧遺構名称対照表 …… 376

旦山古墳群

表－1　3号墳出土鉄器観察表 …… 402

表－2　4号墳石室内出土須恵器観察表 …… 402

表－3　4号墳石室内出土鉄器観察表 …… 402

表－4　丘陵斜面出土須恵器壺観察表 …… 402

奥田古墳

表－1　須恵器観察表 …… 426

表－2　鉄器観察表 …… 427

表－3　耳環観察表 …… 427

表－4　玉類計測表 …… 427

水神ヶ峪遺跡

表－1　水神ヶ峪遺跡出土玉類一覧表 …… 439

表－2　水神ヶ峪遺跡土壙墓一覧表 …… 441

表－3　水神ヶ峪遺跡出土金属器一覧表 …… 442

図　版　目　次

巻頭図版1　1　惣台遺跡

2　先旦山遺跡

巻頭図版2　1　旦山1号墳

2　旦山4号墳

巻頭図版3　奥田古墳

巻頭図版4　1　旦山遺跡建物群

2　惣台遺跡段状遺構30出土土器

旦山遺跡

図版1　1　旦山遺跡遠景（篠向山城から）

2　旦山遺跡1区（東から）

3　旦山遺跡2区（東から）

図版2　1　旦山遺跡遠景（目木橋から）

2　旦山古墳群近景（旦山遺跡から）

3　目木平野を望む（旦山遺跡から）

図版3　1　土壙15土層断面（南から）

2　土壙15（南から）

3　土壙51土層断面（西から）

図版4　1　土壙3（右）（西から）

2　土壙25（南から）

3　土壙28（東から）

図版5　1　土壙2（北から）

2　土壙35（北から）

3　土壙34（右）（西から）

図版6　1　土壙8（北から）

2　土壙36（東から）

3　土壙44（東から）

図版7　1　1区西方竪穴住居群（南から）

2　1区南方竪穴住居群（西から）

3　2区南方竪穴住居群（西から）

図版8　1　焼失竪穴住居28（北から）

2　焼失竪穴住居26（北から）

3　焼失竪穴住居20（西から）

図版9　1　竪穴住居1（南から）

2　竪穴住居5（北から）

3　竪穴住居7（西から）

図版10　1　竪穴住居9・14・24（西から）

2　竪穴住居8（北から）

3　竪穴住居12（北から）

図版11　1　竪穴住居13（北から）

2　竪穴住居15・17（北から）

3　竪穴住居18（南から）

図版12　1　竪穴住居19（北から）

2　竪穴住居20（北から）

3　竪穴住居21・23（西から）

図版13　1　竪穴住居22（北から）

2　竪穴住居2・25（北から）

3　竪穴住居26（東から）

図版14　1　竪穴住居28・29（北から）

2　竪穴住居30（北から）

3　竪穴住居34（北から）

図版15　1　竪穴住居27（北から）

2　竪穴住居35（北から）

3　竪穴住居37（北から）

図版16　1　竪穴住居32・33（北から）

2　竪穴住居36（北から）

3　段状遺構10（西から）

図版17　1　段状遺構13（北から）

2　段状遺構11（北から）

3　段状遺構 1・5・6（北から）

図版18　1　土壙153土層断面（東から）

2　土壙268土層断面（東から）

3　土壙286土層断面（南から）

図版19　1　土壙202（北から）

2　土壙125（西から）

3　土壙107・149（南から）

図版20　1　土壙142（南から）

2　土壙209（東から）

3　土壙201（東から）

図版21　1　土壙240（南から）

2　土壙241（西から）

3　土壙128（西から）

図版22　1　掘り道具痕の残る土壙110（北から）

2　土壙138（東から）

3　土壙133（南から）

図版23　1　土壙234（東から）

2　土壙286（北東から）

3　土壙308（北西から）

図版24　1　土壙116（南から）

2　土壙207（南から）

3　土壙278（東から）

図版25　1　土壙253～255（西から）

2　土壙257（西から）

3　土壙273（北から）

図版26　1　土壙308（東から）

2　土壙308（西から）

3　土壙227（西から）

図版27　1　建物4（北から）

2　建物2（北から）

3　建物3（西から）

図版28　1　建物1・5（西から）

2　建物1・5・6（北から）

3　土壙406（東から）

図版29　縄文時代の土器（1/2,1/4,1/6）・石器（1/2,1/3）

図版30　弥生時代の土器（竪穴住居2出土）（1/4）

図版31　弥生時代の土器（竪穴住居出土）（1/4）

図版32　弥生時代の土器（竪穴住居・土壙出土）（1/4）

図版33　弥生時代の土器（土壙出土）（1/4）

図版34　弥生時代の土器（土壙出土）（1/4）

図版35　弥生時代の土器（土壙出土）（1/4）

図版36　弥生時代の土器（土壙出土）（1/4）

図版37　弥生時代の土器（土壙出土）（1/4）

図版38　弥生時代の土製品・小型土器・玉類（1/2）

図版39　弥生時代の鉄器・石器（1/2）

図版40　弥生時代の石包丁（1/2）

図版41　弥生時代の石器（1/2,1/3）

図版42　中世の渡来銭・鉄器（1/2）

惣台遺跡

図版43　1　竪穴住居7～10・20（西から）

2　竪穴住居11～15・22（東から）

3　竪穴住居16（東から）

図版44　1　竪穴住居19（北から）

2　竪穴住居19カマド（東から）

3　竪穴住居19炉跡（北から）

4　竪穴住居18・19（北から）

5　竪穴住居18・19の2区調査部分検出状況（西から）

図版45　1　土壙3（北から）

2　段状遺構30（北から）

3　土壙25（北から）

図版46　惣台遺跡段状遺構30出土土器（1）（1/4）

図版47　惣台遺跡段状遺構30出土土器（2）（1/4）

図版48　惣台遺跡段状遺構30出土土器（3）（1/4）

図版49　惣台遺跡段状遺構30出土土器 (4)(1/4)
図版50　惣台遺跡段状遺構30出土土器 (5)(1/3,1/6)

野辺張遺跡

図版51　1　野辺張遺跡・惣台遺跡遠景 (北西から)
2　野辺張遺跡遠景 (南西から)
3　野辺張遺跡全景 (北から)
図版52　1　野辺張遺跡西側平坦部全景 (東から)
2　野辺張遺跡西側平坦部近景 (東から)
3　野辺張遺跡北側斜面部全景 (東から)
図版53　1　竪穴住居１～６，土壙１～８(西から)
2　竪穴住居７～９，土壙９～11 (南から)
3　竪穴住居10～12，土壙11～17 (東から)
図版54　1　竪穴住居13～16，土壙16～20 (東から)
2　竪穴住居17～19 (北西から)
3　竪穴住居20・21 (北から)
図版55　1　竪穴住居22 (北から)
2　竪穴住居23～28 (北から)
3　竪穴住居23～28土層断面 (東から)
図版56　1　竪穴住居29～33，土壙28～30 (西から)
2　竪穴住居34，土壙31 (北から)
3　竪穴住居34土層断面 (北西から)

先旦山遺跡

図版57　1　先旦山遺跡１区全景 (東から)
2　先旦山遺跡１区の溝に囲まれた部分 (東から)
3　竪穴住居１～９，土壙１，溝４(南から)
図版58　1　土壙４(西から)
2　土壙５(西から)
3　土壙10 (西から)
図版59　1　竪穴住居９(西から)
2　竪穴住居10・11，土壙６(北西から)
3　竪穴住居14，土壙２(南西から)
図版60　1　竪穴住居15・16，建物１，土壙９・10・25 (西から)
2　竪穴住居13 (北西から)
3　竪穴住居15，土壙９・25 (北から)
図版61　1　先旦山遺跡２区検出遺構全景 (北から)
2　竪穴住居１～６上面土器溜まり遺物出土状況 (南から)
3　建物２，土壙８・22 (東から)
図版62　1　先旦山遺跡作業風景 (西から)
2　先旦山遺跡作業風景 (東から)
3　先旦山遺跡作業風景 (北西から)

旦山古墳群

図版63　1　旦山古墳群遠景 (東から)
2　旦山１号墳全景 (南西から)
3　旦山１号墳埋葬施設 (北東から)
図版64　1　旦山２号墳全景 (北西から)
2　旦山３号墳全景 (北西から)
3　旦山３号墳埋葬施設 (北東から)
図版65　1　旦山４号墳石室内遺物出土状況 (南西から)
2　旦山４号墳奥壁部分遺物出土状況 (南西から)
図版66　1　旦山５号墳検出状況 (東から)
2　旦山古墳群作業風景 (南西から)
3　旦山古墳群から久世町市街地を望む (東から)
図版67　旦山３号墳出土鉄器 (1/2)，旦山４号墳出土土器 (1/3)
図版68　旦山４号墳出土鉄器 (1/2)，旦山古墳群丘陵斜面出土土器 (1/3)

奥田古墳

図版69　1　石室内遺物出土状況 (西から)
2　轡出土状況 (西から)
図版70　1　石室内遺物出土状況 (西から)
2　鐙・装身具出土状況 (北から)
図版71　奥田古墳出土土器 (1)(1/3)
図版72　奥田古墳出土土器 (2)(1/3)
図版73　奥田古墳出土土器 (3)(1/3)
図版74　奥田古墳出土鉄器 (1)(1/4)
図版75　奥田古墳出土鉄器 (2)(1/2)
図版76　奥田古墳出土鉄器 (3)(1/2)
図版77　奥田古墳出土装身具 (1)(1/1)
図版78　奥田古墳出土装身具 (2)(1/1)

水神ヶ峪遺跡

図版79　1　表土除去後墓地全景 (北東から)
2　墓石10・11 (北から)
3　土壙墓全景 (東から)
図版80　土壙墓出土遺物

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査の経緯

高速交通網の東西軸・南北軸の整備に伴って、岡山県はあらゆる分野で拠点性が著しく高まっている。このため、中国縦貫・横断自動車道の結節点となる県北地域に、中国横断自動車道の完成に焦点を合わせて、中・四国を含めた広域的エリアを対象とする物流拠点として、また、地域活性化の起爆剤のひとつとして、岡山県総合流通センターとの連携も勘案しながら、真庭郡久世町大内原・落合町西谷地区（北区域）と久世町中原地区（南区域）に岡山県北流通センターを整備することが決定した。北区域に含まれる落合町西谷地区は、急峻な山々の連なる比較的狭い範囲が岡山県北流通センターの予定地になっていたが、落合町教育委員会の現地踏査では、予定地内に遺跡が存在する可能性は極めて少ないことが判明していた。

一方、久世町内に含まれる建設予定地は、中国横断自動車道の久世インターチェンジ周辺を起点とする南北両地域の広大な範囲（第２図）で、1989年（平成元年）３月に久世町教育委員会から発行された『久世町埋蔵文化財分布地図』によると、銅々古墳、旦山遺跡、旦山古墳の所在が記載されている。銅々古墳については、岡山県商工労働部企業立地対策課から依頼を受けた当初より、その所在地を建設予定地内に取り入れないように指示していたこともあって、現状のままで現地に保存するようになっていた。旦山遺跡に関しては、地元の酪農家が牧草地に通じる道路を造成する前に久世町教育委員会と協議が行われた経緯があり、道路の造成によって遺跡が破壊されないように確認調査が実施された。その結果、限定された狭い範囲の調査であったにもかかわらず、弥生時代中期末から弥生時代後期に属する竪穴住居４軒と袋状土壙多数が検出され、大規模な弥生時代の集落遺跡であることが確認された。旦山古墳は国道181号からの進入路部分に位置しており、かつて農作業中に大刀が出土し、米来（めき）小学校へ持参したという言い伝えが残っている。発掘調査を実施する以前には、丘陵全体が竹薮であり、表面には人頭大から拳大の河原石が散乱していたことから、葺石を有する未発見の古墳が所在する可能性も考えられた。

このように、久世町内の岡山県北流通センター造成予定地に記載されている遺跡は、旦山遺跡と旦山古墳だけであるが、平成元年度から平成３年度にかけて中国横断自動車道の建設に伴って発掘調査が行われた上野遺跡[(1)]、木谷古墳群[(2)]、中原古墳群[(3)]などの状況より、線引きされた部分における遺構の有無を推定すれば、丘陵頂部の平坦部分や丘陵の緩斜面から、古墳や墳墓のみならず竪穴住居や土壙なども比較的多く存在するであろうと思われた。

註

（１）山磨康平「上野遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』91　1994年

（２）福田正継「木谷古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』93　1995年

（３）福田正継・山磨康平「中原古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』93　1995年

第２節　調査の経過

岡山県は平成５年８月に岡山県北流通センターの基本設計を確定し、環境アセスメント調査や用地買収の交渉が進行しつつある状況になり、建設予定地内の保安林の解除も行われる見通しがつき、埋蔵文化財の発掘調査が実施できる条件が整備されてきた。

岡山県教育庁文化課は、平成５年10月６日に久世町中原地区（南区域）の、また平成６年４月７日と８日に久世町大内原・落合町西谷地区（北区域）の遺跡分布調査をそれぞれ行って、遺跡の分布図（第２図）を作成した。それによると、現地踏査の表面観察で南区域には21地点、北区域には11地点の遺跡所在推定地が発見された。その概要は以下の通りである。

１地点……旦山古墳　国道181号からの進入路予定地に位置し、全面調査を実施。丘陵上には別の古墳が所在する可能性があるため、確認調査が必要。

２地点……旦山遺跡　牧草地全体に集落跡が存在すると考えられる。全面調査を実施。

３地点……圃場整備事業を行った時に遺物が出土したという。確認調査が必要。

４地点……丘陵上に中世墓や近世墓が散在するため、確認調査が必要。

５地点……古墳の可能性があるため、確認調査が必要。

６地点……丘陵上に古墳が所在する可能性があるため、確認調査が必要。

７地点……古墳の可能性があるため、確認調査が必要。

８地点……古墳の可能性があるため、確認調査が必要。

９地点……古墳の可能性があるため、確認調査が必要。

10地点……林道の断面に落ち込み状の窪地があって、土器片採集。確認調査が必要。

11地点……古墳の可能性があるため、確認調査が必要。

12地点……銅々古墳　岡山県北流通センター建設予定地外に位置し、現状保存。

13地点……五輪塔が所在。移転前に写真撮影と実測を実施。

14地点……近世墓が所在するため、全面調査を実施。

15地点……近世墓が所在するが、地権者の先祖墓であることが判明。

16地点……丘陵上に古墳が所在する可能性があるため、確認調査が必要。

17地点……久世インターチェンジ南側の丘陵上に３基の古墳が所在するが、岡山県北流通センター建設予定地外に位置し、現状保存。

18地点……畑地で須恵器の破片を採集。確認調査が必要。

19地点……地元の人々が篠向山城の砦跡と考える平坦地が存在するため、確認調査が必要。

20地点……丘陵上に古墳が所在する可能性があるため、確認調査が必要。

21地点……丘陵上に古墳が所在する可能性があるため、確認調査が必要。

22地点……古墳の可能性があるため、確認調査が必要。

23地点……愛宕神社（愛石神社と書いた円礫が所在）　岡山県北流通センター建設予定外の地点。

24地点……古墳の可能性があるため、確認調査が必要。

25地点……弁天神社（弁天神社と書いた柱状石が所在）　神社が古墳の上に所在する可能性があるため、確認調査が必要。

26地点……古墳の可能性があるため、確認調査が必要。
27地点……古墳の可能性があるため、確認調査が必要。
28地点……井戸（直径0.7ｍ・深さ0.6ｍ）が所在し、近くに祠もある。地権者からの聞き取り調査によって、井戸は近年に造られたことが判明。
29地点……古墳の可能性があるため、確認調査が必要。
30地点……古墳の可能性があるため、確認調査が必要。
31地点……古墳の可能性があるため、確認調査が必要。
32地点……社跡　露岩を中心にして、不動明王？の石仏（大正一五年三月吉日と横書きがある）と不明の像の石仏が祭られている。岡山県北流通センターが建設されても現状のままで残存。

この遺跡分布調査の成果に基づき、平成６年11月１日から遺跡確認調査の準備を開始した。

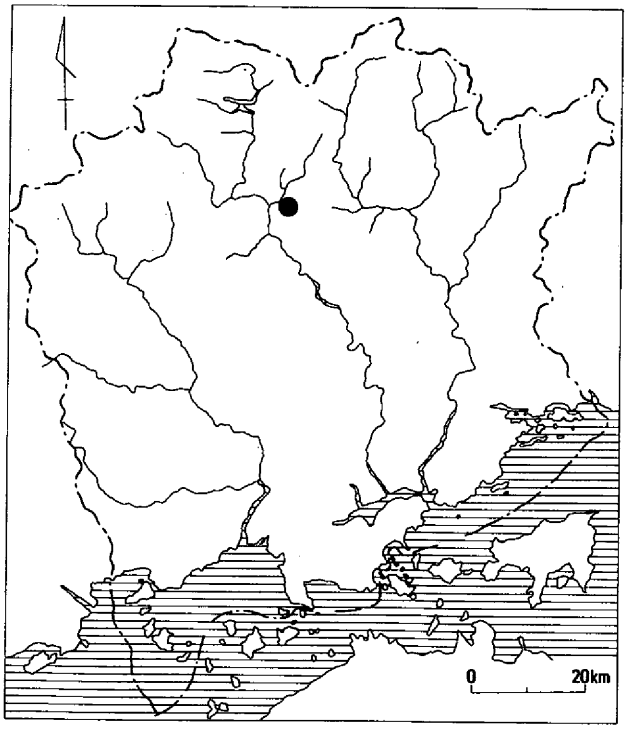
南区域の南西端部に位置する３地点は調節池の建設場所で、最も早い段階に工事が行われる予定であり、11月24日より確認調査に着手した。その結果、弥生時代後期の竪穴住居や土壙などが検出され、須恵器も出土したので、「惣台遺跡」と命名して全面調査を実施することになった。

一方、旦山遺跡については、地元の酪農家が牧草地に通じる道路を造成するときに、久世町教育委員会が確認調査を行った資料があるものの、遺跡全体の範囲や存在する遺構の密度などが把握できていないので、すでに用地買収が完了していた南側の畑地と西側斜面を中心に、12月５日から平成７年１月12日まで、３地点の調査と並行してトレンチによる確認調査を実施した。その結果、西側斜面には遺構は存在しないが、台地上の平坦部分では全体に竪穴住居や土壙などが検出され、それらの遺構の多くは複雑に重なり合っていることが判明した。

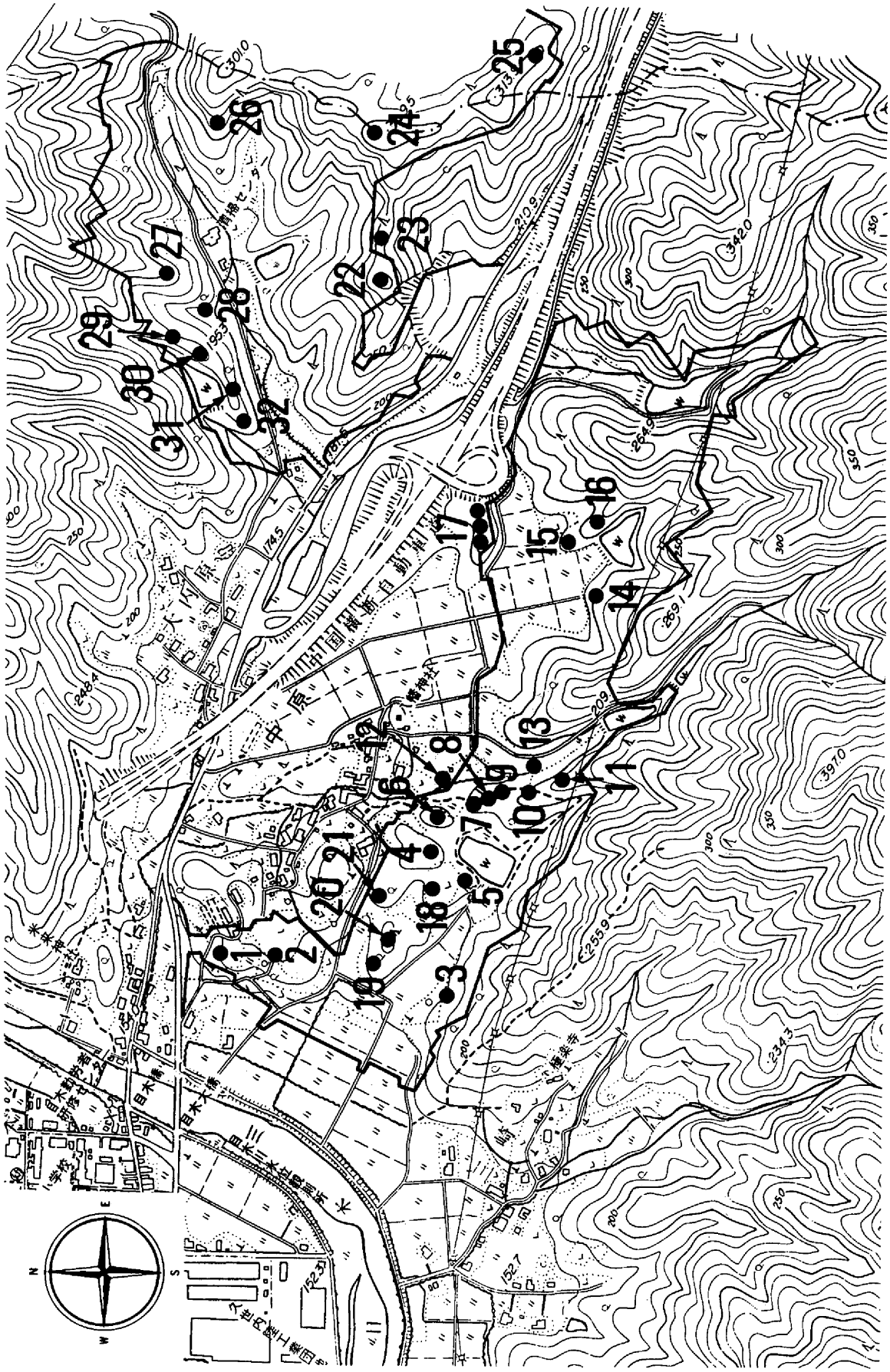
３地点の惣台遺跡は、確認調査が終了すると、調節池になる範囲だけの全面調査へ移行し、３月末日をもって完了した。その結果、竪穴住居９軒、掘立柱建物２棟、段状遺構３基、鍛冶炉３基、土壙19基などを検出した。

１月17日と18日には、北区域の29地点、30地点、31地点の確認調査を行った。古墳と推定される部分に幅１ｍのトレンチを設定して掘り下げたが、いずれも表土直下が地山で、古墳は存在しなかった。

平成７年度には、国道181号からの進入路部分に位置する旦山古墳の調査に着手した。この古墳が所在する丘陵には、未発見の古墳がある可能性が考えられたため、尾根上にトレンチを設定して確認調査を実施した。規模が異なる３基の古墳が存在することが明らかになり、さらに南に面した丘陵の斜面にも半壊した別の古墳を発見した。このような状況から古墳の数が増えたため、「旦山古墳群」に名称を改め、６月30日まで全面調査を行った。その結果、埋葬施設が木棺直葬の土壙で葺石を有する１辺約12ｍ



第１図　遺跡群位置図



第２図　遺構確認調査地点位置図（1／10000）

の方墳（１号墳）、埋葬施設が削平されて存在しない１辺約10ｍの方墳（２号墳）、埋葬施設が破壊された箱式石棺で直径約17ｍの円墳（３号墳）、埋葬施設が横穴式石室で直径 約10ｍの円墳（４号墳）などを検出した。古墳が造られた時期を知る遺物は少ないが、尾根上に位置する１～３号墳が５世紀中葉、丘陵の斜面に発見された４号墳が７世紀前葉から中葉にかけての時期に属するであろう。

旦山古墳群の発掘調査を継続していた６月12日には、北区域の22地点、24地点、25地点の確認調査を行った。古墳と推定される部分に幅１ｍのトレンチを設定して掘り下げたが、いずれの地点も表土直下が地山で、古墳は存在しないことが判明した。また６月16日には26地点と27地点の確認調査を実施したが、前回の確認調査と同様に、古墳は存在しなかった。

１月17日から６月16日まで、３度にわたって北区域の遺跡所在推定地で確認調査が必要な地点の調査を行ったが、いずれの地点も遺構や遺物はなく、遺跡は存在しないことが明らかになった。

８月後半から全面調査を実施する予定にしていた旦山遺跡は、遺跡が所在する地点の用地買収が諸般の事情で難行し、発掘調査ができない見通しになった。そのため、南区域の遺跡所在推定地で確認調査が必要な地点の発掘作業を、継続中の全面調査よりも優先して行うことにした。

まず最初は、現地踏査で須恵器の破片を採集した18地点の確認調査で、６月23日に幅１ｍのトレンチを設定して行った。その結果、竪穴住居の壁体溝を検出し、弥生土器片や須恵器片が出土したので、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡が存在すると考えられた。７月10日には４地点と５地点の確認調査を実施したが、５地点に遺構は何も存在しなかった。ところが丘陵の尾根上に位置する４地点では、古墳の墳丘と思われるやや高くなった部分に、人頭大から拳大の角礫や河原石が数多く認められ、中世墓または近世墓が存在することを推定させた。７月11日と12日には20地点、７月13日には６地点と16地点の確認調査をそれぞれ行ったが、いずれの地点も表土直下が地山で、遺構は何も検出できなかった。７月18日から21日にかけては、11地点、19地点、21地点の確認調査を実施した。11地点と21地点では遺構や遺物が検出できなかったものの、19地点では竪穴住居の一部を確認し、完形品を含む多量の弥生土器と石包丁の破片が出土したので、弥生時代の集落跡が存在すると考えられた。なお７～９地点については、確実に古墳であることが判明していたので、確認調査は行わなかった。また10地点の林道の断面に認められた落ち込み状の窪地は、谷部分に黒色土が自然に堆積しているだけで、人工の遺構ではないと判断した。

このように６月23日から実施した南区域の遺跡所在推定地の確認調査では、４地点、７～９地点、18・19地点で遺構の存在することが明らかになり、それらの地点の全面調査が必要な部分の面積に、14地点の近世墓が所在する範囲を含めると、今年度の当初計画で惣台遺跡の二次調査に引き続いて年度末まで全面調査を行うことにしていた、旦山遺跡全体の面積とほぼ同じ数値になったのである。

こうした結果を踏まえて、岡山県北流通センター建設予定地の北区域と南区域における遺跡所在推定地の確認調査に関して、２冊の実績報告書を提出し、今後の発掘調査の進め方について協議を行った。結論として出されたのは、用地買収交渉が難行して発掘調査が実施できない状態にある旦山遺跡は、平成８年度になってから発掘調査を行うこととし、今年度の８月後半からは確認調査によって新しく発見された４地点や18地点の「先旦山遺跡」と19地点の「野辺張遺跡」の全面調査に継続して、７～９地点の「奥田古墳群」と14地点の「水神ヶ峪遺跡」の調査を行うという内容で、今後の岡山県北流通センター建設に伴う発掘調査は、この行程計画に基づいて進めることになったのである。

７月１日からは惣台遺跡に引き返して、昨年度末に全面調査を実施した調節池部分以外の、残って

いる東側に面した範囲の二次調査を８月15日まで実施した。その結果、前回の成果と同様に、竪穴住居19軒、掘立柱建物２棟、柱穴列２列、段状遺構27基、土壙４基、溝３条などを検出し、弥生時代中期から後期にかけてと古墳時代後期との２時期の集落遺跡であることが明らかになった。

８月16日から11月30日まで、先旦山遺跡１区（確認調査で竪穴住居の壁体溝を検出した畑地）の全面調査を実施したところ、弥生時代後期に属する竪穴住居11軒、段状遺構１基、土壙７基、溝３条、古墳時代後期の竪穴住居４軒、掘立柱建物１棟、土壙３基、９世紀前葉から中葉にかけての平安時代に属する土器溜まり１か所、17世紀中葉から後葉にかけての江戸時代になると思われる掘立柱建物１棟、土壙２基などを検出した。これらの遺構で注目されるのは、弥生時代後期の遺構群と平安時代の土器溜まりである。前者は、何度も建て替えを行った竪穴住居群とその周辺に存在した土壙群を溝によって取り囲んでおり、当時の単位集団の居住状況をうかがい知ることができた。後者からは、土器以外に鉄器や鉄滓とともに炭化物や焼土も出土したから、遺構そのものが検出できなかったので断定できないものの、鍛冶関係の作業が行われていた蓋然性は高いと考える。

12月１日からは野辺張遺跡の全面調査に移行したが、冬期の降雪対策が急務となってきた。そのため、積雪があっても晴天の時には現場作業ができる対策を講じる必要が生じ、複数の遺跡の全面調査を並行して行うことにした。それで正月明けには奥田古墳群の調査にも着手し、さらに２月１日からは先旦山遺跡２区（丘陵上の中世墓または近世墓が存在する可能性のある地点）の全面調査も開始したので、一時期にはその日の気象状況に応じて、日毎に３遺跡を転々とすることもあった。

２月29日に調査が終了した野辺張遺跡では、竪穴住居34軒と土壙31基を検出し、弥生時代後期の集落跡であることが判明した。同じく２月29日に調査が終了した先旦山遺跡２区は、弥生時代後期の竪穴住居１軒、古墳時代後期の竪穴住居１軒、17世紀中葉から後葉にかけての土壙墓９基が丘陵上に重なり合って存在し、調査前に古墳の墳丘と考えられていた地点は、単なる自然の高まりであることが判明した。この調査区からは、西方向の久世町市街地が所在する沖積平野を見渡すことができるから、２軒の竪穴住居はそれぞれの時代の集落における見張台の役目を担っていたと思われる。

奥田古墳群の全面調査は、３月15日に終了した。当初には３基の古墳が存在すると考えられていたが、古墳は１基だけで、残る２か所の高まりは、盗掘による土砂の山と現代の墓地造成の残土であったので、名称を「奥田古墳」に変更した。この古墳は直径約11ｍの円墳で、埋葬施設は右片袖の長さ約７ｍの横穴式石室である。石室内は埋葬されたままの良好な状態で残存し、多数の須恵器だけでなく鉄器や装身具なども出土した。この古墳は、７世紀前葉から中葉にかけての時期のものであろう。

水神ヶ峪遺跡の全面調査は、３月１日から３月末日まで奥田古墳の調査と並行して行った。その結果、４グループに分かれた26基の近世土壙墓群が検出され、煙管、数珠玉、毛抜き、寛永通寶などの遺物が出土した。

平成８年度の全面調査は、旦山遺跡を残すだけであった。調査区全体を１区から３区に分割し、４月５日から７月31日まで１区、８月１日から平成９年１月31日まで２区、２月１日から３月末日まで３区の調査を実施した。この旦山遺跡は岡山県北部における最大級の集落跡で、竪穴住居109軒、段状遺構16基、掘立柱建物６棟、土壙231基などの遺構が検出され、土器、土製品、石器、鉄器など各種の遺物が数多く出土した。土壙のうち65基は縄文時代後期から晩期の落とし穴状の遺構で、弥生時代後期には大型の竪穴住居を構築し、平安時代から室町時代にかけても連綿と居住を継続していた。

なお３区で検出した古墳は、旦山５号墳として旦山古墳群の章で概説することにした。　（福田）

第３図　発掘調査を実施した遺跡位置図（1／4000）

第３節　調査の体制

平成６年度

岡山県教育委員会
　教育長　森崎岩之助
　教育次長　岸本　憲二
岡山県教育庁文化課
　課長　大場　　淳
　課長代理　松井　新一
　課長補佐（埋蔵文化財係長）　高畑　知功
　主任　若林　一憲
岡山県古代吉備文化財センター
　所長　河本　　清
　次長　葛原　克人
　　総務課
　課長　丸尾　洋幸
　課長補佐（総務係長）　杉田　卓美
　主査　石井　善晴
　主任　三宅　秀吉
　　調査第一課
　課長　正岡　睦夫
　　第一係
　課長補佐（第一係長）　松本　和男
　文化財保護主事　延堂　　守（調査）
　文化財保護主事　氏平　昭則（調査）
　　調査第三課
　課長　柳瀬　昭彦
　文化財保護主幹　福田　正継（調査）
　　第二係
　係長　江見　正己
　文化財保護主査　大森　善市（調査）

平成７年度

岡山県教育委員会
　教育長　森崎岩之助
　教育次長　黒瀬　定生
岡山県教育庁文化課
　課長　大場　　淳
　課長代理　樋本　俊二
　参事　葛原　克人
　課長補佐（埋蔵文化財係長）　高畑　知功
　主任　若林　一憲
岡山県古代吉備文化財センター
　所長　河本　　清
　次長　髙塚　惠明
　　総務課
　課長　丸尾　洋幸
　課長補佐（総務係長）　井戸　丈二
　主査　石井　善晴
　主任　木山　伸一
　　調査第二課
　課長　伊藤　　晃
　　第二係
　課長補佐（第二係長）　福田　正継（調査）
　文化財保護主任　大柳　　浩（調査）
　（平成７年８月１日～平成８年３月31日）
　文化財保護主任　可児　　巧（調査）
　（平成７年４月１日～平成７年７月31日）
　文化財保護主事　伊東　　孝（調査）

平成８年度

岡山県教育委員会	
教育長	森崎岩之助
教育次長	黒瀬　定生
岡山県教育庁文化課	
課長	大場　　淳
課長代理	松井　英治
課長代理	臼井　洋輔
参事	葛原　克人
課長補佐(埋蔵文化財係長)	平井　　勝
主査	若林　一憲
岡山県古代吉備文化財センター	
所長	河本　　清
次長	髙塚　惠明
文化財保護参事	正岡　睦夫
総務課	
課長	丸尾　洋幸
課長補佐（総務係長）	井戸　丈二
主査	木山　伸一
調査第二課	
課長	伊藤　　晃
第一係	
課長補佐（第一係長）	浅倉　秀昭（調査）
文化財保護主査	木原　義明（調査）
主事	蛯原　啓介（調査）

平成９年度

岡山県教育委員会	
教育長	黒瀬　定生
教育次長	平岩　　武
岡山県教育庁文化課	
課長	髙田　朋香
課長代理	西山　　猛
課長代理	臼井　洋輔
参事	葛原　克人
課長補佐(埋蔵文化財係長)	平井　　勝
主事	三宅　美博
岡山県古代吉備文化財センター	
所長	籔本　克之
次長	正岡　睦夫
総務課	
課長	小倉　　昇
課長補佐（総務係長）	井戸　丈二
主査	木山　伸一
調査第二課	
課長	伊藤　　晃
第二係	
課長補佐（第二係長）	山磨　康平
文化財保護主幹	浅倉　秀昭(報告書)
文化財保護主幹	福田　正継(報告書)
文化財保護主任	大森　充宏(報告書)

第２章　地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境

岡山県真庭郡久世町は、ＪＲ姫新線や中国自動車道が建設された津山から新見にかけて連なる盆地列のほぼ中央部に位置する山間部の町で、周囲に湯原、勝山、落合、久米、鏡野の各町と富村が境を接している。現在の町域は昭和30年に確定したもので、旧久世町と美和村の合併による面積75.12㎢を測るが、その81％は山林である。この地域の気候は、比較的温暖で雪は少なく、台風や地震などの自然災害もほとんどない。

久世町の地形は、旭川とその支流である目木川が形成した沖積平野を中心に、北は中国山地、南は吉備高原の一部が含まれる。北部の中国山地は高くて急峻で、町内の最高所である三坂山の標高903ｍを筆頭に、摺鉢山で879ｍに達し、その南面は多くの深い谷が入り込んでいる。急峻な山地の麓には、標高200～300ｍの低い山地または丘陵が横たわり、沖積平野との境をなしている。一方、沖積平野は極めて平坦となっており、久世町の中心地として商工業の集積が進んでいる。

ここで、久世町全域の地理的環境をもう少し細かく理解するために、町内を流れる大小の河川の流路を上流に向かって辿りながら、周辺の地形を概観してみたい。

久世と勝山の町境から目木川の合流地を経て落合町に至る範囲の旭川は、川幅が広くて緩やかな曲線を描きながらゆったりと流れるが、上流の勝山町以北では川幅が極端に狭くなって流路が屈曲し、全般にわたって深い谷地形を形成している。

旭川と目木川が合流する中島の地点から、北東方向に向かって目木川を約３㎞ほど遡ると、東方向の前方に岡山県北流通センター建設予定地の南区域を望むことができる。ここは久世と落合の町境になる丘陵が、沖積平野の方向へ舌状に張り出しているため、目木川の流れを妨げることになり、その上流の流路が緩やかに湾曲して川幅を広くし、丘陵に囲まれた沖積地に水田を形成している。一方、目を西方向へ転ずれば、砥石山の麓から南方向に張り出した長くて広い台地が存在し、その先端部分に久世中学校がある。この台金屋を中心に東の目木から西の鍋屋まで続く台地は、旭川や目木川の流域に所在する沖積平野を目前にし、眼下の水田面から低い地形になっている。

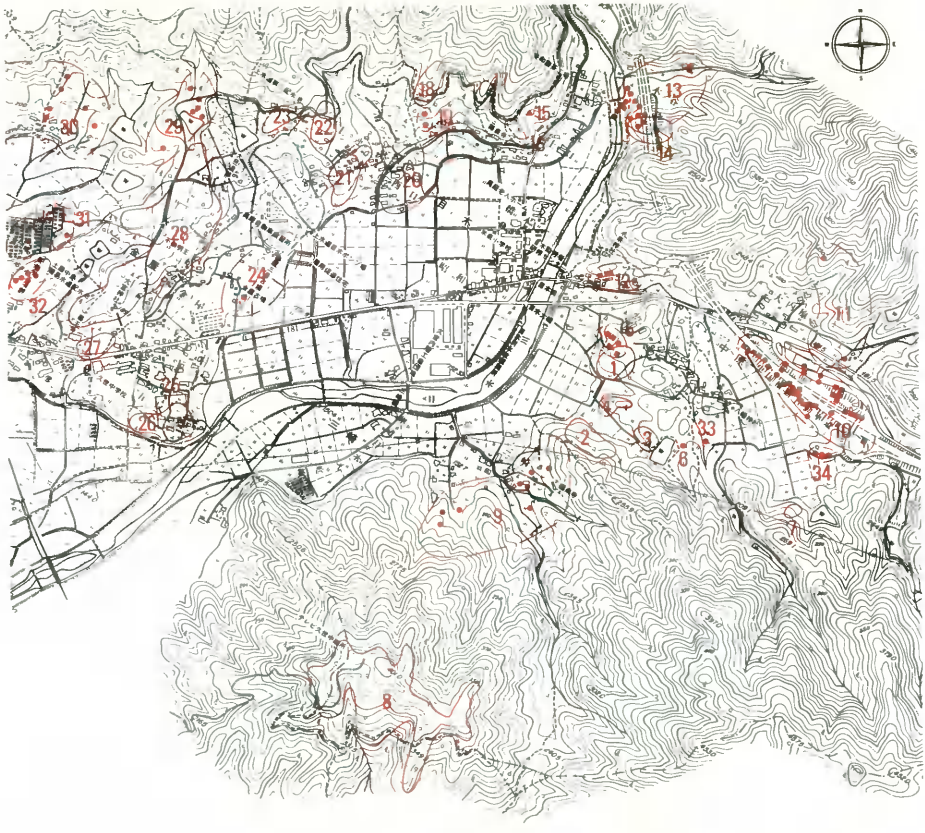
旭川の左岸に位置する久世町久世の旭町と下町の境界地点には、元町で合流した三坂川と小谷川が北方向から流入している。三坂山山麓の三坂川と小谷川に挟まれた地域には、上面が平坦で低い丘陵が所在する。さらに小谷川の上流や右岸の宮芝グラウンド周辺にも、旭川流域の沖積平野に面した緩斜面が認められる。

旭川右岸には主要な河川がなく、横畝川などの小河川が旭川に向かって北流するが、水源からの距離が極めて短く、落合町との境界に位置する急峻な山の麓が、旭川の河原になっている。

このような地形である久世町の地理的環境から遺跡の立地条件を推定すれば、旭川と目木川に挟まれた目木から台金屋を経て鍋屋に至る台地上が最も良好で、目木川の左岸に位置する岡山県北流通センター建設予定地の南区域がそれに続き、旭川の右岸地域は悪いと思われる。

第２節　歴史的環境

久世町に人間が最初に足を踏み入れたのは、縄文時代早期に遡ると推定される。その傍証となる最古の遺物は、楕円や格子目の押型文を有する縄文土器で、上野遺跡[1]、大日遺跡[2]、薬王寺西山遺跡[3]、長光寺山遺跡[4]で出土している。上野遺跡では前期になっても人間が活動した痕跡が認められ、爪形文や貝殻条痕文の土器が採集されている。中期には目木川上流の江森遺跡[5]が知られているだけであるが、後期になると前述の上野遺跡をはじめ、三坂川流域の三栄神社裏山遺跡[6]や小谷川流域の宮芝遺跡[7]で、磨消縄文を有する土器が出土している。晩期の遺物として五反遺跡[8]の鉢形土器が存在するが、この岡



1．旦山遺跡　2．惣台遺跡　3．先旦山遺跡　4．野辺張遺跡　5．旦山古墳群
6．奥田古墳　7．水神ケ峪遺跡　8．篠向山城跡　9．三崎古墳群　10．中原古墳群
11．大内原古墳群　12．宮ノ山古墳群　13．木谷古墳群　14．木谷遺跡　15．経塚
16．引屋敷遺跡　17．上ノ山遺跡　18．戸坂遺跡　19．戸坂古墳群　20．西口遺跡
21．上連遺跡　22．多田須遺跡　23．細シ遺跡　24．金屋古墳群　25．五反廃寺跡
26．五反遺跡　27．岡松遺跡　28．大日遺跡　29．新池古墳群　30．多田古墳群
31．蛇ノ尾古墳群　32．長光寺古墳群　33．同々古墳　34．古墳群

第１図　発掘調査地点周辺遺跡分布図（1／20000）

山県北流通センター建設に伴う発掘調査で、旦山遺跡と惣台遺跡から遺構の落とし穴も検出された。

弥生時代になると前述の五反遺跡より前期後葉の土器が出土しており、中期後葉から後期前葉にかけては集落跡と思われる遺跡が急激に増大する。目木川の流域では、この報告書に掲載している旦山遺跡、惣台遺跡、野辺張遺跡だけでなく、木谷遺跡[9]や上野遺跡などが存在する。目木川と旭川に挟まれた地域では、縄文時代晩期から継続している五反遺跡以外に、大旦遺跡や宮芝遺跡などが知られている。これらの遺跡では、竪穴住居や土壙などの遺構を検出し、それに伴う弥生土器や石器などの遺物が出土している。ところが弥生時代の墳墓については、現在のところ確認されていない。

古墳時代になると古墳が数多く築造されるが、集落跡は不明である。久世町内の前方後円墳は、惣古墳群のアタゴ山５号墳[10]と堂ノ旦１号墳[11]が知られているが、両者とも規模が小さい。また旦山古墳群に近接した北側の尾根上には、宮ノ屺１号墳[12]という前方後方墳が所在するが、現地踏査を行った結果では、２基の方墳が連なっているのかもしれないという印象をもった。５世紀中葉の頃になると造墓活動が活発になり、中原古墳群[13]のように低平な墳丘を有する方墳や円墳が、丘陵の尾根上に数多く築造される。さらに後期になると町内各所に群集墳が形成され、埋葬施設が横穴式石室の古墳が出現する。木谷古墳群の11号墳では、装飾付脚付子持壺やトンボ玉を含む多量の遺物が出土した。

７世紀中葉の白鳳時代になると、五反廃寺[14]が造営される。この寺は大庭郡大庭郷にあり、造営氏族として大庭臣が考えられる。この大庭臣は『続日本紀』天平神護２年（766）条に、「美作国人従八位下白猪臣大足賜姓大庭臣」とあり、美作国人白猪臣大足が大庭臣を賜姓されたことがわかる。そして吉備での「白猪」は白猪屯倉との関係が推定され、555年の白猪屯倉設置に伴い大和政権から派遣された白猪史氏に関わるものと推察される[15]。なお東西方向に所在する出雲街道を挟んで約１kmの地点には、10数点の墨書土器とともに陶製円面硯や獣足壺の脚部が出土した、郡衙推定地の西口遺跡[16]が存在する。ところが、平安時代以降の古代の遺構や遺物は、極端に少なくなる。遺構としては４基の火葬墓が発見された上野火葬墓[17]や上口地区と富尾地区の経塚が所在し、遺物は大旦遺跡や五反遺跡で採集されている。また確実に中世に属する遺構は、中原古墳群の墳墓だけであり、中世か近世か判断できない遺構には、木谷古墳群で数多く検出した土壙墓群がある。町内における近世の時期と確認された土壙墓群は、この報告書に掲載した先旦山遺跡と水神ヶ峪遺跡が初めてである。　（福田）

註

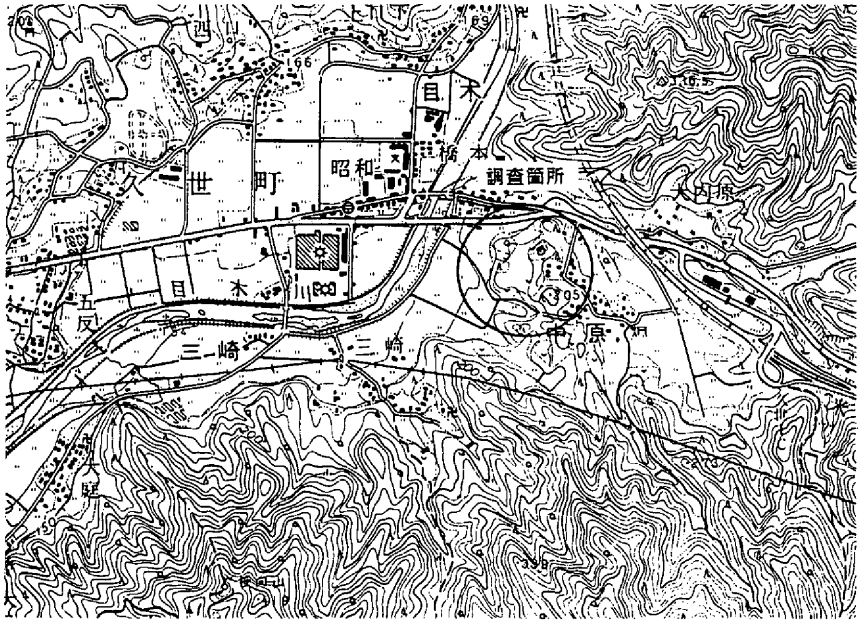
（１）山磨康平「上野遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』91　1994年
（２）松本和男「大旦遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』57　1984年
（３）松本和男・船津昭雄「久世の夜明け」『久世町史』　1975年
（４～８）註３に同じ。江森遺跡は『久世町史』では余野上遺跡となっている。
（９）福田正継「木谷古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』93　1995年
（10）池上　博『久世町埋蔵文化財分布地図』久世町教育委員会　1989年
（11・12）註10に同じ。
（13）福田正継・山磨康平「中原古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』93　1995年
（14）池上　博「五反廃寺」『久世町埋蔵文化財発掘調査報告』２　1997年
（15）亀田修一「吉備における古代寺院の出現とその背景」『古代寺院の出現とその背景』埋蔵文化財研究会・第42回研究集会実行委員会　1997年
（16・17）註３に同じ。

第３章　旦山遺跡

第１節　調査の経過

(1) 確認調査

旦山遺跡は、真庭郡久世町中原に所在する弥生時代後期の集落跡として周知されていた。久世町役場から国道181号を東に３km行くと、旭川の支流である目木川を渡る。この川の左岸に平野からの比高30ｍの台地が存在する。



第１図　旦山遺跡位置図（1／25000）

旦山遺跡の調査は、平成６年12月５日から第一次調査を開始した。現状が水田や畑地になっていた台地上に７本のトレンチを設定し、竹藪となっていた急斜面にも３本のトレンチを設定し、発掘調査した。発掘面積は618㎡である。

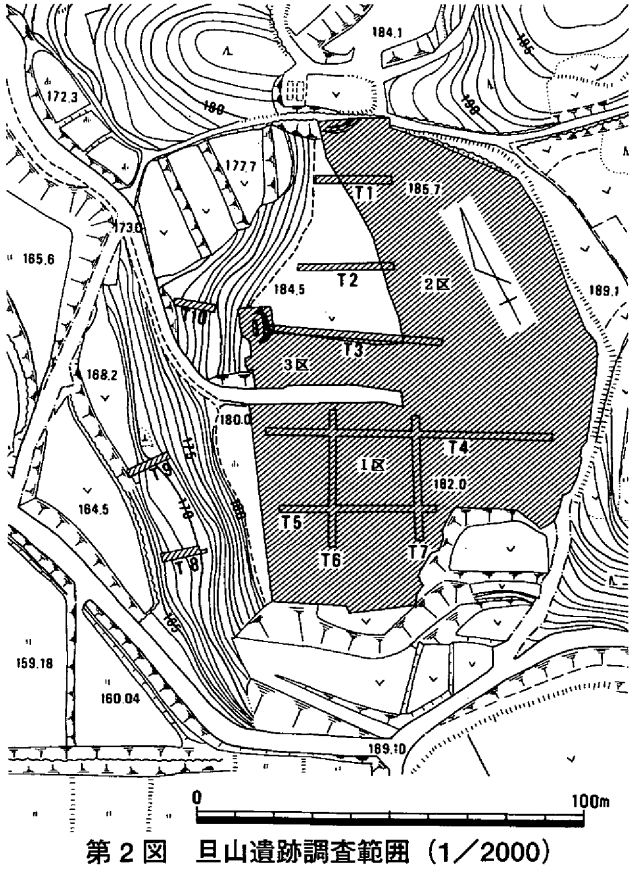
Ｔ１とＴ２では、遺物は出土したものの、遺構については確認できなかった。

Ｔ３では、東半分において大量の弥生土器包含層と、その下層から貯蔵穴を数基検出した。

Ｔ４～Ｔ７はトレンチを井桁状に設定して調査したが、端から端まで粗密はあるものの、遺構を数多く検出し、遺物は弥生時代から中世までのものを含んでいた。遺構の種類は、竪穴住居、貯蔵穴、柱穴群である。

Ｔ８～Ｔ10については、全く遺構や遺物は検出できなかった。

以上の結果から斜面と台地の一部を除いて、第２図の斜線の範囲につき全面調査を行う必要が生じ、6,900㎡の面積を対象とした。



第２図　旦山遺跡調査範囲（1／2000）

(2) 全面調査

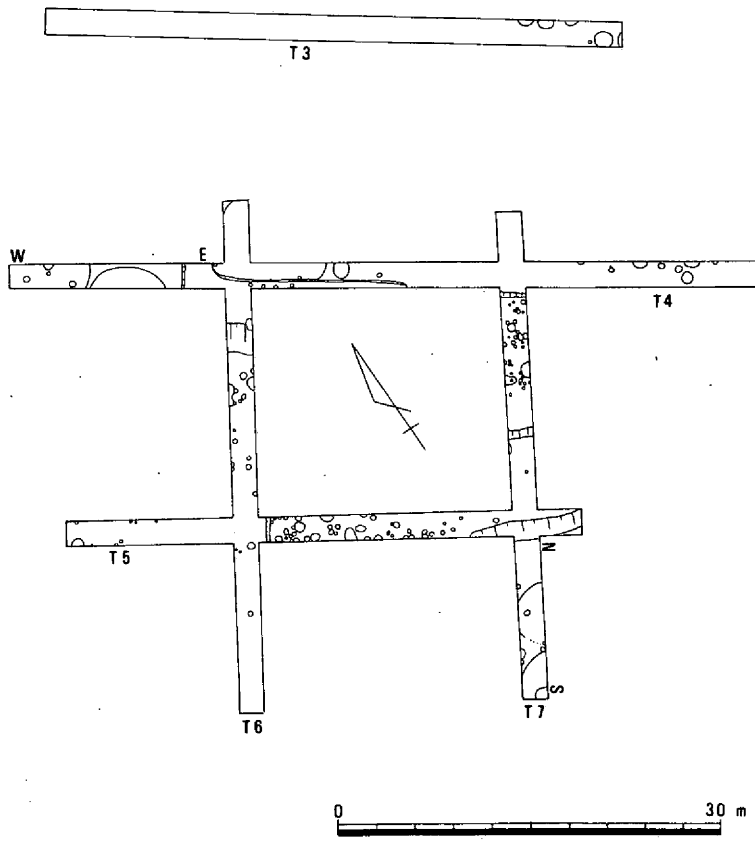
本遺跡の全面調査は、確認調査直後の平成７年度から実施できる予定であったが、岡山県北流通センター建設に伴う用地買収交渉が解決せず、丸１年遅れて平成８年度に実施することとなった。

調査面積は当初6,900㎡で、発掘の進展に伴って500㎡拡張し、実績は7,400㎡に達した。

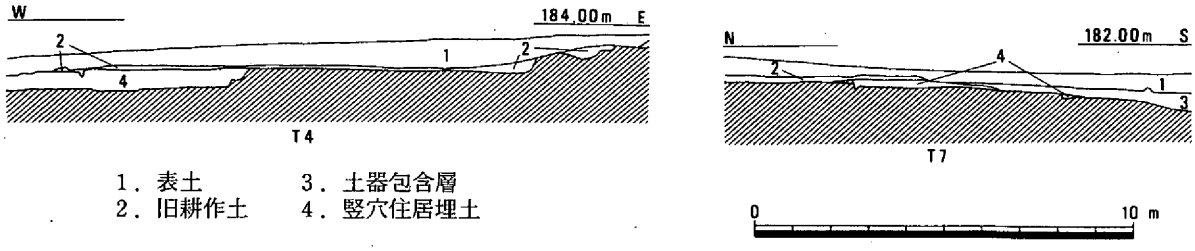
調査の便宜上、調査区を３区に分割した。調査区の中央に幅４ｍの農業用道路があるので、これより南側を１区、北東側を２区、北側を３区と設定した。

１区の調査では平成８年４月から７月まで、3,000㎡を発掘した。２区の調査では８月から平成９年１月まで、3,900㎡を発掘した。３区の調査では１月から３月まで、500㎡を発掘した。調査の画期ごとに重機を導入して表土を除去し、測量杭を打設した。

専門委員会は台風の来襲によって延期され、11月22日に開催し、現地指導を受けた。



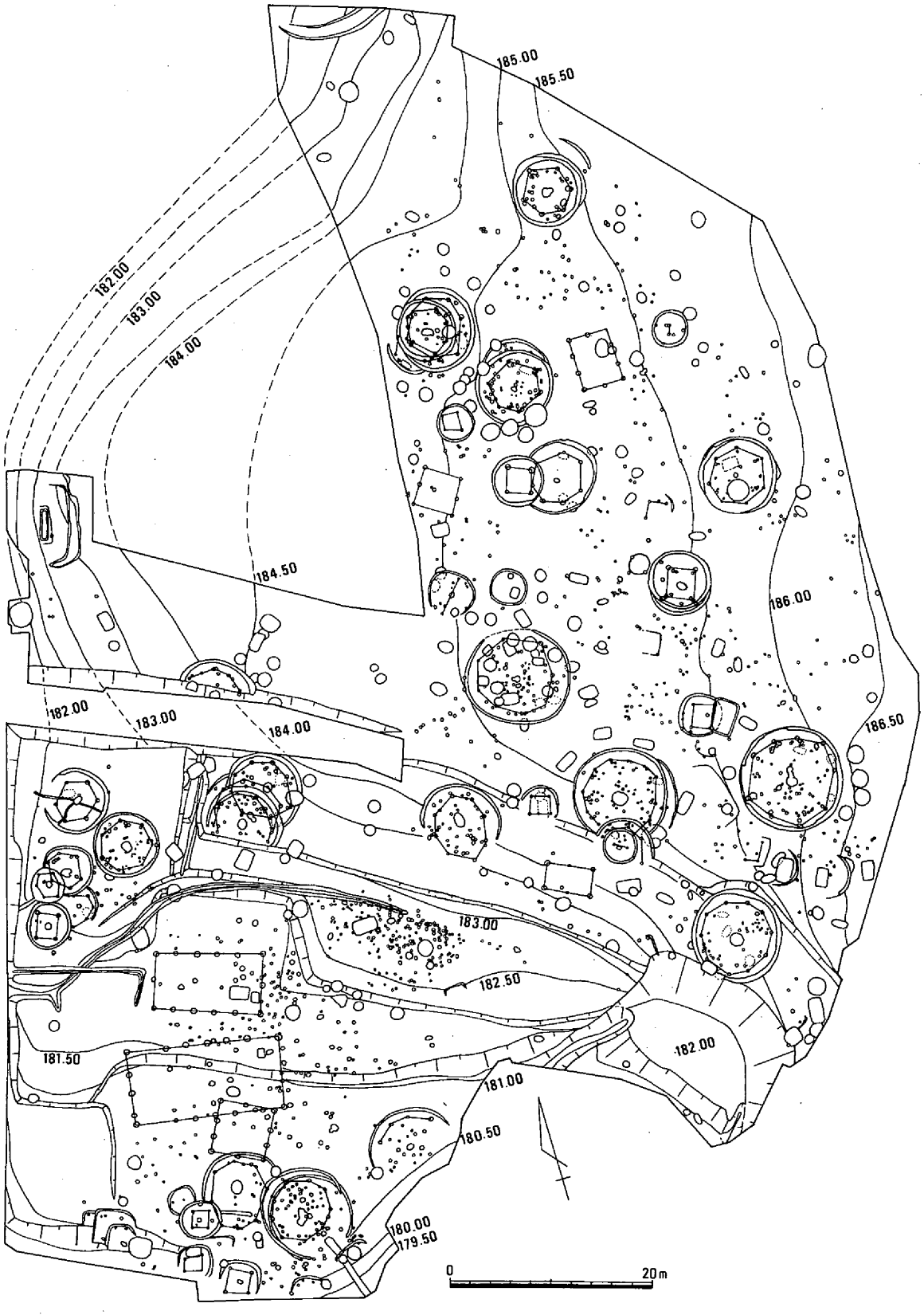
第３図　トレンチ平面図（1／600）



1．表土　　3．土器包含層
2．旧耕作土　　4．竪穴住居埋土

第４図　トレンチ断面図（1／200）

第２節　調査の概要



第５図　旦山遺跡遺構全体図（1／600）

(1) 遺　構

全面調査の１区から３区までの全体で検出できた遺構は、下記のとおりである。

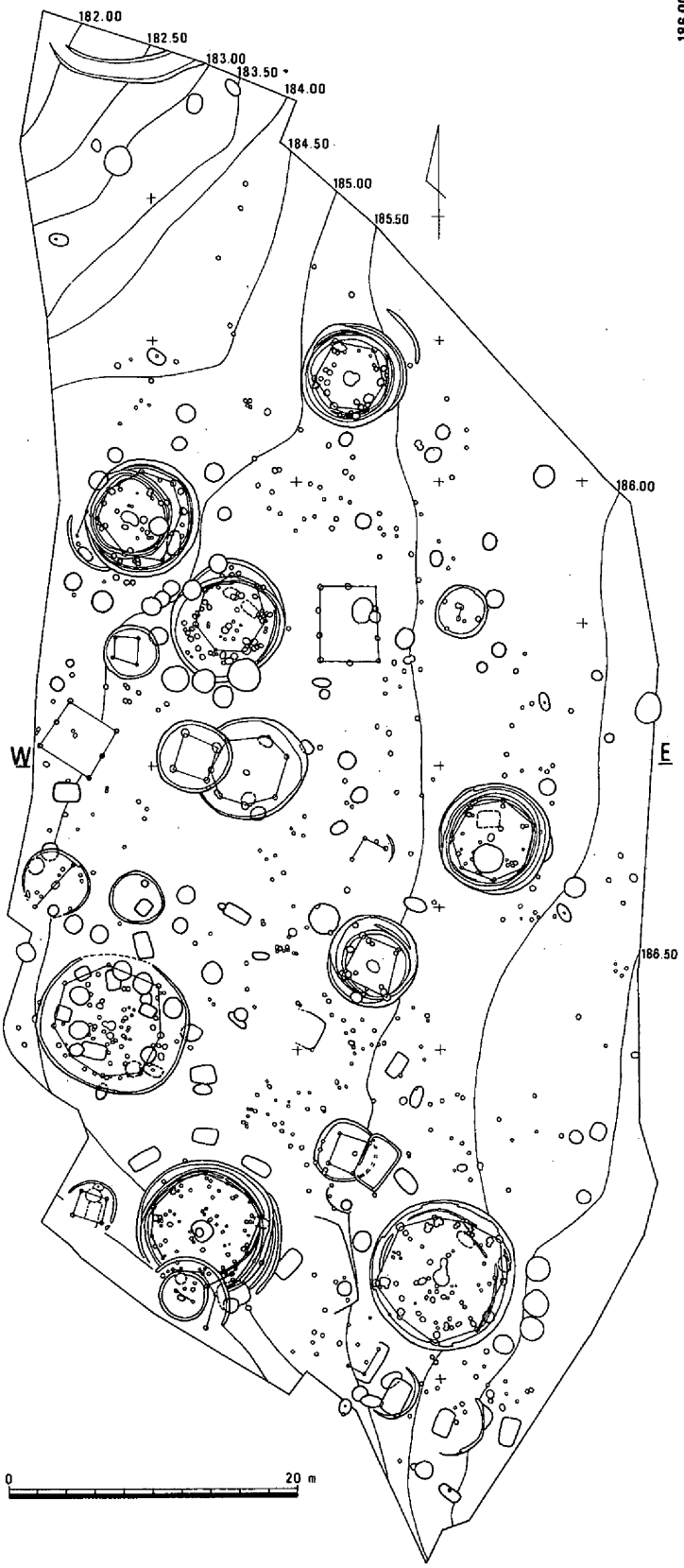
竪穴住居	37軒
段状遺構	16基
建物	6棟
柱穴群	4か所
土壙	177基
落とし穴	65基
溝	3条
古墳	1基

以上309遺構を数える。この他に多数の柱穴が全面で検出されたが、建物か竪穴住居の柱穴か判定できない。

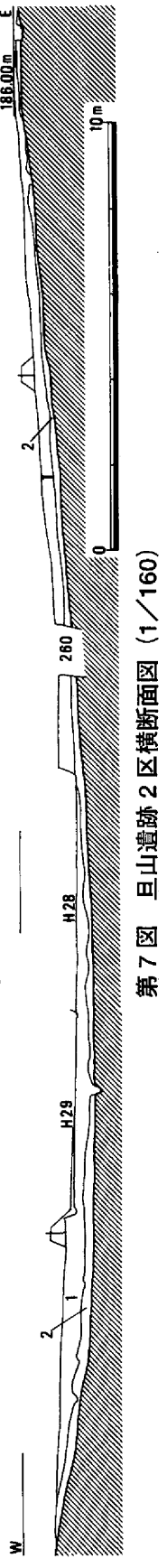
(2) 遺　物

全面調査の１区から３区まで全体で出土した遺物は、下記のとおりである。

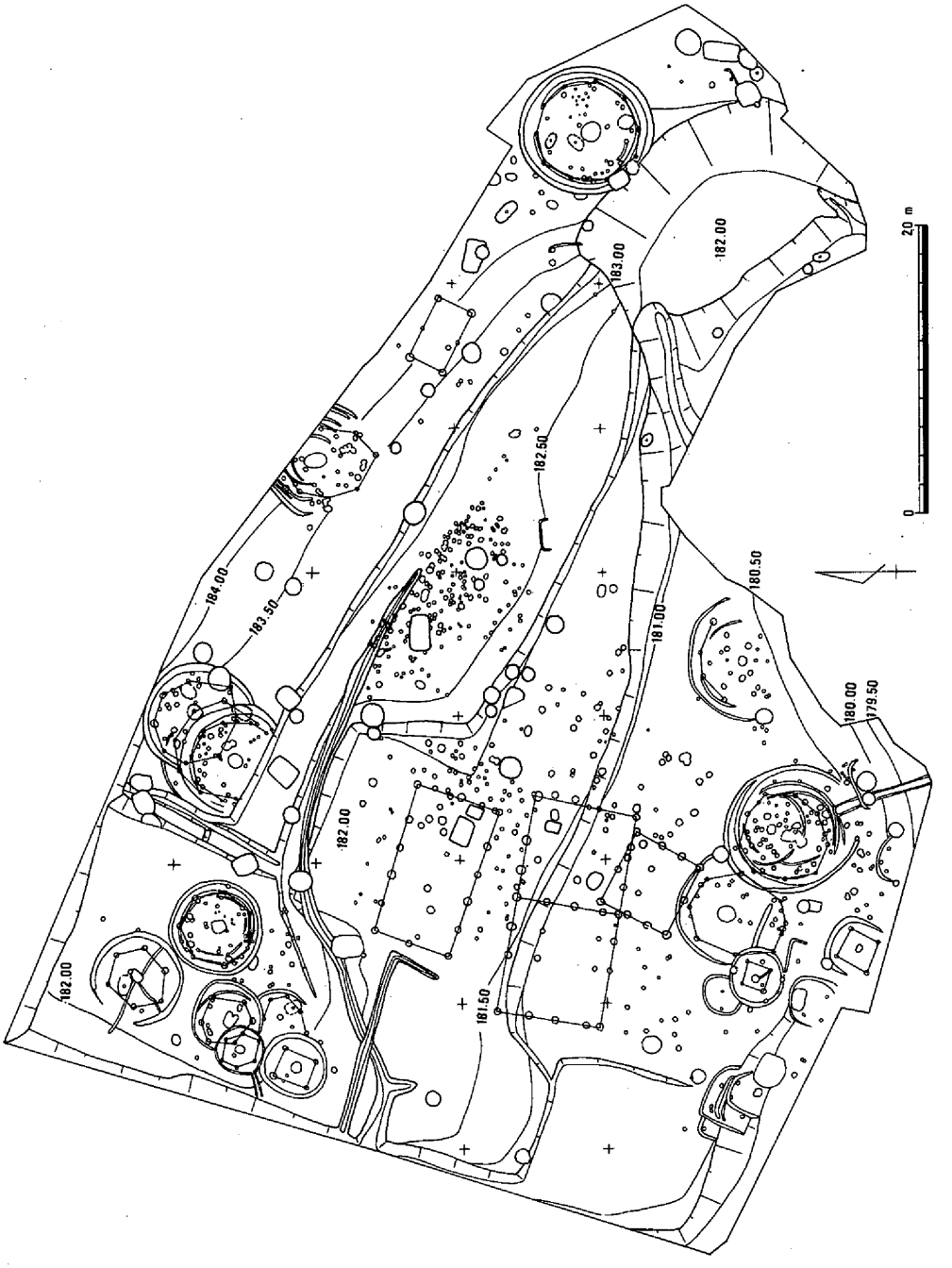
土器（縄文、弥生、須恵器など）	約230箱
土製品（玉、分銅、紡錘車、ミニチュア土器など）	約 30点
石器（鏃、斧、砥石、包丁など）	約130点
鉄器（釘、鉋、鏃、鎌、斧など）	約180点
古銭（永楽通寶、太平通寶など）	12点
鉱滓（鉄、銅）	33点
玉類（勾、管）	7点



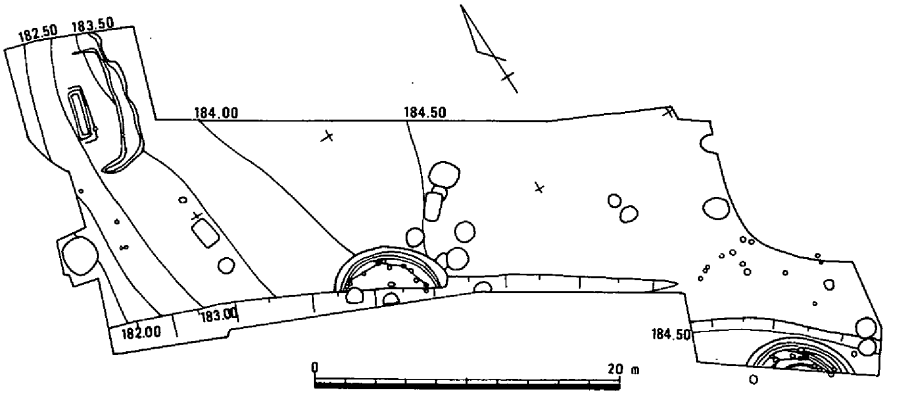
第６図　旦山遺跡２区全体図（1／500）



第７図　旦山遺跡２区横断面図（1／160）



第８図　旦山遺跡１区全体図（1／500）

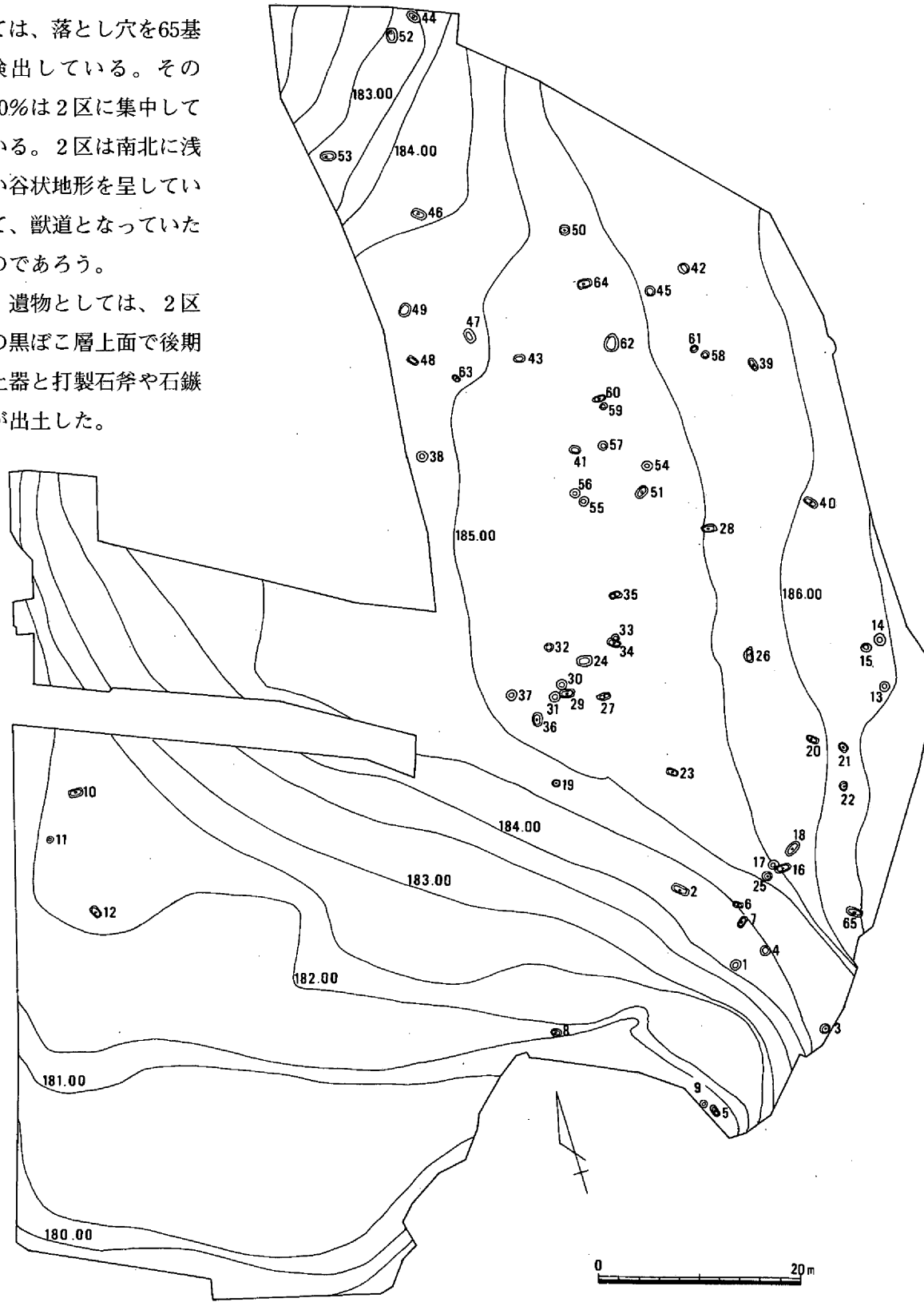


第９図　旦山遺跡３区全体図（1／500）

第３節　縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構としては、落とし穴を65基検出している。その90%は２区に集中している。２区は南北に浅い谷状地形を呈していて、獣道となっていたのであろう。

遺物としては、２区の黒ぼこ層上面で後期土器と打製石斧や石鏃が出土した。

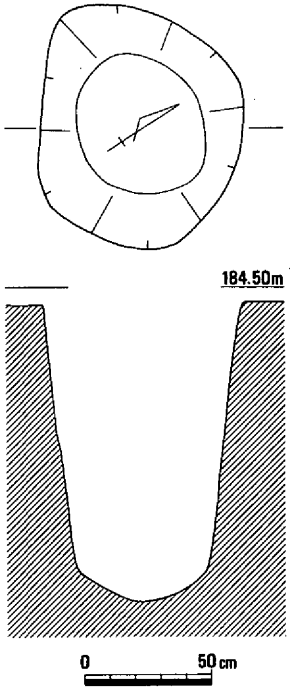


第10図　縄文時代土壙配置図（1／600）

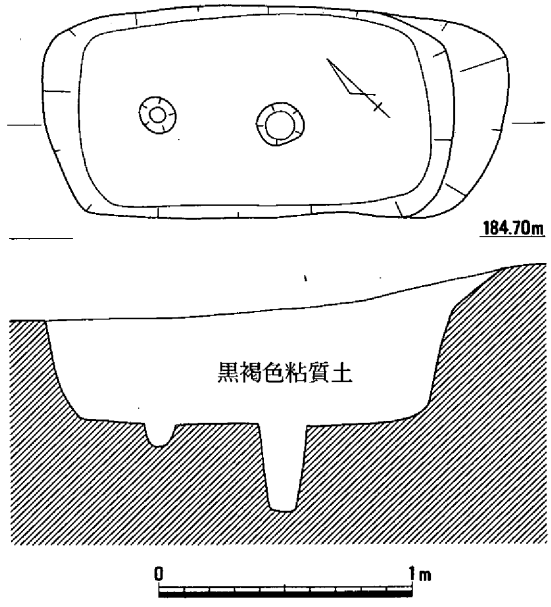
(1) 落とし穴

土壙１～６（第11～16図）

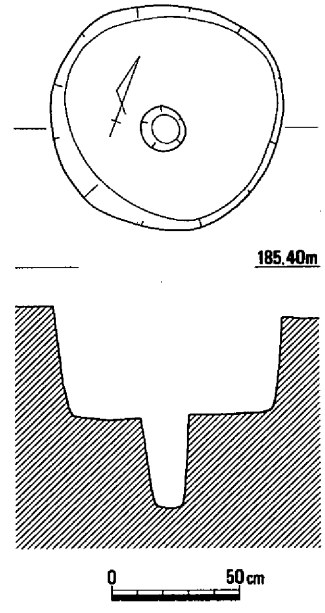
土壙１は暗灰色火山灰が充満していた。底部は円形で、椀形を呈する。土壙２は黒ぼこが充満し、長方形で平坦な床面の中央とやや端よりには逆茂木を埋めた穴があり、２基の土壙の重複が見られる。土壙３は円形で中央に穴がある。土壙４は楕円形で床は平ら、穴はない。土壙５は長方形で、床面の中央に穴を持つ。土壙６は長楕円形で中央に穴がある。以上の土壙は、１区東部で検出した。



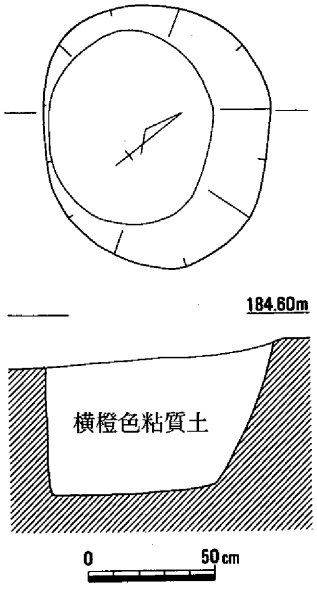
第11図　土壙１(1／30)



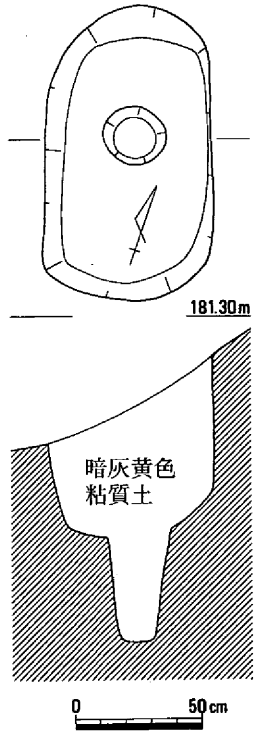
第12図　土壙２（1／30）



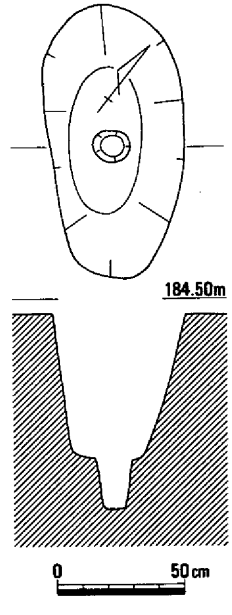
第13図　土壙３（1／30）



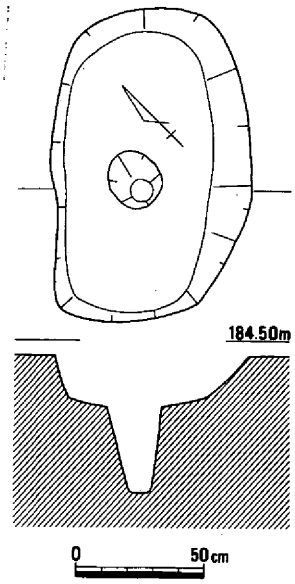
第14図　土壙４（1／30）



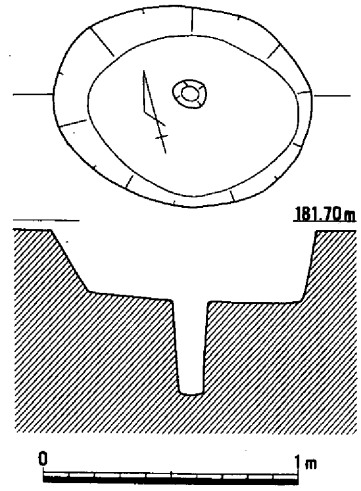
第15図　土壙５（1／30）



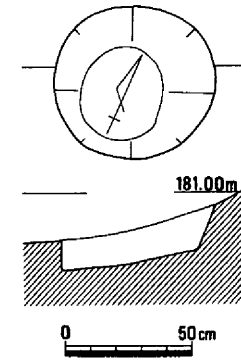
第16図　土壙６（1／30）



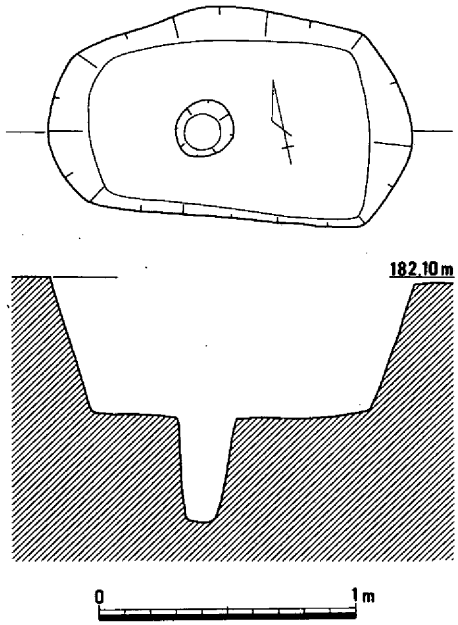
第17図　土壙７（1／30）



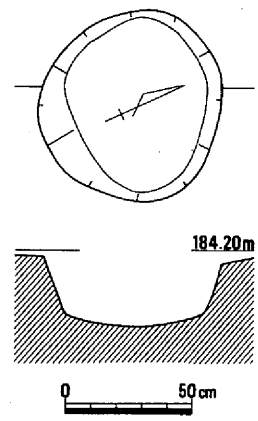
第18図　土壙８（1／30）



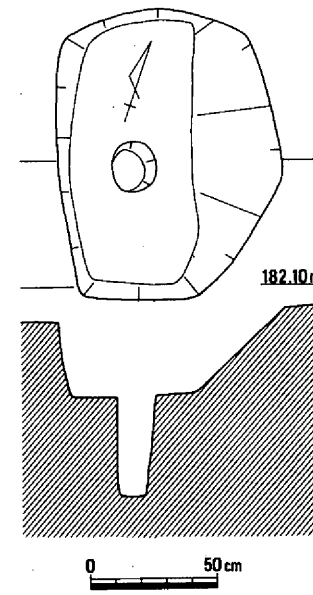
第19図　土壙９（1／30）



第20図　土壙10（1／30）



第21図　土壙11（1／30）



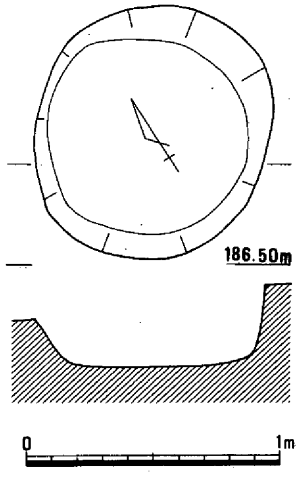
第22図　土壙12（1／30）

土壙７～12（第17～22図）

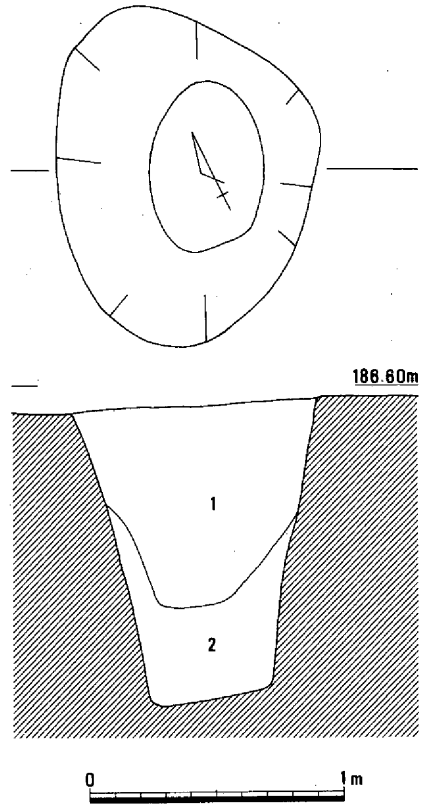
土壙７は長方形で中央に穴がある。土壙８は楕円形で中央に穴がある。土壙９は円形で床は平ら、穴を持たない。土壙10は長方形で中央に穴がある。土壙11は楕円形で底部は椀形を呈する。土壙10は長方形で中央に穴がある。土壙７～９は１区東部だが、土壙10～12は珍しく１区西部で検出した。

土壙13～19（第23～28図）

土壙13は円形で穴がない。土壙14は楕円形で深さ118cmある。土壙15は円形で床は平ら、穴を５個持つが中央のものが深い。土壙16は長方形で中央に穴はない。土壙17は不整形で穴はない。土壙18は楕円形で中央に穴がある。土壙19は方形で中央に穴がある。土壙13～18は２区南東部で検出した。

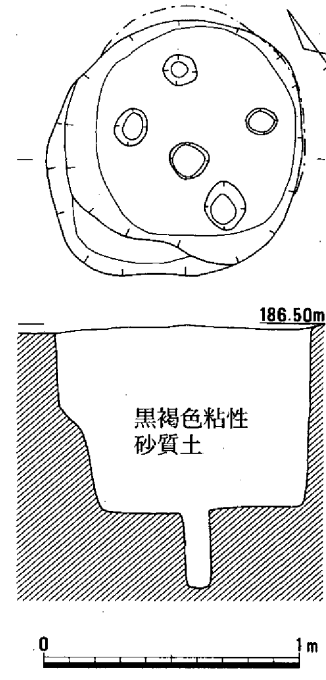


第23図　土壙13(1／30)

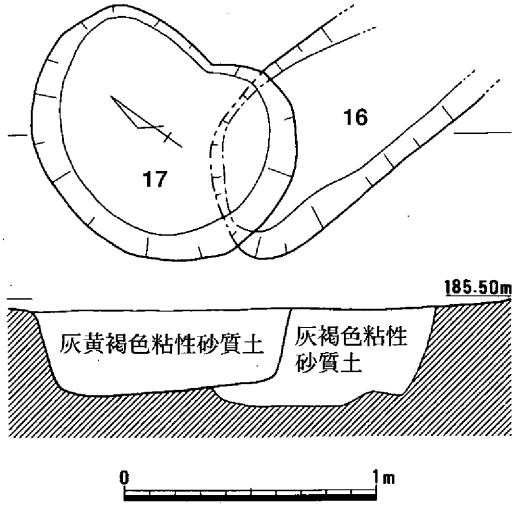


1．灰褐色粘質土　　2．暗灰黄色粘質土

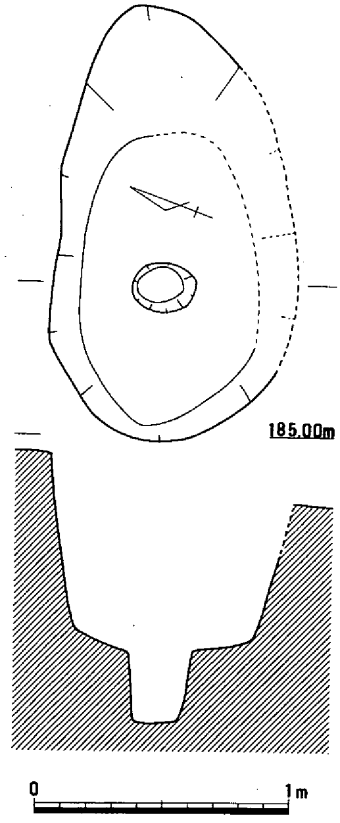
第24図　土壙14（1／30）



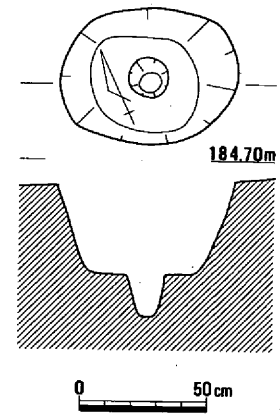
第25図　土壙15（1／30）



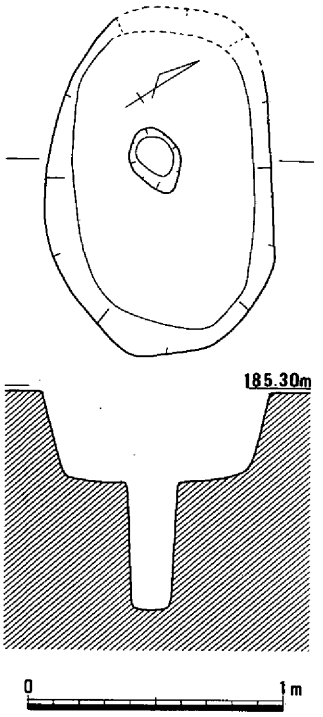
第26図　土壙16・17（1／30）



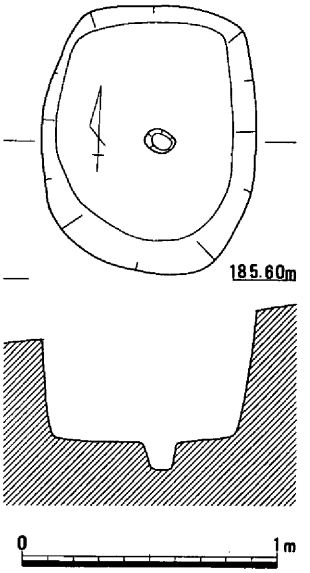
第27図　土壙18（1／30）



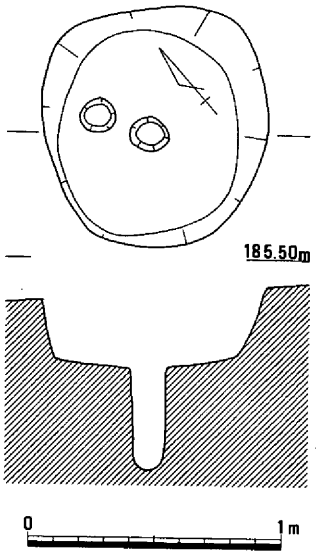
第28図　土壙19(1／30)



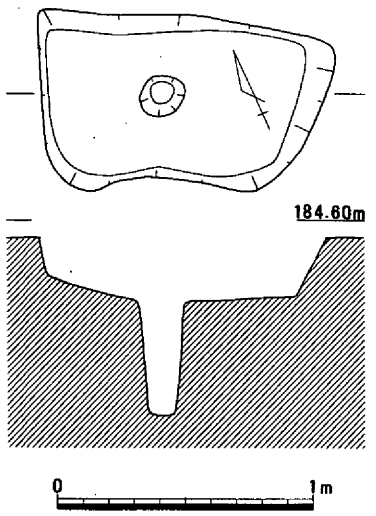
第29図　土壙20（1／30）



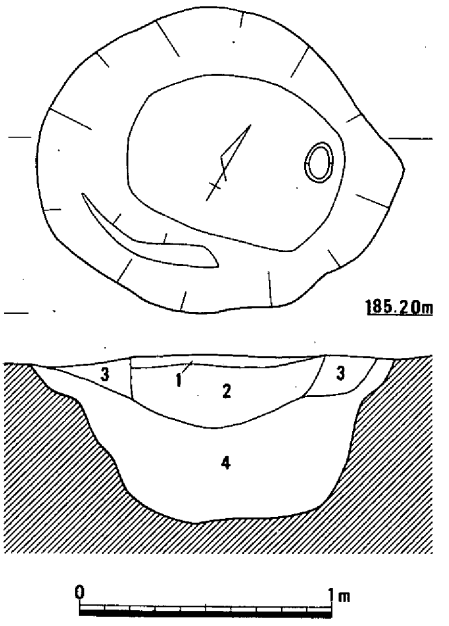
第30図　土壙21（1／30）



第31図　土壙22（1／30）

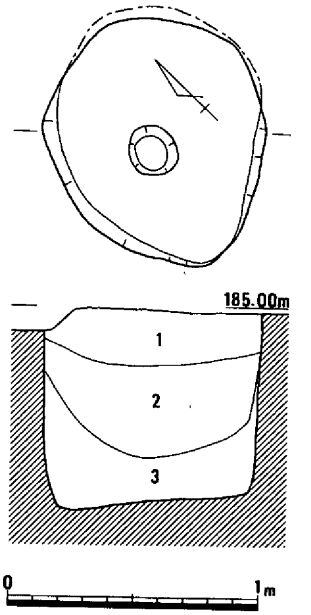


第32図　土壙23（1／30）



1．灰褐色粘質土　　3．黄灰褐色粘質土
2．灰黄色粘質土　　4．灰褐色粘質土

第33図　土壙24（1／30）

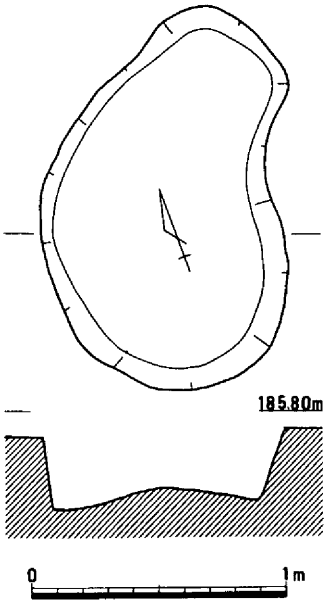


1．黒色粘性砂質土
2．黒褐色粘性砂質土
3．黒褐色粘性砂質土

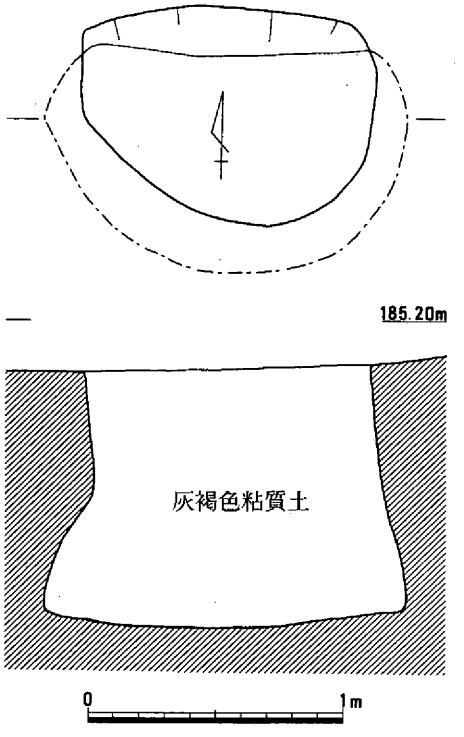
第34図　土壙25(1／30)

土壙20～25（第29～34図）

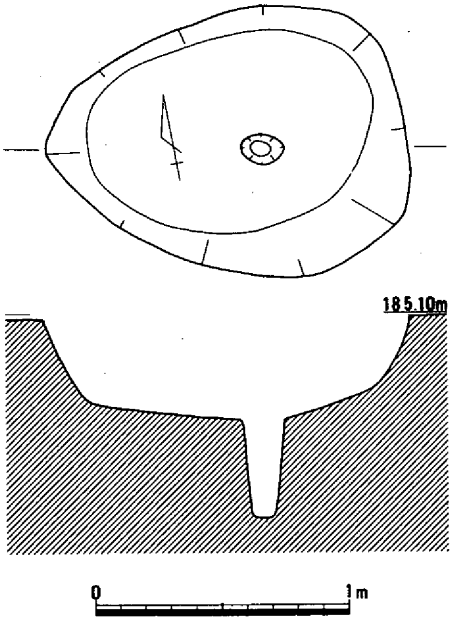
土壙20は楕円形で中央に深さ50㎝の穴を持つ。土壙21は円形で穴は10㎝である。土壙22は円形で、穴を２個持つが中央のものが深い。土壙23は長方形で中央に穴を持つ。土壙24は楕円形で穴は片寄って１個ある。土壙25は円形で中央に穴がある。土壙20～25は２区南部で検出した。



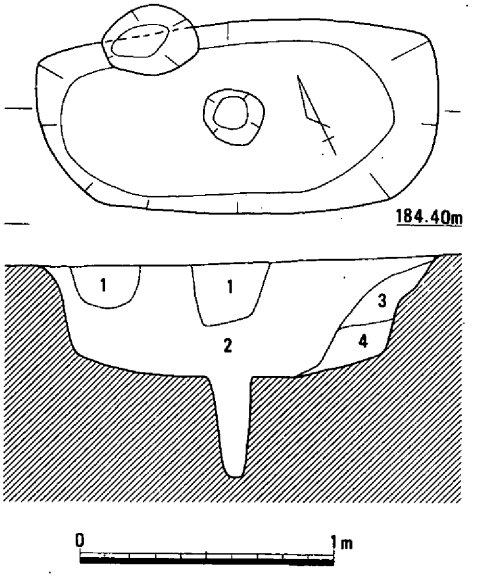
第35図　土壙26（1／30）



第36図　土壙27（1／30）



第37図　土壙28（1／30）



1．暗褐色粘質土　　3．淡黄褐色粘質土
2．黒褐色粘質土　　4．黄褐色粘質土

第38図　土壙29（1／30）

土壙26～29

（第35～38図）

土壙26は瓢箪形で中央がやや盛り上がる。土壙27は楕円形で穴はなく袋状を呈する。検出面からの深さは102cmを測る。土壙28は楕円形で中央よりやや片寄って穴がある。土壙29は長方形で中央に穴を持つ。穴の深さは40cmを測る。土壙26・28は２区中央部、土壙27・29は低位部で検出した。

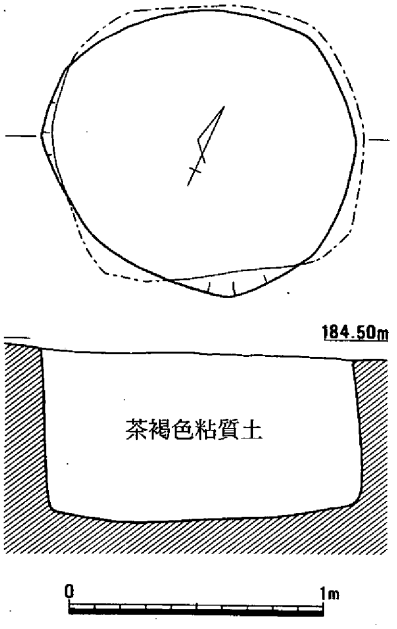
土壙30～33

（第39～42図）

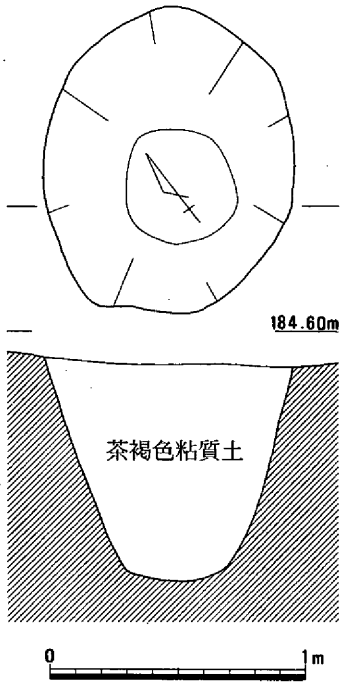
土壙30は角の取れた方形でやや袋状を呈する。土壙31は円形で底部は椀形を呈する。検出面からの深さは86cmを測る。土壙32は円形で底部は椀形である。深さは27cmである。土壙33は円形で底部は椀形である。土壙30～33は２区中央部の低位部に集中して検出した。

土壙34～36（第42～44図）

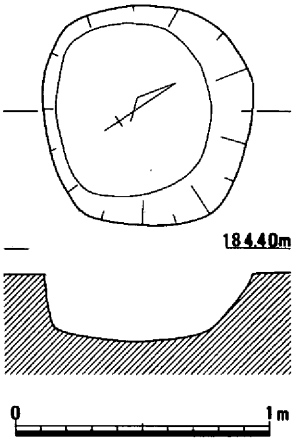
土壙34は楕円形で中央に深さ40cmの穴を持つ。床までの深さは125cmあり、本遺跡中最も深い。土壙33を切っていることから、より新しいと言える。土壙35は楕円形で穴を多数持つが、中央のものが深い。土壙36は長方形で中央に穴を持つ。土壙34～36は中央部の低位部に集中して検出した。



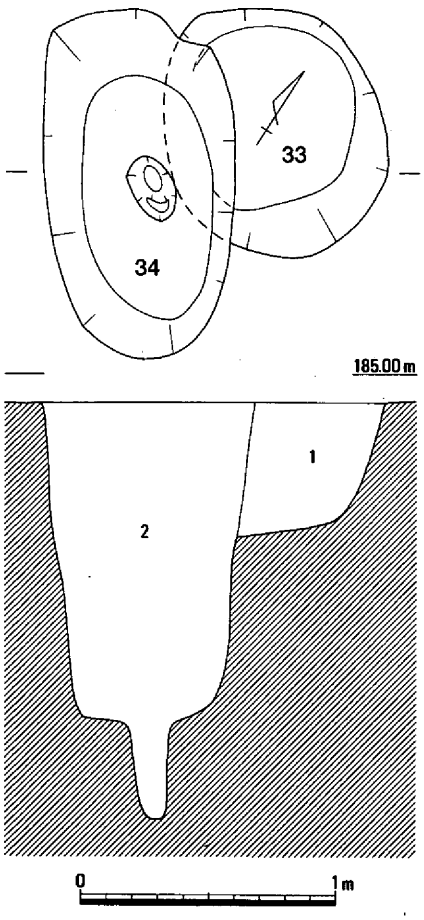
第39図　土壙30（1／30）



第40図　土壙31（1／30）

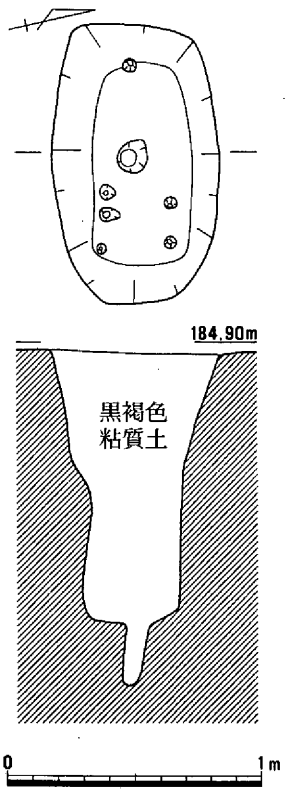


第41図　土壙32（1／30）

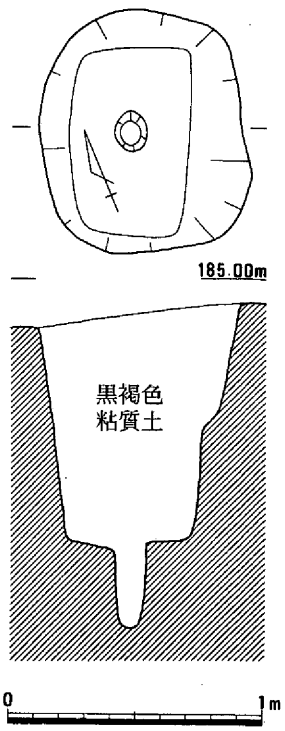


1．茶褐色粘質土
2．黒色土

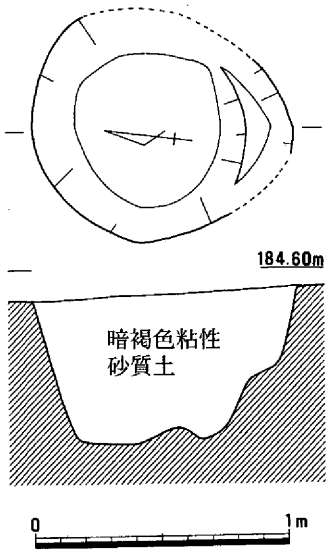
第42図　土壙33・34（1／30）



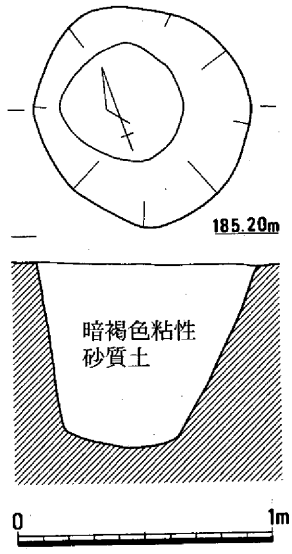
第43図　土壙35（1／30）



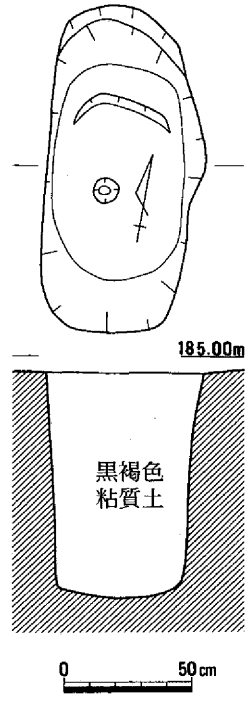
第44図　土壙36（1／30）



第45図　土壙37（1／30）



第46図　土壙38(1／30)

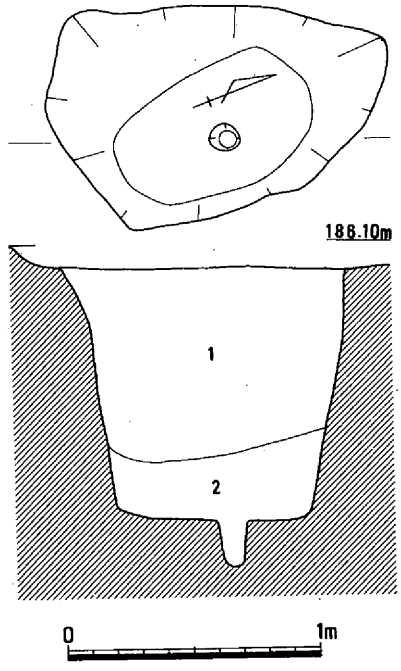


第47図　土壙39(1／30)

土壙37～40・42

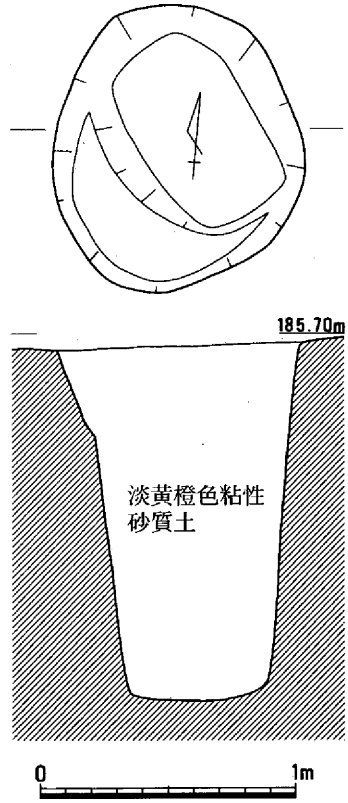
（第45～49図）

土壙37は円形で途中に段があり、床は凹凸があるが、穴は持たない。土壙38は円形で穴はない。検出面からの深さは72cmを測る。底部はすぼんで椀形を呈する。土壙39は楕円形で、中央に穴がある。検出面の海抜高は184.3cmで、床面までの深さは88cmを測る。穴の深さは40cmを測る。黒ぼこが充満していた。土壙40は長方形で中央に穴を持つ。上面は三角形を呈する。深さは100cmを測る。土壙42は深さ140cmを測る。土壙37～40・42は２区中央部で検出した。



1．黒褐色粘性砂質土
2．黒褐色粘性砂質土
（１よりやや黄色を呈する）

第48図　土壙40（1／30）



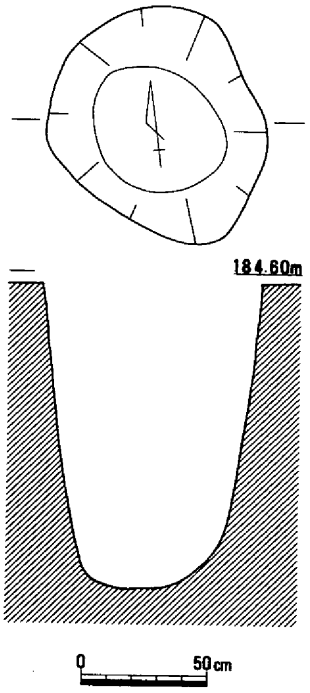
第49図　土壙42（1／30）

土壙41（第50・51図、図版29）

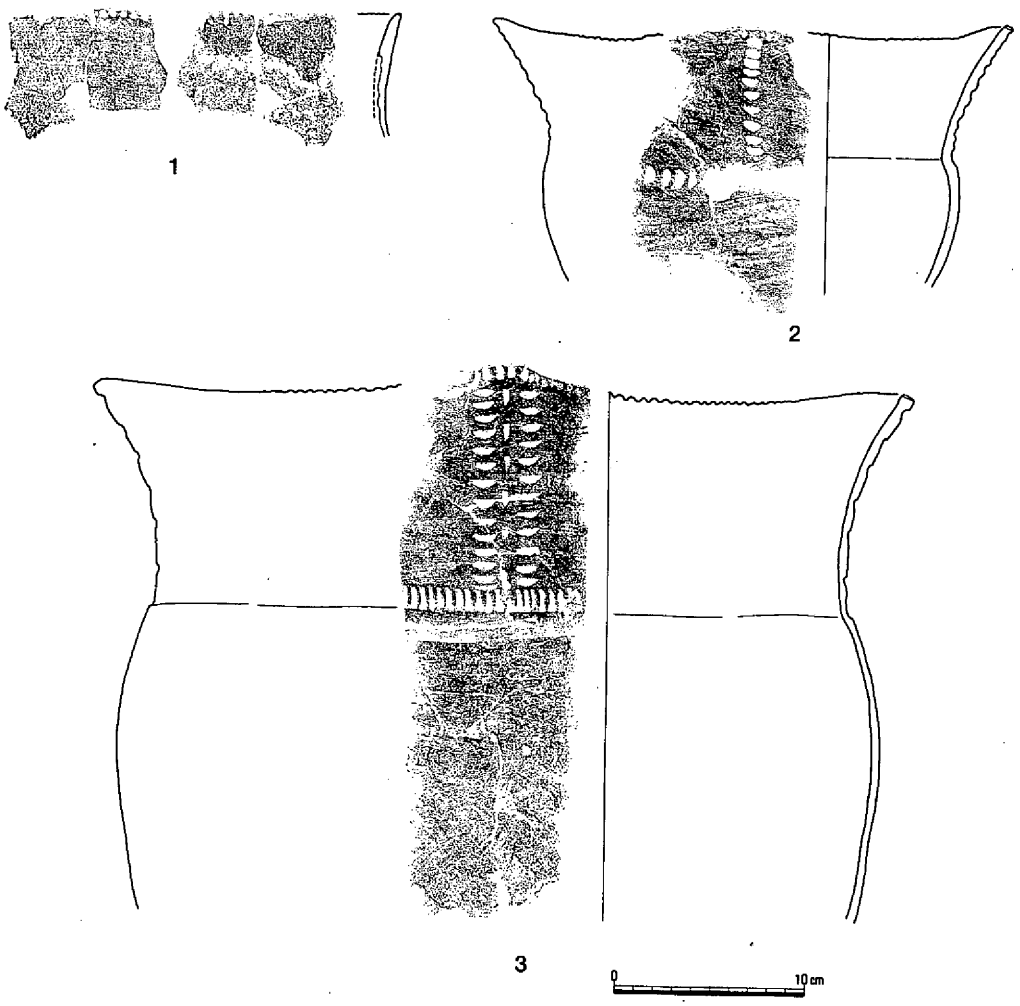
２区の中央部で検出した竪穴住居28の柱穴を掘り下げていた際に確認したものである。埋土としては、「黒ぼこ」とこの地方で呼ばれる火山灰で充塡されていた。上層から中層にかけて、図示した縄文晩期の深鉢形土器が出土した。かなり大きな破片である。底部は欠損していた。土壙は下に行くほど少しずつすぼまり、床は椀形を呈している。穴のない種類の落とし穴と考えられる。時期は土器の存在から縄文晩期に断定できる。その他の土壙の時期について、基準となる重要な土壙である。

１は５㎝角の破片である。深鉢形土器の口縁部で、やや外反する口縁の端部には、丸い断面を持つ棒状工具で刻み目を施している。器表面は両面ともていねいなヘラミガキ仕上げをしている。

２は口径27㎝を測る小型の深鉢形土器である。口縁は波状を呈し、４か所のピークの内の１つには、くびれ部まで縦方向に１列の爪形の刺突文を、そしてくびれ部に横１列の爪形の刺突文をそれぞれ施している。口唇部には**１**と同じ刻み目がある。

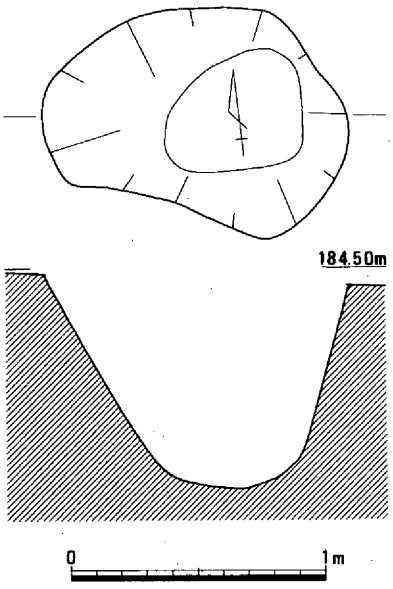


第50図　土壙41（1／30）

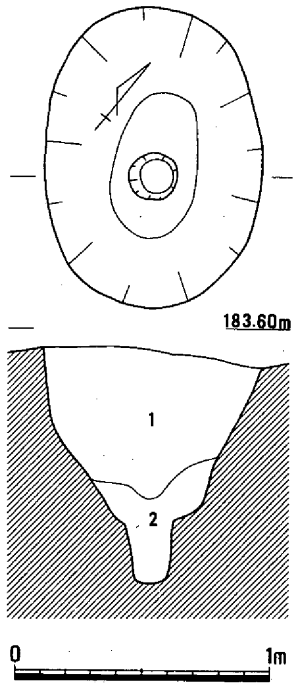


３は径44㎝を測る大型の深鉢土器である。**２**と同じ位置に文様を描写しているが、縦には２列の爪形文とその間１列の縦の刺突文を施している。口唇部には**１**と同じ刻み目がある。

第51図　土壙41出土縄文土器（1／4）

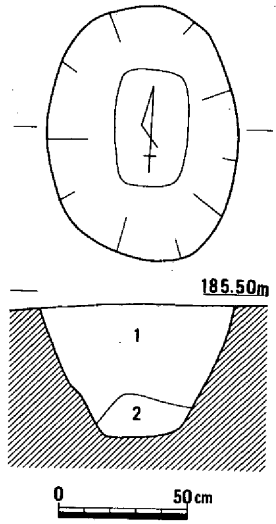


第52図　土壙43（1／30）



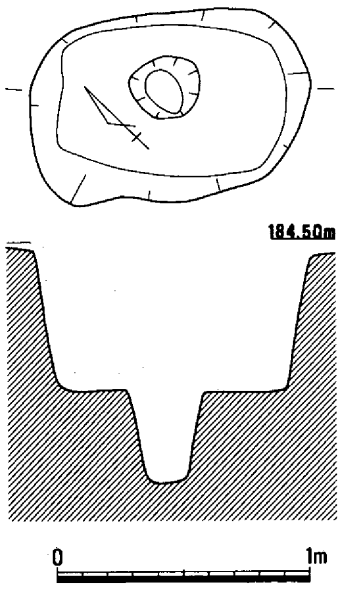
1．黒褐色粘質土
2．淡黄褐色粘質土

第53図　土壙44(1／30)

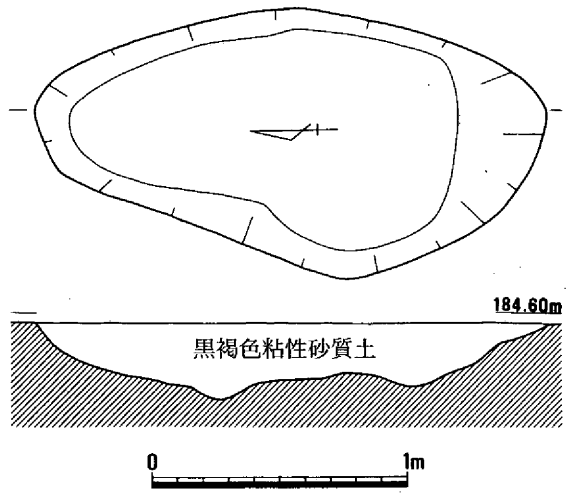


1．黒褐色粘性砂質土
2．灰黄褐色粘性砂質土

第54図　土壙45（1／30）



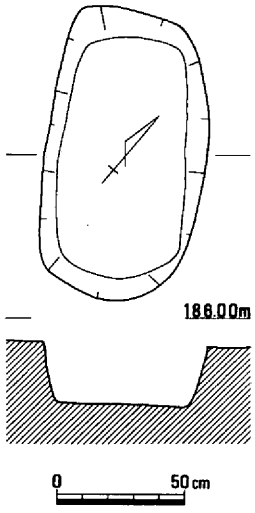
第55図　土壙46（1／30）



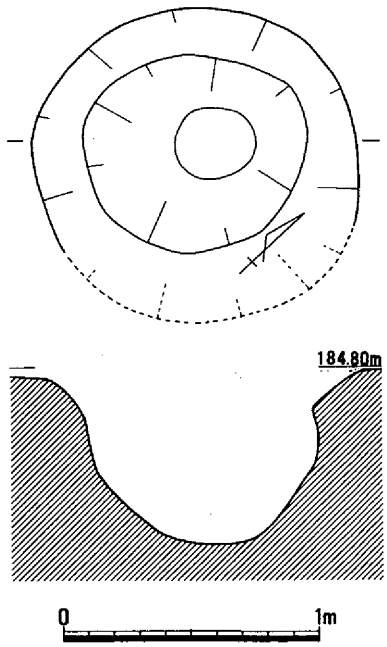
第56図　土壙47（1／30）

土壙43～47（第52～56図）

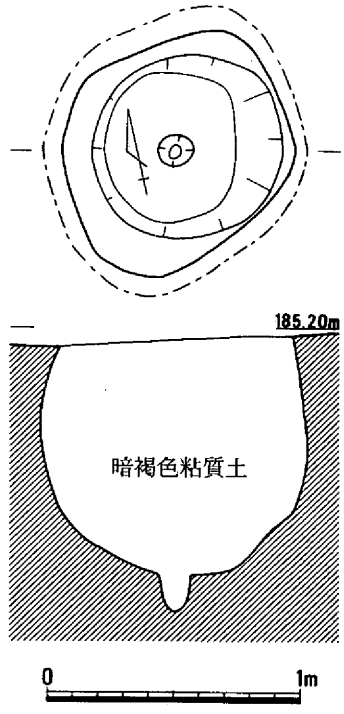
土壙44は楕円形で床は椀形であるが、穴は持たない。土壙44は楕円形で穴を持つ。土層は２層に分離できる。土壙45は楕円形で、穴はない。検出面の海抜高は185.3cmで、床面までの深さは52cmを測る。第１層は黒ぼこ、第２層は灰色火山灰である。土壙46は楕円形で中央に穴を持つ。底面までの深さは55cmを測る。土壙47は深さ30cmを測る。床は凹凸が著しい。土壙43～47は２区北部で検出した。



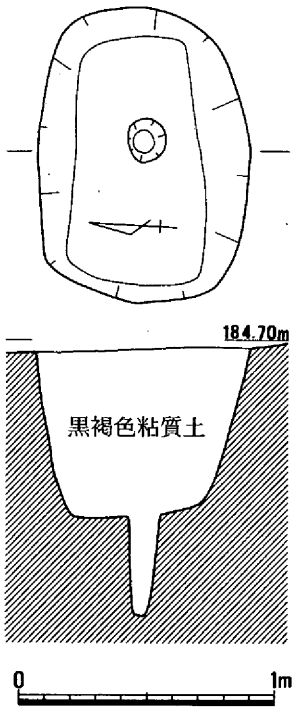
第57図　土壙48(1／30)



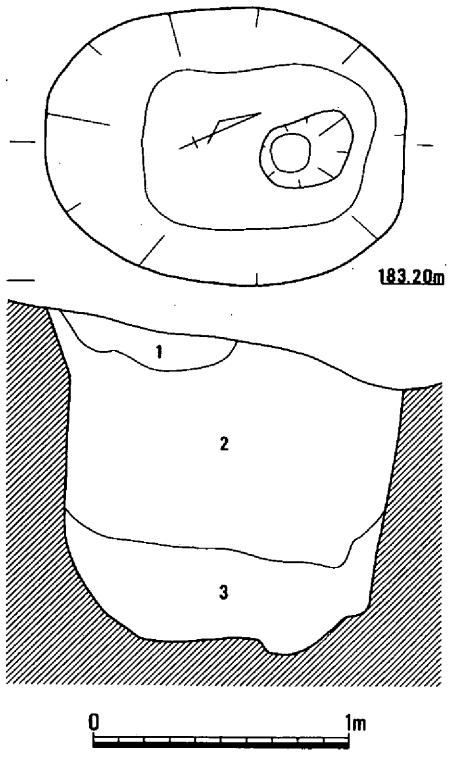
第58図　土壙49（1／30）



第59図　土壙50（1／30）

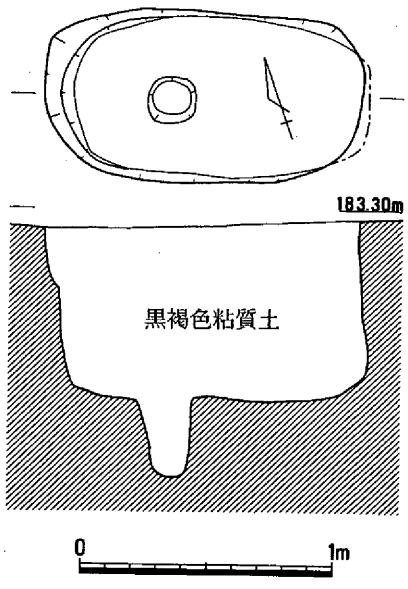


第60図　土壙51(1／30)



1．淡黄橙色粘質土　　3．淡黄橙色
2．黒褐色粘質土

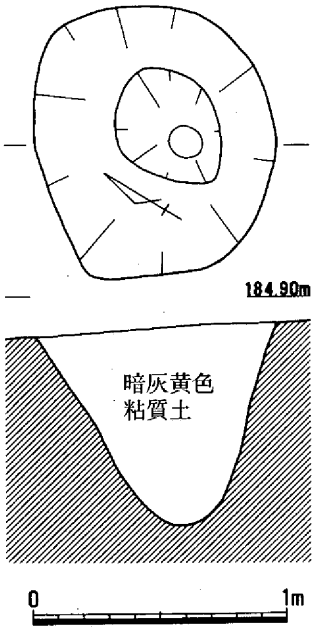
第61図　土壙52（1／30）



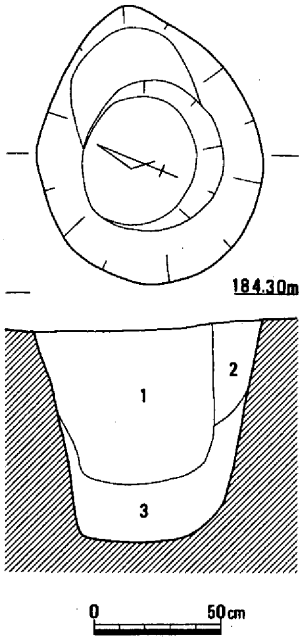
第62図　土壙53（1／30）

土壙48～53（第57～62図）

土壙48は楕円形で床は比較的平坦である。土壙49は円形で鉢形の断面形を呈する。土壙50は円形で穴を持つ。断面形は袋状を呈する。土壙51は長方形で中央に径40㎝の穴を持つ。土壙52は深さ140㎝を測り、穴は浅い。土壙53は楕円形で穴は片寄っている。以上の土壙は、２区北部で検出した。

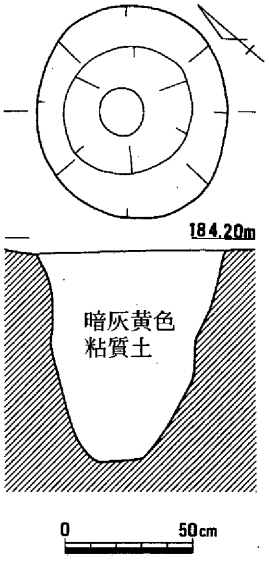


第63図　土壙54（1／30）

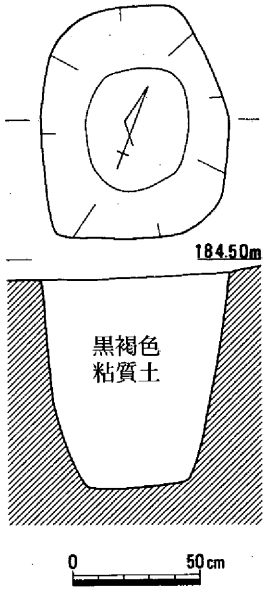


1．黒褐色粘質土
2．暗灰黄色粘質土
3．黄褐色粘質土

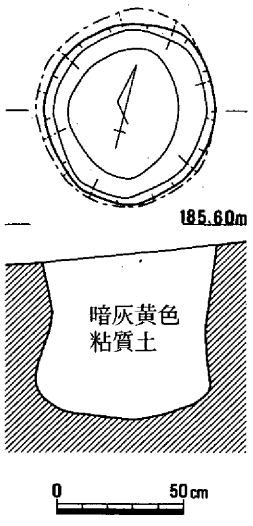
第64図　土壙55(1／30)



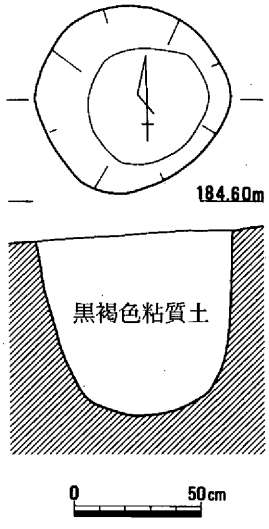
第65図　土壙56(1／30)



第66図　土壙57（1／30）



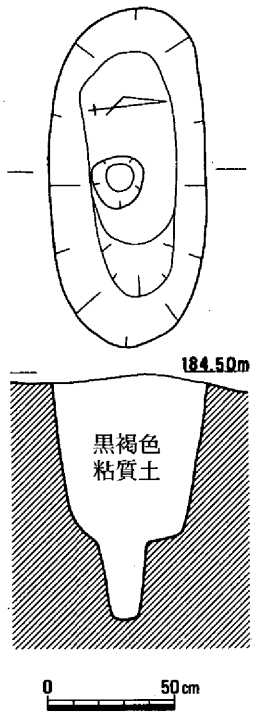
第67図　土壙58（1／30）



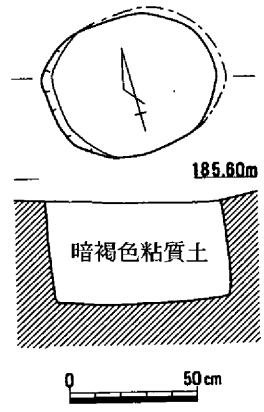
第68図　土壙59（1／30）

土壙54～59（第63～68図）

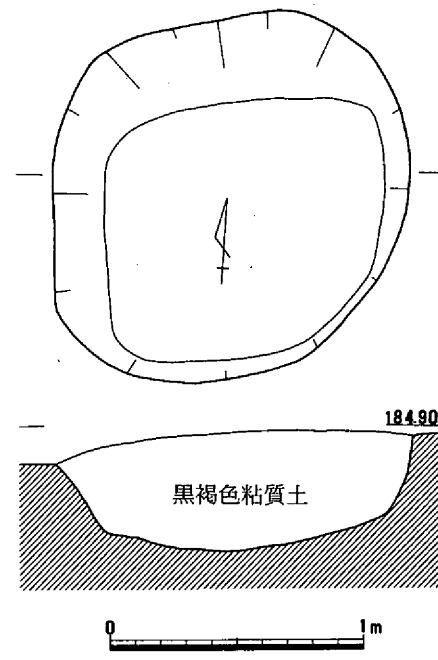
土壙54は円形で床は椀形を呈し、穴は持たない。土壙55は円形で穴はない。途中に段があるのは、２基の土壙が重複しているためである。土壙56は円形で穴はない。床面までの深さ83cmを測る。土壙57は楕円形で穴はない。土壙58は深さ65cmを測り、やや袋状を呈する。土壙59は深さ72cmを測り、床は椀形である。黒ぼこで埋まっている。土壙54～59は、２区中央部で黒ぼこ除去後に検出した。



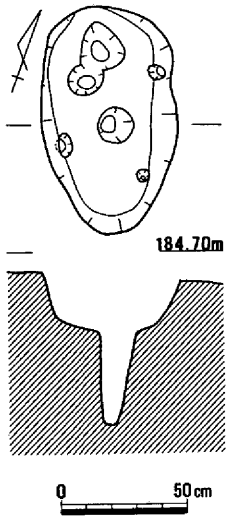
第69図　土壙60(1／30)



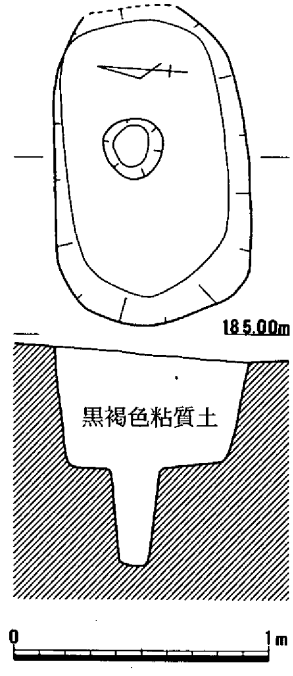
第70図　土壙61(1／30)



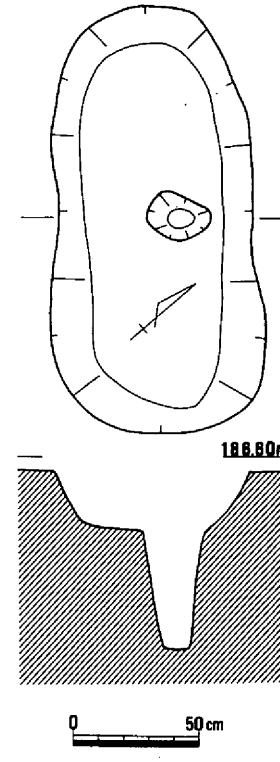
第71図　土壙62（1／30)



第72図　土壙63(1／30)



第73図　土壙64(1／30)



第74図　土壙65(1／30)

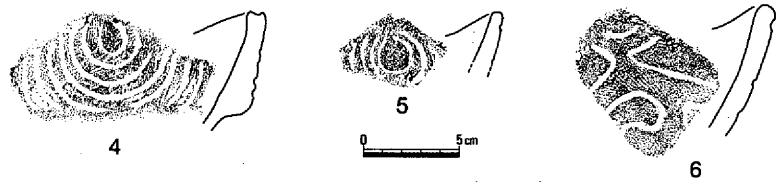
土壙60～65（第69～74図）

土壙60は楕円形で穴を持つ。土壙61は楕円形で穴はない。床は平坦である。土壙62は方形の変形で穴はない。床中央がやや窪む。土壙63は楕円形で穴は多数あるが、中央のものが深い。土壙64は楕円形で穴を持つ。土壙65は床までの深さが20cmを測る。中央穴の床からの深さは48cmである。土壙60～65は、２区中央部で黒ぼこ除去後に検出した。

(2) 縄文土器

本遺跡で遺構以外から出土した縄文土器は、図示した３点以外に小破片の２点が存在する。いずれも２区の中央部分からの出土である。

4は深鉢形土器の口縁部で、波状部の一部分である。同心円の沈線文が施されている。**5**も**4**と同様に波状部の一部分である。同心円の沈線文が施されている。**6**は波状部の一部分である。磨消縄文の部分が認められる。図示していない１点は、磨消縄文が認められる体部小破片である。

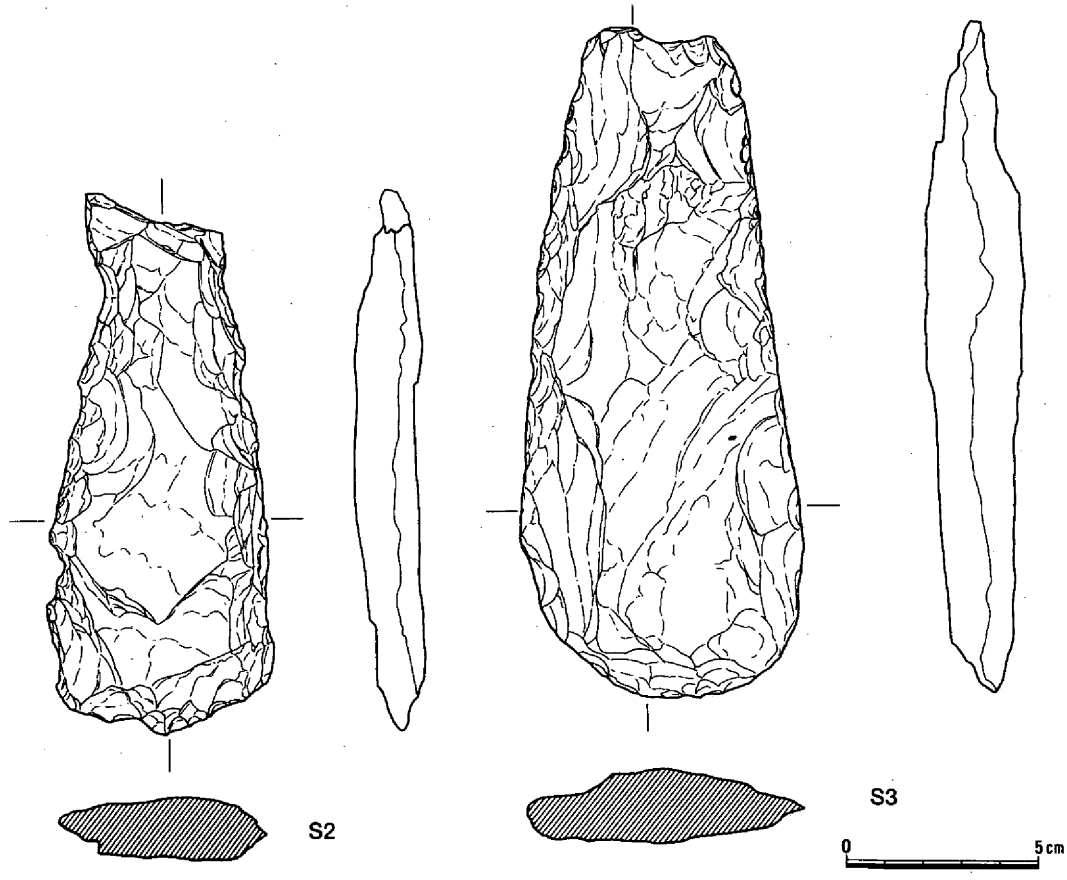


第75図　縄文土器（1／4）

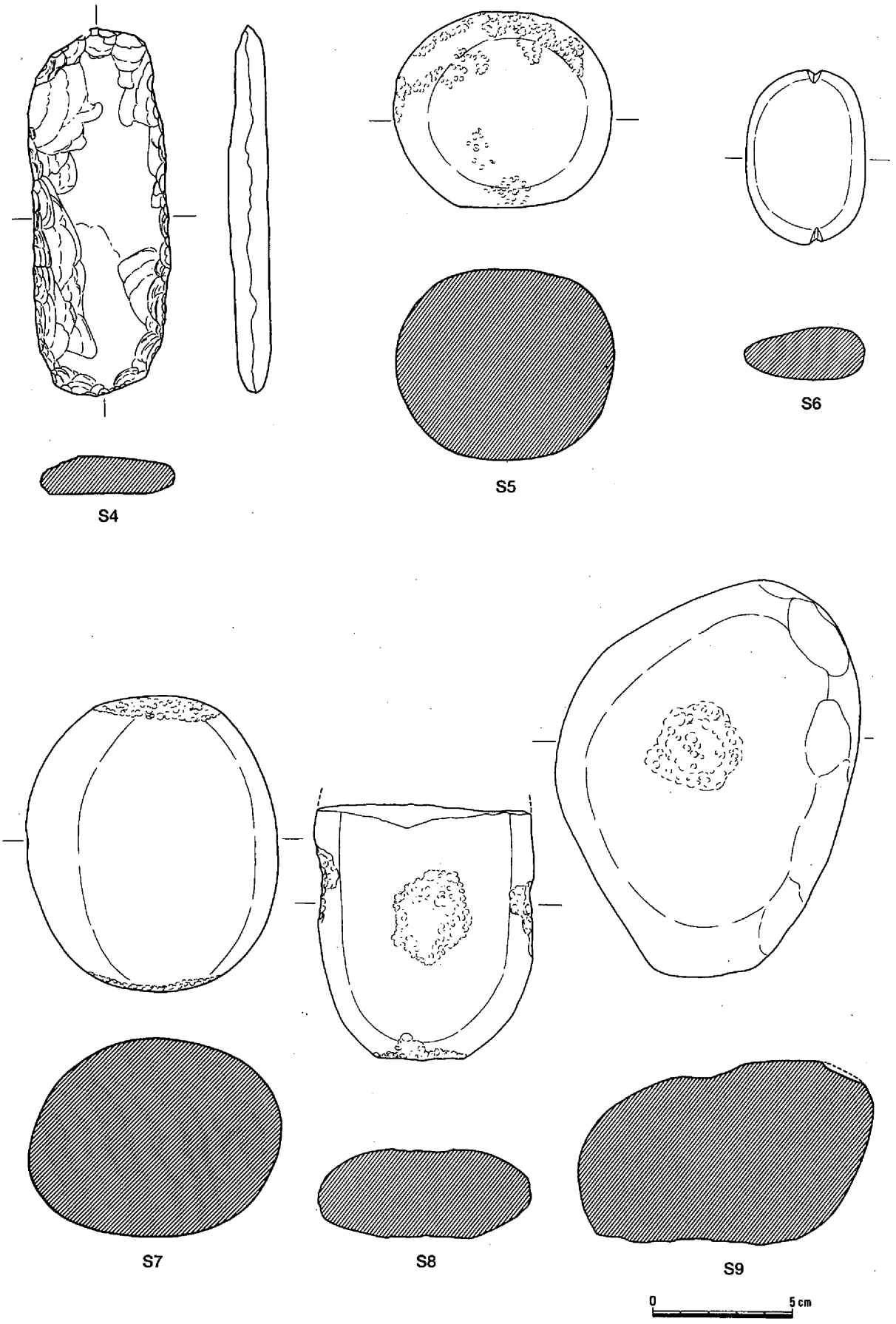
(3) 石　器

本遺跡で縄文時代の石器と考えられるものは、図示した８点である。おおむね弥生時代の遺構の上面から出土している。後世の流入と思われる。

種類は、石鏃、石鍬、叩石、磨石、凹石などである。石材は、黒曜石、流紋岩、閃緑岩である。



第76図　縄文時代の石器（1）（1／2）

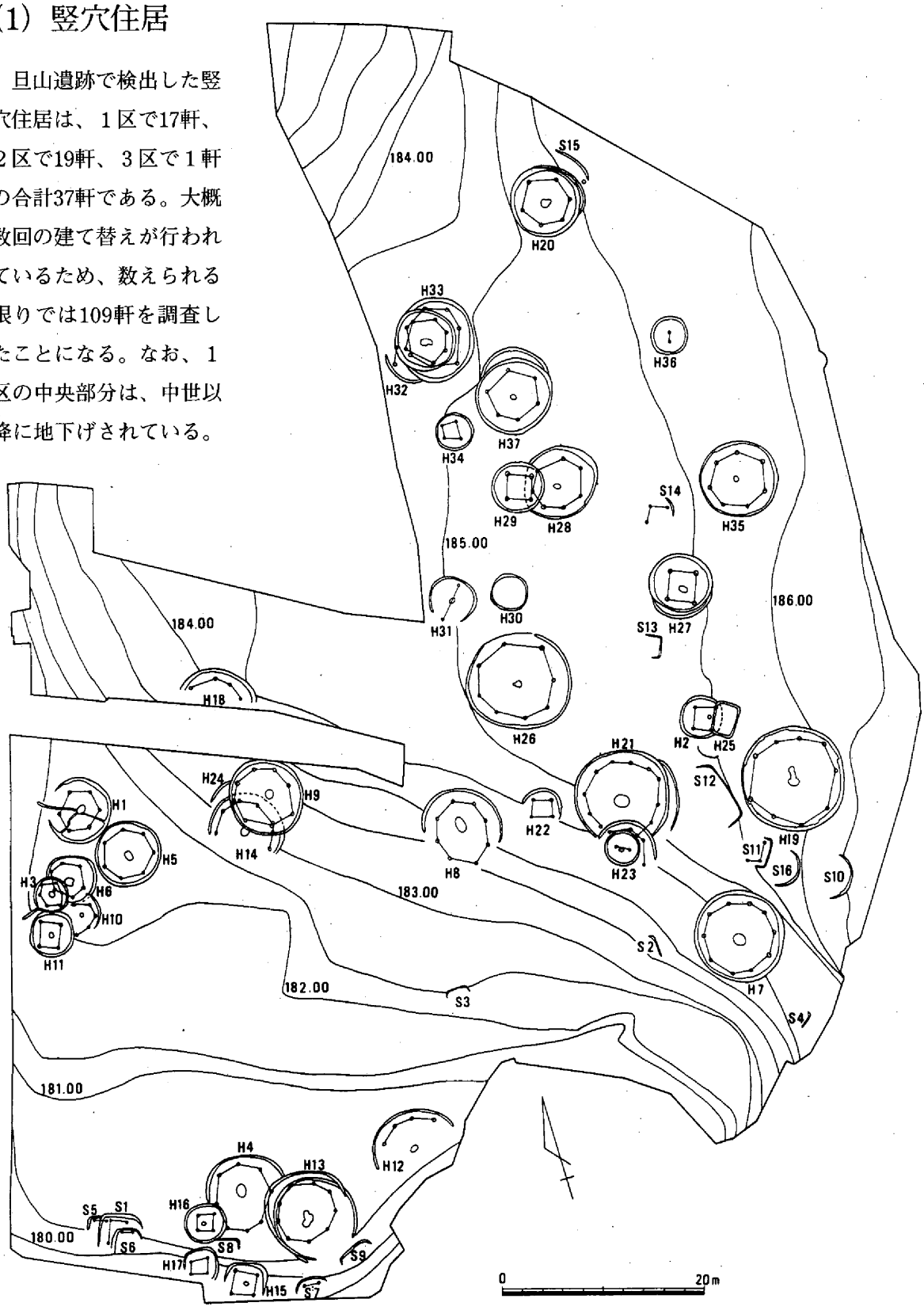


第77図　縄文時代の石器（2）（1／2）

第４節　弥生時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居

旦山遺跡で検出した竪穴住居は、１区で17軒、２区で19軒、３区で１軒の合計37軒である。大概数回の建て替えが行われているため、数えられる限りでは109軒を調査したことになる。なお、１区の中央部分は、中世以降に地下げされている。



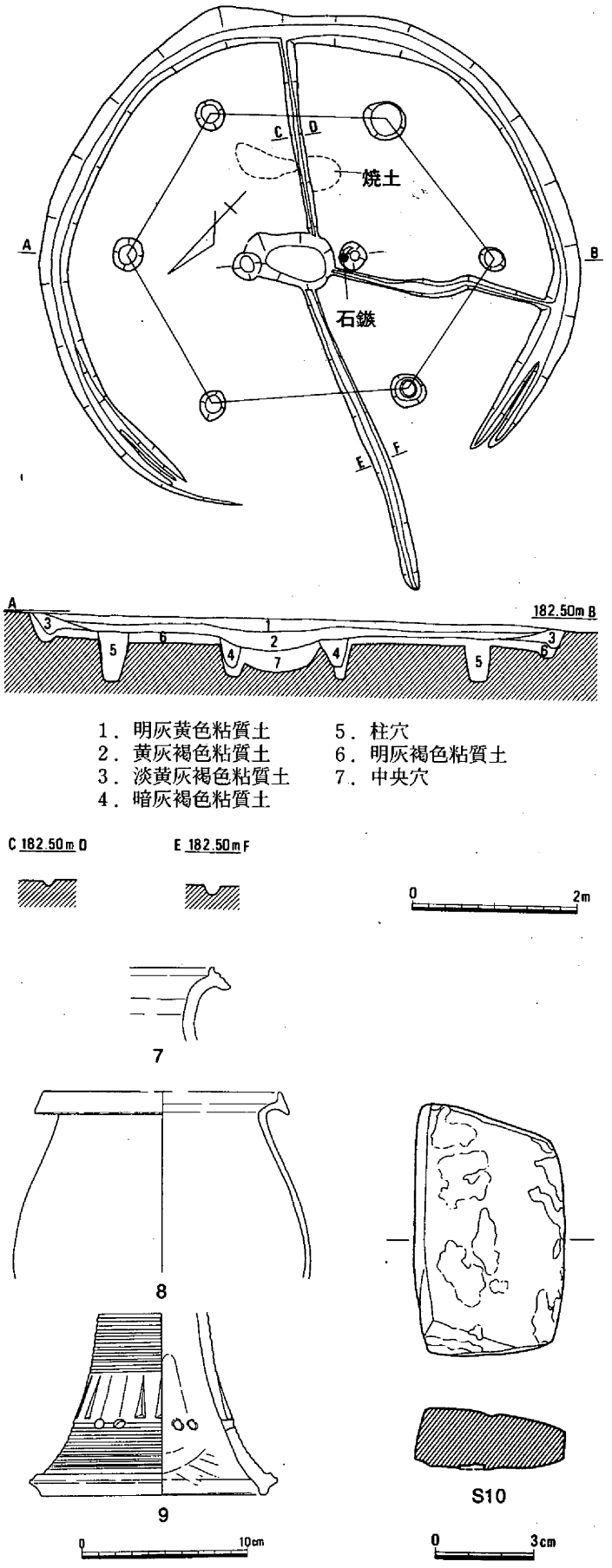
第78図　弥生時代竪穴住居・段状遺構配置図（1／600）

竪穴住居１（第79図、図版９）

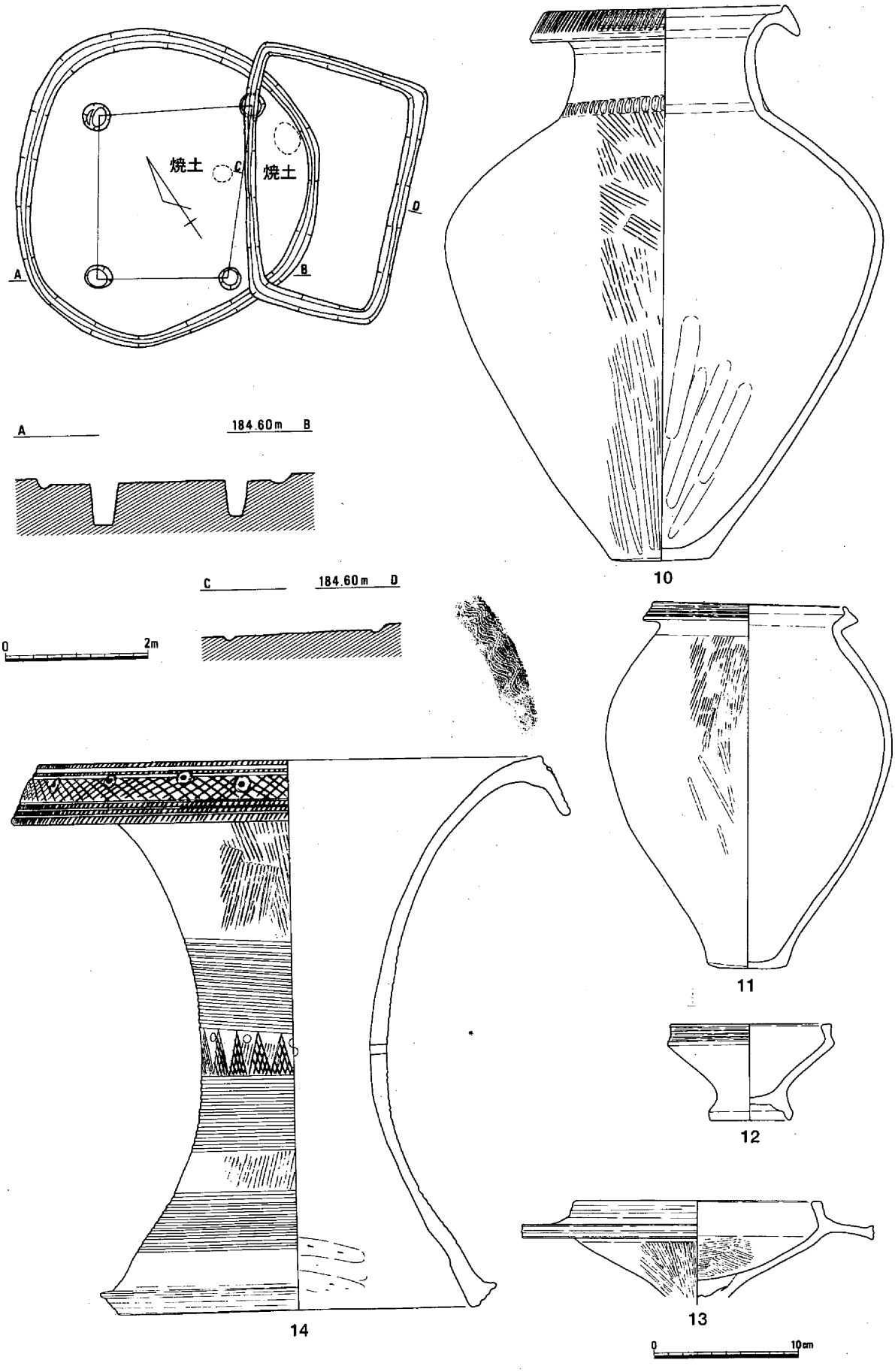
１区北西端で検出した中型の円形住居である。ほかの住居と変わった特徴は、床面に間仕切状の細い溝を持つことと、排水溝状の溝が西の住居の外に延びていることである。間仕切溝は２条ある。津山市内各地の遺跡ではよく見られるが、本遺跡においては数少ない。時期的な特徴であろうか、弥生中期末のものに見られる。壁体溝、中央穴、柱穴、貼床などは他の住居と変わりはない。柱は６本で屋根を支えていたものであろう。中央穴の長軸方向に２か所の柱穴があり、これも屋根を支えていたものであろう。床の２か所に良く焼けて赤くなっている所があり、床全面にわたって炭が５㎜程度覆っていたので、火災を受けたことは明らかである。また土層断面観察から、この住居は２軒が重複していることがわかる。平面形からでも、壁体溝が西端で２条になっていることから理解できる。

遺物は図示していないが、石鏃が図の位置で出土している。砥石は流紋岩製である。他に埋土から土器が出ている。**７**は壺形土器の口縁部で、端面に凹線文を施す。**８**は甕形土器で器壁が薄い。**９**は器台形土器の下半分で、外面には多条の凹線文、円孔、二等辺三角形の切り込みを施す。

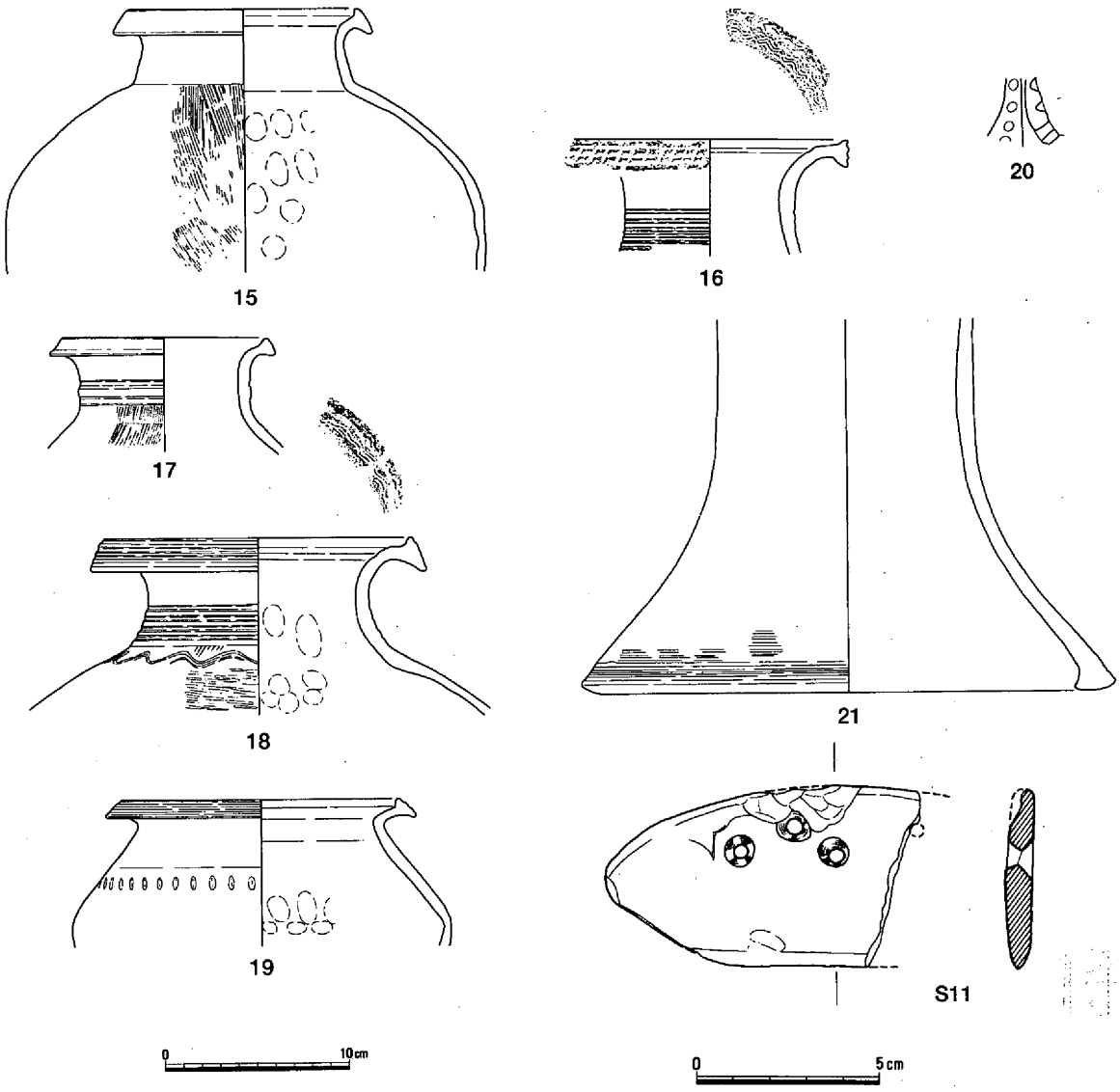
以上の遺物の特徴から、この住居の廃絶された時期は弥生時代中期末に比定できる。



第79図　竪穴住居１（1／80）・出土遺物（1／4、1／2）



第80図　竪穴住居２・25（1／80）・出土遺物（1／4）



第81図　竪穴住居２出土遺物（1／4、1／2）

竪穴住居２（第80・81図、図版13）

２区の南部で検出した小型の円形住居である。黒ぼこ層の中で検出し、床面も黒ぼこ層中で終わっているため、検出に極めて苦労したものである。竪穴住居25が東を切っているために、その部分の壁体溝や柱穴の検出が特に困難であった。壁体溝と４か所の柱穴を持つが、中央穴はない。２か所の床面が赤色になって被熱している。

遺物は石包丁２点と多数の土器片が出土している。**S10**は円孔が４個穿たれている。折れたものを再利用するために、２孔穿ったものであろう。土器は壺、甕、高杯、器台、鉢の弥生土器のセットが揃っている。しかも完全な形に近く復元することが可能である。壺は口縁部には凹線文を施し、その上から篦による刻み目を入れる。頸部下端には刺突文を施す。器台は口縁端部を下方に垂れ下がらせ、その外面に格子文と斜線文を施し、さらに沈線と円形浮文を加えている。円形浮文には竹管文も認められる。筒部の中位には鋸歯文、その上下には凹線文を施す。また口縁上面には波状文が見られる。

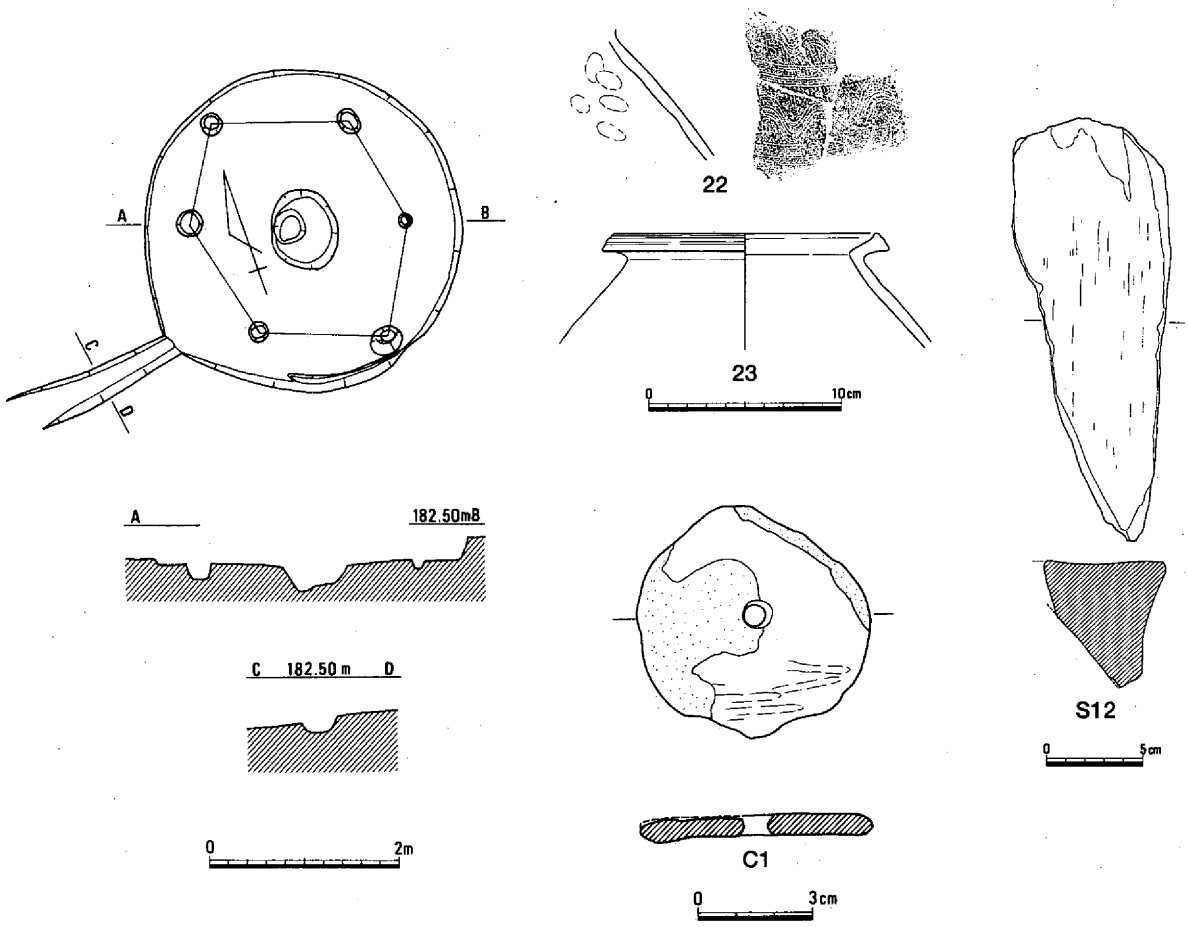
遺物の特徴から、この住居の時期は弥生時代中期末に比定できよう。

竪穴住居３（第82図、図版7・38）

竪穴住居１の南４ｍで検出した小型の円形住居である。壁体溝は南側にわずか残存するのみである。柱は浅いものが６本ある。小型住居にしては不相応な柱穴の数である。中央穴は柱穴より深い。本遺跡では珍しく、竪穴住居１と同様の排水溝が西側に２ｍ取り付いている。異なる点は、中央穴から延びているのではなく、床面より約10cm低い段になって壁体の位置から始まることである。

遺物は土器片のほか、土器体部片再利用の紡錘車と溶結凝灰岩製の大型砥石が出土している。

遺物の特徴から、この住居の時期は弥生時代中期末に比定したい。



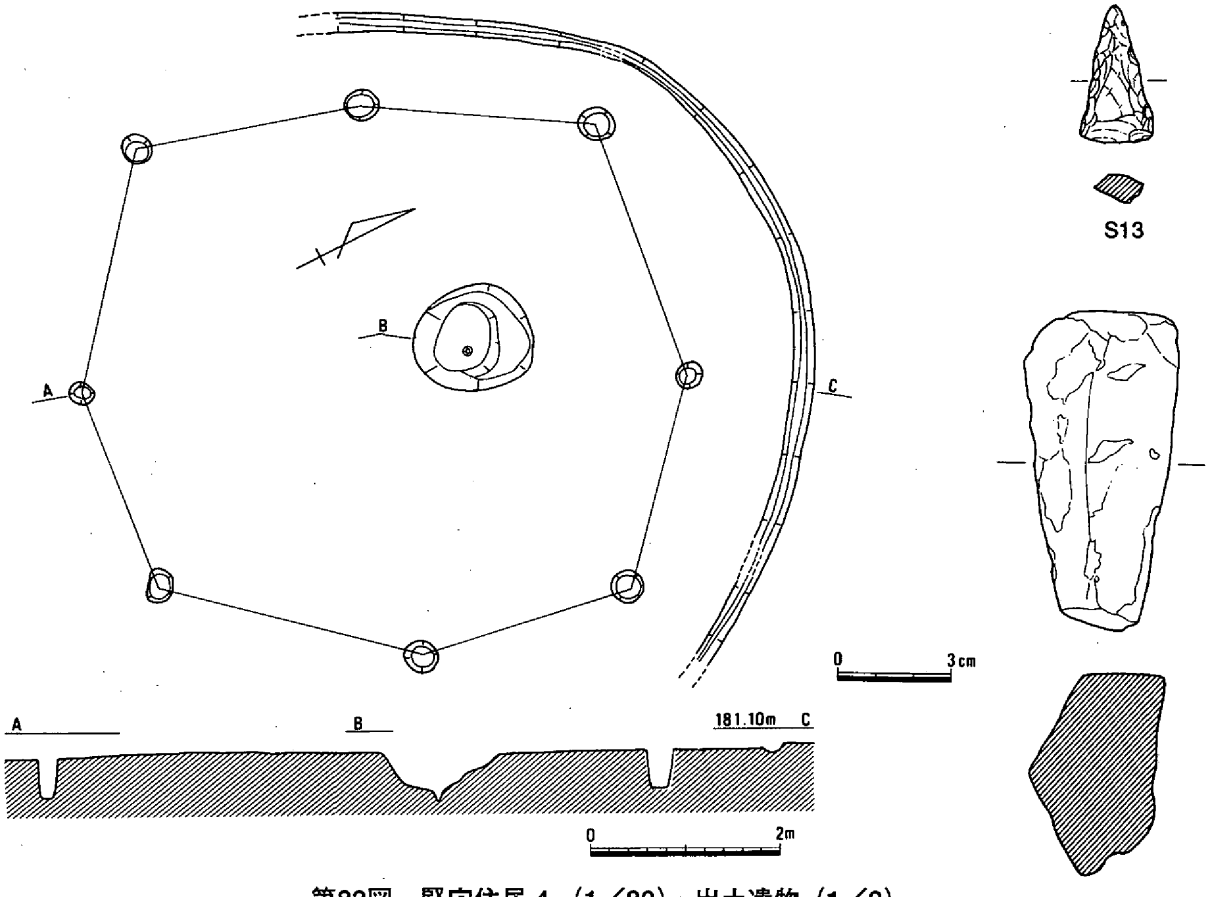
第82図　竪穴住居３（1／80）・出土遺物（1／4、1／2）

竪穴住居４（第83図、図版39）

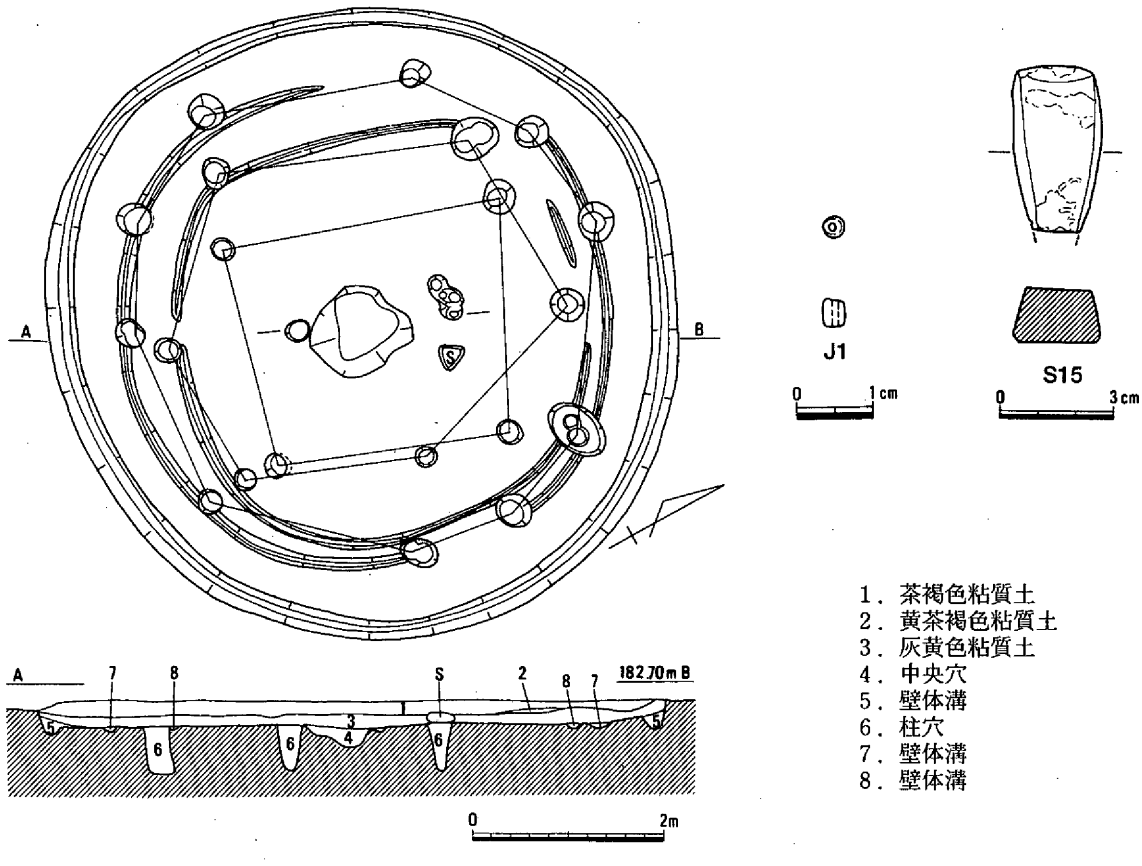
１区の南方で検出した大型の円形住居である。直径は約９ｍになる。柱間の最大値は280cm、最小値は240cm、床面の海抜高は181.00ｍを測る。壁体溝は北側に一部残存するだけである。柱は８本と考えられ、深さは40cm以上ある。中央穴は柱穴と同じ深さである。２段に掘られていることから、この住居は中央穴だけ掘り直しているのではなかろうか。竪穴住居13や同16に切られている。

遺物は少量の土器片のほか、流紋岩製砥石とサヌカイト製石鏃が出土している。石鏃は平基式で、重さは４ｇとやや重い。本遺跡出土の石鏃10本中では最も重い。

遺物の特徴と遺構の切り合いから、この住居の時期は弥生時代中期末と考えたい。



第83図　竪穴住居４（1／80）・出土遺物（1／2）



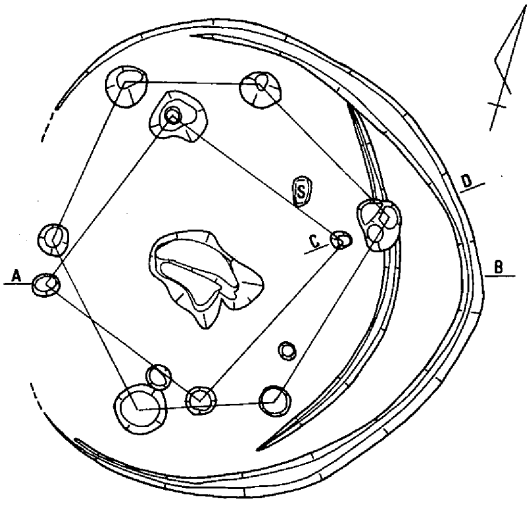
第84図　竪穴住居５（1／80）・出土遺物（1）（1／1、1／2）

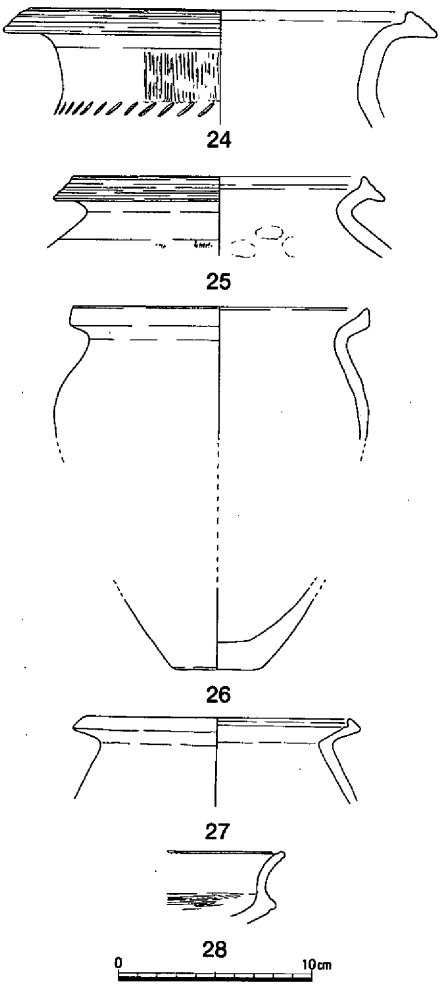
竪穴住居５（第85図、図版9・38）

１区北西にあって、竪穴住居１に接して検出した中型の円形住居である。壁体溝は同心円状に３条検出したことから、３軒重複していることがわかる。柱は４本、６本、10本が対応している。中央穴は１か所で重なっている。火災を被っていた。

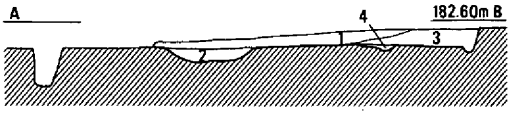
遺物は土器片のほか、砥石とガラス製小玉が出土している。

遺物の特徴から、この住居の時期は弥生時代後期前葉に比定したい。

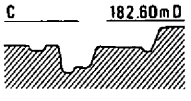


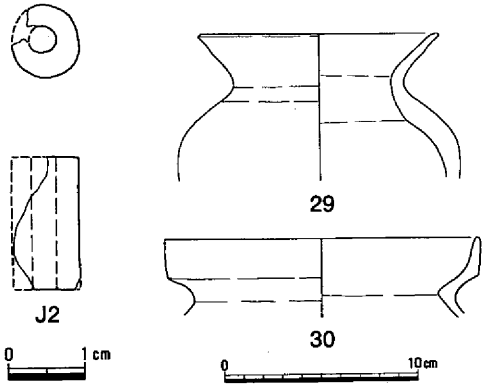


第85図　竪穴住居５出土遺物（2）（1／4）



1．暗灰褐色粘質土
2．中央穴
3．黄灰褐色粘質土
4．壁体溝





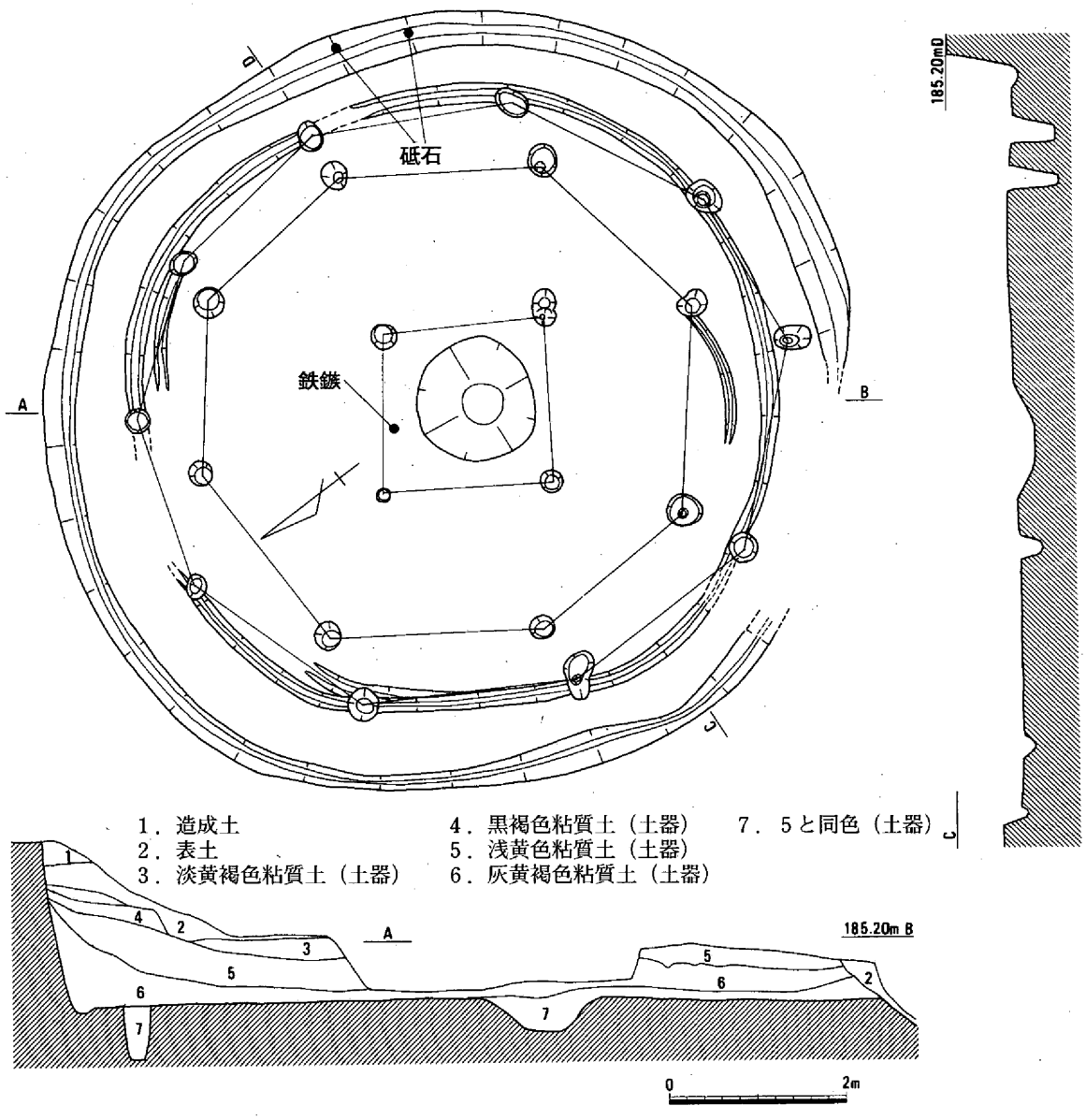
第86図　竪穴住居６（1／80）・出土遺物（1／1、1／4）

竪穴住居６（第86図、図版7・38）

竪穴住居５に接して検出した小型の円形住居である。西側は竪穴住居３の上層にある。壁体溝は２条検出したが、どちらも東側だけ残存している。溝の検出状態と土層断面の観察から、この住居は東に拡張したものである。柱は古い住居４本、新しいものが６本に対応しているようである。中央穴は１か所で、２軒の住居のものが重なっていた。

遺物は土器片のほか、ガラス製管玉が出土している。**Ｊ２**のガラス製管玉は、青色を呈して透明ではない。小型住居から出土するのは珍しい。**29**は外反する口縁の小型広口壺形土器である。**30**は口縁端部がわずかに上方に拡張された甕形土器である。

遺物の特徴から、この住居の時期は弥生時代後期後葉に比定したい。



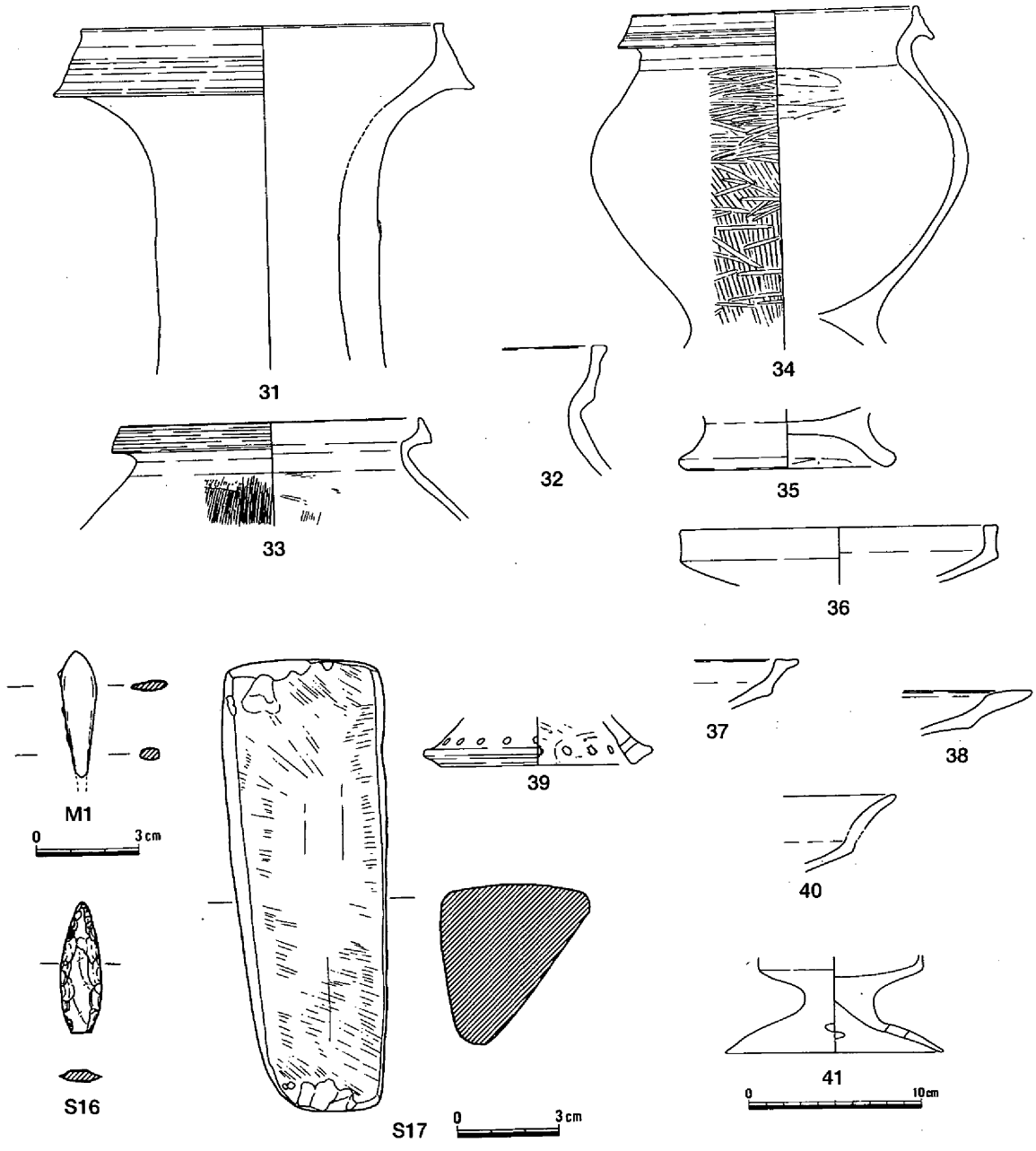
第87図　竪穴住居７（1／80）

竪穴住居７（第87・88図、図版9・39）

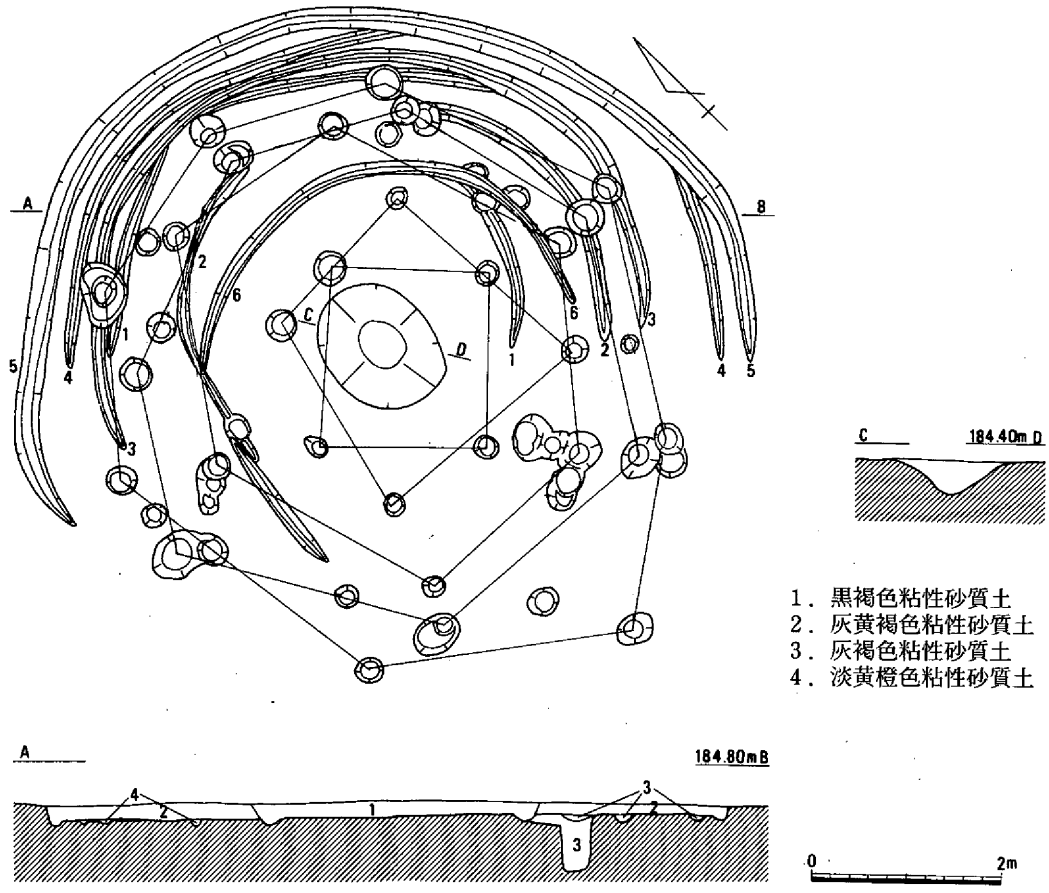
１区の東北端で検出した大型円形住居である。３軒の重複があって、同心円状に拡張したものである。最初の壁体溝は部分的に削平されて、断続的に検出できた。柱については、４本、８本、10本がそれぞれに対応すると考えられる。一番内側の４本については、外の10本と同時に使用されていた可能性もある。中央穴は１か所で、３回分重複している。柱穴の中には、河原石が埋められているものが多い。炭化物は中央穴周辺には厚く、また床面全面には薄く堆積していた。火災を被っている。最終の住居の壁が最も良く残っている部分はＡの位置で、床からの高さは180㎝もあった。

遺物は多量の土器のほかに、壁体溝から砥石、中央穴脇の床面から鉄鏃、埋土から石鏃が出土している。Ｍ１は柳葉形有茎鉄鏃である。土器は長頸壺、壺、甕、高杯、台付鉢などがある。

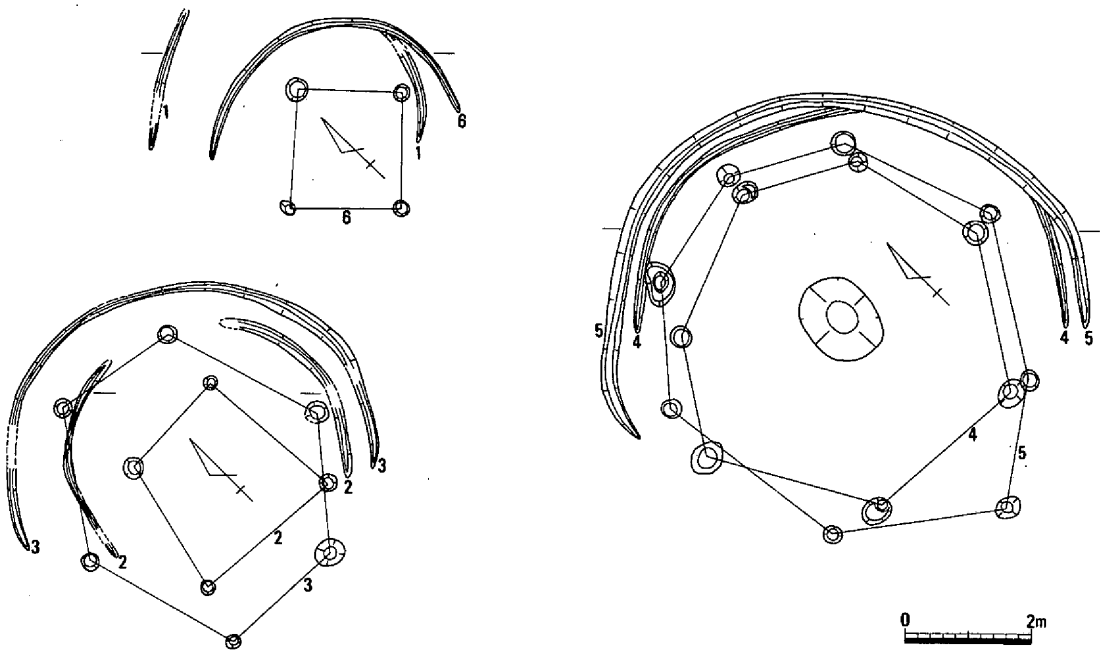
土器からこの住居の時期は、弥生時代後期前葉から後葉に比定したい。



第88図　竪穴住居７出土遺物（1／4、1／2）



第89図　竪穴住居８（1／80）



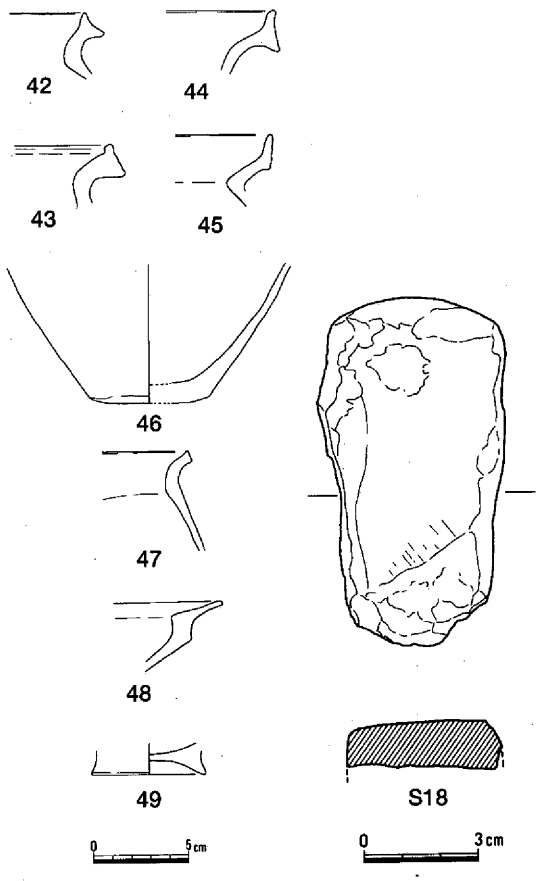
第90図　竪穴住居８変遷図（1／120）

竪穴住居８（第89～91図、図版10）

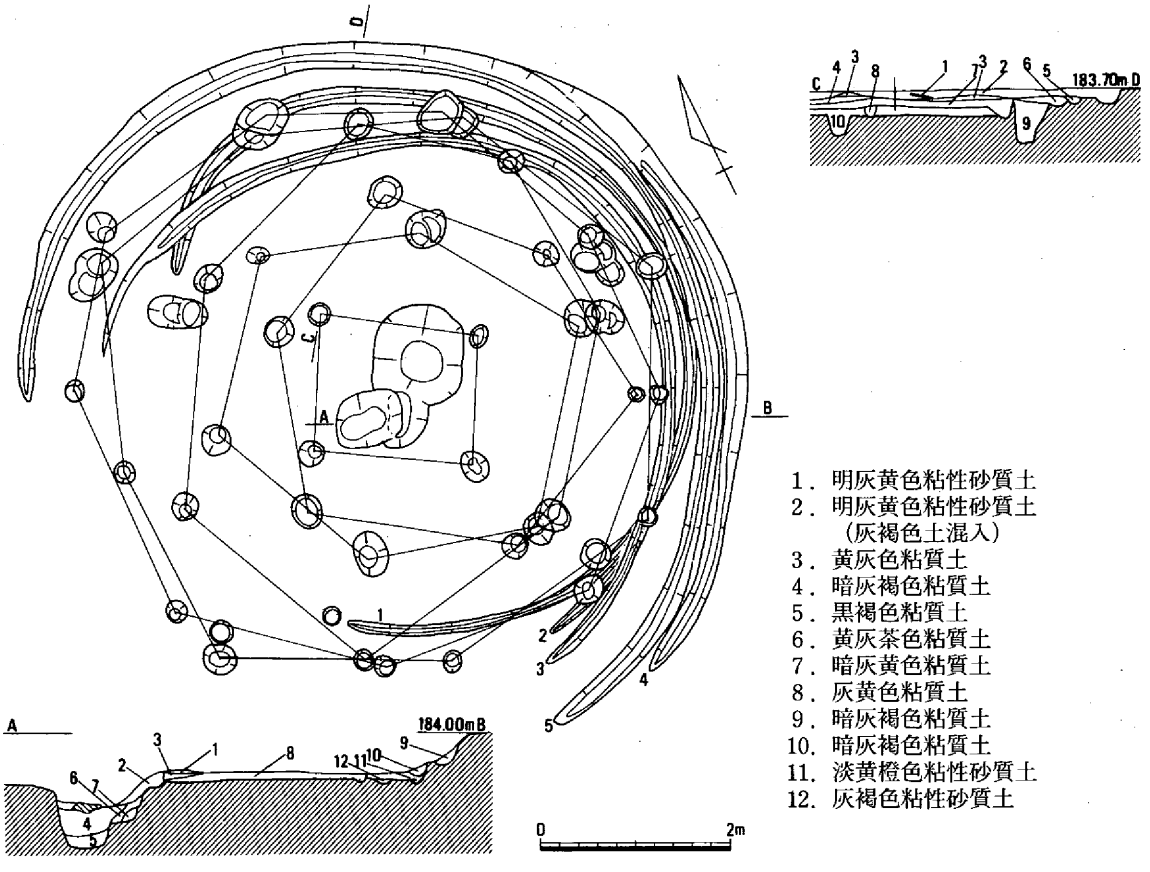
遺跡中央部で、１区と３区において半分ずつ発掘した中型の円形住居である。壁体溝が６条切り合って検出され、柱穴を整理してみると６軒分以上あり、おそらく９軒が重なっているようである。柱は４本～８本と様々である。住居築造の順序を第93図に想定して図示している。拡張が一般的だが、６番目には縮小していることが、土層断面観察によって確認できた。いずれにしても、壁の残存状態は、あまり良好とは言えない。壁体溝は北側半分が残存しているだけである。中央穴は１か所に集中して検出した。火災の痕跡も見られる。

遺物は少量の土器のほかには、砥石が出土している。土器は壺、甕、高杯、台付鉢などがある。

土器の型式から考えて、この住居の存続した時期は、弥生時代後期前葉から中葉というところであろう。

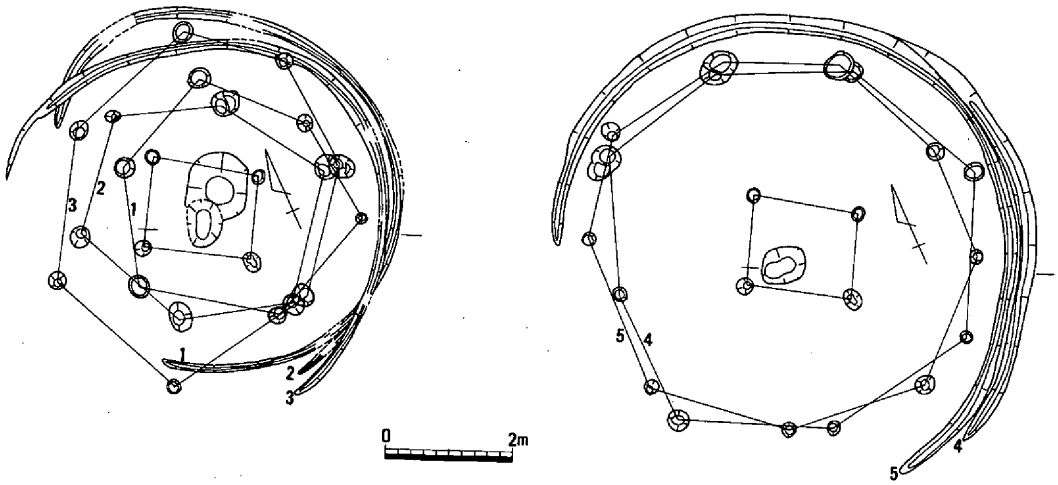


第91図　竪穴住居８出土遺物（1／4、1／2）

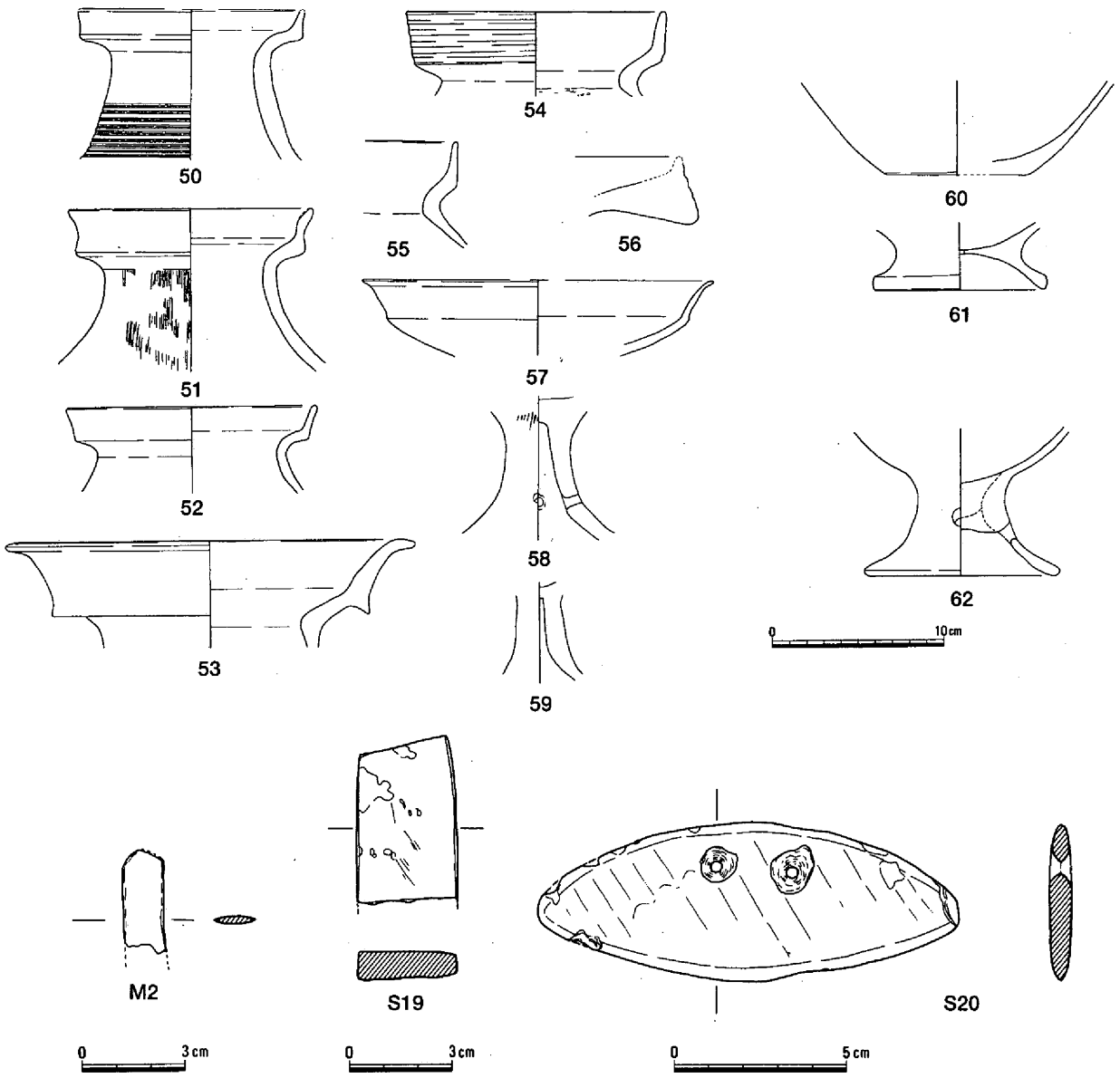


1．明灰黄色粘性砂質土
2．明灰黄色粘性砂質土（灰褐色土混入）
3．黄灰色粘質土
4．暗灰褐色粘質土
5．黒褐色粘質土
6．黄灰茶色粘質土
7．暗灰黄色粘質土
8．灰黄色粘質土
9．暗灰褐色粘質土
10．暗灰褐色粘質土
11．淡黄橙色粘性砂質土
12．灰褐色粘性砂質土

第92図　竪穴住居９（1／80）



第93図　竪穴住居９変遷図（1／120）



第94図　竪穴住居９出土遺物（1／4、1／2）

竪穴住居９（第92～94図、図版10・40）

１区北の竪穴住居８の西10ｍの位置で検出した中型の円形住居である。土層断面観察によると、５軒の住居が重複していることがわかり、南から徐々に北に拡張あるいは移動したことを見て取ることができる。築造順序を図示して説明する。１～３は西に移動している。柱は６本から７本に増えている。中央穴も南西に移動している。３と４では大きく拡張している。４と５では少し縮小気味である。柱はどちらも９本であったと思われる。すべての住居が火災を被っている。

遺物は長頸壺、甕、高杯、台付鉢などの土器多数と、用途不明の鉄器、完形の石包丁、砥石が出土している。

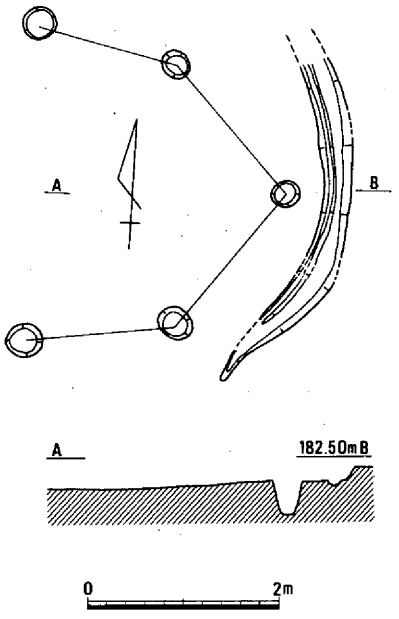
土器の型式から考えて、この住居の存続した時期は、弥生時代後期中葉というところであろう。

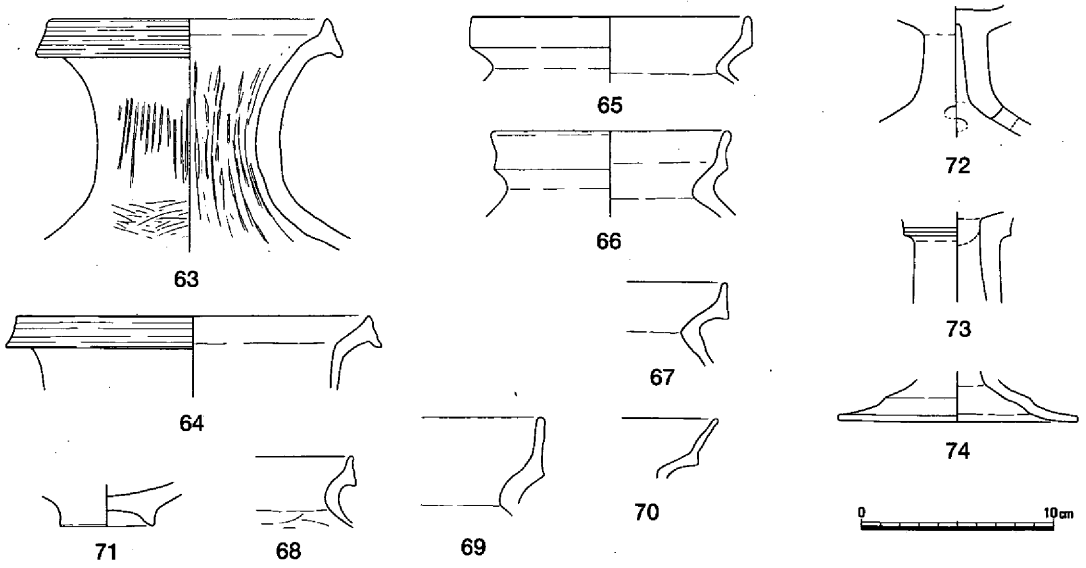
竪穴住居10（第95図）

１区北東の竪穴住居６の南に位置し、それに北の一部を削られている小型の円形住居である。非常に残存状態が悪く、壁体溝は東側の部分しか検出できなかった。しかしよく観察すると、溝は２条あるようで、この住居も２軒が重複しているのである。柱は６・７本であったようだが、検出できたのは５本だけである。精査したが、中央穴は検出できなかった。

遺物は長頸壺、甕、高杯、鉢などの土器と、砥石が出土している。

土器の型式から考えて、この住居の存続した時期は弥生時代後期中葉というところであろうか。





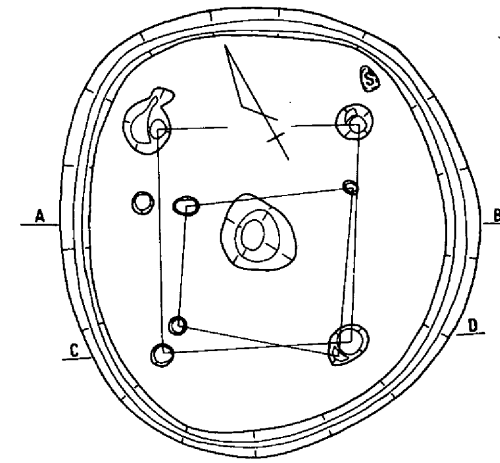
第95図　竪穴住居10（1／80）・出土遺物（1／4）

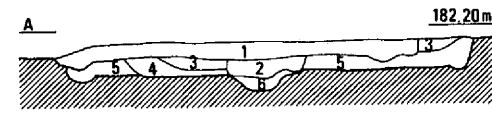
竪穴住居11（第96図）

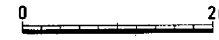
１区北東の竪穴住居３の南に位置し、それの南側の一部を切っている小型の円形住居である。壁体溝は全体に巡っている。１条の溝であるが、柱は２軒分整理できた。中央穴は１か所である。

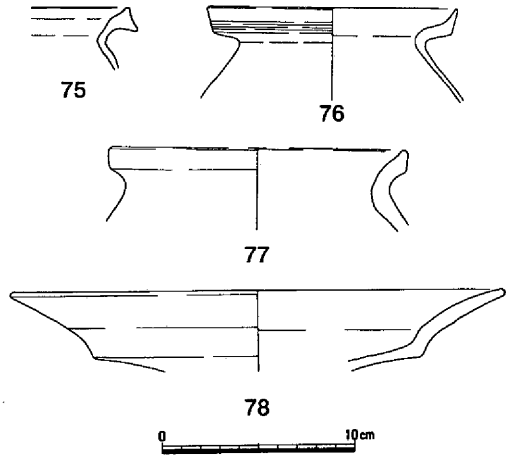
遺物は少量の土器が埋土から出土している。土器は甕と高杯が実測できた。

土器の型式から考えて、この住居の存続した時期は、弥生時代後期中葉に属するであろう。



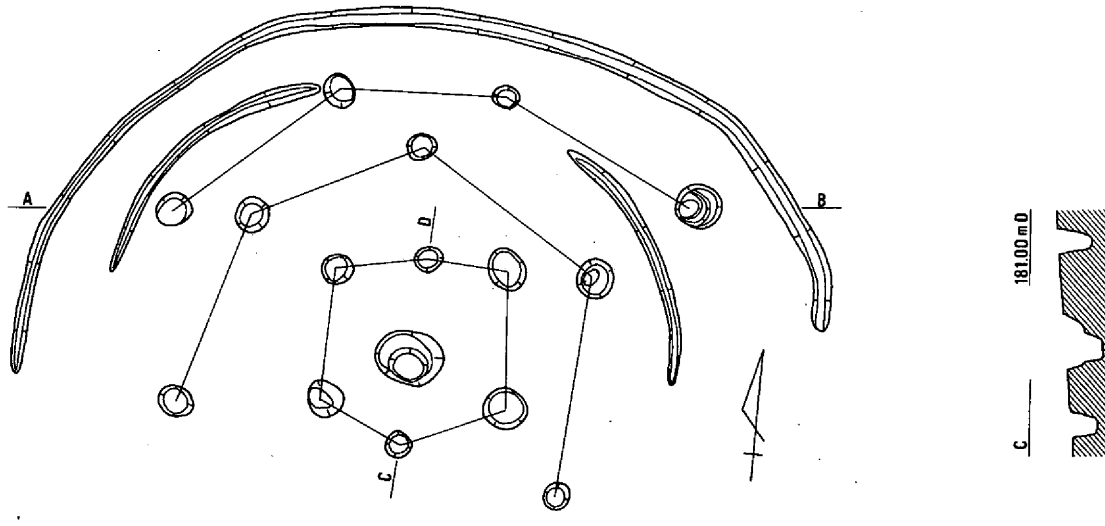






1．黄灰褐色粘質土　　4．暗灰黄色粘質土
2．褐灰黄色粘質土　　5．灰黄色粘質土
3．灰黄色粘質土　　6．２よりやや暗い

第96図　竪穴住居11（1／80）・出土遺物（1／4）



第97図　竪穴住居12（1／80）

竪穴住居12（第97図、図版10）

１区南東部で検出できた大型の円形住居である。残存状態が非常に悪い。壁体溝は北の一部分しか残っていない。内側に存在した壁体溝は、断続的に検出できた。住居が重複しているわけだが、拡張されたのか縮小されたのか、土層で確かめることはできなかった。中央穴は１か所検出した。

遺物としては、土器の細片が少量採集されたにすぎない。

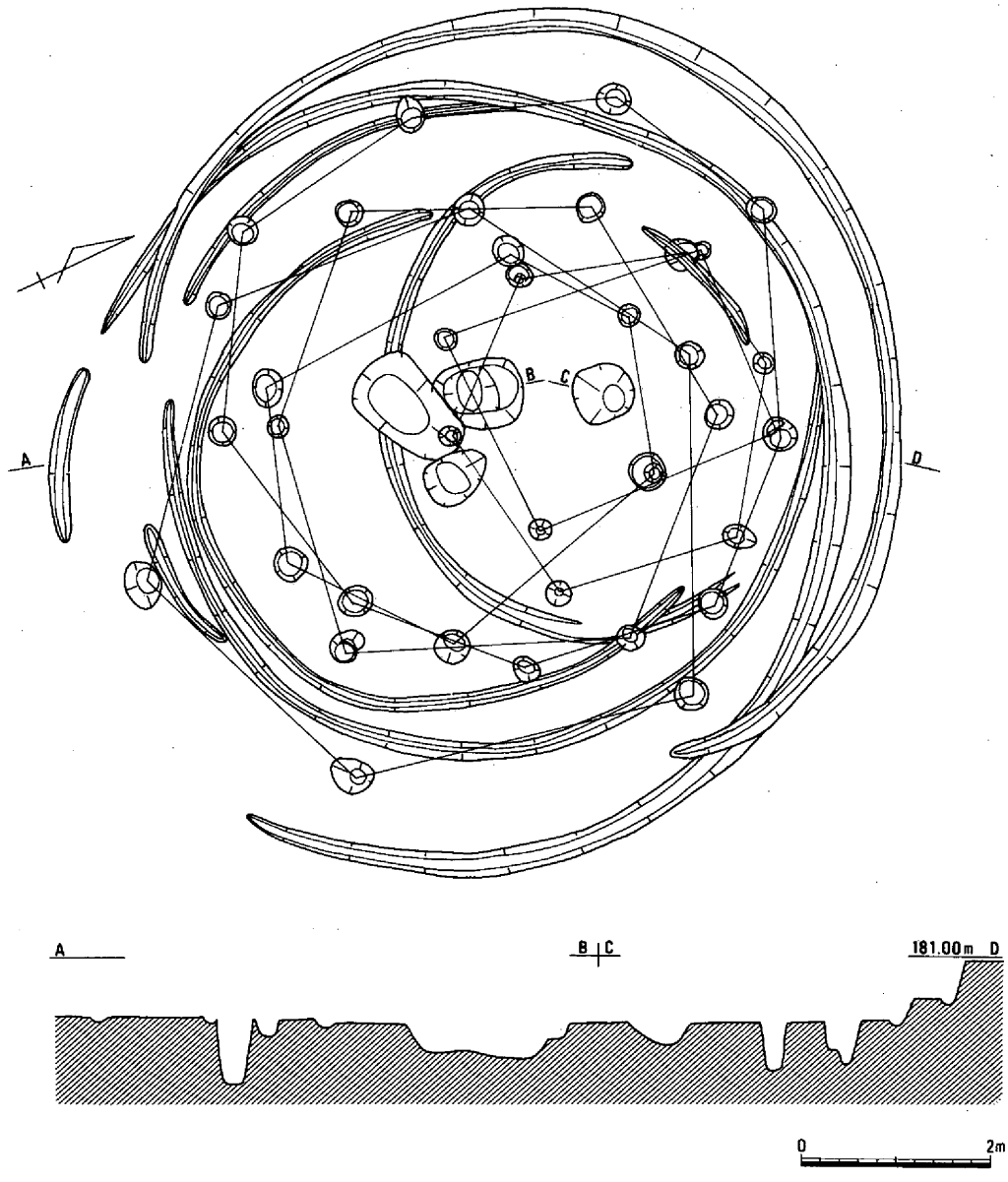
この住居の存続時期は、土器片から弥生時代後期と考えたい。

竪穴住居13（第98～100図、図版11）

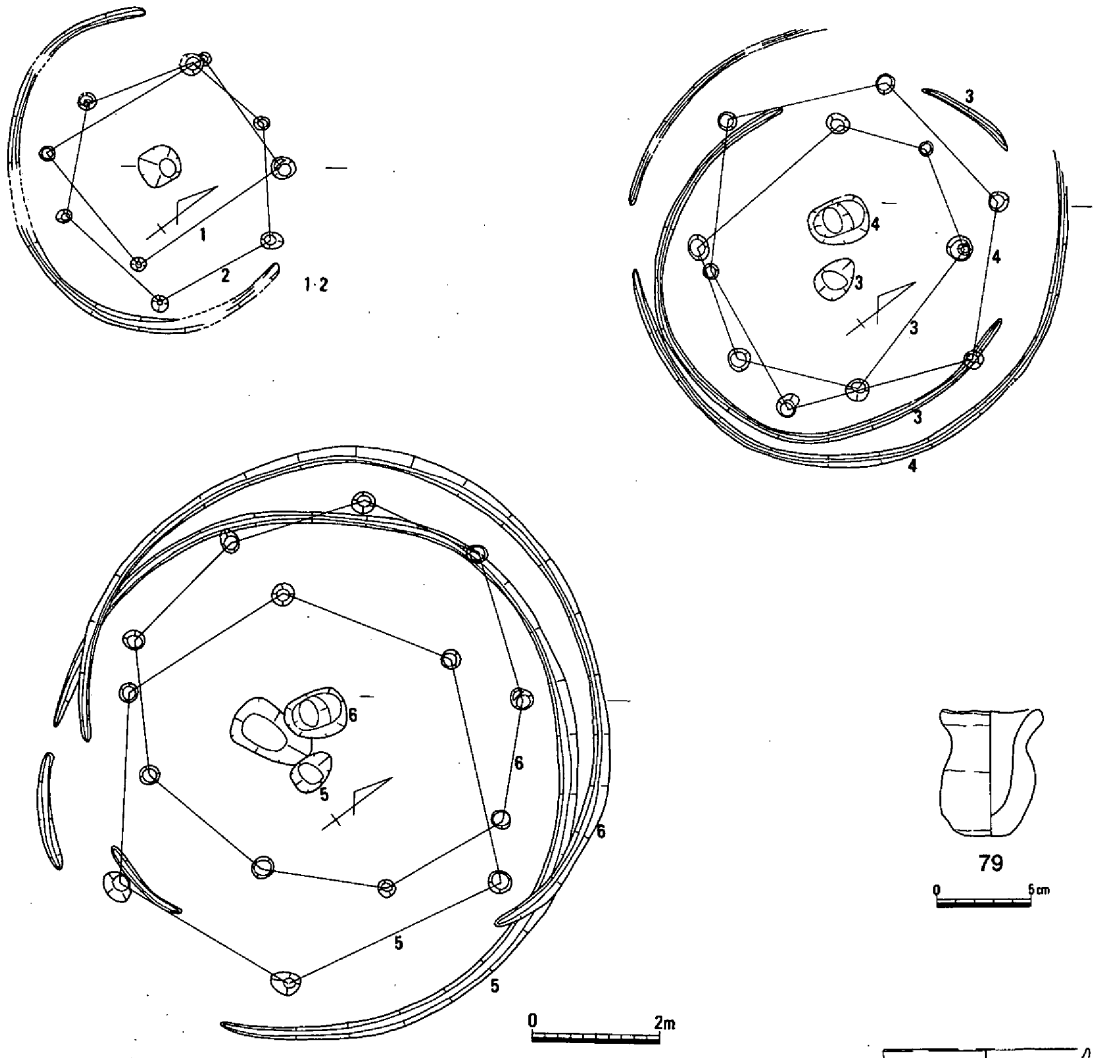
１区南部で検出できた大型の円形住居である。比較的残存状態が良い。壁体溝は５条検出できた。柱は６組まとまった。中央穴は６か所検出した。このことから、６軒が重複していることがわかる。築造の順序は、図示したとおりである。次第に規模が大きくなっているようである。

遺物としては土器のほかに、石包丁、用途不明の鉄器が出土している。

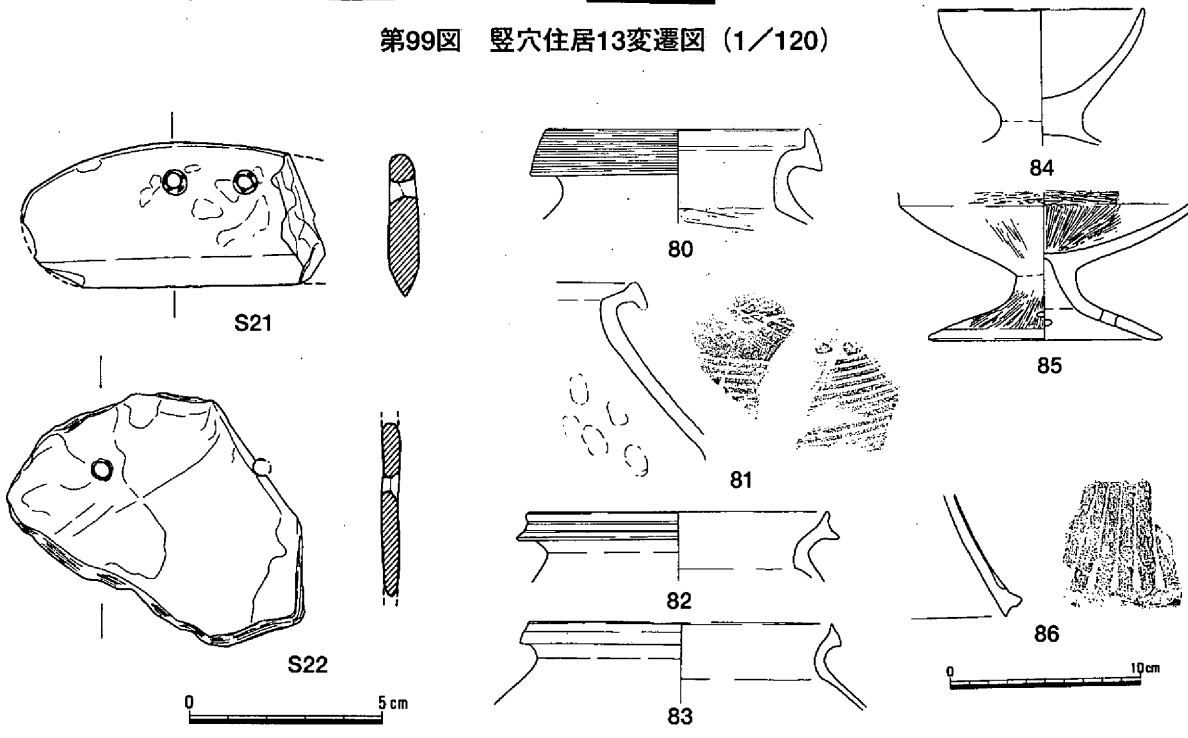
この住居の存続時期は、土器から弥生時代中期末から弥生時代後期後葉までわたっている。



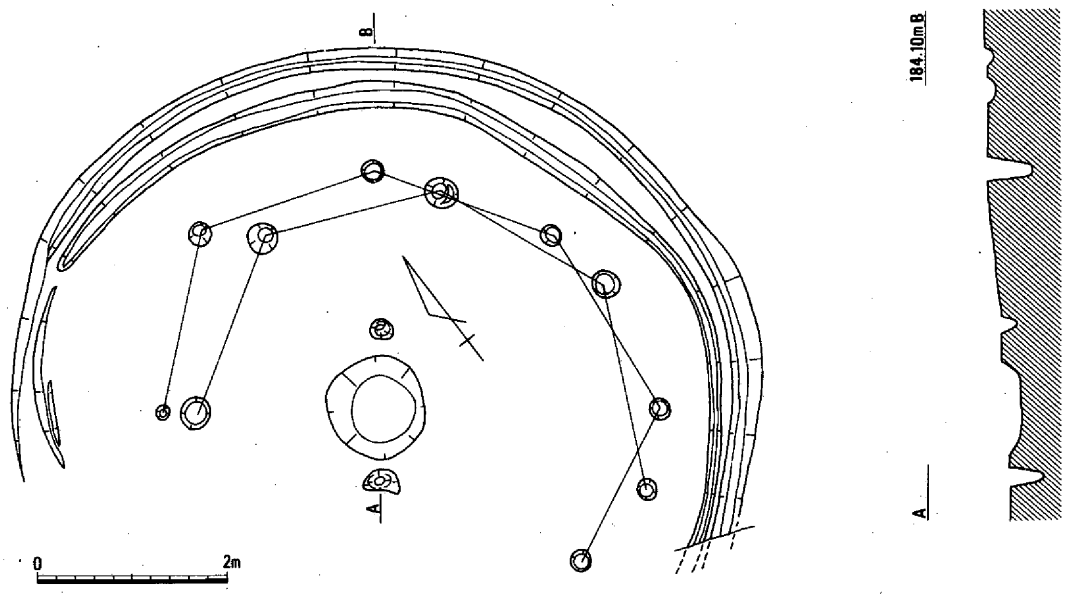
第98図　竪穴住居13（1／80）



第99図　竪穴住居13変遷図（1／120）



第100図　竪穴住居13出土遺物（1／4、1／2）

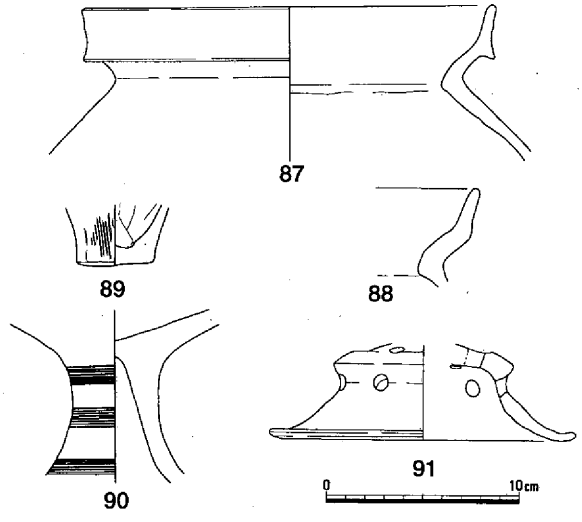


竪穴住居14（第101図）

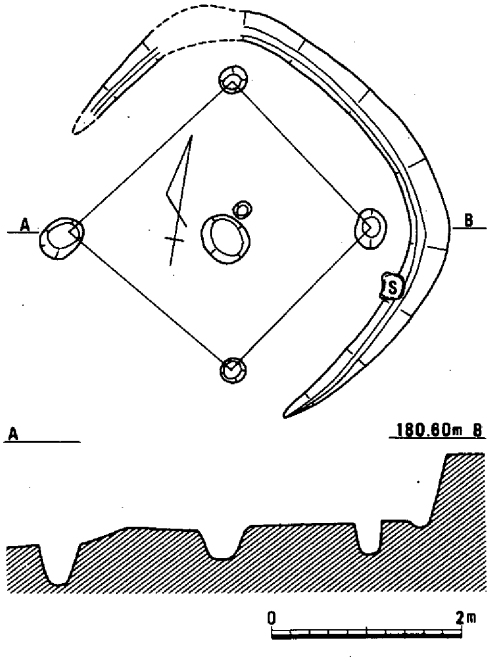
１区北部の竪穴住居９の南に位置し、北側は竪穴住居９によって削られてた中型の円形住居である。２軒重複している。床面は全体が赤色に変色して、被熱していた。柱は８本であったろう。

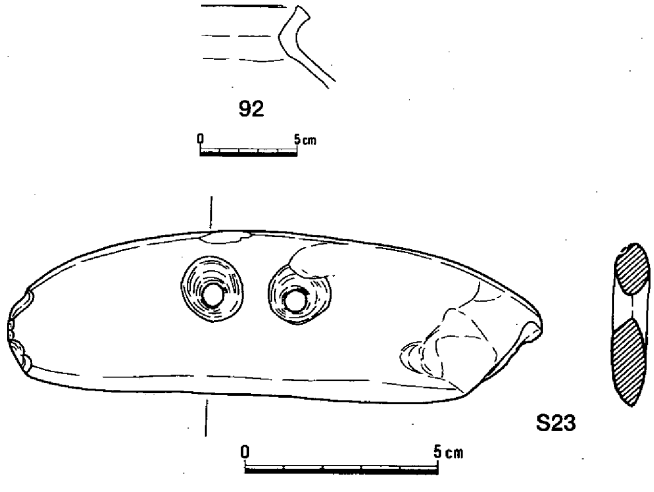
遺物としては、甕、高杯などの土器片と砥石が出土している。

土器から弥生時代後期に属する。



第101図　竪穴住居14（1／80）・出土遺物（1／4）





第102図　竪穴住居15（1／80）・出土遺物（1／4、1／2）

竪穴住居15（第102図、図版11・40）

１区南端部の急斜面で検出した小型の隅丸方形住居である。１辺450cmを測る。壁体溝は「コ」の字形に検出できた。柱は４本でまとまる。中央穴は１か所ある。

遺物としては、甕などの土器片と石包丁が出土している。石包丁は、本遺跡出土の36点中では最大で、87ｇを測る。

土器から弥生時代後期に属する。

竪穴住居16（第103図）

１区南部で検出した小型の楕円形に近い円形住居である。竪穴住居４の南西部を切っている。比較的残存状態が良く、壁体溝は全周に巡っている。柱は４本で、中央穴は１か所である。

遺物として、土器は小型鉢形土器、甕、台付鉢、高杯などが見られ、砥石も出土している。

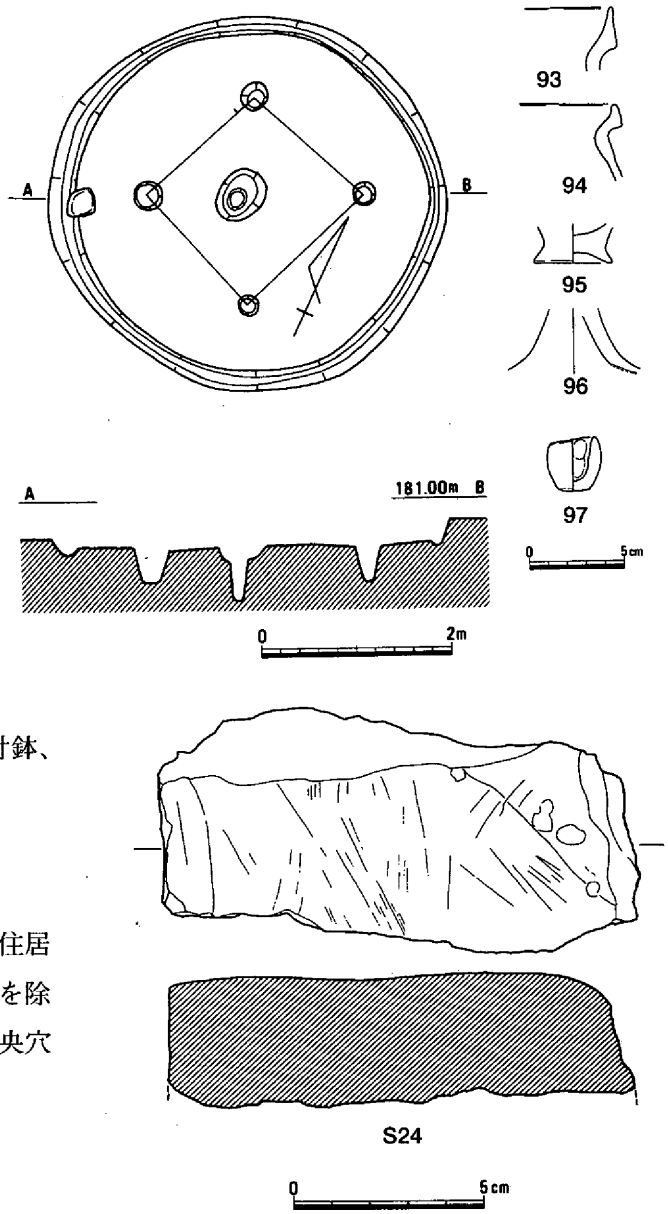
土器から弥生時代後期中葉に属する。

竪穴住居17（第104図、図版11）

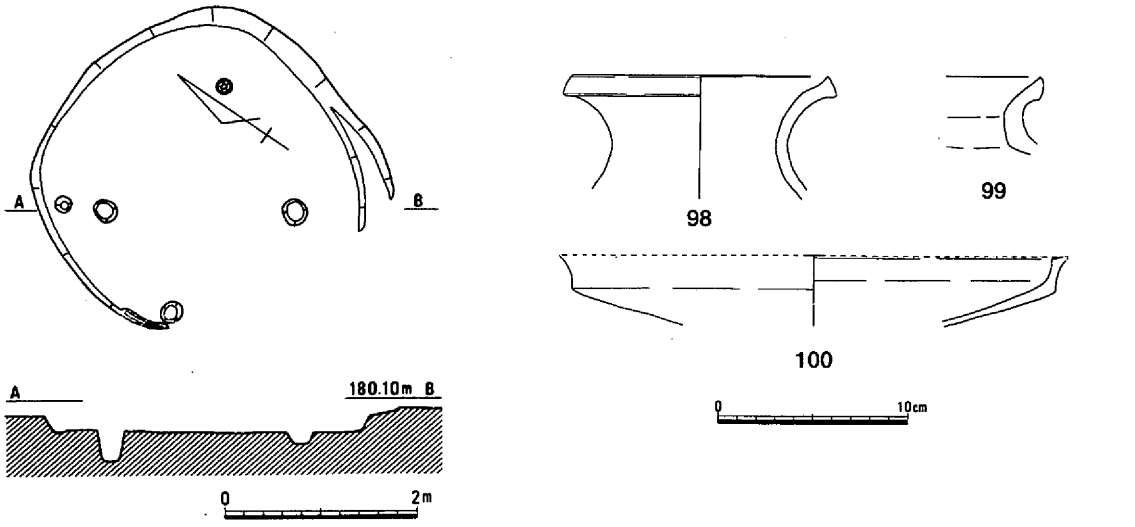
１区南端部の急斜面で検出した小型の方形住居である。壁体溝は存在しない。柱穴は１か所を除いて浅くて規模が小さい。４本柱である。中央穴はない。

遺物の土器は、壺、高杯などが見られる。

土器から弥生時代後期前葉に属する。



第103図　竪穴住居16（1／80）・出土遺物（1／4、1／2）



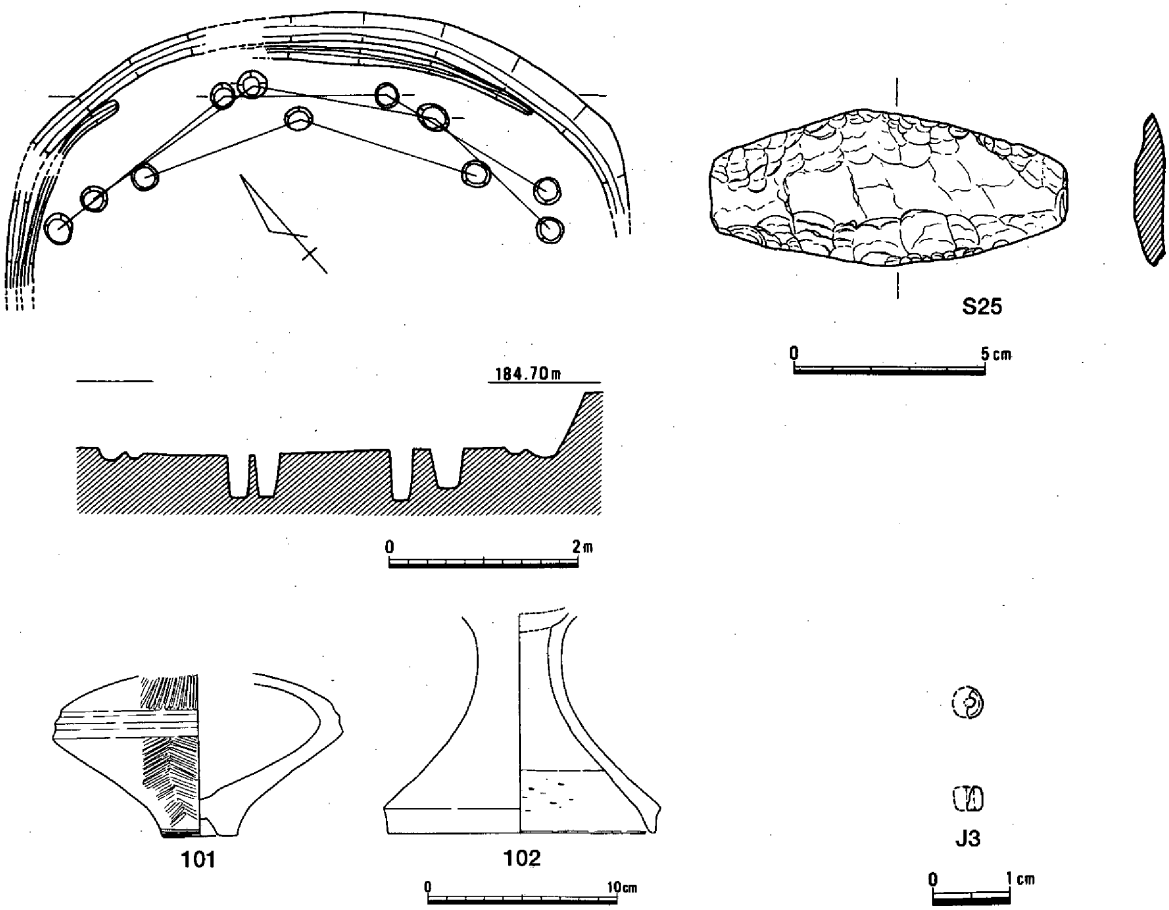
第104図　竪穴住居17（1／80）・出土遺物（1／4）

竪穴住居18（第105図、図版11・31・38）

３区南端部の道路崖面で検出した中型の円形住居である。本遺跡発見の契機となったものである。道路建設のために大半は削平されている。壁体溝は２条あり、柱穴は３軒分の11か所を検出した。つまり３軒の住居が重なっていることが判明した。中央穴はあるのかないのか不明である。

遺物としては土器のほかに、石包丁の未製品とガラス製小玉が見られる。

土器から弥生時代後期中葉に属する。



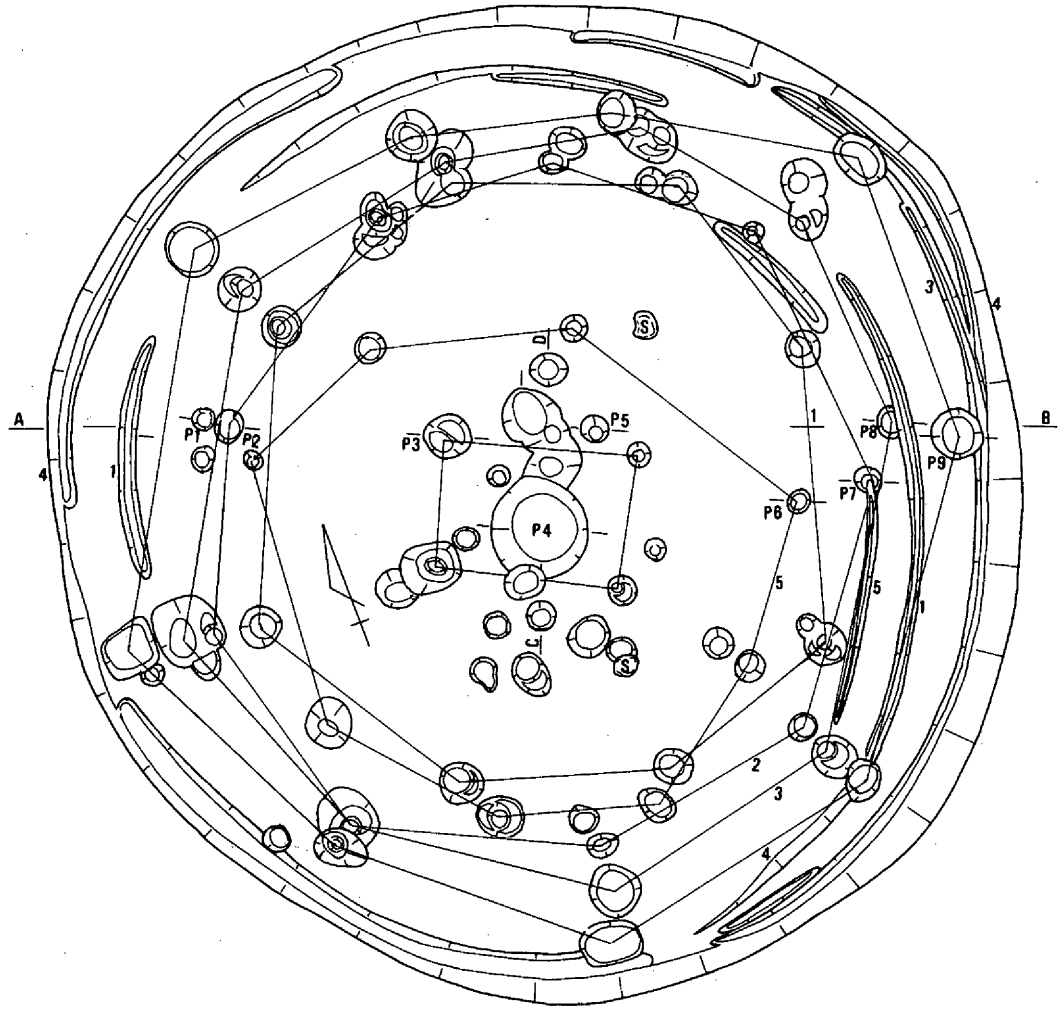
第105図　竪穴住居18（1／80）・出土遺物（1／4、1／2、1／1）

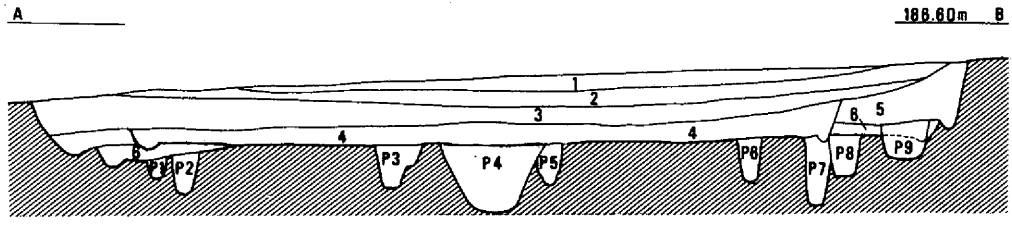
竪穴住居19（第106～109図、図版12・31・38・39）

２区南東部で検出した大型の円形住居である。本遺跡中では最大規模のものである。直径10.44ｍを測り、久世町上野遺跡の大型住居に次ぐ大きさである。壁体溝は４条あり、柱穴は５軒分を検出した。つまり、５軒の住居が重なっていることが判明した。中央穴は４か所の重なりを確認している。中央穴の周囲には多数の柱穴を検出しているが、最大の住居に伴うものかどうか確かめられなかった。第107図に示すように、住居は古い方から順に１から５まで、拡張あるいは縮小していったことが想定できる。竪穴住居が最大になるのは、第４番目であろう。

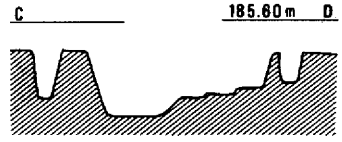
遺物としては土器のほかに、砥石と多数の鉄製品および碧玉製管玉が見られる。土製の玉とミニチュア土器もある。特に鉄製品は、鏃、鉇、鎌、小型斧など、前期古墳から出土するものに類似している。また鉄残滓も多数出土している。鉄器生産集団の首長が住んでいたものかも知れない。

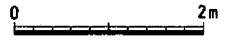
土器から弥生時代後期中葉から後葉に属する。



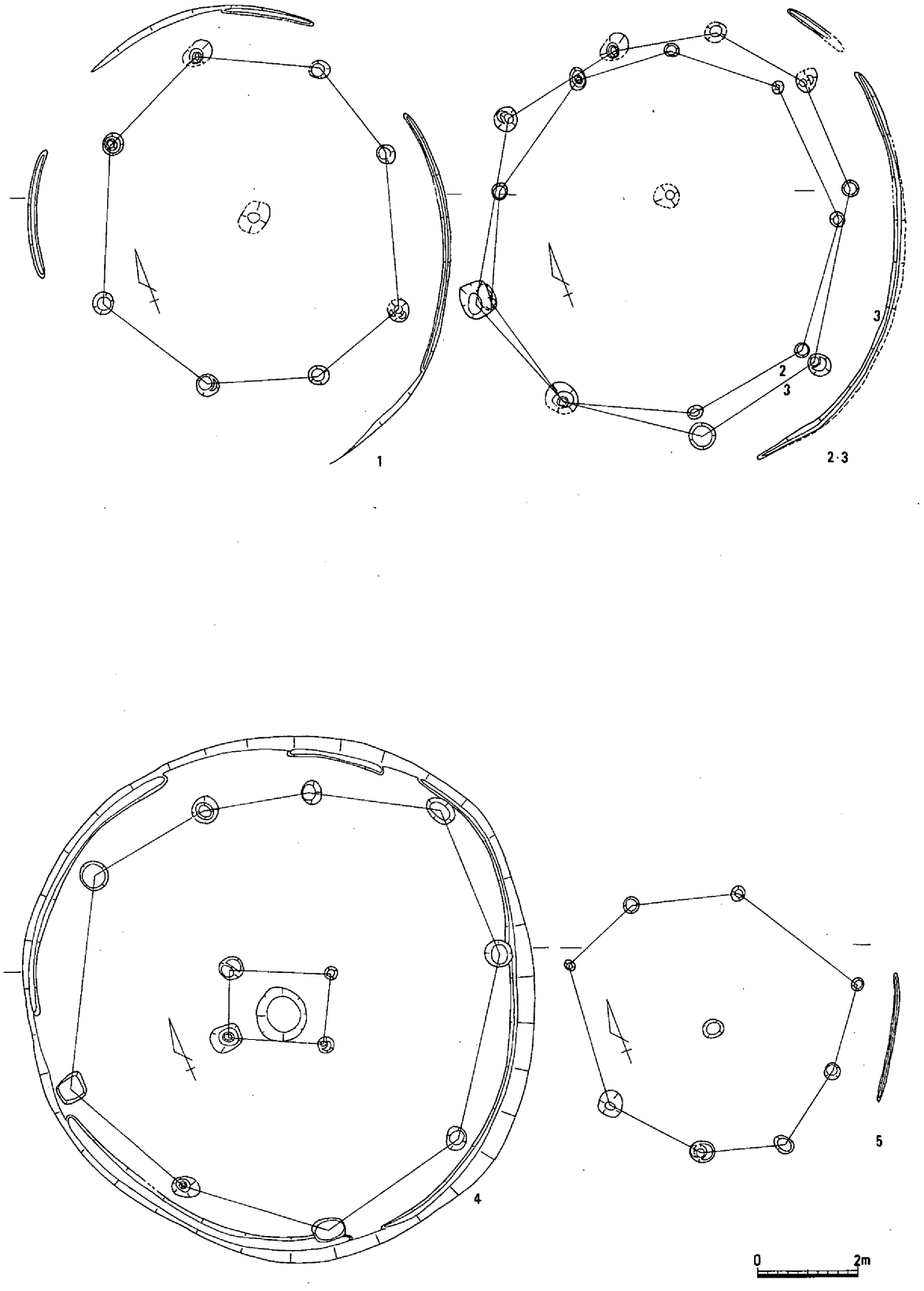


1．灰黄色粘性砂質土（土器）
2．暗灰黄色粘性砂質土（土器）
3．黒褐色粘性砂質土（土器）
4．暗オリーブ褐色粘性砂質土（土器）
5．褐色粘性砂質土（土器）
6．４と同じだが地山ブロックが多い

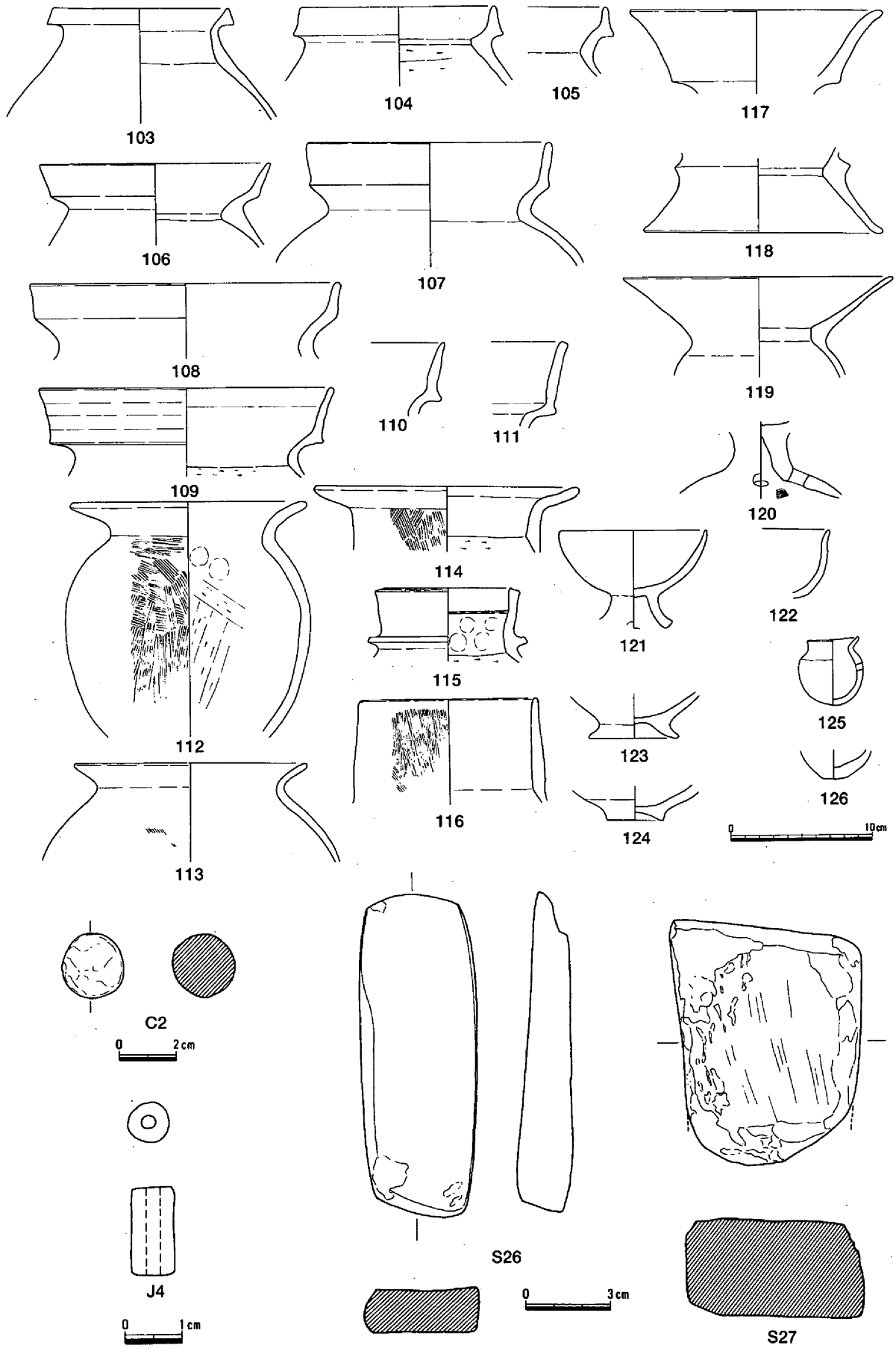




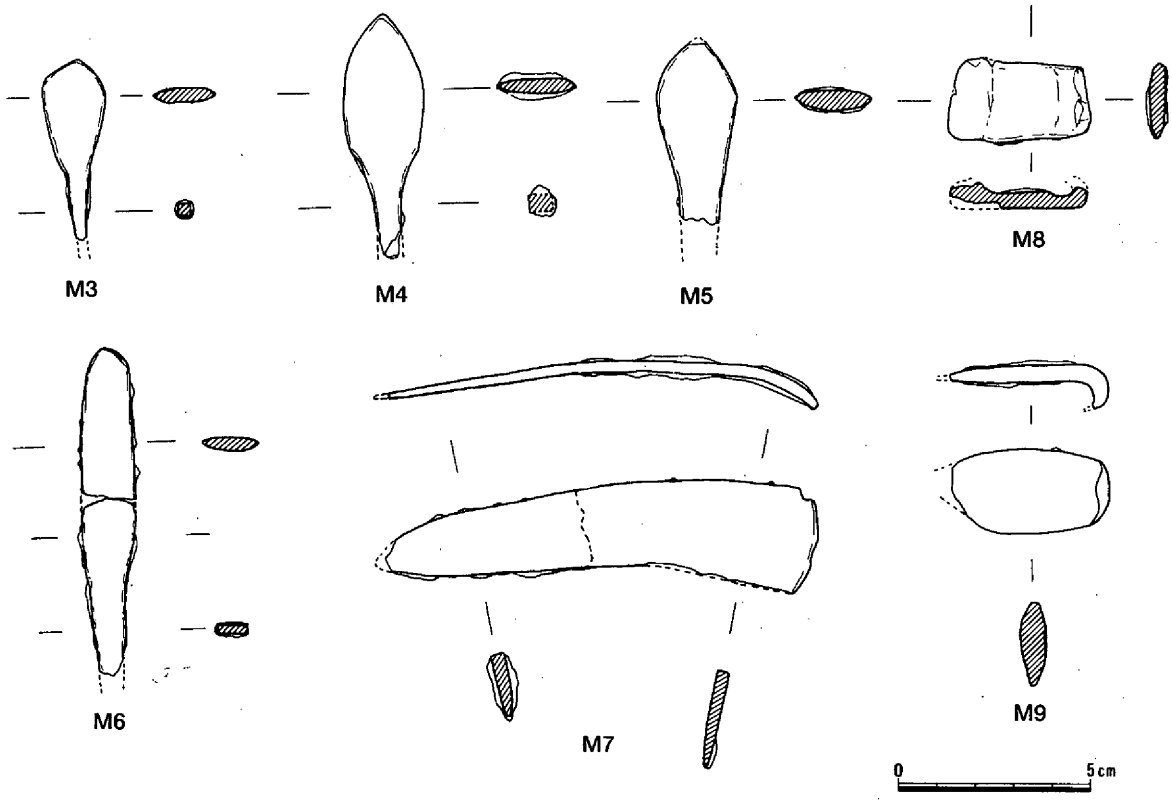
第106図　竪穴住居19（1／80）



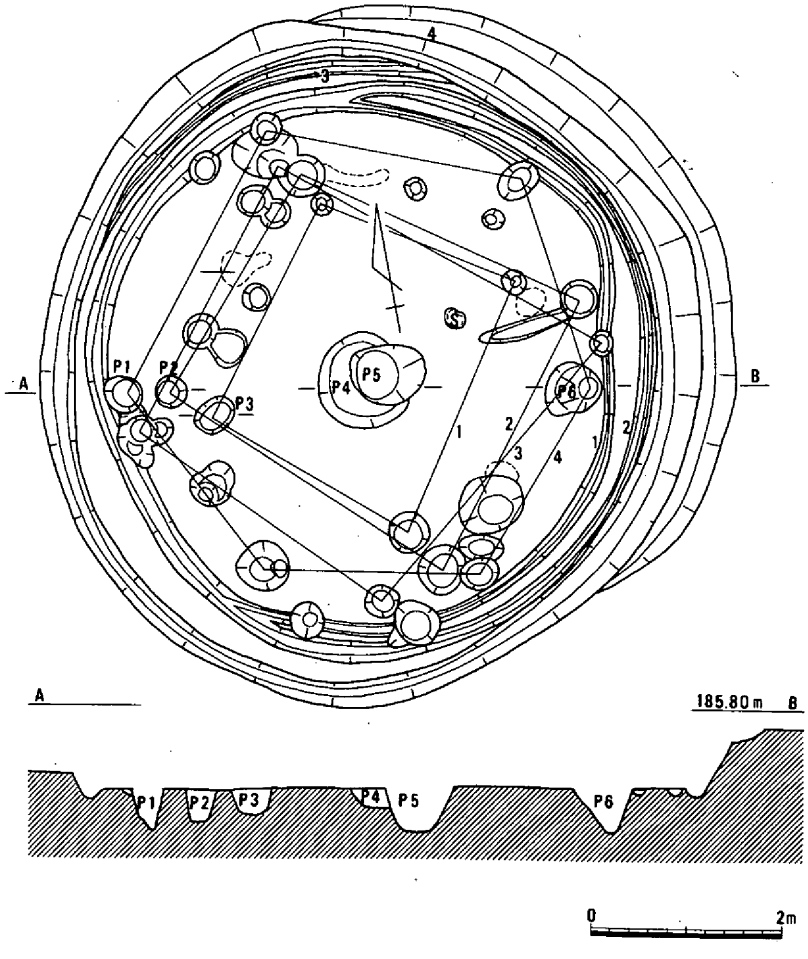
第107図　竪穴住居19変遷図（1／120）



第108図　竪穴住居19出土遺物（1）（1／4、1／2、1／1）



第109図　竪穴住居19出土遺物（2）（1／2）



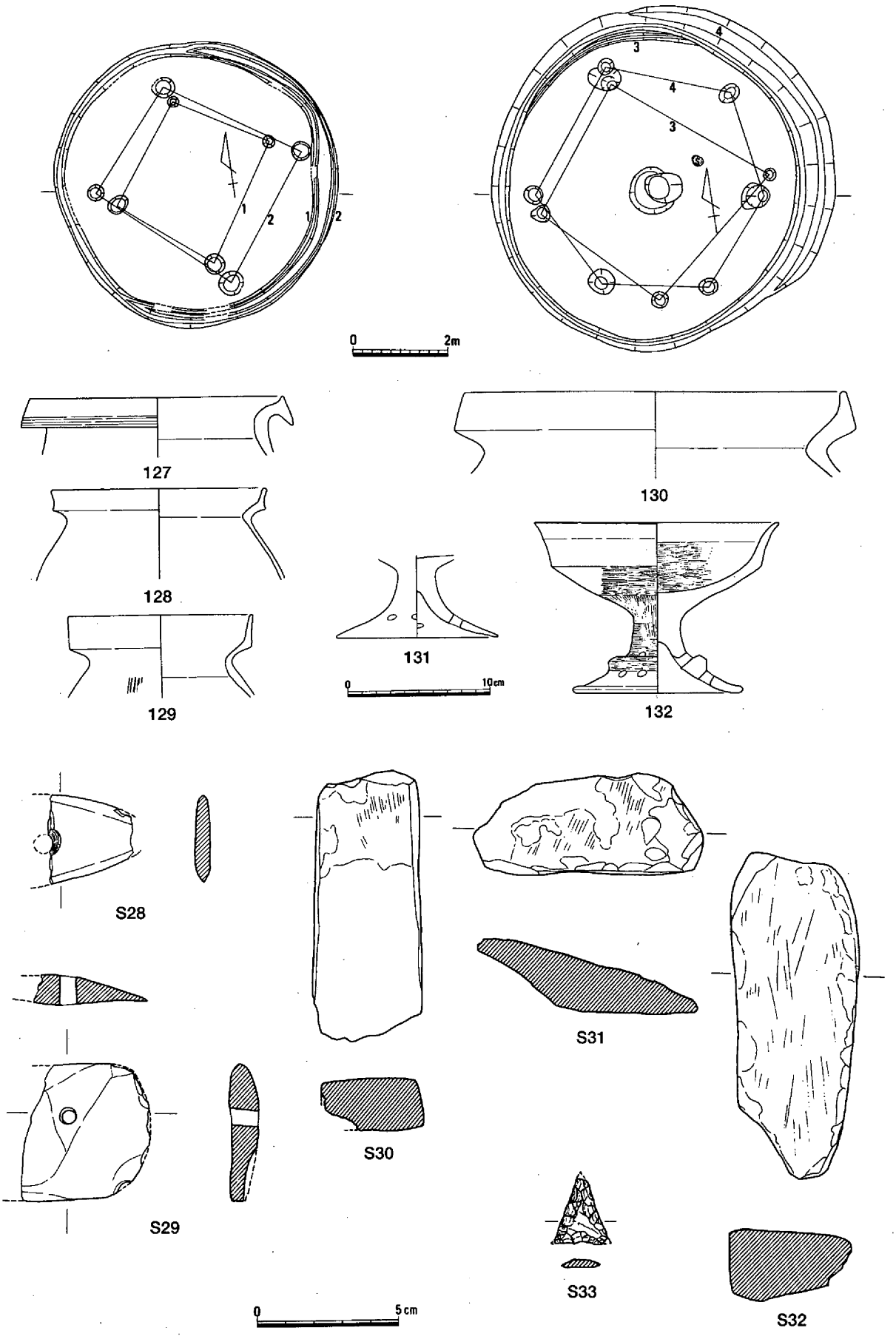
第110図　竪穴住居20.（1／80）

竪穴住居20（第110・111図、図版12・31・39）

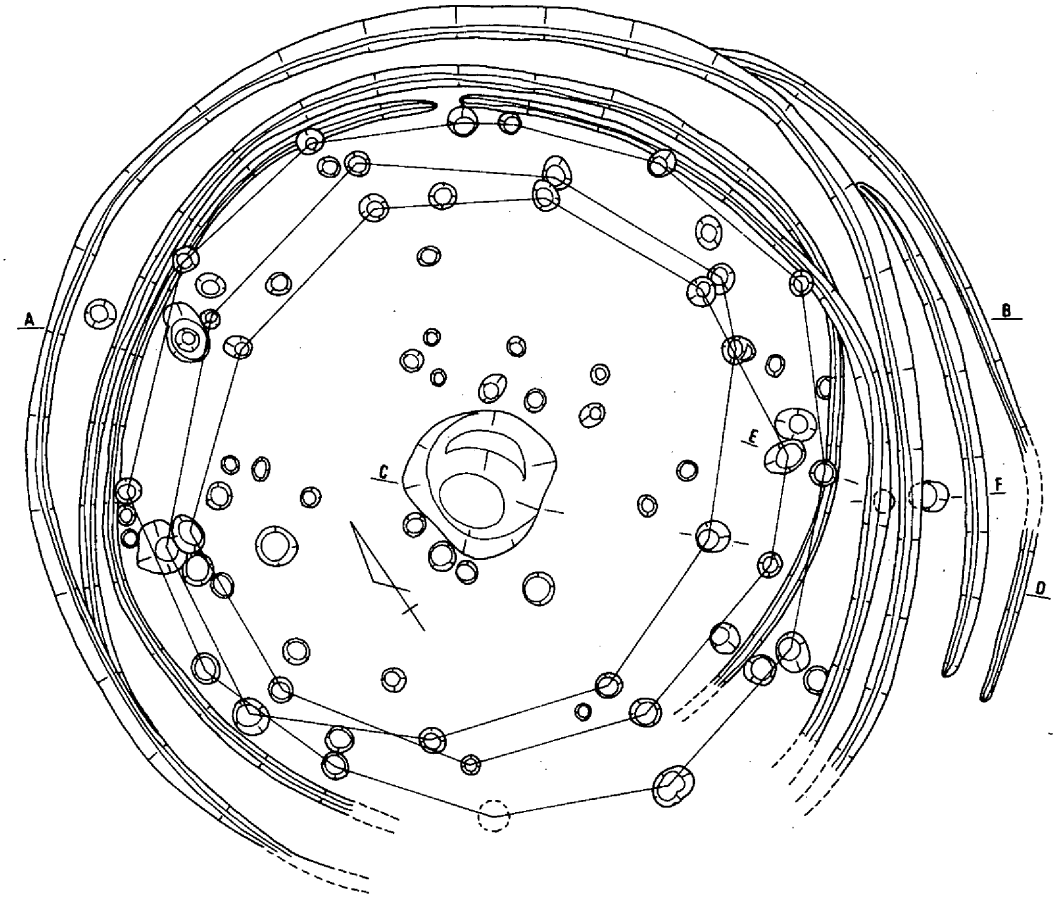
２区北端で検出した中型の円形住居である。床面が深いものと浅いものに分けられる。床面が深い住居が新しい。床面が深いものは４軒の重複があり、床面が浅いものは１軒だけである。図示したように拡張している。柱の数は、４から６本の組み合わせが考えられる。中央穴は２か所検出できた。その周辺の床面に、河原石が置かれていた。

遺物は、土器のほかに石鏃、砥石、石包丁、鉄鏃が出土している。

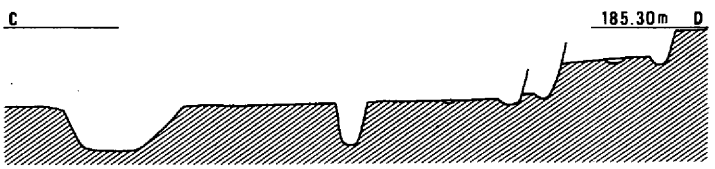
土器から弥生時代後期中葉から後葉に属する。

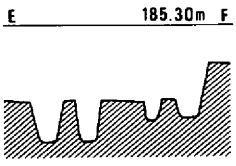


第111図　竪穴住居20変遷図（1／120）・出土遺物（1／4、1／2）



1．淡黄褐色粘質土
2．暗灰色粘質土
3．灰黄褐色粘質土
4．壁体溝
5．壁体溝
6．淡黄褐色粘質土
7．壁体溝
8．黒褐色粘質土
9．壁体溝

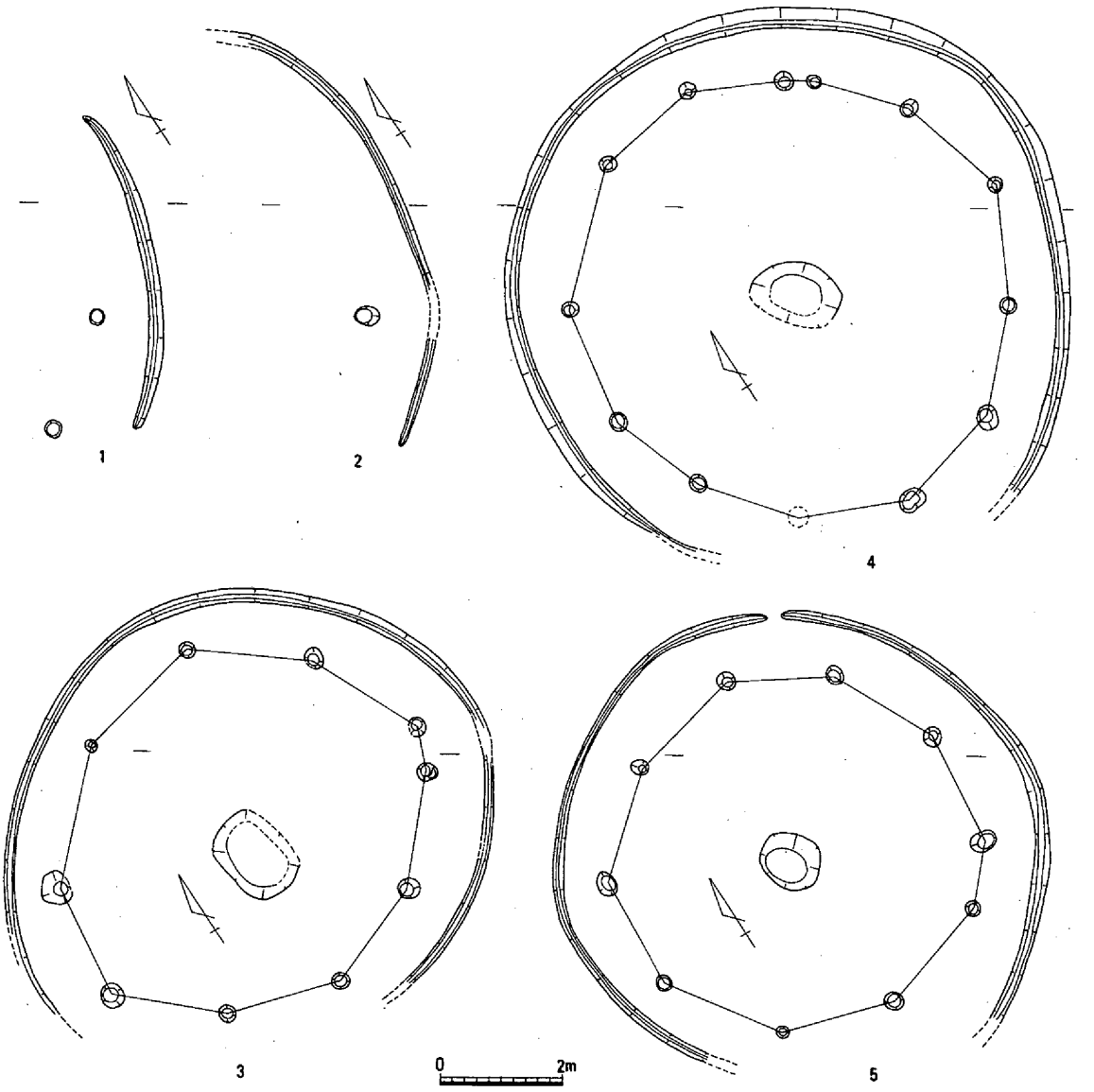




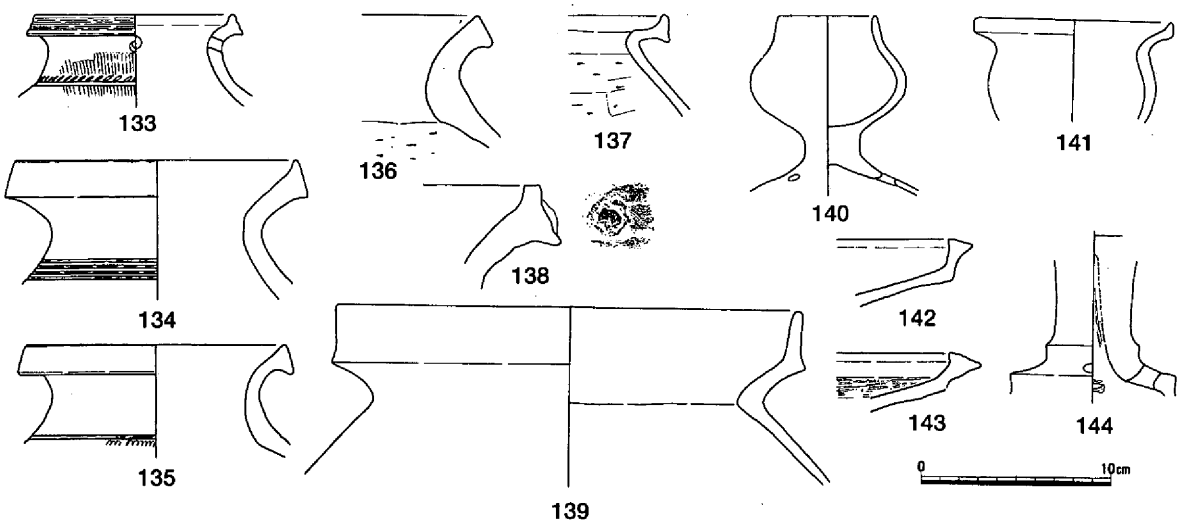
0　2m

0　3cm

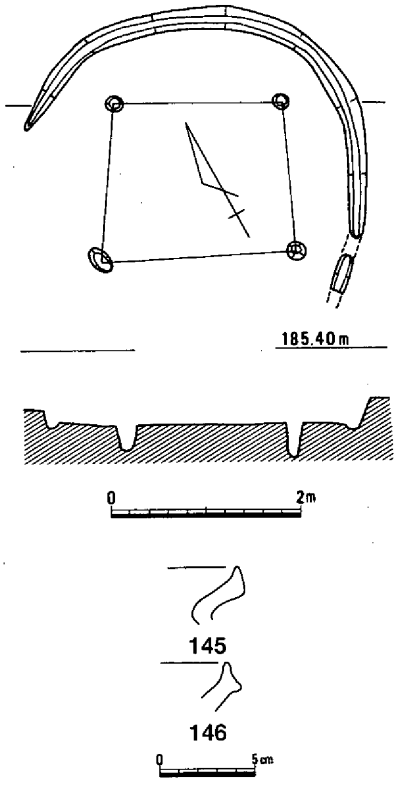
第112図　竪穴住居21（1／80）・出土遺物（1）（1／2）



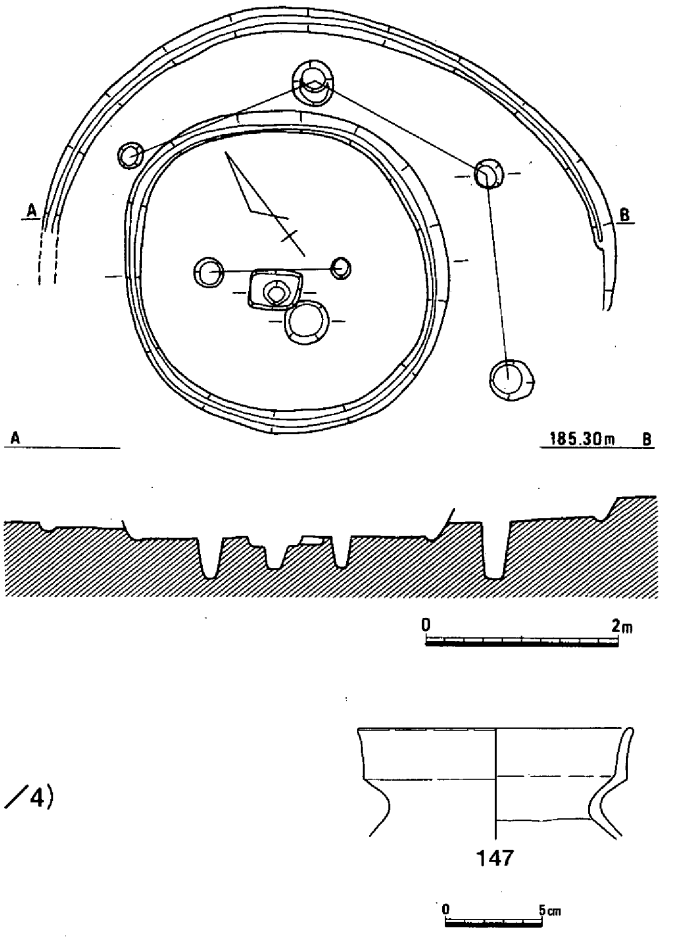
第113図　竪穴住居21変遷図（1／120）



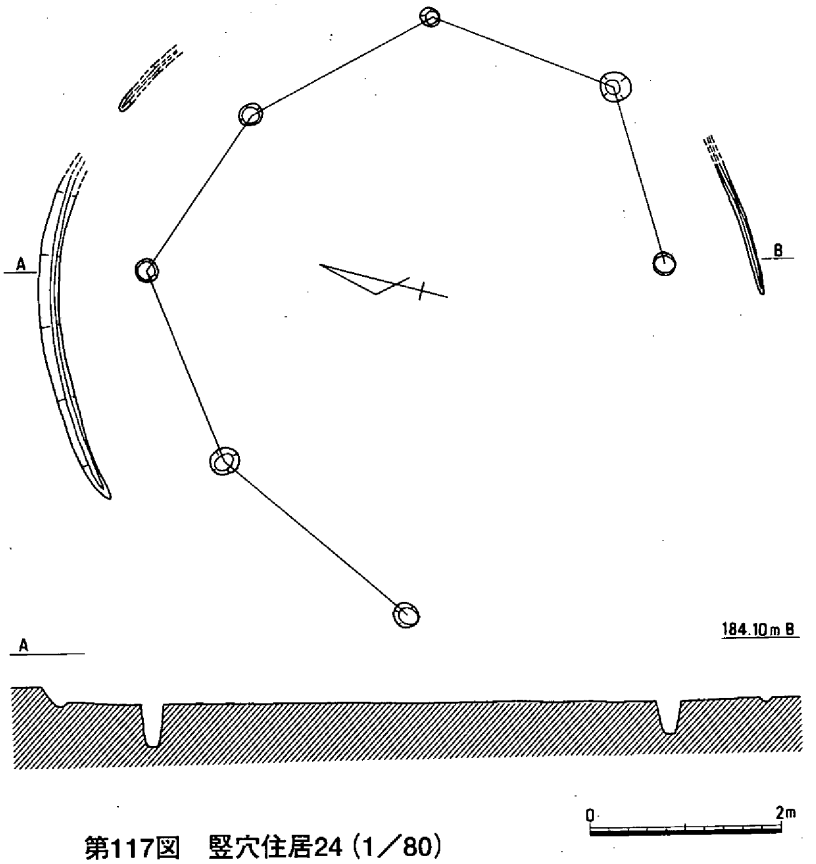
第114図　竪穴住居21出土遺物（2）（1／4）



第115図　竪穴住居22（1／80）・出土遺物（1／4）



第116図　竪穴住居23（1／80）・出土遺物（1／4）



第117図　竪穴住居24（1／80）

竪穴住居21（第112～114図、図版12・31・39）

２区南部で検出した大型の円形住居である。本遺跡で検出した竪穴住居の中では、２位から３位のものである。直径9.40ｍを測る。壁体溝は５条あり、柱穴は５軒分を検出した。つまり５軒の住居が重なっていることが判明した。中央穴は３か所の重なりを確認している。中央穴の周囲には多数の柱穴を検出しているが、どの住居に伴うものか確かめられなかった。図に示すように、住居は古い方から順に１から５まで、拡張あるいは縮小していったことが想定できる。最大期は第４番目であろう。

遺物としては土器のほかに、鉄鏃、石鏃および翡翠製勾玉が見られる。勾玉については出土位置が明確でない。石鏃は平基式と凸基式の両方が出土している。

土器から弥生時代後期前葉から中葉に属する。

竪穴住居22（第115図、図版13）

２区南西部の１区境界で検出した小型の円形住居である。南西半分は田圃の造成のために削除されていた。壁体溝は１条あり、柱穴も１軒分の４か所を検出した。単純な１軒の住居である。中央穴はあるかないか不明である。

遺物としては、土器の小破片が出土したにすぎない。

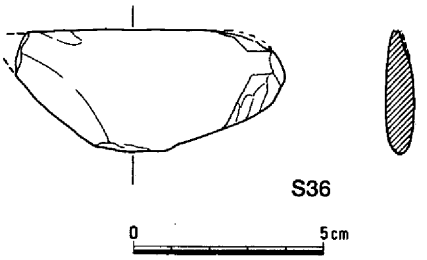
土器から弥生時代後期中葉に属する。

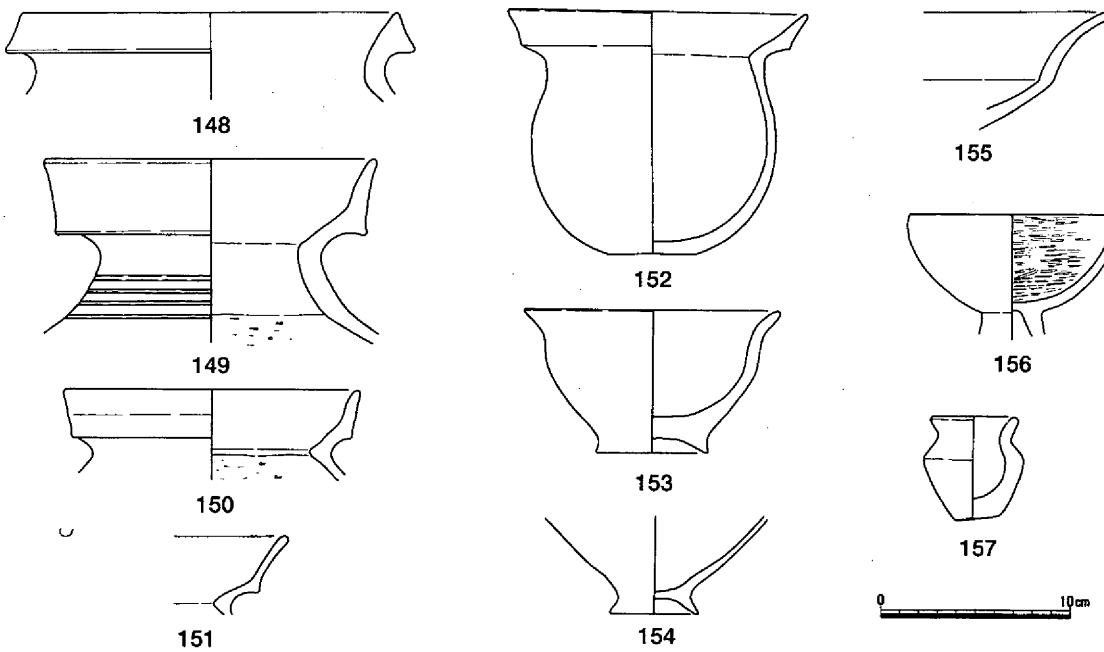
竪穴住居23（第116図、図版12）

２区南部の竪穴住居21の南を切っている小型の円形住居である。南半分は田圃の造成のために削除されていた。壁体溝は２条あり、柱穴も２軒分を検出した。内側のものは２本柱で古く、外側のものが新しい。中央穴はどちらも検出できた。

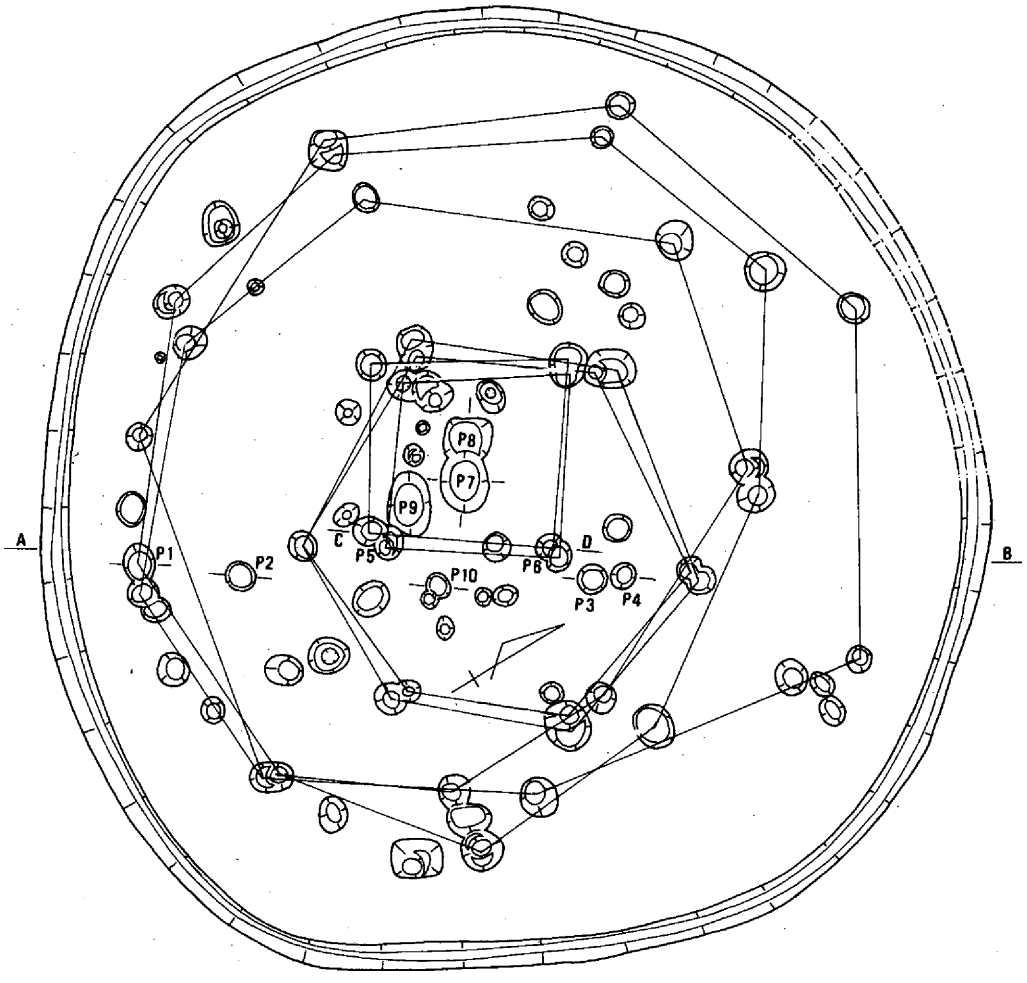
遺物としては、土器の小破片が出土したにすぎない。

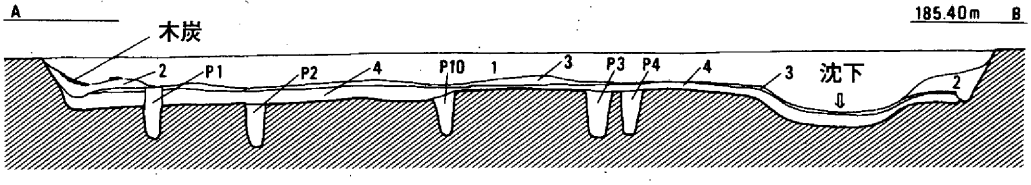
土器から弥生時代後期後葉に属する。



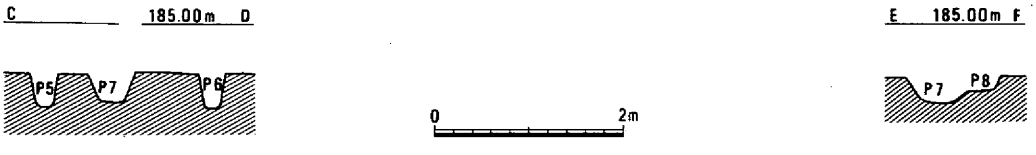


第118図　竪穴住居25出土遺物（1／2、1／4）





1．淡黄褐色粘質土
2．暗赤褐色粘質土
3．暗黄褐色粘質土（貼床）
4．暗褐色粘質土



第119図　竪穴住居26（1／80）

竪穴住居24（第117図）

１区北西の竪穴住居14の北に検出した中型の円形住居である。竪穴住居14の上層、竪穴住居９の下層にあたる。壁体溝と７か所の柱穴を検出した。柱は８本あったものと想像される。中央穴は確認できなかった。

遺物としては、土器の小破片が出土したにすぎない。

土器から弥生時代後期中葉に属する。

竪穴住居25（第80・118図、図版13・31）

２区南部の竪穴住居５の東に検出した小型の隅丸長方形住居である。竪穴住居５の上層にあたる。壁体溝だけを検出した。

遺物としては土器のほかに、孔のない石包丁が出土した。

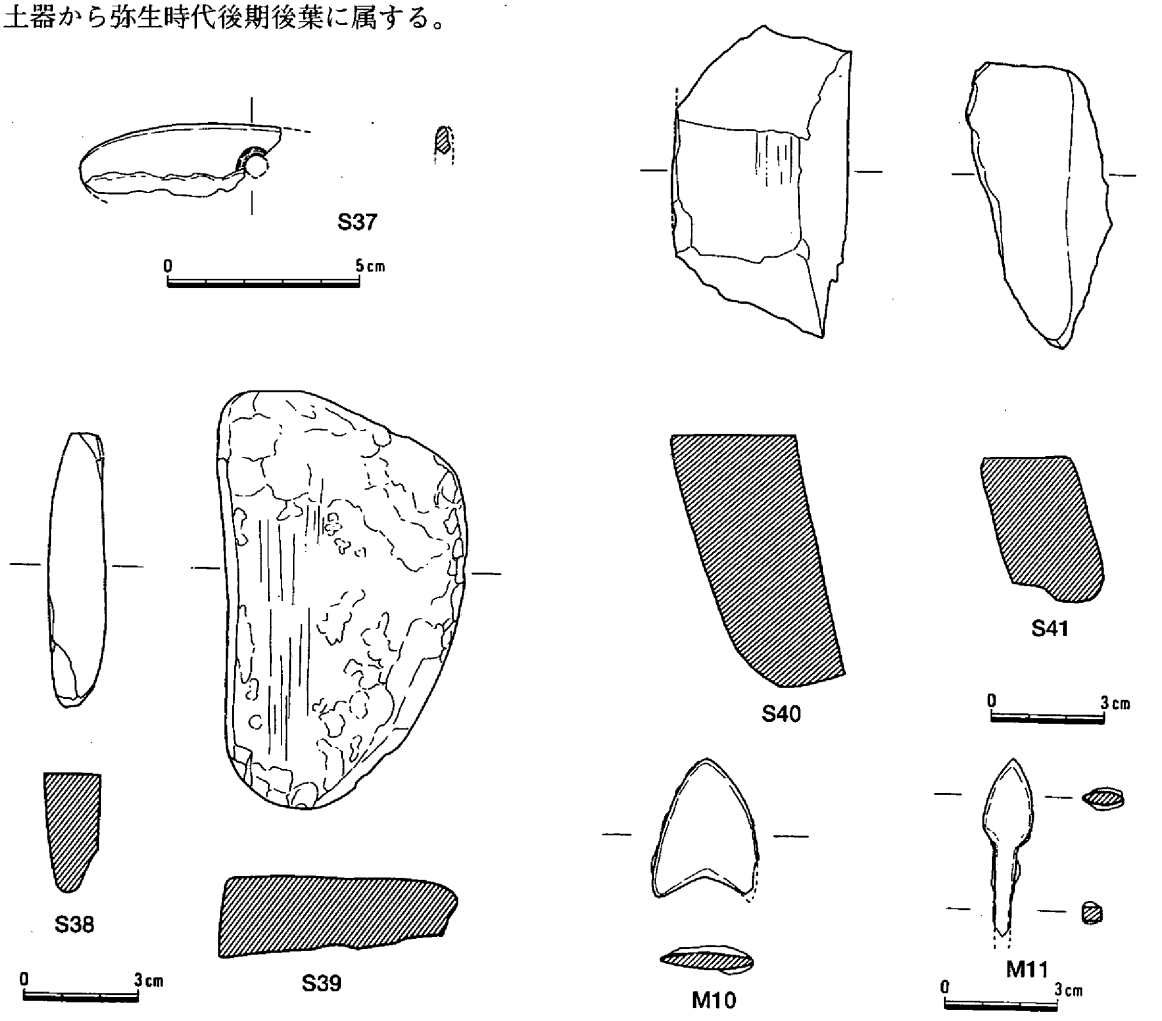
土器から弥生時代後期後葉に属する。

竪穴住居26（第119～121図、図版13・31・38・39・41）

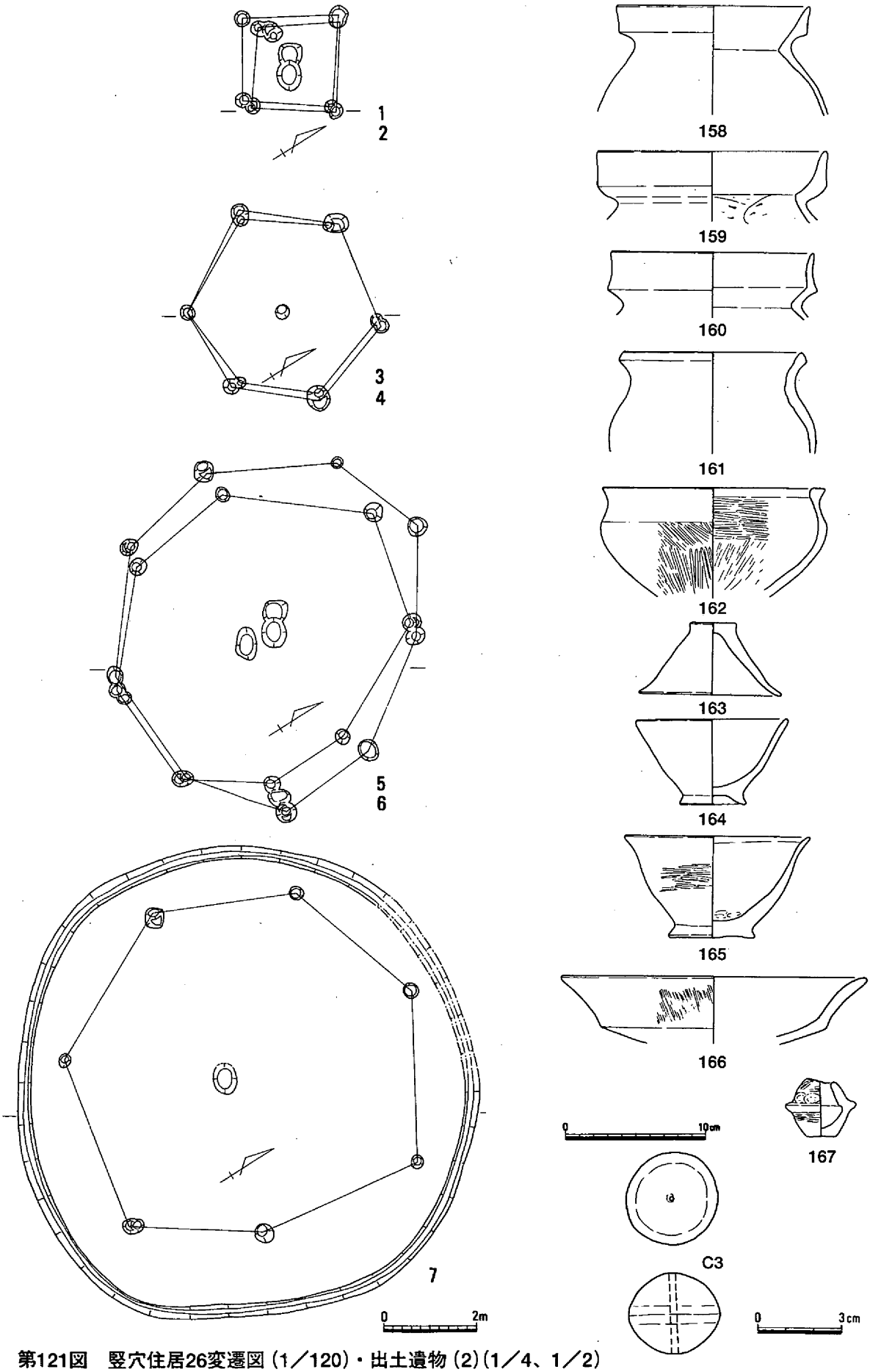
２区南西部で検出した大型の円形住居である。本遺跡中で２位のものである。直径10.40ｍを測る。壁体溝は１条しか検出できなかったが、柱穴と中央穴は７軒分を検出した。つまり７軒の住居が重なっていることが判明した。図に示すように住居は、拡張していったことが想定できる。

遺物としては土器のほかに、鉄鏃、土玉、石包丁、砥石、ミニチュア土器が見られる。

土器から弥生時代後期後葉に属する。



第120図　竪穴住居26出土遺物（1）（1／2）



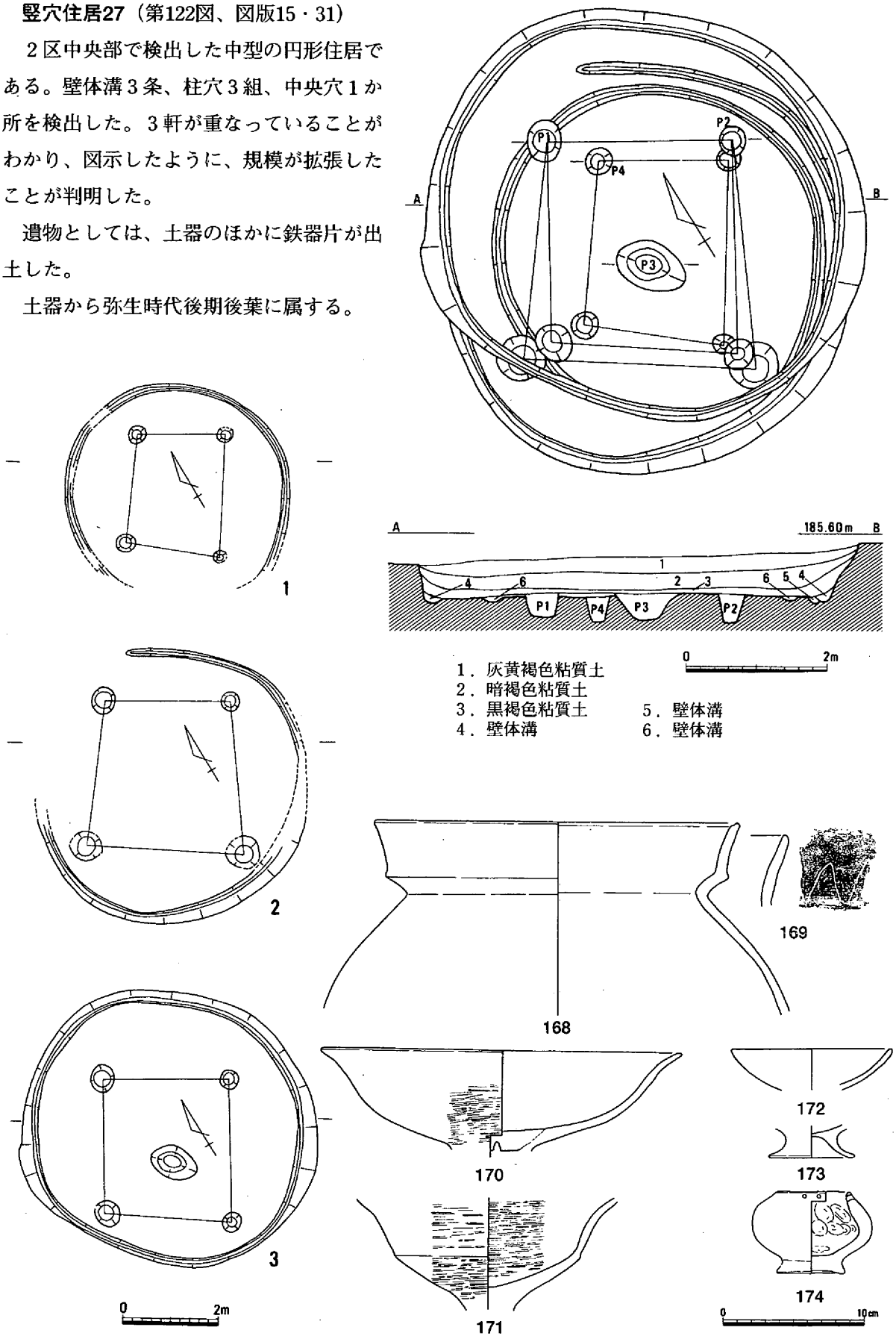
第121図　竪穴住居26変遷図（1／120）・出土遺物（2）（1／4、1／2）

竪穴住居27（第122図、図版15・31）

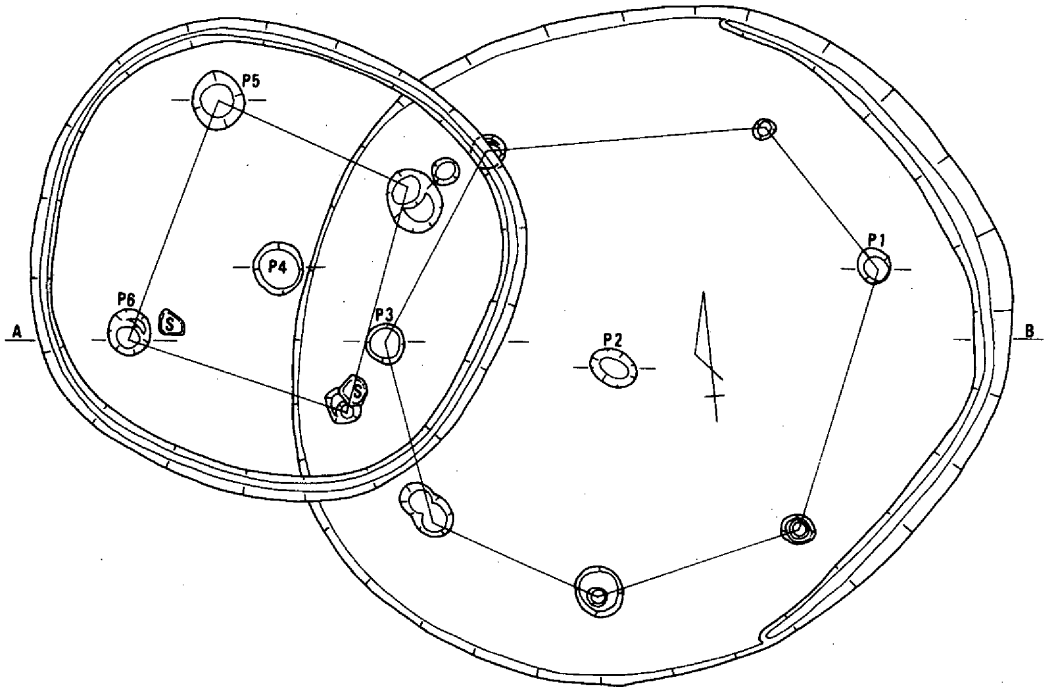
２区中央部で検出した中型の円形住居である。壁体溝３条、柱穴３組、中央穴１か所を検出した。３軒が重なっていることがわかり、図示したように、規模が拡張したことが判明した。

遺物としては、土器のほかに鉄器片が出土した。

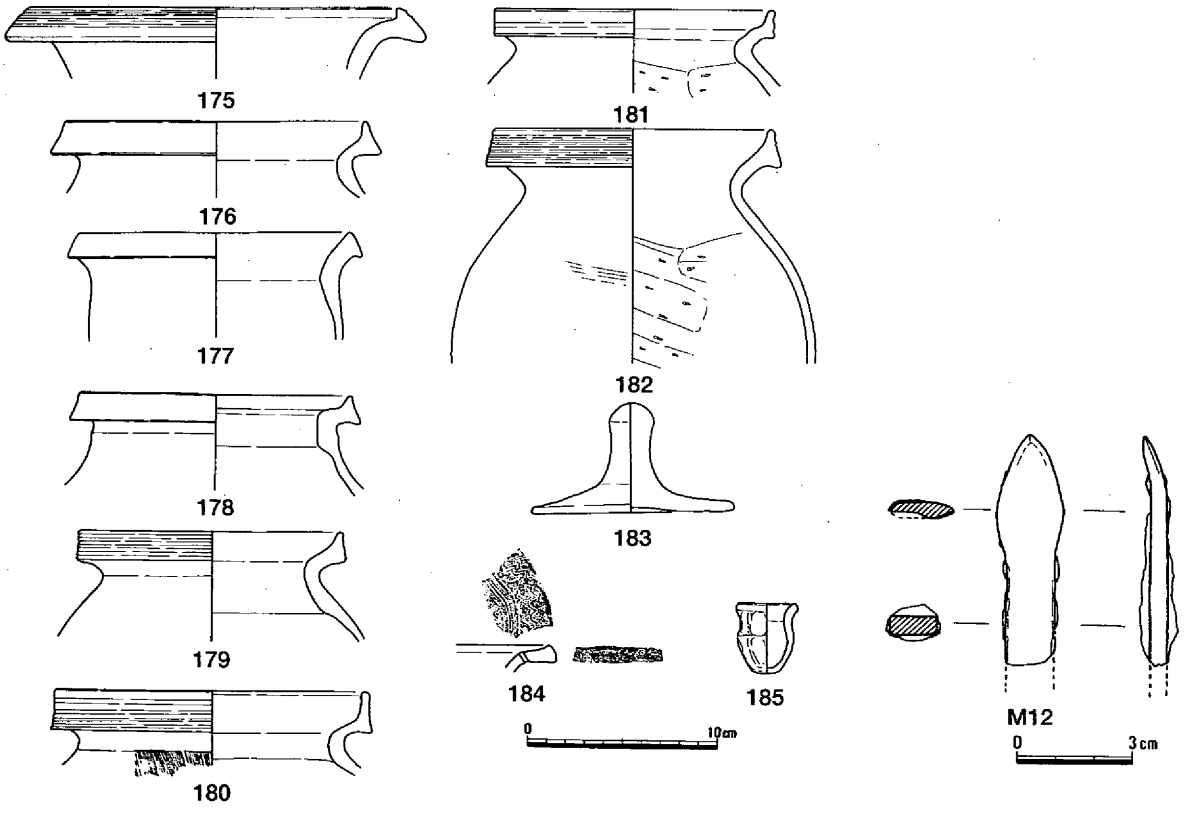
土器から弥生時代後期後葉に属する。



第122図　竪穴住居27（1／80）・竪穴住居27変遷図（1／120）・出土遺物（1／4）



1．灰褐色粘質土　　3．濃褐色粘質土　　5．壁体溝
2．木炭　　4．濃黄褐色粘質土



第123図　竪穴住居28・29（1／80）、竪穴住居28出土遺物（1／4、1／2）

竪穴住居28（第123図、図版14・31・39）

２区中央部で検出した中型の円形住居である。壁体溝１条、柱穴２組、中央穴１か所を検出した。２軒が重なっていることがわかる。順序は不明。柱穴はほぼ同じ位置を踏襲している。火災に遭遇したことがよくわかる状況で検出した。

遺物としては土器のほかに、鉈、砥石が出土した。

土器から弥生時代後期後葉に属する。

竪穴住居29（第123・124図、図版14・31）

２区中央部で検出した小型の隅丸方形住居である。竪穴住居28の西に位置し、その住居を切っているから、新しいことがわかる。壁体溝１条、柱穴２組、中央穴１か所を検出した。２軒が重なっていることがわかる。柱穴はほぼ同じ位置を踏襲している。柱穴脇の床面に、河原石が置かれていた。

遺物としては、土器が少量だけ出土した。

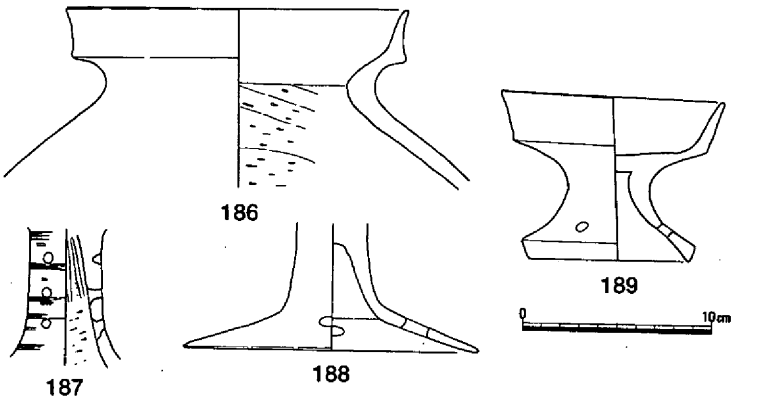
土器から弥生時代後期後葉に属するであろう。

竪穴住居30（第125図、図版14・40）

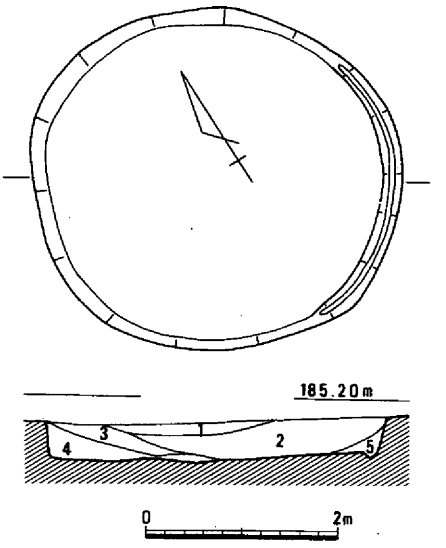
２区中央部で検出した小型の円形住居である。竪穴住居26の西に位置する。壁体溝１条を検出し、柱穴や中央穴はない。

遺物としては土器のほかに、石包丁の未製品と鉄器片が出土している。

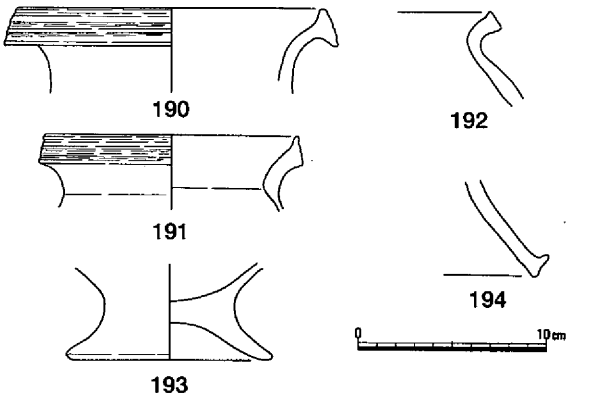
土器から弥生時代後期後葉に属するであろう。

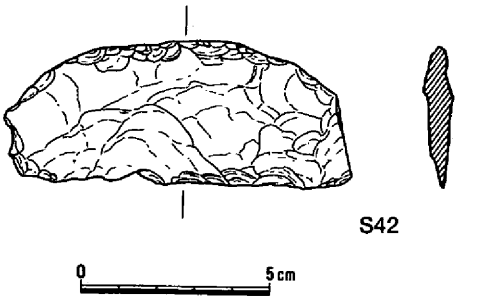


第124図　竪穴住居29出土遺物（1／4）

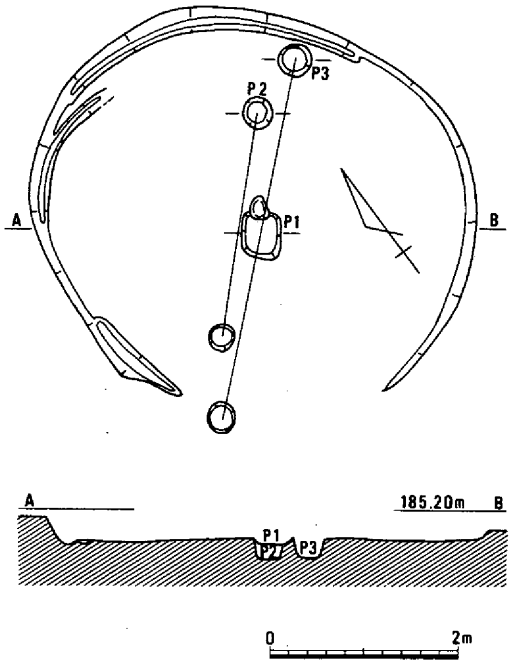


1．黄褐色粘質土　　3．暗褐色粘質土　　5．壁体溝
2．灰黄褐色粘質土　　4．黒褐色粘質土





第125図　竪穴住居30（1／80）・出土遺物（1／4、1／2）

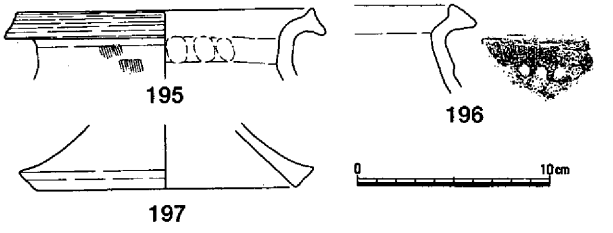


竪穴住居31（第126図）

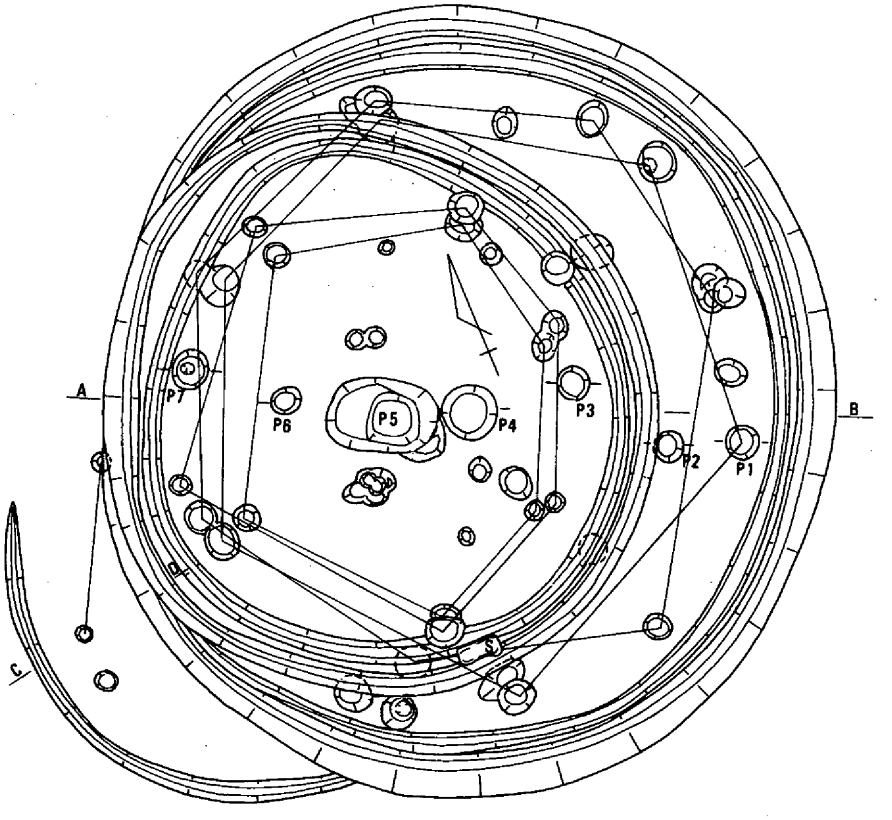
２区中央部で検出した小型の円形住居である。竪穴住居30の西に位置する。壁体溝２条を検出し、柱穴２組と中央穴２か所を検出した。北側に拡張したようである。

遺物としては土器のほかに、石鏃と砥石が出土している。

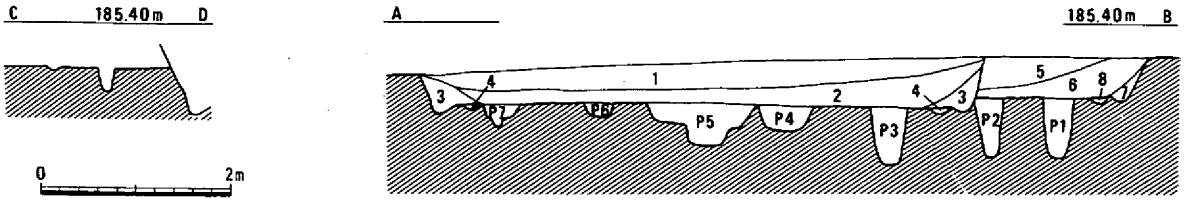
土器から弥生時代後期後葉に属する。



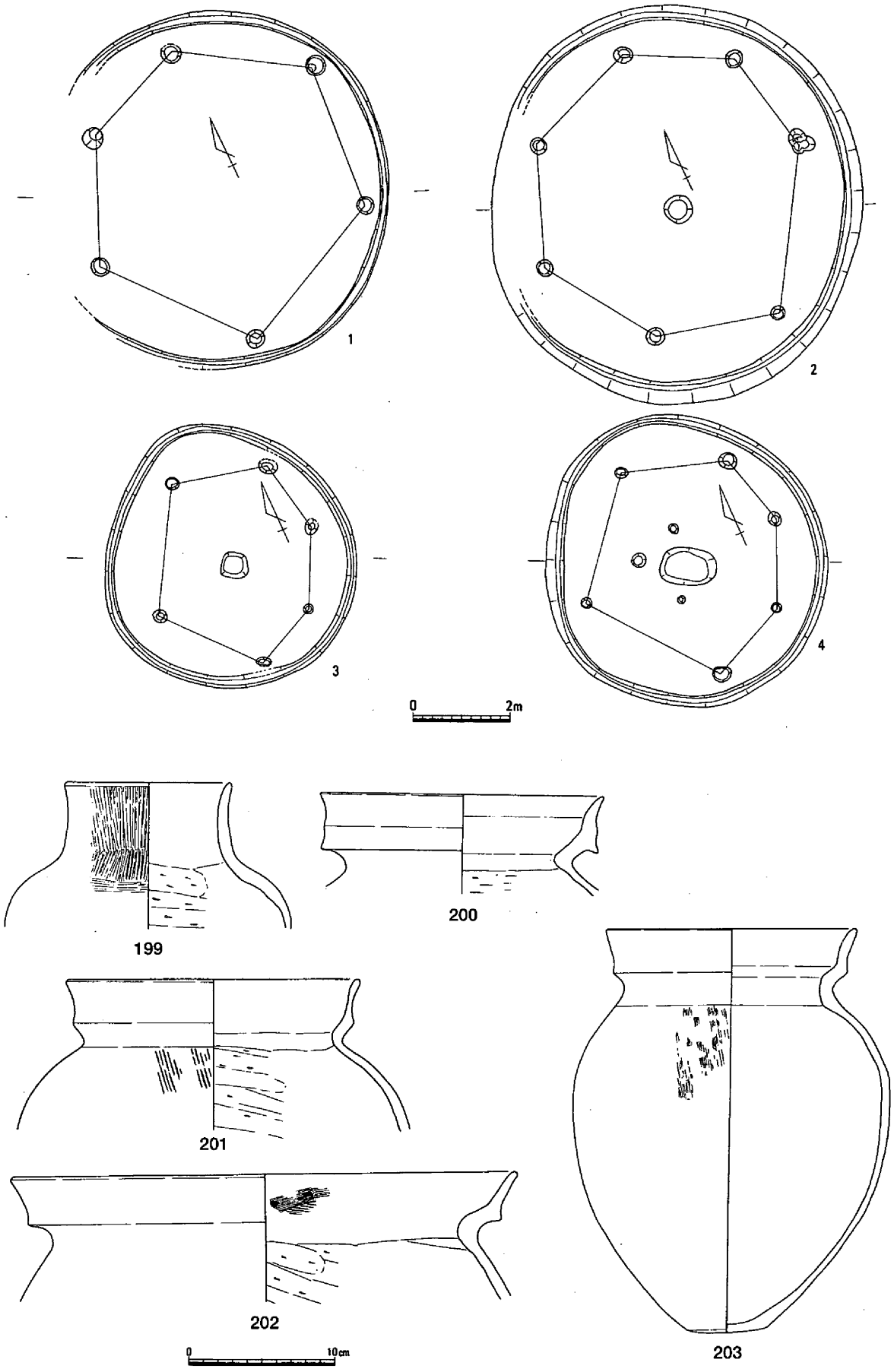
第126図　竪穴住居31（1／80）・出土遺物（1／4）



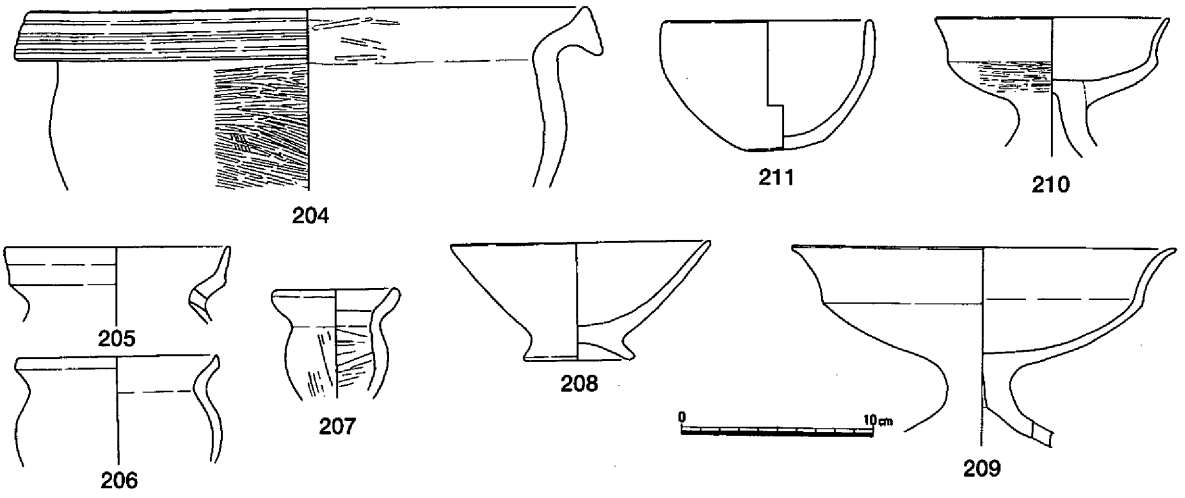
1．暗褐色粘質土
2．灰黄褐色粘質土
3．淡黄褐色粘質土
4．壁体溝
5．黒褐色粘質土
6．暗褐色粘質土
7．壁体溝
8．壁体溝



第127図　竪穴住居32・33（1／80）、竪穴住居32出土遺物（1／4）



第128図　竪穴住居33変遷図（1／120）・出土遺物（1）（1／4）



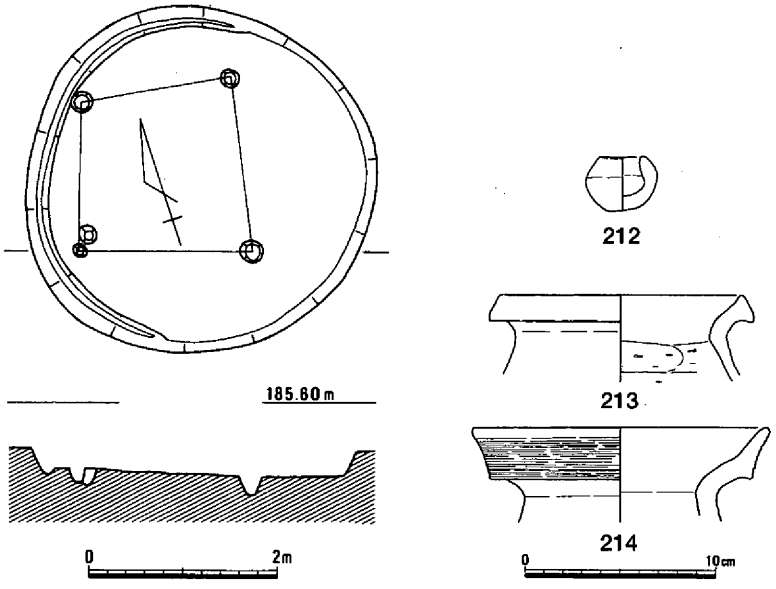
第129図　竪穴住居33出土遺物（2）（1／4）

竪穴住居32・33（第127～129図、図版16・32）

２区の北部で検出した小型から中型の円形住居である。竪穴住居29の北に位置する。大きく３期にわかれる。古い方から竪穴住居32、竪穴住居33の大きい方、最後に竪穴住居33の小さい方の順序になる。そして竪穴住居33は、両者ともに拡張していることがわかった。全部で８軒が重複しているのである。図では柱穴４組、中央穴３か所を示した。

遺物としては、直口壺、甕、鉢、高杯、ミニチュア土器がある。

土器から弥生時代後期中葉から後葉に属する。



第130図　竪穴住居34（1／80）・出土遺物（1／4）

竪穴住居34

（第130図、図版14・38）

２区の北部で検出した小型の円形住居である。２軒が重複していると考えられる。壁体溝は西の端に１条、柱穴は４か所とほかに１か所を検出し、中央穴は確認できなかった。

遺物としては、ミニチュア土器以外に壺や甕などが出土している。

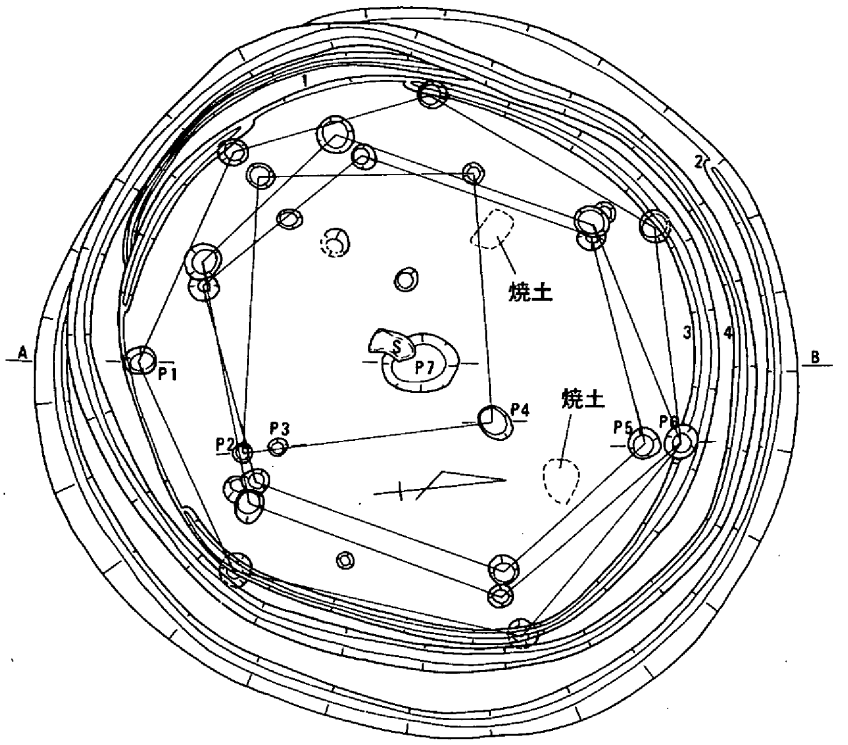
土器から弥生時代後期後葉に属する。

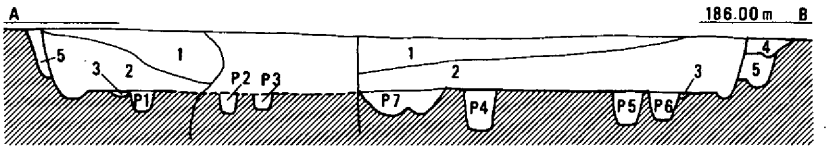
竪穴住居35（第131・132図、図版15・32・38～40）

２区中央部東部にある中型の円形住居である。竪穴住居28の東、竪穴住居27の北に位置する。４軒が重複していると考えられる。２期目が最大の規模となる。壁体溝は４条、柱は４本から７本に増える。中央穴は１か所しか確認できなかった。その脇の床面には、扁平な河原石が置かれていた。火事にあったため、床面が赤色に変色していた。

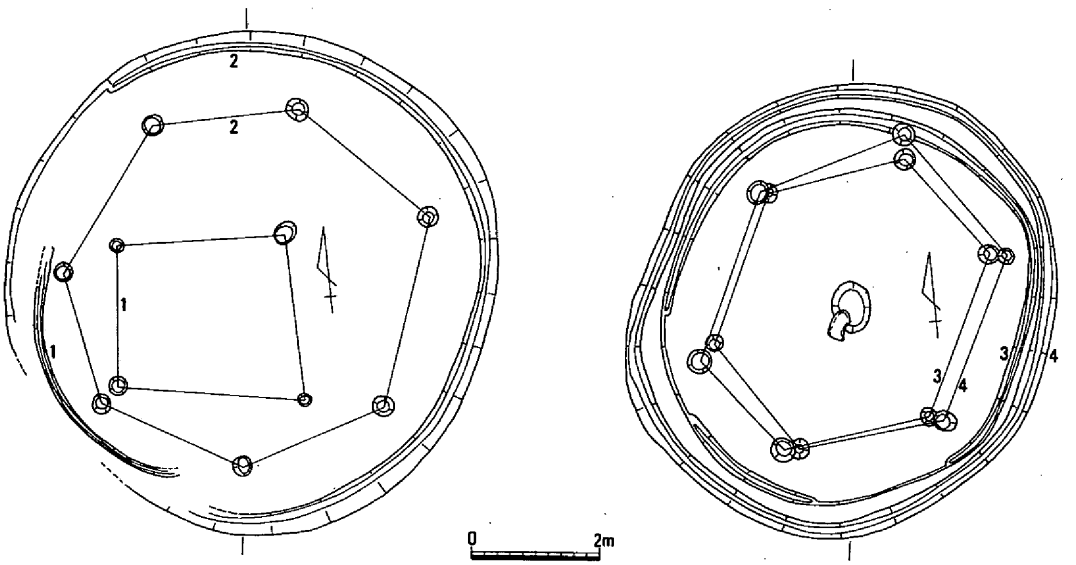
遺物としては、石包丁、砥石、ミニチュア土器、鉋、板状鉄斧、ガラス製小玉が出土している。

土器から弥生時代後期後葉に属する。

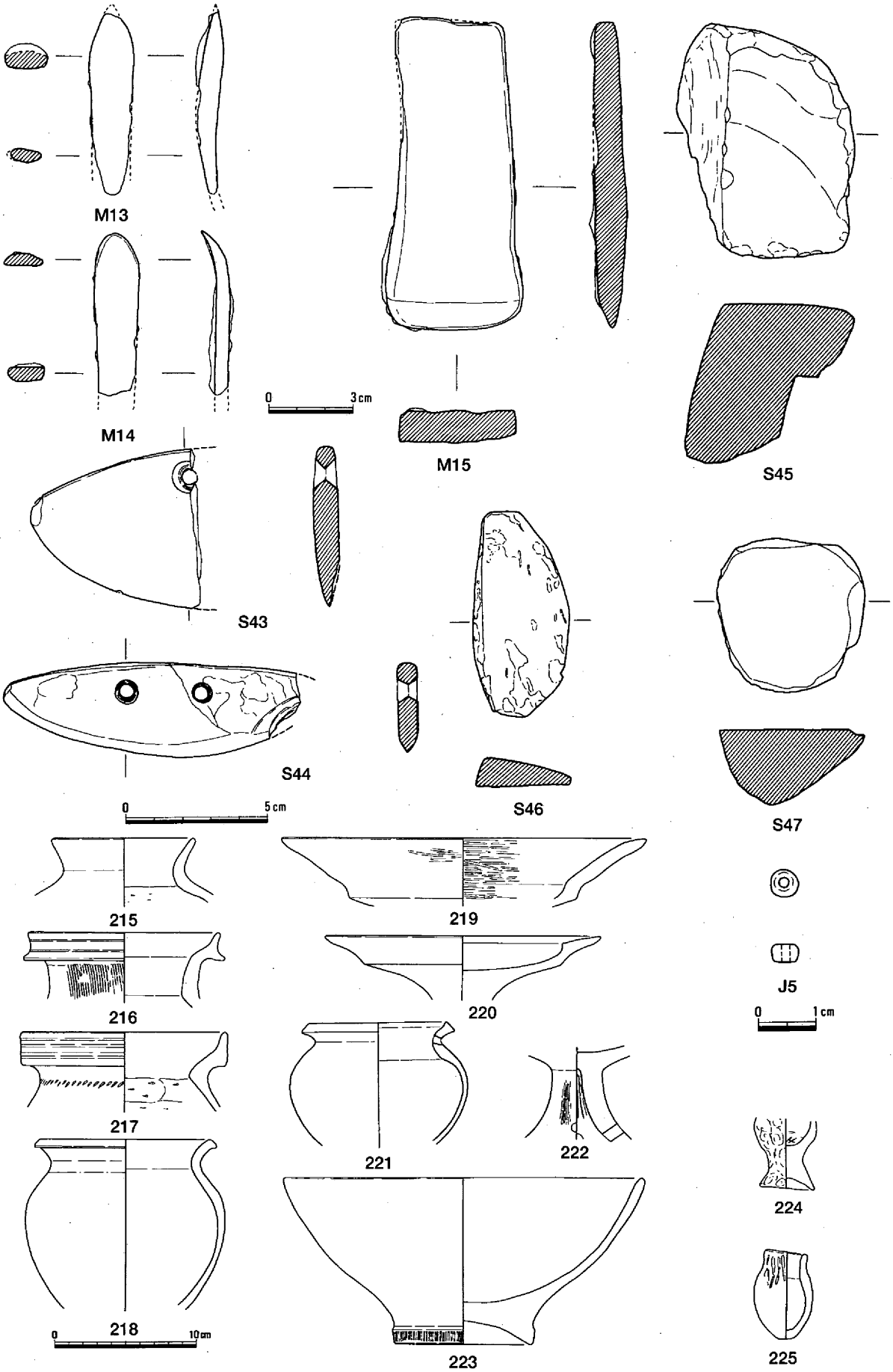




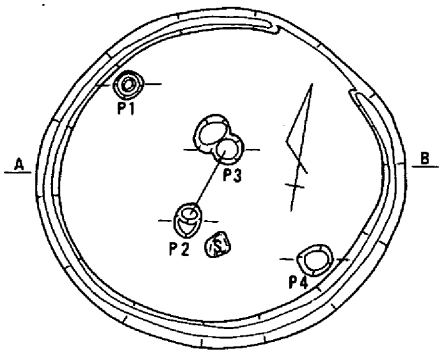
1．黒褐色粘質土　　4．淡黄褐色砂質土
2．暗褐色粘質土　　5．黒褐色粘質土
3．壁体溝

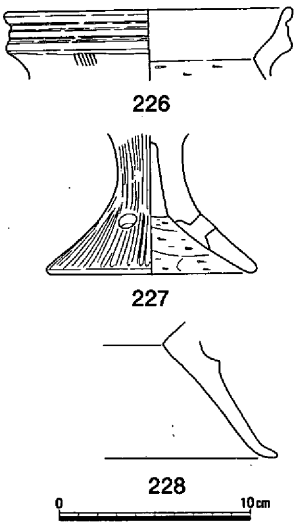


第131図　竪穴住居35（1／80）・竪穴住居35変遷図（1／120）



第132図　竪穴住居35出土遺物（1／2、1／1、1／4）





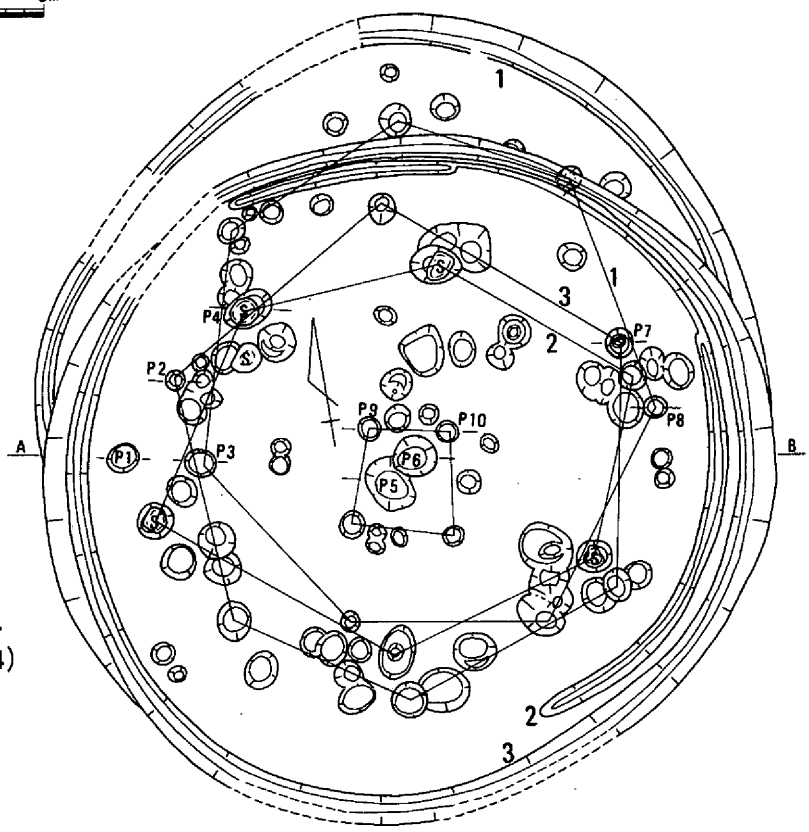
竪穴住居36（第133図、図版16）

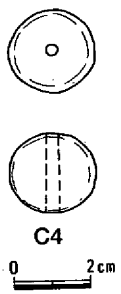
２区北東部にある小型の円形住居である。２軒が重複していると考えられる。壁体溝は１条、柱は２軒とも２本で組んでいる。中央穴は確認できなかった。

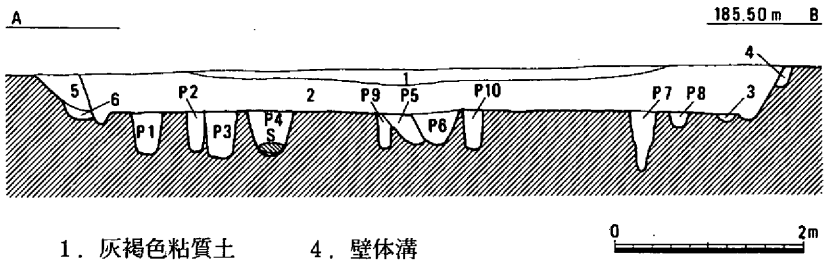
遺物としては砥石、鉄器片が出土している。

土器から弥生時代後期後葉に属する。

第133図　竪穴住居36（1／80）・出土遺物（1／4）







1．灰褐色粘質土
2．暗灰褐色粘質土
3．壁体溝
4．壁体溝
5．黄灰褐色粘質土
6．灰褐色粘質土

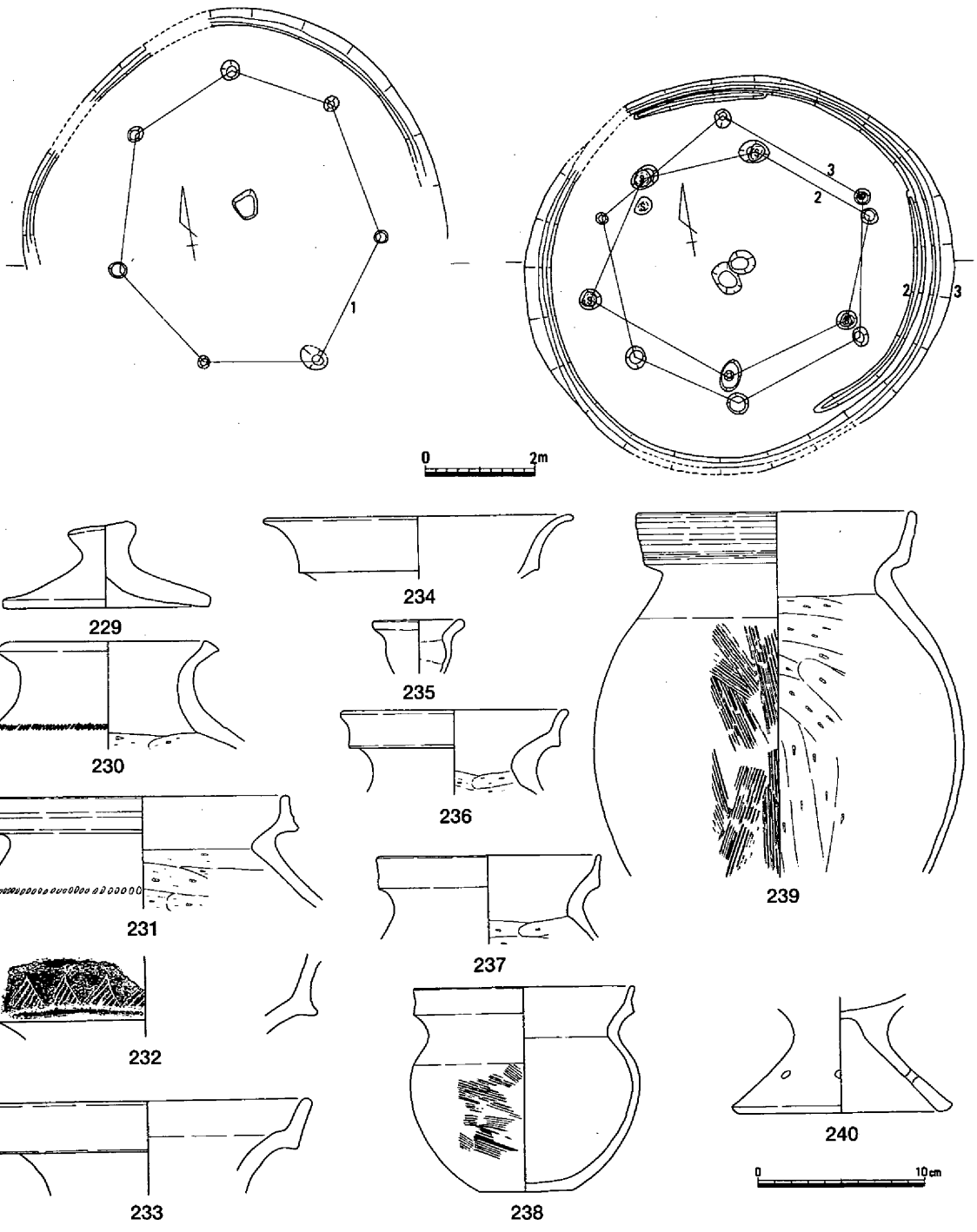
第134図　竪穴住居37（1／80）・出土遺物（1）（1／2）

竪穴住居37（第134・135図、図版15・32・38）

２区北西部にある中型の円形住居である。竪穴住居33の南東、竪穴住居28の北に位置する。８軒が重複していると考えられる。壁体溝は３条、柱は７本から６本に少なくなる。中央穴は２か所しか確認できなかった。扁平な河原石は、いずれも廃棄された古い柱穴の中に放り込まれていた。火事にあったため、床面が赤色に変色していたり、炭の層が何面も重なっていたりした。

遺物としては、土玉、ミニチュア土器、鉄器片が出土している。

土器から弥生時代後期後葉に属する。



第135図　竪穴住居37変遷図（1／120）・出土遺物（2）（1／4）

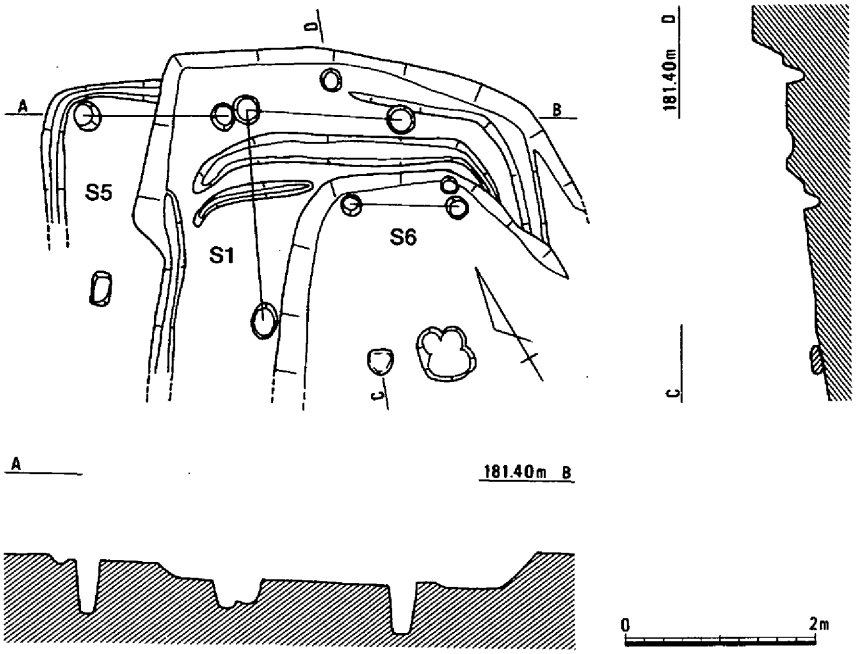
(2) 段状遺構

段状遺構１（第136・137図、図版17）

１区の南西端で検出した方形の遺構である。壁体溝が３条認められる。柱穴は３か所だけ検出できた。竪穴住居でも、別に不自然ではない。

遺物としては、土器、石包丁が出土している。

土器から弥生時代後期初頭に属する。



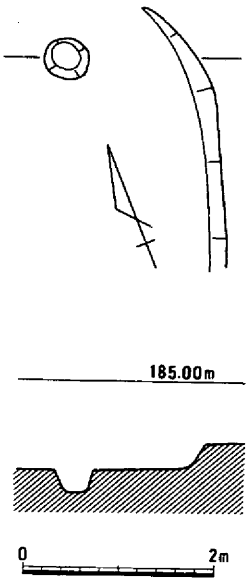
第136図　段状遺構１・５・６（1／80）

段状遺構２（第138図）

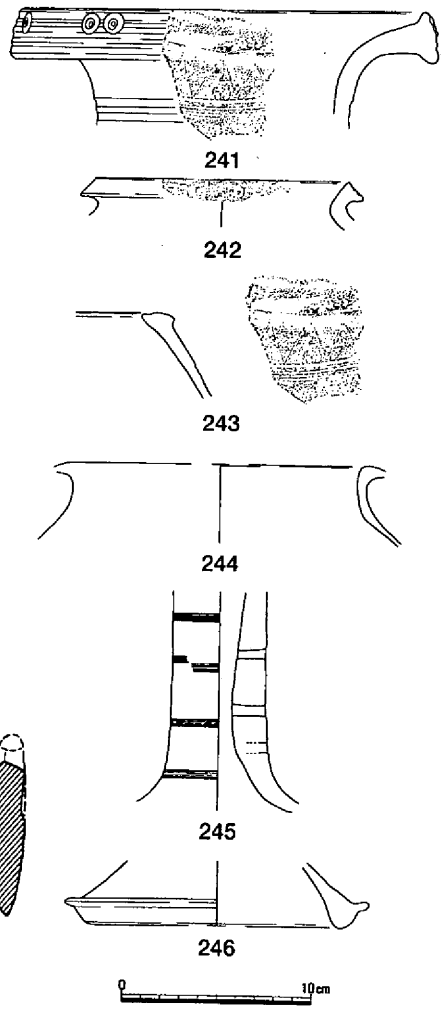
１区の北東部で検出した隅丸方形の段状遺構である。壁体溝は認められたが、実測図にはならないほど浅かった。柱穴は１か所検出できた。竪穴住居の残存状態が極めて悪いものと考えてもよい。

遺物としては、土器細片が出土している。

土器から弥生時代後期に属する。



第138図　段状遺構２（1／80）



第137図　段状遺構１出土遺物（1／4、1／2）

段状遺構３（第139図）

１区の北部中央で検出した隅丸長方形の段状遺構である。長さ２ｍ弱で、幅40cmを測る。土壙の底部かもしれない。

遺物としては土器細片が出土している。

土器から弥生時代後期に属する。

段状遺構４（第140図）

１区の北部東部で検出した隅丸長方形の段状遺構である。長さ１ｍ強で、幅35cmを測る。柱穴を２か所検出した。

遺物としては土器細片が出土している。口縁端部に凹線を持つ甕である。

土器から弥生時代後期に属する。

段状遺構５（第78図、図版17）

１区の南部西部で検出した方形段状遺構である。段状遺構１に切られている。壁体溝と２か所の柱穴を検出している。

遺物としては土器細片が出土している。

切り合いから弥生時代中期に属する。

段状遺構６（第78図）

１区の南部西部で検出した方形段状遺構である。段状遺構１を切っている。２か所の柱穴を検出している。

遺物としては土器細片が出土している。

切り合いから弥生時代後期と考えたい。

段状遺構７（第141図）

１区の南部東部で検出した弧形段状遺構である。竪穴住居の範疇に入れてもよいが、床面の大半が失われているので段状遺構にした。壁体溝と２か所の柱穴を検出した。

遺物としては土器細片が出土している。

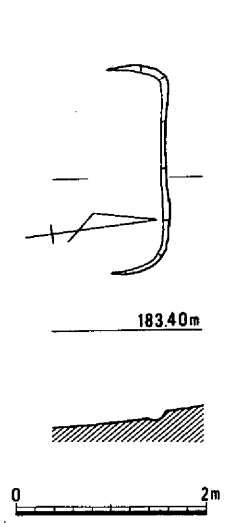
土器から弥生時代後期と考えたい。

段状遺構８（第142図）

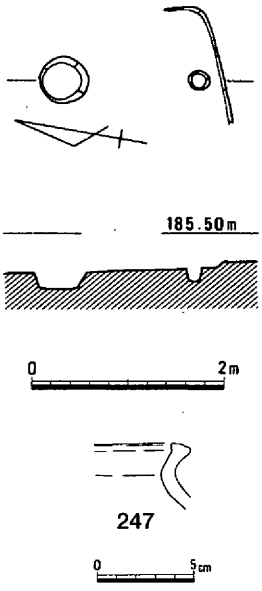
１区の南部中央部で検出した長方形段状遺構である。壁体溝と１か所の柱穴を検出している。

遺物としては甕の細片が出土している。

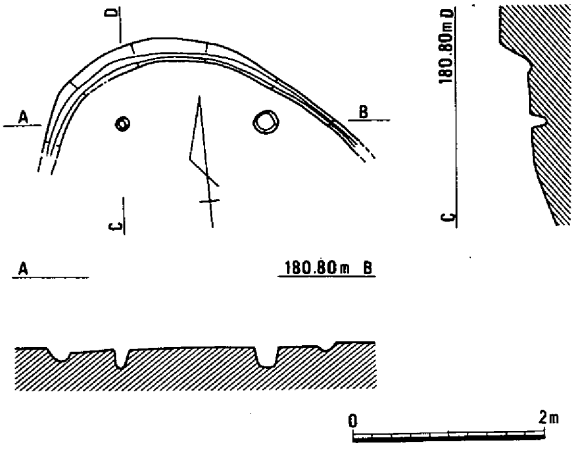
甕から弥生時代後期と考えたい。



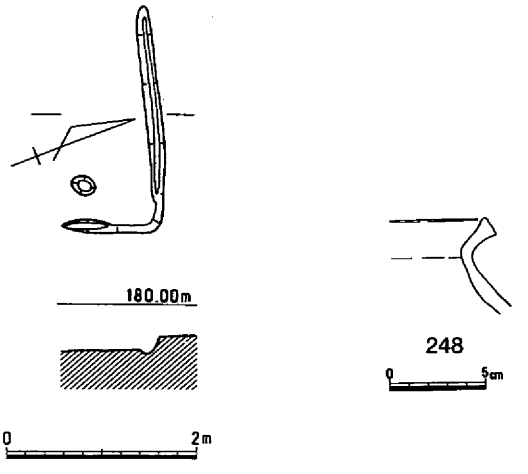
第139図　段状遺構３（1／80）



第140図　段状遺構４（1／80）・出土遺物（1／4）



第141図　段状遺構７（1／80）



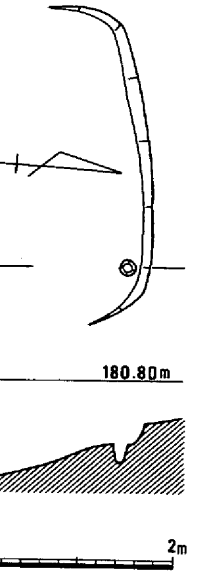
第142図　段状遺構８（1／80）・出土遺物（1／4）

段状遺構９（第143図）

１区の南部東部で検出した長方形段状遺構である。浅い壁体溝と１か所の柱穴を検出している。

遺物としては甕、高杯の細片が出土している。

土器より弥生時代後期前葉から中葉と考えたい。



段状遺構10（第144図）

２区の南部東部で検出した弧形段状遺構である。壁体溝と１か所の火所を検出している。

遺物としては高杯片が出土している。

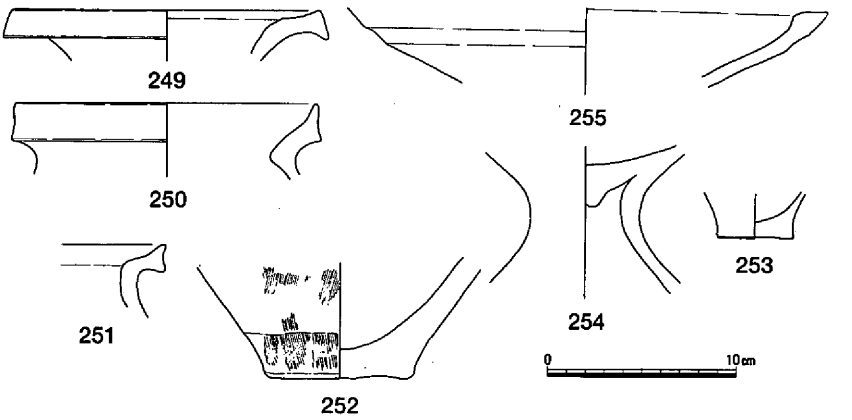
土器より弥生時代後期前葉と考えたい。

段状遺構11（第145図、図版17）

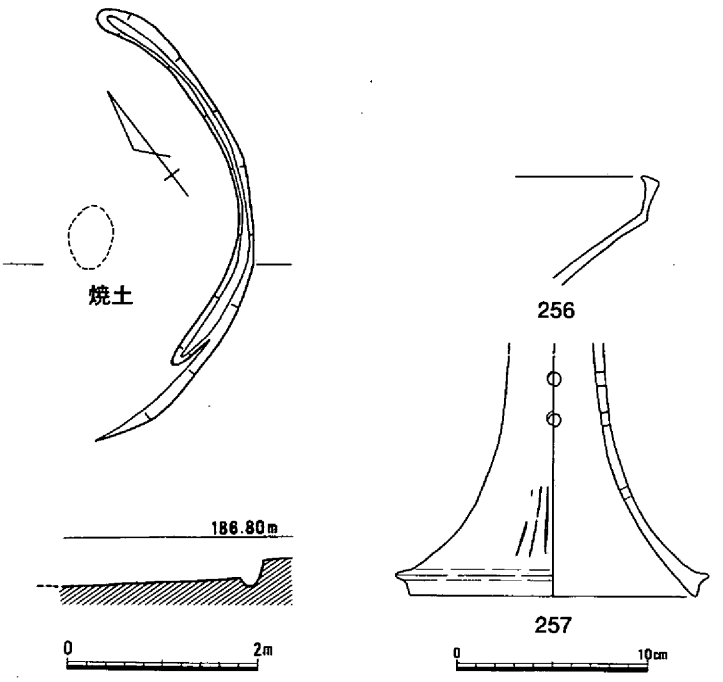
１区の南部東部で検出した長方形段状遺構である。３か所の柱穴と１か所の火所を検出している。

遺物としては土器の細片が出土している。

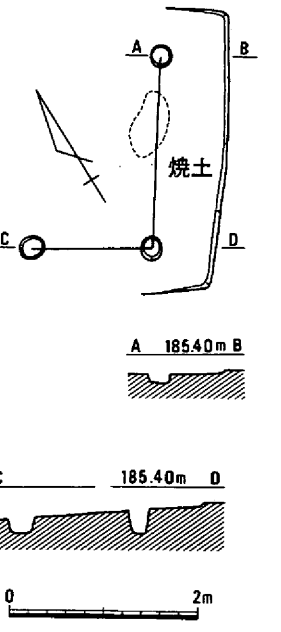
土器より弥生時代後期と考えたい。



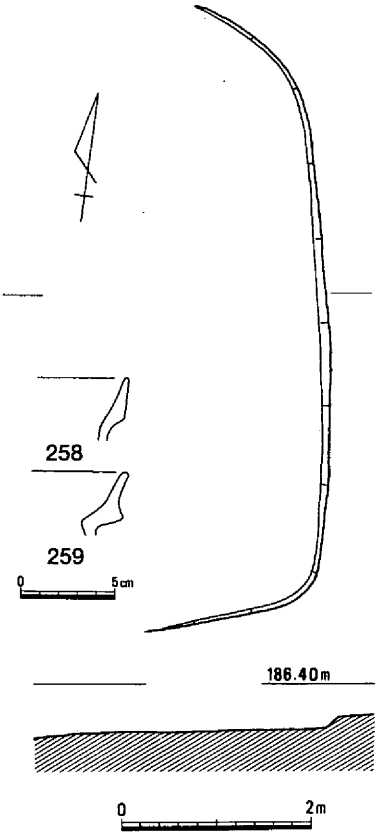
第143図　段状遺構９（1／80）・出土遺物（1／4）



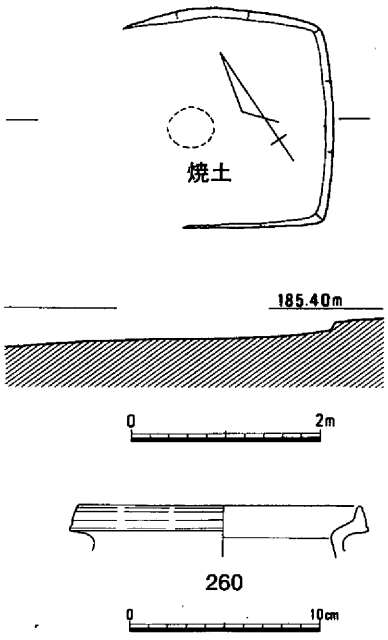
第144図　段状遺構10（1／80）・出土遺物（1／4）



第145図　段状遺構11（1／80）



第146図　段状遺構12（1／80）・出土遺物（1／4）



第147図　段状遺構13（1／80）・出土遺物（1／4）

段状遺構12（第146図）

２区の南部東部で検出した長方形段状遺構である。浅い段を検出している。

遺物としては甕の細片が出土している。

土器より弥生時代後期中葉と考えたい。

段状遺構13（第147図）

２区の中央部南部で検出した長方形段状遺構である。浅い段と火所を検出している。火災にあっている。

遺物としては甕の細片が出土している。

土器より弥生時代後期と考えたい。

段状遺構14（第148図）

２区の中央部で検出した弧形段状遺構である。柱穴３か所と２か所の火所を検出している。

遺物としては土器細片が出土している。

土器より弥生時代後期と考えたい。

段状遺構15（第149図）

２区の北端部で検出した弧形段状遺構である。壁体溝と柱穴１か所を検出している。

遺物としては土器細片が出土している。

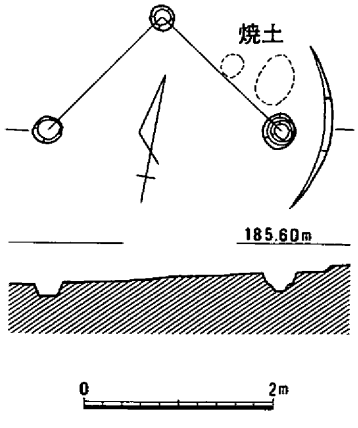
土器より弥生時代後期と考えたい。

段状遺構16（第150図）

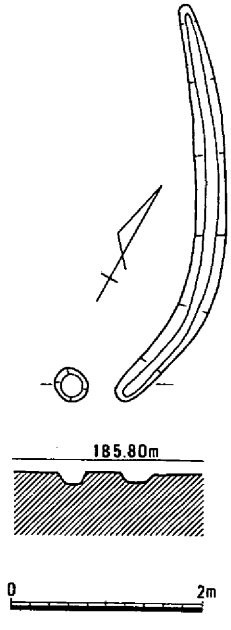
２区の南部東部で検出した弧形段状遺構である。竪穴住居の範疇に入れてもよいが、床面の大半が失われているため段状遺構にした。床面中央に火所を検出した。

遺物としては、甕、鉢片と石包丁が出土している。

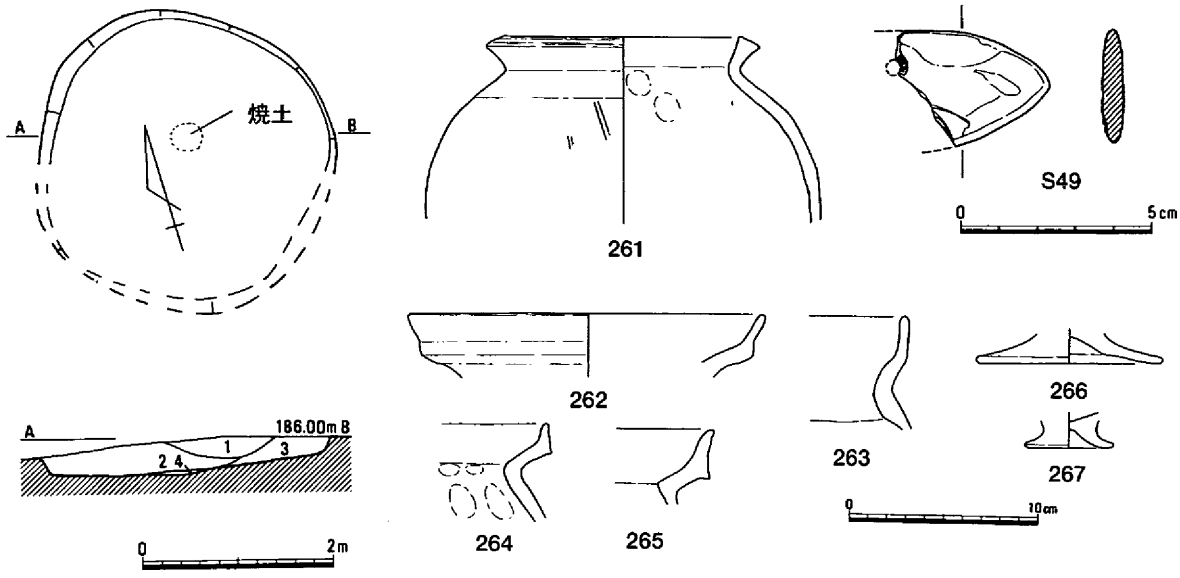
土器から弥生時代後期中葉と考えたい。



第148図　段状遺構14（1／80）



第149図　段状遺構15（1／80）



第150図　段状遺構16（1／80）・出土遺物（1／4、1／2）

(3) 柱穴群

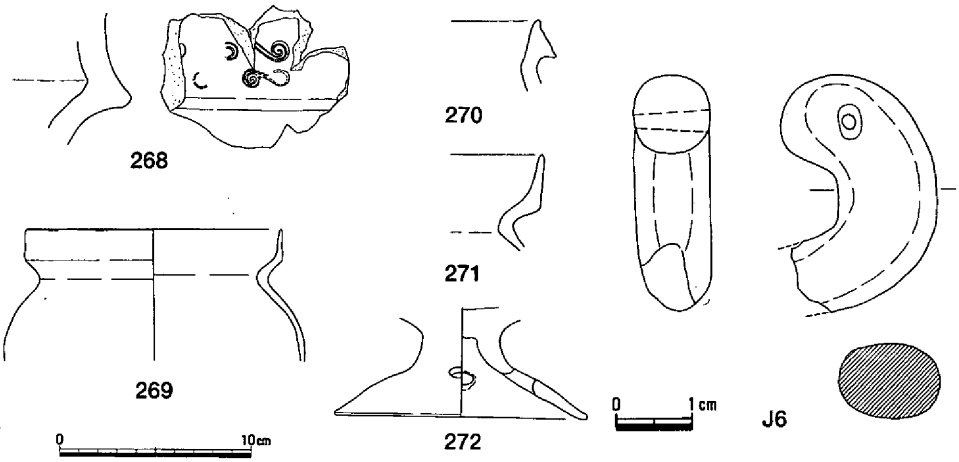
柱穴群１

（第151図、図版38）

１区の中央部で検出した柱穴群である。柱穴約100個が密集して検出できた。

遺物としては、弥生土器のほかに滑石製の勾玉が出土している。

土器片より弥生時代後期と考えたい。



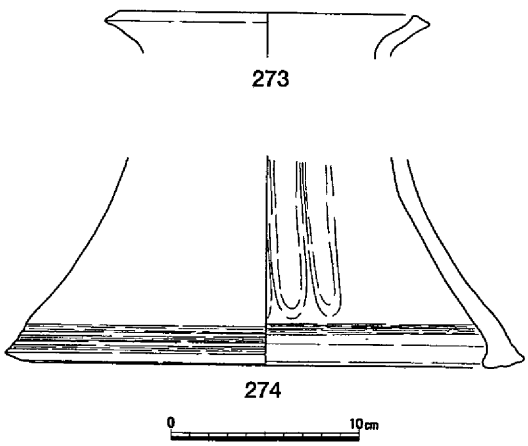
第151図　柱穴群１出土遺物（1／4、1／2）

柱穴群２（第152図）

１区の西部で検出した柱穴群である。柱穴数個がまばらに30㎡の範囲で検出できた。

遺物としては、弥生土器の器台が出土している。

土器より弥生時代中期と考えたい。



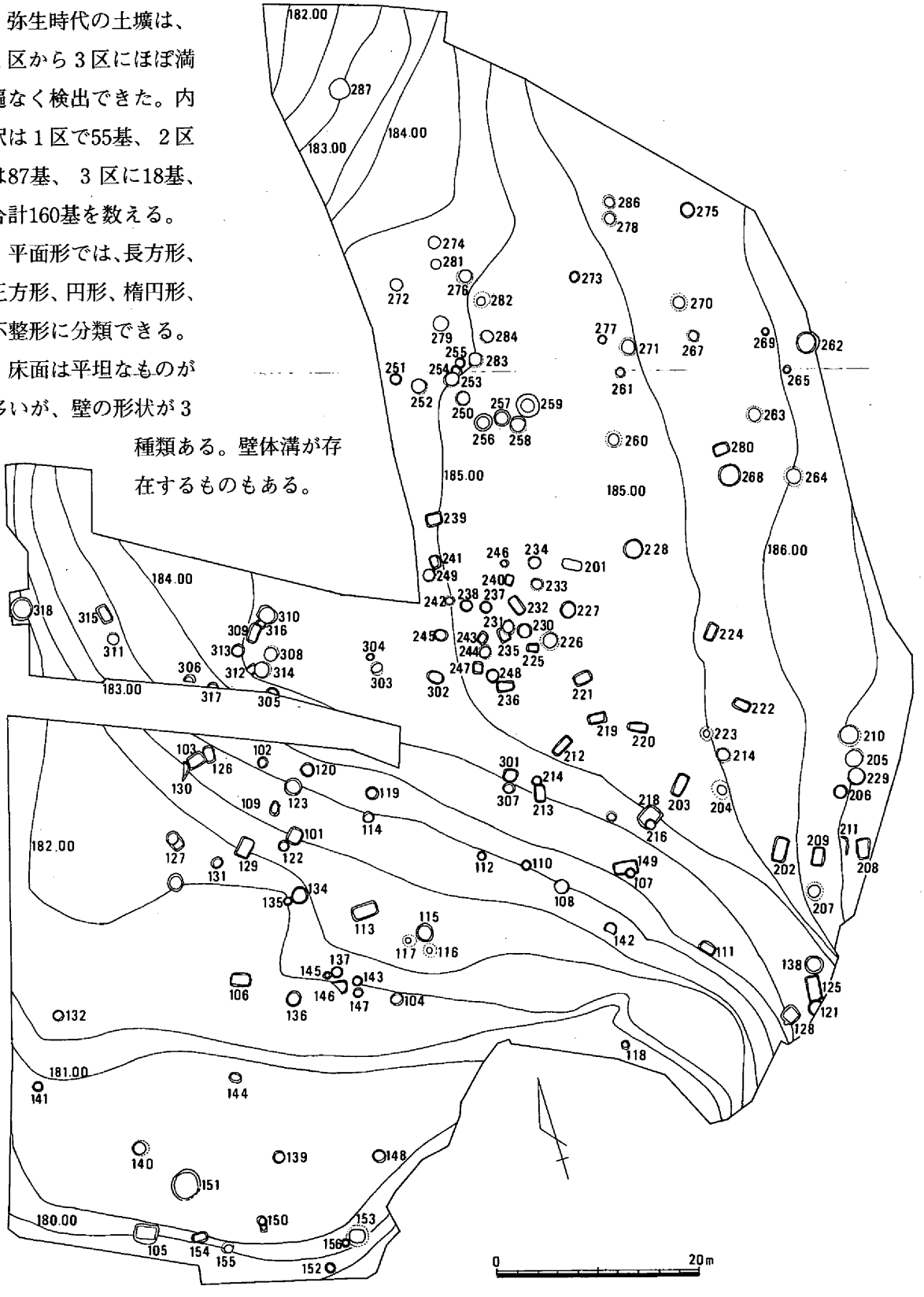
第152図　柱穴群２出土遺物（1／4）

(4) 土　壙

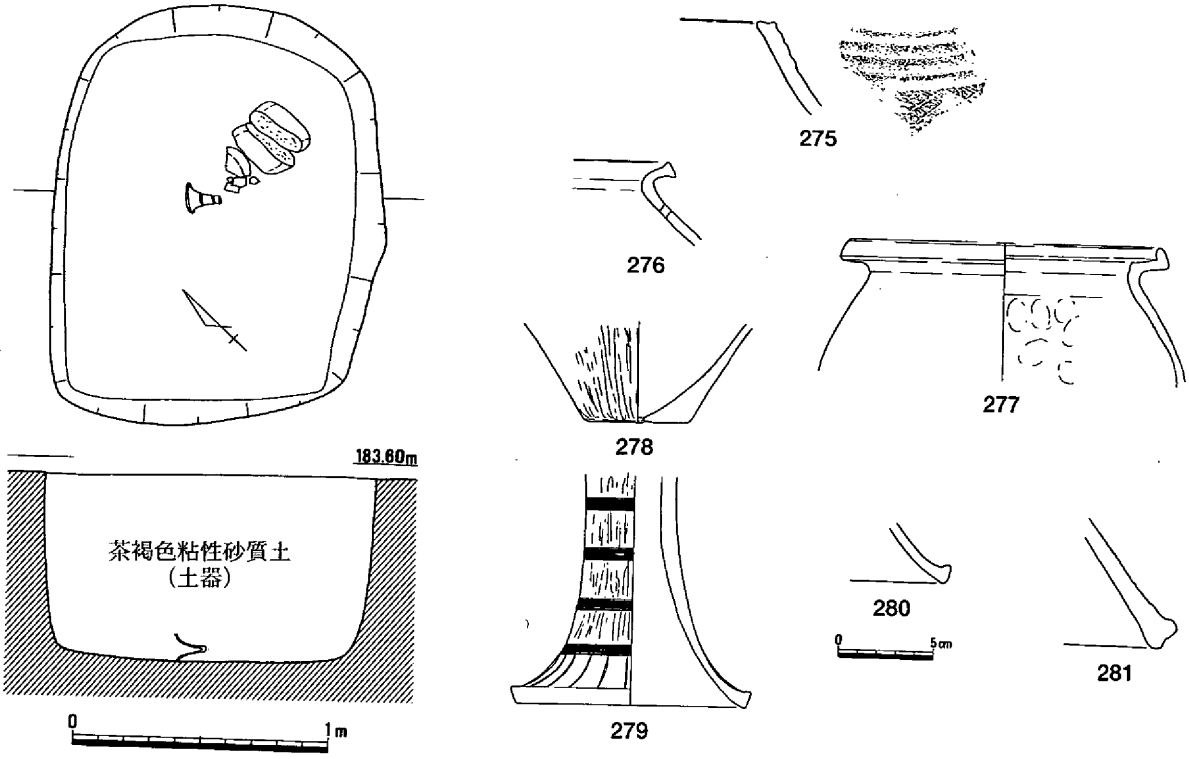
弥生時代の土壙は、１区から３区にほぼ満遍なく検出できた。内訳は１区で55基、２区は87基、３区に18基、合計160基を数える。

平面形では、長方形、正方形、円形、楕円形、不整形に分類できる。

床面は平坦なものが多いが、壁の形状が３種類ある。壁体溝が存在するものもある。



第153図　弥生時代土壙配置図（1／600）



第154図　土壙101（1／30）・出土遺物（1／4）

土壙101（第154図）

１区の中央北部で検出した。平面形は長方形、壁は垂直に立ち上がり、床面は平坦である。茶褐色粘性砂質土で埋まっており、土器は床面に密着して出土したものもある。図示した河原石は、おそらく竪穴住居で調理用に使用していた物を廃棄したものと思われる。被熱して割れている。

土器は、無頸壺、甕、高杯がある。

土器から見て、この土壙の廃棄された時期は弥生時代中期末であろう。

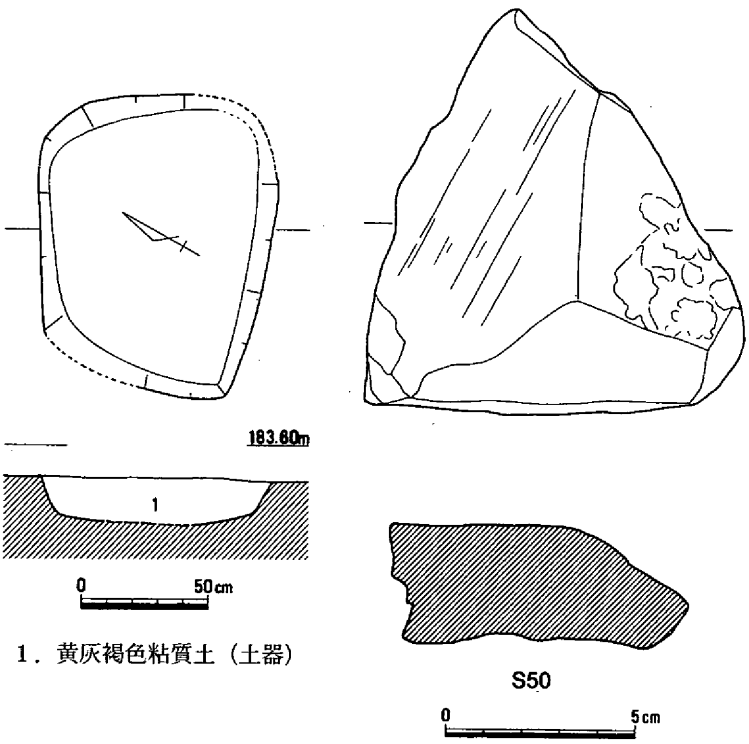
土壙102（第155図）

１区の中央北部で検出した。平面形は長方形、壁は外開きに、床面は平坦である。竪穴住居９の床面を剥いだところで検出できた。

遺物は、流紋岩製の砥石と土器の細片で、弥生時代中期の時期に入れたい。

土壙103（第156図）

竪穴住居９の西で、３基の土壙が切り合って検出できたもののうちで、中間に存在した。両方の土壙に切られていることから一番古



第155図　土壙102（1／30）・出土遺物（1／2）

いことがわかる。平面形は長方形、壁は外開きに立ち上がり、床面は平坦である。

遺物は、土器の細片しか出ていない。

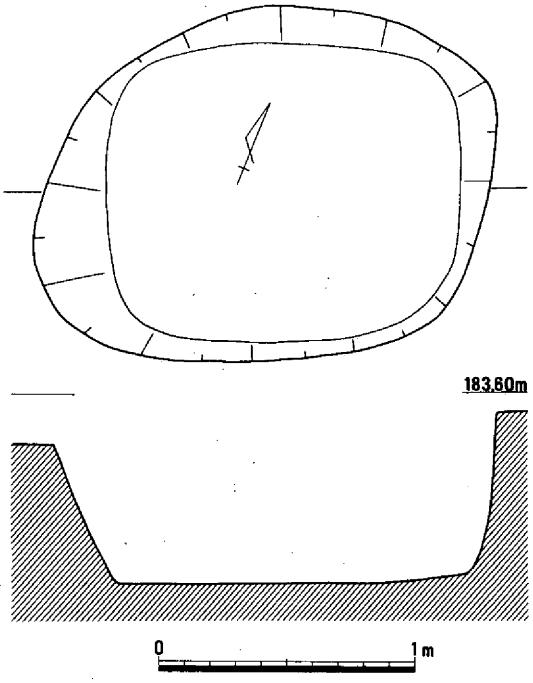
時期は弥生時代中期に入れておきたい。

土壙104（第157図）

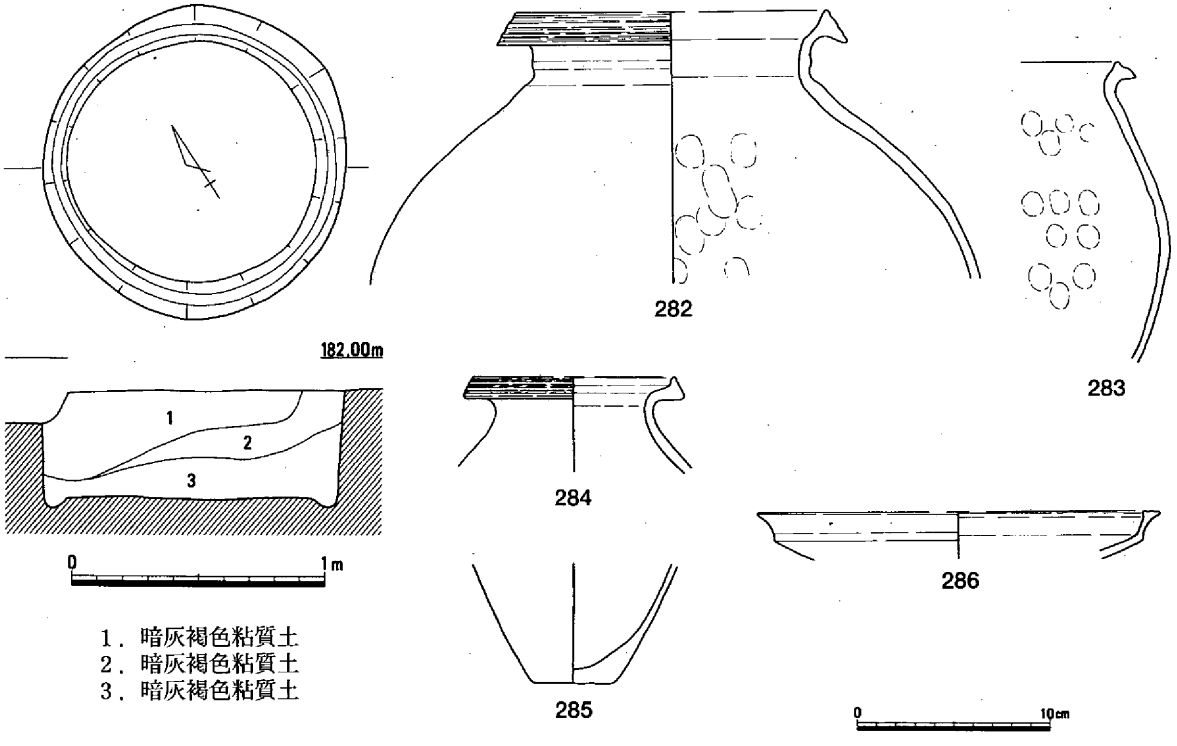
１区中央部で検出した。平面形は円形、壁は垂直に立ち上がり、床は平坦である。そして壁直下に周溝を持つ。床面を乾かすための溝である。住居の壁体溝と同じ機能と考えられる。貯蔵施設として最適である。

遺物は、壺、甕、高杯の破片が出土している。壺、甕の口縁端面には凹線文、体部内面には指頭圧痕がそれぞれ施されている。

土器の型式から、時期は弥生時代中期末である。



第156図　土壙103（1／30）



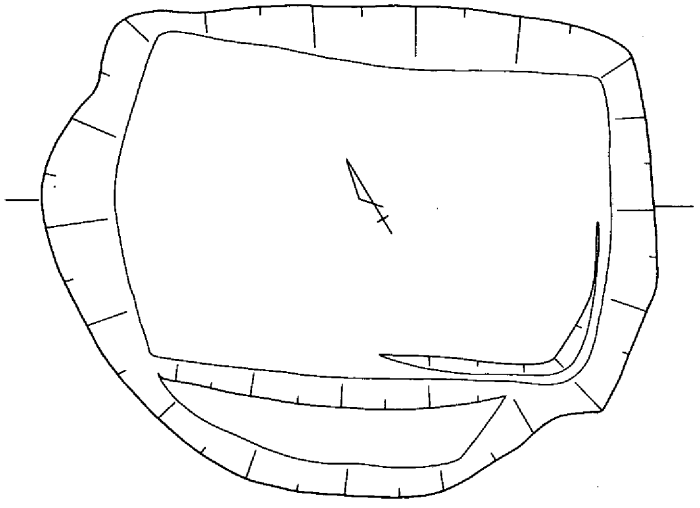
第157図　土壙104（1／30）・出土遺物（1／4）

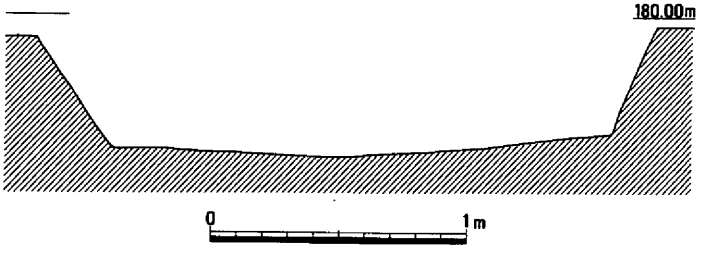
土壙105（第158図、図版41）

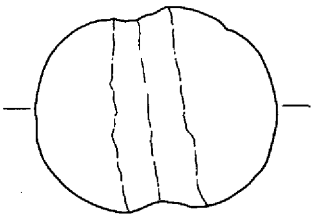
１区南部で検出した。段状遺構が切り合って検出された一画の一番低い位置にある。平面形は長方形、壁は外開きに立ち上がり、床は平坦である。そして南東隅には壁下に周溝が残存する。床を乾かすための溝である。住居の壁体溝と同じ機能と考えられる。貯蔵施設として最適である。

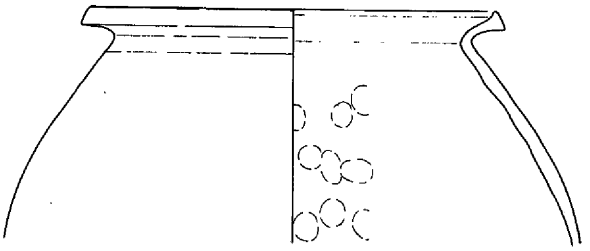
遺物は、甕の破片が出土している。甕の口縁端面に凹線文はない。体部内面には指頭圧痕が施されている。ほかに石錘と石斧も出土している。

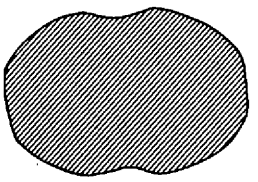
土器の型式から、時期は弥生時代中期末である。

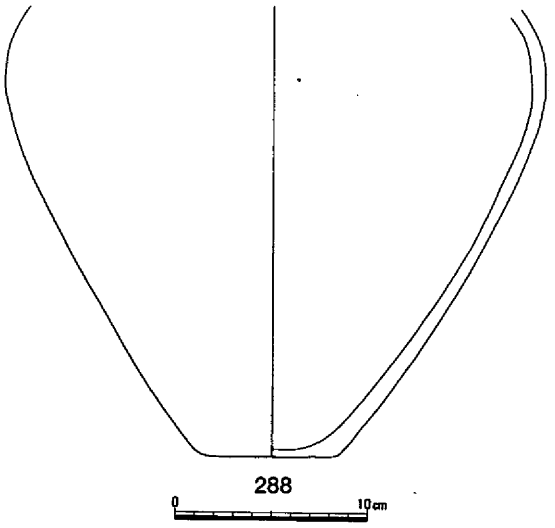


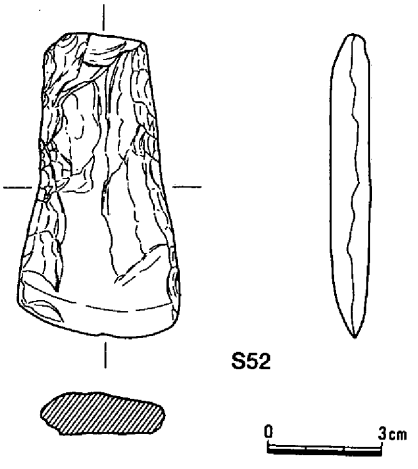












第158図　土壙105（1／30）・出土遺物（1／4、1／2）

土壙106（第159図）

１区北西部で検出した。平面形は長方形、壁は一度外開きになり、後は垂直に立ち上がる。床面は平坦である。

遺物は、壺の口縁端部破片が出土している。土器の型式から、時期は弥生時代後期である。

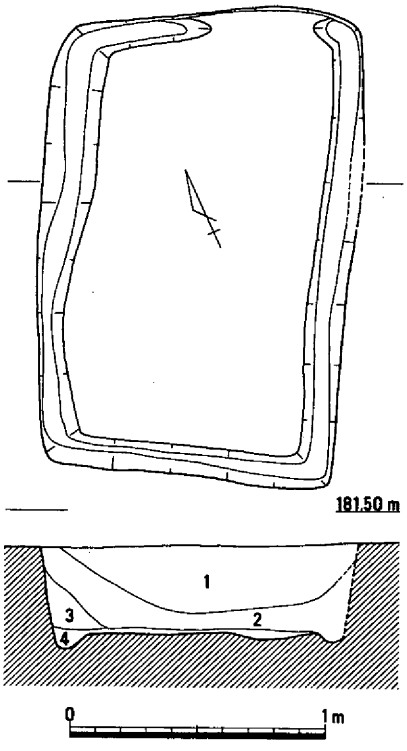
土壙107

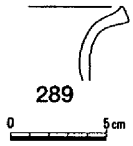
（第160図、図版19）

１区北東部で検出した。平面形は円形、壁は垂直に立ち上がり、一部が袋状を呈する。床面は平坦である。

遺物は、第２層から甕、無頸壺が出土している。甕は二重口縁になっている。

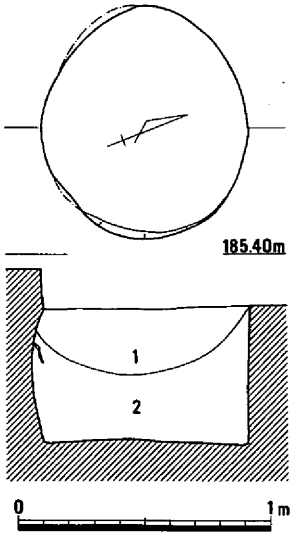
土器の型式から、時期は弥生時代後期である。



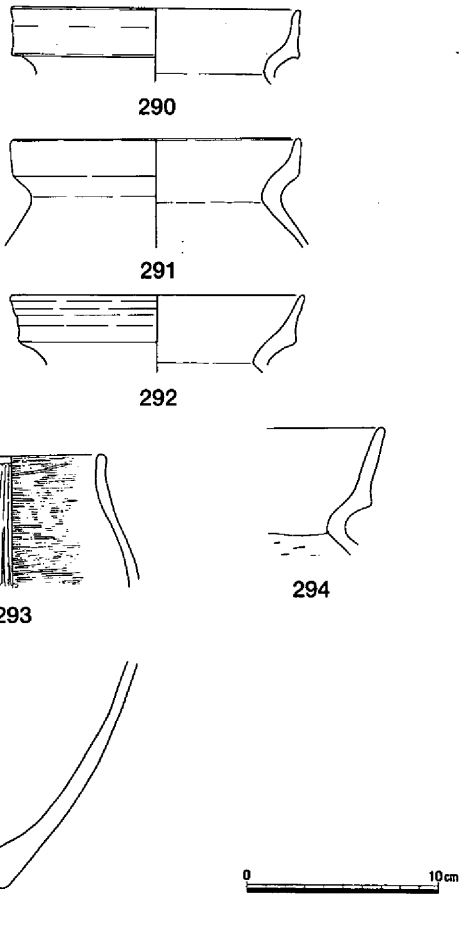


1．灰黄褐色粘性砂質土
2．黄褐色粘性砂質土
3．淡黄橙色粘質土
4．灰褐色粘性砂質土

第159図　土壙106（1／30）・出土遺物（1／4）



1．黒褐色粘質土（土器）
2．暗灰黄色粘質土（土器）



第160図　土壙107（1／30）・出土遺物（1／4）

土壙108（第161図）

１区北東部で検出した。平面形は円形、壁は内傾し、袋状を呈する。床面は平坦である。部分的に浅い周溝が認められる。

遺物は、甕の細片が第３層から出土している。内面はヘラケズリしている。

土器の型式から、時期は弥生時代後期である。

土壙109（第162図）

竪穴住居14の下層で検出した。平面形は長方形、壁は垂直に立ち上がる。床面は平坦である。周溝は一部分が欠けている。

遺物は、土器細片が出土している。

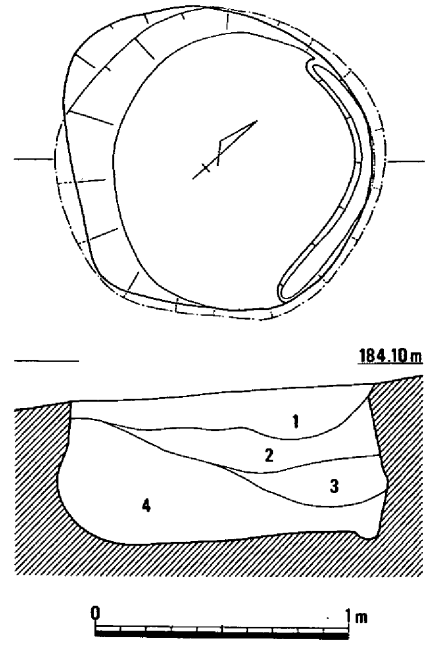
土器から時期は弥生時代後期である。

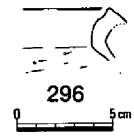
土壙110（第163図、図版22）

竪穴住居８の南東５ｍで検出した。平面形は円形、壁には手斧の削痕が明瞭に認められる。床面は平坦である。２か所に浅い柱穴状の窪みが認められる。

遺物は、高杯片が出土している。

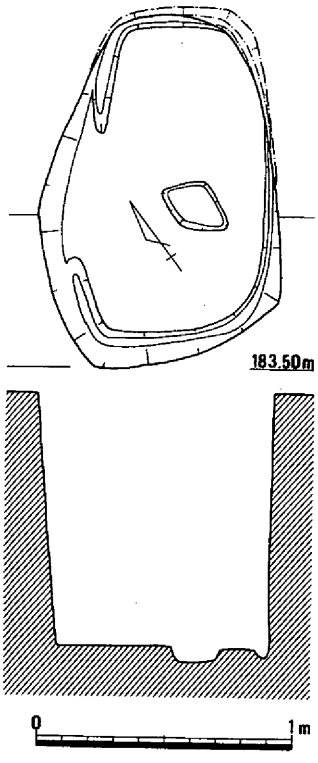
土器から弥生時代後期である。



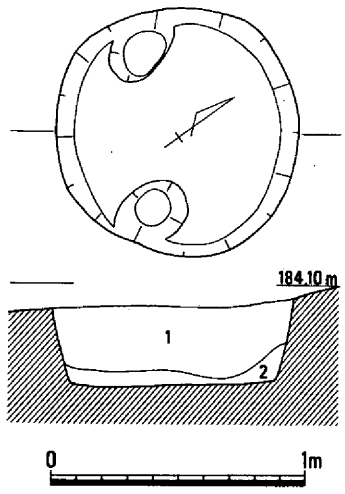


1．明茶黄色粘性砂質土
2．黒褐色粘性砂質土
3．明灰茶黄色粘性砂質土（土器）
4．黒褐色粘性砂質土

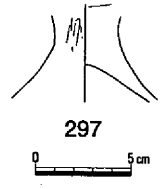
第161図　土壙108（1／30）・出土遺物（1／4）



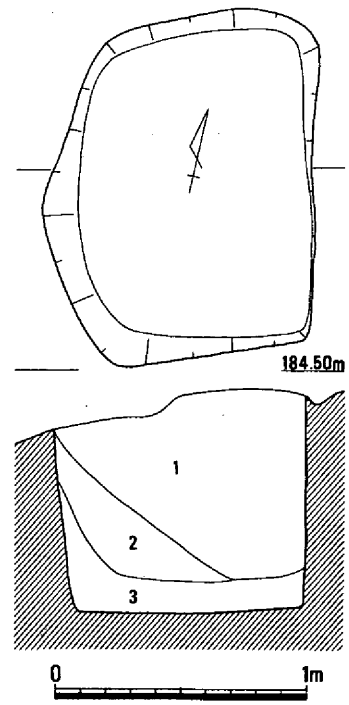
第162図　土壙109(1／30)



1．灰黄褐色粘性砂土（土器）
2．黒褐色粘性砂質土

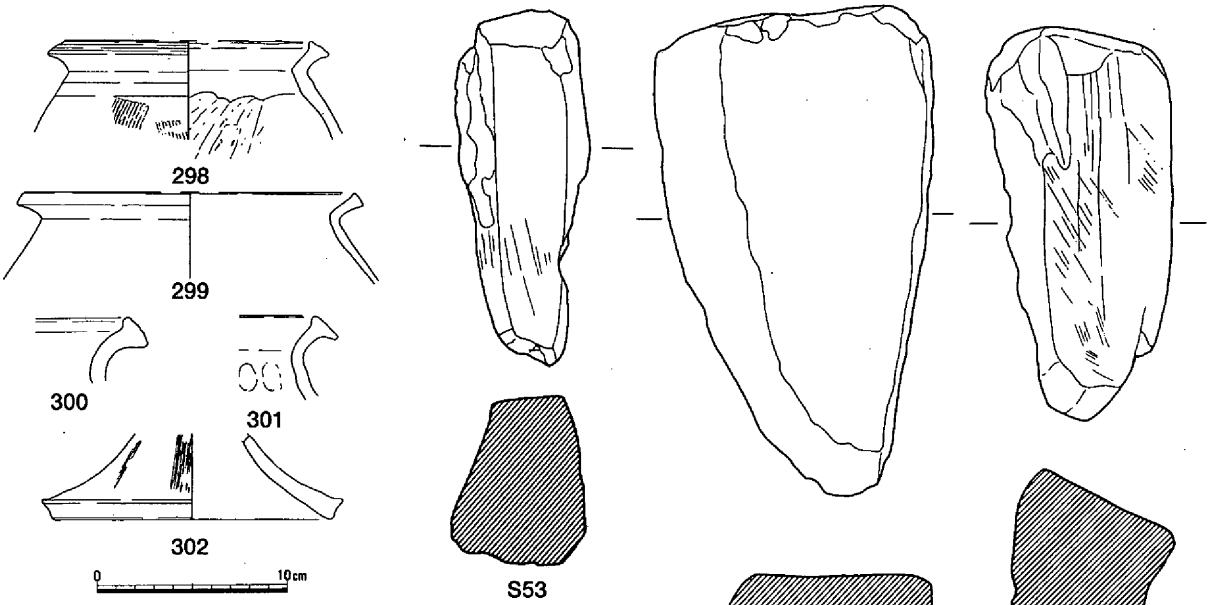


第163図　土壙110（1／30）・出土遺物（1／4）



1．淡黄橙色粘質土
2．黒褐色粘質土
3．灰褐色粘質土

第164図　土壙111(1／30)



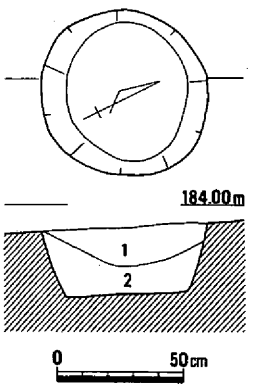
第165図　土壙111出土遺物（1／4、1／2）

土壙111（第164・165図）

竪穴住居７の下層で検出した。平面形は長方形、壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面は平坦である。

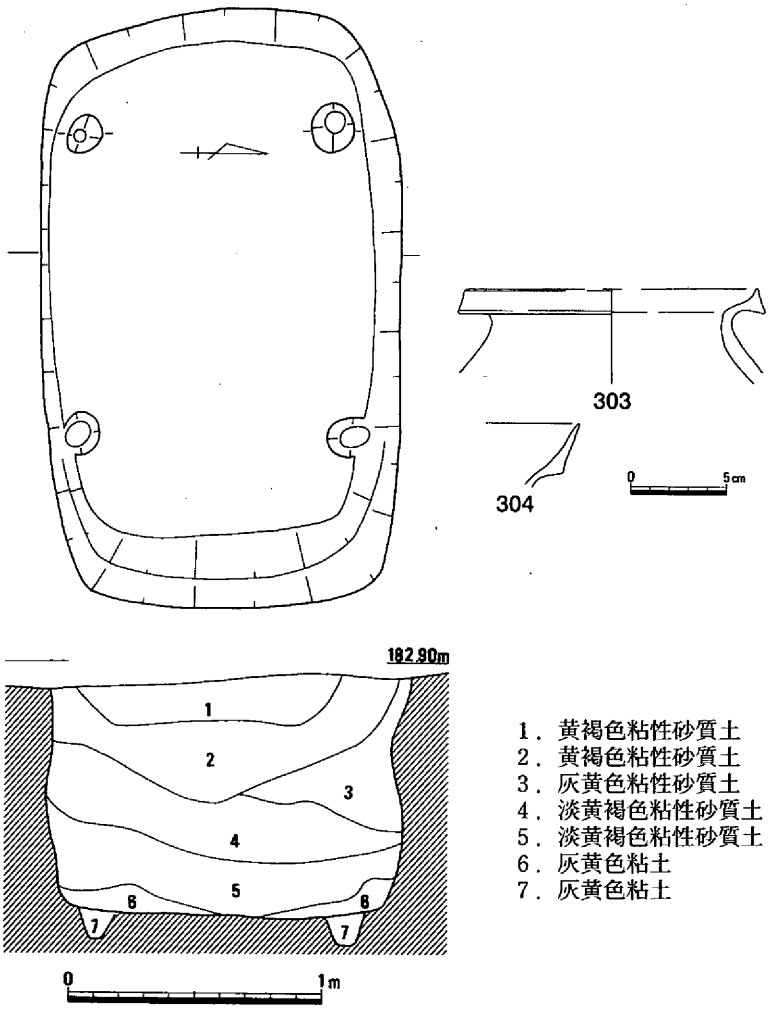
遺物は、壺、甕、高杯の破片が出土している。ほかに砥石が存在する。

土器から弥生時代後期になるであろう。



1．灰黄褐色粘性砂質土
2．暗褐色粘性砂質土

第166図　土壙112（1／30）



1．黄褐色粘性砂質土
2．黄褐色粘性砂質土
3．灰黄色粘性砂質土
4．淡黄褐色粘性砂質土
5．淡黄褐色粘性砂質土
6．灰黄色粘土
7．灰黄色粘土

第167図　土壙113（1／30）・出土遺物（1／4）

土壙112（第166図）

竪穴住居８の南２ｍで検出した。平面形は円形、壁は外傾する。床面は平坦である。

遺物は、土器細片が出ている。

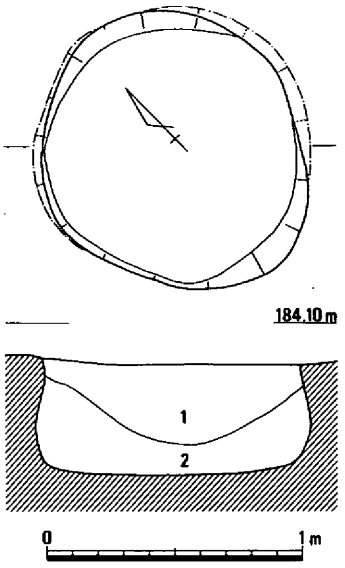
土器から弥生時代後期である。

土壙113（第167図）

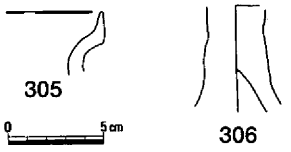
柱穴群１の範囲内で検出した。平面形は長方形、壁は垂直に立ち上がる。床面に４か所の柱穴を確認した。

遺物は、甕の細片が出ている。

土器から弥生時代後期である。



1．茶褐色粘質土（土器）
2．黄褐色粘質土



第168図　土壙114（1／30）・出土遺物（1／4）

土壙114（第168図）

１区北部で検出した。平面形は円形、断面形は袋状を呈する。

上層から土器片が出土している。

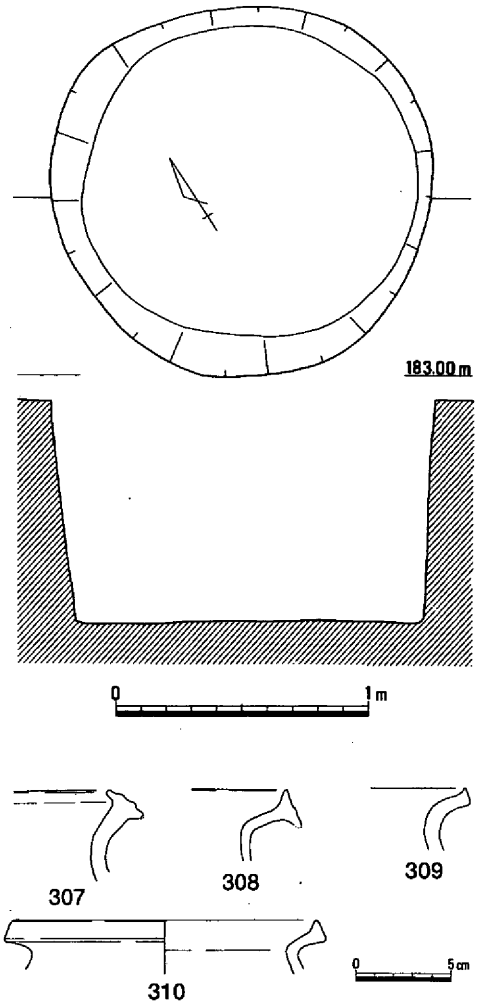
土器から弥生時代後期である。

土壙115（第169図）

柱穴群１の範囲内で検出した。平面形は円形、壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面は平坦である。

遺物は、壺、甕の破片が出ている。

土器から弥生時代後期である。



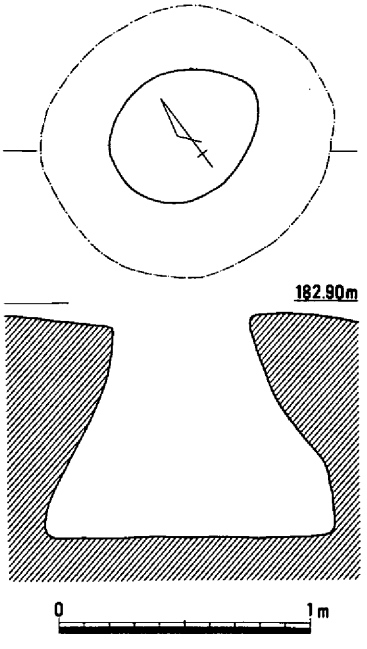
第169図　土壙115（1／30）・出土遺物（1／4）

土壙116（第170図、図版24）

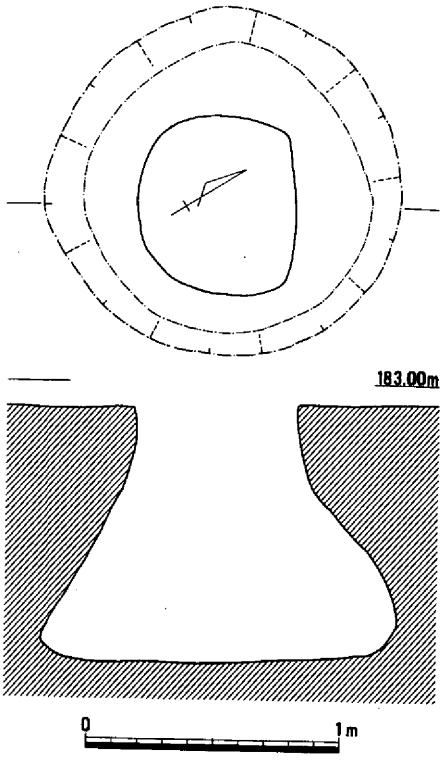
柱穴群１の範囲内で検出した。平面形は楕円形、断面形は逆台形の典型的な袋状土壙である。

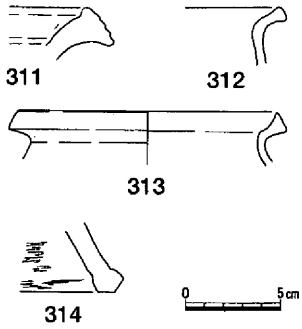
遺物は、壺、甕の破片が出ている。

土器から弥生時代後期である。

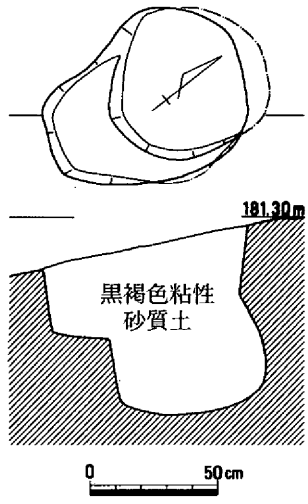


第170図　土壙116（1／30）





第171図　土壙117（1／30）・出土遺物（1／4）



第172図　土壙118（1／30）

土壙117（第171図）

柱穴群１の範囲内で検出した。平面形は円形、断面形は逆台形の典型的な袋状土壙である。

遺物は、壺、甕、高杯の破片が出ている。

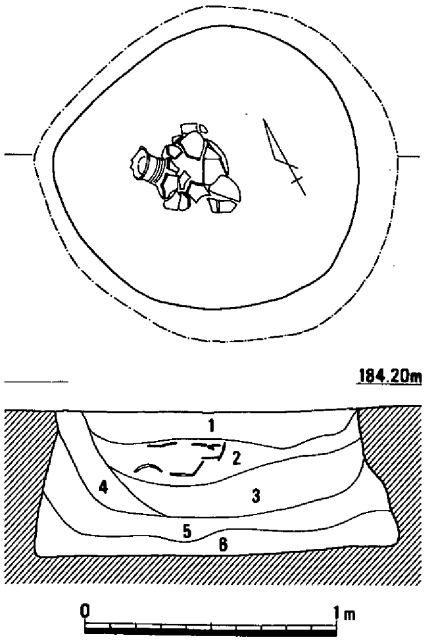
土器から弥生時代後期である。

土壙118（第172図）

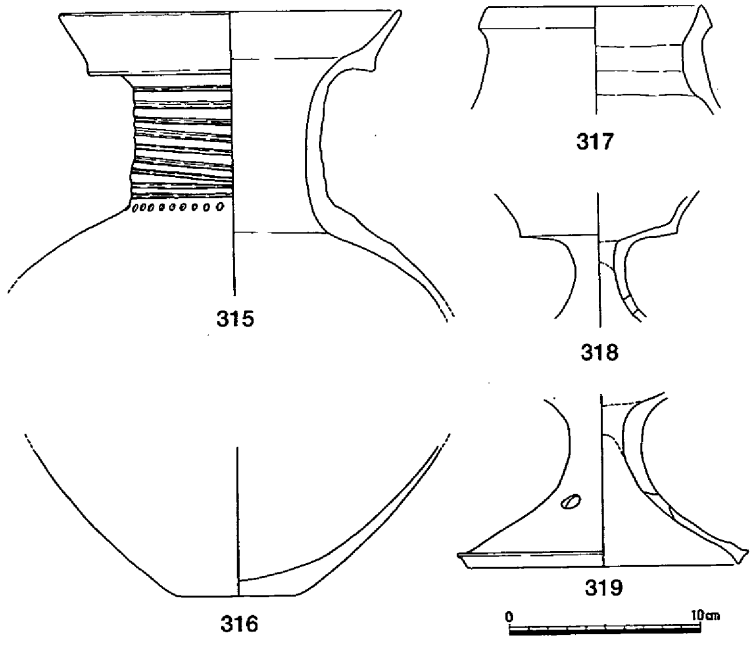
１区東部の南部で検出した。平面形が円形の袋状土壙である。２基の土壙が重複しているようである。

遺物は、土器の細片が出ている。

土器から弥生時代後期である。



1．黄褐色粘性砂質土
2．灰黄色粘性砂質土
3．黄褐色粘性砂質土
4．灰黄色粘質土
5．灰褐色粘質土（土器）
6．黄灰褐色粘土



第173図　土壙119（1／30）・出土遺物（1／4）

土壙119

（第173図、図版32）

土壙114の北で検出した平面形が円形の袋状土壙である。

遺物は、壺や高杯など第２層でまとまって出ている。

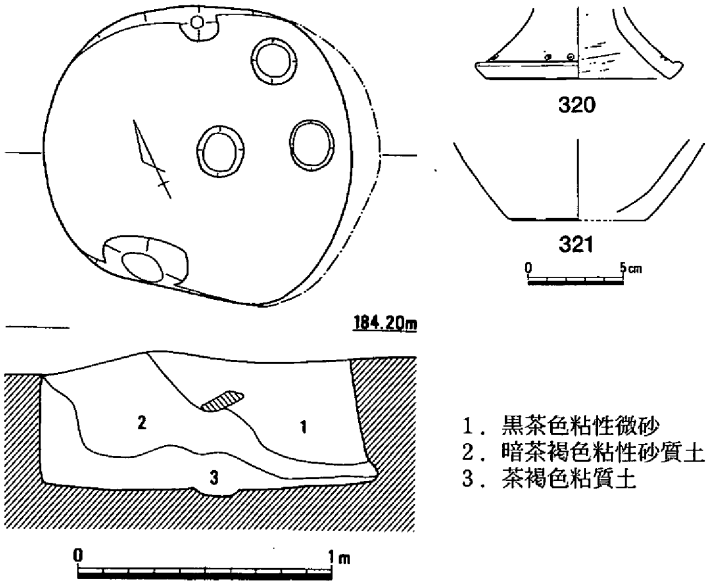
土器から弥生時代後期である。

土壙120（第174図）

竪穴住居９の東に接して検出した。平面形は円形、一部分が袋状である。床面に柱穴状の浅い穴が５か所に認められる。

遺物は、壺底部と高杯脚部の破片が出ている。

土器から弥生時代後期である。



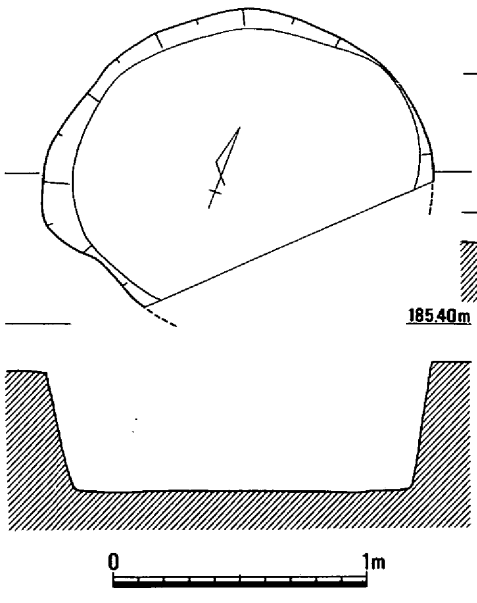
第174図　土壙120（1／30）・出土遺物（1／4）

土壙121（第175図）

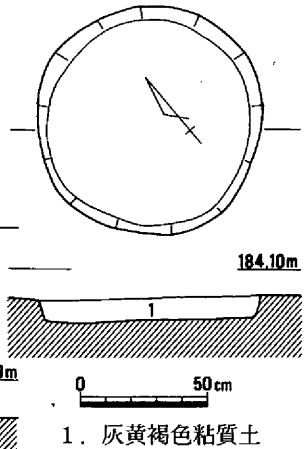
１区北部東端で検出した。平面形は円形だが、東側が調査範囲外のため、全貌は明らかでない。壁は外傾する。床面は平坦である。埋土は３層に分層できる。

遺物は、土器の細片が出ている。

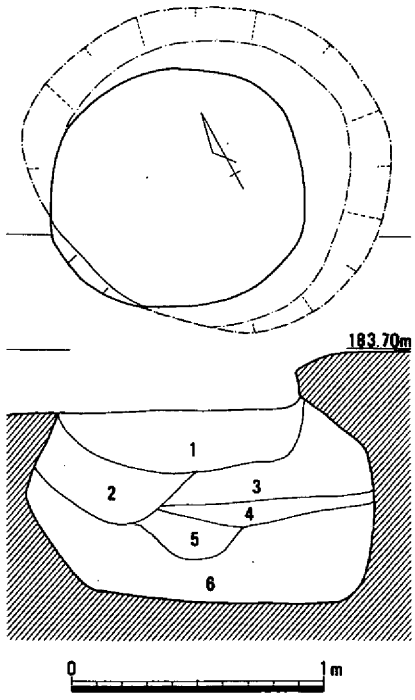
土器から弥生時代後期である。

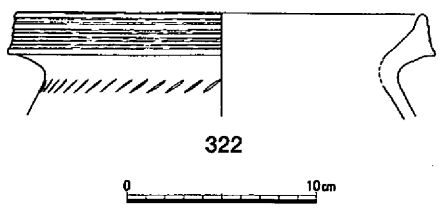


第175図　土壙121（1／30）



第176図　土壙122（1／30）





第177図　土壙123（1／30）・出土遺物（1／4）

土壙122（第176図）

竪穴住居14の東脇で検出した。平面形は円形である。壁は外傾して立ち上がる。床面は平坦である。全体の規模が浅くて小さい。

遺物は、土器の細片が出ている。

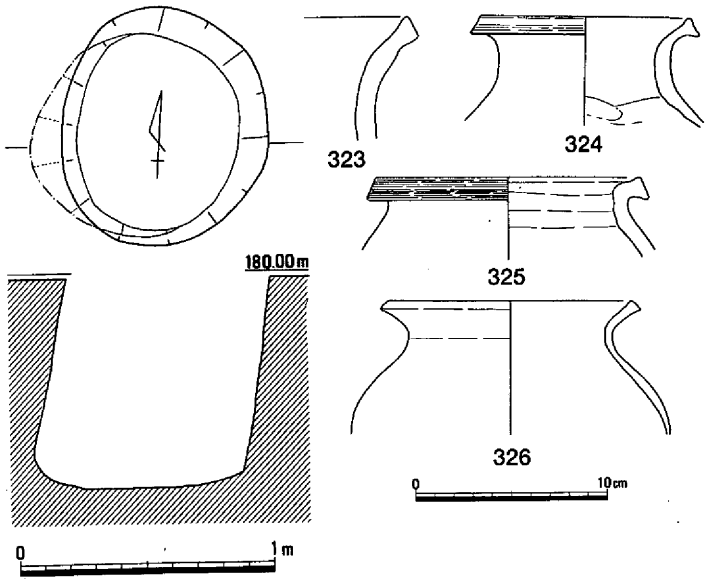
土器から弥生時代後期である。

土壙123（第177図）

竪穴住居９の下層東端で検出した。平面形は円形である。典型的な袋状土壙である。床面は平坦である。検出面からの深さは90cmを測る。

遺物は、壺の破片が出ている。口縁端外面には凹線文、頸部外面には刺突文を施している。

土器から弥生時代後期である。



第178図　土壙124（1／30）・出土遺物（1／4）

土壙124（第178図）

竪穴住居13の南の溝２の下層で検出した。平面形は円形である。一部袋状になっている。床面は平坦である。検出面からの深さは74cmを測る。

遺物は、壺の破片が出ている。頸部の長いものと短いものがある。口縁端外面には凹線文を施している。体部内面は頸部までヘラケズリしている。

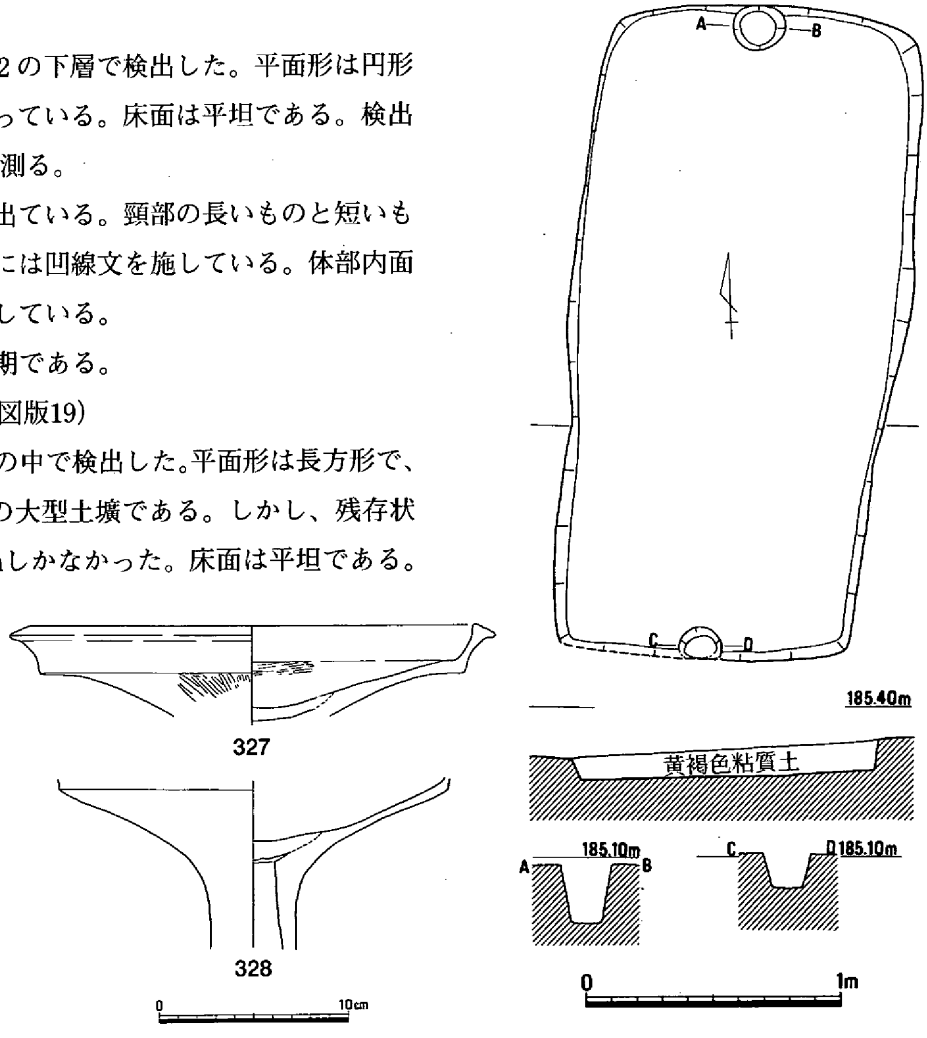
土器から弥生時代後期である。

土壙125（第179図、図版19）

１区北東端の土壙群の中で検出した。平面形は長方形で、長さ250cm、幅120cmの大型土壙である。しかし、残存状態が悪く、深さは12cmしかなかった。床面は平坦である。図示できないほど浅い周溝も認められた。最下層には灰色粘土が薄く堆積していた。

遺物は、高杯の破片が出ている。

高杯の形態から弥生時代後期初頭である。



第179図　土壙125（1／30）・出土遺物（1／4）

土壙126

（第180図、図版32）

竪穴住居９の西の土壙群の東で検出した。土壙103を切っている。平面形は隅丸長方形である。壁はもともと垂直であったと考える。

遺物は、壺底部と高杯脚部の破片が出ている。

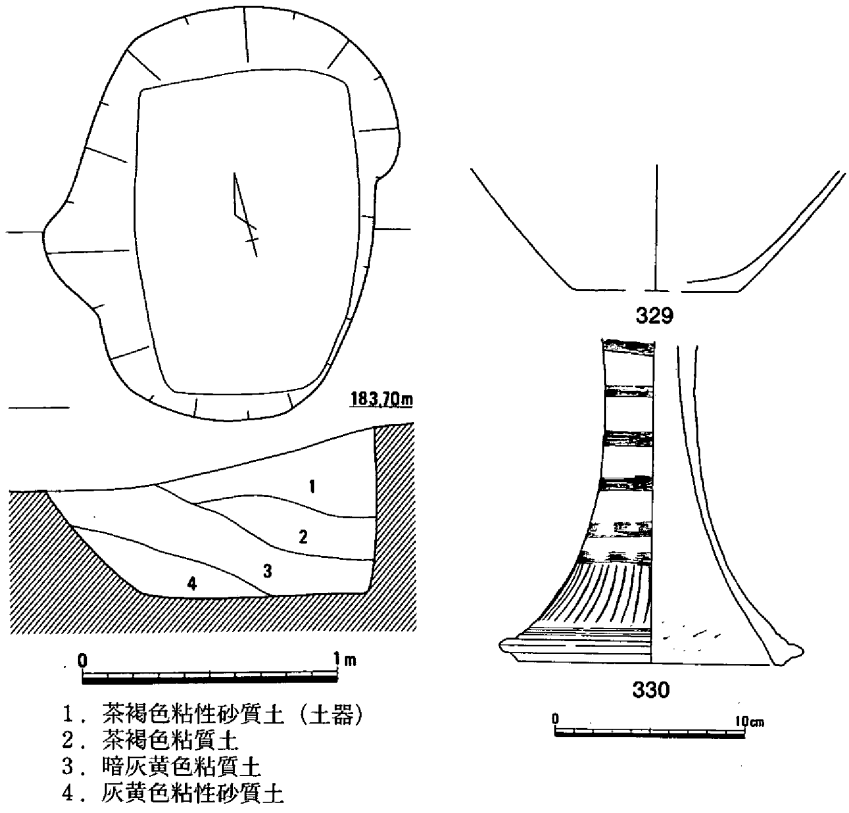
土器から弥生時代後期である。

土壙127（第181図）

竪穴住居５の東で検出した。２基の土壙が重複している。平面形は隅丸長方形と円形である。長方形のものは袋状を呈する。

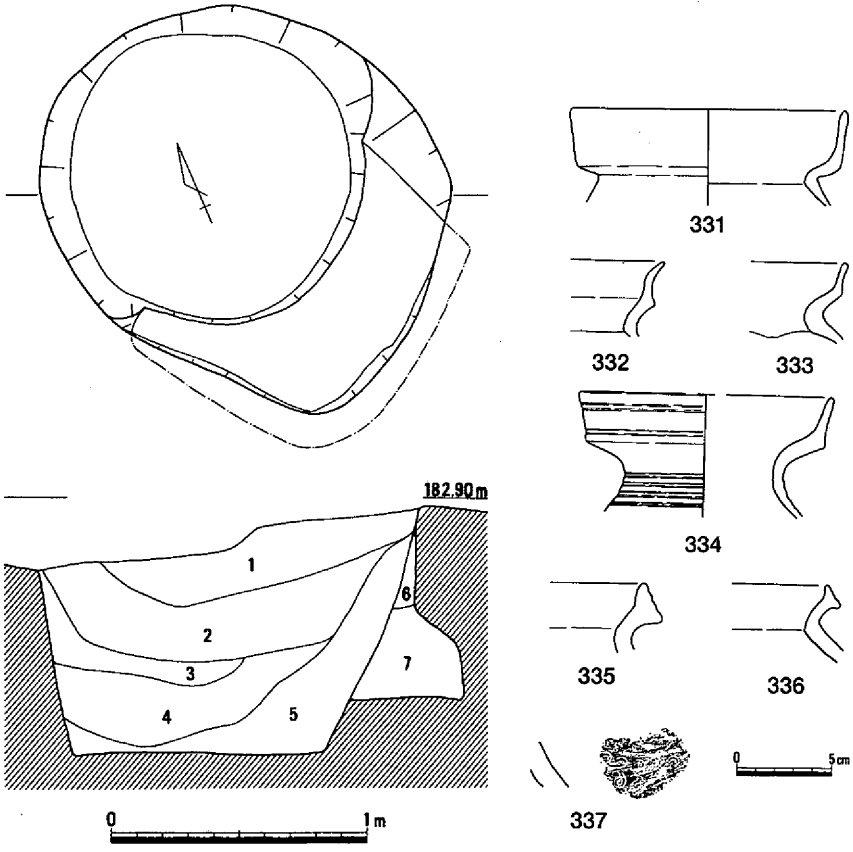
遺物は、壺と甕の破片が出ている。Ｓ字スタンプが認められるものも見える。

土器から弥生時代後期である。



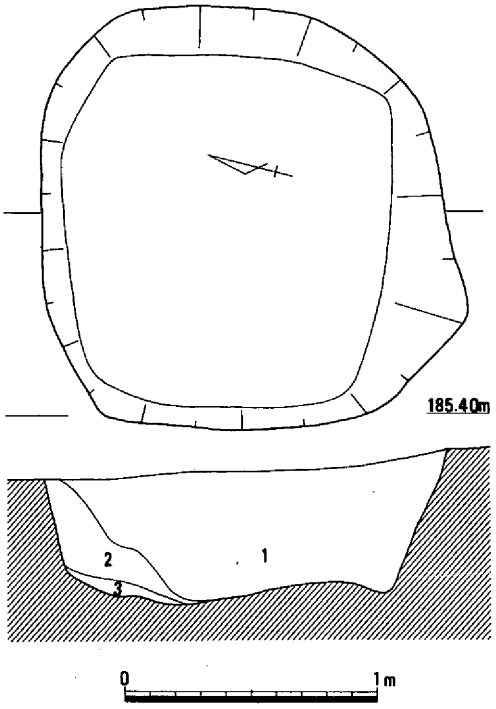
1．茶褐色粘性砂質土（土器）
2．茶褐色粘質土
3．暗灰黄色粘質土
4．灰黄色粘性砂質土

第180図　土壙126（1／30）・出土遺物（1／4）



1．灰黄色粘性砂質土（土器）
2．暗灰黄色粘性砂質土（土器）
3．黄褐色粘性砂質土（土器）
4．暗灰黄色粘性砂質土
5．淡黄色粘性砂質土
6．黄褐色粘性砂質土
7．暗灰黄色粘性砂質土

第181図　土壙127（1／30）・出土遺物（1／4）



1．浅黄色粘質土
2．黄褐色粘質土
3．淡黄色粘質土

第182図　土壙128（1／30）

土壙128（第182図、図版21）

竪穴住居７の東土壙群の南端で検出した。平面形は正方形に近い形で、壁は外開き、床面は平坦になっていない。浅い周溝らしき窪みを認めることができた。土砂で北側から埋まったことがわかる。

遺物は、土器の細片が出ている。

土器から弥生時代後期である。

土壙129（第183図）

竪穴住居14の南側で検出した。平面形は長方形で、壁は垂直に立ち上がり、床面は平坦である。

遺物は、壺、甕、高杯の破片が出ている。

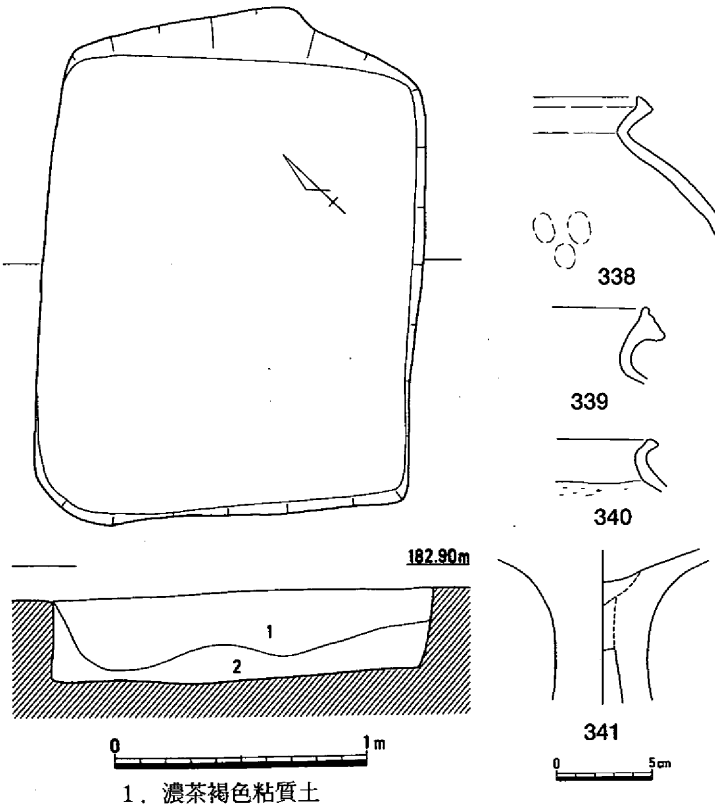
土器から弥生時代中期末から後期前葉である。

土壙130（第184図）

竪穴住居９の西側土壙群で検出した。大半は水田によって削り取られていた。平面形は長方形で壁は垂直に立ち上がり、床面は平坦である。土壙103を切っている。

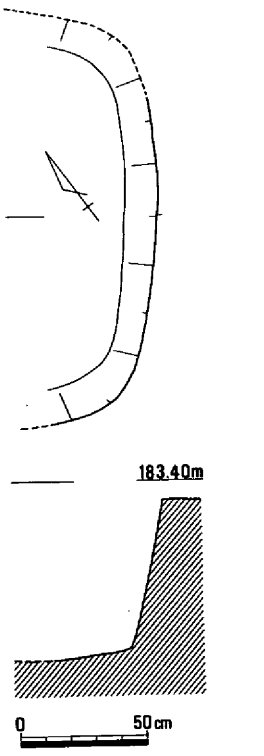
遺物は、土器の細片が出ている。

土器から弥生時代後期である。



1．濃茶褐色粘質土
2．茶褐色土

第183図　土壙129（1／30）・出土遺物（1／4）



第184図　土壙130（1／30）

土壙131（第185図）

土壙129の西で検出したが、南半分は中世の溝によって削り取られていた。平面形は円形で、壁は外開きに立ち上がり、床面は平坦である。

遺物は、土器の細片が出ている。

土器から弥生時代後期である。

土壙132（第186図）

１区中央部西端で検出したが、上部を水田によって削り取られていた。平面形は円形で、壁は垂直に立ち上がり、床面は平坦である。部分的に周溝が存在する。

遺物は、第２層から土器の細片が出ている。

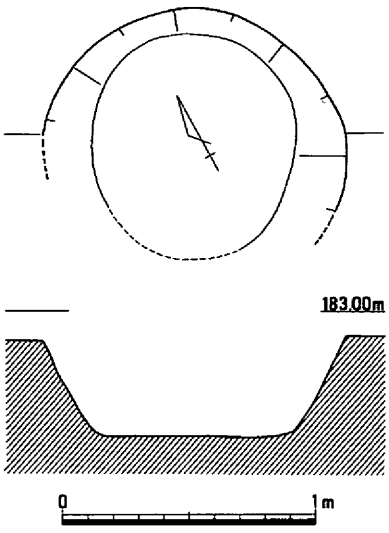
土器から弥生時代後期である。

土壙133（第187図、図版22）

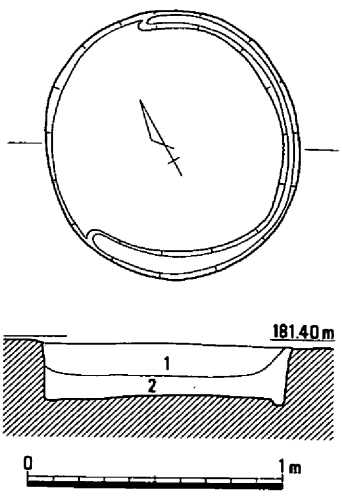
１区中央部西北部で検出したが、上部を中世の溝と中世の宅地によって削り取られていた。平面形は円形で、壁は垂直よりもやや内傾に立ち上がり、床面は平坦である。床の周囲を巡る周溝が存在する。規模はかなり大きく、床面の直径は160cmを測る。大型の貯蔵穴である。深さは85cmであるが、おそらくさらに100cmはあったであろう。

遺物は、第２層から壺形土器の細片が出ている。肩部に刺突文が存在する。

土器から弥生時代後期である。

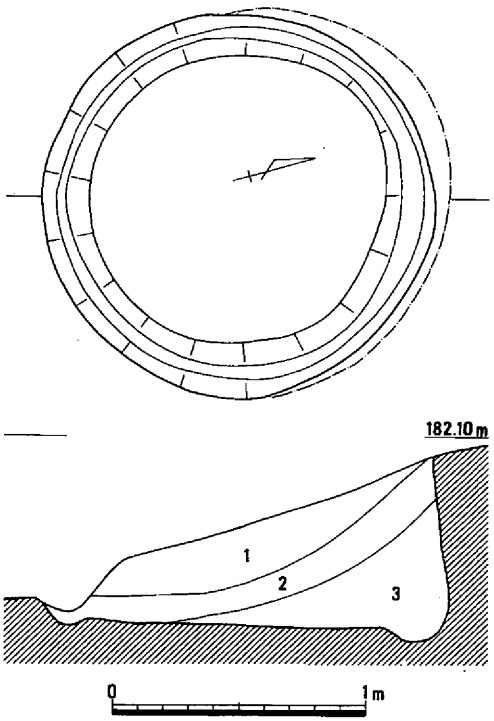


第185図　土壙131（1／30）

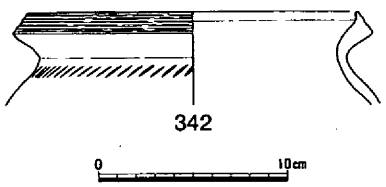


1．灰褐色粘性砂質土
2．黄灰褐色粘性砂質土（土器）

第186図　土壙132（1／30）



1．暗褐灰色粘質土
2．明灰黄色粘質土
3．灰黄色粘土



第187図　土壙133（1／30）・出土遺物（1／4）

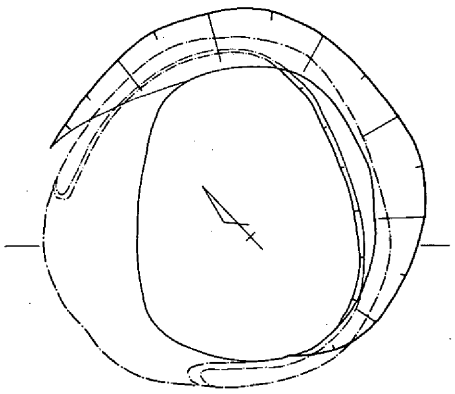
土壙134（第188図）

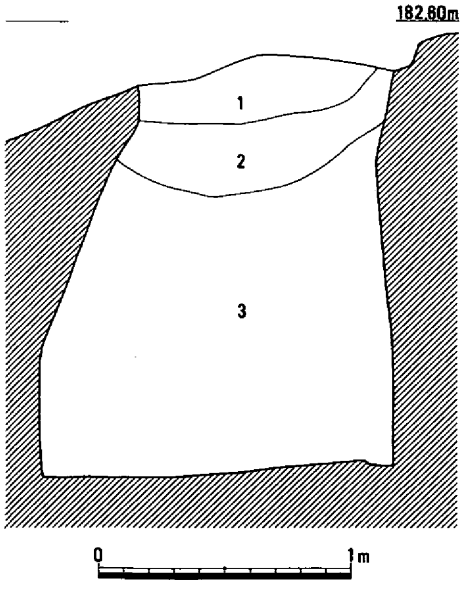
１区中央北部で検出したが、上部をあまり削り取られていないようで、残存状態がかなりよい。上面の平面形は楕円形で、壁は垂直よりはやや内傾に立ち上がり、床面は平坦である。断面形は筒状で、口を絞ったビール瓶のような形である。床の周囲を巡る周溝が存在する。規模はかなり大きく、床面は直径138cmを測る。大型の貯蔵穴である。深さは170cmもあって、まださらに30cmはあったであろう。

１区で検出した土壙の中では、２番目に深い。

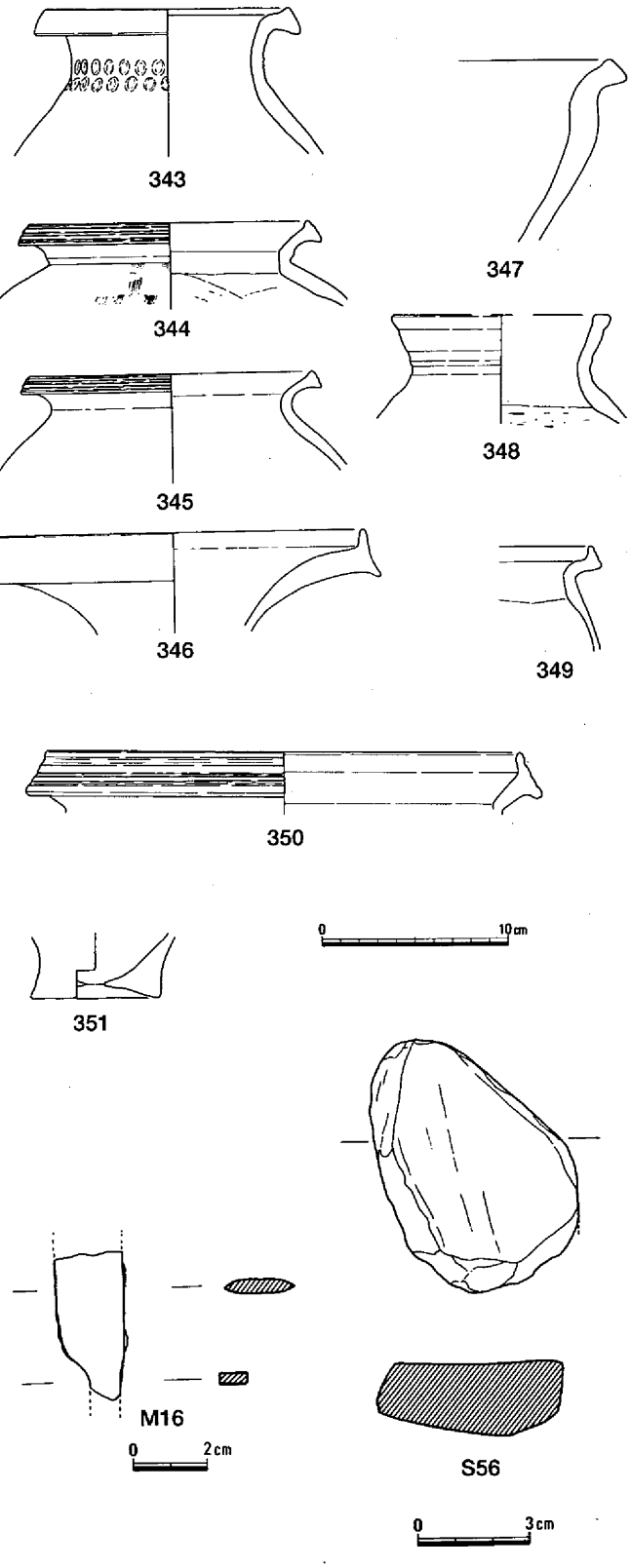
遺物は、埋土の全層から壺、甕、甑の土器片が出ている。そのほかに砥石と鉄器がある。

土器から弥生時代後期前葉である。





1．淡黄褐色粘性砂質土（土器）
2．褐色粘性砂質土（土器）
3．暗褐色粘性砂質土（土器）

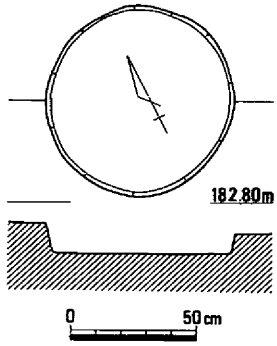


第188図　土壙134（1／30）・出土遺物（1／4、1／2）

土壙135（第189図）

土壙134の南７ｍで検出した。平面形は円形で、壁はほぼ垂直に立ち上がり、全体の床は平坦である。規模は小さく、床面の直径は70cmを測る。

遺物の土器細片から、弥生時代後期と考えたい。

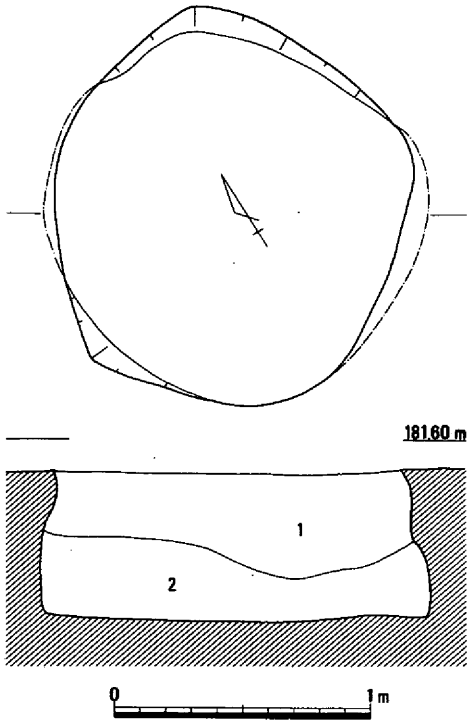


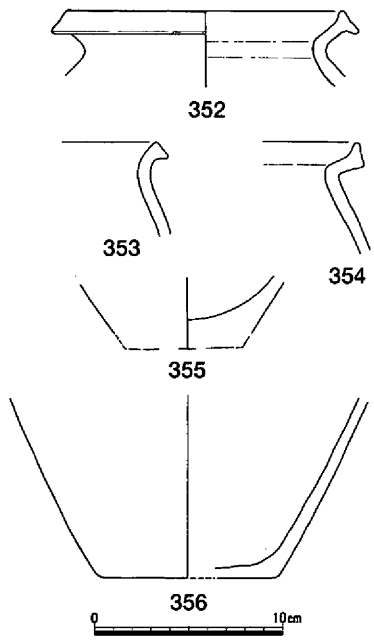
第189図　土壙135（1／30）

土壙136（第190図）

土壙134の西側近くで検出したが、上部をほとんど削り取られていて、残存状態がかなり悪い。平面形は円形で、袋状を呈する。規模は中型で、床面の直径は150cmを測る。

遺物の壺や甕片から、弥生時代後期と考えたい。





1．淡黄灰褐色粘質土（土器）
2．暗褐色粘質土

第190図　土壙136（1／30）・出土遺物（1／4）

土壙138（第191図、図版22）

１区北東隅で検出した。平面形は円形で、断面形は筒状を呈する。規模は大型で、床面の直径は150cmを測る。床の周囲には壁体溝状の溝が存在する。

遺物は壺、高杯が第２層から出土している。

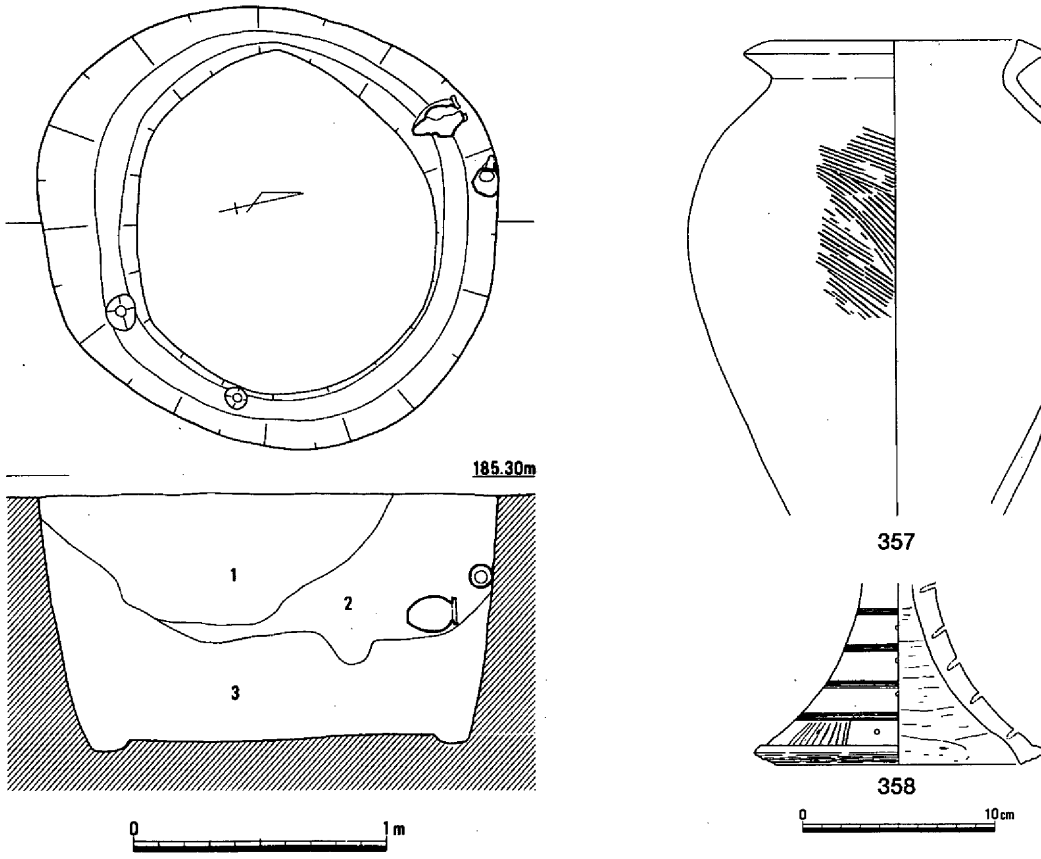
これらから弥生時代後期初頭と考えたい。

土壙139（第192図）

竪穴住居13の北東隅で検出した。住居に切られているため、より古いことがわかる。平面形の上面は楕円形、床面は円形で、袋状を呈する。規模は小型で、床面の直径は118cmを測る。

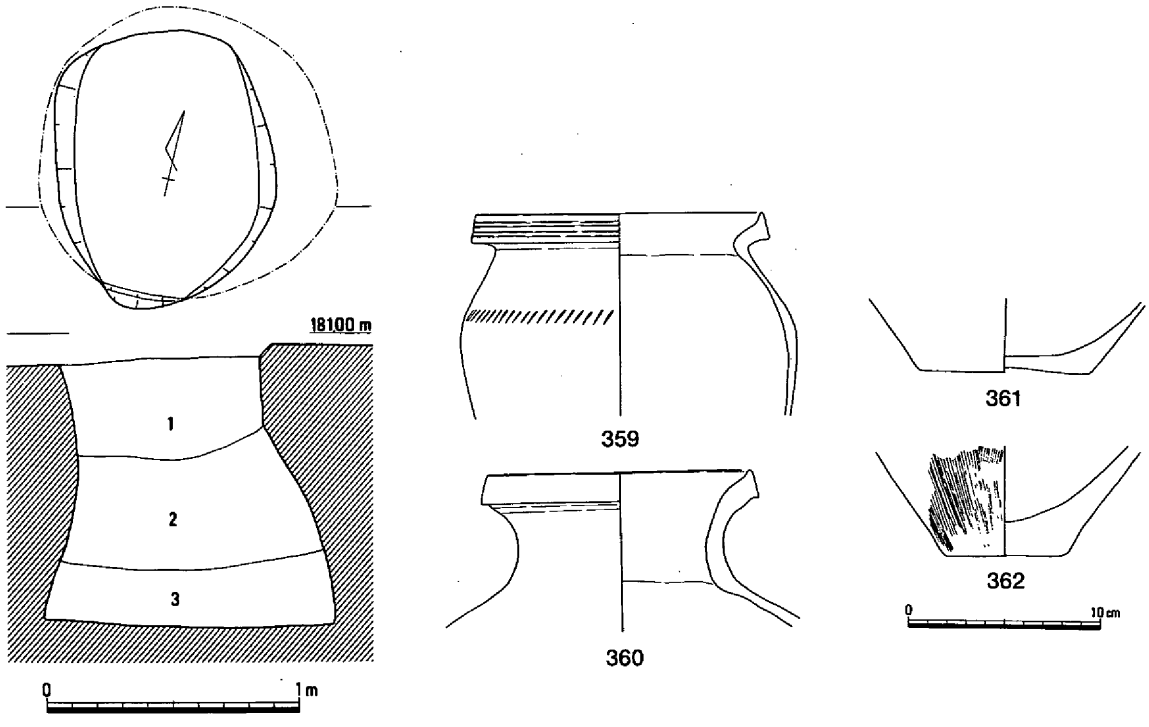
遺物は、第２層から壺や甕が出土している。

これらから弥生時代後期前葉と考えたい。



1．浅黄色粘質土（土器）　　3．暗灰黄粘質土
2．黄褐色粘質土（土器）

第191図　土壙138（1／30）・出土遺物（1／4）



1．暗褐色粘性砂質土（土器）
2．黒褐色粘性砂質土（土器）
3．灰黄褐色粘性砂質土

第192図　土壙139（1／30）・出土遺物（1／4）

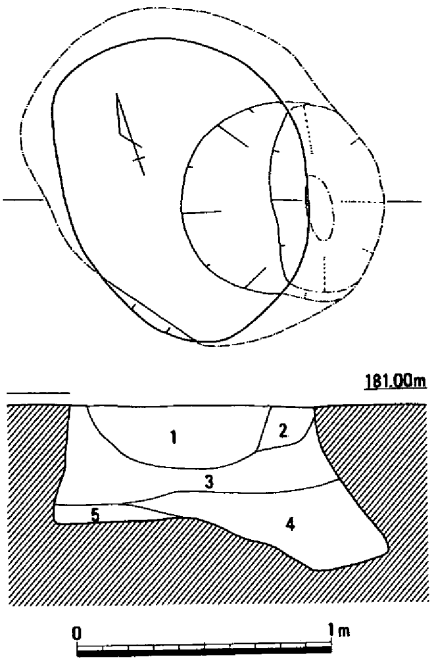
土壙140(第193図)

１区南部の竪穴住居４の西６ｍで検出した。平面形は、上面は楕円形、床面は楕円形で、断面形は袋状を呈する。床面は西側が段になって深い。規模は中型で、床面の長径144cm、短径114cmを測る。

遺物の土器細片から、弥生時代後期と考えたい。

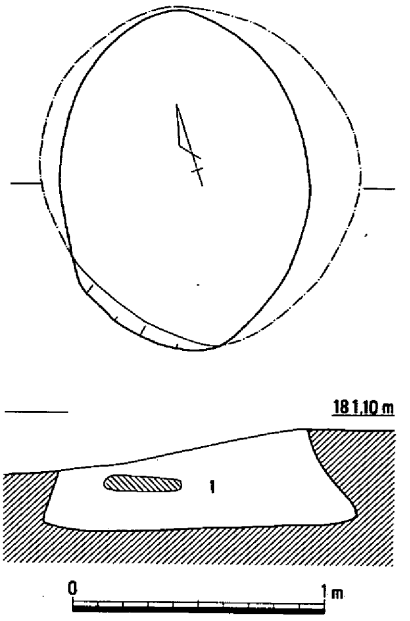
土壙141（第194図）

１区南西部の土壙132の南６ｍで検出した。平面形は、上面も床面も楕円形で、断面形は袋状を呈する。床面は平坦である。規模は中型で、床面の長径は130cm、短径は120cmを測る。



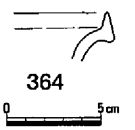
１．灰褐色粘質土（土器）
２．淡灰褐色粘性砂質土
３．黄灰褐色粘質土
４．明黄灰褐色粘質土
５．明黄色粘土

第193図　土壙140（1／30）

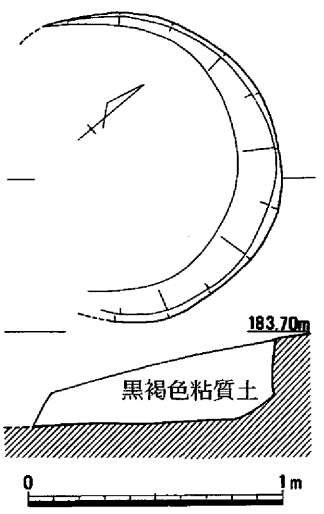


１．黄灰褐色粘質土

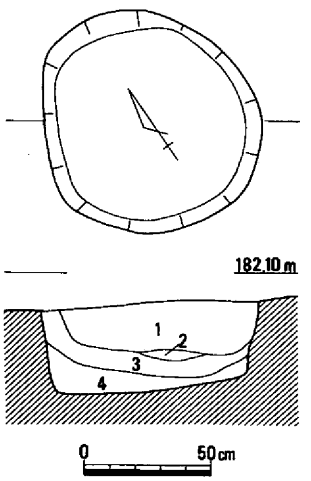
第194図　土壙141（1／30）



第197図　土壙144出土遺物(1／4)



第195図　土壙142（1／30）・出土遺物（1／4）



１．灰褐色粘性砂質土
２．暗褐灰色粘質土
３．褐灰色粘性砂質土
４．明黄色粘質土

第196図　土壙143(1／30)

遺物の土器細片から、弥生時代後期と考えたい。

土壙142（第195図、図版20）

１区北東部で検出した。平面形は半円形で、断面形は外に開いた後に垂直に立ち上がる。床面は平坦である。

遺物は、高杯の脚端部が出土している。これから弥生時代後期と考えたい。

土壙143（第196図）

１区中央の土壙104の西４ｍで検出した。平面形は円形で、断面形はほぼ筒形を呈する。床面は平坦である。規模は小型で、床面の直径は75cmを測る。

土器の細片から、弥生時代後期になると考えたい。

土壙144～147（第153図）

１区中央の土壙136の南西10ｍで検出した土壙144は、不整形な形で浅い。土壙145は土壙136の東３ｍで検出し、小型の楕円形で浅い。土壙146は土壙136の東４ｍで検出し、中型の長方形で浅く、西南側の半分は床面も削平されている。

以上４基ともに、土器の細片から弥生時代後期と考えたい。

土壙148（第198図）

１区南東部の竪穴住居12の西に接して検出した。平面形は不整な長方形で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床はほぼ水平である。規模は小型で、床面の長辺は100cm、短辺は64cmを測る。深さは100cmである。

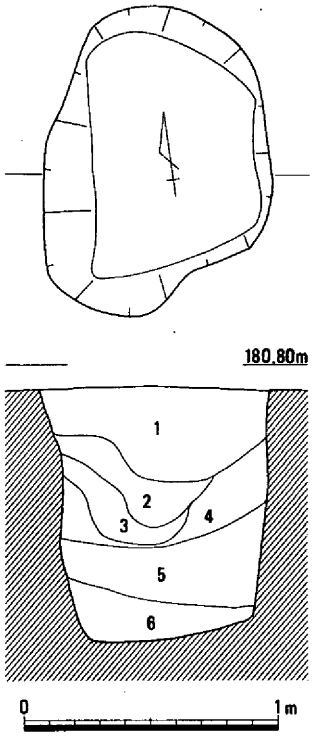
遺物の土器の細片から、弥生時代後期と考えたい。

土壙149（第199図、図版19）

１区北東の土壙107と同時に検出した。この土壙は、土壙107に切られている。平面形は長方形で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面は水平である。規模は大型で、床面の長辺は216cm、短辺は124cmを測る。深さは16cmである。上部はほとんど削平されていると思われた。

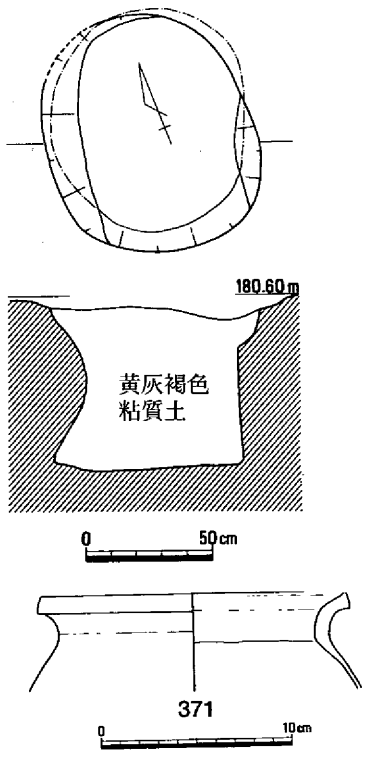
遺物は、壺、甕、鉢、高杯が出ている。

この土器片から、弥生時代後期前葉と考えたい。

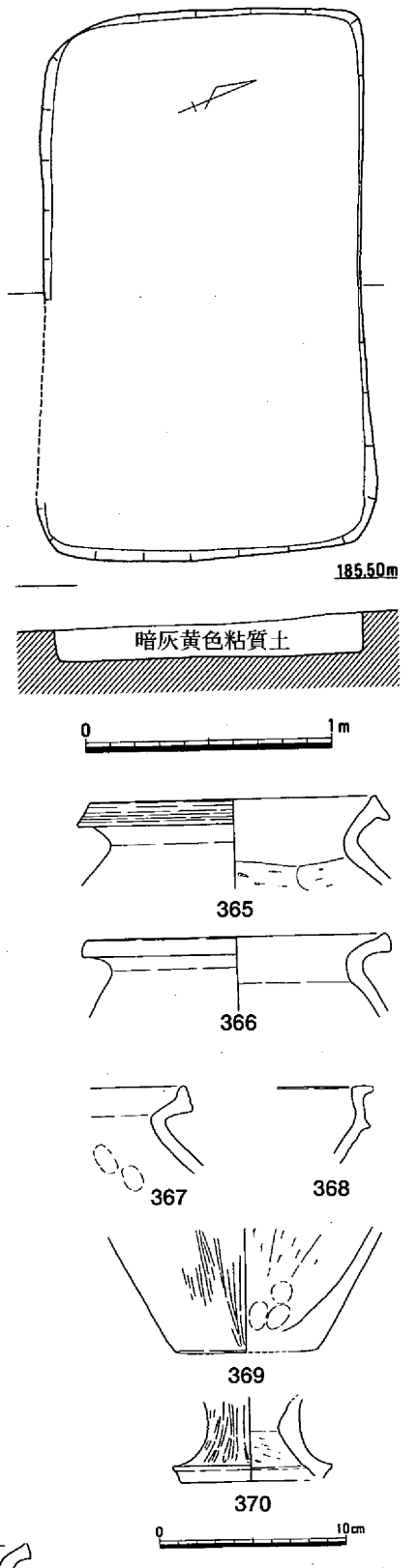


1．暗灰褐色粘質土
2．黄灰褐色粘質土
3．灰褐色粘質土
4．淡灰褐色粘質土
5．暗黄灰褐色粘質土
6．黄灰褐色粘性砂質土

第198図　土壙148（1／30）



第200図　土壙150（1／30）・出土遺物（1／4）



第199図　土壙149（1／30）・出土遺物（1／4）

土壙150（第200図）

１区南部の竪穴住居13の西１ｍで検出した。２基の土壙が重複している。平面形が楕円形のものと長方形のものである。断面形は袋状を呈する。規模は小型で、前者は床面の長径が90cm、短径が80cmを測る。後者は長辺が80cm、短径が70cmである。

遺物は、土器の細片が出土している。

これから弥生時代後期と考えたい。

土壙151（第201図）

１区南部の竪穴住居４の西１ｍで検出した。２基の土壙が重複している。平面形が楕円形のものと円形のものである。規模は大型で、前者は床面の長径が290cm、短径が234cmを測る。後者は径が150cmである。

遺物は、土器の細片が出土している。

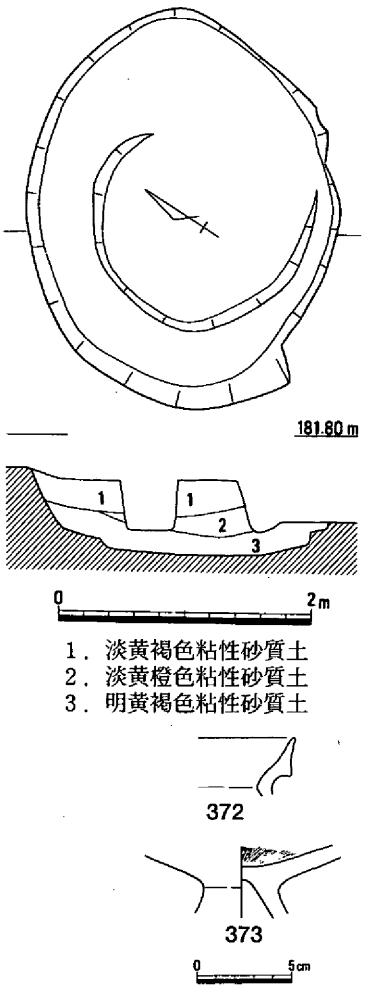
これから弥生時代後期と考えたい。

土壙152（第202図）

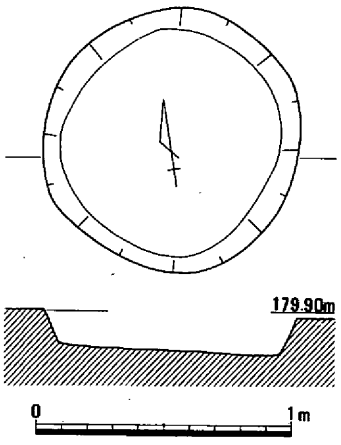
１区南部の段状遺構７の東に接して検出した。その段状遺構７を切っていることから、より新しい。平面形は円形である。規模は小型で、径が90cmである。

遺物は、土器の細片が出土している。

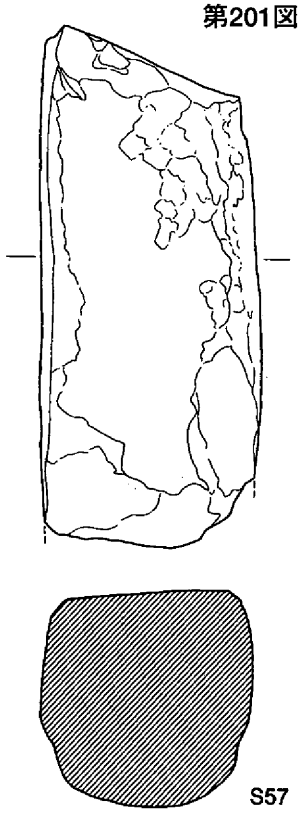
これから弥生時代後期と考えたい。

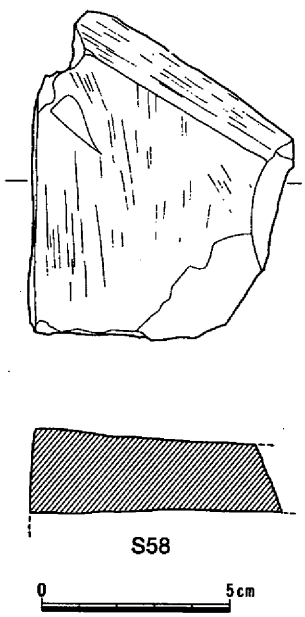


第201図　土壙151（1／60）・出土遺物（1／4）

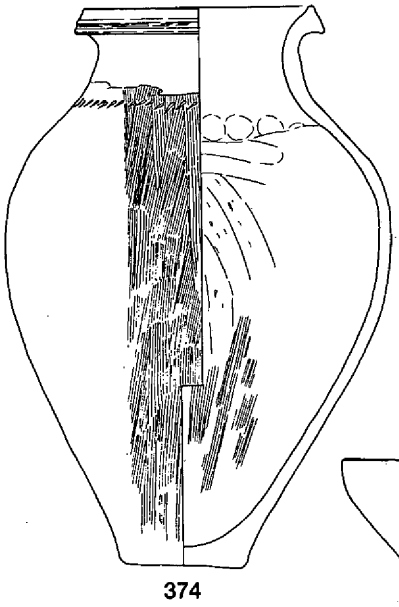


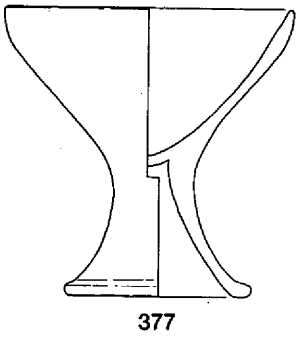
第202図　土壙152（1／30）

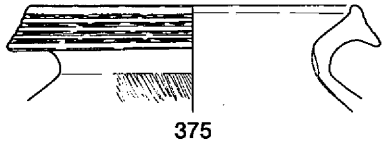


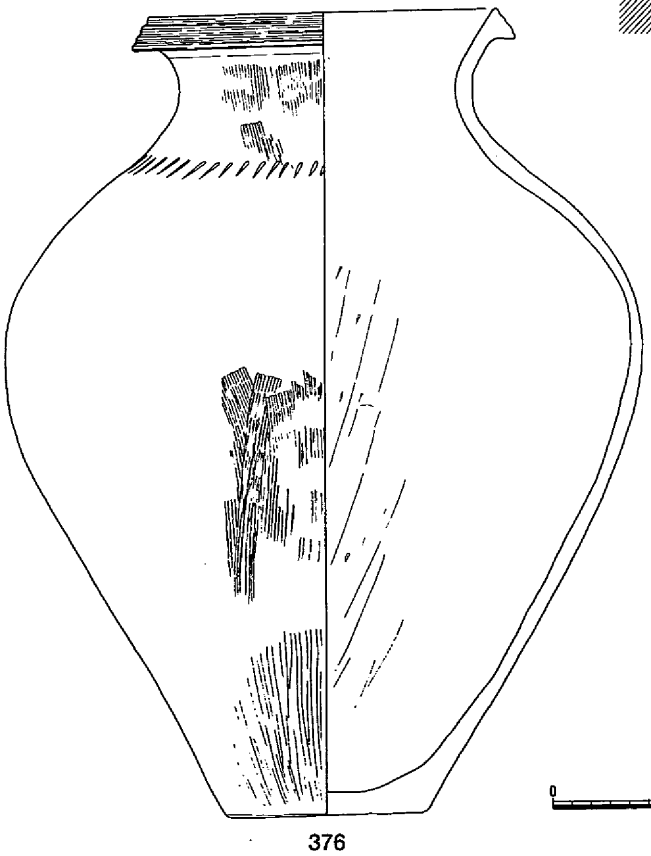


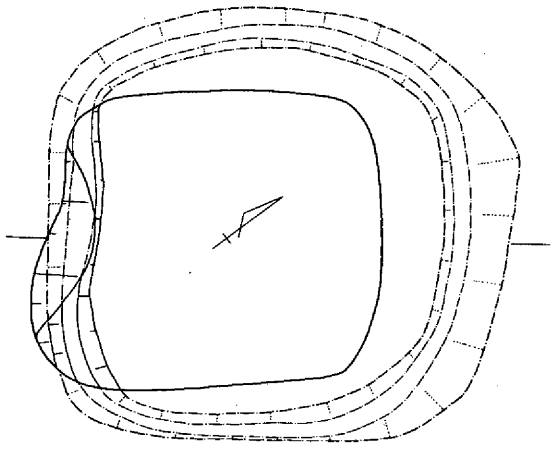
第203図　土壙153出土遺物（1）（1／2）

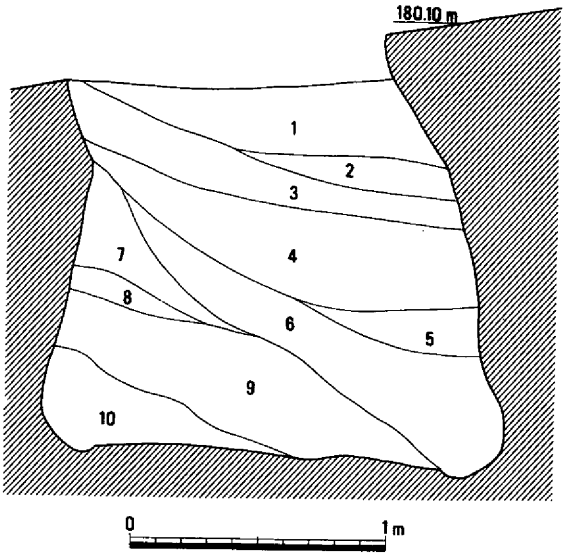

374


377

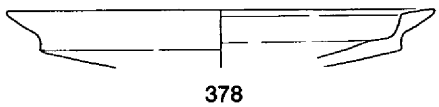

375

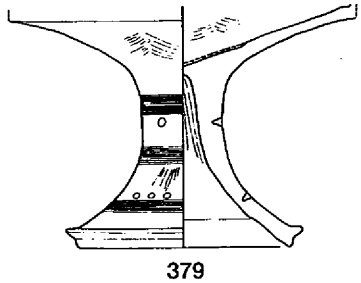

376





1．褐色砂質土
2．淡灰黄色砂質土
3．灰黄色粘性砂質土
4．明灰黄色粘質土
5．灰褐色粘質土
6．黄灰褐色粘質土
7．明灰黄色粘質土
8．灰褐色粘質土
9．淡黄灰褐色粘質土
10．暗黄灰色粘質土


378


379

第204図　土壙153（1／30）・出土遺物（2）（1／4）

土壙153（第203・204図、図版18・33）

１区南部の段状遺構９の床面で検出した。それを切っていることから、段状遺構９より新しいことがわかる。平面形は上面も床面もともに隅丸方形である。ただし床面は４方向とも丸くなっている。断面形を観察すると、全体に袋状を呈している。規模は大型で、床面の１辺は180cmを測る。床面の周囲に壁体溝状の溝が存在する。この溝の底幅は10cm以上あり、床面からの深さは５cmである。また土壙の深さは、１区で検出したもののうちでは最大の175cmもある。この地区の地山は、第三紀層の軟らかい砂岩であるが、鉄器の手斧がなければ掘れるものではない。現代人がスコップと手鍬を使って、共同作業を行っても２～３日はかかったであろう。弥生人は器用で熟練していたとしても、現代人と同程度であったと考えられる。

土器は器高42cmの壺と器高30cmの壺のほかに、台付鉢と高杯が出土している。珍しく完形に復元できる土器である。さらに流紋岩製の砥石が２点出ている。

弥生時代後期初頭の貯蔵穴と考えられる。

土壙154（第205図）

１区南端部の竪穴住居17の内部で検出した。床面より下層で検出したことから、より古いことがわかる。竪穴住居17には伴わない。平面形は長方形に似た形である。規模は小型で、長辺が138cm、短辺が82cm、深さが18cmを測る。

遺物は土器の細片が出土しているが、図化するほどのものはなかった。

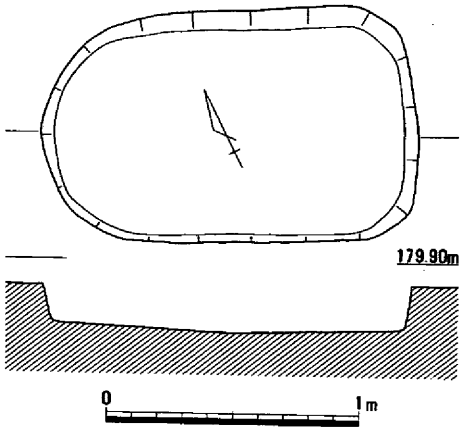
これから弥生時代後期と考えたい。

土壙155（第206図）

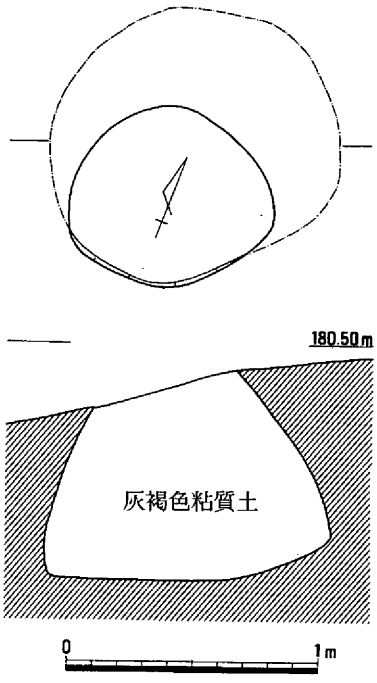
１区南部の竪穴住居15の北東に接して検出した。それに切られていることから、より古いことがわかる。平面形は楕円形である。北方向が袋状を呈している。規模は中型で、床面の長径は124cm、短径は110cm、深さは84cmを測る。埋土は灰褐色粘質土である。

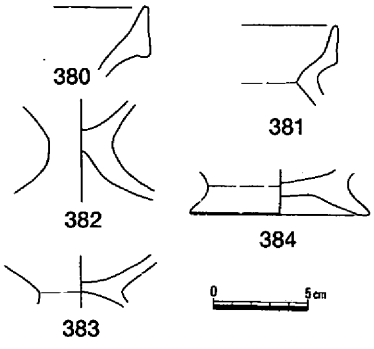
遺物は、土器の細片が少量出土している。甕、高杯、台付鉢の破片である。甕の口縁は、端部が短く立ち上がる。高杯は短脚になっている。

これから弥生時代後期と考えたい。



第205図　土壙154（1／30）





第206図　土壙155（1／30）・出土遺物（1／4）

土壙201

（第207図、図版20・32）

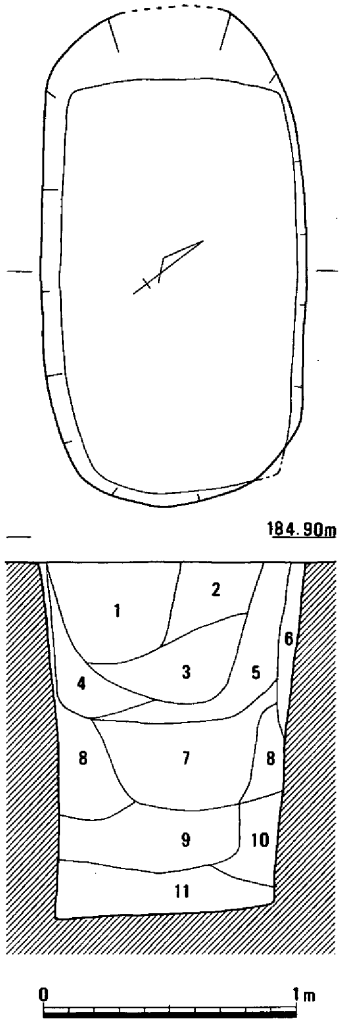
２区中央部の竪穴住居26～28の３軒に囲まれたほぼ中央の位置で検出した。大型で長方形を呈する。床面の長辺は162cm、短辺は94cm、深さは90cmを測る。壁は外傾しているが、ほとんど垂直に近い。床面は平坦である。

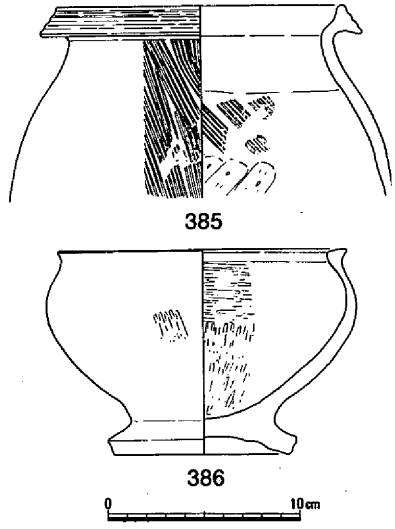
遺物は土器の細片がある。

これから弥生時代中期と考えたい。

土壙202（第208図、図版19）

２区南部の竪穴住居19の南で、段状遺構16の床面で検出した。上面の長辺は250cm、短辺は200cmもあって規模が大きいが、土壙125の長辺が190cm、短辺が120cmには及ばない。検出面からの深さは120cmを測る。



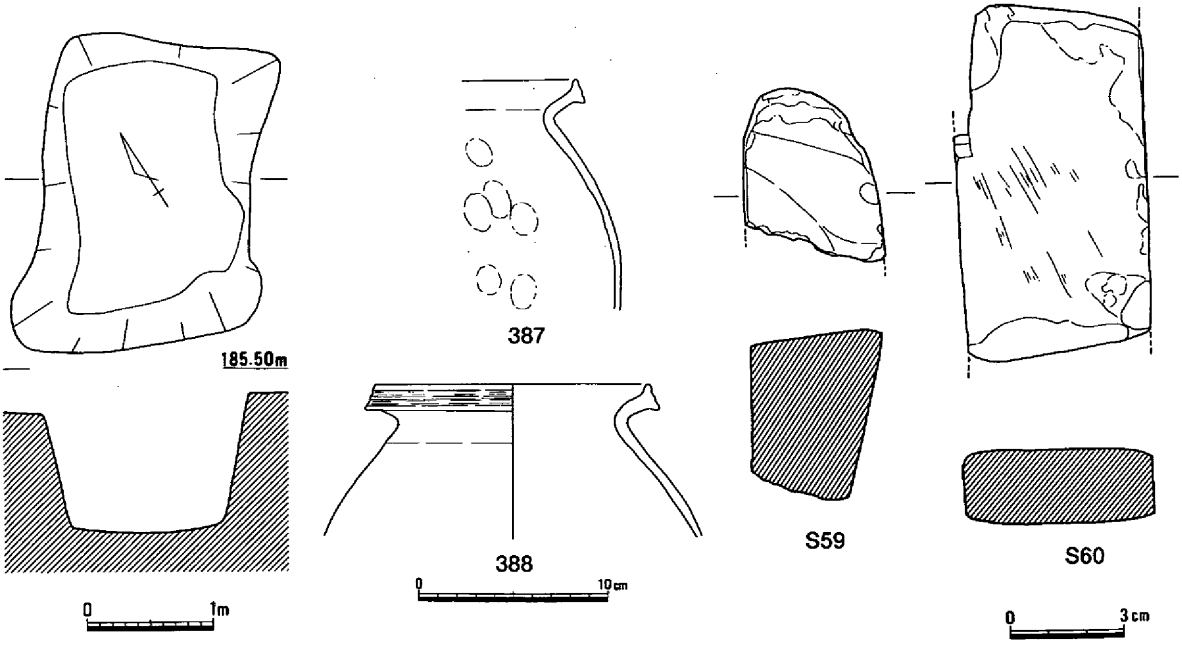


1．淡橙色粘性砂質土
2．淡黄褐色粘性砂質土（土器）
3．暗褐色粘性砂質土
4．淡黄橙色粘性砂質土
5．暗褐色粘性砂質土
6．黒褐色粘性砂質土
7．黒褐色粘性砂質土（土器）
8．灰黄褐色粘性砂質土
9．灰黄褐色粘性砂質土
10．黒褐色粘性砂質土
11．黒褐色粘性砂質土

第207図　土壙201（1／30）・出土遺物（1／4）

遺物は土器の細片のほかに、第１層から砥石が出土している。

土器から弥生時代後期と考えたい。



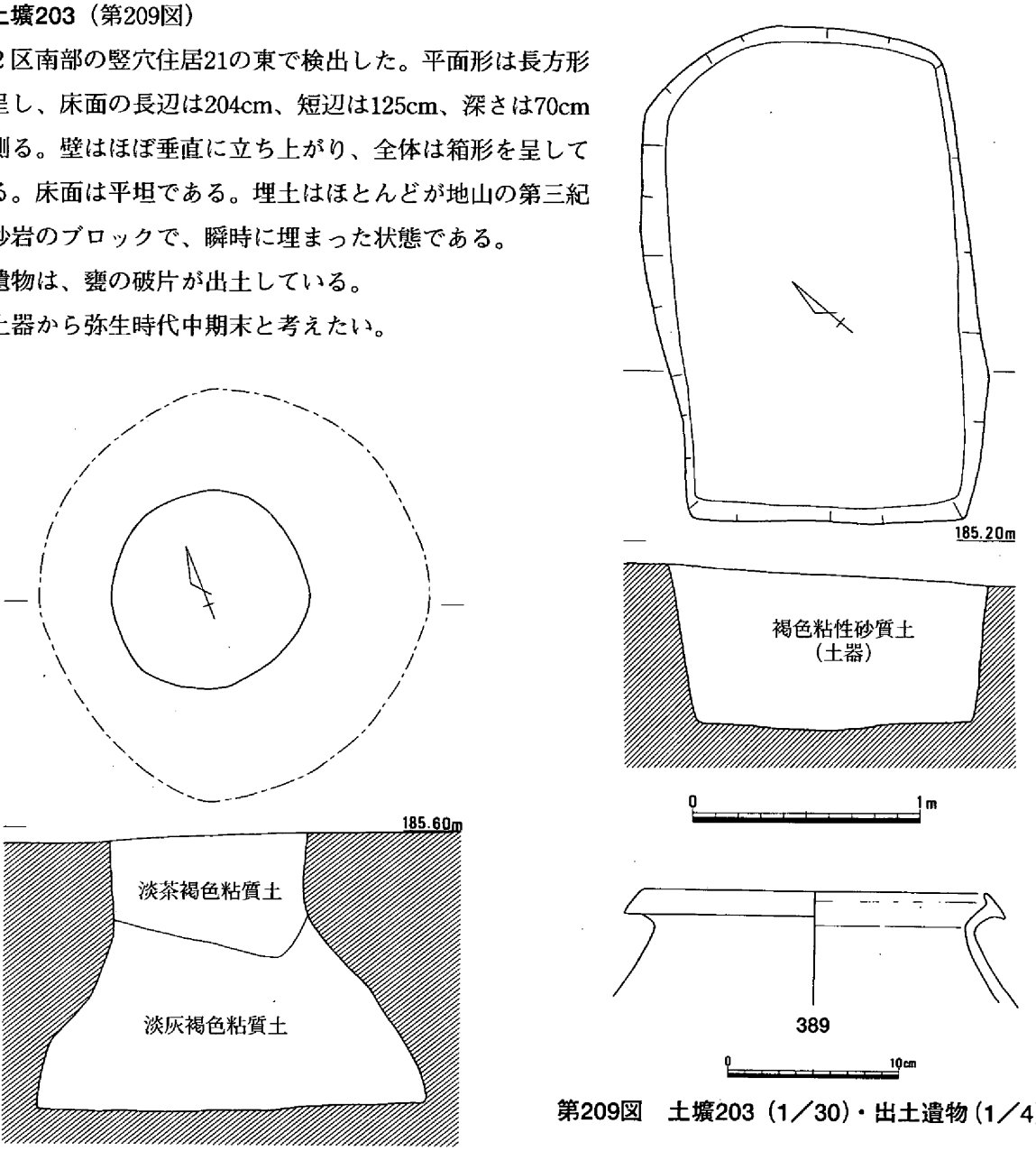
第208図　土壙202（1／60）・出土遺物（1／4、1／2）

土壙203（第209図）

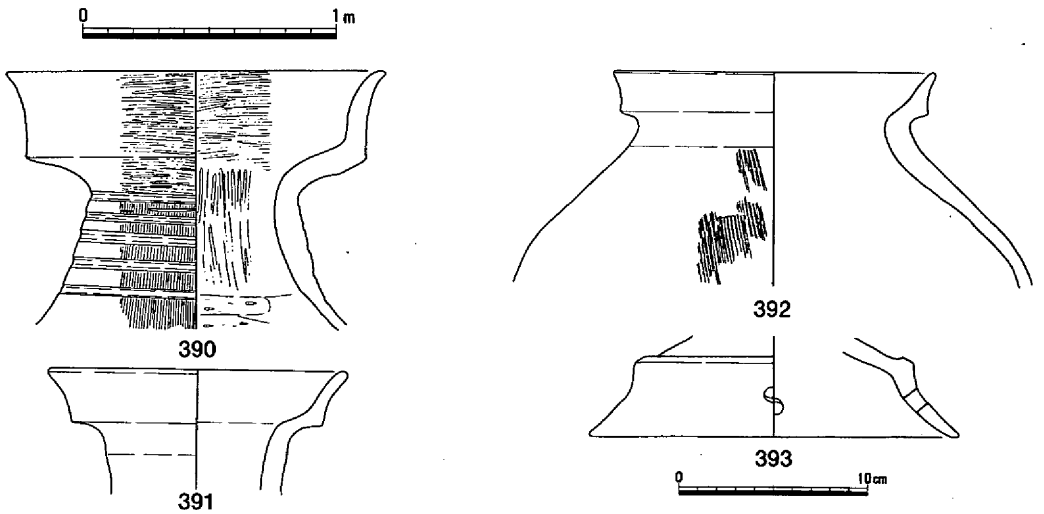
２区南部の竪穴住居21の東で検出した。平面形は長方形を呈し、床面の長辺は204cm、短辺は125cm、深さは70cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、全体は箱形を呈している。床面は平坦である。埋土はほとんどが地山の第三紀層砂岩のブロックで、瞬時に埋まった状態である。

遺物は、甕の破片が出土している。

土器から弥生時代中期末と考えたい。



第209図　土壙203（1／30）・出土遺物（1／4）



第210図　土壙204（1／30）・出土遺物（1／4）

土壙204（第210図、図版33）

２区南部の段状遺構12の床面で検出した。上面は径85cmの円形を呈するが、床面の径は180cm、深さは120cmを測る。袋状を呈し、堆積土は２層に分けることができた。

第１層から壺や器台が出土している。

土器から弥生時代後期と考えたい。

土壙205（第211図）

２区南部の竪穴住居19の東で検出した。大型の円形を呈する。床面の径は173cm、深さは60cmを測る。断面形は袋状を呈している。床面は平坦である。

遺物は、第１層から土器の細片が出土している。

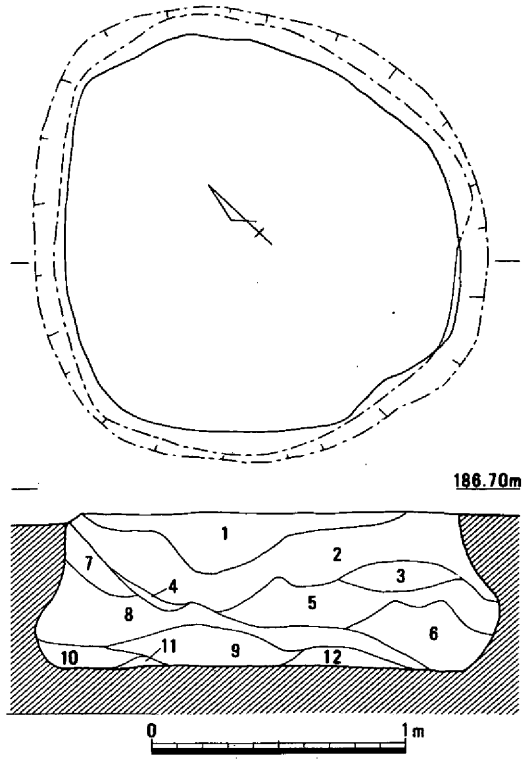
土器から弥生時代後期と考えたい。

土壙206（第212図）

２区南部の竪穴住居19の東南で検出した。やや大型の円形を呈する。床面の径は136cm、深さは80cmを測る。断面形は袋状を呈している。床面は平坦である。

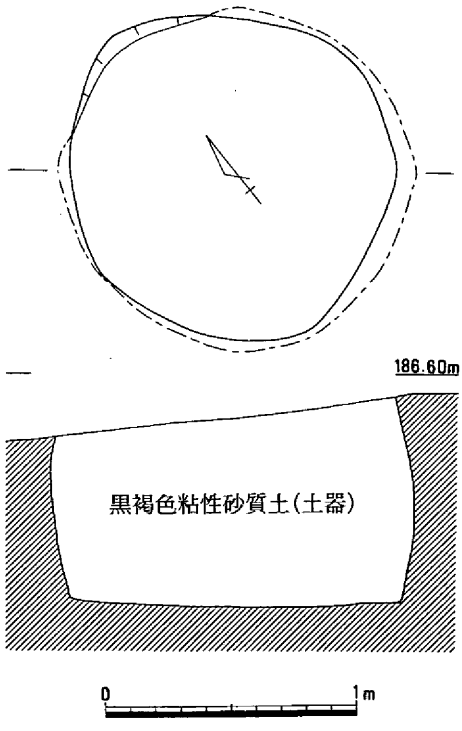
遺物は、土器の細片が出土している。

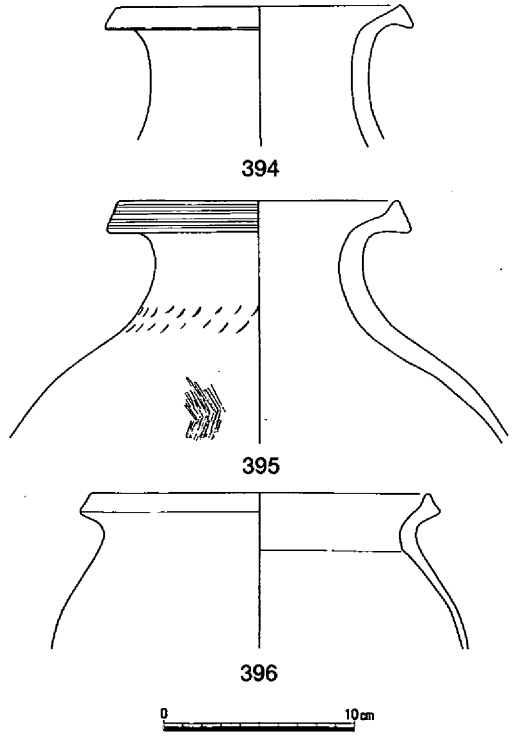
土器から弥生時代後期と考えたい。



1．淡黄茶褐色砂質土（土器）
2．黄茶褐色砂質土
3．濃茶褐色砂質土
4．暗灰黄色砂質土
5．黒褐色粘性砂質土
6．灰黄色粘質土
7．灰褐色粘質土
8．暗黄茶褐色粘質土
9．灰色粘土
10．濃灰黄色粘質土
11．濃灰黄色粘質土
12．黄灰茶色粘質土

第211図　土壙205（1／30）





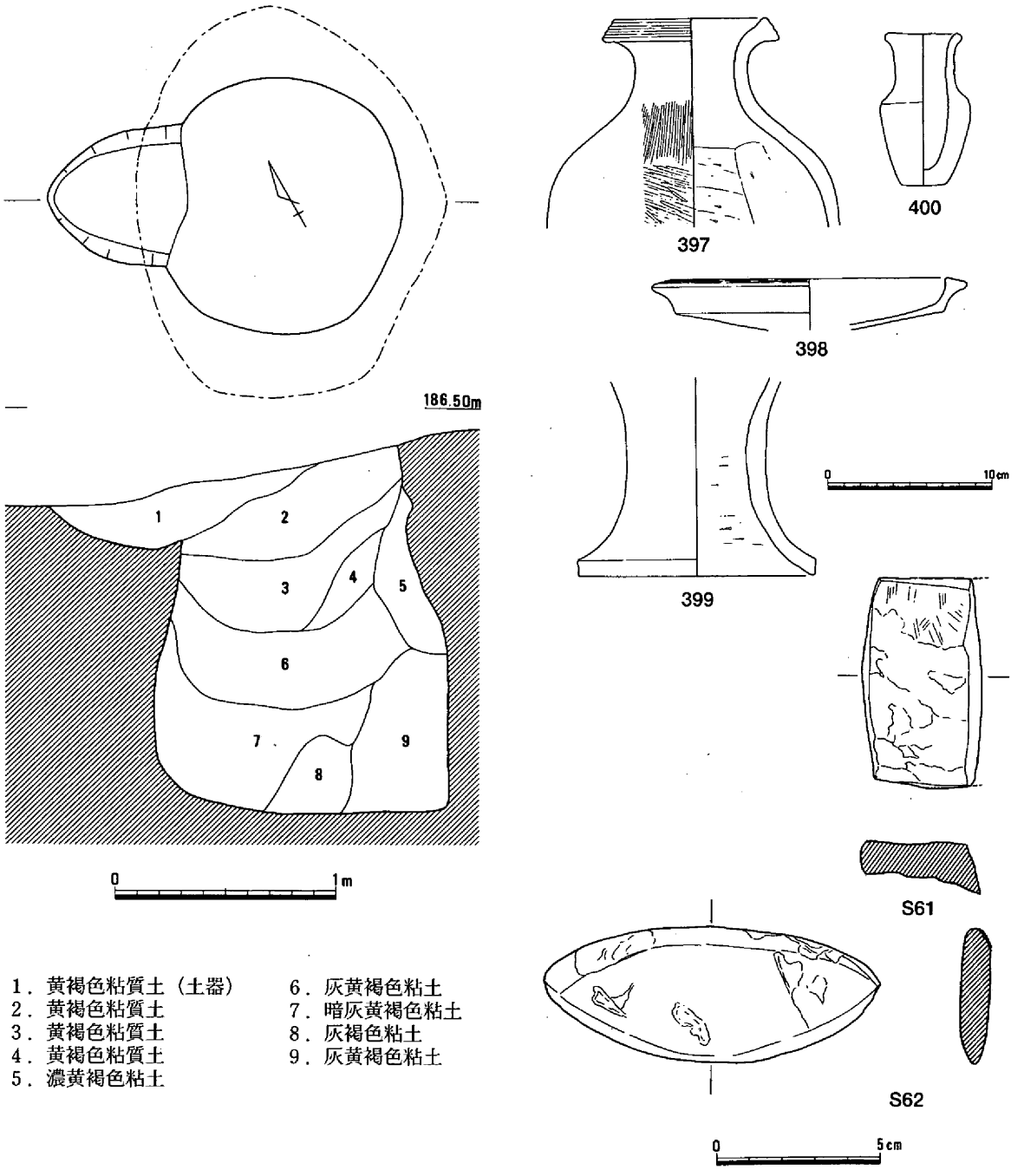
第212図　土壙206（1／30）・出土遺物（1／4）

土壙207（第213図、図版24・40）

２区南端部の段状遺構10の南で検出した。平面形は大型の円形で、断面形は袋状を呈する。床面は平坦であるが、その平面形は楕円形である。検出面の長径は120cm、短径は100cmを測り、床面の長径は180cm、短径は140cmである。検出面からの深さは166cmである。埋土は９層に分層できたが、第１層は別の新しい時期の遺構である。東の山側から埋まった状況を、土層断面で知ることができる。

土器としては、壺、高杯、器台、ミニチュア土器が存在する。このほかに流紋岩製の小型砥石と流紋岩製の石包丁が出土している。石包丁には穿孔がないが、使用痕が認められる。

高杯の特徴から、弥生時代後期初頭と考えたい。旦山遺跡で検出した円形土壙では、古い方に属するようである。



1．黄褐色粘質土（土器）
2．黄褐色粘質土
3．黄褐色粘質土
4．黄褐色粘質土
5．濃黄褐色粘土
6．灰黄褐色粘土
7．暗灰黄褐色粘土
8．灰褐色粘土
9．灰黄褐色粘土

第213図　土壙207（1／30）・出土遺物（1／4、1／2）

土壙208（第214図）

２区南部の段状遺構10の東で検出した。平面形は長方形を呈し、床面の長辺は165cm、短辺は100cm、深さは65cmを測る。壁はほぼ垂直で、全体に箱形を呈している。床面は平坦である。埋土は５層に分けることができた。

遺物は、第１層から弥生時代後期の土器細片が出土している。

土器から弥生時代後期以前と考えたい。

土壙209（第215図、図版20）

２区南部の段状遺構10の床面で検出した。平面形は長方形を呈し、床面の長辺は169cm、短辺は120cm、深さは112cmを測る。壁はほぼ垂直で、全体に箱形を呈している。床面は平坦である。埋土は３層に分けることができた。床面の４方向の隅には、径が10cm、深さが５cmの小さくて浅い柱穴が検出できた。

遺物は第１層から高杯が出土している。図の２点は別個体である。

土器から弥生時代後期初頭と考えたい。

土壙210（第216図、図版41）

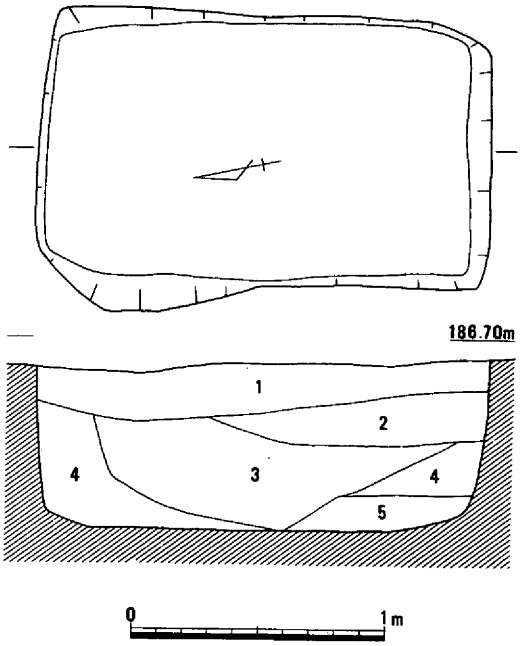
２区南部の竪穴住居19の東で検出した。大型の円形を呈する。床面の直径は148cm、深さは92cmを測る。断面図は袋状を呈している。床面は平坦である。

遺物は、土器の細片に、第２層から石包丁が出土している。

土壙211（第217図）

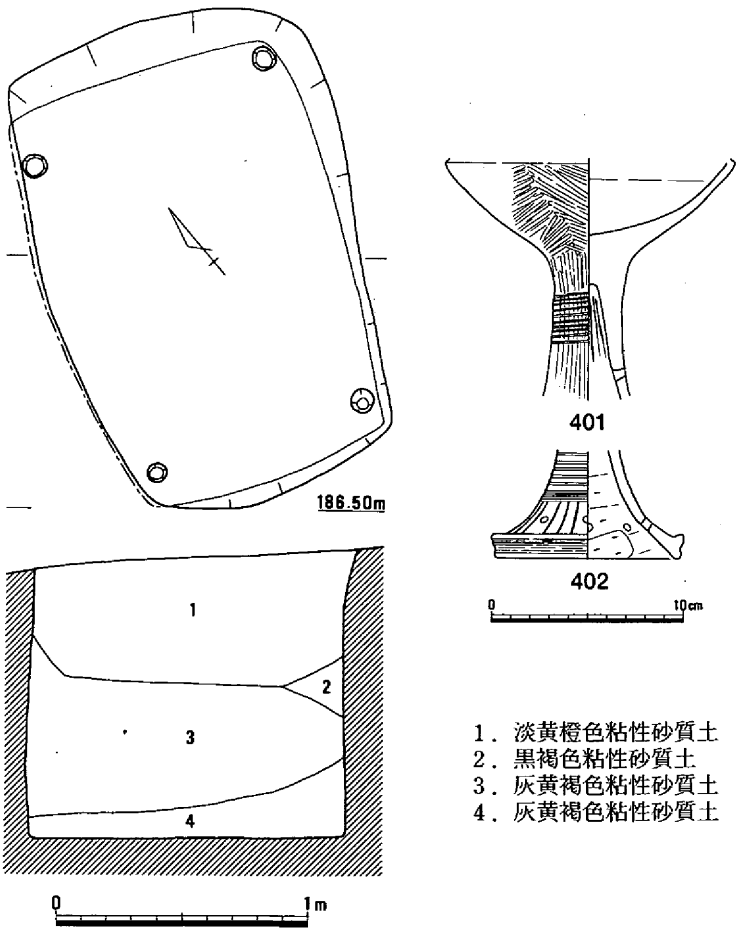
２区南部段状遺構10の東に、それに切られて検出した。平面形は長方形であったと考えられる。床面の残存長辺は138cm、短辺は100cm、深さは24cmを測る。床面は平坦である。

遺物は、土器の細片が出土している。



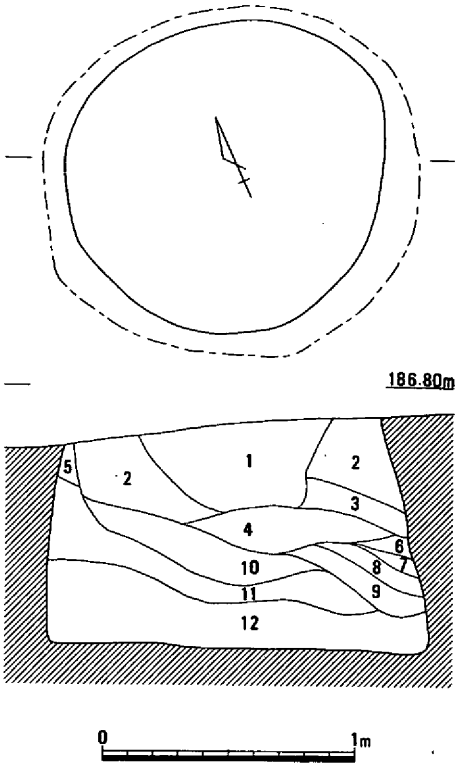
1．灰黄褐色粘性砂質土　4．淡黄褐色粘性砂質土
2．灰黄褐色粘性砂質土　5．暗褐色粘性砂質土
3．淡褐色粘性砂質土

第214図　土壙208（1／30）

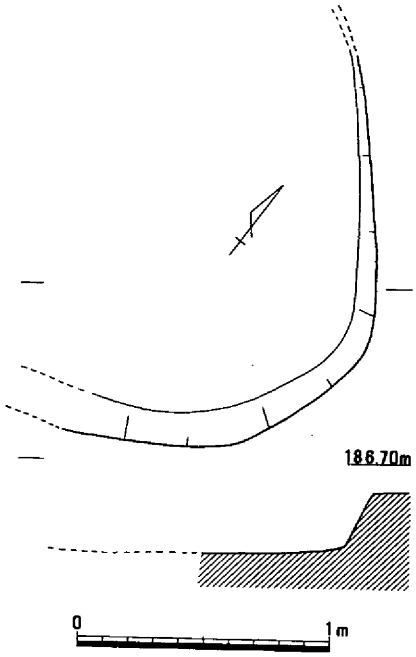


1．淡黄橙色粘性砂質土
2．黒褐色粘性砂質土
3．灰黄褐色粘性砂質土
4．灰黄褐色粘性砂質土

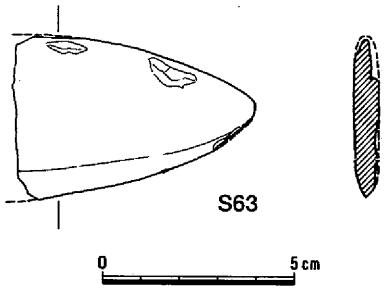
第215図　土壙209（1／30）・出土遺物（1／4）



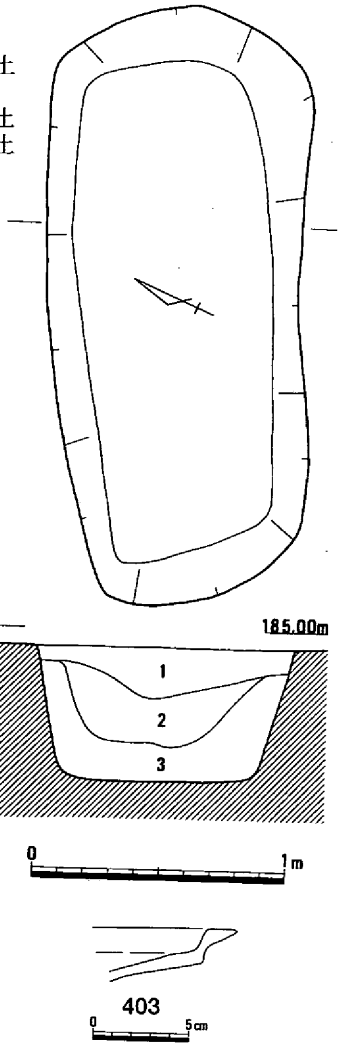
1．淡茶褐色粘性砂質土
2．淡茶褐色微砂（土器）
3．淡灰褐色微砂
4．黄茶褐色粘質土
5．暗黄茶褐色微砂
6．黄褐色砂質土
7．黒褐色粘土
8．暗黄褐色粘質土
9．黒褐色粘土
10．黄灰褐色粘質土
11．暗灰茶色粘質土
12．黒茶色粘質土



第217図　土壙211（1／30）

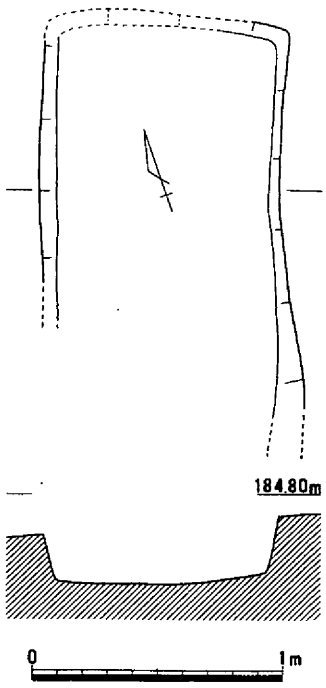


第216図　土壙210（1／30）・
出土遺物（1／2）



1．黄褐色粘質土
2．黄褐色粘質土
3．黒灰黄色粘質土

第218図　土壙212（1／30）・出土遺物（1／4）



第219図　土壙213（1／30）

土壙212（第218図）

２区南部の竪穴住居21の北西で検出した。平面形は長方形を呈し、床面の長辺は196cm、短辺は75cm、深さは53cmを測る。壁はほぼ垂直で、全体に箱形を呈している。埋土は３層に分けた。

遺物は、第１層から高杯の細片が出土している。

土器から弥生時代後期初頭と考えたい。

土壙213（第219図）

２区南部の竪穴住居21の西で検出した。竪穴住居22の下層に存在する。平面形は長方形を呈し、床面の残存長辺は150cm、短辺は84cm、深さは22cmを測る。壁は垂直で、全体に箱形を呈している。

遺物は、土器の細片が出土している。

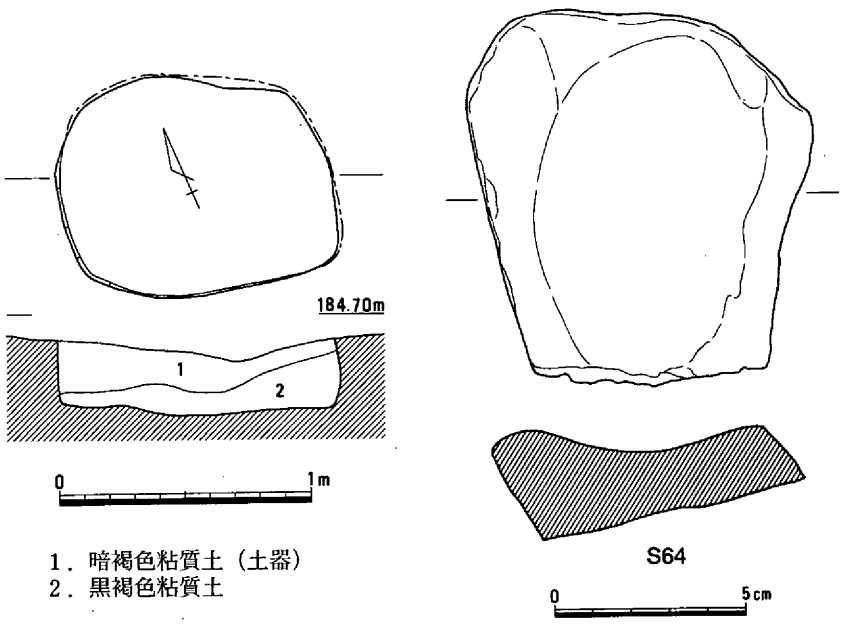
土器から弥生時代後期と考えたい。

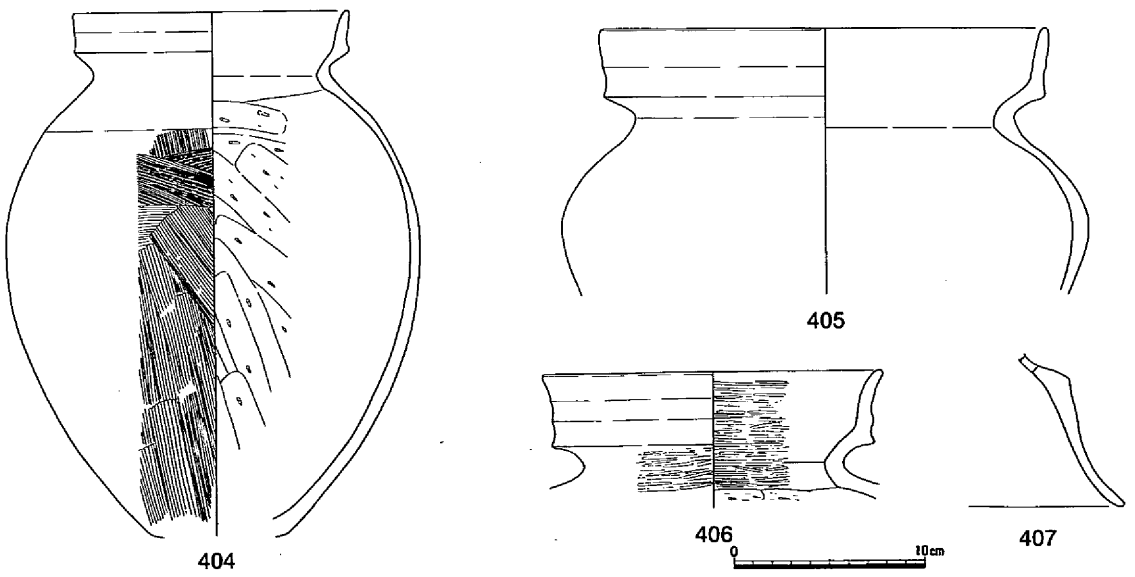
土壙214（第220図、図版33）

２区南部の竪穴住居22の床面で検出した。土壙213を切っている。平面形は楕円形に近い長方形を呈し、床面での長辺は108cm、短辺は86cm、検出面からの深さは30cmを測る。壁はほぼ垂直で、全体に箱形を呈している。床面は平坦である。

遺物は、復元して完形になる甕、鉢、鼓形器台のほかに、砂岩製砥石が出土している。

土器から弥生時代後期後葉と考えたい。





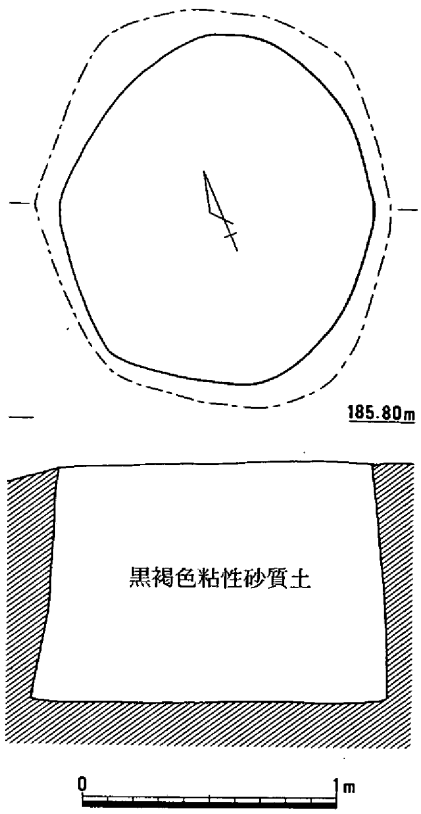
第220図　土壙214（1／30）・出土遺物（1／2、1／4）

土壙215（第221図）

２区南部の竪穴住居19の西で検出した。平面形は多角形に近い楕円形を呈し、床面の長径は138cm、短径は123cm、深さは93cmを測る。壁は内傾し、袋状を呈している。床面は平坦である。

遺物は、土器の細片が出土している。

土器から弥生時代後期と考えたい。



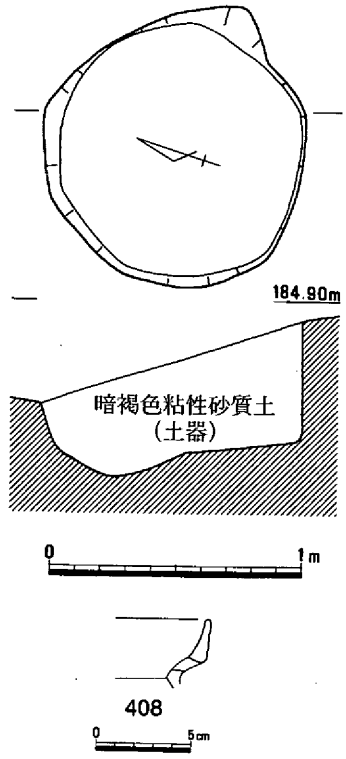
第221図　土壙215（1／30）

土壙216（第222図）

２区南部の竪穴住居21の南で検出した。平面形は円形を呈し、床面の径は100cm、深さは48cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面形は筒状を呈している。床面はほぼ平坦である。

遺物は、円孔を有する甕の口縁の細片が出土している。

土器から弥生時代後期後葉と考えたい。



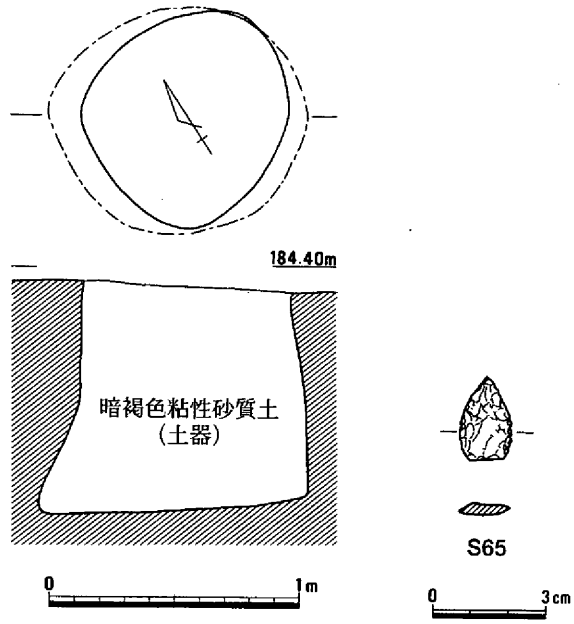
第222図　土壙216（1／30）・出土遺物（1／4）

土壙217（第223図、図版39）

２区南部の竪穴住居23の上層で検出した。平面形は上面が円形を呈し、床面は楕円形である。床面の長径は102cm、短径は90cm、深さは90cmを測る。壁は内傾し、全体に袋状を呈している。

遺物は、土器の細片のほかに、サヌカイト製石鏃が出土している。

土器から弥生時代後期と考えたい。



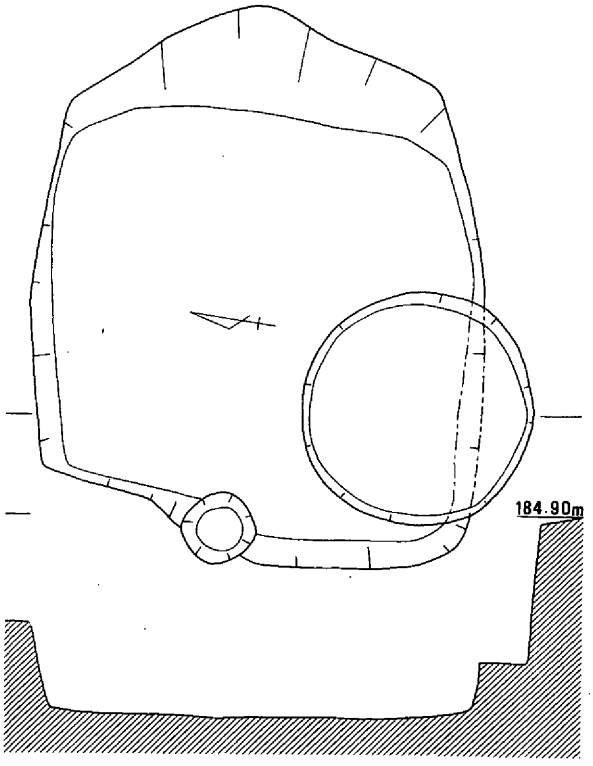
第223図　土壙217（1／30）・出土遺物（1／2）

土壙218（第224図）

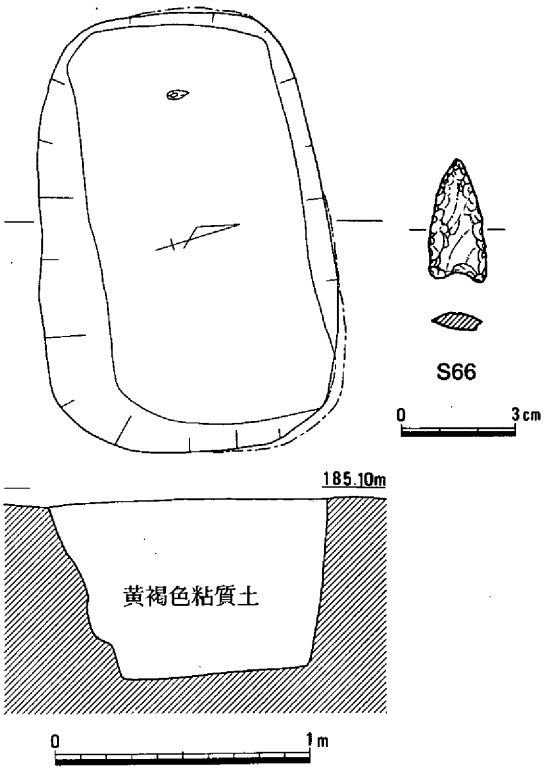
２区南部の竪穴住居21の南で検出した。平面形は長方形を呈し、床面の１辺は167cm、深さは37cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、全体に箱形を呈している。床面は平坦である。

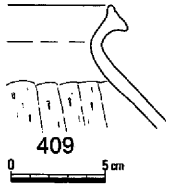
遺物は、土器の細片が出土している。

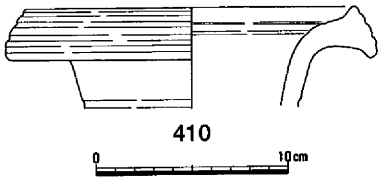
土器から弥生時代後期と考えたい。



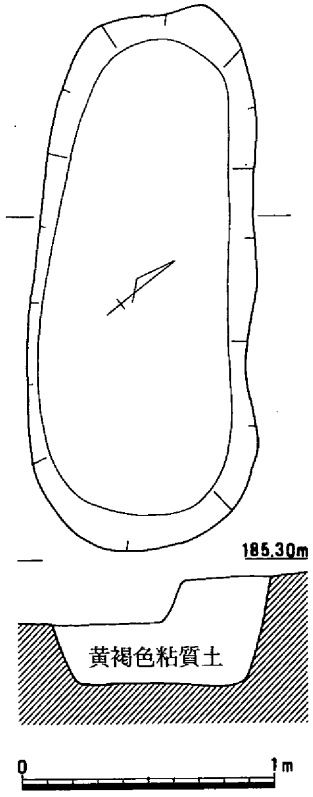
第224図　土壙218（1／30）・
出土遺物（1／4）







第225図　土壙219（1／30）・出土遺物（1／2、1／4）



第226図　土壙220（1／30）

土壙219（第225図、図版39）

２区南部の竪穴住居21の北で検出した。竪穴住居21を取り囲むように検出された、長方形土壙の１つである。平面形は長方形を呈し、床面の長辺は160cm、短辺は84cm、深さは70cmを測る。壁はやや外傾して立ち上がり、全体に箱形を呈している。床面は平坦である。

遺物は壺の細片のほかに、サヌカイト製の石鏃が１点だけ出土している。

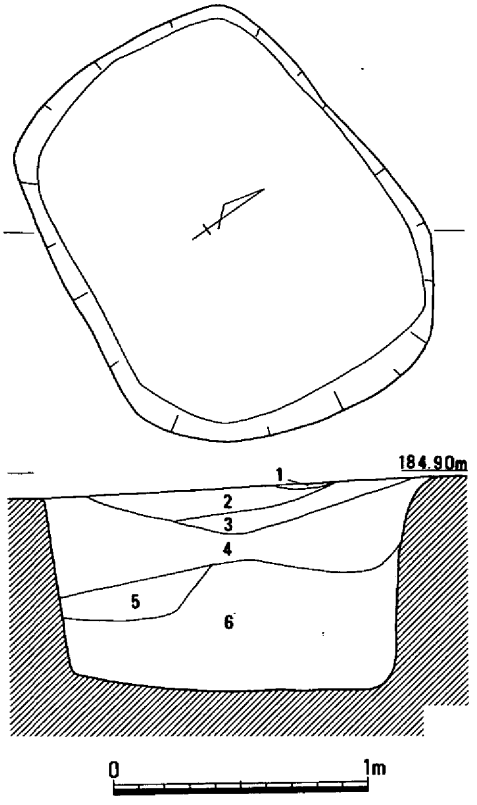
土器から弥生時代後期中葉と考えたい。

土壙220（第226図）

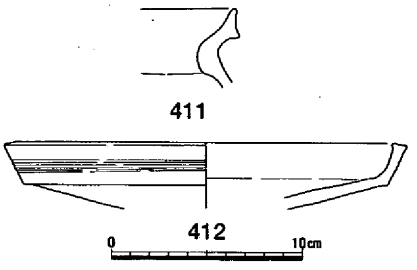
２区南部の竪穴住居21の北東で検出した。竪穴住居21を取り囲むように検出された、長方形土壙の１つである。平面形は隅丸長方形を呈し、床面の長辺は198cm、短辺は75cm、深さは42cmを測る。壁はやや外傾し、全体に箱形を呈している。

遺物は、土器の細片が出土している。

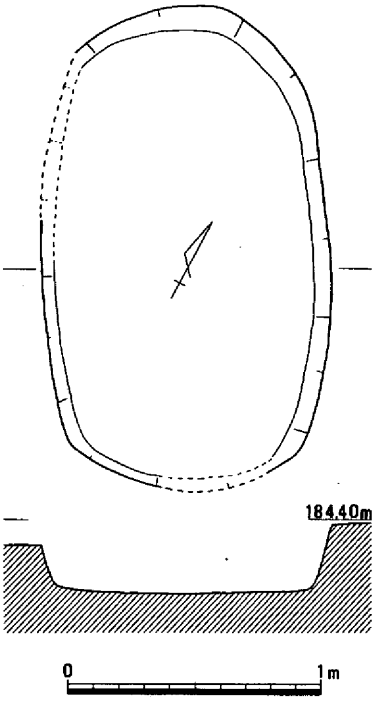
土器から弥生時代後期と考えたい。



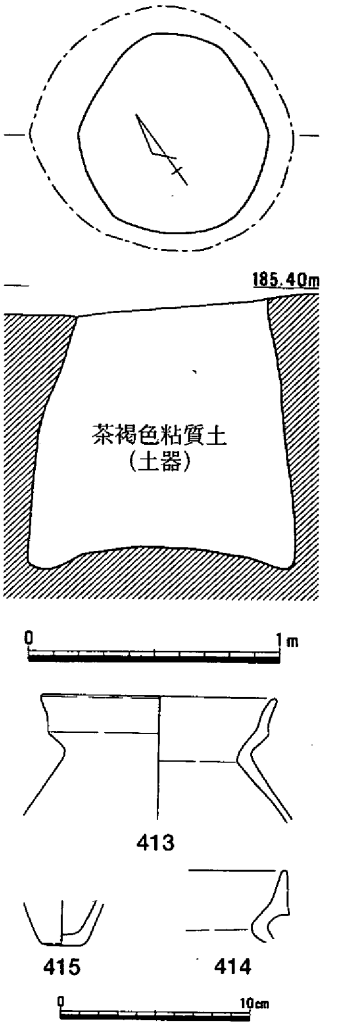
1．淡黄橙色粘性砂質土（土器）
2．淡黄橙色粘性砂質土
3．淡黄褐色粘性砂質土
4．暗褐色粘性砂質土
5．明黄褐色粘性砂質土
6．明黄褐色粘性砂質土



第227図　土壙221（1／30）・出土遺物（1／4）



第228図　土壙222（1／30）



第229図　土壙223（1／30）・出土遺物（1／4）

土壙221（第227図）

２区南部の竪穴住居26の東で検出した。平面形は長辺の短い長方形を呈し、床面の長辺は152cm、短辺は117cm、深さは83cmを測る。

遺物は、甕と高杯の細片が出土している。

土器から弥生時代後期中葉と考えたい。

土壙222（第228図）

２区南部の竪穴住居25の東で検出した。平面形は楕円形を呈し、床面の長径は178cm、短径は102cm、深さは25cmを測る。壁はやや外傾し、全体に箱形を呈している。床面はほぼ平坦である。

遺物は、土器の細片が出土しており、土器から弥生時代後期と考えたい。

土壙223（第229図）

２区南部の竪穴住居25の南で検出した。平面形は円形を呈し、床面の径は104cm、深さは108cmを測る。壁はやや内傾し、全体に袋状を呈している。床面は中心部が盛り上がる。

遺物は、甕とミニチュア土器片が出土しているが、土器から弥生時代後期と考えたい。

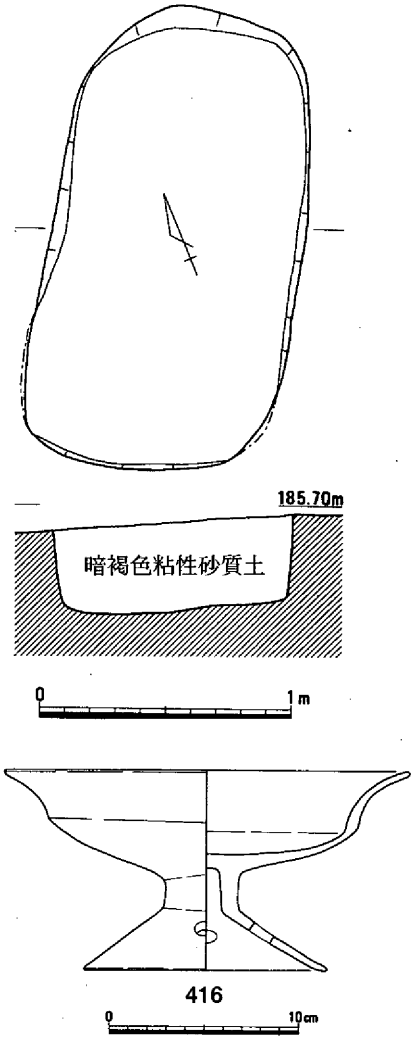
土壙224

（第230図、図版33）

２区中央の竪穴住居27の南で検出した。平面形は長方形を呈し、床面の長辺は174cm、短辺は90cm、深さは34cmを測る。壁は垂直で、全体に箱形を呈している。床面はほぼ平坦である。

遺物は、完形に近い高杯が出土している。口縁端部は緩やかに外反している。

土器から弥生時代後期中葉と考えたい。



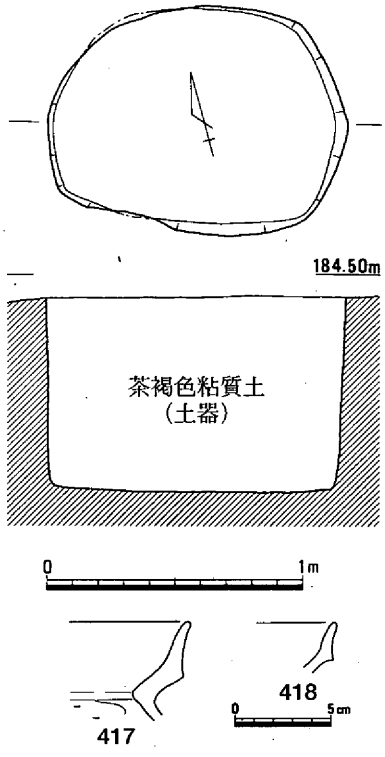
第230図　土壙224（1／30）・出土遺物（1／4）

土壙225（第231図）

２区南部の竪穴住居26の床面で検出した。平面形は隅丸長方形に近い形を呈し、床面の長辺は110cm、短辺は84cm、深さは77cmを測る。壁は垂直で、全体に箱形を呈している。床面は平坦である。この土壙のために、竪穴住居26の床面が10cm以上も地盤沈下していた。

遺物は、土器の細片が出土している。

土器から弥生時代後期後葉と考えたい。



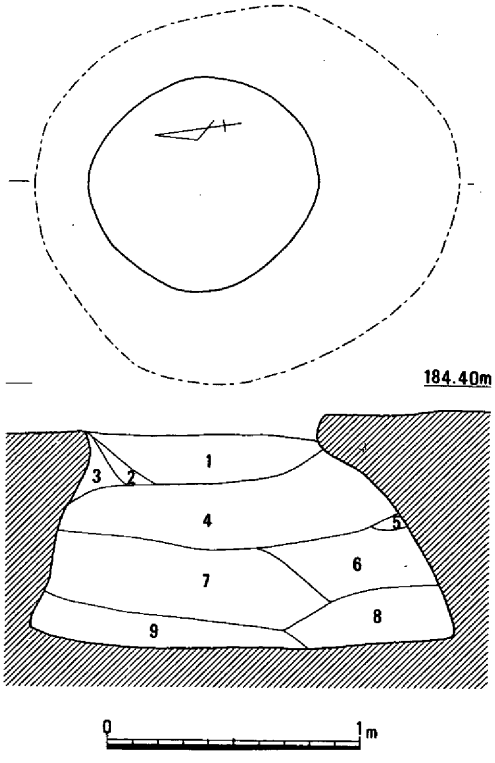
第231図　土壙225（1／30）・出土遺物（1／4）

土壙226（第232図）

２区南部の竪穴住居26の床面で検出した。土壙225の東に存在した。平面形は円形を呈し、上面の径は90cm、床面の径は166cm、深さは84cmを測る。壁は大きく内傾し、全体に袋状を呈している。

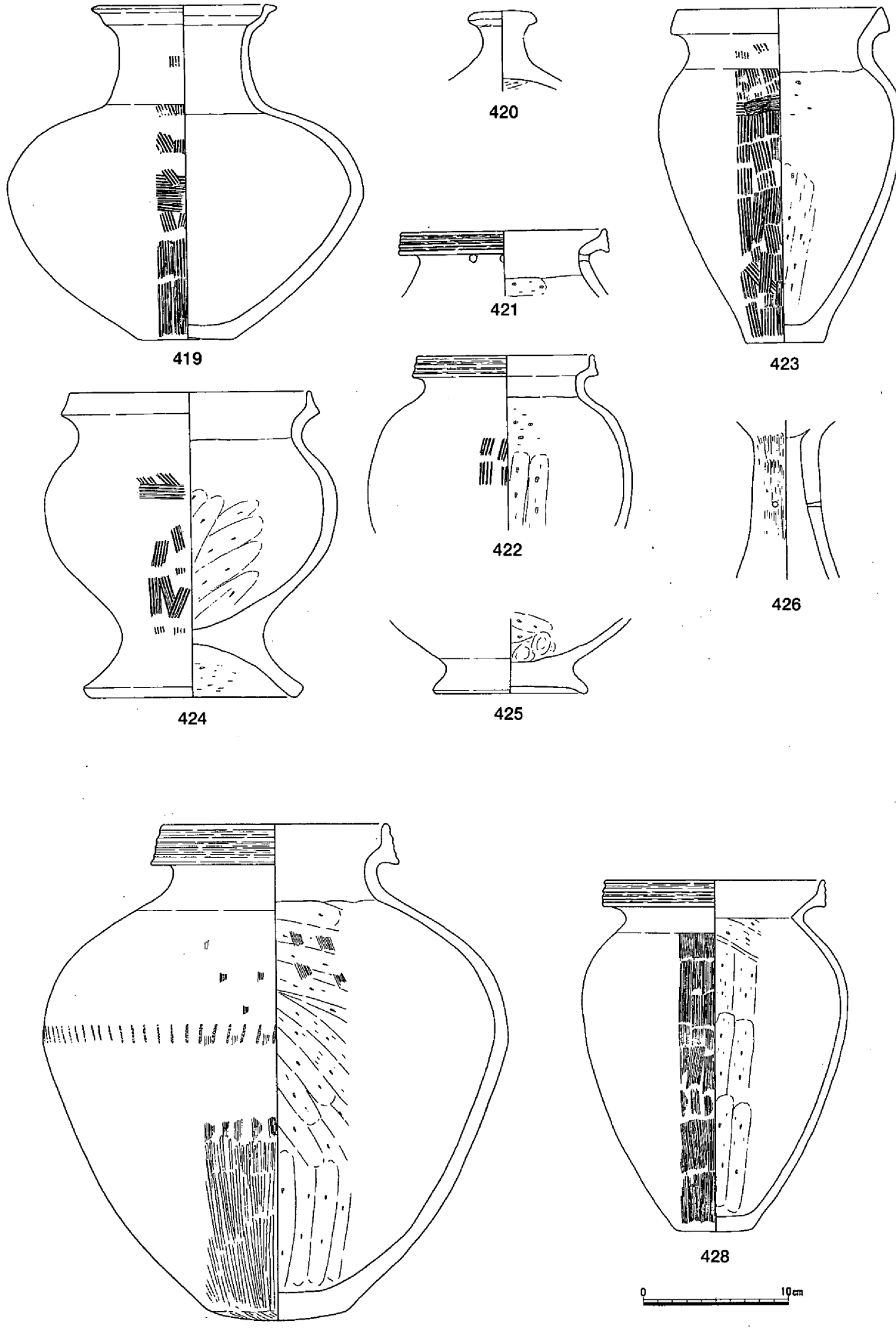
遺物は、検出面に近い上層から土器の細片が出土している。

土器から弥生時代後期と考えたい。



1．黄褐色粘質土（土器）
2．黄褐色粘質土
3．明黄褐色粘質土（土器）
4．明黄褐色粘質土
5．灰黄色粘質土
6．濃茶色粘質土
7．明黄褐色粘質土
8．濃茶色粘質土
9．茶色粘質土

第232図　土壙226（1／30）



第233図　土壙227出土遺物（1／4）

土壙227（第233・234図、図版26・34）

２区南部の竪穴住居26の東で検出した。平面形は上面は楕円形、床面は円形を呈する。上面の長径は180cm、短径は150cm、床面の径は144cm、深さは120cmを測る。壁は大きく内傾して立ち上がり、全体に袋状を呈している。床面は平坦であるが、東側には床面から40cmほど下がった窪みが認められる。

遺物は、第３層から集中して土器が出土している。完形に近いものも存在する。蓋、壺、甕、台付鉢、高杯が認められる。なお埋土の上層には、炭がレンズ状になって堆積していた。

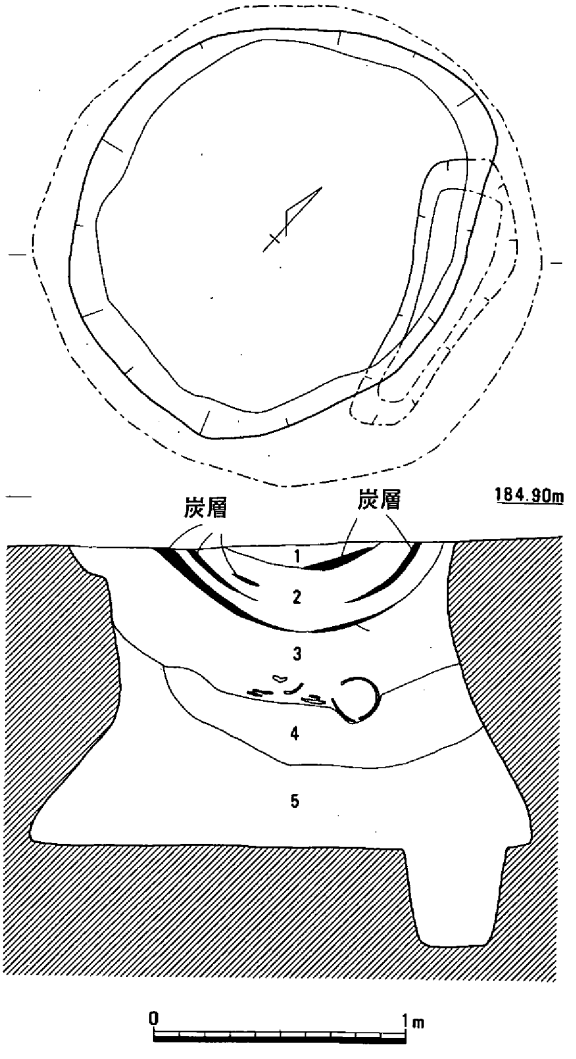
土器から弥生時代後期後葉と考えたい。

土壙228（第235図）

２区中央部の竪穴住居27の北西で検出した。平面形は円形を呈し、径は195cm、深さは28cmを測る。壁はやや外傾して立ち上がり、全体が洗濯用のたらいに似た形を呈している。床面は平坦である。

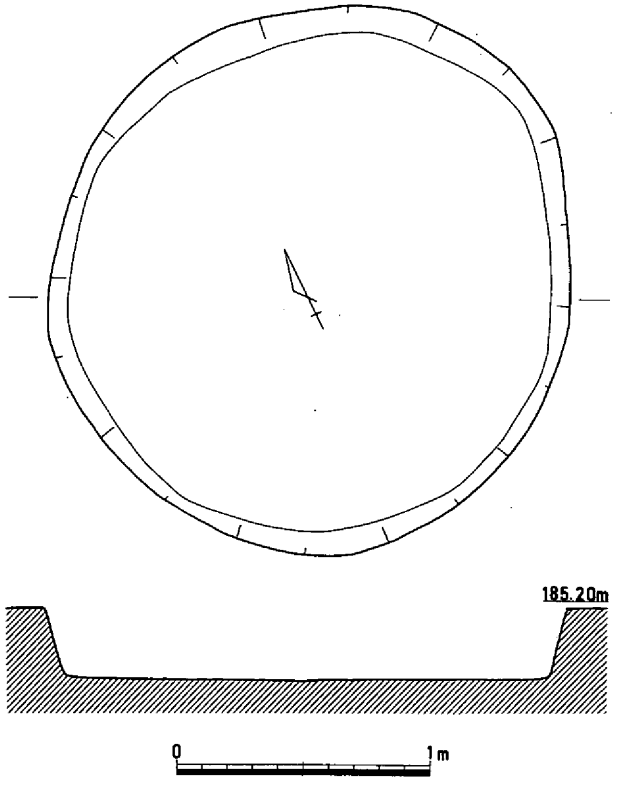
遺物は、土器の細片が出土している。

土器から弥生時代後期と考えたい。

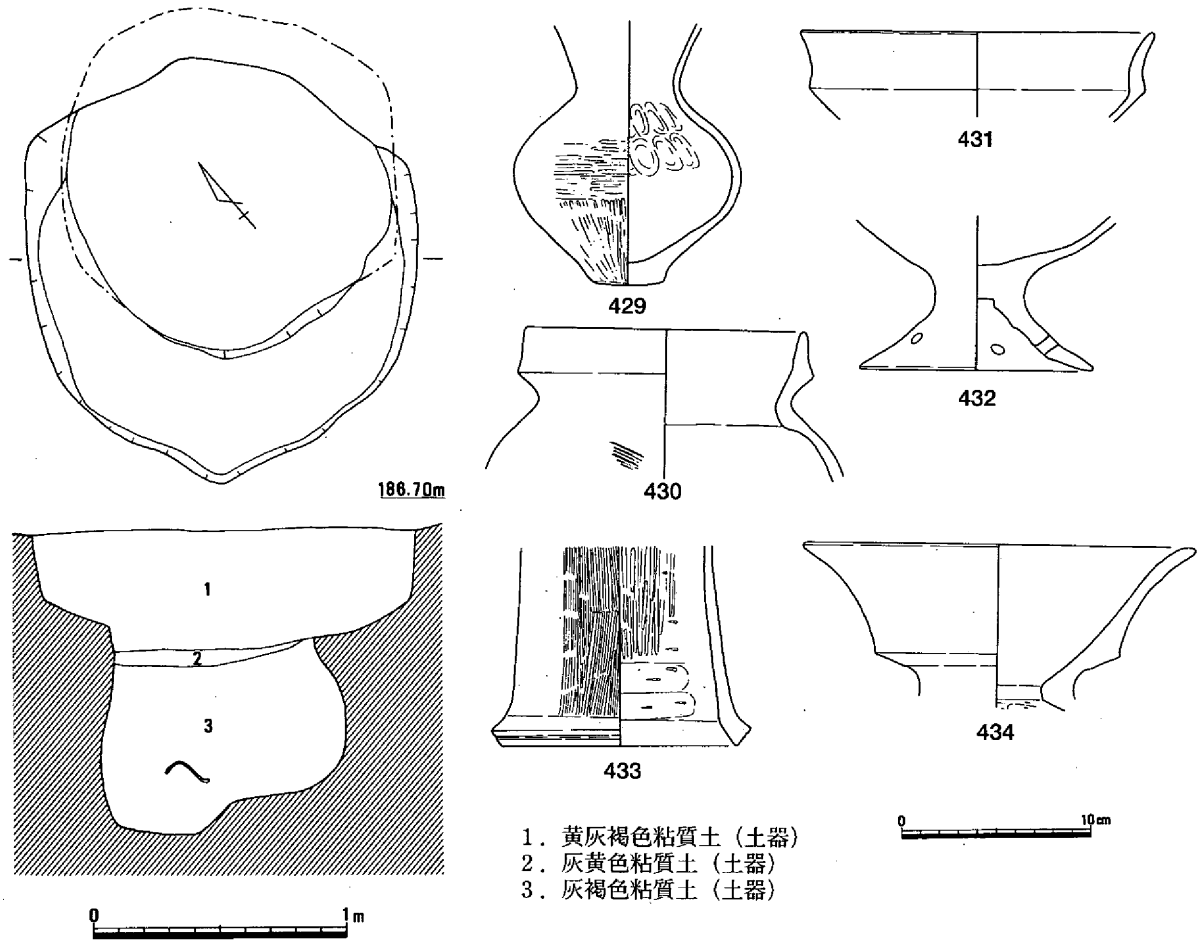


1．灰褐色粘質土
2．灰褐色粘質土（土器）
3．黄灰褐色粘質土（土器）
4．黄灰褐色粘質土
5．濃灰褐色粘質土

第234図　土壙227（1／30）



第235図　土壙228（1／30）



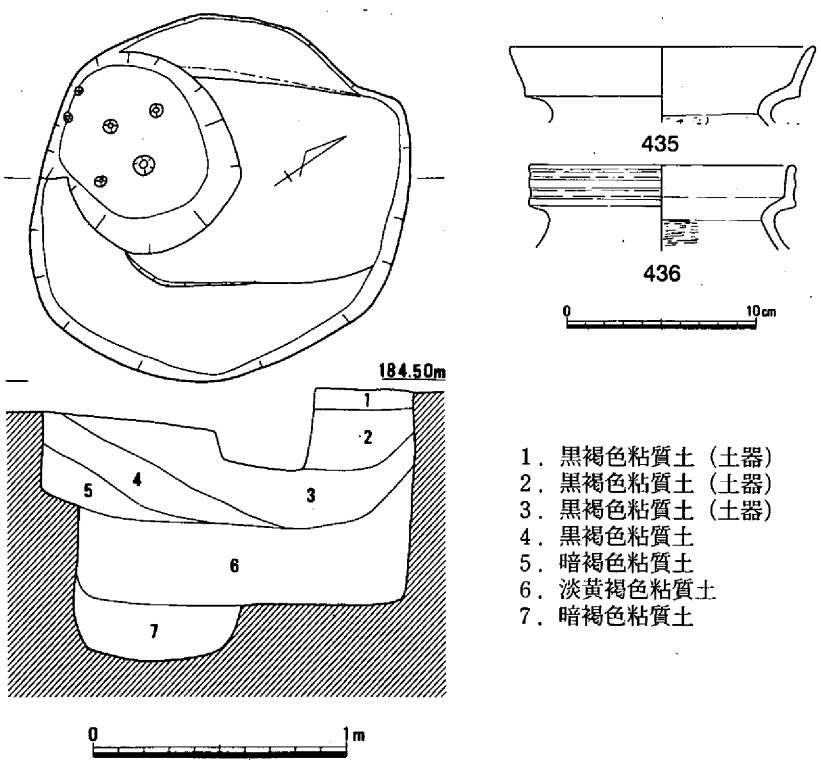
第236図　土壙229（1／30）・出土遺物（1／4）

土壙229（第236図、図版34）

２区南部の竪穴住居19の南東で検出した。２基の土壙が重複している。上層のものは平面形は円形を呈し、床面の径は140cm、深さは45cmを測る。下層のものも平面形は円形を呈し、断面形は袋状で床面の径は135cm、深さは60cmを測る。

遺物として、上位の層から壺、甕、高杯、鼓形器台などの土器片が出土している。

土器から弥生時代後期後葉と考えたい。



第237図　土壙230（1／30）・出土遺物（1／4）

土壙230（第237図）

２区南部の土壙225の北に位置する竪穴住居26の床面に検出した。３基の土壙が重複している。上層のものの平面形は円形を呈し、床面の径は140cm、深さは55cmを測る。中層のものは長方形で、長辺は130cm、短辺は80cm、深さは90cmを測る。下層のものは円形を呈し、底部は椀形で、数か所に杭痕跡がある。その床面の径は50cm、深さは20cmを測る。

遺物は埋土の上層から甕の破片が出土している。

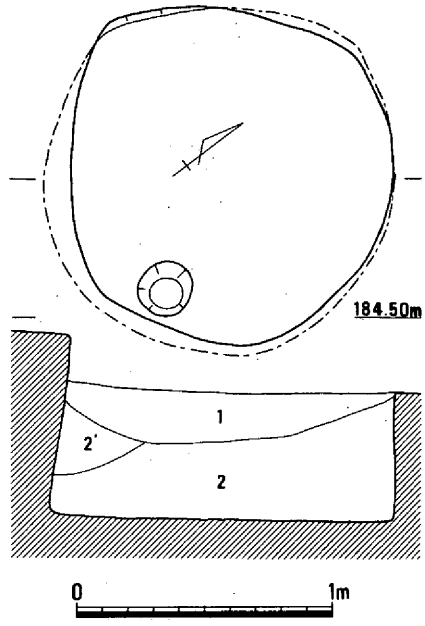
土器から弥生時代後期と考えたい。

土壙231（第238図）

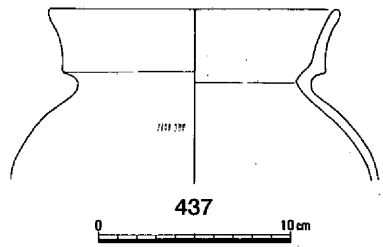
２区南部の竪穴住居26の床面に検出した。平面形は円形で、断面形は袋状を呈し、床面の径は138cm、深さは50cmを測る。床面には１か所の柱穴がある。

遺物は埋土の上層から土器片が出土している。

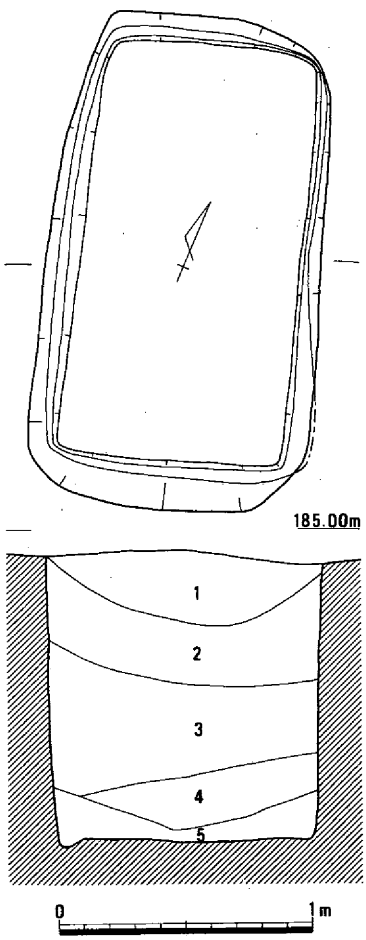
土器から弥生時代後期と考えたい。

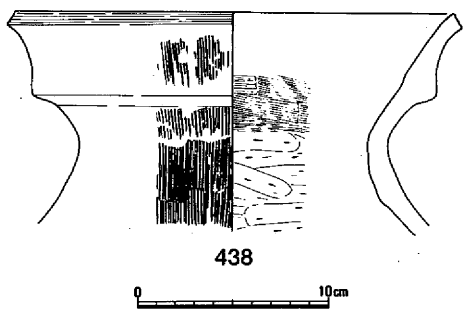


１．黒褐色粘質土
２．黒褐色粘質土



第238図　土壙231（1／30）・出土遺物（1／4）





１．灰黄褐色粘質土
２．黒褐色粘質土
３．黒褐色粘質土
４．明褐色土
５．黒褐色粘質土

第239図　土壙232（1／30）・出土遺物（1／4）

土壙232（第239図）

２区南部の竪穴住居26の北で検出した。平面形は長方形で箱形を呈し、床面の長辺は177cm、短辺は98cm、深さは115cmを測る。床面の周囲には溝が巡る。

遺物は土器片が出土している。

弥生時代後期と考えたい。

土壙233（第240図）

２区南部の竪穴住居26の北で検出した。平面形は円形で、平坦な床面の径は120cm、深さは124cmを測る。壁は内傾して立ち上がり、断面形は下端部の広い円筒形を呈する。

遺物は土器片が出土している。

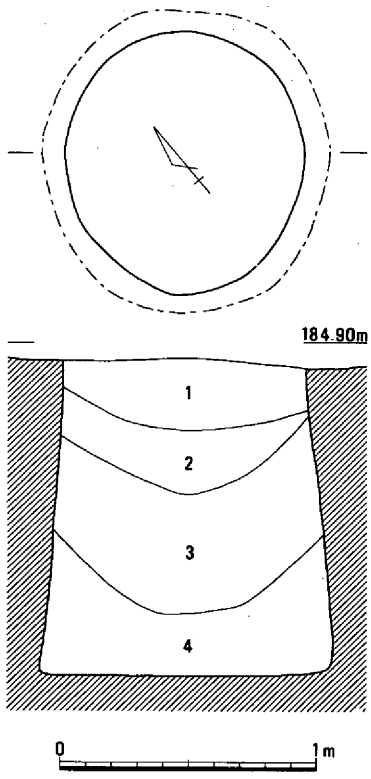
土器から弥生時代後期と考えたい。

土壙234（第241図、図版23）

２区南部の竪穴住居30の東で検出した。平面形は円形に近い形で、断面形は下端部の広い筒形を呈し、平坦な床面の径は152cm、深さは141cmを測る。

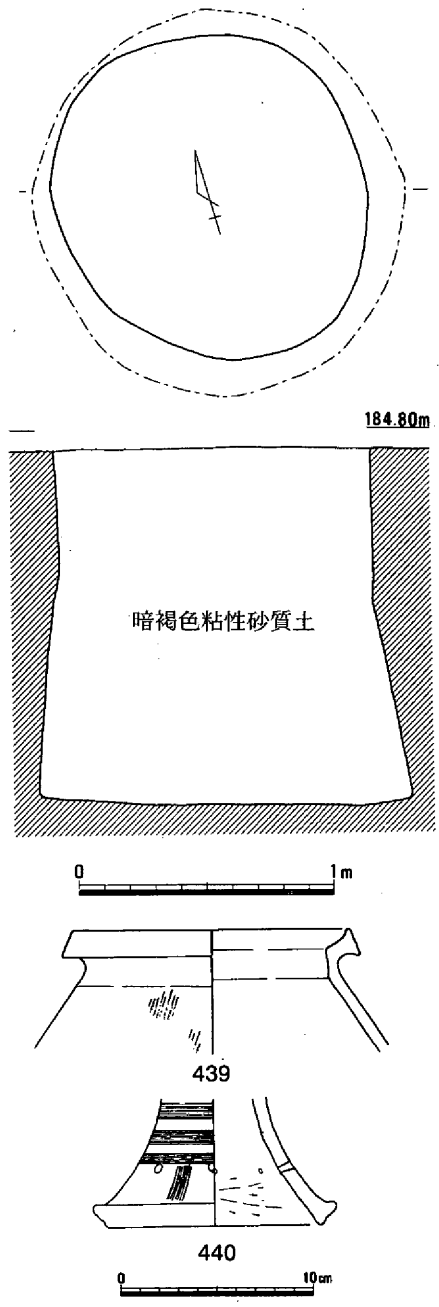
遺物は土器片が出土している。甕は口縁部片、高杯は脚部片である

土器から弥生時代後期前葉と考えたい。

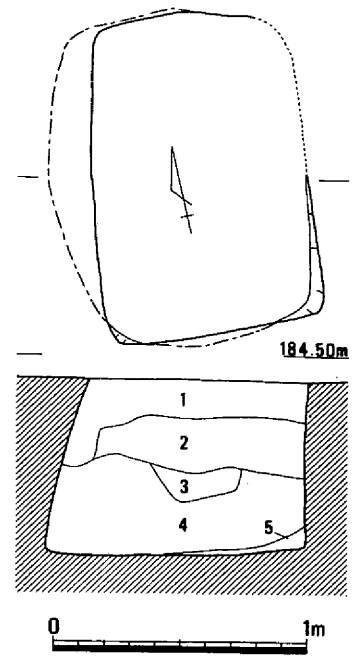


1．淡黄褐色粘質土
2．淡黄褐色粘質土
3．褐色粘質土
4．褐色粘質土

第240図　土壙233（1／30）



第241図　土壙234（1／30）・出土遺物（1／4）



1．暗褐色粘性砂質土
2．淡黄褐色粘性砂質土（土器）
3．明黄褐色土
4．灰黄褐色粘性砂質土
5．黒褐色粘性砂質土

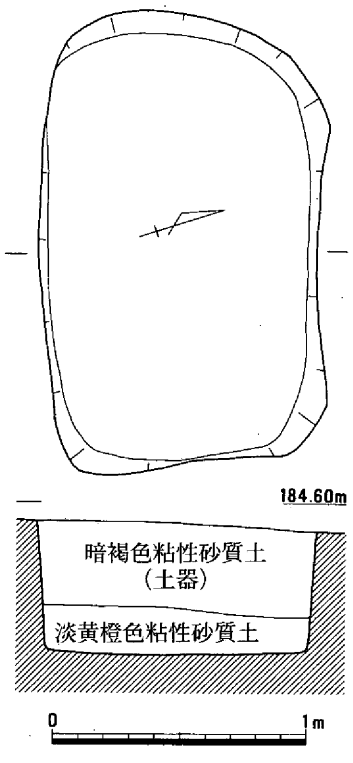
第242図　土壙235（1／30）

土壙235（第242図）

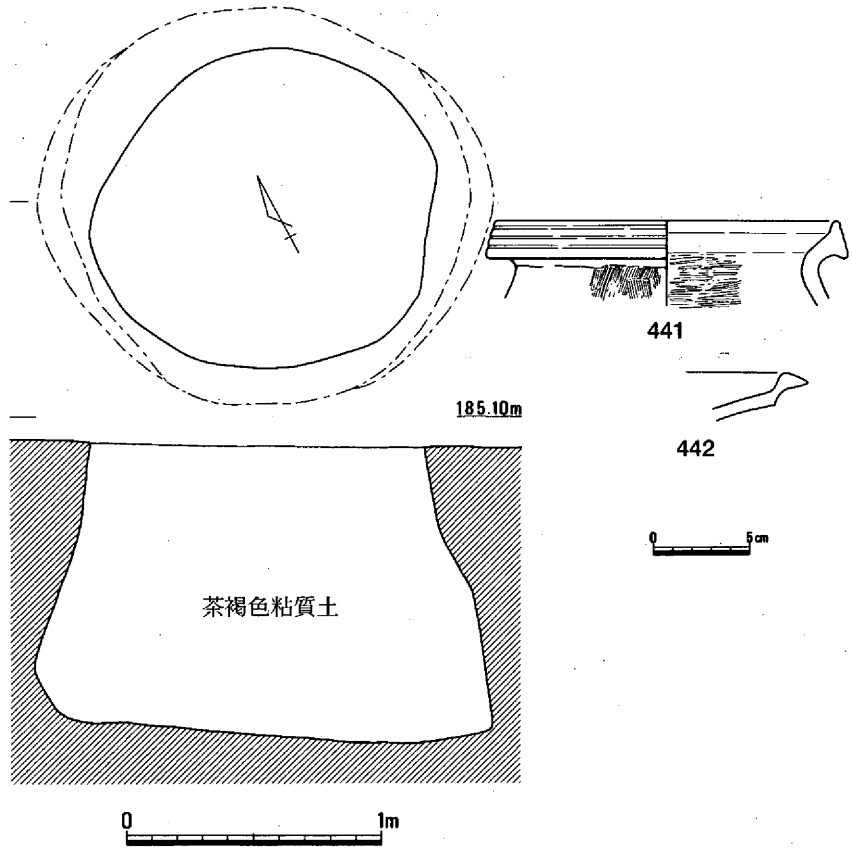
２区南部の竪穴住居26の床面で検出し、土壙231に切られている。平面形は長方形で、断面形は下端部の広い箱形を呈し、平坦な床面の長辺は135cm、短辺は102cm、深さは70cmを測る。西壁が著しく内傾して立ち上がる。

遺物は第２層から土器片が出土している。

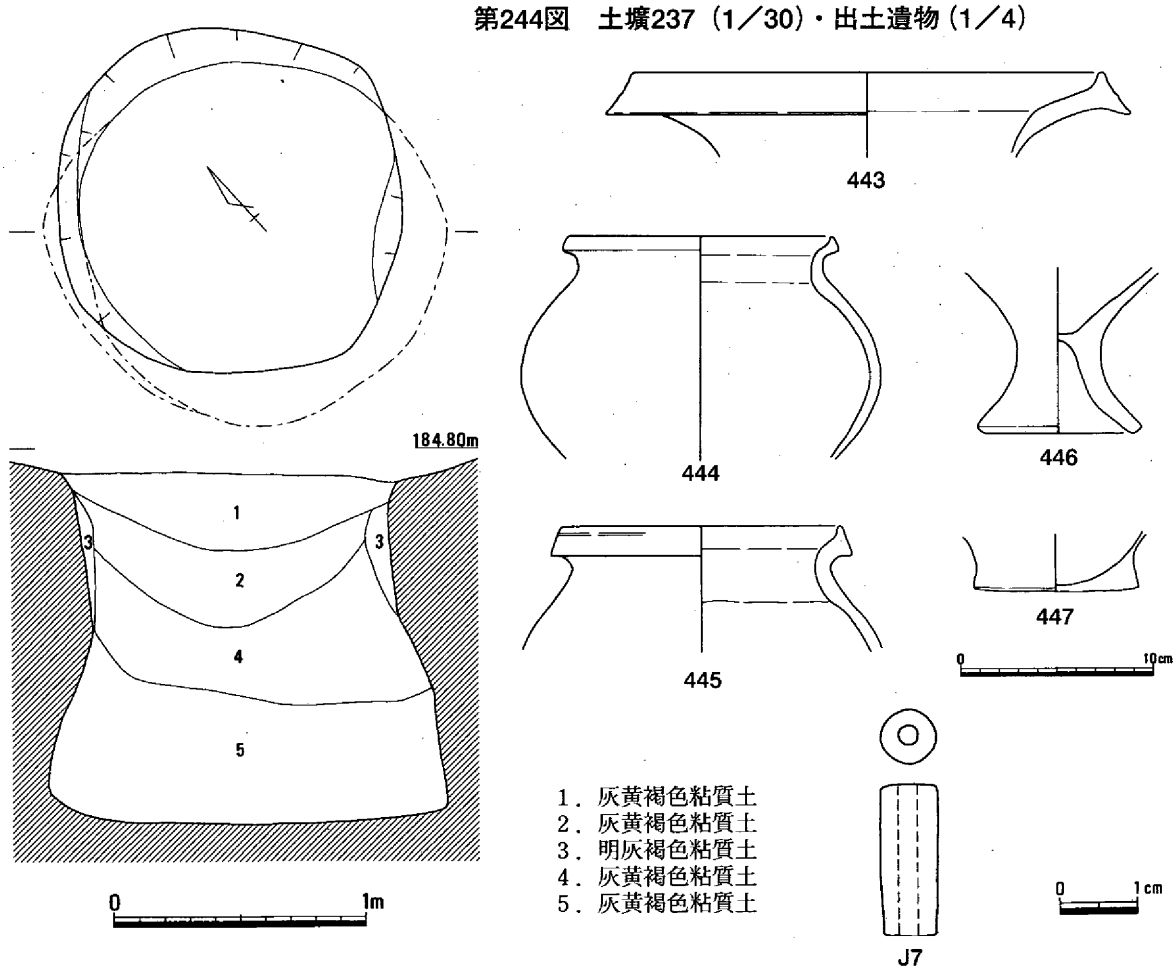
土器から弥生時代後期と考えたい。



第243図　土壙236（1／30）



第244図　土壙237（1／30）・出土遺物（1／4）



第245図　土壙238（1／30）・出土遺物（1／4、1／1）

土壙236（第243図）

２区南部の竪穴住居26の床面で検出した。平面形は東西に長い隅丸長方形に似た形で、断面形は箱形を呈し、平坦な床面の長辺は168cm、短辺は102cm、深さは50cmを測る。埋土は２層に分けることができた。

遺物は第１層から土器片が出土している。

土器から弥生時代後期と考えたい。

土壙237（第244図）

２区南部の竪穴住居26の北で検出した。平面形は楕円形に近い形で、長径は140cm、短径は130cmである。断面形は袋状を呈し、平坦な床面の長径は170cm、短径は158cm、深さは116cmを測る。埋土は分層することができなかった。

遺物は甕と高杯の土器片が出土している。

土器から弥生時代後期初頭と考えたい。

土壙238（第245図、図版38）

２区南部の竪穴住居30の南で検出した。平面形は径130cmの円形で、断面形は南に片寄った袋状を呈し、平坦な床面の径は146cm、深さは138cmを測る。埋土は５層に分けることができた。第２層の下部には、竪穴住居で使用されたと思われる河原石が埋まっていた。

遺物は壺、甕、鉢の土器片のほかに、凝灰岩製の管玉が出土している。土器片はいずれも器表面が磨滅して、調整手法が観察できない。管玉は長さ19.8mm、径7.0mm、孔径2.7mm、重量1.38gを測る。

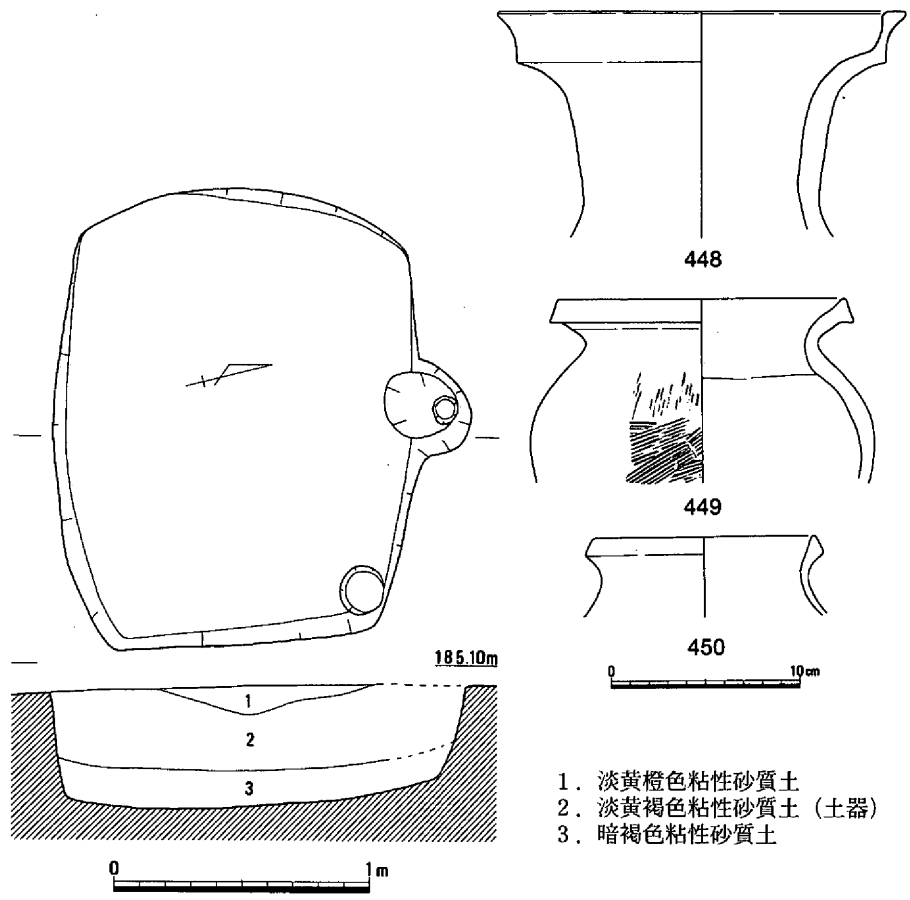
土器から弥生時代後期中葉と考えたい。

土壙239(第246図)

２区南部の竪穴住居31の北10ｍで検出した。平面形は胴張り状になった長方形で、断面形は箱形を呈し、平坦な床面の長辺は168cm、短辺は134cm、深さは47cmを測る。床面の北東隅には、浅い柱穴状の窪みが認められた。

遺物は第２層から土器片が出土している。壺は口縁端部に特徴がある。

土器から弥生時代後期中葉と考える。



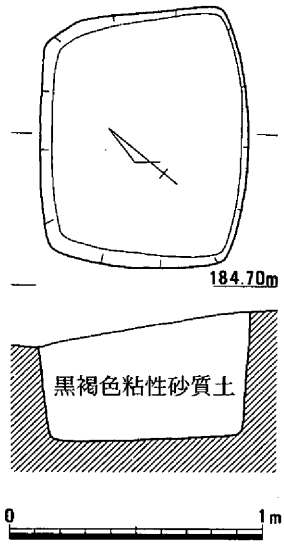
第246図　土壙239（1／30）・出土遺物（1／4）

土壙240

（第247図、図版21）

２区南部の竪穴住居30の床面で検出した。平面形は胴張り状になった長方形で、平坦な床面の長辺は92cm、短辺は75cm、深さは48cmを測る。

遺物は、弥生時代後期と考える土器片が出土している。



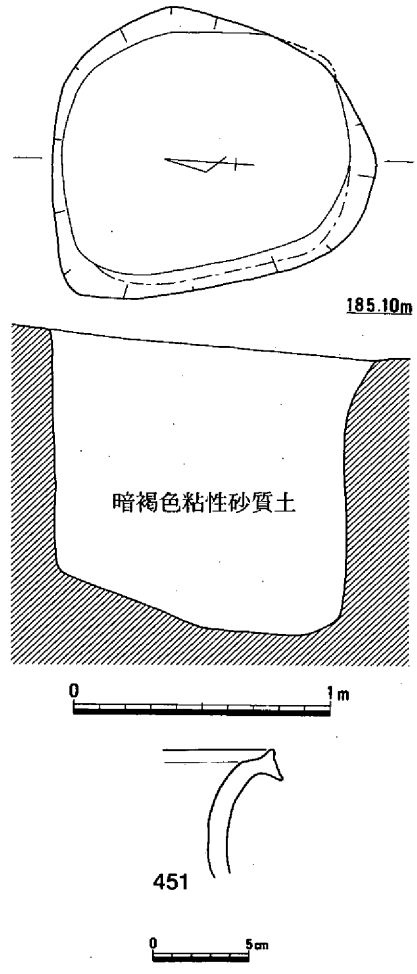
第247図　土壙240（1／30）

土壙241

（第248図、図版21）

２区南部の竪穴住居31の床面で検出した。平面形は胴張り状になった長方形で、断面形は箱形を呈し、床面の長辺は112cm、短辺は90cm、深さは110cmを測る。

遺物は弥生時代後期初頭と考える壺の破片が出土している。

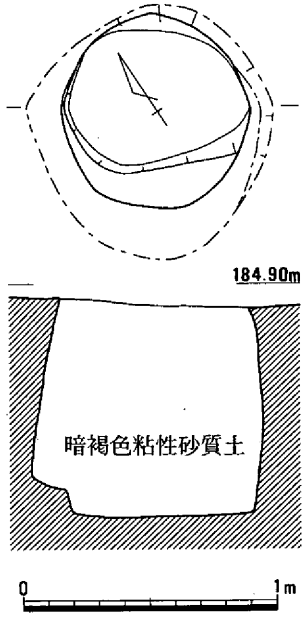


第248図　土壙241（1／30）・出土遺物（1／4）

土壙242（第249図）

２区南部の竪穴住居31の床面で検出した。平面形は楕円形で、断面形は袋状を呈し、床面の長径は70cm、短径は53cm、深さは86cmを測る。床面の南側に段がある。

遺物は弥生時代後期と考える土器片が出土している。

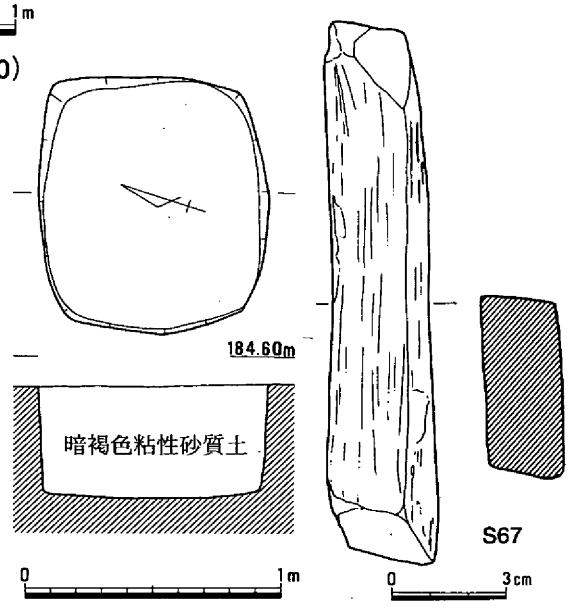


第249図　土壙242（1／30）

土壙243（第250図）

２区南部の竪穴住居26の床面で検出した。平面形は胴張り状になった正方形に近い長方形で、断面形は箱形を呈し、床面の長辺は96cm、短辺は84cm、深さは44cmを測る。

遺物は弥生時代後期と考える土器片のほかに、砥石が出土している。



第250図　土壙243（1／30）・出土遺物（1／2）

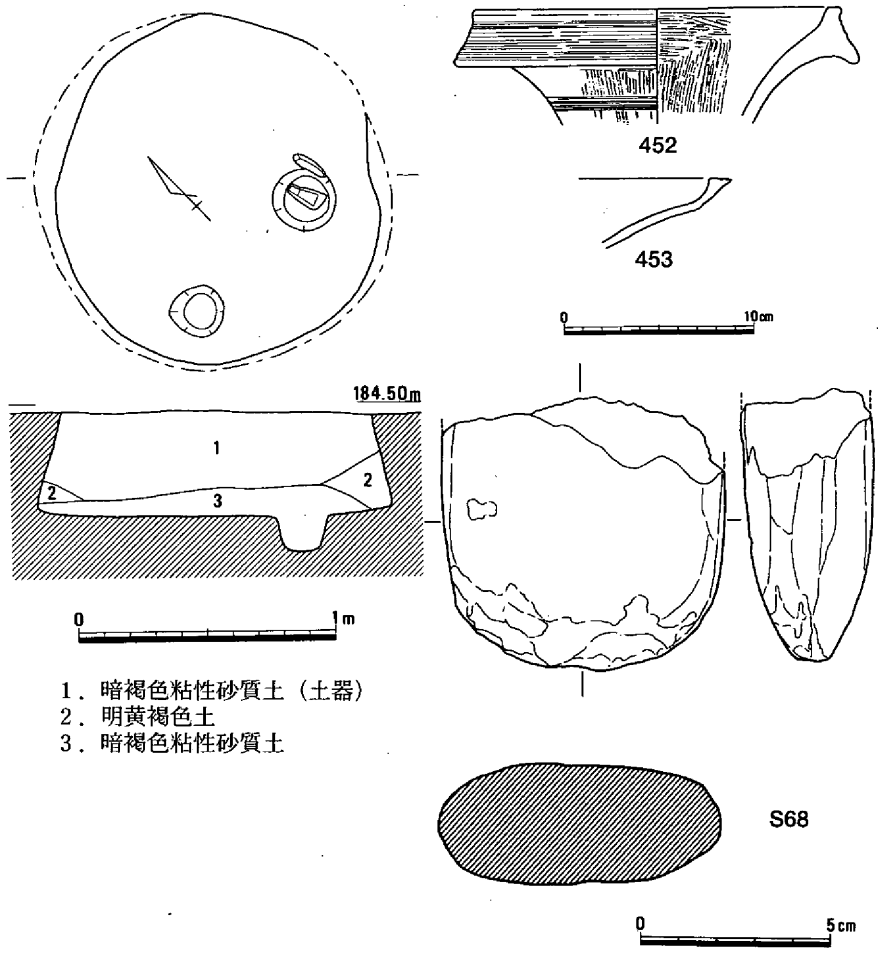
土壙244

（第251図、図版41）

２区南部の土壙243の南に位置する竪穴住居26の床面で検出した。平面形は円形で、断面形は袋状を呈し、床面の径は136cm、深さは56cmを測る。床面には南側に柱穴が２か所ある。その１か所には河原石が入っていた。

遺物は壺と高杯の土器片のほかに、玄武岩製の石斧がある。

土器から弥生時代後期初頭と考えたい。



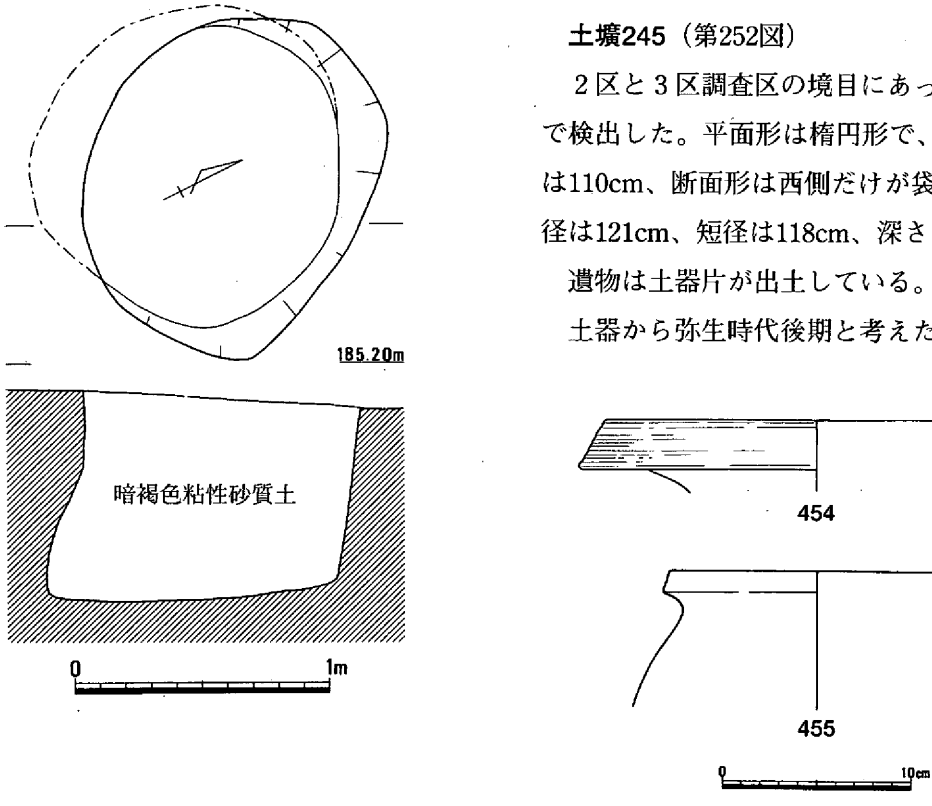
第251図　土壙244（1／30）・出土遺物（1／4、1／2）

土壙245（第252図）

２区と３区調査区の境目にあって、竪穴住居31の南で検出した。平面形は楕円形で、長径は136cm、短径は110cm、断面形は西側だけが袋状を呈し、床面の長径は121cm、短径は118cm、深さは82cmを測る。

遺物は土器片が出土している。

土器から弥生時代後期と考えたい。



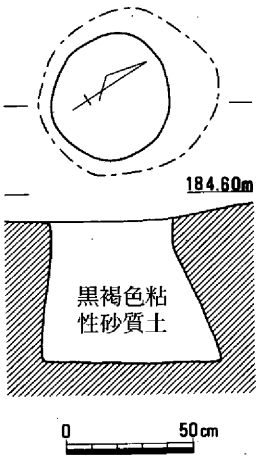
第252図　土壙245（1／30）・出土遺物（1／4）

土壙246（第253図）

２区竪穴住居30の床面で検出した。平面形は円形で、断面形は袋状を呈し、床面の径は70cm、深さは55cmを測る。

遺物は土器片が出土している。

土器から弥生時代後期と考えたい。



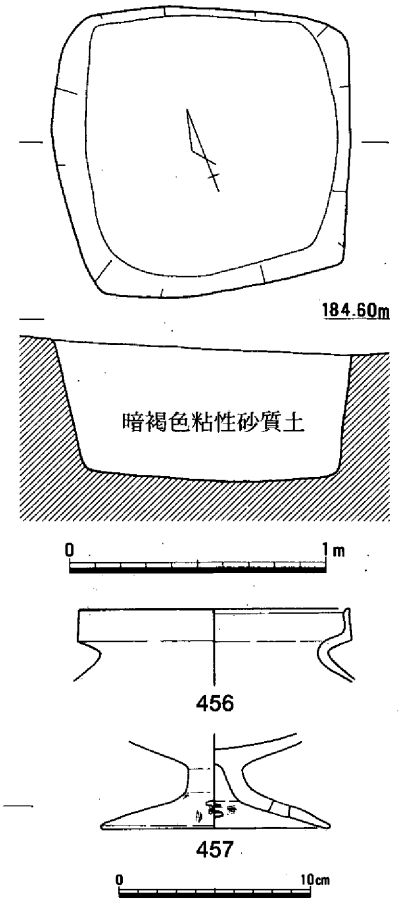
第253図　土壙246（1／30）

土壙247（第254図）

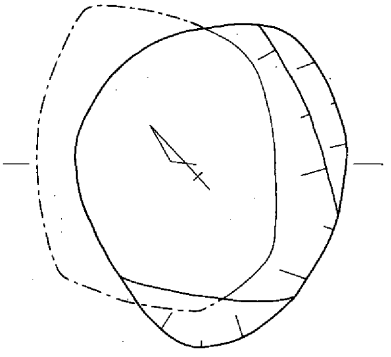
２区南部の竪穴住居26の床面で検出した。平面形はほぼ正方形に近い。断面形は箱形を呈し、床面の１辺は100cm、深さは50cmを測る。

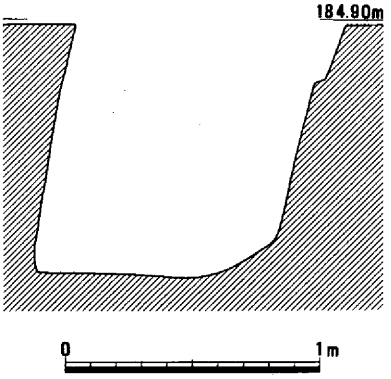
遺物は甕と高杯の破片が出土している。

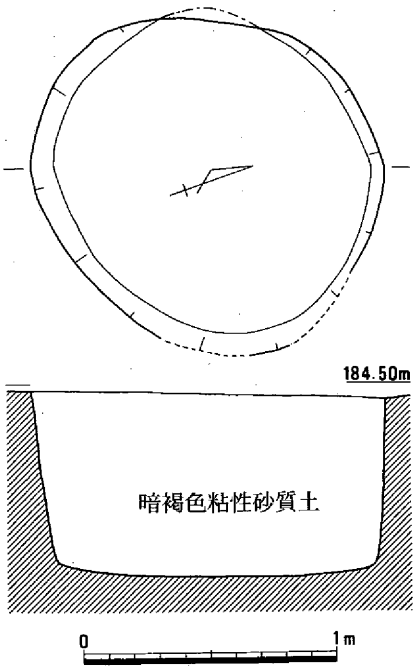
土器から弥生時代後期後葉と考えたい。



第254図　土壙247（1／30）・
出土遺物（1／4）





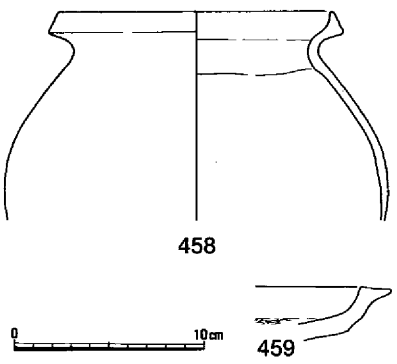


第255図　土壙248（1／30）

土壙248（第255図）

２区の竪穴住居26の床面で検出した円形土壙で、床面の径は130cm、深さは68cmを測る。

遺物は弥生時代後期の土器片が出土している。

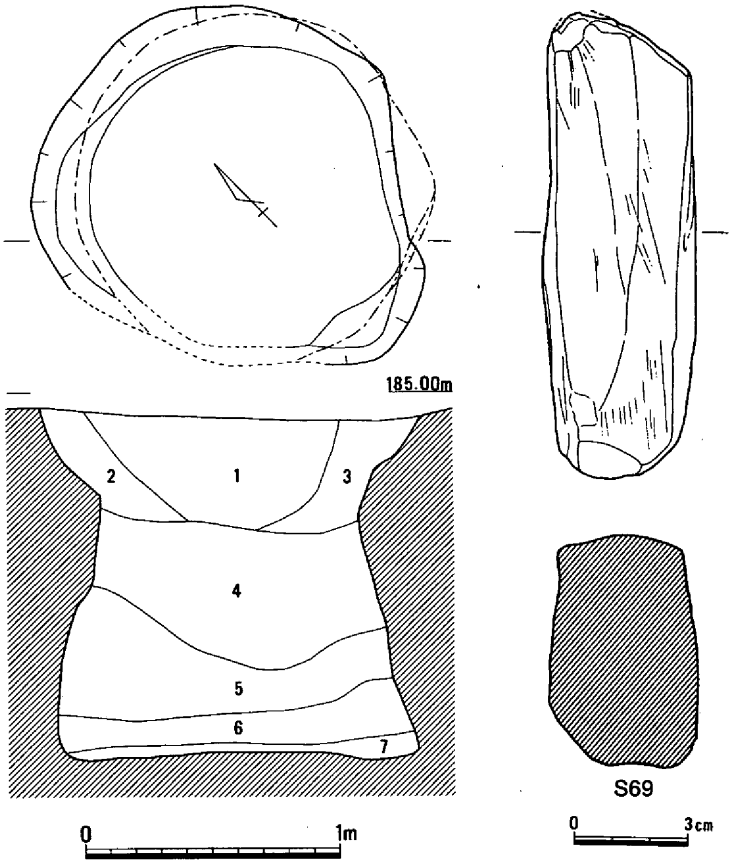


第256図　土壙249（1／30）・
出土遺物（1／4）

土壙249（第256図）

２区の竪穴住居31の床面で検出した楕円形の土壙で、北西方向に向かって斜めに掘り込んでいる。床面の長径は115cm、短径は94cm、深さは98cmを測る。

弥生時代後期前葉の甕と高杯が出土している。



1．黄灰褐色粘質土　5．灰褐色粘質土
2．黄灰褐色粘質土　6．暗灰褐色粘質土
3．黄灰褐色粘質土　7．黒褐色粘質土
4．灰褐色粘質土

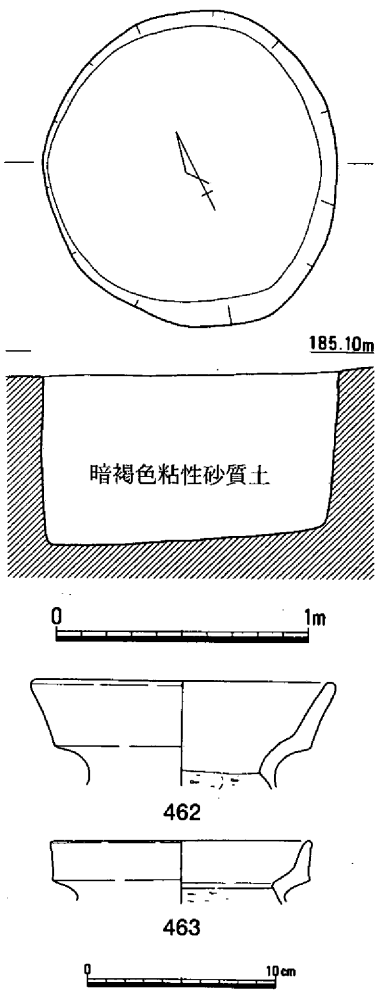
第257図　土壙250（1／30）・出土遺物（1／2、1／4）

土壙250（第257図）

２区北部の竪穴住居34の東に存在して、その一部を切っている。平面形は円形に近い形で、断面形は袋状になっている。床面は平坦で、南側に周溝状の窪みが認められる。床面の径は120cm、深さは138cmを測る。埋土は７層に分割できた。

遺物は土器片のほかに、砥石が出土している。土器は甕と高杯の細片である。

土器から弥生時代後期後葉と考えたい。



第258図　土壙251（1／30）・出土遺物（1／4）

土壙251（第258図）

２区北部の竪穴住居32の南西にある。平面形は円形で、断面形は樽形を呈する。床面は平坦で、床面の径は109cm、深さは67cmを測る。

遺物は土器片が出土している。壺と甕である。

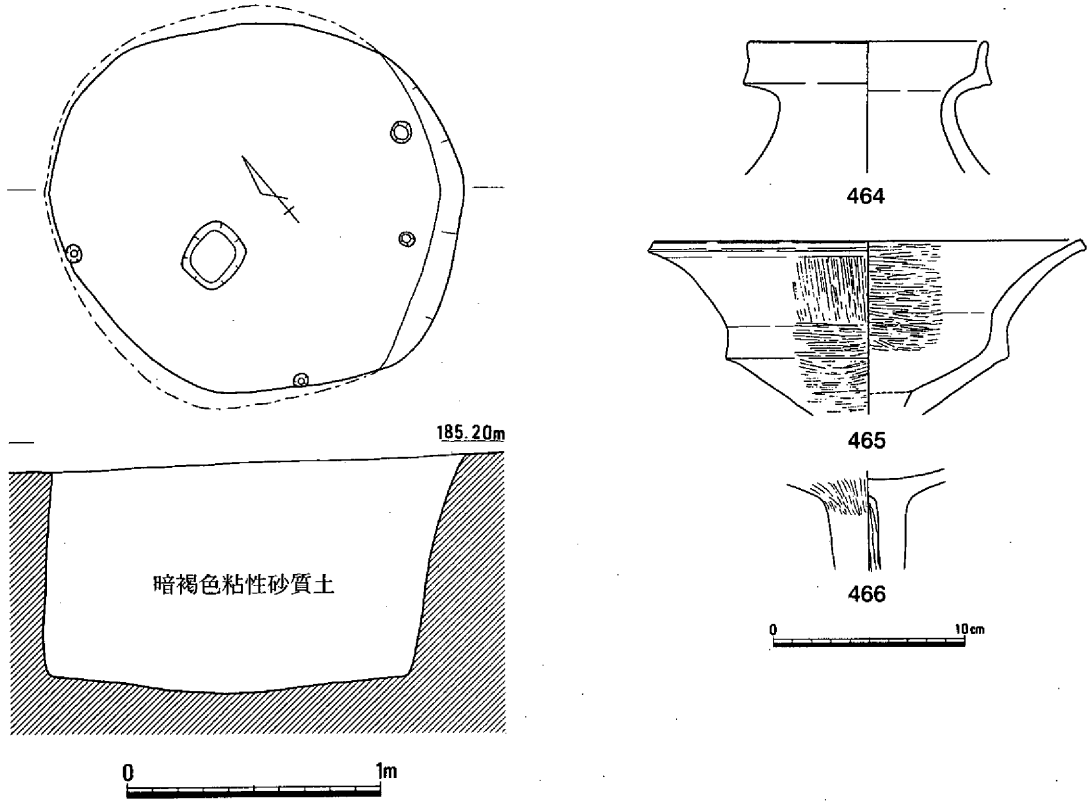
土器から弥生時代後期後葉と考えたい。

土壙252（第259図、図版35）

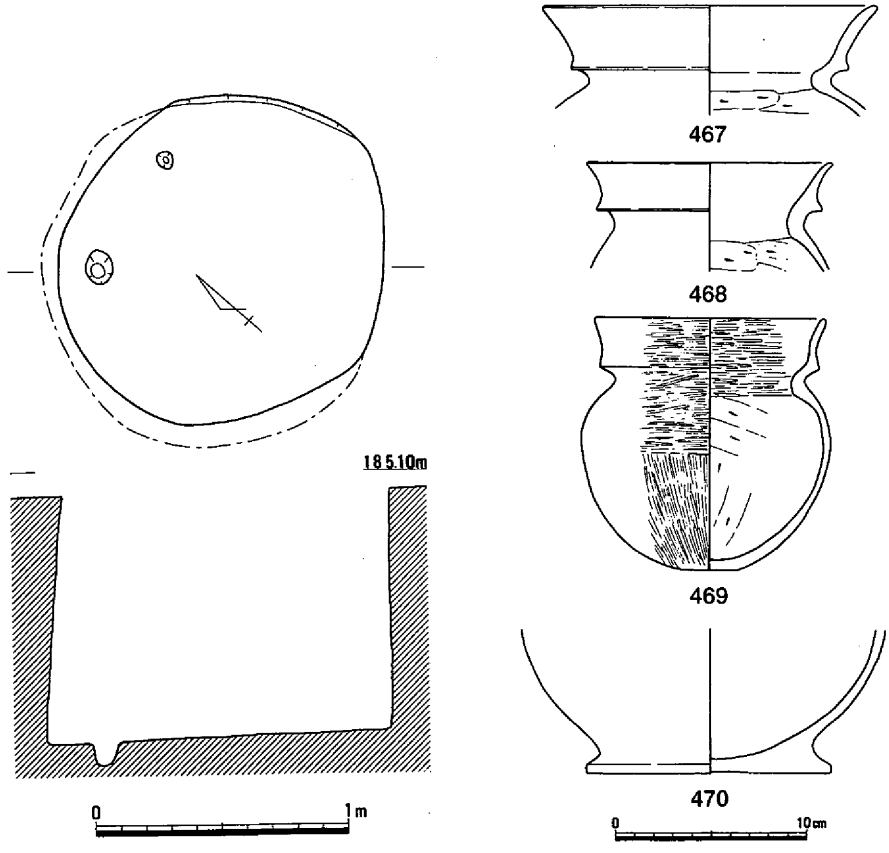
２区北部の竪穴住居32の南にある。平面形は円形で、断面形は樽形を呈する。床面は平坦で、４か所の杭痕跡と１か所の方形窪みが認められる。床面の径は158cm、深さは91cmを測る。

土器片が出土している。壺と高杯である。

土器から弥生時代後期中葉と考えたい。



第259図　土壙252（1／30）・出土遺物（1／4）



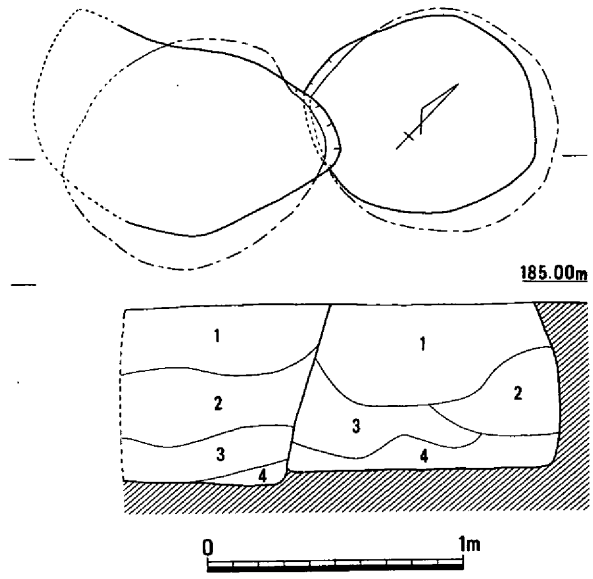
第260図　土壙253（1／30）・出土遺物（1／4）

土壙253（第260図、図版25・35）

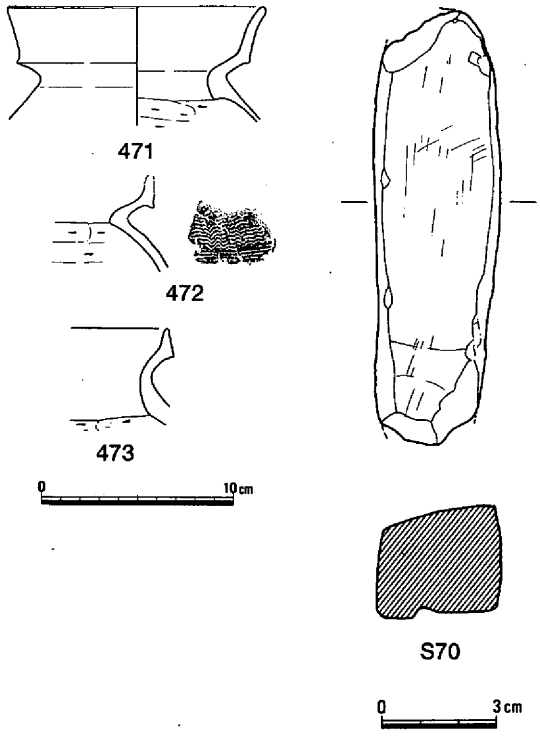
２区北部の竪穴住居33の南にある。平面形は円形で、断面形は樽形を呈する。わずかに裾広がりしている。床面は平坦で、２か所に杭痕跡が認められる。床面の径は134cm、深さは96cmを測る。

遺物には完形に復元できた土器も出土している。

土器から弥生時代後期後葉と考えたい。



1．灰褐色粘質土　　1．灰褐色粘質土
2．灰褐色粘質土　　2．灰褐色粘質土
3．褐色粘質土　　3．濃灰褐色粘質土
4．黒褐色粘質土　　4．灰褐色粘質土



第261図　土壙254・255（1／30）・出土遺物（1／4、1／2）

土壙254（第261図、図版25）

２区北部の竪穴住居33の南にある。土壙253によって一部分が切られている。床面の平面形は楕円形で、断面形は樽形を呈する。わずかに裾広がりしている。床面は平坦で、長径は102cm、短径は90cm、深さは71cmを測る。

第２層から甕の土器片が出土している。472には波状文が施文されている。

土器から弥生時代後期と考えたい。

土壙255（第261図、図版25）

２区北部の竪穴住居33の南にある。土壙254によって切られている。床面の平面形は円形で、断面形は袋状を呈する。床面の径は90cm、深さは65cmを測る。

遺物は土器片のほかに、流紋岩製の砥石が出土している。

土器から弥生時代後期と考えたい。

土壙256（第262図）

２区北部の竪穴住居37の南にある。検出面では径が180cmであるが、50cm下がってから規模が小さくなり、床面まで円筒形を呈している。床面の平面形は円形である。床面は平坦で、径は138cm、深さは133cmを測る。

遺物は第６層以外の層から短頸壺、甕、高杯の破片が出土している。

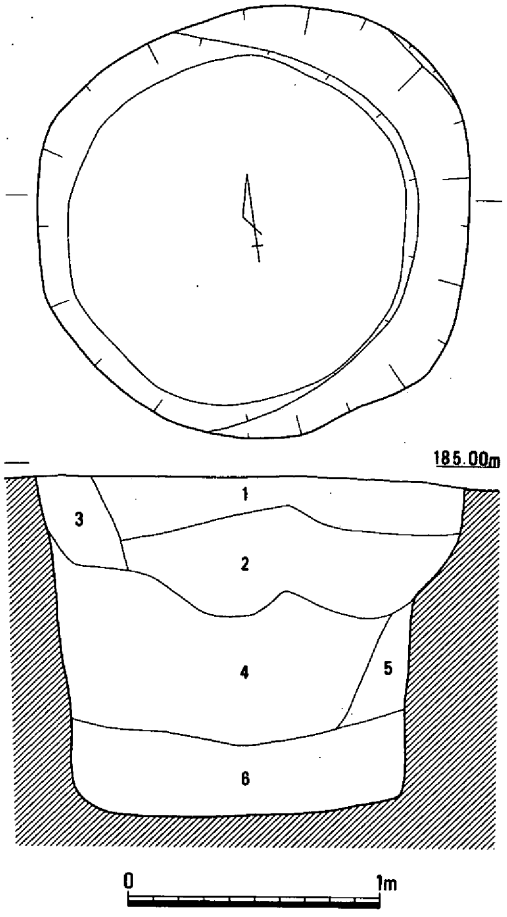
土器から弥生時代後期と考えたい。

土壙257（第263図、図版25）

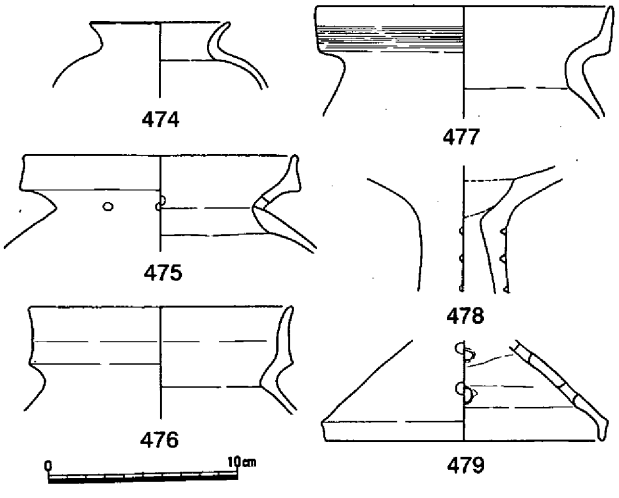
２区北部の竪穴住居37の南にあって、その一部分を切っている。検出面では径が150cmであるが、約50cm下がった位置で細くなってからまた少し裾広がりになる。床面の平面形は楕円形である。床面は平坦で、長径は132cm、短径は114cm、深さは147cmを測る。

遺物は第１層と第６層から土器片が出土している。しかし、実測できるほどの大きさはない。

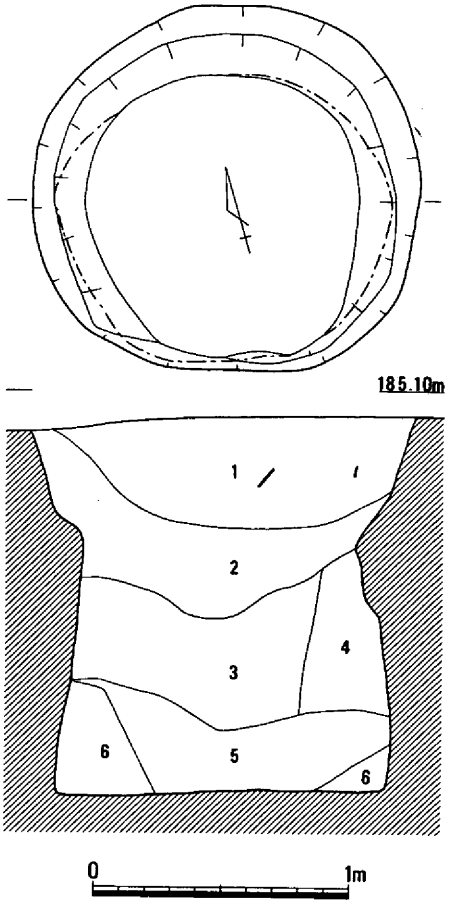
土器から弥生時代後期と考えたい。



1．淡灰褐色粘性砂質土（土器）
2．淡黄灰褐色粘性砂質土（土器）
3．灰褐色粘質土（土器）
4．灰褐色粘質土（土器）
5．灰褐色粘質土（土器）
6．暗灰褐色粘質土



第262図　土壙256（1／30）・出土遺物（1／4）



1．灰褐色粘質土(土器)
2．灰褐色粘質土
3．灰褐色粘土
4．暗灰褐色粘質土
5．暗灰褐色粘土
6．暗褐色粘土(土器)

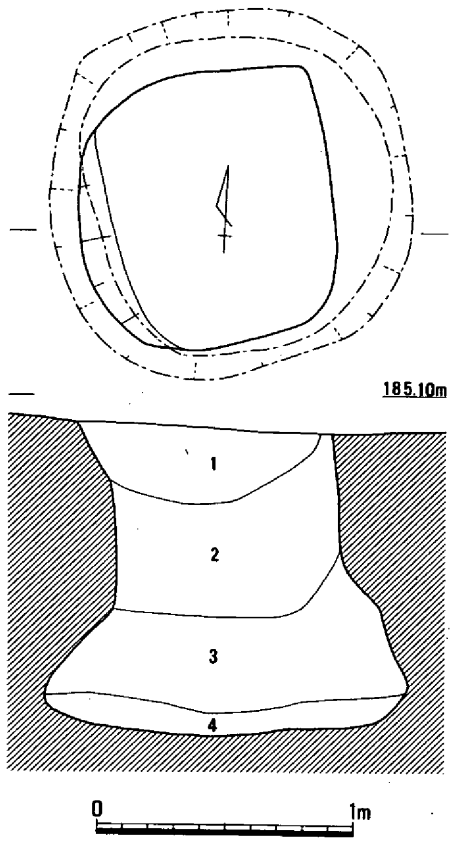
第263図　土壙257（1／30）

土壙258（第264図）

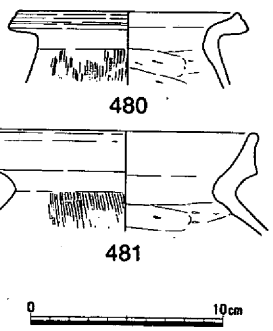
２区北部の竪穴住居37の南にある。検出面では１辺が100cmの正方形だが、下位へ移行すると細くなり、床面に近くなるとまた大きく裾広がりになる。床面の平面形は楕円形である。床面は平坦で、長径は124cm、短径は118cm、深さは122cmを測る。

遺物は第１層と第２層から土器片が出土している。**480**は口縁端面に凹線が存在する。**481**は口縁端部が上方へ立ち上がる甕である。

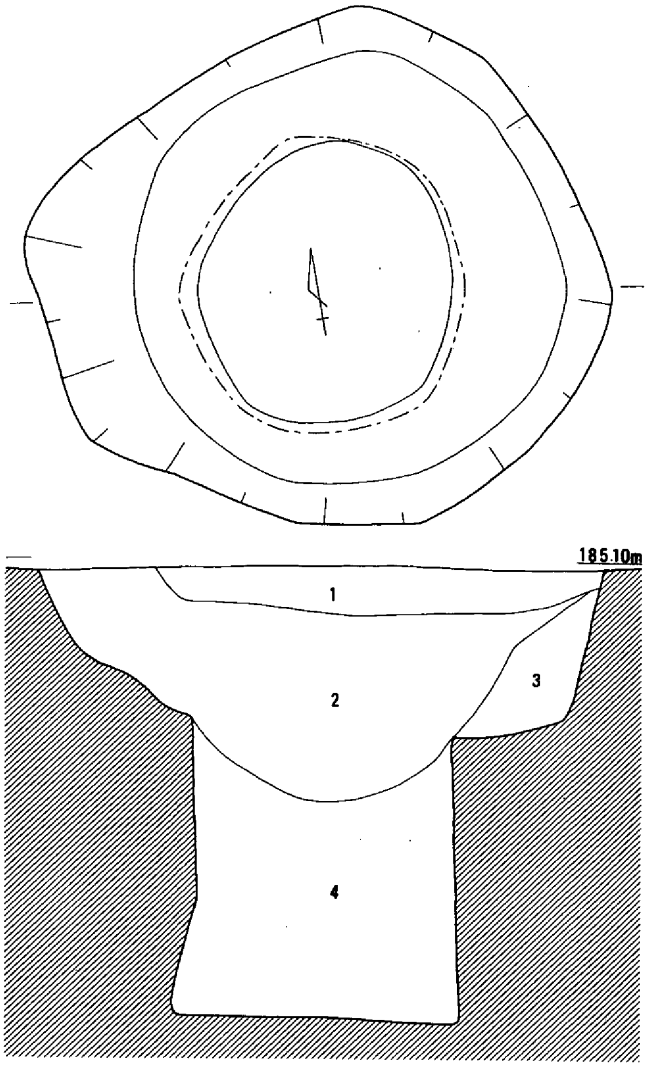
土器から弥生時代後期と考えたい。



1．灰褐色粘質土（土器）
2．灰褐色粘質土（土器）
3．濃灰褐色粘質土
4．黒褐色粘質土



第264図　土壙258（1／30）・出土遺物（1／4）



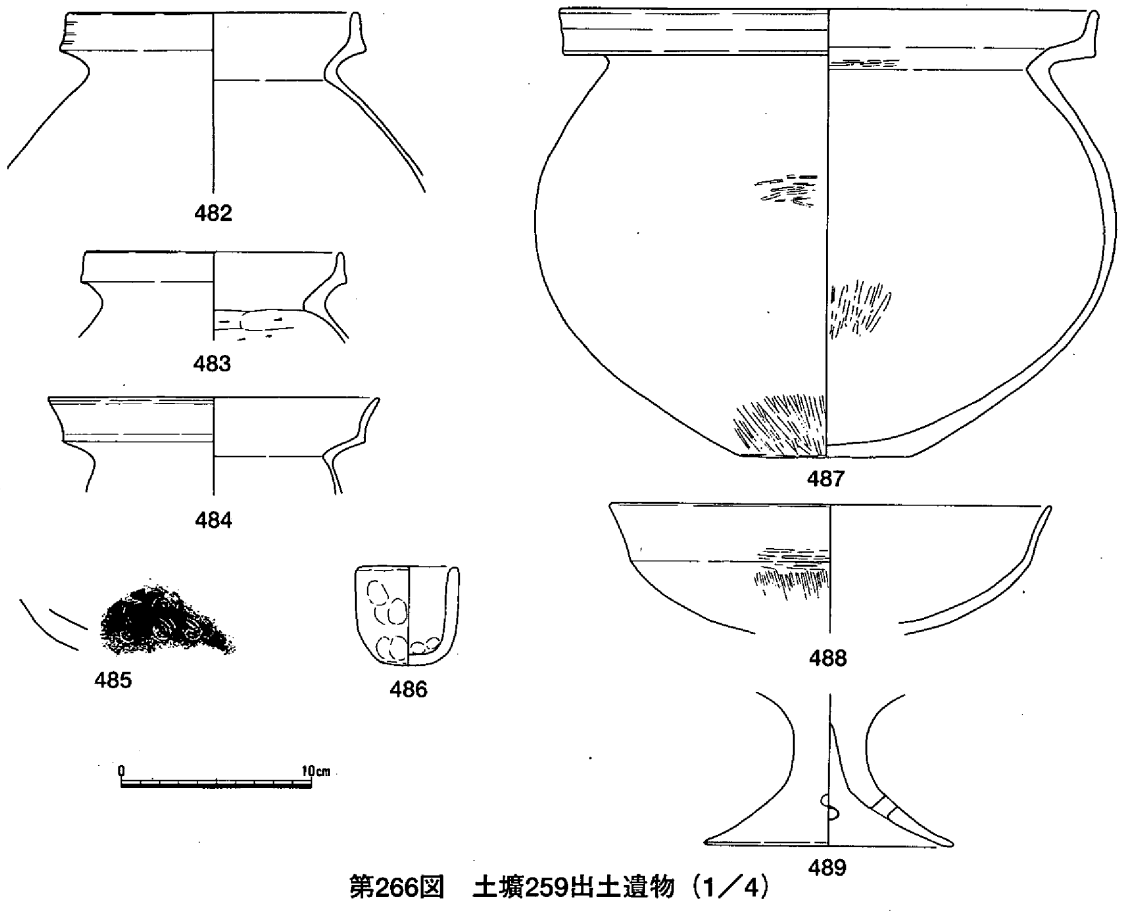
1．淡黄褐色粘性砂質土（土器）
2．暗褐色粘性砂質土（土器）
3．黒褐色粘性砂質土
4．黒褐色粘質土（土器）

第265図　土壙259（1／30）

土壙259（第265・266図、図版35）

２区北部の竪穴住居37の南にあって、その一部分を切っている。検出面では径が200cmであるが、約70cm下がった位置で細くなってからほぼ垂直に床面まで下がる。床面の平面形は楕円形である。床面は平坦で、長径は112cm、短径は100cm、深さは180cmを測る。深さでは、本遺跡で検出した土壙の中で第１位である。

遺物は第３層以外から土器片が出土している。**487**は大型の鉢、**486**はミニチュアの鉢である。**485**は壺と思われ、Ｓ字状のスタンプが施文されている。これらの土器は、弥生時代後期と考えたい。



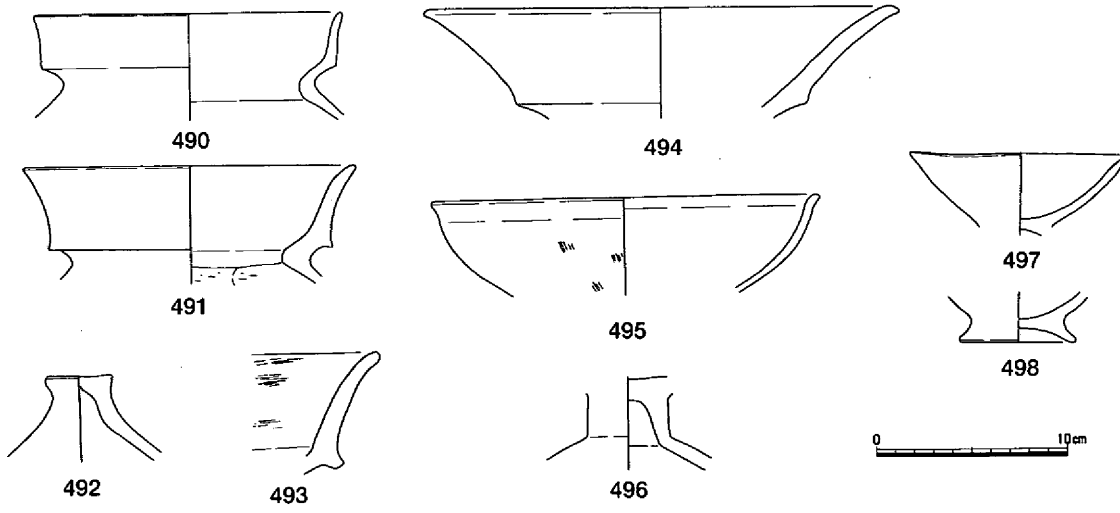
第266図　土壙259出土遺物（1／4）

土壙260（第267・268図）

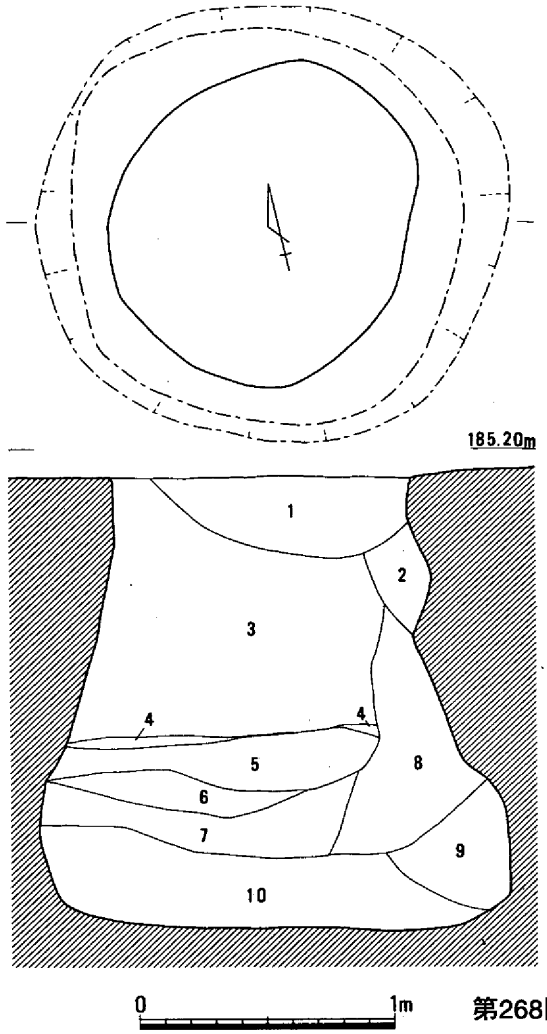
２区中央部の竪穴住居28の東にある。検出面では径が120cmであるが、床面に向かって下降するにしたがって裾広がりになる。床面の平面形は円形である。床面は平坦で、径は156cm、深さは178cmを測る。

遺物は第３層から土器片が出土している。第４層は炭だけの層である。**492**は蓋、**494**は鼓形器台であろうか。**495**は高杯であろう。

土器から弥生時代後期後葉と考えたい。

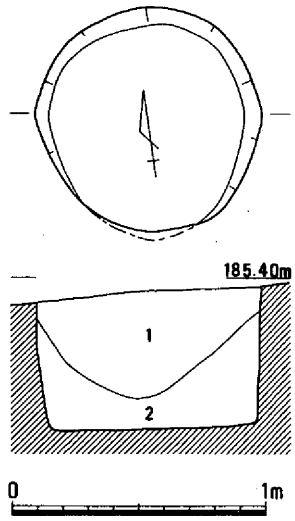


第267図　土壙260出土遺物（1／4）



1．灰褐色粘質土（土器）
2．黒褐色粘質土
3．灰褐色粘土（土器）
4．炭層
5．灰褐色粘質土
6．灰褐色粘質土
7．灰褐色粘質土
8．灰褐色粘質土
9．暗灰褐色粘質土
10．灰褐色粘質土

第268図　土壙260（1／30）



1．淡黄褐色粘性砂質土
2．暗褐色粘性砂質土

第269図　土壙261（1／30）

土壙261（第269図）

２区中央部の竪穴住居36の西５ｍにある。床面の平面形は円形である。床面は平坦で、径は80cm、検出面からの深さは54cmを測る。

遺物は土器片が出土している。

土器から弥生時代後期と考えたい。

土壙262（第270図）

２区中央部の東端の調査区の境にある。床面の平面形は円形である。床面は平坦で、径は160cm、検出面からの深さは30cmを測る。

遺物は土器片が出土している。

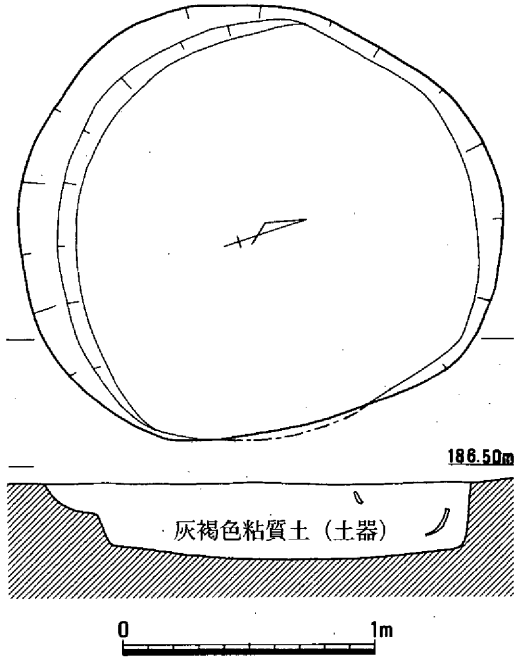
土器から弥生時代後期と考えたい。

土壙263（第270図、図版35）

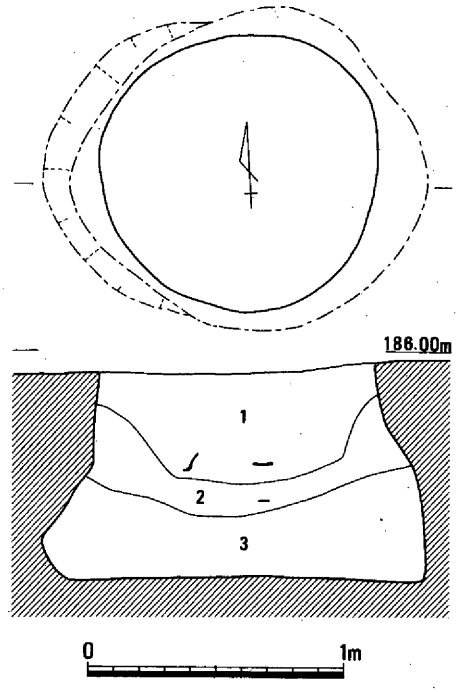
２区中央部の竪穴住居36の北東にある。検出面では径が110cmの円形で、少し下がった部分から袋状に広がる。床面の平面形は楕円形である。床面は平坦で、長径は140cm、短径は128cm、検出面からの深さは85cmを測る。

遺物は上層から土器片が出土している。長頸壺、短頸壺、蓋、鉢、ミニチュア土器がある。

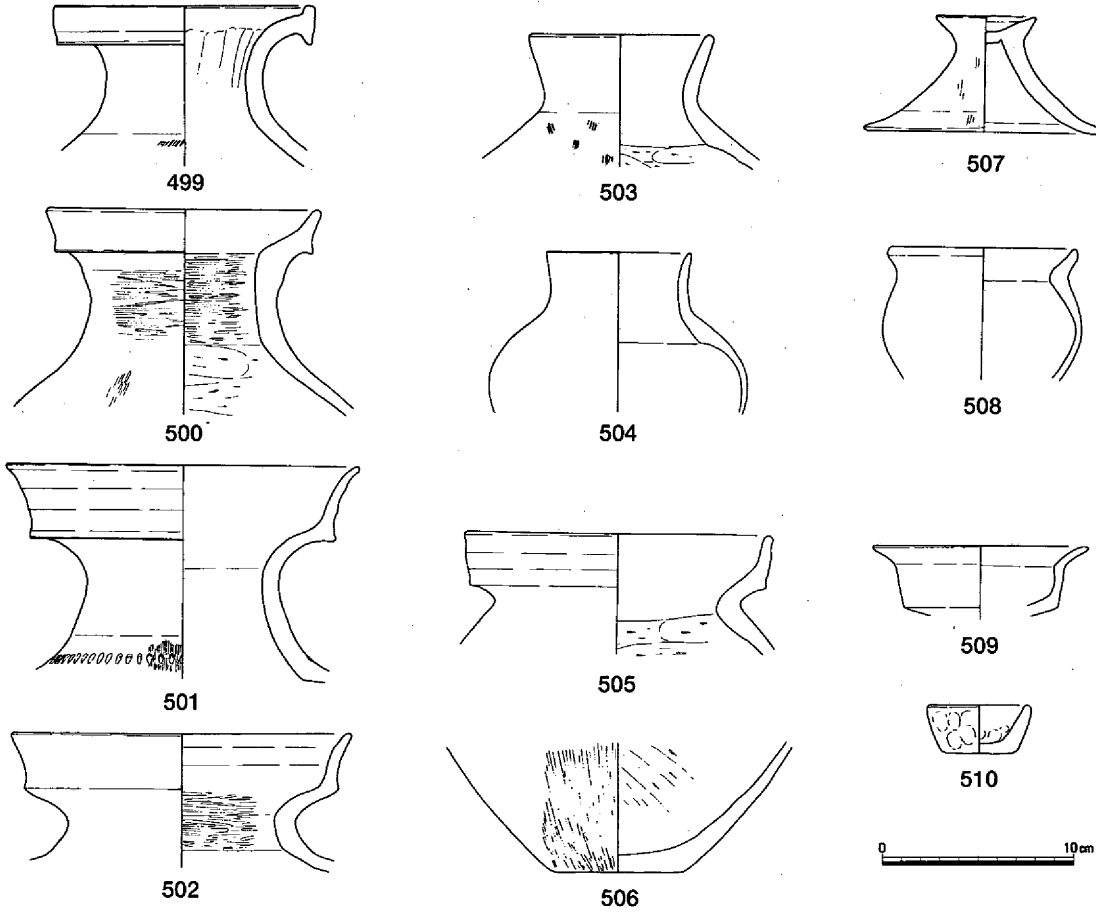
土器から弥生時代後期中葉から後葉と考えたい。



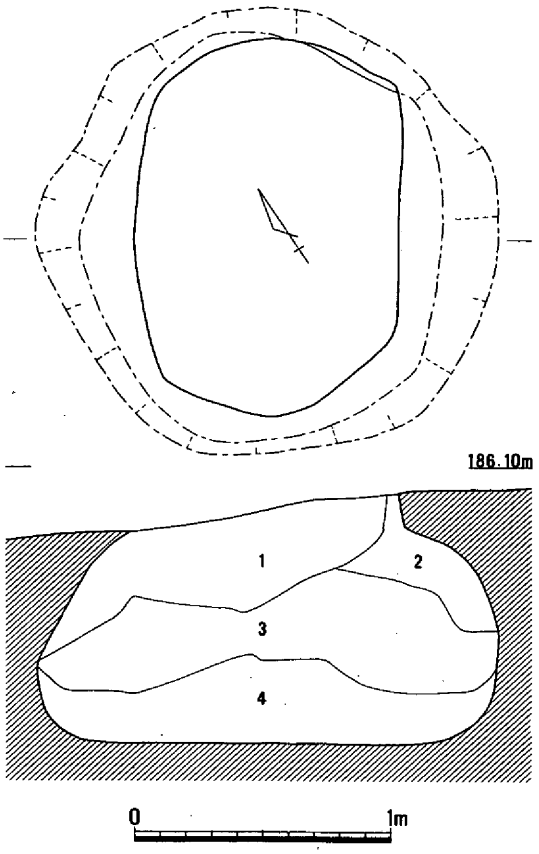
第270図　土壙262（1／30）



1．灰褐色粘性砂質土（土器）
2．灰褐色粘質土（土器）
3．暗黄灰褐色粘質土

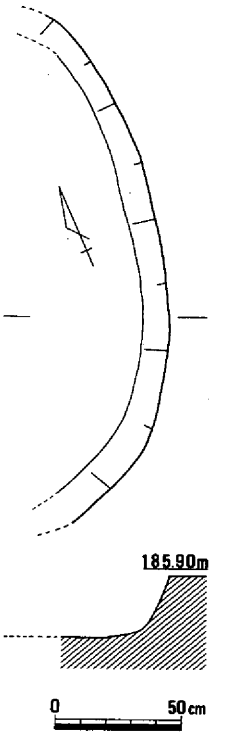


第271図　土壙263（1／30）・出土遺物（1／4）

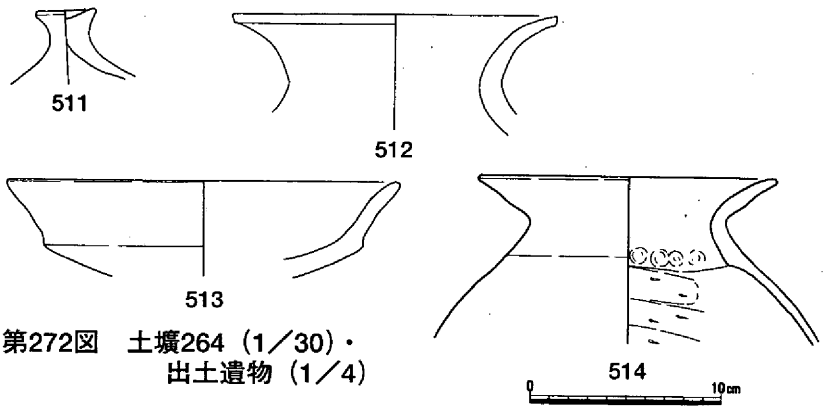


1．灰褐色粘性砂質土　　3．灰黄色土
2．灰褐色粘質土　　4．濃灰褐色粘質土（土器）

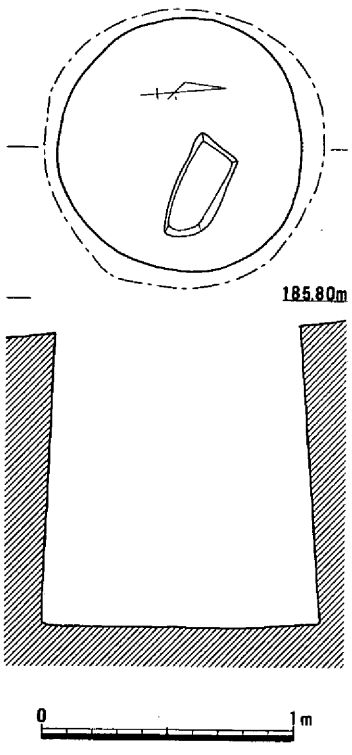
第273図　土壙265（1／30）



第274図　土壙266（1／30）



第272図　土壙264（1／30）・
出土遺物（1／4）



第275図　土壙267（1／30）

土壙264（第272図）

２区中央部の竪穴住居36の南東にある。検出面では長径150cm、短径100cmの楕円形で、少し下がった部分から袋状に広がる。床面の平面形は楕円形である。床面の長径は162cm、短径は150cm、検出面からの深さは100cmを測る。

遺物は最下層から土器片が出土している。蓋、壺、高杯がある。

土器から弥生時代後期と考えたい。

土壙265（第273図）

２区中央部の竪穴住居35の北東７ｍにある。検出面では長径80cm、短径60cmの楕円形で、床面の平面形も楕円形である。床面は平坦で、長径は60cm、短径は52cm、検出面からの深さは54cmを測る。

遺物は土器片が出土している。

土器から弥生時代後期と考えたい。

土壙266（第274図）

２区中央部の竪穴住居35の東にあって、それに削られている。楕円形であろう。床面の長径は178cm、幅は30cmで、深さは23cmを測る。段状遺構の可能性もある。

遺物は土器片が出土している。

土器から弥生時代後期と考えたい。

土壙267（第275・276図、図版35）

２区中央部の竪穴住居36の南東1.5ｍにある。わずかに裾広がりの円筒形を呈する。床面の径は112cm、深さは118cmを測る。床面から20cm上方で細長い河原石が出土した。竪穴住居で使用していた石であろう。

遺物は土器片が出土している。蓋、鉢、高杯、甕などがある。

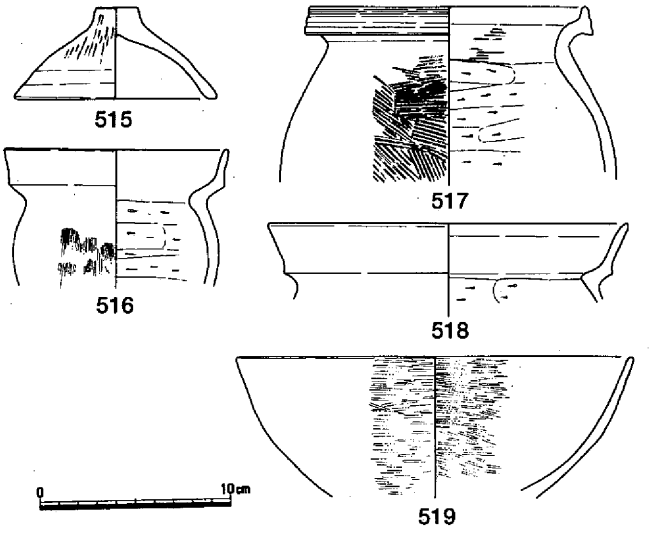
土器から弥生時代後期と考えたい。

土壙268（第277・278図、図版35・41）

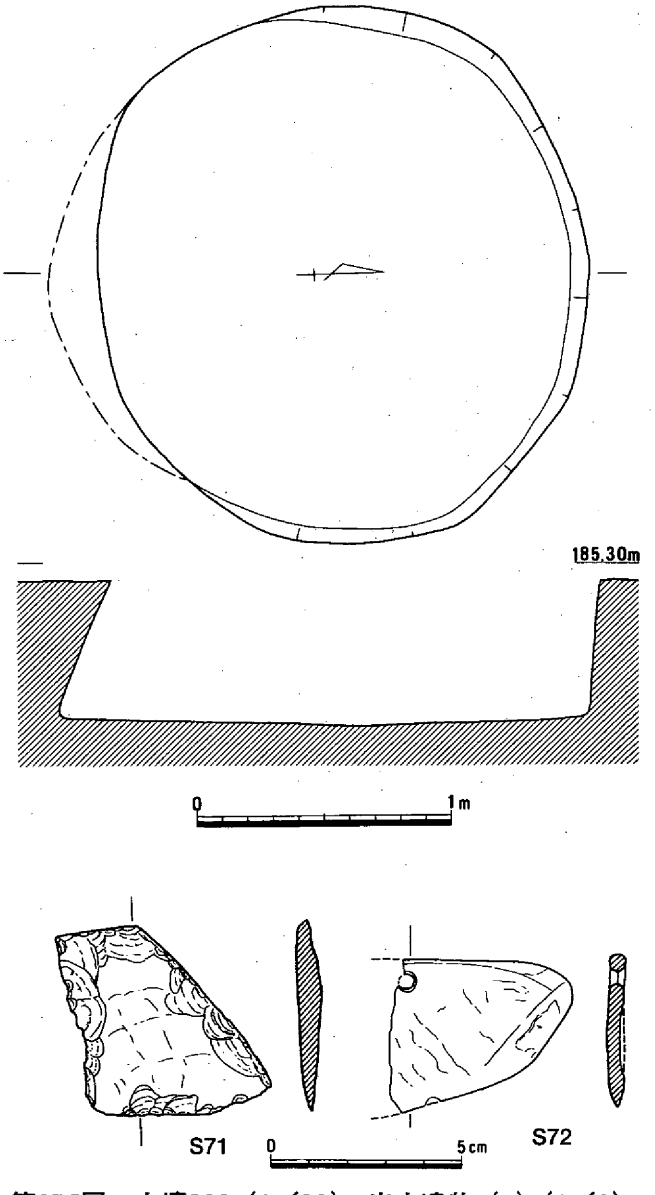
２区中央部の竪穴住居35の床面にある。わずかに裾広がりの円筒形を呈する。床面の径は198cm、竪穴住居35の床面からの深さは57cmを測る。

遺物は土器片のほかに、サヌカイト製の削器と緑色片岩製の石包丁が出土している。しかし、この削器は流れ込みの遺物と考えられた。土器には壺、甕、高杯、鉢、鼓形器台がある。

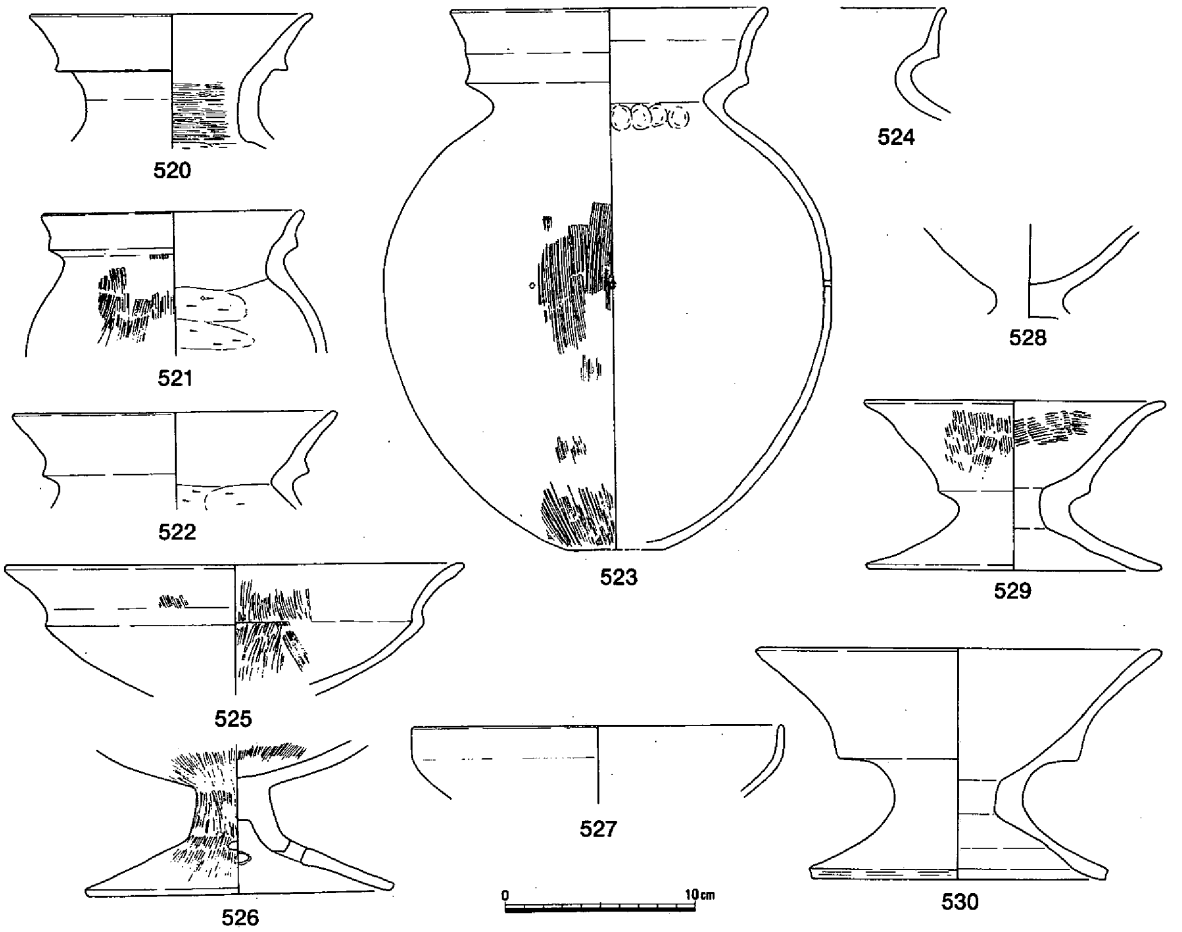
土器からこの土壙の使用された時期は弥生時代後期中葉で、廃棄された時期は弥生時代後期後葉と考えたい。



第276図　土壙267出土遺物（1／4）



第277図　土壙268（1／30）・出土遺物（1）（1／2）



第278図　土壙268出土遺物（2）（1／4）

土壙269（第279図）

２区中央部の竪穴住居36の東８ｍにある。わずかに底部が残存している。円形を呈する。床面の径は65cm、深さは検出面から11cmを測る。

遺物は弥生時代後期の土器片が出土している。

土壙270（第280図）

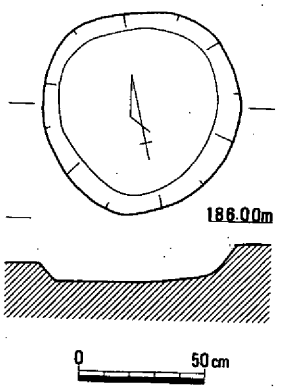
２区中央部の竪穴住居36の東に接して、それを切っている。南側に寄った部分が袋状を呈する。床面は中央がやや窪むものの、ほぼフラットで平面形は楕円形である。その周囲には溝が巡る。長径は180cm、短径は158cm、深さは153cmを測る。

遺物は弥生時代後期の土器片が出土している。

土壙271（第280図）

２区中央部の竪穴住居36の南西２ｍにある。上面は長方形に近い楕円形、床面は楕円形、断面形は袋状を呈する。床面の長径は126cm、短径は99cm、深さは149cmを測る。床面から45cm上方で河原石が出土した。

遺物は弥生時代後期の土器片が出土している。



第279図　土壙269（1／30）

土壙272（第282図）

２区北部の竪穴住居33の北１ｍにある。平面形は円形、断面形は南北方向に袋状を呈する。床面の径は95cm、深さは検出面から54cmを測る。

遺物は土器片が出土している。

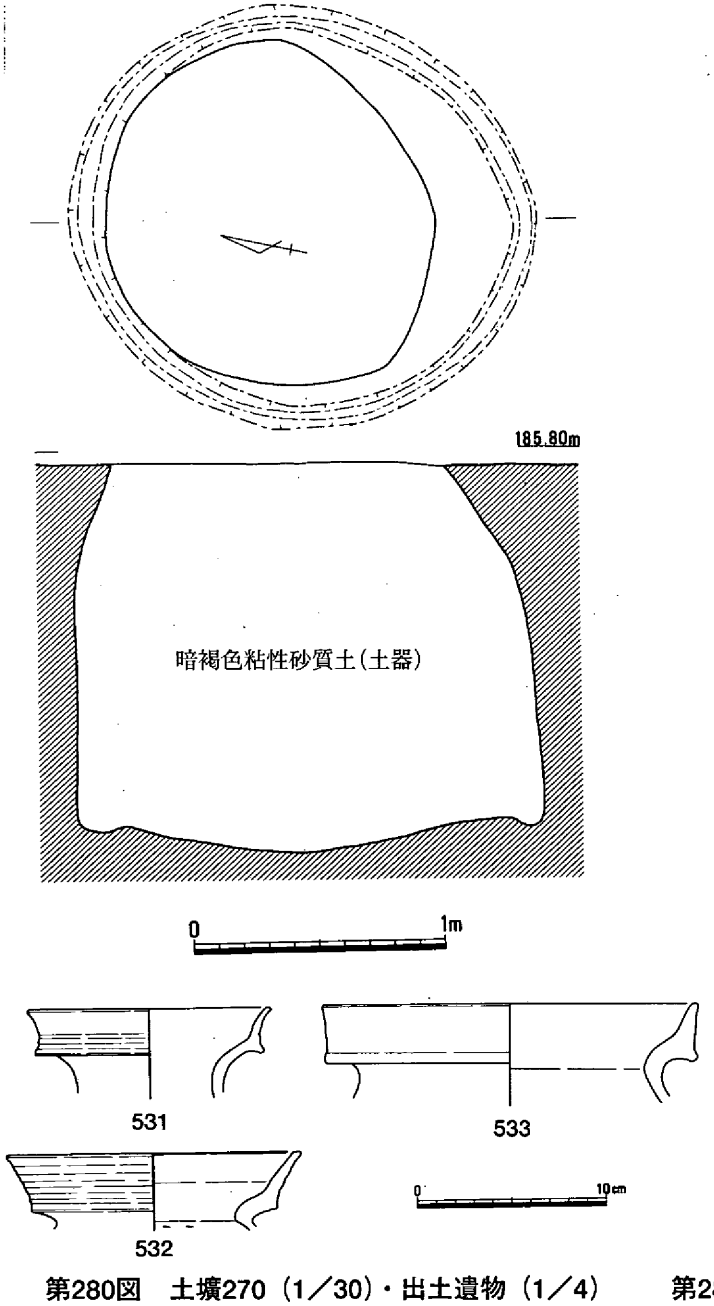
土器から弥生時代後期と考えたい。

土壙273（第283図、図版25）

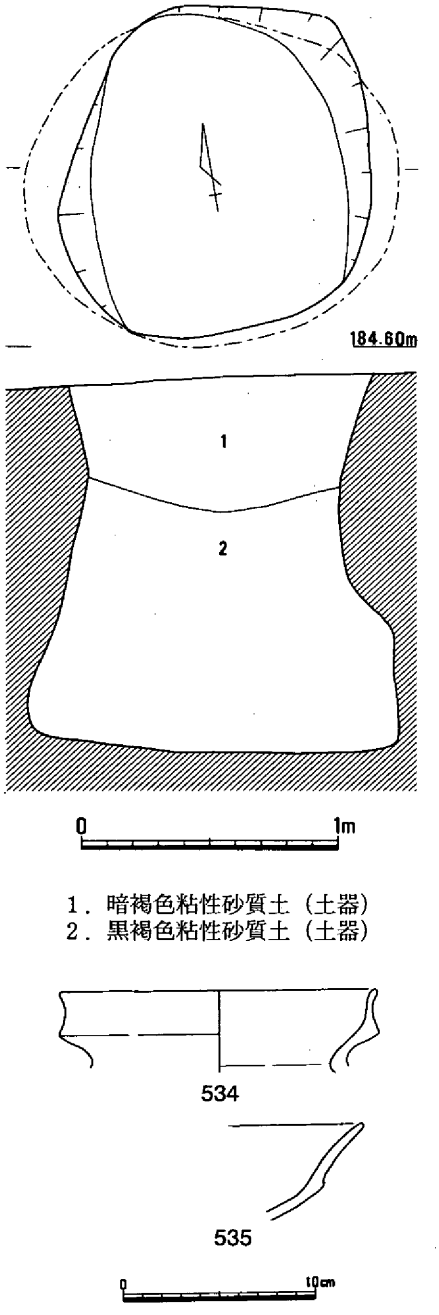
２区北部の竪穴住居20の南６ｍにある。上面は円形、床面は楕円形でやや裾広がりの円筒形を呈する。床面の長径は108cm、短径は88cm、深さは検出面から127cmを測る。床面から５cm上方で、３個の河原石が等間隔で意識的に配置したような状態で出土した。

遺物は上層から土器片が出土している。

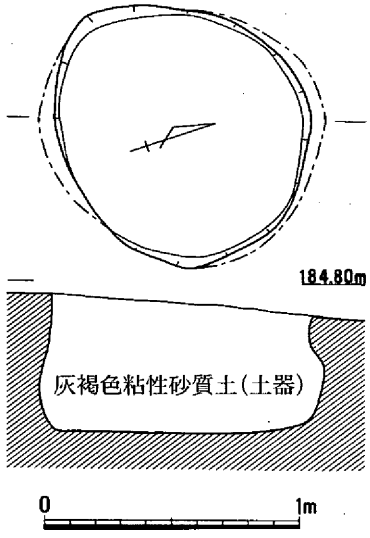
土器から弥生時代後期と考えたい。



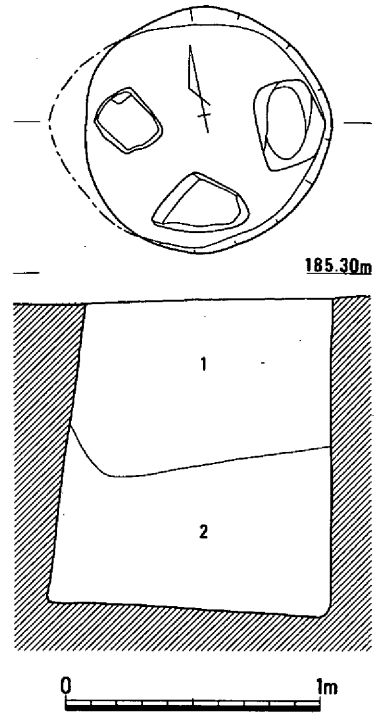
第280図　土壙270（1／30）・出土遺物（1／4）



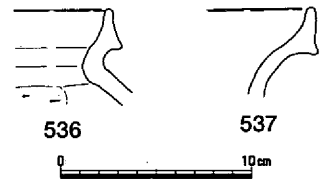
第281図　土壙271（1／30）・出土遺物（1／4）



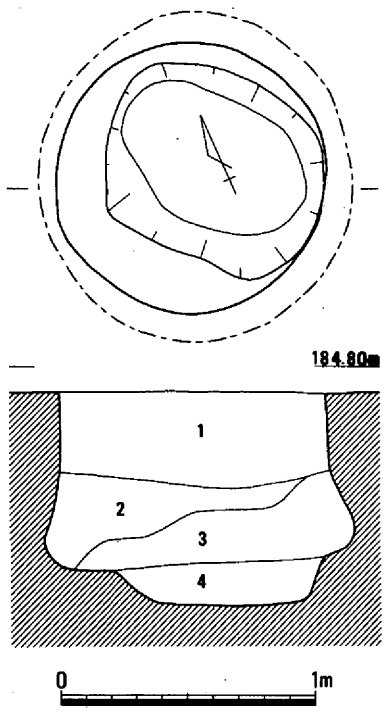
第282図　土壙272（1／30）



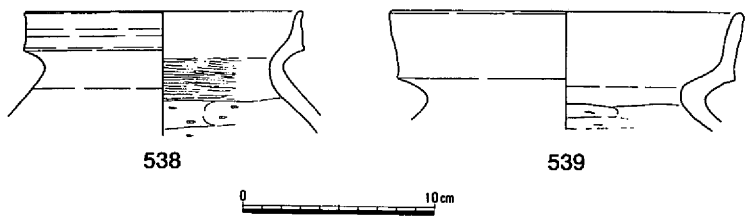
1．暗褐色粘質土（土器）
2．黒褐色粘質土



第283図　土壙273（1／30）・
出土遺物（1／4）



1．灰褐色粘質土（土器）
2．灰褐色粘質土（土器）
3．灰褐色粘質土（土器）
4．黄褐色粘質土



第284図　土壙274（1／30）・出土遺物（1／4）

土壙274（第284図）

２区北部の竪穴住居33の北３ｍにある。平面形は円形、床面に近い部分で袋状を呈する。東側に寄った床面はさらに深く掘り下げている。床面の径は108cm、深さは84cmを測る。

遺物は最下層を除いたすべての層から、弥生時代後期の土器片が出土している。

土壙275（第285図）

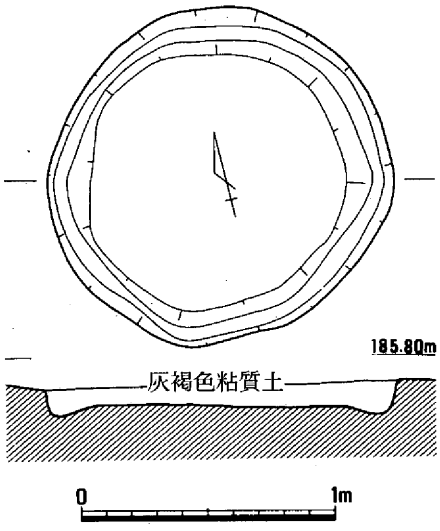
２区北部の竪穴住居20の南東11ｍにある。平面形は多角形を呈する。上面は削平されて、床面と周囲の溝が残存するのみである。床面の径は137cm、深さは床面まで８cmを測る。

遺物は弥生時代後期の土器片が出土している。

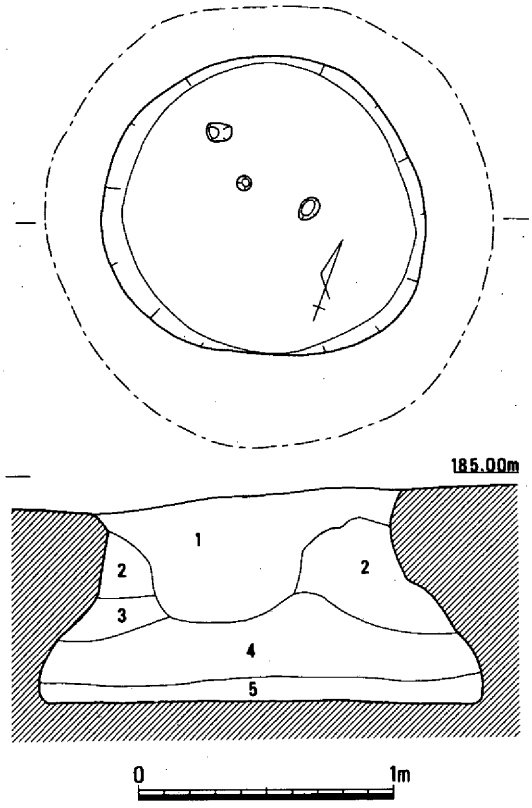
土壙276（第286図）

２区北部の竪穴住居33の北東１ｍにある。平面形は円形を呈する。断面形は典型的な袋状である。床面の径は175cm、深さは84cmを測る。上位の第１層には河原石が存在した。

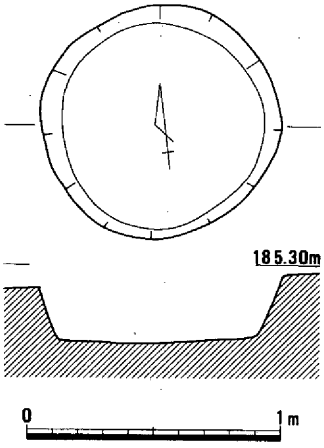
遺物は弥生時代後期の土器片が出土している。



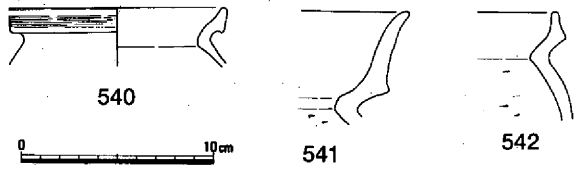
第285図　土壙275（1／30）



1．灰褐色粘質土　　4．灰黄色粘質土
2．暗灰褐色粘質土　　5．灰褐色粘質土
3．暗灰黄褐色粘質土



第287図　土壙277（1／30）



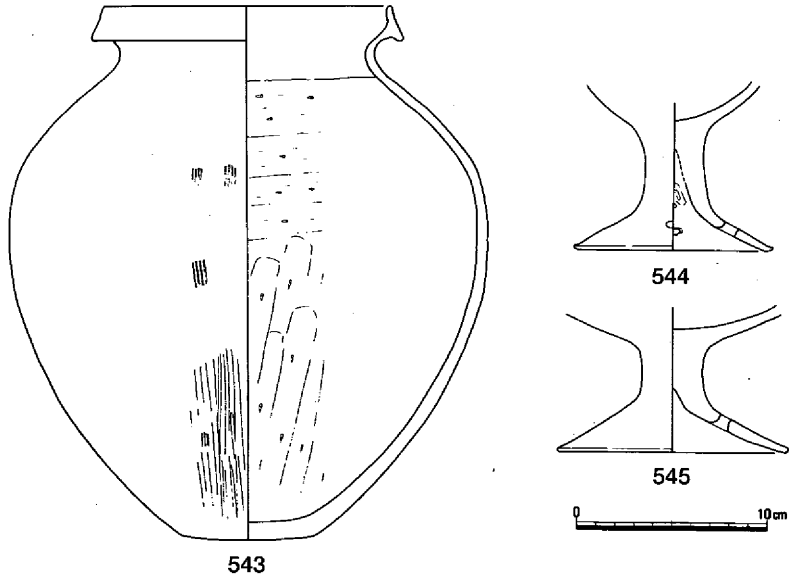
第286図　土壙276（1／30）・出土遺物（1／4）

土壙277（第287図）

２区北部の竪穴住居36の西４ｍにある。平面形は円形を呈する。床面の径は80cm、検出面から床面までの深さは25cmを測る。

遺物には土器片だけが出土している。

土器から弥生時代後期と考えたい。



第288図　土壙278出土遺物（1／4）

土壙278（第288・289図、図版24・36）

２区北部の竪穴住居20の南東４ｍにある。床面の平面形は楕円形、床面に近い部分で、断面形が袋状を呈する。床面の長径は120cm、短径は114cm、深さは90cmを測る。床面の周囲の溝は、一部分が欠けている。

遺物は、復元して完形になった壺**543**が上層から出土している。体部外面の上半分がハケメ、下半分がヘラミガキを行い、内面は頸部まで全体にヘラケズリ痕跡が認められる。それ以外には、２点の高杯が存在する。

土器から弥生時代後期中葉と考えたい。

土壙279（第290図）

２区北部の竪穴住居33の上層で検出した。床面の平面形は楕円形、断面形は北東側に片寄って袋状を呈する。床面の長径は145cm、短径は136cm、深さは71cmを測る。

遺物は上層から甕の破片が出土している。内面は全体にヘラケズリを施している。

土器から弥生時代後期と考えたい。

土壙280（第291図、図版36）

２区東部の竪穴住居35の床面で検出した。床面の平面形は長方形を呈する。床面の長辺は135cm、短辺は136cm、深さは72cmを測る。

遺物は土器片が出土している。鉢、高杯、ミニチュア土器などがある。

土器から弥生時代後期中葉と考えたい。

土壙281（第292図）

２区北部の竪穴住居33の北東１ｍにある。平面形は楕円形を呈する。断面形は典型的な袋状である。床面の長径は132cm、短径は120cm、深さは92cmを測る。

遺物は土器片が出土している。

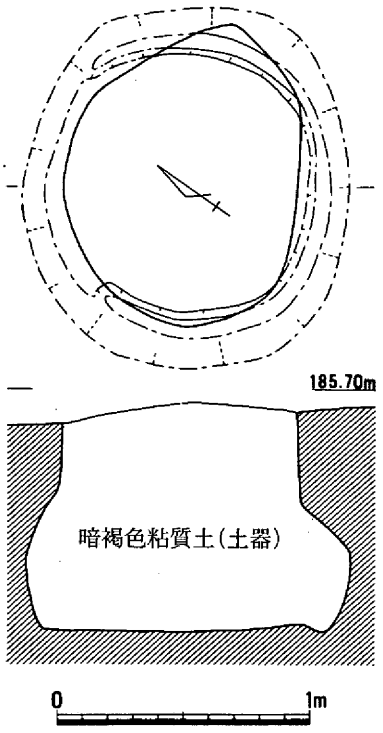
土器から弥生時代後期と考えたい。

土壙282（第293図）

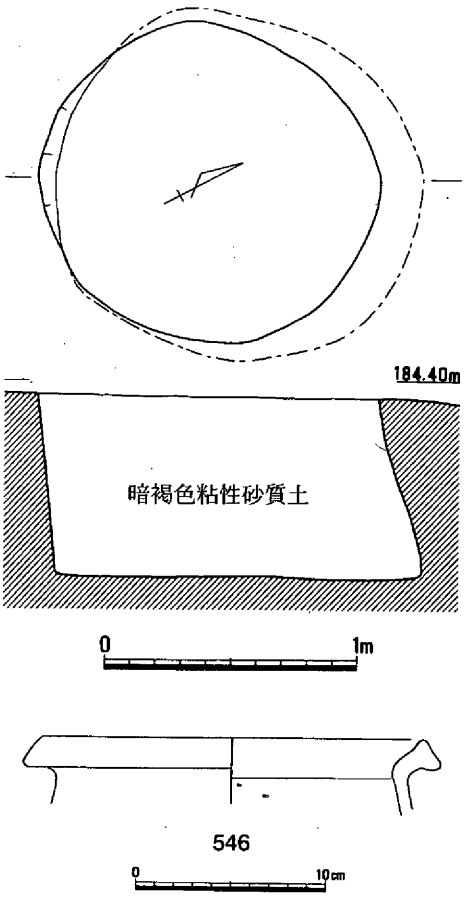
２区北部の竪穴住居33の東１ｍにある。平面形はほぼ円形を呈する。上位は円筒形、下位は袋状である。床面の中央部は、やや盛り上がる。床面の長径は148cm、短径は140cm、深さは72cmを測る。

遺物は土器片が出土している。二重口縁の壺である。外面にはハケメ、内面にはヘラケズリ痕跡が存在する。

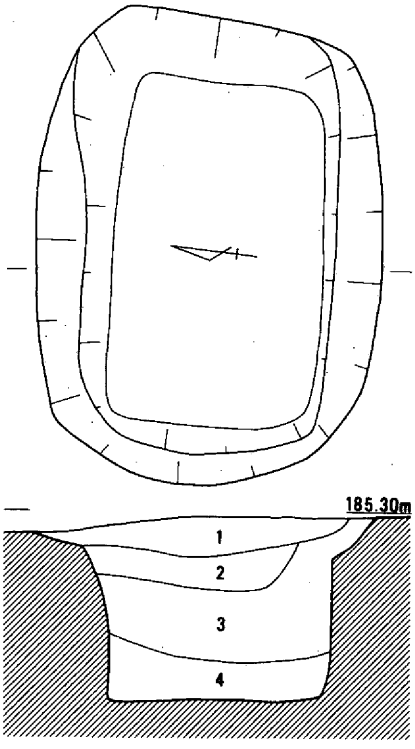
土器から弥生時代後期後葉と考えたい。

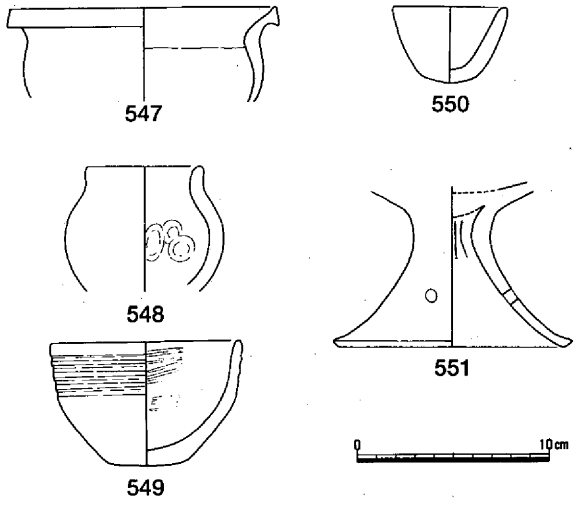


第289図　土壙278（1／30）



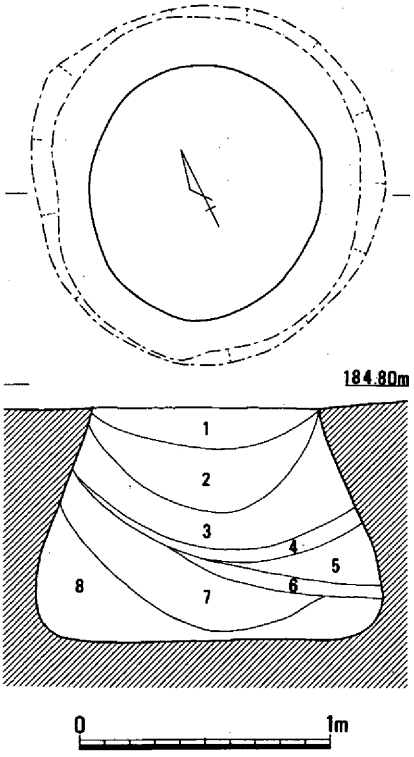
第290図　土壙279（1／30）・出土遺物（1／4）





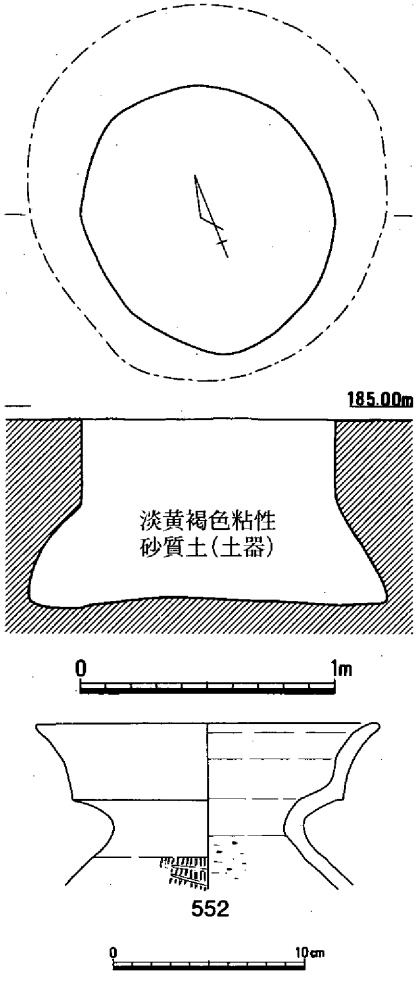
1．灰黄褐色粘性砂質土
2．黄褐色粘性砂質土
3．黄褐色粘性砂質土
4．黄色粘質土

第291図　土壙280（1／30）・出土遺物（1／4）



1．灰褐色粘質土
2．灰黄褐色粘質土
3．灰褐色粘質土
4．暗灰褐色粘質土
5．暗灰黄褐色粘質土
6．黄色粘質土
7．暗黄褐色粘質土

第292図　土壙281（1／30）



第293図　土壙282（1／30）・出土遺物（1／4）

土壙283（第294図）

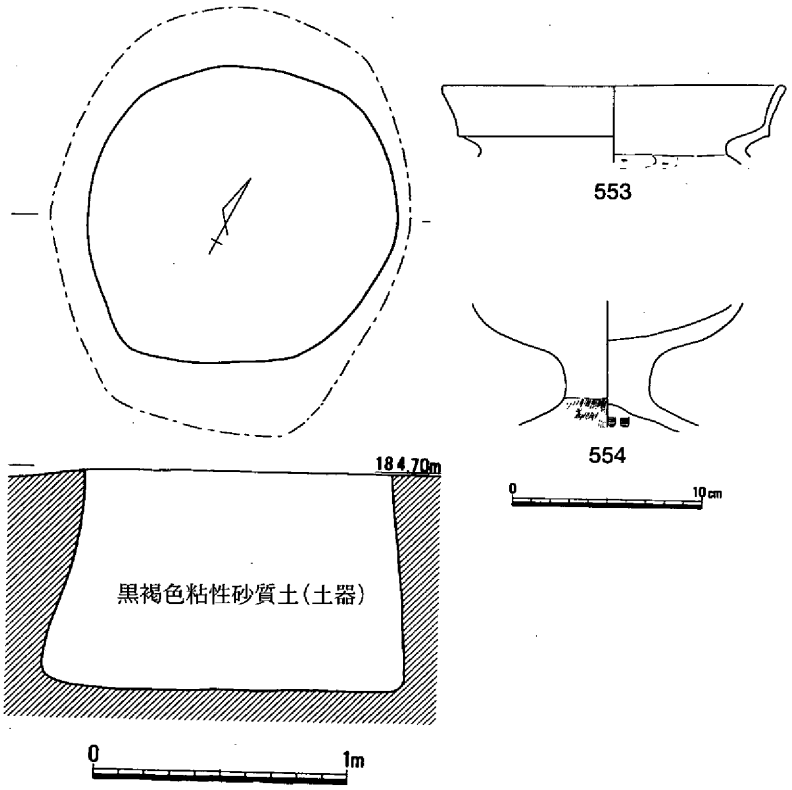
２区北部の竪穴住居37の上層で検出した。平面形は楕円形を呈する。床面の長径は170cm、短径は142cm、深さは86cmを測る。

弥生時代後期後葉の甕と高杯片が出土している。

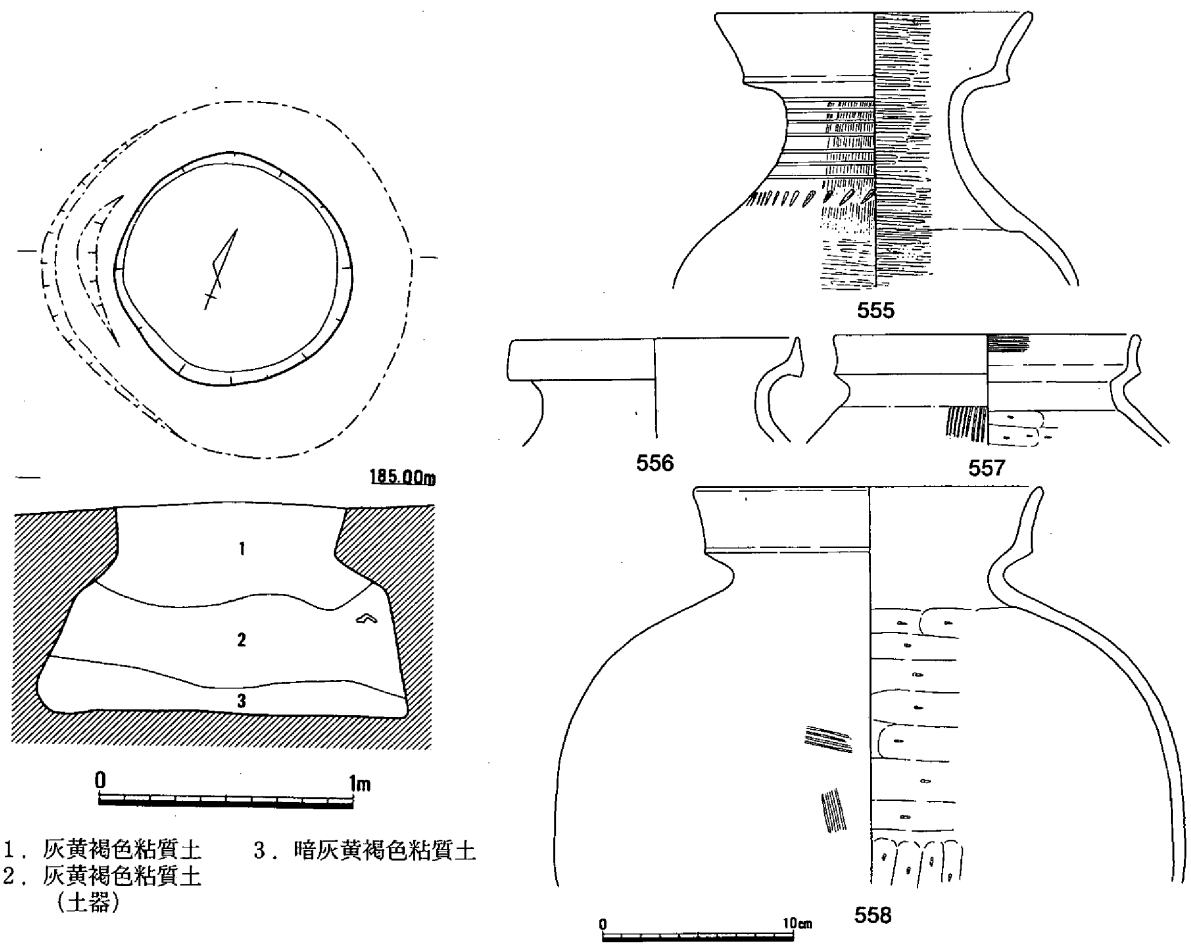
土壙284（第295図、図版36）

２区北部の竪穴住居37の上層で検出した。平面形は円形、断面形は袋状である。床面の西側に溝が認められる。床面の径は140cm、深さは84cmを測る。

遺物は第２層から弥生時代後期後葉の壺と甕が出土している。

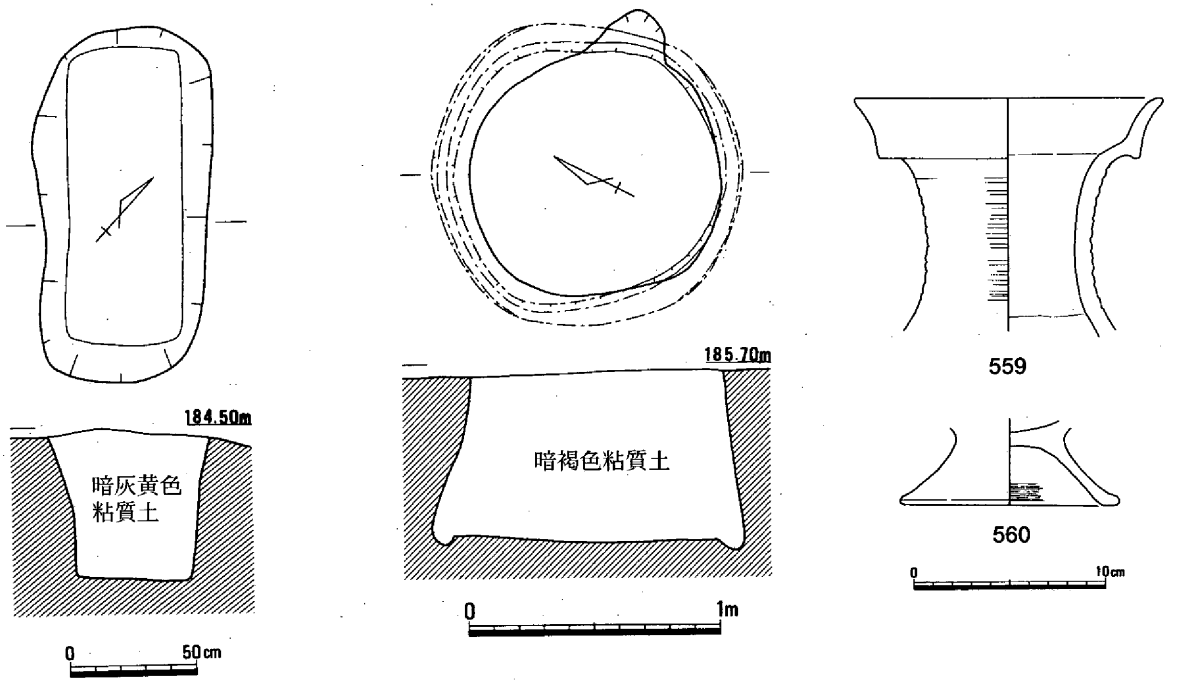


第294図　土壙283（1／30）・出土遺物（1／4）



1．灰黄褐色粘質土　　3．暗灰黄褐色粘質土
2．灰黄褐色粘質土
（土器）

第295図　土壙284（1／30）・出土遺物（1／4）



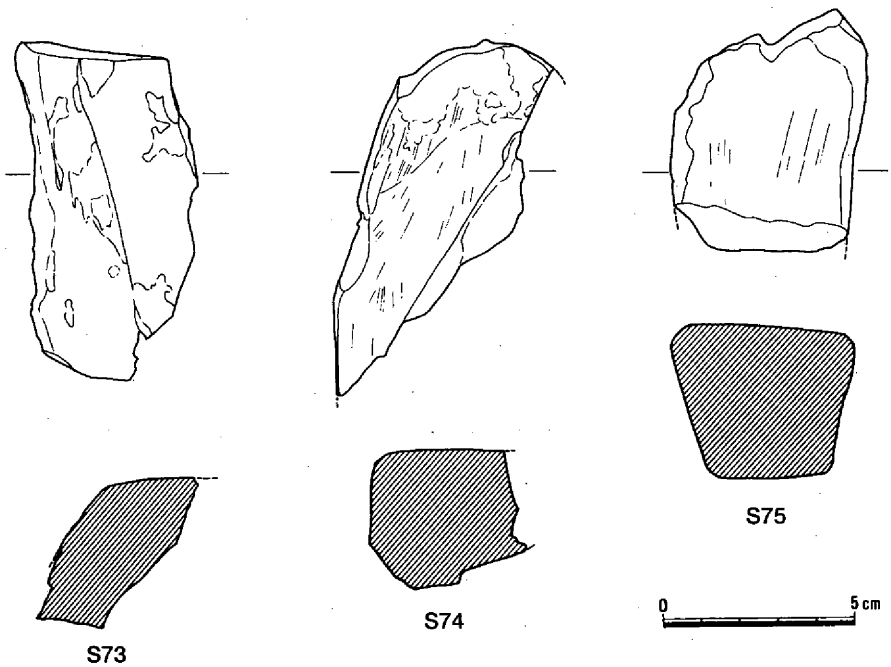
第296図　土壙285（1／30）

土壙285（第296図）

２区東部の竪穴住居37の床面で検出した。床面の平面形は長方形を呈する。床面の長辺は118cm、短辺は45cm、深さは58cmを測る。埋土は、地山の暗灰黄色粘質土である。

遺物は土器片が出土している。

土器から弥生時代後期前葉から中葉と考えたい。



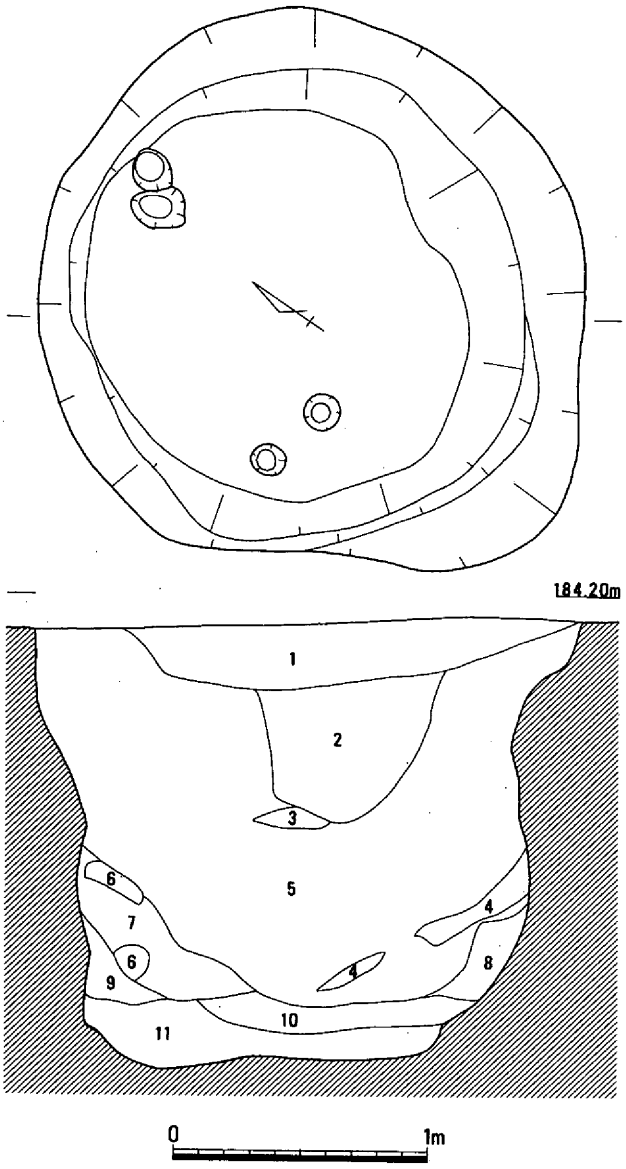
第297図　土壙286（1／30）・出土遺物（1／4、1／2）

土壙286（第296図、図版18・23・36）

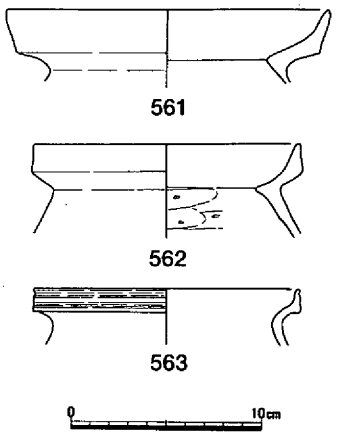
２区北部の竪穴住居20の南東３ｍで検出した。平面形は径が124cmの円形を呈する。上位は円筒形、下位は緩やかに広がる。幅が10cmの溝が、平坦な床面の周囲に認められる。床面の径は124cm、深さは70cmを測る。

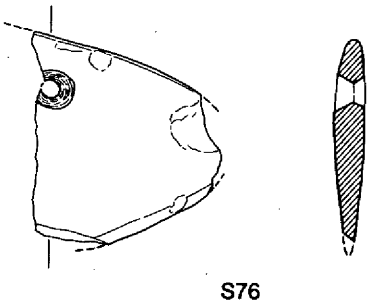
遺物は土器片のほかに、流紋岩製の砥石が３点出土している。土器は長頸壺の口縁部から頸部にかけての破片と、台付鉢の台の部分がある。

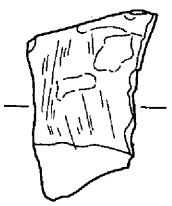
土器から弥生時代後期中葉と考えたい。

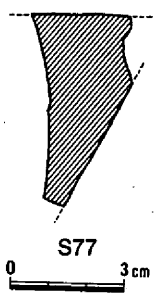


1．灰黄褐色粘質土（土器）
2．灰黄褐色粘質土（土器）
3．灰黄色粘質土
4．黒褐色粘質土
5．灰黄褐色粘質土
6．黄色粘質土
7．暗灰黄色粘質土
8．浅黄色粘質土
9．浅黄色粘質土
10．暗灰黄色粘質土
11．黄褐色粘質土









第298図　土壙287（1／30）・出土遺物（1／4、1／2）

土壙287（第298図）

２区最北部で検出した。平面形は径が約220cmの円形を呈する。上位は円筒形、下位は床面に近くなるにしたがって幅が狭くなる。床面の径は約150cm、深さは170cmを測る。床面には凹凸が認められ、４か所に柱穴状の浅い窪みがある。

遺物は甕の破片のほかに、流紋岩製の砥石と緑色片岩製の石包丁が出土している。土器片は細かく砕けており、図示できるものはわずかであった。

土器から弥生時代後期中葉と考えたい。

土壙301（第299図）

竪穴住居８の北東2.5ｍで検出した。平面形は長方形である。平坦な床面には、２か所の柱穴状の窪みがある。長辺は168cm、短辺は104cm、深さは24cmを測る。

遺物は甕の口縁部破片が出土している。568は体部の外面にハケメが認められる。

土器から弥生時代中期末と考えたい。

土壙302（第300図）

３区東部の竪穴住居８の北９ｍで検出した。床面の平面形は隅丸長方形を呈する。長辺は145cm、短辺は85cm、深さは25cmを測る。

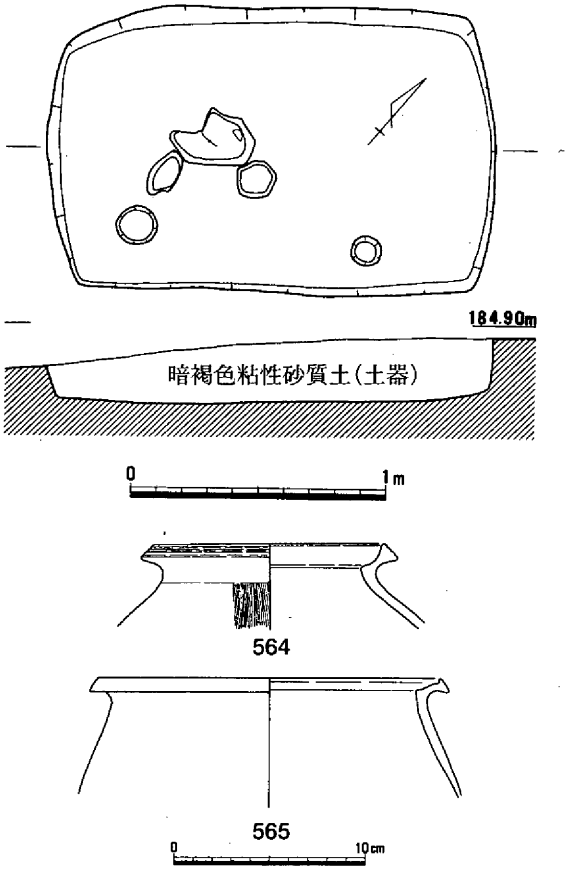
遺物は土器片が出土している。

土器から弥生時代後期と考えたい。

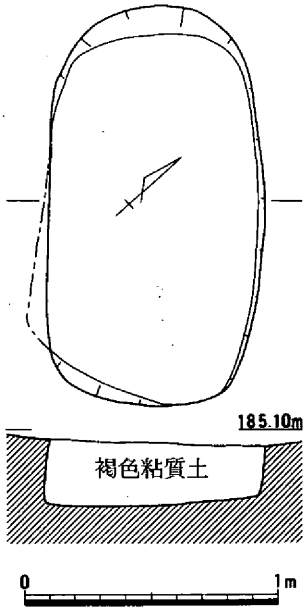
土壙303（第301図）

土壙302の西方４ｍで検出した。平面形は円形を呈する。上位は円筒形、中位は少し幅が広くなる。床面の径は約100cm、深さは95cmを測る。

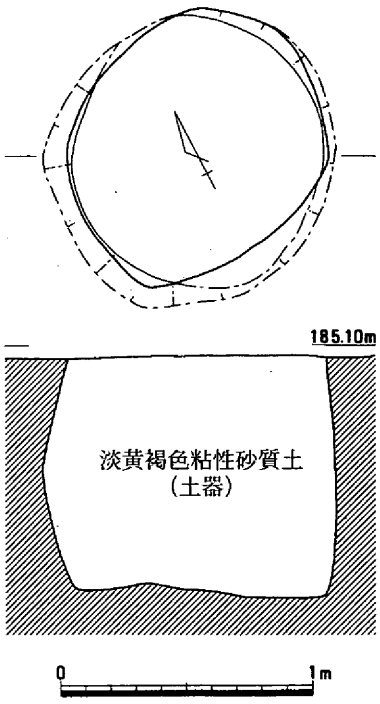
弥生時代後期の土器片のほかに、板状になった河原石が出土している。

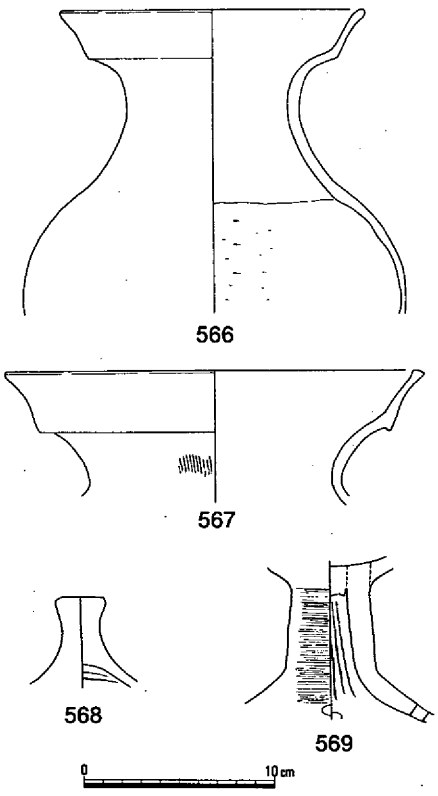


第299図　土壙301（1／30）・出土遺物（1／4）



第300図　土壙302（1／30）





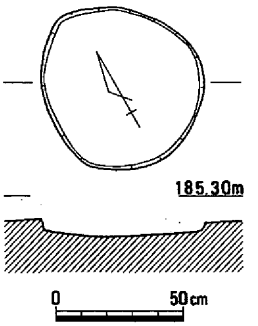
第301図　土壙303（1／30）・出土遺物（1／4）

土壙304（第302図）

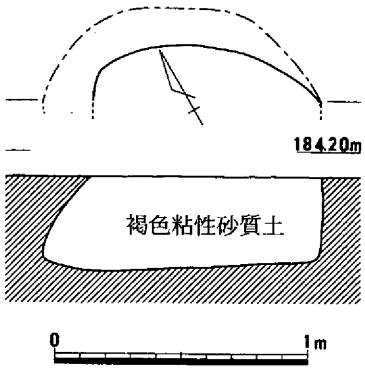
土壙303の北方１ｍで検出した。平面形は円形を呈するが、残存状態は極めて悪い。床面の径は約60cm、検出面から床面までの深さは７cmを測る。

遺物は土器片だけが出土している。

土器から弥生時代後期と考えたい。



第302図　土壙304（1／30）



第303図　土壙305（1／30）

土壙305（第303図）

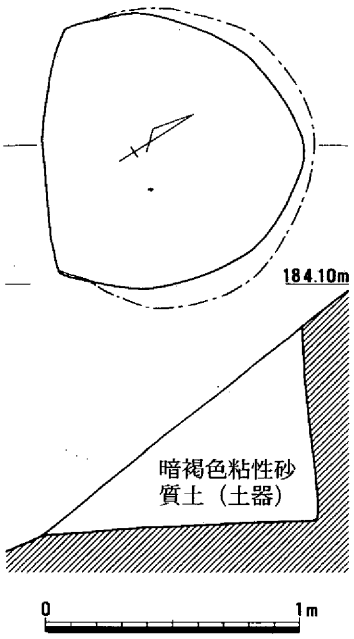
竪穴住居18の北東２ｍで検出した。農道によって掘削された法面に検出したため、全体の形は不明である。床面の径は約110cm、検出面から床面までの深さは38cmを測る。

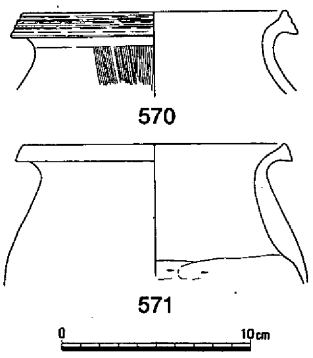
遺物は土器片だけが出土している。

土器から弥生時代後期と考えたい。

土壙306（第304図）

竪穴住居18の西側の床面で検出した。農道によって掘削された法面に検出したため、住居との切り合い関係は不明である。残存した北東側の壁は円筒形で、床面の径は約110cm、検出面から床面までの深さは77cmを測る。





第304図　土壙306（1／30）・出土遺物（1／4）

遺物は弥生時代後期前葉の土器片が出土している。

土壙307（第305図）

竪穴住居８の西で検出した。平面形は不整形な円形で、床面の径は約90cm、検出面から床面までの深さは30cmを測る。

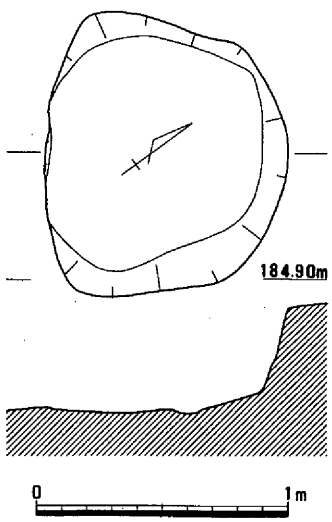
遺物は弥生時代後期前葉の土器片が出土している。

土壙308（第306図、図版23・26・37）

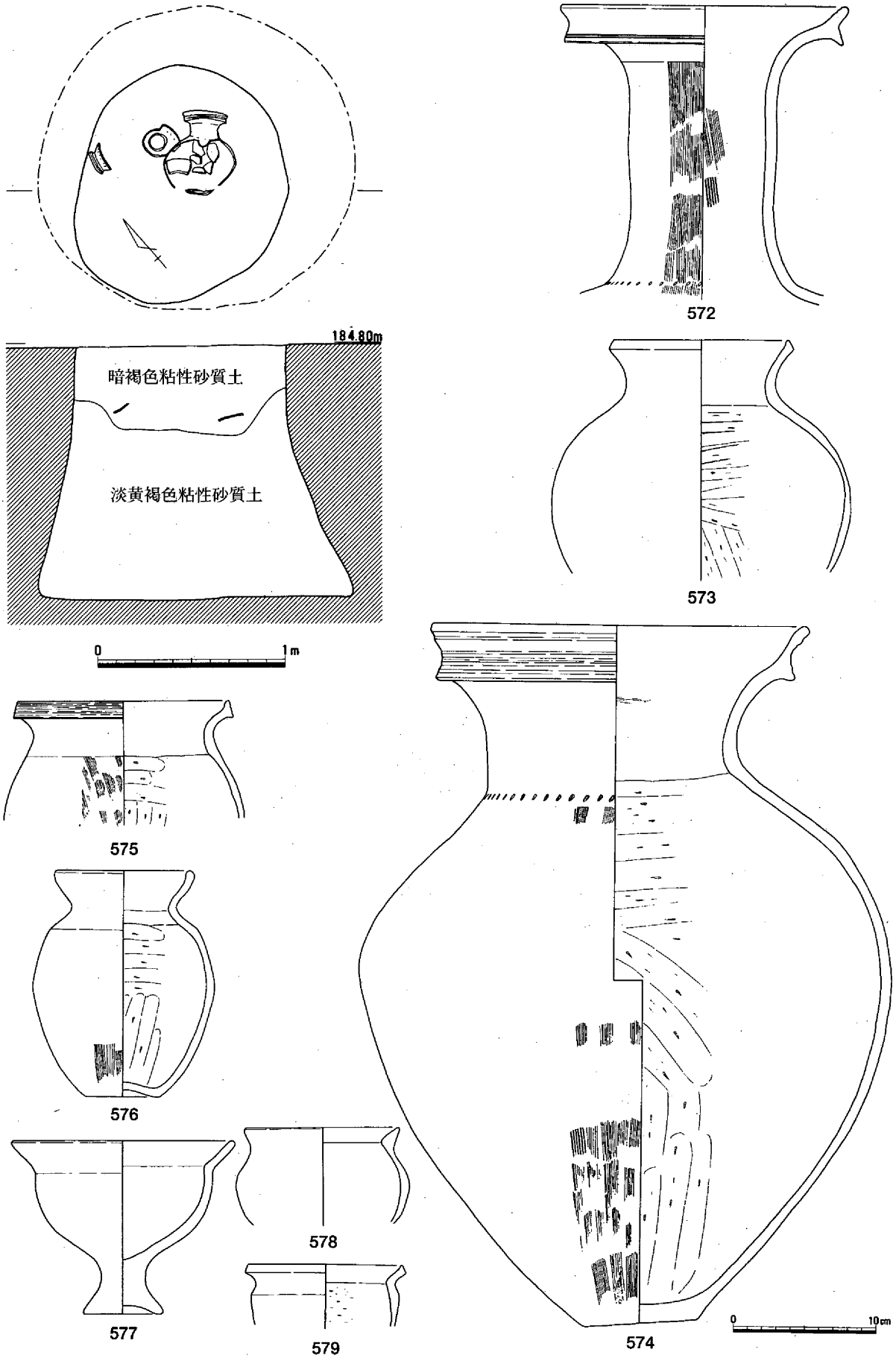
竪穴住居８の北東2.5ｍで検出した。検出面での平面形は楕円形で、床面のそれは円形である。断面形は裾広がりの袋状を呈する。床面の径は約125cm、検出面から床面までの深さは135cmを測る。

遺物は上層から土器片が出土している。特に**574**は、高さ49cmを測る大型の壺で、完形に復元できた。

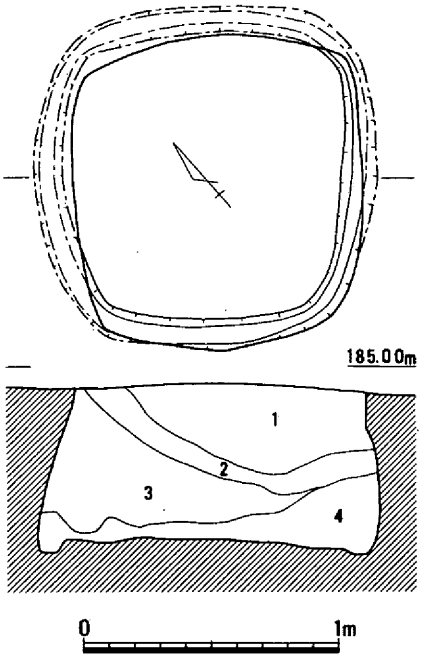
土器から弥生時代後期と考えたい。



第305図　土壙307（1／30）

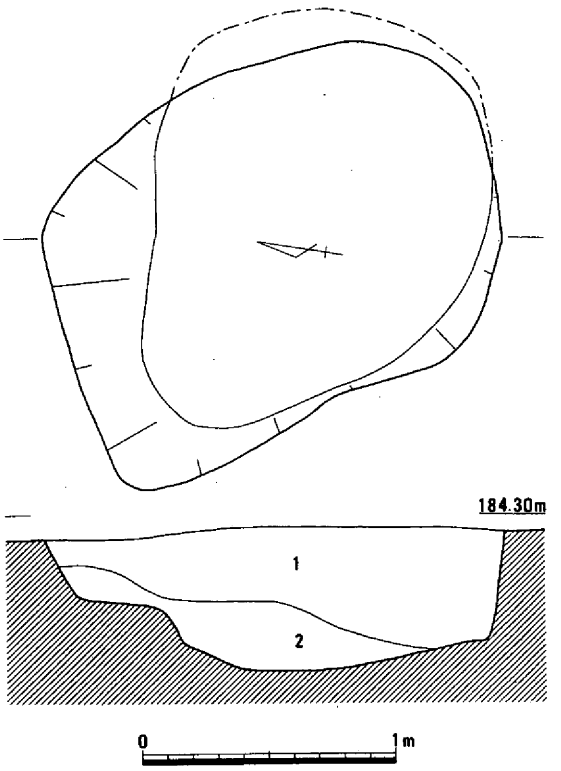


第306図　土壙308（1／30）・出土遺物（1／4）

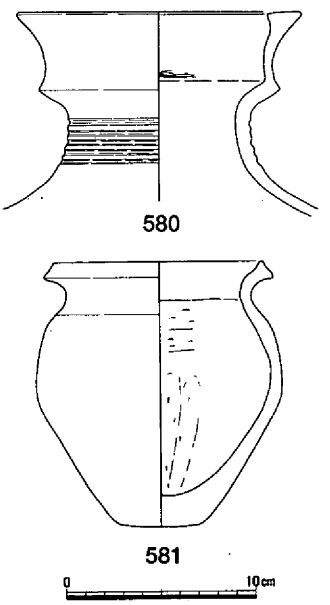


1．灰黄褐色粘質土（土器）
2．灰黄褐色粘質土
3．灰黄褐色粘質土（土器）
4．暗褐色粘質土

第307図　土壙309（1／30）



1．暗褐色粘性砂質土（土器）　2．灰黄褐色粘性砂質土



第308図　土壙310（1／30）・出土遺物（1／4）

土壙309（第307図）

３区東部の竪穴住居８の北東２ｍで検出した。床面の平面形は胴張り状になった隅丸方形を呈する。床面の周囲には、溝が存在する。床面の１辺は130cm、検出面からの深さは64cmを測る。

遺物は第１層と第３層から土器片が出土している。しかし、図化できるほどの大きさはない。

土器から弥生時代後期と考えたい。

土壙310（第308図、図版36）

土壙309の北東１ｍで検出した。検出面での平面形は不整形な長方形である。床面は円形で、凹凸が認められる。検出面の長辺は180cm、短辺は130cm、深さは57cmを測る。

遺物は上層から土器片が出土している。**580**は長頸壺で、頸部に５条の凹線が認められ、口縁端部が肥厚して特異な形状を呈している。**581**は小型の土器で、器壁が厚いために重量感がある。

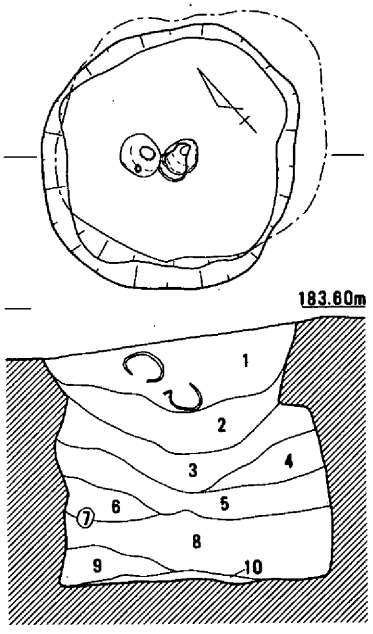
土器から弥生時代後期と考えたい。

土壙311（第309図、図版36）

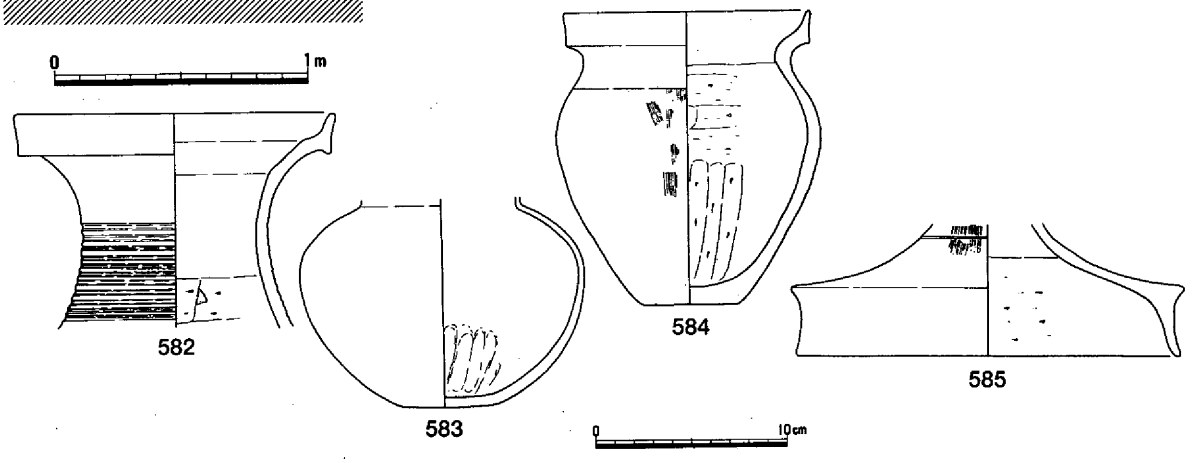
竪穴住居８の北西７ｍで検出した。平面形は円形である。断面形は東側に片寄って袋状を呈する。床面は径が87cm、検出面からの深さは102cmを測る。

遺物は第１・２層から土器片が出土している。長頸壺、広口壺、甕、器台が実測できた。

土器から弥生時代後期中葉と考えたい。



1．暗褐色粘性砂質土（土器）
2．黒褐色砂質土（土器）
3．黒褐色砂質土
4．黒褐色砂質土
5．暗褐色粘性砂質土
6．褐色砂質土
7．淡褐色砂質土
8．黒褐色粘性砂質土
9．黄橙色粘性砂質土
10．黒褐色粘性砂質土



第309図　土壙311（1／30）・出土遺物（1／4）

土壙312（第310図）

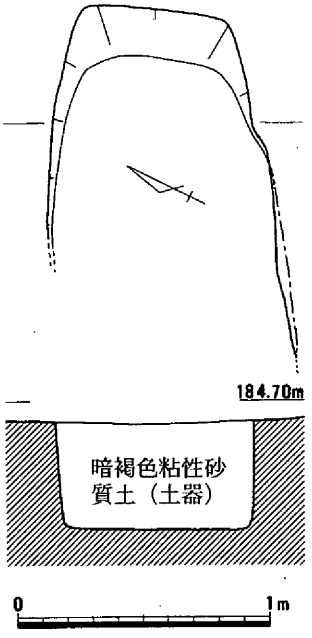
土壙314に切られている。平面形は長方形である。床面は長辺が122cm、短辺が88cm、深さは42cmを測る。

土器片から弥生時代後期と考えたい。

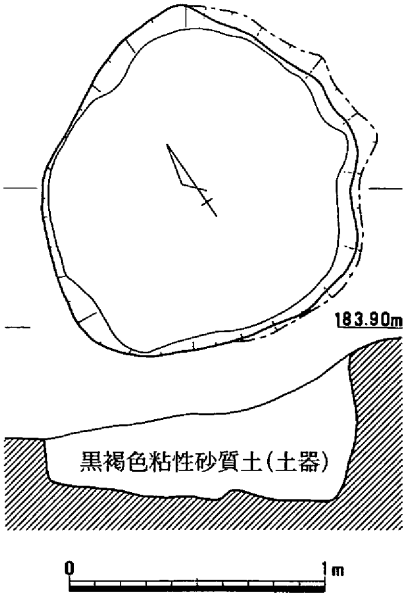
土壙313（第311図）

土壙309の北東１ｍで検出した。平面形は円形である。床面には凹凸がある。検出面での長径は120cm、短径は112cm、深さは55cmを測る。

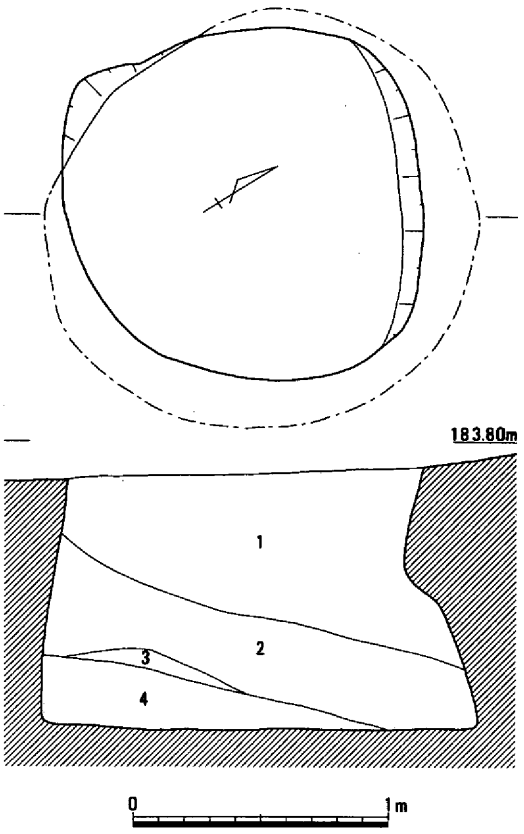
土器片から弥生時代後期と考えたい。



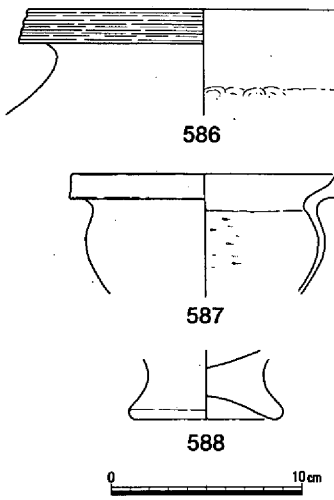
第310図　土壙312（1／30）



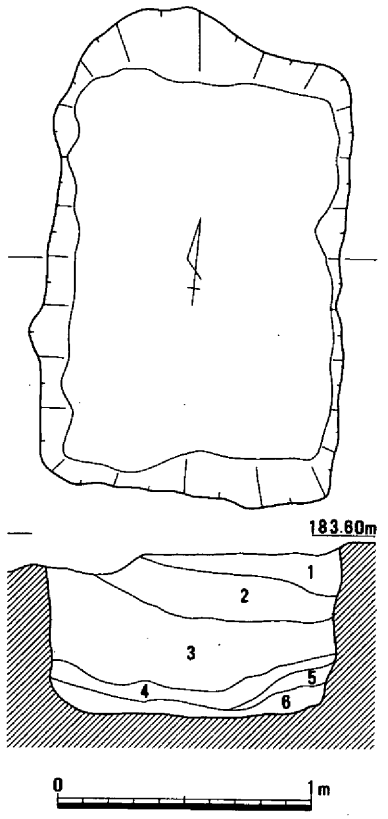
第311図　土壙313（1／30）



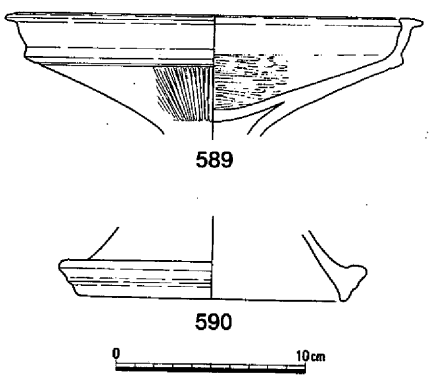
1．灰黄褐色粘性砂質土(土器)　3．暗褐色粘性砂質土
2．橙色粘質土　4．浅黄色粘性砂質土



第312図　土壙314 (1／30)・出土遺物 (1／4)



1．暗褐色粘性砂質土　4．暗褐色粘性砂質土
2．褐色粘性砂質土　5．明褐色粘性砂質土
3．褐色粘性砂質土　6．褐色粘性砂質土



第313図　土壙315 (1／30)・出土遺物 (1／4)

土壙314（第312図）

竪穴住居８の北東１ｍで検出した。検出面での平面形は隅丸方形、床面は円形である。床面は平坦である。断面形は西側を除いて袋状を呈する。床面の径は170cm、深さは103cmを測る。

遺物は上層から土器片が出土している。

土器から弥生時代後期中葉と考えたい。

土壙315（第313図）

土壙311の北で検出した。平面形は長方形である。床面は長辺が145cm、短辺が100cm、深さは

60cmを測る。

遺物は高杯の破片が出土している。杯部と脚部の破片であるが、接合できない。

土器から弥生時代後期前葉と考えたい。

土壙316（第314図）

土壙309の北東で検出した。切り合いは不明である。平面形は楕円形である。床面は長径が135cm、短径が70cm、深さは24cmを測る。

遺物は土器片だけが出土している。

土器から弥生時代後期前葉と考えたい。

土壙317（第315図）

竪穴住居８の中央部で検出した。農道の法面に存在したため、それとの切り合い関係は不明である。平面形は楕円形である。床面は長径が96cm、短径が60cm、深さは50cmを測る。

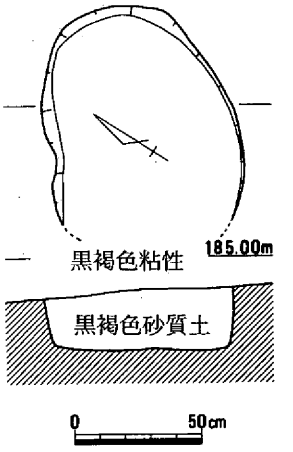
遺物は土器片だけが出土している。

土器から弥生時代後期前葉と考えたい。

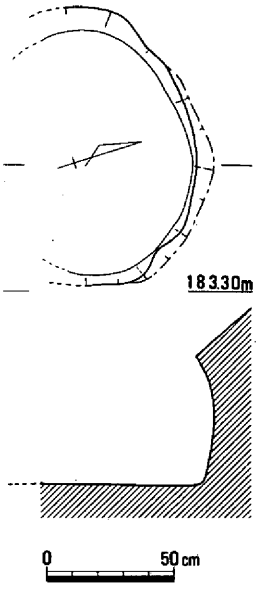
土壙318（第316図）

３区の西端で検出した。平面形は楕円形である。検出面での長径は250cm、短径は220cm、深さは70cmを測る。床面は平坦だが、長径は202cm、短径は190cmを測る。

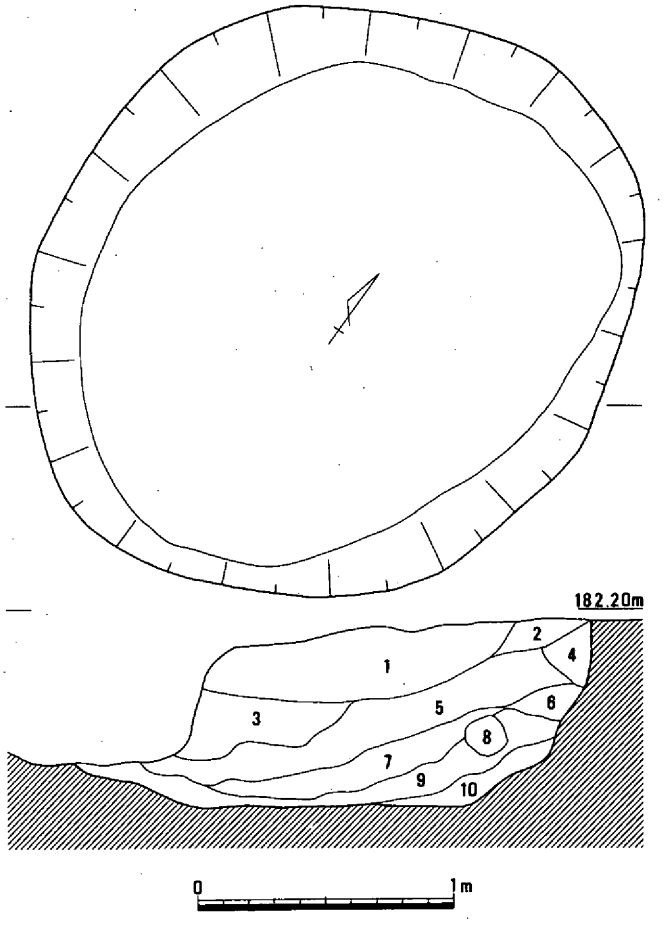
遺物は弥生時代後期の土器片が出土している。



第314図　土壙316（1／30）



第315図　土壙317（1／30）



1．暗赤褐色砂質土　　6．明褐色砂質土
2．明赤褐色砂質土　　7．褐色粘性砂質土
3．暗褐色砂質土　　8．黒褐色砂質土
4．橙色砂質土　　9．橙色粘性砂質土
5．黒褐色砂質土　　10．明褐色粘性砂質土

第316図　土壙318（1／30）

(5) 溝

溝１（第317図）

１区南部の竪穴住居４の南で検出した。南東から北西方向に向かって左曲がりになる部分で、竪穴住居16に切られている。竪穴住居の壁体溝の可能性もある。

遺物は壺の口縁部破片が出土している。

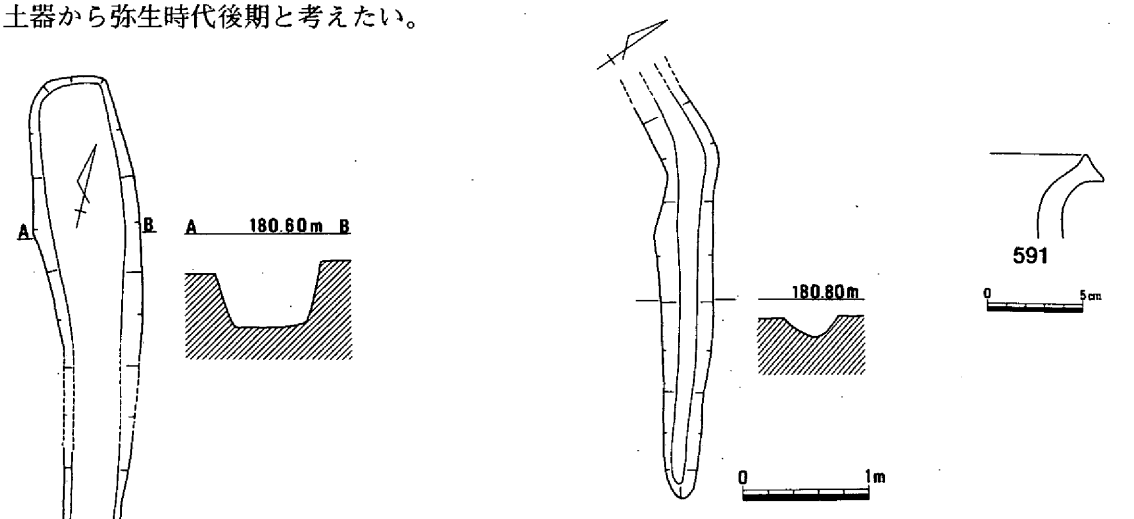
土器から弥生時代後期と考えたい。

溝２（第318図）

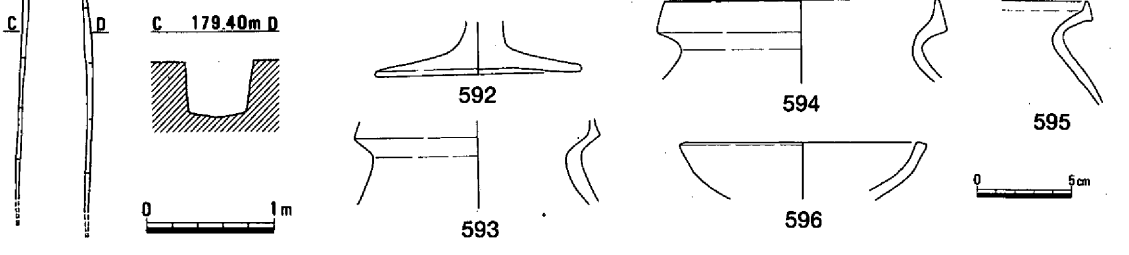
１区南部の竪穴住居13の南で検出した。断面形が逆台形に近い人工的な溝である。竪穴住居13に関連する排水溝と考えられる。

遺物は蓋や甕などが出土している。

土器から弥生時代後期と考えたい。



第317図　溝１（1／30）・出土遺物（1／4）



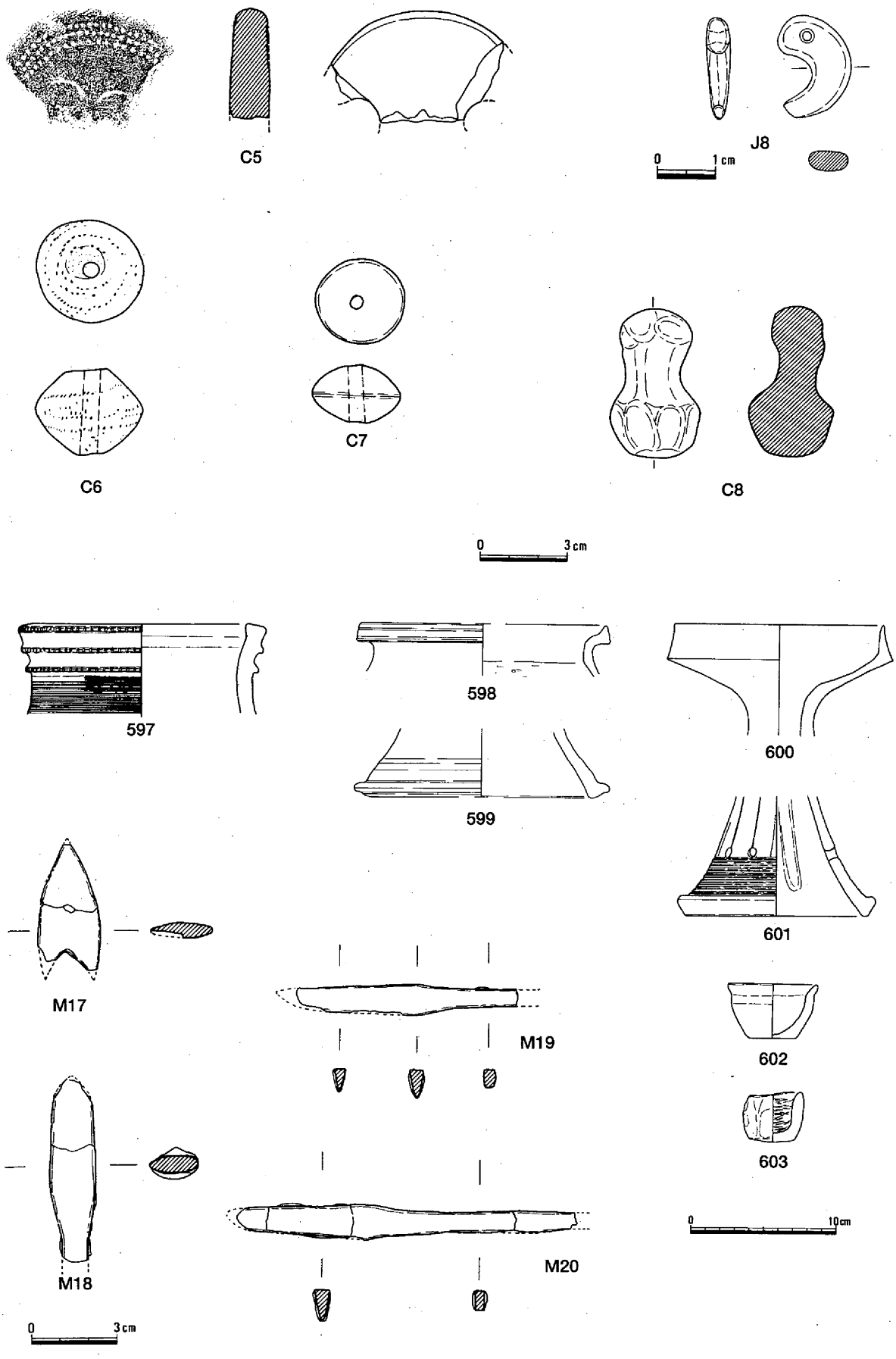
第318図　溝２（1／30）・出土遺物（1／4）

(6) 遺構に伴わない遺物

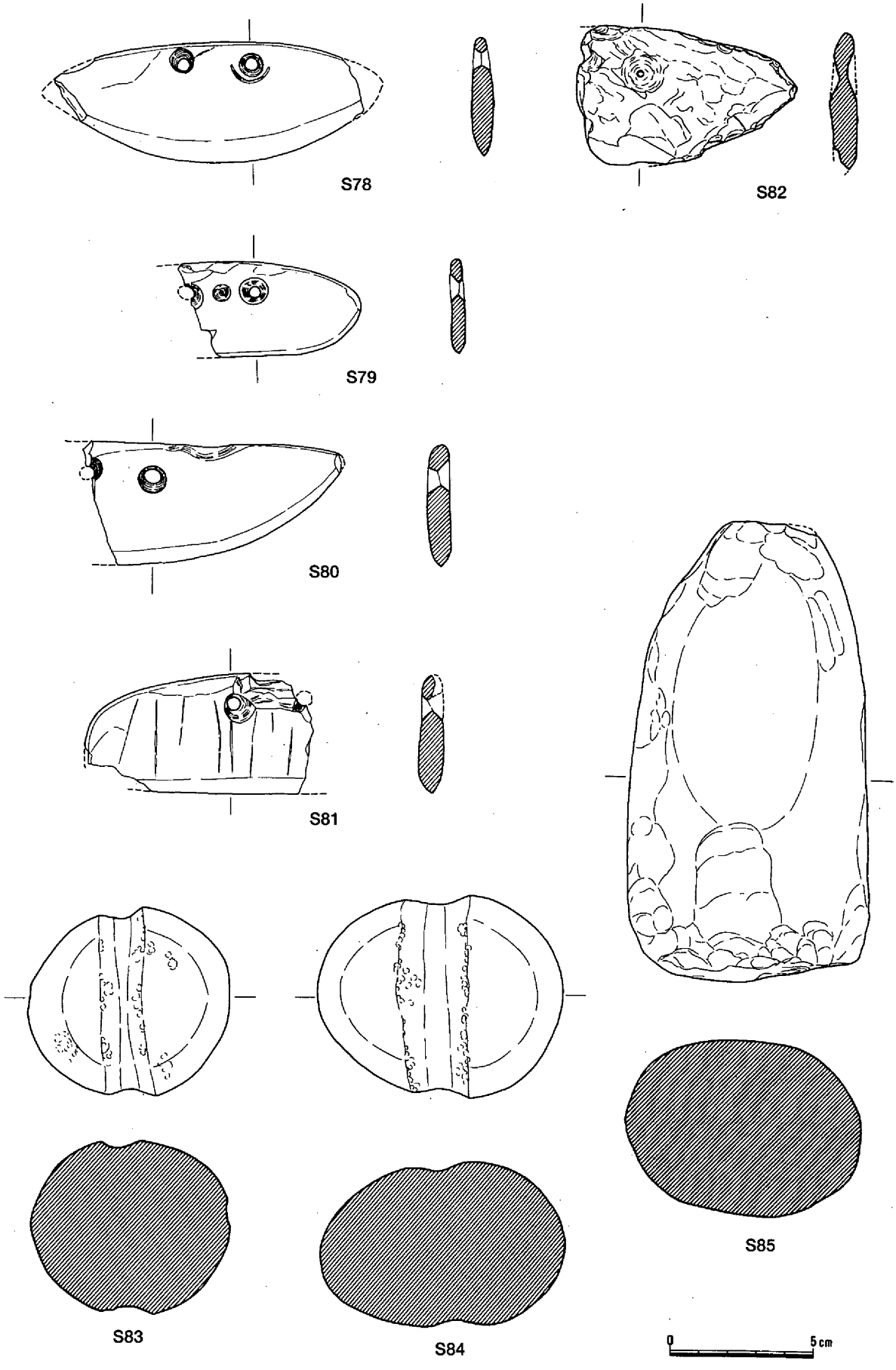
弥生時代に属する遺物で、遺構に伴わないものをここで扱う。翡翠製の勾玉は、２区の竪穴住居19か竪穴住居21のどちらかで出土している。分銅形土製品は２区の中央部で採集した。土玉、壺形土製品、ミニチュア土器も２区の出土である。

石包丁と石錘は２区、石杵は１区から出土している。

鉄鏃、鉈、刀子は１区からの出土である。



第319図　遺構に伴わない遺物（1）（1／1、1／2、1／4）



第320図　遺構に伴わない遺物（2）（1／2）

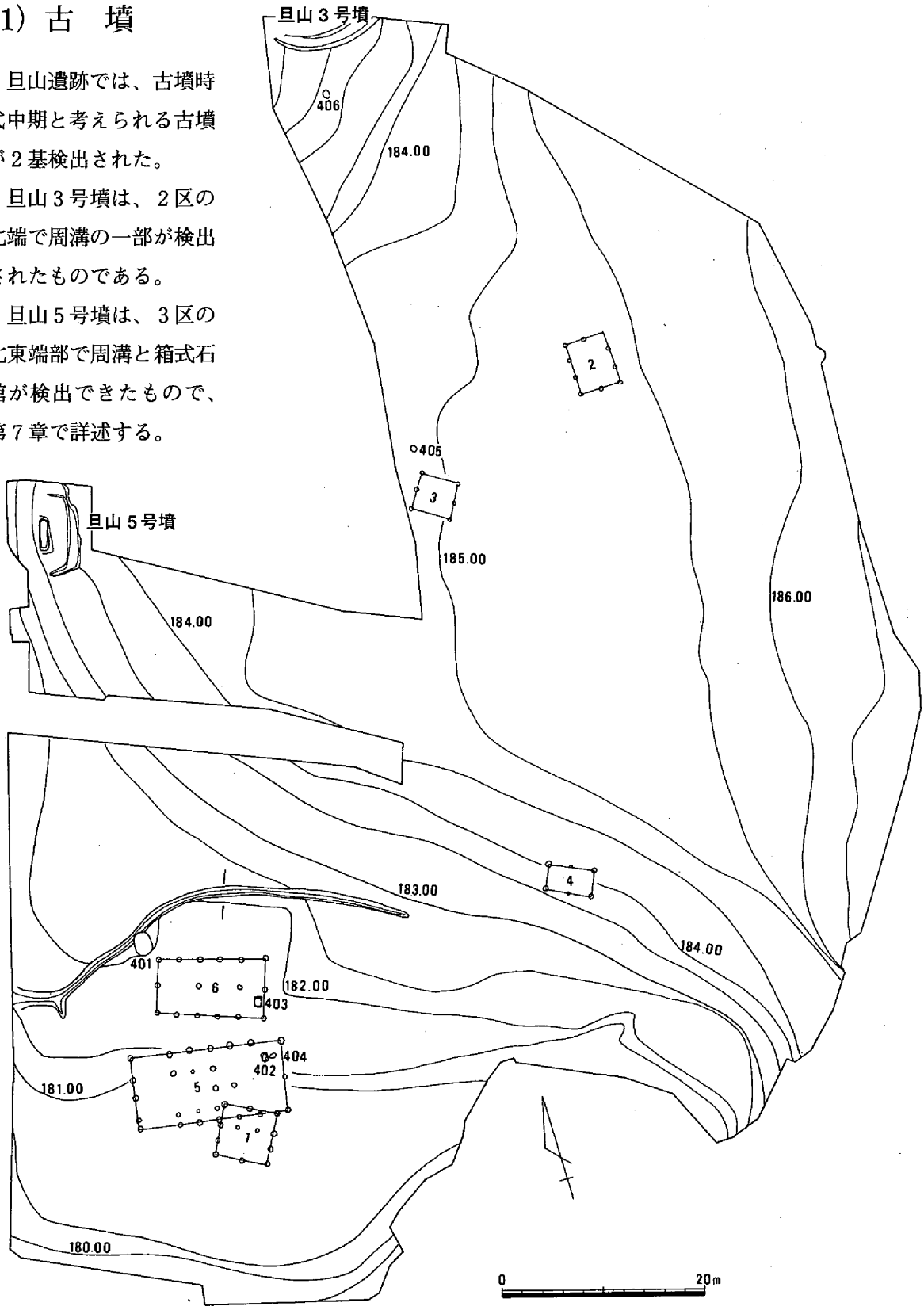
第５節　古墳時代以降の遺構と遺物

(1) 古　墳

旦山遺跡では、古墳時代中期と考えられる古墳が２基検出された。

旦山３号墳は、２区の北端で周溝の一部が検出されたものである。

旦山５号墳は、３区の北東端部で周溝と箱式石棺が検出できたもので、第７章で詳述する。



第321図　古墳時代～中世遺構配置図（1／600）

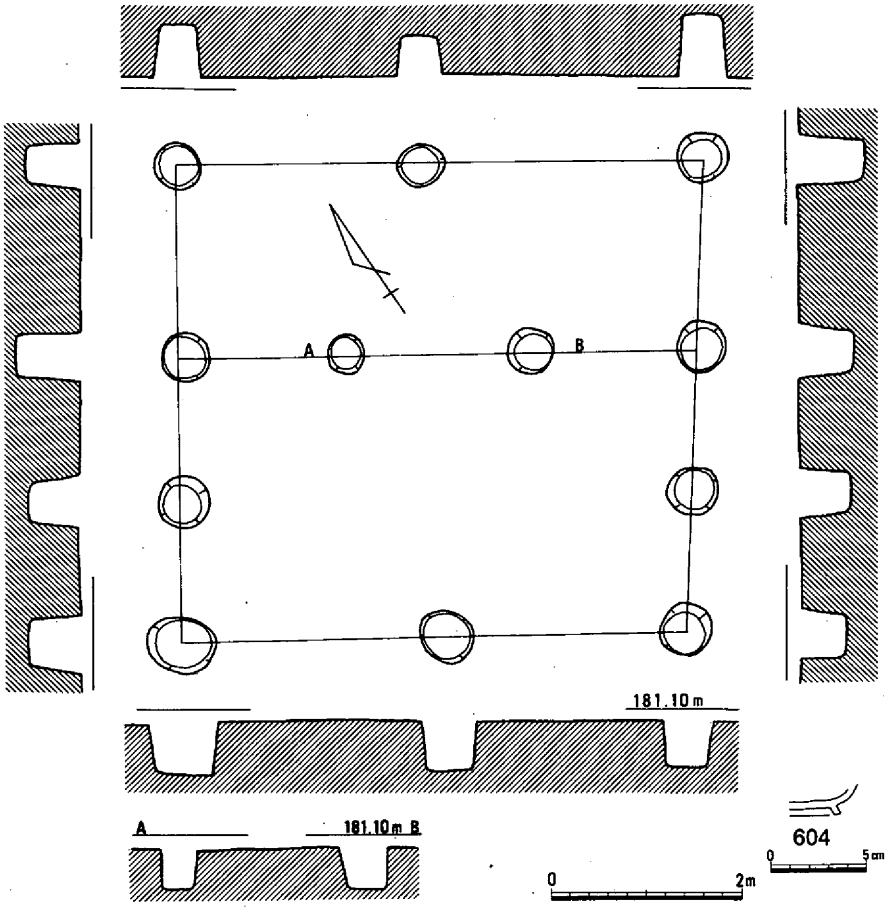
(2) 建　物

建物１

（第322図、図版28）

１区中央からやや南寄りの位置で検出した建物である。３間×２間で、棟の方向はＮ－45°－Ｅである。ほぼ正方形のプランを呈し、540×560cmを測る。柱穴の配置は図示したとおりである。ＡとＢとの間の２本の柱穴は、ここに間仕切が存在したことが想定できる。柱穴の径は50～80cm、深さは40～64cm、柱間は160～280cmを測る。

遺物は古代に属する須恵器片が出土している。



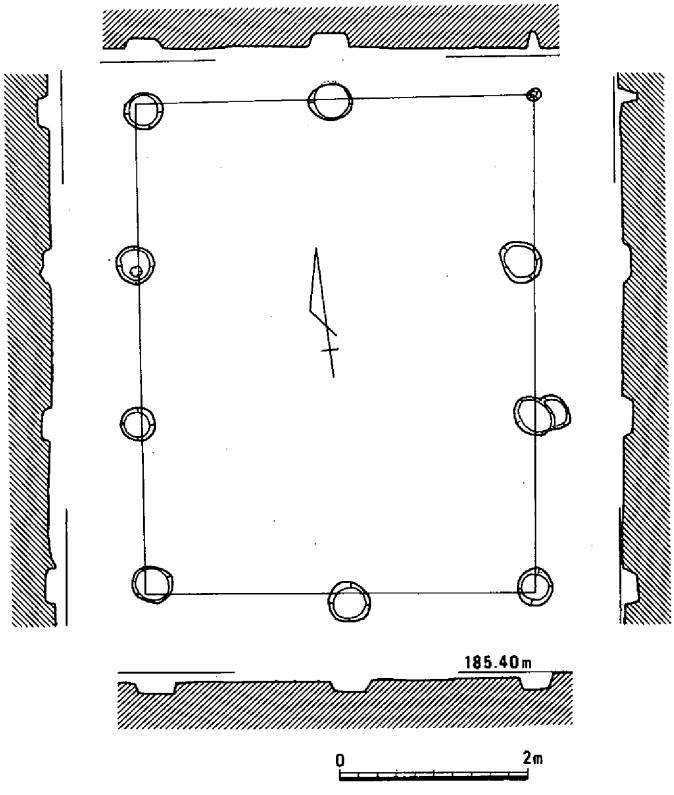
第322図　建物１（1／80）・出土遺物（1／4）

建物２

（第323図、図版27）

２区中央からやや北寄りの位置で検出した長方形の建物である。３間×２間で、棟の方向はＮ－5°－Ｅである。全体の規模は、長さ520cm、幅400cmを測る。柱穴の配置は図示したとおりである。北東隅の柱穴は極めて小さく、杭のようである。柱穴の径は10～40cm、深さは10～20cm、柱間は160～200cmを測る。

遺物は古代に属する須恵器片が出土している。



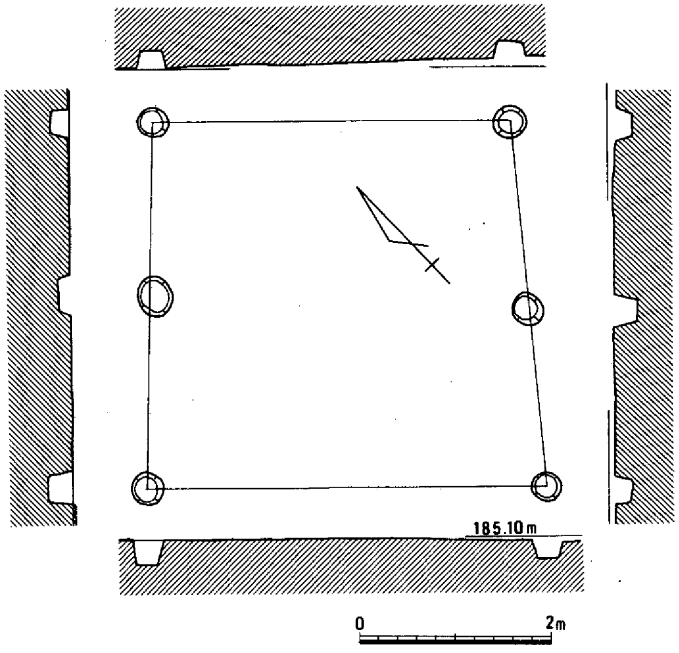
第323図　建物２（1／80）

建物３

（第324図、図版27）

２区西部で検出した建物である。２間×１間で、棟の方向はＮ－45°－Ｅである。正方形のプランを呈し、384㎝×384～416㎝を測る。柱穴の配置は図示したとおりである。柱穴の直径は24～32㎝、深さは10～24㎝、柱間は176～416㎝を測る。

遺物は中世に属すると思われる、備前焼の破片が出土している。



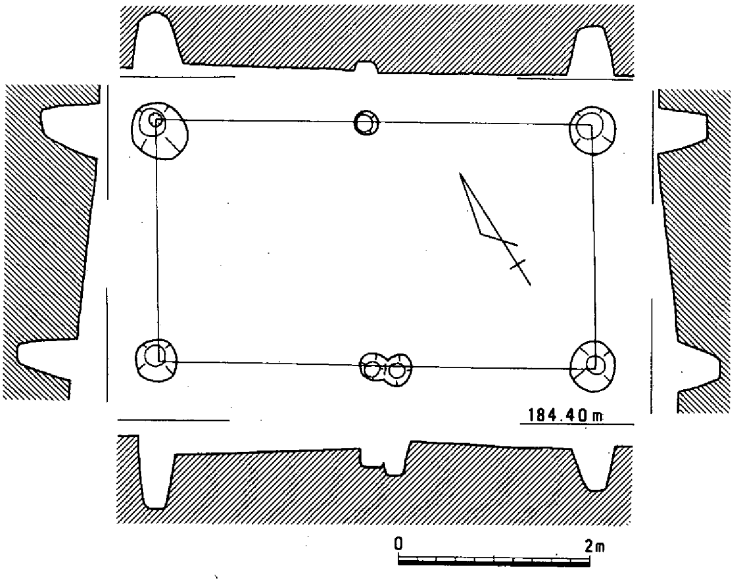
第324図　建物３（1／80）

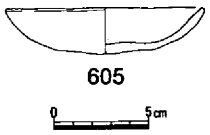
建物４

（第325図、図版27）

１区北東部で検出した建物である。２間×１間で、棟の方向はＮ－60°－Ｗである。長方形のプランを呈し、240㎝×456㎝を測る。柱穴の配置は図示したとおりである。柱穴の径は24～60㎝、深さは10～80㎝、柱間は208～240㎝を測る。桁行部分に柱穴が重なって存在するが、建て替えは行われていない。

遺物は中世に属する土師器皿が出土している。



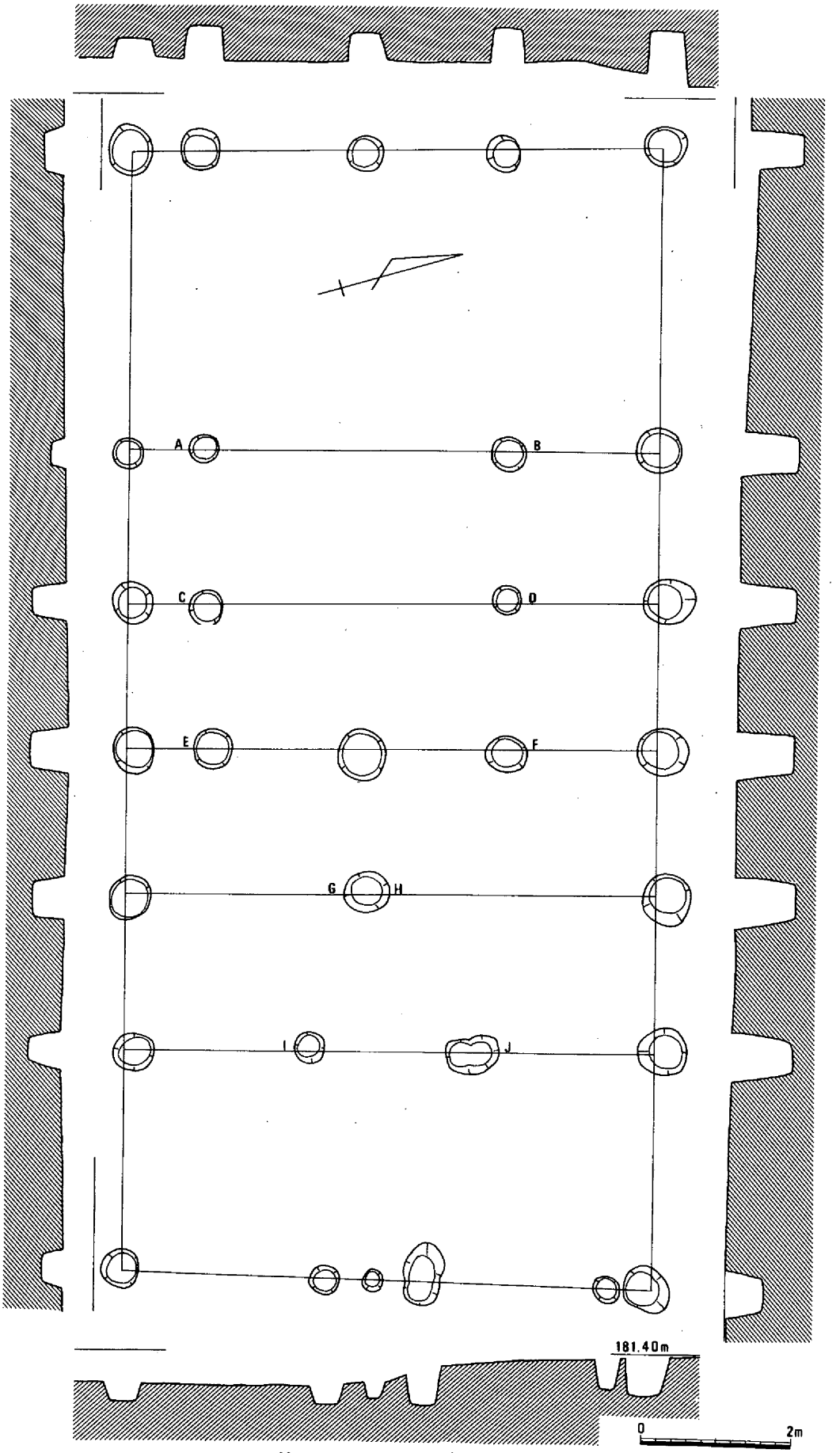


第325図　建物４（1／80）・出土遺物（1／4）

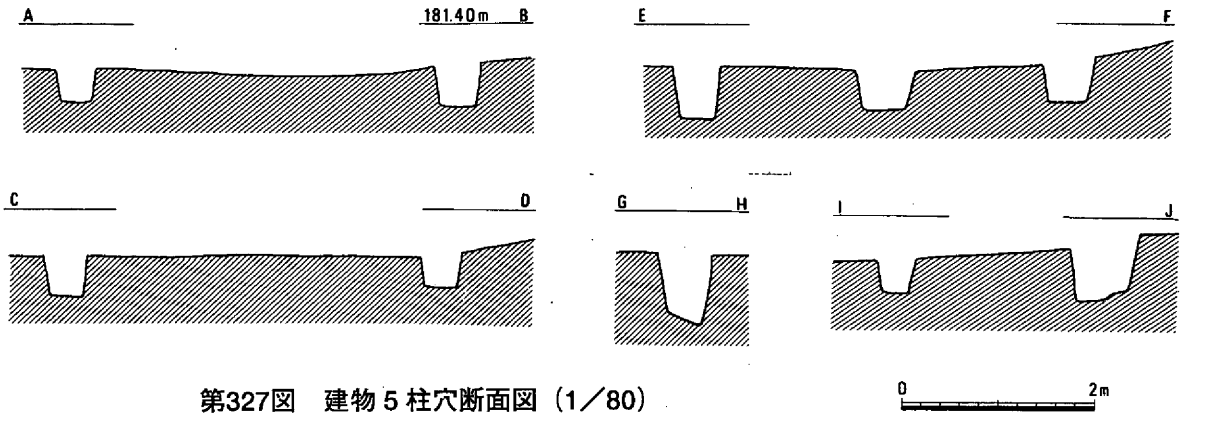
建物５（第326・327・329図、図版28・42）

１区中央部のやや南寄りに、建物１と重複して検出した大型の建物である。６間×２間で、棟の方向はＮ－75°－Ｅである。長方形のプランを呈し、704㎝×1480㎝を測る。柱穴の配置は図示したとおりである。柱穴の径は40～72㎝、深さは20～80㎝、柱間は200～400㎝を測る。東西両端の２間は特別な機能を持ったものと考えられ、中央には間仕切が想定できる。

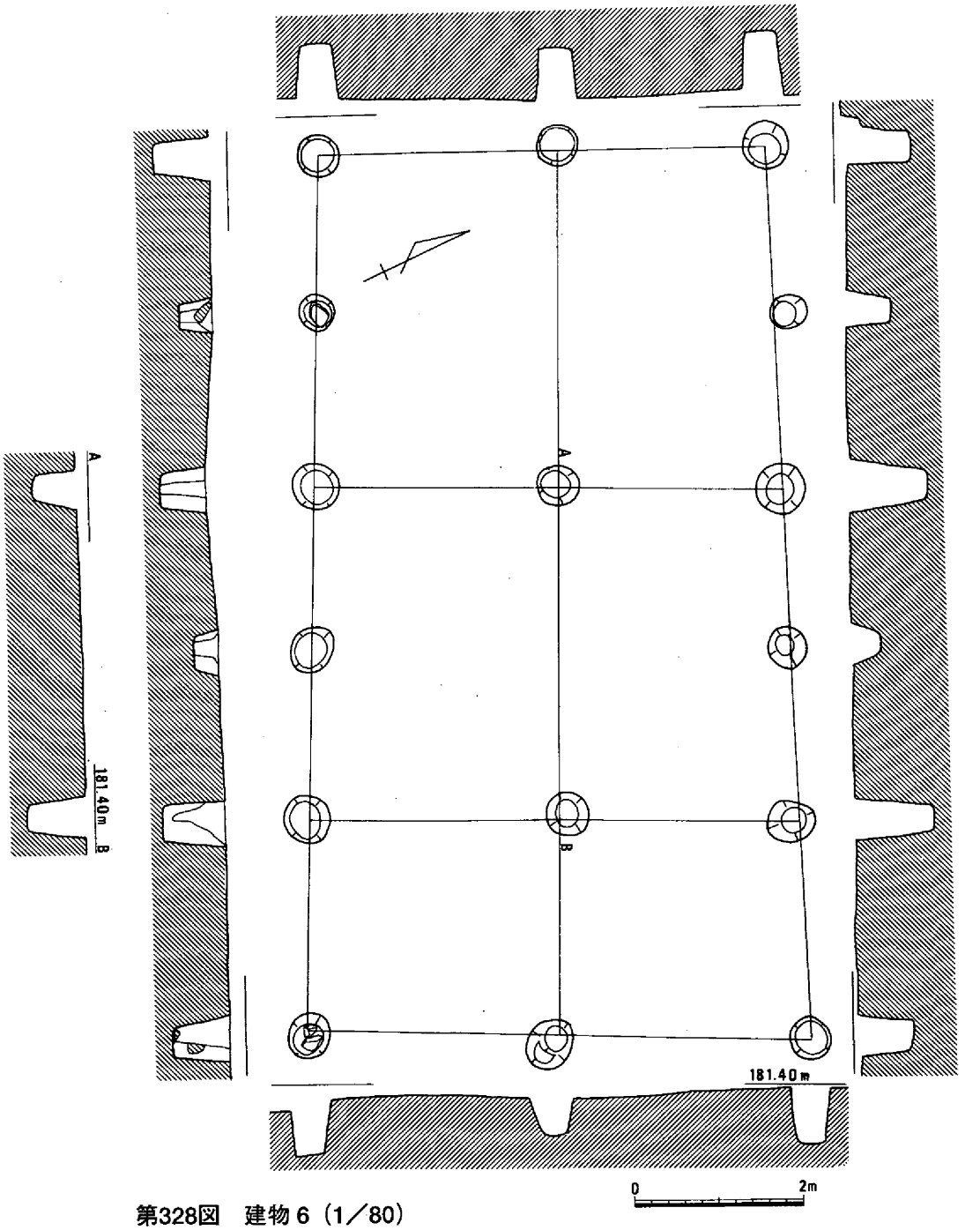
遺物としては、柱穴から中世に属する鉄釘と明国製の青磁碗の破片が出土している。



第326図　建物5（1／80）



第327図　建物５柱穴断面図（1／80）



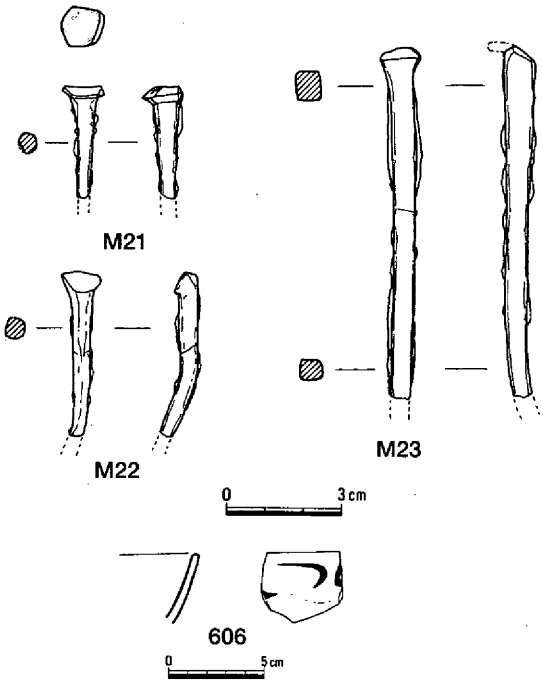
第328図　建物６（1／80）

建物６

（第328･330図、図版28）

１区中央部の建物５の北２～３ｍの地点で検出した大型の建物である。５間×２間で、棟の方向はＮ－65°－Ｅである。建物５とほぼ平行している。長方形のプランを呈し、560㎝×1072㎝を測る。柱穴の配置は図示したとおりである。柱穴の径は40～64㎝、深さは32～88㎝、柱間は192～296㎝を測る。この建物の建設に伴って、宅地の大規模な造成工事が行われているのが注目される。

遺物としては、柱穴から中世に属する鉄釘と明国製の青磁碗片が出土し、包含層から宋銭と国産陶器も採集している。



第329図　建物５出土遺物（1／2、1／4）

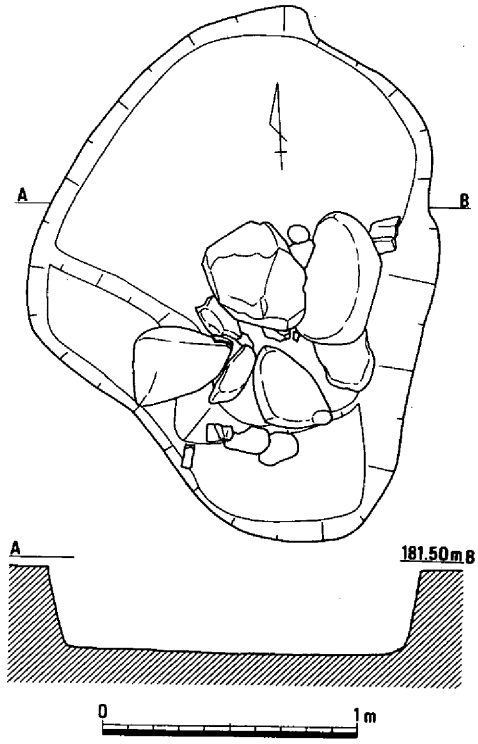
第330図　建物６出土遺物（1／2）

(3) 土　壙

土壙401（第331図）

建物６の北西で検出した不整形な土壙である。径が20～35㎝の河原石が集積していた。祭祀遺構の可能性が高い。

遺物は備前焼の甕の破片が出土している。

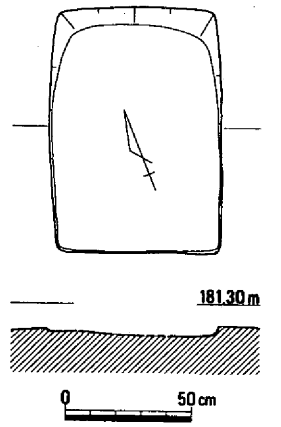


第331図　土壙401（1／30）

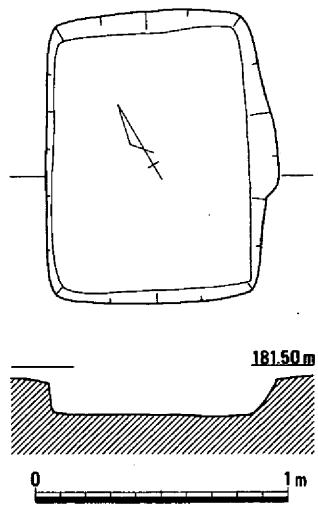
土壙402（第332図）

１区の建物５の北東部分に位置する。建物５と同時に機能していたと考える。平面形は長方形で、長辺100㎝、短辺66㎝、深さ10㎝の浅くて小型の土壙である。内部には炭が充填されていた。

遺物は出土していないが、中世と考えたい。



第332図　土壙402（1／30）



第333図　土壙403（1／30）

土壙403（第333図）

１区の建物６の南東部分に位置する。建物６と同時に機能していたと考える。平面形は隅丸長方形で、長辺120cm、短辺90cm、深さ15cmの浅くて小型の土壙である。内部には炭が充塡されていた。土壙402と類似している。

遺物は出土していないが、中世と考えたい。

土壙404（第334図）

１区の建物５の南東部分で、土壙402の東隣に位置する。平面形は楕円形で、長径80cm、短径60cm、深さ15cmの浅くて小型の土壙である。７個の角礫が配置されていた。

遺物は出土していないが、中世と考えたい。

土壙405（第335図、図版42）

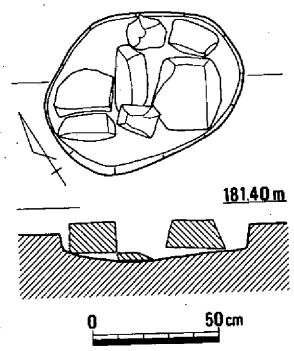
２区の建物３の北に位置する。平面形は円形で、径60cm、深さ15cmの浅くて小型の土壙である。

遺物は床面から11枚の銅銭が重なって出土した。１枚ずつ剥いで錆を落としたところ、「永楽通寶」「太平通寶」「熙寧元寶」「天聖元寶」などが解読できた。古銭から土壙の時期は中世と考えたい。

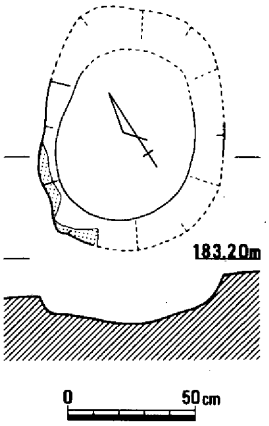
土壙406（第336図、図版28）

２区の北端で検出した土壙で、平面形は楕円形と推定できる。長径90cm、短径70cm、深さ15cmの浅くて小型の土壙である。壁の一部が被熱している。内部には炭と灰が充満していた。

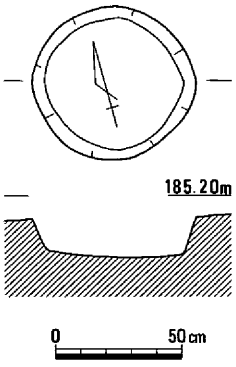
遺物は出土していないが、中世と考えたい。

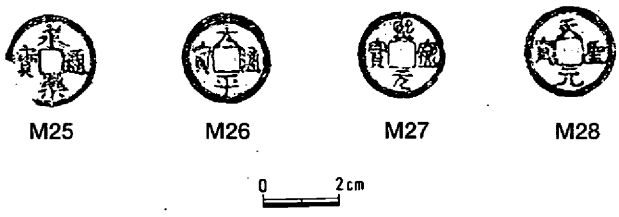


第334図　土壙404（1／30）



第336図　土壙406（1／30）





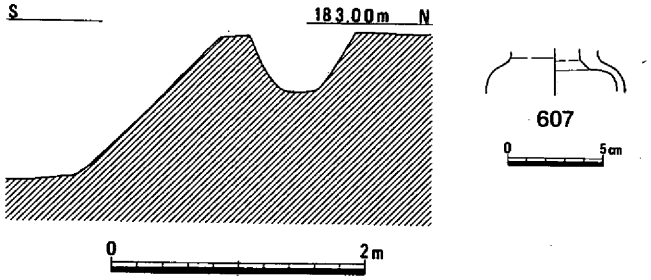
第335図　土壙405（1／30）・出土遺物（1／2）

(4) 溝

溝３（第321・337図）

１区中央部の建物群の北側で検出した細長い溝である。長さ44ｍ、平均の深さ50㎝を測る。

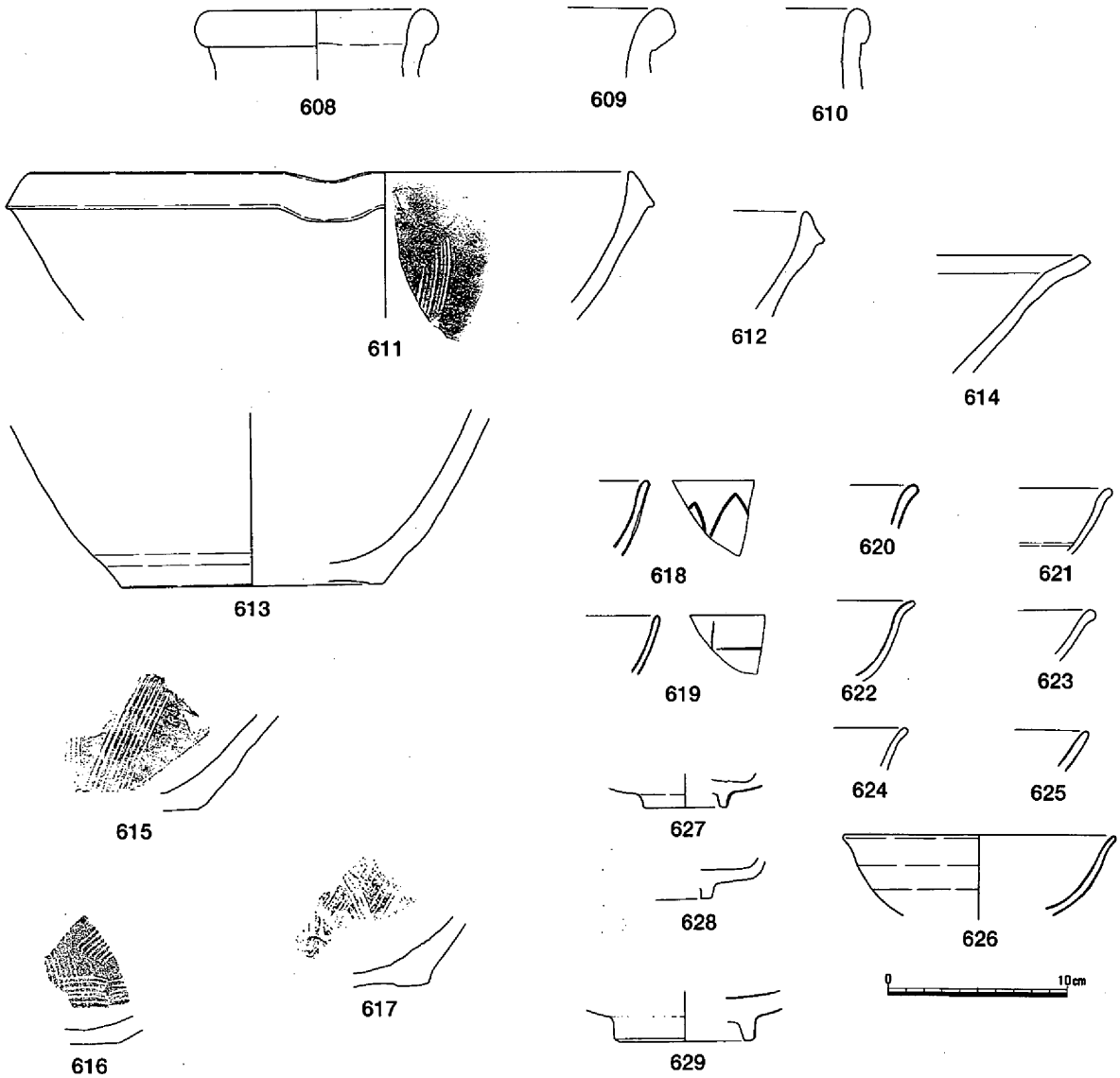
遺物としては、中世の陶磁器や鉄釘が出土している。



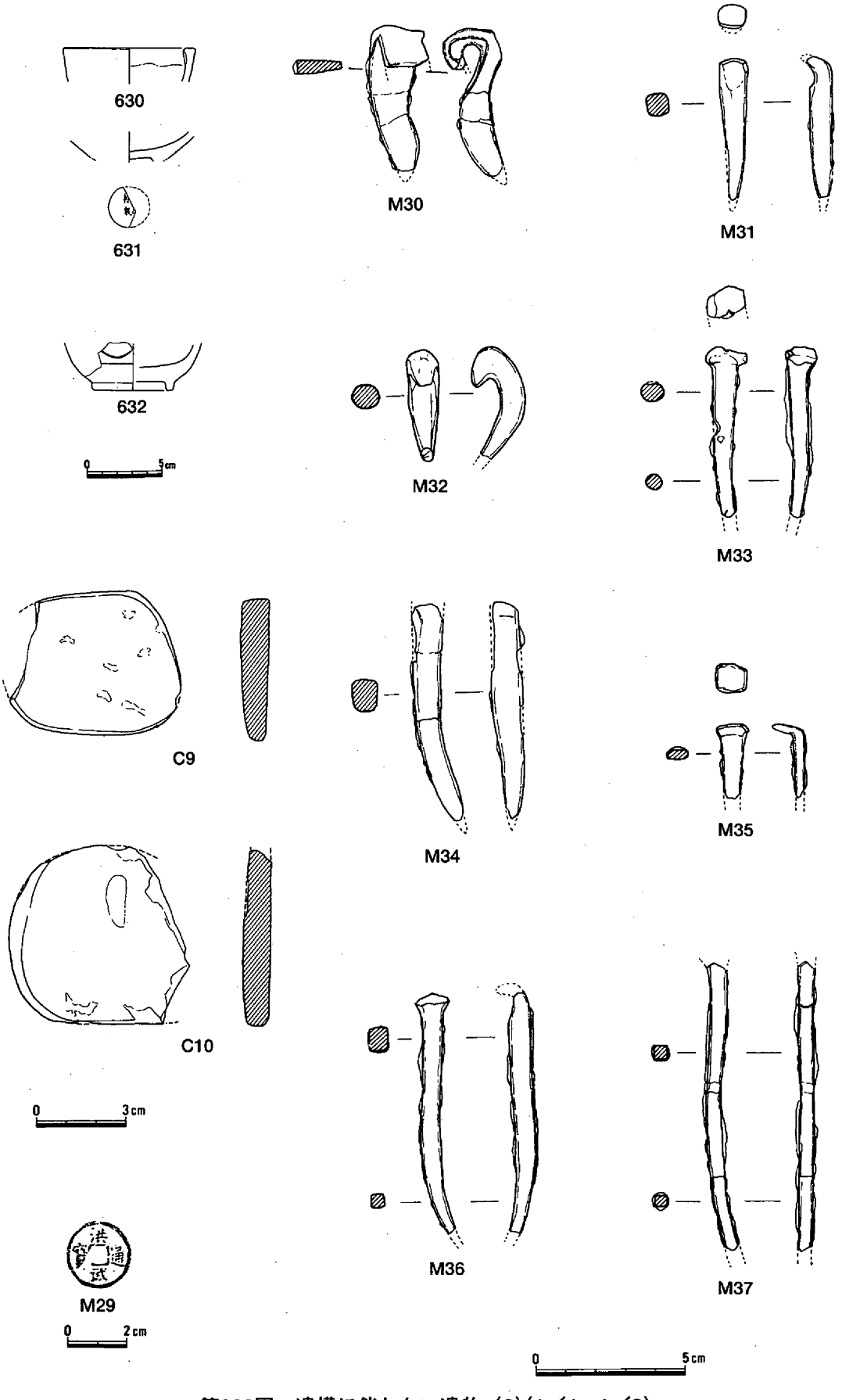
第337図　溝３（1／60）・出土遺物（1／4）

(5) 遺構に伴わない遺物

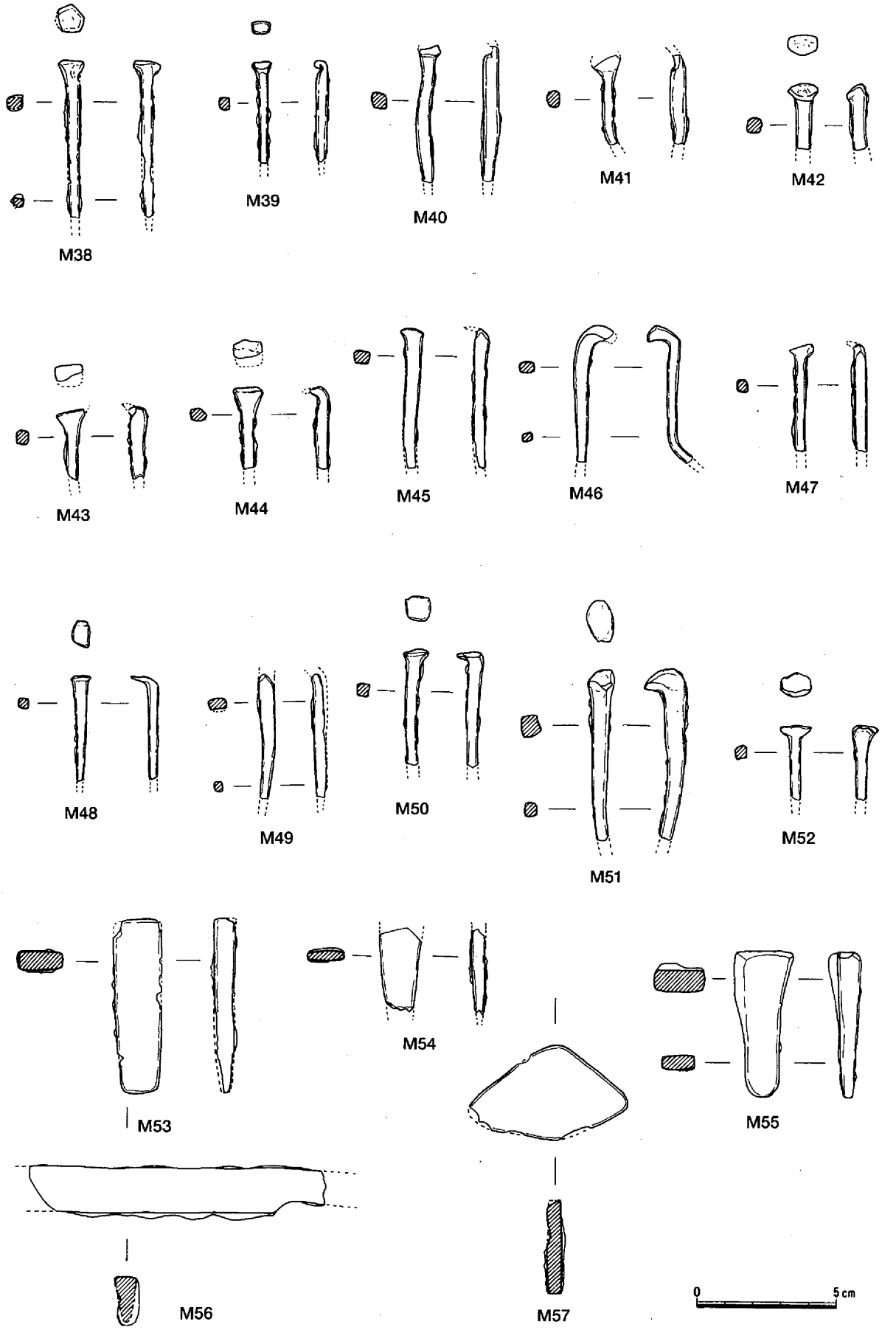
古墳時代以降の遺物は、中世土器包含層出土遺物と一緒に、ここで取り扱うことにした。明国製青磁碗、備前焼擂鉢、宋銭「洪武通寶」、瓦製円板、鉄釘、刀子、楔、火打金などが存在する。大半は１区中央部の建物群を検出する過程で採集した。



第338図　遺構に伴わない遺物（1）(1／4)



第339図　遺構に伴わない遺物（2）(1／4、1／2)



第340図　遺構に伴わない遺物（3）（1／2）

第6節　小　　結

旦山遺跡で検出された遺構について、全体の概要を時期別に説明して、小結にしたい。

縄文時代（第10図）

旦山遺跡の2区には東西に低い丘が存在し、その間には南北に延びる谷地形を呈している。縄文時代後期から晩期にかけては、この辺り一帯は鬱蒼とした森林地帯であったことが想像できる。65基の落とし穴のうち、大半はこの2区で検出された。縄文人達がここを獣道として熟知していたものと思われる。落とし穴は、遺物が伴うことがほとんどないから、時期を断定するのが非常に困難なことである。しかしこの遺跡では、幸いにして1基から縄文時代晩期の深鉢形土器が出土したばかりか、周辺でも後期の土器が採集できたので、落とし穴が縄文時代後期から晩期に属するものと考えられる。

落とし穴と考えられる土壙には、2タイプがある。1つは、平面形が楕円ないし長方形を呈し、埋土に黒ぼこを含んで、床に逆茂木を埋め込む深い柱穴状の穴を有するものである。このタイプの落とし穴は、津山市内の遺跡から多数検出されている[(1)]。いま1つは、平面形が円形で、埋土には黒ぼこの下層に堆積している灰色火山灰が充填され、底部が尖り底になったものである。このタイプの落とし穴は、旦山遺跡の2か所で、前者の落とし穴に切られていることからも、かなり古い時代のものであることがわかる。蒜山高原の遺跡では、旧石器時代に入れる研究者もある[(2)]。なお、本遺跡での第1タイプは33基、第2タイプは24基、その他のタイプは8基である。

弥生時代（第78・153図）

本遺跡の中心となっている時期はこの時代で、中期末から始まって後期後葉で終了している。まさしく『魏志倭人伝』に記された、倭国大乱の時代にあたる。竪穴住居の数37軒は、発掘調査中の便宜的な数値で、実際にはどの住居も何度も建て替えが行われており、本来の竪穴住居の数は、最低でも109軒は存在したようである。さらに段状遺構とした遺構は、実は住居と考えても差し支えないものである。したがって、これらも含めると、合計125軒以上の住居が存在したことになる。しかし、同時に何軒の住居がこの調査区に建っていたかと言えば、面積的に考えて、この台地上に占地できるのは20軒が限度であろう。集落には中央広場や畑も必要であるから、さらに少なくなって10～15軒とも考えられる。この旦山遺跡の集落の特徴を上げると、まず第1にほぼ半数の住居が火災に遭っていること、第2に石鏃と鉄鏃が同時に出土すること、第3に径が10m前後の大型の住居が数軒も存在すること、第4に住居の大小に関係なく鉄器や玉類を保有していること、そして第5に160基にもおよぶ貯蔵穴の存在である。そのほかに、石包丁と砥石の多さ、貯蔵用の建物が検出できなかったこと、などを挙げることができる。

大型の住居は県北の遺跡で頻繁に発掘されるが、やはり支配者層の住居であろう[(3)]。住居の大きさについて、本遺跡では4段階に分けることが可能である。大型は、径が9m以上。中型は、径が6m前後。小型は、3m前後。超小型は、2m前後。この4種の住居が1つのセットとして同時に存在し、大型住居の数は、時期の数を示しているように推定できる。本遺跡は後期の末には集落が消滅している。平和な農村ではなく、焼き討ちに遭っているかのようである。近隣の遺跡でも、同様の焼失住居が多数見られる。この後には、この遺跡には古代まで住む人はいなかったのである。

貯蔵穴に蓄えていたものは、稲のほかに、地下に貯蔵した方が適している根菜類、豆類、堅果類、

魚貝類を考えたい。県南の遺跡では、袋状土壙内に貝層が形成されていることがある[4]。貯蔵穴の平面形には、方形（長方形）のもの48基と、円形（楕円形）のもの112基がある。出土遺物から推定すると、概ね前者の方が古く位置付けられる。弥生時代中期後葉から後期前葉までは、方形を主とした貯蔵穴を使用し、後期中葉から後葉までは、円形の貯蔵穴を使用していたようである。

遺物について気が付いたことを、2・3点追加しておきたい。分銅形土製品は久世町内では初めての発見であり、津山市周辺でも1点が知られているだけで、県北では稀少である[1]。ついでミニチュア土器の出土が多く、この時期の集落では珍しくはないものの、特に目立つ。さらに蓋形土器や玉類の出土が多いのも、気がかりな点である。また、大型の住居に限らず、鉄器の出土が多い。これは県北の大集落に一般的な傾向である[3]。鏃は戦闘用で、鉇は木工用、手斧は木工と穴掘り兼用である。貯蔵穴の壁に、手斧の痕跡を認めている。石包丁もまた多い。しかも折れた物まで、二次加工して使用している。砥石は非常に多い。近所に砥石に使う石材の山があり、現在でも採掘している。鉄滓も出土しているが、中世のそれと全く区別ができないので、その所属年代を決めかねるのが惜しまれる。

古墳時代（第321図）

旦山古墳群の5基のうち2基が、調査区の端部で検出できた。この時期の土師器は、2区で1点が採集されているのみである。本遺跡の範囲内で検出できたのは、3号墳の周溝の一部と5号墳である。先旦山遺跡や惣台遺跡では、後期の竪穴住居が検出されている[5]。

古代（第321図）

建物が2棟検出できた。2棟ともに梁間2間である。建物1はやや特殊な建物のように思える。一般の住宅ではなく、神殿ではなかろうか。中央の2か所の柱穴が前殿と後殿を分ける柱と考えたい。建物2は住宅である。出土した遺物は須恵器の高台付杯で、平安時代と考えられる。

中世（第321図）

建物は4棟検出できた。建物5と建物6は、梁間2間の大型の建物である。一般の農家ではなく、武家屋敷ではないかと考えている。南方向に見える中世の山城である「篠向山城」と、同時期に存在した建物である。建物6を建築するために、大規模な宅地造成を実施していた。

この時代の土壙は6基あるが、土壙405は、規模が小さくて浅い円形の土壙で、中国製の古銭が14枚も出土している。墓穴であろうか。方形で炭の入っている2基の土壙は、建物5と建物6に伴うものであろう。

遺物は備前焼の大甕、瀬戸焼の天目茶碗、明国製青磁碗、鉄釘、刀子、少量の鉄と銅の残滓である。鉄と銅の残滓の出土から考えられるのは、鍛冶工房の存在である。建物5と建物6の東に、中世の柱穴群3が検出されている。これは建物にまとめることができていないが、工房の可能性がある。

時期については、古銭等の遺物から推定して、室町から戦国時代というところであろう。　（浅倉）

註

（1）行田裕美ほか「西吉田遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第58集　1997年
（2）山磨康平ほか「上野遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』103　1995年
（3）浅倉秀昭ほか「小中遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』117　1997年
（4）大橋雅也ほか「津寺遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』98　1995年
（5）本書第4章・第7章参照。

表—1　旦山遺跡新旧遺構名称対照表

本書掲載遺構名	調査時遺構名	時　　期
土壙1	1区NO.2土壙	縄文
土壙2	1区NO.3土壙	縄文
土壙3	1区NO.6土壙	縄文
土壙4	1区NO.15土壙	縄文
土壙5	1区NO.18土壙	縄文
土壙6	1区NO.21土壙	縄文
土壙7	1区NO.22土壙	縄文
土壙8	1区NO.25土壙	縄文
土壙9	1区NO.19土壙	縄文
土壙10	1区NO.60土壙	縄文
土壙11	1区NO.66土壙	縄文
土壙12	1区NO.67土壙	縄文
土壙13	2区NO.4土壙	縄文
土壙14	2区NO.6土壙	縄文
土壙15	2区NO.7土壙	縄文
土壙16	2区NO.17土壙	縄文
土壙17	2区NO.18土壙	縄文
土壙18	2区NO.19土壙	縄文
土壙19	2区NO.27土壙	縄文
土壙20	2区NO.31土壙	縄文
土壙21	2区NO.32土壙	縄文
土壙22	2区NO.33土壙	縄文
土壙23	2区NO.37土壙	縄文
土壙24	2区NO.41土壙	縄文
土壙25	2区NO.50土壙	縄文
土壙26	2区NO.51土壙	縄文
土壙27	2区NO.52土壙	縄文
土壙28	2区NO.55土壙	縄文
土壙29	2区NO.58土壙	縄文
土壙30	2区NO.59土壙	縄文
土壙31	2区NO.60土壙	縄文
土壙32	2区NO.61土壙	縄文
土壙33	2区NO.63土壙	縄文
土壙34	2区NO.64土壙	縄文
土壙35	2区NO.65土壙	縄文
土壙36	2区NO.68土壙	縄文
土壙37	2区NO.78土壙	縄文
土壙38	2区NO.95土壙	縄文
土壙39	2区NO.118土壙	縄文
土壙40	2区NO.119土壙	縄文
土壙41	2区NO.128土壙	縄文
土壙42	2区NO.134土壙	縄文
土壙43	2区NO.137土壙	縄文
土壙44	2区NO.139土壙	縄文
土壙45	2区NO.141土壙	縄文
土壙46	2区NO.142土壙	縄文
土壙47	2区NO.144土壙	縄文
土壙48	2区NO.146土壙	縄文
土壙49	2区NO.149土壙	縄文
土壙50	2区NO.150土壙	縄文
土壙51	2区NO.153土壙	縄文
土壙52	2区NO.159土壙	縄文
土壙53	2区NO.162土壙	縄文
土壙54	2区NO.163土壙	縄文
土壙55	2区NO.164土壙	縄文
土壙56	2区NO.165土壙	縄文
土壙57	2区NO.166土壙	縄文
土壙58	2区NO.167土壙	縄文
土壙59	2区NO.168土壙	縄文
土壙60	2区NO.169土壙	縄文
土壙61	2区NO.170土壙	縄文
土壙62	2区NO.171土壙	縄文
土壙63	2区NO.172土壙	縄文
土壙64	2区NO.174土壙	縄文
土壙65	2区NO.175土壙	縄文
土壙101	1区NO.44土壙	弥生中期
土壙102	1区NO.50土壙	弥生中期
土壙103	1区NO.62土壙	弥生中期
土壙104	1区NO.77土壙	弥生中期
土壙105	1区NO.99土壙	弥生中期
土壙106	1区NO.84土壙	弥生中期
土壙107	1区NO.14土壙	弥生後期
土壙108	1区NO.17土壙	弥生後期
土壙109	1区NO.48土壙	弥生後期
土壙110	1区NO.20土壙	弥生後期
土壙111	1区NO.23土壙	弥生後期
土壙112	1区NO.24土壙	弥生後期
土壙113	1区NO.32土壙	弥生後期
土壙114	1区NO.33土壙	弥生後期
土壙115	1区NO.35土壙	弥生後期
土壙116	1区NO.37土壙	弥生後期
土壙117	1区NO.38土壙	弥生後期

本書掲載遺構名	調査時遺構名	時　　期
土壙118	1区NO.39土壙	弥生後期
土壙119	1区NO.42土壙	弥生後期
土壙120	1区NO.43土壙	弥生後期
土壙121	1区NO.7土壙	弥生後期
土壙122	1区NO.45土壙	弥生後期
土壙123	1区NO.47土壙	弥生後期
土壙124	1区NO.114土壙	弥生後期
土壙125	1区NO.8土壙	弥生後期
土壙126	1区NO.52土壙	弥生後期
土壙127	1区NO.55土壙	弥生後期
土壙128	1区NO.9土壙	弥生後期
土壙129	1区NO.63土壙	弥生後期
土壙130	1区NO.64土壙	弥生後期
土壙131	1区NO.65土壙	弥生後期
土壙132	1区NO.68土壙	弥生後期
土壙133	1区NO.70土壙	弥生後期
土壙134	1区NO.71土壙	弥生後期
土壙135	1区NO.72土壙	弥生後期
土壙136	1区NO.75土壙	弥生後期
土壙137	1区NO.76土壙	弥生後期
土壙138	1区NO.11土壙	弥生後期
土壙139	1区NO.79土壙	弥生後期
土壙140	1区NO.82土壙	弥生後期
土壙141	1区NO.83土壙	弥生後期
土壙142	1区NO.13土壙	弥生後期
土壙143	1区NO.88土壙	弥生後期
土壙144	1区NO.90土壙	弥生後期
土壙145	1区NO.92土壙	弥生後期
土壙146	1区NO.93土壙	弥生後期
土壙147	1区NO.94土壙	弥生後期
土壙148	1区NO.96土壙	弥生後期
土壙149	1区NO.12土壙	弥生後期
土壙150	1区NO.101土壙	弥生後期
土壙151	1区NO.103土壙	弥生後期
土壙152	1区NO.105土壙	弥生後期
土壙153	1区NO.110土壙	弥生後期
土壙154	1区NO.112土壙	弥生後期
土壙155	1区NO.113土壙	弥生後期
土壙201	2区NO.67土壙	弥生中期
土壙202	2区NO.9土壙	弥生中期
土壙203	2区NO.20土壙	弥生中期
土壙204	2区NO.8土壙	弥生後期

本書掲載遺構名	調査時遺構名	時　　期
土壙205	2区NO.2土壙	弥生後期
土壙206	2区NO.10土壙	弥生後期
土壙207	2区NO.11土壙	弥生後期
土壙208	2区NO.12土壙	弥生後期
土壙209	2区NO.16土壙	弥生後期
土壙210	2区NO.3土壙	弥生後期
土壙211	2区NO.21土壙	弥生後期
土壙212	2区NO.24土壙	弥生後期
土壙213	2区NO.25土壙	弥生後期
土壙214	2区NO.26土壙	弥生後期
土壙215	2区NO.28土壙	弥生後期
土壙216	2区NO.34土壙	弥生後期
土壙217	2区NO.35土壙	弥生後期
土壙218	2区NO.36土壙	弥生後期
土壙219	2区NO.38土壙	弥生後期
土壙220	2区NO.39土壙	弥生後期
土壙221	2区NO.40土壙	弥生後期
土壙222	2区NO.45土壙	弥生後期
土壙223	2区NO.46土壙	弥生後期
土壙224	2区NO.53土壙	弥生後期
土壙225	2区NO.56土壙	弥生後期
土壙226	2区NO.57土壙	弥生後期
土壙227	2区NO.62土壙	弥生後期
土壙228	2区NO.66土壙	弥生後期
土壙229	2区NO.1土壙	弥生後期
土壙230	2区NO.69土壙	弥生後期
土壙231	2区NO.70土壙	弥生後期
土壙232	2区NO.71土壙	弥生後期
土壙233	2区NO.72土壙	弥生後期
土壙234	2区NO.73土壙	弥生後期
土壙235	2区NO.76土壙	弥生後期
土壙236	2区NO.77土壙	弥生後期
土壙237	2区NO.79土壙	弥生後期
土壙238	2区NO.80土壙	弥生後期
土壙239	2区NO.82土壙	弥生後期
土壙240	2区NO.83土壙	弥生後期
土壙241	2区NO.85土壙	弥生後期
土壙242	2区NO.86土壙	弥生後期
土壙243	2区NO.87土壙	弥生後期
土壙244	2区NO.88土壙	弥生後期
土壙245	2区NO.89土壙	弥生後期
土壙246	2区NO.90土壙	弥生後期

本書掲載遺構名	調査時遺構名	時　　期
土壙247	2区NO.91土壙	弥生後期
土壙248	2区NO.92土壙	弥生後期
土壙249	2区NO.93土壙	弥生後期
土壙250	2区NO.94土壙	弥生後期
土壙251	2区NO.97土壙	弥生後期
土壙252	2区NO.98土壙	弥生後期
土壙253	2区NO.102土壙	弥生後期
土壙254	2区NO.103土壙	弥生後期
土壙255	2区NO.104土壙	弥生後期
土壙256	2区NO.105土壙	弥生後期
土壙257	2区NO.106土壙	弥生後期
土壙258	2区NO.107土壙	弥生後期
土壙259	2区NO.108土壙	弥生後期
土壙260	2区NO.109土壙	弥生後期
土壙261	2区NO.110土壙	弥生後期
土壙262	2区NO.114土壙	弥生後期
土壙263	2区NO.115土壙	弥生後期
土壙264	2区NO.116土壙	弥生後期
土壙265	2区NO.117土壙	弥生後期
土壙266	2区NO.120土壙	弥生後期
土壙267	2区NO.121土壙	弥生後期
土壙268	2区NO.122土壙	弥生後期
土壙269	2区NO.123土壙	弥生後期
土壙270	2区NO.125土壙	弥生後期
土壙271	2区NO.126土壙	弥生後期
土壙272	2区NO.129土壙	弥生後期
土壙273	2区NO.131土壙	弥生後期
土壙274	2区NO.132土壙	弥生後期
土壙275	2区NO.133土壙	弥生後期
土壙276	2区NO.135土壙	弥生後期
土壙277	2区NO.136土壙	弥生後期
土壙278	2区NO.143土壙	弥生後期
土壙279	2区NO.145土壙	弥生後期
土壙280	2区NO.147土壙	弥生後期
土壙281	2区NO.148土壙	弥生後期
土壙282	2区NO.151土壙	弥生後期
土壙283	2区NO.154土壙	弥生後期
土壙284	2区NO.155土壙	弥生後期
土壙285	2区NO.156土壙	弥生後期
土壙286	2区NO.157土壙	弥生後期
土壙287	2区NO.160土壙	弥生後期
土壙301	3区NO.10土壙	弥生後期

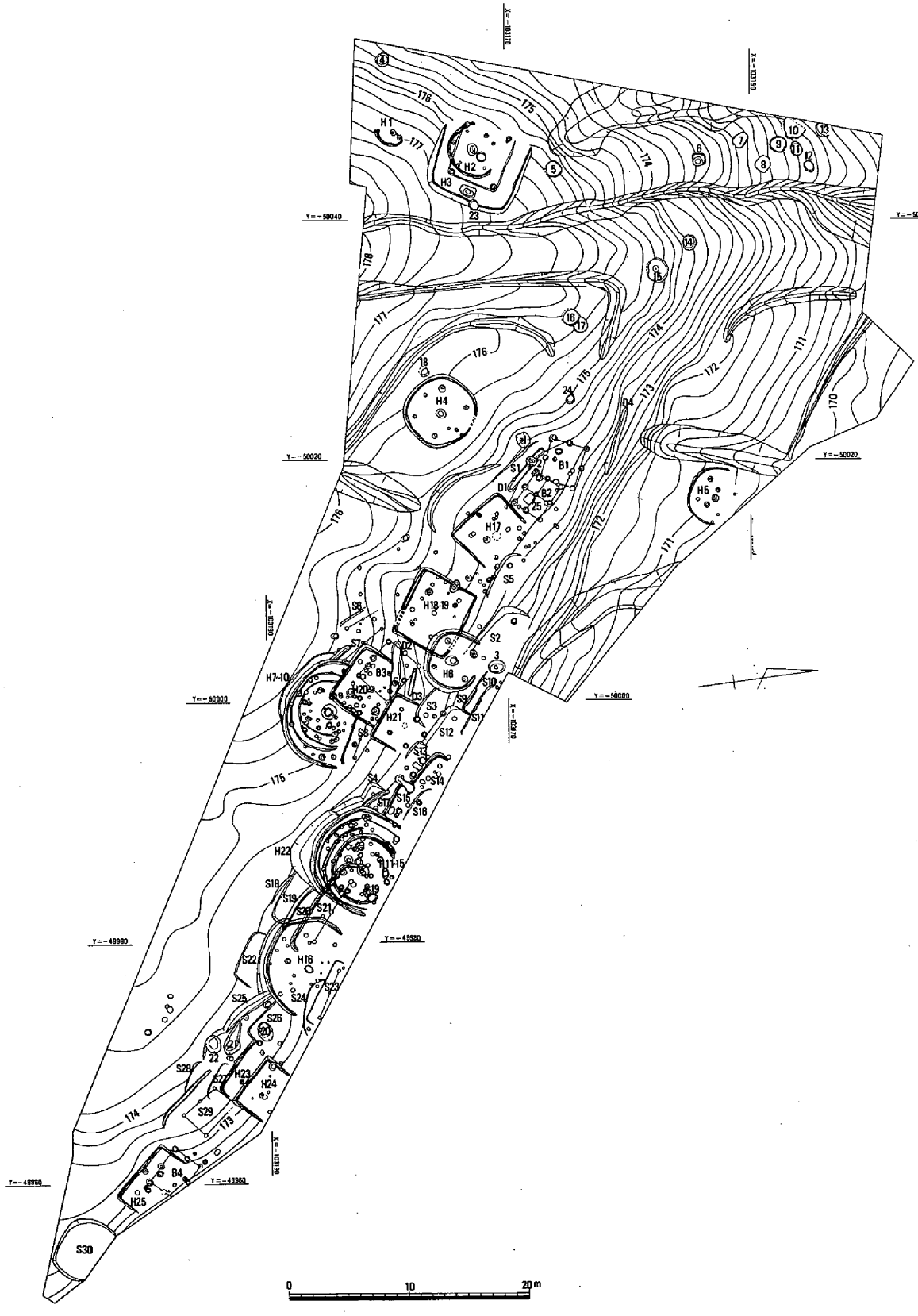
本書掲載遺構名	調査時遺構名	時　　期
土壙302	3区NO.2土壙	弥生中期
土壙303	3区NO.3土壙	弥生後期
土壙304	3区NO.4土壙	弥生後期
土壙305	3区NO.5土壙	弥生後期
土壙306	3区NO.6土壙	弥生後期
土壙307	3区NO.7土壙	弥生後期
土壙308	3区NO.9土壙	弥生後期
土壙309	3区NO.1土壙	弥生後期
土壙310	3区NO.11土壙	弥生後期
土壙311	3区NO.12土壙	弥生後期
土壙312	3区NO.13土壙	弥生後期
土壙313	3区NO.14土壙	弥生後期
土壙314	3区NO.15土壙	弥生後期
土壙315	3区NO.16土壙	弥生後期
土壙316	3区NO.17土壙	弥生後期
土壙317	3区NO.19土壙	弥生後期
土壙318	3区NO.20土壙	弥生後期
土壙401	1区NO.69土壙	弥生後期
土壙402	1区NO.85土壙	中世
土壙403	1区NO.86土壙	中世
土壙404	1区NO.87土壙	中世
土壙405	2区NO.96土壙	中世
土壙406	2区NO.161土壙	中世
竪穴住居1	1区NO.54住居	中世
竪穴住居2	2区NO.43住居	弥生中期
竪穴住居3	1区NO.57住居	弥生中期
竪穴住居4	1区NO.81住居	弥生中期
竪穴住居5	1区NO.53住居	弥生中期
竪穴住居6	1区NO.56住居	弥生後期
竪穴住居7	1区NO.1住居	弥生後期
竪穴住居8	1区NO.26住居	弥生後期
竪穴住居9	1区NO.41住居	弥生後期
竪穴住居10	1区NO.58住居	弥生後期
竪穴住居11	1区NO.59住居	弥生後期
竪穴住居12	1区NO.78住居	弥生後期
竪穴住居13	1区NO.80住居	弥生後期
竪穴住居14	1区NO.46住居	弥生後期
竪穴住居15	1区NO.97住居	弥生後期
竪穴住居16	1区NO.102住居	弥生後期
竪穴住居17	1区NO.112住居	弥生後期
竪穴住居18	3区NO.8住居	弥生後期
竪穴住居19	2区NO.5住居	弥生後期

本書掲載遺構名	調査時遺構名	時　　期
竪穴住居20	2区NO.140住居	弥生後期
竪穴住居21	2区NO.14住居	弥生後期
竪穴住居22	2区NO.23住居	弥生後期
竪穴住居23	2区NO.30住居	弥生後期
竪穴住居24	1区NO.51住居	弥生後期
竪穴住居25	2区NO.44住居	弥生後期
竪穴住居26	2区NO.48住居	弥生後期
竪穴住居27	2区NO.49住居	弥生後期
竪穴住居28	2区NO.74住居	弥生後期
竪穴住居29	2区NO.84住居	弥生後期
竪穴住居30	2区NO.75住居	弥生後期
竪穴住居31	2区NO.81住居	弥生後期
竪穴住居32	2区NO.99住居	弥生後期
竪穴住居33	2区NO.100住居	弥生後期
竪穴住居34	2区NO.101住居	弥生後期
竪穴住居35	2区NO.112住居	弥生後期
竪穴住居36	2区NO.124住居	弥生後期
竪穴住居37	2区NO.130住居	弥生後期
竪穴住居38	2区NO.105住居	弥生後期
段状遺構１	1区NO.91住居	弥生後期
段状遺構２	1区NO.27住居	弥生中期
段状遺構３	1区NO.36段状	弥生後期
段状遺構４	1区NO.10住居	弥生後期
段状遺構５	1区NO.98住居	弥生後期
段状遺構６	1区NO.100住居	弥生中期
段状遺構７	1区NO.106住居	弥生後期
段状遺構８	1区NO.108住居	弥生後期
段状遺構９	1区NO.109住居	弥生後期
段状遺構10	2区NO.15住居	弥生後期
段状遺構11	2区NO.22住居	弥生後期
段状遺構12	2区NO.29住居	弥生後期

本書掲載遺構名	調査時遺構名	時　　期
段状遺構13	2区NO.54住居	弥生後期
段状遺構14	2区NO.113住居	弥生後期
段状遺構15	2区NO.152住居	弥生後期
段状遺構16	2区NO.13住居	弥生後期
溝１	1区NO.104溝	弥生後期
溝２	1区NO.111溝	弥生後期
溝３	3区NO.40溝	中世
建物１	1区NO.95建物	古代
建物２	2区NO.111建物	古代
建物３	2区NO.138建物	古代
建物４	1区NO.16建物	中世
建物５	1区NO.73建物	中世
建物６	1区NO.74建物	中世
柱穴群１	1区NO.34柱穴群	弥生後期
柱穴群２	1区NO.61柱穴群	弥生中期
柱穴群３	1区NO.89柱穴群	中世
炉１	2区NO.47炉	弥生後期
遺構名無し１	1区NO.４土壙	
遺構名無し２	1区NO.５土壙	
遺構名無し３	1区NO.28土壙	
遺構名無し４	1区NO.29土壙	
遺構名無し５	1区NO.30土壙	
遺構名無し６	1区NO.31土壙	
遺構名無し７	1区NO.49土壙	
遺構名無し８	2区NO.127土壙	
遺構名無し９	2区NO.173土壙	
旦山３号墳	2区NO.158溝	古墳中期
旦山５号墳	3区NO.18箱式石棺	古墳中期

旦山遺跡遺構数	309

第４章　惣台遺跡



第１図　惣台遺跡遺構配置図（1／500）

第１節　調査の経過

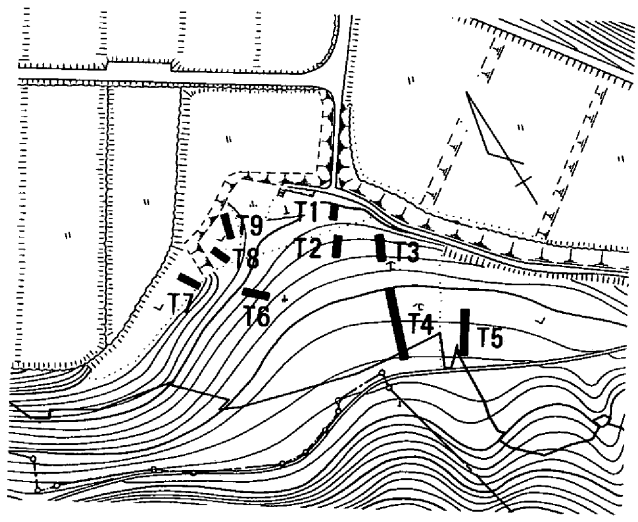
惣台遺跡は、平成元年３月31日に久世町教育委員会から発行された『久世町埋蔵文化財分布地図』には掲載されていなかったが、圃場整備事業を行った時に遺物が出土したという言い伝えがあったので、平成６年11月１日から確認調査の準備を行い、11月24日にトレンチを設定して調査に着手した。その結果、弥生時代後期の竪穴住居や土壙などが検出され、弥生土器片とともに完形品に近い須恵器も出土したので、全面調査を実施することになった。

惣台遺跡の所在する西側の地点は、岡山県北流通センターの造成工事に先立って最初に建設しなければならない調節池の部分に相当していたため、確認調査が終了するとその継続で、１月９日から調節池の範囲だけの全面調査に移行した。

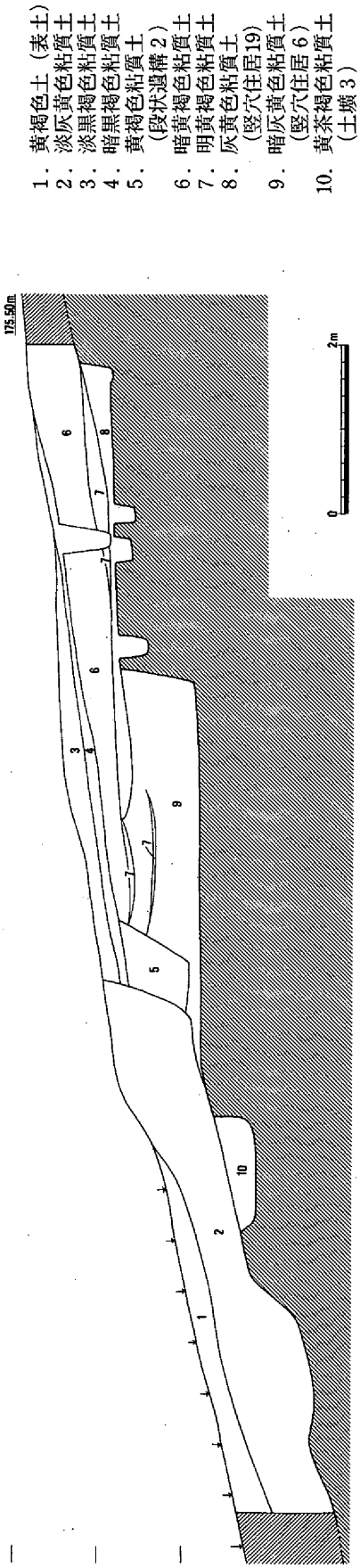
調節池部分の全面調査は３月末日に終了し、平成７年４月からは旦山古墳群の全面調査を行いながら、北区域と南区域の確認調査も実施した。

旦山古墳群の全面調査が終了すると、７月１日から惣台遺跡へ引き返し、調査がすでに完了している調節池の範囲以外の部分について、８月中旬のお盆前まで全面調査を行った。

このように、惣台遺跡の全面調査は、調節池の範囲とそれ以外の部分に分けて実施したが、竪穴住居、段状遺構、掘立柱建物、土壙など数多くの遺構を検出し、弥生時代後期と古墳時代後期に栄えた集落跡であることが判明した。



第２図　惣台遺跡試掘トレンチ位置図（1／2000）



第３図　Ｔ４遺構検出部分土層断面（1／80）

第２節　調査の概要

惣台遺跡で検出した遺構は、竪穴住居25軒、段状遺構30基、掘立柱建物４棟、土壙25基、溝４条であるが、ほとんどの遺構が重なり合っていた。

竪穴住居は、平面形が円形のものと方形のものがあり、何度も建て替えが行われているものも認められた。最も古いものは竪穴住居４で、弥生時代中期末葉に属する。平面形が隅丸方形の竪穴住居３は、柱構造が４本柱で、高床部と方形土壙が存在し、弥生時代後期末葉の時期になると考える。

段状遺構は、１か所または２か所の柱穴を検出したものもあるが、ほとんどは柱穴が存在しない。弥生時代後期の段状遺構は４基だけで、大多数は古墳時代後期のものである。調査範囲の東端で検出した段状遺構30からは、大型のカマドを含む多くの土器が出土した。

４棟の掘立柱建物は、いずれも古墳時代後期の時期と考える。

土壙のうち３基は縄文時代晩期の落とし穴で、底部に柱穴状の窪みが認められた。また調査範囲の西側に存在した３基の土壙は、壁面が熱されて変色し、底部に炭化物が存在した。検出した土壙のほとんどが、弥生時代後期に属する貯蔵穴と考えられるものである。

溝４条のうち３条は古墳時代後期のもので、残る１条は時期が不明である。

第３節　縄文時代の遺構と遺物

(1) 土　壙

土壙１（第５図）

調査範囲の中央部よりやや西側へ寄った地点に検出した土壙で、段状遺構１に接する状態になっていた。平面形は短径107cm、長径131cmの不整形を呈し、検出面からの深さは141cmであった。この土壙の底部中央は、断面形が「U」字形に７cmの深さに窪み、黄褐色土が堆積していた。土壙内には黄橙色土と明黄褐色土が存在したが、遺物は出土しなかった。

土壙２（第６図）

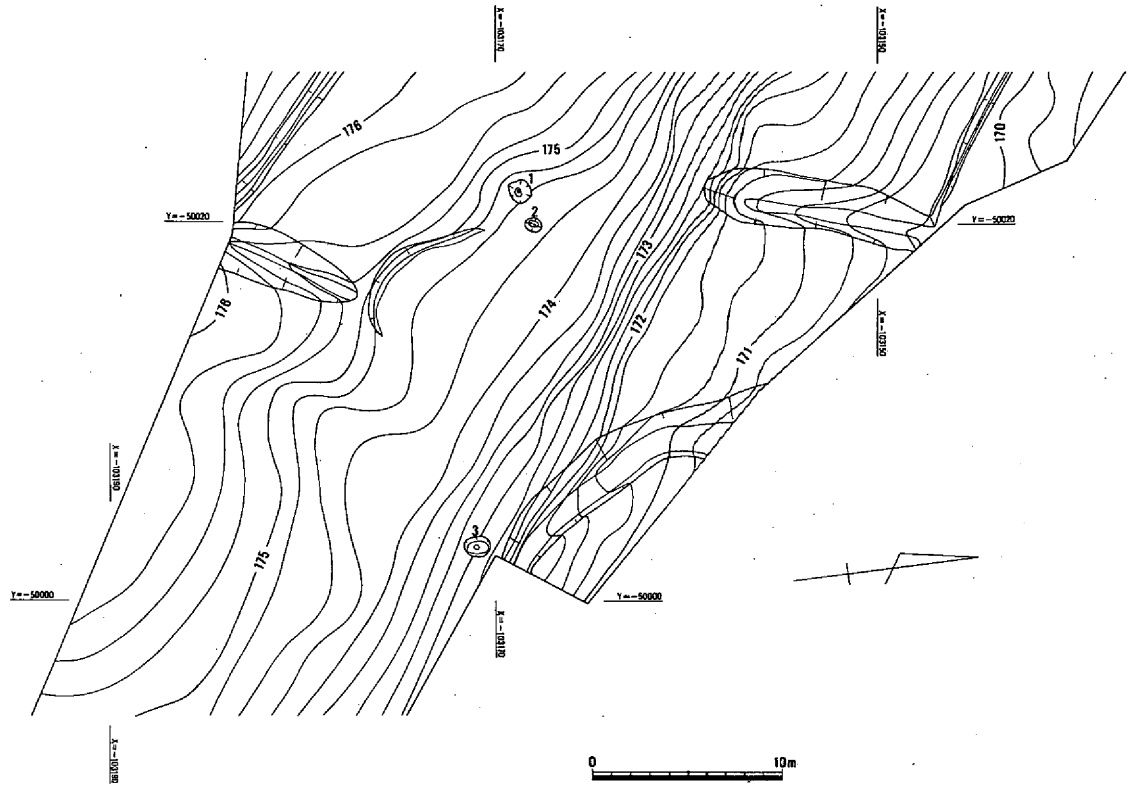
前述した土壙１の北東方向約1.50ｍの地点で、段状遺構１の床面に存在した溝１と重複していた。平面形は短径75cm、長径86cmの楕円形に近い形態を呈し、検出面からの深さは74cmであった。この土壙の底部は２か所が窪み、深いものは底部より10cm下がって断面形が逆台形になっていた。

出土遺物としてサヌカイト製の石鏃Ｓ１があるが、先端部と片方の基端部を欠損している。

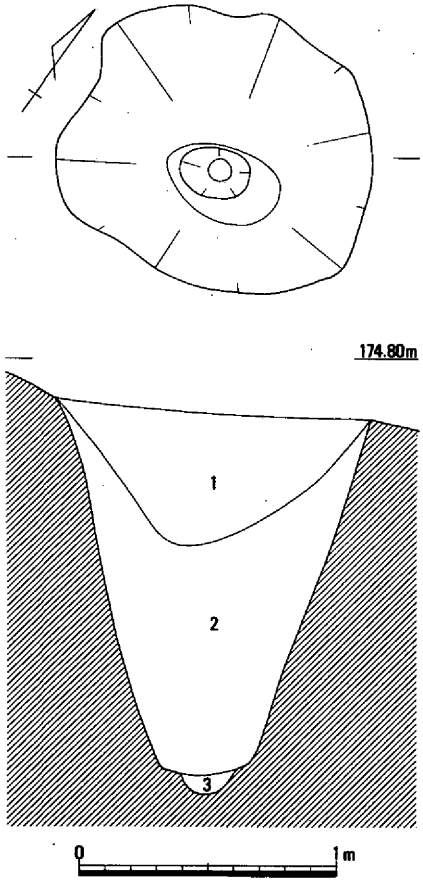
土壙３（第７図、図版45—１）

調査範囲のほぼ中央部で検出した土壙で、東側には段状遺構10や段状遺構11が存在する。平面形は短径104cm、長径137cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは50cmであった。この土壙の底部中央には、深さ56cmを測る柱穴状の穴が存在した。土壙内には黄茶褐色粘質土が堆積していたが、遺物は出土しなかった。

この３基の土壙は、土壙２から出土したサヌカイト製の石鏃の形態や、近接した旦山遺跡の調査結果などから、縄文時代晩期の時期の落とし穴と考える。

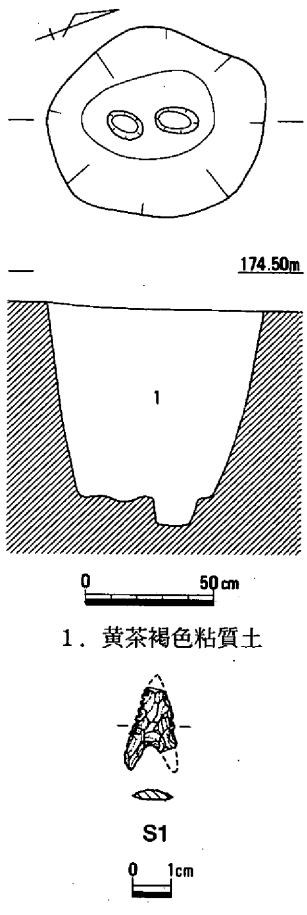


第４図　縄文時代遺構配置図（1／400）



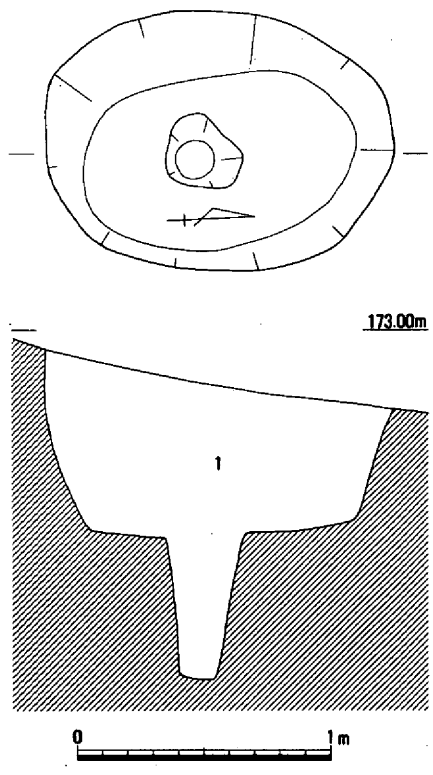
1．黄橙色粘質土
2．明黄褐色粘質土
3．黄褐色粘質土

第５図　土壙１（1／30）



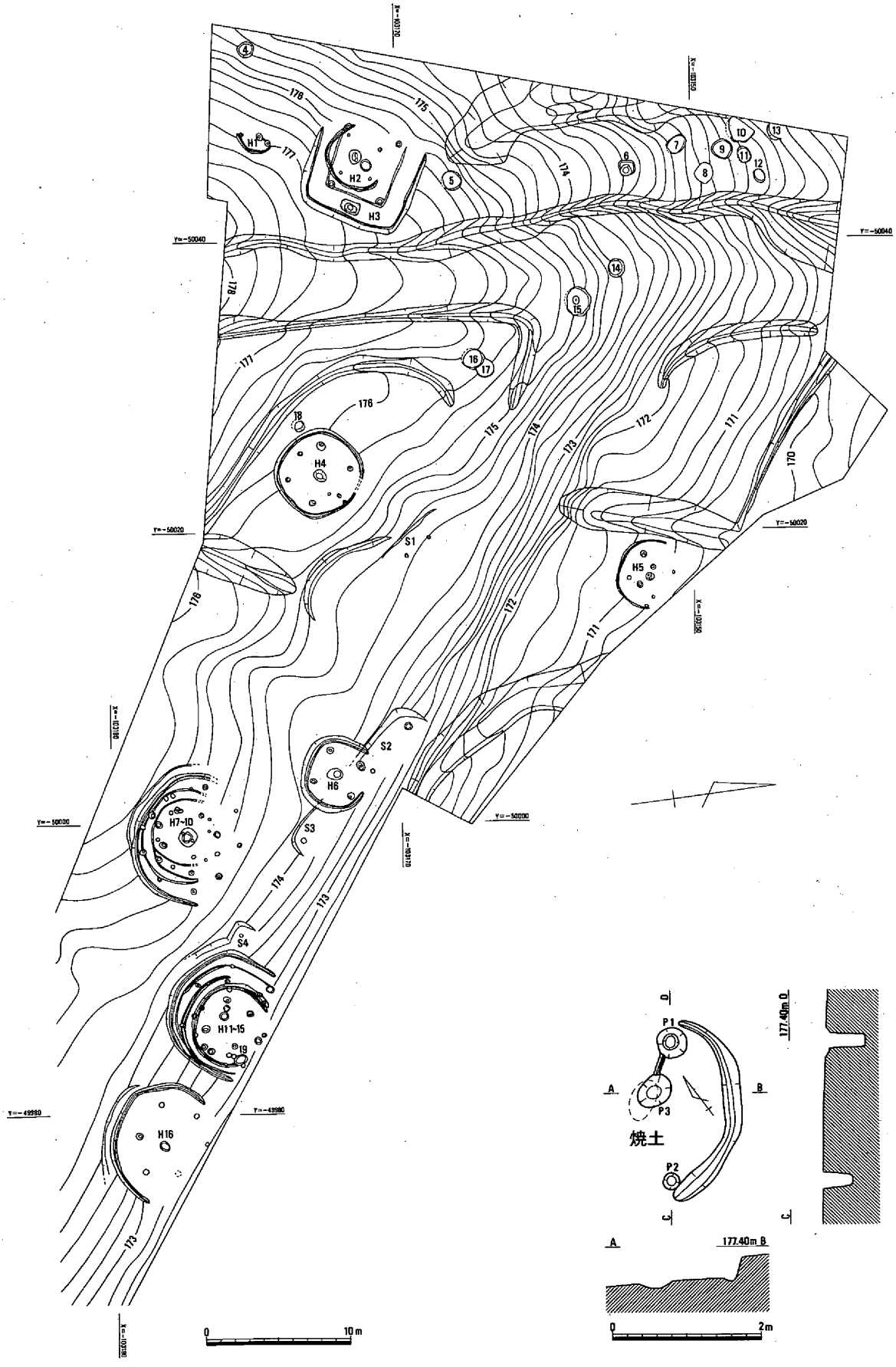
1．黄茶褐色粘質土

第６図　土壙２（1／30）・出土遺物（1／2）



1．茶褐色粘質土

第７図　土壙３（1／30）



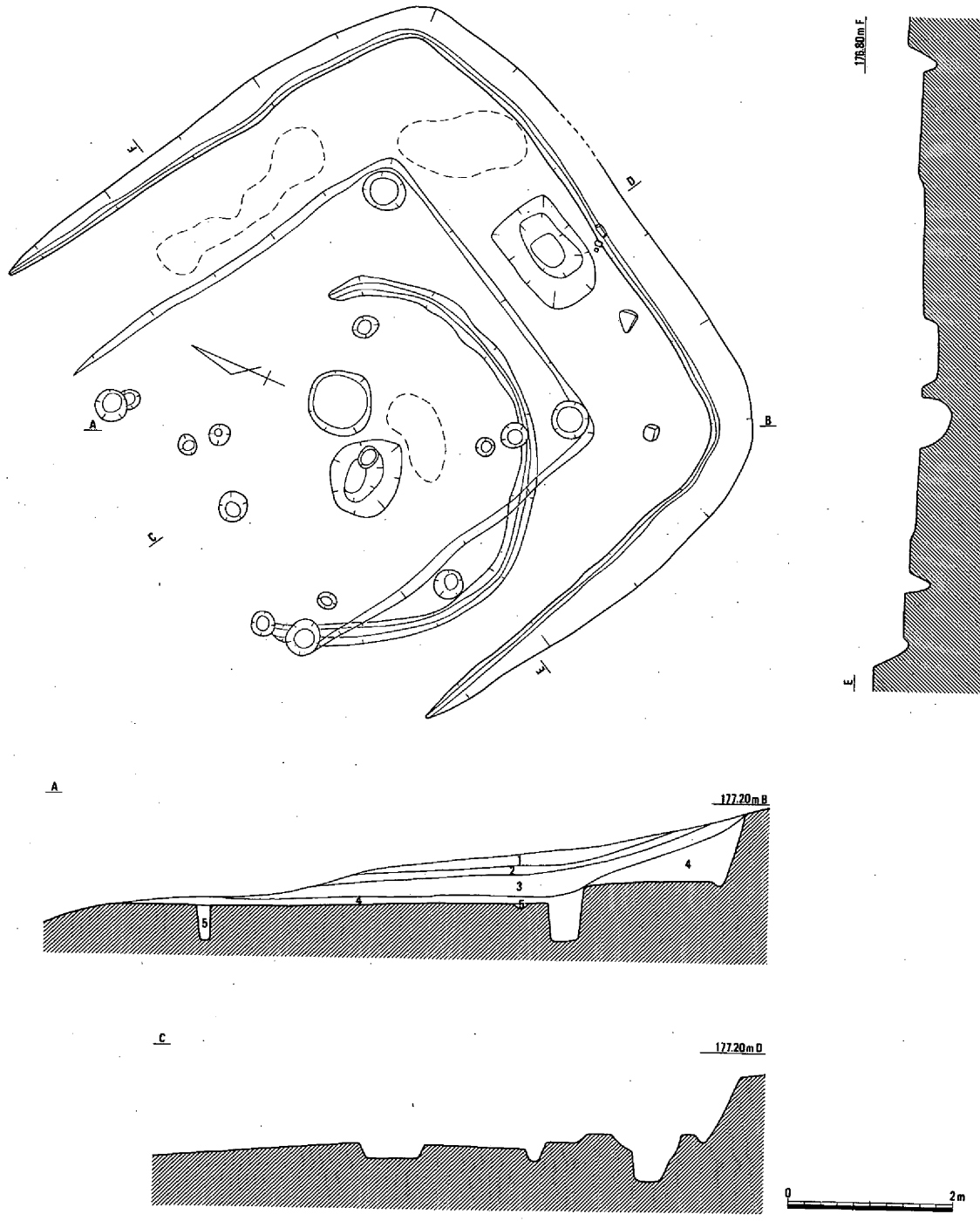
第８図　弥生時代遺構配置図（1／400）

第９図　竪穴住居１（1／80）

第４節　弥生時代の遺構と遺物

惣台遺跡で検出した弥生時代の遺構は、竪穴住居16軒、段状遺構４基、土壙16基である。

竪穴住居には何度も建て替えが行われたものが認められ、土器以外に土製品や鉄器が出土したものも存在する。土壙はいずれも貯蔵穴と推定されるもので、調査範囲西側に集中して検出された。



1．黒褐色土　　2．暗黒褐色土　　3．暗黄褐色土　　4．褐色土　　5．黄褐色土

第10図　竪穴住居２・３（1／80）

(1) 竪穴住居

竪穴住居１（第９図）

調査範囲の南西端部に検出した小規模な竪穴住居で、北方向には竪穴住居２と竪穴住居３が重複して存在する。

地形の高い部分に壁体と壁体溝が緩やかに湾曲して認められ、柱構造は２本柱である。柱穴間の距離は190㎝であるが、中央穴が北東側へ寄った位置に存在した。中央穴の周辺には焼土が認められ、中央穴と柱穴を結ぶ細い溝が確認された。

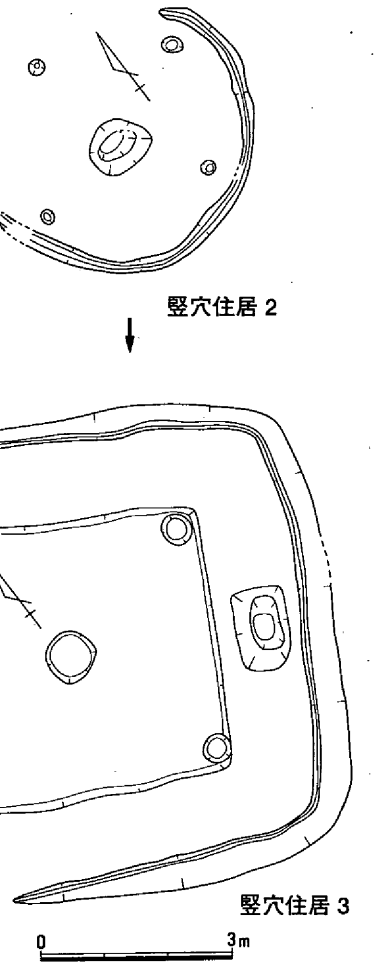
出土遺物として図化できない小破片の土器があり、その特徴から弥生時代後期前葉の時期が推定される。

竪穴住居２（第10～12図）

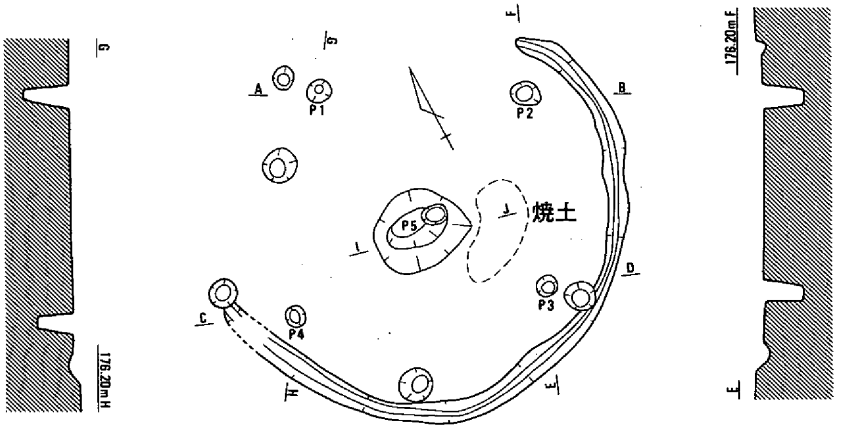
調査範囲の南西部に位置し、北側には土壙５が、南側には前述した竪穴住居１が存在する。この竪穴住居は竪穴住居３と重複しており、竪穴住居２が古くて竪穴住居３が新しいことは明らかである。

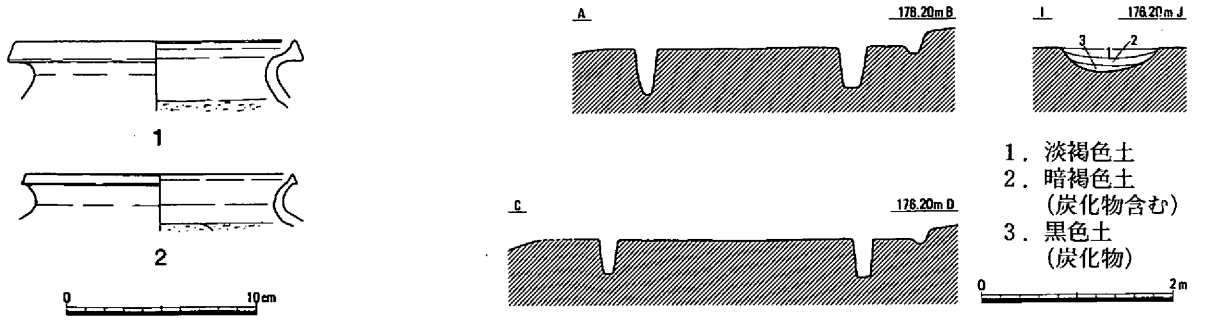
平面形は円形に近い形を呈し、柱構造は４本柱である。壁体溝は南側に面した部分だけに認められ、北側は削平されて不明であった。中央穴の内部には炭化物または炭化物を含む土砂が堆積し、中央穴の南東付近には焼土が認められた。

出土遺物として**１**と**２**の甕形土器の破片が存在するが、その形態的特徴や調整手法などから推定すれば、この竪穴住居２の時期は弥生時代後期前葉になるであろう。

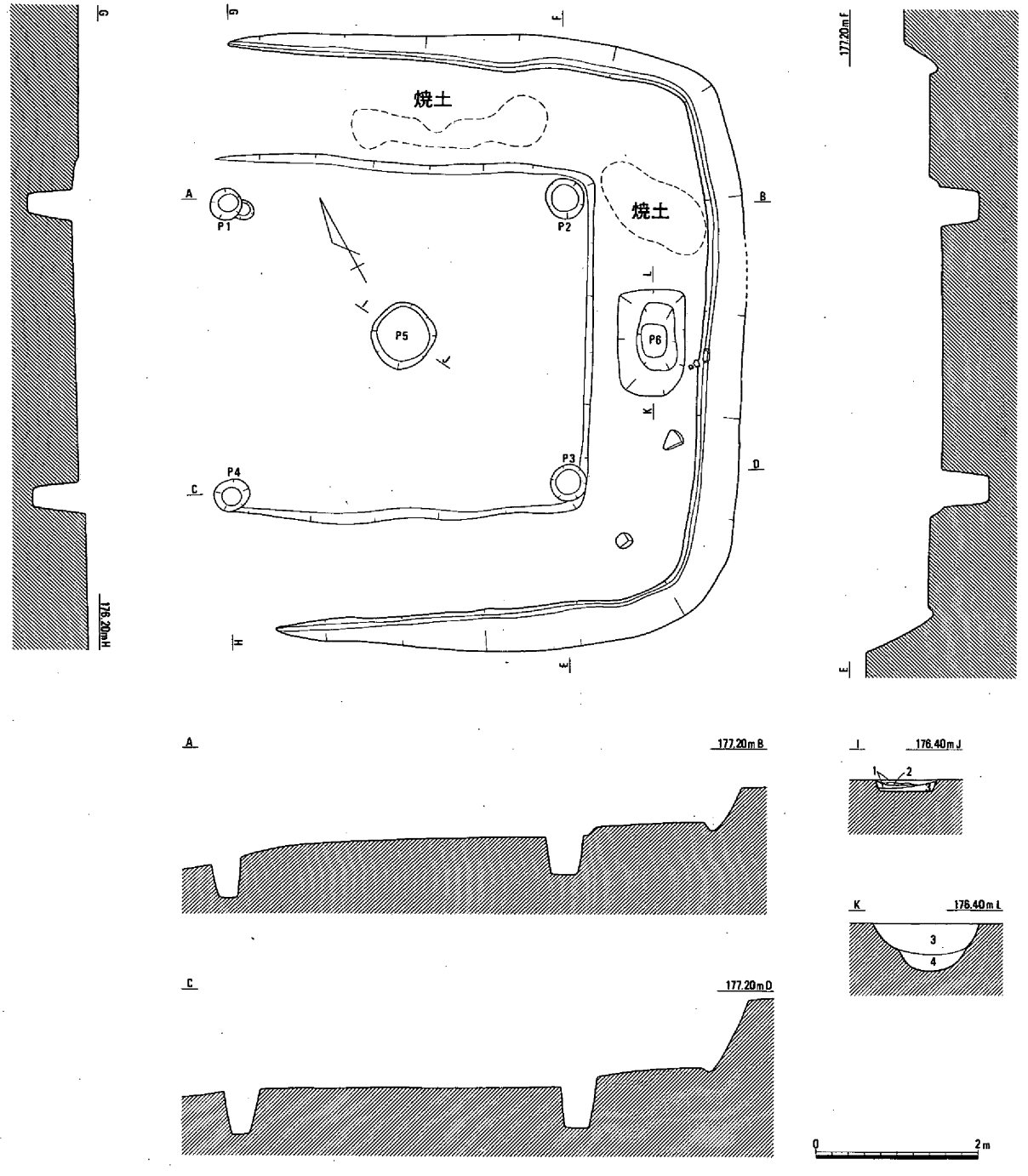


第11図　竪穴住居２・３変遷図（1／120）

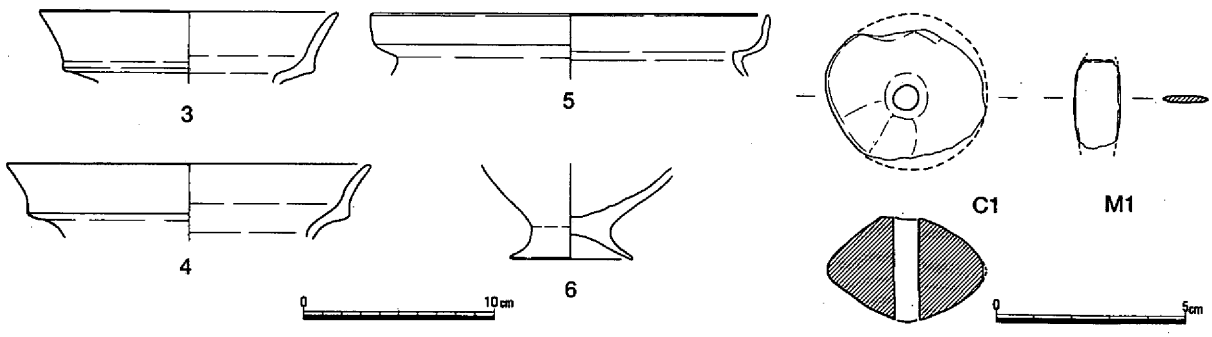




第12図　竪穴住居２（1／80）・出土遺物（1／4）



1．褐色土　　2．黒色土（炭化物）　　3．黄褐色土　　4．暗褐色土



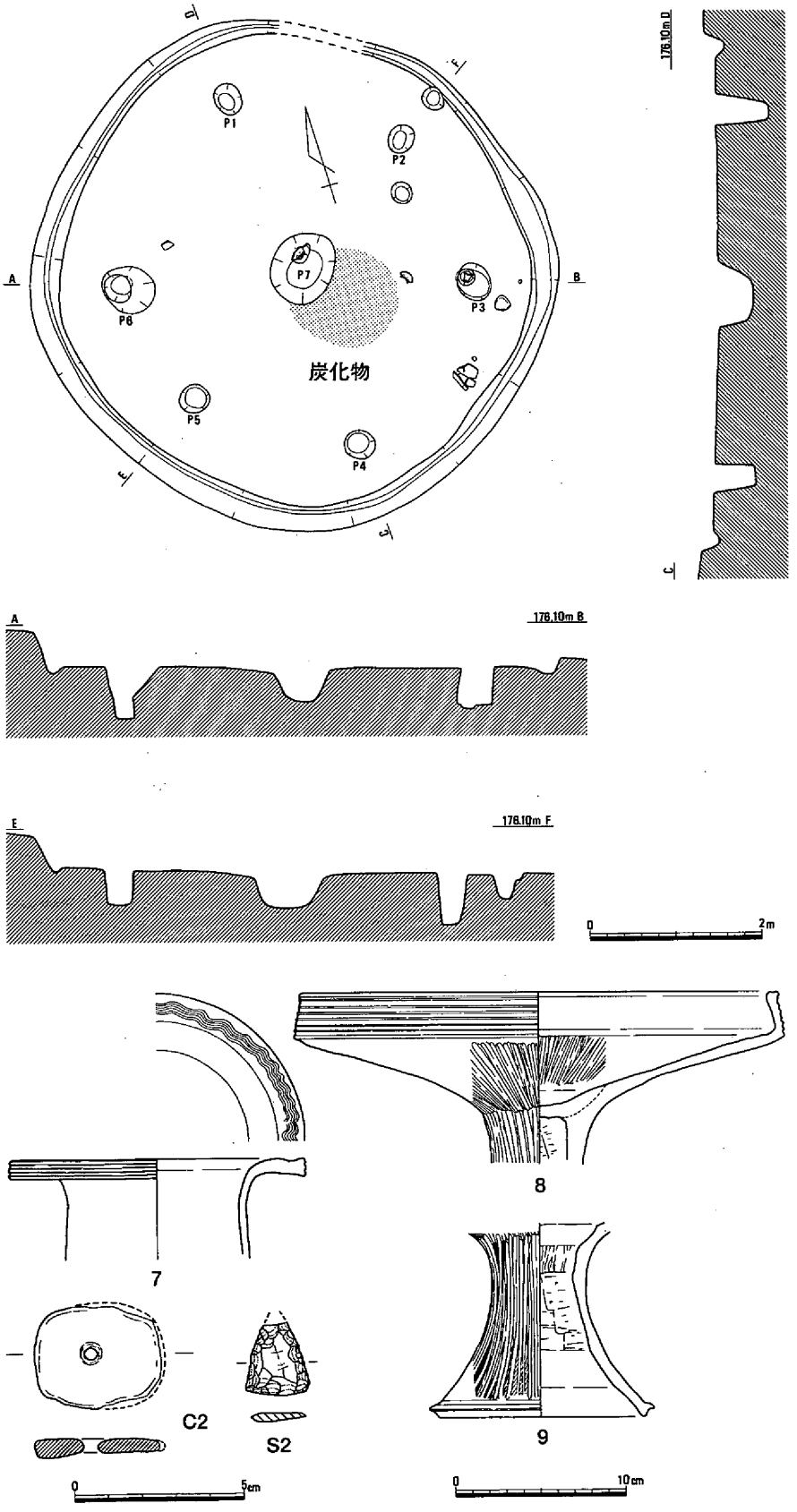
第13図　竪穴住居３（1／80）・出土遺物（1／4、1／2）

竪穴住居３（第10・11・13図）

調査範囲の南西部に、前述した竪穴住居２と重複した状態で検出された竪穴住居である。

平面形は隅丸方形を呈し、１辺が約760cmになるであろう。この竪穴住居は、残存する３方向に高床部が認められ、柱構造は４本柱で、中央穴と方形土壙が存在した。高床部には部分的に焼土が認められ、柱穴間の距離は350～408cmになっていた。中央穴は径が75～85cmの円形に近い形を呈し、内部に炭化物の層が確認された。方形土壙は短辺85cm、長辺134cmの隅丸長方形に近い形で、内部が２段掘りになって黄褐色土と暗褐色土が堆積していた。

この竪穴住居には、弥生時代後期後葉と推定される**３～５**の甕形土器と**６**の台付鉢形土器と思われる土器以外に、算盤玉形土玉**Ｃ１**や鉄鏃**Ｍ１**が存在する。重さ24.64gの土玉は焼成前の穿孔で、類算盤玉形の紡錘車になるのかもしれない。鉄鏃は、両端を欠損した鏃身の一部だけの小破片で、詳細については不明である。



第14図　竪穴住居４（1／80）・出土遺物（1／4、1／2）

竪穴住居４（第14図）

調査範囲の南西方向に単独で検出した竪穴住居で、近接して土壙18が存在する。

平面形は580～590cmの径を測る円形に近い形を呈し、柱構造は６本柱である。壁体溝は全体に存在し、中央穴は楕円形に近い形になって、その南側には炭化物が認められた。

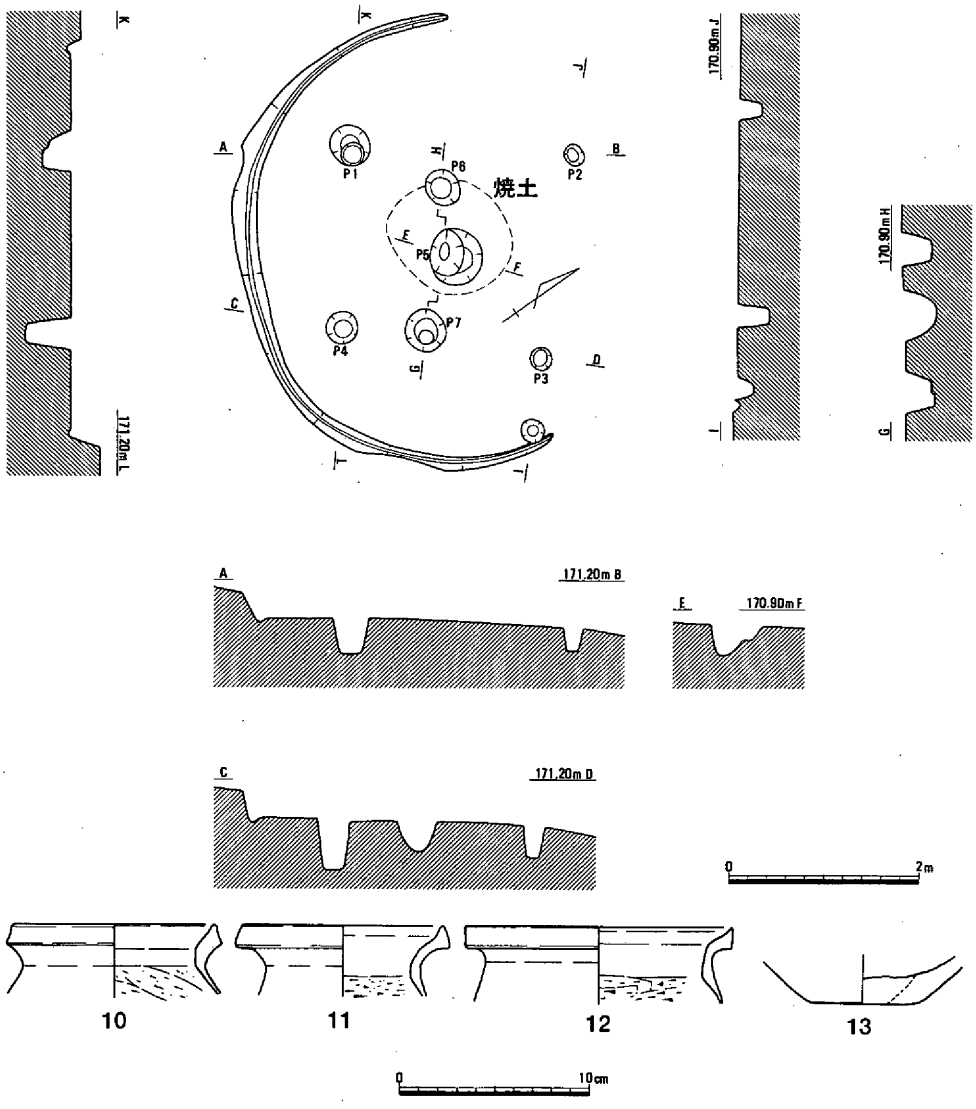
出土遺物として、７の壺形土器と８と９の高杯形土器がある。前者は、直立した頸部が逆「Ｌ」字状に屈曲して口縁部になり、外面に２条の凹線と上面に３条の波状文を描いている。後者は、同一個体の破片で、口縁部は内傾して立ち上がり、内外面ともヨコナデを施している。杯部の下位から脚部にかけては縦方向のヘラミガキを施し、脚端部はヨコナデを行っている。これらの土器の形態的特徴や調整手法から、竪穴住居４は惣台遺跡で最も古い弥生時代中期末葉の時期になると考える。なお土器以外の出土遺物に、土器片を利用した紡錘車Ｃ２と先端を欠損したサヌカイト製の石鏃Ｓ２がある。

竪穴住居５（第15図）

調査範囲の北西部分の離れた地点に検出した竪穴住居で、周辺には遺構が存在しない。

地形の高い南側の部分に緩やかに弧を描いた壁体溝が認められ、その内部に中央穴と６か所の柱穴を検出した。この竪穴住居の平面形は円形に近い形を呈し、柱構造は４本柱である。中央穴は２段掘りで、その周辺には焼土が認められた。この竪穴住居には、中央穴を挟んで160cmの距離を測る２か所の柱穴が検出された。

出土遺物として弥生時代後期前葉の土器片があるが、頸部から底部にかけての内面はヘラケズリを行い、口縁部は内外面ともヨコナデを施している。

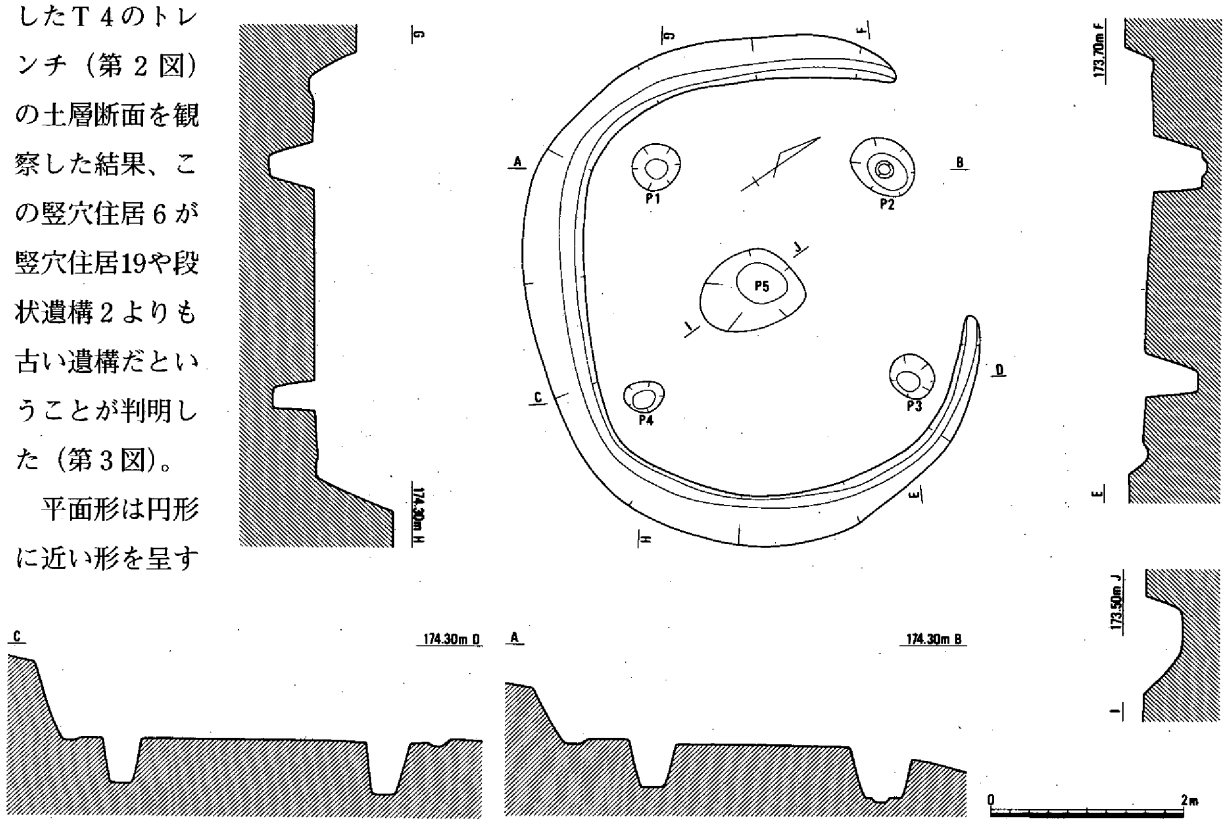


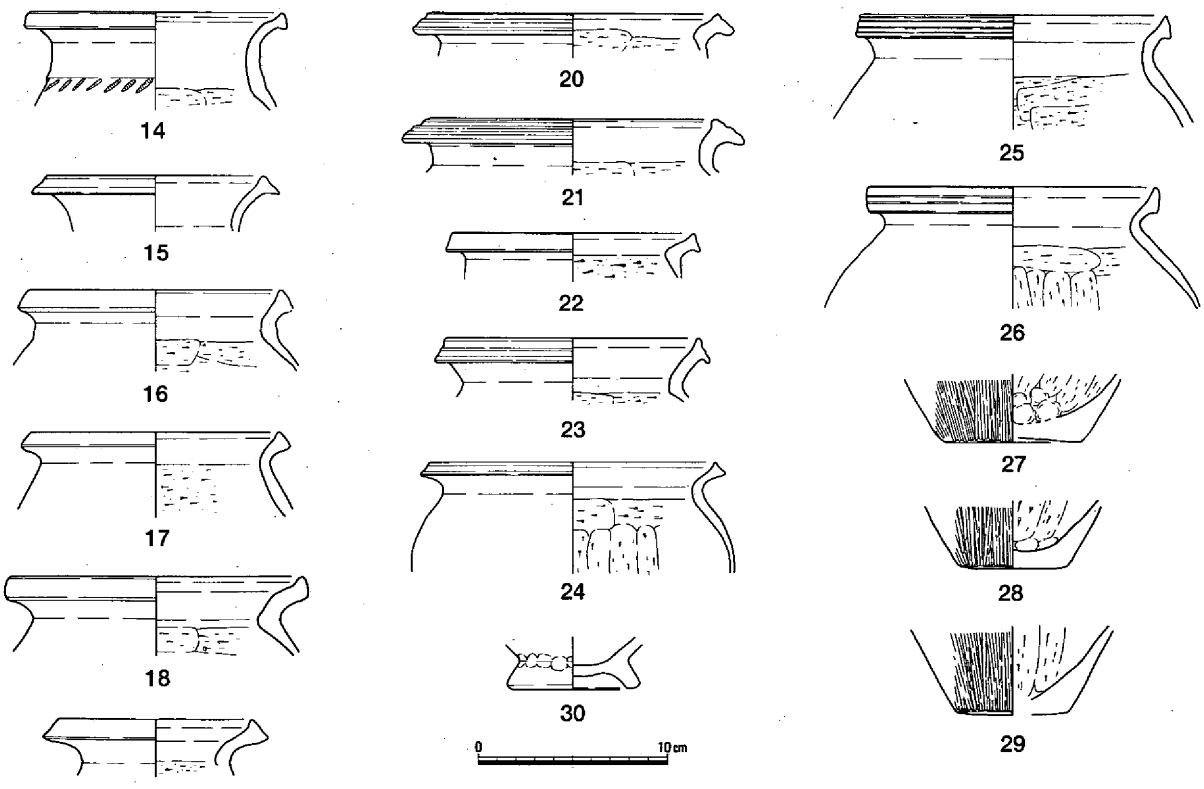
第15図　竪穴住居５（1／80）・出土遺物（1／4）

竪穴住居６（第16図）

調査範囲の中央部に位置し、竪穴住居18・19や段状遺構２・３などと重複していた。確認調査を実施した時に設定したＴ４のトレンチ（第２図）の土層断面を観察した結果、この竪穴住居６が竪穴住居19や段状遺構２よりも古い遺構だということが判明した（第３図）。

平面形は円形に近い形を呈す

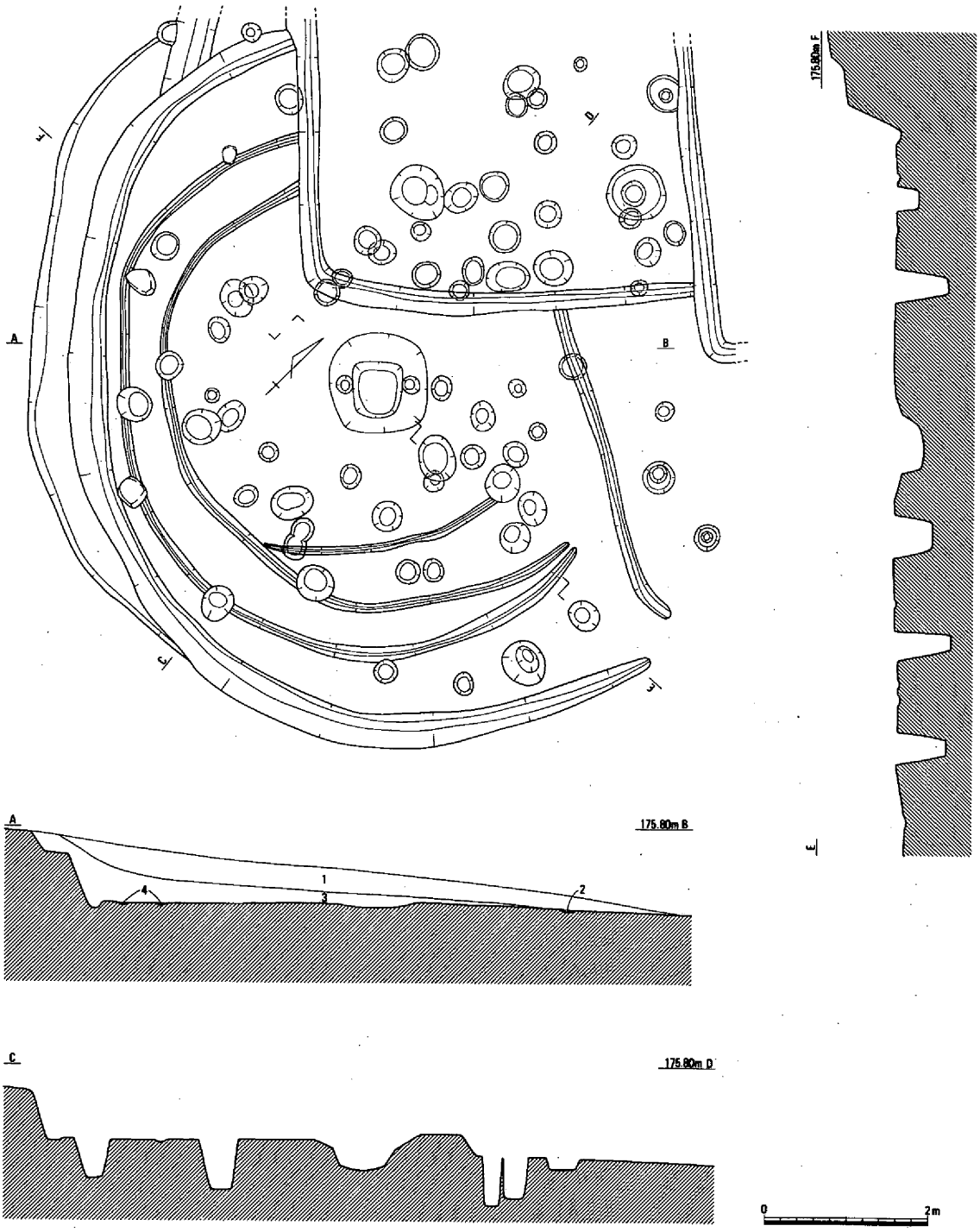




第16図　竪穴住居６（1／80）・出土遺物（1／4）

るが、地形の高い部分に位置する南西方向の壁体や壁体溝は、やや直線的になっていた。柱構造は４本柱で、柱穴間の距離は236～275cmであった。地形の低い北東側の一部を除いて壁体や壁体溝が認められ、やや不整形で規模が比較的大きな中央穴を検出した。この竪穴住居は残存状態が良好で、床面から最も高い壁体の計測値は78cmであった。

出土遺物は土器片だけである。**14**と**15**は壺形土器の口縁部の破片であるが、**14**の外面頸部下位には連続刺突文が巡らされている。**16**～**29**は甕形土器の胴部から口縁部と底部の破片で、胴部の内面はヘ

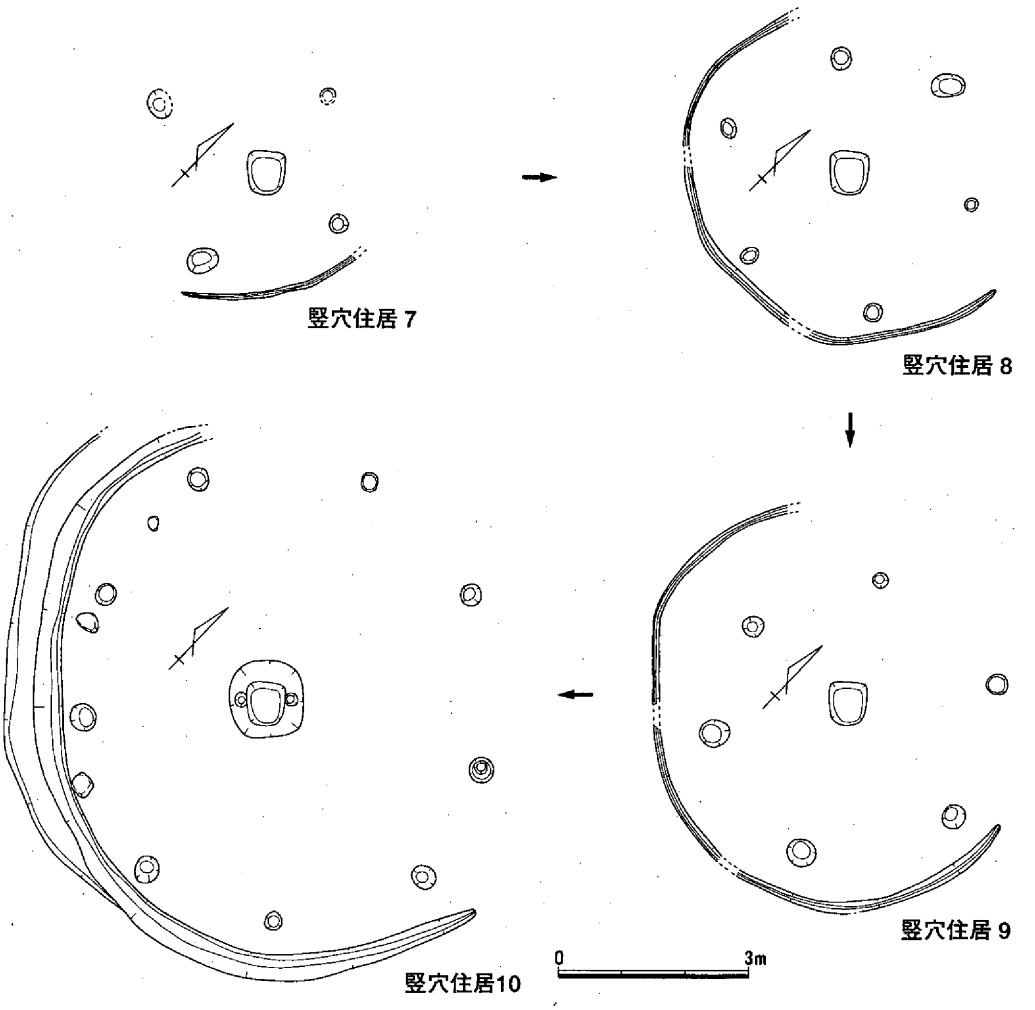


１．褐色砂質土　　２．黒褐色土　　３．淡褐色砂質土　　４．淡黒褐色土（焼土多く含む）

第17図　竪穴住居７～10・20・21、段状遺構８（1／80）

ラケズリを行っている。口縁部は内外面ともヨコナデを施し、端部外面に凹線が存在するものもある。底部の内面にはユビオサエが認められ、外面は縦方向のヘラミガキを施している。

これらの土器片の形態的特徴や調整手法から、竪穴住居６は弥生時代後期前葉の時期になるであろう。

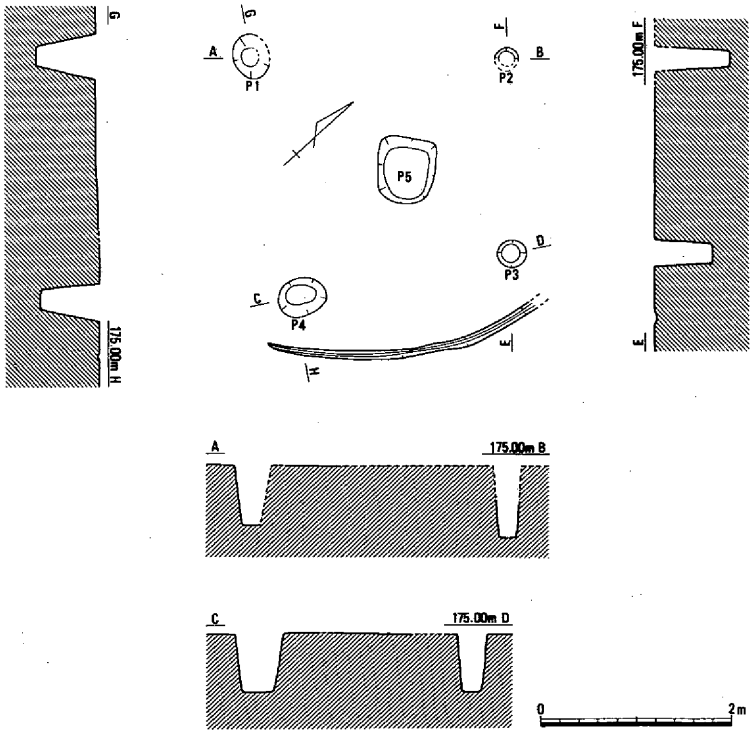


第18図　竪穴住居７～10変遷図（1／120）

竪穴住居７（第17～19図）

調査範囲の中央部よりやや南側へ寄った地点に検出した竪穴住居で、後述する竪穴住居８、竪穴住居９、竪穴住居10が同じ位置に建て替えられた状態で存在した。北側の床面部分は、古墳時代後期の竪穴住居20や建物３などによって切られていた。

わずかに残存した壁体溝や柱穴などから、この竪穴住居の平面形は円形に近い形を呈し、柱構造は４本柱である。柱穴間の距離は220～266cmで、竪穴住居の規模は小さい。中央穴は短辺58cm、長辺68cmの隅丸長方形に近い形を呈し、後に建て替えた竪穴住居が踏襲していた。



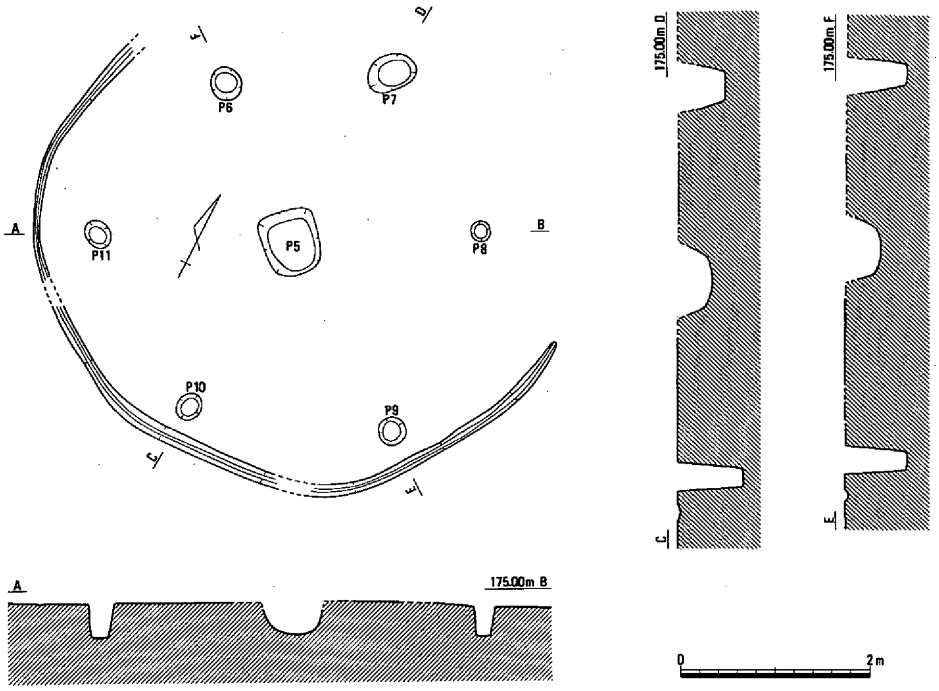
第19図　竪穴住居７（1／80）

竪穴住居８

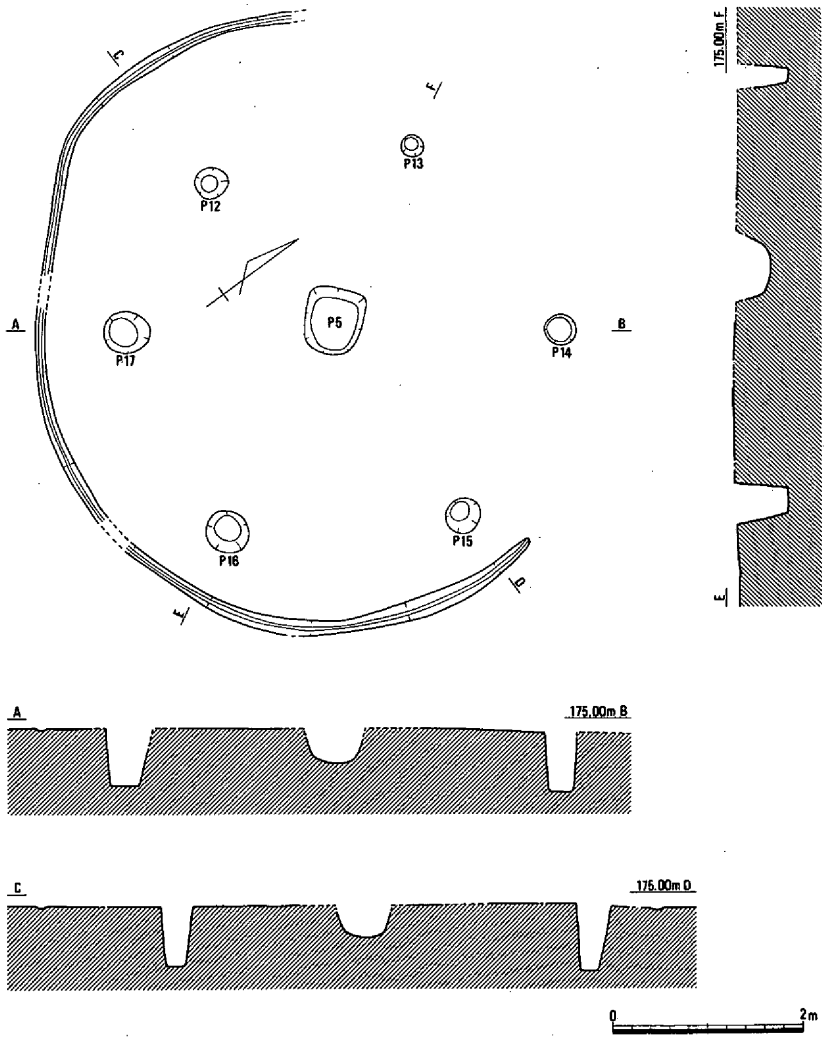
（第17・18・20図）

前述した竪穴住居７と同じ位置に存在した竪穴住居で、中央穴は竪穴住居７のものをそのまま使用していた。検出したのは浅い壁体溝と６か所の柱穴であったが、壁体溝や柱穴の中に堆積していた土に多量の焼土が含まれていたため、全体を把握するのは容易であった。

この竪穴住居の平面形は円形に近い形を呈し、柱構造は６本柱で、竪穴住居７よりも規模を拡張していた。柱穴間の距離は180～230cmを測り、北側が狭くて東側が広くなっていた。柱穴と壁体溝との間隔は、Ｐ９が22cm、Ｐ10が14cm、Ｐ11が45cmであった。柱穴と中央穴の距離は、Ｐ６が190cmと短く、Ｐ９が220cmと長くなっていた。柱穴の規模は、Ｐ８が小さくて床面から浅く、Ｐ７が楕円形に似た形をしてやや深かった。



第20図　竪穴住居８（1／80）

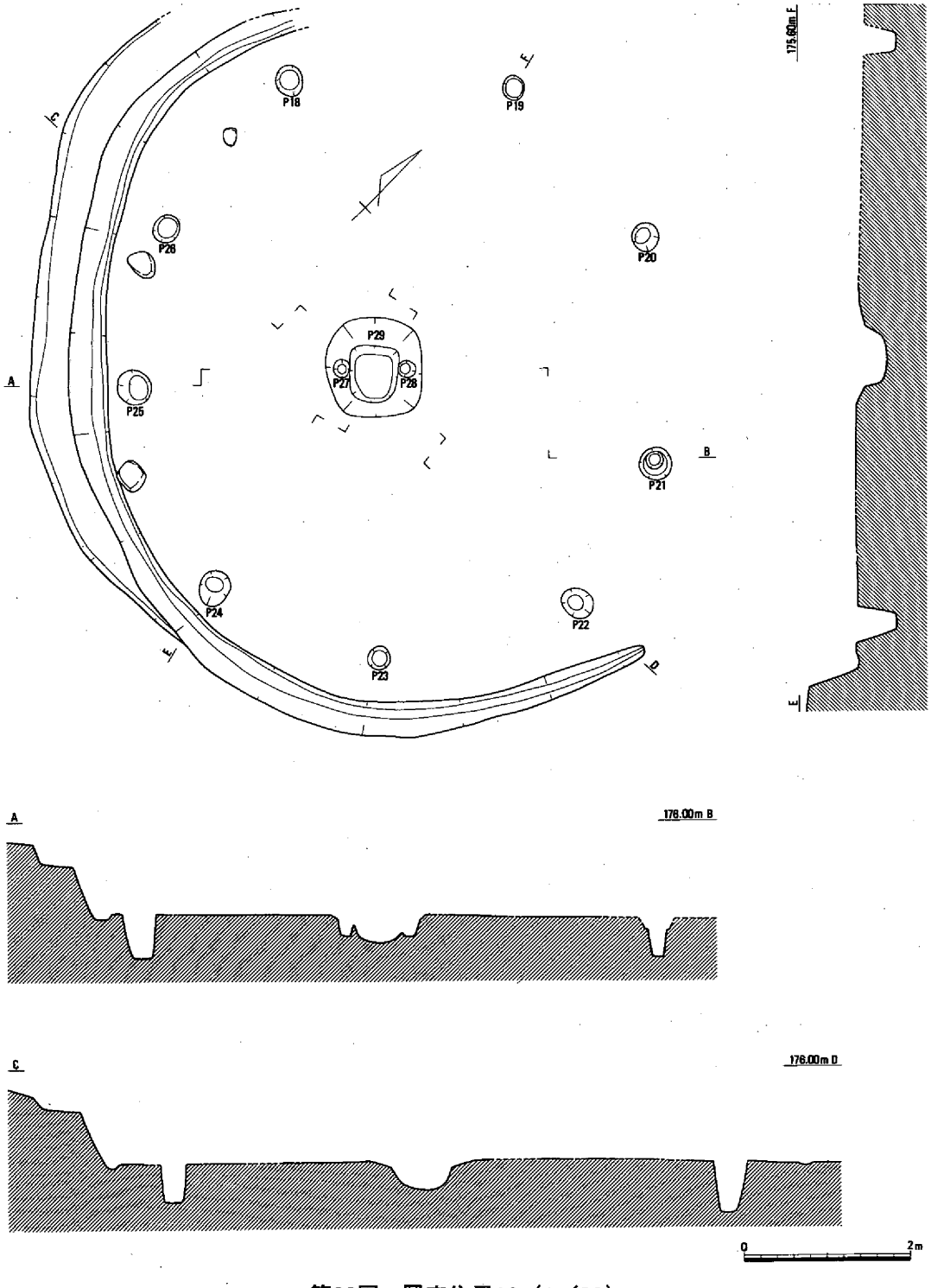


第21図　竪穴住居９（1／80）

竪穴住居９（第17・18・21図、図版43―１）

この竪穴住居も、前述した竪穴住居７や竪穴住居８と同じ位置に存在したもので、中央穴は竪穴住居７や竪穴住居８のものをそのまま使用していた。

平面形は楕円形に近い形を呈し、柱構造は６本柱で、竪穴住居８の規模をさらに拡張していた。柱穴間の距離は166～250㎝を測り、地形の低い北側に面したＰ13とＰ14の間が最も広くなっていた。南側に位置するＰ15からＰ17の３か所の柱穴は、壁体溝に比較的近い地点に存在したが、西側のＰ12



第22図　竪穴住居10（1／80）

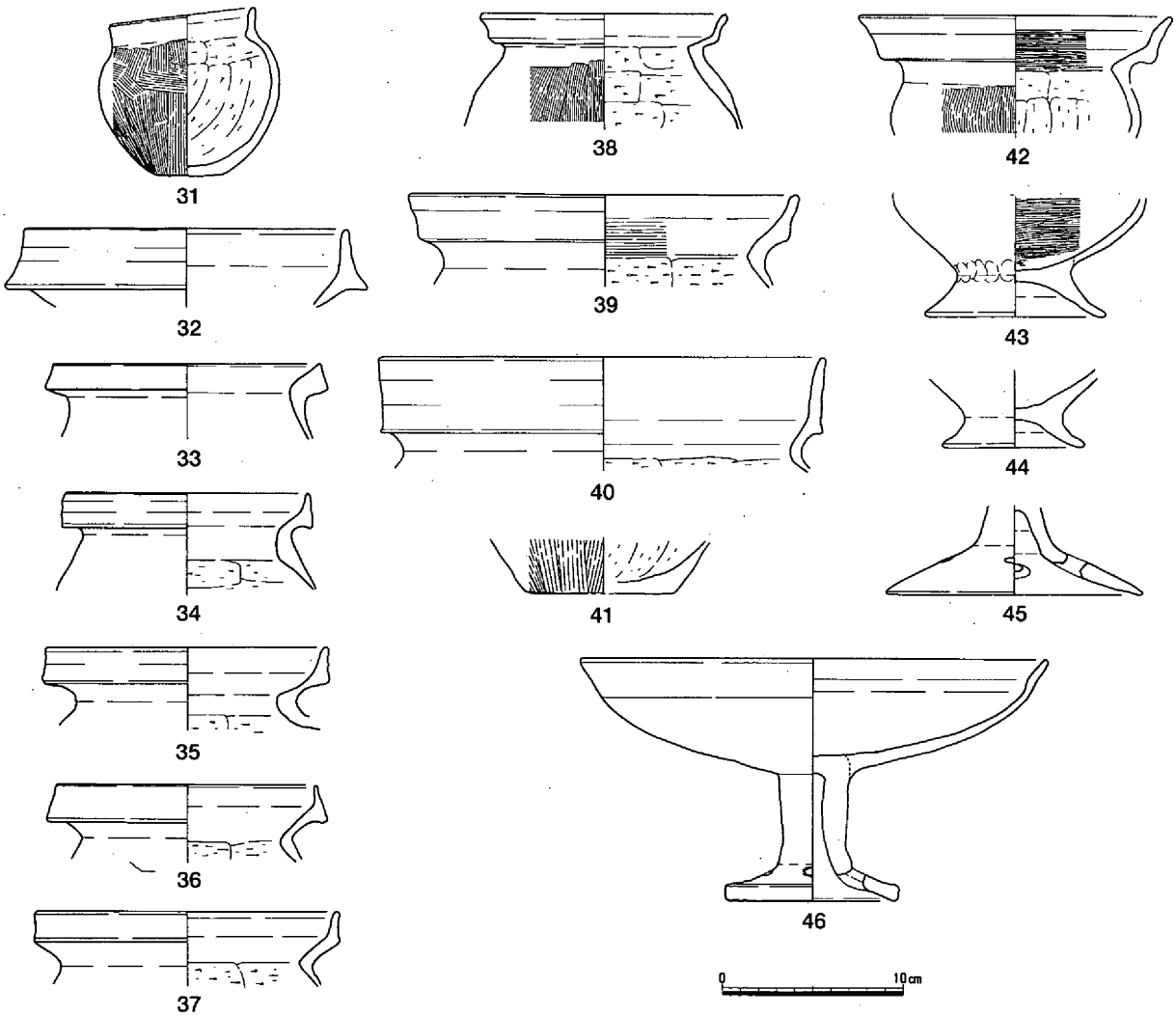
とＰ13は、壁体溝から離れた中央穴に近い所に検出された。柱穴の規模は、北側に位置する古墳時代後期の竪穴住居20の床面で検出したＰ13が小さく、南側に位置するＰ16やＰ17が大きかったが、柱穴の底部のレベルは、どの柱穴もほぼ同じ値になっていた。

竪穴住居10（第17・18・22図、図版43―１）

この竪穴住居も、前述した竪穴住居７、竪穴住居８、竪穴住居９の３軒の竪穴住居と同じ位置に検出したもので、地形の高い南西方向に面した部分に、最大幅が55㎝のテラスが存在した。

平面形は楕円形に近い形を呈し、柱構造は９本柱で、竪穴住居９の規模をさらに大きく拡張していた。柱穴間の距離は190～270㎝を測り、それぞれの柱穴が壁体溝に近い所に存在するようである。南西側の壁体溝に近い床面には、３個の上面が扁平な人頭大の石が検出された。中央穴は、床面の中心よりやや南西方向に寄った地点に確認したが、竪穴住居９の中央穴の上面を隅丸方形に拡張して、両脇に柱穴状の窪みを新しく設置していた。中央穴の内部には、壁体溝や柱穴の中に存在したものと同じである黒褐色土が認められたが、炭化物や焼土は確認できなかった。なお南西方向に検出したテラスは、床面から約60㎝の高さになっていた。

これまでに確認した４軒の竪穴住居によると、建て替えが行われるたびに竪穴住居そのものの規模が大きくなり、柱構造も４本柱から６本柱を経て９本柱に変化していたのである。



第23図　竪穴住居７～10出土遺物（1）（1／4）

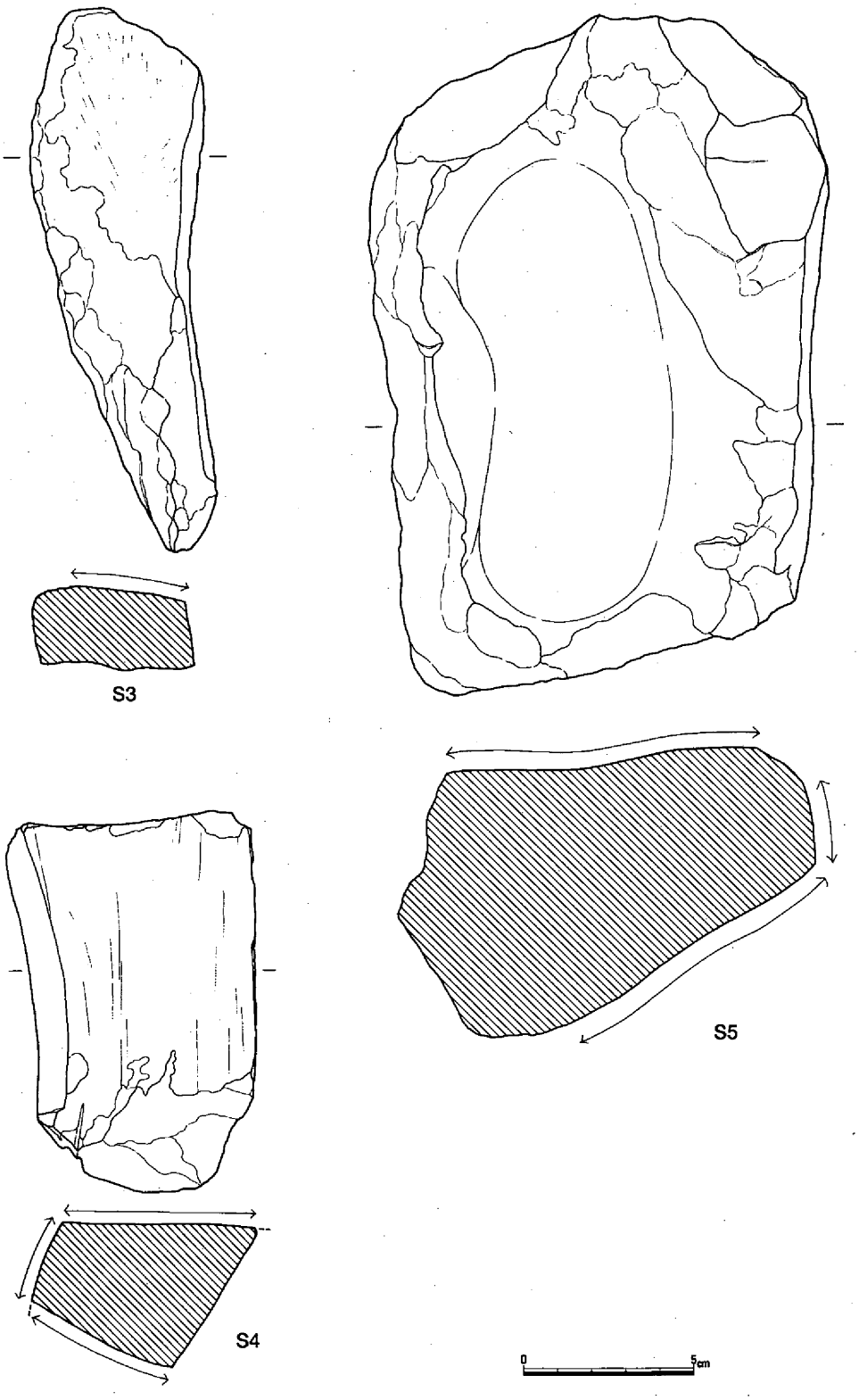
４軒の竪穴住居が重なり合っていた地点からは、31～46の土器とＳ３～Ｓ５の石器が出土した。

31の小型の壺形土器は、口径7.6cm、器高9.3cm、胴部最大径9.8cm、底径3.5cmを測る完形品で、口縁部は内外面ともヨコナデを施している。胴部の内面はヘラケズリを行い、外面にはハケメが認められる。46の高杯形土器も計測可能で、口径24.2cm、器高23.3cm、底径9.2cmを測り、穿孔が３個で円塗りを施している。

32～41の壺または甕形土器の口縁部から底部にかけての破片は、39を除いて口縁部は内外面ともヨコナデを行っている。胴部の内面はヘラケズリを施し、外面に縦方向のハケメが認められるもの（38・41）も存在する。42～44の鉢形土器と思われるものには、内面に横方向のヘラミガキを施しているものがある。

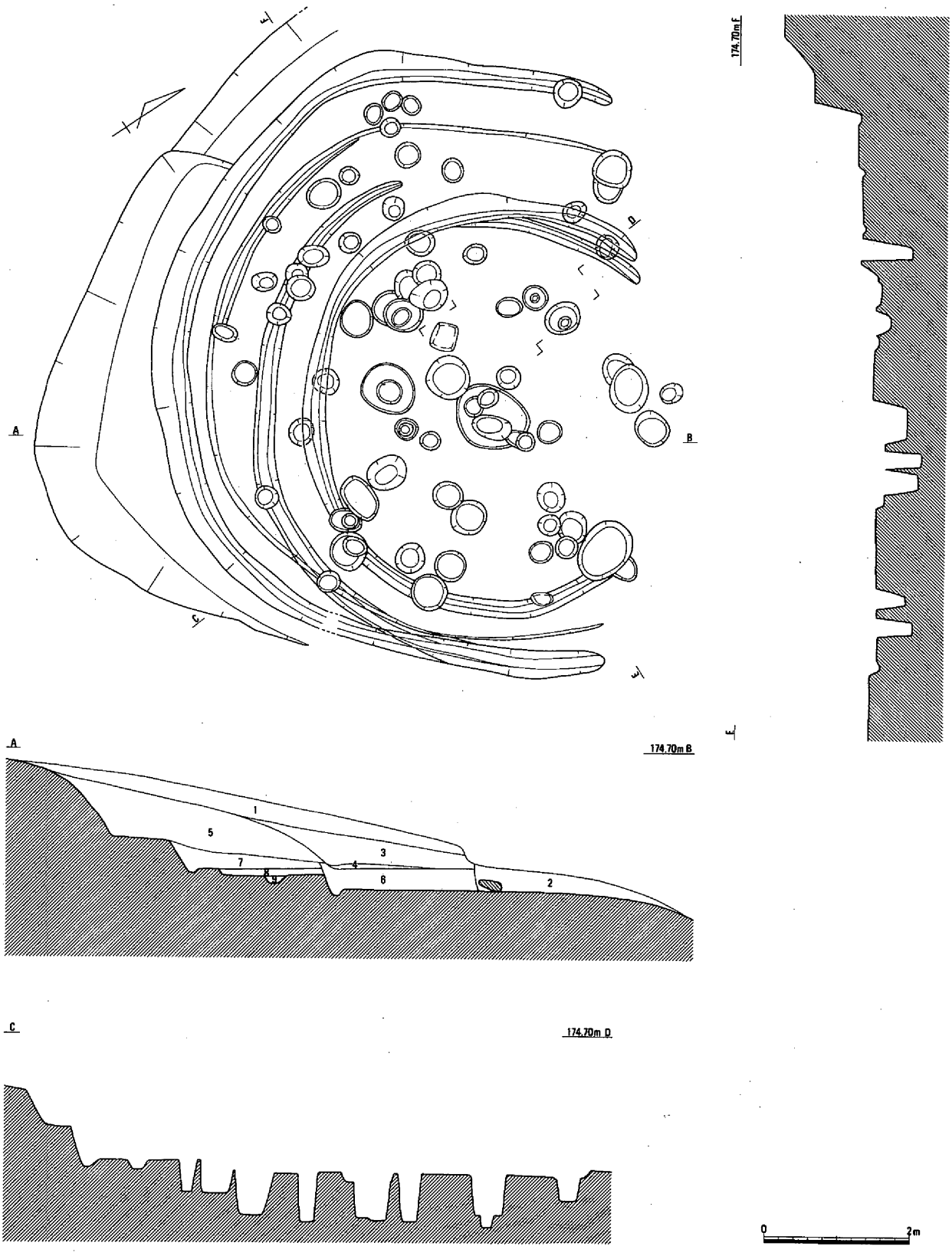
これらの出土土器は、その形態的特徴や調整手法から、弥生時代後期前葉から後葉にかけての時期になるであろう。

なおＳ３～Ｓ５の石器は、３点とも流紋岩製の砥石で、使用面が１面だけの小型のものと、３面の中型と大型のものが認められる。



第24図　竪穴住居７～10出土遺物（2）（1／2）

竪穴住居11（第25～27図、図版43―２）

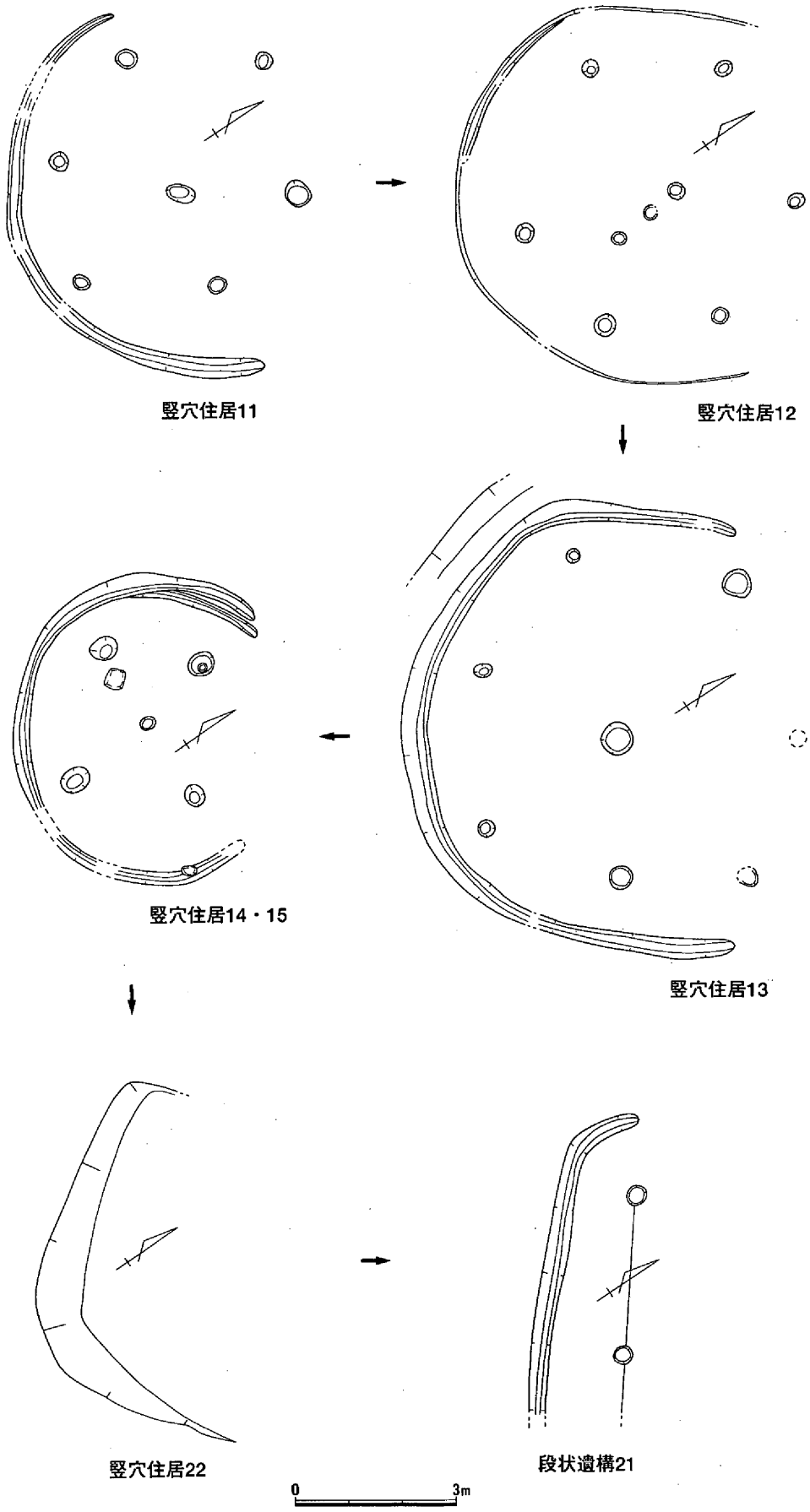


1．淡褐色土　2．淡黄褐色土　3．淡褐色土（礫含む）　4．赤褐色土（焼土）　5．褐色土
6．黒褐色土　7．暗褐色土　8．灰褐色土　9．灰黄褐色土

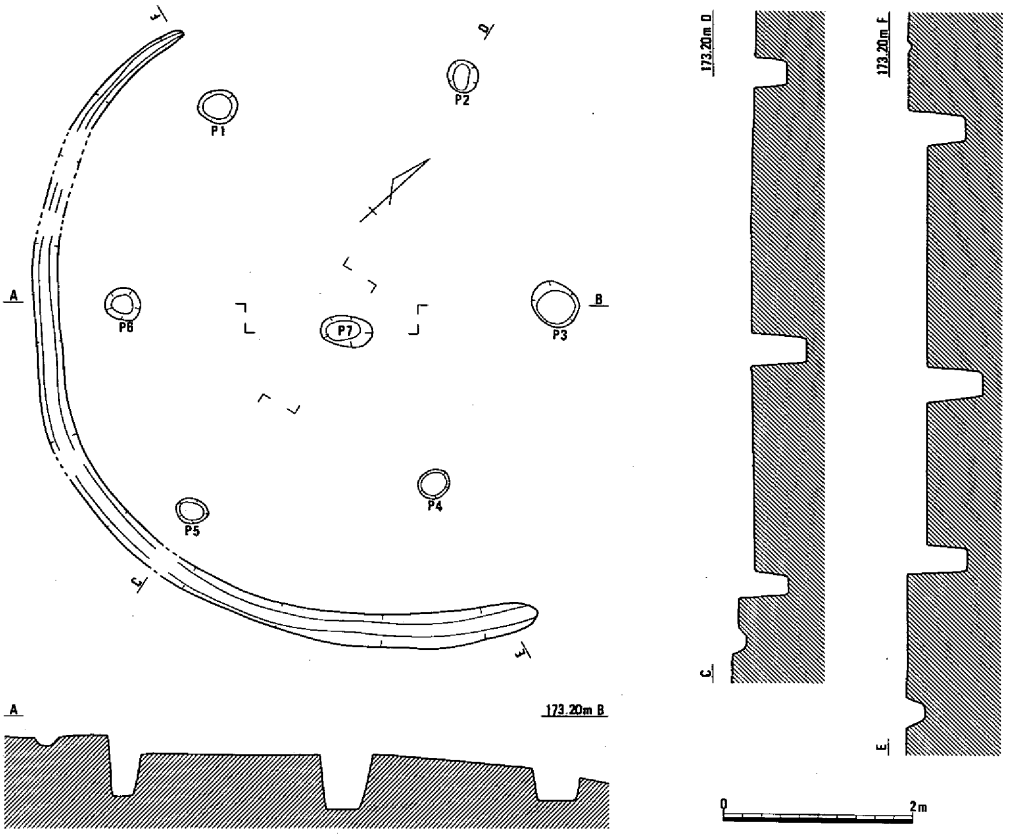
第25図　竪穴住居11～15・22、土壙19（1／80）

調査範囲の中央部からやや南東方向へ寄った地点に検出した竪穴住居で、後述する竪穴住居12から竪穴住居15までの弥生時代後期に属する竪穴住居４軒と竪穴住居22や段状遺構21の古墳時代後期の遺構と重なり合っていた。

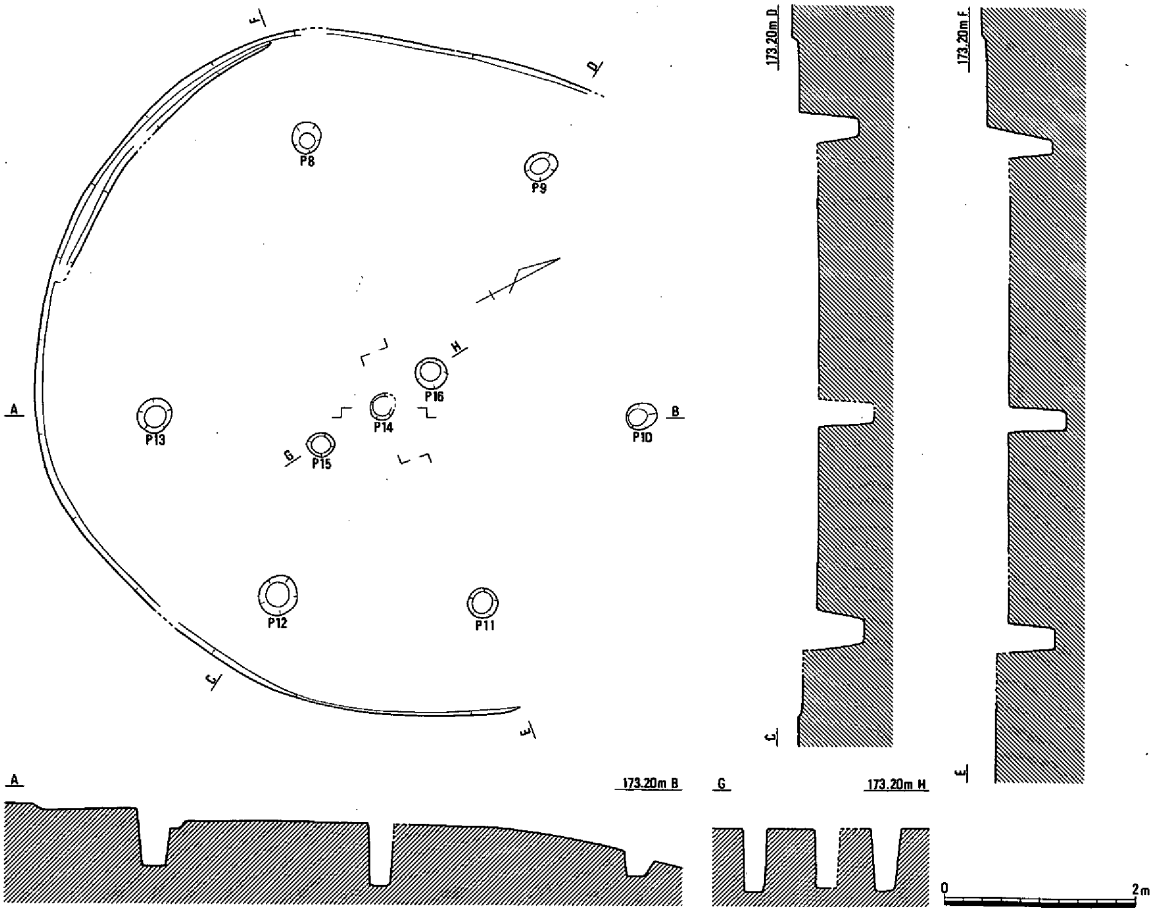
地形の低い北東側の部分が削平されて不明であるものの、平面形は円形に近い形を呈するであろう。この竪穴住居の柱構造は６本柱で、柱穴間の距離は225～252cmを測る。壁体溝と柱穴の間隔は、南側に位置するＰ５が狭く、東側に位置するＰ４が広いように思われる。柱穴そのものの規模は、北東方向に検出しているＰ３が最も大きくなっていた。中央穴の平面形は楕円形に近い形を呈し、短径30cm、長径53cmと規模が比較的小さかった。



第26図　竪穴住居11～15・22、段状遺構21変遷図（1／120）



第27図　竪穴住居11（1／80）

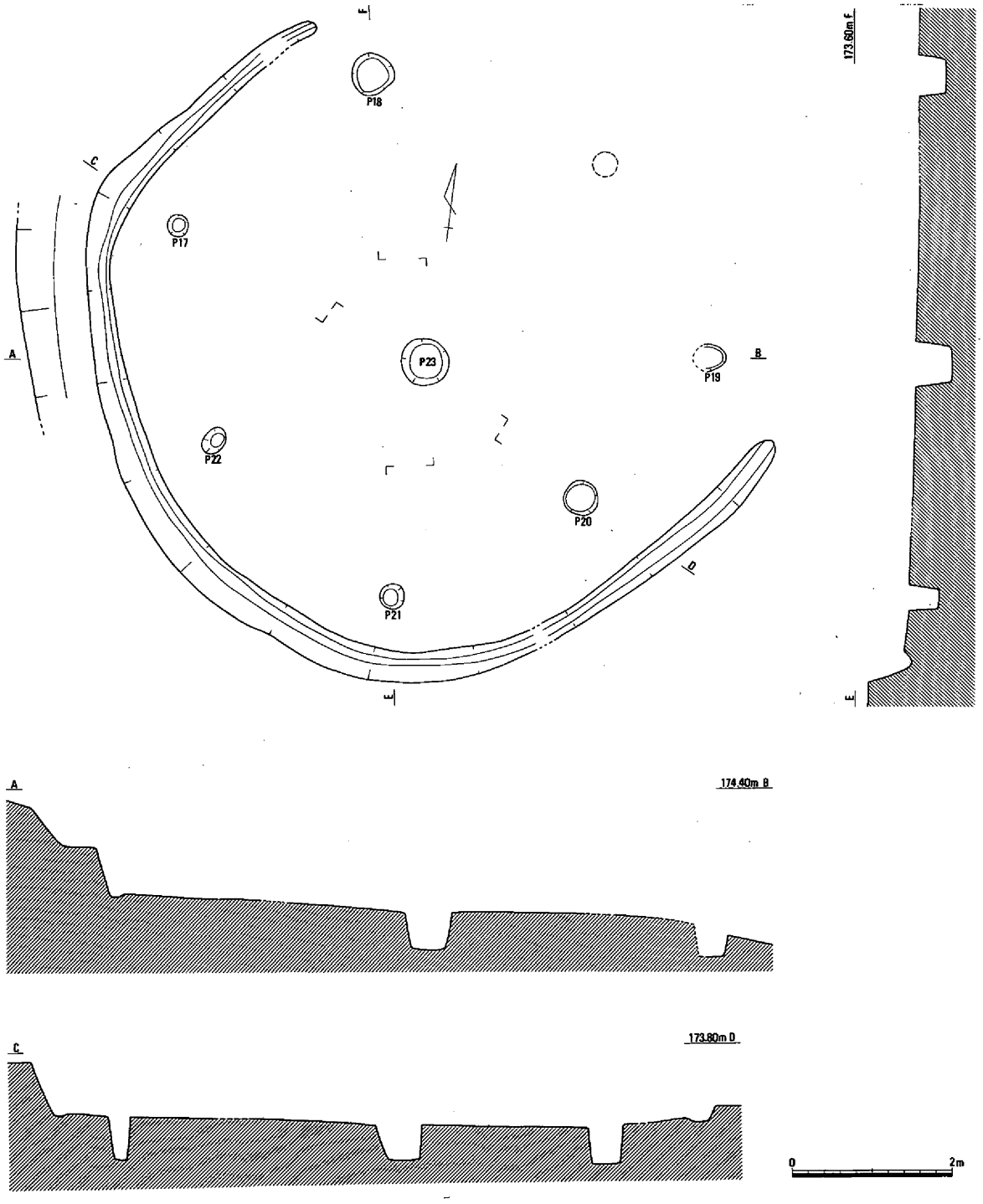


第28図　竪穴住居12（1／80）

竪穴住居12（第25・26・28図、図版43―２）

この竪穴住居は、前述した竪穴住居11と同じ位置に存在したもので、壁体溝の残存状態が悪い。ところが壁体溝や柱穴の中に含まれていた土には、多量の焼土が混在していたので、全体の遺構を把握するのは極めて容易であった。

平面形は円形に近い形を呈し、柱構造は６本柱である。柱穴間の距離は212～230cmを測り、西側に位置するＰ８とＰ13の間が広くなっていた。中央穴は周囲に存在した柱穴とほぼ同じ大きさの規模で、中央穴を挟んだ南北両側に別の柱穴を検出した。



第29図　竪穴住居13（1／80）

竪穴住居13（第25・26・29図、図版43―２）

この竪穴住居も、前述した竪穴住居11や竪穴住居12と同じ位置に検出したもので、地形の高い西方向に面した所に、幅約40cmを測るテラスの一部が存在した。このテラスは床面から約60cmの高さに認められたが、南西側の部分は古墳時代後期の竪穴住居22によって削平されていた。

この竪穴住居は、平面形が円形に近い形態を呈するが、前述した竪穴住居11や竪穴住居12よりも全体の規模が拡張し、柱構造も７本柱に変化していた。残存する柱穴間の距離は240～305cmを測り、北西方向のＰ17とＰ18の間が広くなっていた。中央穴の平面形は円形を呈し、径は60cmであった。

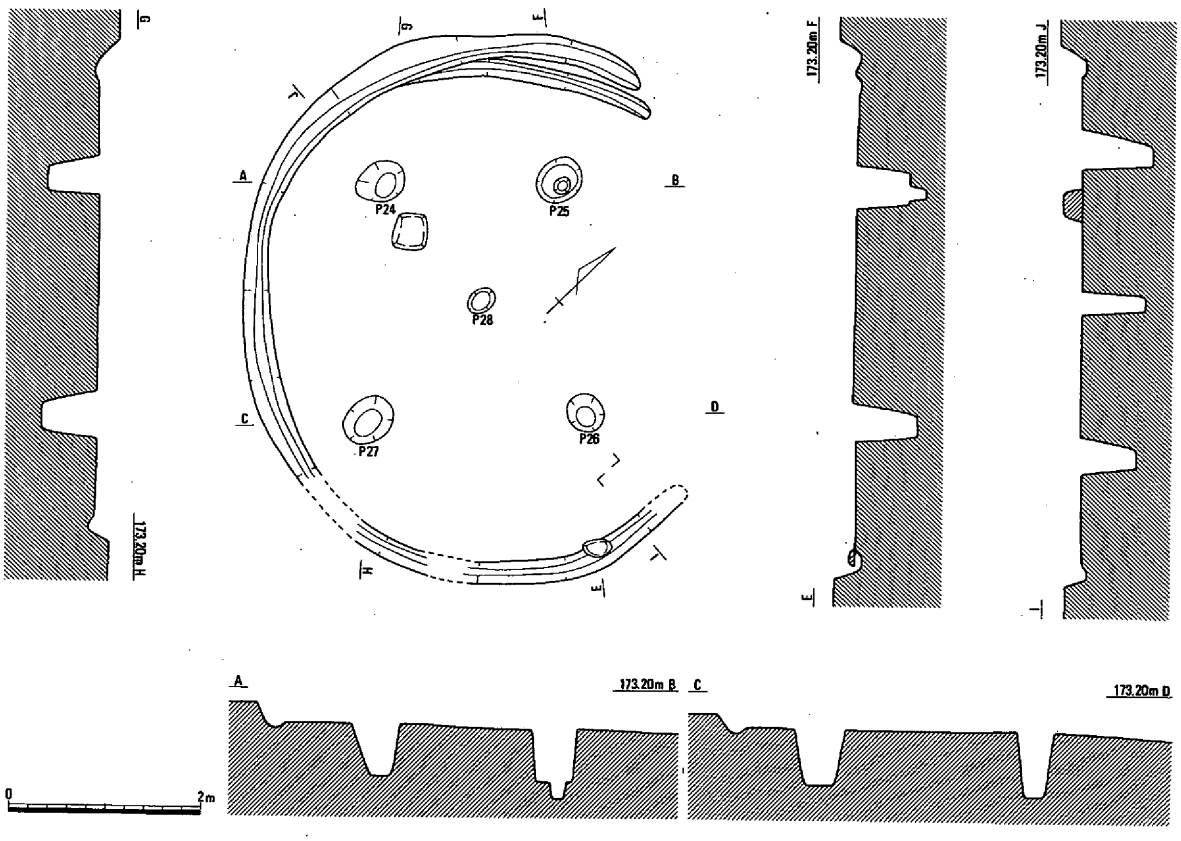
竪穴住居14（第25・26・30図、図版43―２）

この竪穴住居も、前述した竪穴住居11、竪穴住居12、竪穴住居13と同じ位置に検出したものであるが、竪穴住居13は比較的大規模であったが、建て替えで一転して小型の竪穴住居に変化していたのである。柱構造も、７本柱であったものから４本柱になり、柱穴間の距離は182～253cmであった。

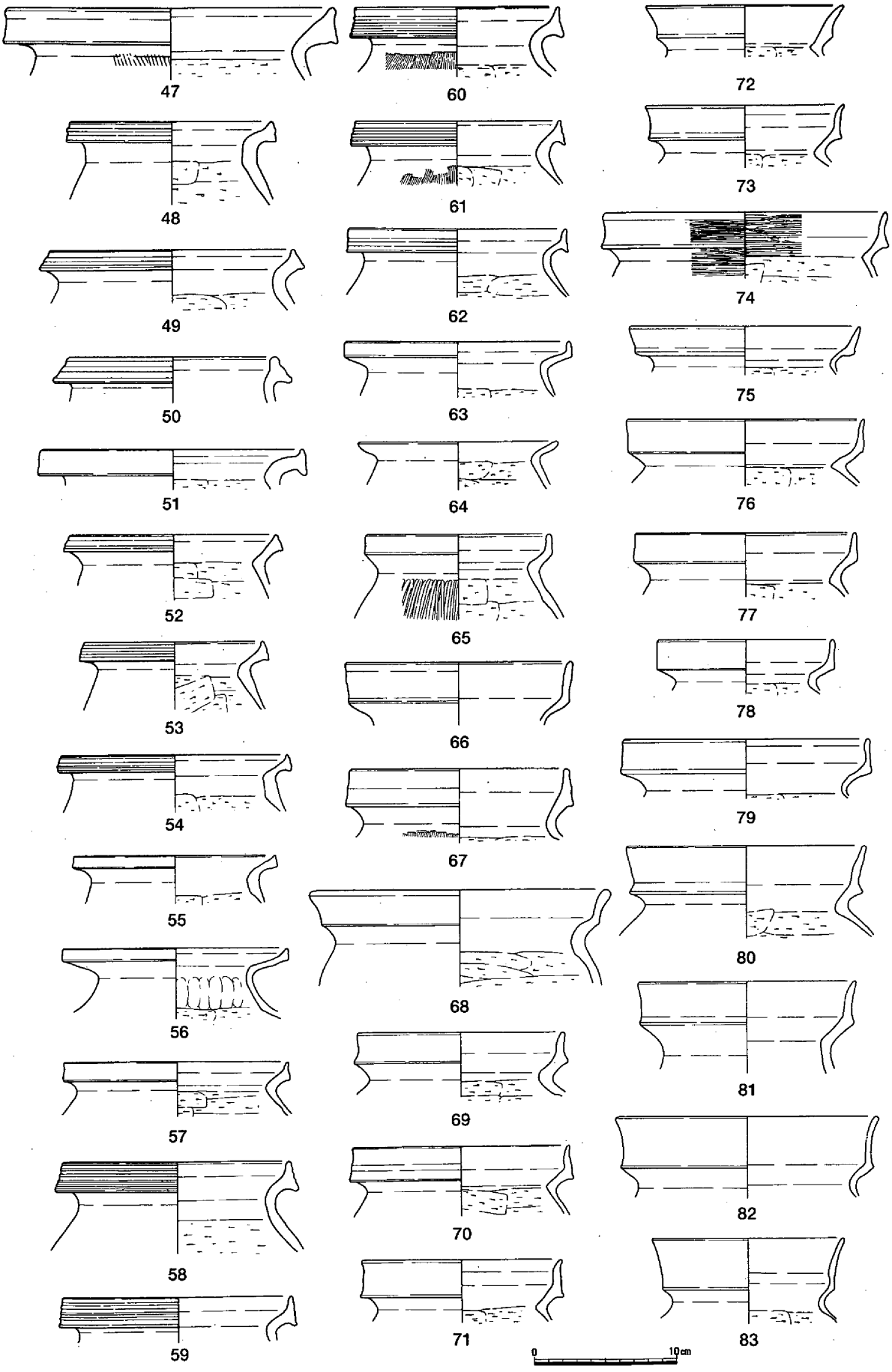
平面形は楕円形を呈し、北西から南東にかけての方向が約530cm、南西から北東にかけての方向が約460cmになるであろう。柱穴の平面形も楕円形を呈し、南側に位置するＰ27が最も大きく、北側のＰ25の底部は２段になっていた。中央穴は４か所の柱穴よりも規模が小さく、短径25cm、長径30cmの楕円形であった。壁体溝と柱穴の間隔は、南西側に位置するＰ24とＰ27が狭く、北東側に位置するＰ25とＰ26が広くなっていた。

竪穴住居15（第25・26・30図、図版43―２）

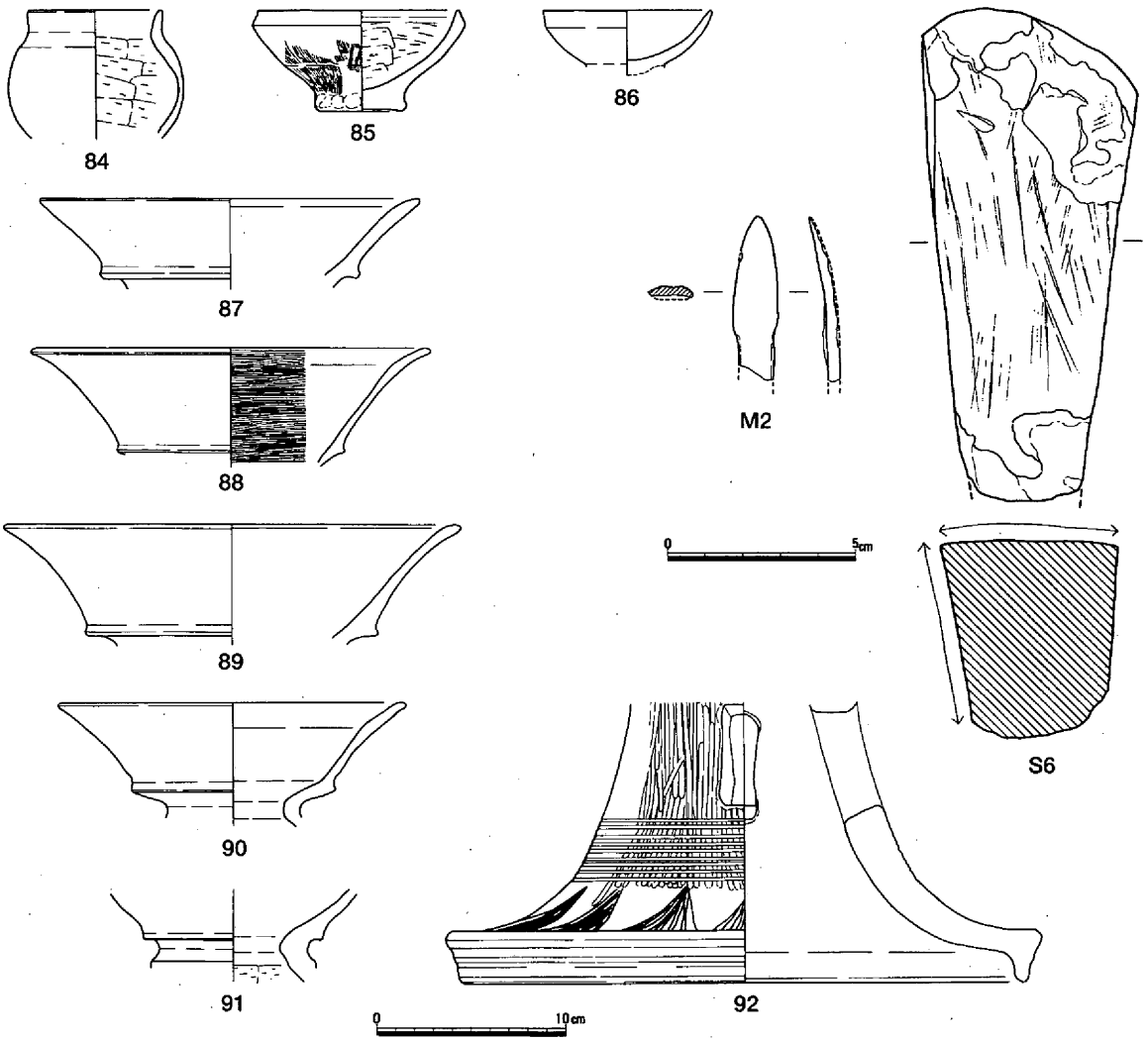
この竪穴住居は、前述した竪穴住居14の柱穴や中央穴をそのまま踏襲して使っていたが、北西方向の壁体溝が竪穴住居14のものよりも外側へ張り出していたのである。



第30図　竪穴住居14・15（1／80）



第31図　竪穴住居11～15出土遺物（1）（1／4）



第32図　竪穴住居11～15出土遺物（2）（1／4、1／2）

これまで説明を行った５軒の竪穴住居が存在した地点からは、47～92の土器以外にＭ２の鉄器やＳ６の石器が出土している。

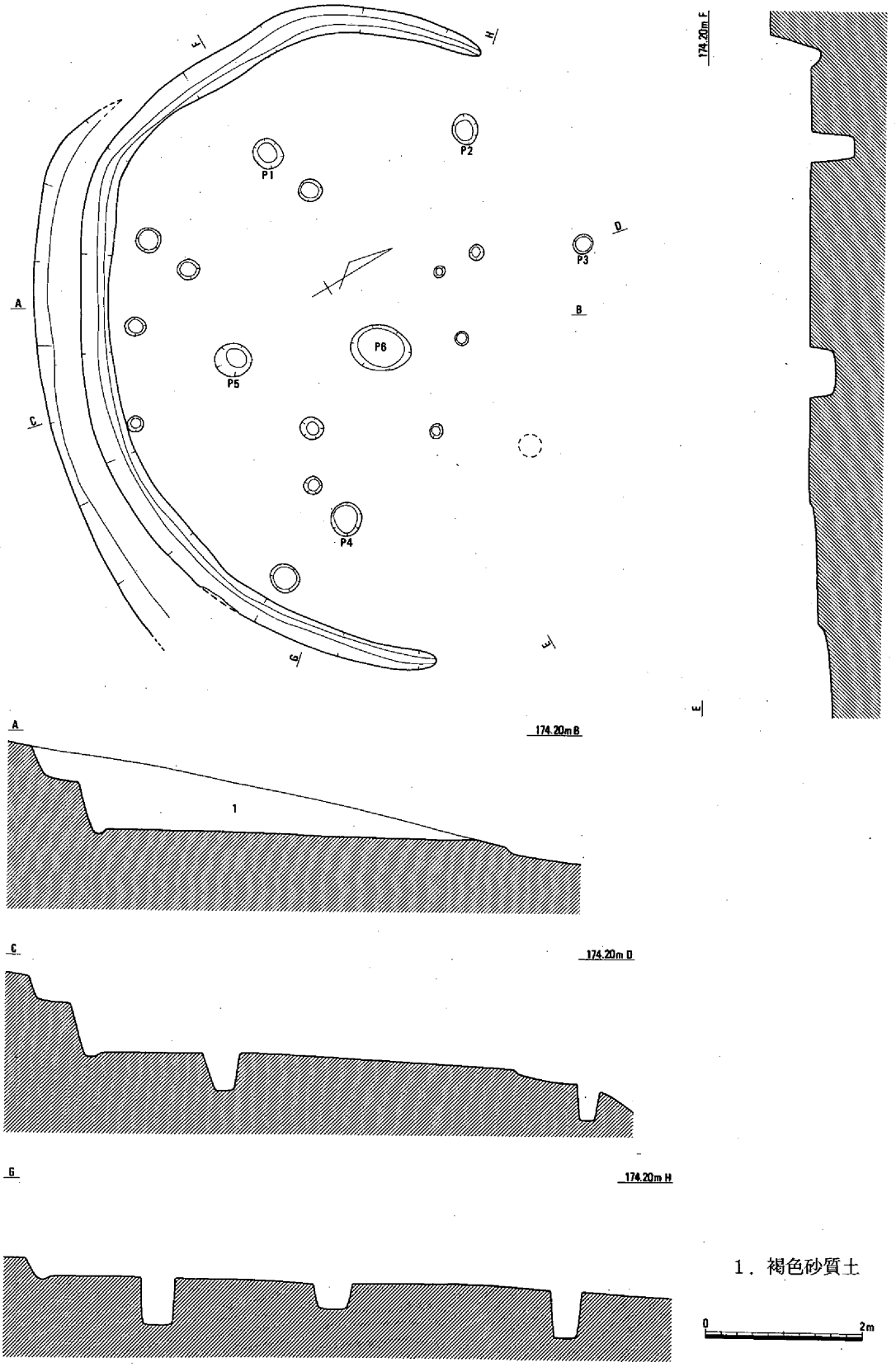
47～83の壺または甕形土器の口縁部から胴部にかけての破片は、口縁部の内外面にヨコナデを行っているものがほとんどであるが、横方向のヘラミガキが認められるもの（74）も存在する。口縁端部の形態は、外側に面が存在して凹線を有するもの、外側に面が存在するが凹線が認められないもの、上方へ外湾して立ち上がって複合口縁になるものなどがある。体部の内面はいずれもヘラケズリを施しているが、外面にハケメが存在するもの（47・60・61・67）や、縦または横方向のヘラミガキを行っているもの（65・74）もある。84は小型の壺形土器の破片である。85と86は鉢形土器と台付鉢形土器である。87～91は鼓形器台の破片で、内面に横方向のヘラミガキを施しているもの（88）もある。92は大型器台の下部破片である。長方形の透かし穴を有し、外面には鋸歯文や凹線が認められる。これらの土器は、その形態的特徴や調整手法から、弥生時代後期前葉から後葉にかけてのものが混在していると推定される。

Ｍ２の鉄器は、鉋の刃部から柄部にかけての小破片である。

Ｓ６の石器は、流紋岩製の砥石で、２面だけを使用している。

竪穴住居16（第33・34図、図版43―３）

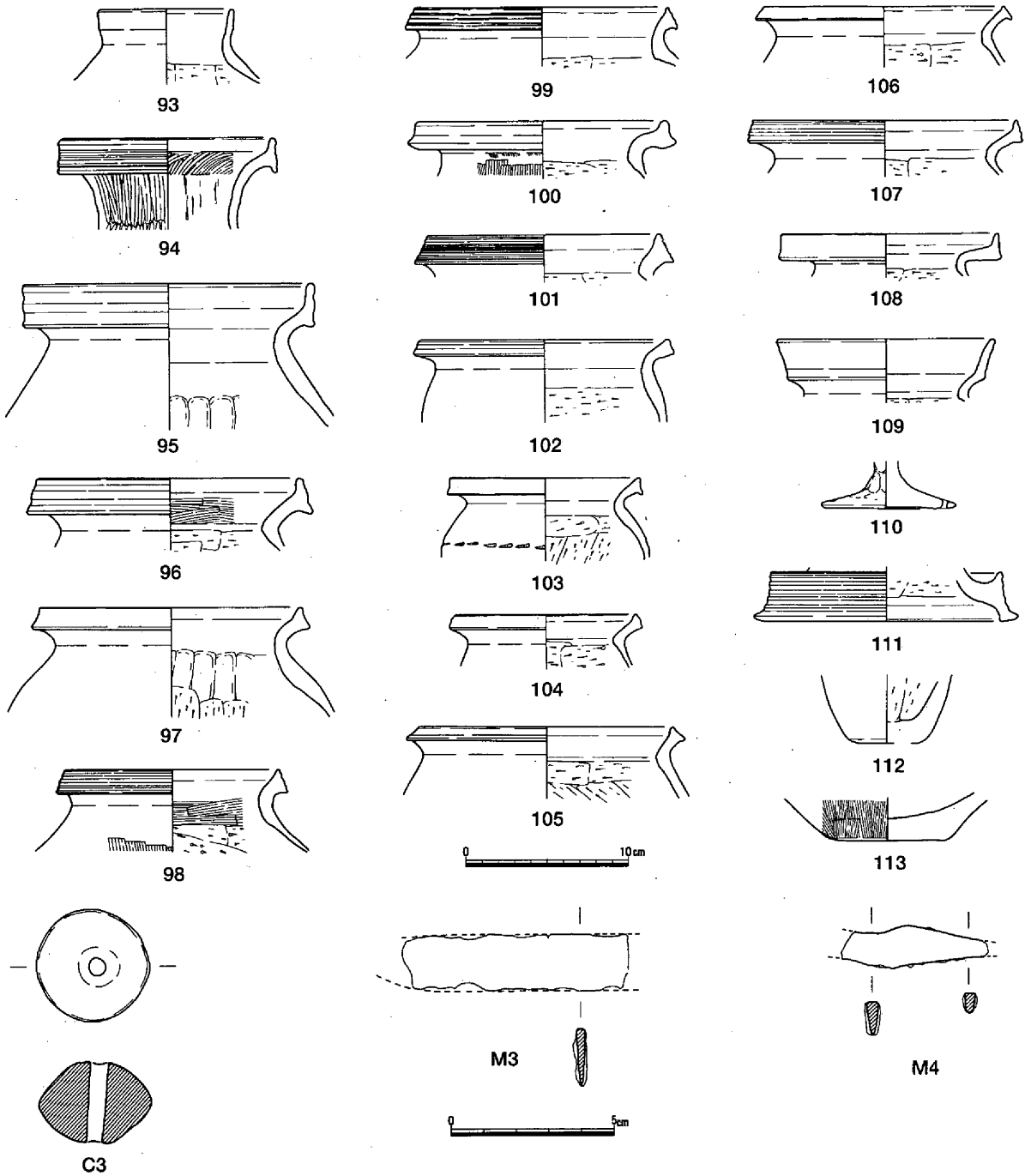
調査範囲の中央部よりやや南東方向へ寄った地点で検出した竪穴住居で、地形の高い南西方向に面した部分に幅約35～50cmのテラスが存在し、床面からの高さは約60cmになっていた。



第33図　竪穴住居16（1／80）

平面形は楕円形に近い形態を呈し、柱構造は６本柱である。残存する柱穴間の距離は252～260㎝を測り、南西側に存在したＰ１とＰ５の間が最も広くなっていた。柱穴の平面形は円形または楕円形を呈し、北側に位置するＰ３の規模が最も小さかった。壁体溝と柱穴の間隔はほぼ同じで、竪穴住居の内部には褐色砂質土が堆積していた。中央穴は短径60㎝、長径78㎝の楕円形を呈し、床面の中心部よりやや南側に寄った所に確認された。

出土遺物として、93～113の土器片以外にＣ３の算盤玉形土玉やＭ３とＭ４の刀子がある。土器片の中には109の甕形土器のように新しい時期のものも混在しているが、ほとんどのものは弥生時代後期前葉の時期に属するであろう。



第34図　竪穴住居16出土遺物（1／4、1／2）

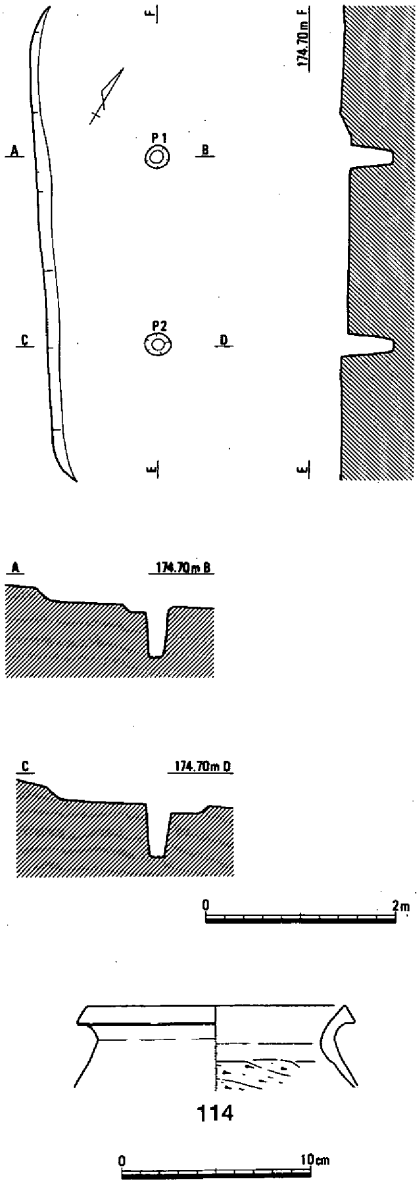
(2) 段状遺構

段状遺構１（第35図）

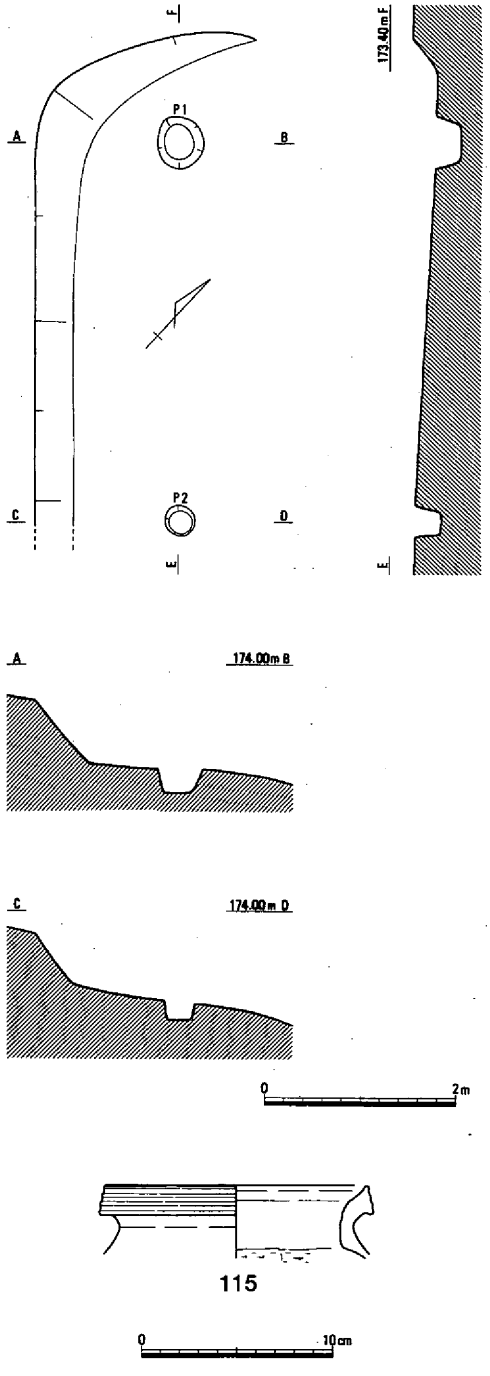
調査範囲の中央部よりやや西方向へ寄った地点に検出した段状遺構で、近接して縄文時代晩期と推定される土壙１や土壙２と、古墳時代後期の溝１などが存在する。

地形の高い南西方向に面した部分に、高さ約12cmの段が約500cmの長さで直線的に確認され、その両端が緩やかに湾曲していた。床面の２か所に柱穴を検出したが、200cmの間隔になっていた。

出土遺物として**114**の甕形土器がある。頸部で「く」字状に外反した口縁の端部は、斜め上下に肥厚して外側に面が存在する。口縁部は内外面ともヨコナデを施し、胴部内面はヘラケズリを行っている。この形態的特徴や調整手法から、段状遺構１は弥生時代後期前葉の時期になるであろう。



第35図　段状遺構１（1／80）・出土遺物（1／4）



第36図　段状遺構２（1／80）・出土遺物（1／4）

段状遺構２（第36図）

調査範囲の中央部に検出した段状遺構で、南東部分が竪穴住居６と重複していた。遺構の切り合い関係を精査した結果、竪穴住居６が古くて段状遺構２が新しいことが判明した（第３図）。

地形の高い南西方向に面した部分に、最も高い地点で77㎝を測る段が、約500㎝の長さで直線的になっているのが確認され、北西端部は北東方向に向かって緩やかに湾曲していた。南東端部は竪穴住居６の覆土中に位置したこともあって、確実に把握することができなかった。床面の２か所に400㎝の間隔で柱穴を検出したが、規模が異なっていた。

出土遺物として**115**の甕形土器があるが、その形態的特徴や調整手法から、弥生時代後期前葉の時期になるであろう。

段状遺構３（第37図）

この段状遺構も、調査範囲の中央部に検出したもので、北西部分が竪穴住居６と、南東部分が竪穴住居21とそれぞれ重複していた。遺構の切り合い関係を精査した結果、この段状遺構３は竪穴住居６よりも新しく、竪穴住居21よりも古いことが判明した。

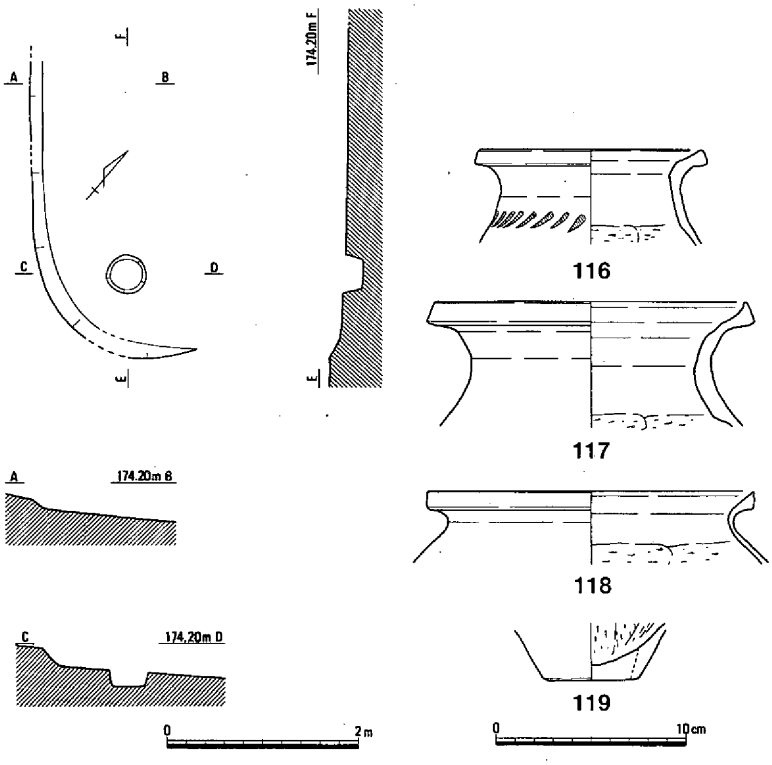
地形の高い南西方向から南東方向にかけて、最も高い地点で23㎝を測る段が「Ｌ」字状を呈して検出され、南東部分の端部では緩やかに湾曲していた。南東隅の床面に柱穴を検出したが、床面から極めて浅かった。

出土遺物として**116～119**の土器片があるが、弥生時代後期前葉の時期と考える。

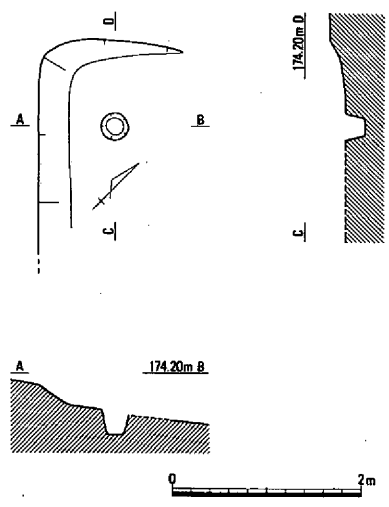
段状遺構４（第38図）

調査範囲の中央部よりやや南東方向に寄った地点に存在したが、竪穴住居13や段状遺構17などと重複していた。遺構の切り合い関係を精査した結果、この段状遺構は竪穴住居13よりも新しく、段状遺構17よりも古いことが判明した。

地形の高い西側部分に、屈曲して「Ｌ」字状を呈する高さ23㎝の段と、床面の西隅に１か所の柱穴を検出しただけである。



第37図　段状遺構３（1／80）・出土遺物（1／4）



第38図　段状遺構４（1／80）

(3) 土　壙

土壙４（第39図）

調査範囲の南西端部に検出した土壙で、地形の高い東側約６ｍの地点には竪穴住居１が存在する。

平面形は短径106㎝、長径108㎝の円形に近い形態を呈し、断面形は「U」字形で内部に黄褐色土が堆積していた。底部はほぼ水平で、溝や柱穴などは存在しなかった。

この土壙からは、弥生時代後期前葉の土器片が出土しているが、図化することができなかった。

土壙５（第40図）

調査範囲の西端部に検出した土壙で、南側には竪穴住居２や竪穴住居３が存在する。

平面形は短径125㎝、長径136㎝の楕円形に近い形態を呈し、南側の壁面が袋状になっていた。断面形は「U」字形に近い形になり、黄褐色粘質土が堆積していた。底部は中心部がわずかに窪み、底部に接して土器片が出土した。

出土遺物として、**120**の高杯形土器の脚端部破片がある。筒部の内面はヘラケズリを行い、外面は縦方向のナデを施している。端部は肥厚して外側に面を有し、全体にヨコナデを行っている。この土器片の形態的特徴や調整手法から、土壙５は弥生時代後期前葉の時期になるであろう。

土壙６（第41図）

この土壙は、前述した土壙５の北方向約1.2ｍの地点に検出したもので、北西方向約４ｍの所には後述する土壙７が存在する。浅くて規模が大きい土壙の南東隅を切った状態で、土壙６は検出された。

平面形は短辺73㎝、長辺75㎝の隅丸方形に近い形を呈し、検出面からの深さは50～71㎝を測る。断面形は「U」字形を呈し、内部には褐色土が堆積していた。底部は周辺部よりも中心部がわずかに窪んでおり、図化することができなかった弥生時代後期前葉の時期と思われる土器片が出土した。

土壙７（第42図）

調査範囲の北西端部に検出した土壙で、南東方向約４ｍの地点には前述した土壙６が存在する。

平面形は短径107㎝、長径142㎝の卵形に近い形態を呈し、南東方向の壁面の一部が外側へ湾曲して袋状に張り出していた。検出面からの深さは53～84㎝を測り、断面形は「U」字形に近い形態を呈していた。内部には褐色土と黄褐色土が堆積し、壺形土器の破片が出土した。

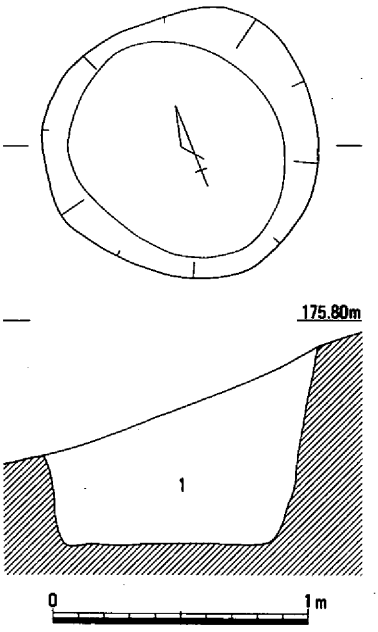
出土した**121**の壺形土器の口径は11.8㎝で、胴部から口縁部にかけて緩やかに斜め上方へ立ち上がり、内外面とも全体にヨコナデを施している。この土器の形態的特徴や調整手法から、土壙７は弥生時代後期前葉の時期になるであろう。

土壙８（第43図）

この土壙も、調査範囲の北西端部に検出したもので、南西方向約2.5ｍの地点には土壙７が確認され、北西方向約２ｍの地点には土壙９が存在する。

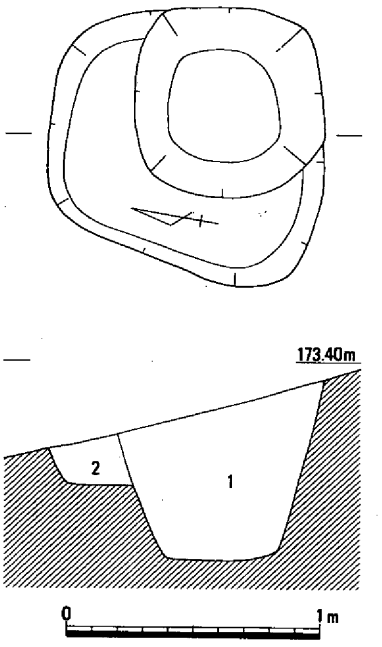
平面形は短径116㎝、長径132㎝の不整形な形態を呈し、南方向の壁面から底部にかけての一部が外側へ張り出して袋状になっていた。検出面から深さは18～45㎝を測り、内部に黒色の炭化物層を挟んで褐色土と灰黄褐色土が堆積していた。この土壙の断面形は「U」字形に近い形態を呈し、底部は周辺部よりも中心部がわずかに窪んでいた。

土壙の底部に近い灰黄褐色土の中から、弥生時代後期前葉に属すると推定される土器の小破片が出土したが、図化することができなかった。



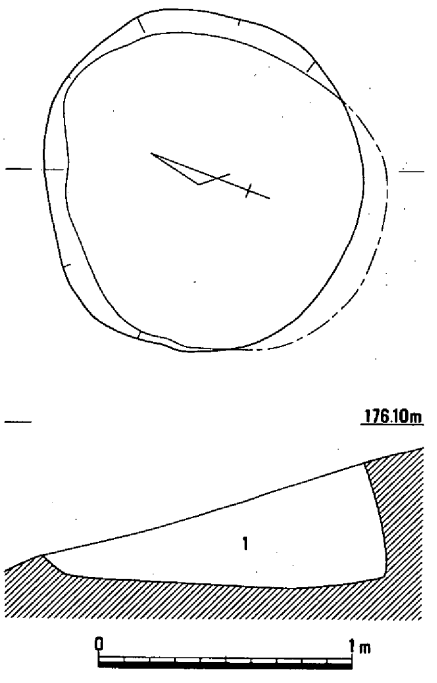
1．黄褐色土

第39図　土壙４（1／30）

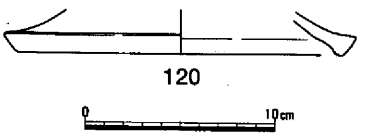


1．褐色土
2．暗褐色土

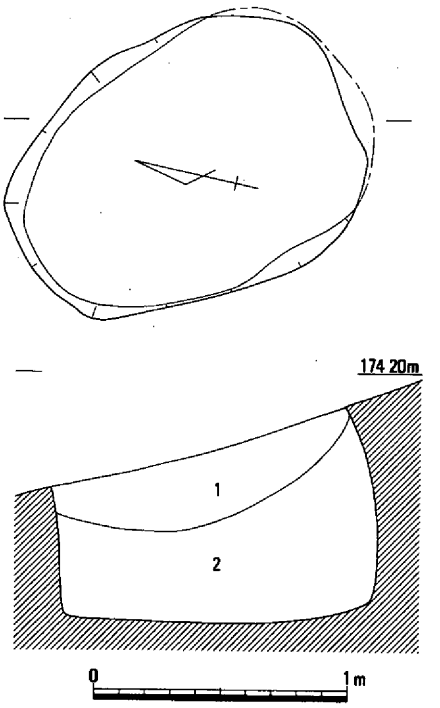
第41図　土壙６（1／30）



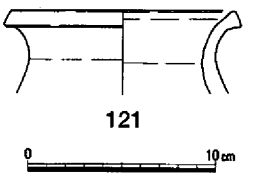
1．黄褐色粘質土



第40図　土壙５（1／30）・出土遺物（1／4）



1．褐色粘質土
2．黄褐色粘質土



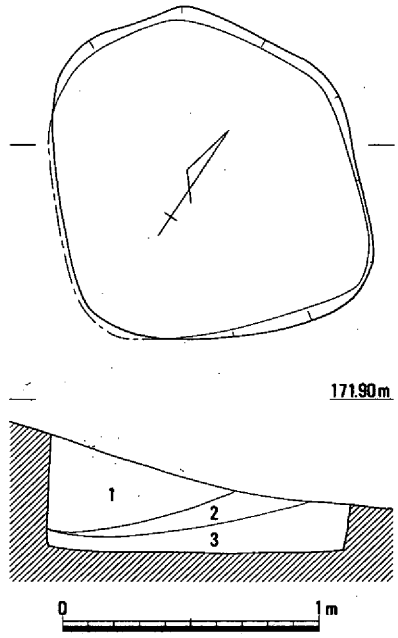
第42図　土壙７（1／30）・出土遺物（1／4）

土壙９（第44図）

この土壙も、調査範囲の北西端部に検出したもので、周辺には土壙７・８や土壙10～12が近接して存在する。

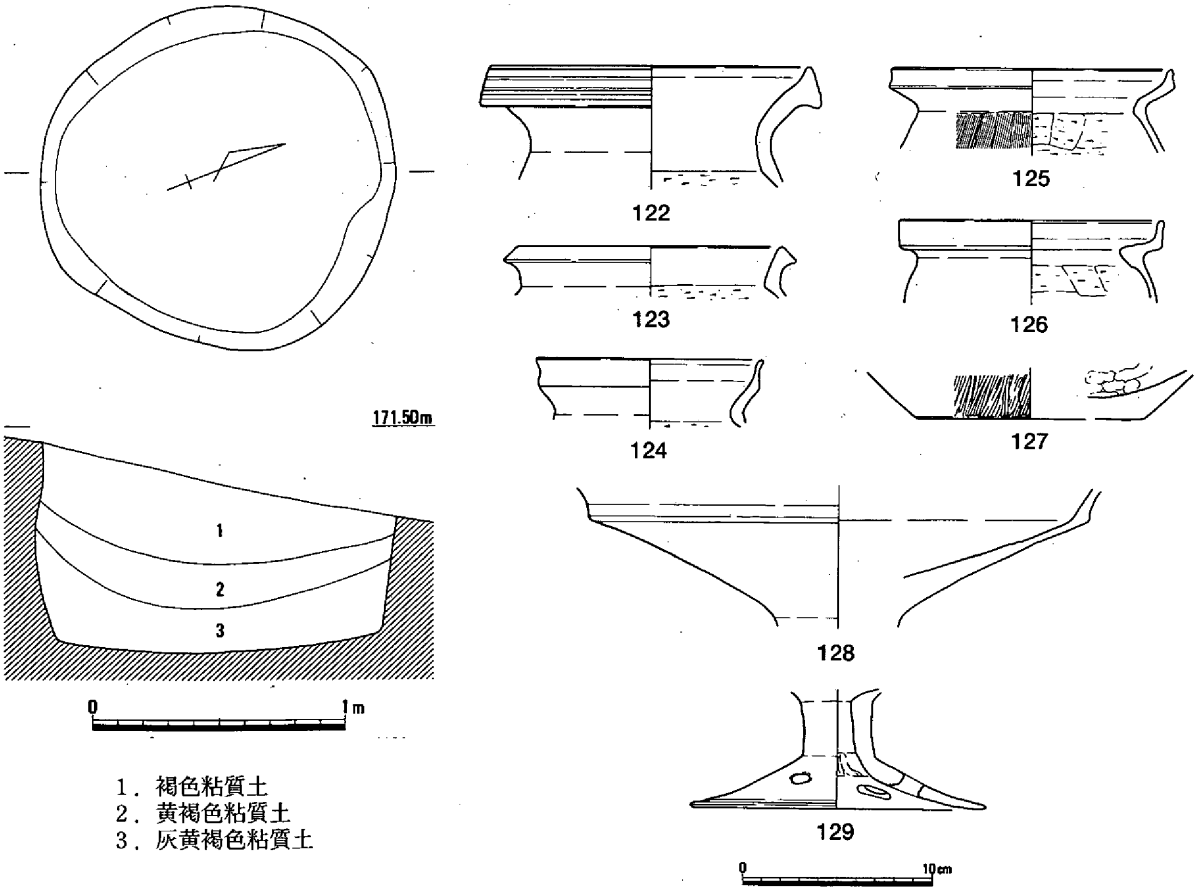
平面形は短径134㎝、長径140㎝の円形に近い形態を呈し、南方向に面した壁面の一部が外側へ湾曲して袋状になっていた。検出面からの深さは53～82㎝を測り、断面形は「Ｕ」字形に近い形態を呈し、土壙の内部には褐色粘質土、黄褐色粘質土、灰黄褐色粘質土が堆積していた。底部の中心部は周辺部より約８㎝も湾曲して窪み、底部の近くから弥生土器の破片が出土した。

出土遺物はいずれも土器片である。**122**の壺形土器は、頸部から口縁部にかけて緩やかに湾曲して斜め上方へ立ち上がり、端部が肥厚して外側に４条の凹線を有する面が存在する。**124～126**の甕形土器は、口縁部が上方へ短く立ち上がって端部を丸く仕上げている。**129**の高杯の脚部は、４個の穿孔が存在して丹塗りを施しているが、端部は器壁を薄くして丸く仕上げている。**128**の杯部下位の破片は、脚部の径が異なるので、**129**とは別の個体である。これらの土器の形態的特徴や調整手法から、土壙９は弥生時代後期中葉の時期になるであろう。



１．褐色土
２．黒色土（炭化物）
３．灰黄褐色土

第43図　土壙８（1／30）



１．褐色粘質土
２．黄褐色粘質土
３．灰黄褐色粘質土

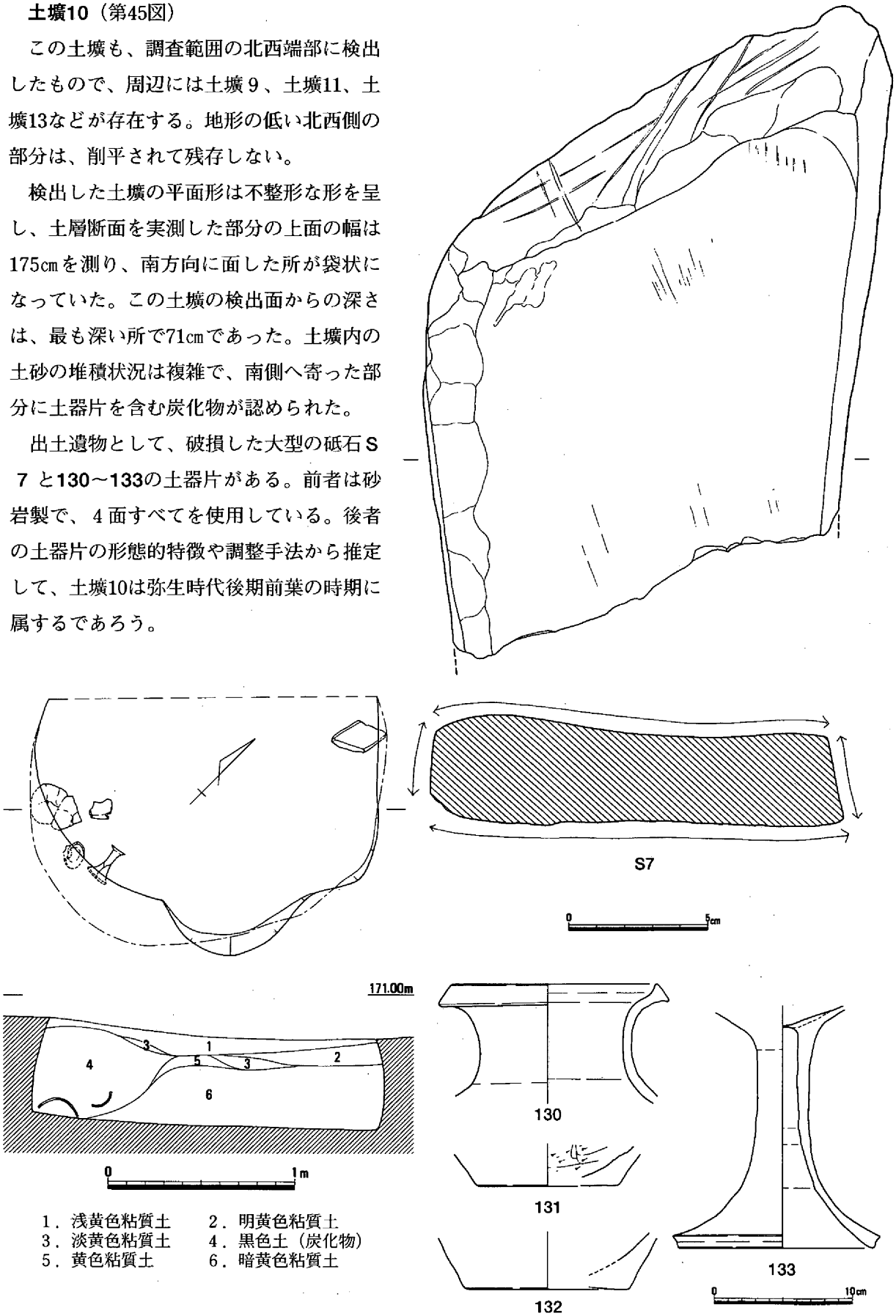
第44図　土壙９（1／30）・出土遺物（1／4）

土壙10（第45図）

この土壙も、調査範囲の北西端部に検出したもので、周辺には土壙９、土壙11、土壙13などが存在する。地形の低い北西側の部分は、削平されて残存しない。

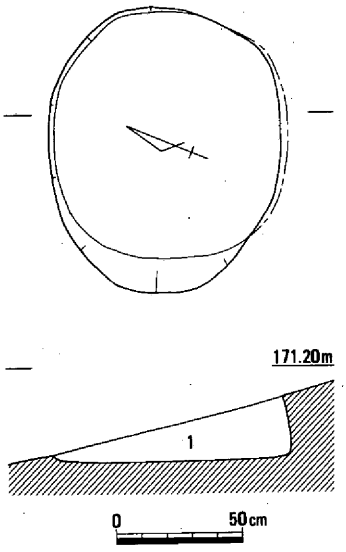
検出した土壙の平面形は不整形な形を呈し、土層断面を実測した部分の上面の幅は175cmを測り、南方向に面した所が袋状になっていた。この土壙の検出面からの深さは、最も深い所で71cmであった。土壙内の土砂の堆積状況は複雑で、南側へ寄った部分に土器片を含む炭化物が認められた。

出土遺物として、破損した大型の砥石Ｓ７と130～133の土器片がある。前者は砂岩製で、４面すべてを使用している。後者の土器片の形態的特徴や調整手法から推定して、土壙10は弥生時代後期前葉の時期に属するであろう。



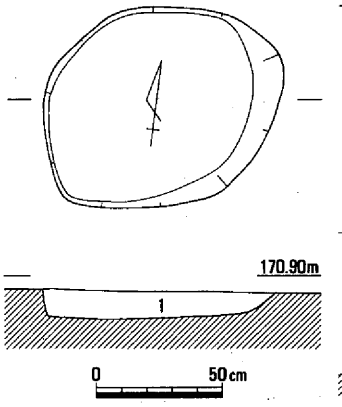
1．浅黄色粘質土　　2．明黄色粘質土
3．淡黄色粘質土　　4．黒色土（炭化物）
5．黄色粘質土　　6．暗黄色粘質土

第45図　土壙10（1／30）・出土遺物（1／4、1／2）



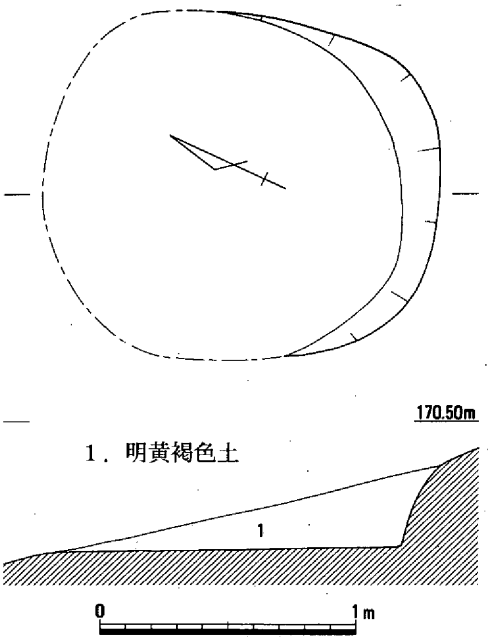
1．褐色土

第46図　土壙11（1／30）



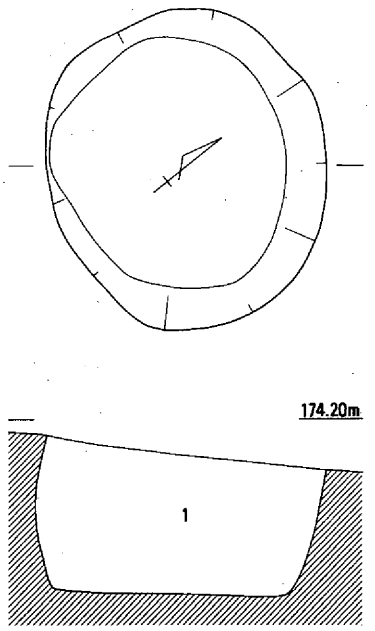
1．褐色土

第47図　土壙12（1／30）

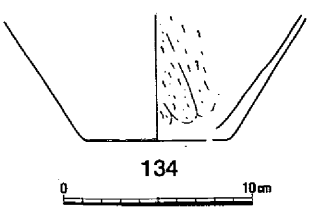


1．明黄褐色土

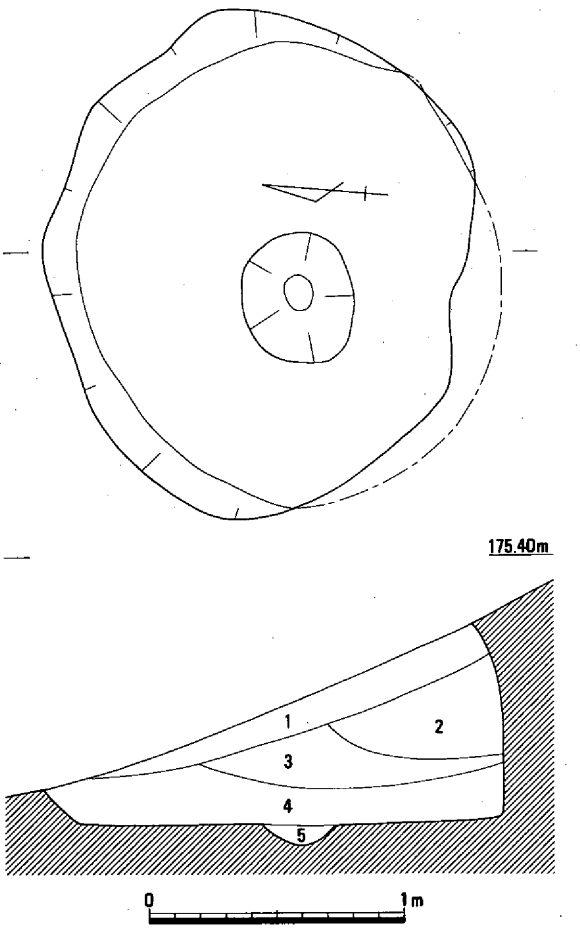
第48図　土壙13（1／30）



1．褐色土



第49図　土壙14（1／30）・出土遺物（1／4）



1．淡黄褐色土　　2．黄褐色土
3．暗黄褐色土　　4．淡黄橙色土
5．暗黄橙色土

第50図　土壙15（1／30）

土壙11（第46図）

調査範囲の北西端部に検出した土壙で、周辺には土壙９、土壙10、土壙12などが存在する。

平面形は短径91㎝、長径112㎝の楕円形に近い形態を呈し、南側に面した壁面の一部が袋状を呈していた。検出面からの深さは２～24㎝と浅く、内部には褐色土が堆積していた。底部はほぼ水平で、弥生時代後期前葉の時期と推定される土器片が出土したが、図化することができなかった。

土壙12（第47図）

この土壙も、調査範囲の北西端部に検出したもので、前述した土壙11の北東方向に位置する。

平面形は短径81㎝、長径112㎝の不整形を呈し、検出面からの深さは２～15㎝と浅くなっていた。この土壙の断面形は「Ｕ」字形に近い形態となり、内部には褐色土が堆積していた。底部の中心部は周辺部よりわずかに窪み、遺物は出土しなかったが、弥生時代後期前葉の時期のものであろう。

土壙13（第48図）

この土壙も、調査範囲の北西端部に検出したもので、南方向約３ｍの地点には土壙10が存在する。地形の低い北側から北西側にかけての部分は、削平されて残存しない。

平面形は三日月状の不整形な形を呈し、検出面からの深さは、最も残存状態が良好な部分で32㎝であった。土壙内には明黄褐色土が堆積し、底部はほぼ水平になっていた。出土遺物として土器の小破片があるが、おそらく弥生時代後期前葉の時期と推定されるものの、図化することができなかった。

土壙14（第49図）

調査範囲の北西方向へ寄った地点に検出した土壙で、南東方向約４ｍの所には後述する土壙15が存在し、西方向約７ｍの位置には土壙６が確認されている。

平面形は短径112㎝、長径126㎝の楕円形に近い形態を呈し、周囲の壁面は底部から内湾して立ち上がっている。検出面からの深さは50～64㎝を測り、内部には褐色土が堆積していた。底部はほぼ水平であるが、南から北方向に向かってわずかに傾斜していた。

出土遺物として**134**の甕形土器の底部がある。内面はヘラケズリを施し、外面は縦方向のナデまたはヘラミガキを行っている。この土器片の形態的特徴や調整手法と、図化できなかった小破片の土器片の観察結果から、土壙14は弥生時代後期前葉の時期になるであろう。

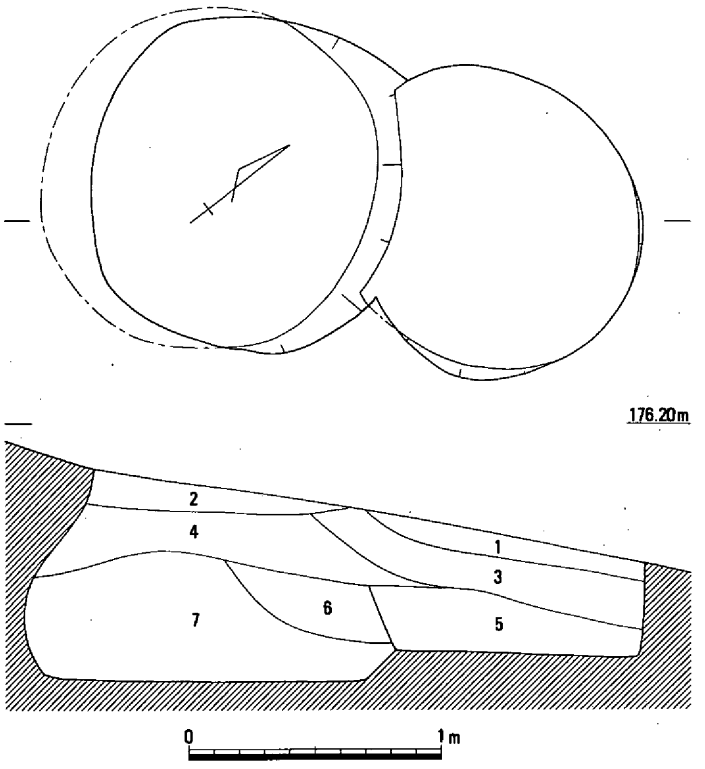
土壙15（第50図）

この土壙も、調査範囲の北西方向へ寄った地点に検出したもので、北西方向約４ｍの所には前述した土壙14が存在し、南東方向約８ｍの位置には土壙16と土壙17が確認されている。

平面形は短径162㎝、長径200㎝の楕円形に近い不整形な形を呈し、南から南西方向にかけての壁面が、緩やかに内湾しながら袋状になって立ち上がっていた。検出面からの深さは14～78㎝を測り、土壙の内部には暗黄橙色土、淡黄橙色土、暗黄褐色土、黄褐色土が堆積し、さらにその上面には淡黄褐色土が認められた。この土壙の底部はほぼ水平であるが、中心部が周辺部よりやや窪み、短径44㎝、長径52㎝を測る楕円形に近い柱穴状の穴を、12㎝の深さまで掘り窪めていた。出土遺物として弥生時代後期前葉と推定される土器片があるが、小破片のために図化することができなかった。

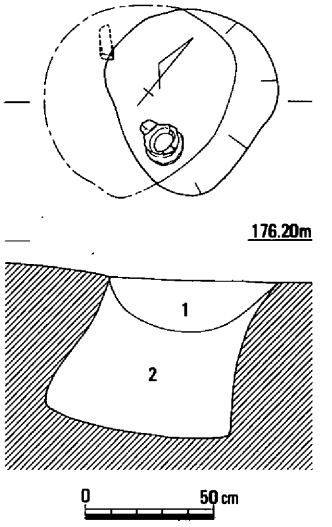
土壙16（第51図）

調査範囲の中央部より西方向に寄った地点に検出した土壙で、北西方向約８ｍの所には前述した土壙15が存在し、南東方向約13ｍの位置には竪穴住居４が確認されている。この土壙は土壙17と切り合っているが、２基の土壙内の土砂堆積状況を検討した結果、この土壙16が古く、土壙17が新しいこと

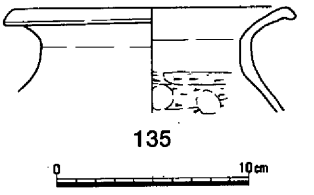


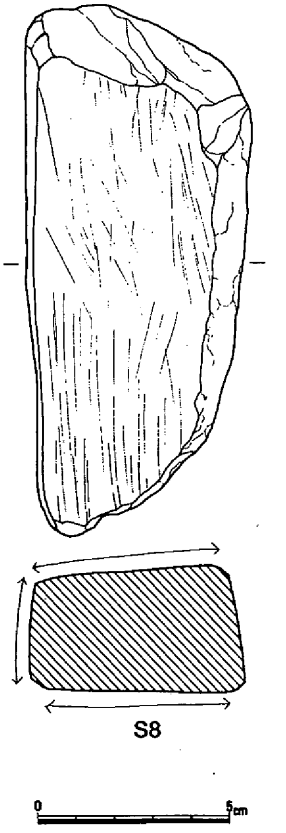
1．淡褐色土　　2．淡黄褐色土
3．暗褐色土　　4．黄褐色土
5．灰黄褐色土　6．褐色土
7．暗黄褐色土

第51図　土壙16・17（1／30）



1．灰黄褐色粘質土
2．黄褐色粘質土

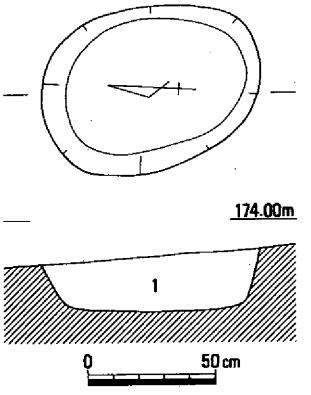




第52図　土壙18（1／30）・出土遺物（1／4、1／2）

が判明した。

平面形は円形に近い不整形な形を呈し、土層断面を実測した方向に直交する北西から南東に向けての径は、128cmになっていた。この土壙の南から西にかけての約半分の壁面は、外側へ緩やかに湾曲して大きく張り出し、断面形が袋状を呈していた。検出面からの深さは62～84cmを測り、底部はほぼ水平であるが、わずかに南西方向から北東方向に向けて傾斜していた。土壙の内部には下位から上位にかけて暗黄褐色土、褐色土、灰黄褐色土、黄褐色土、暗褐色土、



1．黒褐色土
（炭化物含む）

第53図　土壙19（1／30）

淡黄褐色土、淡褐色土が堆積していたが、第51図の第７層である暗黄褐色土と第６層である褐色土が堆積していた段階に、新しく土壙17が土壙16の北東側の一部分を削平して造られていた。その後は土壙16と土壙17が同時に埋没することとなり、２基の土壙の上位に黄褐色土、暗褐色土、淡黄褐色土、淡褐色土が存在した。出土遺物として、弥生時代後期前葉の時期と思われる土器片があるが、図化することができなかった。

土壙17（第51図）

調査範囲の中央部より西方向へ寄った地点に検出した土壙で、前述の土壙16の北東側に位置する部分を削平して造られていた。

平面形は楕円形に近い形態を呈し、長径は不明であるが、短径は112㎝になるであろう。この土壙の壁面はほぼ垂直に立ち上がっており、袋状になっていたのは土壙16に近い南側に面した部分だけであった。検出面からの深さは34～54㎝を測り、断面形は「U」字形になっていた。底部はほぼ水平であるが、わずかに南西方向から北東方向に向かって傾斜していた。この土壙17の底部は、土壙16の底部より12㎝も高い位置に存在した。内部の最下位には灰黄褐色土が認められ、その上面に黄褐色土、暗褐色土、淡褐色土が堆積していた。底部に近い所から弥生土器の小破片が出土したが、おそらく弥生時代後期前葉のものであろう。

土壙18（第52図）

調査範囲の南西方向へ寄った地点に検出したもので、近接して竪穴住居４が存在する。周辺には弥生時代の土壙はなく、最も近い位置にあるのは、北西方向約13ｍに確認した土壙16と土壙17である。

平面形は短径63㎝、長径73㎝の不整形な形を呈し、南方向から南西方向にかけての壁面が袋状になり、北東方向の壁面は外湾して立ち上がっていた。検出面からの深さは58～62㎝を測り、内部に灰黄褐色粘質土と黄褐色粘質土が堆積していた。この土壙の底部は、南西方向から北東方向へ向かって著しく傾斜していた。土壙内からは、底部から浮いた状態で、壺形土器の破片と砥石が出土した。

口縁部が下になった状態で出土した**135**の壺形土器は，口径14.2㎝を測る器壁の薄い土器である。胴部は内湾して立ち上がり、頸部で器壁が肥厚すると上方へ直立し、口縁部は斜め上方へ外湾している。口縁端部は斜め下方に肥厚し、外側に面が認められる。胴部の内面はユビオサエの上面にヘラケズリを施し、外面は全体にヨコナデを行っている。頸部から口縁部にかけては、内外面ともヨコナデを施している。この壺形土器の形態的特徴や調整手法から、土壙18は弥生時代後期前葉の時期に属するであろう。

Ｓ８の砥石は流紋岩製で、３面を使用している。使用痕跡を観察すると、金属器に使用したのではないかと推定されるものもある。

なおこの土壙18は竪穴住居４に近接して検出されたが、両遺構から出土した弥生土器の時期が、前者は弥生時代後期前葉、後者は弥生時代中期末葉と推定され、造られた時期が相違していた。

土壙19（第53図）

調査範囲の南東方向へ寄った地点に検出した小規模な土壙で、竪穴住居11から竪穴住居15までの５軒の竪穴住居が重なり合った床面の東端部に存在する。

平面形は短径65㎝、長径88㎝の楕円形に近い形態を呈し、検出面からの深さは18～26㎝で、断面形は「U」字形になっていた。土壙の底部はほぼ水平で、炭化物を含む黒褐色土が堆積していた。

出土遺物として、数点の弥生時代後期前葉の時期と思われる土器片があるが、図化できなかった。

第５節　古墳時代の遺構と遺物

惣台遺跡で検出した古墳時代の遺構は、竪穴住居９軒、段状遺構26基、掘立柱建物４棟、土壙６基、溝３条である。

竪穴住居には造り付けのカマドを有するものが存在し、段状遺構には大量の土師器が出土したものも認められた。掘立柱建物には総柱のものがあり、土壙には熱で壁面が変色して底部に炭化物が認められたものもある。

(1) 竪穴住居

竪穴住居17（第55図）

調査範囲の中央部よりやや西方向へ寄った地点に検出した竪穴住居で、北西側の近接した部分には建物１、建物２、土壙25、溝１などが存在する。

平面形は１辺505cmの方形または長方形を呈するが、地形の低い北東側の部分は、削平されて壁体や壁体溝が存在しなかった。この竪穴住居の柱構造は４本柱で、柱穴間の距離が242～280cmになっていた。床面の中央部には焼土や炭化物が認められ、南西方向から北東方向に向かって床面がわずかに傾斜していた。東側の部分には段状遺構５が存在するが、段状遺構５がこの竪穴住居16の床面の一部を切って造られていることが判明した。

出土遺物として、須恵器の杯身（**136・137**）と土師器の甕形土器（**138～143**）がある。**136**の杯身は、口径10.4cm、器高3.7cmを測り、口縁端部の立ち上がりは低い。外面の底部はヘラ切り未調整で、それ以外の部分は内外面とも全体にヨコナデを施している。胎土中には大きな砂粒を多量に含んでおり、内面の器表面には有機物が付着している。**138～143**の甕形土器には、口縁端部の外側に面を有するもの（**138・139**）と器壁が薄くなって丸く仕上げているもの（**140～143**）がある。前者の胴部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部内面には横方向のハケメが認められ、胴部内面はヘラケズリを行っている。頸部から口縁端部にかけての外面はヨコナデを施し、胴部の外面には縦方向のハケメが存在する。後者の胴部は内湾して立ち上がり、頸部で屈曲して口縁端部へ移行する。胴部の内面はヘラケズリを行っているが、**142**は表面が磨滅して調整が不明である。口縁部の内面はいずれもヨコナデを施しているが、口縁部の外面はヨコナデを施すものだけでなく、縦方向のハケメが認められるもの（**143**）もある。これらの須恵器や土師器の形態的特徴や調整手法から、竪穴住居17は７世紀前葉の時期に属すると考える。

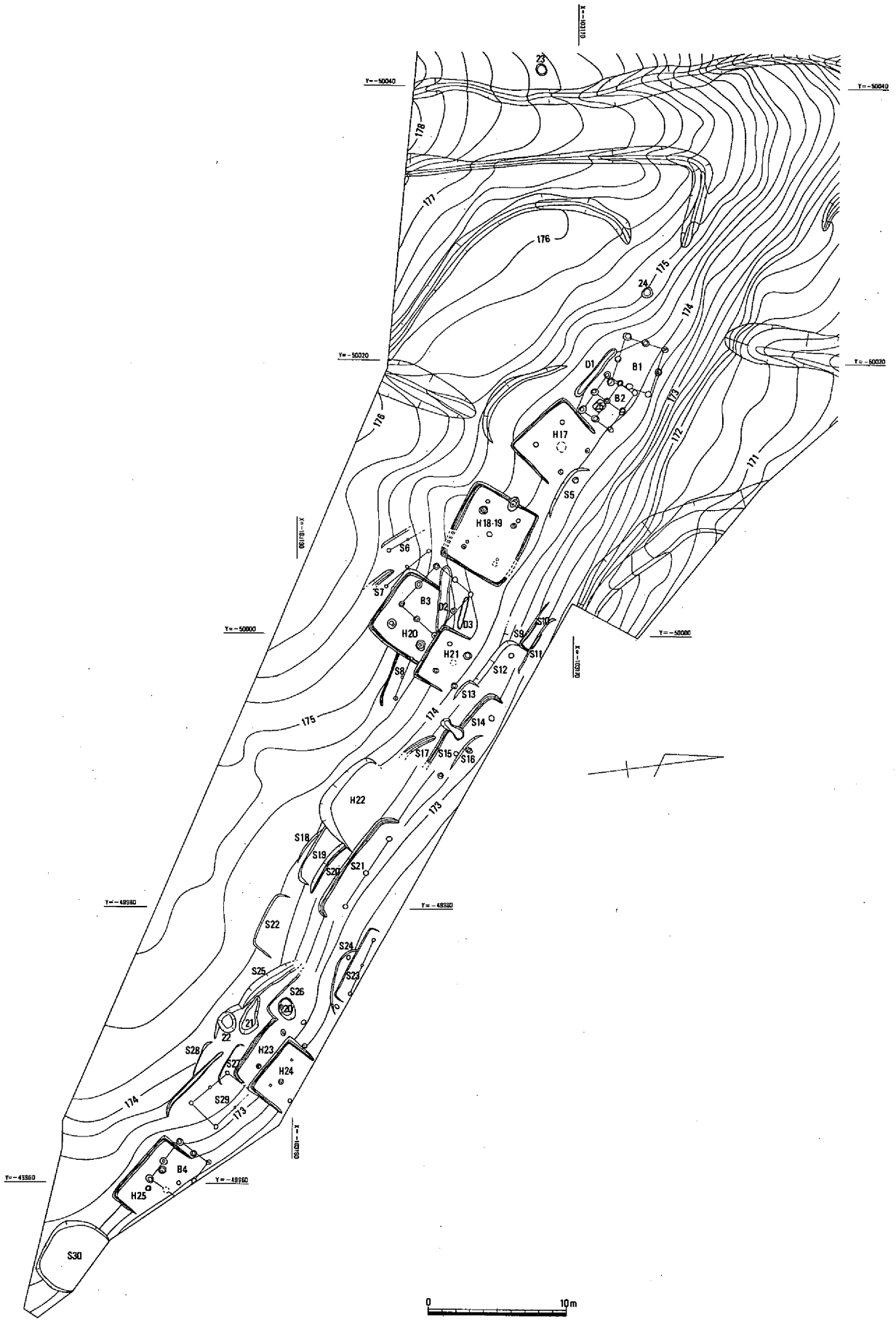
竪穴住居18（第56・57・59図、図版44－４・５）

調査範囲の中央部に存在した竪穴住居で、北東側の一部分が竪穴住居６と重複していた。この竪穴住居は確認調査の時に設定したＴ４のトレンチ（第２図）で検出したもので、竪穴住居６が古くてこの竪穴住居18が新しいことが判明していた（第３図）。

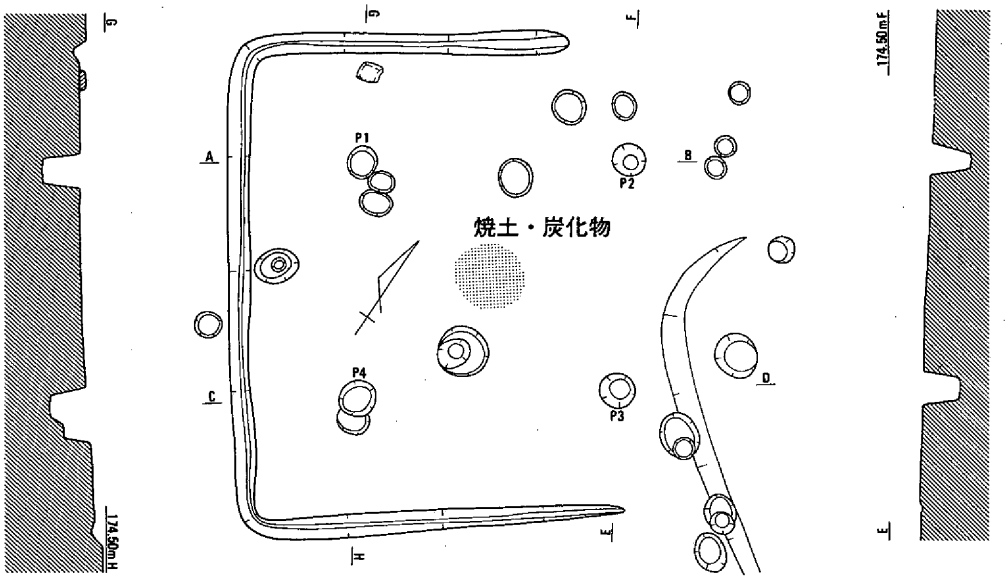
平面形は短辺470～490cm、長辺590cmの長方形を呈し、柱構造は４本柱である。西方向に位置する柱穴は検出できなかったが、残存する柱穴間の距離は260cmと324cmであった。

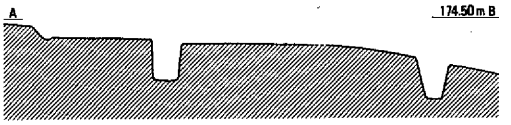
竪穴住居19（第56～59図、図版44）

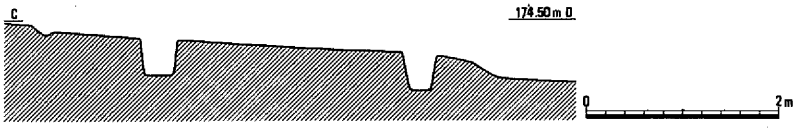
前述した竪穴住居18と重なり合って検出した竪穴住居で、この竪穴住居19が新しく造られていた。

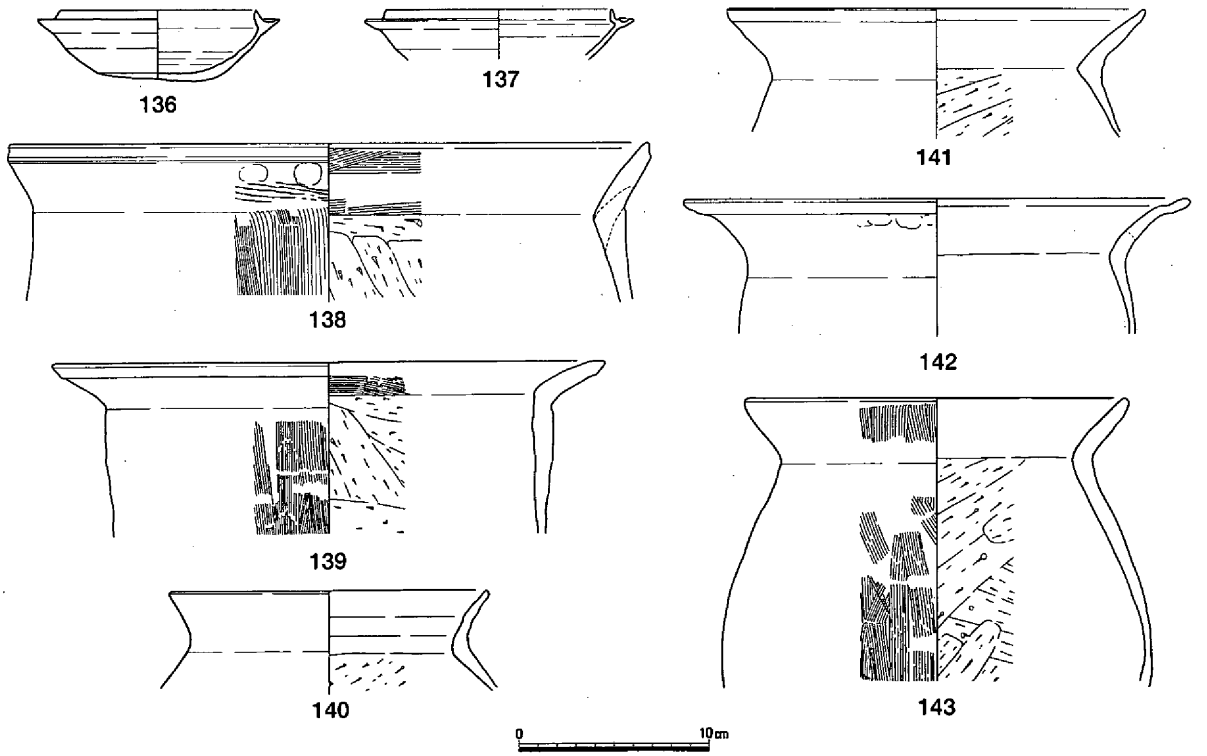


第54図　古墳時代遺構配置図（1／400）

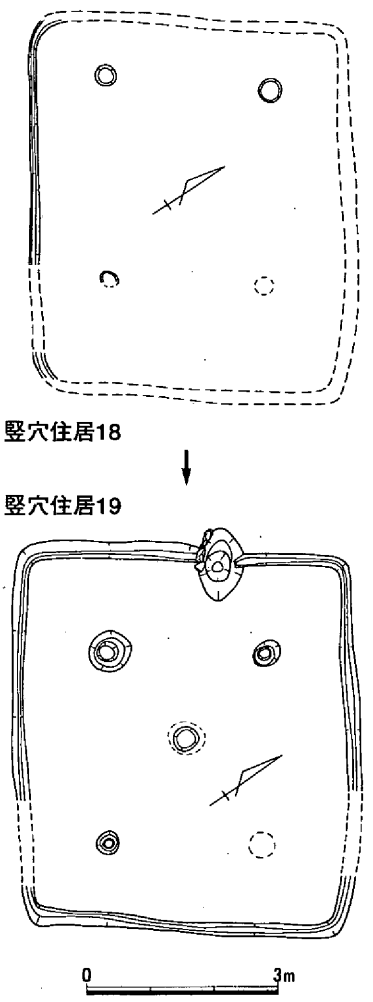




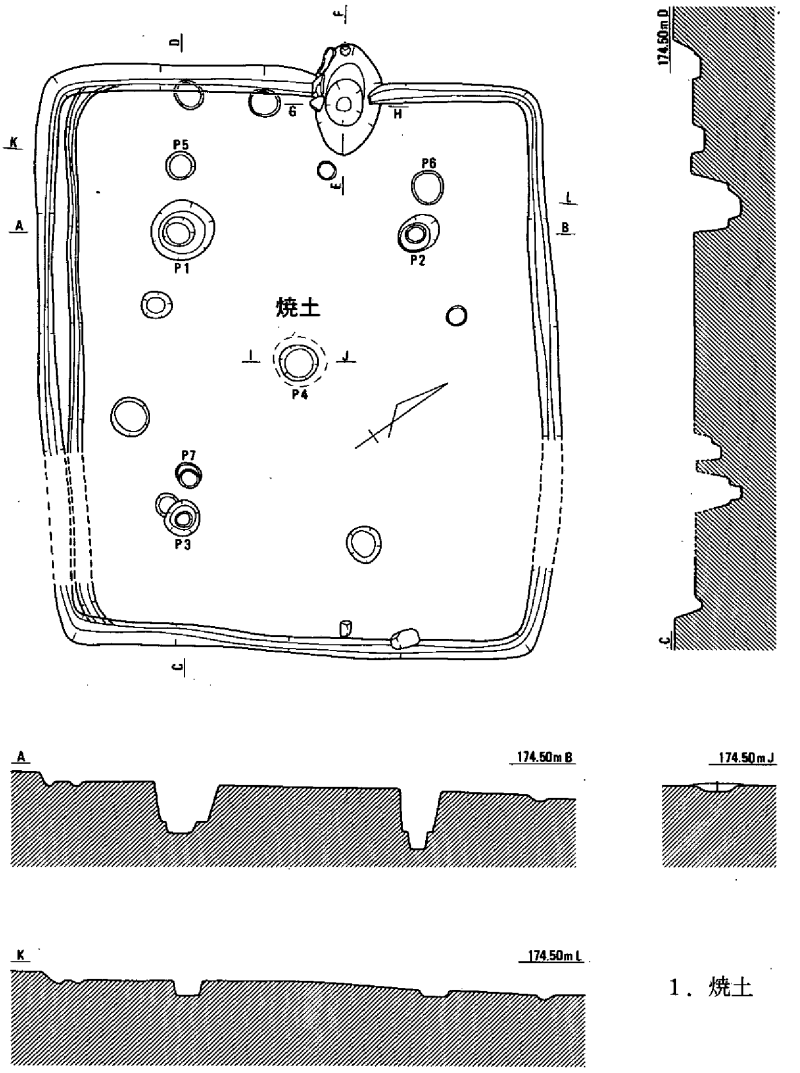




第55図　竪穴住居17（1／80）・出土遺物（1／4）

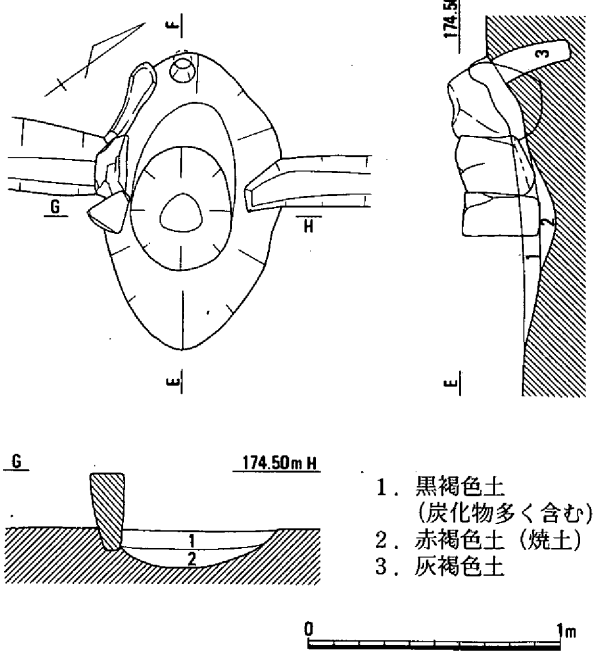


第56図　竪穴住居18・19
変遷図（1／120）

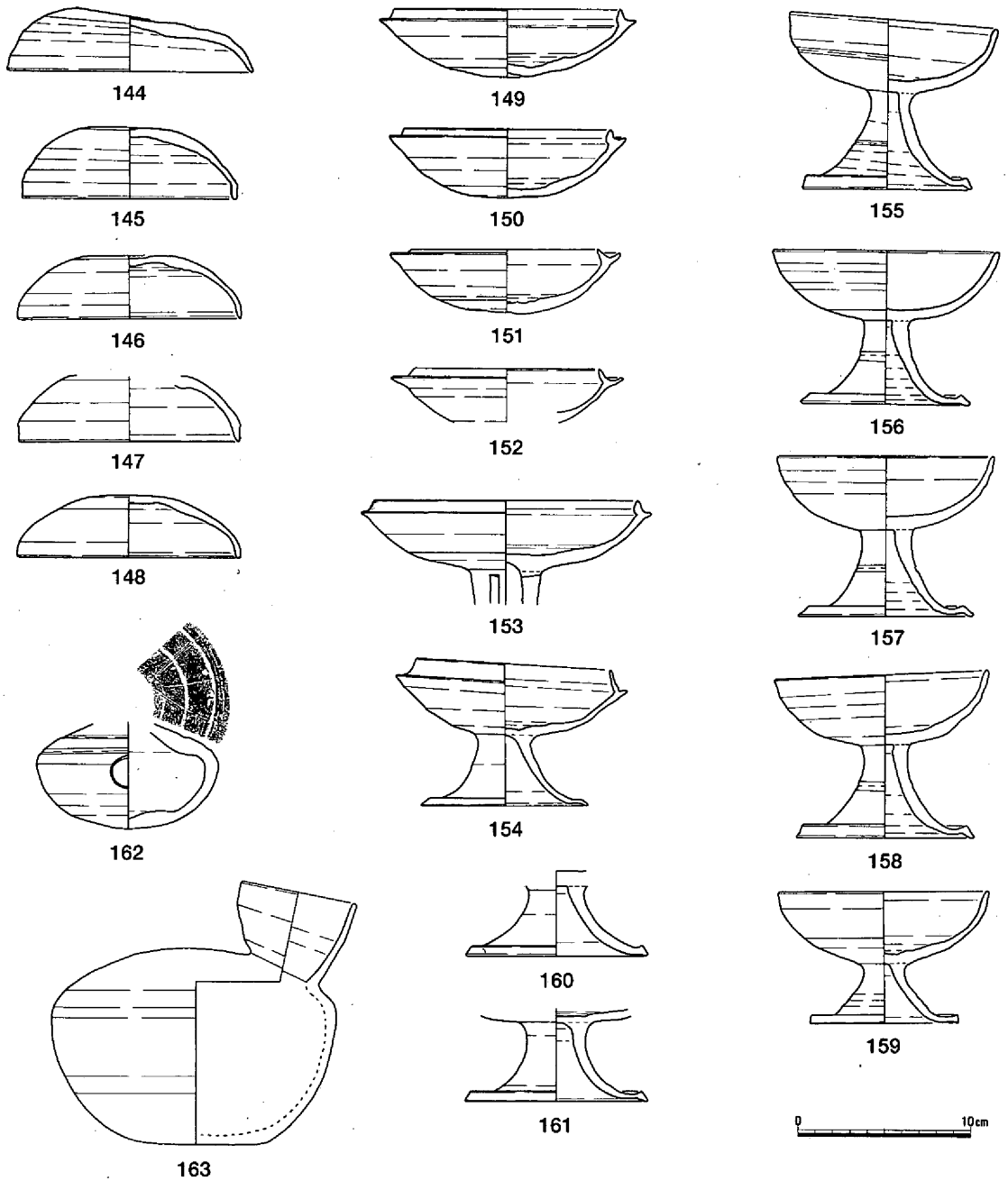


第57図　竪穴住居18・19（1／80）

平面形は短辺490～530㎝、長辺590㎝の長方形を呈し、北西方向に面した壁面に造り付けのカマドが存在した。この竪穴住居の壁面は、南西方向に面した部分だけを拡張したもので、残る３方向の壁面は、竪穴住居18の壁面をそのまま踏襲していた。検出したカマドの平面形は短径68㎝、長径116㎝の楕円形を呈し、西側端部には人頭大の石が並べられ、カマドの中央部は「U」字形に浅く窪んで、赤褐色の焼土の上面に炭化物を多く含んだ黒褐色土が堆積していた。この竪穴住居の柱構造は４本柱で、検出した柱穴間の距離は250～300㎝を測り、床面の中央部に焼土で覆われた浅い柱穴状の窪みが存在するのを確認した。



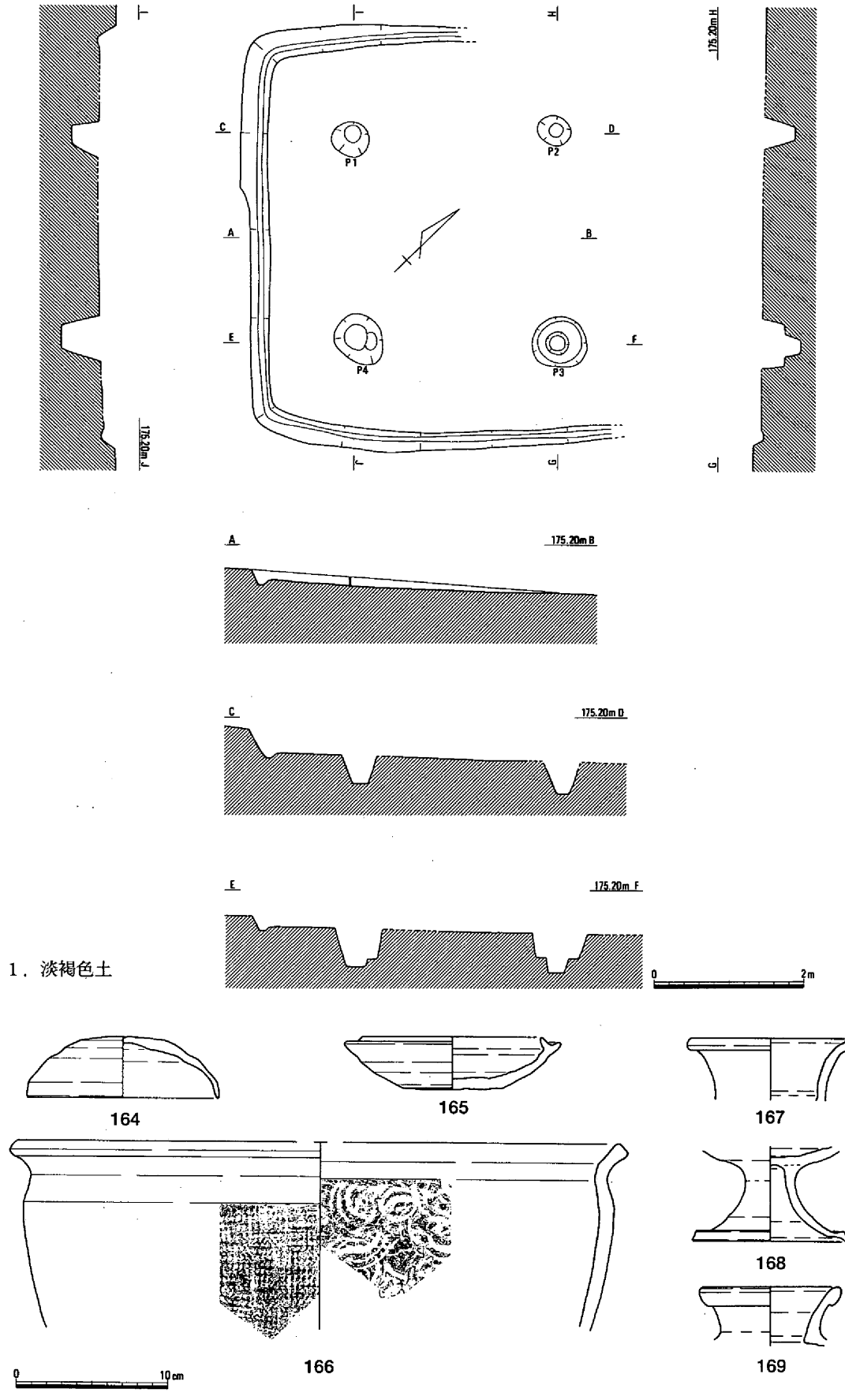
第58図　竪穴住居19カマド（1／30）



第59図　竪穴住居18・19出土遺物（1／4）

竪穴住居18と竪穴住居19から出土した遺物は、すべて須恵器である。このうち古い時期に造られた竪穴住居18に伴うものは、**144**の杯蓋、**149**の杯身、**153**の長脚有蓋高杯、**154**の短脚有蓋高杯の４点で、６世紀末葉の時期と考える。残る竪穴住居19に伴う各器種の須恵器は、おそらく７世紀前葉の時期に属するであろう。

144の杯蓋は、口径14.2cm、器高3.7cmを測り、外面天井部はヘラケズリを行っている。**145**の杯蓋は、口径11.6～12.5cm、器高4.3cmを測り、外面天井部はヘラ切り未調整である。ほぼ完形品である**163**の平瓶は、口径6.7cm、器高11.5cm、胴部径16.7cm、頸部径4.7cmを測り、外面底部はヘラ切り未調整である。**155**～**158**の完形品またはほぼ完形品の短脚無蓋高杯は、口径12.1～13.4cm、器高9.0～10.3cmを測り、内外面とも全体にヨコナデを施している。



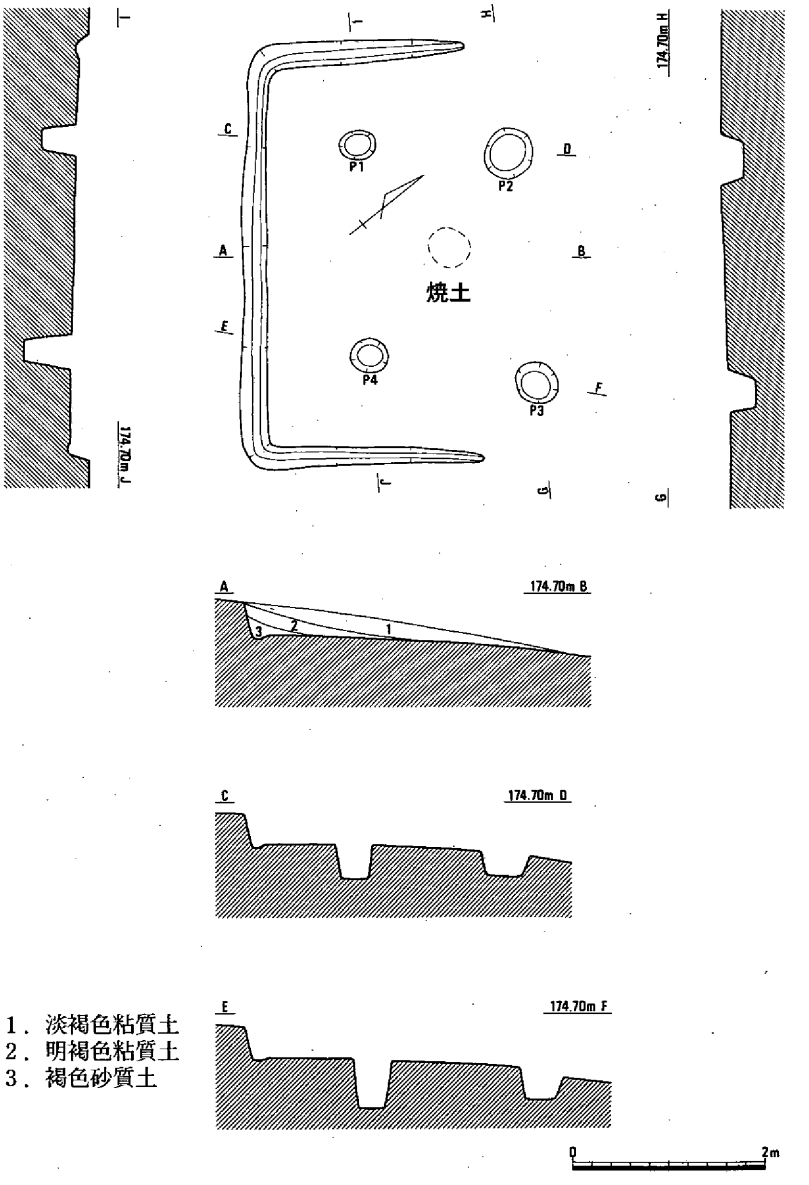
第60図　竪穴住居20（1／80）・出土遺物（1／4）

竪穴住居20（第60図）

調査範囲の中央部よりやや南東方向へ寄った地点に検出した竪穴住居で、弥生時代後期の竪穴住居７から竪穴住居10の北東部分に位置する床面を削平して造られていた。近接した所には竪穴住居21、建物３、溝２、溝３などが存在し、重複する竪穴住居21と溝２との新旧関係は、ともにこの竪穴住居20が古くて竪穴住居21や溝２が新しいことが判明した。

平面形は１辺が480～530cmの方形または長方形を呈し、地形の低い北東方向から北方向にかけての部分は、竪穴住居21や溝２によって削平されていた。この竪穴住居の柱構造は４本柱で、柱穴間の距離は264～280cmを測り、地形の等高線に平行する方向が直交する方向よりも長くなっていた。検出した柱穴の規模は、北方向に位置するＰ２が小さく、東方向に位置するＰ３が大きくて２段掘りになっていた。竪穴住居全体の残存状態は悪く、最も残りのよい壁体の高さは32cmであった。床面には淡褐色土が堆積し、須恵器が出土した。

164の杯蓋は、口径12.5cm、器高4.1cmを測り、外面天井部はヘラ切り未調整である。**165**の杯身は、口径11.8cm、器高3.5cmを測り、外面底部はヘラ切り未調整である。全体の焼成は極めて良好で、受部に杯蓋の口縁端部破片が付着している。推定口径29.6cmの小破片の鉢は、内湾して立ち上がった胴部が頸部で屈曲して口縁部へ移行する。頸部から口縁部にかけては内外面ともヨコナデを施し、胴部内面には青海波のタタキ痕跡、胴部外面には格子目のタタキ痕跡がそれぞれ存在する。**167**の壺の口縁部は、緩やかに外湾して端部を丸く仕上げている。**168**の高杯の脚部は、脚上部径3.7cm、脚端部径10.5cmを測り、内外面とも全体にヨコナデを施している。口縁端部が玉縁状を呈する**169**の提瓶の破片は、口径9.0cm、頸部径7.7cmを測り、内外面ともヨコナデを施し、器表面全体に自然釉が付着している。これらの須恵器の形態的特徴や調整手法から、竪穴住居20は７世紀前葉の時期と思われる。



第61図　竪穴住居21（1／80）

竪穴住居21（第61図）

調査範囲の中央部よりやや南東方向へ寄った地点に検出した竪穴住居で、近接した部分には竪穴住居20、段状遺構３、段状遺構８、建物３、溝２などが存在する。これらの遺構との切り合い関係を精査した結果、この竪穴住居21は段状遺構３が埋没した後に、その空間を利用して竪穴住居20と段状遺構８の一部を削平する状態で造られ、後世になってこの竪穴住居21の西側隅に溝２が占拠していた。

平面形は１辺430cmの方形または長方形を呈し、地形の低い北東側の部分は、削平されて壁体や壁体溝が存在しなかった。この竪穴住居の柱構造は４本柱で、柱穴間の距離は160～245cmを測り、床面のほぼ中央部に焼土が認められた。竪穴住居の内部には、上層から下層にかけて淡褐色粘質土、明褐色粘質土、褐色砂質土が堆積していたが、遺物は出土しなかった。

この竪穴住居21は、遺物が出土しなかったので造られた時期を断定するのは困難であるが、近接して存在した遺構との切り合い関係や、竪穴住居21の平面形や柱構造などから、周辺に検出された古墳時代後期の竪穴住居と同じ時期の７世紀前葉に属するであろう。

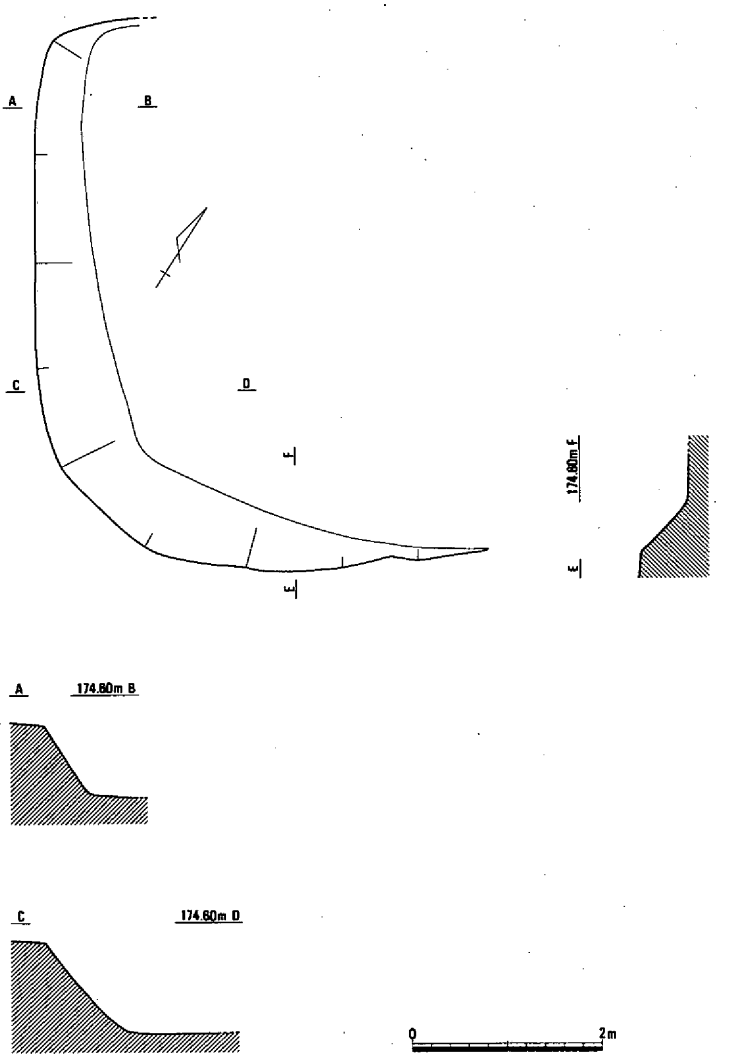
竪穴住居22（第25・26・62・63図、図版43－２）

調査範囲の南東部に検出した竪穴住居で、近接した地点には竪穴住居や段状遺構が重なり合って存在している。この竪穴住居は、何度も建て替えが行われていた竪穴住居11から竪穴住居15の上面に造られており、南東側に位置する段状遺構19や段状遺構20の一部を削平していたが、後世になると長大な段状遺構21によって占拠されていた（第26図）。

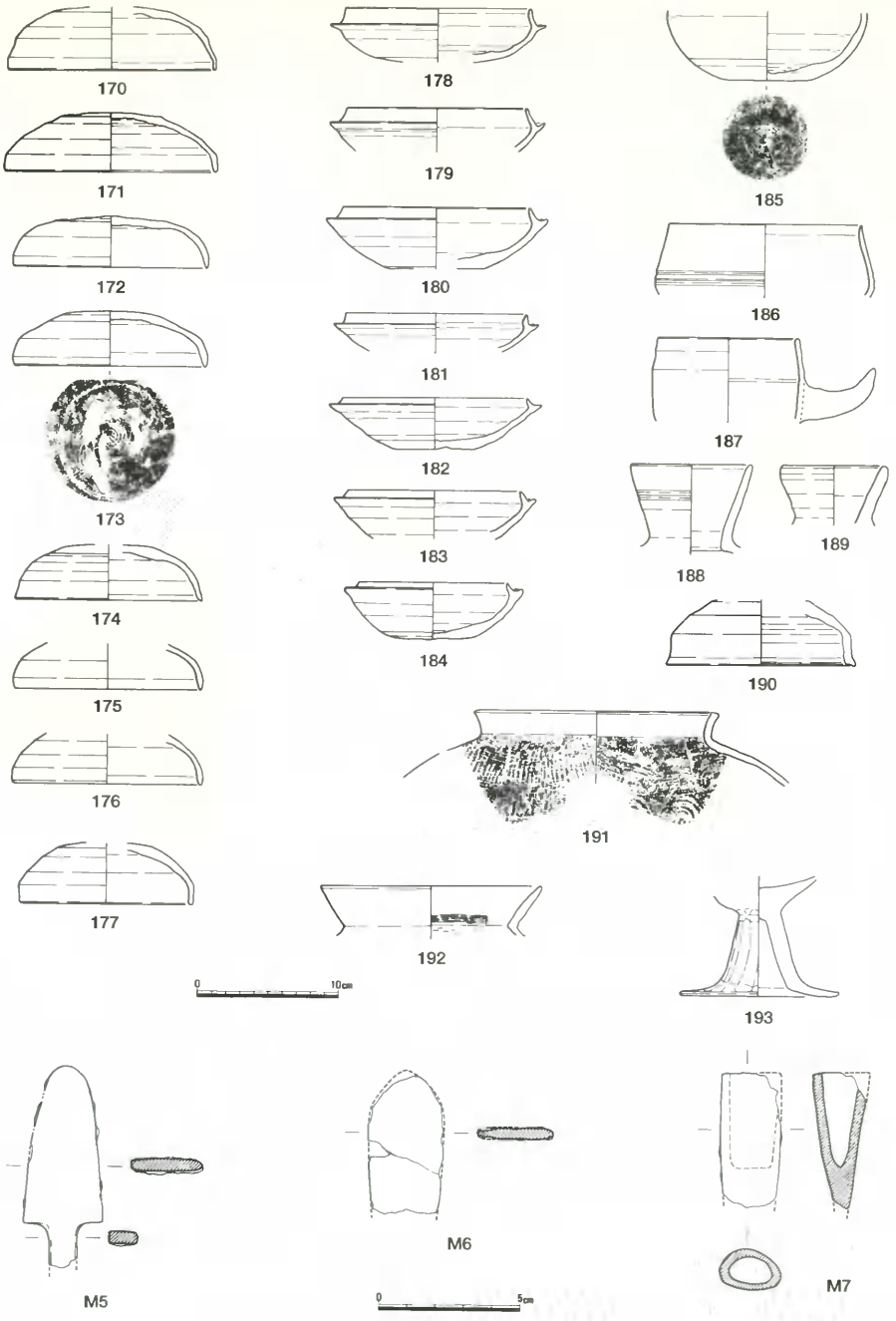
確認できたのは、地形の高い西方向から南東方向にかけての壁体の一部分だけで、柱穴や壁体溝は検出できなかった。この竪穴住居の平面形は、方形または長方形を呈すると考えられる。

出土した須恵器の杯蓋や杯身は、外面の天井部や底部がヘラ切り未調整のものがあり、内面の天井部と底部にタタキ痕跡が残存するものや仕上げナデを施すものなどが認められる。土師器は、甕形土器と高杯形土器の破片である。これらの土器の形態的特徴や調整手法から、竪穴住居22は６世紀末葉から７世紀前葉の時期になるであろう。

なおＭ５とＭ６の鉄器は、平根の長三角形式鉄鏃である。Ｍ７の鉄器は、有袋の小型鉄斧で全体が細身である。



第62図　竪穴住居22（1／80）



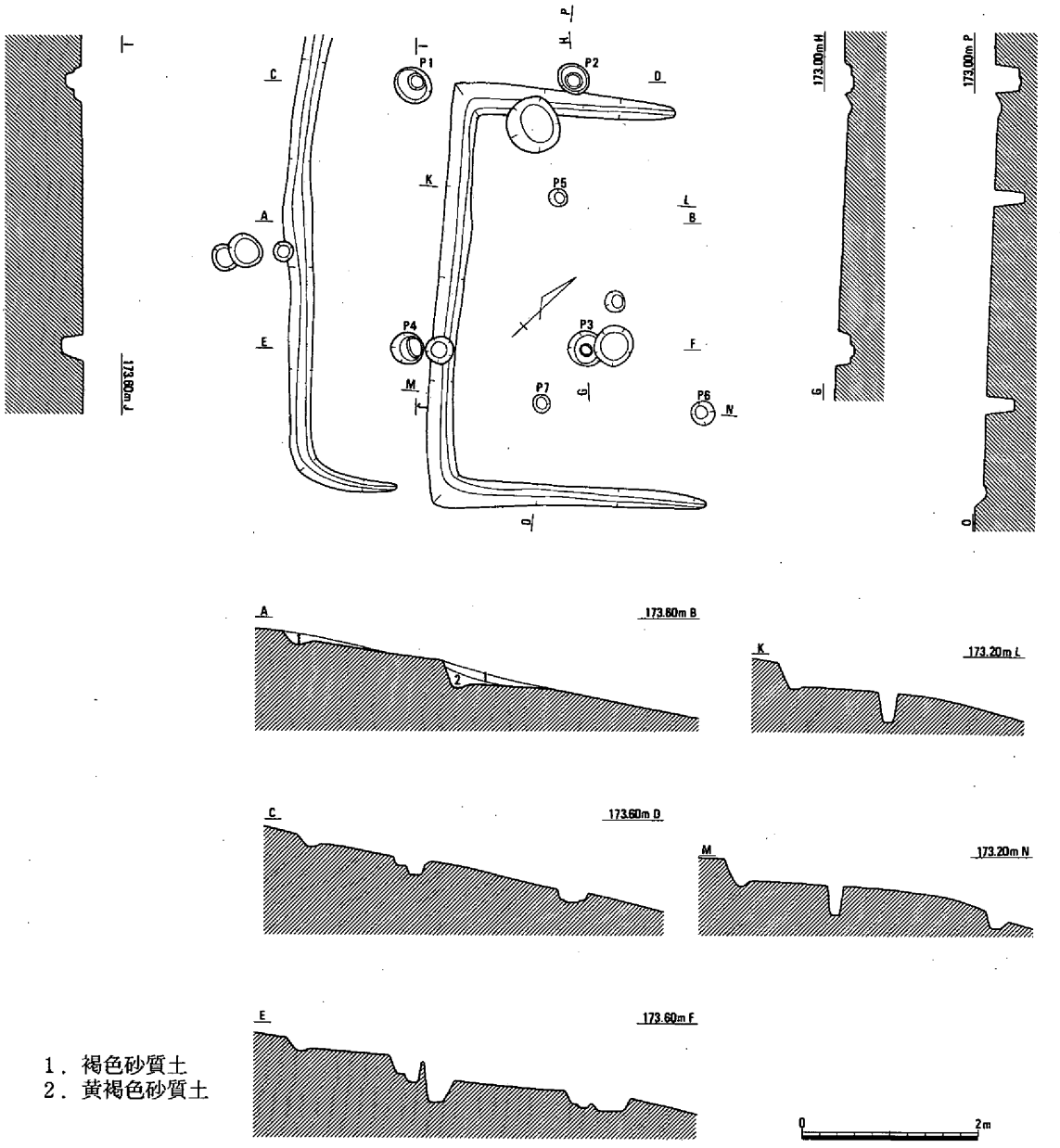
第63図　竪穴住居22出土遺物（1／4、1／2）

竪穴住居23（第64図）

調査範囲の南東端部に検出した竪穴住居で、近接した地点には後述する竪穴住居24、段状遺構26、段状遺構27、段状遺構29などが存在する。これらの遺構との切り合い関係を精査したところ、この竪穴住居は竪穴住居24の上面に新しく造られていたが、後になって南西部分が段状遺構26によって削平され、壁体や壁体溝が残存しなかった。

平面形は方形または長方形を呈するが、地形の低い北東方向の部分は竪穴住居24と重複していたこともあって、この竪穴住居の床面そのものを把握することができなかった。地形の高い南西方向の部分には、「Ｌ」字形を描いた壁体溝の一部が認められ、柱構造は４本柱である。柱穴間の距離は175～306cmを測り、地形の等高線に平行する方向が直交する方向よりも長くなっていた。個々の柱穴はいずれも２段掘りを呈し、床面には褐色砂質土が堆積していた。

小破片で図化できない須恵器片が出土したが、おそらく７世紀中葉の時期になるであろう。



第64図　竪穴住居23・24（1／80）

竪穴住居24（第64図）

前述した竪穴住居23の下位に検出した竪穴住居で、この竪穴住居が竪穴住居23よりも古い遺構である。地形の低い北東方向の部分は、削平されて柱穴や壁体溝が残存しなかった。

平面形は１辺440cmを測る方形または長方形を呈し、柱構造は４本柱である。残存する柱穴間の距離は180cmと235cmで、柱穴そのものの規模は、前述した竪穴住居23のものよりも極めて小さいものであった。

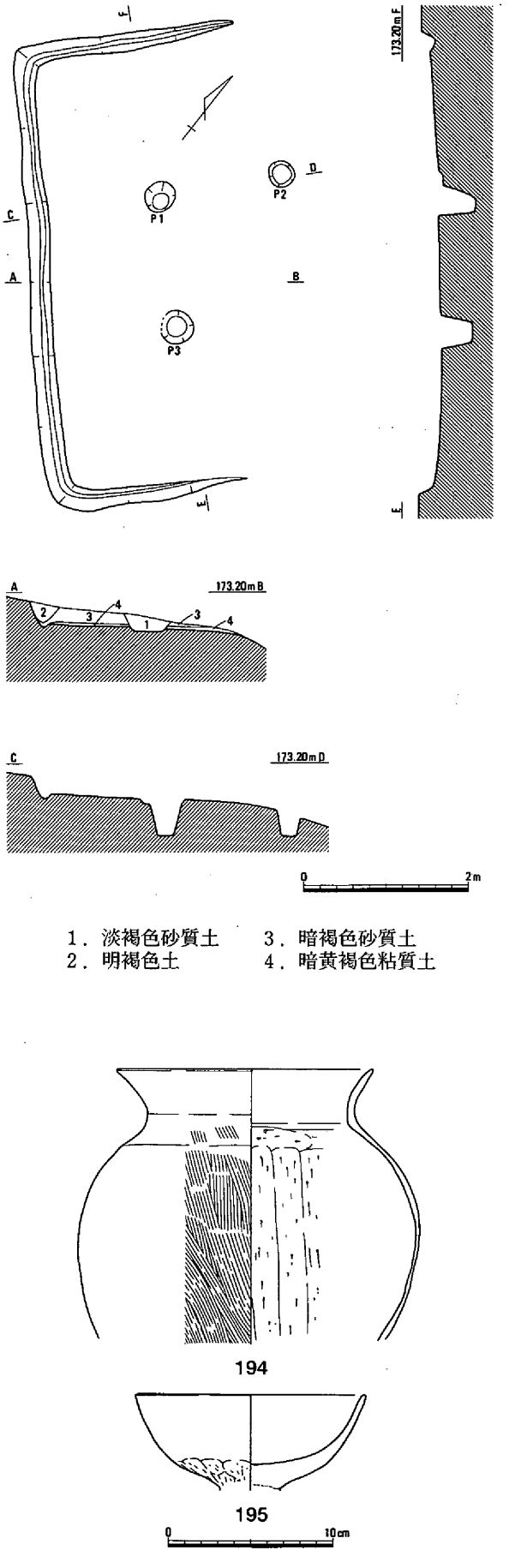
出土遺物は何もないが、遺構の切り合い関係や竪穴住居の平面形態から、この竪穴住居24は７世紀中葉の時期に属するであろう。

竪穴住居25（第65図）

この竪穴住居も調査範囲の南東端部に検出したもので、建物４と重複していたが、新旧関係は確認できなかった。またこの竪穴住居は段状遺構29と段状遺構30の中間に位置したが、地形の低い北東方向の部分は、削平されて柱穴や壁体溝が残存しなかった。

平面形は１辺545cmの方形または長方形に近い形態を呈し、柱構造は４本柱である。検出した柱穴間の距離は150cmと155cmを測り、３か所の柱穴が壁体溝から離れて床面の中央部に位置していた。この竪穴住居の床面には暗黄褐色粘質土の貼床が認められ、その上面に暗褐色砂質土が堆積していた。

出土遺物として、土師器の甕形土器**194**と高杯形土器**195**がある。前者の口縁部は外湾して斜め上方へ立ち上がり、内外面とも全体にヨコナデを施している。胴部の最大径は中位にあり、内面はヘラケズリを施すが外面にはハケメが存在する。後者の外面の杯部下位にはヘラケズリが認められるが、それ以外の部分は全体にヨコナデを行っている。焼成は良好で、外面に煤が付着している。これらの土器の形態的特徴や調整手法から、竪穴住居25は古墳時代後期の６世紀後葉から７世紀前葉の時期になるであろう。



第65図　竪穴住居25（1／80）・出土遺物（1／4）

(2) 段状遺構

段状遺構５（第66図）

調査範囲のほぼ中央部に検出した段状遺構で、西側には竪穴住居17が存在し、南側には重複した竪穴住居18と竪穴住居19が確認されている。

地形の高い南西方向に面した部分に、両端が緩やかに湾曲した壁体を検出したが、壁体溝は存在しなかった。この壁体の直線的な部分は約350cmで、床面からの高さは14cmであった。西側の隅には床面から52cmの深さを測る柱穴を検出したが、南側の隅には柱穴が存在しなかった。

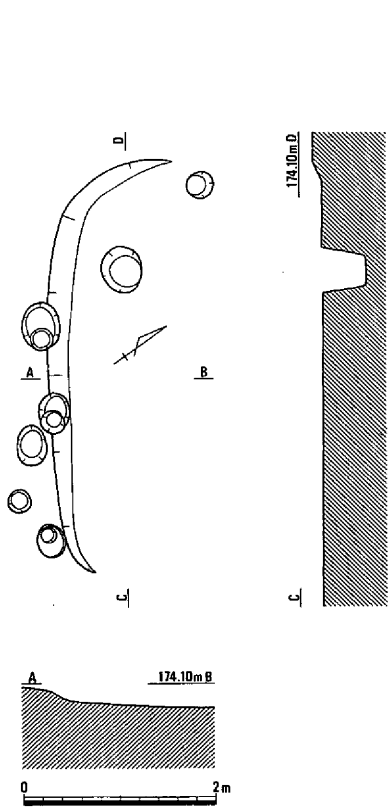
出土遺物は確認できなかったが、遺構内に堆積していた覆土から古墳時代後期に属すると考える。

段状遺構６（第67図）

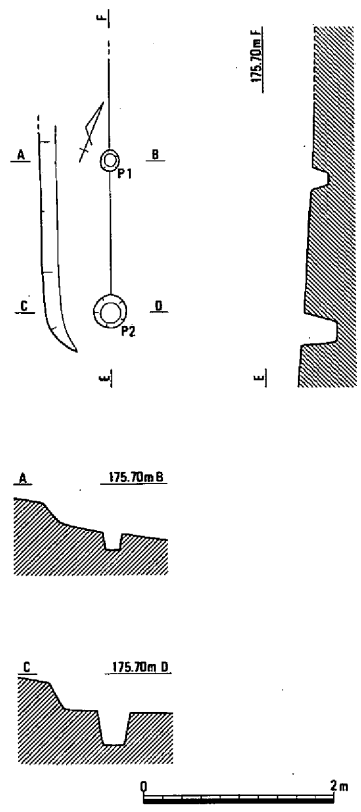
調査範囲の中央部よりやや南側へ寄った地点に検出した段状遺構で、東側には後述する段状遺構７が存在し、北側には重複した竪穴住居18と竪穴住居19が確認されている。

直線的な壁体の一部と２か所の柱穴を検出しただけで、北西方向に面した部分は削平されて不明である。壁体の床面からの高さは29cmを測り、残存する２か所の柱穴間の距離は166cmであった。壁体と柱穴の間は50cmと56cmで、南側の隅に位置する柱穴が西側の柱穴よりも規模が大きくなっていた。柱穴の床面からの深さは、南側の隅に位置するものが37cm、西側に位置するものは10cmで、西側の柱穴が極端に浅くなっていた。

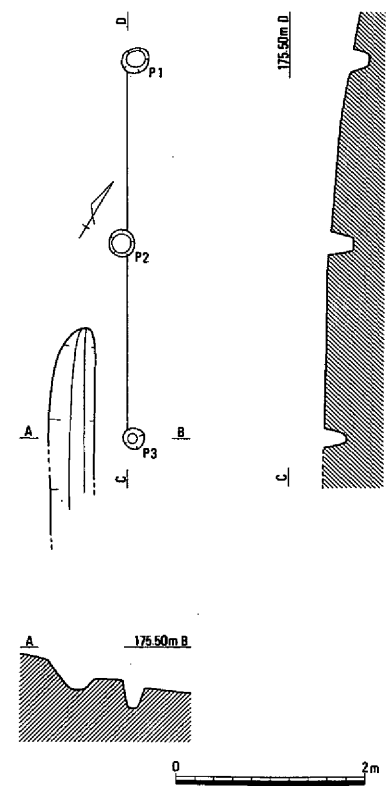
この段状遺構も出土遺物は確認できなかったが、周辺で検出した遺構の時期やこの遺構内に堆積していた覆土から、古墳時代後期に属するであろう。



第66図　段状遺構５（1／80）



第67図　段状遺構６（1／80）



第68図　段状遺構７（1／80）

段状遺構７（第68図）

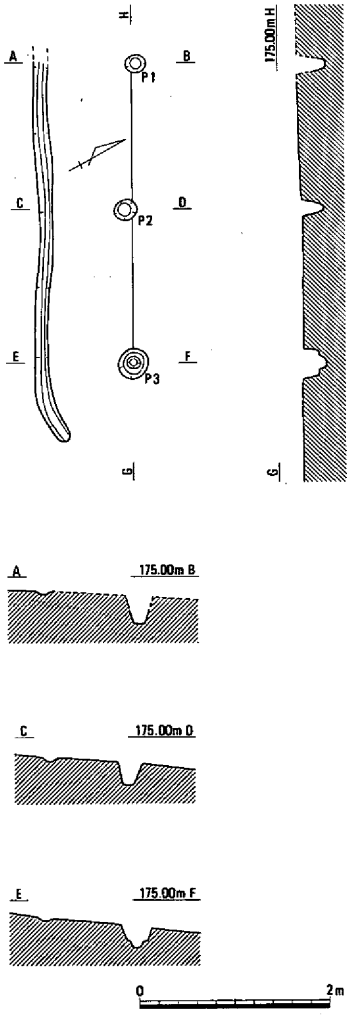
調査範囲の中央部よりやや南側へ寄った地点に検出した段状遺構で、北側には竪穴住居20や建物３が存在する。

この段状遺構は、弥生時代後期に属する竪穴住居10のテラスを削平して造られ、直線的な壁体や壁体溝の一部と３か所の柱穴を検出した。柱穴間の距離は197cmと200cmを測り、南端に位置する柱穴の規模が最も小さかった。南方向に面した壁体や壁体溝は、弥生時代後期の竪穴住居の上面になっていたこともあって、確認することができなかった。

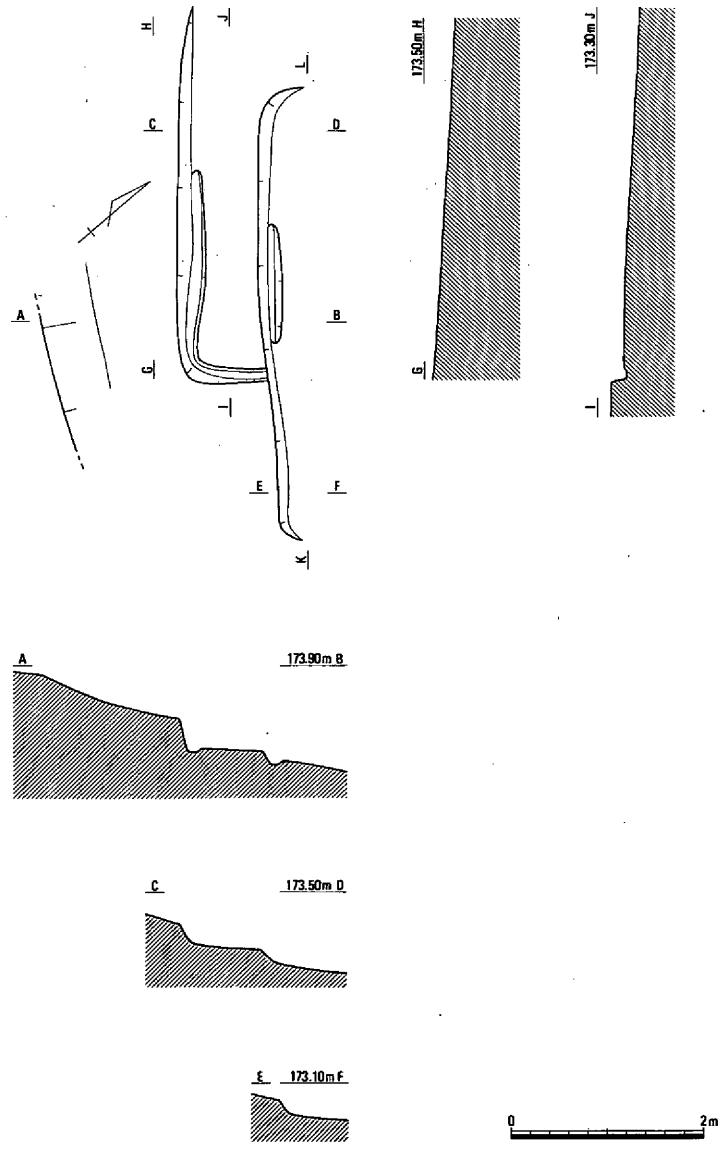
段状遺構８（第69図）

調査範囲の中央部よりやや南東方向へ寄った地点に検出した段状遺構で、西側の部分が竪穴住居20や竪穴住居21に削平されていた。

検出面での幅が12～18cmを測る溝の一部と３か所の柱穴を検出したが、遺構全体の残存状態は極めて悪かった。柱穴間の距離は150cmと160cmを測り、南側に位置する柱穴は２段掘りになっていた。溝



第69図　段状遺構８（1／80）



第70図　段状遺構９～11（1／80）

と柱穴との間は80～100cmの間隔があり、中間に位置するＰ２が溝に最も近くなっていた。床面はほぼ水平であるが、南西方向から北東方向に向かってわずかに傾斜していた。

出土遺物は存在しないが、遺構の切り合い関係から竪穴住居20や竪穴住居21よりも古いことが判明している。ちなみに竪穴住居20は、出土した須恵器の形態的特徴や調整手法から７世紀前葉の時期と考えられているから、この段状遺構８はそれよりも古い時期になるが、古墳時代後期よりも遡ることはないであろう。

段状遺構９（第70図）

調査範囲のほぼ中央部に検出した段状遺構で、周辺には後述する段状遺構10、段状遺構11、段状遺構12などが存在する。

この段状遺構の南東方向に面した部分は、後になって段状遺構12に削平されていたが、北西方向に面した部分は、弥生時代後期前葉の竪穴住居６の上面に位置していたこともあって、端部を明確に把握することができなかった。壁体の床面からの高さは35cmで、柱穴や壁体溝は存在しなかった。遺構内に堆積していた土砂は古墳時代後期のものと推定されるが、遺構そのものの残存状態が悪くて遺物が出土していないから、断定することはできない。

段状遺構10（第70図）

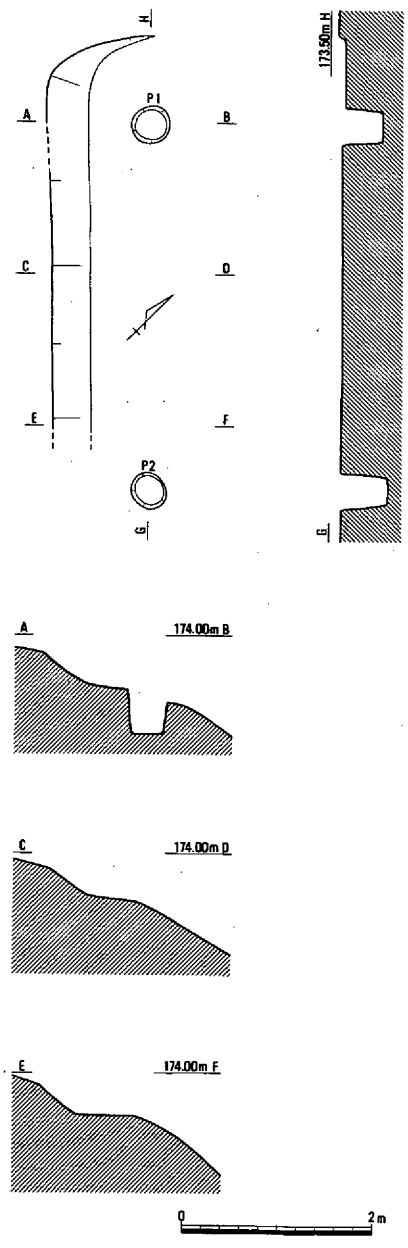
前述した段状遺構９の北側に検出した段状遺構で、地形の低い北東方向に面した部分が、後になって後述する段状遺構11に削平されていた。

この段状遺構は、地形の高い南西方向から南方向にかけての部分に「Ｌ」字形を呈する壁体や壁体溝が検出されただけで、柱穴は存在しなかった。壁体の床面からの高さは32cmで、西方向へ移行するにしたがって壁体や壁体溝の残存状態が悪くなっていた。この段状遺構も遺物が出土しなかったが、おそらく古墳時代後期の時期になるであろう。

段状遺構11（第70図）

この段状遺構は、前述した段状遺構10の北東方向に面した部分を削平して造られていた。

地形の高い南西方向に面した部分に、両端部が短く湾曲して直線的に延びる壁体と壁体溝の一部が存在しただけで、柱穴は確認できなかった。この段状遺構の１辺は約430cmを測るが、地形の低い北東方向に面した部分が急勾配の削平地点になっていたため、この段状遺構の全容を把握することは不可能であった。壁体溝は残存する壁体の中央付近に約120cmの部分だけが認められ、西方向と南方向の隅に面した地点は検出できなかった。遺物は出土しなかったが、周辺に存在する段状遺構と同様に、古墳時代後期の時期になると思われる。



第71図　段状遺構12（1／80）

段状遺構12（第71図）

調査範囲のほぼ中央部に検出した段状遺構で、周辺には段状遺構９、段状遺構10、段状遺構11、段状遺構13、段状遺構14などが存在する。

この段状遺構の西方向に面した部分は段状遺構９を削平していたが、南方向に面した部分は段状遺構13に切られていたので、段状遺構９よりも新しいが段状遺構13よりも古いことが判明した。残存する遺構は、地形の高い南西方向に面した部分の壁体と２か所の柱穴である。壁体の床面からの高さは31㎝を測り、柱穴間の距離は380㎝であった。

この段状遺構も遺物が出土しなかったが、遺構内に堆積していた覆土や遺構の切り合い関係から、おそらく古墳時代後期の時期になるであろう。

段状遺構13（第72図）

前述した段状遺構12の南方向に面した壁体の一部を削平して検出された段状遺構で、近接して竪穴住居21や段状遺構14などが存在する。

平面形は逆「Ｌ」字形を呈した壁体を確認しただけで、柱穴は検出できなかった。壁体の床面からの高さは28㎝で、床面は南西方向から北東方向に向かってわずかに傾斜していた。

出土遺物として、２点の須恵器がある。**196**の杯身は、口径11.5㎝、器高3.6～4.1㎝を測る。外面の底部は回転方向が右のヘラケズリを施し、それ以外の部分はヨコナデを行っている。受部には杯蓋の口縁端部破片が付着し、焼成は良好で外面全体に自然釉が付着している。**197**の長脚有蓋高杯の杯部破片は、口径12.5㎝、脚上部径4.0㎝を測る。外面の杯部下位はヘラケズリを施し、外面の杯部上位はヨコナデを行っている。内面の杯部は全体にヨコナデを行っているが、底部には仕上げナデが認められる。焼成は極めて良好で、外面全体に自然釉が付着している。これらの須恵器の形態的特徴や調整手法から、段状遺構13は６世紀後葉の時期になると考える。

段状遺構14（第73図）

調査範囲の中央部よりやや南東方向へ寄った地点に検出した段状遺構で、周辺には段状遺構13、段状遺構15、段状遺構16などが存在する。

地形の高い南西方向に面した部分に、逆「Ｌ」字形を呈した壁体と壁体溝が確認され、南端には造り付けのカマドに似た浅い溝状の窪みが存在した。壁体の床面からの高さは37㎝を測り、壁体溝の床面からの深さは５㎝であった。検出した柱穴は２か所で、距離は226㎝となっていた。

この段状遺構から遺物は出土しなかったが、後述する段状遺構15の壁体や壁体溝を削平していたから、段状遺構15よりも新しい時期の古墳時代後期に属するであろう。

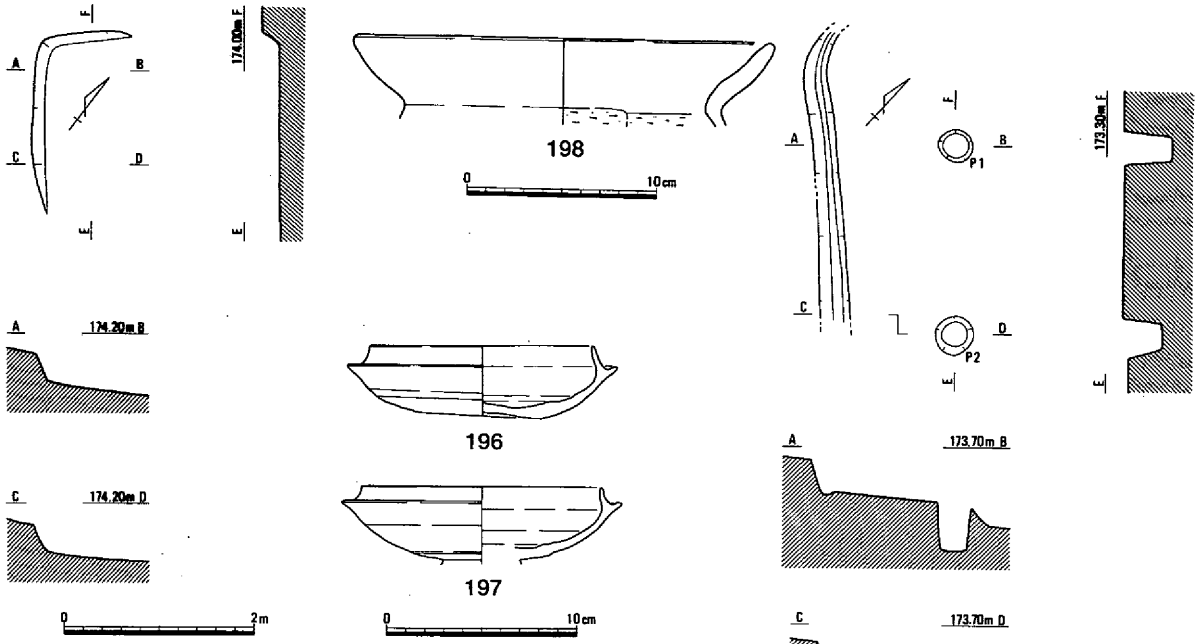
段状遺構15（第74図）

前述した段状遺構14の南東側に検出した段状遺構で、西方向に面した壁体や壁体溝が段状遺構14に削平されていた。南側に面した壁体や壁体溝は、弥生時代後期の竪穴住居11から竪穴住居15の上面に位置したため、確認することができなかった。壁体の床面からの高さは42㎝を測り、壁体溝の床面からの深さは２㎝と浅くなっていた。柱穴は２か所に検出され、柱穴間の距離は200㎝であった。

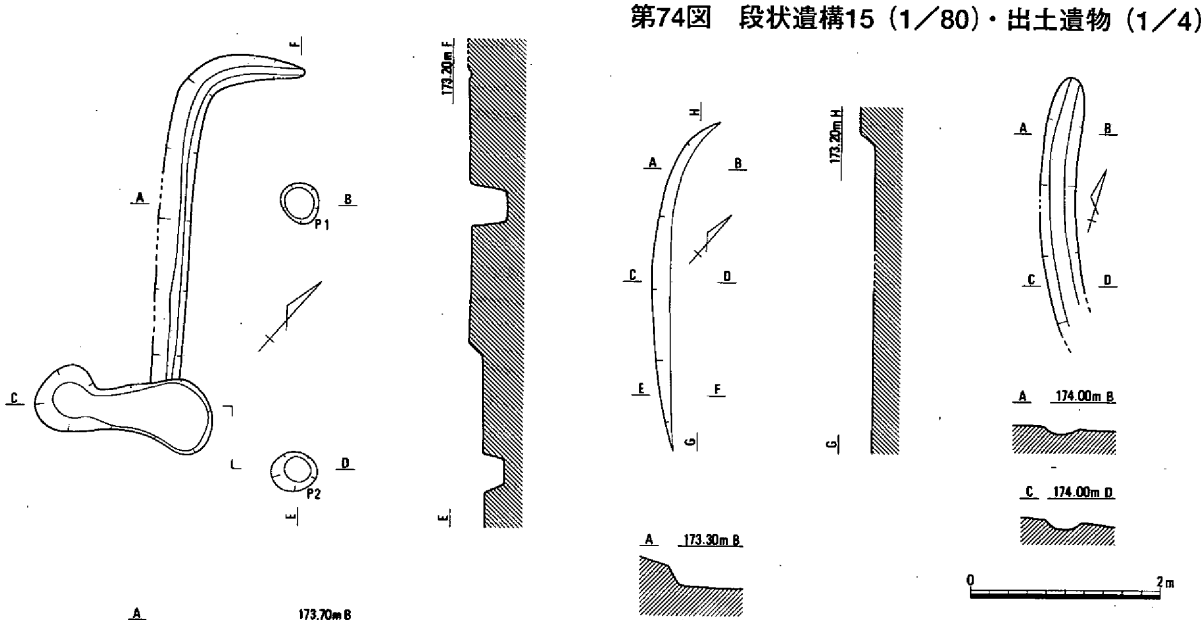
出土遺物として、土師器の甕形土器の口縁部破片（**198**）があり、口径22.8㎝、頸部径16.7㎝を測る。この土器片の形態的特徴や調整手法から、段状遺構15は古墳時代後期の時期になるであろう。

段状遺構16（第75図）

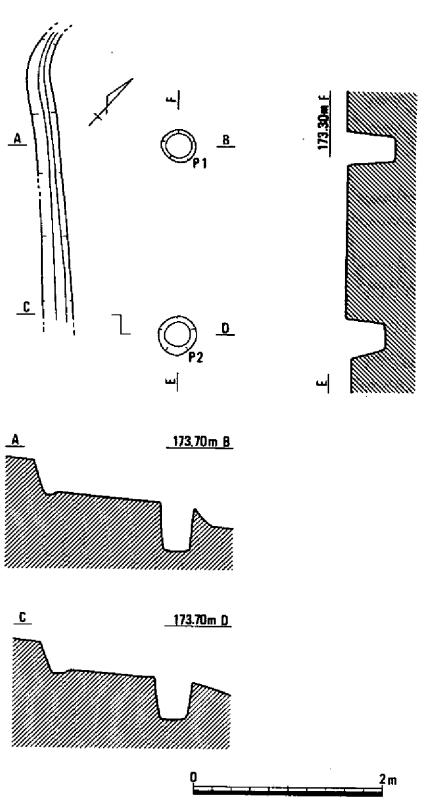
調査範囲の中央部よりやや南東方向へ寄った地点に検出した段状遺構で、周辺には段状遺構14や段



第72図　段状遺構13（1／80）・出土遺物（1／4）

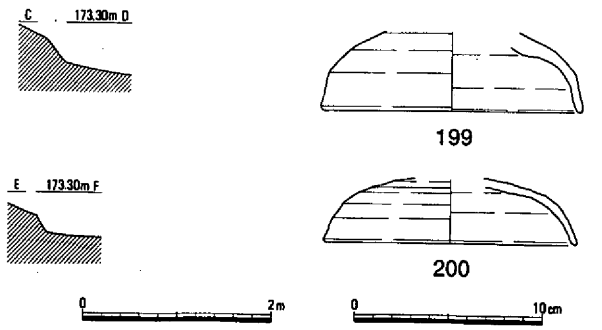


第73図　段状遺構14（1／80）



第74図　段状遺構15（1／80）・出土遺物（1／4）

第76図　段状遺構17(1／80)

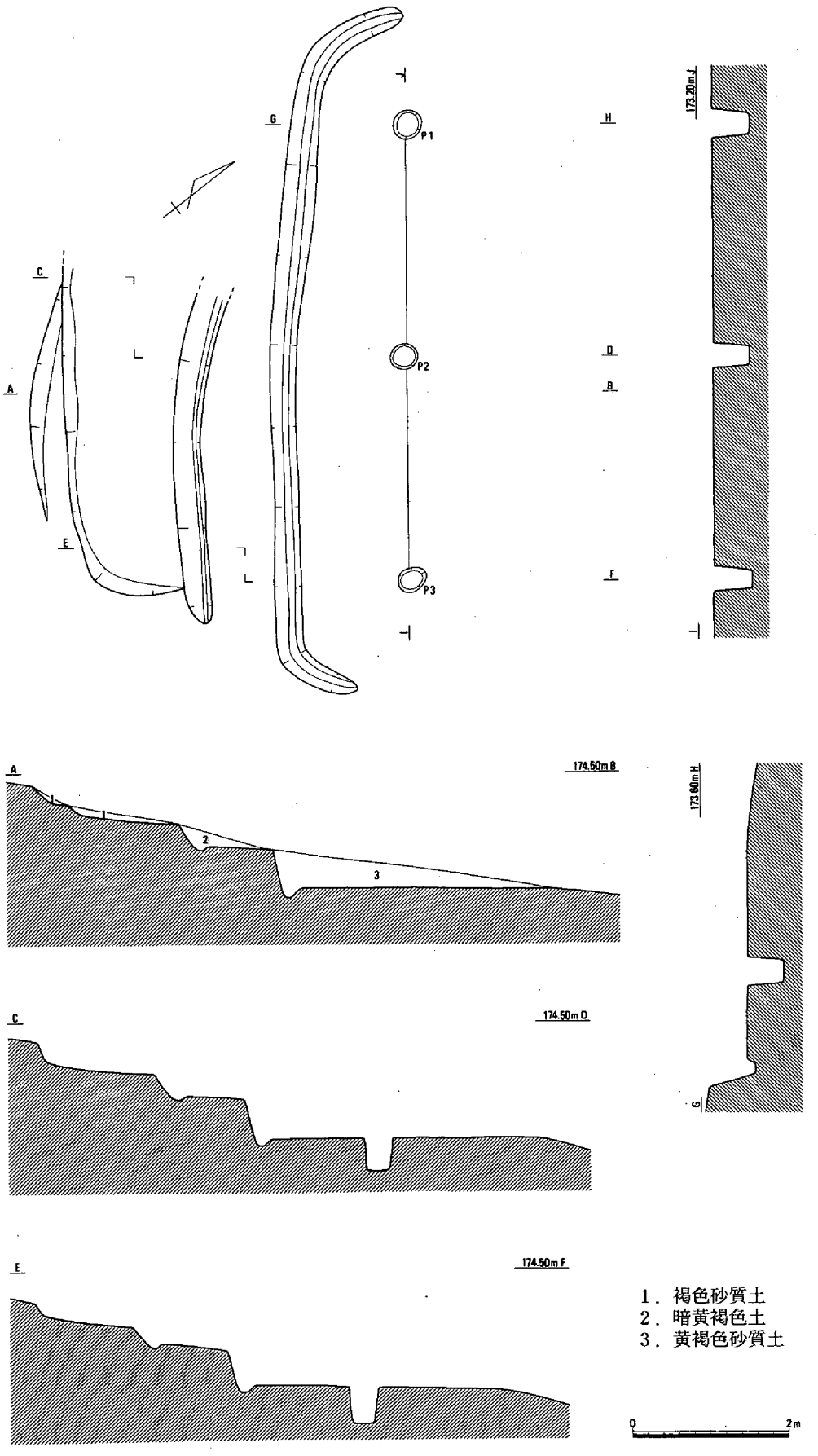


第75図　段状遺構16（1／80）・出土遺物（1／4）

状遺構15などが存在する。

地形の高い南西方向に面した部分に緩やかに湾曲した孤状の壁体を確認しただけで、柱穴や壁体溝は検出できなかった。壁体の床面からの高さは27㎝を測り、床面が南西方向から北東方向に向かってわずかに傾斜していた。

出土遺物として、２点の須恵器の杯蓋が存在する。どちらも外面の天井部はヘラケズリを施し、外面の口縁部はヨコナデを行っている。内面は全体にヨコナデを行っているが、天井部に仕上げナデは認められない。この形態的特徴や調整手法から、段状遺構16は６世紀末葉から７世紀前葉の時期になると推定される。



第77図　段状遺構18～21（1／80）

段状遺構17（第76図）

調査範囲の中央部よりやや南東方向へ寄った地点に検出した段状遺構で、地形の低い北方向には段状遺構15や段状遺構16が存在する。

検出面での最大幅が40cmで深さが４cmを測る溝が、長さ約280cmにわたって緩やかに湾曲していただけで、柱穴は検出できなかった。南方向に面した部分は、弥生時代後期の竪穴住居11から竪穴住居15の上面に位置したため、溝の端部を把握することができなかった。

出土遺物は存在しないが、溝内の土砂や周辺で確認された遺構の検出状況から、段状遺構17は古墳時代後期の時期に属すると思われる。

段状遺構18（第77図）

調査範囲の中央部より南東方向へ寄った地点に検出した段状遺構で、西側には竪穴住居22が、北側には段状遺構19が存在する。遺構の切り合い関係から、この段状遺構18は段状遺構19よりも古いことが判明した。

地形の高い南西方向に面した部分に、湾曲した壁体の一部を検出しただけである。壁体の床面からの高さは20cmを測り、床面のほとんどの部分が段状遺構19に削平され、柱穴や壁体溝は確認できなかった。遺物は出土しなかったが、この段状遺構18はおそらく古墳時代後期の時期になるであろう。

段状遺構19（第77図）

前述した段状遺構18の床面を削平して造られていた段状遺構で、西方向に面した部分は竪穴住居22の壁体によって切られていた。

平面形は「Ｌ」字形を呈する壁体が存在するだけで、柱穴や壁体溝は検出できなかった。壁体の床面からの高さは17cmで、床面が南西方向から北東方向に向かってわずかに傾斜していた。

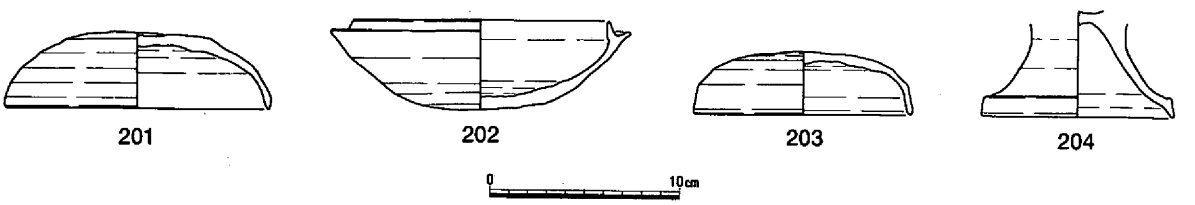
この段状遺構も出土遺物が存在しないが、遺構の切り合い関係で７世紀前葉の竪穴住居22よりも古いことが判明しているから、おそらく古墳時代後期の時期に属すると思われる。

段状遺構20（第77図）

調査範囲の中央部より南東方向へ寄った地点に検出した段状遺構で、南西側には前述した段状遺構19が、北東側には段状遺構21が、西側には竪穴住居22がそれぞれ存在する。

わずかに湾曲する壁体と壁体溝の一部を検出しただけで、柱穴は確認できなかった。壁体の床面からの高さは32cmを測り、遺構内には暗黄褐色土が堆積していた。壁体溝の床面からの深さは４cmで、幅は４～８cmになっていた。床面はほぼ水平であるが、南西方向から北東方向に向かってわずかに傾斜していた。

この段状遺構も前述の段状遺構19と同様に出土遺物が存在しないが、西方向に面した壁体や壁体溝が７世紀前葉の竪穴住居22に削平されていたので、７世紀前葉の時期よりも古い古墳時代後期に属すると考えておきたい。



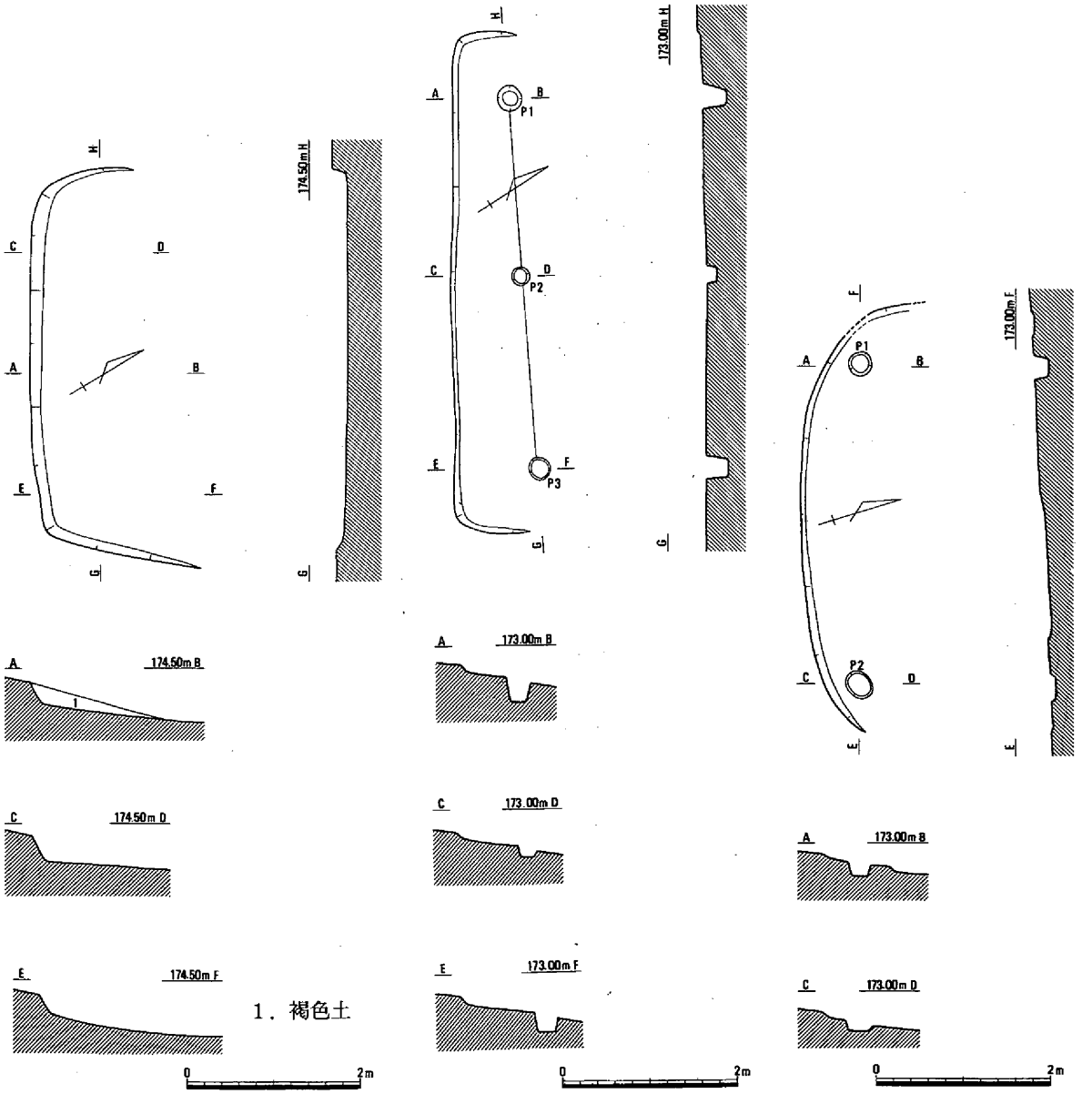
第78図　段状遺構21出土遺物（1／4）

段状遺構21（第26・77・78図）

調査範囲の中央部より南東方向へ寄った地点に検出した段状遺構で、周辺には竪穴住居22、段状遺構18、段状遺構19、段状遺構20などが存在する。この段状遺構21と竪穴住居22の新旧関係を土層断面（第25図）によって検討したところ、段状遺構21が新しく竪穴住居22が古いことが判明した。

地形の高い南西方向に面した部分に、両端が短く内湾した壁体と壁体溝が存在した。壁体の直線的に延びた部分は約760cmを測り、床面からの高さは51cmになっていた。壁体溝の床面からの深さは８cmで、幅は10～16cmになっていた。またこの段状遺構には３か所の柱穴が確認され、柱穴間の距離は300cmと290cmで、壁体溝との間隔は130～160cmになっていた。

出土遺物として、４点の須恵器（**201～204**）がある。杯蓋と壺蓋の内面天井部には仕上げナデが認められ、外面の天井部にはヘラケズリを施している。この４点の須恵器の形態的特徴や調整手法から、段状遺構21は７世紀前葉の時期になると考える。



第79図　段状遺構22（1／80）

第80図　段状遺構23（1／80）

第81図　段状遺構24（1／80）

段状遺構22（第79図）

調査範囲の中央部より南東方向へ寄った地点に検出した段状遺構で、北側には弥生時代後期前葉に属する竪穴住居16が存在する。

平面形は逆「コ」字形を呈する壁体を確認しただけで、柱穴や壁体溝は検出できなかった。地形の高い南西方向に面する直線的に延びた壁体の長さは約390cmを測り、壁体の床面からの高さは30cmになっていた。遺構内には褐色土が堆積し、床面は南西方向から北東方向に向かってわずかに傾斜しているのが認められた。

出土遺物は存在しないが、周辺で検出した遺構の時期から推定して、この段状遺構22は古墳時代後期に属するであろう。

段状遺構23（第80図）

調査範囲の中央部より南東方向へ寄った地点に検出した段状遺構で、南側には段状遺構24や竪穴住居16が存在する。この段状遺構の北側は、圃場整備事業によって著しく削平されていた。

検出した遺構は、両端が短く屈曲した逆「コ」字形を呈する壁体と３か所の柱穴だけである。南西方向に面した直線的に延びる壁体の長さは約550cmで、壁体の床面からの高さは６cmと極めて浅くなっていた。３か所の柱穴は大きさがほぼ同じで直線的に並び、柱穴間の距離は205cmと225cmであった。

出土遺物は存在しないが、壁体の形態や遺構内の堆積土などから、段状遺構23は古墳時代後期の時期になるであろう。

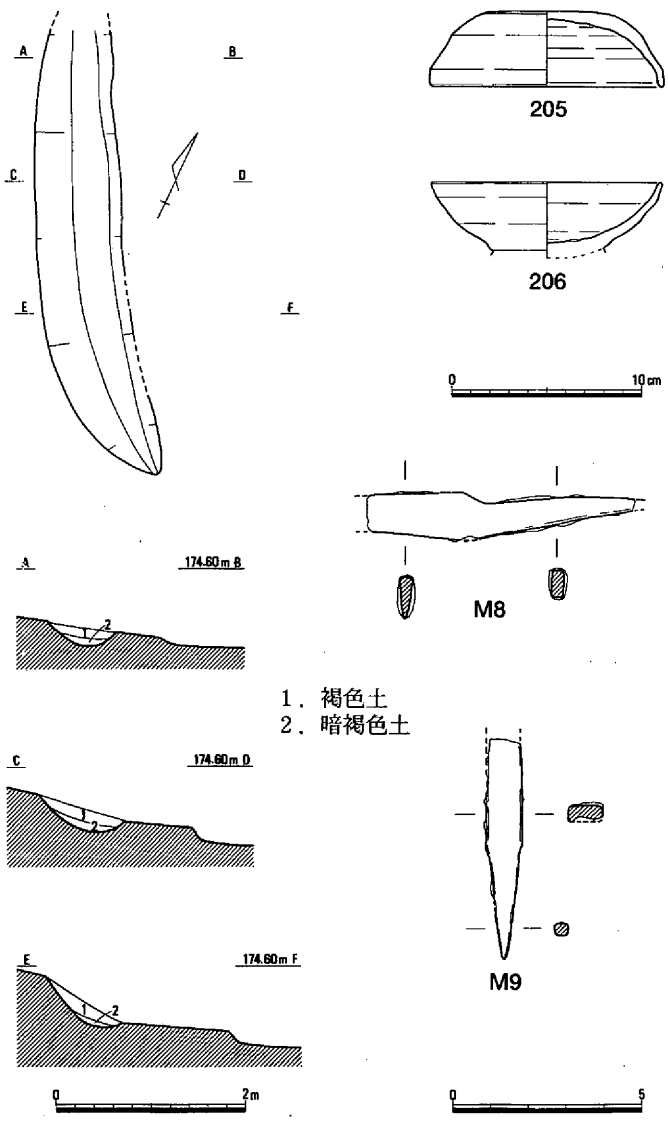
なお南西方向に面した部分に直線的に延びる壁体と直線的に並んだ３か所の柱穴の向きが異なるので、壁体と３か所の柱穴は別の遺構であるかもしれない。

段状遺構24（第81図）

前述した段状遺構23の南側に検出した段状遺構で、段状遺構23に削平されていた。

緩やかに湾曲した壁体と２か所の柱穴を検出しただけで、壁体溝は確認できなかった。壁体の床面からの高さは５cmで、柱穴間の距離は370cmになっていた。床面はほぼ水平であるが、わずかに南西方向から北東方向に向かって傾斜していた。

この遺構も古墳時代後期に属すると考えるが、２か所の柱穴の位置が壁体に極めて近接していたから、壁体と２か所の柱穴は別の遺構であるかもしれない。



第82図　段状遺構25（1／80）・出土遺物（1／4、1／2）

段状遺構25（第82図）

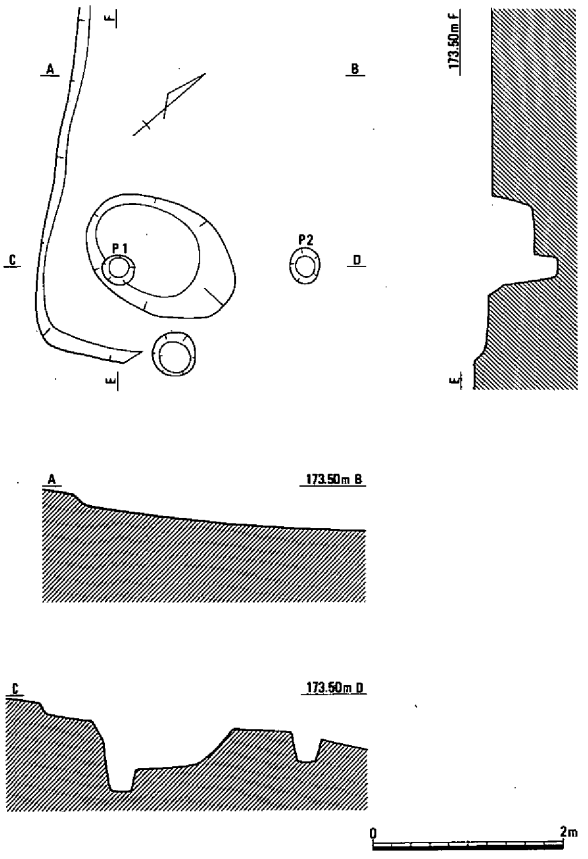
調査範囲の南東部分に検出した段状遺構で、周辺には段状遺構26や土壙21などが存在する。

地形の高い南西方向に面した部分に緩やかに湾曲した幅の比較的広い溝を検出しただけで、柱穴は確認できなかった。西方向に面した部分は、弥生時代後期前葉の竪穴住居16の上面に位置したため、端部を把握することができなかった。溝の検出面での最大幅は80cmを測り、溝内には暗褐色土と褐色土が堆積していた。

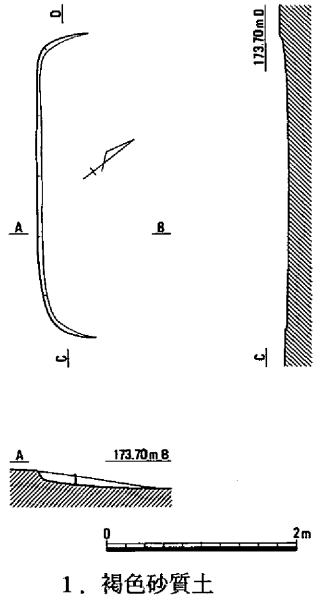
この段状遺構から出土した遺物として、２点の須恵器と２点の鉄器がある。**205**の杯蓋は、推定口径12.0cm、推定器高4.0cmを測り、全体の器形が歪んでいる。外面の天井部はヘラ切り未調整で、外面の口縁部や内面全体はヨコナデを施している。胎土中には大きな砂粒を多く含み、焼成は良好で灰白色を呈している。**206**の短脚無蓋高杯は、脚部が貼り付け部分から剥離して存在しないものの、口径12.1cm、脚上部径4.9～5.7cmを測る。残存する杯部は、内外面とも全体にヨコナデを施している。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は不良で灰色または灰白色を呈している。

２点の須恵器の形態特徴や調整手法などから、段状遺構25は７世紀前葉の時期になるであろう。

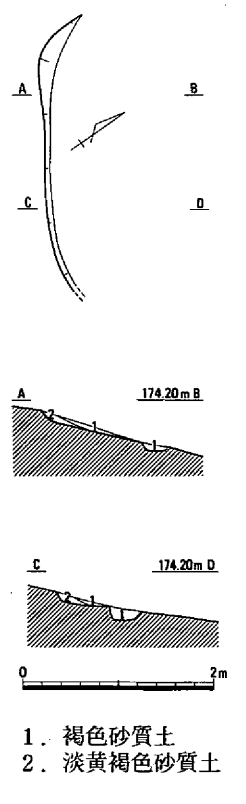
Ｍ８の刀子は、長さ7.0cm、幅1.3cm、厚さ0.6cmを測り、重さは7.5ｇである。刀身から茎にかけての欠損品で、茎の断面形は長方形を呈している。関の部分の上端には段が認められるが、下端には段が存在しない。**Ｍ９**の鉄鏃は、長さ5.8cm、幅1.0cm、厚さ0.6cmを測り、重さは5.5ｇである。茎の先端部分の欠損品で、上位部分の断面形は長方形を呈し、下位部分の断面形は正方形になって先端部分は尖っている。



第83図　段状遺構26（1／80）



第84図　段状遺構27（1／80）



第85図　段状遺構28（1／80）

段状遺構26（第83図）

調査範囲の南東方向に検出した段状遺構で、周辺には段状遺構25、土壙20、土壙21、竪穴住居23などが存在する。遺構の切り合い関係によると、この段状遺構26は土壙20や竪穴住居23よりも新しいことが判明した。

地形の高い南西方向から南方向にかけて「L」字形を呈する壁体が存在し、２か所の柱穴も確認した。壁体の床面からの高さは14cmを測り、柱穴間の距離は195cmになっていた。この段状遺構の西方向に面した部分は、弥生時代後期前葉の竪穴住居16の上面に位置したため、端部を把握することができなかった。床面はほぼ水平だが、わずかに南西方向から北東方向に向かって傾斜していた。

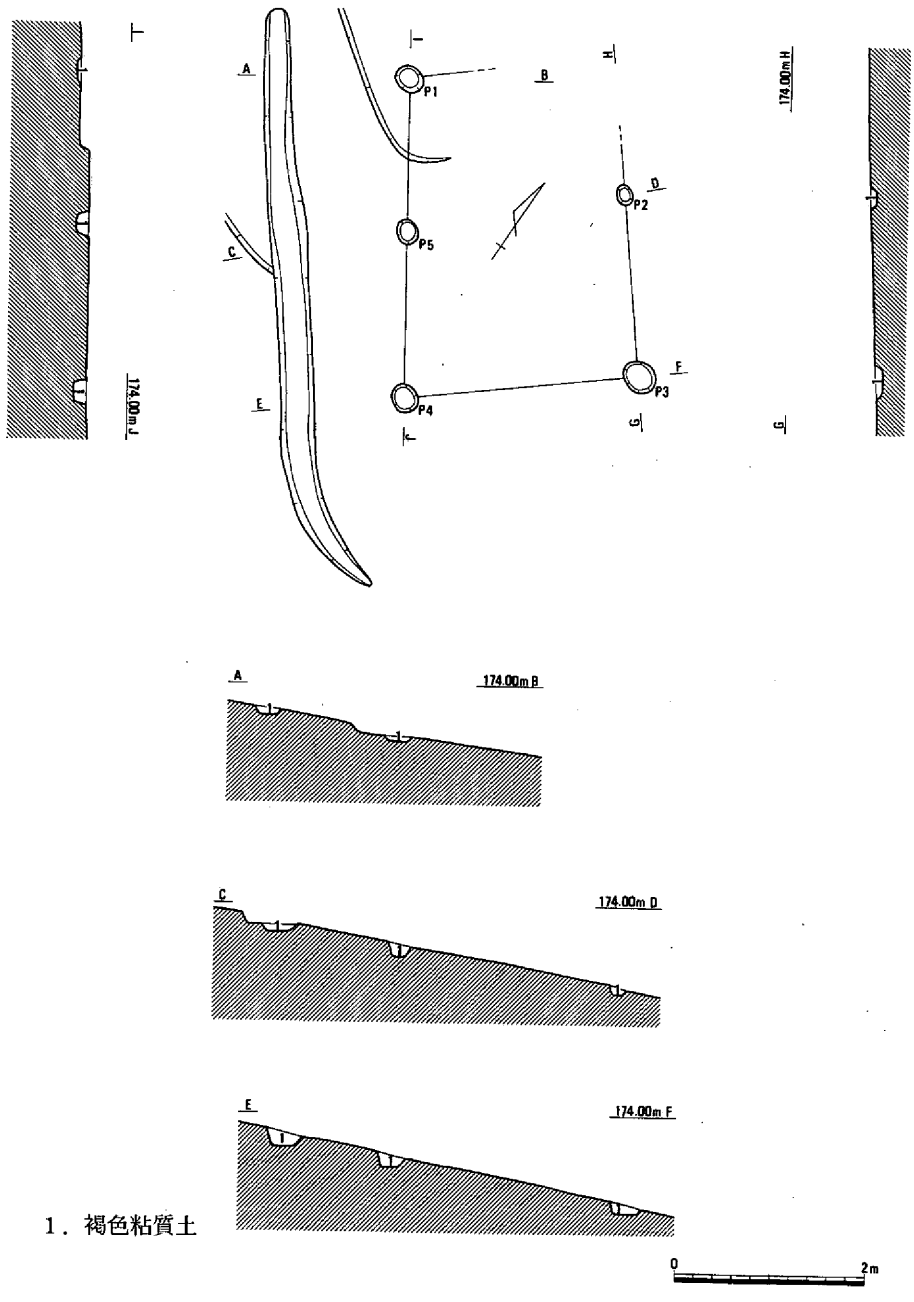
出土遺物は存在しないが、残存する壁体や柱穴などから、古墳時代後期の時期になるであろう。

段状遺構27(第84図)

調査範囲の南東端部に検出した残存状態の悪い段状遺構で、周辺には竪穴住居23、竪穴住居24、段状遺構29などが存在する。

地形の高い南西方向に面した部分に両端が緩やかに内湾する壁体を検出しただけで、柱穴や壁体溝は確認できなかった。壁体の南西方向に面した直線的に延びる部分は約280cmを測り、壁体の床面からの高さはわずかに８cmであった。遺構内には褐色砂質土が堆積しているのが認められ、床面は南西方向から北東方向に向かってわずかに傾斜していた。

この段状遺構から出土した遺物はないが、周辺に検出した段状遺構と同様に、古墳時代後期の時期に属するであろう。



第86図　段状遺構29（1／80）

段状遺構28（第85図）

調査範囲の南東端部に検出した段状遺構で、東側の部分を後述する段状遺構29に削平されていた。

地形の高い南西方向に面した部分に緩やかに湾曲する壁体の一部を検出しただけで、柱穴や壁体溝は確認できなかった。壁体の床面からの高さは12cmで、遺構内には淡黄褐色砂質土と褐色砂質土が堆積していた。床面はほぼ水平であるが、南西方向から北東方向に向かってわずかに傾斜していた。

この段状遺構にも出土遺物がないが、おそらく古墳時代後期の時期になるであろう。

段状遺構29（第86図）

調査範囲の南東端部に検出した段状遺構で、周辺には竪穴住居23、竪穴住居24、段状遺構27、段状遺構28などが存在する。遺構の切り合い関係から、この段状遺構29が段状遺構28よりも新しいことが判明している。

確認できたのは、地形の高い南西方向に位置する溝と５か所の柱穴だけである。溝の検出面での最大幅は38cmで、床面からの深さは12cmになっていた。北方向に位置すると思われる１か所の柱穴が確認できなかったが、５か所の柱穴から推定して１間×２間の建物になるであろう。柱穴間の距離は160～245cmを測り、Ｐ３とＰ４を結ぶ１間の梁行方向が最も長くなっていた。床面は南西方向から北東方向に向かって傾斜しており、溝や柱穴の内部には褐色粘質土が堆積していた。

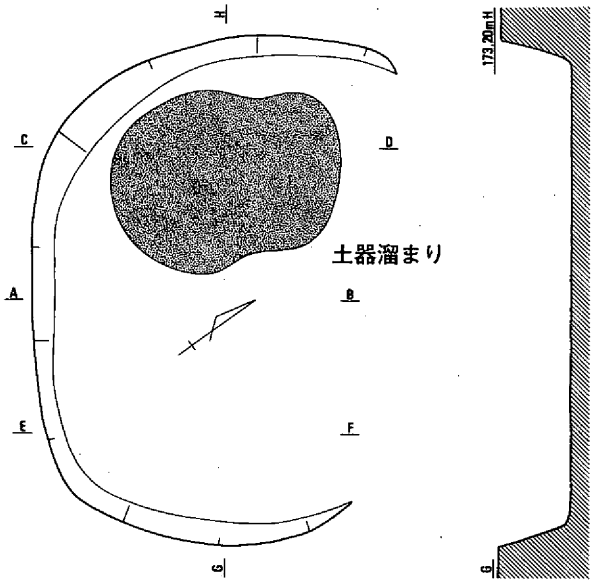
出土遺物は存在しないが、おそらく古墳時代後期の段状遺構になるであろう。

なお直線的に延びる溝の方向とＰ４からＰ５を経てＰ１に至る建物の桁行方向が異なっているから、溝と建物はそれぞれ別の遺構になるのかもしれない。

段状遺構30（第87～92図、図版45－２）

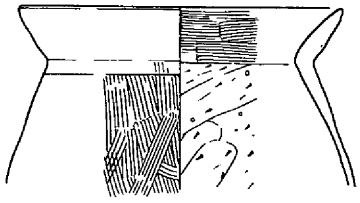
発掘調査を実施した惣台遺跡の範囲内において、南東方向の最も端部に寄った地点に検出した段状遺構で、北西方向には竪穴住居25や建物４が存在する。

地形の低い北東方向を除く３方向を、「Ｃ」字形に似た形態に壁体が検出され、柱穴や壁体溝は確認できなかった。壁体の床面からの高さは61cmを測り、床面は南西方向から北東方向に向かってわずかに傾斜していた。遺構内には褐色粘質土、褐色砂質土、淡褐色砂質土、暗黄褐色砂質土が複雑に堆積し、北西側に寄った地点

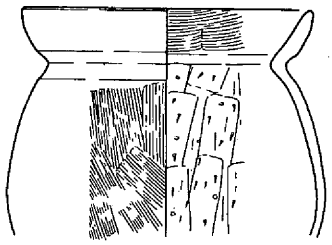


1．暗黄褐色砂質土　2．淡褐色砂質土
3．褐色砂質土　4．褐色粘質土

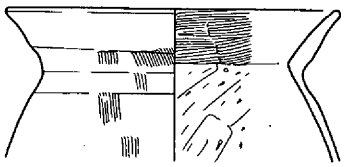
第87図　段状遺構30（1／80）



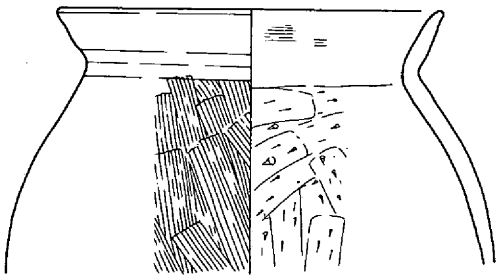
207



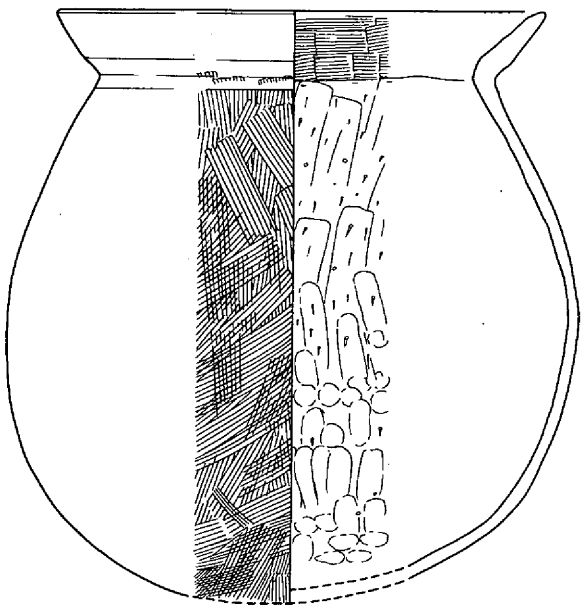
208



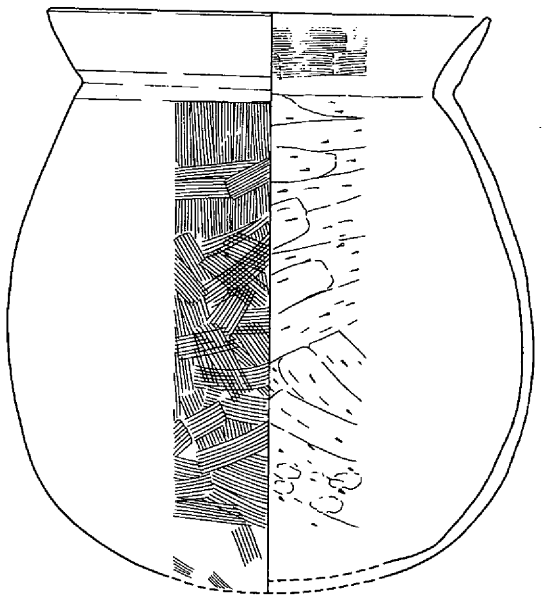
209



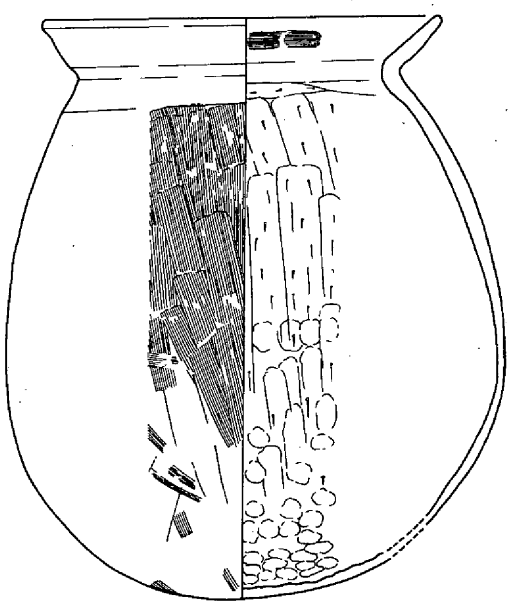
210



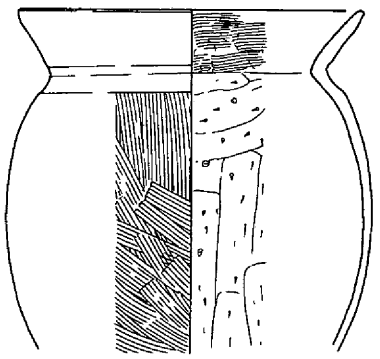
211



212



213



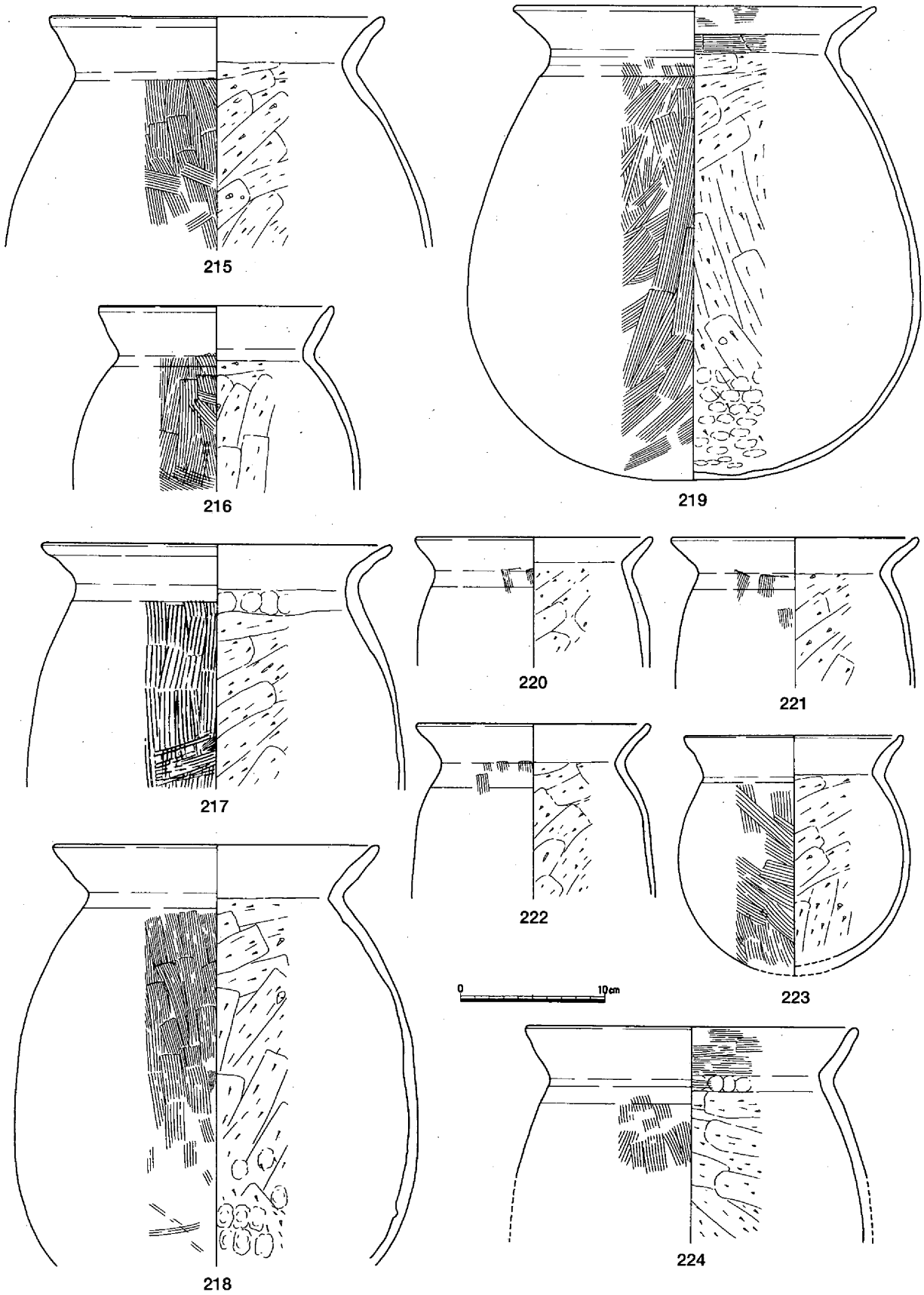
214

0　10cm

第88図　段状遺構30出土遺物（1）（1／4）

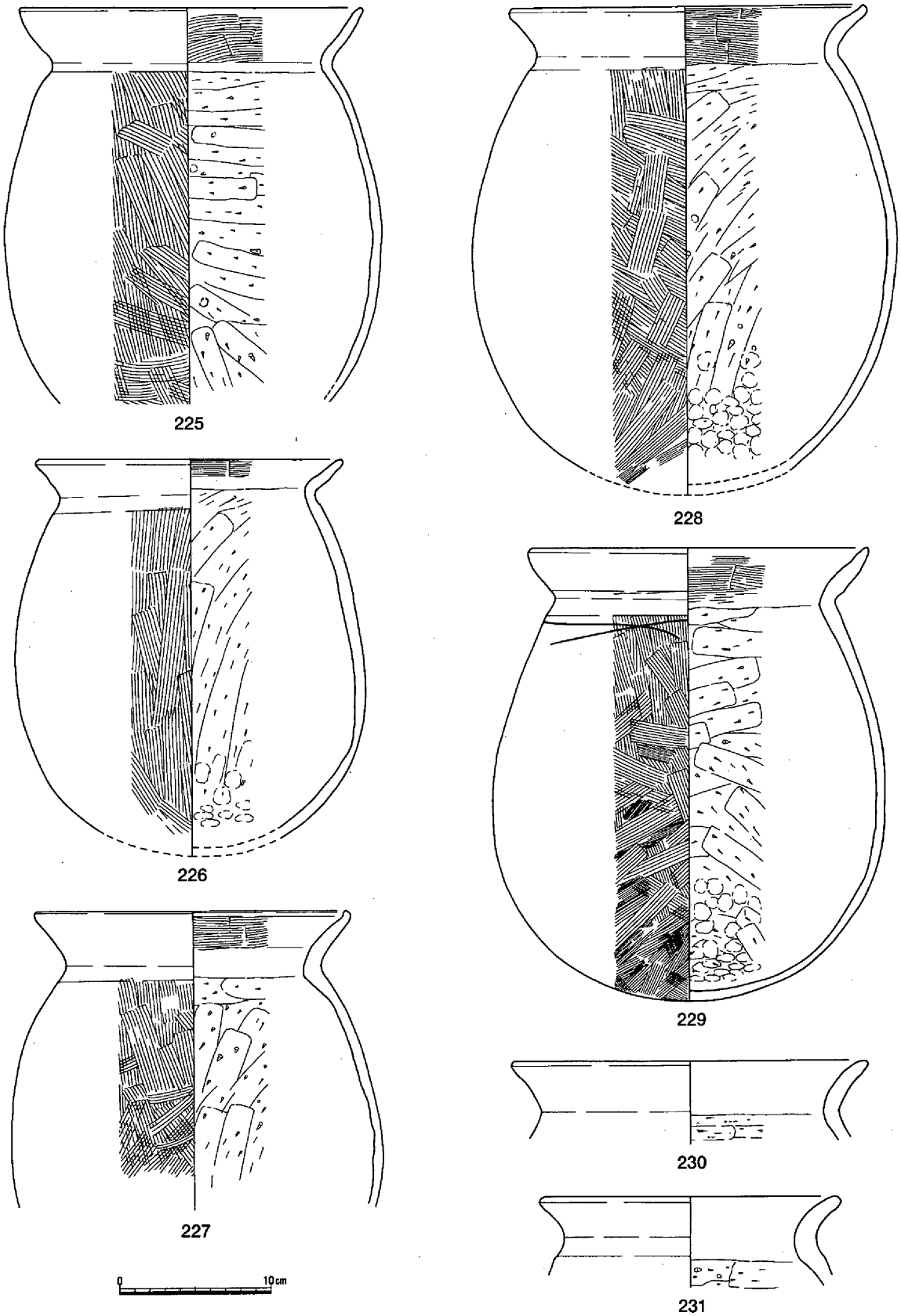
には完形品を多く含む大量の土師器や須恵器が出土した。

この段状遺構の床面は、地形の低い北東方向に面した約半分の範囲が黒色を呈する軟弱な火山灰に

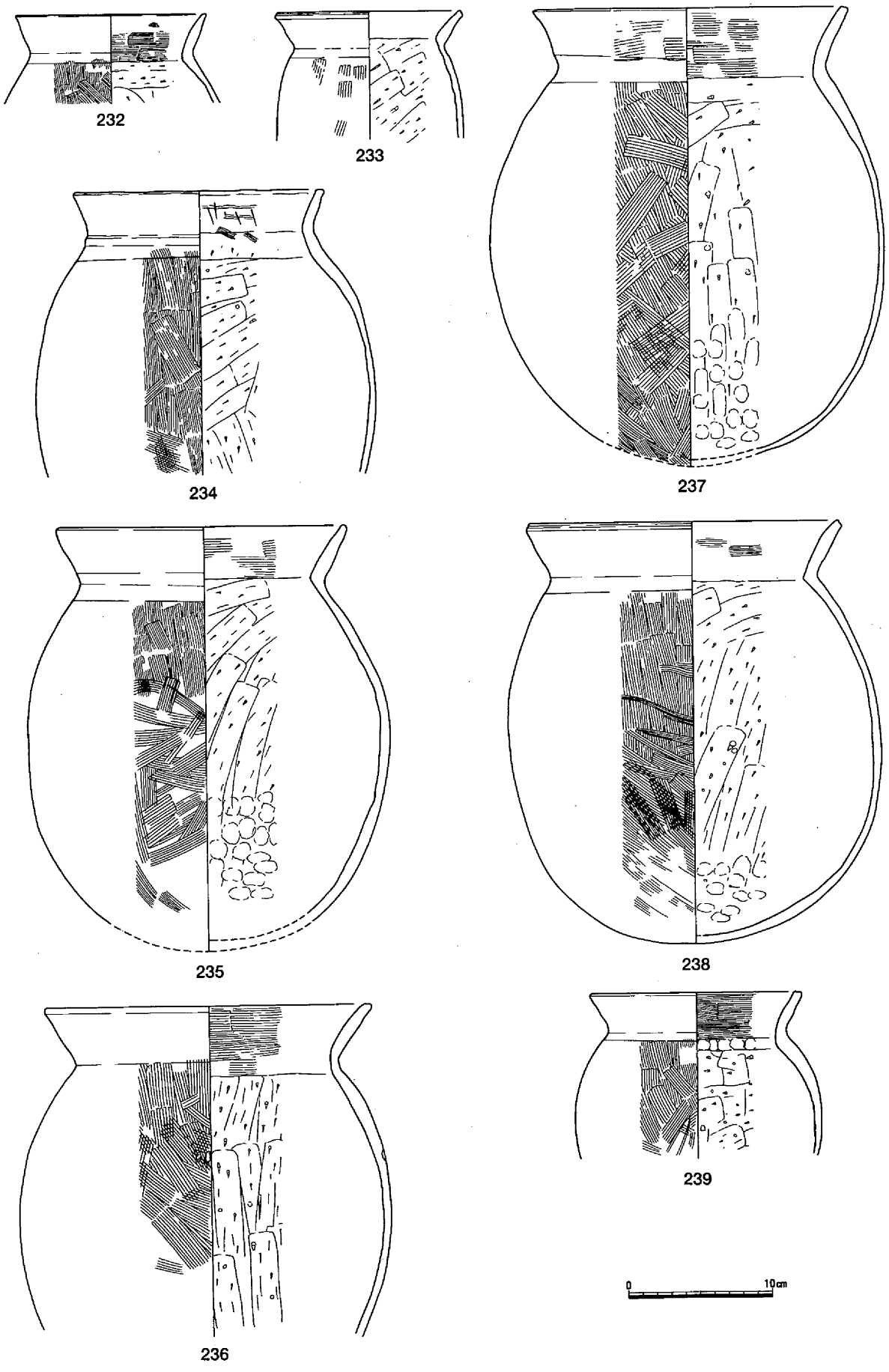


第89図　段状遺構30出土遺物（2）（1／4）

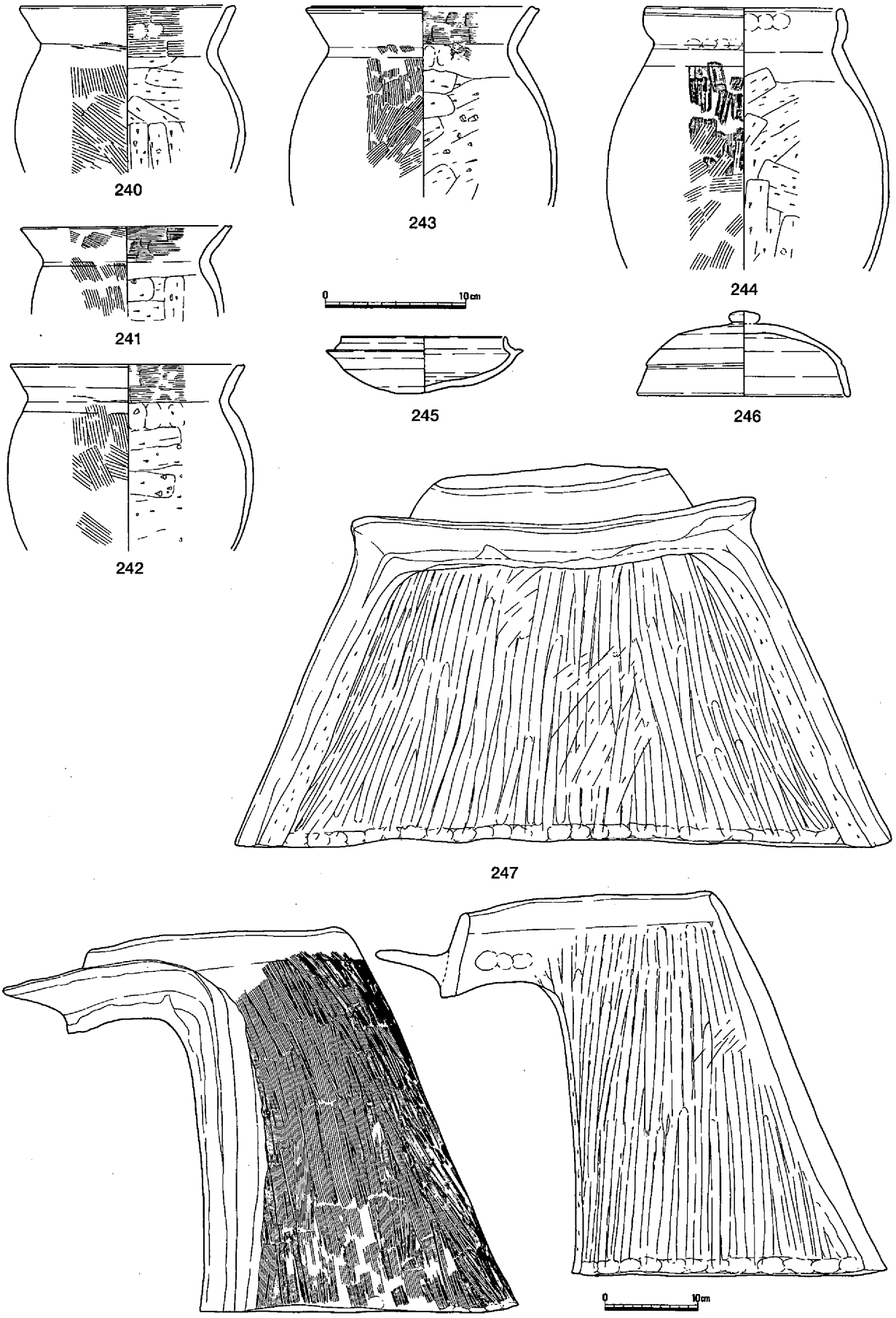
なっていたため、その部分に立つと足が沈む状態であった。このようなことから、竪穴住居を造ろうと思って地山を掘り下げたものの、床面が軟弱で不安定だったから、途中で竪穴住居を造ることを断



第90図　段状遺構30出土遺物（3）（1／4）



第91図　段状遺構30出土遺物（4）（1／4）



第92図　段状遺構30出土遺物（5）（1／4、1／6）

念したのではないかと考えられた。この比較的広くて深い穴を利用して、不用になった土師器や須恵器を無造作に捨てていたと思われる状態であった。

出土した土師器は、いずれも甕形土器である。頸部で「く」字形に外反して斜め上方へ立ち上がった口縁端部は、丸く仕上げているもの（207～221・230・231）、わずかに内湾するもの（222～229）、中央部が浅く窪んだ面を有するもの（232～243）があり、口縁部全体が短く内湾して立ち上がるもの（244）も認められる。胴部の形態では、最大径が下位部分にあって断面形が卵形を呈するもの（207～213・215～219・226～229・238）、最大径が中位に存在するもの（214・223・225・234～237・244）、最大径が上位部分にあるもの（239・242）が認められる。底部はすべての甕形土器が丸底である。口縁部から頸部にかけての外面はヨコナデを施しているが、横方向のハケメが残存するもの（241）や指頭圧痕が認められるもの（244）もある。口縁部の内面もヨコナデを施しているが、横方向のハケメが存在するものが多い。胴部の外面には縦または斜め方向のハケメが認められ、胴部の内面には横または斜め方向のヘラケズリを行っている。外面の肩部に、籾圧痕状を呈する２個の刺突痕が存在するもの（236）もある。底部の外面にもハケメが認められるが、ナデを加えてハケメを消しているものが多い。大型土器の底部の内面には、多くの指頭圧痕が確認されている。これらの甕形土器の胎土中には大きな砂粒を多く含み、焼成はいずれも良好で橙色または黄橙色を呈している。また外面には黒斑や煤の付着が認められ、内面には有機物が付着しているものが多い。

245の須恵器の杯身は、口径11.7㎝、器高4.1㎝を測り、全体の器形が歪んでいる。外面の底部は回転方向が右のヘラケズリを施し、外面の体部から口縁部にかけてはヨコナデを行っている。内面は全体にヨコナデを行っているが、内面の底部には仕上げナデ痕跡が認められる。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で全体に灰色を呈し、外面には自然釉が付着している。

須恵器の長脚有蓋高杯の蓋（246）は、口径15.0㎝、器高6.2㎝を測り、ほぼ完形品である。口縁部と体部の境には稜を有し、天井部には貼り付けのつまみが存在する。外面の天井部には回転方向が右のヘラケズリを施し、外面の体部から口縁部にかけてはヨコナデを行っている。内面は全体にヨコナデを行っているが、内面の天井部には仕上げナデ痕跡が認められる。胎土中には大きな砂粒を多く含み、焼成は不良である。内面は灰白色であるが、外面は灰色を呈している。

247のカマドは、受口径25.1㎝、全体の高さ41.6㎝、下端径70.6㎝を測り、復元完形品である。正面の部分に外側へ張り出した廂の幅は約7.5㎝で、わずかに上方を向くように貼り付けている。体部に切開した焚口は、正面の形が台形を呈し、上端幅約30㎝、下端幅約60㎝になっている。下端部から受口部へ移行するにしたがって器壁が薄くなり、受口上端部は丸く仕上げている。体部に切開した焚口部分は、ヘラ切りを行っただけで未調整である。体部の外面には縦方向のハケメが認められるが、上端部の受口に近い部分と下端部はヨコナデを施し、下半部の一部分はユビナデによってハケメが消えている。体部の内面はヘラケズリの後に縦方向のユビナデを施し、受口に近い上端部にはヨコナデを加え、下端部にはユビオサエ痕跡が認められる。体部の外面には黒斑が存在し、内面には部分的に煤が付着している。胎土中には砂粒を多く含み、焼成は極めて良好で、橙色を呈している。

以上に説明した段状遺構30から出土した遺物は、良好な一括資料と思われる。土師器の甕形土器やカマドについては類例がほとんど知られていないので、出土点数が少ない完形品またはほぼ完形品である２点の須恵器に注目したい。この杯身と長脚有蓋高杯の蓋との形態的特徴や調整手法から推定すれば、段状遺構30は６世紀後葉の時期に属すると考えられる。

(3) 建　物

建物１（第93図）

調査範囲の中央部よりやや西方向へ寄った地点に検出した掘立柱建物で、南側に面した部分が後述する建物２と重複している。近接した位置には溝１、土壙24、土壙25が存在するが、この建物との関係は不明である。

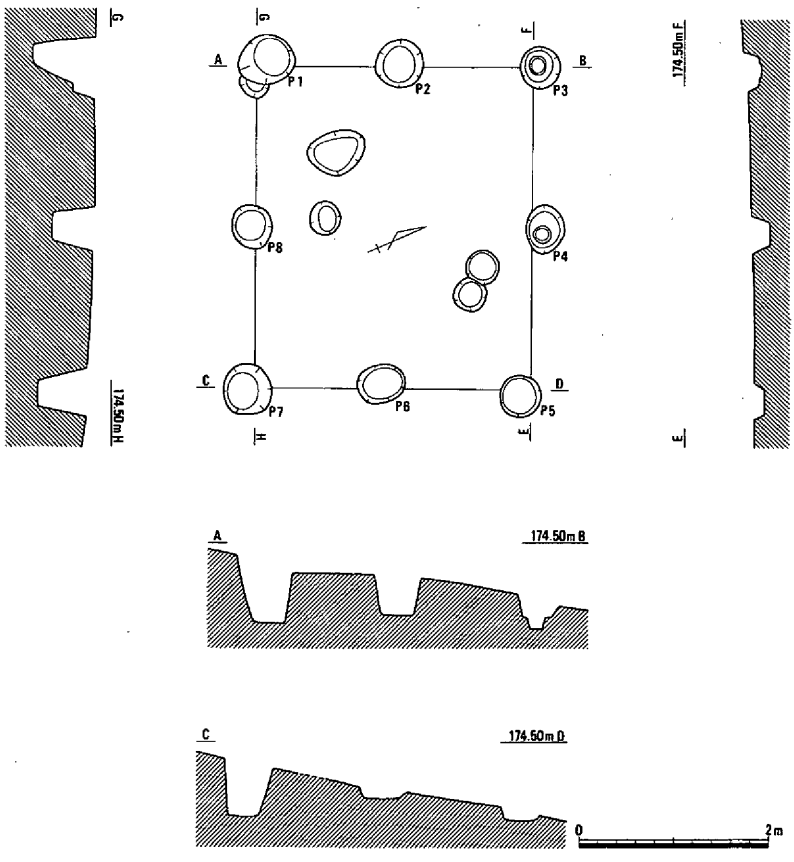
この掘立柱建物の棟方向はＮ－66°－Ｗを示し、桁行２間、梁行２間になっている。桁行の長さは約340㎝、梁行の長さは約190㎝である。柱穴の平面形は円形または楕円形で、北側に位置するＰ３とＰ４は２段掘りになっていた。桁行の柱穴底部のレベルはほぼ揃っていたが、梁行の中間に位置するＰ６だけが著しく浅く、Ｐ７の方向へやや寄っていた。

この掘立柱建物から出土した遺物は存在しないが、柱穴内に堆積していた土砂から推定すると、おそらく古墳時代後期の時期になるであろう。

建物２（第94図）

この建物２も中央部よりやや西方向へ寄った地点に検出した総柱の掘立柱建物で、前述した建物１と重複していたが、新旧関係を把握することはできなかった。周辺には竪穴住居17と溝１があり、この建物の南方向に寄った地点には土壙25が確認されている。溝１はこの掘立柱建物の南西方向に面した地形の高い位置に存在したので、雨落溝になるのではないかと考えられたが、溝内の土砂と柱穴内の土砂が異なっていただけでなく、直線的に延びた溝１の方向とこの建物の棟方向が微妙に違っていたので、別々の遺構であると判断した。また土壙25がこの掘立柱建物の付属施設になるのではないかとも考えられたが、土壙の底部には炭化物が堆積して火が使われていたのは明らかであり、この建物は総柱の掘立柱建物で土壙の近くに中心部の柱があって、土壙の火でそれが燃えてしまうことになり、極めて具合が悪いのである。したがってこの建物と土壙25は、時期の異なった別々の遺構が、偶然にも近接して検出された結果によると思われた。

この総柱の掘立柱建物の棟方向はＮ－49°－Ｗを示し、桁行２間、梁行２間になっていた。桁行の長さは約320㎝、梁行の長さは約240㎝である。柱穴の平



第93図　建物１（1／80）

面形は円形または楕円形で、東方向の端部に検出したＰ９だけが２段掘りになっていた。桁行の２間の柱間隔はほぼ同じ距離になっていたが、梁行の柱間隔は約110cmと約130cmで、南西方向に面した部分が北東方向に面した部分よりも約20cmも短くなっていた。桁行方向の柱穴底部のレベルはほぼ揃っていたが、梁行方向の柱穴底部のレベルは地形に沿って南西方向から北東方向へ移行するにしたがって低くなっていた。

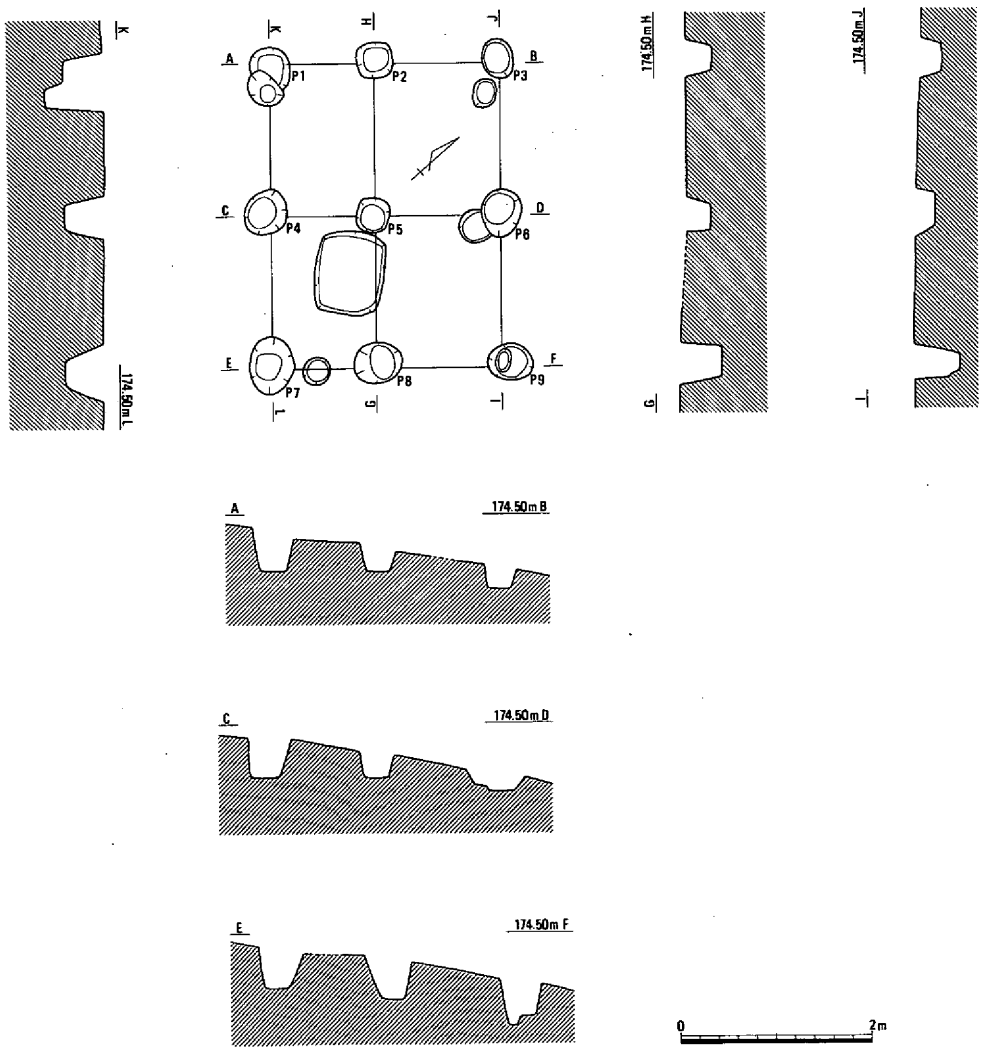
この総柱の掘立柱建物も遺物が出土しなかったが、柱穴内に存在した土砂から推定して、古墳時代後期の時期になると考えられた。

建物３（第95図）

調査範囲の中央部よりやや南方向へ寄った地点に検出した掘立柱建物で、周辺には竪穴住居20、竪穴住居21、溝２、溝３などが存在する。この建物の東方向の端部に位置するＰ５は、竪穴住居21の壁体と切り合っており、この建物３が竪穴住居21よりも古いことが判明している。

この掘立柱建物の棟方向はＮ－40°－Ｗを示し、桁行２間、梁行２間になっていた。桁行の長さは約400cm、梁行の長さは約330cmである。柱穴の平面形は円形または楕円形で、西方向に位置するＰ５だけが２段掘りになっていた。南西方向に面した桁行の柱間隔はほぼ同じ距離になっていたが、北東方向に面した桁行の柱間隔は約180cmと約220cmで、長さが異なっていた。また北西方向に面した梁行の柱の間隔は約170cmと約160cmを測り、南東方向に面した梁行の柱の間隔は約150cmと約180cmとなり、どちらも長さが相違していた。この掘立柱建物の柱穴の底部のレベルは、桁行方向も梁行方向も地形に沿って高くなったり低くなったりしていた。

出土遺物はないが、竪穴住居21よりも古いことなどから、建物３は古墳時代後期の時期になるであろう。



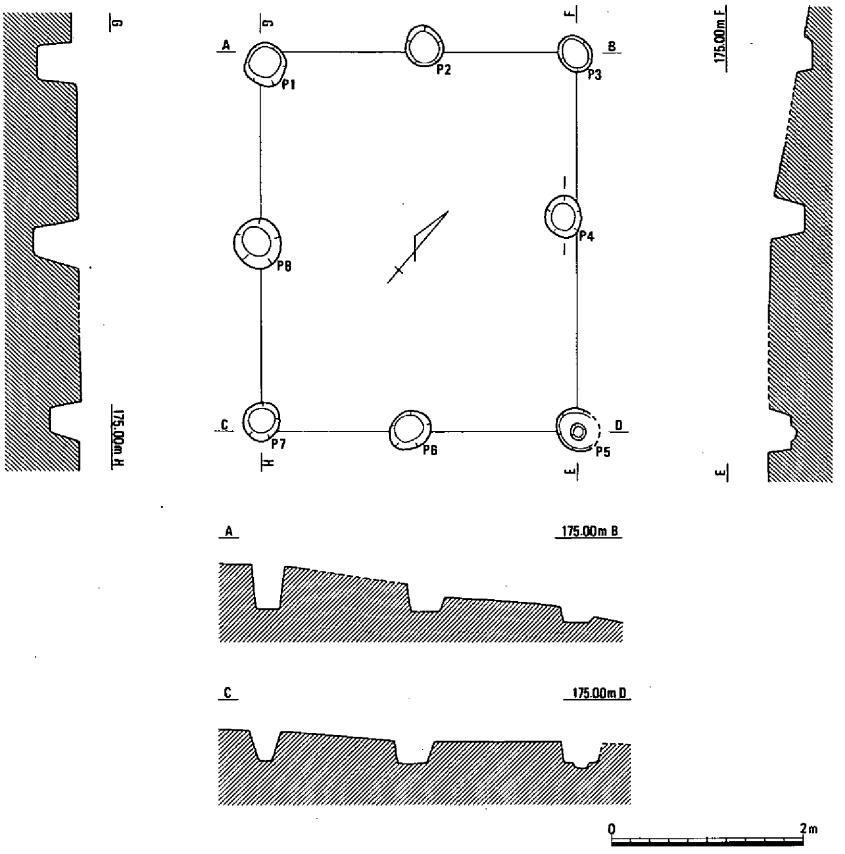
第94図　建物２（1／80）

建物４（第96図）

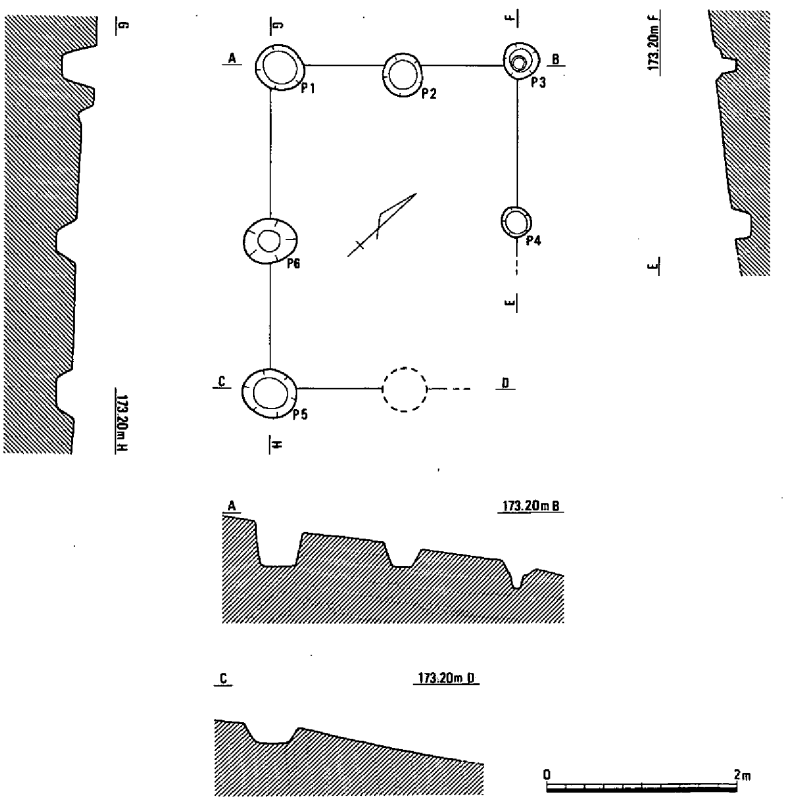
発掘調査を実施した惣台遺跡の南東端部に検出した掘立柱建物で、竪穴住居25と重複していた。この建物と竪穴住居25の新旧関係については、把握することができなかった。

この掘立柱建物の西方向に面した部分は、圃場整備事業によって著しく削平されていたため、２か所の柱穴が存在しなかったが、桁行２間、梁行２間の規模になると考えられた。棟方向はＮ－47°－Ｗを示し、桁行の長さ約340㎝、梁行の長さ約260㎝になると推定される。柱穴の平面形は円形または楕円形を呈し、北方向に位置するＰ３だけが２段掘りになっていた。柱穴の断面図は「Ｕ」字形または逆台形を呈し、褐色砂質土が堆積していた。この掘立柱建物の柱穴底部のレベルは一定でなく、桁行方向も梁行方向も地形に沿って高くなったり低くなったりしていた。

この掘立柱建物に確実に伴う出土遺物は存在しないが、西方向のＰ１の上面から須恵器の小破片を採集している。その形態的特徴や調整手法から、建物４は６世紀後葉の時期に属するのではなかろうか。



第95図　建物３（1／80）



第96図　建物４（1／80）

(4) 土　壙

土壙20（第83・97図）

調査範囲の南東部分に検出した土壙で、段状遺構26の床面に位置していた。段状遺構26の柱穴がこの土壙の南側に面した壁面を切っていたため、この土壙が段状遺構26よりも古いことが判明した。

平面形は長径167㎝、短径117㎝の楕円形を呈し、検出面からの深さは52㎝になっていた。東側の壁面は緩やかに湾曲して立ち上がっていたが、西側に面した壁面は直線的に斜め上方へ立ち上がっていた。土壙の底部はほぼ水平で断面形は「U」字形を呈し、内部に褐色土が堆積していた。

この土壙から出土した遺物は存在しないが、おそらく古墳時代後期の時期に属するであろう。

土壙21（第98図）

調査範囲の中央部より南東方向へ寄った地点に検出した遺構で、周辺には段状遺構25、段状遺構26、段状遺構27、竪穴住居23、土壙20、土壙22が存在する。

平面形は不整形な形態を呈し、長さ約300㎝、幅約130㎝、検出面からの深さ約12㎝になっており、溝の一部になるのかもしれない。底部は西方向から東方向に向かって傾斜し、内部に黒褐色土が堆積していた。

この遺構に伴う遺物は出土しなかったが、古墳時代後期の時期になるのではなかろうか。

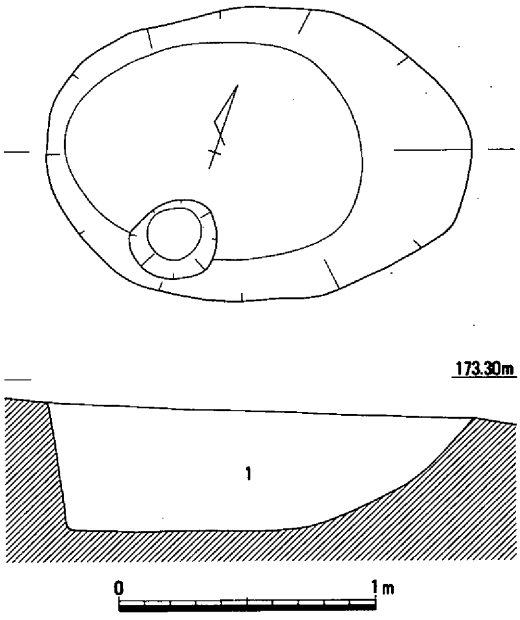
土壙22（第99図）

調査範囲の南東方向の地点に検出した土壙で、周辺には段状遺構25、段状遺構27、段状遺構28、竪穴住居23などが存在する。

この土壙の地形が高い部分には、最大の高さ44㎝を測る緩やかに湾曲した段が認められた。

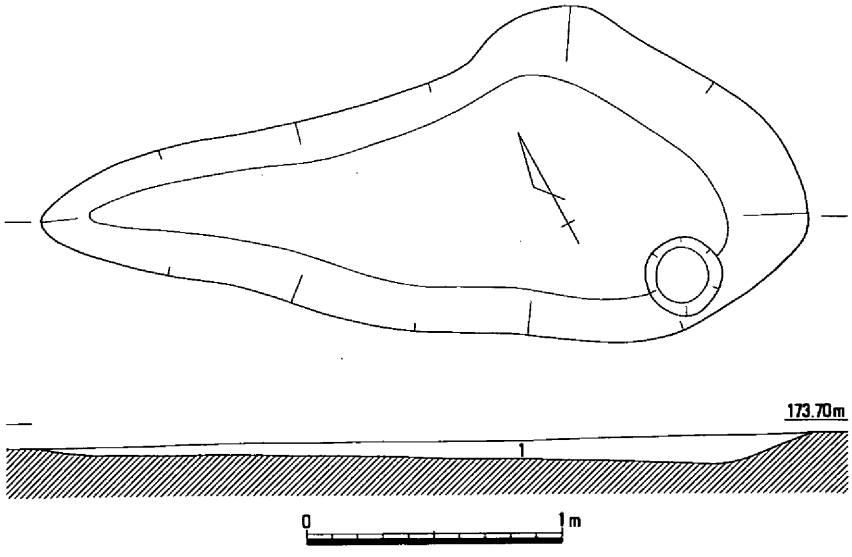
土壙の平面形は、長径約150㎝、短径約130㎝の楕円形に近い形態を呈し、検出面からの深さは約80㎝になっていた。底部はほぼ水平で、断面形は「U」字形を呈し、内部には暗黄褐色砂質土、淡褐色砂質土、褐色砂質土が堆積していた。

この土壙から出土した遺



1．褐色土

第97図　土壙20（1／30）



1．黒褐色土

第98図　土壙21（1／30）

物として、248の須恵器の杯身がある。推定口径13.5cm、器高3.0cmを測り、口縁端部の立ち上がりは低い。外面の底部は回転方向が右のヘラケズリを施し、外面の体部から口縁部にかけてと内面全体はヨコナデを行っている。胎土中には大きな砂粒を多く含み、焼成は著しく不良で、全体に浅黄橙色または淡黄色を呈している。

この須恵器の杯身の形態的特徴や調整手法から、土壙22は６世紀末葉の時期になるであろう。

土壙23（第100図）

調査範囲の南西部へ寄った地点に検出した遺構で、竪穴住居３と重なり合っていた。遺構の切り合い関係を精査した結果、この遺構が竪穴住居３の壁体の上面に造られており、この遺構が新しくて竪穴住居３が古いことが判明した。

平面形は長径85cm、短径80cmの楕円形に近い形態を呈し、検出面からの深さは30cmであった。断面形は浅い「U」字形を呈し、底部の中央部はわずかに窪んでいた。壁面は全体に火を受けて赤褐色を呈し、底部には炭化物が認められた。

出土遺物は存在しないが、おそらく古墳時代後期の時期に属するであろう。

なおこの遺構は、検出した状態から土壙として取り扱ったが、鉄生産に関係した炉跡になるのかもしれない。

土壙24（第101図）

建物１の西方向約５ｍの地点に検出した遺構である。

平面形は不整形な形態を呈し、底部は南西方向から北東方向に向かって傾斜していた。側面は全体に火を受けて赤褐色を呈し、底部には炭化物が認められた。

この遺構も鉄生産に関係した炉跡と推定され、古墳時代後期の時期になるであろう。

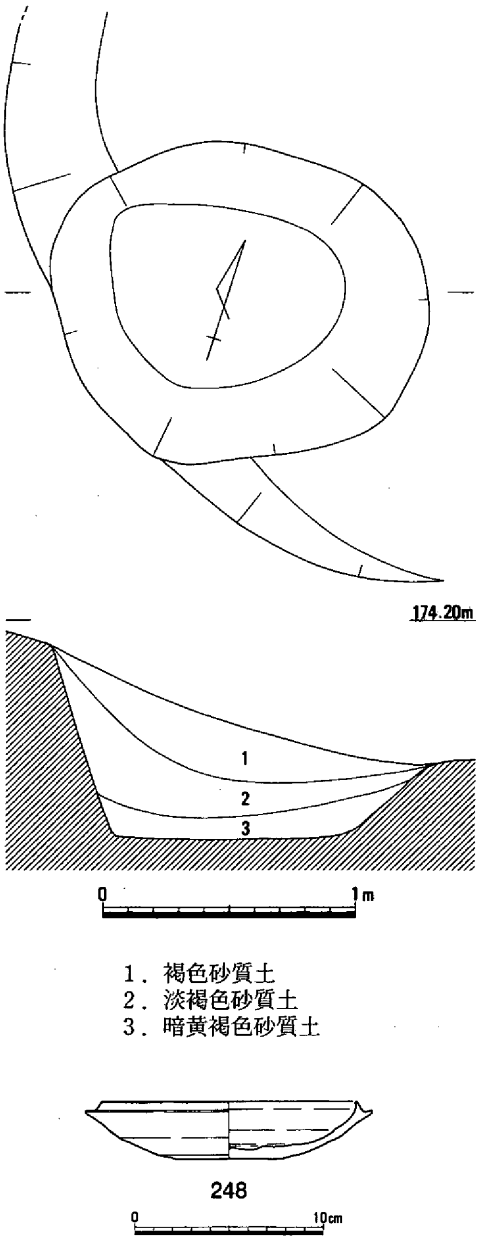
土壙25（第94・102図、図版45－３）

調査範囲の中央部よりやや西方向へ寄った地点に検出した土壙で、建物２と重なり合っていた。

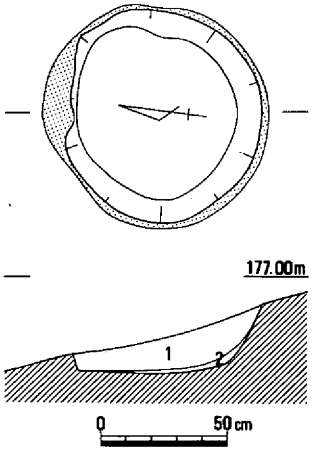
平面形は長辺86cm、短辺72cmの長方形を呈し、検出面からの深さは30cmであった。断面形は逆台形を呈し、床面がわずかに窪んでいた。側面は火を受けて赤褐色を呈していたが、床面は焼けていなかった。内部には炭化物が堆積し、火を受けて破損した河原石が認められた。

出土遺物として小破片の須恵器が存在するが、その形態的特徴や調整手法から、この土壙25は７世紀前葉の時期になると思われる。

この長方形を呈する土壙は、倉敷市西坂に所在した菅生小学校裏山遺跡[1]で検出された焼土土壙と同じもので、鉄生産に伴って白炭を作るために必要な土壙と考える。

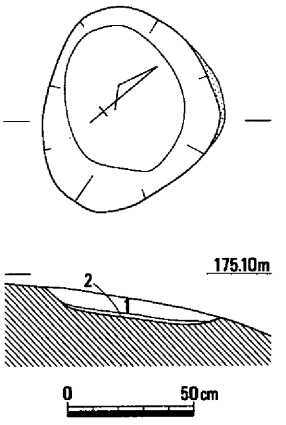


第99図　土壙22（1／30）・出土遺物（1／4）



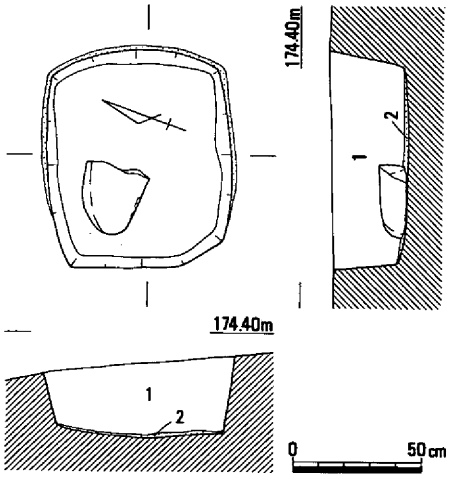
1．褐色土
2．黒色土（炭化物）

第100図　土壙23（1／30）



1．黄褐色土
2．黒灰色土（炭化物）

第101図　土壙24（1／30）



1．暗褐色土
2．炭化物

第102図　土壙25（1／30）

(5) 溝

溝１（第103図）

調査範囲の中央部よりやや西方向へ寄った地点に検出した溝で、周辺には竪穴住居17、建物１、建物２、土壙25などが存在する。

この溝は、総柱の掘立柱建物である建物２の雨落溝になるのではないか考えられたが、溝内の土砂と建物の柱穴内の土砂が異なっていただけでなく、直線的に延びた溝の方向と建物の棟方向が微妙に違っていたので、別々の遺構であると判断した。

検出した溝の長さは約450cm、検出面での幅は42～58cm、検出面での深さは９cmとなっていた。断面形は浅い「U」字形を呈し、底部のレベルがどの地点もほぼ同じであった。

出土遺物は検出できなかったが、溝内に堆積していた土砂などから、この溝は古墳時代後期の時期に属するであろう。

溝２（第104図）

調査範囲の中央部よりやや南方向へ寄った地点に検出した溝で、竪穴住居20を削平して竪穴住居21の上面へ直線的に延びているのが判明した。東側の端部は、精査したが確認できなかった。

検出面での幅は60～90cmを測り、最大の深さは15cmで、内部には淡褐色砂質土が堆積していた。

溝３（第105図）

前述した溝２の南側に検出した直線的に延びる溝で、延長約240cmになっていた。

検出面での幅は38～42cmを測り、深さは９～14cmで、内部には淡褐色砂質土が認められた。

出土遺物は存在しないが、溝の内部に竪穴住居や段状遺構の覆土と同じ淡褐色砂質土が確認されたので、溝３は前述した溝２と同様に、古墳時代後期の時期になるであろう。

註

（１）浅倉秀昭・中野雅美・亀山行雄「菅生小学校裏山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』81　1993年

第６節　時期不明の遺構

(1) 溝

溝４（第106図）

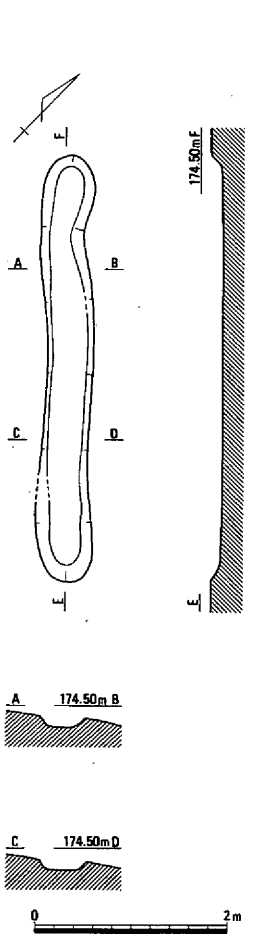
調査範囲の中央部よりやや西方向へ寄った地点に検出した遺構で、南方向約５ｍの位置には土壙24が、南東方向約５ｍの位置には建物１がそれぞれ存在する。

比較的傾斜のある斜面に、等高線と平行する方向を示して延長約590㎝の痕跡が確認されたが、地形の低い北東側には壁面の立ち上がりが認められなかった。底部と思われる平坦部分のレベルは、南東端部から約150㎝だけ北西方向へ移行した範囲は緩やかに下がるが、そこからさらに北西端部へ移行すると５°から７°の傾斜で上がっていたのである。

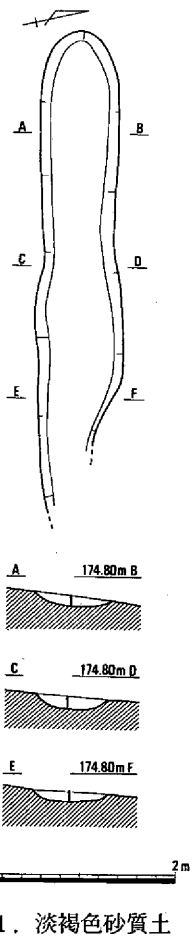
この遺構は、津山市綾部の緑山遺跡[(1)]などで検出された鉄生産に伴って白炭を焼く横口付炭窯が削平されたものの可能性が強く、横口焼成部や煙道までも破壊されてしまったのではなかろうか。

註

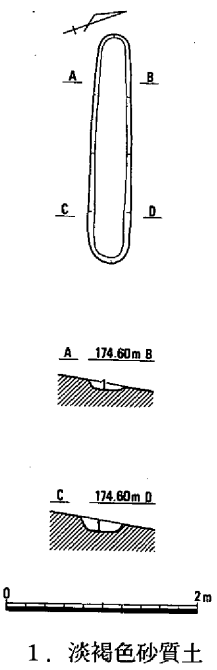
（１）中山俊紀「緑山遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第19集　1986年



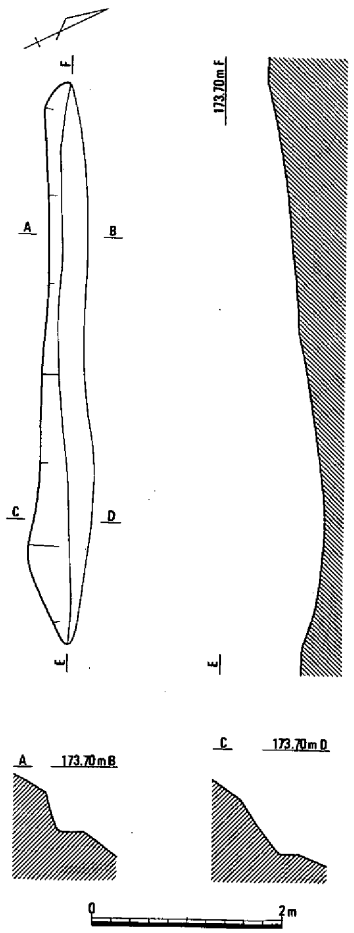
第103図　溝１(1／80)



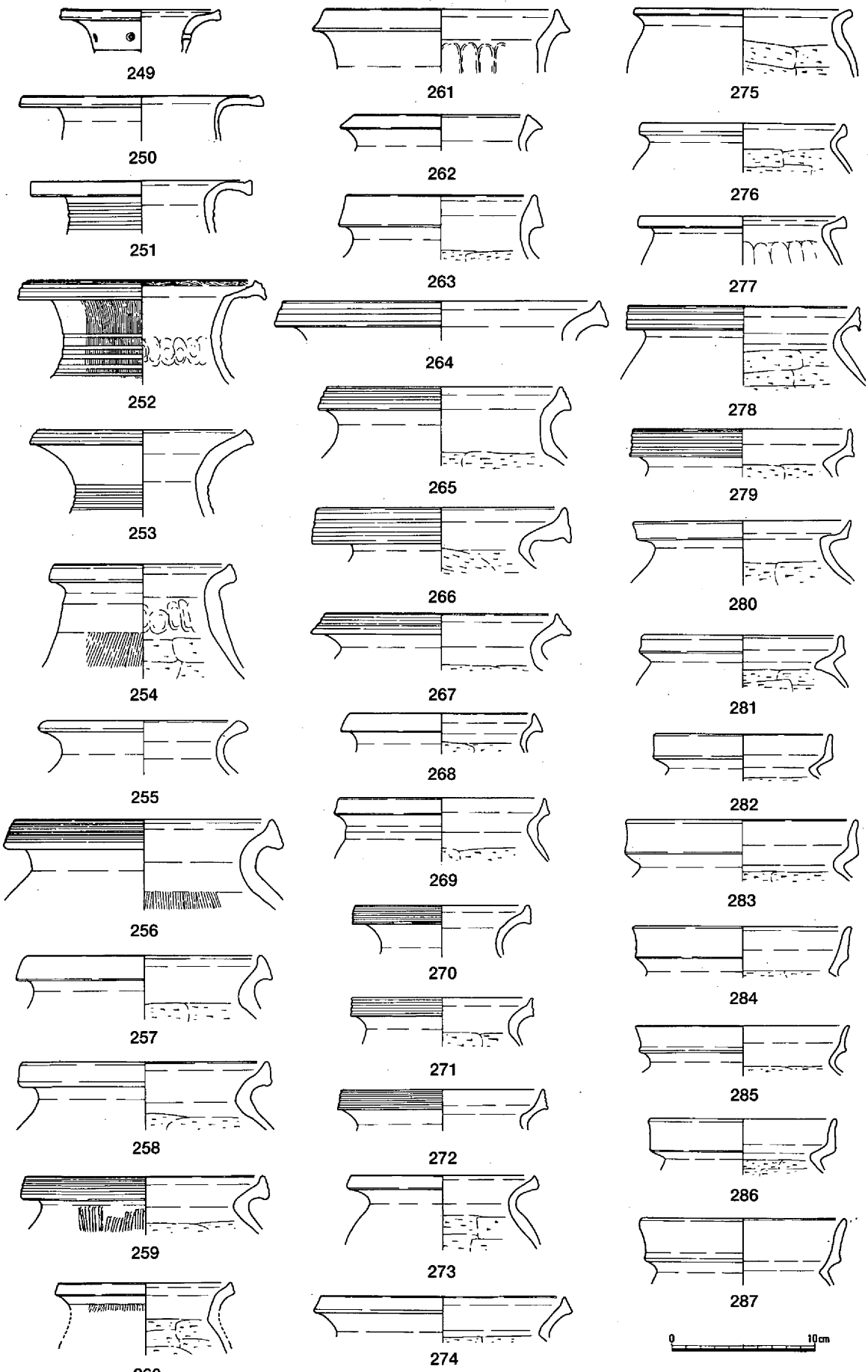
第104図　溝２(1／80)



第105図　溝３(1／80)



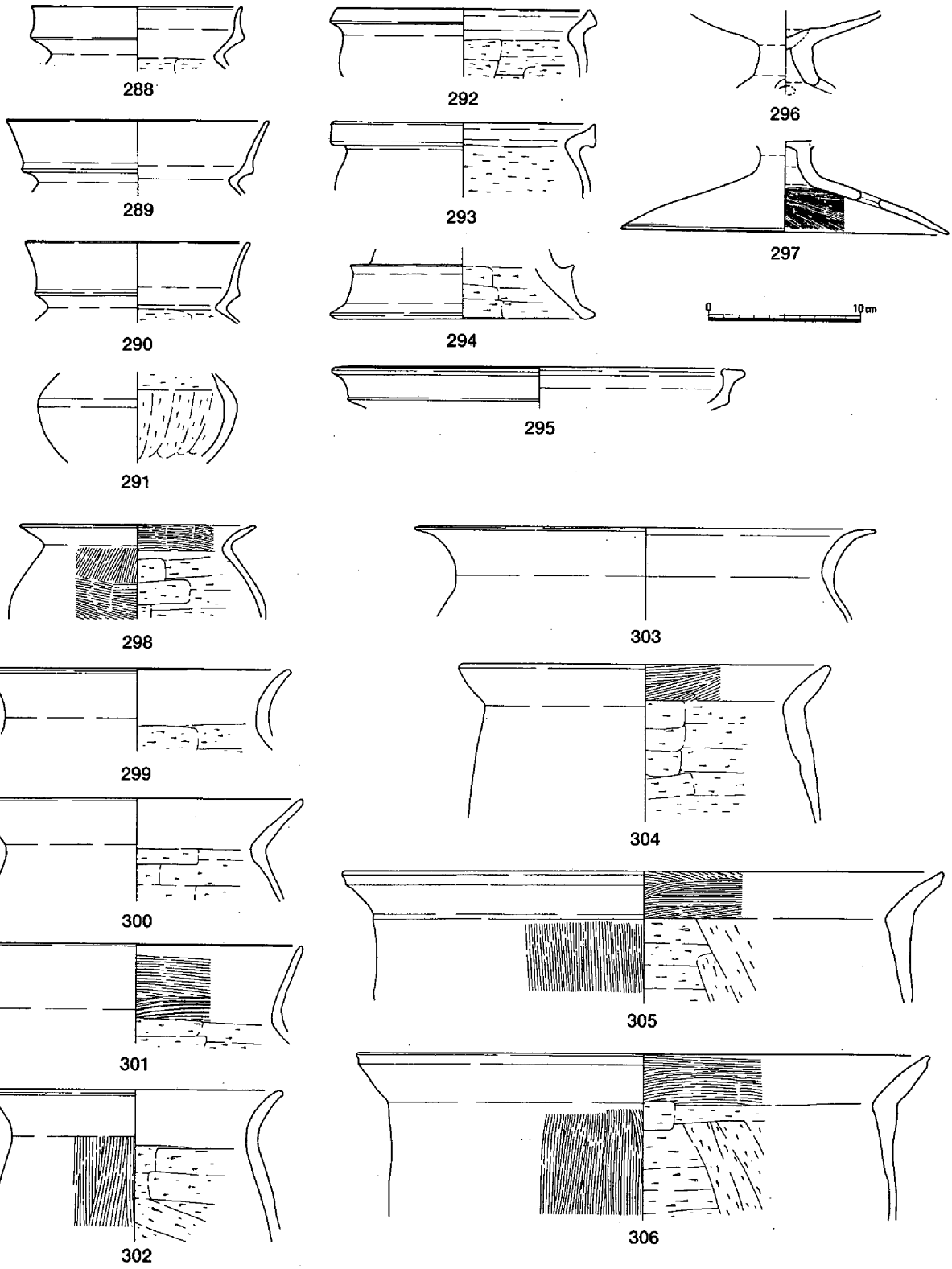
第106図　溝４(1／80)



第107図　遺構に伴わない遺物（1）（1／4）

第７節　遺構に伴わない遺物

惣台遺跡から出土した遺構に伴わない遺物には、弥生土器、土師器、須恵器、勝間田焼、亀山焼の

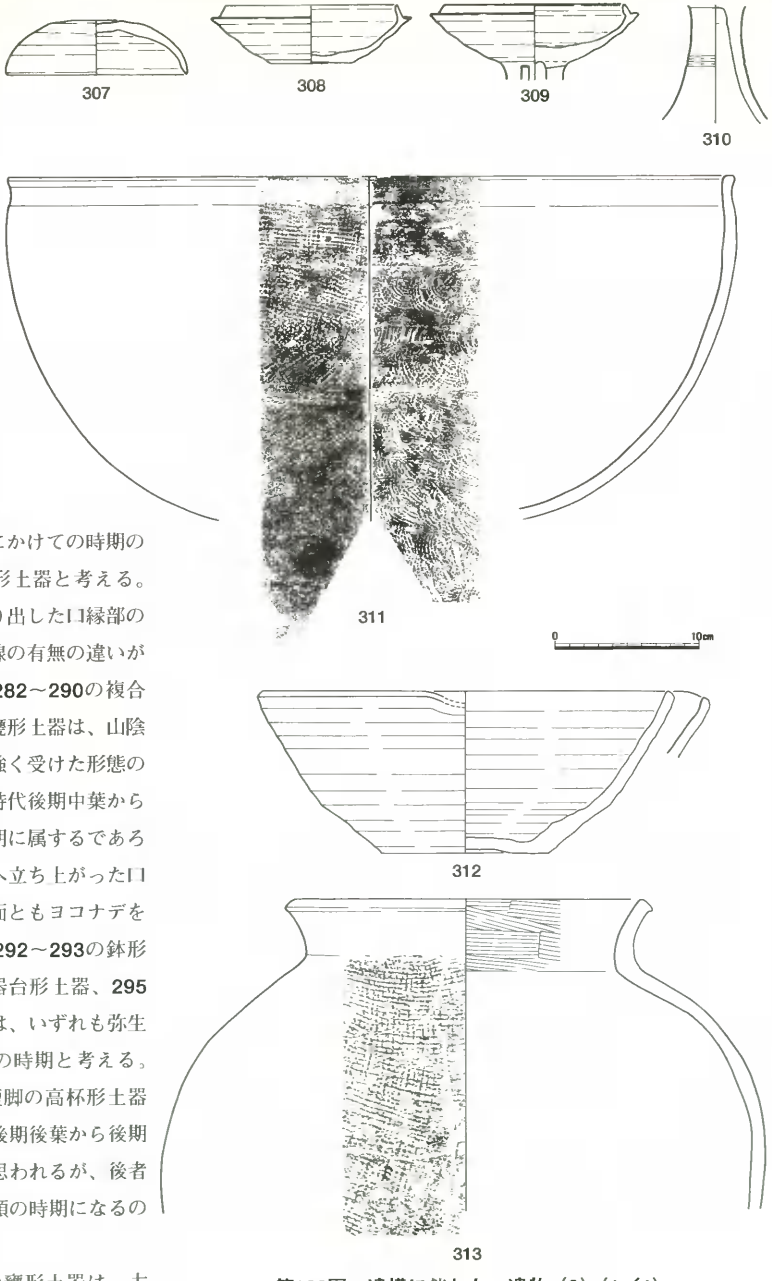


第108図　遺構に伴わない遺物（2）（1／4）

土器や陶器以外に、石器や鉄器も採集されている。

弥生土器の中でも249～252の壺形土器は、弥生時代中期後葉の時期と考えられるもので、口縁部が大きく外湾し、穿孔や波状文が認められるものも存在する。外面の頸部には凹線や縦方向のハケメが施され、内面には指頭圧痕が残存するものもある。253～278の口縁部破片は、弥生時代後期初頭から後期前葉にかけての時期の壺形土器と甕形土器と考える。斜め上方へ張り出した口縁部の外面には、凹線の有無の違いが認められる。282～290の複合口縁を有する甕形土器は、山陰地方の影響を強く受けた形態の土器で、弥生時代後期中葉から後期後葉の時期に属するであろう。斜め上方へ立ち上がった口縁部は、内外面ともヨコナデを行っている。292～293の鉢形土器、294の器台形土器、295の高杯形土器は、いずれも弥生時代後期前葉の時期と考える。296と297の短脚の高杯形土器は、弥生時代後期後葉から後期末葉の時期と思われるが、後者は古墳時代初頭の時期になるのかもしれない。

298～304の甕形土器は、古



第109図　遺構に伴わない遺物（3）（1／4）

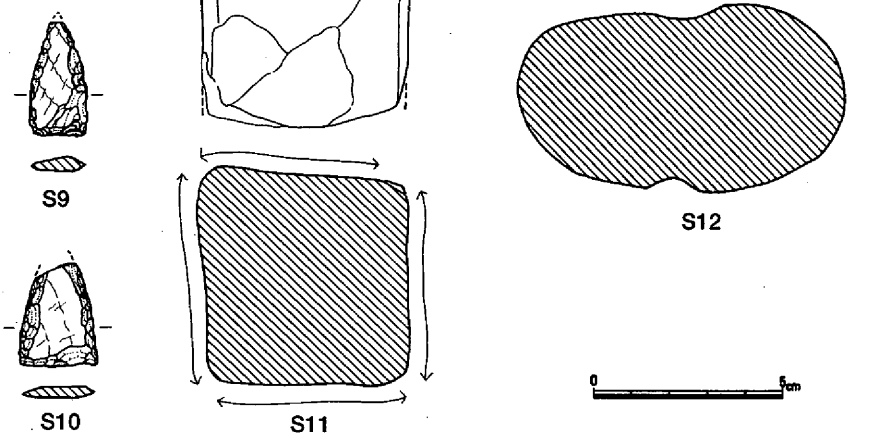
墳時代の時期に属すると考える。305と306の甕形土器は、平安時代の時期になるであろう。これらの土器の口縁部は内外面ともヨコナデを行っているが、内面に横または斜め方向のハケメが認められるものもある。胴部の外面は、縦方向のナデを行っているものと縦方向のハケメが存在するものとがあるが、内面はいずれもヘラケズリを施している。

307～311の須恵器は、6世紀後葉から7世紀前葉の時期と考える。杯蓋内面の天井部には仕上げナデを施し、杯身外面の底部はヘラ切り未調整である。小破片の鉢の内面には青海波のタタキ痕跡の上面にヨコナデを行い、外面には格子目状のタタキ痕跡やカキメが認められる。

312の勝間田焼の捏鉢は、口径28.3cm、器高11.4cmで片口を有し、13世紀前葉の時期に属するであろう。内外面とも全体にヨコナデを行い、外面底部はヘラ切り未調整で、内面底部には仕上げナデを施している。313の亀山焼の甕は、口径24.3cmを測る瓦質のもので、14世紀後葉から15世紀前葉の時期に属するであろう。内面の口縁部には横方向のハケメが存在し、外面の胴部には格子目のタタキが認められる。

石器としては、S9とS10の鏃、S11の砥石、S12の錘がある。

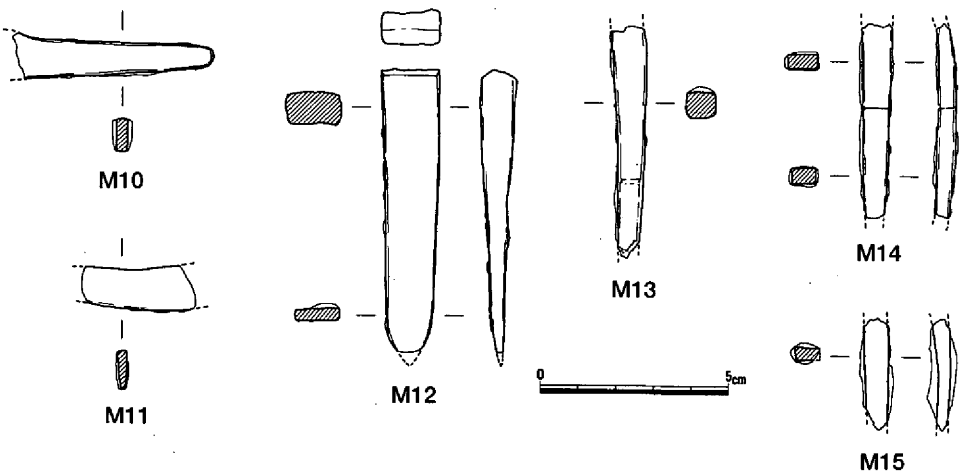
2点の鏃は、どちらも材質がサヌカイトで、先端部を欠損している。材質が砂岩の砥石は、4面すべてを使用している。流紋岩の錘は完形品で、溝内が磨滅している。



第110図　遺構に伴わない遺物（4）（1／2）

鉄器としては、M10とM11の刀子とM12～M15の釘がある。

2点の刀子は、茎だけの破片と刀身だけの破片で、全体の形が不明である。釘の断面形は、いずれも長方形または正方形を呈し、先端部分を欠損している。M12は比較的残存状態が良好であるが、頭部に折り返しは認められない。



第111図　遺構に伴わない遺物（5）（1／2）

第８節　小　　結

惣台遺跡で検出した遺構は、竪穴住居25軒、段状遺構30基、掘立柱建物４棟、土壙25基、溝４条であるが、土壙と溝を除くほとんどの遺構が重なり合っていた。

竪穴住居の平面形態には、円形のものと方形のものがある。前者は、弥生時代中期後葉から後期後葉の時期に属するが、大多数のものは弥生時代後期前葉に造られていた。最も古いものは柱構造が６本柱の竪穴住居４で、壺形土器や高杯形土器以外に紡錘車や石鏃が出土している。後者は、弥生時代後期後葉の時期のものと、古墳時代後期である６世紀末葉から７世紀前葉にかけての時期のものが存在するが、１軒の竪穴住居以外はすべてが古墳時代後期に属するものである。平面形が隅丸方形の竪穴住居３は、柱構造が４本柱で高床部と方形土壙が伴い、甕形土器や台付鉢形土器以外に算盤玉形土玉や鉄鏃が出土している。竪穴住居19には造り付けのカマドが存在し、床面の中央部に焼土で覆われた浅い柱穴状の窪みを確認した。建て替えが行われていた竪穴住居を検討したところ、竪穴住居７～10では、建て替えが行われるたびに竪穴住居そのものの規模が大きくなって、柱構造が４本柱から６本柱を経て９本柱に変化していたが、竪穴住居11～15では、建て替えが行われるたびに規模が大きくなっていたものが、途中の段階で一転して小型の竪穴住居に変化していた。だから柱構造も６本柱から７本柱を経て、突然に４本柱になっていたのである。また竪穴住居２・３では、出土遺物の時期差から推定して、竪穴住居３が建てられるまでに長期間の空白があったと考えられた。さらに竪穴住居18・19では、一部の壁体が拡張されただけなのに、４か所の柱穴は別の地点へ移動していた。

段状遺構には、１か所または２か所の柱穴を検出したものもあるが、ほとんどは柱穴が存在しなかった。弥生時代後期と推定されるものは、段状遺構１～４の４基だけで、大多数は古墳時代後期のものである。調査範囲の南東端部で検出した段状遺構30からは、カマドを含む多くの土器が出土した。

４棟の掘立柱建物は、いずれも２間×２間の小型で古墳時代後期に属すると思われるもので、建物２だけが総柱の掘立柱建物であった。

25基の土壙のうち３基は、縄文時代晩期の時期と推定される落とし穴で、底部に柱穴状の窪みが認められ、土壙２からはサヌカイト製で基端部の長い石鏃が出土した。また別の３基の土壙には、火を受けて赤褐色に変色した部分や炭化物の堆積が認められた。土壙23と土壙24は鉄生産に関係した炉跡と考えられ、土壙25は鉄生産に伴って白炭を作るために必要な焼成土壙で、いずれも古墳時代後期の遺構である。残る19基の土壙は、弥生時代後期の貯蔵穴と推定されるもので、断面形が袋状になっているものが多く、調査範囲の西方向へ寄った尾根状を呈して少し高い部分に集中して存在した。土壙18は竪穴住居４と近接した地点に検出されたが、両遺構から出土した弥生土器の時期が異なるので、土壙18は竪穴住居４に伴う貯蔵穴にはならないことが判明した。

４条の溝のうち３条は古墳時代後期のものと推定されるが、残る１条は時期が不明であるものの、鉄生産に伴って白炭を焼く横口付炭窯が削平されたものかもしれない。

以上の検出した遺構から惣台遺跡の変遷を考えれば、縄文時代晩期の段階に３基の落とし穴が造られ、弥生時代中期末葉から後期前葉にかけての時期に集落が誕生し、しばらく弥生時代後期後葉まで継続するが、古墳時代になると集落は途絶えてしまい、古墳時代後期の６世紀後葉に再び集落が営まれたものの、短期間のうちに消滅しているのである。

表－1　惣台遺跡新旧遺構名称対照表

新遺構名	旧遺構名	時　期
竪穴住居1	NO. 3	弥生時代後期
竪穴住居2	NO. 7	弥生時代後期
竪穴住居3	NO. 2	弥生時代後期
竪穴住居4	NO. 1	弥生時代中期
竪穴住居5	NO.22	弥生時代後期
竪穴住居6	NO.23	弥生時代後期
竪穴住居7	NO.88	弥生時代後期
竪穴住居8	NO.89	弥生時代後期
竪穴住居9	NO.39	弥生時代後期
竪穴住居10	NO.41・90	弥生時代後期
竪穴住居11	NO.91	弥生時代後期
竪穴住居12	NO.78	弥生時代後期
竪穴住居13	NO.62・66	弥生時代後期
竪穴住居14	NO.92	弥生時代後期
竪穴住居15	NO.75	弥生時代後期
竪穴住居16	NO.60	弥生時代後期
竪穴住居17	NO. 5	古墳時代後期
竪穴住居18	NO.35	古墳時代後期
竪穴住居19	NO. 4	古墳時代後期
竪穴住居20	NO.43	古墳時代後期
竪穴住居21	NO.48	古墳時代後期
竪穴住居22	NO.53	古墳時代後期
竪穴住居23	NO.50	古墳時代後期
竪穴住居24	NO.51	古墳時代後期
竪穴住居25	NO.38	古墳時代後期
段状遺構1	NO. 6	弥生時代後期
段状遺構2	NO.18	弥生時代後期
段状遺構3	NO.54	弥生時代後期
段状遺構4	NO.55	弥生時代後期
段状遺構5	NO.17	古墳時代後期
段状遺構6	NO.44	古墳時代後期
段状遺構7	NO.45	古墳時代後期
段状遺構8	NO.64	古墳時代後期
段状遺構9	NO.85	古墳時代後期
段状遺構10	NO.79	古墳時代後期
段状遺構11	NO.81	古墳時代後期
段状遺構12	NO.86	古墳時代後期
段状遺構13	NO.80	古墳時代後期
段状遺構14	NO.82	古墳時代後期
段状遺構15	NO.76	古墳時代後期
段状遺構16	NO.84	古墳時代後期
段状遺構17	NO.74	古墳時代後期
段状遺構18	NO.71	古墳時代後期
段状遺構19	NO.72	古墳時代後期

新遺構名	旧遺構名	時　期
段状遺構20	NO.73	古墳時代後期
段状遺構21	NO.59	古墳時代後期
段状遺構22	NO.46	古墳時代後期
段状遺構23	NO.70・83	古墳時代後期
段状遺構24	NO.69	古墳時代後期
段状遺構25	NO.47	古墳時代後期
段状遺構26	NO.68	古墳時代後期
段状遺構27	NO.49	古墳時代後期
段状遺構28	NO.61	古墳時代後期
段状遺構29	NO.42	古墳時代後期
段状遺構30	NO.37	古墳時代後期
建物1	NO.15	古墳時代後期
建物2	NO.14	古墳時代後期
建物3	NO.63	古墳時代後期
建物4	NO.40	古墳時代後期
土壙1	NO.19	縄文時代晩期
土壙2	NO.36	縄文時代晩期
土壙3	NO.24	縄文時代晩期
土壙4	NO.10	弥生時代後期
土壙5	NO.34	弥生時代後期
土壙6	NO.26	弥生時代後期
土壙7	NO.27	弥生時代後期
土壙8	NO.28	弥生時代後期
土壙9	NO.29	弥生時代後期
土壙10	NO.32	弥生時代後期
土壙11	NO.30	弥生時代後期
土壙12	NO.31	弥生時代後期
土壙13	NO.33	弥生時代後期
土壙14	NO.25	弥生時代後期
土壙15	NO.20	弥生時代後期
土壙16	NO.12	弥生時代後期
土壙17	NO.21	弥生時代後期
土壙18	NO. 8	弥生時代後期
土壙19	NO.93	弥生時代後期
土壙20	NO.77	古墳時代後期
土壙21	番号なし	古墳時代後期
土壙22	NO.56	古墳時代後期
土壙23	NO. 9	古墳時代後期
土壙24	NO.11	古墳時代後期
土壙25	NO.13	古墳時代後期
溝1	番号なし	古墳時代後期
溝2	NO.52	古墳時代後期
溝3	NO.58	古墳時代後期
溝4	NO.16	時期不明

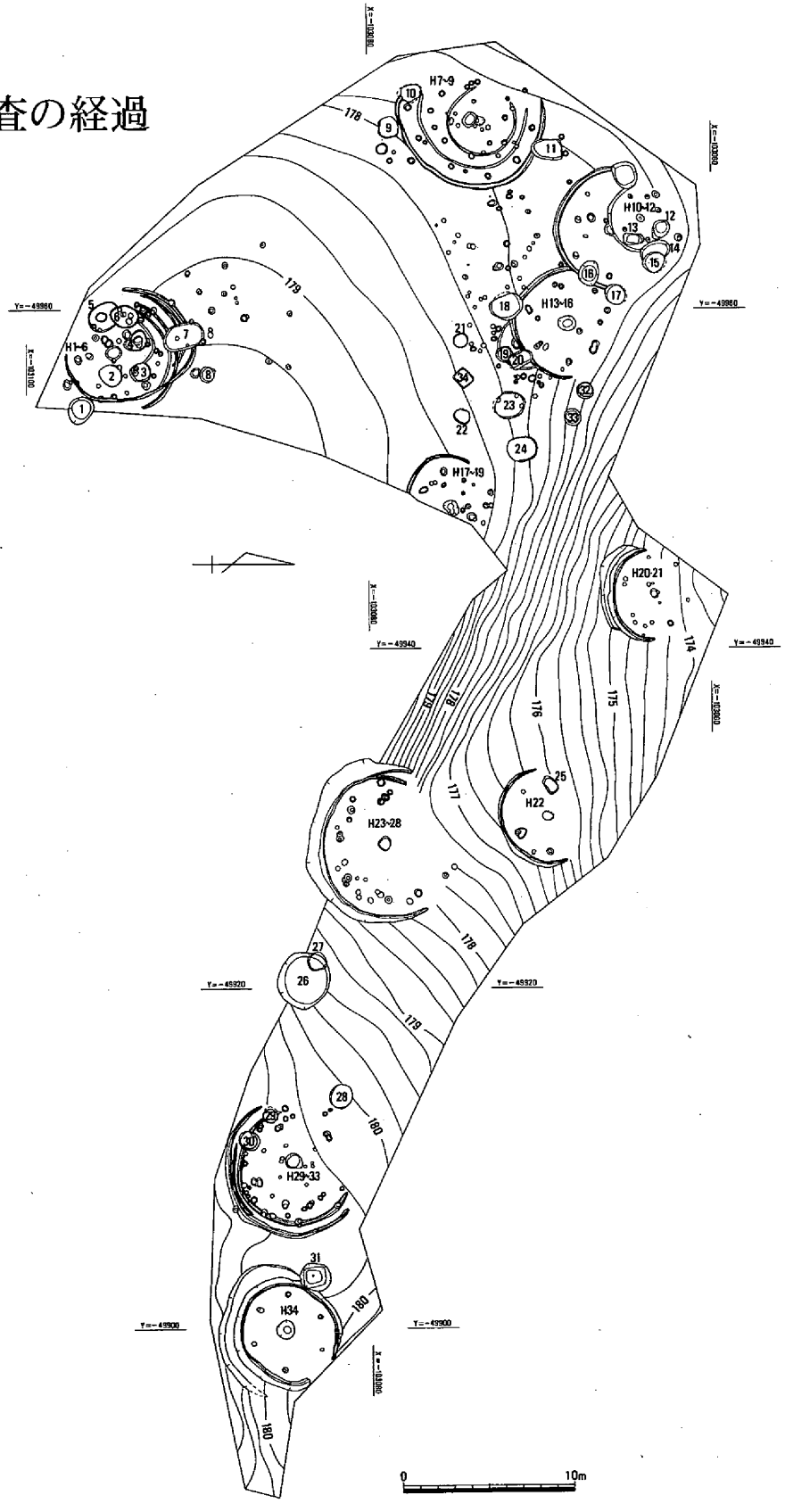
第５章　野辺張遺跡

第１節　調査の経過

野辺張遺跡は、平成元年３月31日に久世町教育委員会によって発行された『久世町埋蔵文化財分布地図』には掲載されていなかったが、目木川流域の沖積平野に向かって舌状に張り出した丘陵の先端部が平坦になっていたので、地元の人々は篠向山城に関連した砦跡が存在すると考えていた。

平成６年の８月後半から全面調査を実施する予定にしていた旦山遺跡については、遺跡が所在する地点の用地買収が諸般の事情で難行し、発掘調査ができない見通しになったのである。そのために、全面調査の継続中であった惣台遺跡の発掘調査を一時中断して、分布調査によって明らかになっていた遺跡所在推定地の確認調査を早急に行うことにしたのである。

平成６年７月11日には遺跡所在推定地の20地点である第２図のＴ４を、７月18日から21日にかけ



第１図　野辺張遺跡遺構配置図（1／400）

ては19地点と２地点であるＴ１～Ｔ３とＴ５をそれぞれ掘り下げた。その結果、丘陵の尾根上に位置するＴ４とＴ５には遺構が存在しなかったが、丘陵の斜面であるＴ１からＴ３の３地点には竪穴住居を検出し、比較的多くの弥生土器が出土した。したがって、その丘陵の斜面の範囲を全面調査の対象地である「野辺張遺跡」と命名し、先旦山遺跡１区の調査が終了した後の平成６年12月１日から全面調査に着手した。地元の人々が篠向山城の砦跡が存在すると考えていた地点には、砦跡を想定させる遺構や遺物が何もなく、丘陵の斜面に数軒の竪穴住居が確認されたのである。

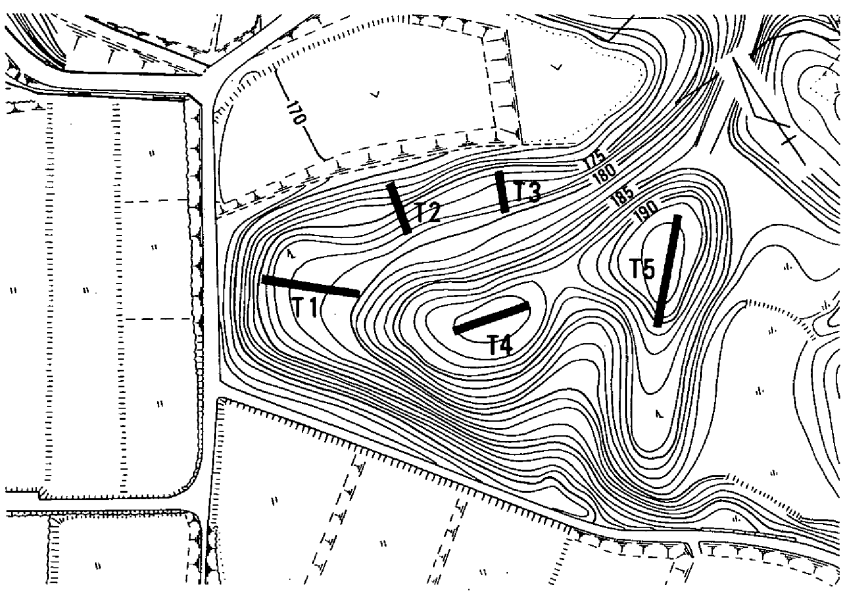
野辺張遺跡の全面調査の結果、竪穴住居や土壙を数多く検出し、弥生時代後期の集落跡であることが判明した。また人骨片が出土した江戸時代の近世土壙墓を２基だけ確認したが、詳細な点については不明である。

第２節　調査の概要

野辺張遺跡の所在地は、西方向の目木川流域の沖積平野に面した地点が、舌状に張り出した丘陵先端の頂部に存在する。旦山遺跡に面した北方向から東方向にかけての細長い部分は、丘陵の緩斜面に位置する。この遺跡で検出した遺構は、竪穴住居34軒と土壙34基であるが、前者の地点には竪穴住居や土壙が丘陵先端の縁辺部に存在し、丘陵中央部の平坦面には遺構が確認できなかった。この遺構が検出できなかった平坦面は、集落全体の住民が共同で使用する広場であった可能性が強い。

竪穴住居はいずれも弥生時代後期のものばかりで、何度も建て替えが行われているものが多い。竪穴住居１～６や竪穴住居７～９では、建て替えが行われるたびに竪穴住居そのものの規模が大きくなって、柱構造が４本柱から６本柱を経て８本柱に変化していたが、竪穴住居23～28では、逆に建て替えが行われるたびに竪穴住居そのものの規模が小さくなって、柱構造が10本から９～５本柱を経て４本柱になっていた。また竪穴住居７～９には、近接した地点に土壙９～11が検出され、それぞれの竪穴住居に伴う貯蔵穴が確認された。竪穴住居１～６と竪穴住居23～28は、地形の高い部分に面した壁体が急勾配の斜面の下端部に接して存在するか急勾配の斜面の途中に発見されたため、竪穴住居の斜面に面した上屋構造がどのようになるのか、理解することができなかった。

土壙34基のうち２基は江戸時代の近世土壙墓で、両土壙墓とも人骨片が残存していた。また１基は時期不明の長方形土壙で、焼土や炭化物が認められた。残る31基の土壙は弥生時代後期に属する貯蔵穴と推定されるもので、断面形が袋状を呈するものや検出面から深いものも存在した。



第２図　野辺張遺跡試掘トレンチ位置図（1／2000）

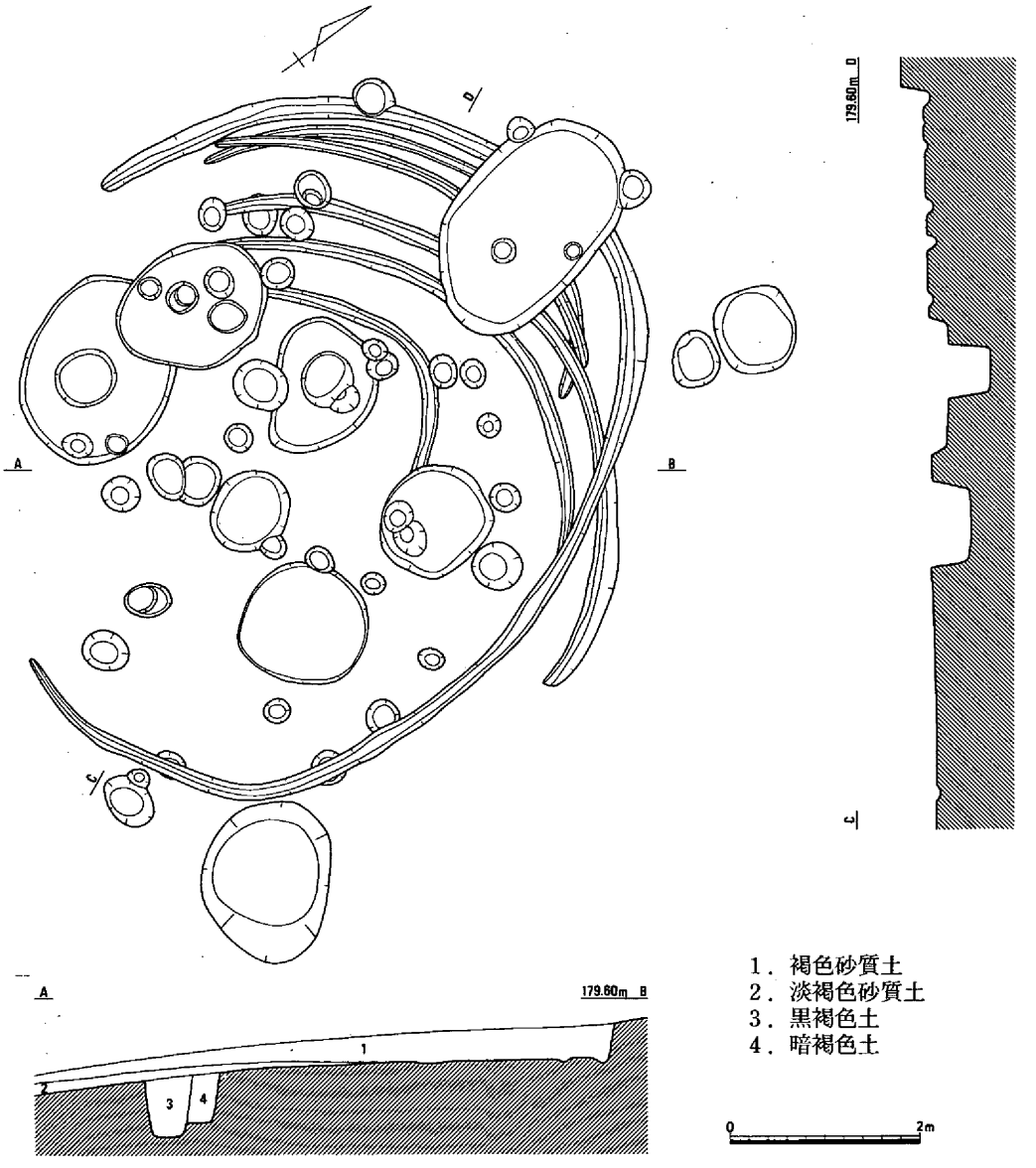
第３節　弥生時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居

竪穴住居１（第３～５図、図版53－１）

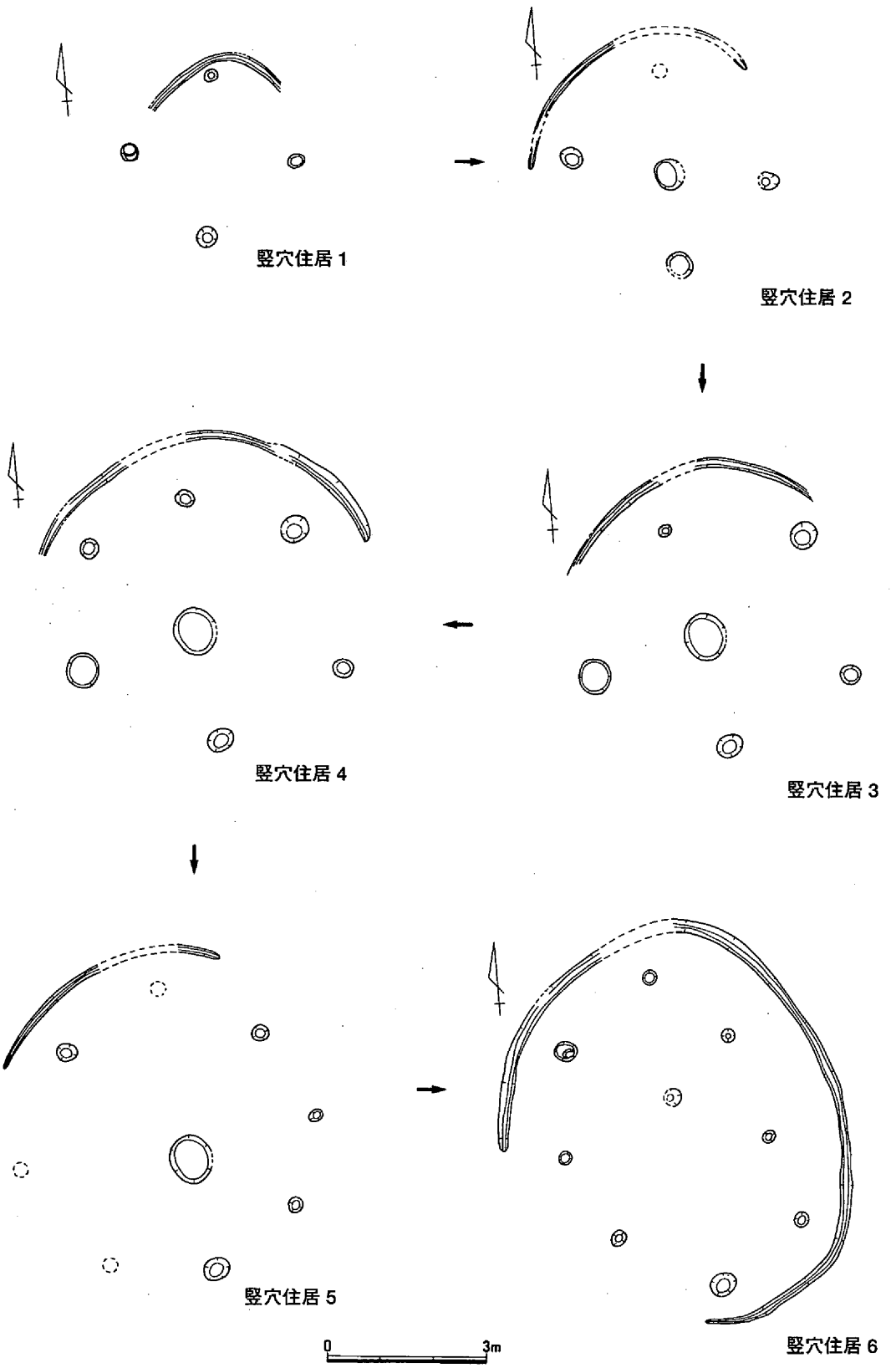
調査範囲の南西端部に検出した小規模な竪穴住居で、同じ地点で何度も建て替えが行われたため、６軒の竪穴住居が重なり合っていた。さらにこの地点には８基の土壙も検出され、竪穴住居と土壙が複雑に切り合っていた。

検出した遺構は、緩やかに湾曲した壁体溝と思われる溝の一部と４か所の柱穴だけで、精査したにもかかわらず中央穴は確認できなかった。溝の検出面での幅は12～26cmを測り、深さは４～６cmであった。柱穴の平面形は円形に近い形態を呈し、柱穴間の距離は210～230cmになっていた。



第３図　竪穴住居１～６、土壙１～８（1／80）

この竪穴住居に伴う遺物はないが、重なり合った６軒の竪穴住居のうちでは、最初に造られたものであることを確認しているので、竪穴住居１はおそらく弥生時代後期前葉の時期に属するであろう。



第４図　竪穴住居１～６変遷図（1／120）

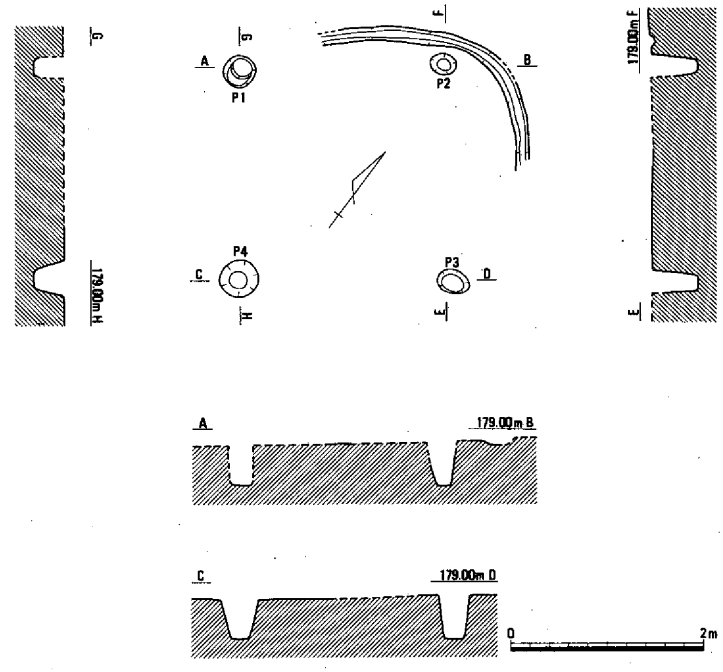
竪穴住居２（第３・４・６図、図版53－１）

前述した竪穴住居１と同じ場所である調査範囲の南西端部に検出した竪穴住居で、全体の規模が竪穴住居１よりも比較的大きくなっている。

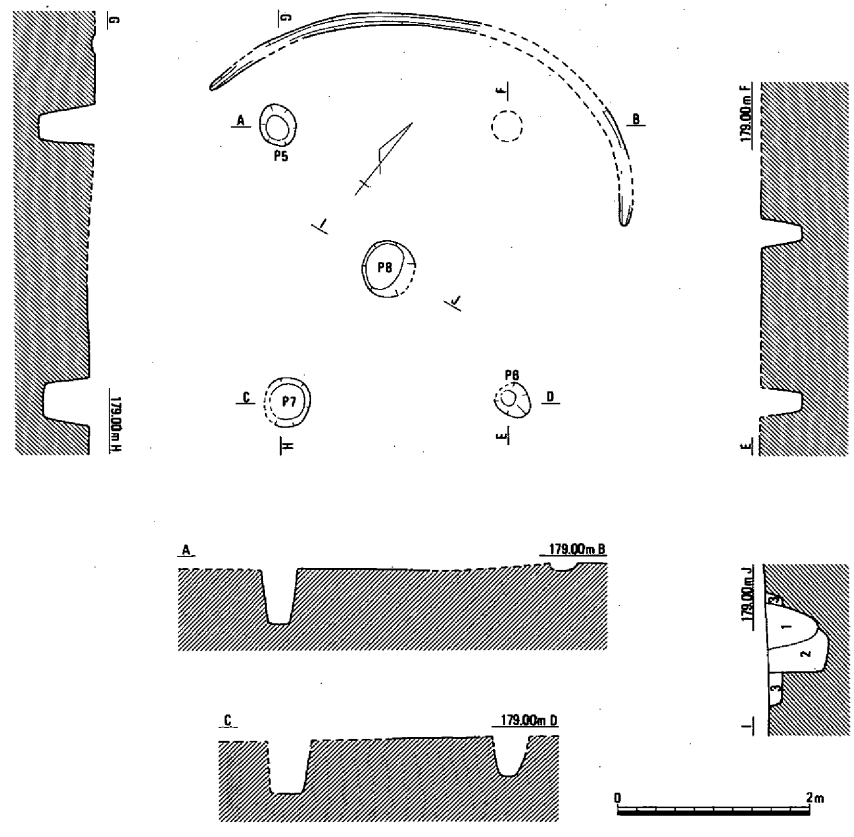
平面形は円形に近い形態を呈するが、地形の高い北側に面した部分に、緩やかに湾曲した弧を描く壁体溝と思われる溝の一部が存在し、北側隅に位置するものを除く３か所の柱穴と中央穴を検出した。

この竪穴住居の柱構造は４本柱で、柱穴間の距離は230cmと280cmになっていた。北側隅に位置する柱穴は、土壙７によって削平されていたため、存在しなかった。３か所の柱穴の規模はほぼ同じで、平面形は円形または楕円形に近い形態を呈していた。中央穴の平面形は短径52cm、長径60cmの楕円形を呈し、断面形は「Ｕ」字形で内部に褐色砂質土が堆積していた。この中央穴は土壙４を新しく切って造られていたが、後になって西側の部分を、内部に淡褐色砂質土が存在する竪穴住居６の中央穴によって削平されていた。

この竪穴住居に確実に伴う遺物は特定できないが、竪穴住居や土壙の切り合い関係から判断して、竪穴住居２は弥生時代後期前葉の時期になるであろう。



第５図　竪穴住居１（1／80）



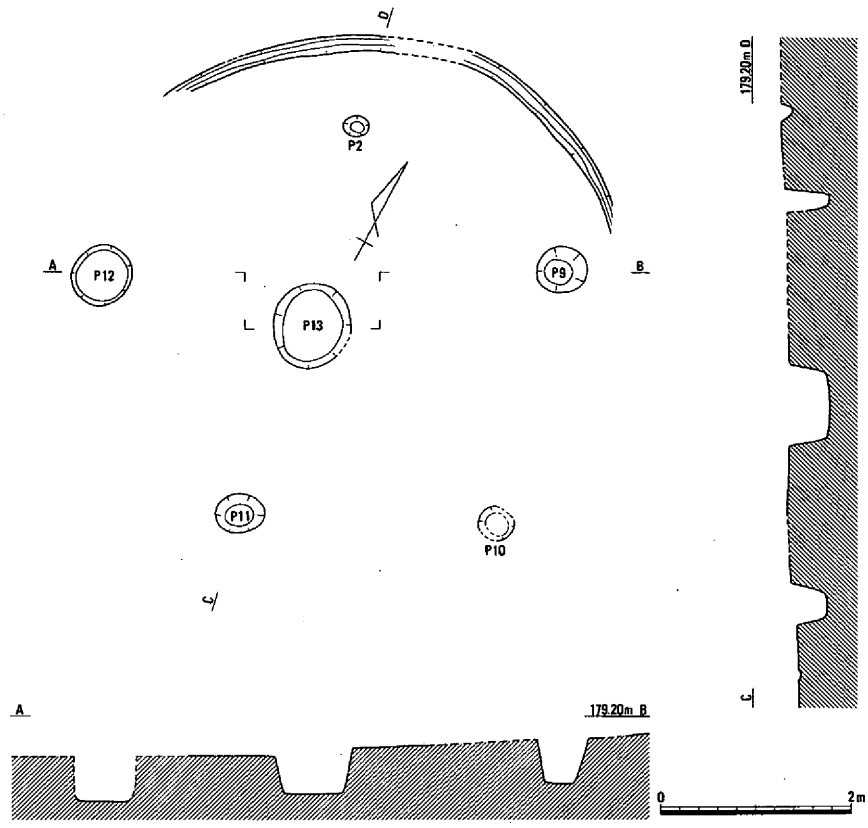
１．淡褐色砂質土　　２．褐色砂質土　　３．暗黄褐色砂質土

第６図　竪穴住居２（1／80）

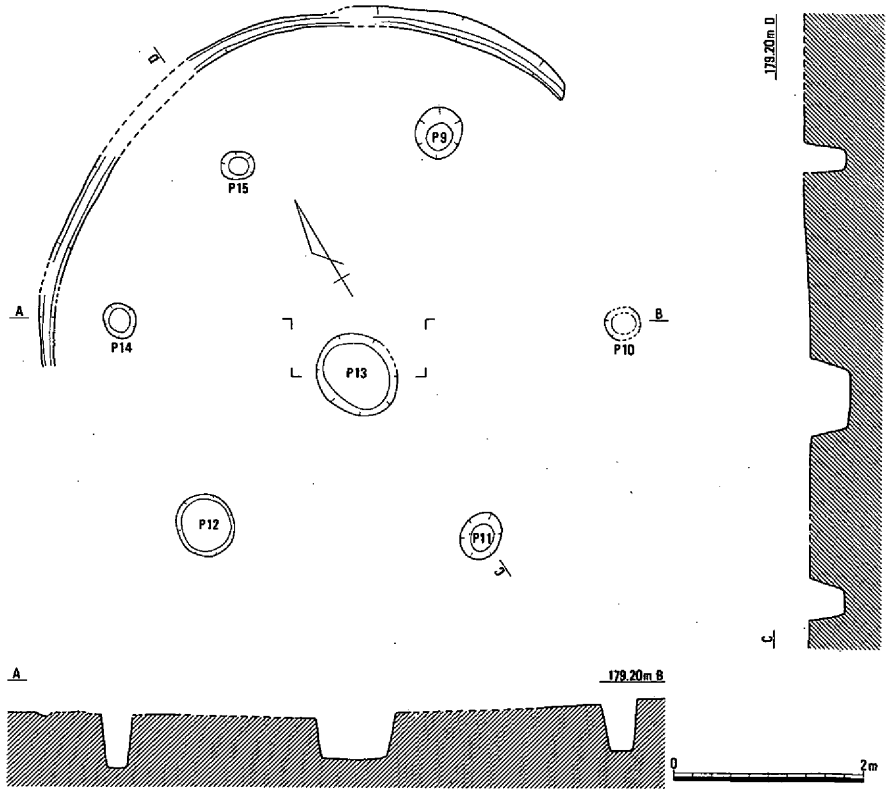
竪穴住居３（第３・４・７図、図版53－１）

調査範囲の南西端部に前述した竪穴住居１や竪穴住居２と重なり合った状態で検出した竪穴住居で、周辺には土壙１から土壙８までの８基の土壙も確認されている。

地形の高い北方向に面した部分に、緩やかな弧を描いた壁体溝と思われる溝の一部が存在したので、この竪穴住居の平面形は円形に近い形であったと推定される。この溝は後になって土壙７に切られているが、検出面での幅は14～20cmを測り、深さは４～14cmになっていた。この竪穴住居の柱構造は５本柱で、北側に存在した小規模な柱穴は、竪穴住居１で使用されていたものをそのまま踏襲していた。検出した５か所の柱穴の平面形は円形または楕円形を呈していたが、大きさは不揃いで、Ｐ２の短径22cm、長径28cmを測る最小のものからＰ12の短径58cm、長径64cmを測る最大のものまで、規模の相違したものが認められた。柱穴間の距離は



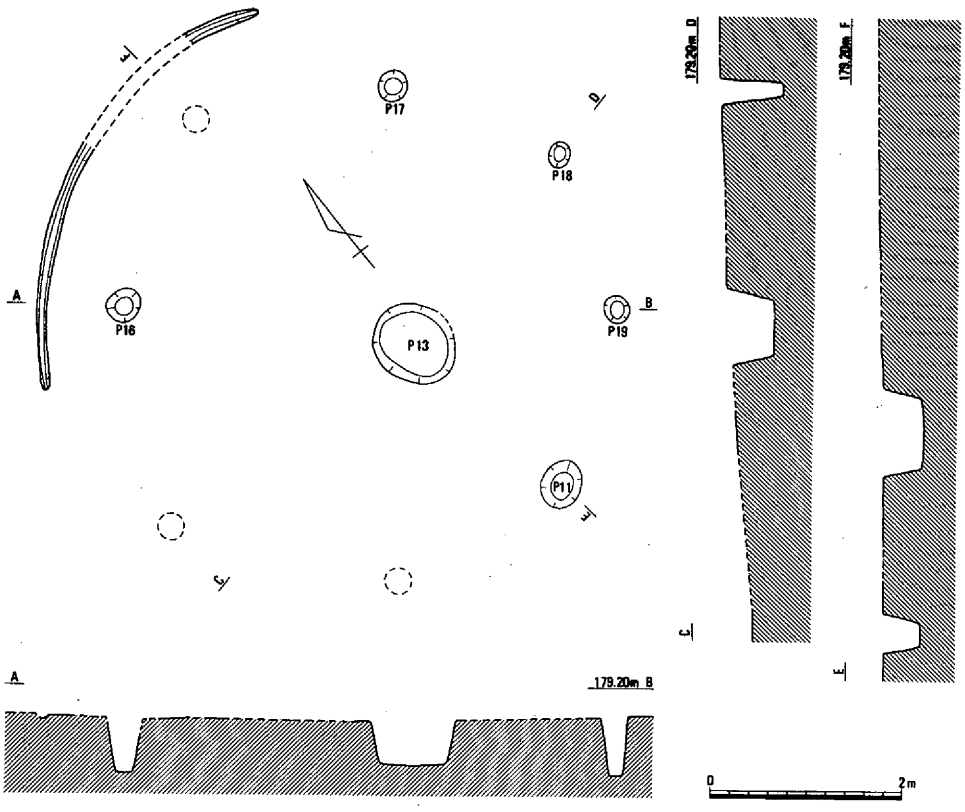
第７図　竪穴住居３（1／80）



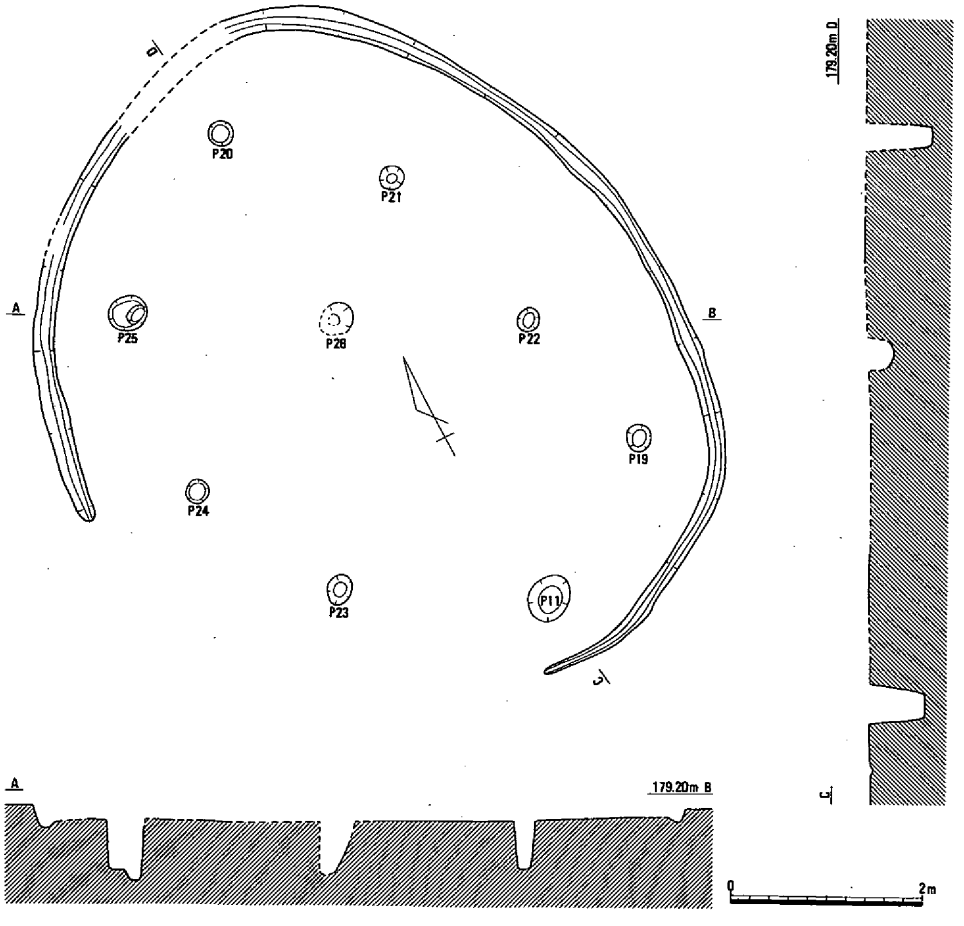
第８図　竪穴住居４（1／80）

270～300cmで、北西方向に面したＰ２とＰ12との間が最も広くなっていた。中央穴は床面の中央部よりもやや西側へ寄った地点に存在し、平面形は短径80cm、長径90cmの楕円形を呈していた。中央穴の検出面からの深さは50cmで、断面形は「Ｕ」字形となり、内部には壁体溝や柱穴内に堆積していた土砂と同じ色調である黒褐色土が認められた。中央穴の底部のレベルは、５か所に検出した柱穴のレベルとほぼ同じであった。

この竪穴住居も出土遺物が特定できないが、東方向に位置するＰ10の柱穴が弥生時代後期後葉の時期と思われる竪穴住居６の壁体溝に削平されていたので、竪穴住居３は弥生時代後期後葉かそれよりも古く遡る時期に属すると考えられる。



第９図　竪穴住居５（1／80）



第10図　竪穴住居６（1／80）

竪穴住居４（第３・４・８図、図版53－１）

この竪穴住居も、前述した竪穴住居１から竪穴住居３が検出された調査範囲の南西端部に存在し、別の竪穴住居や土壙と重なり合っていた。

平面形は円形に近い形を呈し、前述した竪穴住居３を拡張していたので、柱構造が竪穴住居３の５本柱からこの竪穴住居では６本柱に変化しているのが判明した。しかも４か所の柱穴（Ｐ９～Ｐ12）と中央穴（Ｐ13）は、竪穴住居３で使用されていたものを踏襲していた。柱穴の平面形は円形または楕円形を呈し、柱穴間の距離は210～270cmになっていた。壁体溝は地形の高い北方向に面した部分に緩やかな弧を描いて存在したが、後に土壙７や竪穴住居６の壁体溝に削平されていた。

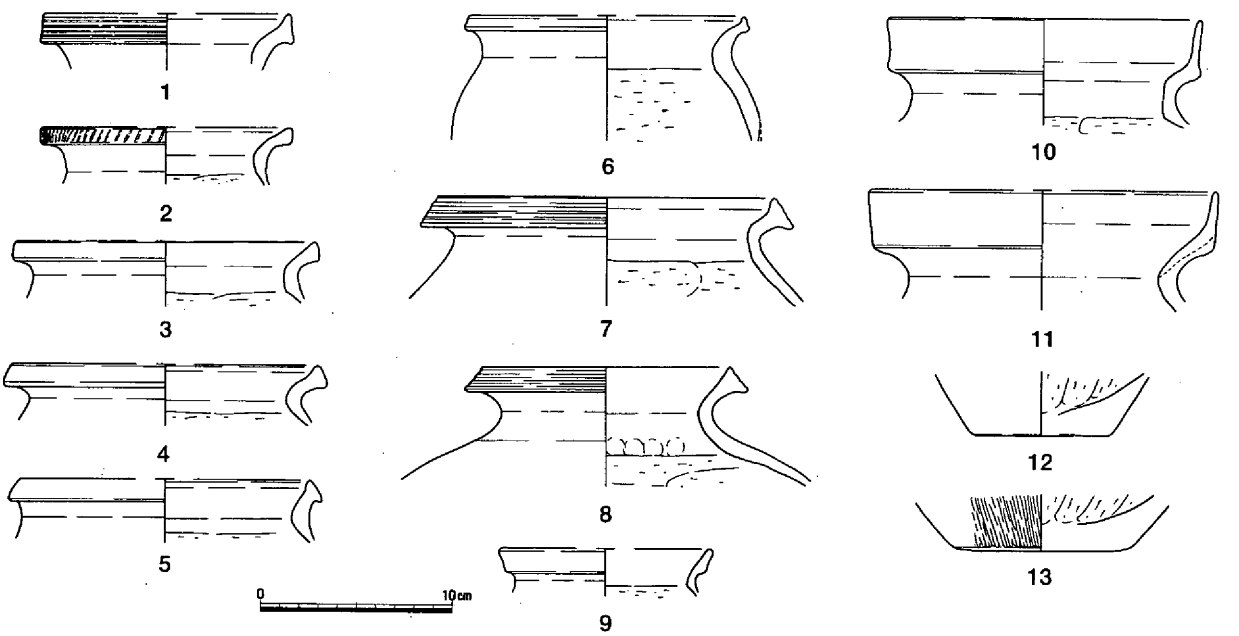
この竪穴住居から出土した遺物はないが、竪穴住居や土壙の切り合い関係より、竪穴住居４は弥生時代後期前葉から後期後葉の時期に属するであろう。

竪穴住居５（第３・４・９図、図版53－１）

調査範囲の南西端部に、前述した竪穴住居１から竪穴住居４までの４軒の竪穴住居と重複した状態で検出した竪穴住居で、竪穴住居４の規模よりもさらに大きくなっていた。

平面形は円形に近い形態を呈し、柱構造は８本になると推定される。北側に位置する柱穴は、土壙７に削平されて存在しなかった。西方向に面した２か所の柱穴は、比較的傾斜の強い斜面に位置したため、残存しなかった。南方向に面した柱穴だけは、竪穴住居４に使われていたものを、そのまま踏襲していた。検出した柱穴間の距離は170～190cmを測り、柱穴の平面形は円形または楕円形を呈していた。柱穴の規模は不揃いで、Ｐ18の短径20cm、長径30cmの最小のものからＰ11の短径40cm、長径50cmの最大のものまで認められた。地形の高い北から北西にかけての方向に面した部分には、緩やかに湾曲した壁体溝の一部が存在した。その壁体溝の検出面での幅は11～15cmを測り、深さは３cmと浅くなっていた。中央穴は平面形が楕円形を呈する竪穴住居４のものをそのまま利用していたが、床面の中央部よりやや南側へ寄った位置になっていた。

この竪穴住居５も、遺構の切り合い関係より、弥生時代後期前葉から後期後葉の時期と考える。



第11図　竪穴住居１～６出土遺物（1／4）

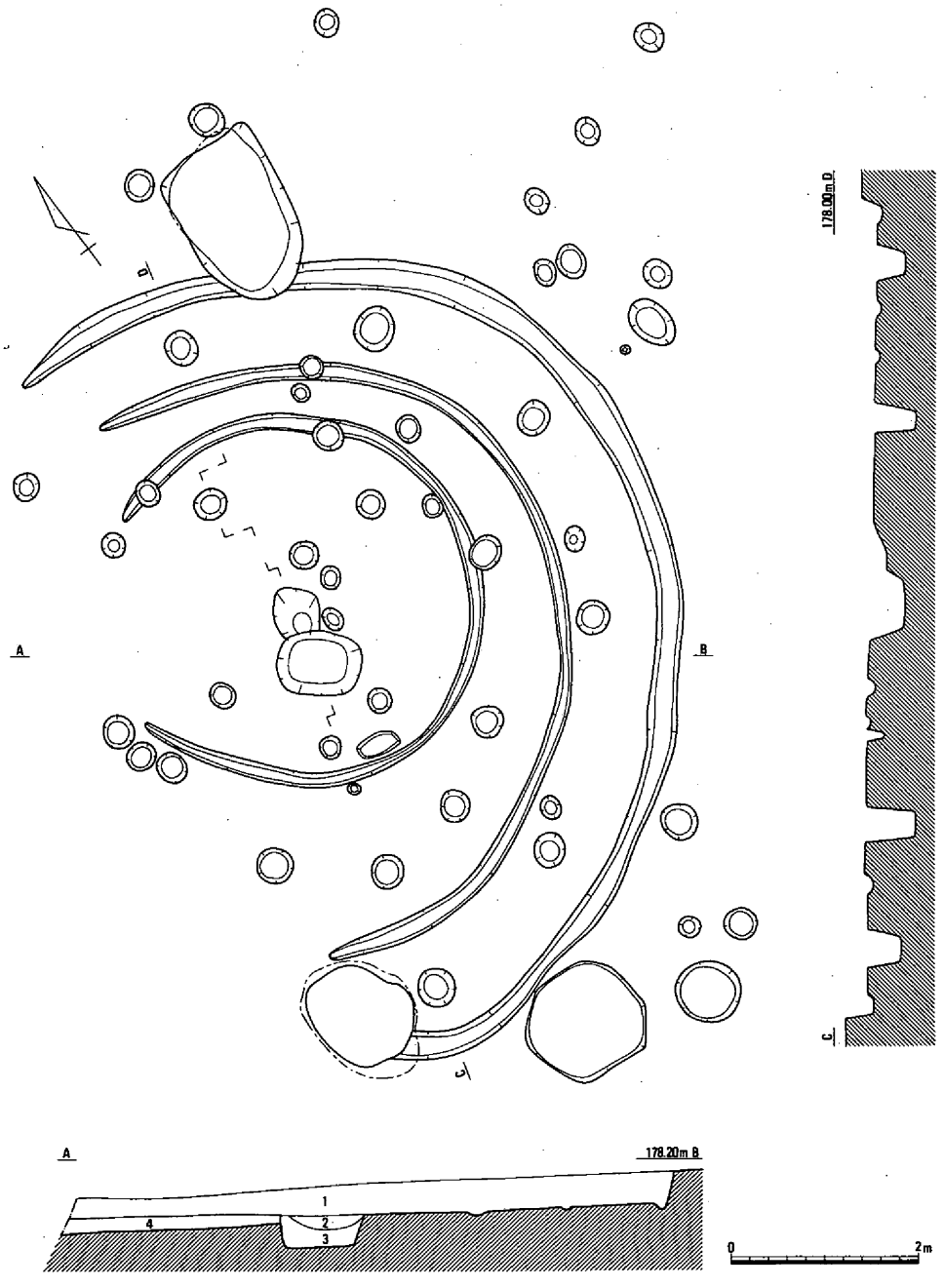
竪穴住居６（第３・４・10図、図版53－１）

これまでに概説を行った竪穴住居１から竪穴住居５までの５軒の竪穴住居が存在する調査範囲の南西端部に検出した竪穴住居で、この竪穴住居６が最も新しい時期に造られている。

検出した壁体溝の残存状態によると、この竪穴住居の平面形は楕円形に近い形態になり、柱構造は８本柱である。壁体溝が検出できなかったのは、地形の低い南西方向に面した一部分だけで、検出面での最大幅は28㎝になっていた。柱穴間の距離は170～220㎝を測り、柱穴の平面形は円形または楕円形を呈していた。柱穴の底部のレベルは、８か所の柱穴ともすべてほぼ同じになっていた。中央穴は床面の中央よりやや北方向へ寄った位置に検出され、その規模は周辺の柱穴と変わらない大きさであった。中央穴の平面形は楕円形に近い形を呈し、断面形は浅い「U」字形となり、内部に淡褐色砂質土が堆積していた。

この竪穴住居６は、重なり合った６軒の竪穴住居のうちで最も新しい時期に造られたと考えられるから、第11図の竪穴住居１～６出土遺物で該当するものを選択すれば、**10**と**11**の２個体になるであろう。

これらの弥生土器は、口縁端部が上方へ長く立ち上がった複合口縁を有する弥生時代後期後葉に属すると推定されているもので、竪穴住居６が造られたのもほぼその時期になると思われる。



１．淡褐色砂質土　２．褐色砂質土　３．暗褐色砂質土　４．暗黄褐色粘質土

第12図　竪穴住居７～９、土壙９～11（1／80）

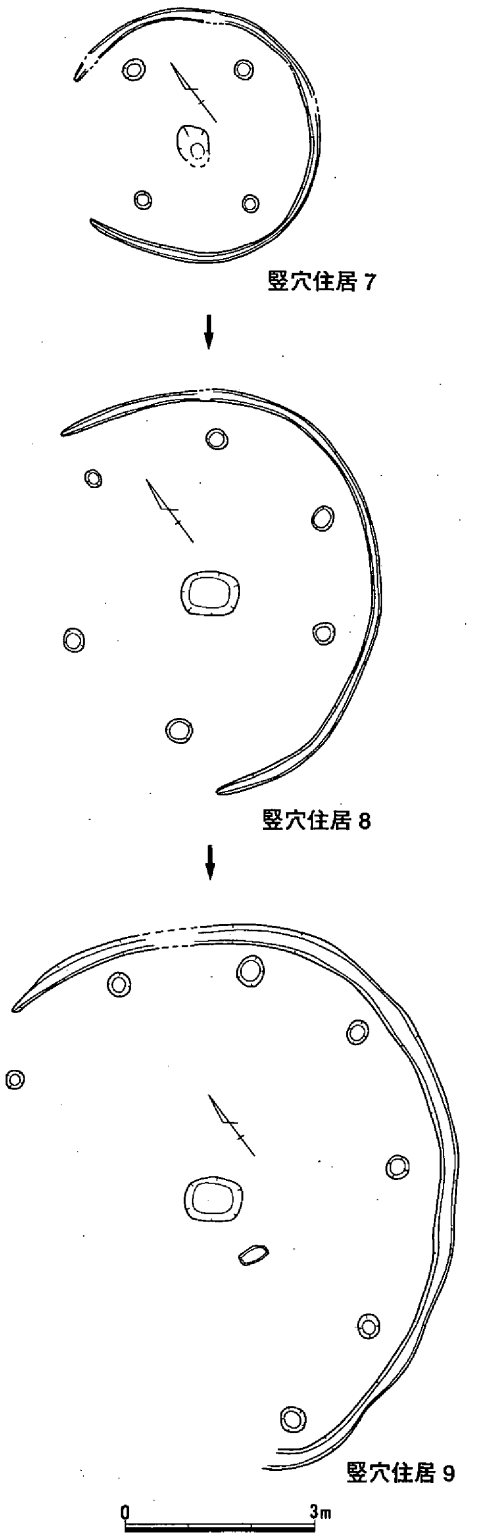
６軒の竪穴住居が重なり合っていた地点からは、１～13の弥生土器が出土した。図化できたのは、壺形土器または甕形土器の口縁部と底部の破片である。

１～８の壺形土器または甕形土器は、斜め上方へ立ち上がった口縁の外面に、数条の凹線が存在するもの（１・７・８）、クシ状工具による刺突文が認められるもの（２）、ヨコナデを行っているだけで何も施さないもの（３～６）がある。内面の口縁部から頸部にかけてと外面の頸部から胴部にかけてはヨコナデを行っているが、内面の胴部は横方向のヘラケズリを施している。内面の頸部直下に、指頭圧痕が連続して残存するもの（８）も認められる。胎土中には砂粒を多く含み、焼成は全般に良好で、いずれもにぶい橙色または灰黄色を呈している。これらの土器は、その形態的特徴や調整手法などから、弥生時代後期前葉の時期に属するであろう。

９の甕形土器の小破片は、斜め上方へ立ち上がった口縁部の器壁が肥厚して、複合口縁に似た形態となり、口縁端部は丸く仕上げている。口縁部は内外面とも全体にヨコナデを行い、外面には何も認められない。胴部の外面はヨコナデを行い、内面は横方向のヘラケズリを施している。この土器片は、弥生時代後期中葉の時期になるであろう。

10と11は竪穴住居６のところで概説したように、複合口縁を有する弥生土器片で、前者は短い頸部が認められるから、壺形土器になるのかもしれない。後者は口径約18.2㎝を測る大型の甕形土器で、口縁部から頸部にかけて粘土の接合圧痕が認められる。口縁部から頸部にかけては内外面とも全体にヨコナデを行っているが、内面の胴部は横方向のヘラケズリを施している。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成はどちらも良好で、橙色またはにぶい橙色を呈している。この２点の土器片は、その形態的特徴や調整手法から、弥生時代後期後葉の時期になると考える。

12と13の土器片は、壺形土器または甕形土器の底部である。内面はどちらも縦方向のヘラケズリを施しているが、外面は縦方向のナデを行っているもの（12）と縦方向のヘラミガキ痕跡が認められるもの（13）とがある。胎土中には２～３㎜前後の砂粒を多く含み、焼成はどちらも極めて良好で、前者は灰黄褐色、後者はにぶい橙色をそれぞれ呈している。12の外面には黒斑が存在するが、13の外面には煤が付着している。この２点の壺形土器または甕形土器の底部破片は、その形態的特徴や調整手法などから、弥生時代後期前葉の時期に属するのではなかろうか。



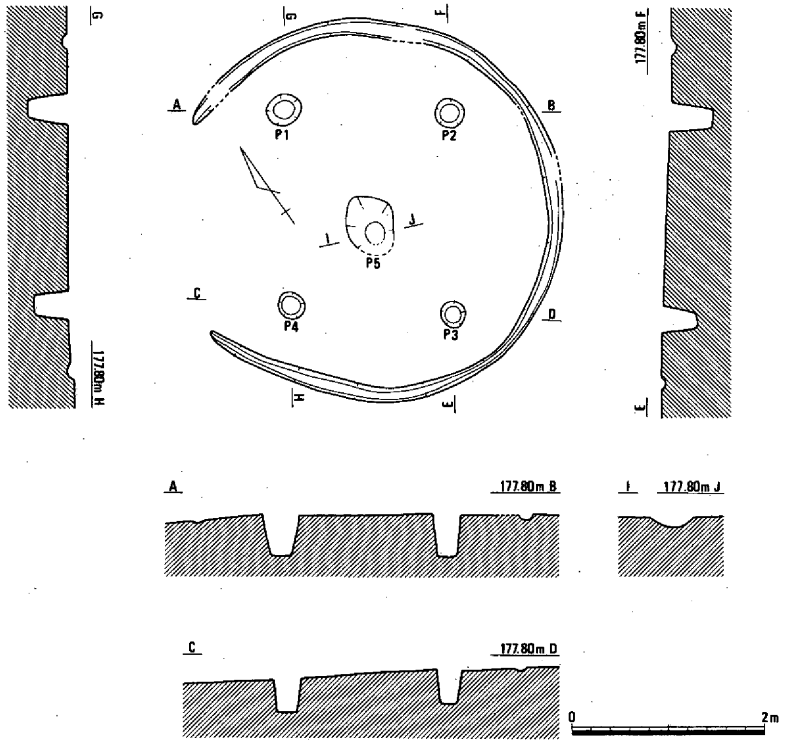
第13図　竪穴住居７～９変遷図(1／120)

竪穴住居７（第12～14図、図版53－２）

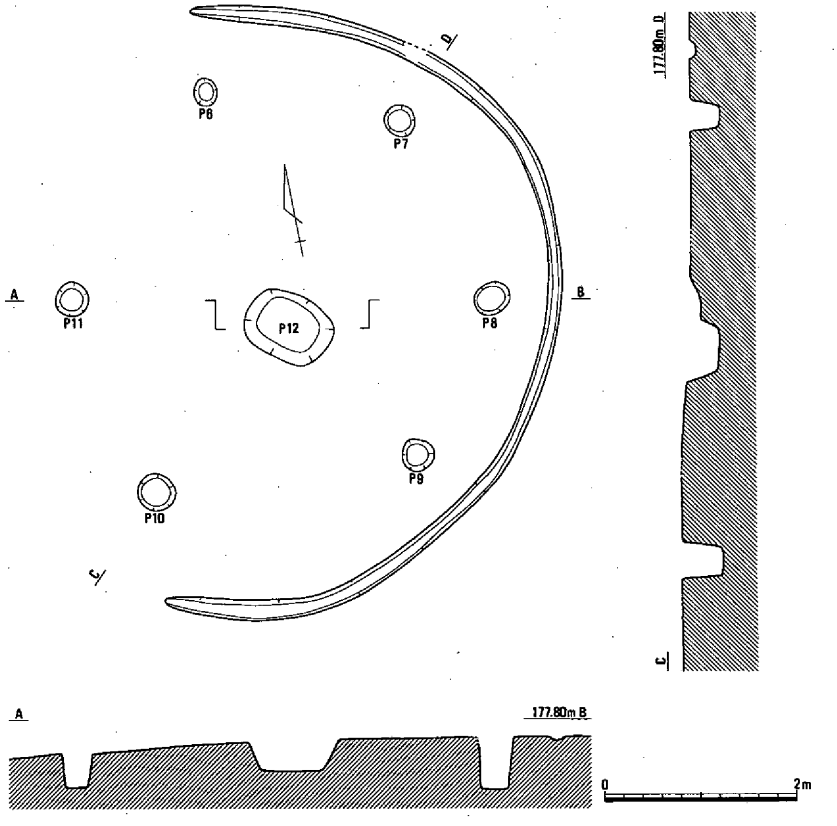
調査範囲の西端部に検出した竪穴住居で、この地点には、建て替えが行われたと思われる３軒の竪穴住居が、同心円の状態に重なり合って確認された。

平面形は円形に近い形態を呈し、柱構造は４本柱で、中央穴が存在する。地形の低い北西方向に面した部分は、壁体溝が残存しなかった。壁体溝の検出面での幅は７～18cmを測り、深さは３～８cmになっていた。４か所の柱穴の平面形は円形または楕円形を呈し、南側に位置するＰ３が最も小さく、北側に位置するＰ１が最も大きくなっていた。柱穴間の距離は170～210cmを測り、Ｐ１とＰ２およびＰ３とＰ４の間はほぼ同じで約170cmになっていたが、Ｐ１とＰ４の間は約210cmと最も広かった。壁体溝と柱穴との間隔は、Ｐ１が約65cmで最も広く、残る３か所はほぼ同じで約60cmになっていた。中央穴は床面の中央部よりやや南西方向へ寄った地点に存在したが、平面形は不整形な形であった。中央穴の検出面からの深さは11cmで、断面形は浅い「Ｕ」字形を呈していた。この中央穴の南側に面した部分は、後述する竪穴住居８や竪穴住居９の中央穴によって後に削平されていた。

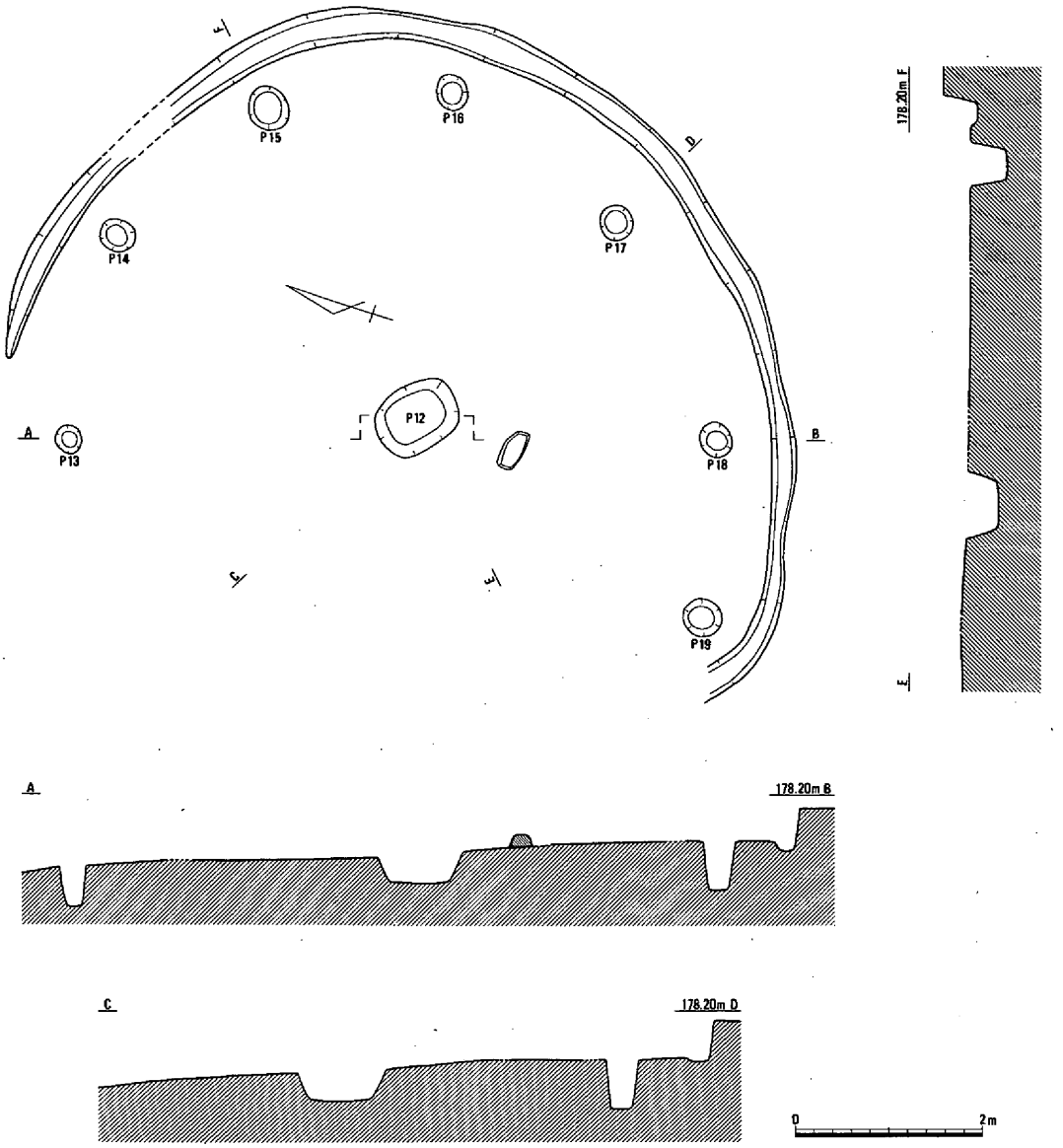
確実に伴う出土遺物はないが、竪穴住居７は弥生時代後期前葉の時期と考えられる。



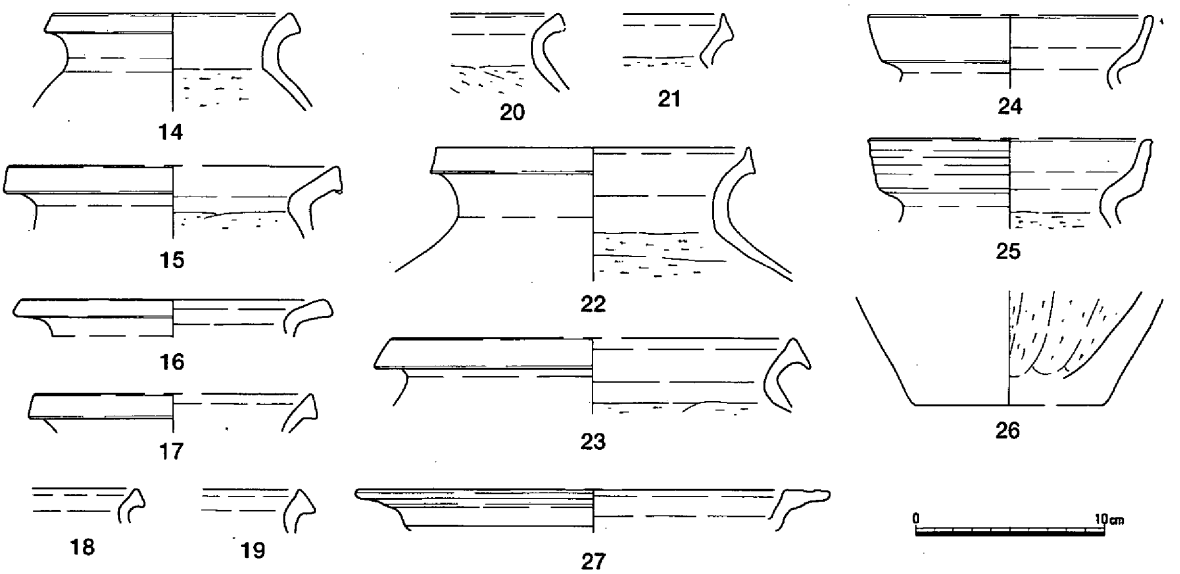
第14図　竪穴住居７（1／80）



第15図　竪穴住居８（1／80）



第16図　竪穴住居９（1／80）



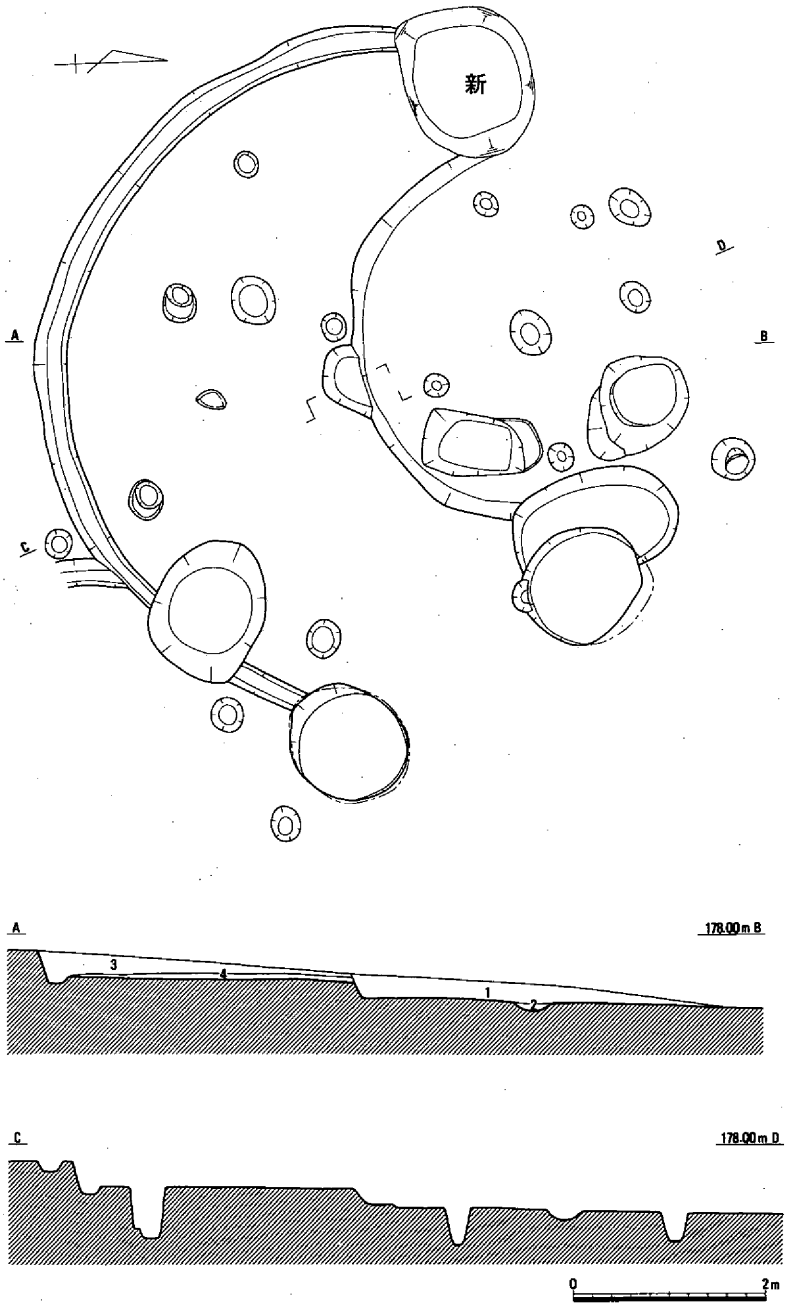
第17図　竪穴住居７～９出土遺物（1／4）

竪穴住居８（第12・13・15図、図版53－２）

目木川流域の沖積平野に向かって舌状に張り出した低丘陵の先端部分に位置し、竪穴住居１や竪穴住居３と重なり合っていた。

地形の高い東方向に面した部分に、緩やかに湾曲して半円の形を描いた壁体溝の痕跡によると、この竪穴住居の平面形は円形に近い形態を呈すると考えられ、柱構造は６本柱で、中央穴が存在する。地形の低い西方向に面した部分は、柱穴すべてが検出できたものの、壁体溝は残存しなかった。壁体溝の検出面での幅は10～23cmを測り、深さは３～10cmになっていた。６か所の柱穴の平面形は円形または楕円形を呈し、北西方向に位置するＰ６が最も小さく、南西方向に位置するＰ10が最も大きくなっていた。柱穴の断面形はいずれも「U」字形を呈し、床面からの深さは31～54cmであった。柱穴間の距離は180～275cmを測り、南東方向に位置するＰ８とＰ９の間が狭く、南方向に位置するＰ９とＰ10の間が広くなっていた。地形の低い西方向に面したＰ11の地点を除いて、壁体溝と柱穴との間隔は、東方向に位置するＰ８が60cmと狭く、北東方向と南東方向に位置するＰ７とＰ９が70cm、北方向に位置するＰ６が80cm、南西方向に位置するＰ10が100cmと広くなっていた。中央穴は床面のほぼ中央部に存在し、平面形は短辺70cm、長辺90cmの隅丸長方形に似た形態を呈していた。中央穴の床面からの深さは34cmで、断面形は浅い「U」字形を呈していた。この竪穴住居８の中央穴は、建て替えられて規模が大きくなった竪穴住居９の中央穴にそのまま踏襲されていた。

この竪穴住居に確実に伴う出土遺物は存在しないが、第17図の竪穴住居７～９出土遺物を概観して、竪穴住居８は弥生時代後期中葉の時期と思われる。



1．明褐色土　2．暗赤褐色土　3．淡褐色土　4．明黄褐色土

第18図　竪穴住居10～12、土壙12～17（1／80）

竪穴住居９（第12・13・16図、図版53－２）

前述した竪穴住居７や竪穴住居８と同じ地点に検出した竪穴住居で、南方向に面した壁体に接して土壙９が存在する。この竪穴住居は、確認調査で設定したトレンチ（第２図のＴ１）を掘り下げて発見したもので、野辺張遺跡の全面調査を実施する端緒になった遺構である。

地形の低い西方向に面した部分は、壁体溝や柱穴が存在しないが、平面形は円形に近い形態で、柱構造は10本柱になるであろう。壁体溝の検出面での幅は16～38cmを測り、床面から最も深い所が11cmであった。確認した柱穴の平面形は円形または楕円形を呈し、柱穴間の距離は190～260cmになっていた。壁体溝と柱穴の間隔はいずれも狭く、50～80cmであった。中央穴は床面の中央部よりやや南方向へ寄った位置に確認したが、前述した竪穴住居８のものをそのまま利用していた。中央穴の南側約50cmの所には、上面が扁平な河原石が床面に密着して存在した。

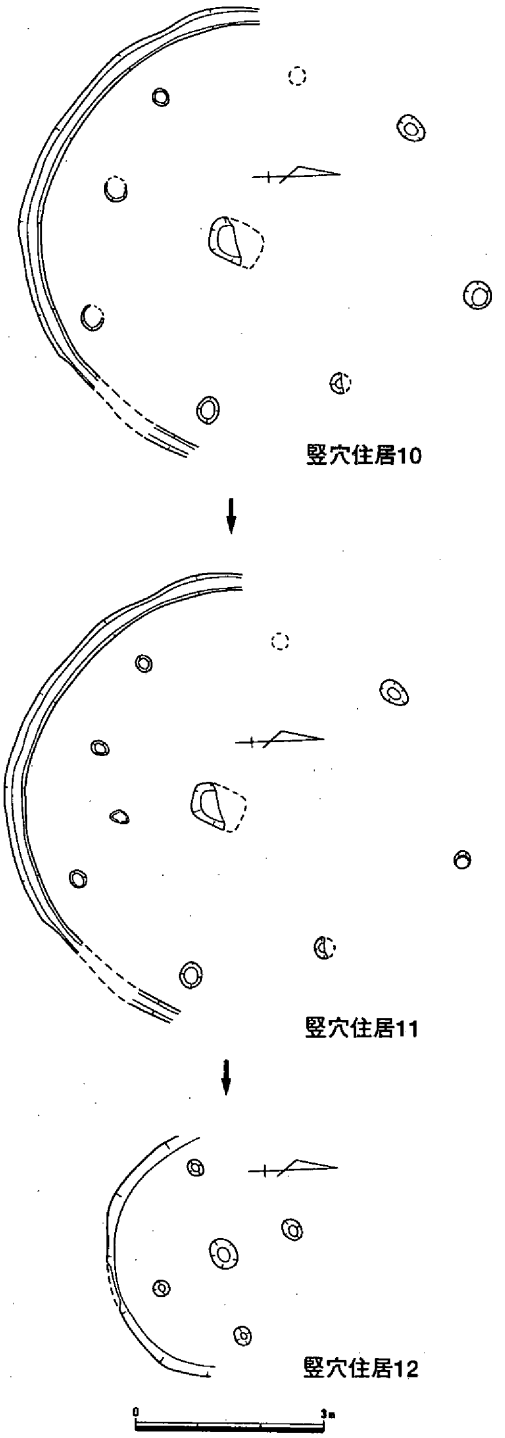
この竪穴住居は、同心円の状態に重複した３軒の竪穴住居のうちで最も新しいことが判明しているから、おそらく弥生時代後期後葉の時期になると考える。

３軒の竪穴住居が重複した地点からは、**14～27**の土器片が出土している。

14～20の壺形土器または甕形土器の口縁端部は、器壁が肥厚しているだけで上方へは拡張していない。口縁部は内外面とも全体にヨコナデを行い、外面に凹線は認められない。頸部から胴部にかけては、外面はヨコナデを行っているが、内面は横または斜め方向のヘラケズリを施している。これらの土器片は、その形態的特徴や調整手法から弥生時代後期前葉の時期に属するであろう。**26**の壺形土器の底部と**27**の高杯形土器の口縁部破片も、この時期に属すると推定される。

24と**25**の口縁部破片は、端部が斜め上方へ高く張り出して複合口縁の形態を呈している。口縁部全体と外面の頸部はヨコナデを行い、外面に凹線状の浅い窪みが認められるもの（**25**）もある。内面の頸部より下位の部分は、横方向のヘラケズリを施している。この２点の口縁部破片は、弥生時代後期後葉の時期に属する器形を呈している。

残る**21**～**23**の口縁部破片は、端部が上方または下方へ拡張する形態を呈しているものの、調整手法は他の口縁部破片と同じであるから、弥生時代後期中葉の時期に属すると思われる。



第19図　竪穴住居10～12変遷図（1／120）

竪穴住居10（第18～20図、図版53－３）

調査範囲の北西端部に検出した竪穴住居で、後述する竪穴住居11や竪穴住居12と重複していた。

地形の高い南方向に面した部分に、緩やかに湾曲して半円の形を描いた壁体溝の残存状態から、この竪穴住居の平面形は円形を呈し、柱構造は８本柱と推定され、中央穴が確認されている。壁体溝の検出面での幅は22～35cmを測り、床面からの深さは５～14cmになっていた。７か所の柱穴の平面形は円形または楕円形を呈するが、西方向に位置する１か所の柱穴は、後世に新しく掘り窪められた穴によって削平されていた。残存する柱穴間の距離は160～280cmを測り、地形の低い北側に面したＰ２とＰ３の間が広くなっていた。南方向に面した部分の壁体溝と柱穴との間隔は、Ｐ６が60cmと狭く、Ｐ７が115cmと広くしていた。床面の中央よりも南側へ寄った位置に中央穴を検出したが、北側の部分が竪穴住居12によって削平されていた。この中央穴の平面形は、短辺約60cmの隅丸長方形に近い形を呈し、断面形は浅い「Ｕ」字形で、床面からの深さは約５cmになると推定された。

出土遺物は確認できなかったが、この竪穴住居の北側部分を削平して新しく造られていた竪穴住居12が、弥生時代後期前葉の時期になると考えられているので、遺構の切り合い関係から、この竪穴住居10は弥生時代後期前葉かそれよりも古い時期に属すると推定される。

竪穴住居11（第18～20図、図版53－３）

この竪穴住居は、前述した竪穴住居10を建て替えたものであるが、３か所の柱穴の位置がわずかに移動しているだけで、壁体溝や中央穴は竪穴住居10のものをそのまま踏襲していた。

したがって、この竪穴住居の平面形も竪穴住居10と同じ形態の円形を呈し、柱構造も８本柱になっていた。位置がわずかに移動していた３か所の柱穴の平面形は楕円形で、底部のレベルが竪穴住居10のものより９～42cmも低くなっていた。南方向に面した２か所の柱穴（Ｐ10とＰ11）と中央穴に囲まれた地点の床面には、上面の扁平な河原石が存在した。

この竪穴住居に伴う出土遺物も確認できなかったが、竪穴住居10と同様に遺構の切り合い関係により、竪穴住居11は弥生時代後期前葉かそれよりも古い時期に属するであろう。

竪穴住居12（第18・19・21・22図、図版53－３）

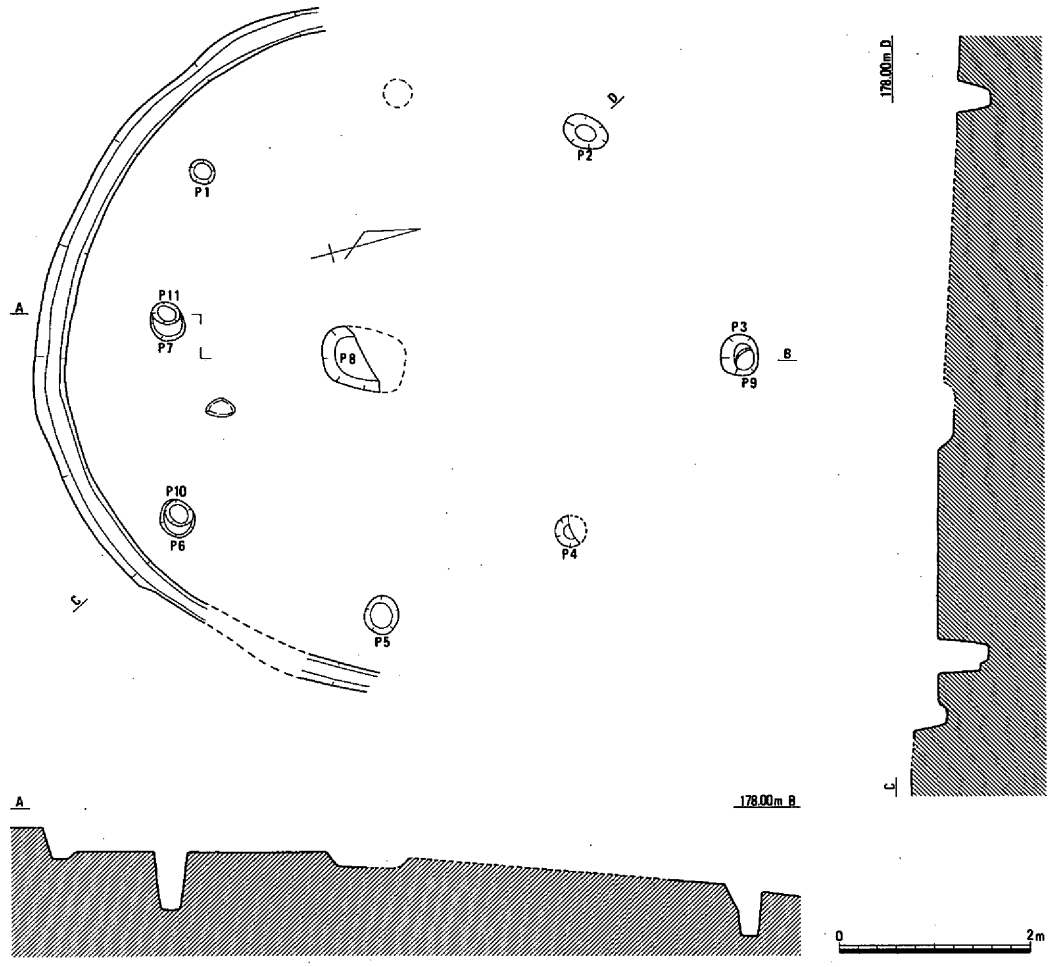
調査範囲の北西端部に検出した竪穴住居で、竪穴住居10や竪穴住居11の北西方向に面した床面を削平して造られていた。この竪穴住居の床面や近接した位置には、土壙12から土壙15までの４基の土壙が確認されている。

平面形は円形に近い形態を呈し、柱構造は４本柱である。この竪穴住居は、中央穴は存在するが、壁体溝は確認できなかった。地形の高い南方向に面した部分に残存する、壁体の床面からの高さは７～22cmを測り、東方向の壁体は土壙14に削平されていた。柱穴の平面形は円形または楕円形を呈し、柱穴間の距離は150～198cmになっていた。柱穴の床面からの深さは22～34cmで、断面形は「Ｕ」字形を呈していた。中央穴の平面形は短径40cm、長径52cmの楕円形を呈し、床面からの深さは11cmと浅くなっていた。

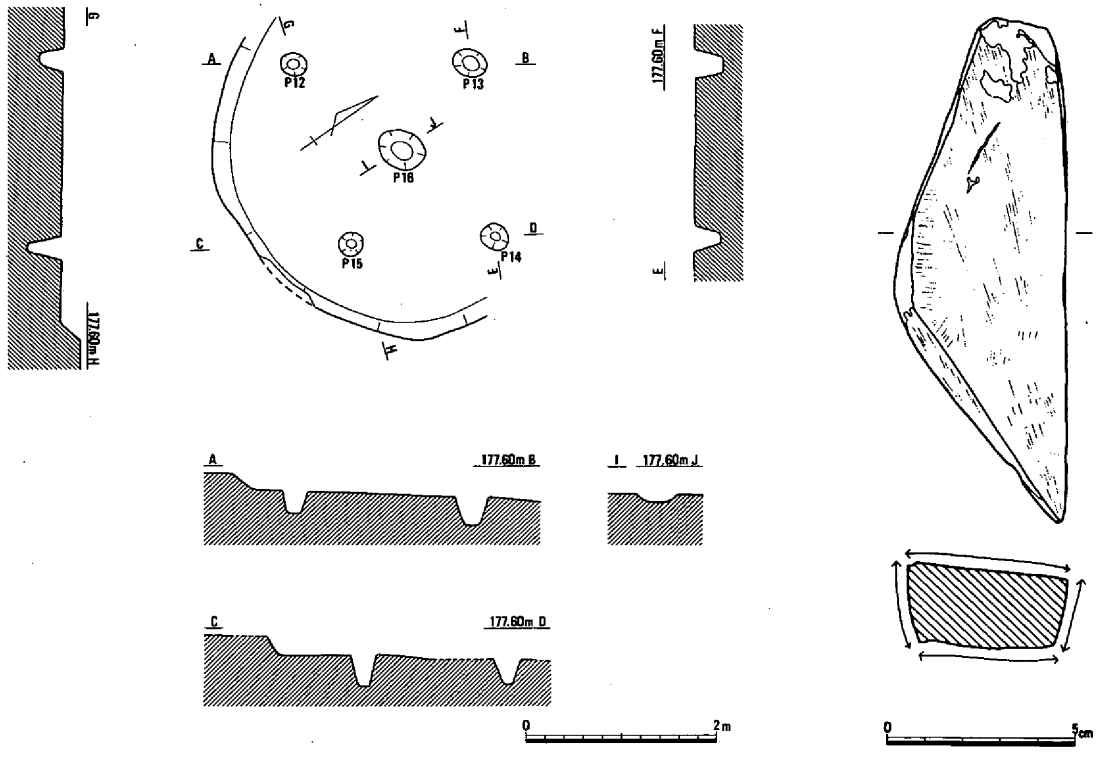
この竪穴住居から出土した遺物として、砥石（**Ｓ１**）と土器片（**28～35**）がある。

砥石の石材は流紋岩で、長さ13.3cm、幅4.6cm、厚み2.3cm、重さ186ｇを測る。この砥石は欠損品で、側面は欠損後に使用している。

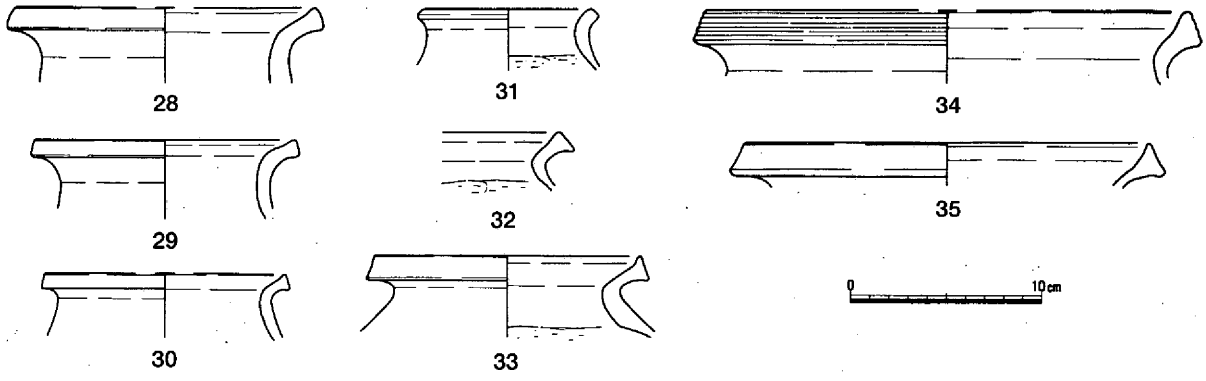
土器片で図化できたのは、壺形土器（**28～31**）または甕形土器（**32～35**）の口縁部である。甕形土器の口縁部外面には凹線が存在するもの（**34**）が認められるが、壺形土器ではいずれもヨコナデを行



第20図　竪穴住居10・11（1／80）



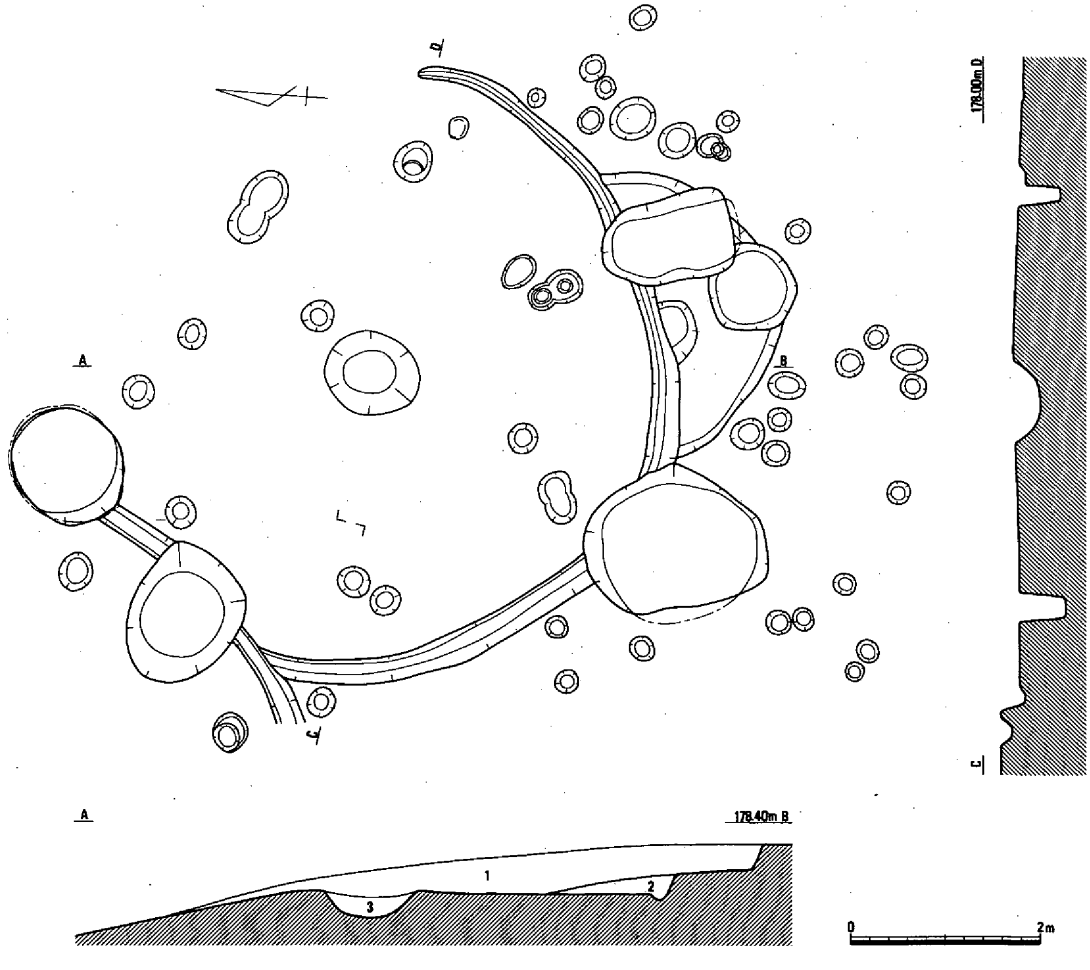
第21図　竪穴住居12（1／80）・出土遺物（1）（1／2）



第22図　竪穴住居12出土遺物（2）（1／4）

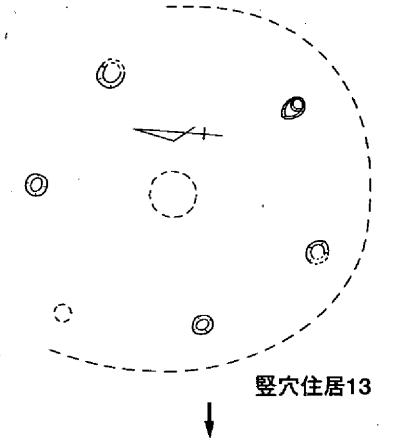
っているだけである。31の口縁部は、斜め上方へ外湾しているだけで、端部の器壁が肥厚しない。口縁部から頸部にかけては、内外面とも全体にヨコナデを行っている。胴部上位の調整手法が観察できるもの（31～33）では、内面は横方向のヘラケズリを施し、外面はヨコナデを行っている。これらの土器片の胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成はいずれも良好で、にぶい橙色を呈している。

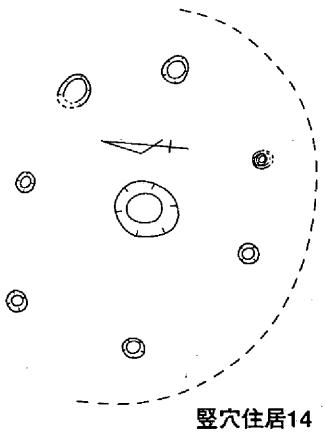
出土した土器片の形態的特徴や調整手法から、この竪穴住居12は弥生時代後期前葉の時期に属すると考えられる。

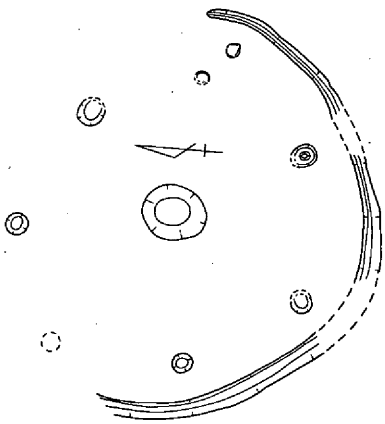


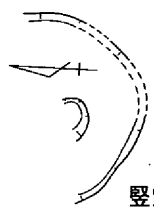
1．暗褐色砂質土　　2．淡褐色砂質土　　3．暗赤褐色砂質土

第23図　竪穴住居13～16、土壙16～20（1／80）

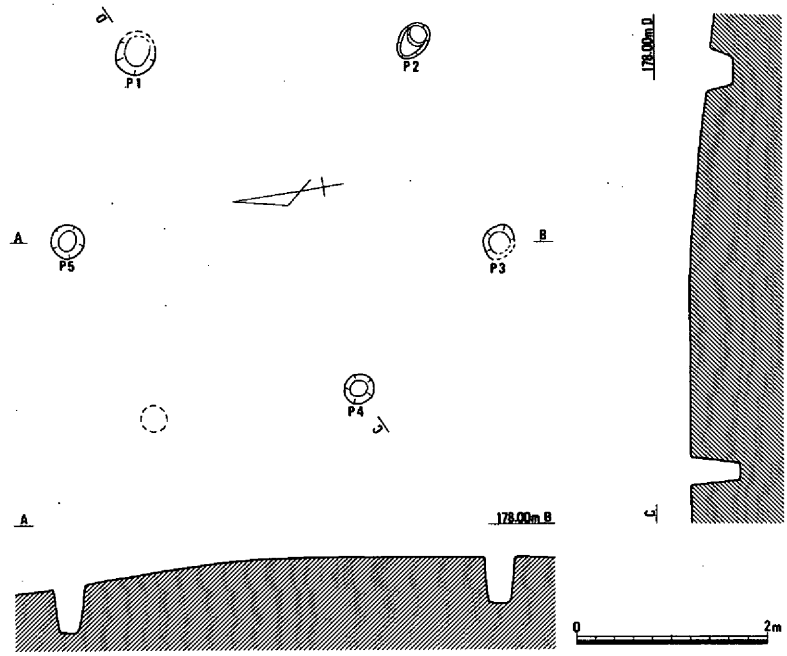




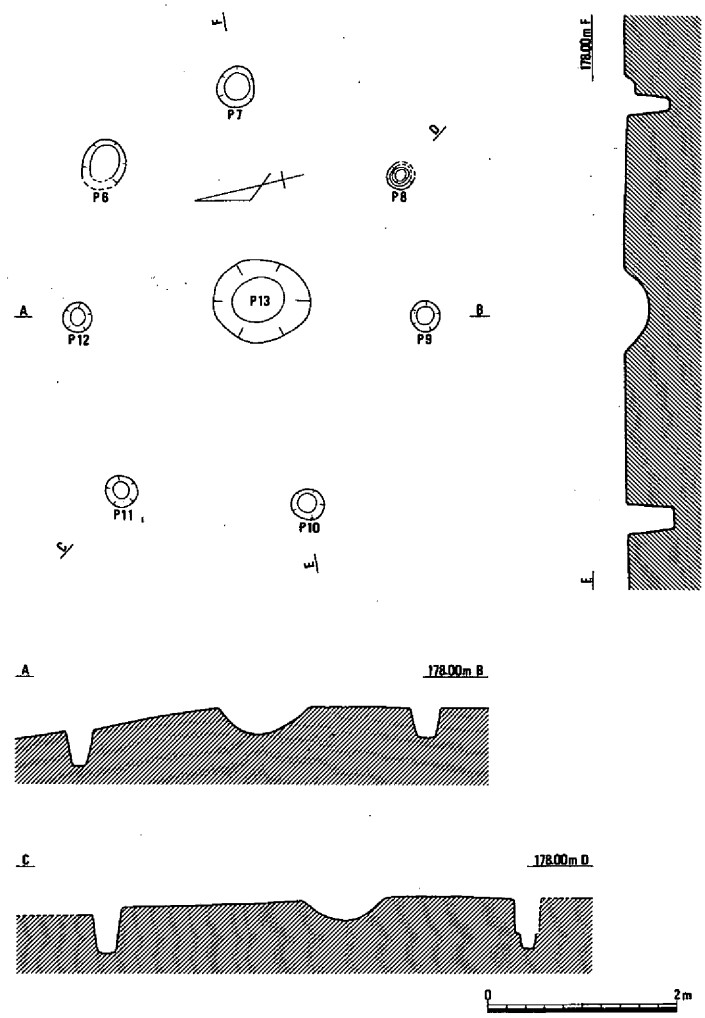




第24図　竪穴住居13～16変遷図(1／120)



第25図　竪穴住居13（1／80）



第26図　竪穴住居14（1／80）

竪穴住居13（第23～25図、図版54－１）

調査範囲の中央よりやや西方向へ寄った地点に検出した竪穴住居で、隣接して前述した竪穴住居10や竪穴住居11が存在する。またこの竪穴住居の周辺には、土壙16から土壙20までの５基の土壙も確認され、竪穴住居や土壙が複雑に重なり合っていた。

この竪穴住居は、同じ場所に新しく竪穴住居14と竪穴住居15が規模を拡張して造られていたため、壁体溝や中央穴が残存しなかった。検出した５か所の柱穴の配置から推定すれば、この竪穴住居の平面形は、円形に近い形態であったと考えられ、柱構造は６本柱である。北西方向に位置する柱穴は、土壙16に削平されて残存しなかった。５か所の柱穴の平面形は円形または楕円形を呈し、柱穴間の距離は215～295cmになっていた。

この竪穴住居に伴う出土遺物は特定できないが、遺構の切り合い関係などから、竪穴住居13は弥生時代後期前葉かそれよりもさらに古い中期末葉の時期に属するであろう。

竪穴住居14（第23・24・26図、図版54－１）

この竪穴住居は、前述した竪穴住居13を建て替えたものであるが、後に竪穴住居15が同じ場所に造られていたため、壁体や壁体溝は残存しなかった。

検出した７か所の柱穴と中央穴の位置から、この竪穴住居の平面形は楕円形に近い形態であったと推定され、柱構造は７本柱である。柱穴の平面形は円形または楕円形を呈し、柱穴間の距離は150～230cmになっていた。南東方向に検出した柱穴（Ｐ８）は、２段掘りになっていたが、残る６か所の柱穴は、断面形が「Ｕ」字形を呈して２段掘りになっていない。中央穴は短径88cm、長径102cmの卵形に近い形態を呈し、床面からの深さが25cmで、断面形は浅い「Ｕ」字形であった。

この竪穴住居に伴う出土遺物も特定できないが、前述した竪穴住居13と同様に、竪穴住居14は弥生時代後期前葉かそれよりもさらに古い中期末葉の時期になるであろう。

竪穴住居15（第23・24・27図、図版54－１）

調査範囲の中央よりやや西方向へ寄った地点に検出した竪穴住居で、前述した竪穴住居13や竪穴住居14と同じ場所に、規模を拡張して造られていた。

地形の高い南方向に面した部分に存在した、緩やかに湾曲して半円の形を描いた壁体溝の痕跡によると、この竪穴住居の平面形は円形に近い形態を呈すると思われる。柱構造は７本柱であるものの、北西方向に位置する柱穴は、土壙16に削平されて残存しなかった。壁体溝の検出面での幅は12～30cmを測り、床面からの深さは４～８cmになっていた。残存した壁体の床面からの高さは、南方向に面した地点で39cmであった。残存した柱穴の平面形は円形または楕円形を呈し、南方向の柱穴は２段掘りになり、東方向の柱穴は規模が小さくて断面形が袋状になっていた。柱穴間の距離は160～230cmを測り、南方向に位置するＰ15とＰ16の間を広くしていた。床面の南側に位置した柱穴と壁体溝との間隔を計測すると、東方向に位置するＰ14が70cmと広く、南方向のＰ15やＰ16は50cmであった。中央穴は床面のほぼ中央部に存在し、前述した竪穴住居14のものをそのまま踏襲して使っていた。東方向に位置する柱穴と壁体溝の間には、上面が扁平な河原石が確認された。

この竪穴住居は、重なり合った３軒の竪穴住居のうちで最も新しいことが判明しているから、おそらく弥生時代後期前葉の時期になると考えられる。

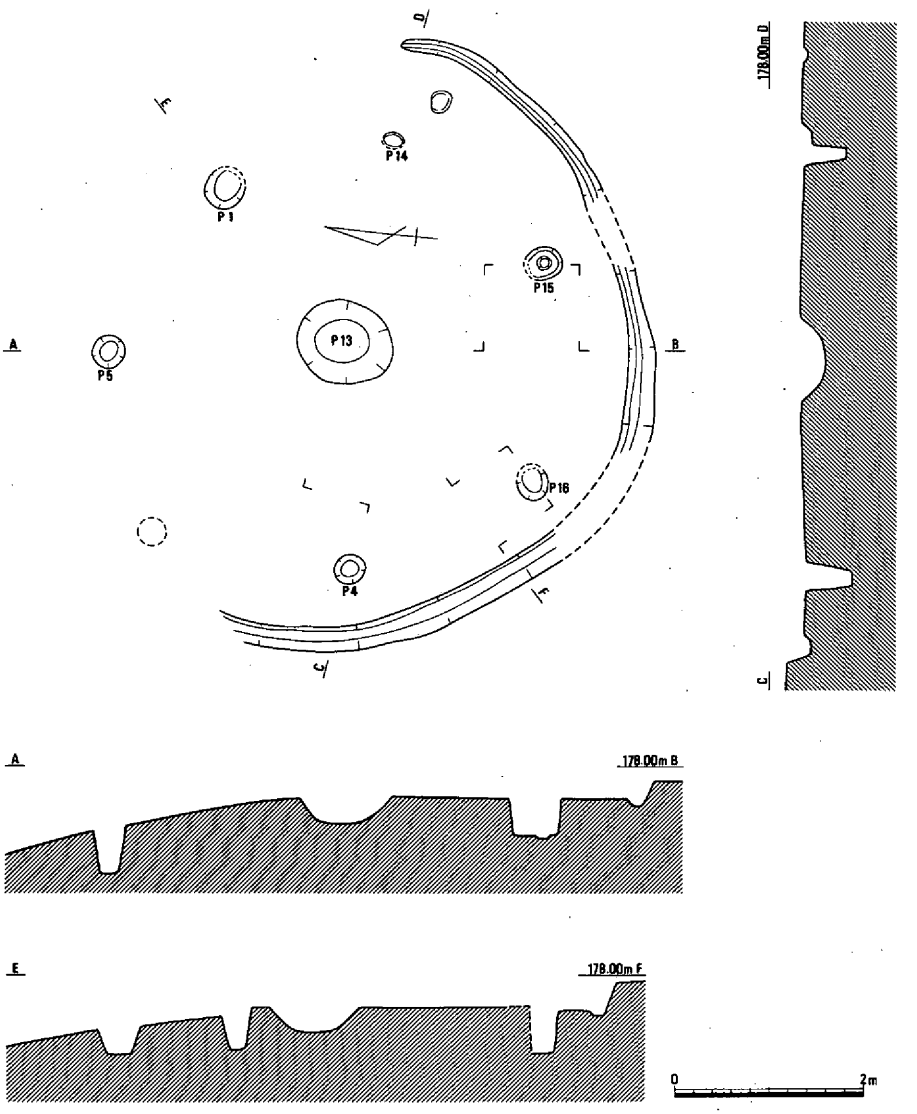
３軒の竪穴住居が重複した地点からは、土製品（**Ｃ１・Ｃ２**）と土器片（**36～54**）が出土している。

Ｃ１は壺形土器のミニチュア品である。口径2.2cm、器高3.6cm、底径1.7cmを測る完形品で、全体に

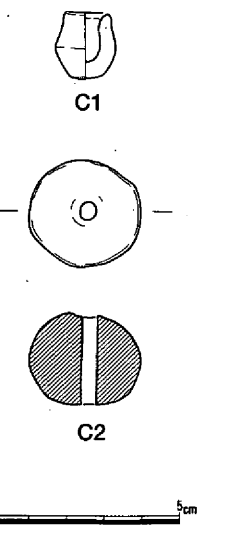
明褐灰色を呈している。C２は土玉の完形品である。径3.0cm、厚み2.4cm、孔径0.4cm、重さ19.5ｇを測り、全体に灰色を呈している。

36～49は、壺形土器または甕形土器の口縁部破片である。斜め上方へ外湾または外反して張り出した口縁端部の外側は上下に拡張し、凹線が存在するもの（36・39・40・48・49）、波状文が描かれているもの（38）、ヨコナデを行っているだけのもの（37・41～47）がある。口縁部から頸部にかけては、内外面とも全体にヨコナデを行っている。外面の頸部直下には、縦方向のハケメが認められるもの（40・43）や縦方向の粗いヘラミガキを施しているもの（41）もある。内面の頸部直下には、いずれも横方向のヘラケズリを施している。50の壺形土器は、推定口径8.5cmの小破片である。短く外反した口縁端部は丸く仕上げ、口縁部から頸部にかけてヨコナデを行っている。胴部の内面には指頭圧痕が存在し、外面には横または斜め方向のヘラミガキを施している。51と52の壺形土器または甕形土器の底部は、内面に縦方向のヘラケズリを施し、外面に縦方向のヘラミガキ痕跡が認められる。53の高杯形土器の脚底部は、内面にヘラケズリを施し、外面にヨコナデを行っている。54の高杯形土器の口縁端部破片は、推定口径21.5cmを測り、端部上面に２条の凹線が認められる。これらの土器の胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は全般に良好で、にぶい橙色またはにぶい黄橙色を呈しているものが多い。

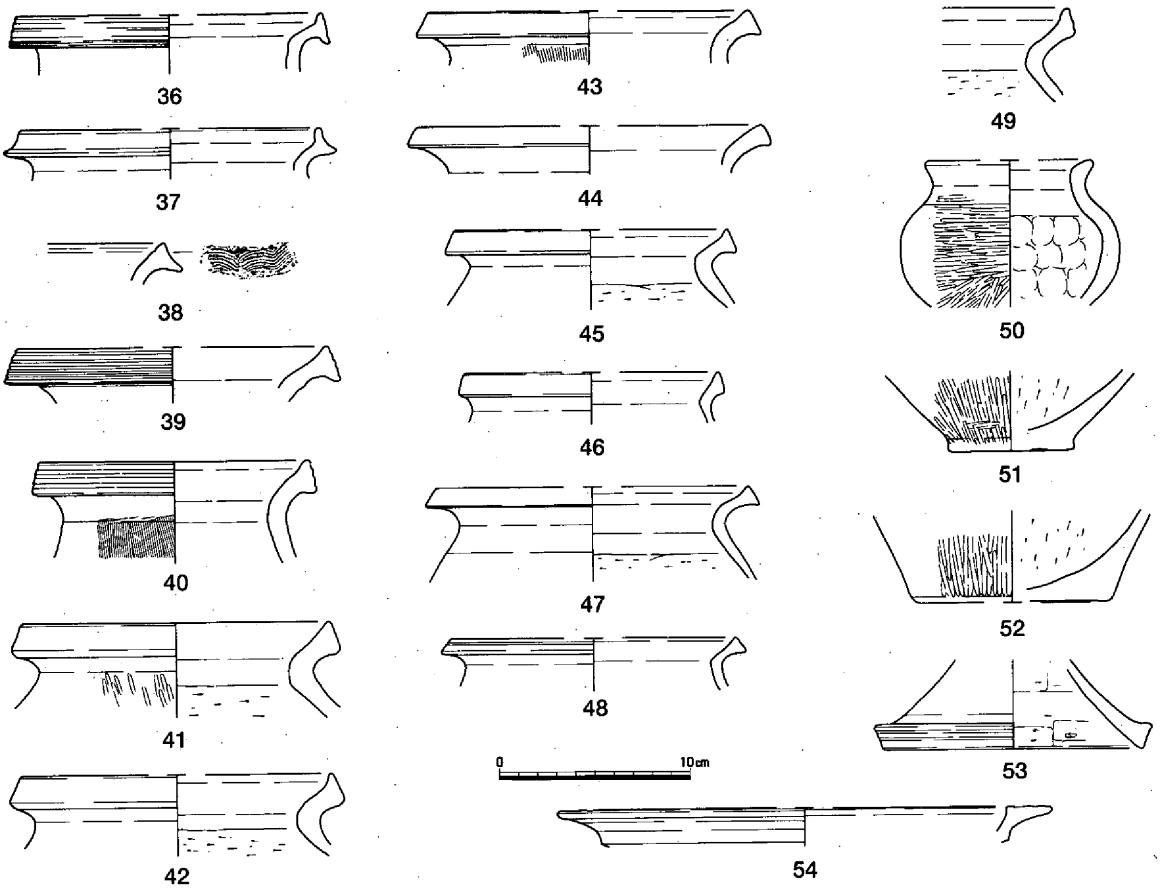
以上に説明した土器片は、その形態的特徴や調整手法などから、弥生時代後期前葉の時期に属するであろう。



第27図　竪穴住居15（1／80）



第28図　竪穴住居13～15出土遺物(1)(1／2)



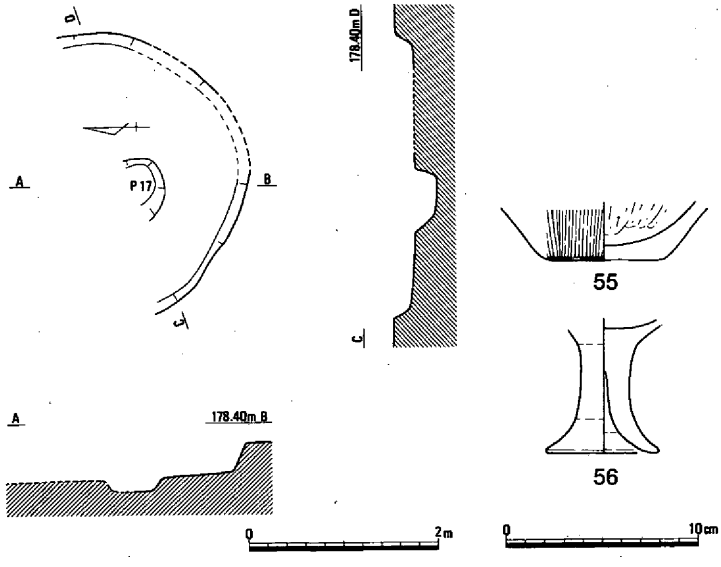
第29図　竪穴住居13～15出土遺物（2）（1／4）

竪穴住居16

（第23・24・30図、図版54－１）

調査範囲の中心部よりやや西方向へ寄った地点に検出した遺構で、竪穴住居15のみならず土壙19や土壙20を削平して造られていた。

地形の高くなった南方向に面した部分に、高さ30㎝の壁体と思われる湾曲した段が存在するだけで、壁体溝や柱穴は検出できないものの、中央穴と推定される深さ18㎝の窪みを確認したから、この遺構は小規模な竪穴住居であると考えた。



第30図　竪穴住居16（1／80）・出土遺物（1／4）

平面形は円形に近い形態を呈し、柱構造は２本柱か、床面に柱を有しない構造であったと思われる。

出土遺物として、壺形土器の底部（**55**）と高杯形土器の脚部（**56**）があるが、前者の底部はやや丸くなりつつあり、後者の脚端部は肥厚していない。これらの土器片の形態的特徴や調整手法から、竪穴住居16は弥生時代後期中葉から後期後葉にかけての時期に属するであろう。

竪穴住居17（第31～33図、図版54－２）

調査範囲のほぼ中央部に検出した竪穴住居で、後述する竪穴住居18や竪穴住居19と重なり合っていた。この竪穴住居の南側から東側の部分は、近くの水田に水を送る用水路によって削平され、調査することができなかった。

検出した遺構は、２か所の柱穴と中央穴だけであった。地形の高い南西方向へ寄った地点に、新しく竪穴住居18が造られていたため、この竪穴住居の壁体や壁体溝は、削平されて残存しなかった。柱穴や中央穴の位置から、この竪穴住居の柱構造は４本柱で、平面形は円形に近い形であったと推定される。２か所の柱穴は円形を呈し、柱穴間の距離は180cmであった。中央穴の平面形は短径48cm、長径56cmの楕円形に近い形態になり、床面からの深さは21cmで、断面形は「U」字形を呈していた。

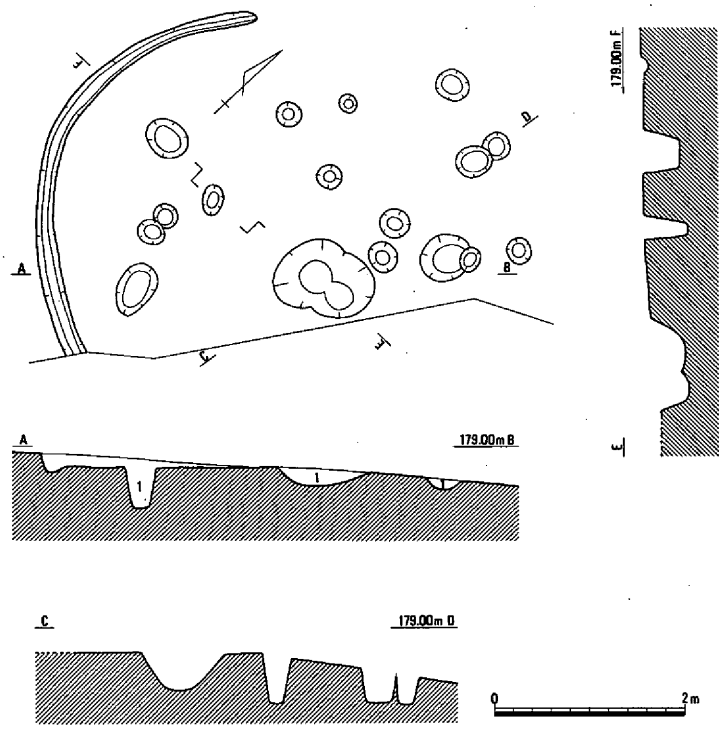
この竪穴住居に伴う遺物は特定できないが、竪穴住居の重なり合った状態などから、竪穴住居17は弥生時代後期前葉の時期に属するであろう。

竪穴住居18（第31・32・34図、図版54－２）

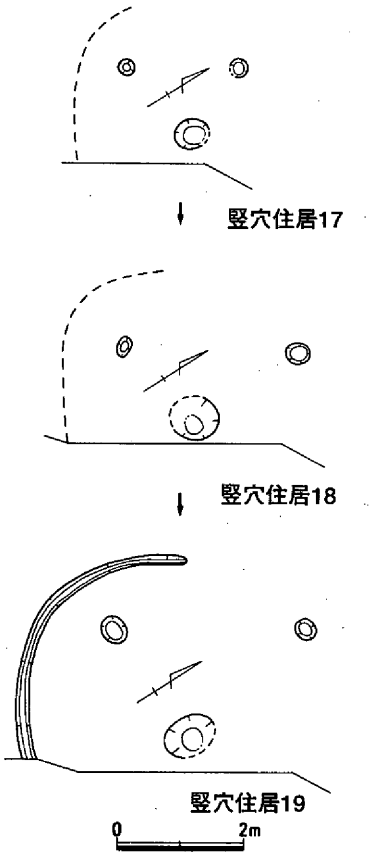
この竪穴住居は、前述した竪穴住居17の地点からやや南西方向へ寄った位置に検出されたもので、２か所の柱穴と中央穴を確認しただけで、壁体や壁体溝は残存しなかった。

検出した柱穴や中央穴の位置から、この竪穴住居も柱構造は４本柱で、平面形は円形に近い形であったと推定される。２か所の柱穴は楕円形に近い形を呈し、柱穴間の距離は280cmになっていた。中央穴の平面形は短径70cm、推定長径80cmの楕円形で、床面からの深さは34cmを測り、断面形は「U」字形を呈していた。この中央穴の東側部分は、後述する竪穴住居19の中央穴に削平されていた。

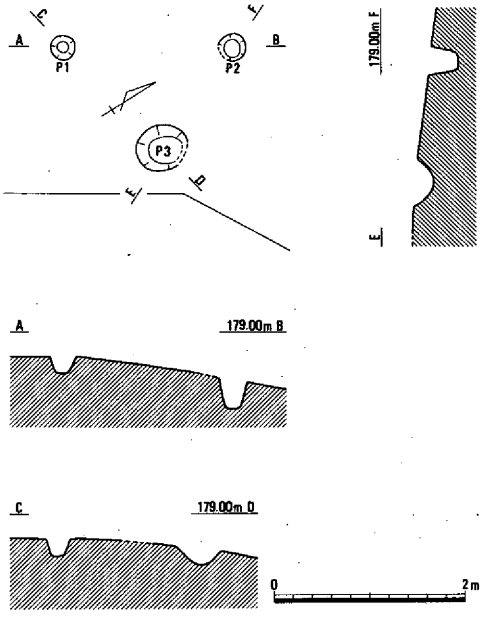
この竪穴住居も特定できる出土遺物が存在しないが、弥生時代後期前葉の時期になると思われる。



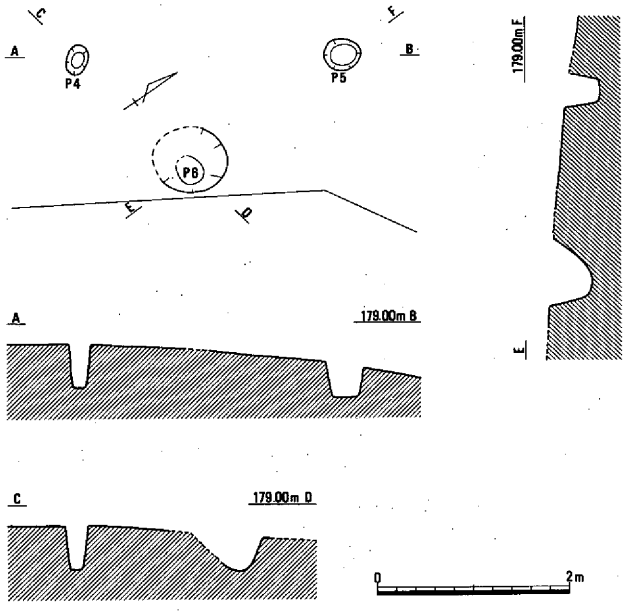
第31図　竪穴住居17～19（1／80）



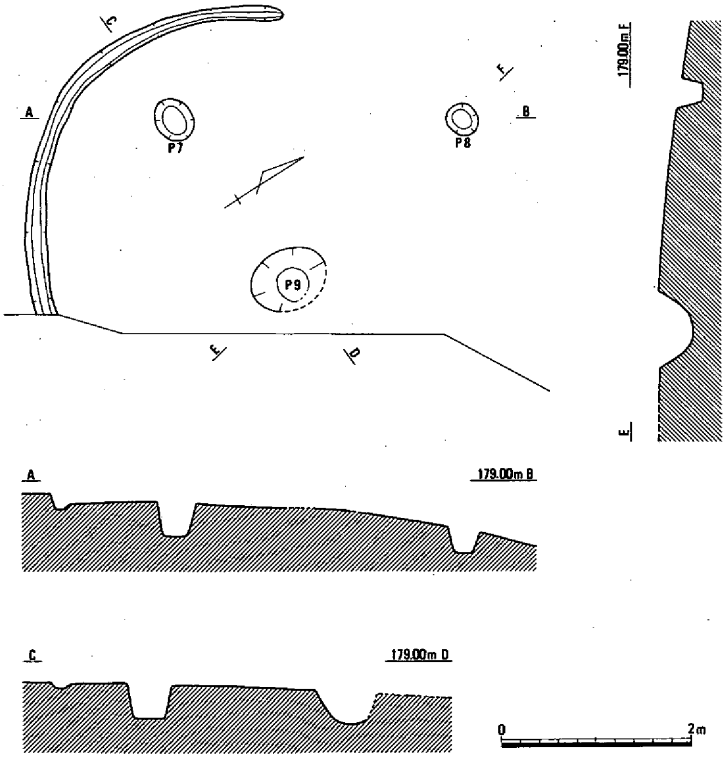
第32図　竪穴住居17～19変遷図（1／120）



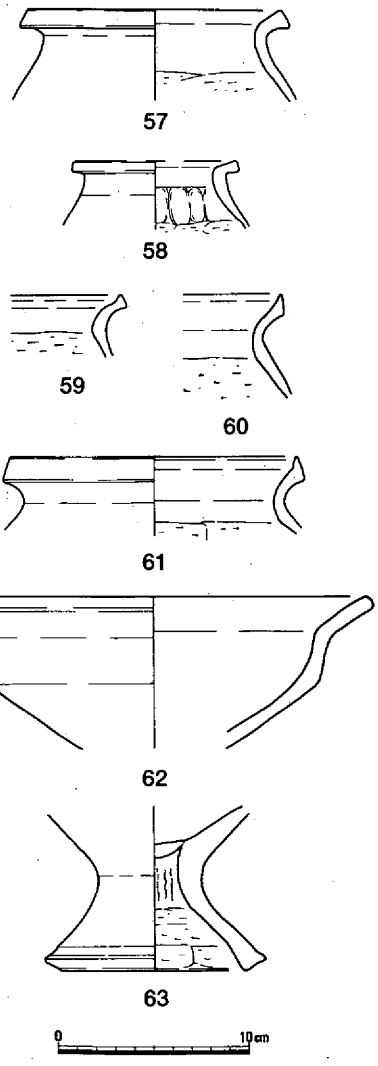
第33図　竪穴住居17（1／80）



第34図　竪穴住居18（1／80）



第35図　竪穴住居19（1／80）



第36図　竪穴住居17～19出土遺物（1／4）

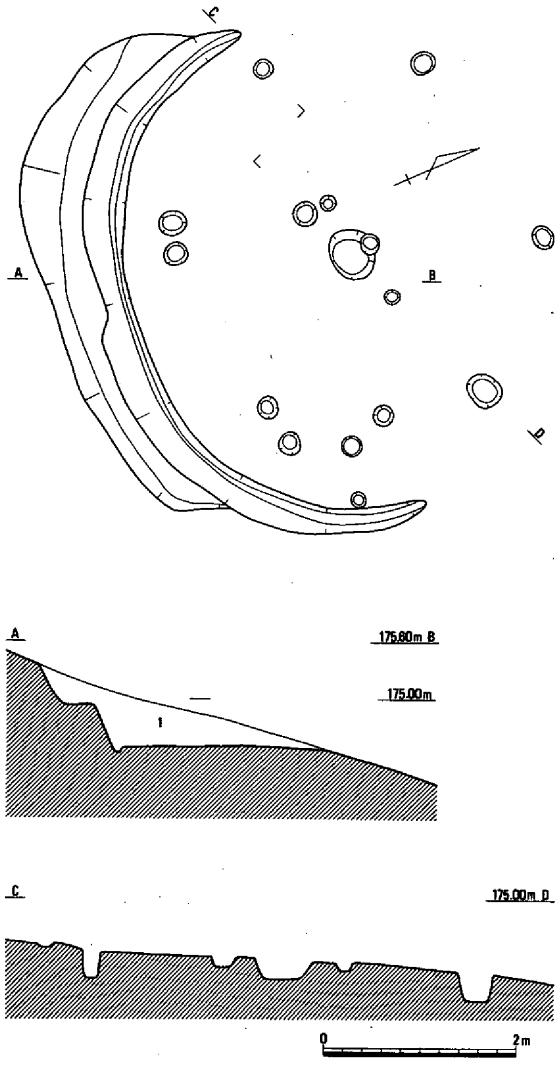
竪穴住居19（第31・32・35・36図、図版54－２）

調査範囲のほぼ中央部に検出した竪穴住居で、前述した竪穴住居18の床面を地形の高い南西方向に拡張して造られていた。

検出した壁体溝や柱穴などの位置から、この竪穴住居の平面形は円形に近い形態を呈し、柱構造は４本柱になっていた。残存した壁体溝の検出面での幅は12～22cmを測り、床面からの深さは５cmであった。２か所の柱穴の平面形は楕円形に近い形で、柱穴間の距離は305cmになっていた。床面の中央よりやや南西方向に寄った地点に存在した中央穴は、推定短径64cm、長径80cmの楕円形を呈し、床面からの深さは39cmで、断面形は「U」字形であった。

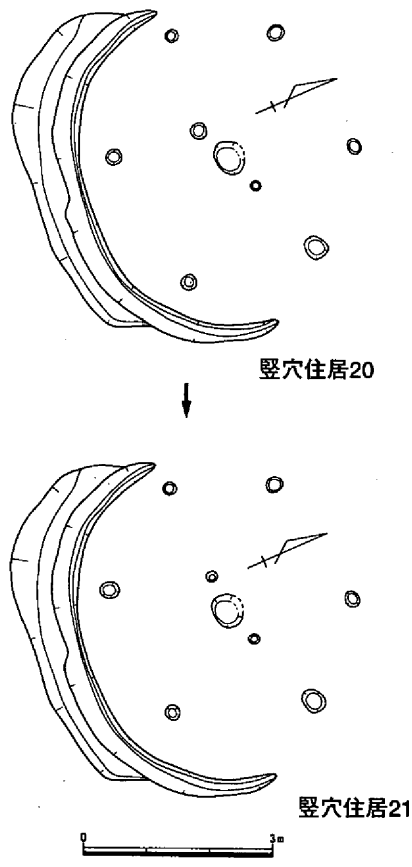
この竪穴住居から出土した遺物として、同一個体と思われる高杯形土器の杯部（**62**）と脚部（**63**）がある。屈曲して斜め上方へ立ち上がった口縁の端部は、器壁が肥厚せずに丸く仕上げ、杯部全体の形態が深くなっている。脚部は「ハ」字状に開き、端部に立ち上がりが認められる。この高杯形土器の杯部と脚部の形態的特徴から、竪穴住居19は弥生時代後期前葉でも後期中葉に近い時期に属すると考える。

なお竪穴住居17から竪穴住居19まで３軒の竪穴住居が重複した地点から、どの竪穴住居に伴う遺物なのか特定できない壺形土器または甕形土器の破片（**57～61**）が出土しているが、これらの土器片はいずれも弥生時代後期前葉の時期に属するであろう。



1．淡黄褐色土

第37図　竪穴住居20・21（1／80）



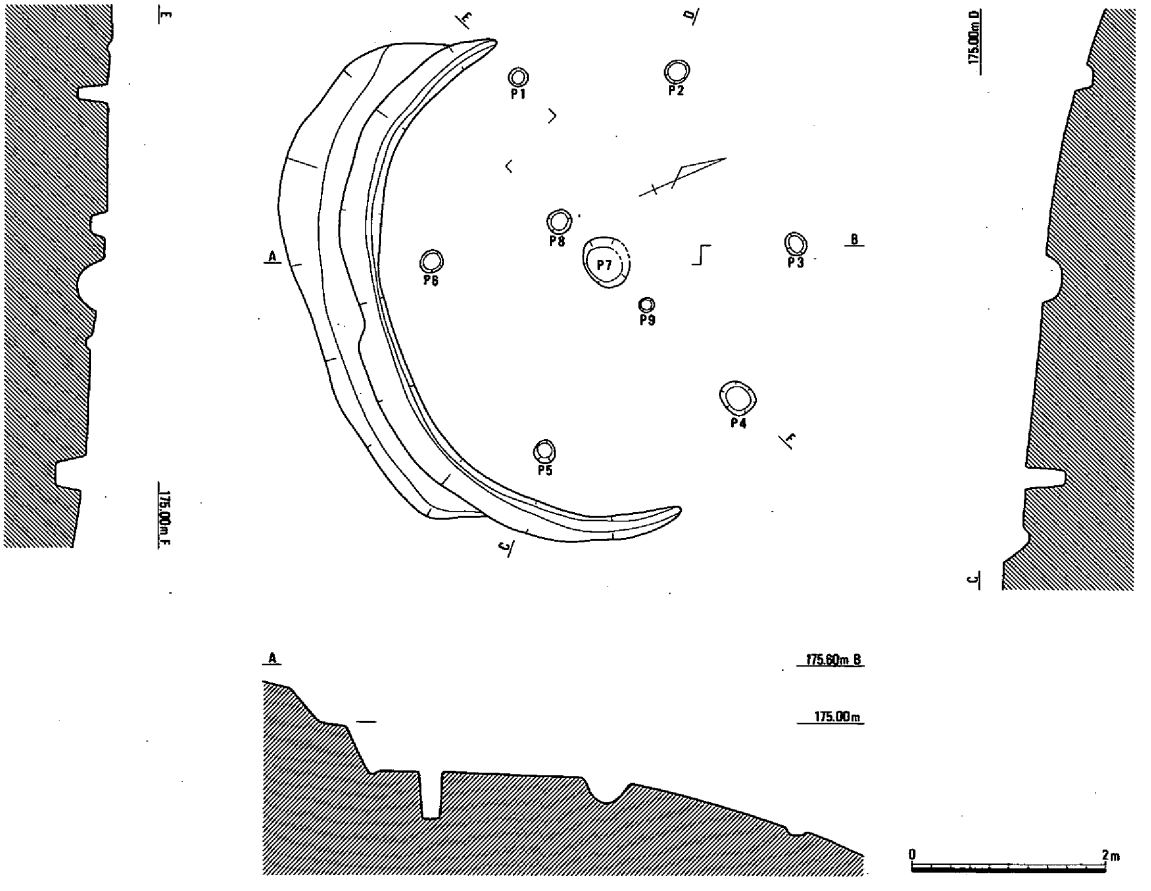
第38図　竪穴住居20・21変遷図（1／120）

竪穴住居20（第37～39図、図版54－３）

調査範囲の中央部からやや北方向へ寄った地点に検出した竪穴住居で、後述する竪穴住居21と重なり合っていた。この竪穴住居20が所在した位置は、野辺張遺跡で最も地形が低くなっていた。

地形の高い南方向に面した部分に、緩やかに湾曲した壁体や壁体溝とテラスを確認した。その残存した状態によると、この竪穴住居の平面形は円形または楕円形に近い形態を呈し、柱構造は６本柱になっていた。テラスの床面からの高さは48cmを測り、平坦面の幅は18～36cmであった。残存する壁体溝の検出面での最大幅は44cmで、床面からの深さは３～10cmになっていた。６か所の柱穴の平面形は円形または楕円形を呈し、西方向に位置するＰ１が最も小さく、東方向に位置するＰ４が最も大きくなっていた。柱穴の断面形はいずれも「Ｕ」字形を呈し、床面からの深さは９～49cmであった。柱穴間の距離は165～230cmを測り、西方向に位置するＰ１とＰ２の間が狭く、南方向に位置するＰ５とＰ６の間が広くなっていた。地形の低い西方向に面した部分を除いて、壁体溝と柱穴との間隔は、西方向に位置するＰ１が50cmと狭く、南東方向と南方向に位置するＰ５とＰ６が60cmであった。中央穴は推定短形50cm、長径56cmの楕円形に近い形態を呈し、床面からの深さは26cmで、断面形が「Ｕ」字形になっていた。この竪穴住居には、中央穴を挟んで125cmの距離を測る地点に２か所の柱穴（Ｐ８とＰ９）を確認した。この２か所の柱穴は、床面周辺で検出した６か所の柱穴よりも規模が小さくて浅いから、中央穴に関係した柱穴と思われる。

この竪穴住居に確実に伴う出土遺物は存在しないが、後述する竪穴住居21よりも古いことが判明しているから、竪穴住居20は弥生時代後期初頭かそれよりも古い時期に属するであろう。



第39図　竪穴住居20（1／80）

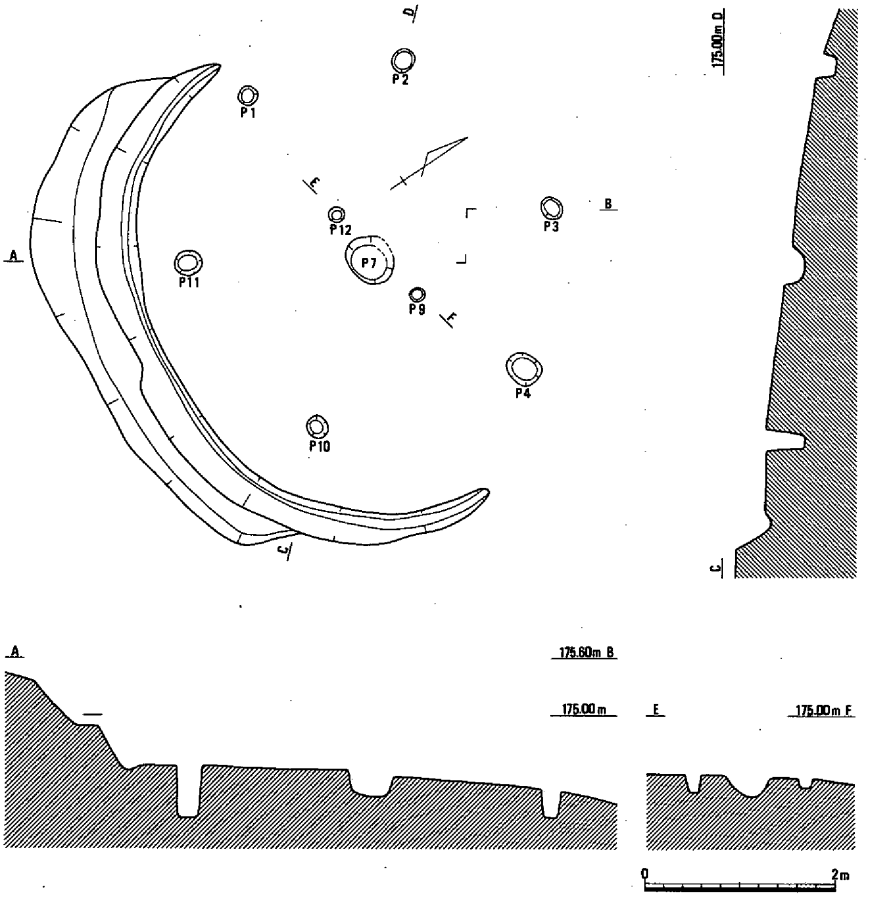
竪穴住居21（第37・38・40図、図版54－３）

前述した竪穴住居20の建て替えによって造られた竪穴住居で、壁体や壁体溝のみならず４か所の柱穴と中央穴も、竪穴住居20のものをそのまま踏襲して使っていた。

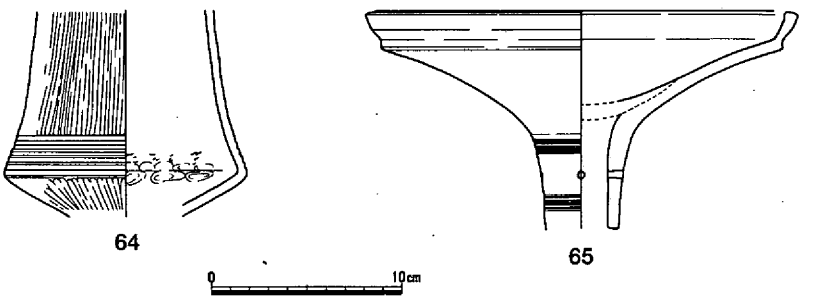
柱穴や中央穴などの検出状況から、この竪穴住居の平面形も円形に近い形態を呈し、柱構造は６本柱である。柱穴の位置が竪穴住居20のものと異なっていたのは、地形の高い南方向に面した地点に検出した２か所（Ｐ10とＰ11）で、どちらもわずかに西方向へ移動していた。これらの柱穴の平面形は楕円形に近い形態を呈し、床面からの深さは21cmと56cmで、断面形は「Ｕ」字形になっていた。この新しい２か所の柱穴間の距離は218cmを測り、壁体溝と２か所の柱穴との間隔は85cmと60cmの数値であった。中央穴を挟んだ位置にも、120cmの距離を有するやや規模が小さくて浅い２か所の柱穴が存在したが、東方向に位置する柱穴は竪穴住居20のものをそのまま利用していたものの、西方向の柱穴は25cm北側へ寄った地点へ移動していた。

この竪穴住居の床面より約30cmほど上位から、台付鉢形土器と思われる上部の破片（**64**）が出土したが、後世に混入したものでこの竪穴住居に伴う遺物ではないと判断された。したがって、この竪穴住居に伴う土器は、高杯形土器（**65**）だけである。斜め上方へ直線的に張り出した杯部は、短く屈曲して口縁端部に至っているが、端部の器壁はほとんど肥厚していない。脚部の上位には４個の穿孔と７条の凹線が認められ、器表面は内外面とも全体にヨコナデを行っているようである。

この高杯形土器の形態的特徴や調整手法から、竪穴住居21は弥生時代後期初頭の時期に属すると考えられ、野辺張遺跡では古い遺構である。



第40図　竪穴住居21（1／80）



第41図　竪穴住居20・21出土遺物（1／4）

竪穴住居22（第42図、図版55－１）

調査範囲の中央部よりやや東方向へ寄った地点に検出した竪穴住居で、床面の西側に寄った地点には、土壙25が確認された。

地形の高い南方向に面した部分に、緩やかに湾曲して半円形を描いた壁体や壁体溝が存在し、３か所の柱穴と中央穴が検出された。このような遺構の残存状態から、竪穴住居22の平面形は円形に近い形態を呈し、柱構造は６本柱と推定された。確認した壁体の床面からの高さは73cmを測り、床面には黄灰色砂質土が堆積していた。検出面での壁体溝の最大幅は43cmで、床面からの深さは４～７cmになっていた。柱穴は３か所に認められ、平面形は円形に近い形で、床面からの深さは46～55cmを測り、断面形は「U」字形を呈していた。残存した柱穴間の距離は220cmと245cmで、南東方向に面した部分よりも南西方向がわずかに広くなっていた。壁体溝と柱穴との間隔は65～90cmとなり、西側に位置した柱穴の部分を広くしていた。中央穴は短径55cm、長径70cmの楕円形に近い形態を呈し、床面からの深さは８cmであった。中央穴の断面形は浅い「U」字形で、内部には黒褐色土が堆積していた。

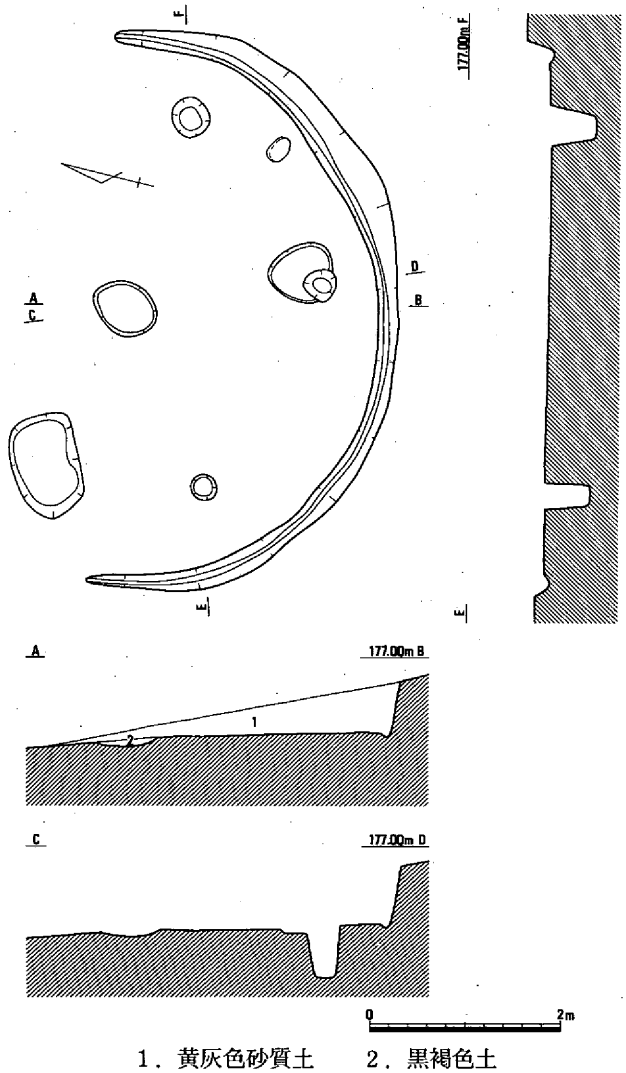
図化することが可能な土器は存在しないが、出土した少量の土器片の形態的特徴や調整手法から、竪穴住居22は弥生時代後期前葉の時期に属すると思われる。

竪穴住居23（第43～45図、図版55－２）

前述した竪穴住居22の南方向へ約10ｍ寄った地点に検出した竪穴住居で、同じ場所に６軒の竪穴住居が重なり合っていた。

この竪穴住居は急勾配の斜面に造られていたため、残存する壁体の立ち上がりが異常に高くなっていた。また竪穴住居の内部に設定した土層断面観察用の畦によると、この地点では竪穴住居を建て替えるたびに竪穴住居そのものの規模が小さくなり、柱構造も当初には10本柱だったものが９本柱から４本柱にまで変化していたのである。

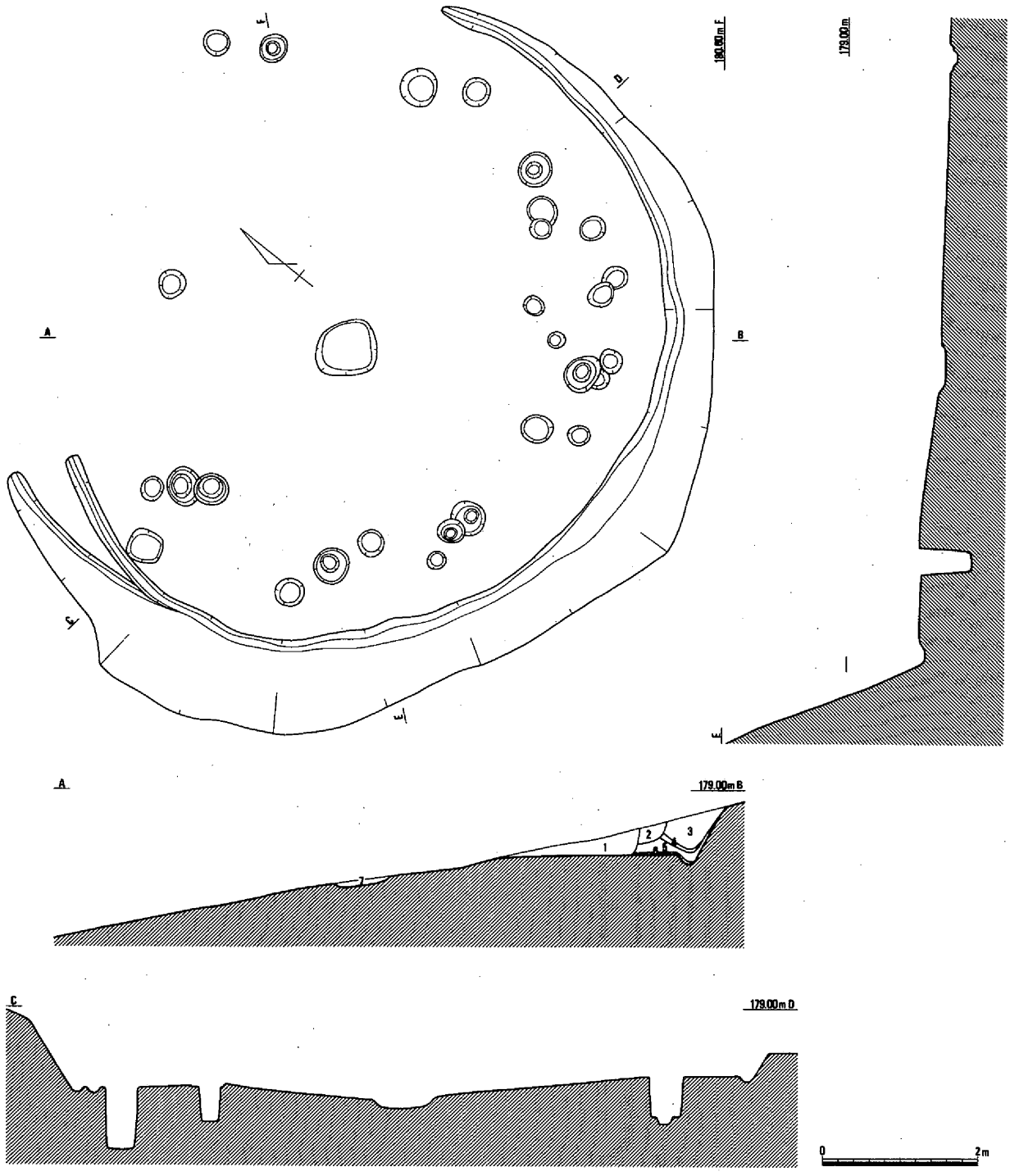
検出した壁体や壁体溝と６か所の柱穴や中央穴から、この竪穴住居の平面形は円形に近い形態を呈し、柱構造はおそらく10本柱であったと思われる。残存する壁体の高さは床面から220cmもあり、異常に高い数値になっていた。検出面での壁体溝の最大幅が120cmとなり、床面からの深さは５～11cmであった。床面に確認できた柱穴は６か所で、地形が低くなった北西方向に面した部分は、精査したが柱穴が検出できなかった。残存した柱穴の平面形は円形または楕円形に近い形態を呈したものが多く、北東方向に位置したＰ１の柱



１．黄灰色砂質土　　２．黒褐色土

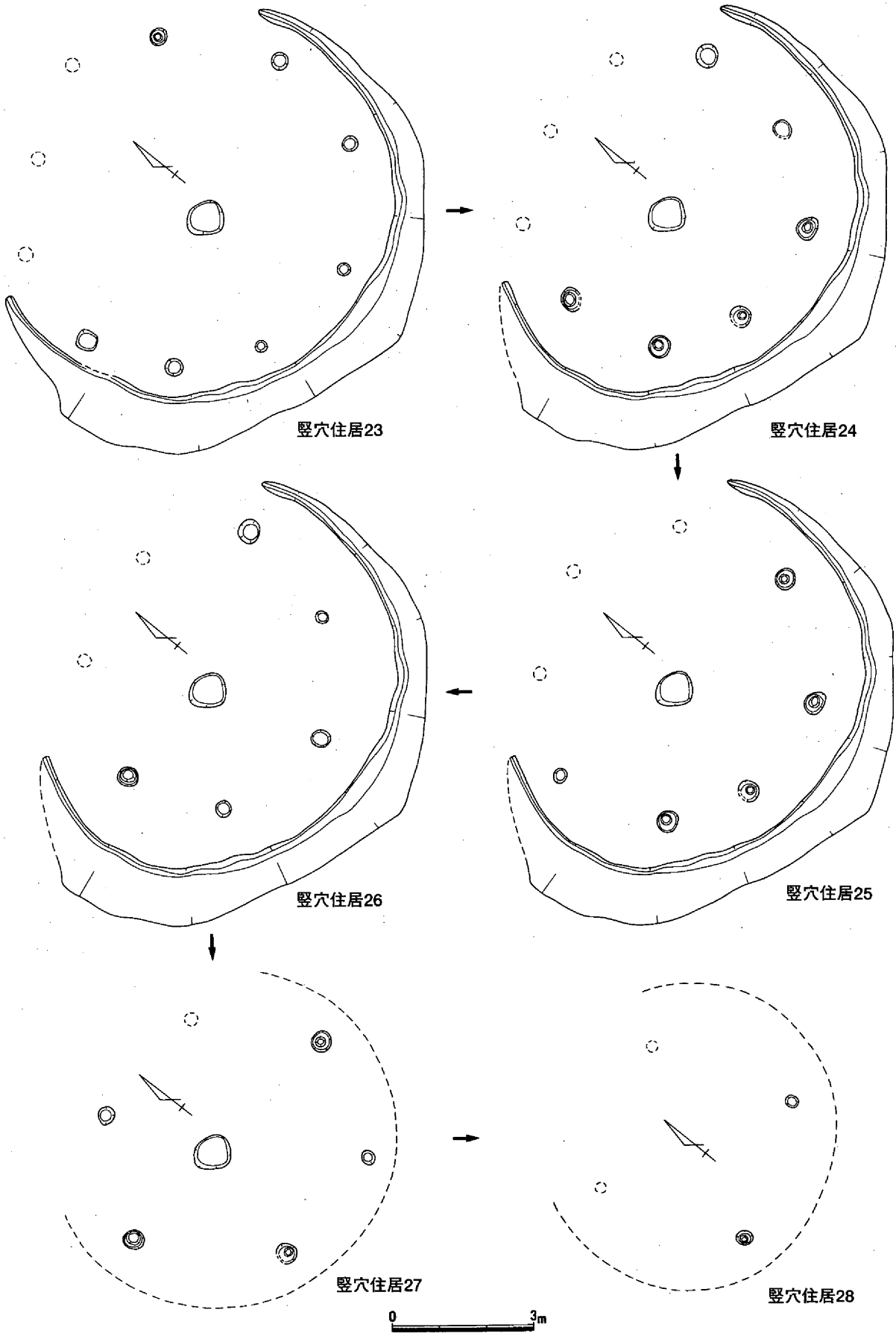
第42図　竪穴住居22、土壙25（1／80）

穴だけが２段掘りになっていた。柱穴そのものの規模は、南方向に存在したＰ５が最も小さく、西方向に存在したＰ７が最も大きくて、隅丸方形に近い形態になっていた。床面から最も深いものはＰ７で82㎝もあり、断面形は細長い「Ｕ」字形であった。計測が可能な柱穴間の距離は190～270㎝で、南西方向に位置したＰ５とＰ６の間が最も狭く、南東方向に位置したＰ３とＰ４の間が最も広くなって



１．淡茶褐色土（炭化物含む）　２．淡黄褐色土　３．暗灰褐色土（炭化物含む）
４．淡灰色土　５．淡褐色土　６．明灰色土（炭化物含む）　７．暗灰色土（炭化物含む）

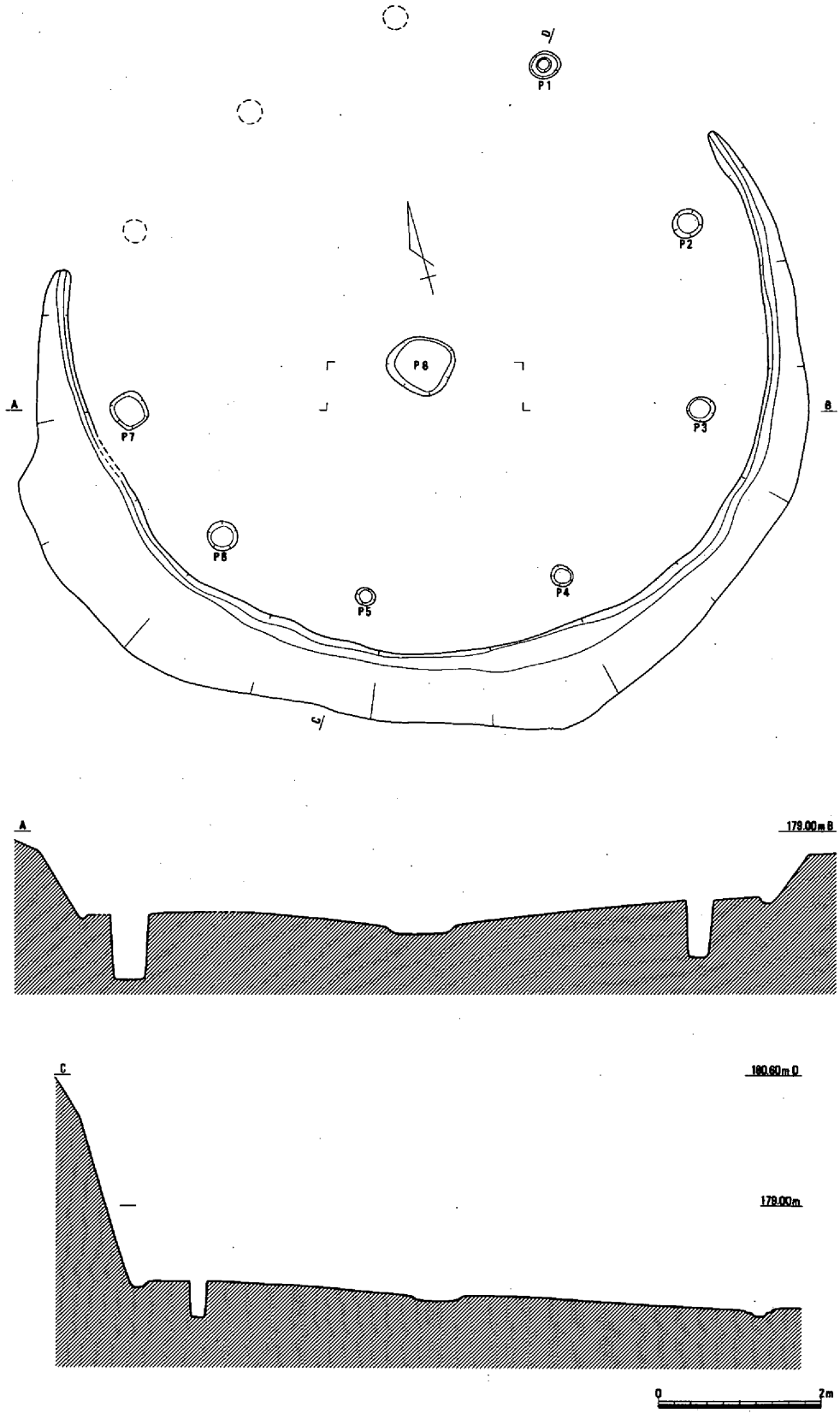
第43図　竪穴住居23～28（1／80）



第44図　竪穴住居23～28変遷図（1／120）

いた。地形の低い北東方向に位置したＰ１を除いて、壁体溝と柱穴との間隔は55～75cmを測り、西方向のＰ７が狭くて東方向のＰ２やＰ３が広くなっていた。床面の中央よりやや南側に寄った地点に検出された中央穴は、短径70cm、長径76cmの不整形な形態を呈しており、検出面からの深さは15cmで、断面形は浅い「U」字形になっていた。この中央穴は、同じ場所に竪穴住居24から竪穴住居27まで４度の建て替えが行われていたにもかかわらず、位置を移動することなくそれぞれの竪穴住居の中央穴としてそのまま踏襲されて機能していたのである。

この竪穴住居に伴う出土遺物は特定できないが、重なり合った６軒の竪穴住居のうちでは最も古いことが土層断面の観察で判明しているから、竪穴住居23は弥生時代後期前葉の時期に属するであろう。



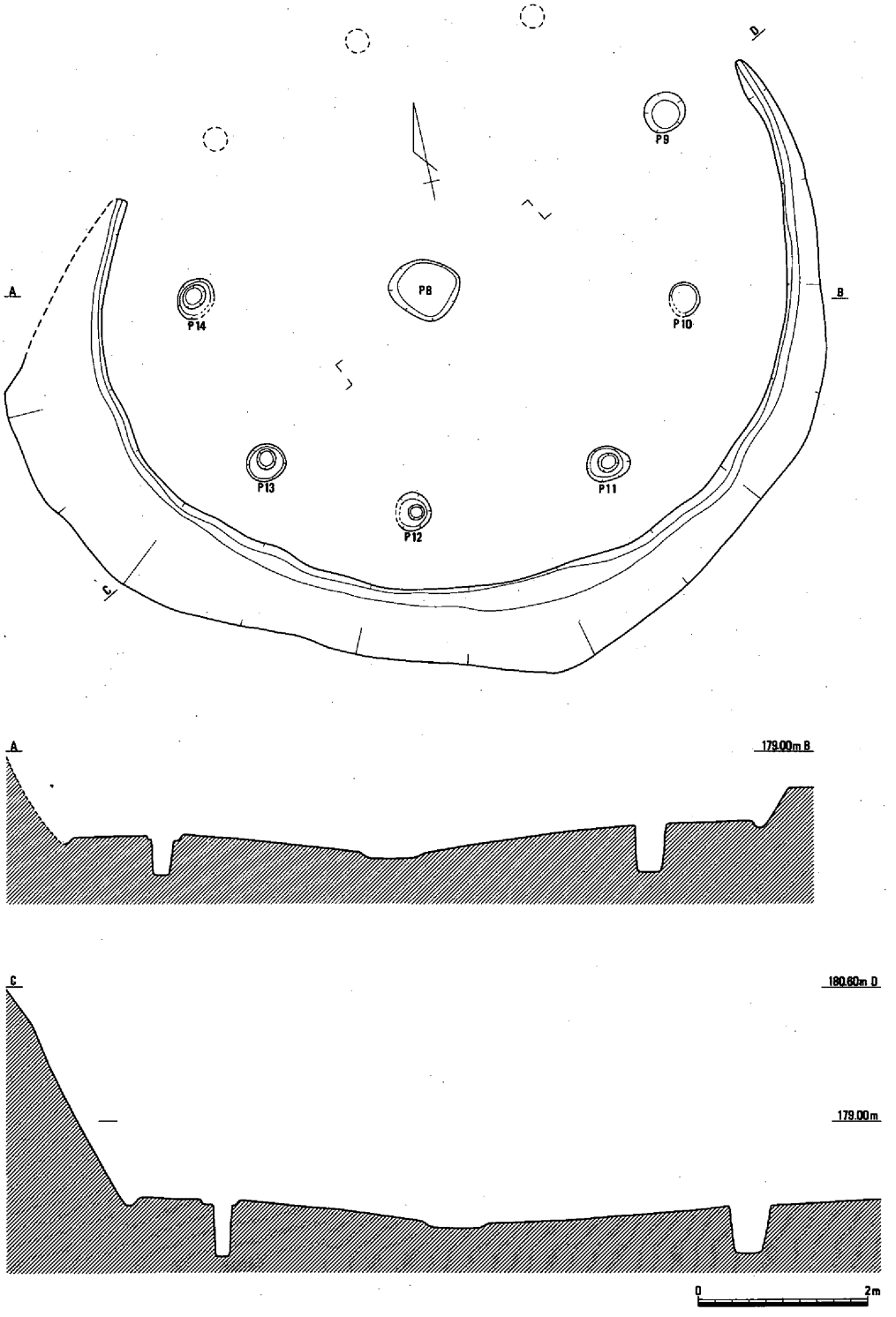
第45図　竪穴住居23（1／80）

竪穴住居24（第43・44・46図、図版55－２）

前述した竪穴住居23と同じ地点に検出した竪穴住居であるが、西方向に面した壁体や壁体溝が竪穴住居23のものよりも内側に確認され、竪穴住居全体の規模がやや小さくなっていた。

検出した壁体溝や柱穴などの残存状態から、この竪穴住居の平面形は円形に近い形態を呈し、柱構造は９本柱と推定される。確認した柱穴の平面形は円形または楕円形に近い形で、断面形が２段掘りになっているものが多い。柱穴間の距離は190～230cmを測り、南方向に面したＰ11とＰ12の間が最も広く、隣接したＰ12とＰ13の間が最も狭くなっていた。壁体溝と柱穴との間隔は100～130cmを測り、前述した竪穴住居23よりも全般に広くなっていた。中央穴は床面の中央よりもやや西側へ寄った地点に確認されたが、竪穴住居23のものをそのまま踏襲して使われていた。

この竪穴住居から出土したと断定できる遺物は存在しないものの、６軒の竪穴住居の切り合い関係や、竪穴住居23に続いて造られたことを考慮するなら、竪穴住居24も弥生時代後期前葉の時期に属するであろう。



第46図　竪穴住居24（1／80）

竪穴住居25（第43・44・47図、図版55－２）

この竪穴住居は、前述した竪穴住居24を建て替えて新しく造られたものであるが、壁体や壁体溝だけでなく中央穴までも、竪穴住居24のものを踏襲してそのまま使っていた。また地形の高い南方向に面した３か所の柱穴（Ｐ11～Ｐ13）も、竪穴住居24で機能していたものを利用していた。

この竪穴住居の平面形は円形に近い形態を呈し、北方向に位置する柱穴が確認できなかったが、柱構造は８本柱になるであろう。検出した柱穴の平面形は円形または楕円形に近い形で、断面形が２段掘りになっているものが多い。柱穴間の距離は、南東方向のＰ11とＰ15の間が270cm、西方向のＰ13とＰ16の間が240cmになっていた。壁体溝と柱穴との間隔は、Ｐ15が110cm、Ｐ16が80cmであった。

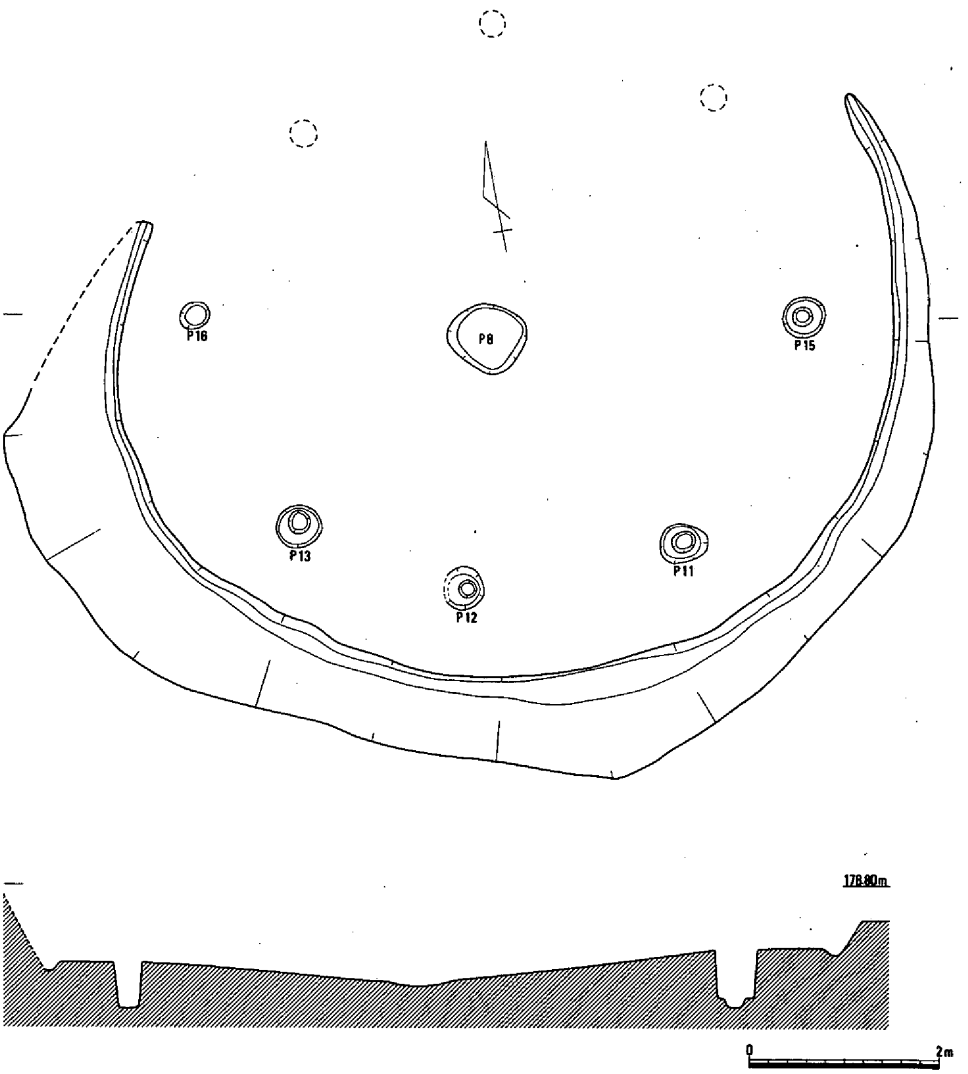
この竪穴住居の出土遺物は特定できないが、竪穴住居25は弥生時代後期前葉の時期と思われる。

竪穴住居26（第43・44・48図、図版55－２）

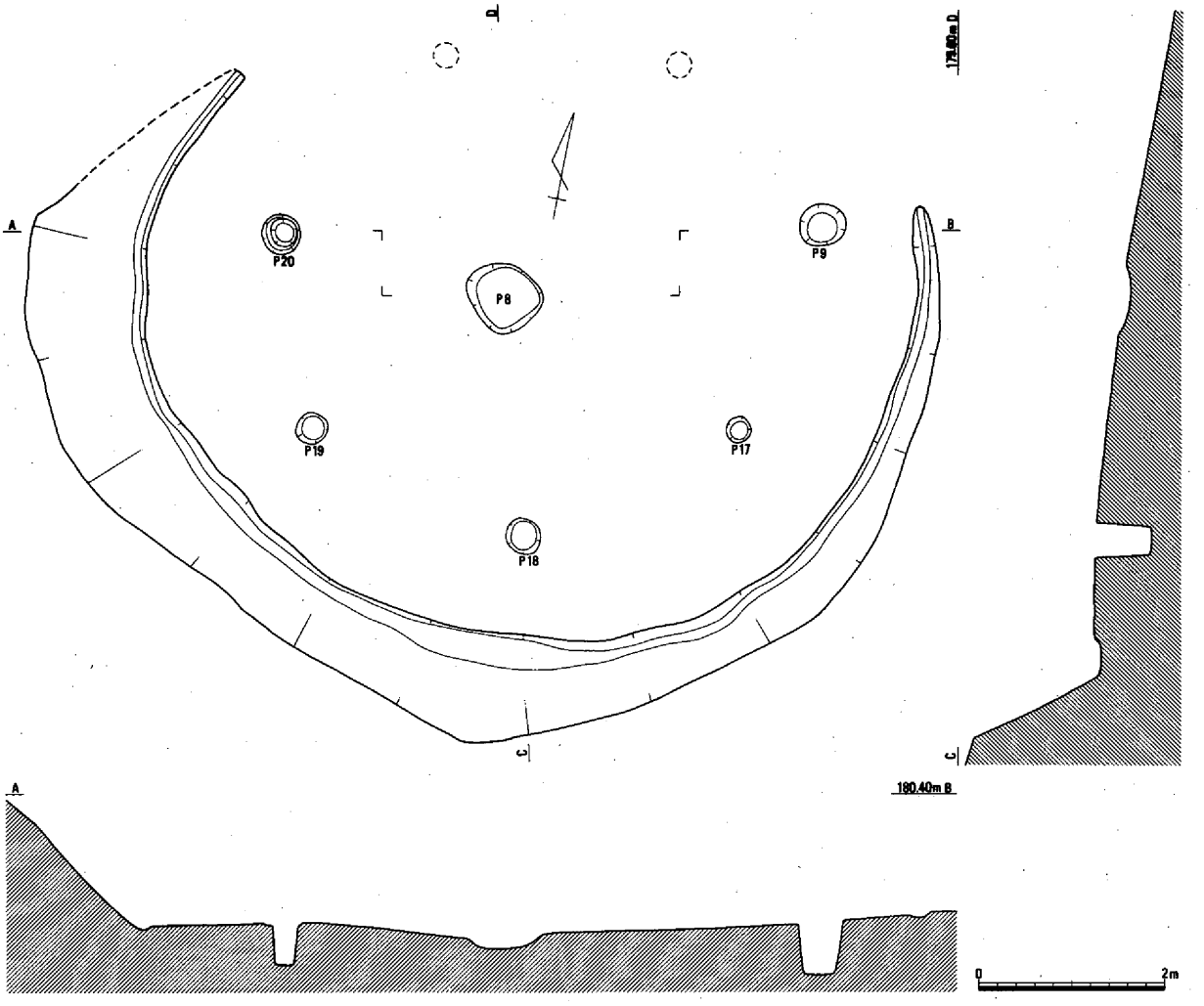
調査範囲の中央部よりやや東方向へ寄った地点に検出した竪穴住居で、前述した竪穴住居23や竪穴住居25などと同じ場所に重なり合っていた。この竪穴住居は、壁体溝や中央穴は竪穴住居24や竪穴住居25のものをそのまま踏襲して使用していたが、柱穴の数が減少して位置が移動していた。

地形の低い北方向に面した部分が削平されて残存しないが、平面形は円形に近い形態を呈し、柱構造は７本柱と推定される。東方向のＰ９は竪穴住居24の柱穴を拡張して利用し、西方向のＰ20は２段掘りになっていた。柱穴間の距離は210～260cmを測り、南方向に面したＰ18とＰ19の間が最も広くなっていた。壁体溝と柱穴との間隔は110～140cmで、前述した竪穴住居25よりも広くしていた。

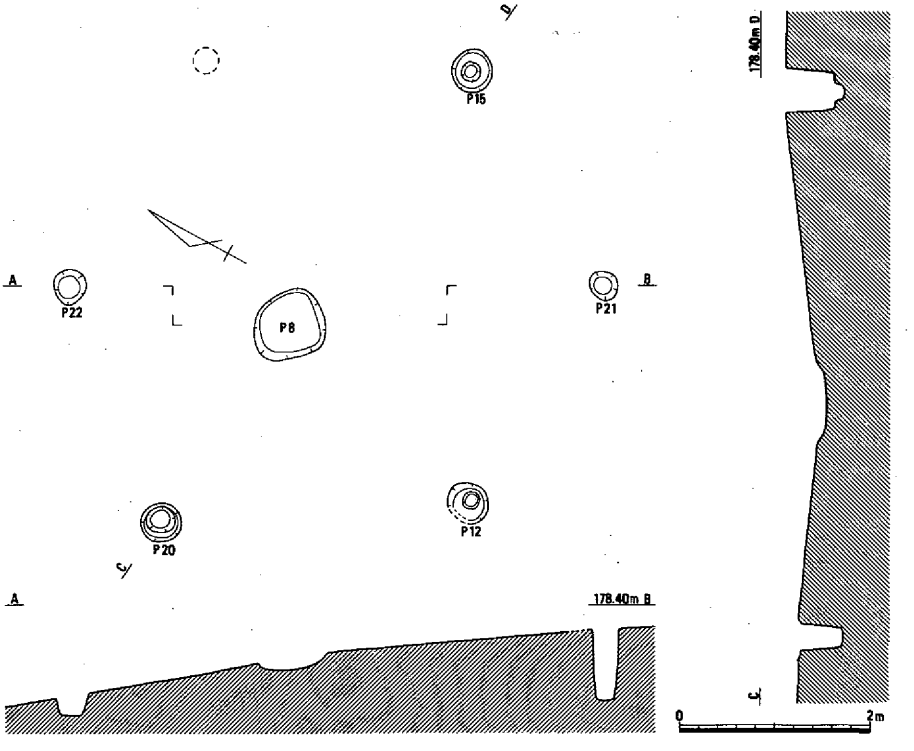
この竪穴住居から出土した遺物は特定できないが、竪穴住居26もおそらく弥生時代後期前葉の時期に属するであろう。



第47図　竪穴住居25（1／80）



第48図　竪穴住居26（1／80）



第49図　竪穴住居27（1／80）

竪穴住居27（第43・44・49図、図版55－２）

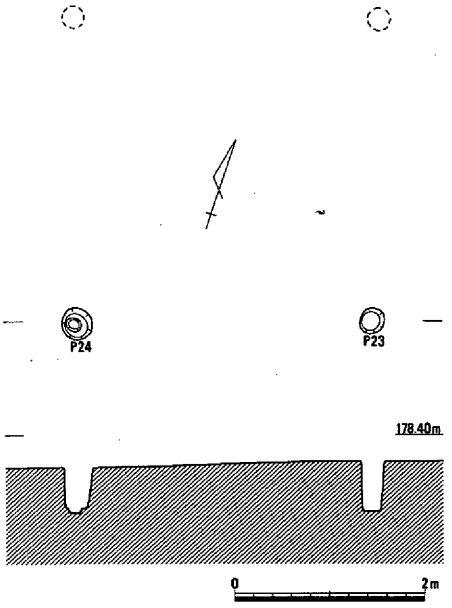
前述した竪穴住居26に引き続いて造られた竪穴住居で、壁体や壁体溝の存在した位置が、竪穴住居23から竪穴住居26の４軒の竪穴住居のものより内側になっていた。そのために、土層断面ではかすかに確認できたものの、６軒の竪穴住居が重なり合っていたこともあって、平面的には全容を把握することができなかった。また検出した柱穴の配置状態から、竪穴住居そのものの規模も、竪穴住居26よりもさらに縮小されていた。

この竪穴住居の柱構造は６本柱で、中央穴は竪穴住居23から竪穴住居26のものをそのまま踏襲して使っていた。２か所の柱穴（Ｐ21とＰ22）は新しいものであったが、３か所の柱穴は以前の竪穴住居の柱穴を掘り返して再利用していたために、断面形が２段掘りになっていた。柱穴間の距離は260～330cmを測り、南西方向に面したＰ12とＰ20の間が広くなっていた。

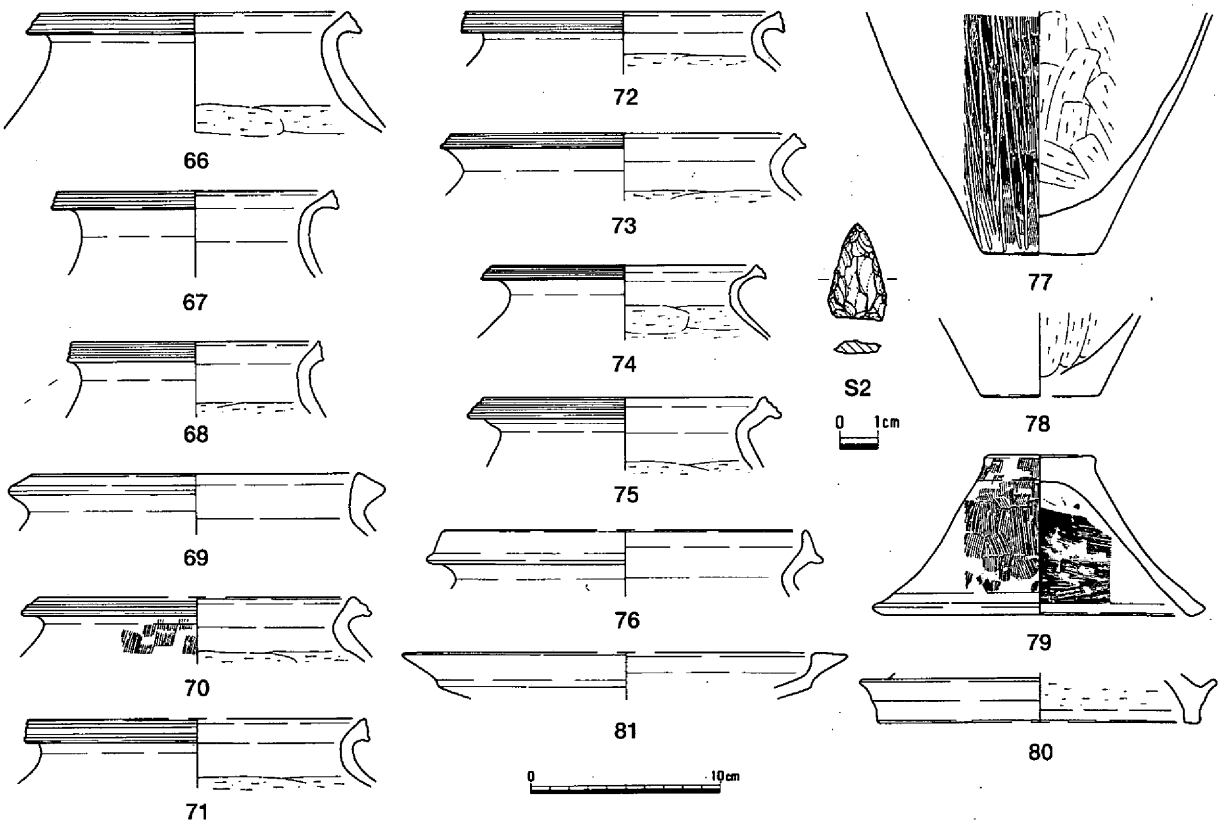
竪穴住居28（第43・44・50図、図版55－２）

土層断面を観察してその存在が明らかになったもので、精査したにもかかわらず２か所の柱穴を検出したにすぎない。

この竪穴住居は、柱構造が４本柱の小規模なものと推定され、検出した柱穴間の距離は310cmになっていた。壁体溝や中央穴は、存在すると思われたが確認できなかった。



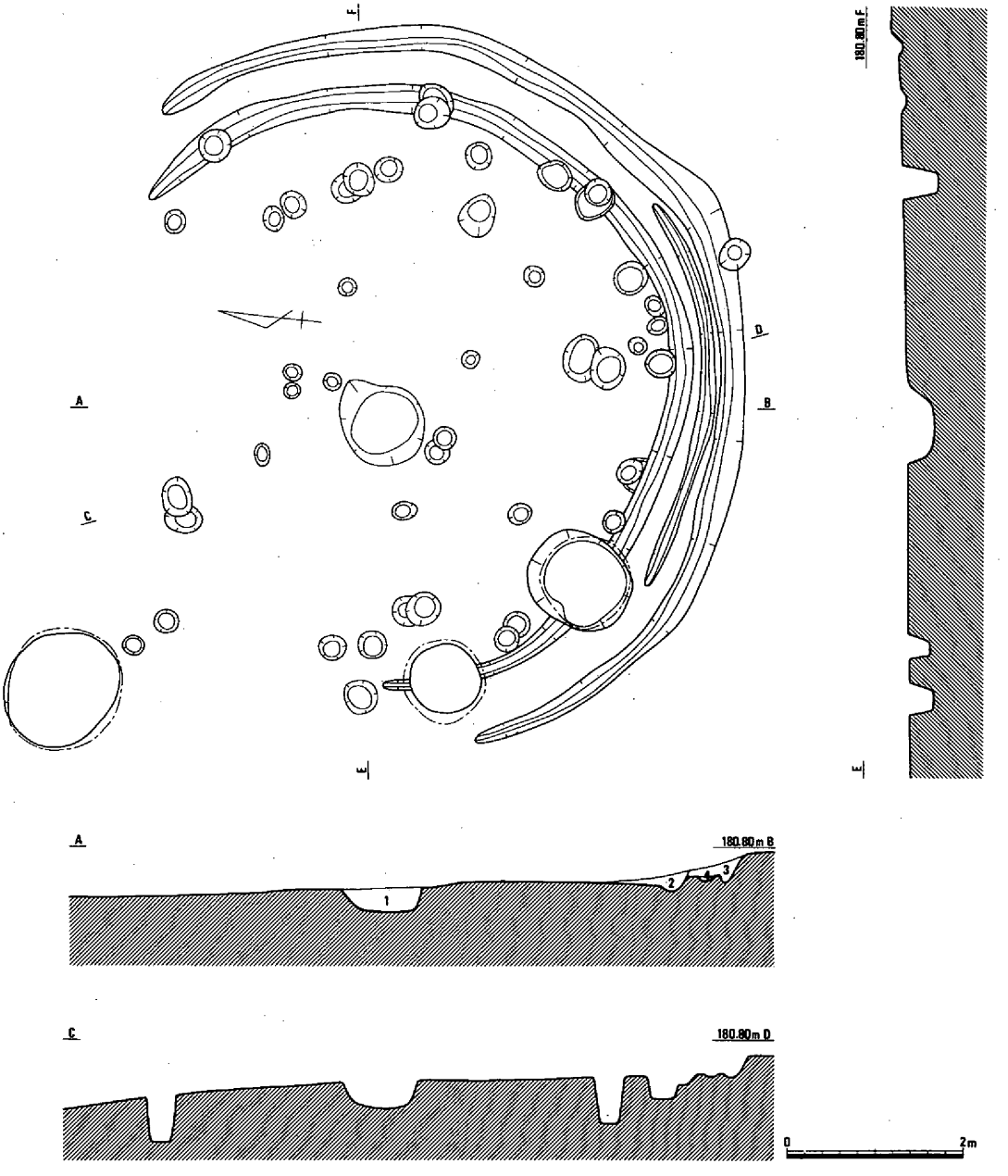
第50図　竪穴住居28（1／80）



第51図　竪穴住居23～28出土遺物（1／4、1／2）

竪穴住居23から竪穴住居28まで６軒の竪穴住居が存在した地点からは、１点の石鏃（S２）と比較的多くの土器片（66～81）が出土している。石鏃はサヌカイト製の完形品で、重さ1.5ｇを測る。66～76の壺形土器または甕形土器の口縁部は、外湾して斜め上方へ立ち上がった端部外面に凹線が認められるものが多い。口縁部から頸部にかけては、内外面とも全体にヨコナデを行っているものが多く存在するが、外面に縦方向のハケメが認められるもの（70）もある。77の底径5.9㎝の底部破片は、内面は縦または斜め方向のヘラケズリを施し、外面はハケメの上面に粗いヘラミガキを加えている。79の蓋形土器は、内外面ともハケメが認められる。80は器台形土器、81は高杯形土器の破片である。

これらの土器片は、その形態的特徴や調整手法から、弥生時代後期前葉の時期に属するであろう。

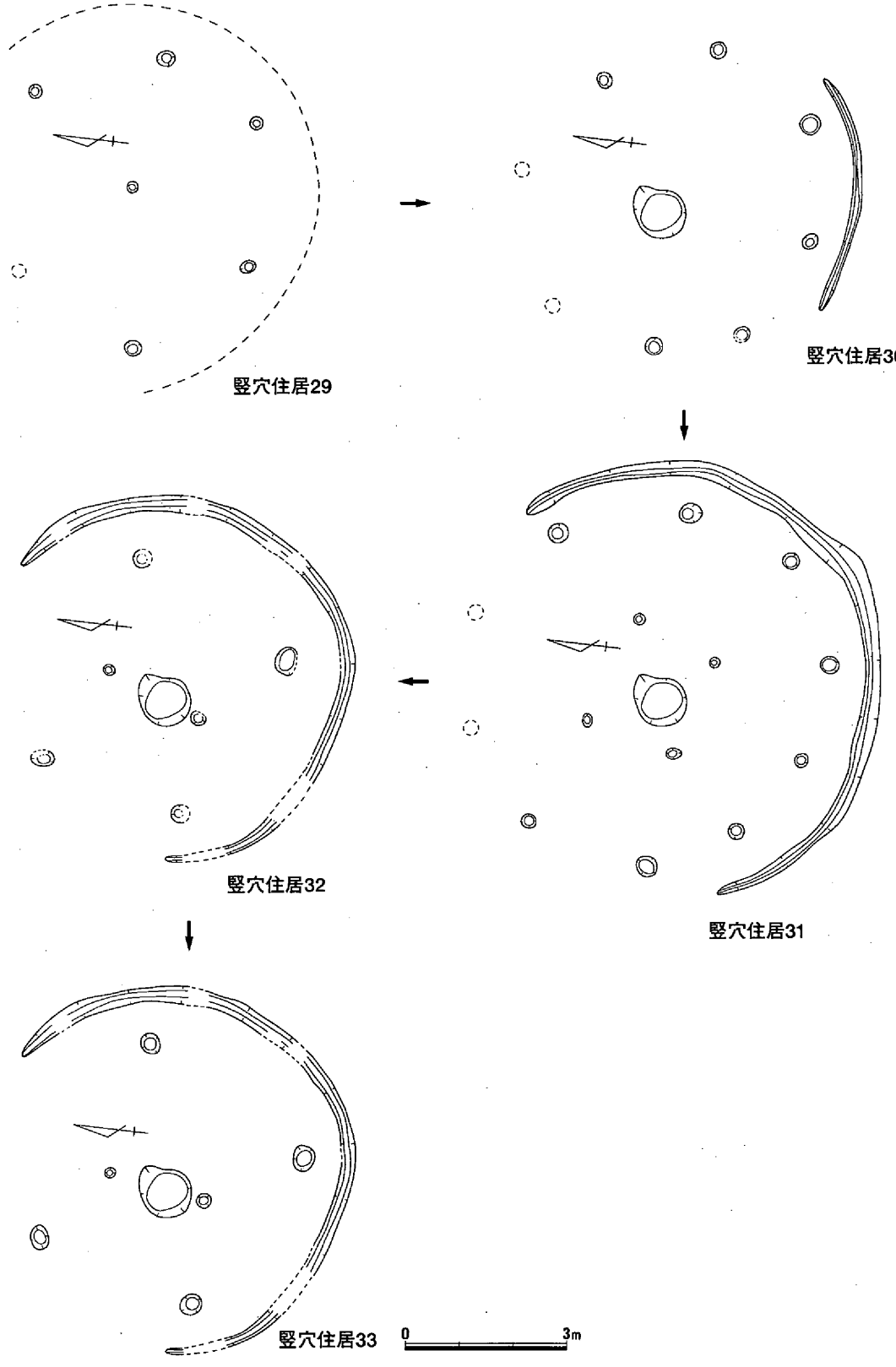


１．暗灰褐色土（炭化物含む）　２．灰褐色土（炭化物含む）
３．暗茶褐色土（炭化物含む）　４．淡褐色土

第52図　竪穴住居29～33、土壙28～30（1／80）

竪穴住居29（第52～54図、図版56－１）

調査範囲の東方向に検出した竪穴住居で、同じ場所に５軒の竪穴住居が重なり合っていた。これらの竪穴住居の変遷過程を土層断面によって観察すると、建て替えが行われるたびに竪穴住居の規模が



第53図　竪穴住居29～33変遷図（1／120）

拡張していたのが、途中の段階で突然に竪穴住居の規模が縮小されていたのである。

５軒の竪穴住居の床面には土壙29と土壙30が重複して存在し、北西方向の近接した地点には土壙28を検出した。また東方向には竪穴住居34や土壙31が確認され、西方向約10ｍの地点には大きな土壙26と土壙27が重なり合っているのが認められた。

この竪穴住居は、同じ場所を利用して竪穴住居30から竪穴住居33の４軒の竪穴住居が継続して造られていたので、壁体や壁体溝が検出できなかった。検出した柱穴の位置関係から、柱構造は６本柱になると推定される。地形の低い北西方向に面した柱穴は存在しなかったが、検出した柱穴の平面形は円形または楕円形を呈していた。残存した柱穴間の距離は200～270㎝を測り、南方向に面したＰ３とＰ４の間が広くなっていた。床面から最も深い柱穴は、東方向に位置したＰ２で50㎝であった。中央穴はかすかに痕跡を検出したもので、短径16㎝、長径18㎝の楕円形に近い形態を呈し、周囲の柱穴よりも小さくなっていた。また床面からの深さは４㎝と浅く、断面形は「Ｕ」字形であった。

出土遺物は存在しないが、この竪穴住居29は弥生時代後期前葉の時期に属するであろう。

竪穴住居30（第52・53・55図、図版56－１）

前述した竪穴住居29と同じ場所に存在した竪穴住居で、検出した壁体溝は竪穴住居31と竪穴住居32や竪穴住居33の壁体溝の中間に短く湾曲して確認された。

地形の高い南方向に面した位置に部分的に残存した壁体溝の検出状態から、この竪穴住居の平面形は円形に近い形態を呈すると考えられた。壁体溝の検出面での最大幅は18㎝で、検出面からの深さは５㎝になっていた。この壁体溝の上面は、後に造られた竪穴住居によって削平されていたため、床面から立ち上がる壁体は残存しなかった。地形の低い北方向に面した部分には柱穴が確認できなかったが、この竪穴住居の柱構造は８本柱になるであろう。検出した柱穴の平面形は円形または楕円形を呈し、検出面から最も深いもので56㎝を測り、断面形は「Ｕ」字形を呈していた。残存する柱穴間の距離は165～220㎝になり、南方向に面したＰ９とＰ10の間が最も広く、西方向に面したＰ11とＰ12の間が最も狭くなっていた。壁体溝と柱穴との間隔は、南方向に存在したＰ９とＰ10がともに60㎝であった。中央穴は床面のやや北方向へ寄った位置に確認され、短径92㎝、長径112㎝の不整形な形を呈していた。この中央穴の検出面からの深さは32㎝を測り、断面形は「Ｕ」字形になり、内部に炭化物を含んだ暗灰褐色土が堆積していた。

この竪穴住居から出土した遺物は存在しないが、遺構の切り合い関係などから、竪穴住居30は前述した竪穴住居29と同様に、弥生時代後期前葉の時期に属すると思われる。

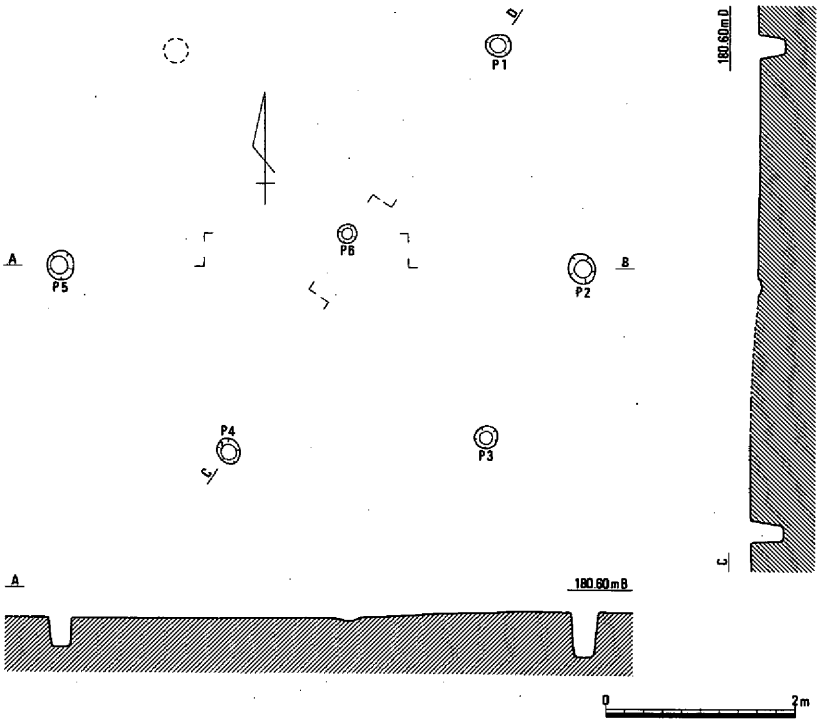
竪穴住居31（第52・53・56図、図版56－１）

この竪穴住居も調査範囲の東方向に存在したもので、前述した竪穴住居29や竪穴住居30と同じ場所に重なり合って検出された。竪穴住居30の床面をそのまま利用し、竪穴住居全体の規模を拡張して建て替えられており、重なり合った５軒の竪穴住居のうちでは最大の全容を有するものである。なおこの竪穴住居31に後続して造られた竪穴住居32と竪穴住居33は、一転して竪穴住居そのものの規模が極端に縮小し、柱構造も変化していたのである。

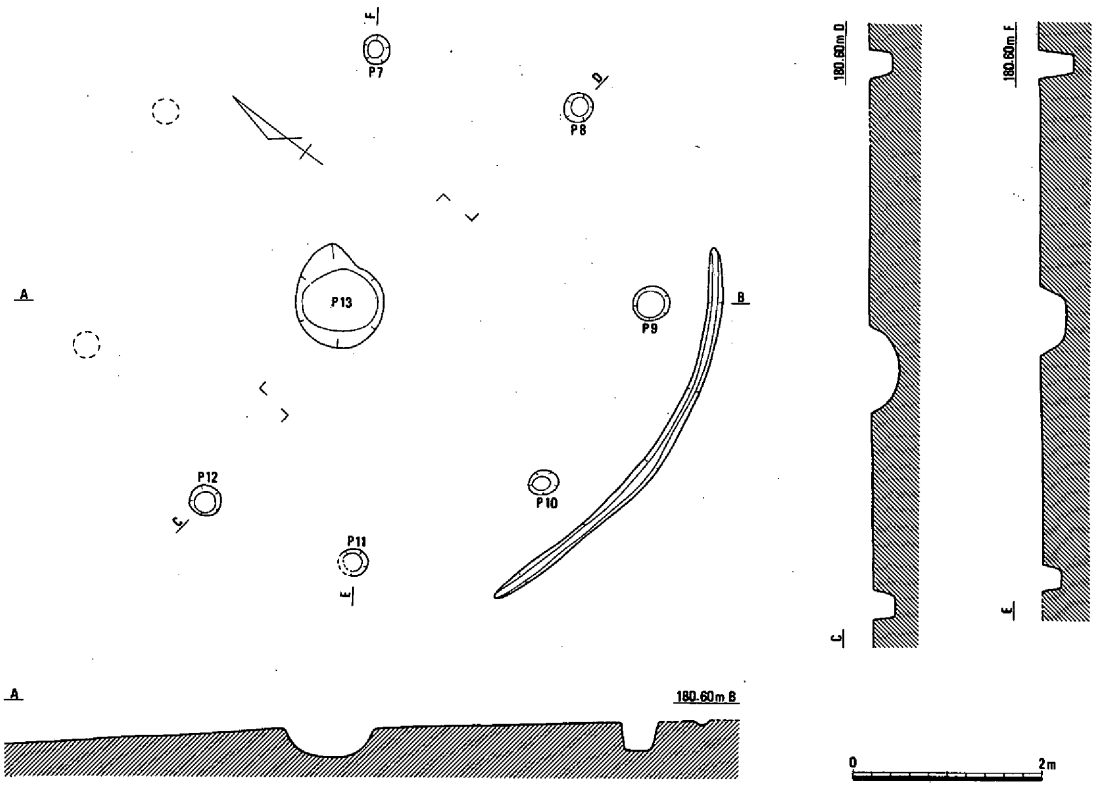
地形の高い南方向に面した部分に、緩やかに湾曲して半円の形を描いた壁体や壁体溝の痕跡によると、この竪穴住居の平面形は円形に近い形態を呈すると考えられる。地形の低い北方向に面した部分には柱穴が確認できなかったが、柱構造は10本柱になると推定され、竪穴住居30のものをそのまま踏襲した中央穴が存在した。壁体溝の検出面での最大幅は48㎝を測り、床面からの深さは７㎝になって

いた。残存する壁体の床面からの高さは25cmを測り、南方向に面した柱穴のＰ17に近接した部分が最も高くなっていた。残存した８か所の柱穴の平面形は円形または楕円形を呈し、断面形は「Ｕ」字形で、床面からの最大の深さが66cmであった。柱穴間の距離は180～240cmを測り、南方向から西方向にかけての地点は180cmとほぼ同じ数値になり、東方向に面したＰ14とＰ15の間が最も広くなっていた。壁体溝が残存しない北方向から西方向にかけての部分を除いて、壁体溝と柱穴との間隔は60～100cmを測り、南方向に面したＰ18が最も広く、南東方向に面したＰ16が最も狭くなっていた。竪穴住居30のものをそのまま踏襲した中央穴は、床面の南西方向へ寄った地点に位置していた。

この竪穴住居の特徴として、中央穴の周囲に上屋を支えると推定される



第54図　竪穴住居29（1／80）

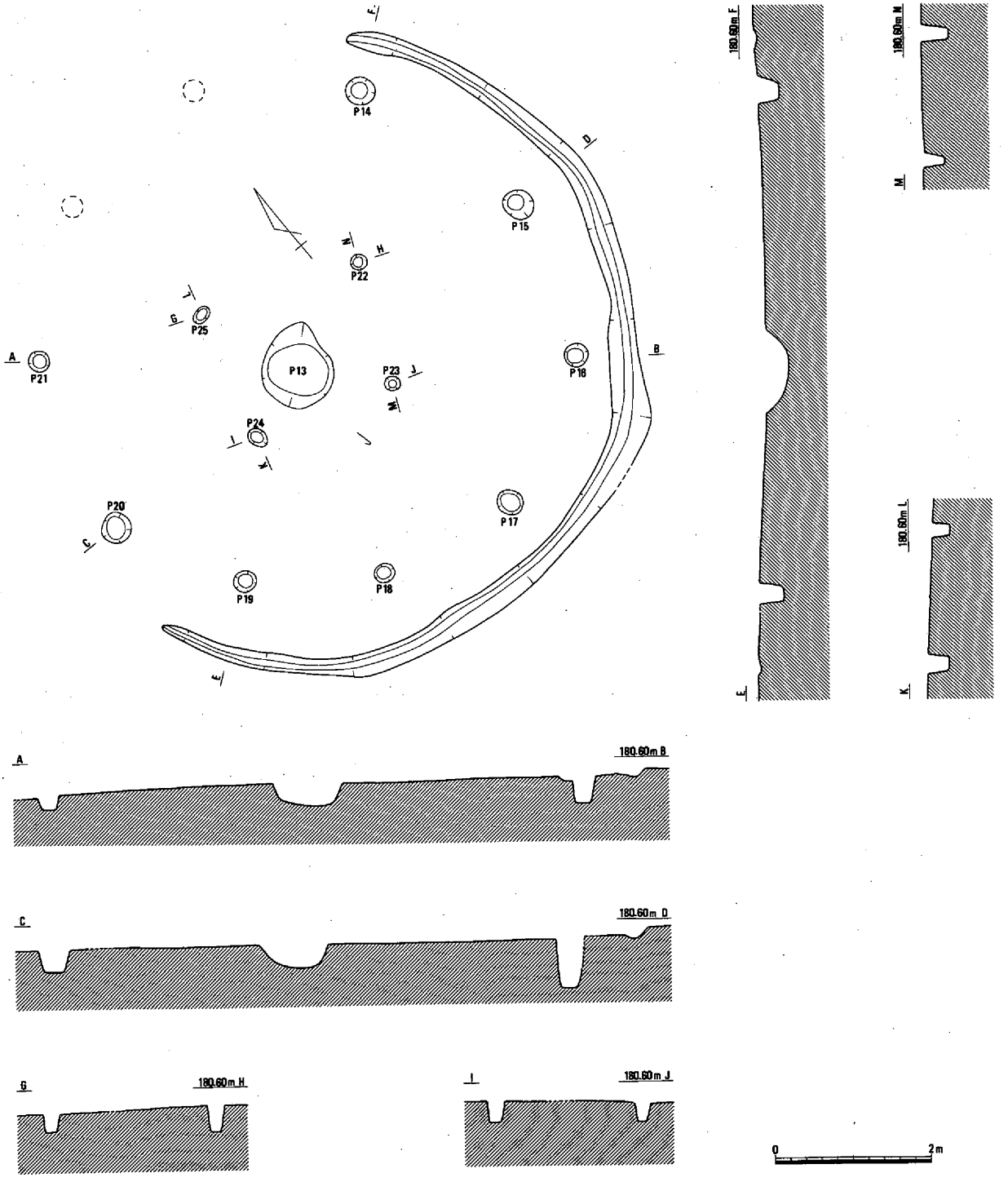


第55図　竪穴住居30（1／80）

小規模な柱穴（Ｐ22～Ｐ24）が確認されたことである。平面形は円形または楕円形を呈し、最大の柱穴でも短径20cm、長径40cmを測るにすぎない。これらの柱穴の床面からの深さは24～35cmと浅く、断面形はいずれも「Ｕ」字形になっていた。これらの柱穴間の距離は160～210cmを測り、西方向に面したＰ22とＰ23の間が最も狭く、北方向に面したＰ22とＰ25の間を最も広くしていた。

野辺張遺跡で検出した竪穴住居で、中央穴の周囲に４か所の上屋を支えると推定される小規模な柱穴が存在したのは、この竪穴住居31の１軒だけである。

この竪穴住居31の出土遺物として、図化できない弥生時代後期前葉の時期に属する土器片がある。



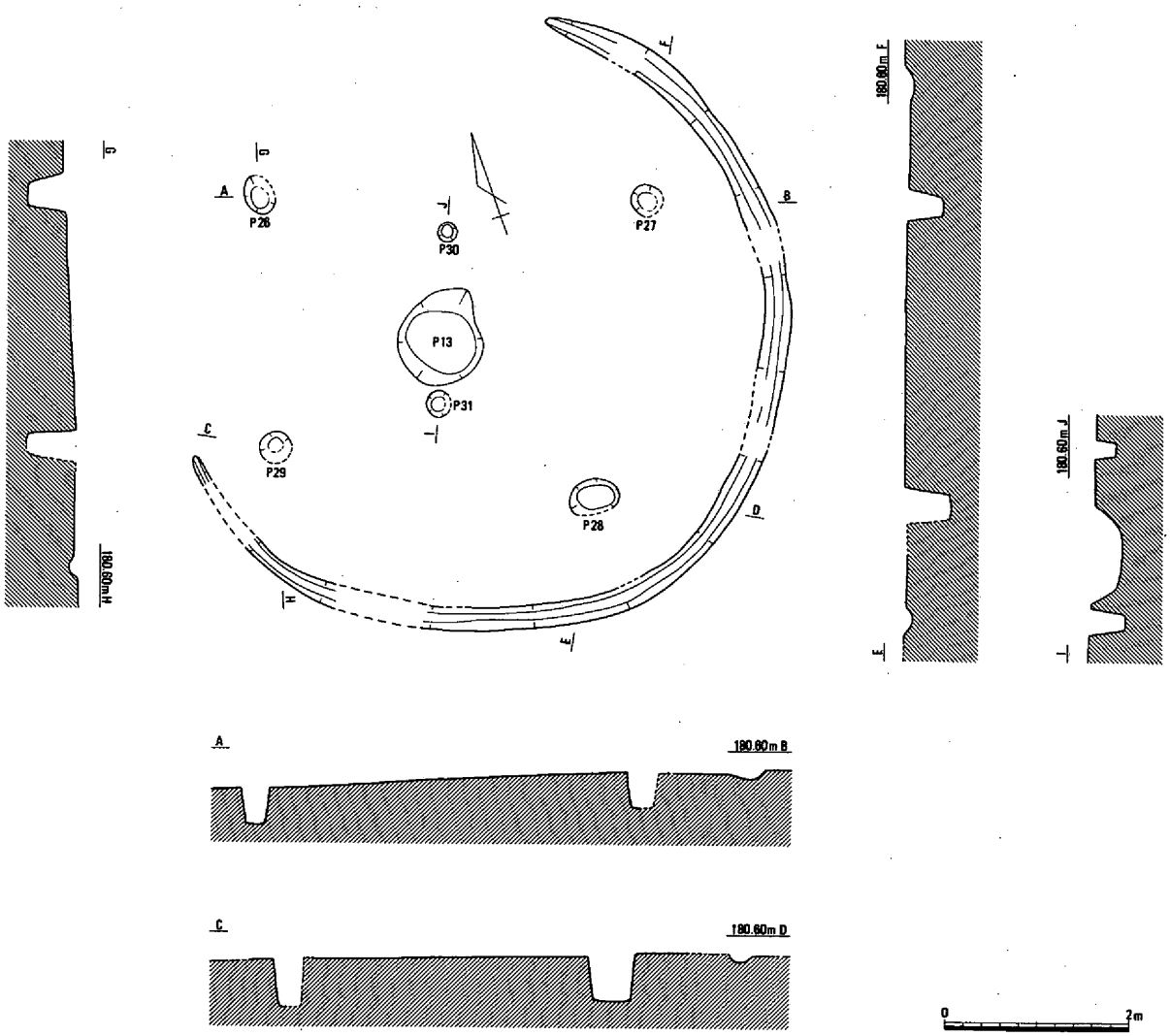
第56図　竪穴住居31（1／80）

竪穴住居32（第52・53・57図、図版56－１）

前述した竪穴住居29から竪穴住居31までの３軒の竪穴住居と同じ場所に、複雑に重なり合った状態で検出された竪穴住居である。この竪穴住居は、規模の大きな竪穴住居31に継続して造られたものであるが、残存した壁体溝や柱穴などの位置関係によると、竪穴住居そのものの規模が縮小して柱構造が変化しているのが確認された。

地形の高い南方向に面した部分に、緩やかに湾曲する孤形を描いた壁体溝が存在したが、南西側の地点は土壙29や土壙30と重複していた。この竪穴住居の平面形は円形に近い形態を呈し、柱構造は４本柱で、中央穴は竪穴住居31のものをそのまま踏襲して使っていた。壁体溝の検出面での最大幅は35㎝を測り、床面から最も深い所は７㎝になっていた。前述した竪穴住居31の床面を利用して造られていたこともあって、残存する壁体の高さは７㎝と低かった。検出した柱穴間の距離は270～410㎝を測り、北方向に面したＰ26とＰ27の間が広くなっていた。中央穴を挟んだ位置には、190㎝の間隔を有する小規模で浅い柱穴（Ｐ30とＰ31）が存在した。

この竪穴住居に伴う出土遺物は検出されていないが、遺構の切り合い状態などから、竪穴住居32はおそらく弥生時代後期前葉の時期に属するであろう。



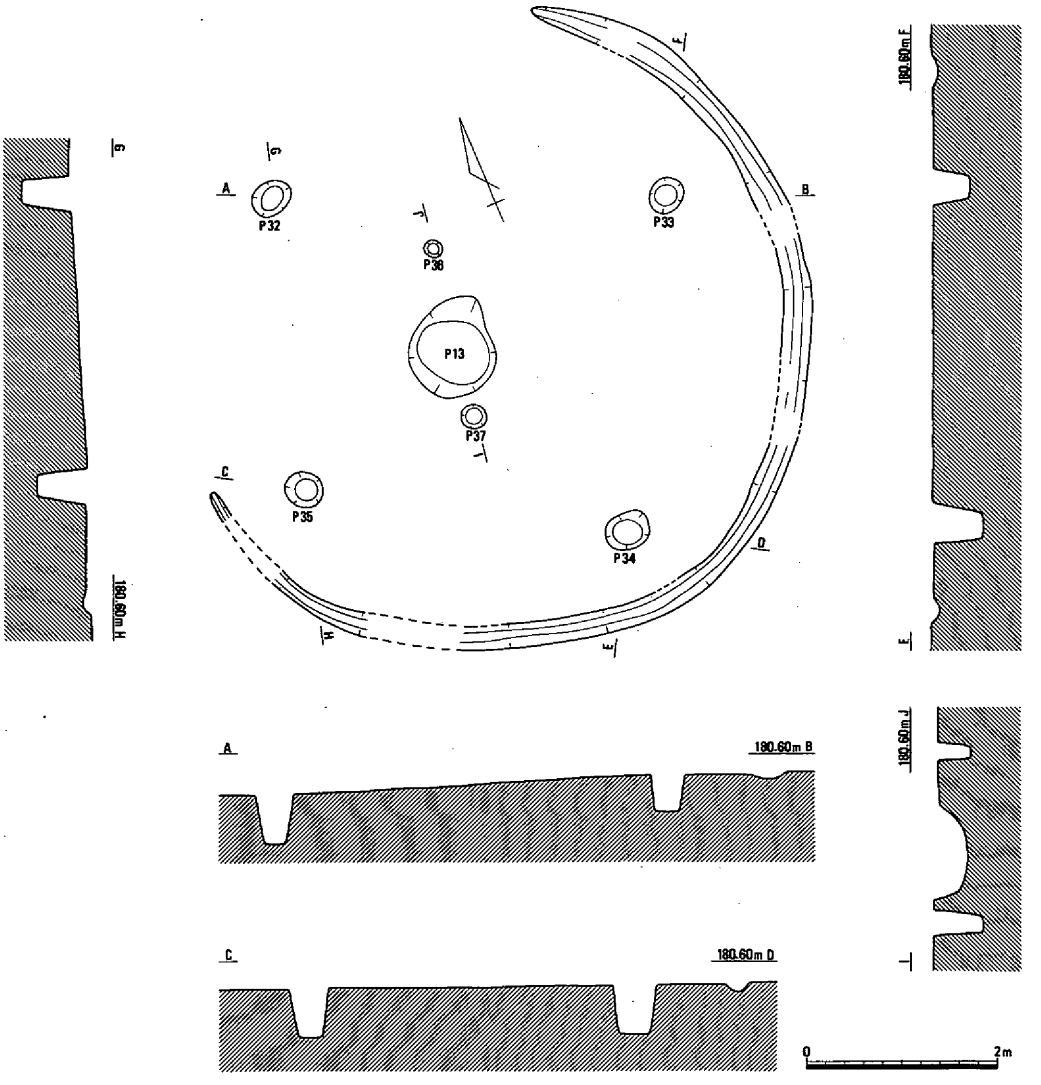
第57図　竪穴住居32（1／80）

竪穴住居33（第52・53・58、図版56－１）

調査範囲の東方向に検出した竪穴住居で、土壙28と土壙31の中間に位置し、５軒の竪穴住居が同じ場所に重なり合っていた。この竪穴住居33は、確認した５軒の竪穴住居のうちでも最後に造られたもので、壁体溝や中央穴は竪穴住居32のものをそのまま踏襲して使用していた。

平面形は円形に近い形態を呈し、柱構造は４本柱である。検出した４か所の柱穴は、竪穴住居32の柱穴に近接した位置にあり、いずれも楕円形に近い形になっていた。柱穴の床面からの深さは53～55㎝を測り、断面形は「U」字形を呈していた。柱穴間の距離は310～410㎝を測り、西方向に面したP32とP35の間が最も狭く、北方向に面したP32とP33の間が最も広くなっていた。地形の低い北方向に位置する柱穴（P32）を除いて、壁体溝と柱穴との間隔は80～90㎝を測り、東方向の地形が高いP33の地点が最も広くなっていた。中央穴は床面の中央よりやや南西方向へ寄った位置に存在し、その中央穴を挟んだ位置には、180㎝の間隔になった小規模で床面から浅い柱穴（P36とP37）が検出された。この２か所の柱穴は、竪穴住居32のものとは異なる位置に存在していた。

出土遺物として図化できなかった小破片の土器が存在するが、その形態的特徴や調整手法から、弥生時代後期前葉の時期に属すると考えられる。

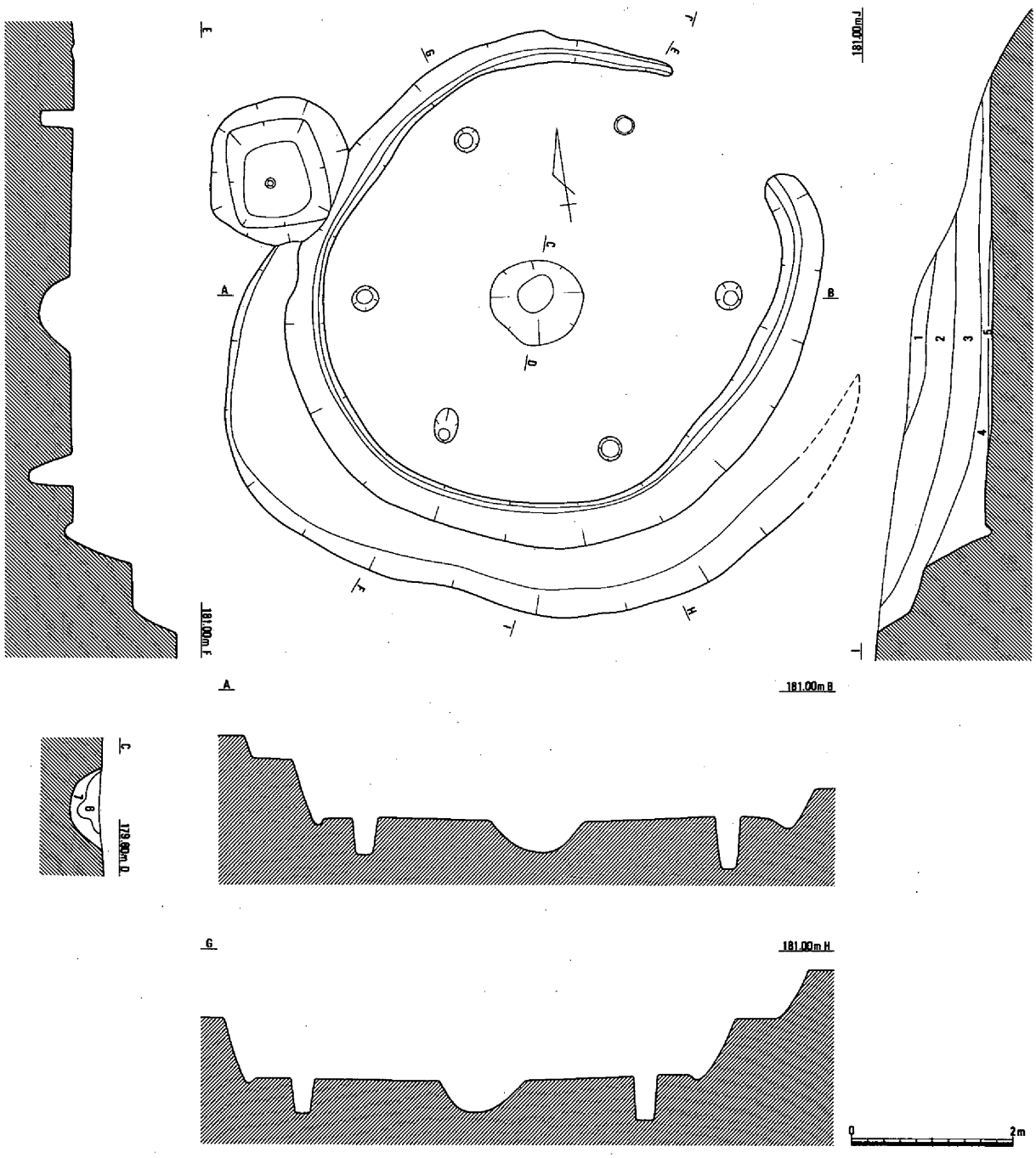


第58図　竪穴住居33（1／80）

竪穴住居34（第59～63図、図版56－２）

調査範囲の東端部に検出した竪穴住居で、北東方向の壁体や壁体溝に接して土壙31が確認されている。また北方向約10ｍの地点には、５軒の竪穴住居が重なり合った竪穴住居29から竪穴住居33が存在する。この竪穴住居は、竪穴住居22と同様に単独で所在し、建て替えは行われていなかった。

平面形は楕円形に近い形態を呈し、地形の高い南方向に面した部分にテラスが認められた。このテラスの最大幅は100㎝を測り、残存する高さは62㎝になっていた。地形の低い北東方向の一部を除い



1．黒褐色土　　2．暗黄褐色土　　3．淡灰褐色土　　4．淡黄褐色土
5．暗灰褐色土（炭化物多く含む）　　6．暗黄灰色土　　7．黒色土（炭化物）

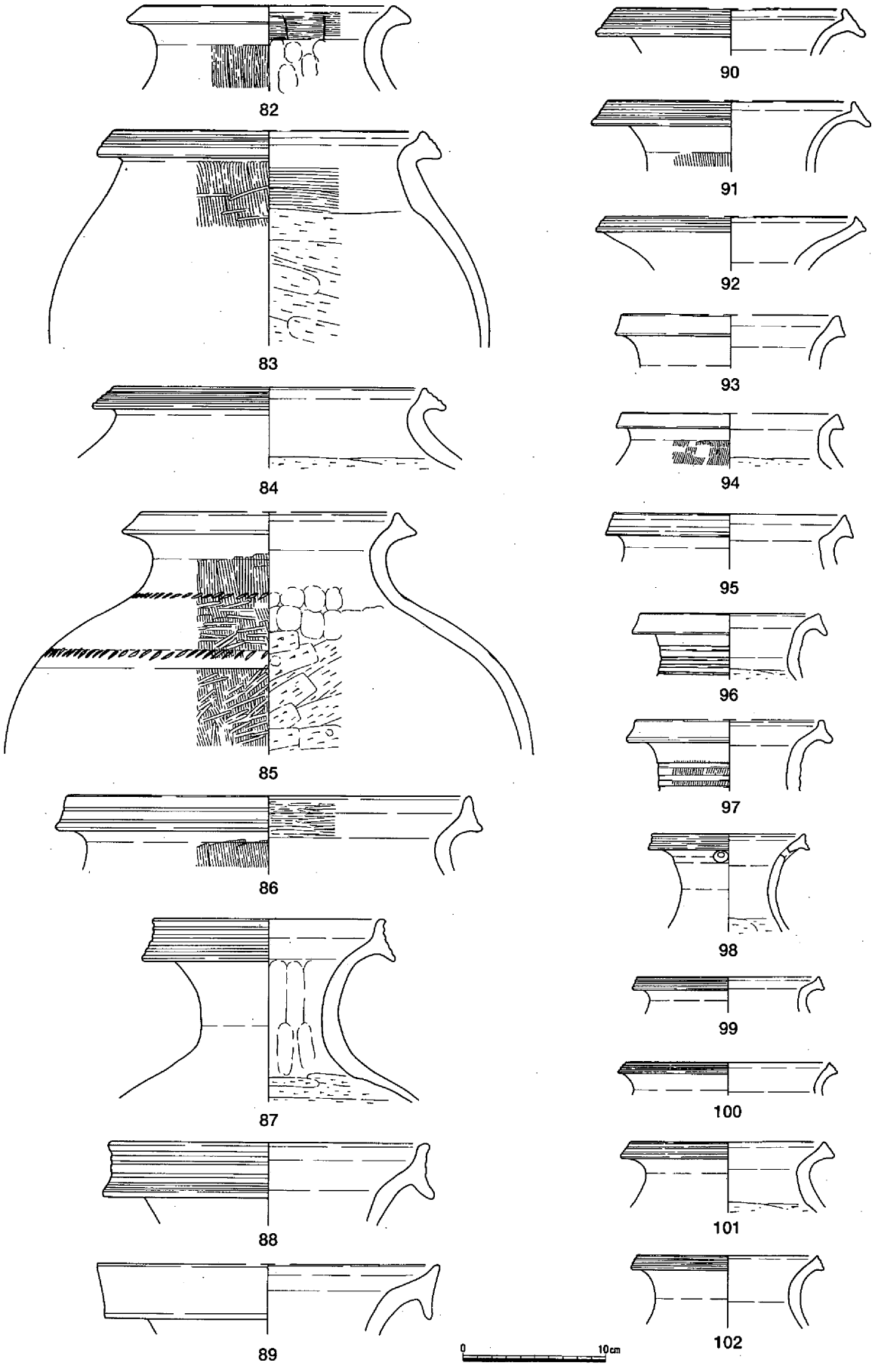
第59図　竪穴住居34、土壙31（1／80）

て、壁体と壁体溝が存在した。壁体の床面からの高さは70cmとなり、床面のレベルは北方向に面した部分が南方向よりも４cmだけ低くなっていた。壁体溝の最大幅は70cmを測り、深さは10cmであった。この竪穴住居の柱構造は６本柱で、床面の中心よりやや南西方向へ寄った部分に中央穴が存在した。柱穴の平面形は円形または楕円形を呈し、床面からの深さは40～65cmになっていた。柱穴間の距離は195～250cmを測り、地形の低い北西部分が最も広かった。柱穴と壁体溝との間隔は60～75cmで、北方向の柱穴地点を最も広くしていた。中央穴は短径105cm、長径110cmの円形に近い形態を呈し、床面からの深さが39cmで、断面形は「U」字形となり、内部に暗黄灰色土と炭化物が堆積していた。この竪穴住居の床面は、南方向から北方向に向かってわずかに傾斜し、中央穴の周辺には炭化物を多く含んだ暗灰褐色土が認められた。

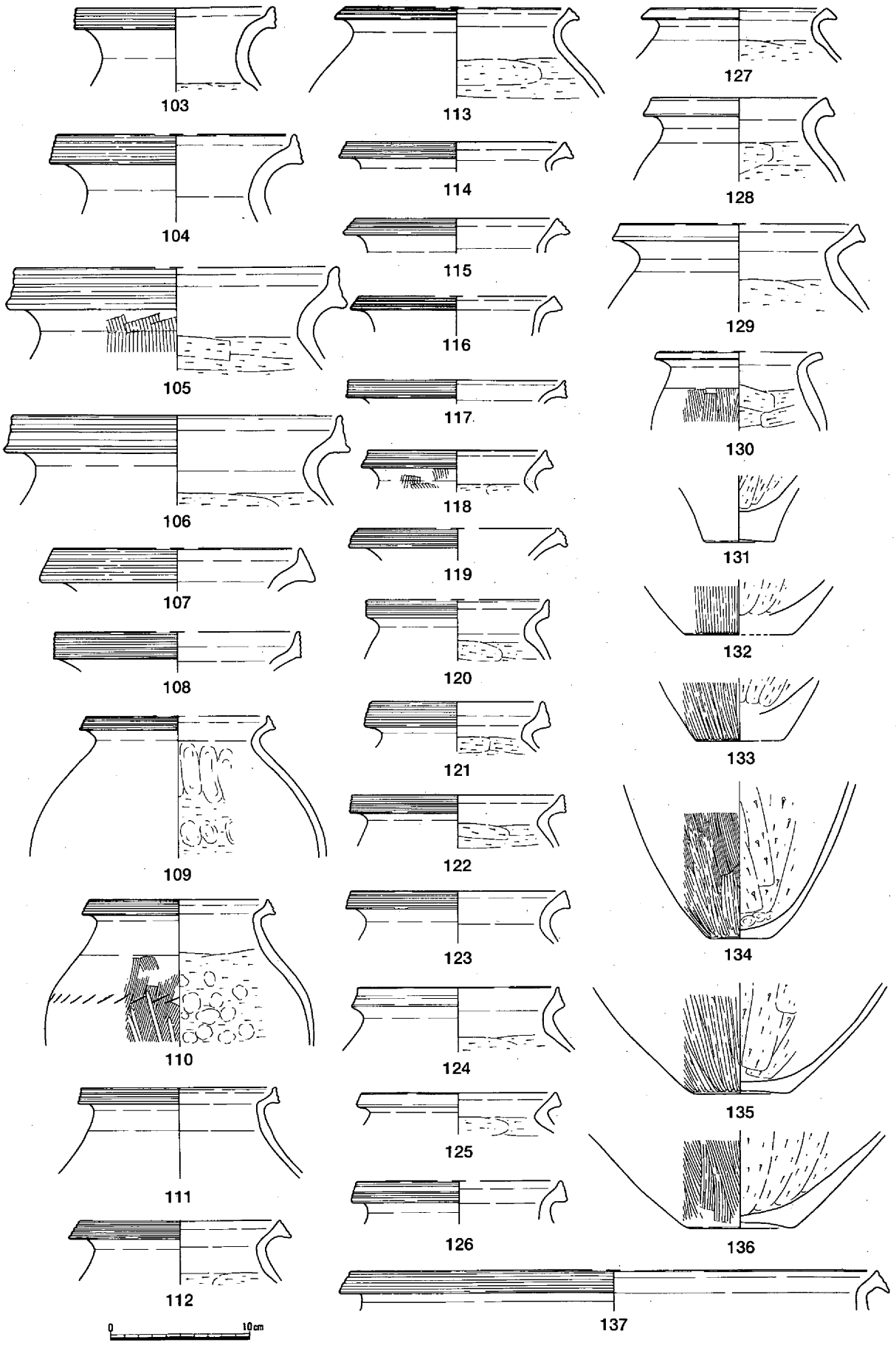
出土遺物として、携帯用と思われる砥石（S３）を含む多量の土器片があるが、床面に近い下層から出土したもの（82～140）と上層から出土したもの（141～152）に分類できた。

下層から出土した大型の壺形土器または甕形土器（82～86）は、全体の器壁が厚くて、斜め上方へ外湾または外反した口縁の端部があまり拡張しない。口縁部の外面には、数条の凹線が認められるものと、中央部が浅く窪んでいるだけのものとがある。口縁部から頸部にかけては、いずれも内外面ともヨコナデを行っているが、内面に横方向のハケメやヘラミガキが存在するものや、指頭圧痕が残存するものもある。胴部の内面はヘラケズリを施しているが、胴部の外面は縦方向のハケメ以外に、粗い横方向のヘラミガキを加えているものや、連続刺突文が巡らされているものがある。外湾した口縁端部が、上下に大きく拡張して細長い頸部を有する壺形土器（87～89）にも、口縁部外面に数条の凹線が認められるものと、中央部が浅く窪んでいるだけのものとがある。口縁部から頸部にかけては内外面ともヨコナデを行い、胴部の内面は横方向のヘラケズリを施している。頸部の内面に、縦方向のユビナデ痕跡が認められるものもある。中型と小型の壺形土器の口縁部破片（90～108）には、種々の形態が存在している。器壁が薄くて斜め上方へ湾曲した口縁の端部が拡張するもの（90・91）、斜め上方へ直線的に張り出して端部が肥厚しないもの（92）、頸部に凹線を有するもの（96・97）、蓋形土器とセットになる２個の穿孔が認められるもの（98）、比較的口径が大きくて口縁端部が上方へ立ち上がるもの（105・106）などがある。口縁部の外面には凹線を有するものが多く、口縁部は内外面ともヨコナデを行っている。頸部の内面はヨコナデを行っているが、頸部の外面に縦方向のハケメが存在するものもある。胴部の内面はヘラケズリを施しているが、外面は器表面が磨滅して調整手法が不明なものが多い。中型と小型の甕形土器の口縁部破片（109～130）にも、口縁部外面に数条の凹線を有するものが多く認められる。口縁部から頸部にかけては、内外面とも全体にヨコナデを行い、胴部の内面はいずれもヘラケズリを施している。胴部の内面に指頭圧痕が残存するもの（109・110）や、胴部の外面に粗いヘラミガキ痕跡や刺突文が巡らされているもの（110）もある。壺形土器の底部（131～133）と甕形土器の底部（134～136）は、内面に縦方向のヘラケズリを施し、外面にハケメやヘラミガキ痕跡が認められる。鉢形土器の口縁部（137）や高杯形土器の破片（138～140）も出土したが、前者は小破片で全体の器形が不明である。後者の杯部の口縁端部には面が認められ、脚端部は立ち上がって筒部に複数の穿孔が存在する。

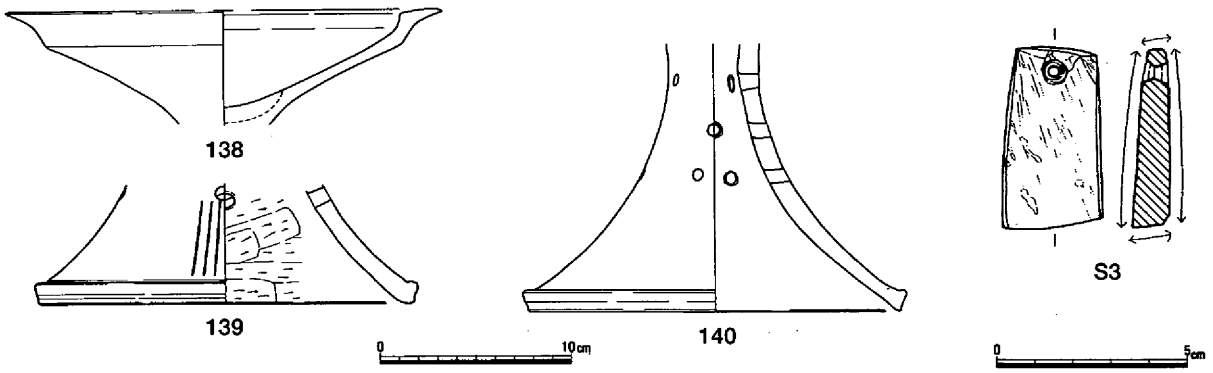
これらの下層から出土した土器片の形態的特徴や調整手法から、竪穴住居34は弥生時代後期前葉の時期に属すると考える。なお携帯用と思われる砥石（S３）は、ほぼ完形品で石材は流紋岩である。長さ4.8cm、幅2.6cm、厚さ1.0cm、重さ21.5ｇを測り、両面穿孔の円孔が存在する。



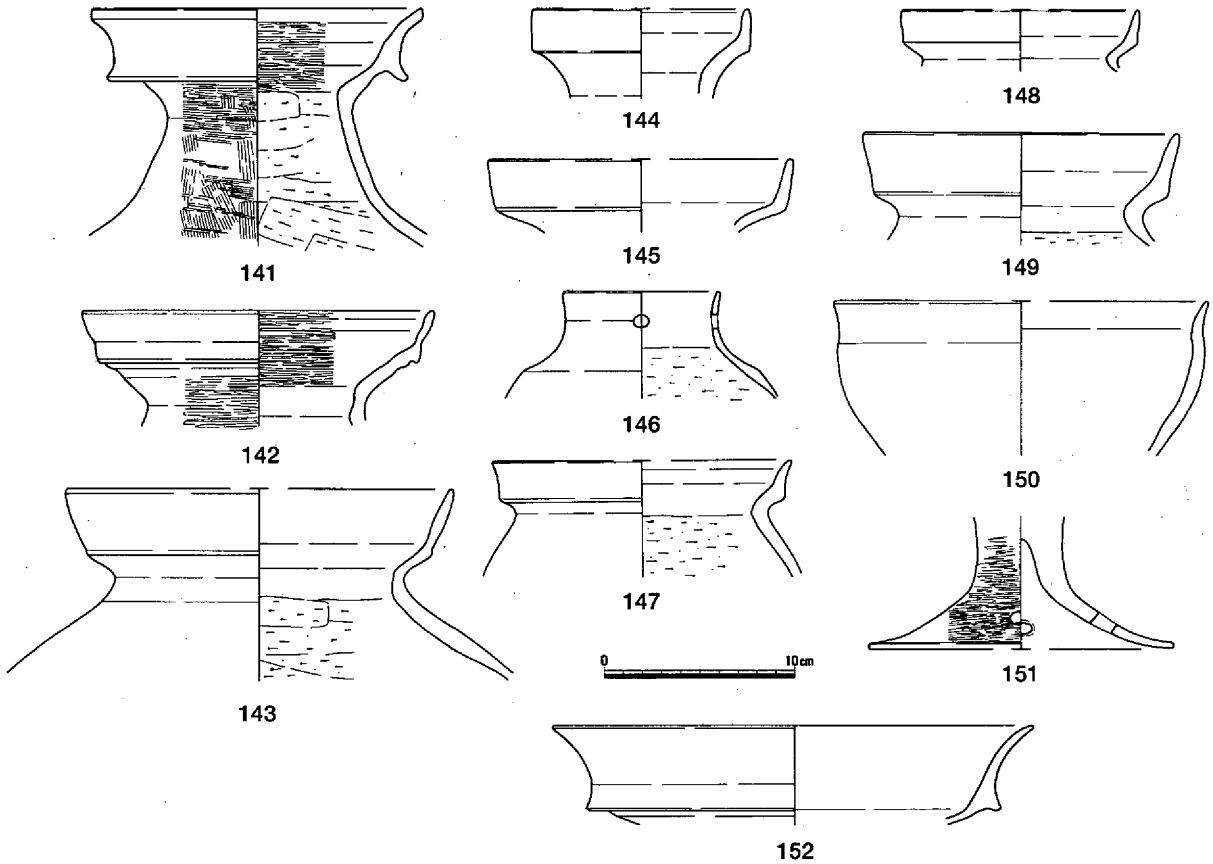
第60図　竪穴住居34下層出土遺物（1）（1／4）



第61図　竪穴住居34下層出土遺物（2）（1／4）



第62図　竪穴住居34下層出土遺物（3）（1／4、1／2）



第63図　竪穴住居34上層出土遺物（1／4）

上層から出土した土器片は、竪穴住居34が廃棄されて使われなくなった後に、埋土とともに流入していたものである。壺形土器、甕形土器、鉢形土器、高杯形土器が存在するが、出土量は少ない。

複合口縁を有する長い頸部の壺形土器（**141**・**142**）は、口縁部の内面と頸部の外面に横方向のヘラミガキを施している。口縁部の端部と外面はヨコナデを行い、内面の頸部から胴部にかけてはヘラケズリを施している。直口壺形土器の口縁部（**146**）には、穿孔が認められる。複合口縁を有する甕形土器（**143**・**147～149**）は、口縁部から頸部にかけてヨコナデを行い、内面の胴部はヘラケズリを施している。鉢形土器（**150**）は内外面ともヨコナデを行い、高杯形土器の脚部（**151**）外面には横方向に短いヘラミガキ痕跡が認められる。

この上層から出土した土器片は、いずれも弥生時代後期後葉の時期に属するであろう。

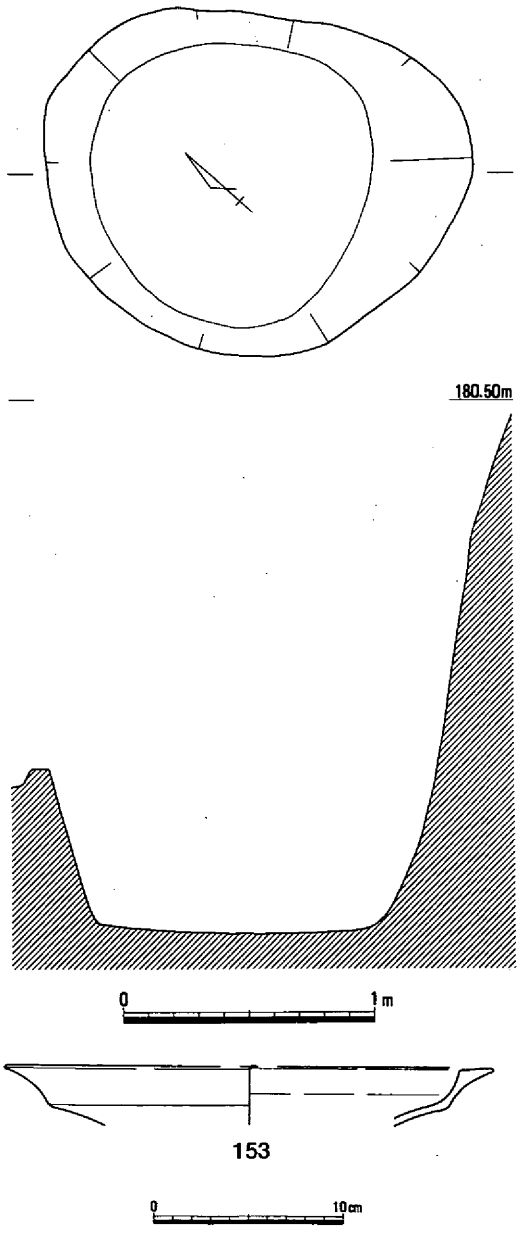
(2) 土壙

土壙１（第３・64図、図版53－１）

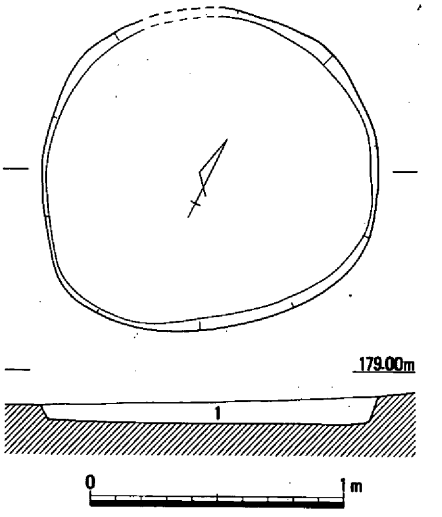
調査範囲の南西端部に検出した土壙で、竪穴住居６の南東方向に面した壁体溝と接していた。この土壙の南東側の壁面は急勾配の斜面に位置していたため、雨水を処理する上屋構造がどのようになっていたのか、理解することができなかった。

平面形は、長径170cm、短径135cmの楕円形に近い形態を呈し、検出面からの深さは南東側で160cm、北西側で65cmを測り、底部はほぼ水平で断面形は「U」字形であった。

出土遺物として、弥生時代後期前葉に属すると思われる高杯形土器の杯部破片（**153**）がある。

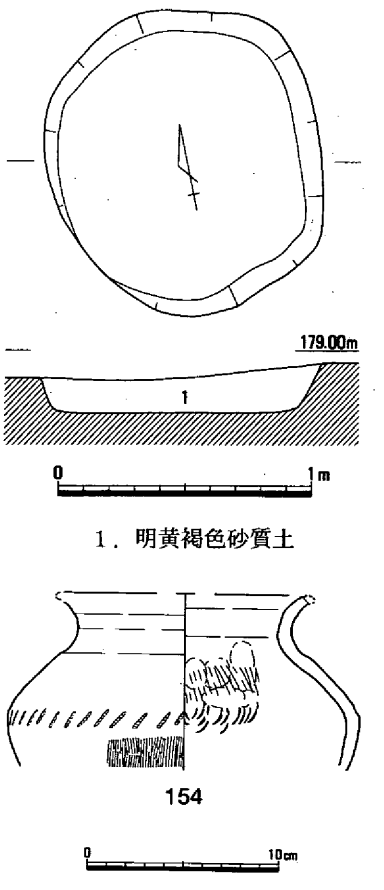


第64図　土壙１(1／30)・出土遺物（1／4）



1．褐色砂質土

第65図　土壙２（1／30）



1．明黄褐色砂質土

第66図　土壙３(1／30)・出土遺物（1／4）

土壙２（第３・65図、図版53－１）

調査範囲の南西端部に検出した土壙で、上面は竪穴住居６の床面に削平されていた。

平面形は長径132㎝、短径127㎝の不整形な形態を呈し、残存した深さは10㎝と浅くなっていた。断面形は極めて浅い「Ｕ」字形になり、底部はほぼ水平で、内部に褐色砂質土が堆積していた。

出土遺物がないのでこの土壙の時期は不明であるが、遺構の切り合い関係から、弥生時代後期後葉に属すると思われる竪穴住居６よりも古くなるのは明らかである。

土壙３（第３・66図、図版53－１）

この土壙も、竪穴住居６の床面を精査していて検出したものである。

平面形は長径120㎝、短径108㎝の不整形な形態を呈し、残存した深さは20㎝であった。断面形は浅い「Ｕ」字形になり、底部はほぼ水平で、内部に明黄褐色砂質土が堆積していた。

出土遺物として、緩やかに外湾した口縁部を有する土器片（**154**）がある。胴部の内面にはユビオサエ痕跡やタタキ痕跡が認められ、外面にはハケメや刺突文が存在する。この土器片は、あまり見かけない器形や調整手法になっているが、弥生時代後期前葉の時期に属するのではなかろうか。

土壙４（第３・67図、図版53－１）

調査範囲の南西端部に検出した土壙で、竪穴住居１から竪穴住居６までの６軒の竪穴住居が重なり合った地点のほぼ中央部に存在していた。東方向へ約２ｍ寄った所には、土壙３が確認されている。

平面形は歪んだ形態を呈し、この土壙の中央部には竪穴住居の中央穴が存在した。検出面からの深さは18㎝と浅く、断面形は「Ｕ」字形で、内部に暗黄褐色砂質土が堆積していた。

出土遺物は存在しないが、この土壙は竪穴住居６の中央穴に削平されていたから、弥生時代後期後葉の時期よりも古いと考えられる。

土壙５（第３・68図、図版53－１）

竪穴住居１から竪穴住居６までの６軒の竪穴住居が重なり合っていた地点に検出した土壙で、北側の部分が後述する土壙６に削平されていた。

平面形は長径200㎝、短径155㎝の楕円形に近い形態を呈し、検出面からの深さは20㎝と浅くなっていた。断面形は「Ｕ」字形となり、底部はほぼ水平で、内部に淡褐色砂質土が堆積していた。

出土遺物は存在しないが、竪穴住居の床面の下位に位置し、別の土壙に削平されていたから、おそらく弥生時代後期前葉の時期に属すると思われる。

土壙６（第３・69図、図版53－１）

調査範囲の南西端部に検出した土壙で、前述の土壙と同様に６軒の竪穴住居と重なり合っていた。

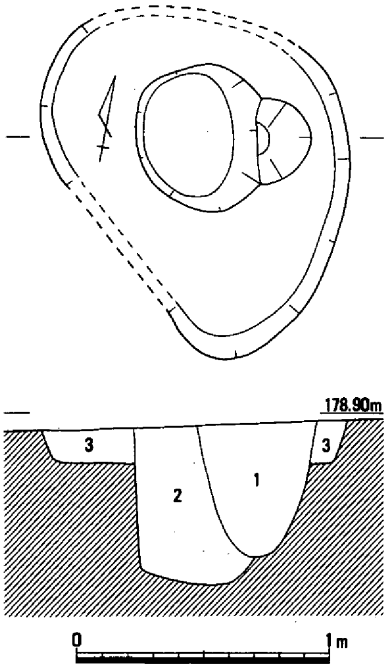
平面形は長径164㎝、短径132㎝の楕円形に近い形態を呈し、検出面からの深さは30㎝になっていた。この土壙は竪穴住居６の床面を精査していて検出したもので、土壙５の北側部分を削平して造られていた。断面形は浅い「Ｕ」字形を呈し、底部の中央部がわずかに窪んで、内部に褐色砂質土が堆積していた。

出土遺物はないが、遺構の切り合い関係から、弥生時代後期前葉の時期になるのではなかろうか。

土壙７（第３・70図、図版53－１）

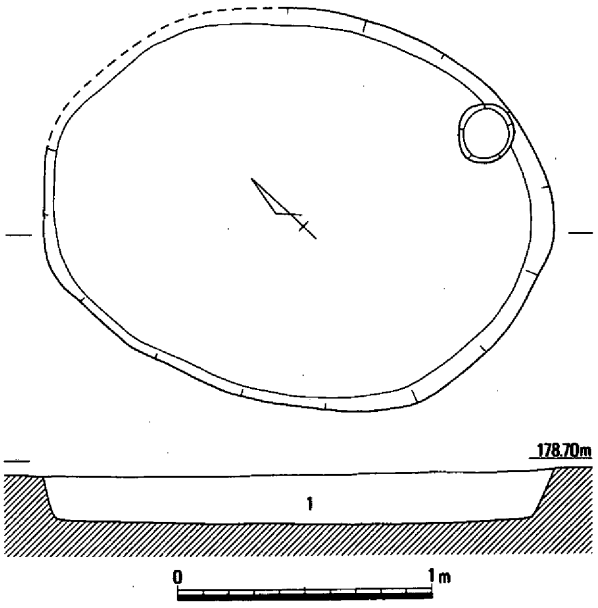
調査範囲の南西端部に、竪穴住居２から竪穴住居６までの５軒の竪穴住居と重なり合って検出された土壙で、南方向の部分には前述した６基の土壙が存在する。

平面形は、長径248㎝、短径152㎝の小判形に似た形態を呈し、北端部分の検出面からの深さは71㎝



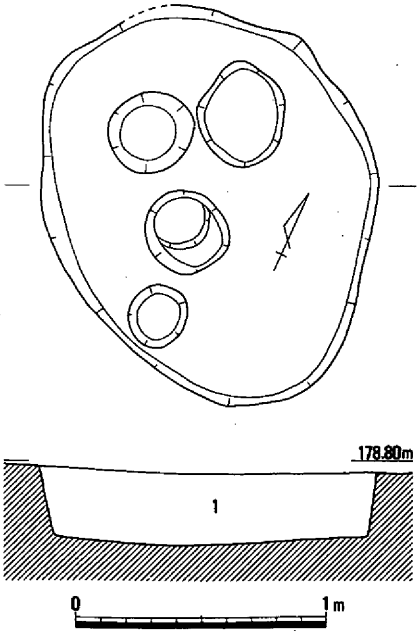
1．淡褐色砂質土
2．褐色砂質土
3．暗黄褐色砂質土

第67図　土壙４（1／30）



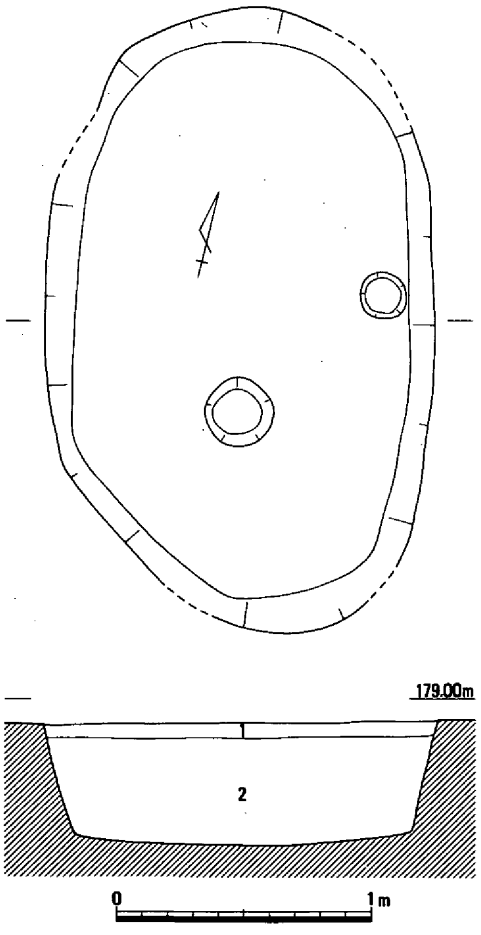
1．淡褐色砂質土

第68図　土壙５（1／30）



1．褐色砂質土

第69図　土壙６（1／30）



1．淡褐色砂質土
2．褐色砂質土

第70図　土壙７（1／30）

になっていた。断面形は「U」字形を呈し、内部には褐色砂質土と淡褐色砂質土が堆積していた。底部の中央部分はわずかに窪み、堆積した土砂を除去したところ、やや南方向へ寄った地点に竪穴住居６の柱穴が存在した。

この土壙は、竪穴住居２から竪穴住居６までの重なり合った５軒の竪穴住居の壁体や壁体溝を新しく削平していたので、弥生時代後期後葉よりも新しい時期に属するであろう。

土壙８（第３・71図、図版53－１）

６軒の竪穴住居が重なり合って存在した調査範囲の南西端部に検出した土壙で、南方向に近接した地点には柱穴状のピットが確認されている。

平面形は長辺90cm、短辺85cmの隅丸長方形に近い形態を呈し、検出面からの深さは７cmと浅くなっていた。底部の中央部分はわずかに窪み、内部に炭化物を含む褐色砂質土と暗黄褐色砂質土が認められ、断面形は浅い「U」字形を呈していた。

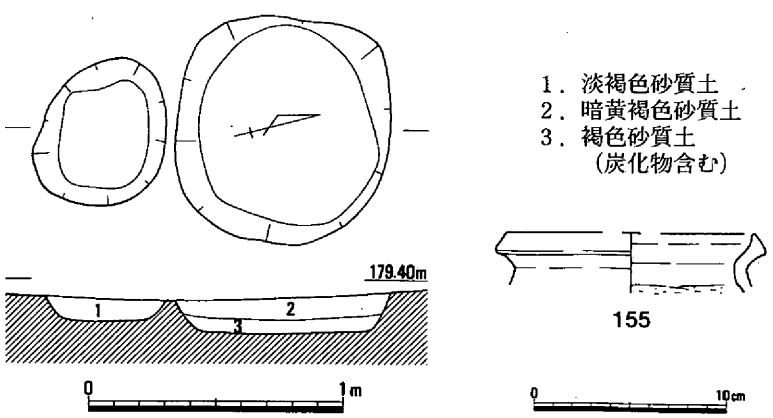
この土壙からは、**155**の甕形土器の小破片が出土している。斜め上方へ湾曲して立ち上がった口縁の端部は上方に拡張し、外面はヨコナデを行っているだけで凹線は存在しない。口縁部から頸部にかけては内外面とも全体にヨコナデを行い、内面の胴部上位は横方向のヘラケズリを施している。この土器片の形態的特徴や調整手法から、土壙８は弥生時代後期前葉の時期に属するであろう。

土壙９（第12・72図、図版53－２）

調査範囲の西端部に検出した土壙で、北側に面した部分は竪穴住居９と接していた。

平面形は長径132cm、短形114cmの不整形な形態を呈し、検出面からの深さは105cmと深くなっていた。断面形は逆台形に近い形態を呈し、底部の中央部がわずかに盛り上がって周辺部よりも高いことを確認した。土壙内には暗褐色砂質土、暗黄褐色砂質土、褐色砂質土が堆積し、比較的多くの弥生土器片が出土した。

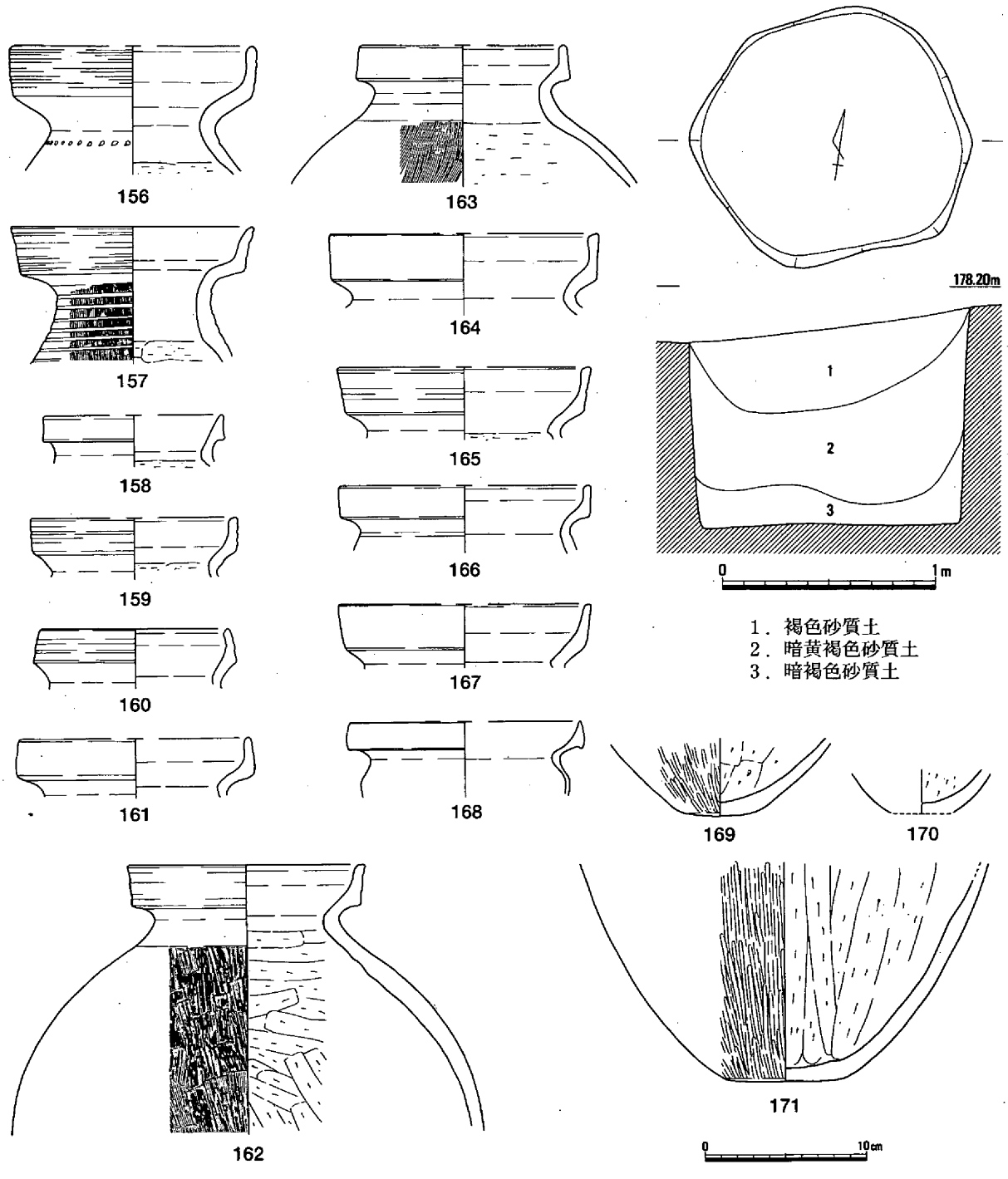
口縁端部が上方へ長く立ち上がった複合口縁を有する壺形土器には、外面の頸部に刺突文を巡らせているもの（**156**）と縦方向のハケメの上面に凹線文を施しているもの（**157**）とがあるが、口縁部は内外面ともヨコナデを行い、外面には凹線状の浅い窪みが認められる。頸部の内面はヨコナデを行い、内面の胴部上位は横方向のヘラケズリを施している。**158**の小型の壺形土器は、口縁端部が上方へ立ち上がって外側に面を有するが、ヨコナデを行っているだけで凹線は認められない。口縁部から頸部にかけてはヨコナデを行い、内面の胴部上位は横方向のヘラケズリを施している。**159**と**160**の口縁部外面には、ヨコナデによって生じた凹線状の浅い窪みが存在するが、**161**の口縁部外面はヨコナデを行っているだけで何も認められない。**162**と**163**は、頸部に立ち上がりがない器壁の厚い複合口縁の壺形土器である。口縁部から頸部にかけてはどちらもヨコナデを行っているが、前者の口縁部外面には凹凸が認められる。胴部の器壁は緩やかに外湾し、最大径は中位に存在するようである。外面には縦または斜め方向のハケメ



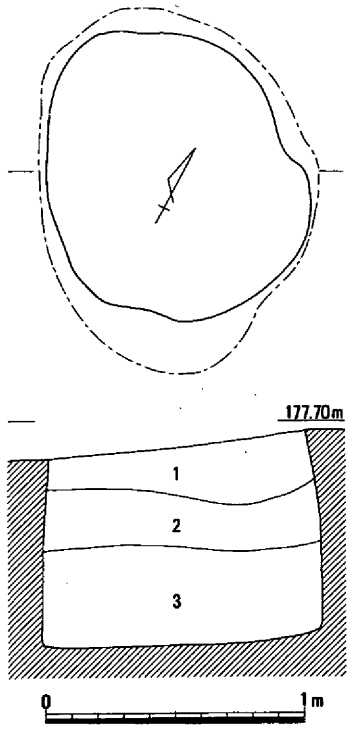
第71図　土壙８（1／30）・出土遺物（1／4）

が認められ、内面は横または斜め方向のヘラケズリを施している。164～167は甕形土器の口縁部破片と思われるが、内外面とも全体にヨコナデを行っている。168は鉢形土器の小破片である。口縁部の器壁が肥厚して上方へ立ち上がり、胴部の最大径は上位に認められる。169～171は壺形土器または甕形土器の底部破片であるが、やや丸底に近い形態を呈している。内面は縦方向のヘラケズリを全体に施し、外面は縦方向のヘラミガキが認められるものと縦方向のナデを行っているものとがある。

これらの土器の形態的特徴や調整手法から、土壙９は弥生時代後期後葉の時期に属するであろう。このように考えるならば、検出した地点が極めて近接しているものの、土壙９は竪穴住居９に伴う貯蔵穴になる可能性がある。

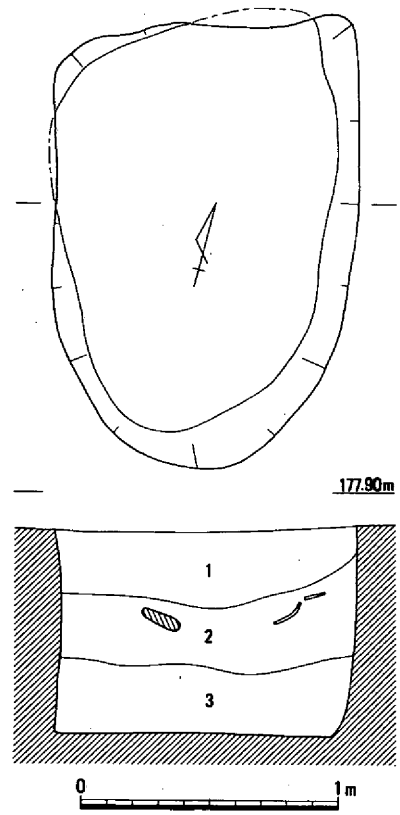


第72図　土壙９（1／30）・出土遺物（1／4）

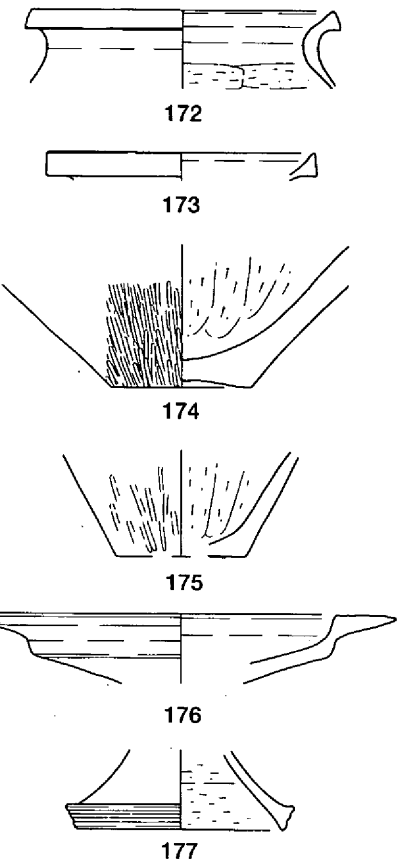


1．褐色砂質土
2．淡褐色砂質土
3．明黄褐色砂質土

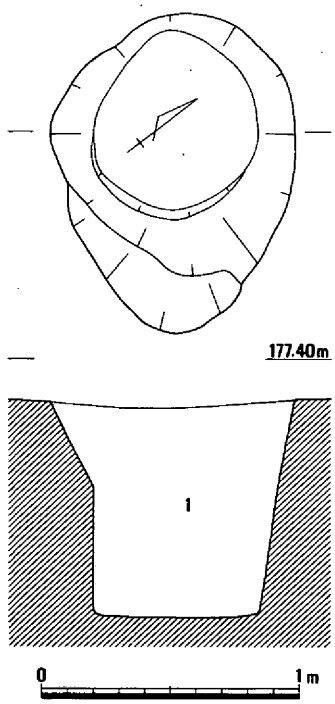
第73図　土壙10（1／30）



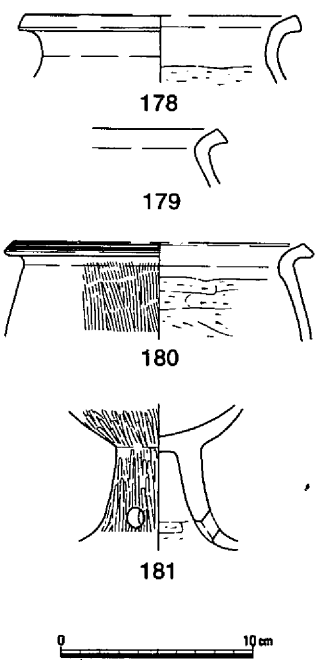
1．褐色砂質土
2．暗黄褐色砂質土
3．明黄褐色砂質土



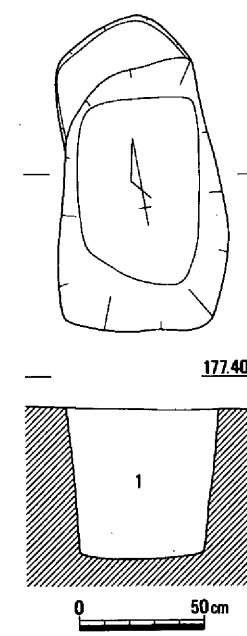
第74図　土壙11（1／30）・出土遺物（1／4）



1．明褐色砂質土



第75図　土壙12（1／30）・出土遺物（1／4）



1．暗褐色砂質土

第76図　土壙13（1／30）

土壙10（第12・73図、図版53－２）

調査範囲の西端部分に検出した土壙で、同心円の状態に確認された竪穴住居８と竪穴住居９の２条の壁体溝に挟まれた地点に位置していた。

平面形は西側部分が拡張した楕円形に近い形態を呈し、長径115㎝、短径95㎝になっていた。断面形は袋状になり、検出面からの深さが85㎝で、内部に明黄褐色砂質土、淡褐色砂質土、褐色砂質土が堆積していた。底部はほぼ水平であるが、遺物は出土しなかった。

前述した土壙９が出土した遺物から竪穴住居９の貯蔵穴になる可能性が考えられたが、検出された位置関係から推定するならば、この土壙10も竪穴住居８の貯蔵穴になるのかもしれない。

土壙11（第12・74図、図版53－２）

調査範囲の西側部分に検出した土壙で、竪穴住居９の北方向に面した壁体溝と重なり合っていた。遺構の切り合い関係では、この土壙11が古くて竪穴住居９が新しいことが確認された。

平面形は長径177㎝、短径117㎝の不整形な形態を呈し、断面形は部分的に袋状になって、検出面からの深さは80㎝であった。底部の中心部分はわずかに盛り上がって、周辺部分よりやや高くなっていた。土壙内には明黄褐色粘質土、暗黄褐色砂質土、褐色砂質土が堆積し、弥生土器片が出土した。

172と**173**の甕形土器は、外湾して斜め上方へ立ち上がった口縁の端部外面には、ヨコナデを行っているだけで凹線は認められない。口縁部から頸部にかけては内外面ともヨコナデを行い、内面の胴部上位は横方向のヘラケズリを施している。**174**の器壁の厚い壺形土器の底部と**175**の器壁の薄い甕形土器の底部は、どちらも内面には縦方向のヘラケズリを施し、外面には縦方向のヘラミガキ痕跡が認められる。**176**の高杯形土器の杯部と**177**の高杯形土器の脚部は、同一個体であるかもしれない。杯部の口縁端部は横方向へ大きく張り出し、上位に凹線状の窪みを有する面が認められる。口縁部は内外面ともヨコナデを行っているが、それ以外の部分は表面の磨滅が著しくて調整が不明である。脚部は「ハ」字状を呈して緩やかに開き、端部には外側に２条の凹線が認められる立ち上がりが存在する。外面全体と端部はヨコナデを行っているが、内部は横方向のヘラケズリを施している。

これらの土器の形態的特徴や調整手法から、土壙11は弥生時代後期前葉の時期に属するであろう。このように考えるならば、この土壙11は南西方向に近接して検出された竪穴住居７に伴う貯蔵穴になる可能性が強い。

土壙12（第18・75図、図版53－３）

調査範囲の北西端部に存在した竪穴住居12の床面を精査していて検出した土壙で、周辺には土壙13から土壙15までの３基の土壙も確認されている。

平面形は長径105㎝、短径95㎝の楕円形に近い不整形な形態を呈し、検出面からの深さは85㎝になっていた。断面形は「U」字形を呈するが、部分的には２段掘りの状態になっていた。底部はほぼ水平で、内部には暗褐色砂質土が堆積していた。

出土遺物として、壺形土器や甕形土器（**178～180**）と高杯形土器（**181**）の小破片がある。後者の高杯形土器は、土壙の最上位部分に存在して形態的特徴や調整手法が前者の壺形土器や甕形土器の時期のものとは異なるので、この土壙へ後世になって混入したものであると判断した。**178**の壺形土器と**179**の甕形土器の口縁部から頸部にかけては、内外面とも全体にヨコナデを行っている。**180**の甕形土器の口縁部は短く外反し、外面には凹線が認められる。胴部の内面には横方向のヘラケズリを施し、外面には縦方向のハケメが存在する。これらの土器片は、弥生時代後期前葉の時期と考える。

土壙13（第18・76図、図版53－３）

調査範囲の北西端部に所在した竪穴住居12の東側に面する床面に検出した土壙で、周辺には土壙12や土壙15などが確認されている。

平面形は長辺105㎝、短辺67㎝の隅丸長方形に似た不整形な形態を呈し、検出面からの深さは60㎝になっていた。また断面形は逆台形を呈し、底部の中央部が周辺よりもわずかに窪んでいた。内部には暗褐色砂質土が堆積していたが、遺物は出土しなかった。

この土壙は竪穴住居12の床面を精査していて検出したもので、竪穴住居12よりも古い遺構であることが判明しているから、おそらく弥生時代後期前葉の時期に属するのであろう。

土壙14（第18・77図、図版53－３）

前述した土壙13の北東方向に検出した土壙で、西側には土壙12が、東側には土壙15が、それぞれ近接した位置に確認されている。

平面形は長径175㎝、短径112㎝の楕円形に近い形態を呈し、検出面からの深さは南端部分で45㎝になっていた。底部はほぼ水平であるが、中心部分が周辺よりもやや窪んでいた。断面形は「U」字形を呈し、土壙内には灰黒褐色土が堆積していたが、遺物は存在しなかった。

この土壙は竪穴住居12の壁体を切って造られていたが、後世になって後述する土壙15によって東側部分が削平されていたので、弥生時代後期前葉の時期よりも新しくなるのは確実である。

土壙15（第18・78図、図版53－３）

調査範囲の北西端部に検出した土壙で、前述した土壙14の東側部分を削平して造られていた。

平面形は長径128㎝、短径110㎝の楕円形に近い形態を呈し、北東方向に面した部分の断面形が袋状になっていた。検出面からの深さは75㎝を測り、底部の中央部は周辺よりもわずかに窪んでいた。土壙内には暗黄褐色砂質土と炭化物を含んだ褐色砂質土が堆積していたが、遺物は出土しなかった。

この土壙は、弥生時代後期前葉の時期に属する竪穴住居12を削平して造られていた土壙14を新しく切っていたので、弥生時代後期前葉の時期よりも新しくなるのは確実であるが、出土遺物が存在しないのでそれ以上の詳細なことは不明である。

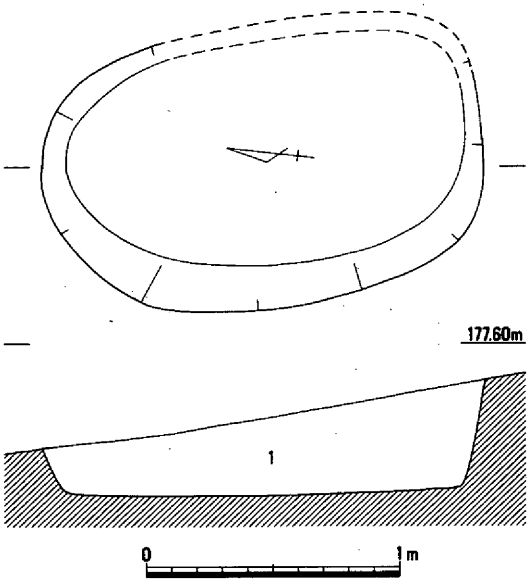
土壙16（第18・23・79図、図版53－３・54－１）

竪穴住居11と竪穴住居15が重なり合った地点に検出した土壙で、この土壙16が竪穴住居11の壁体溝を切っていた。また北東方向約２ｍの位置には、後述する土壙17が確認されている。

平面形は長径145㎝、短径113㎝の不整形な形態を呈し、検出面からの深さは85㎝になっていた。断面形は「U」字形を呈し、底部はほぼ水平であった。内部には黄褐色粘質土、暗褐色砂質土、明黄褐色砂質土が堆積し、比較的多くの弥生土器片が出土した。

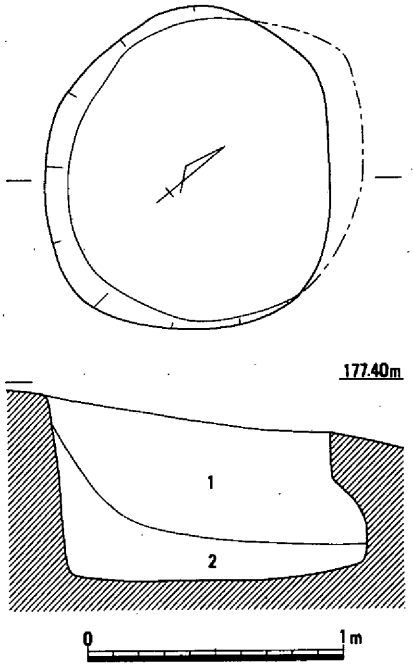
182から**187**の壺形土器または甕形土器の口縁部破片は、外湾した口縁端部の外側に凹線を有するものが多い。口縁部から頸部にかけては内外面とも全体にヨコナデを行っているが、頸部の内面に縦方向のユビナデを施しているもの（**182**）や指頭圧痕が残存するもの（**183**）以外に、頸部に穿孔が認められるもの（**185**）もある。**188**の壺形土器または甕形土器の底部破片は、内面には縦方向のヘラケズリを施し、外面には縦方向のヘラミガキ痕跡が存在する。**189**の端部に立ち上がりを有する高杯形土器の脚部破片には、裾部に横方向に並んだ穿孔が巡らされている。外面と端部はヨコナデを行い、内面は横方向のヘラケズリを施している。

これらの土器の形態的特徴や調整手法から、土壙16は弥生時代後期前葉の時期に属するであろう。



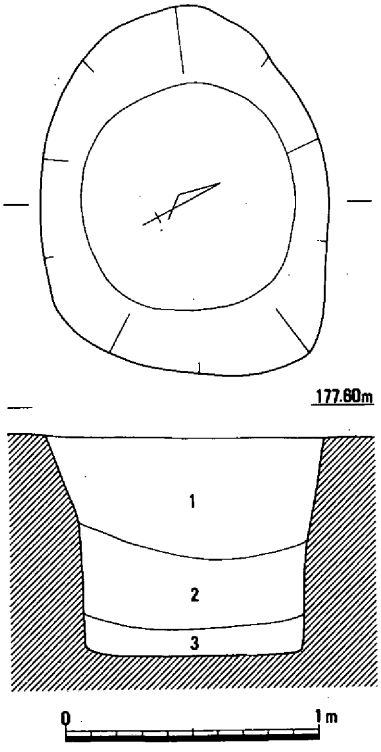
1．灰黒褐色土

第77図　土壙14（1／30）

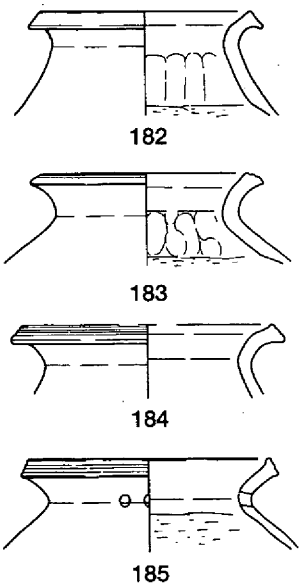


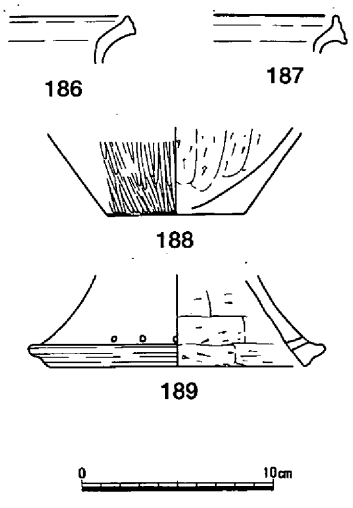
1．褐色砂質土
（炭化物含む）
2．暗黄褐色砂質土

第78図　土壙15（1／30）



1．明黄褐色砂質土
2．暗褐色砂質土
3．黄褐色粘質土





第79図　土壙16（1／30）・出土遺物（1／4）

土壙17（第18・23・80、図版53－３・54－１）

調査範囲の中央部より西方向へ寄った地点に検出した土壙で、竪穴住居11の壁体溝を削平して造られていた。

平面形は長径130㎝、短径112㎝の楕円形に近い形態を呈し、検出面からの深さは160㎝になっていた。断面形は全体に袋状を呈し、底部が南西方向から北東方向へ向かってわずかに傾斜していた。土壙内には暗褐色砂質土と明褐色砂質土が堆積し、弥生土器片が出土した。

190の壺形土器の口縁部は、斜め上方へ外湾した端部が上下に拡張して、外面に数条の凹線が認められる。内外面とも全体にヨコナデを行い、焼成は良好で、にぶい橙色を呈している。**191**の壺形土器の口縁端部は、器壁が薄くなって上方へ立ち上がり、複合口縁に似た形態になっている。口縁部から頸部にかけて、内外面とも全体にヨコナデを行っている。**192**の鉢形土器は、器壁断面に粘土の接合痕跡が確認できる。短く外反した口縁の端部は、斜め下方へ拡張して外側に面が認められる。口縁部から頸部にかけては、内外面とも全体にヨコナデを行っている。胴部の内面はヘラケズリを施し、外面には縦方向のヘラミガキ痕跡が認められる。

これらの土器片の形態的特徴や調整手法から、土壙17は弥生時代後期前葉でも後期中葉に近い時期に属すると考える。

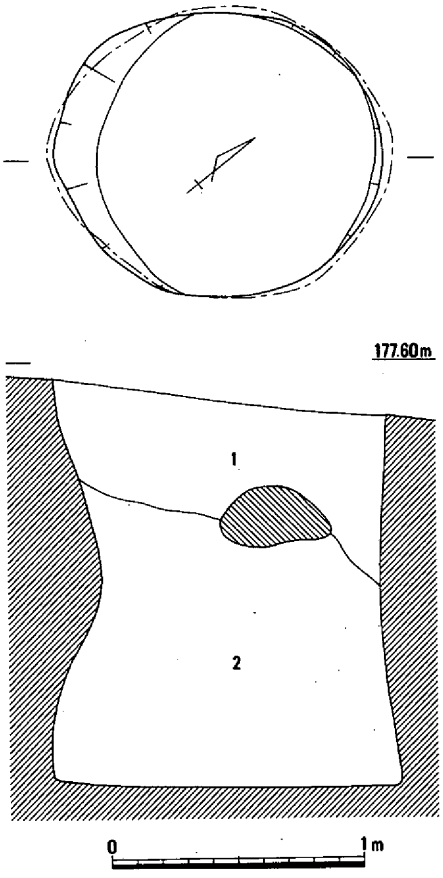
土壙18（第23・81図、図版54－１）

調査範囲の中央部より西方向へ寄った地点に、竪穴住居15と重なり合った状態で検出した土壙で、遺構の切り合い関係から、この土壙18が新しくて竪穴住居15が古いことが判明している。

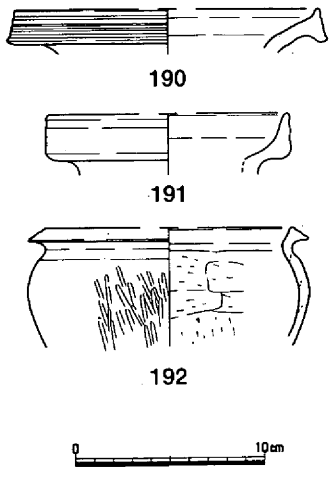
平面形は長径192㎝、短径152㎝の不整形な形態を呈しており、検出面からの深さは100㎝になっていた。西方向に面した壁面の断面形は袋状を呈し、底部が深く入り込んでいた。底部はほぼ水平になっていたが、中央部が周辺よりもやや窪んでいた。内部には下位から上位にかけて、暗黄褐色粘質土、暗褐色砂質土、明灰褐色砂質土、明褐色砂質土が堆積し、比較的多くの弥生土器片が出土した。

193の壺形土器は、口縁部が短く「く」字状に外反し、外側に中央部が浅く窪んだ面が存在する。口縁部から頸部にかけては内外面ともヨコナデを行っているが、頸部の内面にはユビオサエの痕跡が認められる。胴部の内面は横方向のヘラケズリを施し、外面はヨコナデを行っている。**194**の壺形土器は、頸部から口縁部にかけて緩やかに外湾し、口縁端部は斜め下方へ張り出して、外側に数条の凹線を有する面が認められる。口縁部から頸部にかけては、内外面とも全体にヨコナデを行っている。**195**の壺形土器は、口縁端部が上方へ拡張して、外側に２条の凹線が存在する面が認められる。内外面とも全体にヨコナデを行い、焼成は良好で、にぶい橙色を呈している。**196**の甕形土器の破片は、頸部で「く」字状に鋭く外反し、口縁端部が斜め下方へ拡張して円形浮文を有する面が認められる。口縁部から頸部にかけて、内外面とも全体にヨコナデを行っている。胎土中には砂粒を多く含み、焼成は良好で、にぶい黄橙色を呈している。**197**の壺形土器の小破片は、頸部から口縁部にかけて緩やかに外湾し、口縁端部は斜め上下に拡張して、外側に４条の凹線を有する面が存在する。口縁部から頸部にかけて、内外面とも全体にヨコナデを行っている。**198**の壺形土器の小破片も、頸部から口縁部にかけて外湾しているが、口縁端部は上方へ短く立ち上がり、外側に中央部が浅く窪んだ面が認められる。口縁部と頸部は内外面ともヨコナデを行い、胴部内面はヘラケズリを施している。

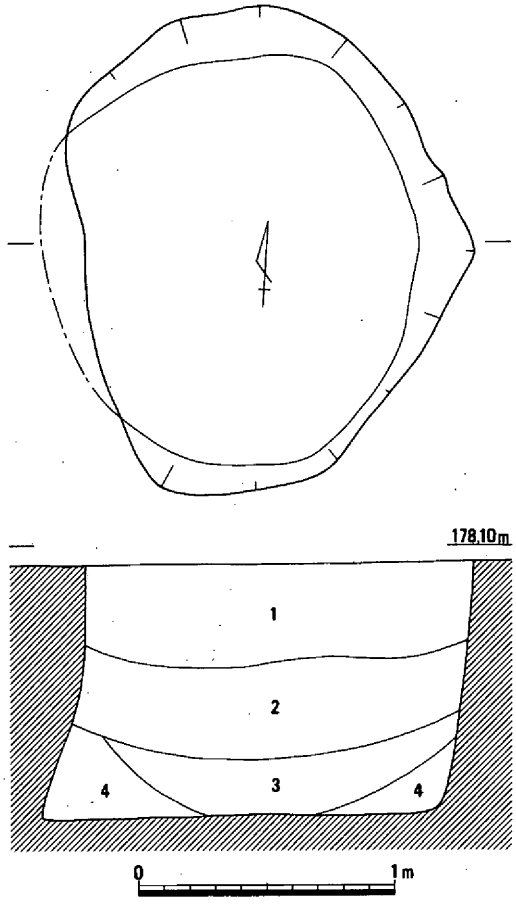
これらの土器片の形態的特徴や調整手法から、土壙18は竪穴住居15とほとんど同じである弥生時代後期前葉の時期に属すると思われる。



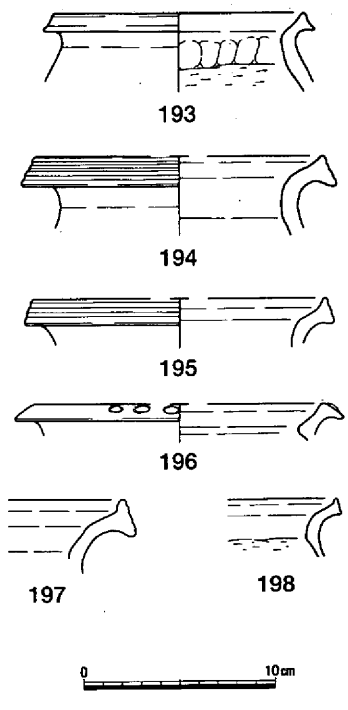
1．明褐色砂質土
2．暗褐色砂質土



第80図　土壙17（1／30）・出土遺物（1／4）



1．明黄褐色砂質土
2．明灰褐色砂質土
3．暗褐色砂質土
4．暗黄褐色粘質土

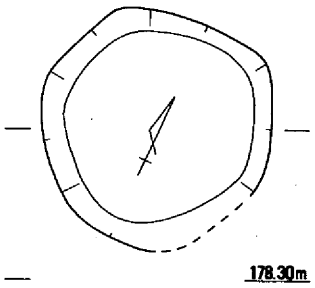


第81図　土壙18（1／30）・出土遺物（1／4）

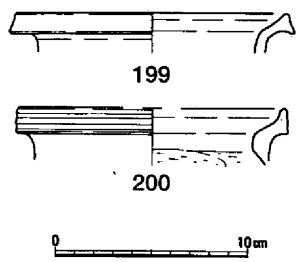
土壙19（第23・82図、図版54－１）

調査範囲の中心部よりやや西方向へ寄った地点に検出した土壙で、小規模な竪穴住居16の壁体や床面と重なり合っていた。この土壙は竪穴住居16の床面を精査していて確認したもので、土壙19が古くて竪穴住居16が新しいことが判明している。

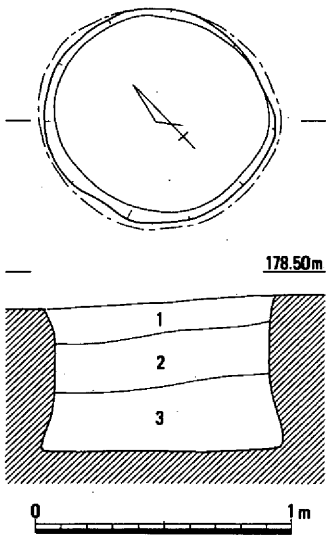
平面形は長径96㎝、短径90㎝の楕円形に近い形態を呈し、西方向に面した部分の検出面からの深さは84㎝になっていた。断面形は「U」



1．褐色砂質土
2．明黄褐色粘質土

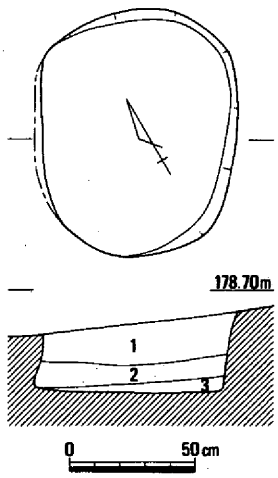


第82図　土壙19（1／30）・出土遺物（1／4）



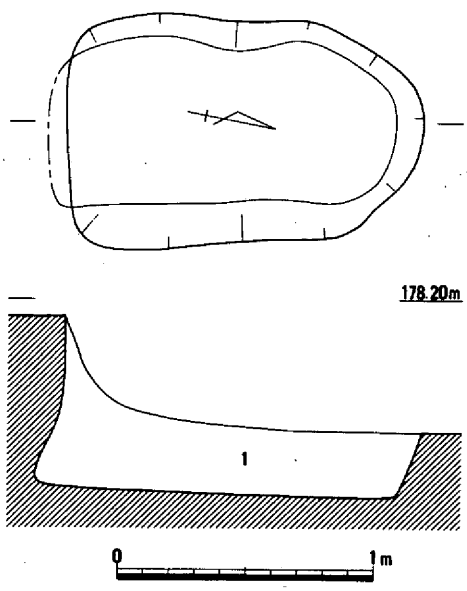
1．褐色砂質土
2．明褐色砂質土
3．明黄褐色粘質土

第84図　土壙21（1／30）

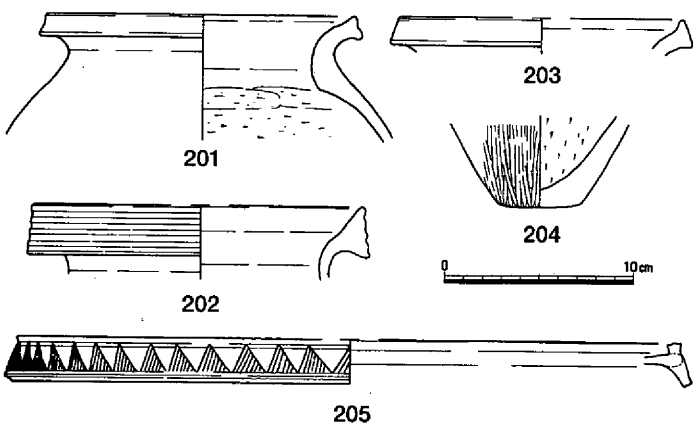


1．明褐色砂質土
2．淡褐色砂質土
3．淡黄褐色粘質土

第85図　土壙22（1／30）



1．暗褐色砂質土



第83図　土壙20（1／30）・出土遺物（1／4）

字形を呈し、底部の中央部がわずかに窪んでいた。土壙内には明黄褐色粘質土と炭化物を含む褐色砂質土が堆積し、弥生土器片が出土した。

199の壺形土器は、斜め上方へ外湾した口縁の端部が拡張し、外側に中央部が浅く窪んだ面が認められる。内外面とも全体にヨコナデを行い、焼成は良好である。**200**の壺形土器は、「く」字状に外反した口縁の端部は上方へ立ち上がり、外側に２条の凹線を有する面が存在する。口縁部から頸部にかけては内外面とも全体にヨコナデを行い、胴部の内面は横方向のヘラケズリを施している。

これらの土器の形態的特徴や調整手法から、土壙19は弥生時代後期前葉の時期に属するであろう。

土壙20（第23・83図、図版54－１）

この土壙も竪穴住居16の床面を精査していて検出したもので、前述した土壙19の南東部分を削平して造られていた。

平面形は長径140㎝、短径92㎝の細長くて不整形な形態を呈し、南端部分の検出面からの深さは67㎝になっていた。南方向に面した部分の断面形は袋状を呈するが、それ以外の部分の断面形は「U」字形であった。底部は南方向から北方向へ向かって緩やかに傾斜し、内部には暗褐色砂質土が堆積していた。この土壙から出土した遺物として、弥生土器片が確認されている。

201の壺形土器は、頸部の器壁が厚くなっている。短く外湾した口縁の端部は斜め上下に拡張し、外側に中央部が浅く窪んだ面が認められる。口縁部から頸部にかけては内外面とも全体にヨコナデを行い、胴部の内面には横方向のヘラケズリを施している。**202**の壺形土器は、頸部の器壁が薄くて口縁端部の器壁が厚くなっている。口縁端部は上下に拡張し、外側に４条の凹線を有する面が認められる。内外面とも全体にヨコナデを行い、焼成は良好で、橙色を呈している。**203**は壺形土器の口縁部の小破片で、内外面とも全体にヨコナデを行っている。**204**の器壁の厚い底部は、壺形土器になると思われる。内面には縦方向のヘラケズリを施し、外面には縦方向の細かいヘラミガキ痕跡が認められる。**205**の口径が大きな土器片は、装飾高杯形土器の破片である。口縁部の外面には鋸歯文が連続して巡らされ、内外面とも全体にヨコナデを行っている。

これらの土器片の形態的特徴や調整手法から、土壙20は弥生時代後期前葉から後期中葉にかけての時期に属すると考える。

土壙21（第84図）

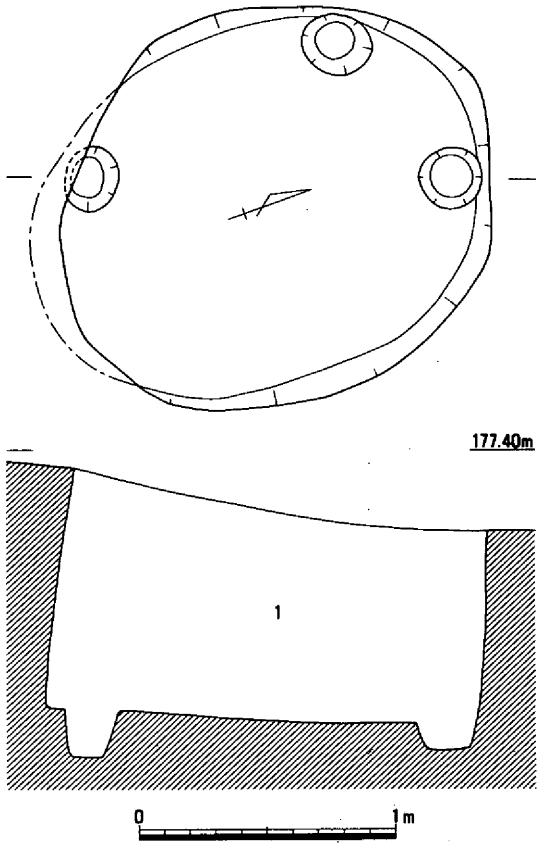
調査範囲の中央部よりやや西方向へ寄った地点に検出した土壙で、北方向約３ｍの地点には竪穴住居16や土壙19などが確認されている。

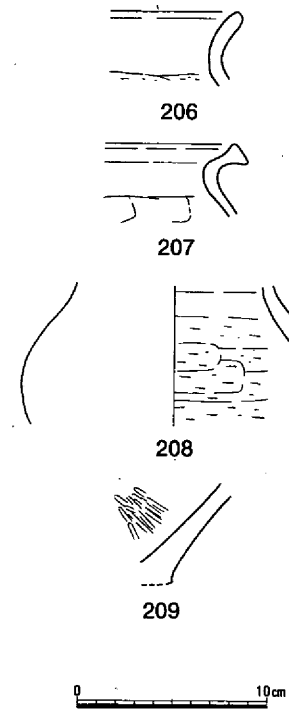
平面形は長径86㎝、短径82㎝の楕円形に近い形態を呈し、検出面からの深さは60㎝になっていた。断面形は全体に袋状を呈し、底部はほぼ水平であった。内部には明黄褐色粘質土、明褐色砂質土、褐色砂質土が堆積し、図化できない小破片の弥生土器片が出土した。

土壙22（第85図）

この土壙も、調査範囲の中央部よりやや西方向へ寄った地点に検出したもので、西方向約４ｍの地点には竪穴住居17から竪穴住居19の３軒の竪穴住居が重なり合って存在し、北西方向約３ｍの地点には土壙23が確認されている。

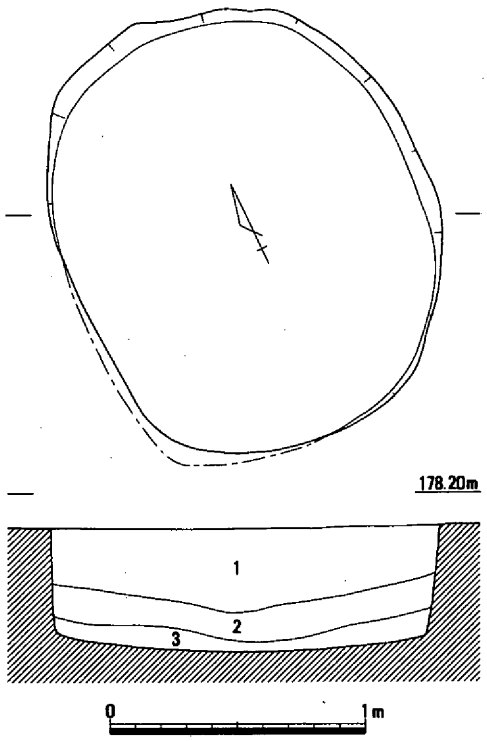
平面形は長径98㎝、短径78㎝の楕円形に近い形態を呈し、検出面からの深さは30㎝になっていた。西側に面した壁面の一部が袋状を呈し、底部はほぼ水平で、淡黄褐色粘質土、淡褐色砂質土、明褐色砂質土が堆積していた。内部を精査したが遺物が出土しなかったので、土壙22の時期は不明である。

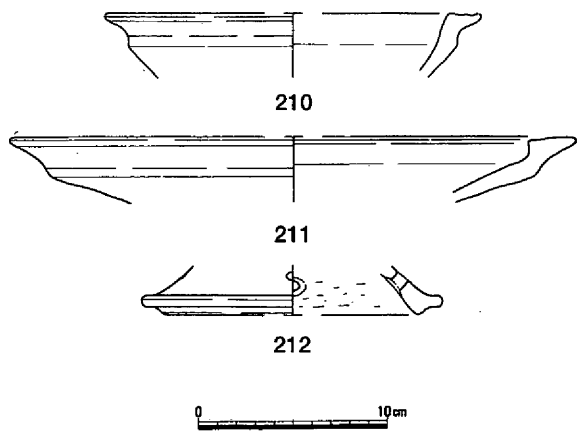




1．淡褐色砂質土

第86図　土壙23（1／30）・出土遺物（1／4）





1．淡褐色砂質土
2．褐色砂質土
3．淡黄褐色粘質土

第87図　土壙24（1／30）・出土遺物（1／4）

土壙23（第86図）

調査範囲の中央部よりやや西方向へ寄った地点に検出した大型の土壙で、北側に隣接して竪穴住居13から竪穴住居16までの４軒の竪穴住居や、土壙19と土壙20などが確認されている。また南東方向約３ｍの位置には土壙22が、北東方向約３ｍの位置には土壙24が、それぞれ存在している。

平面形は長径166㎝、短径158㎝の楕円形に近い形態を呈し、検出面からの深さは南端部分で95㎝になっていた。この土壙の特徴は、底部の壁面に沿った場所の３か所に柱穴が伴うことである。その柱穴の平面形は円形または楕円形を呈し、底部からの深さは11㎝から21㎝であった。東側に面した底部を精査したが、別の柱穴は存在しなかった。この土壙の南側に面した壁面は袋状を呈し、底部は南方向から北方向に向かって緩やかに傾斜していた。土壙の内部には炭化物を含む淡褐色砂質土が堆積し、弥生土器の小破片が出土した。

206の甕形土器は、外湾して斜め上方へ立ち上がった口縁の端部が、丸く仕上げられて外側に面が認められない。口縁部から頸部にかけては内外面とも全体にヨコナデを行い、胴部の内面は横方向のヘラケズリを施している。**207**の甕形土器は、「く」字状に外反した口縁の端部が斜め上下に拡張して、外側に面が存在する。口縁部から頸部にかけては内外面ともヨコナデを行い、胴部の内面は横方向のヘラケズリを施している。**208**の壺形土器は、胴部だけの小破片である。胴部の最大径はほぼ中位に認められ、全体の器壁が厚くなっている。内面は横方向のヘラケズリを施しているが、外面はヨコナデを行っている。**209**は鉢形土器の底部破片で、平底の一部が残存している。内面はヘラケズリを行った上面にヘラミガキを加え、外面には縦方向のハケメが認められる。

これらの土器の形態的特徴や調整手法から、土壙23は弥生時代後期前葉の時期に属するであろう。

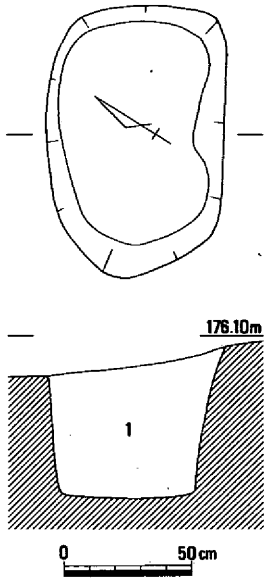
土壙24（第87図）

この土壙も、調査範囲の中央部よりやや西方向へ寄った地点に検出したもので、南東方向約５ｍの位置には竪穴住居17から竪穴住居19までの３軒の竪穴住居が確認されている。

平面形は長径180㎝、短径144㎝の楕円形に近い形態を呈し、検出面からの深さは50㎝になっていた。この土壙の西方向から南方向にかけての壁面は、断面形が袋状を呈していた。底部の中央部は浅く窪んで、周辺よりもやや深くなっていた。土壙の内部には淡黄褐色粘質土、褐色砂質土、淡褐色砂質土が堆積し、弥生土器片が出土した。

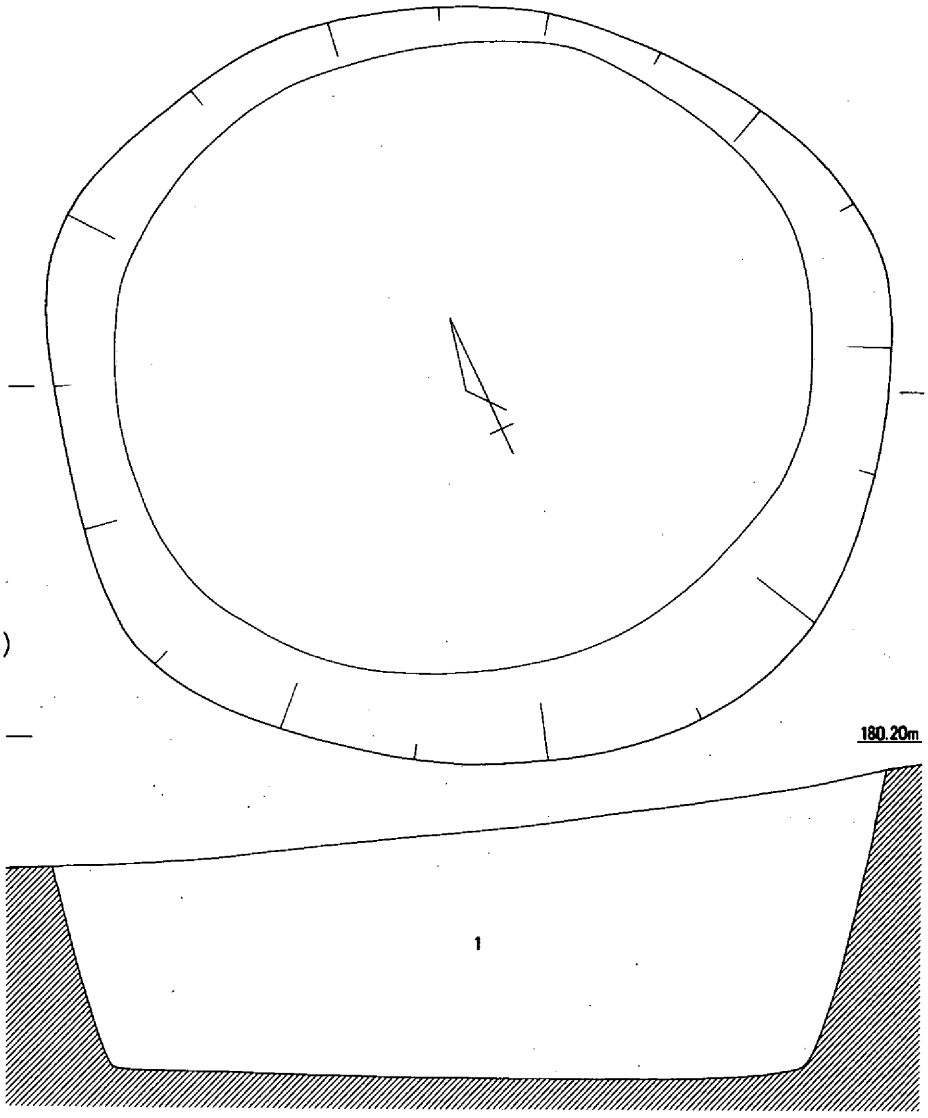
210の鉢形土器は、胴部から口縁部にかけて器壁が厚くなって斜め上方へ立ち上がり、口縁の端部は外側へ拡張して上位に２条の凹線を有する面が存在する。胴部の外面には稜が認められ、内外面とも全体にヨコナデを行っている。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で、橙色を呈している。**211**の高杯形土器の杯部破片と**212**の高杯形土器の脚部破片は、胎土や色調などから同一個体の可能性が強い。杯部の下位は器壁が厚くなって斜め上方へ直線的に立ち上がり、口縁部との境界部分で屈曲して口縁端部へ移行する。口縁端部は外側へ拡張して、上位に凹線を有する面が認められる。器表面が内外面とも磨滅しているので調整手法の観察が困難であるが、おそらく全体にヨコナデを行っていると思われる。脚部の端部は器壁が厚くなって「ハ」字状に開き、中央部が浅く窪んだ立ち上がりが認められる。立ち上がりに近い位置には穿孔が存在するが、外から内方向に向かって刺突されている。内面は横方向のヘラケズリを施し、外面と端部はヨコナデを行っている。

これらの３点の土器片の形態的特徴や調整手法から、土壙24は前述した土壙23よりもやや古い弥生時代後期前葉の時期に属すると考える。

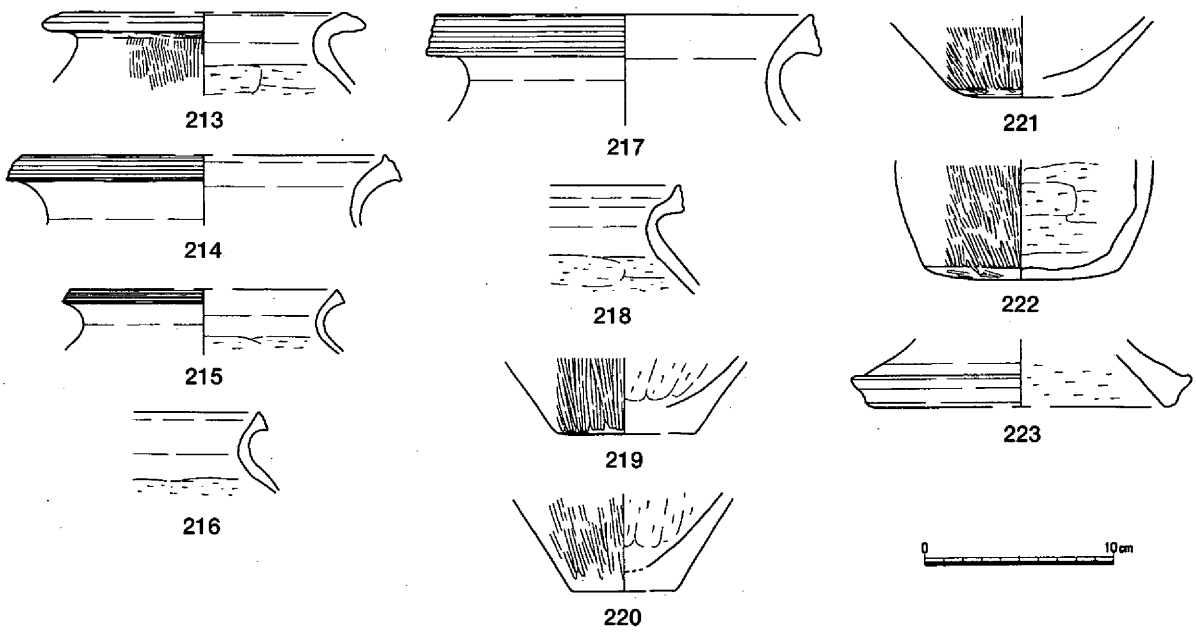


1．淡黄褐色土

第88図　土壙25（1／30）



1．黄灰色砂質土



第89図　土壙26（1／30）・出土遺物（1）（1／4）

土壙25（第42・88図）

調査範囲の中央部よりやや東方向へ寄った地点に検出した土壙で、竪穴住居22の西側の床面に存在する。この土壙は単独に確認されたもので、最も近い位置の土壙は南東方向約17ｍの土壙27である。

平面形は長径106㎝、短径70㎝の不整形な形態を呈し、検出面からの深さは60㎝になっていた。断面形は「Ｕ」字形を呈し、底部の中央部がわずかに窪んでいた。内部には淡黄褐色土が堆積し、小破片で図化できない弥生土器が出土した。

この土壙は竪穴住居22よりも新しい遺構であることは確認しているが、詳細な時期は不明である。

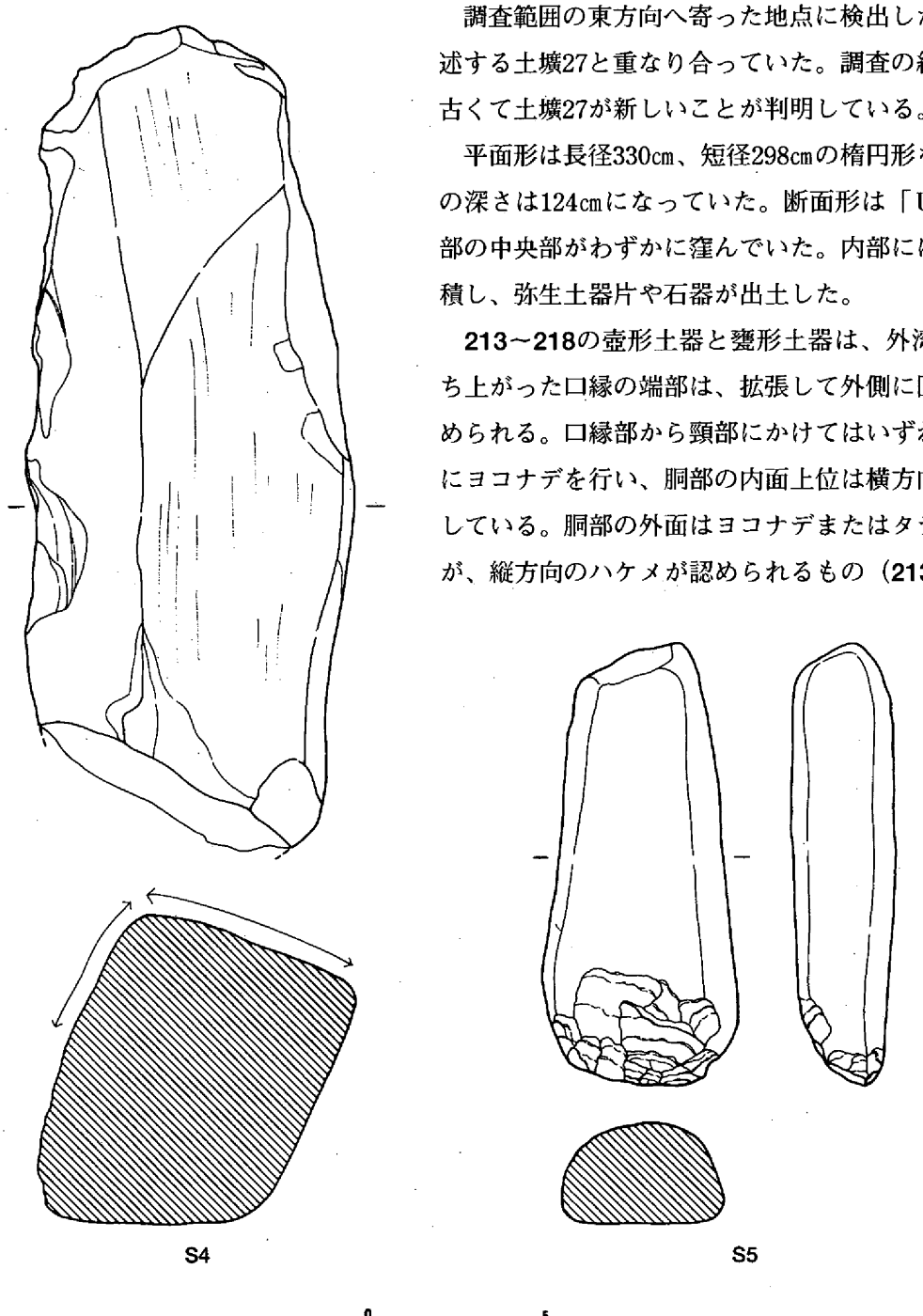
土壙26（第89図）

調査範囲の東方向へ寄った地点に検出した大型の土壙で、後述する土壙27と重なり合っていた。調査の結果、この土壙26が古くて土壙27が新しいことが判明している。

平面形は長径330㎝、短径298㎝の楕円形を呈し、検出面からの深さは124㎝になっていた。断面形は「Ｕ」字形を呈し、底部の中央部がわずかに窪んでいた。内部には黄灰色砂質土が堆積し、弥生土器片や石器が出土した。

213～218の壺形土器と甕形土器は、外湾して斜め上方へ立ち上がった口縁の端部は、拡張して外側に凹線を有する面が認められる。口縁部から頸部にかけてはいずれも内外面とも全体にヨコナデを行い、胴部の内面上位は横方向のヘラケズリを施している。胴部の外面はヨコナデまたはタテナデを行っているが、縦方向のハケメが認められるもの（**213**）も存在する。

219～221の壺形土器の底部破片は、いずれも内面は縦方向のヘラケズリを施し、外面には縦方向のヘラミガキを行っている。**222**の器壁の薄い甕形土器と思われる底部は、胴部の径があまり大きくならない。内面は下端まで横方向のヘラケズリを施し、外面は縦方向のヘラミガキを行っている。**223**

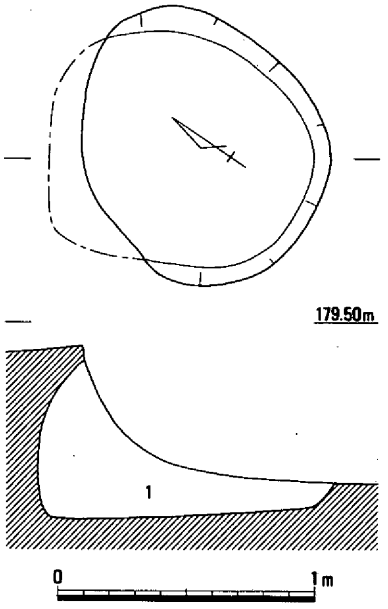


第90図　土壙26出土遺物（2）（1／2）

の端部に立ち上がりを有する高杯形土器の脚部は、内面は横方向のヘラケズリを施し、外面と端部はヨコナデを行っている。胎土中には細かい砂粒を含み、焼成は良好で、にぶい橙色を呈している。

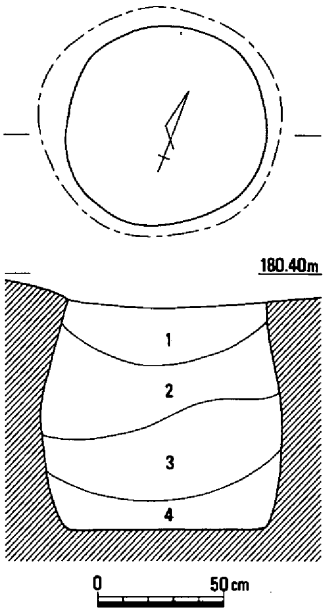
これらの土器片の形態的特徴や調整手法などから、土壙26は弥生時代後期前葉の時期に属すると思われる。

Ｓ４の砥石は、石材がホルンヘルスである。その法量は、長さ23.3㎝、幅9.2㎝、厚さ８.７㎝で、重さ273.0gになる。この砥石の使用された面は２面だけであり、欠損している。**Ｓ５**の蛤刃石斧は、石材が砂岩である。その法量は、長さ12.5㎝、幅5.5㎝、厚さ２.９㎝で、重さ286.0gになる。この蛤刃石斧は、表面全体が滑らかで風化が認められない逸品で、先端の刃部に刃こぼれした部分が確認できるものの、ほぼ完形品に近い製品と思われる。



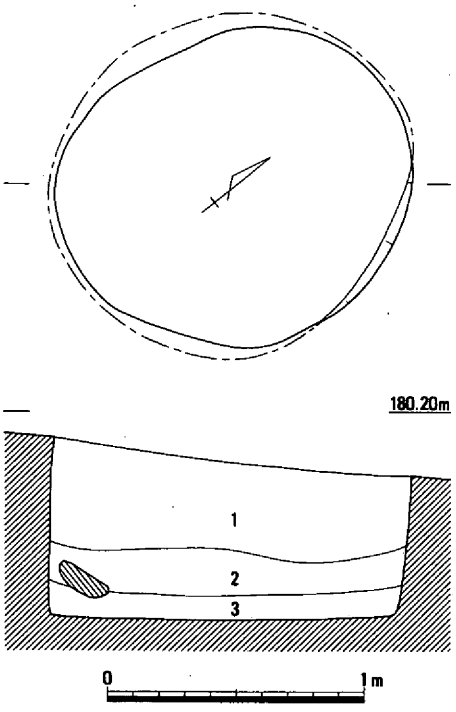
１．淡黄褐色土

第91図　土壙27（1／30）

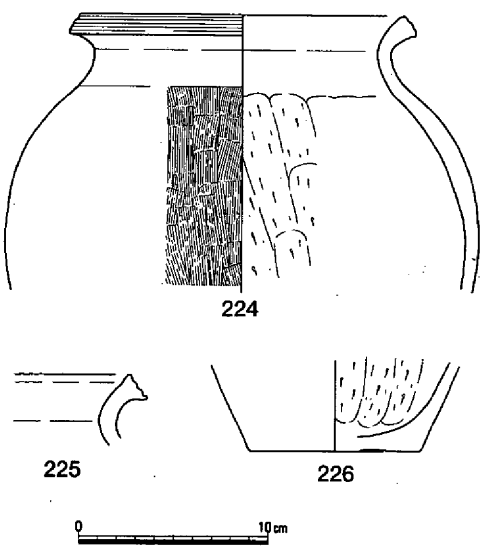


１．暗灰褐色粘質土
２．暗黄褐色粘質土
３．淡茶灰色粘質土
４．淡黄褐色粘質土

第93図　土壙29（1／30）



１．明黄褐色土
２．淡黄灰色土
３．明黄色土



第92図　土壙28（1／30）・出土遺物（1／4）

土壙27（第91図）

竪穴住居23から竪穴住居28までの６軒の竪穴住居が重なり合って所在した地点と、竪穴住居29から竪穴住居33までの５軒の竪穴住居が重なり合って所在した地点の中間に検出した土壙で、前述した土壙26と重複していた。調査の結果、この土壙27が古くて土壙26が新しいことが判明している。

平面形は長径112㎝、短径90㎝の楕円形に近い形態を呈し、北西方向に面した部分の検出面からの深さは70㎝になっていた。北西方向に面した壁面の断面形は袋状を呈し、底部は南東方向から北西方向に向かってわずかに傾斜していた。土壙内には淡黄褐色土が堆積していただけで、遺物は出土しなかった。

この土壙は、遺物が出土しなかったので時期が不明であるが、遺構の切り合い関係より弥生時代後期前葉の時期に属する大型の土壙26よりも古いことが判明しているから、弥生時代後期前葉かそれよりも古い時期に属するであろう。

土壙28（第52・92図、図版56－１）

調査範囲の東方向へ寄った地点に検出した土壙で、この土壙の南東方向には、竪穴住居29から竪穴住居33まで５軒の竪穴住居が重なり合って所在し、土壙29や土壙30も確認されている。

平面形は長径138㎝、短径120㎝の楕円形に近い形態を呈し、検出面からの深さは70㎝になっていた。東方向に面した一部分を除いて、断面形は袋状を呈していた。底部はほぼ水平になっていたが、中心部がわずかに窪んでいた。内部には明黄色土、淡黄灰色土、明黄褐色土が堆積し、３点の弥生土器片が出土した。

224の甕形土器は、口縁部から胴部にかけての比較的大きな破片である。緩やかに外湾して斜め上方へ立ち上がった口縁の端部は、器壁が厚くなって外側に２条の凹線を有する面が認められる。胴部の最大径は中位よりやや上方に存在し、器壁が頸部よりも厚くなっている。口縁部から頸部にかけては内外面とも全体にヨコナデを行い、胴部の内面には縦方向の粗いヘラケズリを施し、外面には縦方向のハケメが認められる。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で、にぶい橙色を呈している。**225**の壺形土器または甕形土器の口縁部破片は、頸部から口縁部にかけて緩やかに外湾して斜め上方へ立ち上がり、口縁端部が斜め上下に拡張して外側に３条の凹線を有する面が存在する。内外面ともヨコナデを行い、全体ににぶい橙色を呈している。**226**の壺形土器または甕形土器の底部は、安定した平底になっている。内面は縦方向のヘラケズリを施し、外面はタテナデを行っている。

これらの３点の土器片の形態的特徴や調整手法から、土壙28は弥生時代後期前葉の時期に属すると推定される。

土壙29（第52・93図、図版56－１）

調査範囲の東方向へ寄った地点に検出した土壙で、竪穴住居33の西方向に位置する壁体溝を削平して造られていた。この土壙の南東方向約２ｍの所には、後述する土壙30が確認されている。

平面形は長径82㎝、短径78㎝の楕円形に近い形態を呈し、検出面からの深さは90㎝になっていた。断面形は全体に袋状を呈し、底部はほぼ水平になっていた。内部には淡黄褐色粘質土、淡茶灰色粘質土、暗黄褐色粘質土、暗灰褐色粘質土が堆積し、遺物は出土しなかった。

この土壙は、遺物が出土しなかったので時期が不明であるが、遺構の切り合い関係より弥生時代後期前葉の時期に属する竪穴住居33よりも新しいことが判明しているから、弥生時代後期前葉かそれよりも新しい時期に属するであろう。

土壙30（第52・94図、図版56－１）

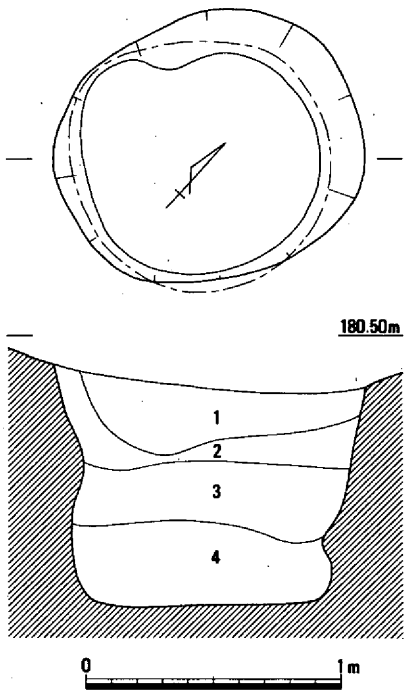
調査範囲の東方向へ寄った地点に検出した土壙で、この土壙も前述した土壙29と同様に、竪穴住居33の壁体溝を削平して造られていた。

平面形は長径92㎝、短径82㎝の楕円形に似た形態を呈し、検出面からの深さは96㎝になっていた。断面形は全体に袋状を呈し、底部の中央部が周辺よりもわずかに高くなっていた。内部には淡黄褐色土、淡茶灰色粘質土、明黄褐色土、淡灰褐色粘質土が堆積し、弥生土器が出土した。

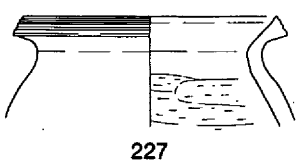
227の器壁の厚い壺形土器と思われる土器片と**228**の壺形土器の底部破片は、その形態的特徴や調整手法から、弥生時代後期前葉の時期に属するであろう。

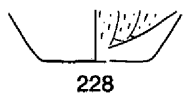
土壙31（第59・95図、図版56－２）

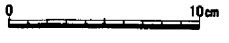
調査範囲の東端部に所在した竪穴住居34の北西側に接して検出した土壙で、この土壙31が竪穴住居34のテラスや壁体溝を切って造られているのを確認したから、土壙31が新しくて竪穴住居34が古い。検出面での平面形は長径180㎝、短径165㎝の楕円形に近い形態を呈し、検出面からの深さは160㎝になっていた。断面形は２段掘りの状態になって逆台形に近い形態を呈し、底部の中央部に柱穴状の浅いピットが存在した。このピットには上屋構造を支える柱が立っていたのかもしれない。内部には淡褐色砂質土、明黄褐色粘質土、淡灰黄色土が堆積していたが、遺物が出土しなかったので時期は不明である。



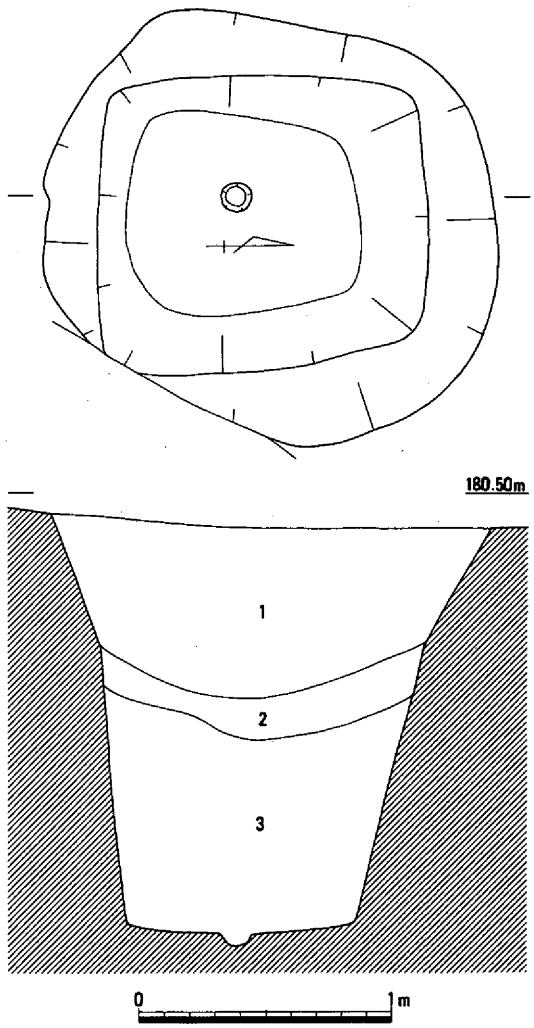
１．淡灰褐色粘質土
２．明黄褐色土
３．淡茶灰色粘質土
４．淡黄褐色土







第94図　土壙30（1／30）・出土遺物（1／4）



１．淡灰黄色土
２．明黄褐色粘質土
３．淡褐色砂質土

第95図　土壙31（1／30）

第４節　江戸時代の遺構

(1) 土　壙

土壙32（第96図、図版）

調査範囲の中央部よりやや北西方向へ寄った地点に検出した土壙で、平面形は長径98㎝、短径95㎝の楕円形に近い形態を呈し、検出面からの深さは55㎝になっていた。断面形は「U」字形を呈し、内部には暗褐色砂質土が堆積して人骨の下肢骨の一部が出土したので、近世土壙墓と考えた。

土壙33（第97図）

前述した土壙32の南東方向約２ｍの地点に検出した土壙で、平面形は長径100㎝、短径94㎝の楕円形に近い形態を呈し、検出面からの深さは68㎝になっていた。断面形は「U」字形を呈し、内部には暗褐色砂質土が堆積して人骨片が出土したので、近世土壙墓と考えた。

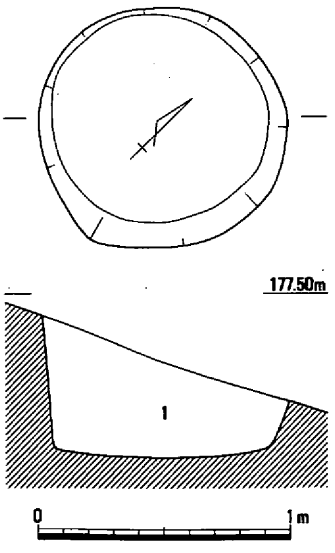
第５節　時期不明の遺構

(1) 土　壙

土壙34（第98図）

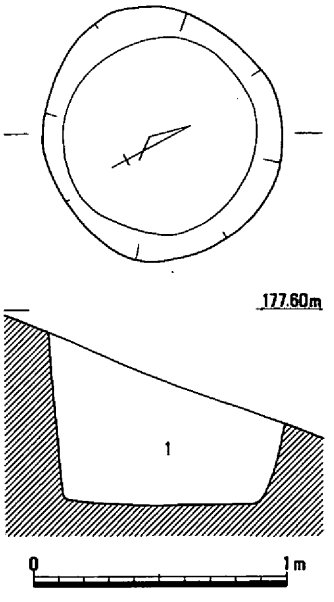
調査範囲の中央部よりやや西方向へ寄った地点の、土壙21と土壙22の中間に検出した土壙である。

平面形は長辺102㎝、短辺92㎝の隅丸長方形に近い形態を呈し、検出面からの深さは14㎝と浅くなっていた。断面形は「U」字形を呈し、内部には炭化物を多量に含む黒褐色砂質土、黄褐色砂質土、炭化物を含む褐色砂質土が堆積して焼土も認められたが、遺物は出土しなかった。



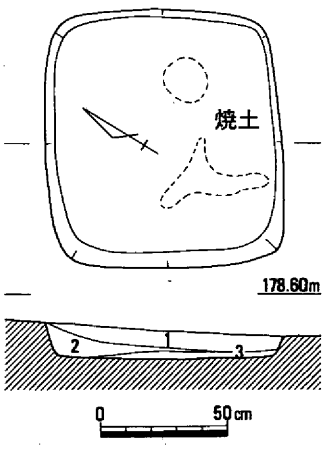
1．暗褐色砂質土

第96図　土壙32（1／30）



1．暗褐色砂質土

第97図　土壙33（1／30）



1．褐色砂質土
（炭化物含む）
2．黄褐色砂質土
3．黒褐色砂質土
（炭化物多量に含む）

第98図　土壙34（1／30）

第６節　遺構に伴わない遺物

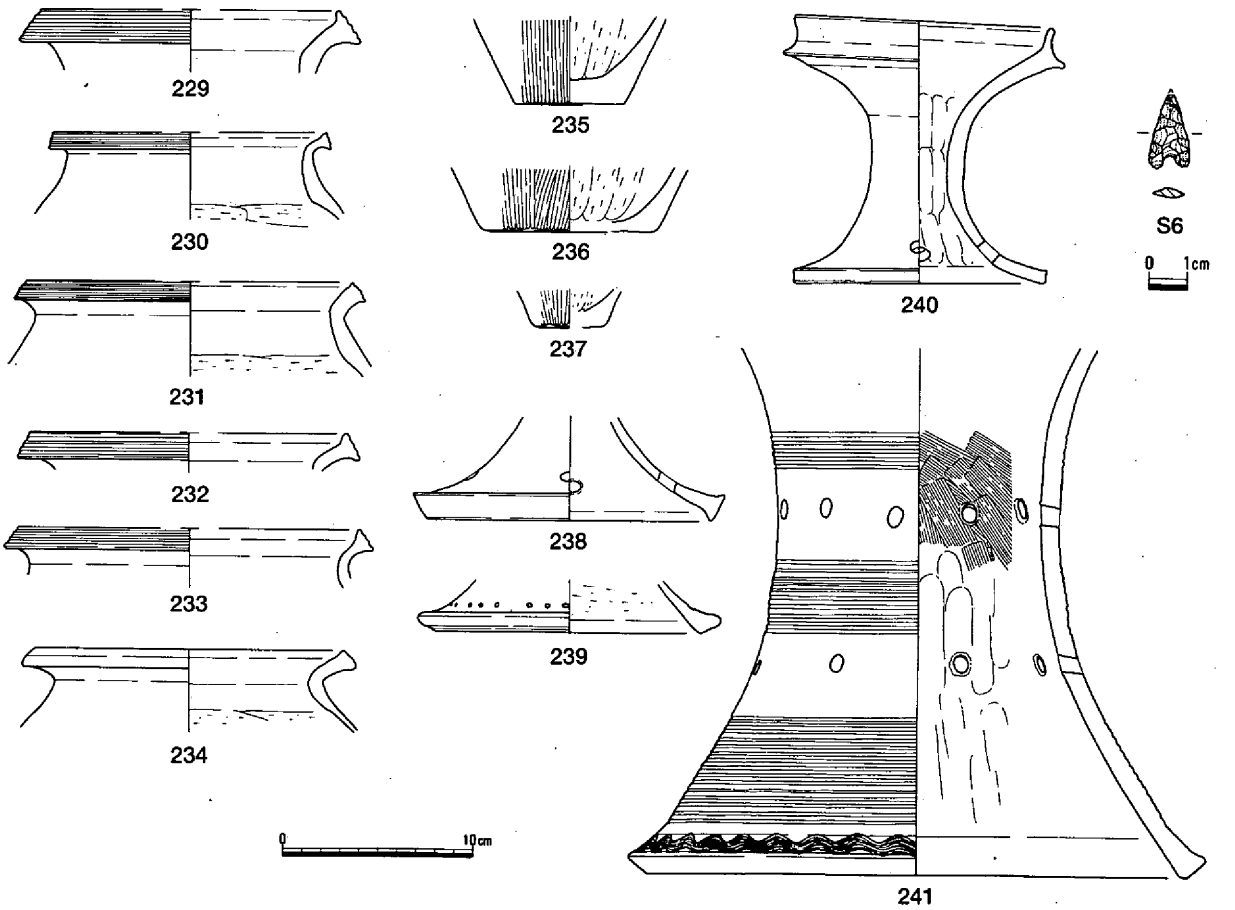
野辺張遺構から出土した遺構に伴わない遺物には、弥生土器以外に１点の石鏃が採集されている。

229～233の壺形土器または甕形土器の口縁部破片は、外反または外湾した口縁の端部が拡張し、外側に数条の凹線を有する面が認められる。234の甕形土器は、頸部から口縁部にかけて器壁が厚くなって「く」字状に外反し、口縁端部の外面には凹線が存在しない。235～237の壺形土器または甕形土器の底部はいずれも平底で、内面には縦方向のヘラケズリを施し、外面には縦方向のヘラミガキ痕跡が認められる。238と239の高杯形土器の脚部は、「ハ」字状に開いた端部の器壁が厚くなって立ち上がりが認められる。以上に説明した土器片は、弥生時代後期前葉の時期に属するであろう。

240の完形品に近い器台形土器は、口径13.6cm、器高14.3cm、脚端部径10.3cmを測る。緩やかに外湾して斜め上方へ立ち上がった口縁の端部は、器壁が薄くなって上方へ立ち上がり、内面には縦方向のユビナデ痕跡が認められる。この器台形土器は弥生時代後期中葉の時期に属するであろう。

241の大型の器台形土器は、口縁部を欠損して器形が不明である。内面には斜め方向のハケメや縦方向のユビナデ痕跡が認められ、外面には凹線や波状文が巡らされている。この器台形土器は、その形態的特徴や調整手法から、弥生時代中期末葉の時期に属するであろう。

なおS６の石鏃はサヌカイト製で、長さ2.0cm、幅1.1cm、厚さ0.3cm、重さ0.5gになっている。



第99図　遺構に伴わない遺物（1／4、1／2）

第７節　小　　結

野辺張遺跡で検出した遺構は、竪穴住居34軒と土壙34基であるが、２基の近世土壙墓と１基の時期不明の土壙を除けば、いずれも弥生時代後期の時期に造られたと推定される。

竪穴住居は、同じ場所に何度も建て替えが行われたものが多く、１軒の竪穴住居が単独で検出されたのは、調査範囲の中央部よりやや東方向に寄った地点に所在した竪穴住居22と、東端部に検出した竪穴住居34だけである。重複していた竪穴住居を精査したところ、竪穴住居７から竪穴住居９までの３軒の竪穴住居や竪穴住居17から竪穴住居19までの３軒の竪穴住居のように、建て替えが行われるたびに竪穴住居そのものの規模が大きくなるもの以外に、竪穴住居23から竪穴住居28までの６軒の竪穴住居のように、建て替えが行われるたびに竪穴住居そのものの規模が小さくなるものや、竪穴住居29から竪穴住居33までの５軒の竪穴住居のように、建て替えが行われるたびに竪穴住居そのものの規模が大きくなっていたものが、途中の段階で突然に竪穴住居の規模が小さくなるものも認められた。

竪穴住居７から竪穴住居９までの３軒の竪穴住居には、近接した地点に土壙９から土壙11までの３基の土壙が存在し、それぞれの遺構から出土した土器の観察結果などから、竪穴住居７に伴う貯蔵穴が土壙11、竪穴住居８に伴う貯蔵穴が土壙10、竪穴住居９に伴う貯蔵穴が土壙９にそれぞれなるのではないかと推定された。

調査範囲の西方向に面した部分は、目木川流域の沖積平野へ舌状に張り出した丘陵上に位置していたが、竪穴住居や土壙などの検出した遺構群は丘陵先端の縁辺部や緩斜面の地点に所在して、丘陵中央部の平坦面には遺構が確認できなかった。この遺構が確認できなかった比較的広い平坦面は、集落全体の住民が共同で使用する広場になっていた可能性が強い。

弥生時代後期の時期に属すると思われる土壙は31基もあり、平面形は楕円形に近いものから不整形なものまで千差万別である。土壙そのものの規模も、大きいものから小さいものまで様々である。検出面から底部までは、深いものや浅いものが混在していたが、底部はほぼ水平になっていた。土壙の断面形も、「U」字形を呈するもの、逆台形を呈するもの、袋状を呈するものが認められた。これらの土壙の立地状況は、竪穴住居と重なり合うか竪穴住居に近接した地点に存在するものと、竪穴住居と離れた地点に単独で検出されたものとがある。これらの土壙の大多数のものが、竪穴住居に伴う貯蔵穴の機能を有していたと推定されるが、土壙内から遺物が出土したものが少ないので、土壙と竪穴住居とを特定できるものは、ほとんど見つけることができなかった。

ここで野辺張遺跡に存在した土壙で、特異なものを列挙したい。調査範囲の南西端部に検出した土壙１は、南東側の壁面が急勾配の斜面に位置して底部までの深さが160cmもあったから、雨水を処理する上屋構造がどのようになっていたのか、理解することができなかった。大型の土壙23は、底部の壁面に沿った場所の３か所に柱穴を伴っていた。調査範囲の東端部に検出した土壙31は、底部の中央部に柱穴状の浅いピットが存在したから、上屋構造を支える柱が立っていた可能性が考えられる。

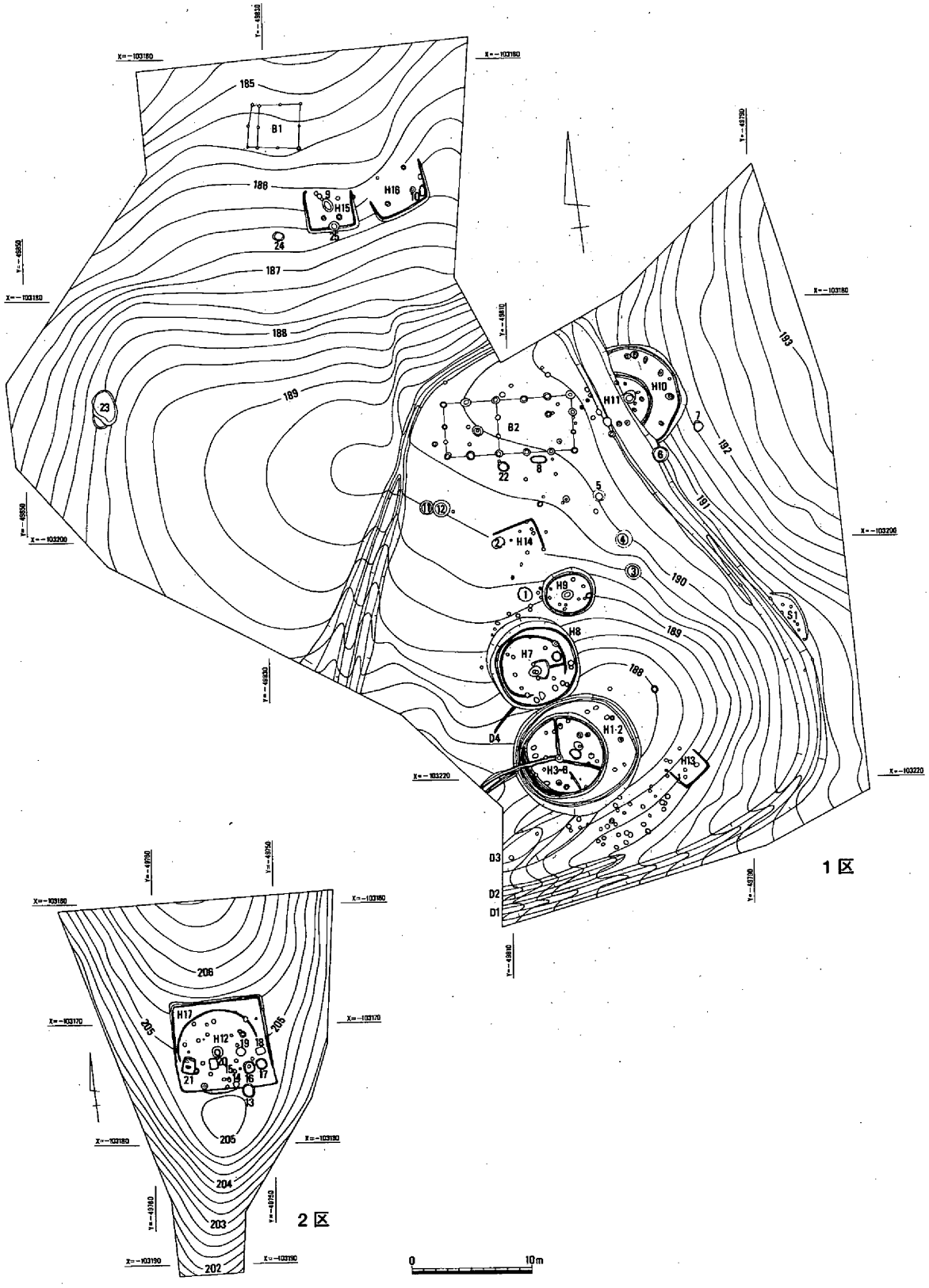
ところで、この野辺張遺跡から出土した土器で最も古いものは、241の器台形土器で弥生時代中期末葉の時期に属すると思われる。この段階になって初めて野辺張遺跡へ人間が足を踏み入れ、弥生時代後期の短期間に集落を形成するが、その後は集落が別の地点へ移動してしまう。江戸時代になって２基の近世土壙墓が造られるが、それ以降は遺構が存在しないのである。（福田）

表－１　野辺張遺跡新旧遺構名称対照表

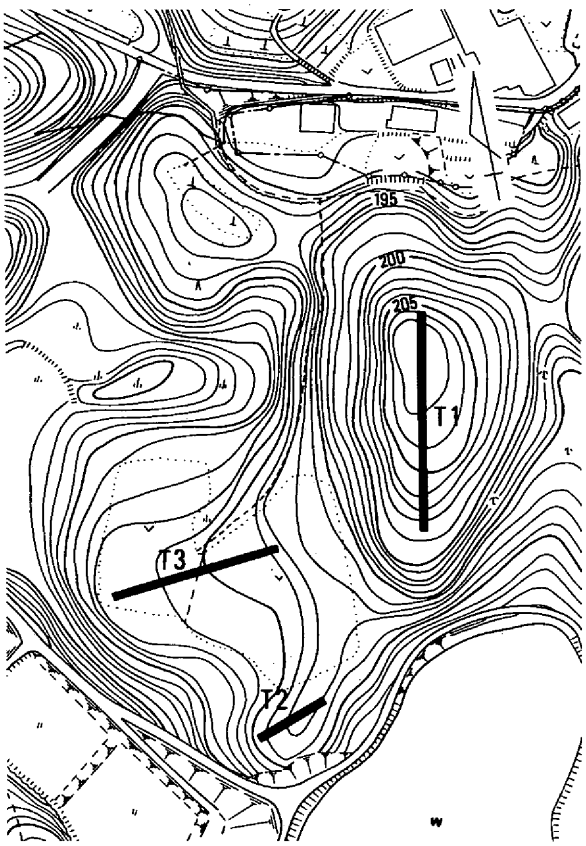
新遺構名	旧遺構名	時　　期
竪穴住居１	NO.１	弥生時代後期
竪穴住居２	NO.１	弥生時代後期
竪穴住居３	NO.１	弥生時代後期
竪穴住居４	NO.１	弥生時代後期
竪穴住居５	NO.１	弥生時代後期
竪穴住居６	NO.１	弥生時代後期
竪穴住居７	NO.４	弥生時代後期
竪穴住居８	NO.４	弥生時代後期
竪穴住居９	NO.４	弥生時代後期
竪穴住居10	NO.19	弥生時代後期
竪穴住居11	NO.19	弥生時代後期
竪穴住居12	NO.20	弥生時代後期
竪穴住居13	NO.18	弥生時代後期
竪穴住居14	NO.18	弥生時代後期
竪穴住居15	NO.18	弥生時代後期
竪穴住居16	NO.17	弥生時代後期
竪穴住居17	NO.８	弥生時代後期
竪穴住居18	NO.８	弥生時代後期
竪穴住居19	NO.８	弥生時代後期
竪穴住居20	NO.46	弥生時代後期
竪穴住居21	NO.46	弥生時代後期
竪穴住居22	NO.42	弥生時代後期
竪穴住居23	NO.34	弥生時代後期
竪穴住居24	NO.34	弥生時代後期
竪穴住居25	NO.34	弥生時代後期
竪穴住居26	NO.34	弥生時代後期
竪穴住居27	NO.34	弥生時代後期
竪穴住居28	NO.34	弥生時代後期
竪穴住居29	NO.35	弥生時代後期
竪穴住居30	NO.35	弥生時代後期
竪穴住居31	NO.35	弥生時代後期
竪穴住居32	NO.35	弥生時代後期
竪穴住居33	NO.35	弥生時代後期
竪穴住居34	NO.41・44	弥生時代後期

新遺構名	旧遺構名	時　　期
土壙１	NO.32	弥生時代後期
土壙２	NO.25	弥生時代後期
土壙３	NO.29	弥生時代後期
土壙４	NO.31	弥生時代後期
土壙５	NO.33	弥生時代後期
土壙６	NO.30	弥生時代後期
土壙７	NO.23	弥生時代後期
土壙８	NO.２	弥生時代後期
土壙９	NO.３	弥生時代後期
土壙10	NO.21	弥生時代後期
土壙11	NO.５	弥生時代後期
土壙12	NO.27	弥生時代後期
土壙13	NO.26	弥生時代後期
土壙14	番号なし	弥生時代後期
土壙15	NO.15	弥生時代後期
土壙16	NO.24	弥生時代後期
土壙17	NO.14	弥生時代後期
土壙18	NO.16	弥生時代後期
土壙19	NO.28	弥生時代後期
土壙20	NO.22	弥生時代後期
土壙21	NO.６	弥生時代後期
土壙22	NO.９	弥生時代後期
土壙23	NO.10	弥生時代後期
土壙24	NO.11	弥生時代後期
土壙25	NO.45	弥生時代後期
土壙26	NO.43	弥生時代後期
土壙27	NO.47	弥生時代後期
土壙28	NO.40	弥生時代後期
土壙29	NO.36	弥生時代後期
土壙30	NO.37	弥生時代後期
土壙31	NO.38	弥生時代後期
土壙32	NO.13	江戸時代
土壙33	NO.12	江戸時代
土壙34	NO.７	不明

第６章　先旦山遺跡



第１図　先旦山遺跡遺構配置図（1／500）

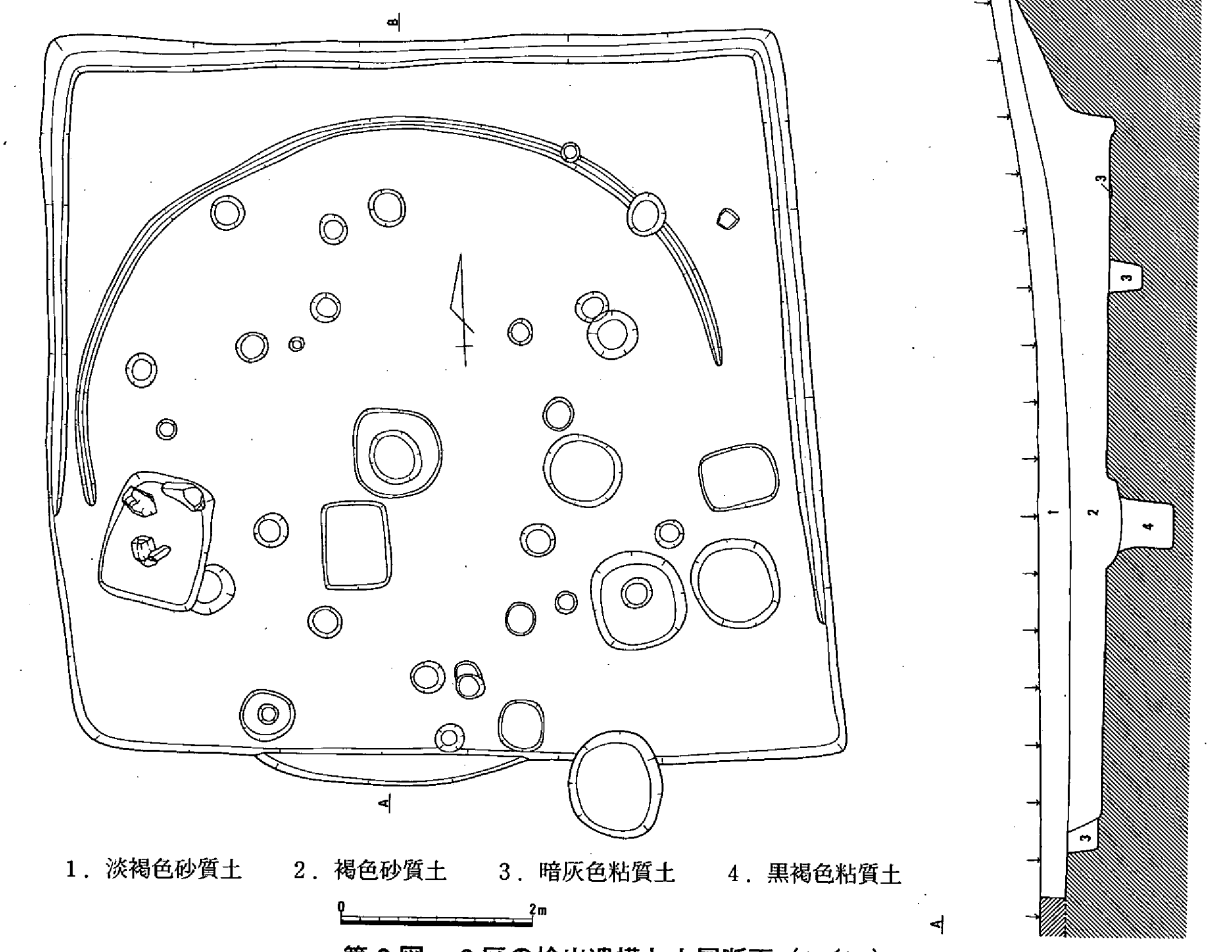


第２図　先旦山遺跡試掘トレンチ位置図(1／2000)

第１節　調査の経過

先旦山遺跡も、平成元年３月31日に久世町教育委員会によって発行された『久世町埋蔵文化財分布地図』には掲載されていなかったが、平成５年10月６日に岡山県教育庁文化課が実施した遺跡分布調査で、緩斜面に位置する畑地から須恵器の破片を採集したため、平成７年６月23日に幅１ｍのトレンチ（Ｔ３）を設定して遺構確認調査を実施したところ、竪穴住居の壁体溝と思われる溝を検出して弥生土器片や須恵器片が出土したので、緩斜面の畑地部分には弥生時代から古墳時代にかけての集落跡が存在すると考えられた。

一方、東方向に位置する丘陵の尾根上には、古墳の墳丘と思われるやや高くなった部分に、人頭



第３図　２区の検出遺構と土層断面（1／80）

大から拳大の角礫や河原石が数多く認められ、中世墓または近世墓が存在する可能性が考えられたため、平成７年７月10日に幅１ｍのトレンチ（Ｔ１）を設定して遺構確認調査を実施したところ、中世墓や近世墓以外に２軒の竪穴住居が重なり合って存在することも明らかになったのである。

このような結果を踏まえて、緩斜面の畑地部分を１区、東方向に位置する丘陵の尾根上を２区と定め、新しく発見された「先旦山遺跡」と命名して、平成７年８月16日から全面調査に着手した。

なおＴ２のトレンチを設定した地点は、古墳が存在する可能性が指摘されていたが、確認調査を実施した結果、自然の高まりで古墳ではないということが判明した。

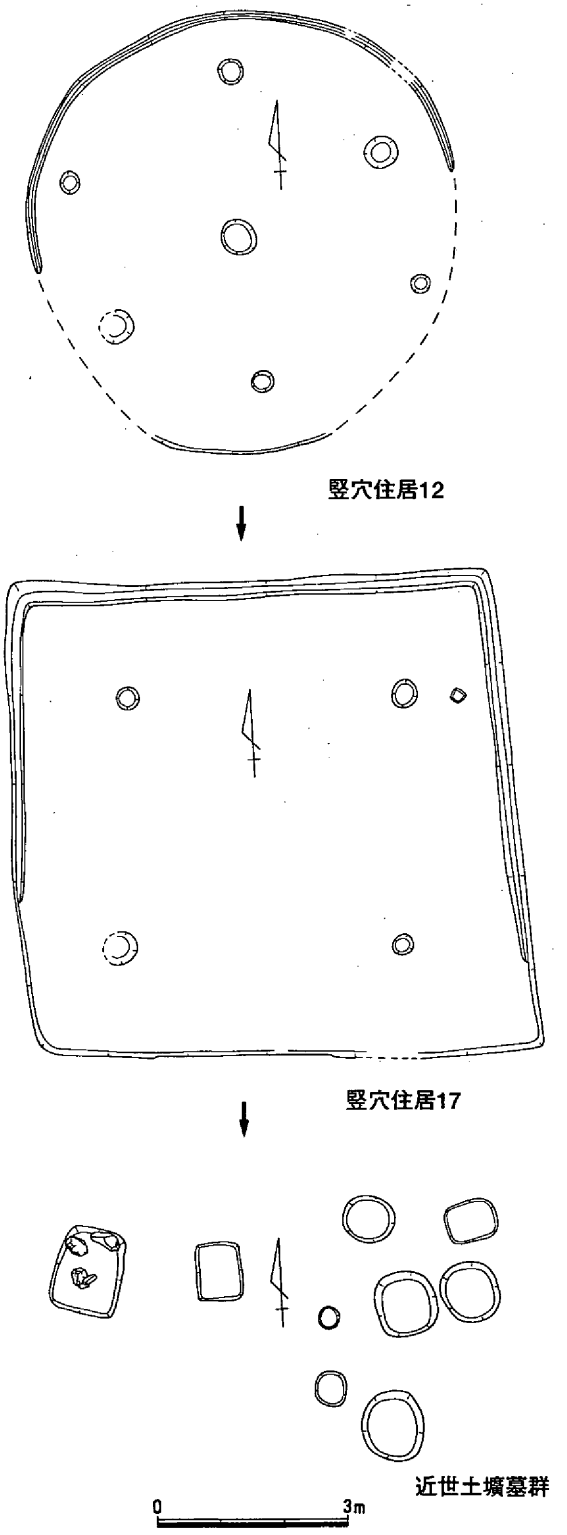
第２節　調査の概要

この遺跡で検出した遺構は、竪穴住居17軒、段状遺構１基、掘立柱建物２棟、土壙25基、溝４条で、弥生時代後期と古墳時代後期の集落跡が存在した。また江戸時代の大型掘立柱建物と近世土壙墓と思われる土壙も検出したので、江戸時代の時期になっても人間の足跡が認められた。なお地形の低くなった１区の南端部に位置した竪穴住居１から竪穴住居６までの上面には、９世紀前葉と考えられる平安時代の時期に属する比較的多くの土器片が鉄製品や土錘などとともに出土したので、遺構の存在は確認できなかったものの、周辺部分に平安時代の鉄生産に関係した工房のようなものがあったのかもしれない。

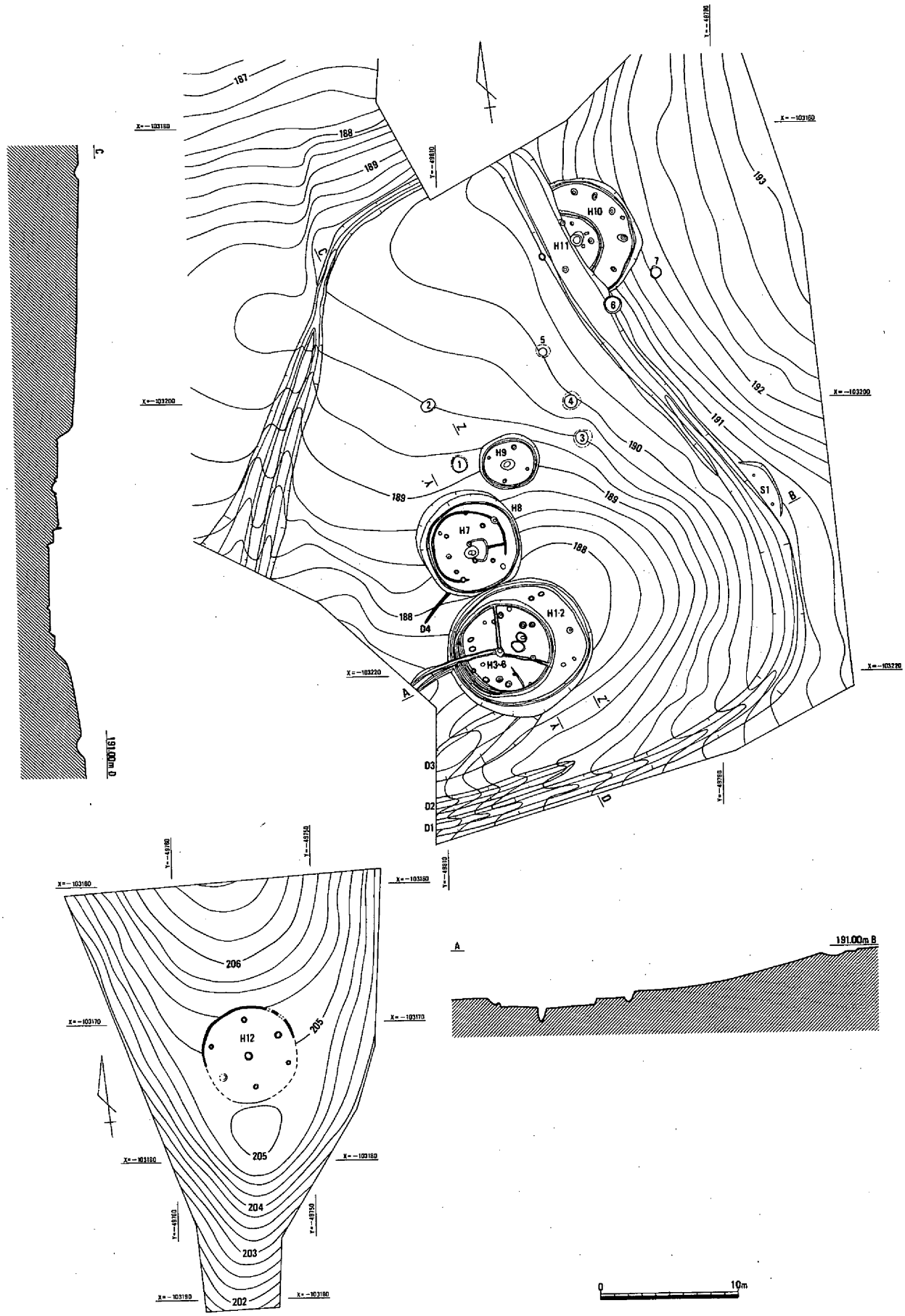
弥生時代後期の竪穴住居は、周囲を排水用の溝に囲まれた状態で検出され、同じ場所で何度も建て替えが行われていることが確認されたが、土層断面を精査したところ、珍しいことに建て替えが行われるたびに竪穴住居そのものの規模が小さくなっていたのである。

古墳時代後期の遺構は、竪穴住居５軒、掘立柱建物１棟、土壙３基だけで、検出した遺構そのものが少なく、散在的な立地状況を呈していた。

２区の丘陵尾根上に検出した弥生時代後期と古墳時代後期の２軒の竪穴住居は、その所在地点から西方向に展開する久世町内の沖積平野を広く望むことができるから、集落における見張台のような役割を果たしていたのではなかろうか。



第４図　２区遺構変遷図（1／120）



第５図　弥生時代遺構配置図（1／400）

第３節　弥生時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居

竪穴住居１（第７～９図、図版57）

１区の調査範囲の南端部分に検出した大型の竪穴住居で、同じ場所で何度も建て替えが行われていたため、６軒の竪穴住居が重なり合っていた。この竪穴住居の北側には、竪穴住居８が接した状態で確認されている。

平面形は長径10.60ｍ、短径9.80ｍの楕円形に近い形態を呈し、柱構造は７本柱で、中央穴と外側斜面に延びる溝が存在した。南方向に面した地点の壁体の残存状態が最も良好で、床面からの高さが78㎝になっていた。また壁体溝の検出面での幅は118㎝を測り、床面からの深さは10㎝で、底部の断面形は「Ｕ」字形を呈していた。７か所の柱穴の平面形は円形または楕円形に近い形態を呈し、南側に位置するＰ４が最も小さくなっていた。Ｐ２とＰ７の柱穴は、断面形が２段掘りになっていた。柱穴間の距離は260～370㎝を測り、Ｐ１とＰ２の間が最も広く、Ｐ３とＰ４の間を最も狭くしていた。東方向に面して床面が残存する部分に位置した柱穴の深さは39～49㎝で、断面形は「Ｕ」字形を呈していた。壁体溝と柱穴との間隔は、Ｐ７が170㎝で最も広く、Ｐ１とＰ２が110㎝で最も狭くなっていた。中央穴は床面のほぼ中心部分に位置し、平面形が長径95㎝、短径80㎝の不整形な形を呈していた。この中央穴の検出面からの深さは５㎝を測り、断面形は浅い「Ｕ」字形になっていた。外側の斜面に延びる溝の長さは2.40ｍまで確認できたが、それより先は急斜面になって不明であった。この溝は緩やかに湾曲し、検出面での最大幅は36㎝を測り、最も深い地点の計測値は43㎝であった。

この竪穴住居に確実に伴う出土遺物は存在しないが、重なり合って検出された６軒の竪穴住居の中で最初に造られた竪穴住居であることが判明しているから、竪穴住居１は弥生時代後期前葉でも初頭に近い時期に属するであろう。

竪穴住居２（第６～８・10、図版57）

この竪穴住居は、前述した竪穴住居１を建て替えたもので、壁体溝や柱穴の一部は竪穴住居１のものをそのまま踏襲して使っていた。

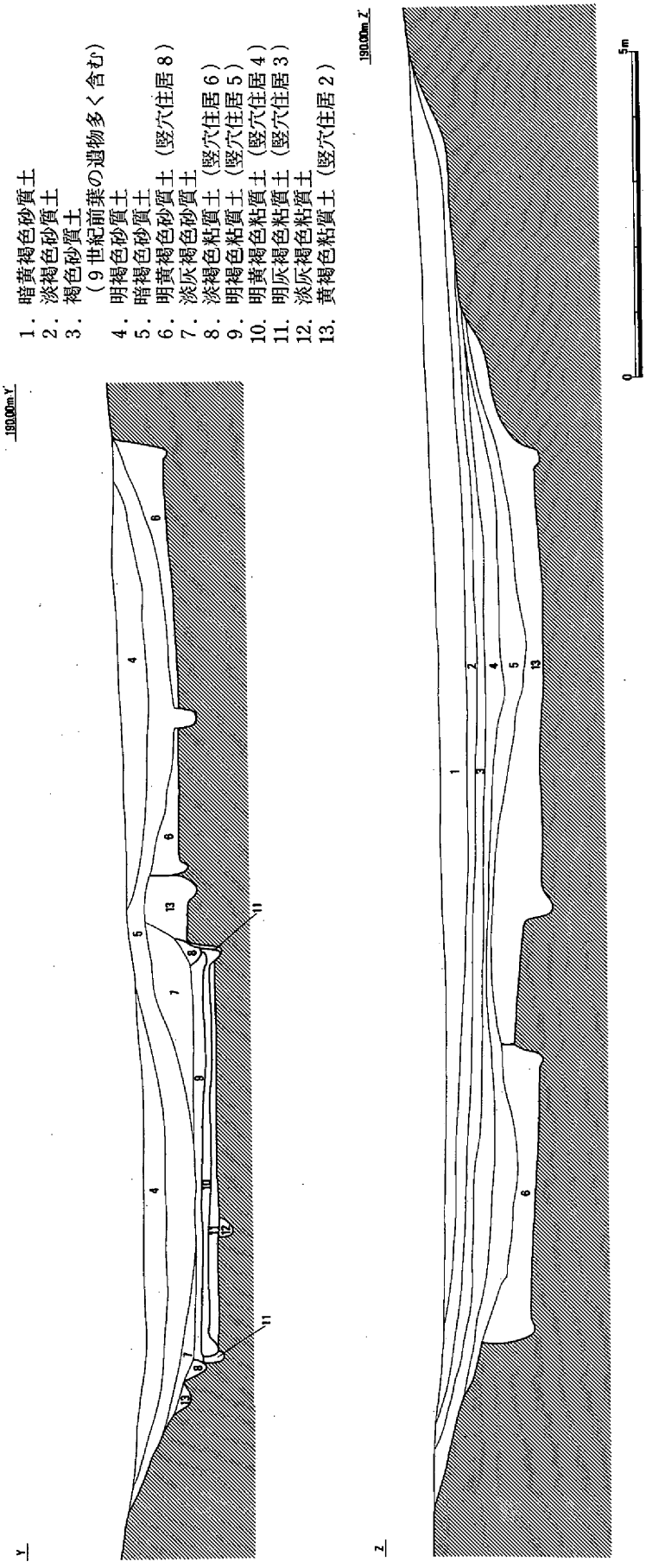
そのために、平面形は竪穴住居１と同じの長径10.6ｍ、短径9.80ｍの楕円形に近い形態を呈するものの、柱構造は８本柱に変化し、中央穴と外側斜面に延びる溝が存在した。壁体や壁体溝の検出面での計測値は竪穴住居１と同じであるが、柱穴や中央穴の位置は移動していた。８か所になった柱穴のうち、床面の南側に面したＰ２からＰ５の４か所は竪穴住居１の柱穴を再利用し、北側に面したＰ９からＰ12の４か所は新しく造られていた。これらの柱穴の平面形は円形または楕円形に近い形態を呈し、Ｐ９の床面からの深さは46㎝になっていた。柱穴間の距離は200～370㎝を測り、Ｐ10とＰ11の間とＰ11とＰ12の間を狭くしていた。壁体溝と柱穴との間隔では、北東方向に位置するＰ９が80㎝と著しく狭くなっていた。中央穴は床面の中央より北側へ寄った地点に存在し、平面形が長径80㎝、短径70㎝の不整形な形態を呈し、部分的に２段掘りの状態になっていた。

この竪穴住居２から出土した遺物は少ないが、その形態的特徴や調整手法などから、弥生時代後期前葉の時期に属すると考えられる。

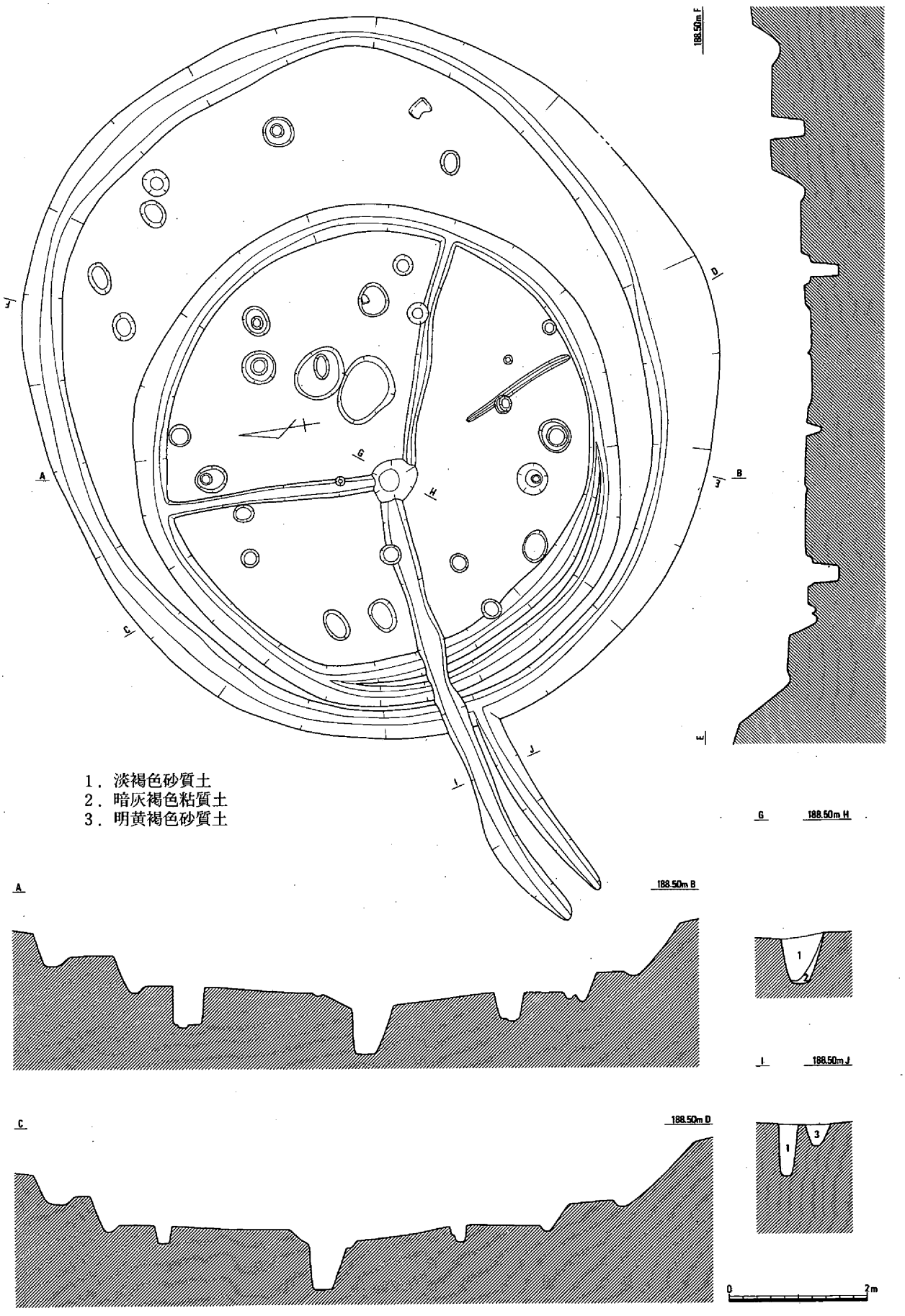
竪穴住居３（第６～８・11図、図版57）

１区の調査範囲の南端部分に検出した竪穴住居で、前述した竪穴住居１や竪穴住居２と重なり合っていた。土層断面を精査して竪穴住居の切り合い関係を検討したところ、新しく建て替えが行われるたびに竪穴住居そのものの規模が小さくなっているのを確認した。したがってこの竪穴住居３は、竪穴住居１や竪穴住居２よりも新しく、後述する竪穴住居４や竪穴住居５よりも古いことが判明している。

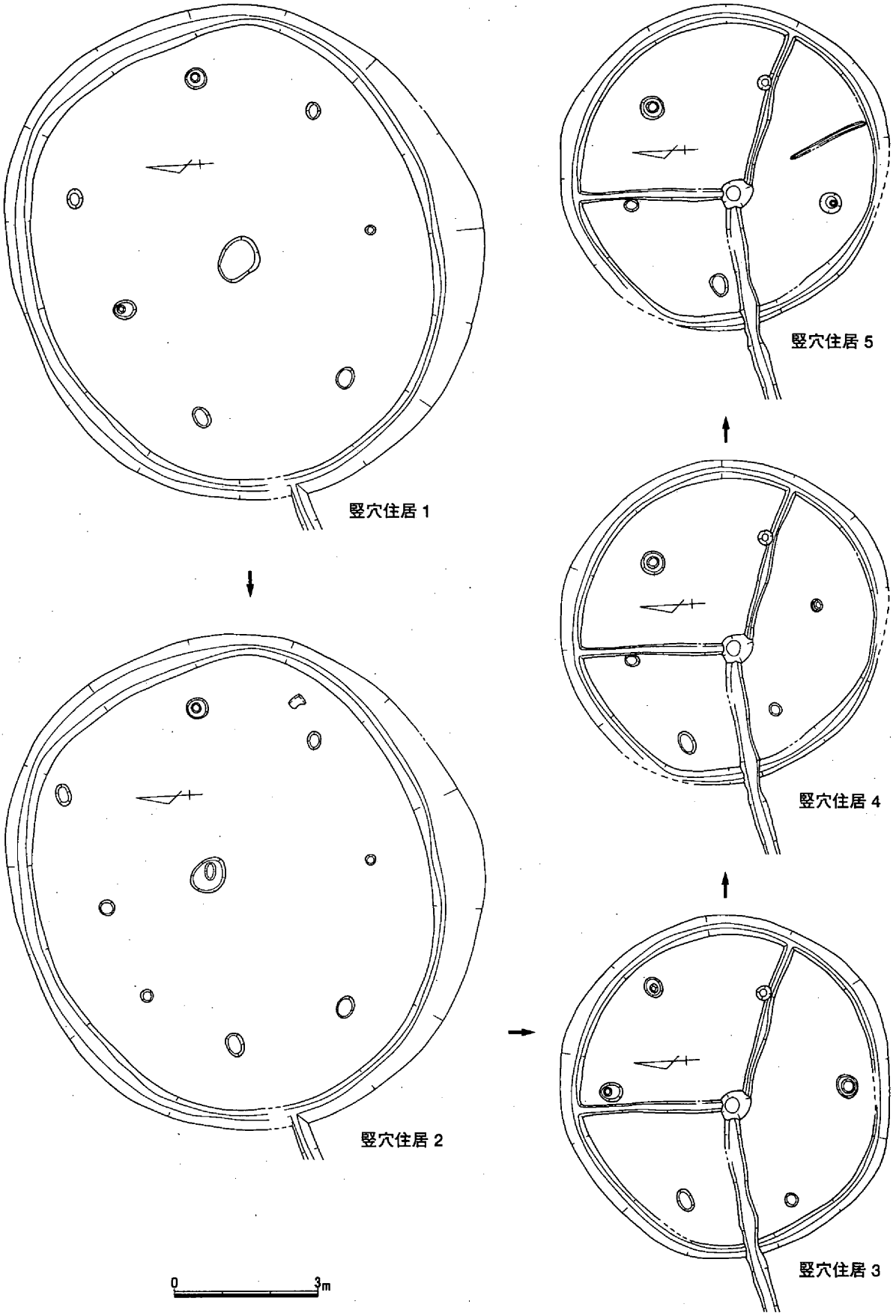
この竪穴住居の平面形は、長径7.30ｍ、短径7.10ｍの東西方向が長くて南北方向が短い楕円形に近い形態を呈し、柱構造は６本柱で、中央穴が存在した。床面には中央穴から延びる床溝が確認され、西方向の溝は外側の斜面まで続いていた。壁体の残存状況が最も良好だったのは北端部分で、床面から44㎝の高さになっていた。壁体溝の検出面での幅は25～53㎝を測り、床面から最も深い地点で12㎝であった。壁体溝の底部のレベルは地形の高い東側部分が地形の低い西側部分より10㎝も高く、底部の断面形は「Ｕ」字形を呈していた。６か所の柱穴の平面形は円形または楕円形に近い形態を呈し、３か所の柱穴の断面形が２段掘りになっていた。これらの柱穴の床面からの深さは34～62㎝を測り、Ｐ17が最も浅くてＰ14が最も深くなっていた。



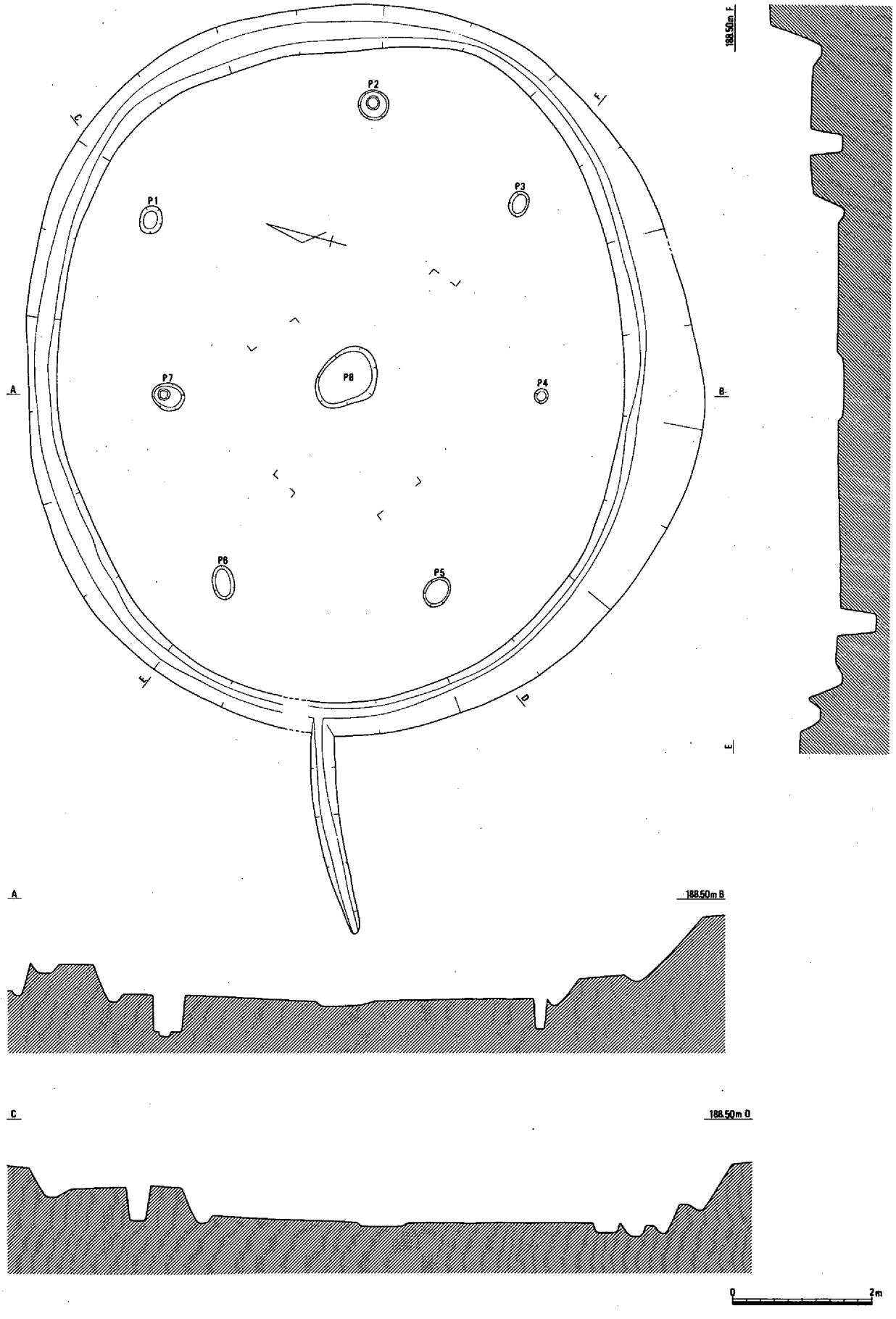
第６図　１区中央部分土層断面（1／100）



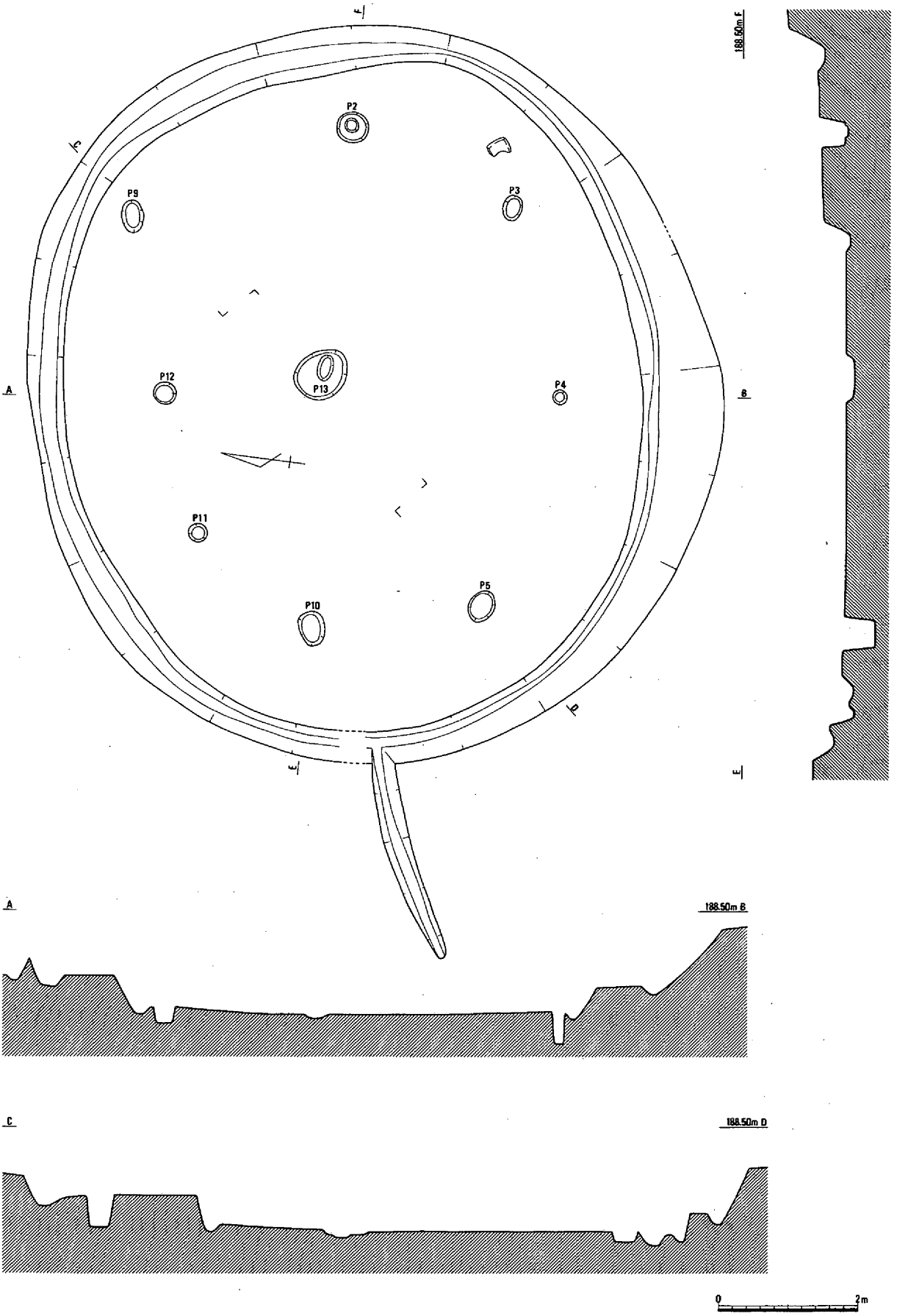
第７図　竪穴住居１～６（1／80）



第 8 図　竪穴住居 1 ～ 5 変遷図（1／120）



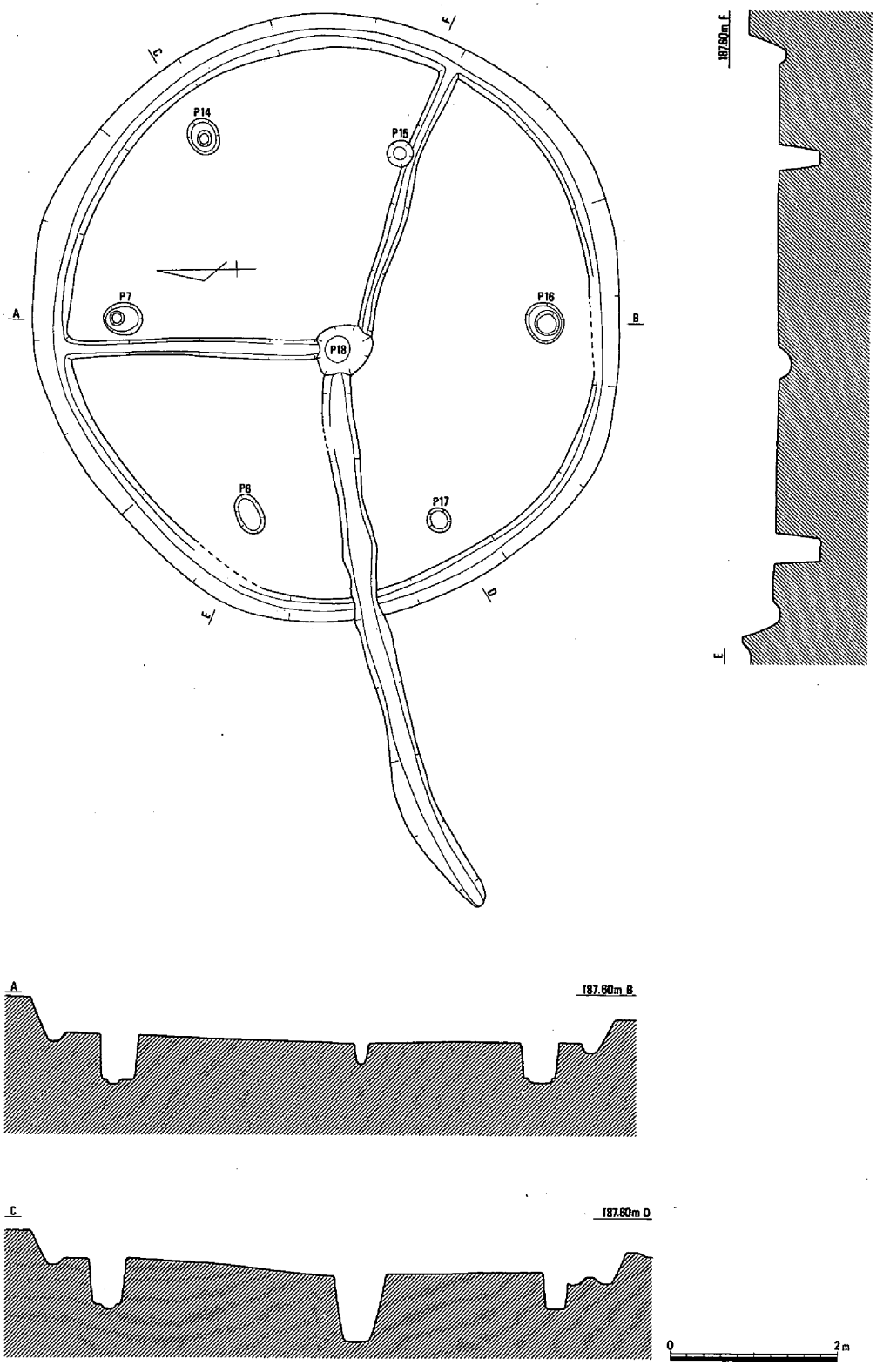
第９図　竪穴住居１（1／80）



第10図　竪穴住居２（1／80）

柱穴間の距離は230～280cmを測り、Ｐ17とＰ６の間が最も狭く、Ｐ６とＰ７の間を最も広くしていた。壁体溝と柱穴との間隔は50～120cmを測り、Ｐ17が最も狭くてＰ15が最も広くなっていた。中央穴は床面の中心部分よりやや西方向へ寄った地点に存在し、平面形は長径70cm、短径60cmの楕円形に近い形態を呈していた。床面からの深さは76cmもあって、いずれの床溝の底部よりもレベルが低く、断面形は「U」字形であった。床溝は中央穴から３方向に認められ、北および南東方向のものは壁体溝に到達していたが、西方向に延びる床溝は外側の斜面まで380cmも続き、中央穴に接する地点と斜面の先端部との底部の高低差は６cmであった。床溝の床面での幅は18～40cmで、西方向に延びるものが最も広くなっていた。

この竪穴住居から出土した遺物は少量の弥生土器片だけであるが、その形態的特徴や調整手法と竪穴住居そのものの遺構の切り合い関係から、竪穴住居３は弥生時代後期前葉の時期に属するであろう。



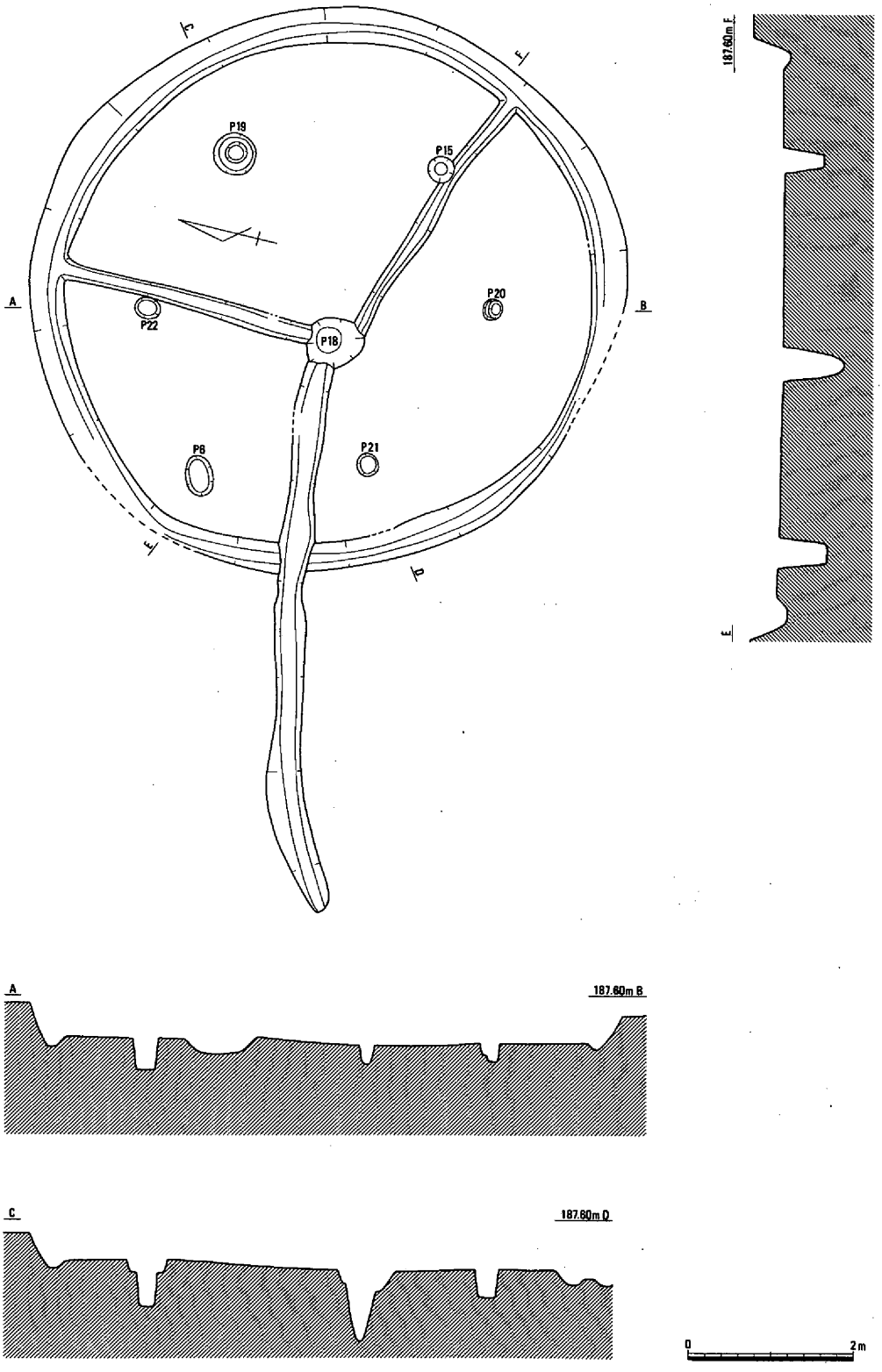
第11図　竪穴住居３（1／80）

竪穴住居４（第６～８・12図、図版57）

この竪穴住居は、前述した竪穴住居３の建て替えによるものである。

平面形は長径7.00ｍ、短径6.80ｍの楕円形に近い形態を呈し、柱構造は６本柱で、中央穴や床溝が存在した。柱穴間の距離は180～240㎝を測り、Ｐ15とＰ20の間が最も狭くなっていた。壁体溝と柱穴との間隔は80～120㎝で、Ｐ15とＰ20を最も広くしていた。この竪穴住居の柱穴のうちＰ15とＰ22は、中央穴と壁体溝とを結ぶ床溝に接する状態で存在していた。中央穴と床溝は、前述した竪穴住居３のものをそのまま踏襲して使用していた。

この竪穴住居から出土した遺物は、いずれも弥生土器片ばかりであるが、器形が確認できるものは極めて少ない。その形態的特徴や調整手法と竪穴住居そのものの遺構の切り合い関係から判断すると、竪穴住居４は弥生時代後期前葉でも後期中葉に近い時期に属すると思われる。



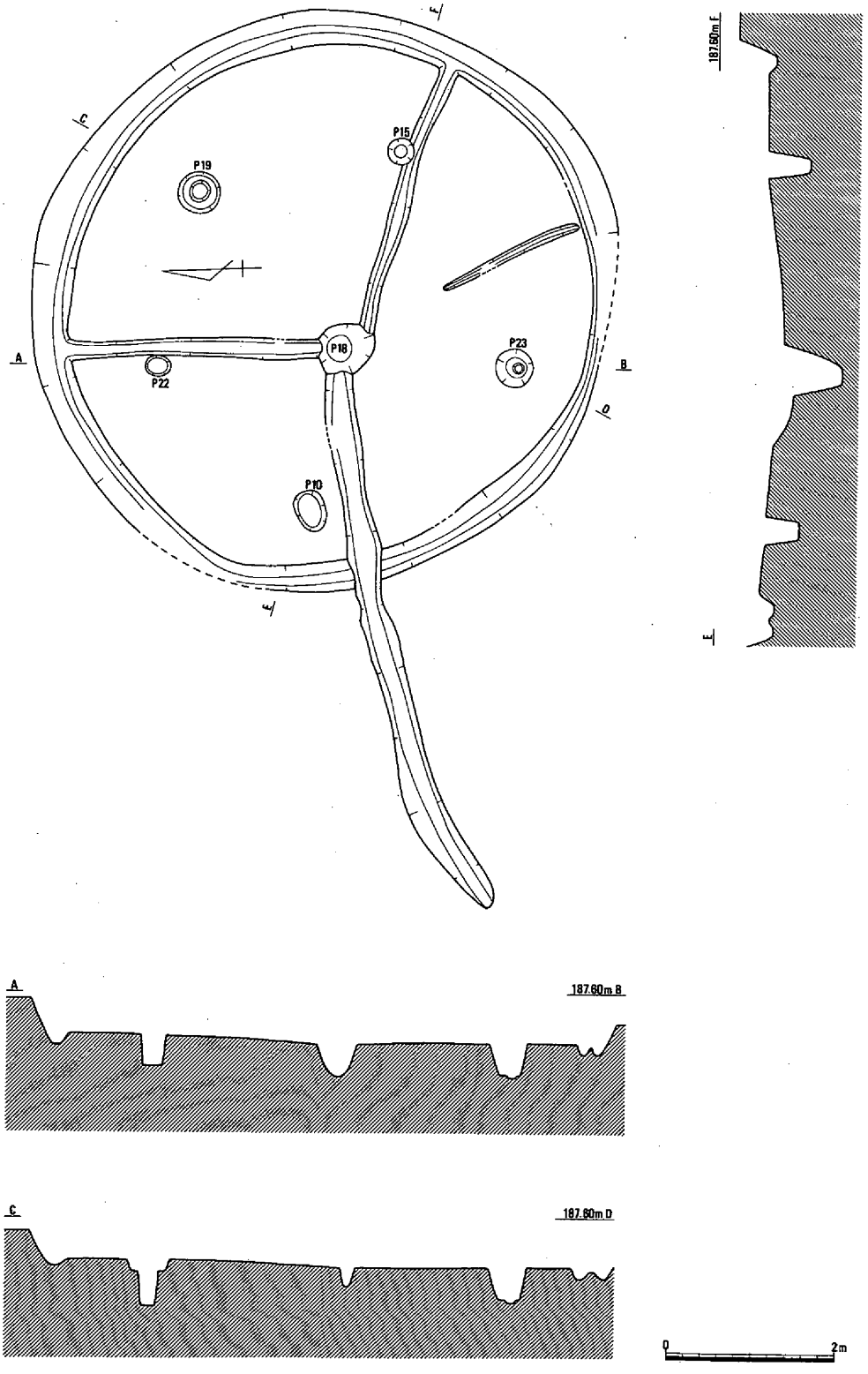
第12図　竪穴住居４（1／80）

竪穴住居５（第６～８・13図、図版57）

１区の調査範囲の南端部分に検出した竪穴住居で、前述した竪穴住居３や竪穴住居４と重なり合っていた。土層断面を観察した結果、この竪穴住居５が竪穴住居３や竪穴住居４よりも新しいことが判明し、平面的には検出できなかった別の竪穴住居（竪穴住居６）が存在することも確認された。

平面形は楕円形に近い形態を呈し、壁体溝や中央穴は前述した竪穴住居４のものをそのまま利用していた。この竪穴住居の柱構造は５本柱で、その柱穴の平面形は円形または楕円形を呈していた。柱穴間の距離は220～300㎝で、北方向に面したＰ19とＰ22の間が最も狭くなっていた。南東方向の床面には、直線的に180㎝の長さに延びる幅の狭い床溝が新しく存在した。

この竪穴住居から出土した遺物は存在しないが、竪穴住居の切り合い関係などから、竪穴住居５は弥生時代後期中葉の時期に属するのではなかろうか。



第13図　竪穴住居５（1／80）

竪穴住居６（第６図）

この竪穴住居は、１区の南端部分に設定した土層断面観察用の畦によってその存在を確認したもので、前述した竪穴住居５よりも新しいことが判明している。

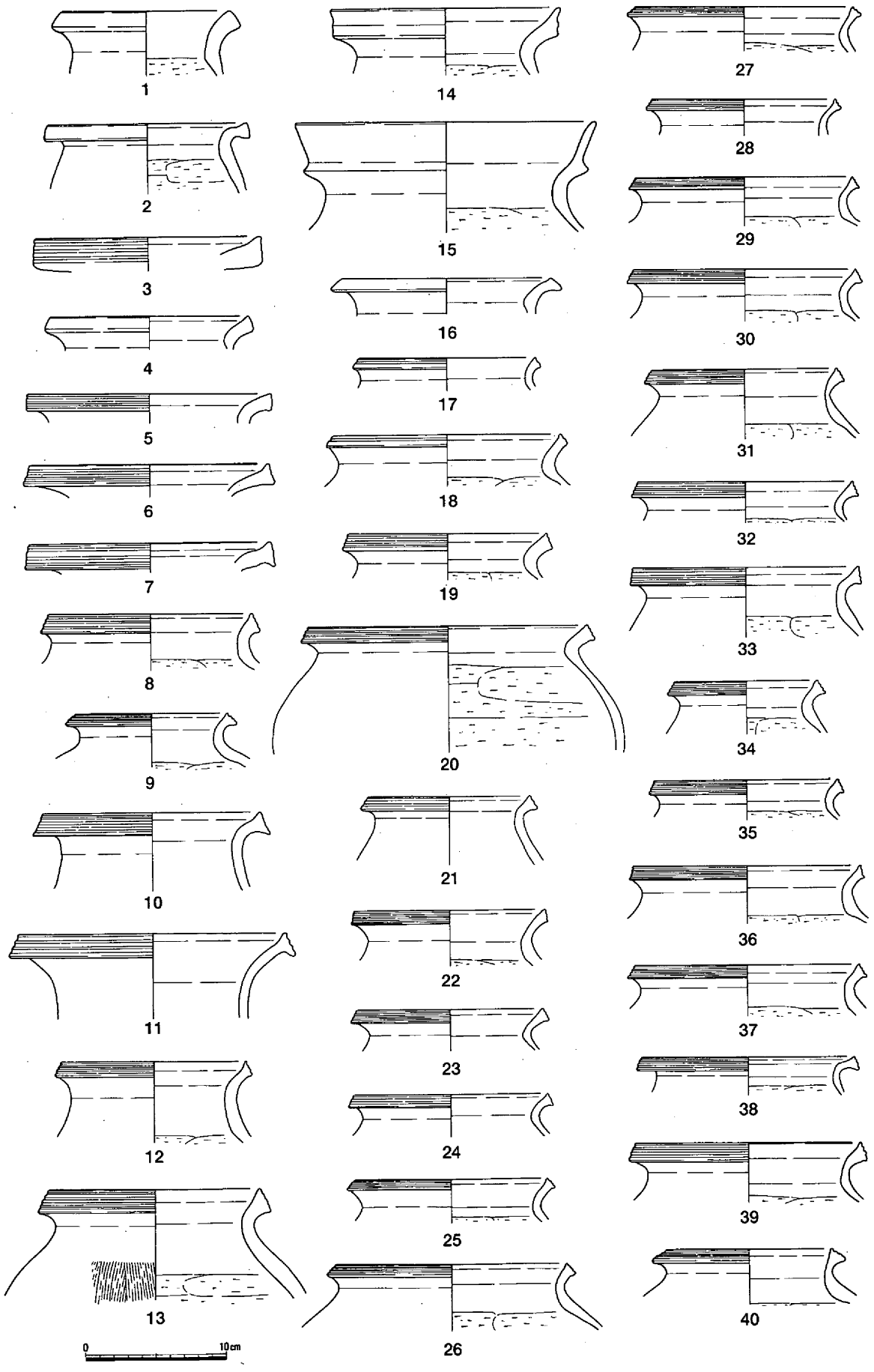
土層断面を見ながら、平面的に竪穴住居全体の確認作業を試みたが、ぼんやりと色調の異なる土砂が存在するものの、輪郭を把握することはできなかった。

土層断面によると、竪穴住居そのものの大きさは6.80ｍを測り、床面の海抜高は187.50ｍで、ほぼ水平になっていた。壁体溝の幅は30～35㎝となり、内部には淡褐色粘質土が堆積し、底部の断面形は「Ｕ」字形を呈していた。壁体溝の床面からの深さは15～20㎝を測り、比較的深いと思われた。

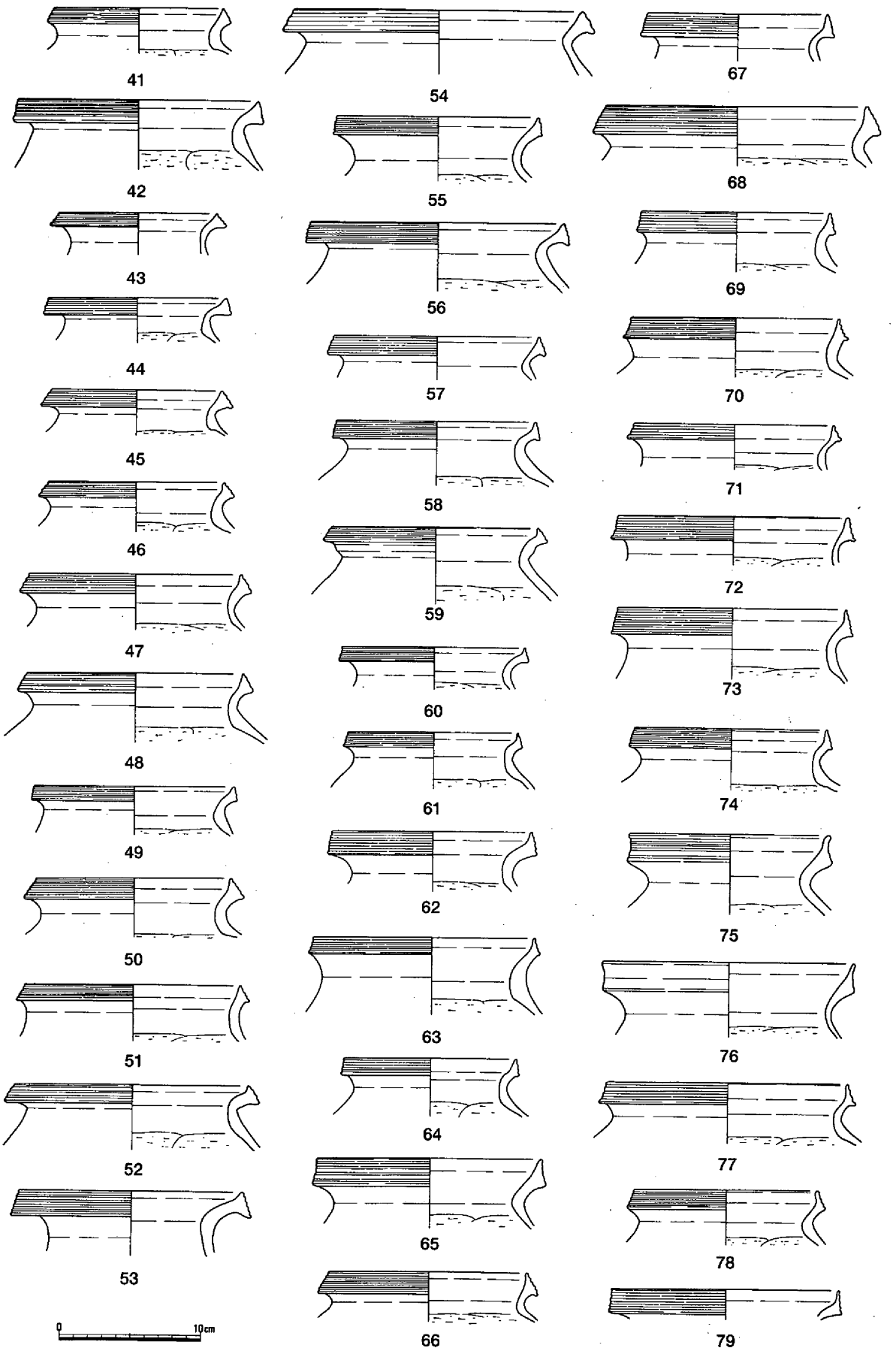
この竪穴住居は、断面形が確認されただけであるから出土遺物はないが、同じ場所に６軒の竪穴住居が重複して存在した中で最後に造られた竪穴住居であるから、弥生時代後期後葉の新しい時期に属すると推定される。

１区の調査範囲の南端部分には、竪穴住居１から竪穴住居６までの６軒の竪穴住居が重なり合って存在していたこともあって、比較的多くの遺物が出土した。ところが、これらの遺物がどの竪穴住居に伴うものなのか、確実に把握できたものは極めて少ない状態であるから、竪穴住居１～６出土遺物として一括で提示することにした。

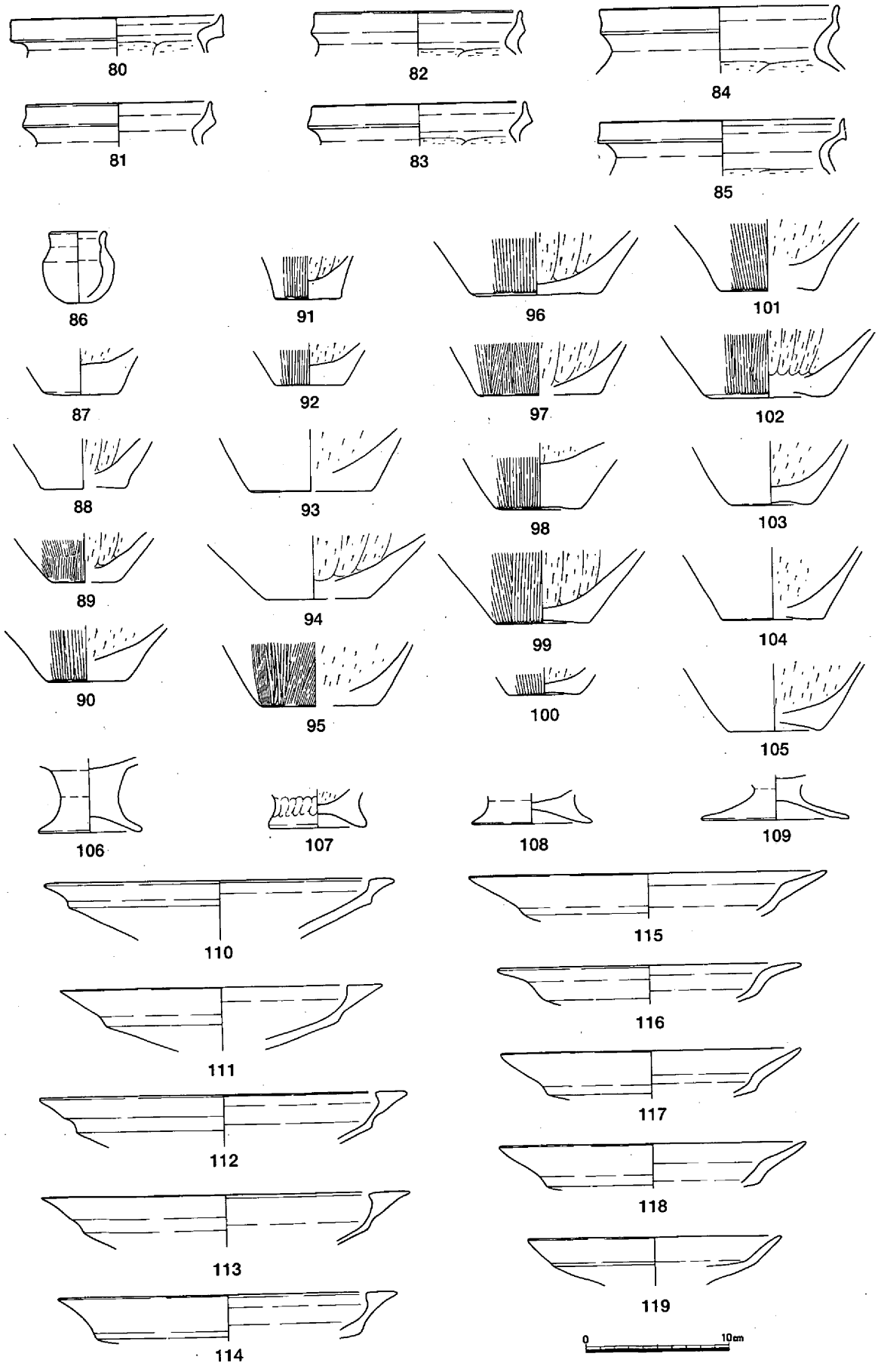
１～13の口縁部破片は、比較的器壁が厚いものが多く、壺形土器の器形になると思われる。斜め上方へ立ち上がった口縁部の外面に、凹線を有するもの（**３・５～13**）とヨコナデを行っているだけで凹線が認められないもの（**１・２・４**）とがある。また口縁端部が斜め上下に拡張しているもの（**６～13**）が多いが、ほとんど拡張しないもの（**１～５**）も存在する。**10**と**11**は口径に比して器壁が比較的薄いもので、長頸壺の器形になると考える。この２点の土器片は、緩やかに外湾して斜め上方へ立ち上がった口縁の端部は斜め上下に拡張し、外側に数条の凹線を有する面が認められる。**１～13**のすべての土器片が、口縁部から頸部にかけて内外面ともヨコナデを行い、内面の胴部上位には横方向のヘラケズリを施している。外面の胴部は縦または横方向のナデを行っているものが多いが、縦方向のハケメが認められるもの（**13**）も存在する。**14**の器壁の厚い土器片は、斜め上方へ立ち上がった口縁の端部が上方へ著しく拡張し、外側に幅の広い２条の凹線を有する面が認められる。口縁部から頸部にかけては内外面ともヨコナデを行い、内面の胴部上位は横方向のヘラケズリを施している。**15**の複合口縁を有する土器片は、口縁部が斜め上方へ高く立ち上がり、端部を丸く仕上げている。頸部の器壁は厚くなって「く」字状に外湾するが、胴部の器壁は薄くなっているようである。この土器片も、口縁部から頸部にかけては内外面ともヨコナデを行い、内面の胴部上位は横方向のヘラケズリを施している。**16**の口縁部破片は、端部が肥厚しなくて外面に凹線が存在しないもので、内外面ともヨコナデを行っている。**17～79**の壺形土器または甕形土器の破片は、斜め上方へ立ち上がった口縁端部の外面に凹線が認められる。口縁部から頸部にかけてはいずれも内外面とも全体にヨコナデを行い、内面の胴部上位は横方向のヘラケズリを施している。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成はいずれも良好で、橙色またはにぶい橙色を呈するものが多い。**80～85**の甕形土器は、外反または外湾して斜め上方へ立ち上がった口縁の端部が上方へ立ち上がり、外面にはヨコナデを行っているだけで凹線は認められない。口縁部から頸部にかけては前述した土器片と同様に内外面ともヨコナデを行い、内面の胴部上位は横方向のヘラケズリを施している。**86**の小型の壺形土器は、口径4.0㎝、器高5.0㎝、底径2.0㎝を測る。胴部から頸部にかけては器壁が厚く、緩やかに内湾して立ち上がる。



第14図　竪穴住居１～６出土遺物（1）（1／4）



第15図　竪穴住居１～６出土遺物（2）（1／4）

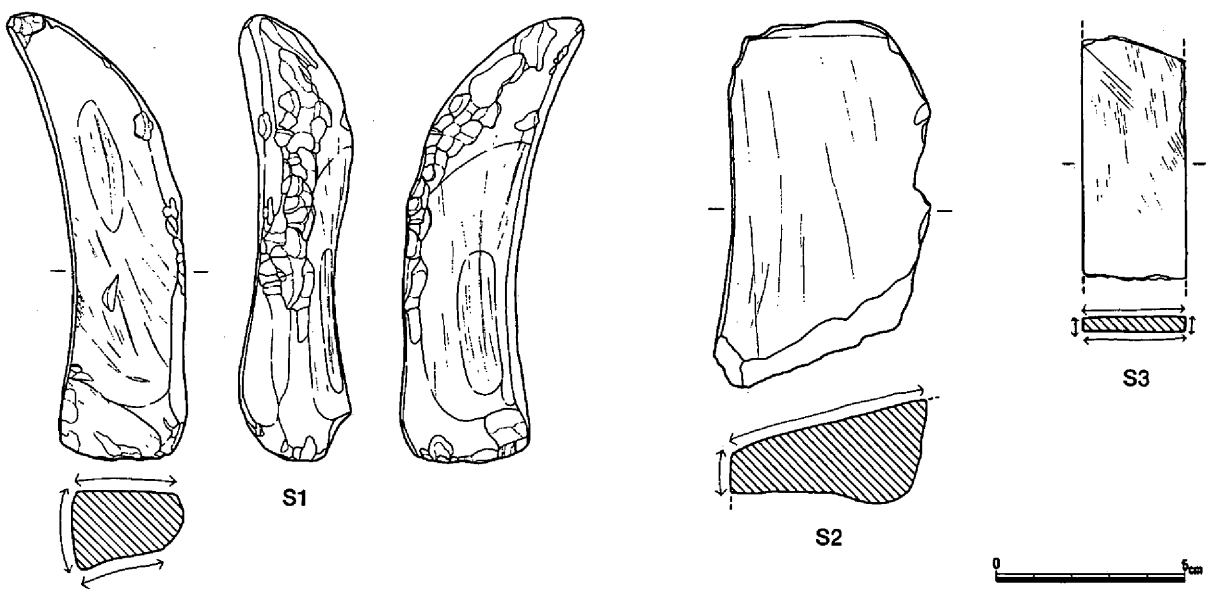


第16図　竪穴住居１～６出土遺物（3）（1／4）

頸部の器壁は薄くなってくびれた状態を呈し、口縁部は短く外反して端部を丸く仕上げている。器表面が磨滅して調整手法の把握が困難であるが、外面の上位と内面全体はヨコナデを行い、外面の下位は縦方向のナデを施しているようである。87～105の破片は、壺形土器または甕形土器の底部である。いずれも平底であるが、上げ底の状態を呈するもの（98～105）もある。内面はいずれも縦方向の粗いヘラケズリを施しているが、外面は縦方向のナデを行っているものと縦方向のヘラミガキ痕跡が認められるもの以外に、縦方向のハケメとヘラミガキ痕跡が混在するもの（95）や縦方向のハケメだけが認められるもの（97）が存在する。106～108の３点は、壺形土器、甕形土器、鉢形土器のいずれかの器形を呈する土器の脚または台と思われる。外面に指頭圧痕が残存するもの（107）があるが、外面はいずれもヨコナデを行っている。109は高杯形土器の脚部破片であるが、短脚で「ハ」字状に開いた端部を丸く仕上げている。110～119の破片は、高杯形土器の杯部である。斜め上方へ立ち上がった口縁の端部が肥厚して面を有するもの（110～114）と端部が肥厚せずに丸く仕上げているもの（115～119）とが存在するが、いずれも内外面とも全体にヨコナデを行っている。

これらの土器片は、弥生時代後期前葉の時期に属するものが圧倒的に多いと思われるが、壺形土器または甕形土器の口縁部で端部が拡張しなくて外面に凹線が認められないもの（１～５・16）は、弥生時代後期前葉でも初頭の古い時期に属するであろう。そして口縁端部が上方へ拡張するようになると、時期が新しくなるようである。弥生時代後期前葉以外の新しい時期に属すると考えられる土器片を抽出すれば、14・80～85・115～118は弥生時代後期中葉の時期に、15・109・119は弥生時代後期後葉の時期にそれぞれ属すると思われる。

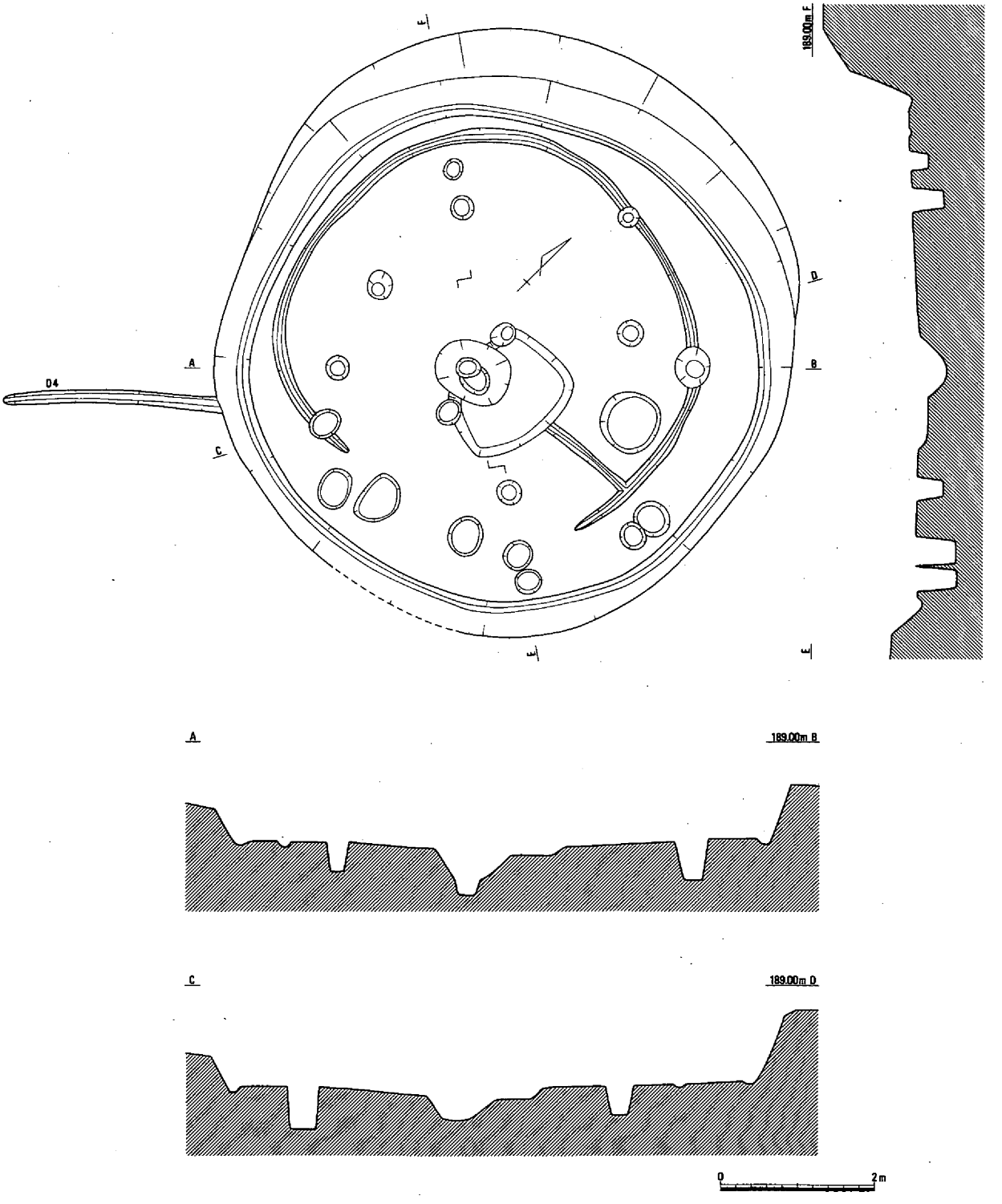
竪穴住居１～６の地点から出土した石器として、３点を採集している。Ｓ１は頁岩製の敲打石で、長さ11.7cm、幅4.8cm、厚さ3.0cm、重さ146.2ｇを測る。この敲打石は、砥石として使われていたものを転用したと推定され、先端や側面の部分に使用痕が認められる。Ｓ２は流紋岩製の砥石である。長さ9.7cm、幅5.7cm、厚さ3.2cm、重さ188.2ｇを測る欠損品で、欠損した後に逆向きに使用している。Ｓ３も流紋岩製の砥石であるが、長さ6.5cm、幅2.7cm、厚さ0.5cm、重さ16.6ｇを測る板状を呈したもので、両端を欠損している。



第17図　竪穴住居１～６出土遺物（4）（1／4）

竪穴住居７（第18～20図、図版57）

１区の調査範囲の中央より南方向へ寄った地点に検出した竪穴住居で、南側には竪穴住居１や竪穴住居２が存在し、北側には竪穴住居９や土壙１が確認されている。この竪穴住居は、後述する竪穴住居８の床面を精査していて壁体溝や柱穴を検出したもので、竪穴住居８よりも古い時期に造られた遺構であることが判明している。



第18図　竪穴住居７・８、溝４（1／80）

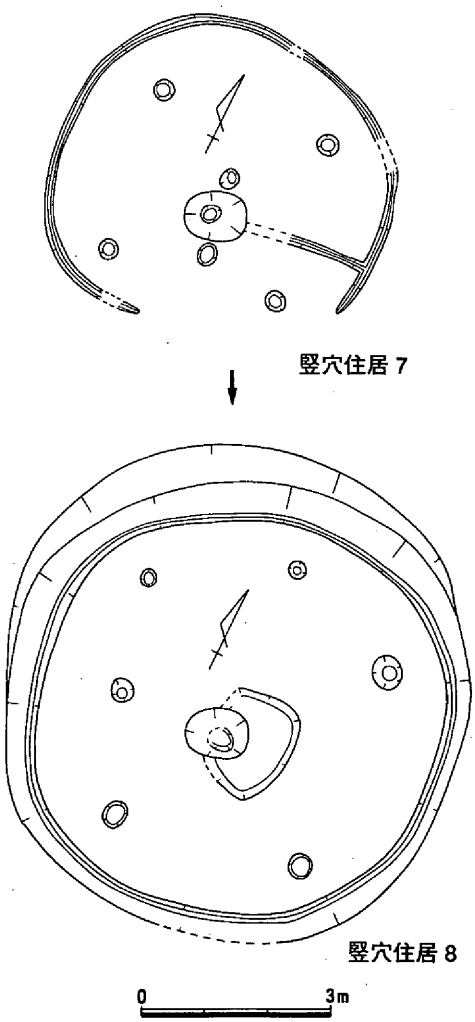
平面形は径5.40ｍの円形に近い形態を呈し、柱構造は４本柱で、中央穴や床溝が存在した。この竪穴住居は、上面を竪穴住居８に削平されていたので、壁体の立ち上がりは残存しなかった。壁体溝の検出面での最大幅は38㎝を測り、床面から最も深い地点が３㎝で、断面形は浅い「Ｕ」字形を呈していた。４か所の柱穴の平面形は円形または楕円形に近い形態を呈し、ほぼ同じ大きさになっていた。柱穴間の距離は260～280㎝を測り、東方向に面したＰ２とＰ３の間を最も狭くしていた。Ｐ３の地点を除く壁体溝と柱穴との間隔は、Ｐ１が90㎝で最も広く、Ｐ４が70㎝で最も狭くなっていた。柱穴の検出面からの深さは38～40㎝を測り、断面形は「Ｕ」字形を呈していた。なおこの竪穴住居には、中央穴を狭んで130㎝の距離を測る２か所の柱穴（Ｐ６とＰ７）を検出した。平面形はどちらも楕円形に近い形態を呈し、検出面からの深さは32㎝と36㎝になっていた。床溝は中央穴から東方向へ直線的に延びており、Ｐ２とＰ３の柱穴の間を抜けて壁体溝に到達していた。床溝の検出面での幅は８～16㎝を測り、最も深い地点が３㎝で、断面形は「Ｕ」字形を呈していた。中央穴は床面の中央より南方向へ寄った位置に存在し、平面形は長辺100㎝、短辺80㎝の隅丸長方形に近い形態になっていた。中央穴の検出面からの深さは60㎝を測り、断面形が２段掘りの状態を呈していた。

この竪穴住居は、上面全体が竪穴住居８に削平されていたので出土遺物は存在しないが、弥生時代後期前葉でも初頭の時期よりも古く遡ることはないと考えられた。

竪穴住居８（第18・19・21図、図版57）

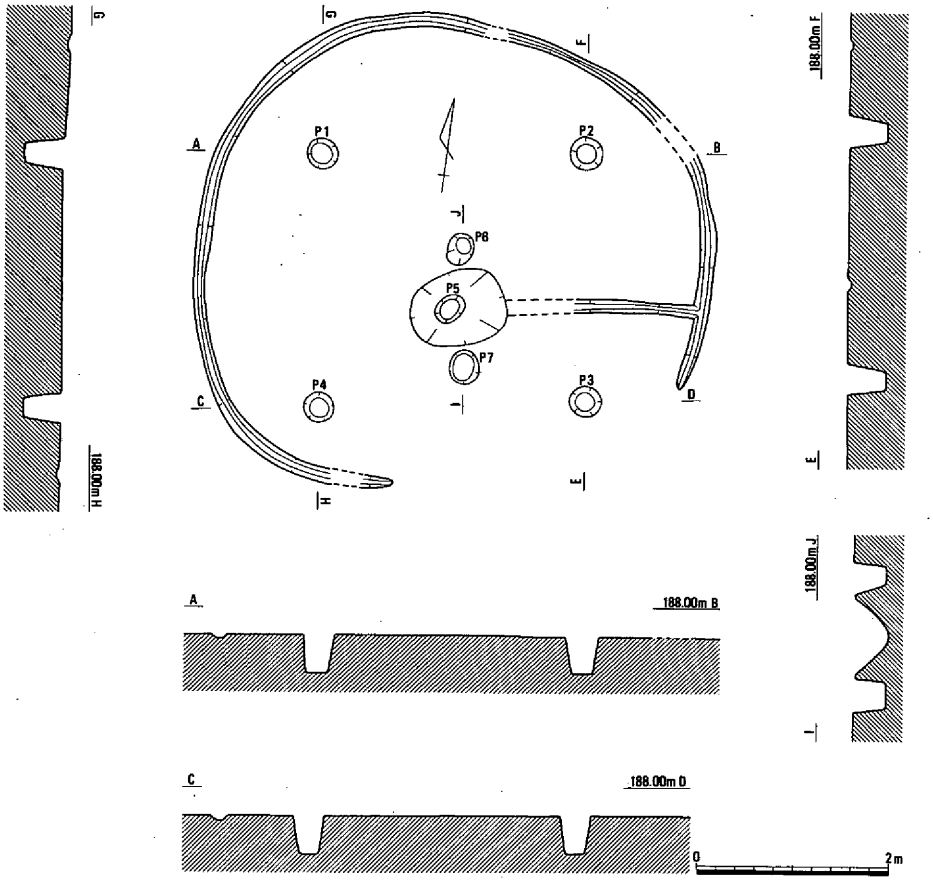
この竪穴住居は、前述した竪穴住居７を拡張して建て替えられたもので、全体の規模が大きくなって柱構造も４本柱から６本柱に変化していた。

平面形は長径7.80ｍ、短径7.20ｍの楕円形に近い形態を呈し、柱構造は６本柱で、中央穴が存在した。地形の高い北方向から北西方向のかけての壁体は、２段掘りのような状態になって段を有し、床面から最も高い地点は96㎝であった。壁体溝の検出面での幅は35～70㎝で、床面から最も深い地点は７㎝を測り、底部の形態は「Ｕ」字形を呈していた。６か所の柱穴の平面形は円形または楕円形を呈し、北方向に位置するＰ９の規模が最も小さく、長径27㎝、短径25㎝になって床面からの深さは40㎝であった。規模が最も大きいものは北東方向に位置するＰ10で、長径52㎝、短径43㎝になって床面からの深さは54㎝であった。柱穴間の距離は190～330㎝を測り、Ｐ10とＰ11との間が最も広く、Ｐ12とＰ13の間とＰ８とＰ13の間を最も狭くしていた。西方向に位置する３か所の柱穴は、ほぼ直線的に並んで柱穴間の距離が190㎝と狭くなっていた。壁体溝と柱穴との間隔は70～140㎝で、Ｐ９とＰ11とが70㎝で最も狭く、Ｐ13が140㎝で最も広くしていた。中央穴は床面の中央よりやや西方向へ寄った位置に存在し、平面形は長辺100㎝、短辺80㎝の隅丸長方



第19図　竪穴住居７・８変遷図（1／120）

形に近い形態を呈していた。中央穴の床面からの深さは36㎝で、中心部分が２段掘りの状態になっていた。この中央穴の東側の部分には、平面形が長辺160㎝、短辺105㎝の隅丸長方形を呈して10～15㎝の深さに窪んでいるのが認められた。



第20図　竪穴住居７（1／80）

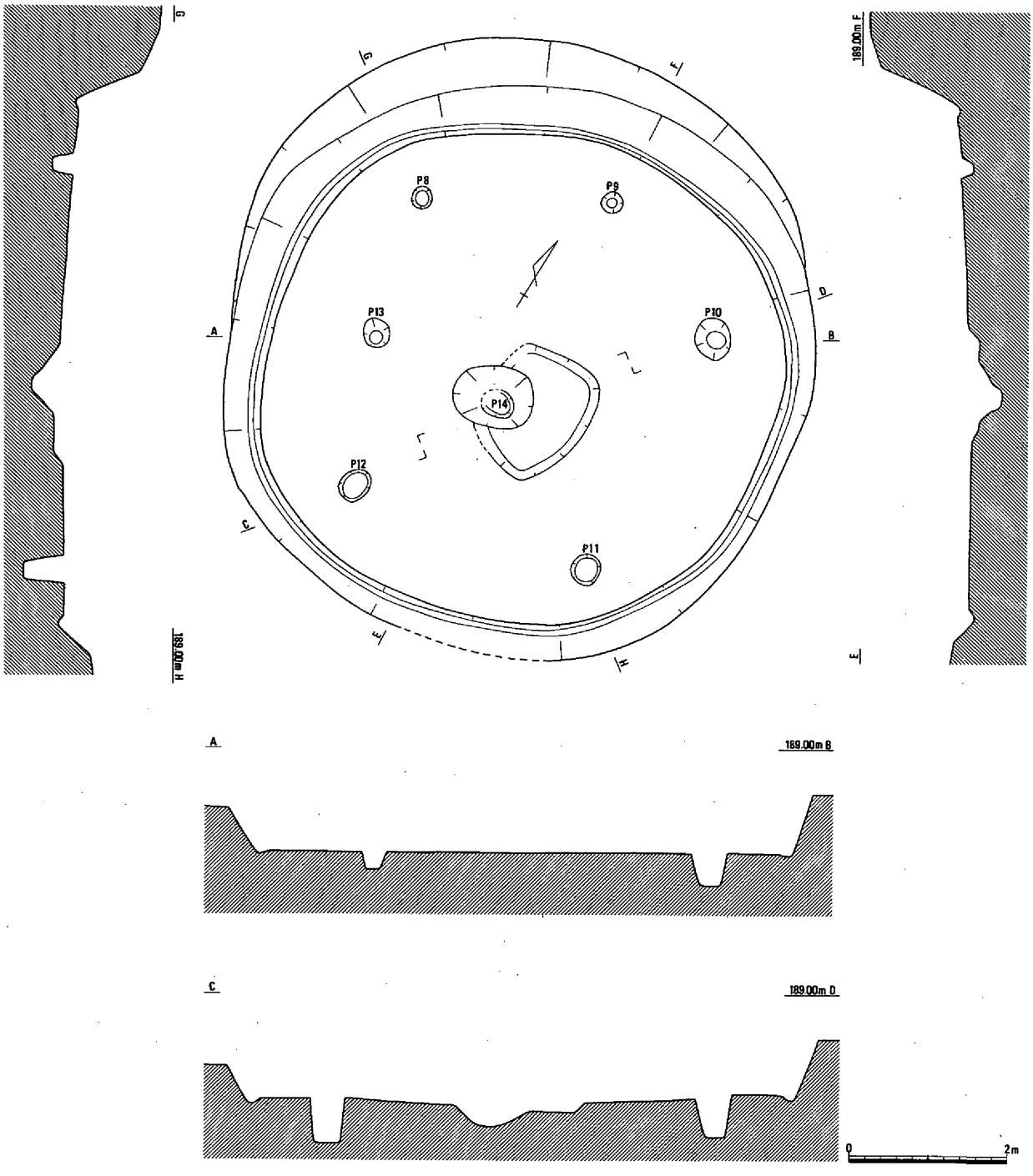
竪穴住居７と竪穴住居８が重なり合っていた地点から出土した遺物として、３点の弥生土器片を図示することができた。

120の甕形土器は、推定口径15.4㎝になっている。器壁の厚い胴部は緩やかに内湾して立ち上がり、頸部で「く」字状に短く外反し、口縁部に移行する。口縁部の器壁は胴部よりも薄くなり、端部が斜め上下に拡張して外側に凹線を有する面が認められる。口縁部から頸部にかけては内外面ともヨコナデを行い、内面の胴部上位は横方向のヘラケズリを施している。外面の胴部は器表面が磨滅して調整手法が不明であるが、上位はヨコナデを行っているようである。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は極めて良好で、全体ににぶい橙色を呈している。**121**の高杯形土器の杯部は、推定口径22.7㎝になっている。斜め上方へ直線的に立ち上がった杯部の器壁は、中位で屈曲して口縁端部へ移行する。口縁端部は横方向へ拡張して器壁が厚くなり、上方に面が認められる。内外面とも全体にヨコナデを行い、焼成は良好で、浅黄橙色を呈している。**122**の壺形土器とも甕形土器とも断定できないものは、推定口径17.5㎝になっている。胴部から口縁部にかけて緩やかに外湾して斜め上方へ立ち上がり、口縁端部の器壁は上方へ肥厚し、外側に３条の凹線を有する面が認められる。胴部の器壁は口縁部や頸部よりも薄くなり、内湾して頸部に移行している。口縁部から頸部にかけては、内外面とも全体にヨコナデを行っている。胴部上位の内面は横方向のヘラケズリを施しているが、外面は全体にヨコナデを行っている。胎土中には細かい砂粒を比較的多く含み、焼成は全体に良好で、橙色を呈している。

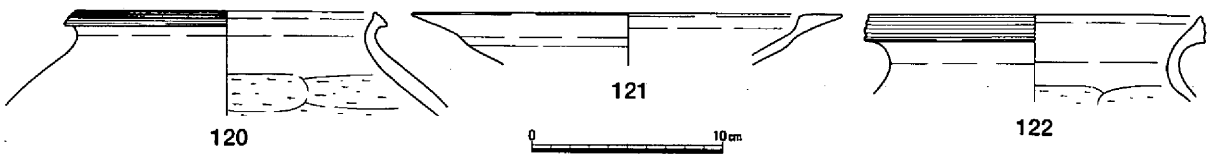
これらの土器片の形態的特徴や調整手法から推定すれば、３点の土器片とも弥生時代後期前葉の時期に属すると思われるが、**122**の壺形土器とも甕形土器とも断定できないものは、口縁部が緩やかに外湾して斜め上方へ立ち上がり、端部が上方へ著しく肥厚しているから、**120**の甕形土器や**121**の高杯形土器よりもやや新しい時期に属するのではなかろうか。

竪穴住居９（第23図、図版59－１）

１区の調査範囲の中央部よりやや南東方向へ寄った地点に検出した小型の竪穴住居で、南西方向の近接した位置には前述した竪穴住居７や竪穴住居８が重なり合って存在し、西方向の近接した位置に



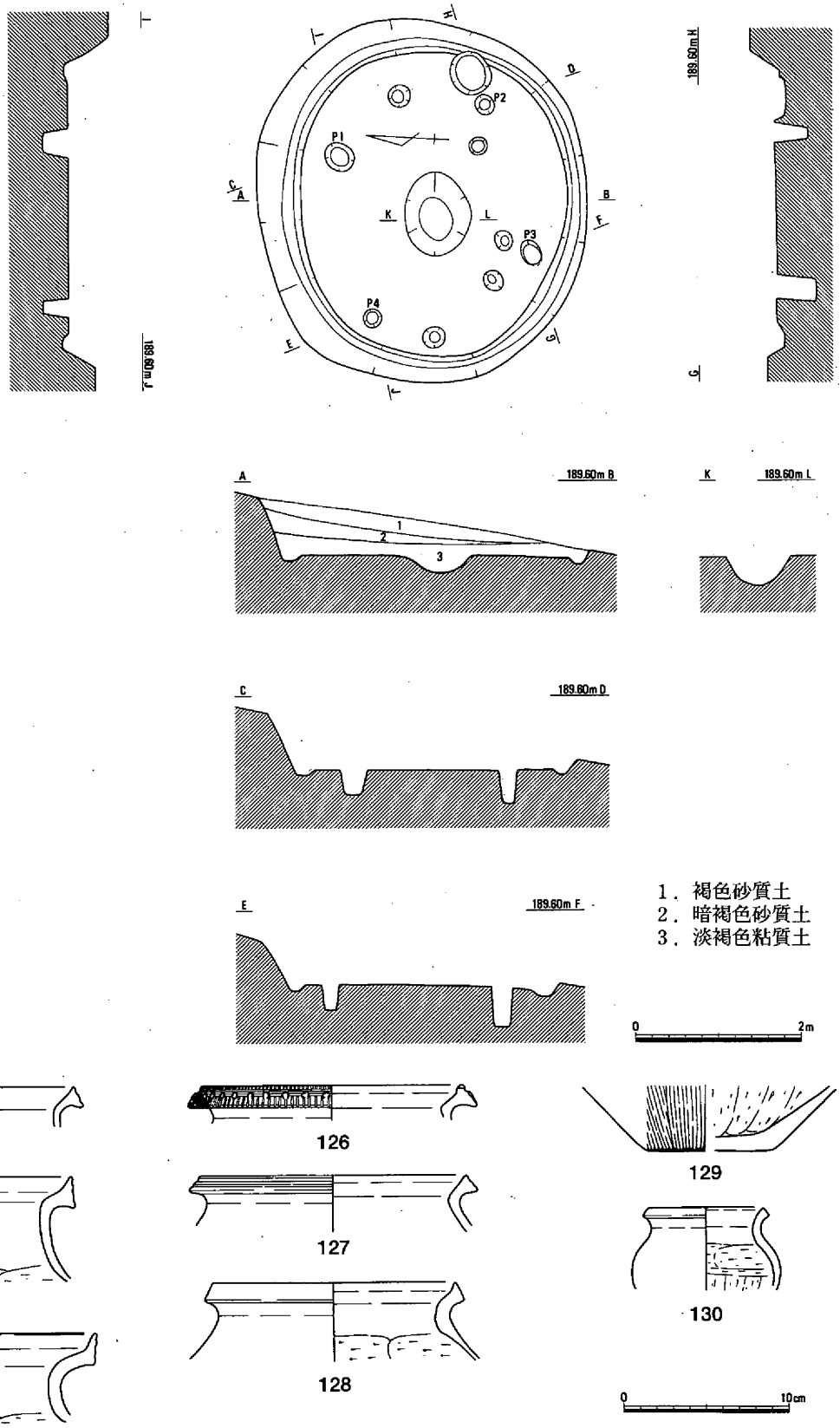
第21図　竪穴住居８（1／80）



第22図　竪穴住居７・８出土遺物（1／4）

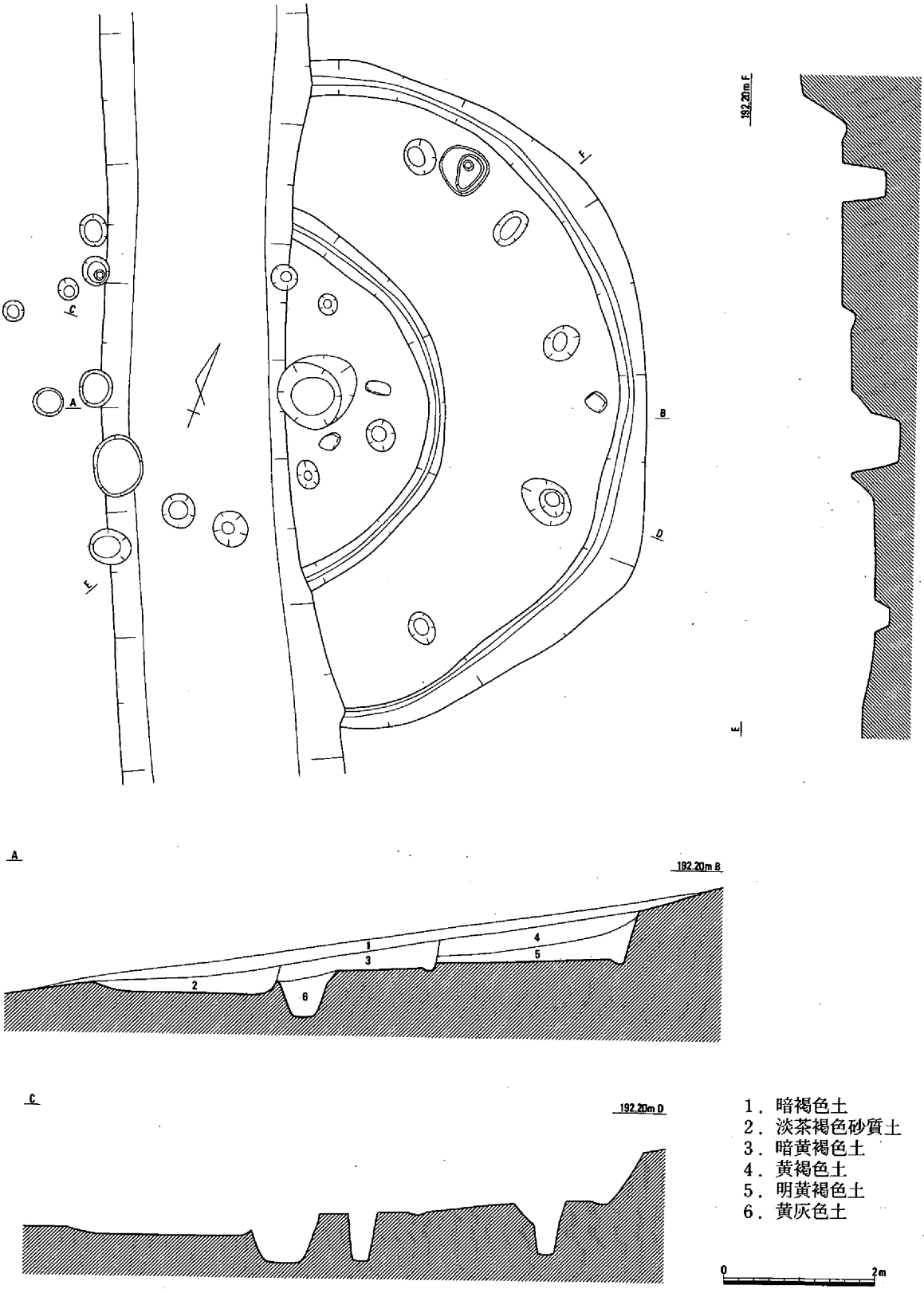
は貯蔵穴と推定される土壙１が確認されている。

平面形は長径4.50ｍ、短径3.95ｍの楕円形に近い形態を呈し、東西方向が長くて南北方向を短くしていた。この竪穴住居は規模が小さいこともあって柱構造は４本柱で、壁体溝や中央穴が存在した。壁体の残存状態が良好なのは北方向に面した地点で、床面からの高さが67㎝であった。壁体溝の検出面での幅は23～60㎝を測り、床面からの深さは５～10㎝となっていた。壁体溝の底部の断面形は、全体に「U」字形を呈していた。この竪穴住居の上屋を支える４か所の柱穴の平面形はいずれも楕円形に近い形態を呈し、床面からの深さは30～47



第23図　竪穴住居９（1／80）・出土遺物（1／4）

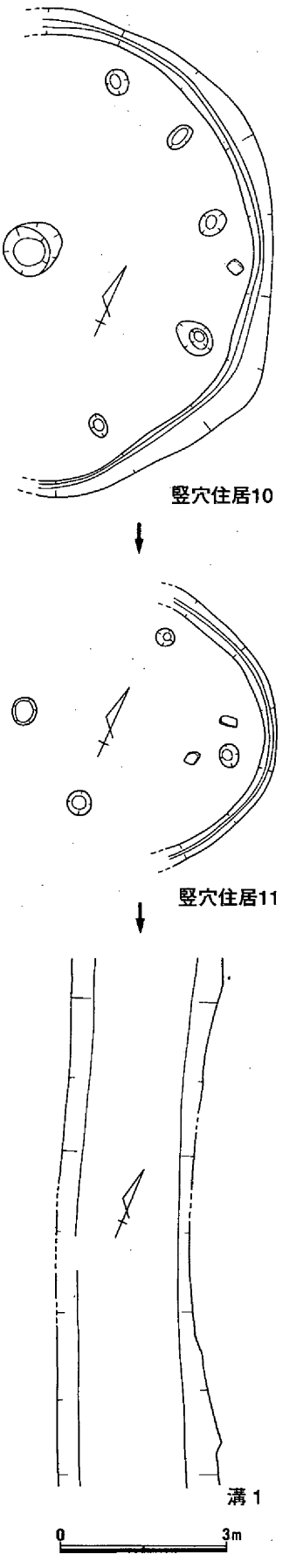
cmを測り、断面形は「U」字形になっていた。柱穴間の距離は185～210cmで、Ｐ１とＰ２の間が最も狭く、Ｐ３とＰ４との間を最も広くしていた。壁体溝と柱穴との間隔は25～60cmを測り、Ｐ４が壁体溝に最も近い位置になっていた。南西方向に位置するＰ３は、床面から底部までの深さが48cmであっ



第24図　竪穴住居10・11、溝１（1／80）

たが、壁体溝の方向に面した壁面の断面形が袋状を呈していた。なおこの竪穴住居の床面には柱穴以外の浅い穴も存在したが、内部に堆積していた土砂が柱穴のものとは異なっていた。中央穴は床面のほぼ中央部に位置し、平面形が長径100㎝、短径78㎝の楕円形に近い形態を呈していた。床面からの深さは38㎝を測り、断面形は「U」字形になっていた。竪穴住居内の土層断面によると、床面上の覆土である淡褐色粘質土の上面に周辺から流入した暗褐色砂質土と褐色砂質土が堆積し、床面に近い部分から弥生土器片が出土した。

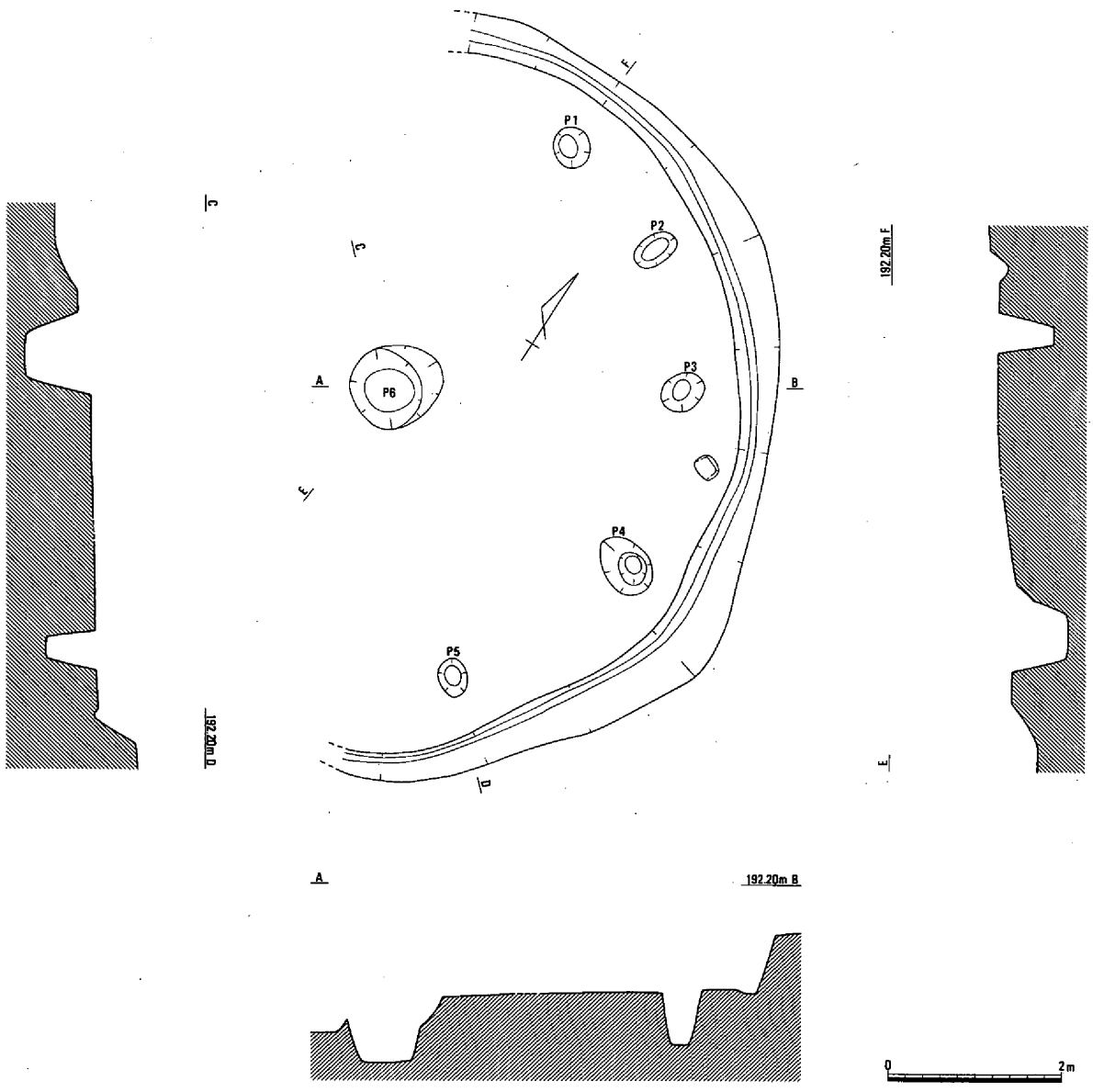
123の壺形土器は、器壁の薄い頸部がほぼ垂直に立ち上がり、口縁部は斜め上方へ外反している。口縁の端部は斜め上下に拡張し、外側に２条の凹線を有する面が認められる。内外面とも全体にヨコナデを行い、焼成は良好で、にぶい橙色を呈している。**124**も壺形土器であるが、胴部上位から口縁端部まで観察することが可能である。内湾して立ち上がった胴部の器壁は薄く、頸部は外湾して口縁部に移行している。頸部で「く」字状に短く外反した口縁部の器壁は厚く、端部は上下に拡張して外側に３条の凹線を有する面が認められる。口縁部から頸部にかけては内外面ともヨコナデを行い、内面の胴部上位は横方向の粗いヘラケズリを施している。胎土中には比較的大きな砂粒を多く含み、焼成は良好で、全体ににぶい黄橙色を呈している。**125**の壺形土器は、頸部から口縁部にかけて緩やかに外湾して斜め上方へ長く張り出し、口縁の端部はさらに上方へ著しく拡張している。口縁端部の器壁は薄くなって丸く仕上げ、外側に３条の凹線を有する面が認められる。口縁部から頸部にかけては比較的器壁が厚く、内外面とも全体にヨコナデを行っている。胴部上位の内面は横方向のヘラケズリを施し、外面はヨコナデを行っている。この土器片も胎土中には比較的大きな砂粒を多く含み、焼成は良好で、全体ににぶい橙色を呈している。**126**の甕形土器は、斜め上方へ外反した口縁の端部が拡張し、外側に２条の凹線だけでなく円形浮文や２段の連続刺突文を有する面が認められる。**127**の甕形土器は、頸部で「く」字状に短く外反して口縁部へ移行している。口縁部の器壁は比較的厚く、外側に２条の凹線を有する面が存在する。内外面とも全体にヨコナデを施し、焼成は良好でにぶい橙色を呈している。**128**の甕形土器は、口縁部や頸部に比較して胴部の器壁が極めて薄くなっている。緩やかに内湾して立ち上がった胴部は、頸部で器壁が極端に厚くなって外湾しながら口縁部へ移行している。口縁部の端部は短く上方へ立ち上がっているが、外側の面はヨコナデを行っているだけで凹線は存在しない。口縁部から頸部にかけては内外面とも全体にヨコナデを行い、内面の胴部上位は横方向の粗いヘラケズリを施している。胴部外面の器表面が全体に磨滅



第25図　竪穴住居10・11、溝１変遷図(1／120)

しているので調整手法が不明であるが、胴部外面の上位はヨコナデを行っていると思われる。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で、全体ににぶい橙色を呈している。**129**の破片は、壺形土器または甕形土器の平底の底部である。内面は縦方向の粗いヘラケズリを施し、外面には縦方向のヘラミガキの痕跡が認められる。胎土中には比較的大きな砂粒を多く含み、焼成は良好で、浅黄橙色を呈している。底部から胴部の下端にかけて、黒斑も認められる。**130**の小型の壺形土器は、推定口径が6.9cmである。胴部は内湾して立ち上がり、胴部の最大径はほぼ中位に存在するようである。頸部から口縁部にかけては外湾して斜め上方へ立ち上がるが、口縁の端部は拡張していない。口縁の外面はヨコナデを行っているだけで、凹線は存在しない。口縁部から頸部にかけては、内外面とも全体にヨコナデを行っている。内面の胴部上位は横方向のヘラケズリを施し、胴部下位は縦方向のヘラケズリを行っている。外面の胴部上位はヨコナデを行い、胴部下位は縦方向のナデを施している。

これらの土器片の形態的特徴や調整手法から、竪穴住居９は弥生時代後期前葉の時期に属すると考えるが、**126**の甕形土器と**130**の小型の壺形土器は、やや古い様相を呈していると思われる。



第26図　竪穴住居10（1／80）

竪穴住居10（第24～26図、図版59－２）

１区の中央部より東方向へ寄った地点に検出した竪穴住居で、後述する竪穴住居11と重なり合っていた。この竪穴住居の西側部分は、竪穴住居１から竪穴住居９までの９軒の竪穴住居や土壙１から土壙５までの５基の土壙を取り囲む溝によって削平され、南側の隣接した位置には、土壙６や土壙７が確認されている。

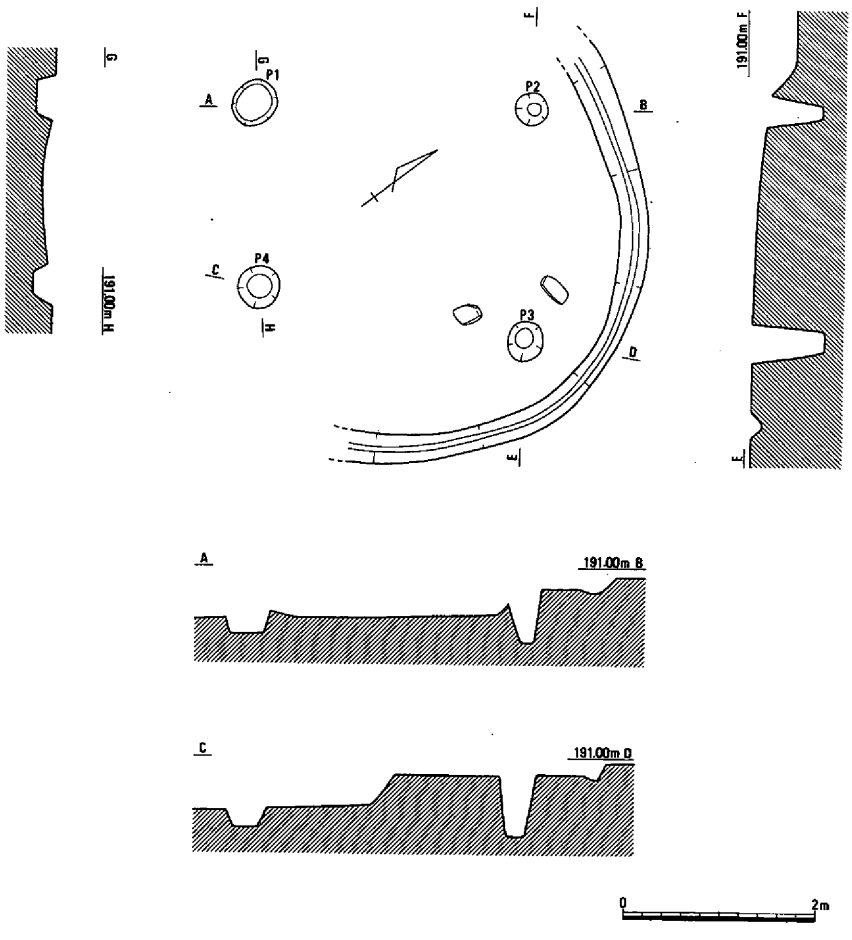
平面形は円形に近い形態を呈し、残存する計測値の径は9.00ｍにもなる。この竪穴住居の柱穴は東方向に位置する５か所が残存していただけで、いずれも楕円形に近い形態を呈していた。西方向の柱穴は溝に削平されて不明であるが、本来の柱構造は10本柱であったと推定される。柱穴の床面からの深さは57～72㎝を測り、断面形は「Ｕ」字形を呈していた。残存する柱穴間の距離は150～240㎝となり、Ｐ１とＰ２の間が最も狭く、Ｐ４とＰ５の間が最も広くなっていた。Ｐ３とＰ４の間で壁体溝に近接した位置には、扁平な河原石が１個だけ存在した。壁体溝と柱穴との間隔は70～80㎝を測り、いずれもほぼ同じ間隔になっていた。中央穴の平面形は長径104㎝、短径100㎝の楕円形に近い形態を呈し、断面形は「Ｕ」字形で、床面からの深さが64㎝になっていた。

この竪穴住居に伴う遺物がないので時期は不明であるが、竪穴住居や土壙を囲む溝に削平されているから、竪穴住居10は比較的古い時期の弥生時代後期前葉の時期に属するのではなかろうか。

竪穴住居11（第24・25・27図、図版59－２）

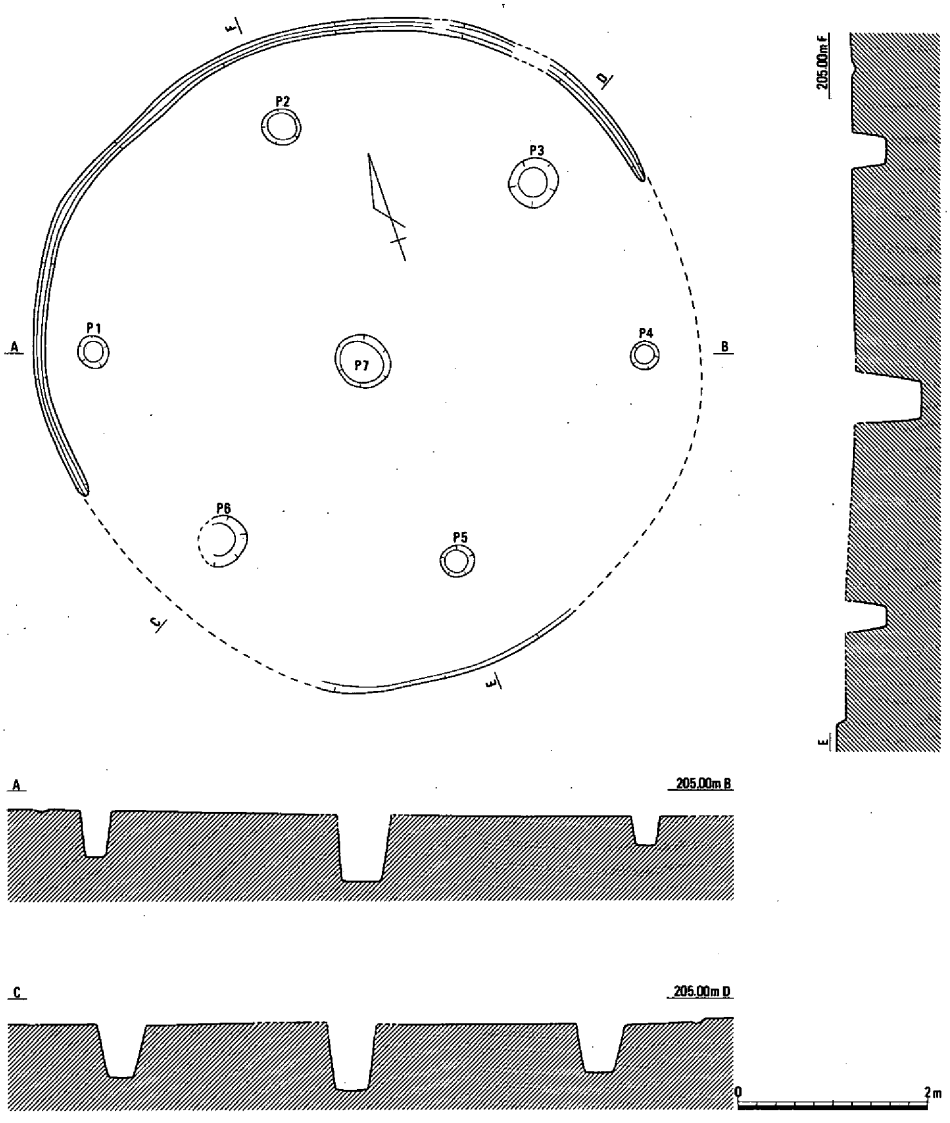
１区の中央部より東方向へ寄った地点に、前述した竪穴住居と重なり合った状態で検出した竪穴住居である。土層断面を観察した結果、この竪穴住居11が新しくて竪穴住居10が古いことが判明した。

地形の低い西側に面した部分が溝によって削平されていたので詳細は不明であるが、平面形は円形に近い形態を呈するであろう。この竪穴住居の柱構造は４本柱で、中央穴は残存しなかった。前述した竪穴住居10と重なり合っていたこともあって、検出面での壁体の床面からの高さは13㎝になっていた。壁体溝の検出面での幅は22～38㎝を測り、床面からの深さは２～13㎝で、底部の断面形は「Ｕ」字形であった。４か所の柱穴の平面形は円形または楕

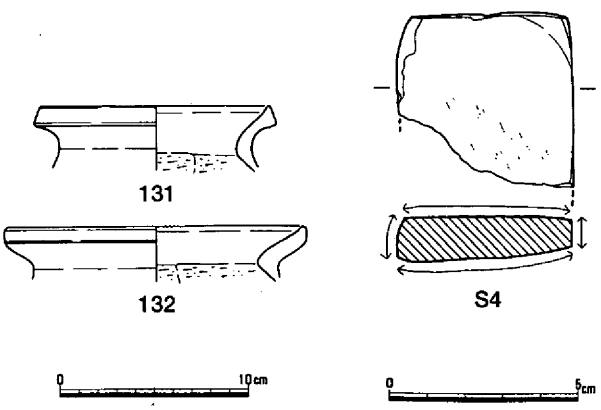


第27図　竪穴住居11（1／80）

円形を呈し、断面形はいずれも「Ｕ」字形になっていた。残存状態が良好な北方向と東方向に位置した柱穴（Ｐ２とＰ３）の床面からの深さは、56cmと65cmを計測した。柱穴間の距離は190～290cmを測り、Ｐ４とＰ１の間が最も狭く、Ｐ１とＰ２の間を最も広くしていた。地形の高い部分に位置した柱穴の壁体溝との間隔は55cmと75cmになっており、一定の揃った距離にはなっていなかった。床面の東方向に位置した柱穴の近くには、上面が扁平な２個の河原石が認められた。中央穴が存在することが想定された位置は、この竪穴住居を削平した竪穴住居１から竪穴住居９までの９軒の竪穴住居や土壙１から土壙５までの５基の土壙を取り囲む溝の最も深くなった地点であったため、竪穴住居が造られた当初には所在したものが削平されてしまったと考えられた。



出土遺物が存在しなかったのでこの竪穴住居が造られた詳細な時期は不明であるが、前述した竪穴住居10の建て替えによって造られていることや、竪穴住居１から竪穴住居９までの９軒の竪穴住居や土壙１から土壙５までの５基の土壙を取り囲む溝に削平されていたことなどから、竪穴住居11は竪穴住居10の造られた時期に極めて近い弥生時代後期前葉の時期に属すると思われるが、竪穴住居10よりは新しくて竪穴住居１から竪穴住居９までの９軒の竪穴住居よりも古いと推定される。



第28図　竪穴住居12（1／80）・出土遺物（1／4、1／2）

竪穴住居12（第24・25・28図、図版61－１）

丘陵の尾根上に位置する２区の中央部に検出した竪穴住居で、この竪穴住居12以外には周辺部に弥生時代の遺構は確認されていない。

平面形は径7.00ｍの円形に近い形態を呈し、柱構造は６本柱で、中央穴が存在した。この竪穴住居の上面は古墳時代後期と推定される方形の竪穴住居に削平されていたため、残存状態が悪い部分も認められ、南東方向や南西方向に面した壁体溝は検出できなかった。地形の高い北方向の地点には、壁体の立ち上がりは確認できなかった。地形の低い南方向に面した部分は、壁体の床面からの高さが14㎝で、精査したにもかかわらず壁体溝は検出できなかった。残存した壁体溝の検出面での幅は12～16㎝を測り、床面から最も深い地点で４㎝になっていた。壁体溝の底部の断面形は「Ｕ」字形を呈し、内部に暗灰色粘質土が堆積していた。６か所の柱穴の平面形は円形または楕円形を呈し、床面の東方向に位置するＰ３の規模が最も大きく、Ｐ４が最も小さくなっていた。柱穴間の距離は220～310㎝を測り、東方向に面したＰ３とＰ４の間が最も狭く、北西方向に面したＰ１とＰ２の間が最も広くなっていた。壁体溝が検出できなかったＰ４とＰ６の地点を除いて、壁体溝と柱穴との間隔は60～100㎝で、Ｐ１が最も狭くてＰ３とＰ５がほぼ同じで広くしていた。これらの柱穴の床面からの深さは31～55㎝を測り、断面形は「Ｕ」字形で、内部に暗灰色粘質土が堆積していた。中央穴は床面の中央部よりやや南側へ寄った位置に存在し、平面形は長径60㎝、短径52㎝の楕円形を呈していた。この中央穴の検出面から底部までは70㎝と深く、断面形は「Ｕ」字形で、黒褐色粘質土が堆積していた。

出土遺物として、２点の弥生土器片（**131・132**）と砥石の破片（**Ｓ４**）がある。これらの土器片の形態的特徴や調整手法から、竪穴住居12は弥生時代後期前葉の時期に属するであろう。なお砥石は、流紋岩製で板状を呈し、４面とも使用している。

この竪穴住居12が所在した丘陵上からは、西方向に展開する久世町内の沖積平野を広く望むことができるから、集落における見張台のような役割を果たしていたのではなかろうか。

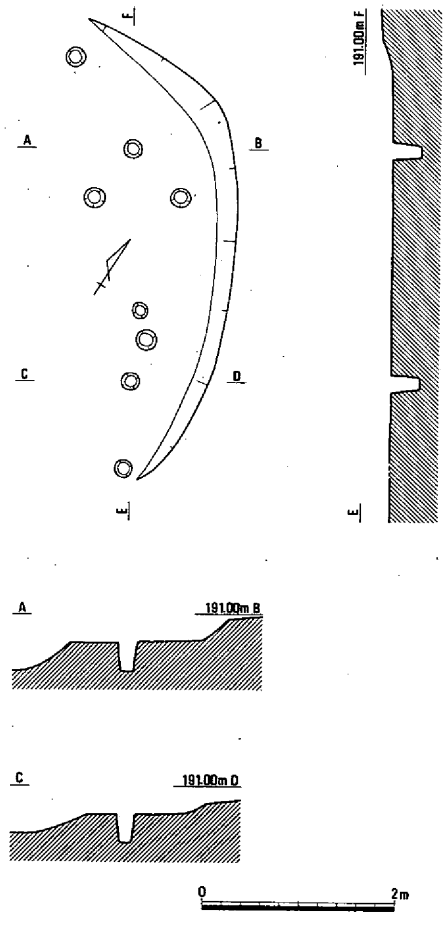
(2) 段状遺構

段状遺構１（第29図）

１区の南東方向へ寄った地点に検出した遺構で、西側の部分が竪穴住居群や土壙群を取り囲む溝によって削平されていた。

平面形は三日月に似た形態を呈し、壁体と柱穴が確認されただけである。検出面での壁体の高さは10㎝を測り、床面は北東方向から南西方向に向かってわずかに傾斜していた。床面には８か所の柱穴が存在したが、いずれも平面形は円形に近い形態を呈し、床面からの深さは10～30㎝で、断面形は「Ｕ」字形になっていた。

出土遺物がないので時期が不明であるが、竪穴住居群や土壙群を取り囲む溝に削平されているから、弥生時代後期前葉でも比較的古い時期に属すると思われる。



第29図　段状遺構１（1／80）

(3) 土　壙

土壙１（第30図）

１区の調査範囲の中央部よりやや南東方向へ寄った地点に検出した土壙で、東側には竪穴住居９が存在していた。また南側の近接した地点には、竪穴住居７と竪穴住居８が重なり合って確認されている。

平面形は長径117㎝、短径110㎝の楕円形に近い形を呈し、検出面からの深さは55㎝になっていた。南方向に面した一部分を除いて、断面形は袋状を呈していた。底部はほぼ水平になっていたが、中心部が周辺部よりもわずかに窪んでいた。土壙内には淡茶褐色土が堆積していたが、遺物は出土しなかった。

遺物が存在しなかったので時期は不明であるが、土壙１はおそらく弥生時代後期前葉の時期に属するであろう。

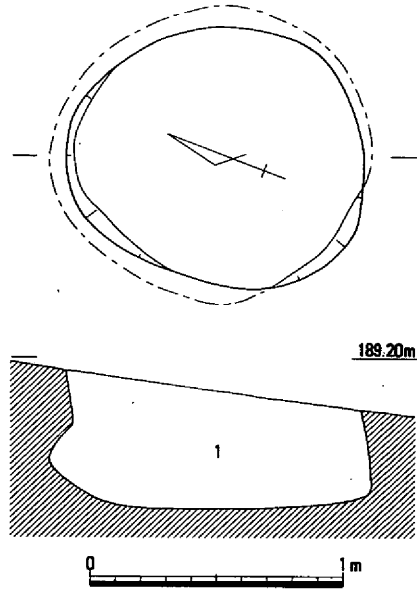
土壙２（第31図、図版59－３）

１区の調査範囲の中央部よりやや南東方向へ寄った地点に検出した土壙で、古墳時代後期に属すると推定される竪穴住居14の床面を精査していて、その所在が明らかになったのである。

平面形は長径105㎝、短径78㎝の楕円形に近い形態を呈し、検出面からの深さは22㎝と浅くなっていた。南東方向に面した壁面の一部は断面形が袋状を呈していたが、それ以外の部分は断面形が浅い「U」字形になっていた。底部の中心部は周辺よりもやや深くなって、浅く窪んでいた。土壙内には底部から上位にかけて暗茶褐色土、暗黄褐色土、淡茶褐色土が堆積し、弥生土器片が出土した。

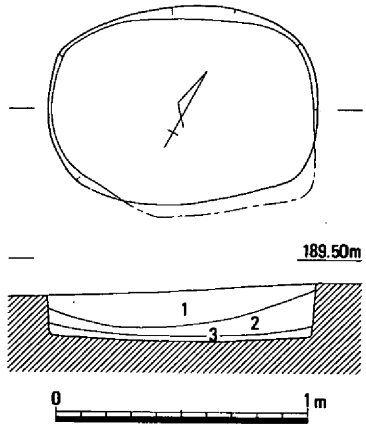
134～137の甕形土器の口縁部と推定される土器片は、口縁端部が上方へ著しく拡張し、外面に凹線がないものと数条の凹線が存在するものとがあり、**138**の底部もやや上げ底である。

これらの土器片の形態的特徴や調整手法から、土壙２は弥生時代後期中葉の時期に属すると思われる。

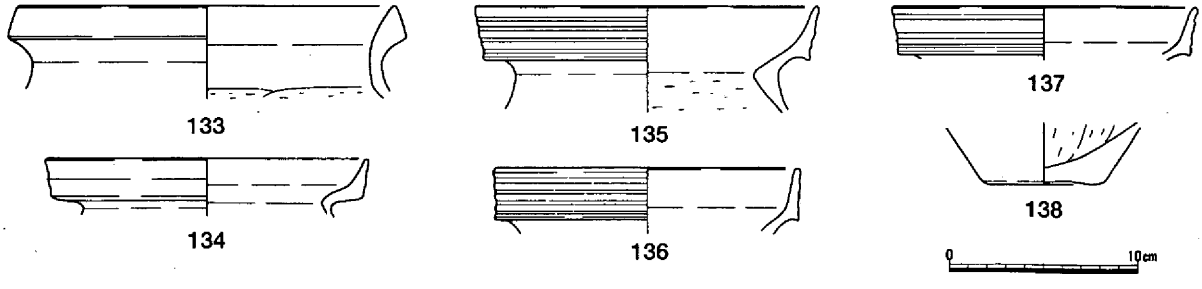


1．淡茶褐色土

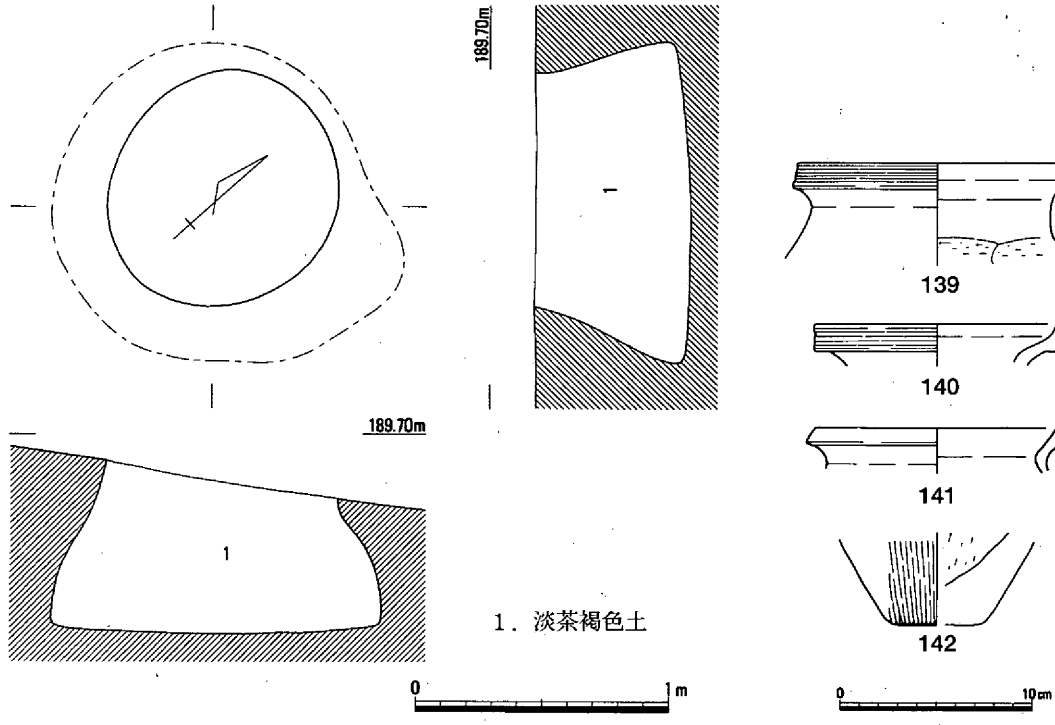
第30図　土壙１（1／30）



1．淡茶褐色土
2．暗黄褐色土
3．暗茶褐色土



第31図　土壙２（1／30）・出土遺物（1／4）

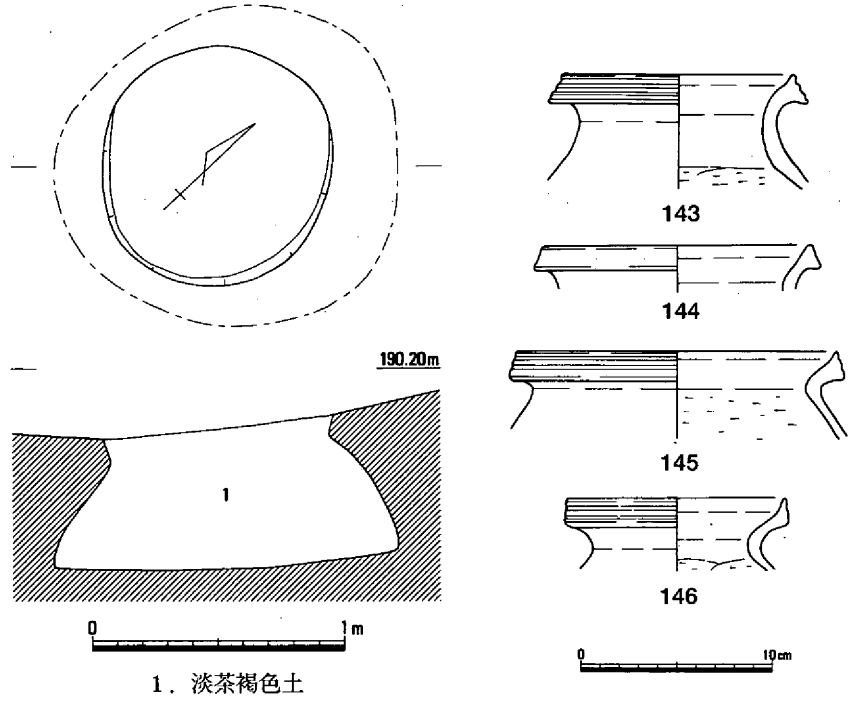


第32図　土壙３（1／30）・出土遺物（1／4）

土壙３（第32図）

１区の調査範囲の中央部よりやや南東方向へ寄った地点に検出した土壙で、北方向へ2.50ｍ進んだ位置には土壙４が存在し、西方向へ5.50ｍの位置には竪穴住居９が確認されている。

平面形は長径96㎝、短径68㎝の楕円形に近い形態を呈し、検出面から底部まで最も深い地点で70㎝になっていた。壁面の断面形は全体に袋状を呈し、底部が外側へ深く入り込んでいた。底部の中心部は周辺よりもやや深くなり、わずかに窪んでいた。土壙内には淡茶褐色土が堆積し、弥生土器片が出土した。



第33図　土壙４（1／30）・出土遺物（1／4）

139と**140**の口縁端部は上方へ拡張し、外側に凹線を有する面が認められるが、**141**の外面には凹線が存在しない。口縁部から頸部にかけてはヨコナデを行い、内面の胴部上位はヘラケズリを施している。**142**の底部は器壁が厚く、内面はヘラケズリを施し、外面はヘラミガキを行っている。

この土器片の形態的特徴や調整手法から、土壙３は弥生時代後期前葉の時期に属するであろう。

土壙４（第33図、図版58－１）

１区の調査範囲の中央部よりやや南東方向へ寄った地点に検出した土壙で、南側へ2.50ｍの位置には土壙３が、北側へ3.50ｍの位置には土壙５が、それぞれ確認されている。

平面形は長径94㎝、短径90㎝の楕円形に近い形態を呈し、検出面からの深さは60㎝になっていた。断面形は全体に袋状を呈し、底部の壁面が外側へ深く入り込んでいた。底部のレベルは、地形の高い北東方向から地形の低い南西方向へ向かって傾斜していた。土壙内には淡茶褐色土が堆積し、弥生土器片が出土した。

この土器片の形態的特徴や調整手法から、土壙４は弥生時代後期前葉の時期に属すると考える。

土壙５（第34図、図版58－２）

前述した土壙４の北方向に検出した土壙で、北東側6.00ｍの地点には土壙６が存在する。

平面形は長径65㎝、短径59㎝の楕円形に近い形態を呈し、検出面からの深さは70㎝になっていた。断面形は全体に袋状を呈し、底部の中心部がわずかに窪んでいた。土壙内には淡茶褐色土が堆積し、遺物は出土しなかった。

遺物がないので時期は不明であるが、土壙５は弥生時代後期前葉の時期に属するであろう。

土壙６（第35図、図版59－２）

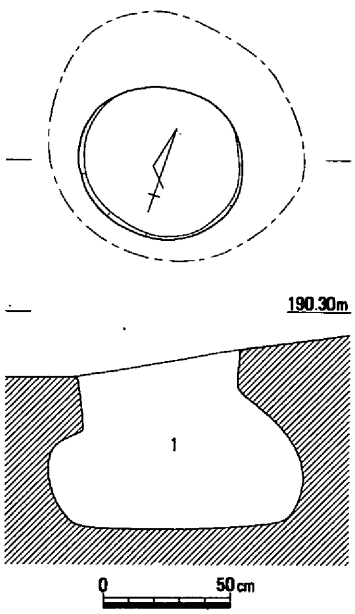
１区の調査範囲の東方向に検出した土壙で、北側に近接して竪穴住居10や竪穴住居11が存在する。

平面形は長径128㎝、短径126㎝の不整形な形態を呈し、検出面からの深さは50㎝になっていた。断面形は「U」字形を呈し、底部は東方向から西方向に向かって緩やかに傾斜していた。土壙内には淡茶褐色土が堆積していたが、遺物は存在しなかった。

土壙７（第36図）

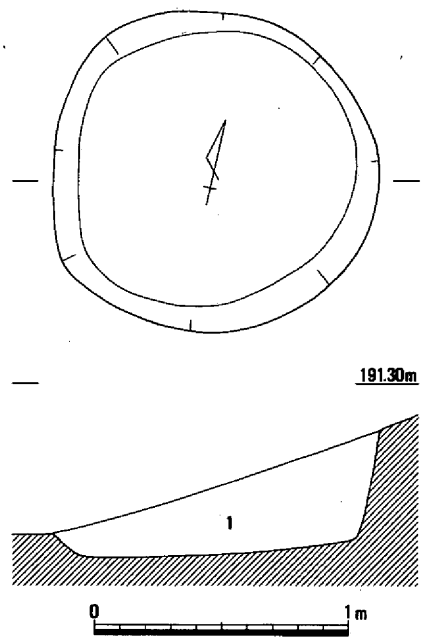
この土壙も１区の調査範囲の東方向に検出したもので、前述した土壙６とは4.00ｍも離れている。

平面形は長径92㎝、短径80㎝の不整形な形態を呈し、検出面からの深さは18㎝になっていた。断面形は「U」字形を呈し、底部はほぼ水平で、土壙内には淡茶褐色土が堆積していたが、遺物は存在しなかった。



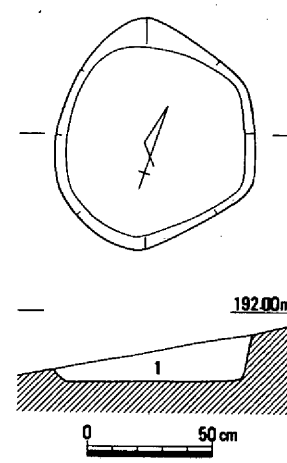
１．淡茶褐色土

第34図　土壙５（1／30）



１．淡茶褐色土

第35図　土壙６（1／30）



１．淡茶褐色土

第36図　土壙７（1／30）

(3) 溝

溝１（第１・５・37図、図版57－２）

１区の調査範囲の南方向に面した広い地域に検出した溝で、丘陵の裾部分から緩斜面の低位部にかけて、竪穴住居１から竪穴住居９までの９軒の竪穴住居と土壙１から土壙５までの５基の土壙を、取り囲む状態になっていた。

この溝の検出面での幅は60～280cmを測り、西方向に面した緩斜面の低位部では、２条に枝分かれしていた。この溝が最も深かったのは、北方向の幅が狭くなっていた地点で、丘陵裾部の段状遺構１と土壙６の中間部分では、溝そのものの痕跡を把握するのが困難な状態であった。断面形は「U」字形を呈し、内部には明褐色砂質土が堆積していた。溝内を精査したが、遺物は出土しなかった。

この溝１は、内側に存在する竪穴住居や土壙を守るために設けられた、排水溝の役目を果たしていたと考えられる。なお遺物が出土しなかったので時期が不明であるが、竪穴住居10と竪穴住居11や段状遺構１を削平し、竪穴住居１から竪穴住居９までの９軒の竪穴住居と土壙１から土壙５までの５基の土壙を取り囲んでいたから、弥生時代後期前葉でも初頭に近い時期に造られたものが、弥生時代後期後葉の時期まで長時間にわたって機能していたのではなかろうか。

溝２（第１・５・37図）

１区の調査範囲の南端部分に検出した溝で、前述した溝１の内側に平行する状態になっていた。

この溝は東西方向を示し、確認した長さは約11cmにすぎなかった。検出面での最大幅は100cmを測り、断面形は「U」字形を呈していた。この溝に伴う遺物は、確認できなかった。

溝３（第１・５・37図）

この溝も１区の調査範囲の南端部分に検出したもので、東側部分を竪穴住居２に削平されていた。

検出面での最大幅は290cmを測り、断面形は浅い「U」字形を呈していた。溝内には淡褐色砂質土が堆積していたが、遺物は出土しなかった。

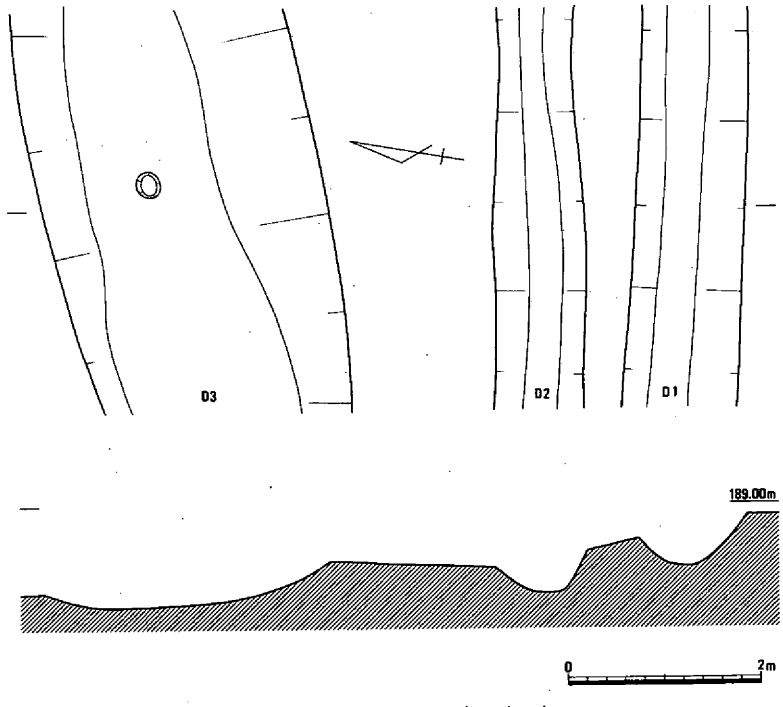
この溝３は、竪穴住居２に削平されていたから、弥生時代後期前葉かそれより古い時期に属する。

溝４（第１・５・18図）

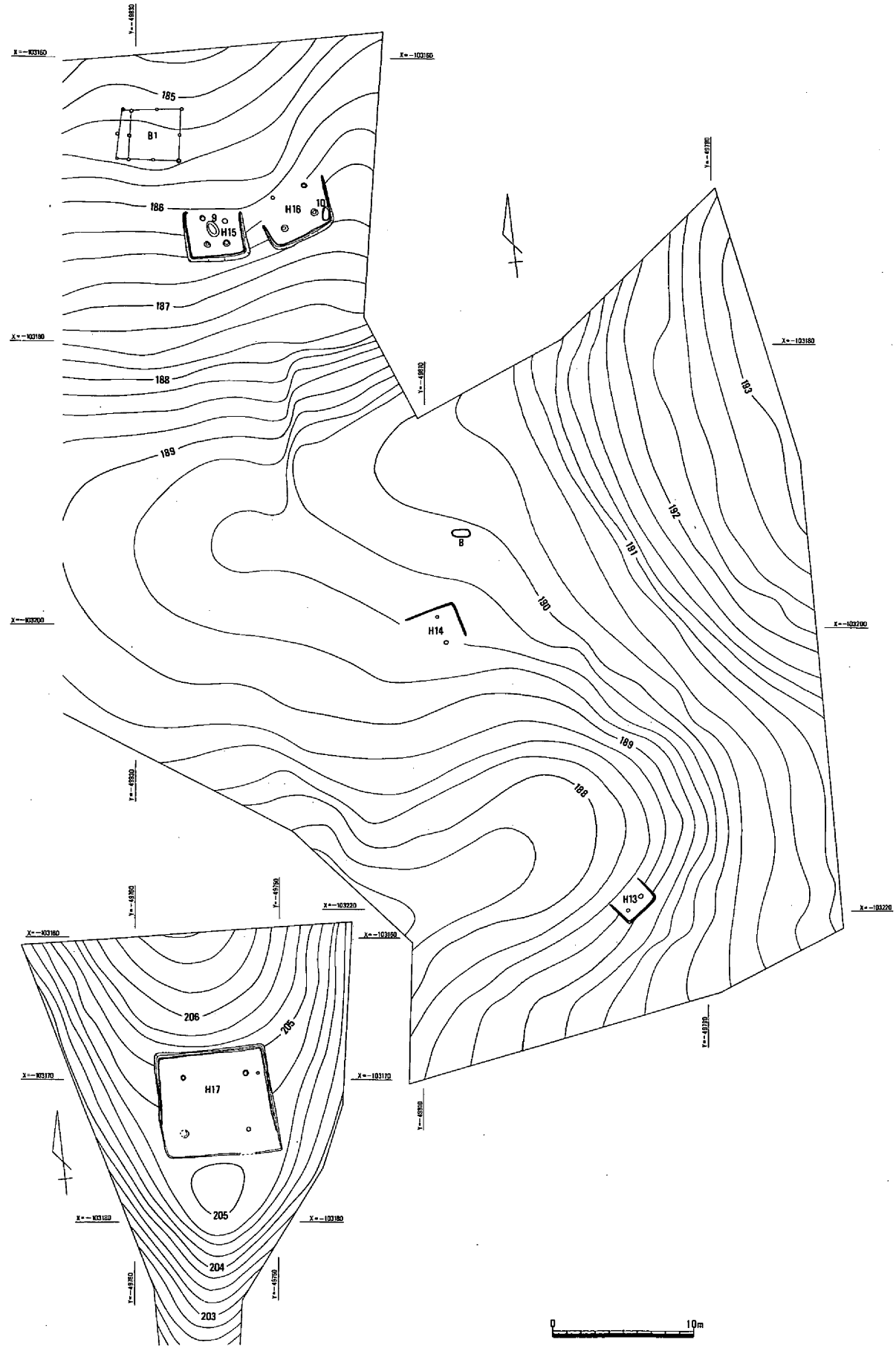
１区で検出した竪穴住居８に、北東部分が削平された溝である。

長さ約2.80ｍが残存し、検出面での最大幅は20cmを測る。断面形は「U」字形を呈し、最も深い地点で12cmになっていた。

この溝４は、竪穴住居の外側に延びる床溝の可能性が強く、弥生時代後期前葉かそれよりも古い時期に属するであろう。



第37図　溝１～３（1／80）



第38図　古墳時代遺構配置図（1／400）

第４節　古墳時代の遺構と遺物

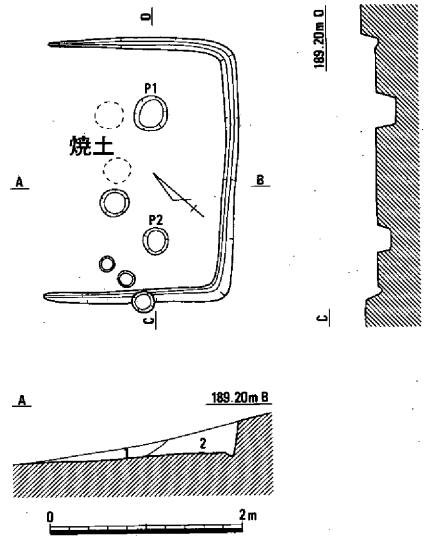
(1) 竪穴住居

竪穴住居13（第39図、図版60－２）

１区の調査範囲の南東端部に検出した小型の竪穴住居で、周辺には古墳時代に属する遺構は確認されていない。

地形の高い南東方向に面した部分に、「コ」字形を呈する壁体溝と２か所の柱穴が残存するだけで、地形の低い北西方向に面した部分は、削平されて床面も残っていなかった。平面形は１辺275cmの方形を呈し、柱構造は４本柱と推定される。竪穴住居の内部には暗黄灰色土と暗灰褐色土が堆積し、壁体の床面からの高さは37cmになっていた。検出面での壁体溝の最大幅は18cmを測り、断面形は「U」字形で、床面から最も深い地点が４cmであった。残存する２か所の柱穴の平面形は楕円形に近い形態を呈し、柱穴間の距離は136cmになっていた。柱穴の断面形は「U」字形を呈し、床面からの深さは16cmであった。床面の北東方向へ寄った位置には、２か所の焼土面が認められた。

遺物が出土しなかったので詳細な時期が不明であるが、検出した平面形態などから、竪穴住居13は６世紀後葉から７世紀前葉にかけての時期に属するのではなかろうか。



1．暗灰褐色土　　2．暗黄灰色土

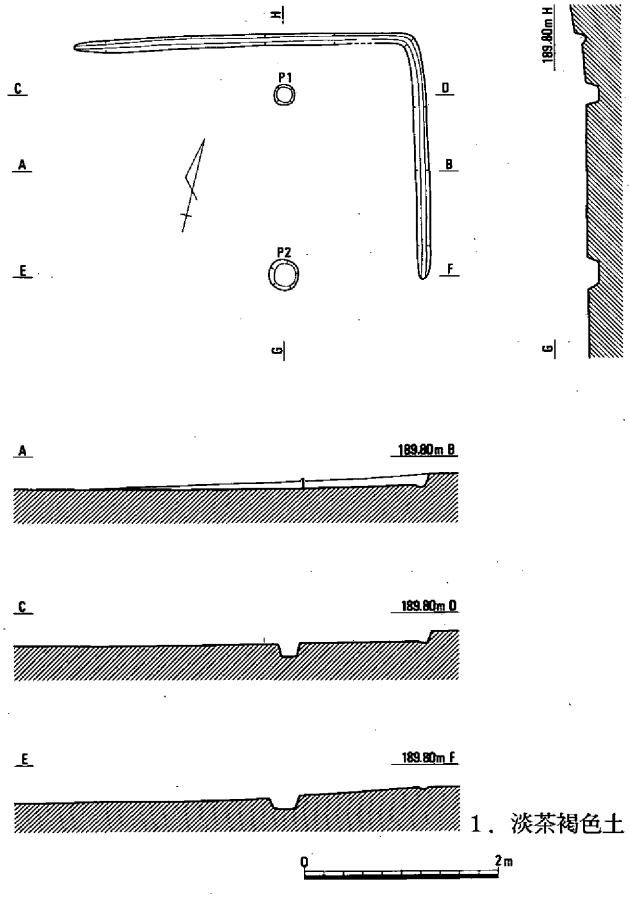
第39図　竪穴住居13（1／80）

竪穴住居14（第40図、図版59－３）

１区の調査区の中央部分に検出した竪穴住居で、「L」字状を呈する壁体溝の一部と２か所の柱穴を確認しただけである。

検出面での壁体溝の最大幅は18cmを測り、床面から最も深い地点で２cmになっていた。188cmの距離を有する２か所の柱穴の平面形は円形に近い形態を呈し、断面形は「U」字形で、床面から14cmの深さであった。床面には淡茶褐色土が堆積していたが、遺物は出土しなかった。

この竪穴住居14の本来の平面形は方形で、柱構造は４本柱になり、６世紀後葉から７世紀前葉にかけての古墳時代後期の時期に属すると思われる。



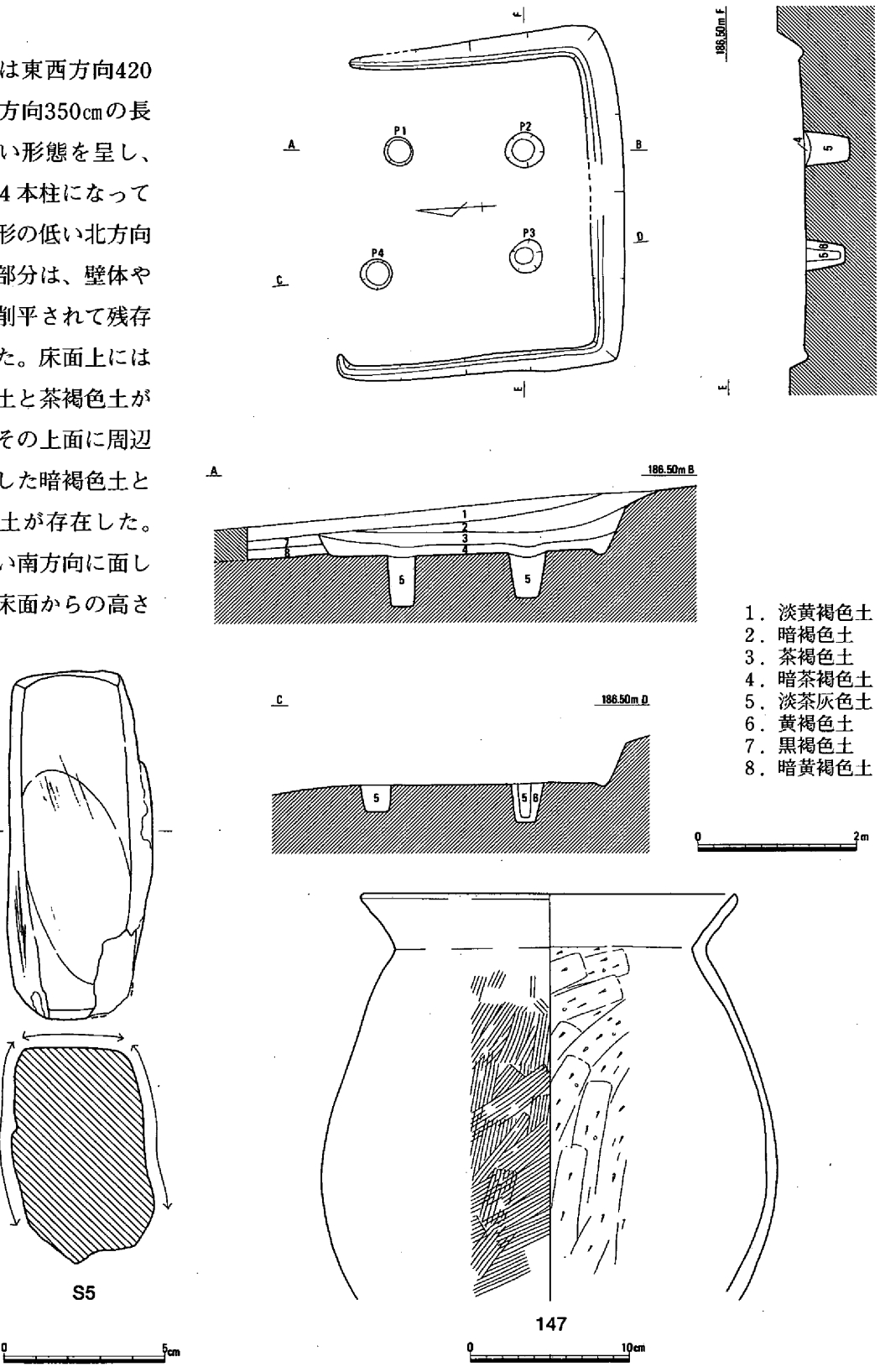
1．淡茶褐色土

第40図　竪穴住居14（1／80）

竪穴住居15（第41図、図版60－１・60－３）

１区の調査範囲の北西部分に検出した竪穴住居で、東側に近接して後述する竪穴住居16が確認されている。この竪穴住居には土壙９と土壙25が重なり合っていたが、竪穴住居15が古くて土壙９と土壙25は新しいことが判明している。

平面形は東西方向420㎝、南北方向350㎝の長方形に近い形態を呈し、柱構造は４本柱になっていた。地形の低い北方向に面した部分は、壁体や壁体溝が削平されて残存しなかった。床面上には暗茶褐色土と茶褐色土が堆積し、その上面に周辺から流入した暗褐色土と淡黄褐色土が存在した。地形の高い南方向に面した壁体の床面からの高さ



第41図　竪穴住居15（1／80）・出土遺物（1／4、1／2）

は55cmを測り、土壙25の周辺部が最も高くなっていた。検出面での壁体溝の最大幅は44cmで、底部の断面形は「U」字形を呈していた。この竪穴住居の柱構造となる４か所の柱穴の平面形は円形または楕円形に近い形態を呈し、北西方向の床面に検出したＰ４はやや北側へ寄った位置になっていた。柱穴の規模では、北東方向のＰ１が長径38cm、短径33cmで最も小さく、南東方向のＰ２が長径48cm、短径44cmで最も大きくなっていた。柱穴の床面からの深さは33～69cmで、Ｐ４が最も浅くてＰ２が最も深くなり、断面形はいずれも「U」字形であった。柱穴間の距離は135～186cmを測り、Ｐ２とＰ３の間が最も狭く、Ｐ１とＰ４の間が最も広くなっていた。壁体溝と柱穴の間隔は、東側に面する南北方向の壁体溝でＰ１が110cm、Ｐ２が116cm、南側に面する東西方向の壁体溝でＰ２が94cm、Ｐ３が94cm、西側に面する南北方向の壁体溝でＰ３が128cm、Ｐ４が118cmとなり、東西方向の壁体溝と柱穴との間隔を狭く、南北方向の壁体溝と柱穴との間隔を広くしていた。

この竪穴住居から出土した遺物として甕形土器と砥石があるが、どちらも床面に密着した状態で存在した。**147**の甕形土器は、下半部が欠損しているが口径23.3cm、頸部径19.8cmを測る。胴部の断面形は卵形に近い形態を呈し、最大径が中位より下方に認められ、中位の器壁が薄くなっている。胴部は緩やかに内湾して上方へ立ち上がり、頸部で「く」字状に屈曲すると、口縁端部まで直線的に斜め上方へ張り出している。頸部の器壁は厚く、口縁端部は丸く仕上げられている。口縁部から頸部にかけては、内外面とも全体にヨコナデを行っている。胴部の内面は縦または斜め方向の粗いヘラケズリを施し、外面には縦または斜め方向のハケメが認められる。外面には黒斑が存在し、外面の胴部下半全体に煤の付着が認められる。

この土器の形態的特徴や調整手法から、竪穴住居15は６世紀後葉の時期に属するであろう。

なお**Ｓ５**の砥石は流紋岩製で３面を使用しているが、側面には金属器の使用痕が認められる。

竪穴住居16（第42図、図版60－１）

前述した竪穴住居15の東側に検出した竪穴住居で、新しい土壙10が床面の南東隅に存在した。

地形の低い北から西方向に面した部分の壁体や壁体溝が残存しないが、本来の平面形態は方形または長方形に近い形になると思われ、柱構造は４本柱である。地形の高い南方向に面した検出面での長さは440cmを測り、壁体の床面からの高さは36cmになっていた。壁体溝の検出面での最大幅は36cmで、床面から最も深い地点が５cmになっていた。４か所の柱穴の平面形は円形または楕円形に近い形態を呈し、柱穴間の距離は200～242cmであった。柱穴内には黄褐色土が堆積し、柱痕跡と推定される暗褐色土も認められた。床面上には暗茶褐色土が堆積し、須恵器と土師器が出土した。

148の須恵器の杯蓋は、口径14.0cm、器高5.2cmである。端部が短く外湾した口縁部の器壁は極めて薄く、天井部内面の器表面には凹凸が認められる。内面全体と外面の口縁部はヨコナデを行い、外面の天井部はヘラケズリを施している。焼成は全体に不良で、内外面とも器表面が磨滅し、淡黄色を呈している。**149**の土師器の把手付甕形土器は、口径30.1cm、胴部最大径30.3cm、頸部径25.8cmを測るが、底部を欠損している。胴部は緩やかに内湾して立ち上がり、頸部の部分で外湾して口縁端部へ移行している。底部と口縁部の器壁は薄く、口縁端部は丸く仕上げられている。貼り付けられた把手は２か所で、端部は斜め上方へ張り出している。口縁部は内外面ともヨコナデを行い、外面の頸部と把手の表面には指頭圧痕が認められる。胴部の内面は粗いヘラケズリを施し、外面には縦方向のハケメが認められる。底部は欠損して不明であるが、外面はヘラケズリを施しているようである。

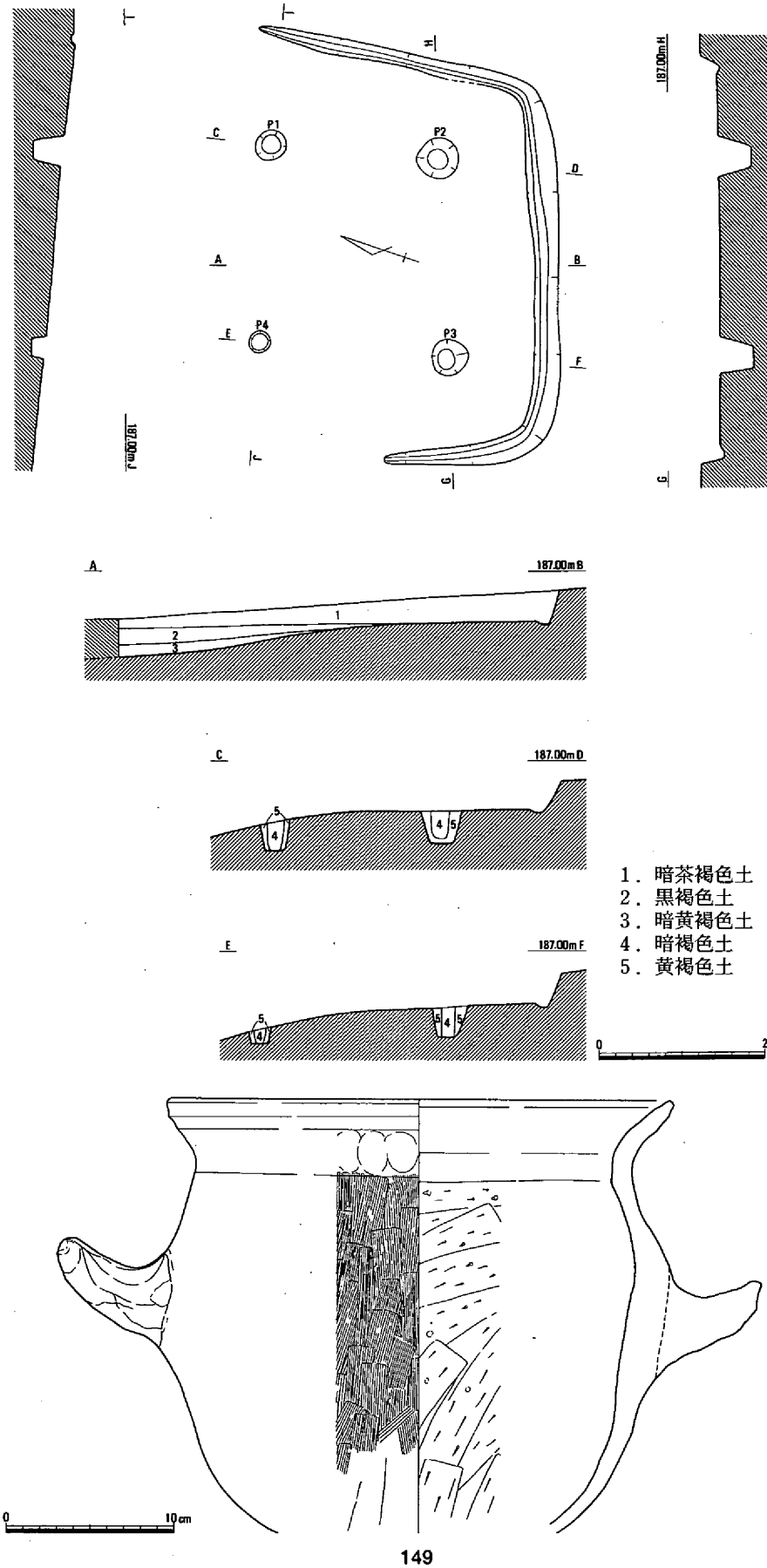
この２点の土器の形態的特徴や調整手法から、竪穴住居16は６世紀後葉の時期に属すると考える。

竪穴住居17

（第43図、図版61－１）

丘陵の尾根上に位置する２区の中央部に検出した大型の竪穴住居で、この竪穴住居17以外には周辺部に古墳時代の遺構は確認されていない。

平面形は東西方向760～800cm、南北方向740～760cmを測る長方形に近い形態を呈し、柱構造は４本柱で、地形の低い南側に面した床面には、壁体溝が残存しなかった。壁溝の床面からの最大の高さは51cmを測り、壁体溝の検出面での最大幅は40cmになっていた。壁体溝の床面からの最大の深さは８cmで、底部の断面形は「U」字形を呈していた。４か所の柱穴の平面形は円形または楕円形に近い形態を呈して、北西方向に位置するＰ８が最も小さく、南西方向に位置するＰ６が最も大きくなっていた。柱穴間の距離は390～445cmであったが、東西方向が狭くて南北方向が広いことを確認した。壁体溝と柱穴と

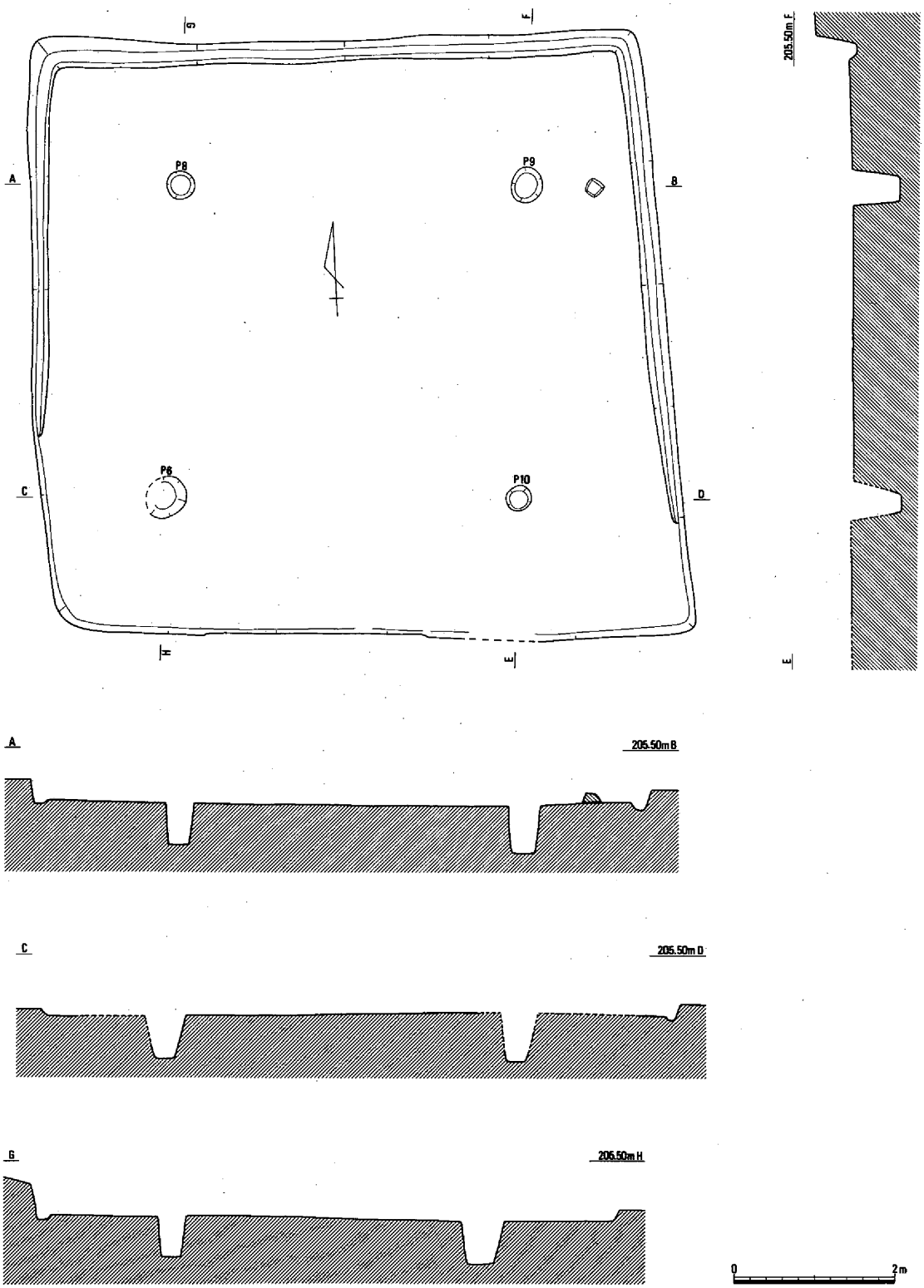


148　　149

第42図　竪穴住居16（1／80）・出土遺物（1／4）

の間隔は、北側に面する東西方向の壁体溝でＰ８が162cm、Ｐ９が174cm、東側に面する南北方向の壁体溝でＰ９が143cm、Ｐ10が142cm、南側に面する東西方向の壁体溝は残存しないが、推定でＰ10が約165cm、Ｐ６が約165cm、西側に面する南北方向の壁体溝でＰ６が約145cm、Ｐ８が175cmとなっており、東側に面する南北方向の壁体溝と柱穴との間隔を狭くしていた。

この竪穴住居から出土した遺物として土師器の小破片があるが、図化することができなかった。こ



第43図　竪穴住居17（1／80）

の土器片の形態的特徴や調整手法などから、前述した竪穴住居15や竪穴住居16とほぼ同時期の６世紀後葉である古墳時代後期の時期に属すると思われる。

この竪穴住居17が所在した丘陵上からは、西方向に展開する久世町内に沖積平野を広く望むことができる。竪穴住居そのものが大型で周辺に同時期の遺構が存在しないことから、竪穴住居17は集落における丘陵上の見張台の役割を果たしていたのではなかろうか。

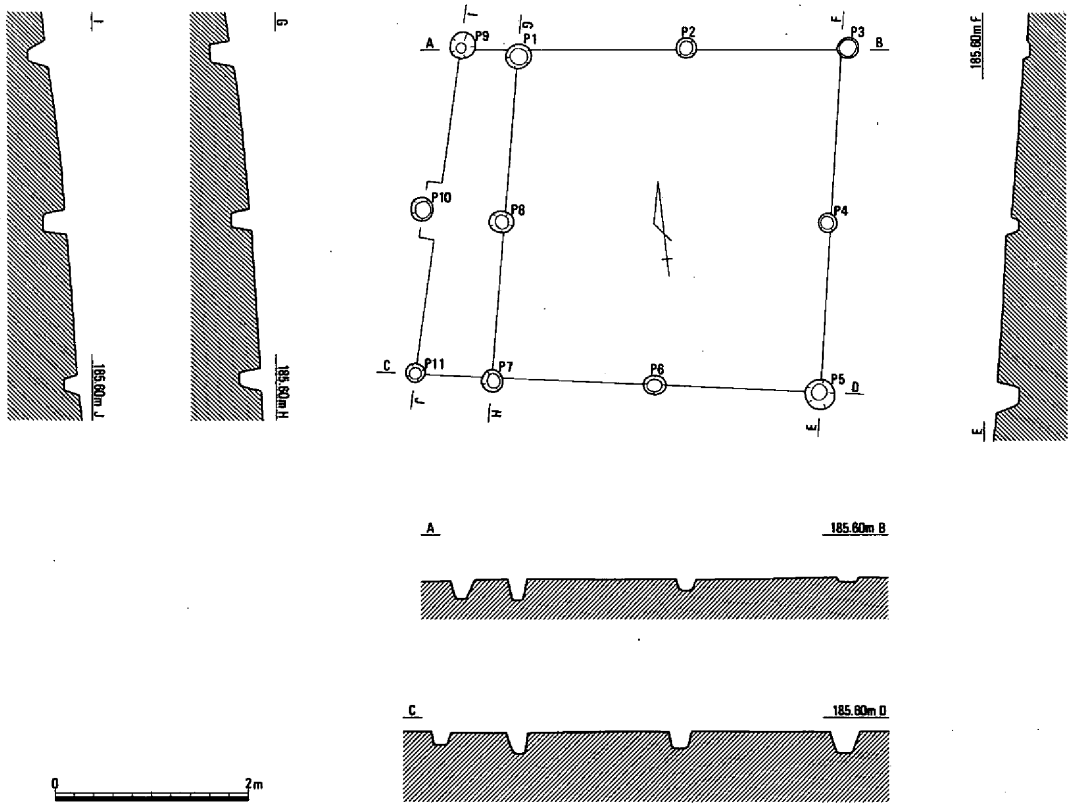
(2) 建　物

建物１（第44図、図版60－１）

１区の調査範囲の北西端部に検出した掘立柱建物で、南東方向の近接した地点には竪穴住居15や竪穴住居16と土壙９や土壙10が確認されている。

棟方向がＮ－12°－Ｅを示すこの掘立柱建物は、桁行２間、梁行２間の側柱だけの建物で、西側に廂が認められた。検出した11か所の柱穴の規模はいずれも小さく、平面形が円形または楕円形に近い形態を呈していた。桁行の柱穴間の距離は342～364cmを測り、東側に面した部分が長くなっていた。梁行の柱穴間の距離は340～346cmを測り、北側に面した部分がわずかに長くなっていた。西側に検出した廂に使用された柱穴の桁行からの距離は60～85cmで、北側の部分が狭くて中央部分が広くなっていたため、３か所の廂の柱穴は直線的に並んでいなかった。

出土遺物が存在しないので建物１の時期は不明であるが、柱穴内に堆積していた土砂が竪穴住居15や竪穴住居16の覆土に酷似していたので、古墳時代後期の時期に属するのではないかと推定したが、全体の形態が著しく歪んで廂が伴う掘立柱建物であるから、中世の時期になるのかもしれない。



第44図　建物１（1／80）

(3) 土　壙

土壙８（第45図）

１区の調査範囲の中央部よりやや東方向へ寄った地点に検出した土壙で、南側へ約７ｍ進んだ位置には、残存状態が極めて悪い竪穴住居14が確認されている。

平面形は長径130㎝、短径52～58㎝の隅丸長方形に近い形態を呈し、上面を削平されていたのか、検出面からの深さは10㎝と浅くなっていた。底部はほぼ水平であるが、中央部分が周辺部よりもわずかに窪んでいた。断面形は浅い「Ｕ」字形を呈し、内部に暗茶褐色土が堆積していた。土壙内を精査したが、遺物は出土しなかった。

出土遺物がないので時期は不明であるが、内部に堆積していた土が竪穴住居15や竪穴住居16の覆土に酷似していたから、土壙８はそれらとほぼ同時期の古墳時代後期の時期に属すると推定した。

土壙９（第46図、図版58－３・60－１）

１区の調査範囲の北西方向へ寄った地点に検出した土壙で、竪穴住居15の床面に位置していた。

平面形は長径118㎝、短径76㎝の楕円形に似た形態を呈し、検出面からの深さは12㎝と浅かった。床面の中央部は周辺よりもわずかに深くなり、西側の法面に扁平な割り石が存在した。断面形は浅い「Ｕ」字形を呈し、内部に褐色土が堆積していたが、遺物は出土しなかった。

この土壙は、遺構の切り合い関係によって竪穴住居15よりも新しいことが判明しているが、古墳時代後期の範囲内に含まれる時期に属すると思われた。

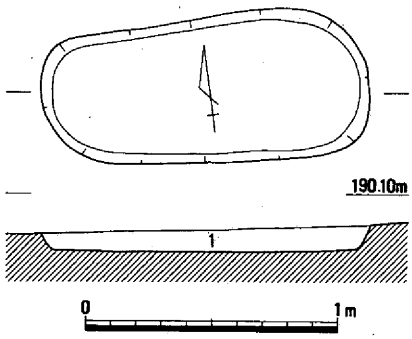
土壙10（第47図、図版58－３・60－１）

竪穴住居16の床面の東方向に面した隅に検出した土壙で、竪穴住居16を新しく切って造られていた。

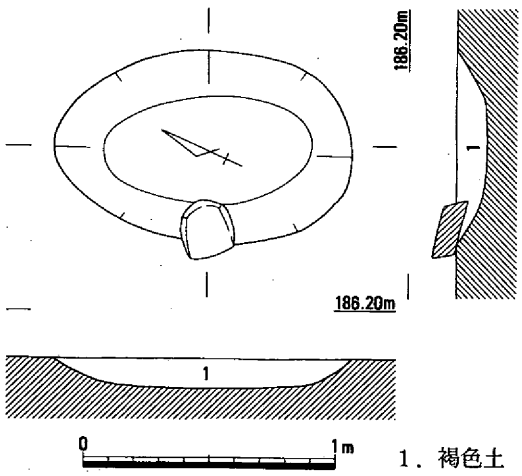
平面形は長径93㎝、短径45～48㎝の隅丸長方形に似た形態を呈し、検出面からの深さは11㎝になっていた。底部はほぼ水平で、断面形は「Ｕ」字形であった。内部には暗茶褐色土が堆積し、南端部の床面から口縁部を下にした状態で須恵器の杯身が出土した。

150の杯身は口径12.0㎝、器高3.8㎝のほぼ完形品で、口縁端部が短く外側に開く形態になっている。外面の底部はヘラ切り未調整で、それ以外の部分は全体にヨコナデを行っている。

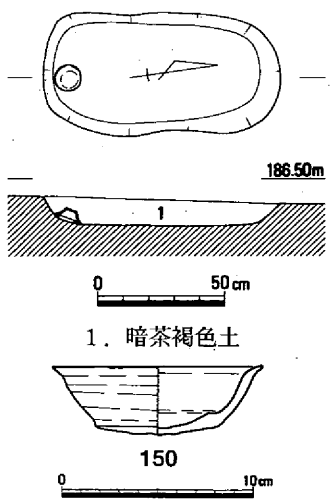
この杯身の形態的特徴や調整手法から、土壙10は７世紀中葉の時期に属すると考える。



第45図　土壙８（1／30）



第46図　土壙９（1／30）



第47図　土壙10（1／30）・出土遺物（1／4）

第５節　平安時代の遺物

１区の調査範囲の南端部分では、竪穴住居１から竪穴住居６までの６軒の竪穴住居が所在した地点の上面より、９世紀前葉の平安時代に属すると思われる比較的多くの土師器や須恵器の土器片が、鉄滓のみならず各種類の鉄製品や土錘などに混在して出土した。そのために、周辺部分の地形が高くなった広い範囲を精査したが、遺構は確認できなかった。以前には、近接した地域のどこかに、平安時代の鉄生産に関係した工房のようなものがあったのかもしれない。

(1) 土師器

竪穴住居１～６の上面に検出した土器溜まりでは、土師器は狭い範囲に集中して出土した。器種としては、黒色土器の椀、回転台土師器の杯と皿、耳皿が認められる。

151の推定口径12.3㎝を測る黒色土器の椀は、内面だけが黒色を呈し、外面はにぶい黄橙色になっている。斜め上方へ立ち上がった口縁の端部は、短く外反して丸く仕上げている。内面は全体に横方向のヘラミガキを施し、外面はヨコナデを行っている。

152～191は、高台を有しない回転台土師器の杯で、出土した土師器の量の過半数を占めていた。ロクロのような回転台を使用して成形が行われているため、内外面とも器表面に凹凸が認められるものが多く、全体の器壁はほとんどのものが薄くなっている。体部から口縁部にかけては、斜め上方へ直線的に立ち上がるが、口縁端部がわずかに外湾するもの（**160・163・170・183**）も認められる。底部は平底であるが、器壁が湾曲して外側へ張り出すもの（**152・161・188**）や、中央部分が窪んで上げ底の状態になったもの（**157・160・166・175**）もある。この回転台土師器の杯は、内外面とも全体にヨコナデを行っているが、外面の底部にヘラ切り痕跡が鮮明に残存しているものが多い。

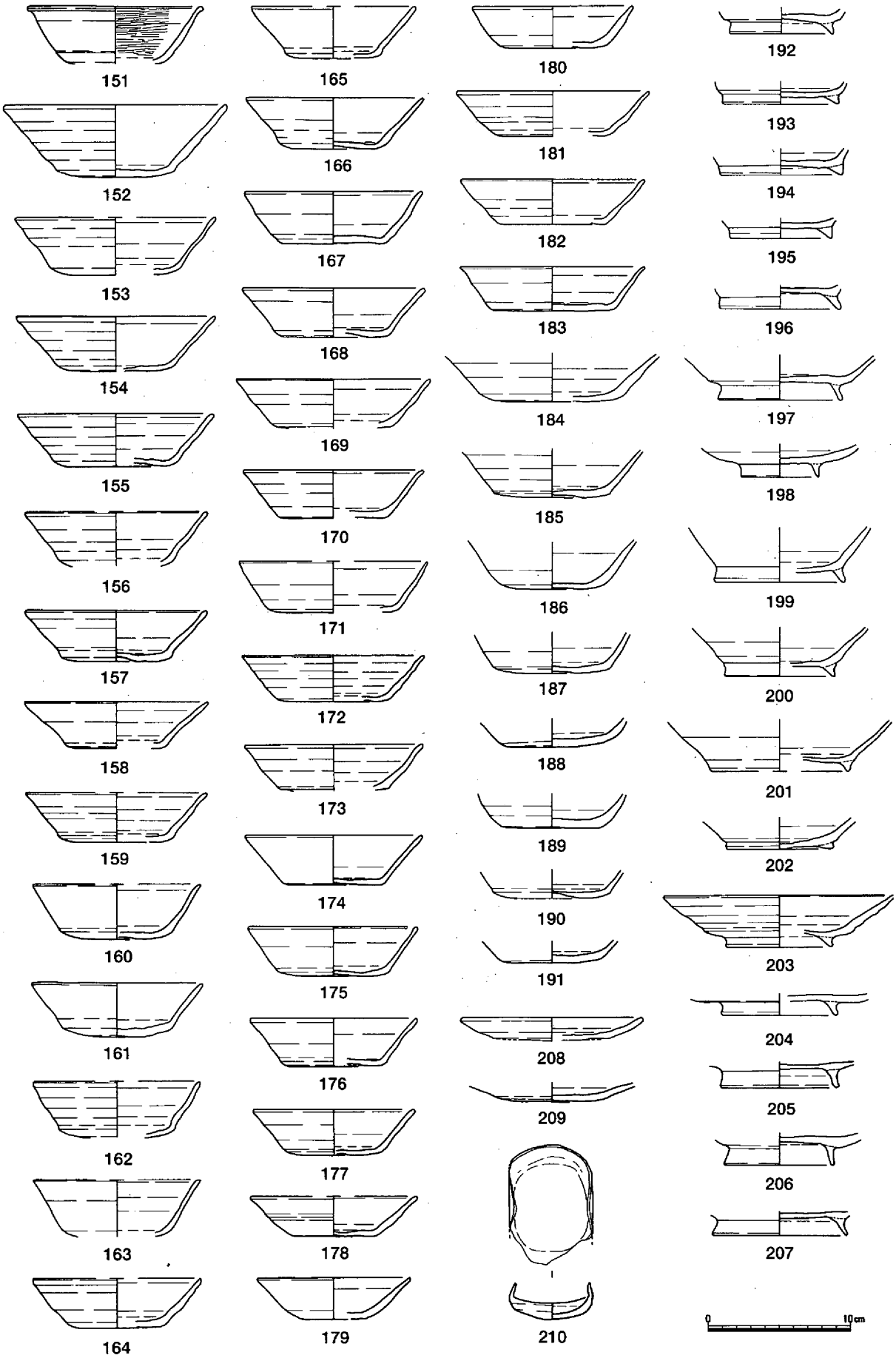
192～203は、貼付高台を有する回転台土師器の杯である。高台の形態には、断面形が三角形を呈して低いもの（**192～195・200～203**）と、「ハ」字状に斜め下方へ細く張り出して高くなったもの（**197～199**）がある。ほとんどのものが口縁端部を欠損して調整手法が不明であるが、前述した高台を有しない回転台土師器の杯と同じであると推定している。

204～207の底部の破片は、欠損する体部の器壁が横方向へ長く張り出すと思われるので、貼付高台を有する回転台土師器の皿になると考えた。高台の形態は、いずれも細長くて高くなり、端部は丸く仕上げている。内外面ともヨコナデを行っているが、内面に有機物が付着しているものもある。

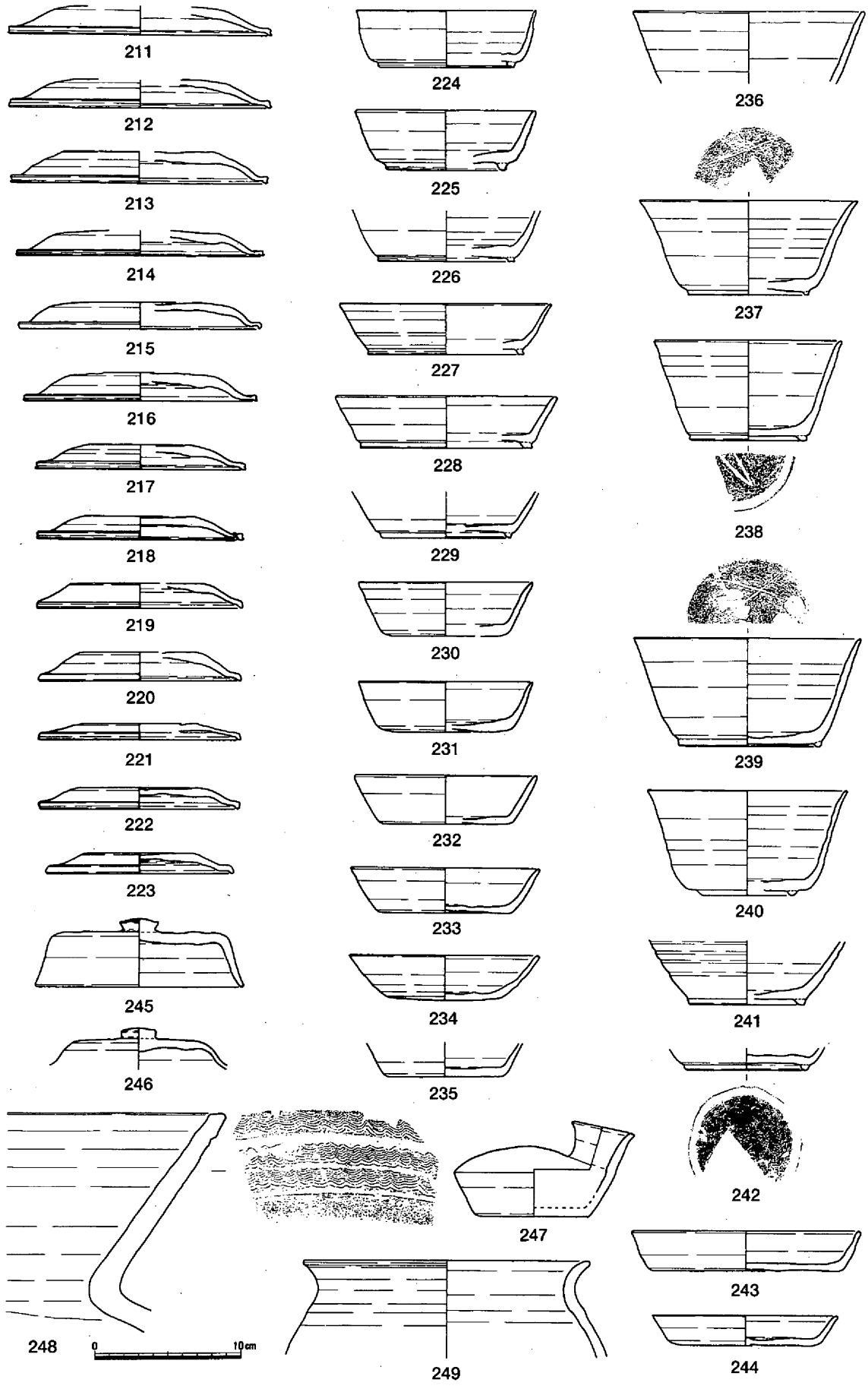
208と**209**は、高台を有しない回転台土師器の皿である。**208**の計測値は、口径12.7㎝、器高1.7㎝、底径8.1㎝である。体部から口縁部にかけては、内湾して斜め上方へ立ち上がり、**208**の口縁端部は丸く仕上げている。内外面とも全体にヨコナデを行っているが、外面の底部にはヘラ切り痕跡が残存している。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で、にぶい橙色を呈している。

210は耳皿である。口縁部の推定長径8.6㎝、短径5.0㎝、器高2.7㎝、底部の長径5.9㎝、短径5.2㎝を測る。底部は舟底形を呈して緩やかに湾曲し、短径部分の口縁端部は指先で挟んで内傾させている。内外面とも器表面が著しく磨滅しているため、調整手法は不明である。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で、内面はにぶい橙色、外面は浅黄橙色を呈している。

以上に説明した土師器は、その器種構成や形態的特徴から、９世紀前葉の時期に属するであろう。



第48図　竪穴住居１～６上面土器溜まり出土遺物（1）（1／4）



第49図　竪穴住居１～６上面土器溜まり出土遺物（2）（1／4）

(2) 須恵器

須恵器は広い範囲から散発的に採集したもので、土師器の出土状況とは異なっていた。器種としては、杯蓋、杯身、皿、壺蓋、平瓶、甕、壺が認められる。

211～223の杯蓋は、いずれも外面の天井部につまみが存在しない。天井部の器壁は口縁部よりも厚く、天井部の外面がほぼ水平になっているものが多い。口縁部は屈曲して端部へ移行するが、端部に低い立ち上がりを有して外側に面が認められる。内面全体と外面の口縁部はヨコナデを行っているが、外面の天井部はヘラ切り未調整で、ロクロの回転方向は右である。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で、青灰色または灰色を呈している。内外面に重ね焼きの痕跡が存在するものや、自然釉が付着しているものも認められる。また222の内面の器表面は滑らかで、硯として使用されたことが推定される。

224～229は、貼付高台を有する器高の低い杯身である。底部の器壁は体部や口縁部よりも厚く、内面の底部の器表面には凹凸が認められる。体部から口縁部にかけては、器壁が薄くなりながら斜め上方へ直線的に立ち上がり、口縁端部はわずかに外湾して丸く仕上げている。貼付高台はいずれも低く、接地部の中央部分がわずかに窪んでいるものが多い。内面全体と外面の体部から口縁部にかけてはヨコナデを行い、外面の底部はヘラ切り未調整である。

230～235は、高台を有しない杯身である。全体の器形は、前述した貼付高台を有する器高の低い杯身から高台を取り除いたものに酷似している。内外面の調整手法は、前述した224～229の杯身と同じである。

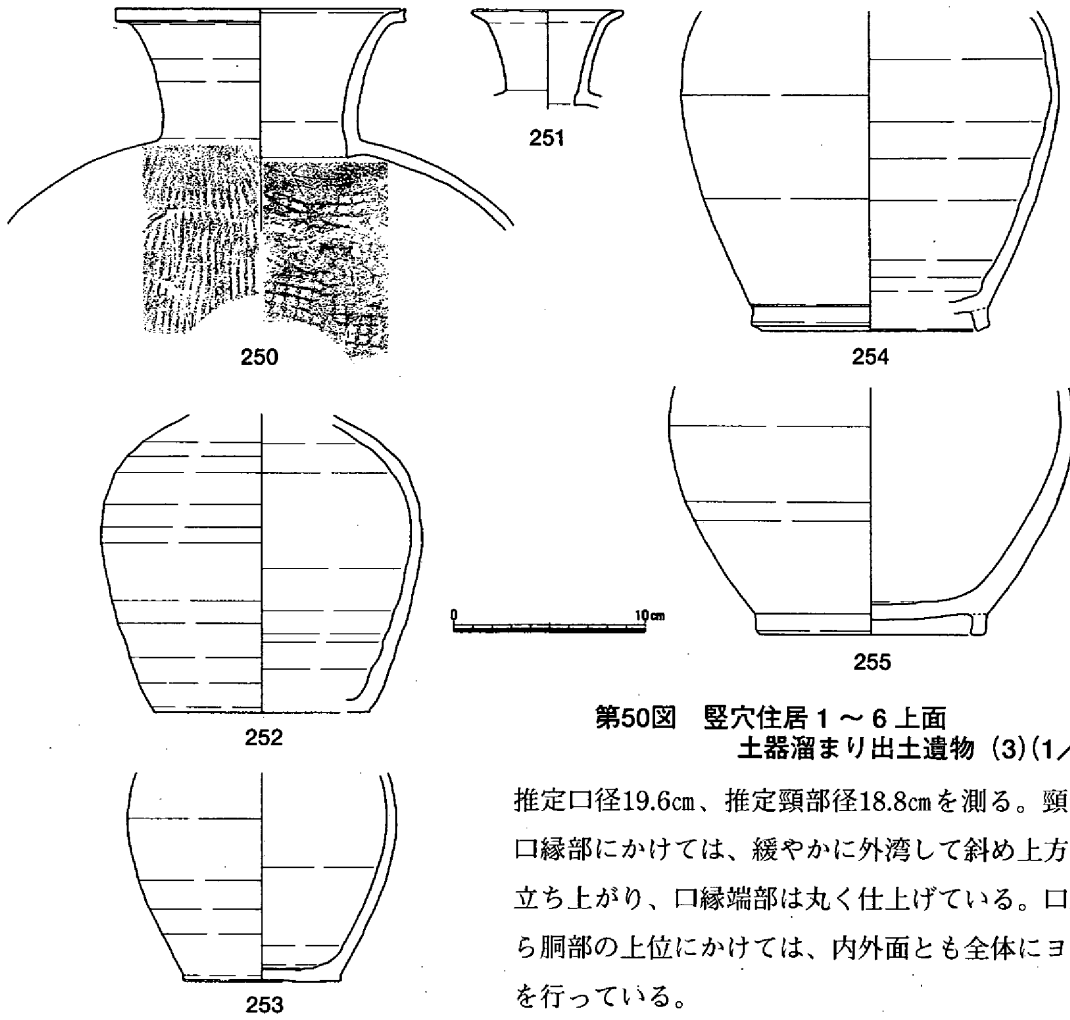
236～242は、貼付高台を有する器高の高い杯身である。全体の器形を把握することができる239の計測値は、口径15.8cm、器高7.5cmである。高台は底部の内側へ寄った部分に位置し、いずれも低くて接地部が丸くなったものが多い。底部はほぼ水平で器壁が厚く、体部から口縁部にかけての器表面には、内外面とも凹凸が顕著に認められる。体部から口縁部にかけては、わずかに外湾しながら斜め上方へ立ち上がり、口縁端部は器壁が薄くなって丸く仕上げている。内面全体と外面の体部から口縁部にかけてはヨコナデを行い、外面の底部はヘラ切り未調整で、ロクロの回転方向は右と左が混在している。これらの杯身には、内面または外面の底部にヘラ記号を有するもの（237～239・242）が認められる。

243と244は皿である。前者の計測値は、推定口径16.0cm、器高2.8cmである。後者の計測値は、推定口径13.0cm、器高2.1cmである。底部はほぼ水平で、口縁部は斜め上方へ短く立ち上がる。どちらも内面は全体にヨコナデを行い、仕上げナデを加えている。外面の体部から口縁部にかけてはヨコナデを行い、外面の底部はヘラ切り未調整である。

245と246は壺蓋で、外面天井部の中央につまみが存在する。天井部はほぼ水平で器壁が厚く、口縁端部へ移行するにしたがって器壁が薄くなっている。245の口縁部は斜め下方へ「ハ」字状に張り出し、口縁端部は短く外湾して丸く仕上げている。内面全体と外面の口縁部はヨコナデを行い、外面の天井部はヘラケズリを施している。

247はほぼ完形品の小型の平瓶で、口径4.7cm、器高6.6cm、胴部径11.2cm、底径8.0cmを測る。外面の底部はヘラ切り未調整で、それ以外の部分は内外面ともヨコナデを行っている。

248は大型の甕の口縁部小破片であるが、外面の上位に波状文が施されている。249は甕の破片で、



第50図　竪穴住居１～６上面
土器溜まり出土遺物（3)(1／4)

推定口径19.6cm、推定頸部径18.8cmを測る。頸部から口縁部にかけては、緩やかに外湾して斜め上方へ短く立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げている。口縁部から胴部の上位にかけては、内外面とも全体にヨコナデを行っている。

250～255は、壺の口縁部と胴部から底部にかけての破片である。**250**の胴部上位から口縁部の破片は、推定口径15.0cm、推定頸部径10.4cmを測る。頸部から口縁部にかけては、緩やかに外湾しながら斜め上方へ立ち上がり、口縁端部は短く外反して外側に面が認められる。口縁部から頸部にかけては全体にヨコナデを行い、内面の胴部には格子目のタタキ痕跡が存在し、外面の胴部には平行タタキ痕跡が認められる。**251**は口径8.0cm、頸部径4.4cmを測る小型の口縁部破片で、端部は丸く仕上げられている。**252～255**は、長胴形を呈する胴部から底部にかけての破片で、胴部の最大径は中位より上方の肩部に存在し、貼付高台の有無の違いが認められる。これらの底部の外面はヘラ切り未調整で、それ以外の部分はヨコナデを行っている。

以上に説明した須恵器は、その器種構成のみならず形態的特徴や調整手法から、前述した土師器と同様に、９世紀前葉の平安時代に属すると思われる。

(3) 鉄　器

竪穴住居１～６の上面に検出した土器溜まりでは、鉄器が鉄滓に混在した状態で出土した。鉄器の種類は、刀、刀子、鏃、釘などである。

Ｍ１の刀は大型品であるが、腐食が著しくて外形が不明確である。茎部分に木質が残存している。

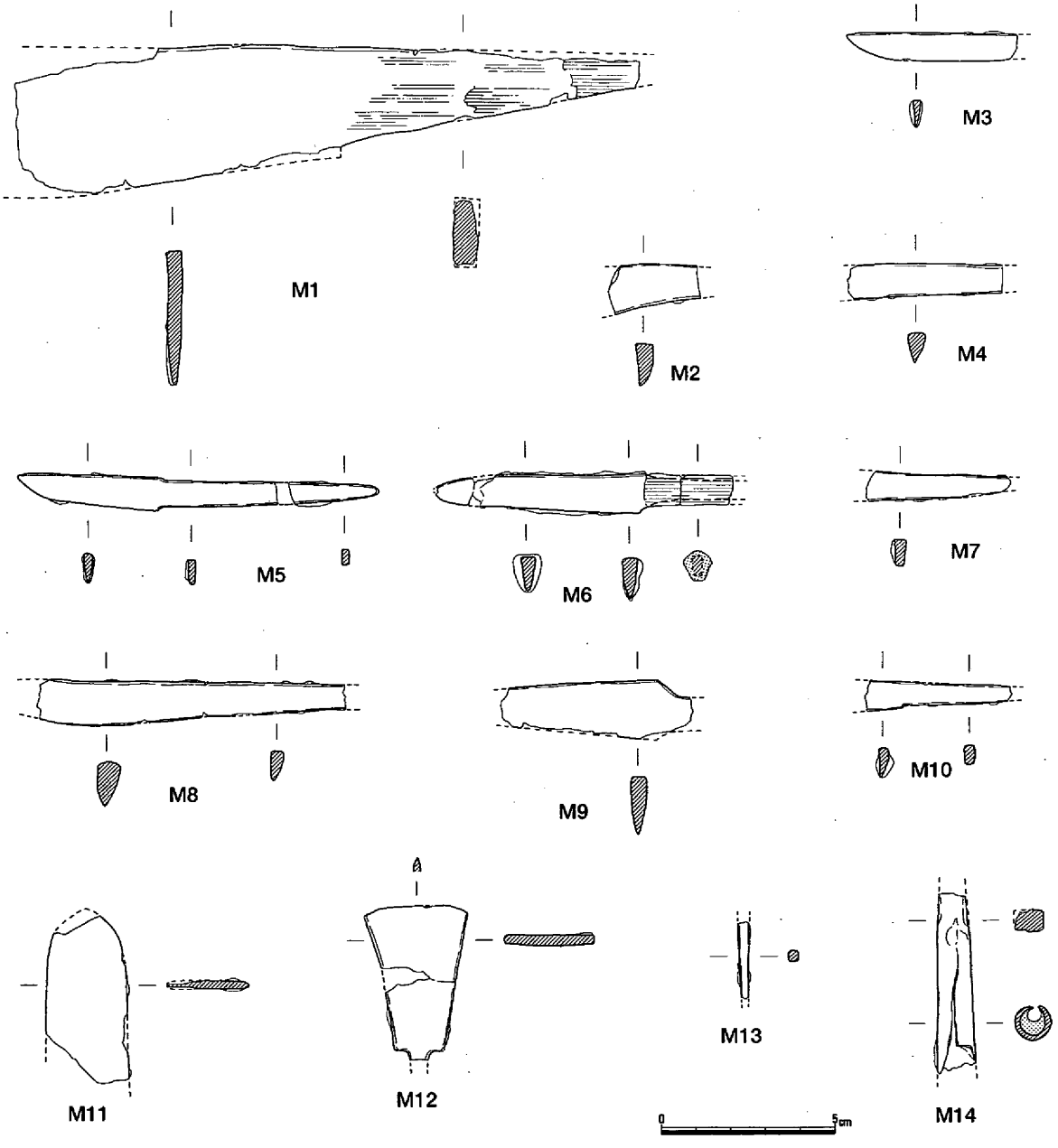
Ｍ２～M10は刀子である。**Ｍ２**と**Ｍ４**は茎部分の小破片である。**Ｍ３**は刀身部だけの破片である。**Ｍ５**は刀身部よりも長い茎部分の一部を欠損し、関部分は両側に段が認められる。**Ｍ６**の関部分は両

側に段が存在し、端部を欠損した茎部分に木質が残存する。Ｍ７は茎部分だけの小破片で、両端部を欠損している。Ｍ８は刀身部から茎部分にかけての破片で、関部分に段が認められない。Ｍ９も刀身部から茎部分にかけての破片であるが、関部分の両側に段が存在する。M10は両端部分を欠損した刀身部から茎部分にかけての破片で、関部分の片側だけに段が認められる。

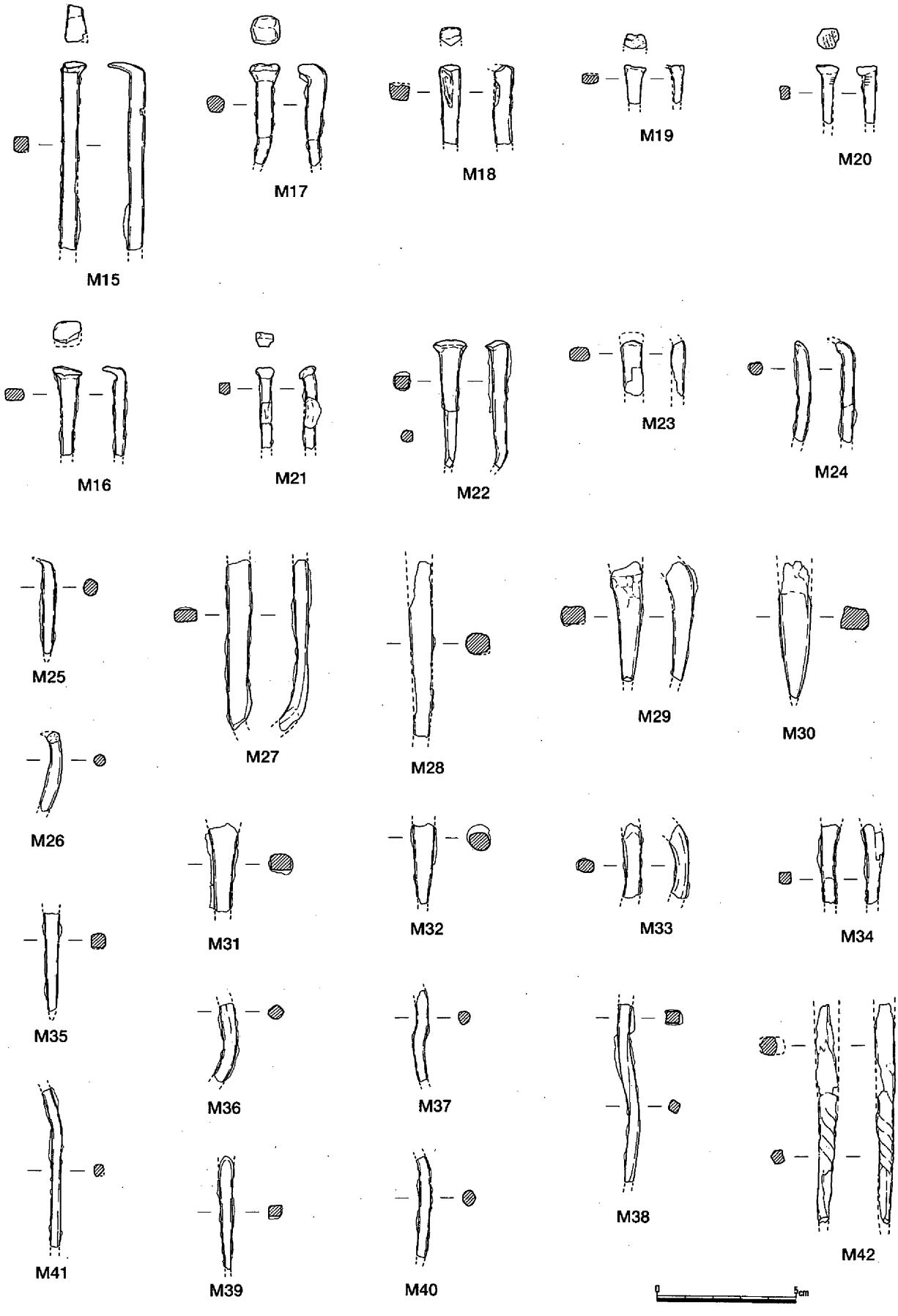
M11～M13は鏃である。M11は平根の長三角形式鉄鏃の鏃身部だけの破片である。M12は平根の方頭式鉄鏃で、関部分から欠損している。M13は茎部分だけの小破片である。

M14は不明鉄器で、袋部分の内部に木質が残存している。

M15～M42は釘である。M15とM26は、頭部の全形または一部分が残存している。M15とM16は、頭部を逆「Ｌ」字形に折り曲げ、断面形は正方形または長方形である。M22～M26は、頭部の折り曲げ部分で欠損している。M27～M42は、いずれも両端部分を欠損している。比較的長くて両端部分を欠損したM38とM42には、捩じれているのが認められる。



第51図　竪穴住居１～６上面土器溜まり出土遺物（4）（1／2）



第52図　竪穴住居１～６上面土器溜まり出土遺物（5）（1／2）

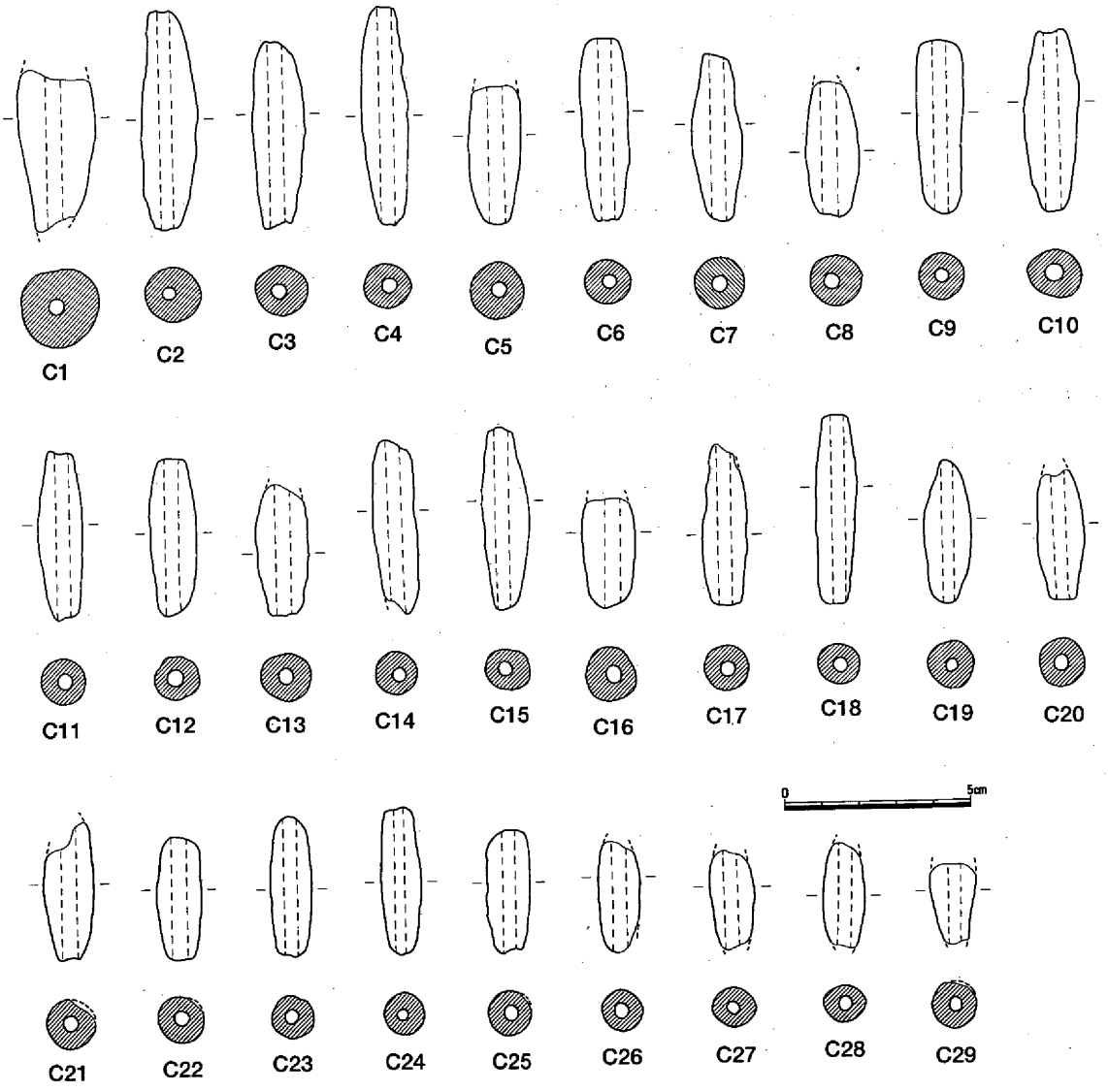
(4) 土製品

竪穴住居１～６の上面の土器溜まりから出土した土製品は、土錘だけである。土師器のように狭い範囲に集中して出土するのではなく、比較的広い範囲から普遍的に採集された。

土錘の形態は、いずれも管状土錘と呼ばれるものである。全体が細長くて、両端の径が中央部分よりも小さいのが一般的で、両端を結ぶ円孔が存在する。

完形品であるC２の計測値は、長さ5.7cm、最大径1.5cm、孔径0.4cm、重さ11.9ｇである。またC４の計測値は、長さ5.9cm、最大径1.3cm、孔径0.4cm、重さ7.7ｇである。片方の端部の径が大きいC６の計測値は、長さ4.9cm、最大径1.3cm、孔径0.4cm、重さ6.8ｇである。中央部分の径が両端よりも著しく大きいC７の計測値は、長さ4.4cm、最大径1.4cm、孔径0.4cm、重さ6.6ｇである。全体が細長いC18の計測値は、長さ5.1cm、最大径1.1cm、孔径0.4cm、重さ5.1ｇを測る。

これらの土錘の胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で、灰色または橙色に近い色調を呈するものが多い。また表面に指紋や黒斑が存在するものや、二次焼成を受けているものもある。



第53図　竪穴住居１～６上面土器溜まり出土遺物（6）（1／2）

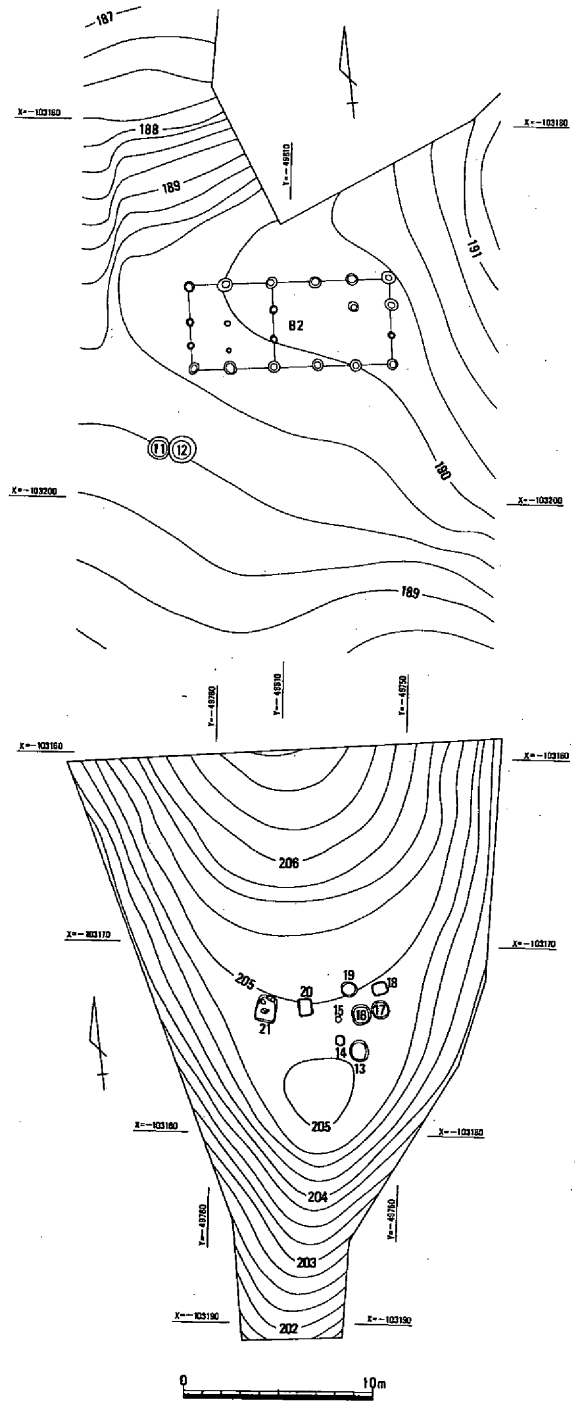
第６節　江戸時代の遺構と遺物

(1) 建　物

建物２（第55図、図版61－３）

１区の調査範囲の中央部に検出した大型の掘立柱建物で、南西方向へ約８ｍ寄った地点には、土壙11と土壙12が確認されている。

この掘立柱建物の棟方向はＮ－86°－Ｗを示し、桁行５間、梁行３間になっていたが、桁行に位置する柱穴はいずれも規模が大きく、１間の柱穴間の距離は梁行よりも広くしていた。桁行の長さは10.64ｍを測り、梁行の長さは4.56ｍであった。検出した柱穴の平面形は円形または楕円形に近い形態を呈し、断面形はいずれも「Ｕ」字形になっていた。桁行の柱穴間の距離は190～240cmで、北側に位置するＰ６とＰ10の間が最も広くなっていた。梁行の柱穴間の距離は、西側も東側も間隔が不揃いで、130～190cmになっていた。また梁行の柱穴の検出面からの深さは、西側も東側も南側の桁行に近いもの（Ｐ２とＰ16）が著しく浅くなり、全体の規模も小さかった。この掘立柱建物のやや西方向へ寄った位置には、梁行と同じ方向であるＰ７とＰ10の間に少し規模の小さい２個の柱穴（Ｐ８とＰ９）が存在したが、柱穴間の距離は約150ｍに揃っていたものの、検出面からの深さは梁行の柱穴と同様に、片方の柱穴が著しく浅くなっていた。さらにＰ５とＰ６の間にはＰ20とＰ21とが検出され、Ｐ13とＰ14の間にもＰ19が確認されているが、この大型の掘立柱建物の内部構造がどのようになっていたのか理解できないので、中間に位置するそれぞれの柱穴がいかなる役目を果たしていたのか不明であった。ただＰ13とＰ14の間に検出したＰ19は、桁行方向に位置するＰ９とＰ17を結ぶ直線上に存在したのは事実である。なお桁行方向に存在した柱穴は、検出面から底部までの深さが30～80cmと計測値に著しい差が認められるが、この掘立柱建物が検出された地点の地形

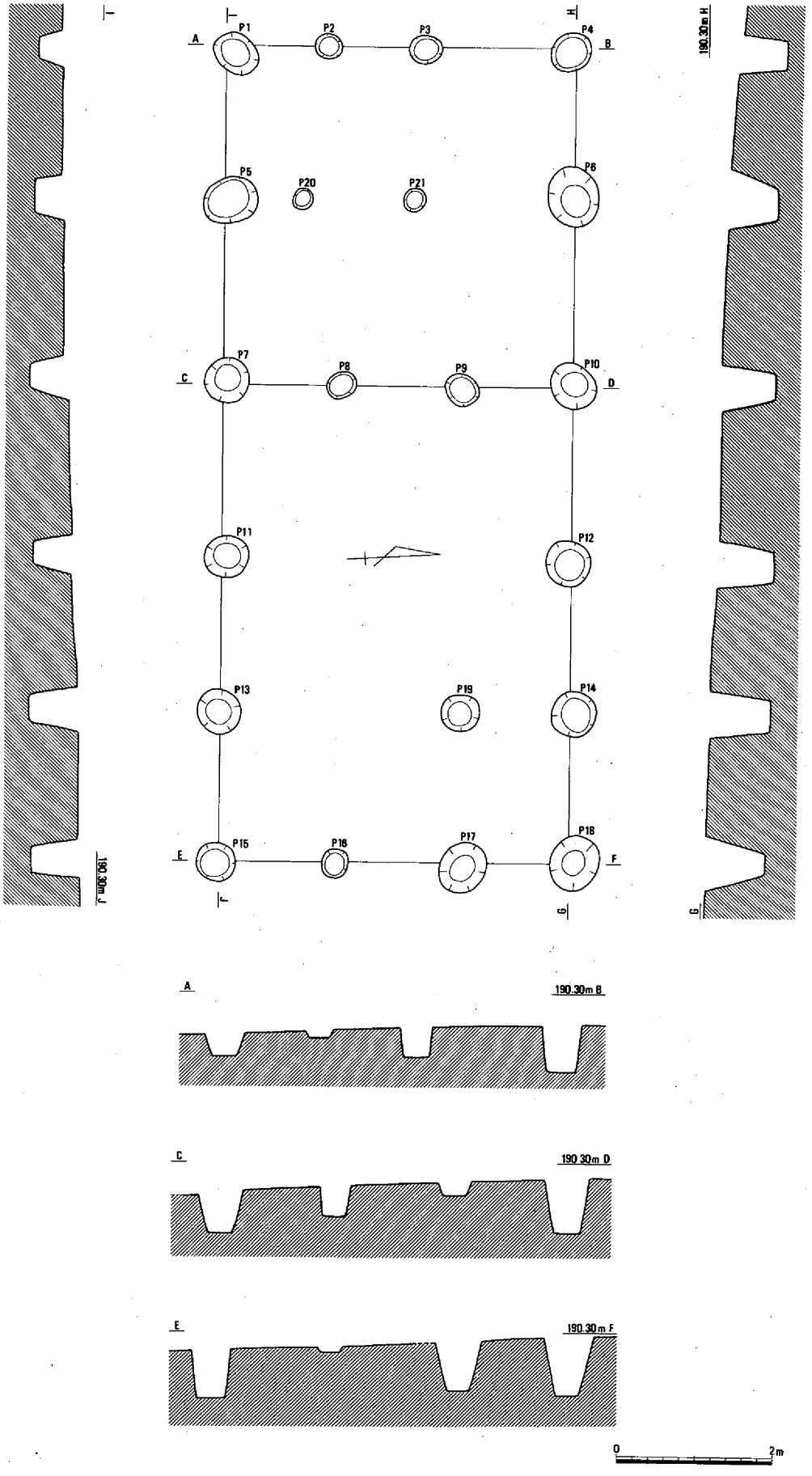


第54図　江戸時代遺構配置図（1／400）

に沿って底部の深さが決められており、地形の高い位置では底部のレベルが高くて検出面から底部まで深く、地形の低い部分では底部のレベルが低くて検出面から底部まで浅くしていた。

この大型の掘立柱建物の南西方向には、土壙11と土壙12の２基の土壙が接した状態で確認されている。これらの土壙は、検出した位置関係から、建物２に付属する便所ではないかと推定したが、小皿や釘などが出土したものの、確証を得ることはできなかった。

柱穴内に堆積していた淡青灰色砂質土から肥前磁器の染付皿と思われる小破片が出土したので、建物２は江戸時代に属すると考えた。



第55図　建物２（1／80）

(2) 土　壙

土壙11（第56図）

１区の調査範囲のほぼ中央部に検出した土壙で、後述する土壙12と接する状態で存在した。２基の土壙が接している部分を精査したところ、この土壙11が新しくて土壙12が古いことが判明した。この土壙の北東方向へ約８ｍ寄った地点には、大型の掘立柱建物である建物２が確認されている。

平面形は長径120㎝、短径110㎝の楕円形に近い形態を呈し、検出面からの深さは土壙12に接する部分で43㎝になっていた。底部は西方向から東方向に向かってわずかに傾斜し、断面形は「Ｕ」字形であった。内部には割り石を多く含んだ淡茶褐色土が堆積し、土師質土器の小皿と釘などの鉄器が出土した。

256の土師質土器の小皿は、口径7.9㎝で底部を欠損している。この小皿は、ロクロなどの回転台を使用して成形している。底部から口縁部にかけてわずかに屈曲しながら斜め上方へ立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げている。内外面とも全体にヨコナデを行い、焼成は良好で、にぶい橙色または橙色を呈し、口縁端部に煤が付着している。

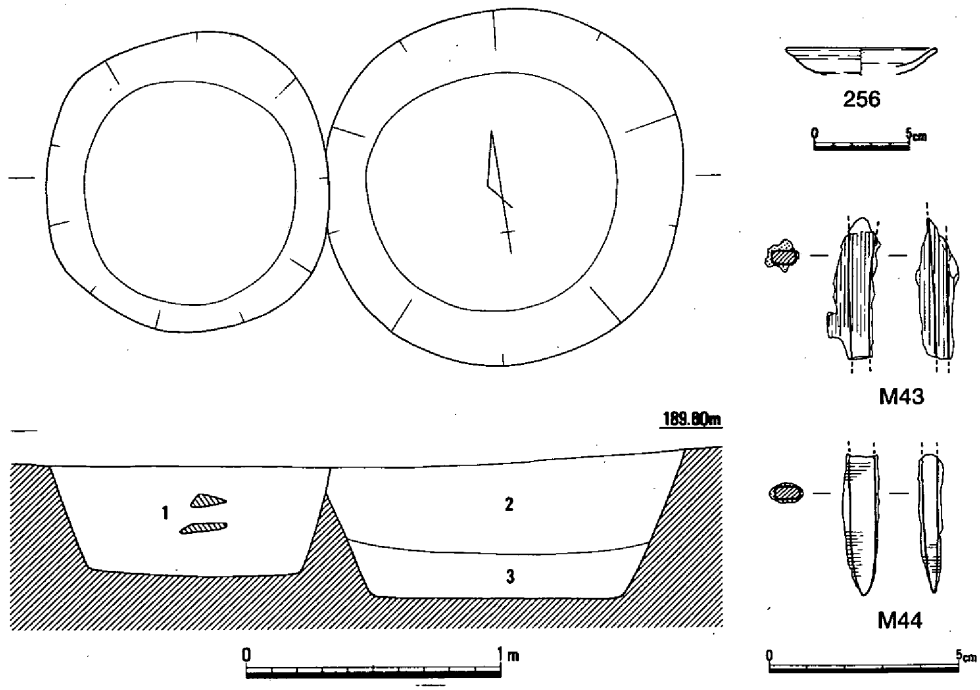
この土師質土器の小皿の形態的特徴や調整手法から、土壙11は17世紀中葉から後葉にかけての江戸時代に属すると思われる。

なお**M43**の不明鉄器は、断面形が長方形である。両端部とも欠損し、縦方向の木質が残存しているから、釘になるのかもしれない。**M44**の釘は、先端部分だけの破片である。断面形は長方形で、横方向の木質が残存している。

土壙12（第56図）

この土壙も１区の調査範囲のほぼ中央部に、前述した土壙11と接した状態で検出した。

検出面での平面形は長径142㎝、短径138㎝の楕円形に近い形態を呈し、検出面からの深さは東端部分で58㎝であった。底部はほぼ水平になり、断面形は「Ｕ」字形を呈していた。土壙内には淡黄灰色土と明黄褐色土が堆積していたが、遺物は出土しなかった。

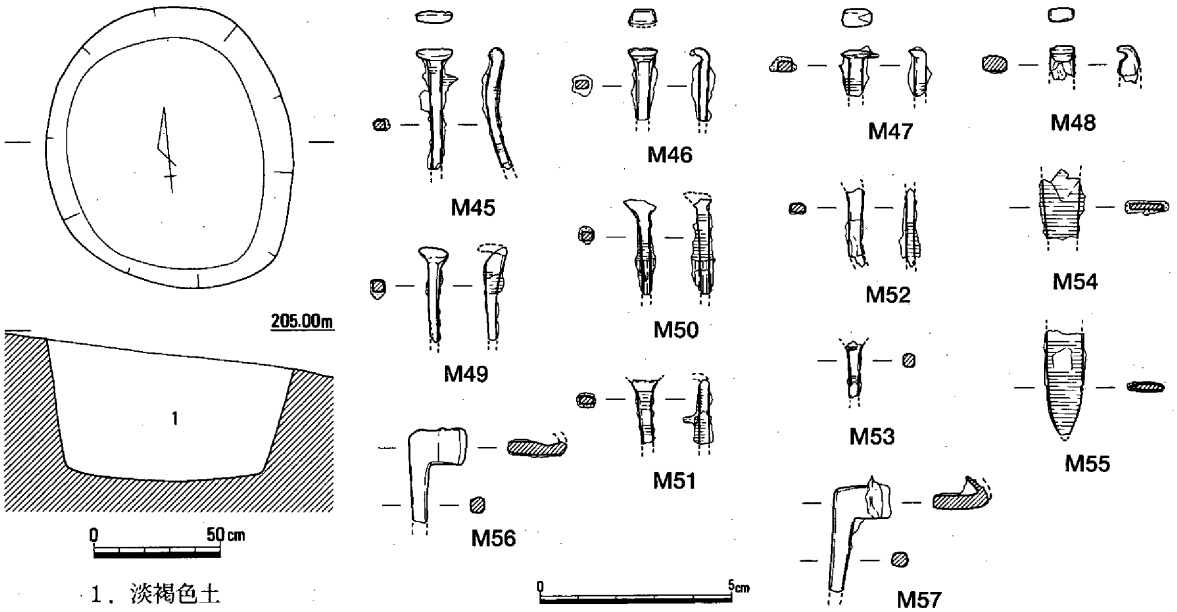


1．淡茶褐色土　　2．明黄褐色土　　3．淡黄灰色土

第56図　土壙11・12（1／30）・出土遺物（1／4、1／2）

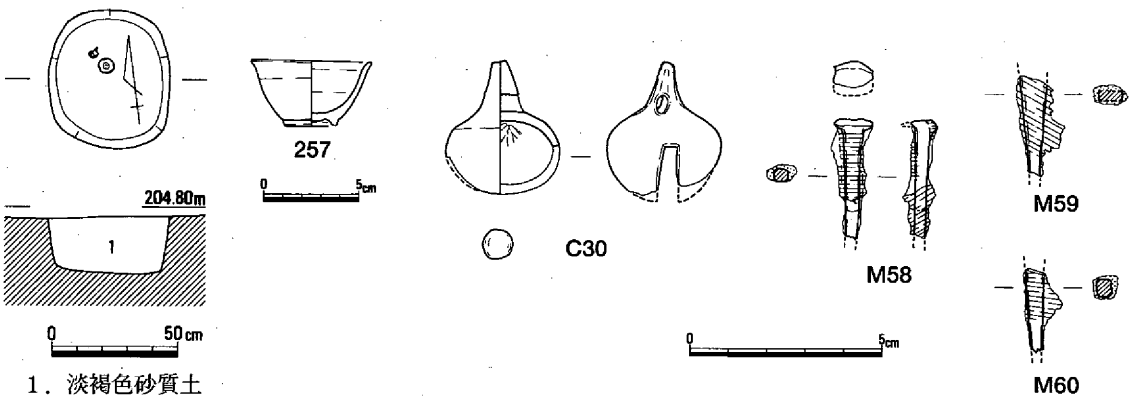
遺構の切り合い状態で、前述した土壙11がこの土壙12よりも新しいことが判明しているから、この土壙12は17世紀中葉から後葉にかけての時期か、それよりも古い時期に属することが考えられる。ところが両土壙内に堆積していた土砂が異なっていたものの、調査によって得た感触は、両土壙が造られた時期にそれほど極端な時期差があるとは思われなかった。すなわち、ほぼ同時期に存在した遺構と推定されたのである。

この土壙12と前述した土壙11は、大型の掘立柱建物である建物２に近接した地点に検出された。その位置関係から、２基の土壙は建物２に付属する屋外の便所ではないかと考えたが、小皿や釘などの鉄器が出土したものの、土壙の周辺に柱穴などが存在しなかったので、確証は得られなかった。



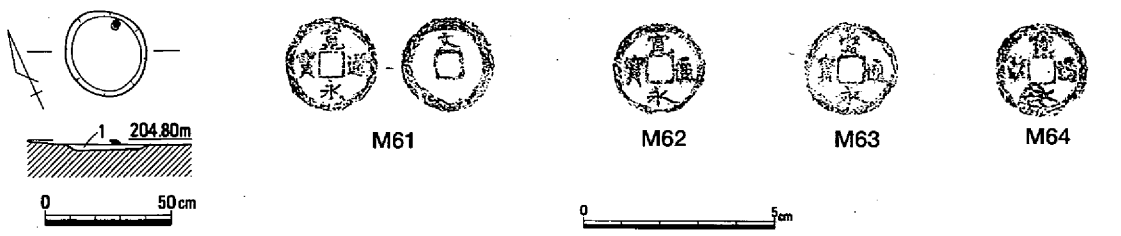
1．淡褐色土

第57図　土壙13（1／30）・出土遺物（1／2）



1．淡褐色砂質土

第58図　土壙14（1／30）・出土遺物（1／4、1／2）



1．暗褐色砂質土

第59図　土壙15（1／30）・出土遺物（1／2）

土壙13（第57図、図版61－１）

２区の丘陵上に検出した土壙で、確認された９基に土壙のうちでは、最も地形の低い南東方向へ寄った位置に存在した。

平面形は長径112㎝、短径98㎝の楕円形に似た形態を呈し、検出面からの深さは西側の部分で55㎝になっていた。底部は中央部が周辺部よりもわずかに窪み、断面形は「U」字形を呈していた。土壙内には淡褐色土が堆積し、鉄器が出土した。

M45～M55は釘である。頭部は逆「L」字状に折り曲げ、断面形は長方形や正方形だけでなく、扁平な楕円形を呈するものも認められ、横方向の木質が残存している。

M56と**M57**は不明鉄器である。幅の狭い部分の断面形は正方形で、幅の広い先端部には折り返しが認められる。

この土壙は近世土壙墓と推定され。詳細な時期を知る出土遺物はないものの、おそらく17世紀中葉から後葉にかけての江戸時代に属すると思われる。

土壙14（第58図、図版61－１）

この土壙も、２区の丘陵尾根上に検出した土壙で、南東方向約１ｍの地点には前述した土壙13が確認されている。

平面形は長径54㎝、短径48㎝の楕円形に近い形態を呈し、検出面からの深さは22㎝になっていた。底部は西方向から東方向へ向かってわずかに傾斜し、断面形は「U」字形を呈していた。土壙内には淡褐色砂質土が堆積し、肥前磁器の小坏、土鈴、釘が出土した。

257の肥前磁器の白磁小坏は、口径6.2㎝、器高3.4㎝、底径2.7㎝を測るほぼ完形品である。口縁端部はわずかに端反りになり、底部には低い高台が認められる。高台の畳付き部分を除いて、内外面とも全体に灰白色の釉薬が施されている。

C30の土鈴は、高さ3.5㎝、最大径3.1㎝を測り、上部には円孔が貫通している。一部分が破損していることもあって、重さ0.5ｇの土製の玉も存在している。胎土には砂粒の少ない水漉粘土を使用しており、焼成は良好で、全体に灰白色を呈している。

M58～M60の釘は、断面形がいずれも長方形である。**M58**の頭部は逆「L」字状に折り曲げ、上下で残存する木目の方向が異なっている。**M59**と**M60**は両端を欠損しているが、前者には斜め方向の木質が、後者には横方向の木質がそれぞれ残存している。

この土壙も近世土壙墓と推定され、出土した肥前磁器の白磁小坏から、17世紀中葉の江戸時代に属すると考える。

土壙15（第59図、図版61－１）

２区の丘陵上で検出した小規模な土壙で、確認された９基の土壙のほぼ中央部に位置し、南方向約１ｍの地点には前述した土壙14が確認されている。

平面形は長径35㎝、短径32㎝の楕円形に近い形態を呈し、上面が著しく削平されて、検出面からの深さは２㎝と浅くなっていた。底部はほぼ水平で、断面形は浅い「U」字形を呈していた。土壙内には暗褐色砂質土が堆積し、北東端部の位置に土壙の底部から約２ｍほど浮いた状態で、４枚の寛永通寶が重なって出土した。

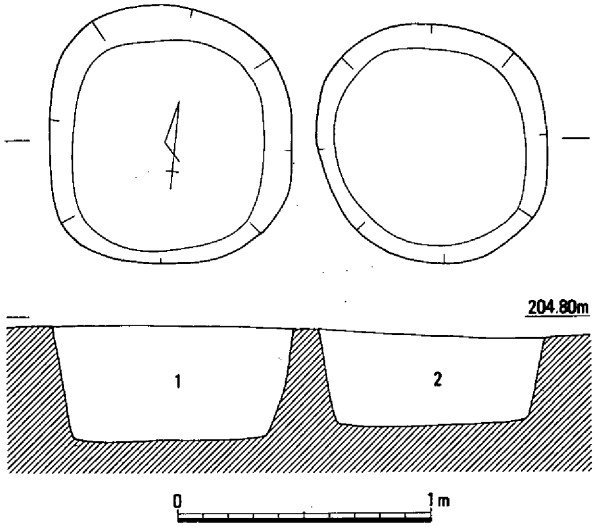
M61の寛永通寶は、背面の内郭の上に「文」の１字が鋳込まれている。**M62～M64**は背面が無文のものであるが、表面が腐食して、「寛永通寶」の各文字が不鮮明になっている。

出土遺物は４枚の寛永通寶だけであるが、この土壙15も小規模な近世土壙墓と推定され、17世紀後葉の江戸時代に属すると思われる。

土壙16（第60・61図、図版61－１）

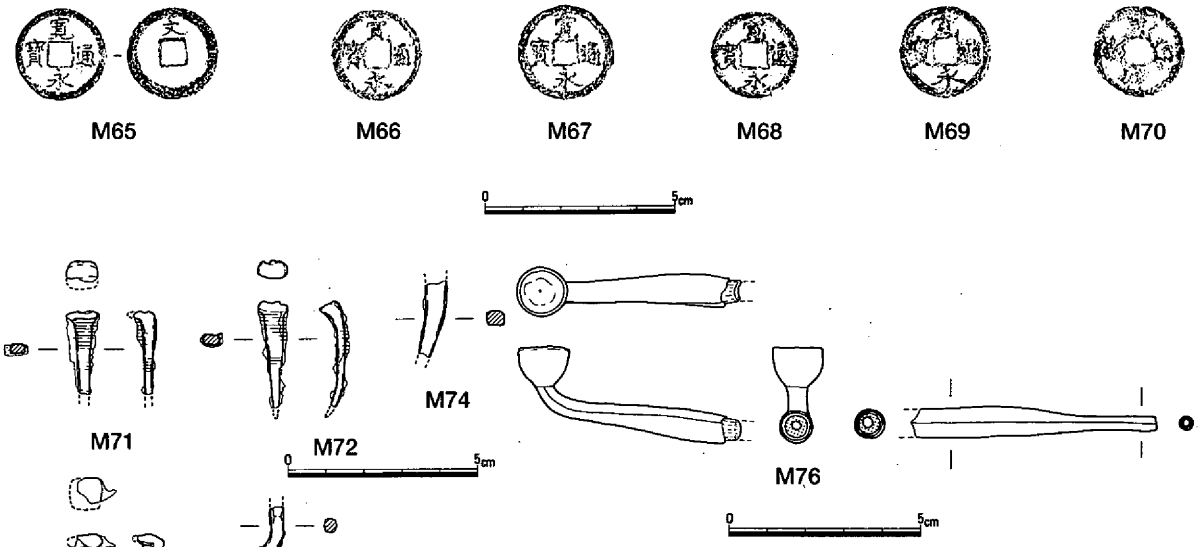
２区の丘陵上に検出した土壙で、東方向に近接して後述する土壙17が確認されている。また西方向へ約１ｍの地点には前述した土壙15が存在し、南方向へ約２ｍの地点には土壙13が確認されている。

平面形は長辺102㎝、短辺95㎝の隅丸長方形に似た不整形な形態を呈し、検出面からの深さは中央部分で45㎝になっていた。底部は東方向から西方向に向かってやや傾斜し、中心部分が周辺部よりもわずかに窪んでいた。土壙内には暗茶褐色砂質土が堆積し、寛永通

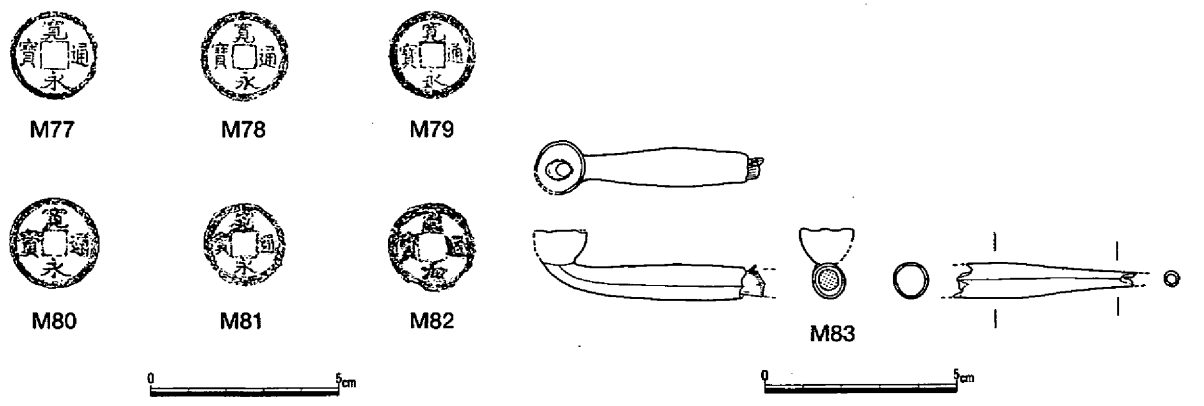


１．暗茶褐色砂質土　　２．暗黄褐色砂質土

第60図　土壙16・17（1／30）



第61図　土壙16出土遺物（1／2）



第62図　土壙17出土遺物（1／2）

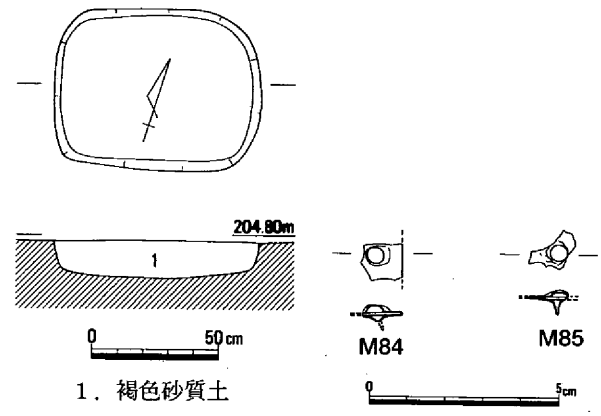
寛、釘、煙管が出土した。

M65の寛永通寶は、背面の内郭の上に「文」の１字が鋳込まれている。M66～M70の寛永通寶は、背面が無文のものである。M70の表面は、腐食が著しくて、「寛永通寶」の各文字が不鮮明である。

M71～M75は釘である。断面形は長方形のもの（M71～M74）と正方形のもの（M75）とが認められるが、いずれも先端部分を欠損しているものばかりである。M71とM73の頭部は、どちらも逆「L」字状に折り曲げられ、横方向の木質が残存している。M72は全体に湾曲し、横方向の木質が残存している。M74とM75も湾曲しているが、木質は認められない。

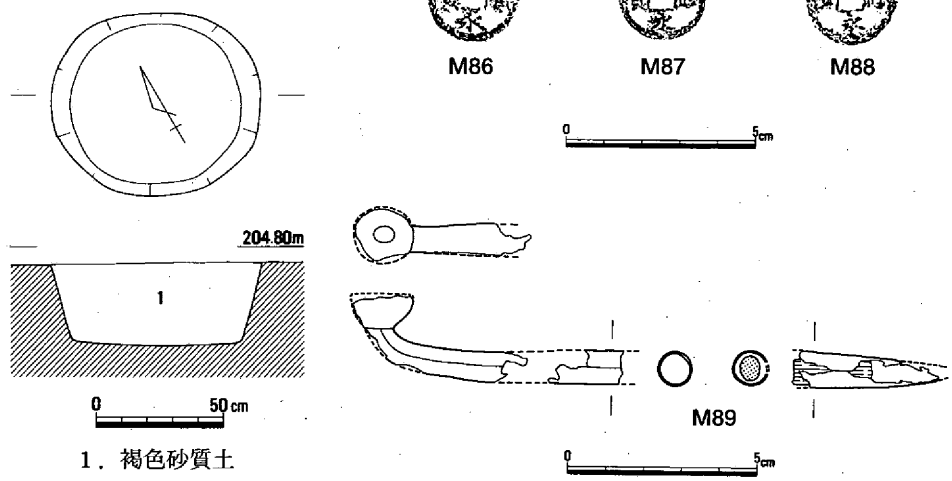
M76は胴製の煙管で、雁首と吸口に分かれている。残存状態は極めて良好で、火皿の計測値は口径1.3㎝、高さ1.0㎝である。首部の形態は全体に細く造られ、脂返しの湾曲は比較的小さくなっている。

このような各種の出土遺物から、土壙16は近世土壙墓と推定され、背面に「文」の文字を有する寛永通寶が出土しているので、17世紀後葉の江戸時代に属すると考える。



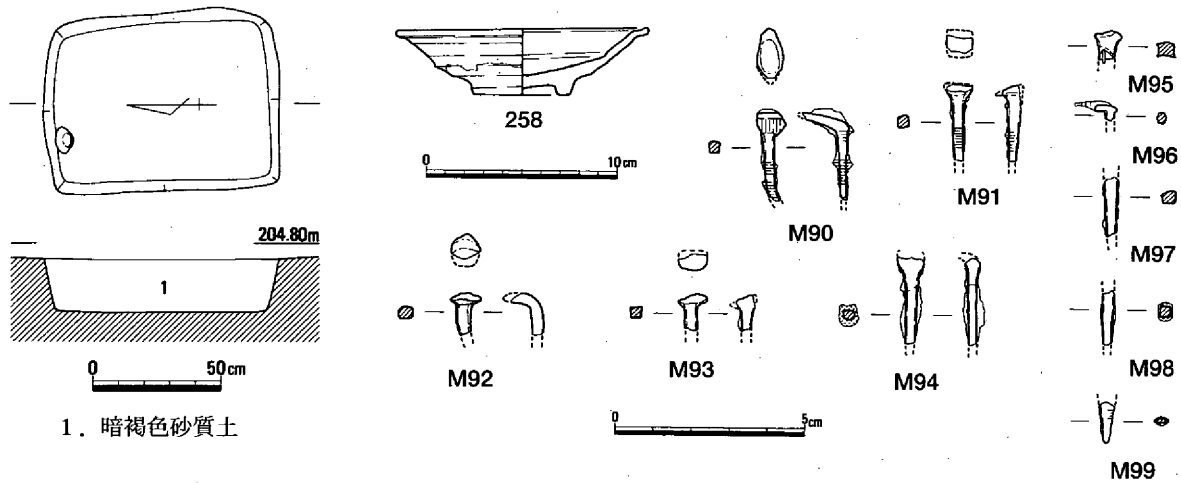
1．褐色砂質土

第63図　土壙18（1／30）・出土遺物（1／2）



1．褐色砂質土

第64図　土壙19（1／30）・出土遺物（1／2）



1．暗褐色砂質土

第65図　土壙20（1／30）・出土遺物（1／4、1／2）

土壙17（第60・62図、図版61－１）

２区の丘陵上に検出した土壙で、西側には前述した土壙16が確認されている。

平面形は長径98㎝、短径90㎝の楕円形に近い形態を呈し、検出面からの深さは38㎝になっていた。底部の中央部はわずかに窪み、断面形は「U」字形を呈していた。土壙の内部には暗茶褐色砂質土が堆積し、６枚の寛永通寶と煙管が出土した。

M77～M82の寛永通寶は、いずれも背面が無文のものである。**M77**の「寛永通寶」の各文字は鮮明であるが、**M82**は全体の腐食が進行して文字が判読できない状態である。

M83は銅製の煙管で、雁首と吸口とに分離している。火皿は口径1.4㎝、高さ0.8㎝を測り、脂返しの径は前述した**M76**よりも全体に太くなって、ほとんど湾曲していない。

この土壙17も近世土壙墓で、17世紀中葉から後葉にかけての江戸時代に属するであろう。

土壙18（第63図、図版61－１）

この土壙も２区の丘陵上に検出したもので、確認された９基の土壙のうちでは、北東方向に面した端部に位置していた。

平面形は長辺81㎝、短辺64㎝の隅丸長方形に似た形態を呈し、検出面からの深さは中心部分で15㎝になっていた。底部は舟底のように中心部分が深くなり、断面形は「U」字形を呈していた。土壙内には褐色砂質土が堆積し、２個の棺金具が出土した。

M84と**M85**の棺金具は、どちらも欠損品である。前者は鉄板に鋲を打ち込み、裏面に木質が残存している。後者は鋲を打ち込んだ部分だけが残存し、周辺部分は欠損して不明である。

この土壙18も近世土壙墓と推定され、周辺部に検出された土壙群と同様に、17世紀中葉から後葉にかけての江戸時代に属するのではなかろうか。

土壙19（第64図、図版61－１）

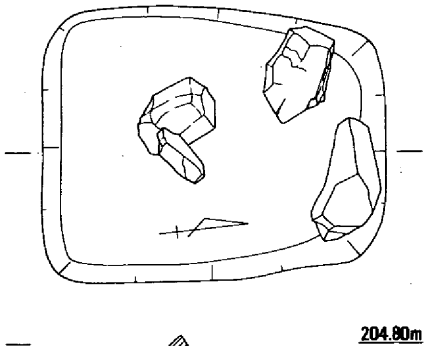
２区の丘陵上に検出した土壙で、９基の土壙の中では最も地形の高い北端部分に位置していた。

平面形は長径82㎝、短径72㎝の楕円形に近い形態を呈し、検出面からの深さは33㎝になっていた。底部の中央部は周辺部よりもわずかに窪み、断面形は「U」字形になっていた。土壙内には褐色砂質土が堆積し、３枚の寛永通寶と煙管が出土した。

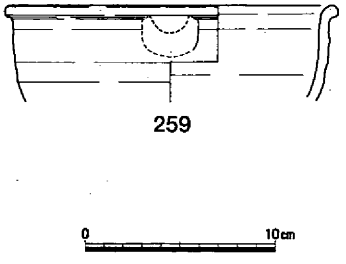
M86～M88の寛永通寶は、３枚とも背面が無文である。

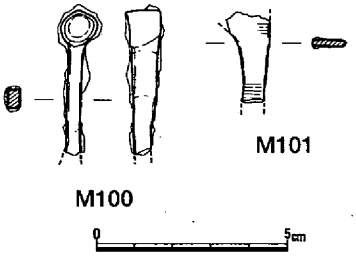
M89の銅製の煙管は、表面が腐食して残存状態が悪い。

この土壙19も近世土壙墓と推定され、17世紀中葉から後葉にかけての江戸時代に属すると思われる。



1．暗茶褐色砂質土
2．淡褐色砂質土





第66図　土壙21（1／30）・出土遺物（1／4、1／2）

土壙20（第65図、図版61－１）

この土壙も、２区の丘陵上で検出したものである。

平面形は長辺91㎝、短辺70㎝の隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは20㎝になっていた。底部はほぼ水平で、断面形は「U」字形を呈していた。内部には暗褐色砂質土が堆積し、肥前陶器の皿と釘が出土した。

258の肥前陶器の皿は、口径12.9㎝、器高3.5㎝を測る。口縁端部は溝縁になって屈曲し、底部に高台が認められる。外面の高台周辺を除いて、灰オリーブ色を呈する釉薬が施され、砂目積みで焼成している。

M90～M99は釘である。頭部は逆「L」字状に折り曲げられ、断面形は正方形のものと長方形のものが認められる。

この土壙20も近世土壙墓と推定され、出土した肥前陶器の皿から、17世紀中葉の江戸時代に属すると考える。

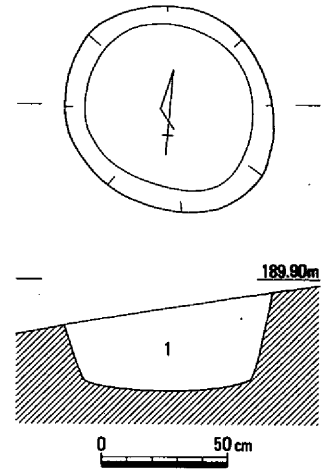
土壙21（第66図、図版61－１）

２区の丘陵上に検出した土壙で、平面形は長辺136㎝、短辺108㎝の隅丸長方形に近い形態を呈し、検出面から深さは36㎝になっていた。土壙内には割り石が認められ、肥前陶器の片口や棺金具などが出土した。

259の肥前陶器の片口は、推定口径17.0㎝で注口が剥離している。

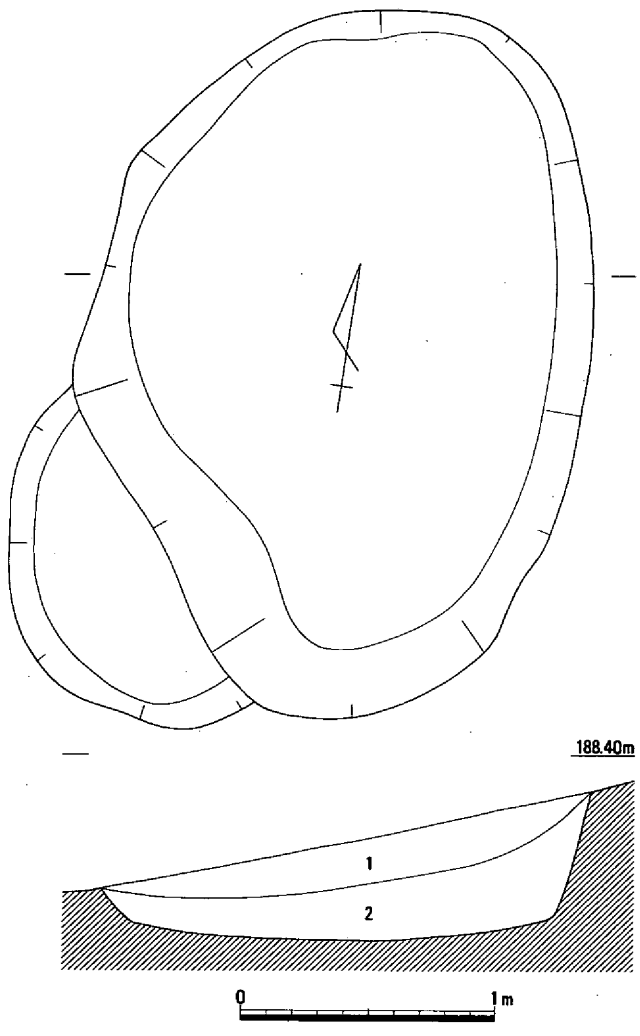
M100の棺金具と**M101**の不明の鉄器は、断面形が長方形で、後者には木質が残存する。

土壙21も近世土壙墓で、17世紀中葉の江戸時代に属するであろう。



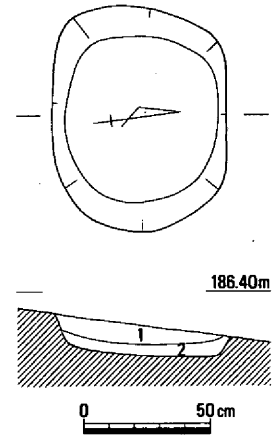
１．褐色土

第67図　土壙22（1／30）



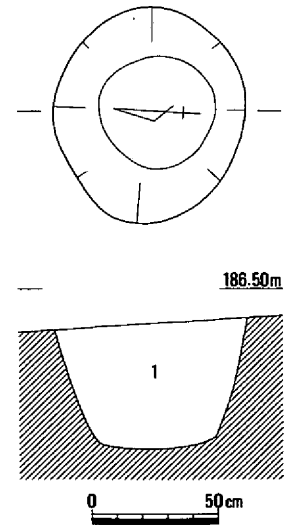
１．褐色砂質土
２．暗黄褐色砂質土

第68図　土壙23（1／30）



１．暗茶褐色土
２．黒色土（炭化物）

第69図　土壙24（1／30）



１．褐色土

第70図　土壙25（1／30）

第７節　時期不明の遺構

(1) 土　壙

土壙22（第67図）

１区の調査範囲のほぼ中央部に検出した土壙で、北側の近接した地点には、江戸時代の大型の掘立柱建物である建物２が存在し、東方向へ約３ｍ寄った地点には、古墳時代後期の土壙８が確認されている。また南西方向へ約７ｍ寄った地点には、江戸時代の土壙11と土壙12が存在し、南方向へ約６ｍ寄った地点には、古墳時代後期の竪穴住居14が確認されている。

平面形は長径88㎝、短径78㎝の楕円形に近い形態を呈し、東端部分の検出面からの深さは36㎝になっていた。底部は舟底のように中央部分が窪んで深くなり、断面形は「Ｕ」字形を呈していた。土壙内には褐色土が堆積し、遺物は出土しなかった。

この土壙22の性格や造られた時期については、出土遺物が存在しなかったので不明である。

土壙23（第68図）

１区の調査範囲の西端部分に単独で検出された土壙で、近接した部分に遺構は確認されていない。

平面形は長径282㎝、短径200㎝の楕円形に似た不整形な形態を呈し、検出面からの深さは52㎝になっていた。底部は中心部分がわずかに窪み、断面形は「Ｕ」字形を呈していた。土壙内には暗黄褐色砂質土と褐色砂質土が堆積していたが、遺物は出土しなかった。

この単独に検出された大型の土壙23も、その性格や造られた時期が不明である。

土壙24（第69図）

１区の調査範囲の北西部分に検出した土壙で、北東方向の近接した地点には、古墳時代後期の竪穴住居15と竪穴住居16や土壙９と土壙10が存在し、北方向約９ｍの地点には、古墳時代後期に属するのではないかと思われる掘立柱建物の建物１が確認されている。

平面形は長径90㎝、短径68㎝の楕円形とも隅丸長方形とも判断できない不整形な形態を呈し、検出面からの深さは９～15㎝になっていた。底部は南方向から北方向に向かって傾斜し、断面形は「Ｕ」字形を呈していた。土壙内の底部には炭化物が厚く堆積し、その上面に炭化物を含む暗茶褐色土が認められた。土壙内を精査したが、遺物は出土しなかった。

この土壙24は、底部が傾斜して炭化物が厚く堆積していたので、鉄生産に関係した炉跡ではないかと考えられたが、造られた時期は出土遺物がないので不明である。

土壙25（第70図）

１区の調査範囲に北西部分に検出した土壙で、古墳時代後期の竪穴住居15と重なり合っていた。調査の結果、この土壙25が新しくて竪穴住居15が古いことが判明している。

平面形は長径86㎝、短径75㎝の楕円形に近い形態を呈し、検出面からの深さは52㎝になっていた。底部は中央部分が周辺部よりもわずかに窪み、断面形は「Ｕ」字形を呈していた。土壙内には褐色土が堆積し、精査したにもかかわらず遺物は出土しなかった。

この土壙25は、古墳時代後期に属する竪穴住居の壁体や壁体溝を削平して造られていたから、古墳時代後期の時代かそれよりも新しいことは推定されるが、その性格や詳細な時期は不明である。

第８節　遺構に伴わない遺物

先旦山遺跡から出土した遺物で、遺構に伴わないものは、５点の弥生土器片（260～265）と石包丁の破損品（Ｓ６）だけである。

260の壺形土器とも甕形土器とも判定するのが困難な土器片は、頸部から口縁部にかけての器壁が厚い。頸部で緩やかに外湾して口縁部に移行すると、口縁端部が斜め下方へ拡張して、外側に３条の凹線を有する面が認められる。口縁部から頸部にかけては内外面ともヨコナデを行い、内面の胴部上位は横方向のヘラケズリを施している。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で、全体ににぶい橙色を呈している。この土器片は、その形態的特徴や調整手法から、弥生時代後期前葉の時期に属するであろう。

261の口縁部破片は、口縁端部が上方へ長く立ち上がって丸く仕上げている。口径に比較すると全体の器壁は薄く、口縁部の外側には３条の凹線を有する面が認められる。内外面とも全体にヨコナデを行い、焼成は良好で、全体ににぶい橙色を呈している。

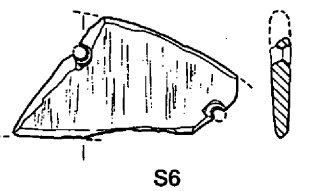
262の甕形土器の破片は、胴部の形態が長胴形を呈し、頸部の器壁が厚くなっている。胴部の最大径は中位よりやや上方にあると推定され、胴部から頸部にかけては緩やかに内湾して立ち上がり、頸部で「く」字状に外反して口縁部に移行する。斜め上方へ立ち上がった口縁部は、上方へ拡張して外側に２条に凹線を有する面が認められる。口縁部から頸部にかけては内外面とも全体にヨコナデを行い、胴部の内面は横方向のヘラケズリを施している。胴部の外面は器表面が磨滅して調整が不明であるが、横または縦方向のナデを行っているようである。

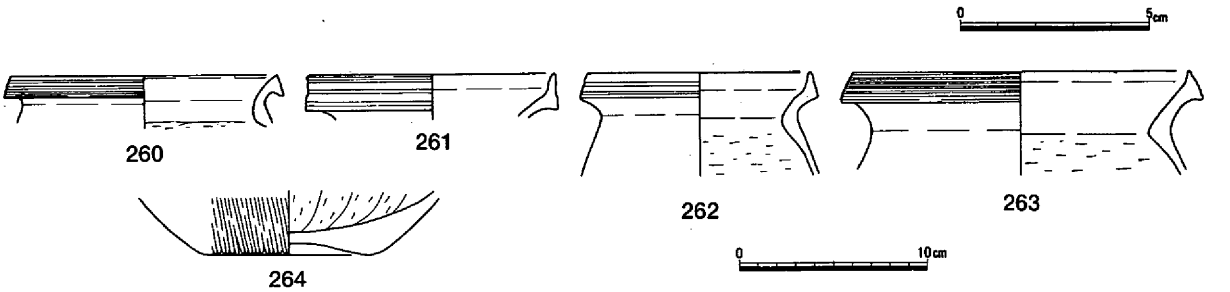
263は大型の甕形土器の口縁部破片で、推定口径が17.6cmになる。胴部の器壁は口縁部や頸部の器壁よりも薄く、底部から頸部にかけて緩やかに内湾して立ち上がると思われる。頸部で「く」字状に外反した口縁部は斜め上方へ長く立ち上がり、端部が斜め上下に拡張して、外側に５条の凹線を有する面が認められる。口縁部から頸部にかけては内外面ともヨコナデを行い、内面の胴部は横方向のヘラケズリを施している。外面の胴部は器表面が磨滅して、調整手法を観察することができない。

264の底部の破片は、上げ底になっている。内面は縦方向のヘラケズリを施し、外面には縦方向のヘラミガキ痕跡が認められる。

以上に説明した261～264の土器片は、その形態的特徴や調整手法などから、弥生時代後期前葉でも中葉に近い時期に属すると思われる。

なおＳ６の石包丁は、材質が黒色変岩である。欠損した後に新しく円孔を穿ち、再利用している。





第71図　遺構に伴わない遺物（1／4、1／2）

第9節　小　　結

先旦山遺跡で検出した遺構は、竪穴住居17軒、段状遺構1基、掘立柱建物2棟、土壙25基、溝4条であるが、発掘調査を実施した地点は、緩斜面の畑地部分の1区と丘陵の尾根上に位置する2区とに分かれていた。

1区で検出した弥生時代後期に属する9軒の竪穴住居と5基の土壙は、周囲を排水用と思われる溝に囲まれた状態で存在していた。溝に囲まれた中心部分に位置した6軒の竪穴住居は、同じ場所で何度も建て替えが行われていることが確認されたが、土層断面を精査したところ、建て替えが行われるたびに竪穴住居そのものの規模が小さくなっていたのである。

ところで、検出した竪穴住居の位置から推定して、溝に囲まれた内部には、同時期に何軒の竪穴住居が存在したのであろうか。重複した竪穴住居1～6の6軒の竪穴住居と竪穴住居7・8の2軒の竪穴住居は、検出した位置が極めて近接していたから、同時期に2軒の竪穴住居が存在することは不可能である。また竪穴住居7・8の2軒の竪穴住居と建て替えが行われていない竪穴住居9も、検出した位置が極めて近接していたから、同時期に2軒の竪穴住居が存在することは不可能である。それでは2軒の竪穴住居が存在した可能性があるのは、竪穴住居9が機能していた時に、竪穴住居1～6の地点に竪穴住居が建てられていた時だけということになる。このように考えるならば、溝に囲まれた広い範囲に竪穴住居が存在したのはせいぜい1軒だけで、偶然に2軒が存在した可能性があるのは、竪穴住居9が機能していた弥生時代後期前葉の短期間だけだということになる。

古墳時代後期に属する遺構は、竪穴住居5軒、掘立柱建物1棟、土壙3基だけで、検出した遺構そのものの数が少なく、散在的な立地状況を呈する集落であったと推定される。

なお2区の丘陵尾根上に検出した弥生時代後期と古墳時代後期に属する2軒の大型の竪穴住居は、その所在地点に足を運んで立ってみると、西方向に展開する久世町内の沖積平野を広く望むことができるから、それぞれの時代における見張台のような重要な役割を果たしていたのではなかろうか。

地形の低くなった1区の南端部に位置した竪穴住居1～6の上面には、9世紀前葉と考えられる平安時代に属する土師器や須恵器が、鉄製品や土錘とともに出土したので、遺構の存在は確認できなかったものの、周辺部分に平安時代の鉄生産に関係した工房のようなものがあったのかもしれない。

江戸時代の遺構としては、1区に検出した大型の掘立柱建物や2基の土壙と、2区に検出した9基の近世土壙墓がある。大型の掘立柱建物の柱穴からは、肥前磁器の染付皿の小破片が出土している。1区に存在した2基の土壙は、検出した位置関係から、大型の掘立柱建物に付属する便所ではないかと推定されたが、小皿や釘などが出土したものの、確証を得ることはできなかった。2区の丘陵上で検出した9基の近世土壙墓は、平面形が楕円形に近いものや隅丸長方形に似たものがあり、出土遺物にも肥前磁器の小坏、肥前陶器の皿と片口、土鈴、寛永通寶、煙管、釘など各種のものが存在した。その中でも肥前磁器の小坏や肥前陶器の皿と片口は、17世紀中葉に属すると推定される。また2枚の寛永通寶の背面には、内郭の上に「文」の1字が鋳込まれているから、この寛永通寶は後西・霊元両天皇の時の年号である寛文年代（1661～1673年）に鋳造されたことが判明している。このような出土遺物から、近世土壙墓が造られたのは17世紀の中葉から後葉にかけての時期と考えられる。

以上の調査結果から、先旦山遺跡は弥生時代後期から江戸時代まで栄えていたのである。　（福田）

表－1　先旦山遺跡新旧遺構名称対照表

新遺構名	旧遺構名	時　　期
竪穴住居1	NO. 5	弥生時代後期
竪穴住居2	NO. 5	弥生時代後期
竪穴住居3	NO. 4	弥生時代後期
竪穴住居4	NO. 4	弥生時代中期
竪穴住居5	NO. 4	弥生時代後期
竪穴住居6	NO. 4	弥生時代後期
竪穴住居7	NO. 3	弥生時代後期
竪穴住居8	NO. 3	弥生時代後期
竪穴住居9	NO.25	弥生時代後期
竪穴住居10	NO.11	弥生時代後期
竪穴住居11	NO.12	弥生時代後期
竪穴住居12	2区NO.11	弥生時代後期
竪穴住居13	NO.26	古墳時代後期
竪穴住居14	NO.17	古墳時代後期
竪穴住居15	NO. 6	古墳時代後期
竪穴住居16	NO. 8	古墳時代後期
竪穴住居17	2区NO.10	古墳時代後期
段状遺構1	NO.28	弥生時代後期
建物1	NO.10	古墳時代後期
建物2	NO.21	江戸時代
土壙1	NO.15	弥生時代後期
土壙2	NO.14	弥生時代後期
土壙3	NO.24	弥生時代後期
土壙4	NO.16	弥生時代後期
土壙5	NO.20	弥生時代後期

新遺構名	旧遺構名	時　　期
土壙6	NO.18	弥生時代後期
土壙7	NO.19	弥生時代後期
土壙8	NO.13	古墳時代後期
土壙9	NO. 6	古墳時代後期
土壙10	NO. 8	古墳時代後期
土壙11	NO.22	江戸時代
土壙12	NO.23	江戸時代
土壙13	2区NO. 1	江戸時代
土壙14	2区NO. 8	江戸時代
土壙15	2区NO. 2	江戸時代
土壙16	2区NO. 5	江戸時代
土壙17	2区NO. 9	江戸時代
土壙18	2区NO. 6	江戸時代
土壙19	2区NO. 7	江戸時代
土壙20	2区NO. 3	江戸時代
土壙21	2区NO. 4	江戸時代
土壙22	番号なし	時期不明
土壙23	NO. 7	時期不明
土壙24	NO. 9	時期不明
土壙25	番号なし	時期不明
溝1	番号なし	弥生時代後期
溝2	番号なし	弥生時代後期
溝3	番号なし	弥生時代後期
溝4	番号なし	弥生時代後期

第７章　旦山古墳群

第１節　調査の経過

この旦山古墳群は、平成元年３月31日に久世町教育委員会によって発行された『久世町埋蔵文化財分布地図』には、「旦山古墳」と命名された１基の古墳が、舌状に張り出した丘陵の頂部に記載されているだけであった。ところが、地元から発掘調査に参加していただいていた作業員の人々の話によると、旦山古墳が記載された丘陵上で農作業を行っていた時に、１振の大刀が出土して米来小学校へ持参したということであるから、埋葬施設が破壊された別の古墳が存在する可能性が考えられた。

この地点は、一般国道181号や米子自動車道久世インターチェンジに近いこともあって、岡山県北流通センターの進入路部分に位置していたため、平成７年度の４月当初から発掘調査に着手した。

立木や竹薮の伐採作業を終えると、調査前の状況写真撮影や地形測量を行った。丘陵上には未発見の古墳が存在する可能性が考えられたため、まず尾根上にトレンチを設定して確認調査を実施したところ、規模が異なる３基の古墳が所在することが明らかになり、丘陵の先端部分に位置する古墳から順番に、「１号墳」から「３号墳」にした。なお１号墳には葺石が存在することが確認され、近くの斜面には人頭大から拳大の河原石が散乱しているのが認められた。さらに南に面した丘陵の斜面に、古墳の墳丘と思われる高まりが存在したので、トレンチを設定して確認調査を行ったところ、埋葬施設が袖のない横穴式石室の古墳であることが判明したので、「旦山４号墳」にした。

このような状況から、所在する古墳が増えたため、「旦山古墳群」に名称を改め、６月30日までそれぞれの古墳の全面調査を実施した。

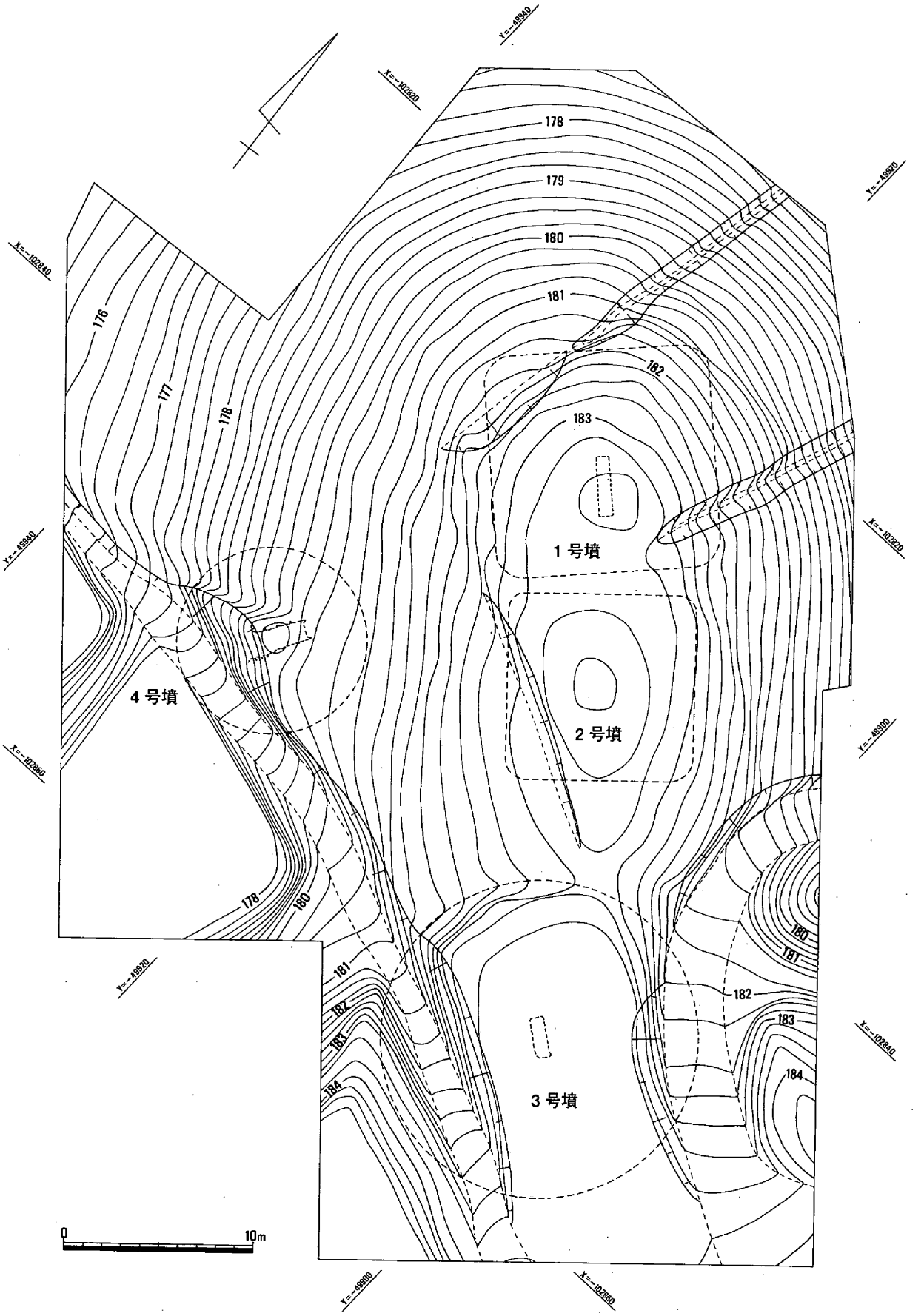
旦山５号墳は、平成８年度に全面調査を行った旦山遺跡で発見されたのであるが、集落跡の旦山遺跡で概説するのは適当ではないと判断したため、旦山古墳群の５号墳として取り上げることにした。

第２節　調査の概要

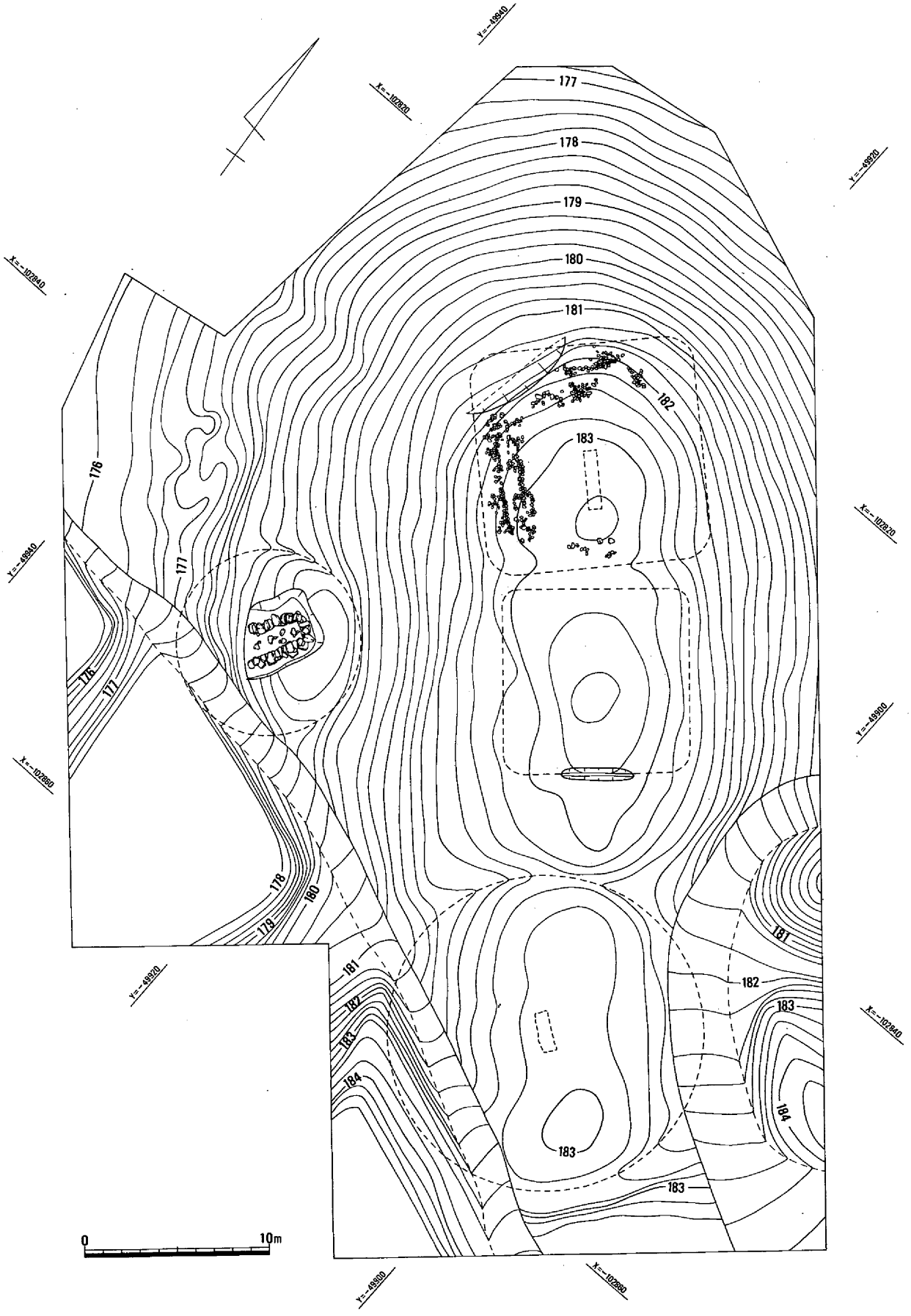
旦山古墳群は、方墳３基と円墳２基からなる古墳群で、目木川流域の沖積平野に向かって突き出した尾根の先端から南東方向に、１号墳（方墳）、２号墳（方墳）、３号墳（円墳）と並び、その斜面の低い位置に４号墳（円墳）が存在し、やや離れた旦山遺跡の地点に５号墳（方墳）が確認された。

１号墳は１辺12ｍの方墳で、木棺直葬と思われる埋葬施設が確認され、葺石が存在した。２号墳は１辺10ｍの方墳で、埋葬施設はすでに削平されて残存しなかった。また直径17ｍの円墳の３号墳は、埋葬施設が箱式石棺であったが、盗掘を受けて破壊されていたものの、鉄鏃が出土した。さらに直径10ｍの円墳である４号墳は、河原石を使用した無袖の横穴式石室を有し、須恵器や鉄器が出土した。１辺９ｍの方墳の５号墳は、埋葬施設が箱式石棺で、遺物は出土しなかった。

各古墳が造られた時期については、出土した須恵器から４号墳が７世紀前葉から中葉と推定され、それ以外の４基の古墳は、３号墳の鉄鏃の形態などから、５世紀中葉前後になるのではなかろうか。



第１図　１～４号墳調査前周辺地形測量図（1／300）



第２図　１～４号墳調査後周辺地形測量図（1／300）

第３節　各古墳の調査

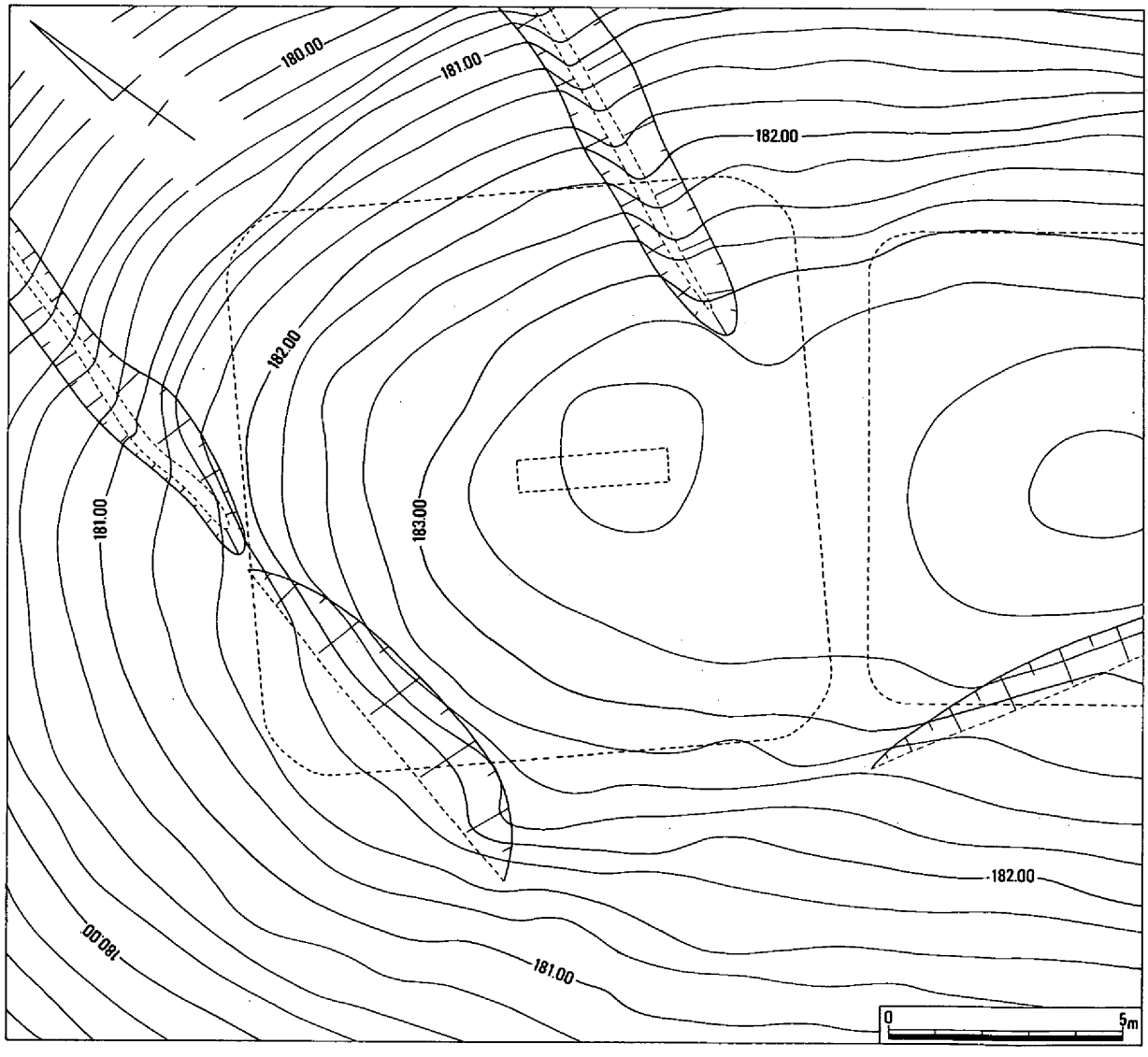
(1)　１号墳

調査前の状況（第１・３図）

１号墳から４号墳までの４基の古墳が所在した丘陵は、目木川流域に展開する沖積平野に向かって舌状に張り出し、発掘調査に着手する以前には、丘陵全体が竹藪になっていた。

岡山県北流通センターの進入路予定地になっている丘陵部分の竹藪を伐採したところ、先端部に高まりが認められた。この高まりが『久世町埋蔵文化財分布地図』に記載されている「旦山古墳」で、今度の報告書で「旦山１号墳」として取り扱った。

この１号墳が所在した丘陵の先端部に位置する頂部は、砂防工事で部分的に表土が削平され、葺石と思われる人頭大から拳大の河原石が、斜面に数多く散乱していた。



第３図　１号墳調査前周辺地形測量図（1／150）

墳丘と周溝（第１～６図、図版63－２）

旦山１号墳の墳丘は、西方向に面した地点が、砂防工事によって表土が部分的に削平されていたので、墳端を把握するのが困難であった。また墳丘の盛土は少なく、墳頂部の埋葬施設の上面でも32㎝だけで、明褐色砂質土のみが認められた。埋葬施設の検出面からの深さは、最も残存状態が良好な部分でも12㎝だけであったから、墳丘の上面が削平されて、盛土の多くが流出していると思われた。

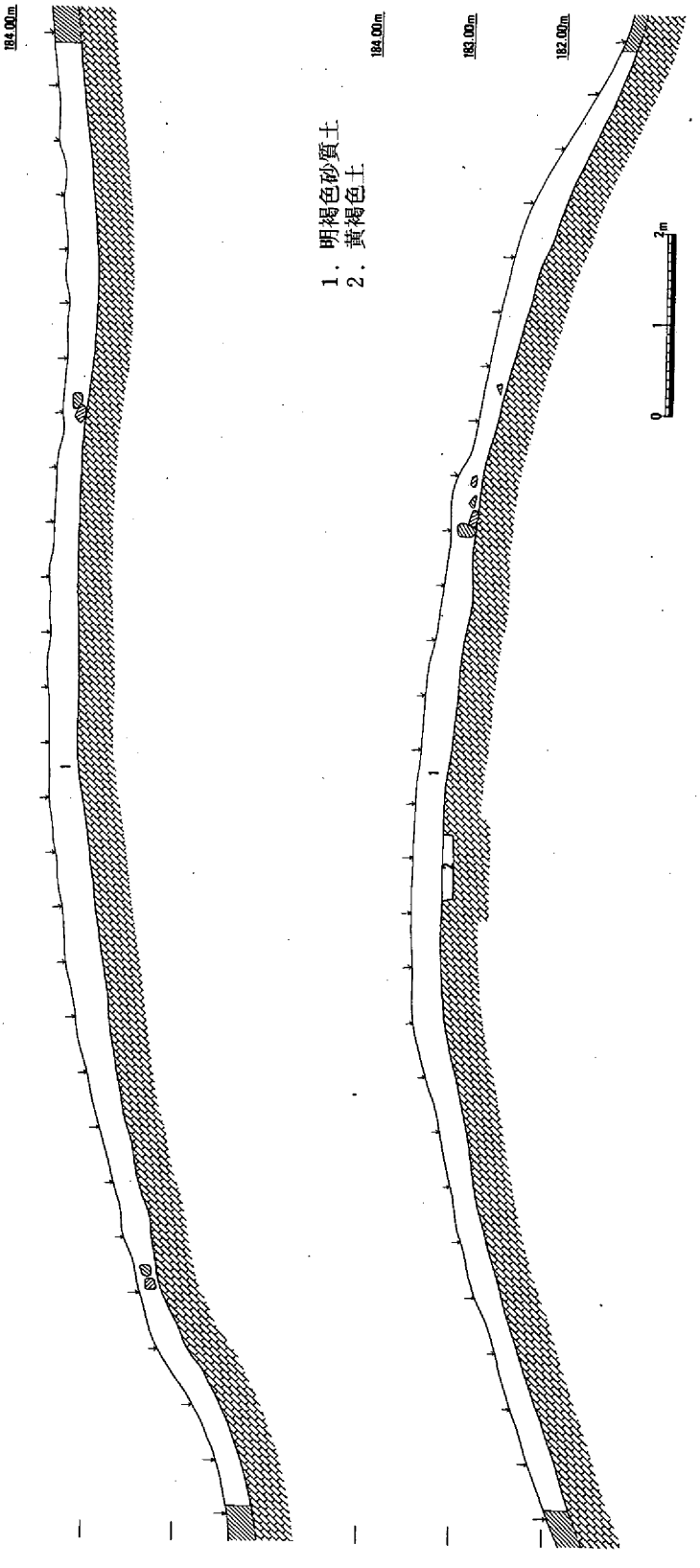
丘陵の尾根上を縦貫する土層断面観察用の畦を設置して調査を行ったところ、後述する２号墳との中間地点に、尾根方向に直交する浅い溝状の周溝と思われる痕跡を検出した。この痕跡は地山面を浅く掘り窪めているだけで、上面には１号墳や２号墳の墳丘に認められた明褐色砂質土が存在した。この１号墳と２号墳の中間地点に検出した溝状の痕跡は、両古墳が共有する周溝で、１号墳と２号墳は同時期に造られた可能性が強い。なおこの１号墳は丘陵の先端部分に所在したこともあって、周溝が確認されたのは、この２号墳に面した方向だけであった。

葺石

（第２・４～６、図版63－２）

１号墳の墳丘上には、人頭大から拳大の河原石を用いた葺石が存在した。南西側と北西側の残存状態は比較的良好で、両側とも２列が直線状になって平行するように並べられていた。この葺石の配列状況などから、１号墳は１辺12ｍの方墳であると判断した。

なお北東側に面した部分の葺石は、墳端が急勾配の斜面に位置していたこともあって、ほとんどのものが転落して残存しなかった。



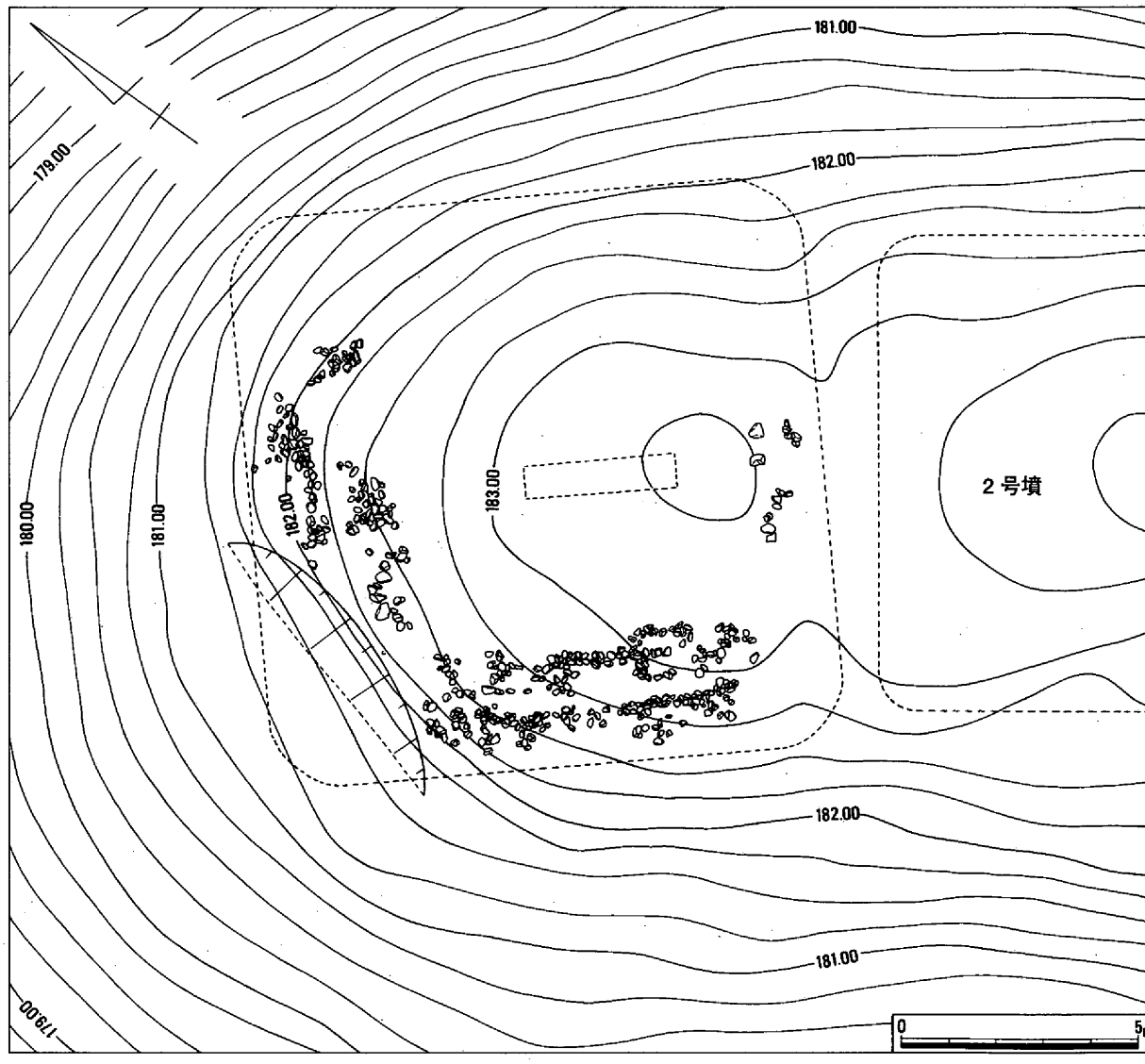
第４図　１号墳墳丘土層断面（1／80）

埋葬施設（第７図、図版63－３）

１号墳の埋葬施設は、長大な木棺直葬の土壙である。

その埋葬施設の土壙の長軸方向は、１号墳が所在した丘陵の尾根と同じ方向を示して検出され、確認された位置は、墳丘の中心からやや２号墳の方向へ寄った南東側になっていた。

検出面での平面形は、長辺316cm、短辺70～74cmの長方形を呈し、南東側の小口部分が北西側よりもわずかに広くなっていた。検出面からの深さは、南東側の小口部分で12cm、北西側の小口部分で２cmを測り、土壙の上面が著しく削平されていると考えられた。土壙の底部は、検出した地点の地形と同じように、南東方向か北西方向へ向かって傾斜し、南東端部と北西端部では10cmの高低差が認められた。短軸方向の底部は、中央部が周辺部よりもわずかに窪み、断面形は浅い「U」字形を呈していた。土壙の内部には全体に黄褐色土が堆積し、精査したにもかかわらず、木棺痕跡は確認できなかった。土壙の中央部から南東方向へ寄った地点で、北東側の側壁に近接した位置には、４個の河原石が土壙の底部に密着して検出された。この４個の河原石は、遺体の頭部を支える枕石になると推定されたが、側壁に近接した位置に存在したので、土壙内の木棺を固定していたのかもしれない。

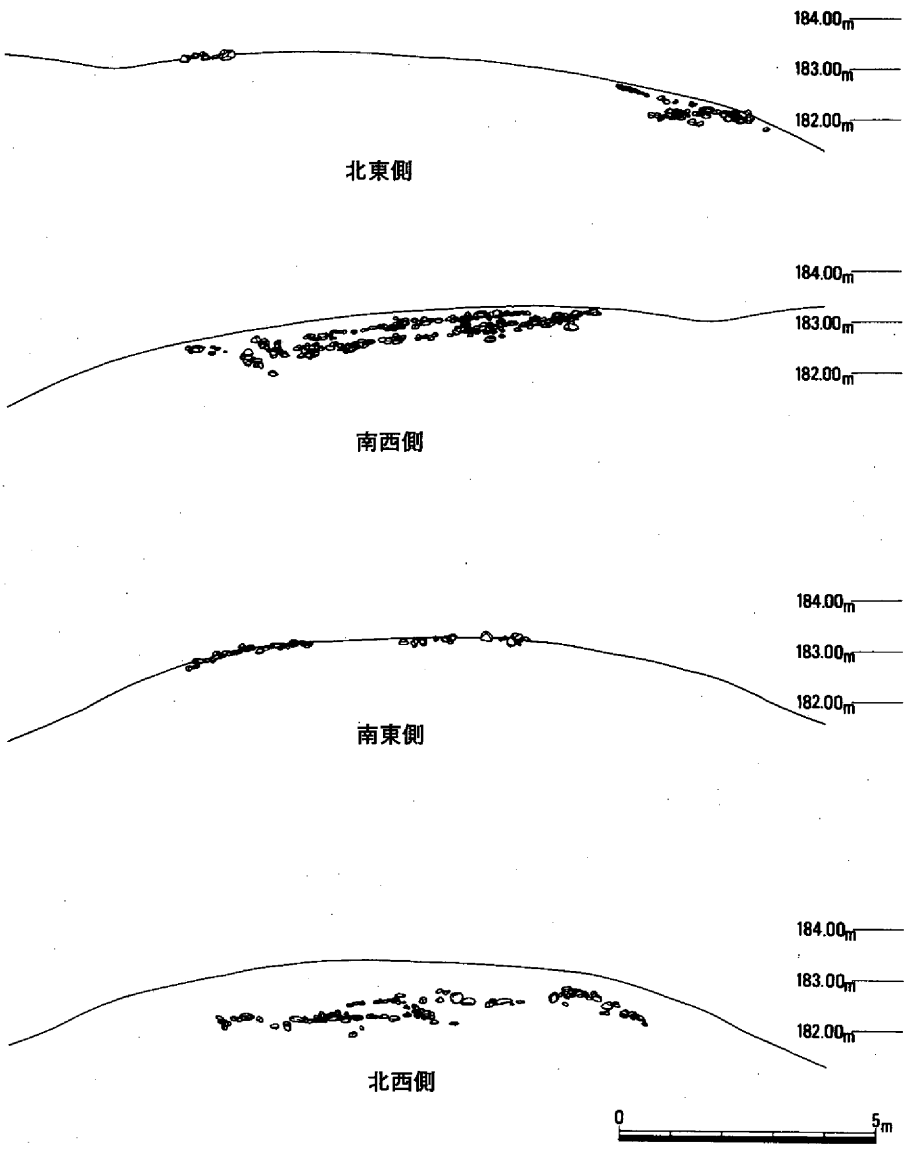


第５図　１号墳調査後周辺地形測量図（1／150）

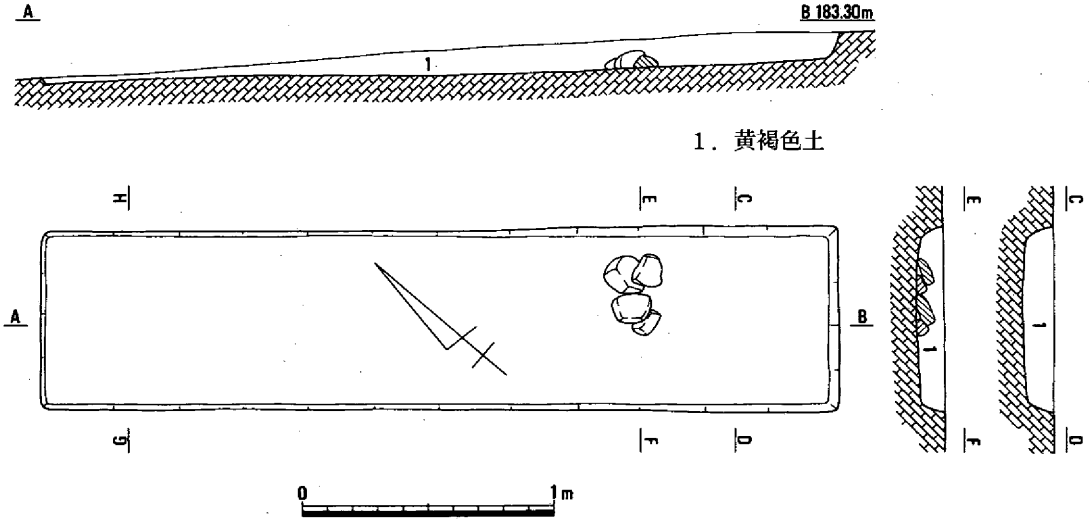
出土遺物

１号墳の埋葬施設である木棺直葬の長大な土壙には、遺物は何も存在しなかった。

１号墳の南西方向の丘陵斜面から須恵器の壺（第26図66）が出土したが、１号墳の墳端から著しく離れた地点であるから、１号墳に伴うものとは考えられない状態であった。この壺の形態的特徴や調整手法によると、１号墳が築造された時期よりもむしろ新しくなると思われた。



第６図　１号墳葺石側面図（1／150）



第７図　１号墳埋葬施設実測図（1／30）

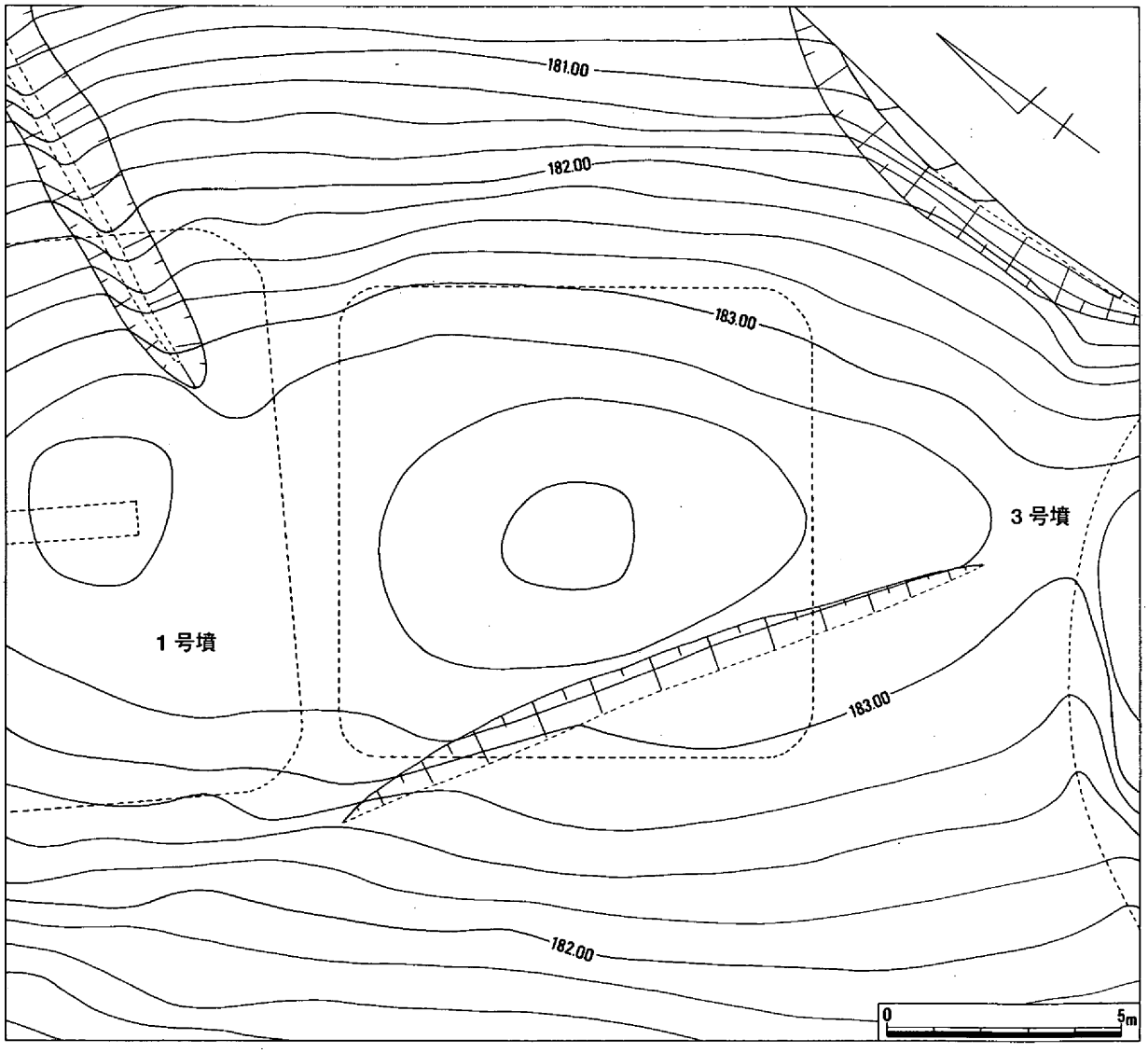
(2)　２号墳

調査前の状況（第１・８図）

平成７年度の４月当初から発掘調査に着手したのであるが、まず丘陵全体に繁茂していた立木や竹薮の伐採作業を行った。その段階では、前述した１号墳の地点には葺石の伴う古墳が所在することが明らかであったが、この２号墳の地点は地形が比較的に平坦で、古墳が所在するとは思われない状況であった。

調査前の状況写真撮影を終了して調査前の地形測量を実施したところ、１号墳の南東方向に位置する丘陵の尾根上が、わずかに高くなっていることが判明した。そのために、尾根上にトレンチを設定して確認調査を行ったところ、埋葬施設は検出できなかったものの、尾根が延びた方向に直交する浅い溝を確認したので、これまで知られていなかった「旦山２号墳」と命名し、前面調査に着手した。

この２号墳が所在した位置の南側地点は、防砂工事によって表土が削平され、直線的に延びた段状を呈する部分が認められた。



第８図　２号墳調査前周辺地形測量図（1／150）

墳丘と周溝（第１・２・８～10図、図版64－１）

旦山２号墳の墳丘は、南方向に面した地点が、砂防工事によって表土が部分的に削平されていたので、墳端を把握するのが困難であった。土層断面観察用に設定した畦の層状を確認しながら、墳端を把握する調査を行った結果、丘陵の斜面に位置する北東側と南西側とも、地山面の傾斜が緩くなる部分が認められたので、その位置を墳端と考えた。

尾根が延びる方向の１号墳に面した部分は、１号墳と２号墳の中間地点に、地山面を浅く掘り窪めた尾根方向に直交する痕跡を検出したので、この痕跡を１号墳と２号墳が共有した周溝と考えた。一方、南東方向に面した尾根上では、検出面での最大幅が60cmで残存した長さが400cmの溝を確認した。この溝は尾根方向に直交し、断面形が浅い「U」字形を呈していたので、２号墳の周溝の一部と断定した。

このような調査結果から推定するならば、２号墳は１辺10ｍの方墳であったと考えられる。

埋葬施設（第２・10、図版64－１）

２号墳の埋葬施設は、精査したにもかかわらず、検出できなかった。

墳丘の中心部分でも表土面から35cmの深さで地山面に到達し、盛土部分に明褐色砂質土だけが認められたから、古墳が築造された時には存在した埋葬施設は、すでに削平されて、その痕跡さえも確認できない状態になっていると思われた。

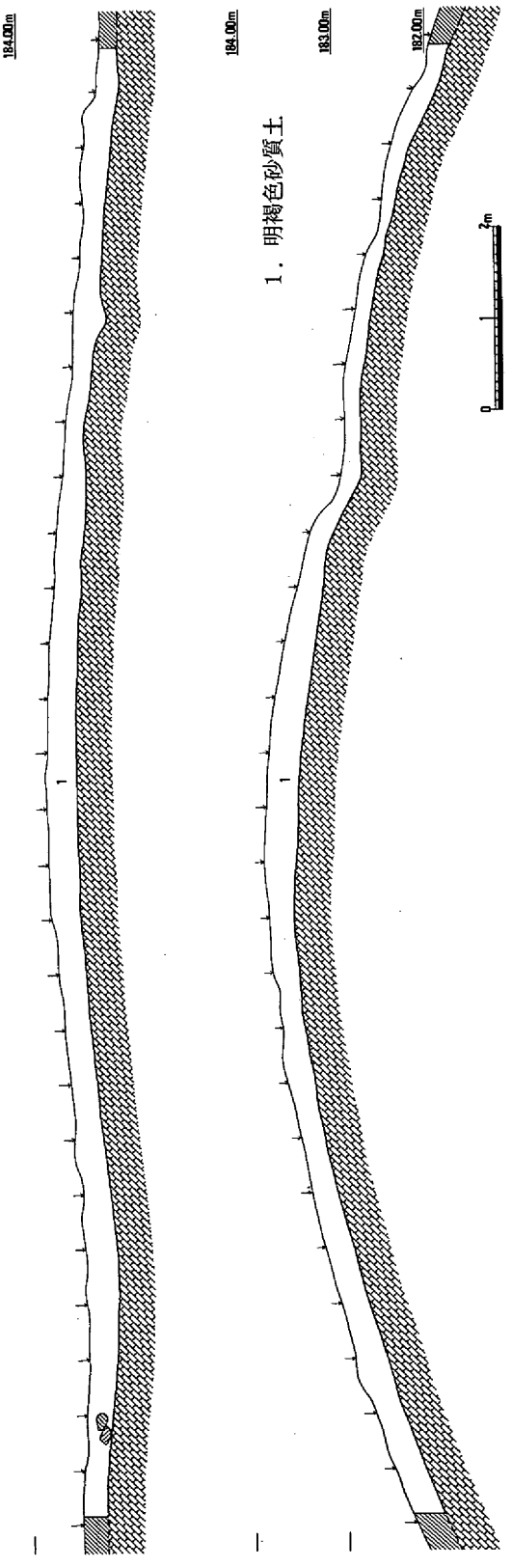
出土遺物

埋葬施設が確認できなかったので、この旦山２号墳に伴う出土遺物は存在しない。

２号墳の南西方向に面した部分の、砂防工事によって表土が削平された部分から、須恵器の壺と思われる破片（第26図**67**）が出土したが、その形態的特徴や調整手法から、この破片は２号墳が築造された時期よりもかなり新しい時期に属すると思われる。

１号墳、２号墳、３号墳の３基の古墳は、いずれも丘陵の尾根上に並んで所在したから、その立地状況からほぼ同時期に造られたと考える。

３号墳の墳端部分からは、５世紀中葉前後の尖根の鉄鏃や細身の柳葉形鉄鏃が出土している。この２号墳は、前述した１号墳も含めて、５世紀中葉前後の時期に築造されたのではなかろうか。



第９図　２号墳墳丘土層断面（1／80）

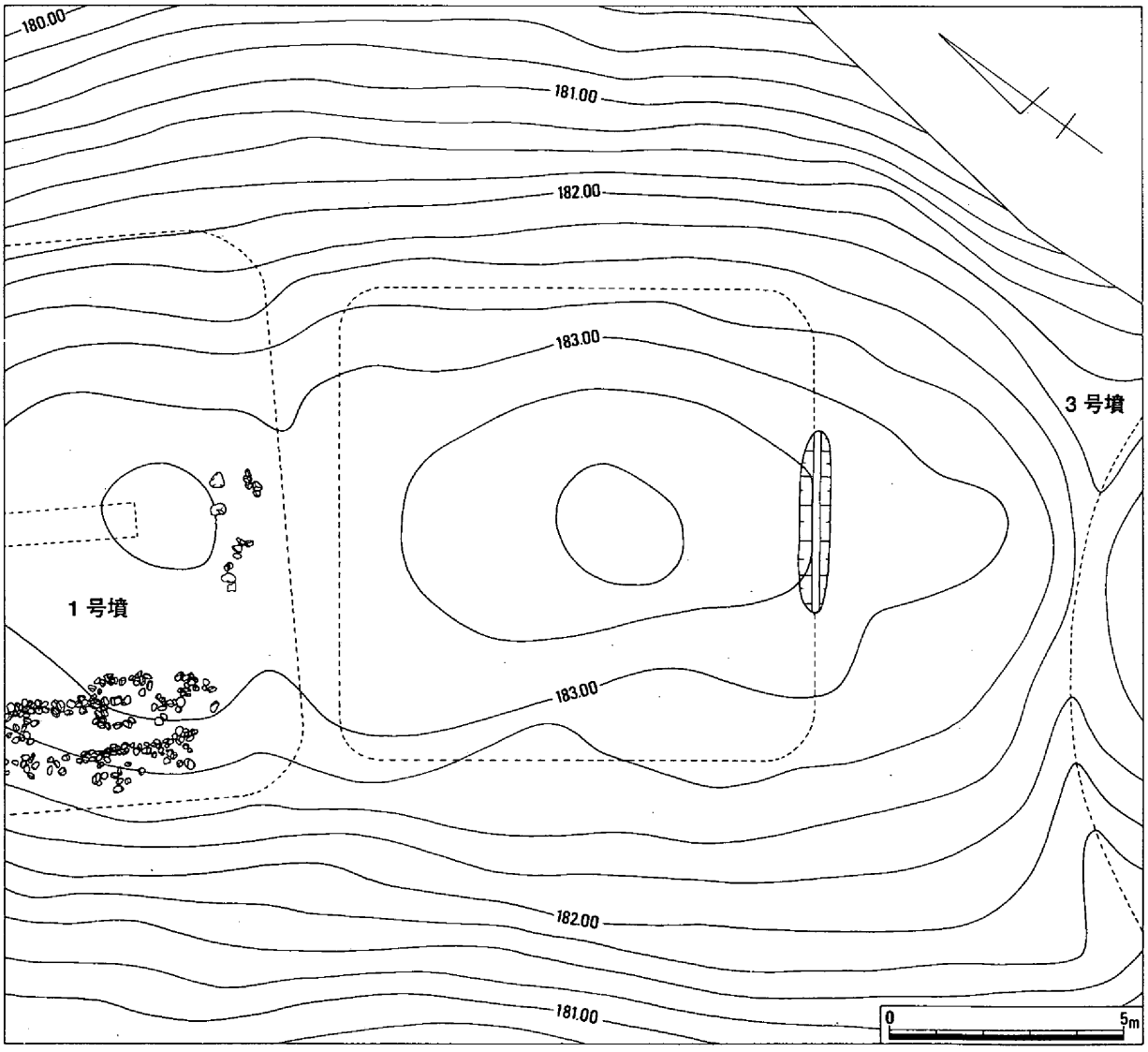
(3) ３号墳

調査前の状況（第１・11図）

旦山３号墳の所在した地点は、北西方向の２号墳に面した部分が竹藪になり、北東方向と南西方向に面した端部が農作業用の道路や小道に改変され、中心部分から南東方向に面した部分が平坦な畑地に変貌していたので、その位置に古墳が残存しているとは、とても想像ができない状態であった。

発掘調査に着手する前に、竹藪を伐採したり畑地の草木を取り除いたところ、北端部に位置する畑地の法面に、古墳の埋葬施設の箱式石棺に使われていたと思われる３枚の板石が、無造作に重ねて置かれているのを発見したので、近くのどこかに半壊した古墳が存在することが考えられた。

１号墳と２号墳を結ぶ丘陵屋根上のトレンチを、さらに南東方向に位置する畑地まで延長して古墳の有無の確認調査を行ったところ、畑地の南東端部で墳端に位置する周溝を検出したので、「旦山３号墳」として全面調査を実施した。墳丘の地山面を精査した結果、石材がすべて抜き取られた埋葬施設の残骸を確認したので、畑地の法面に置かれていた３枚の板石は、ここに使われていたと考えた。



第10図　２号墳調査後周辺地形測量図（1／150）

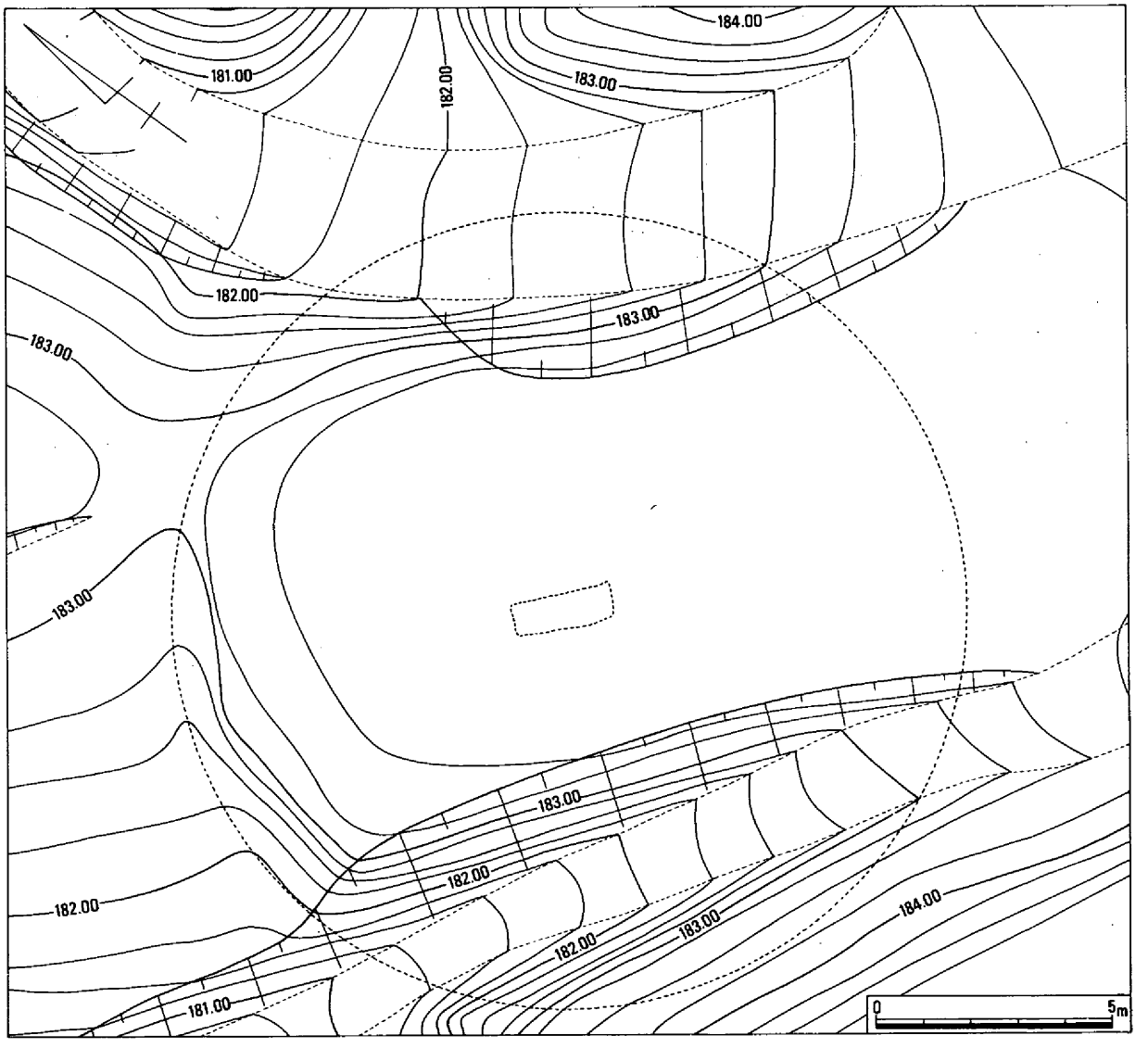
墳丘と周溝（第１・２・11～13図、図版64－２）

旦山３号墳を検出した位置は、盛土部分のほとんどが平坦な畑地に造成され、墳丘を確認することができなかった。墳丘の中心部分に、土層断面を観察するための畦を「十」字形に直交して設定したところ、３号墳が築造された当時の盛土と推定されるのは砂礫を多く含む茶褐色土（第12図**９**）だけで、墳丘の盛土の大部分は地山面までことごとく削平されていた。畦の断面に認められた層状は、後世になって盛土部分を畑地にするために、著しい改変が行われた状態を如実に示していたのである。

丘陵の尾根方向に設定したトレンチによって、墳丘の南東方向と北西方向に面した部分で、断面形が「U」字形を呈する周溝を検出した。南東方向に面した部分の周溝内には、明褐色土、淡褐色砂質土、暗褐色砂質土、黄褐色土（第12図**２**～**５**）が堆積し、北西方向に面した部分の周溝内には、暗褐色砂質土と黄褐色土だけが認められた。

周溝の外側に位置する法面の地山を、丹念に追求して掘り進めたところ、北東方向や南西方向の農作業用の道路や小道の部分まで、周溝が円形を呈して延びることが判明した。

このような調査結果から、旦山３号墳は直径17ｍの円墳であることが確認されたのである。



第11図　３号墳調査後周辺地形測量図（1／150）

埋葬施設（第14図、図版64－２・３）

３号墳の墳丘の盛土が、畑地の造成によって大部分が地山面まで削平されていたため、埋葬施設も所在した地点に石材の抜き取り痕跡が残存しただけで、ことごとく破壊されていた。

埋葬施設の痕跡は、周溝によって円形に囲まれた部分の中心に位置し、平面形が長辺218㎝、短辺78㎝の長方形に似た形で、長軸方向は丘陵の尾根方向にほぼ平行するN－24°－Wを示し、内部全体に黄褐色土が堆積していた。この黄褐色土が堆積した痕跡の内部を掘り下げたところ、検出面での最大幅が27㎝を測る断面形が「U」字形または逆台形を呈する溝が、長方形の痕跡の周囲に巡っているのを確認した。この調査結果によって、３号墳の埋葬施設は箱式石棺であったと考えられた。発掘調査に着手した時に畑地の法面に置かれていた３枚の板石は、３号墳の埋葬施設の箱式石棺に使われていたものの一部であると思われた。

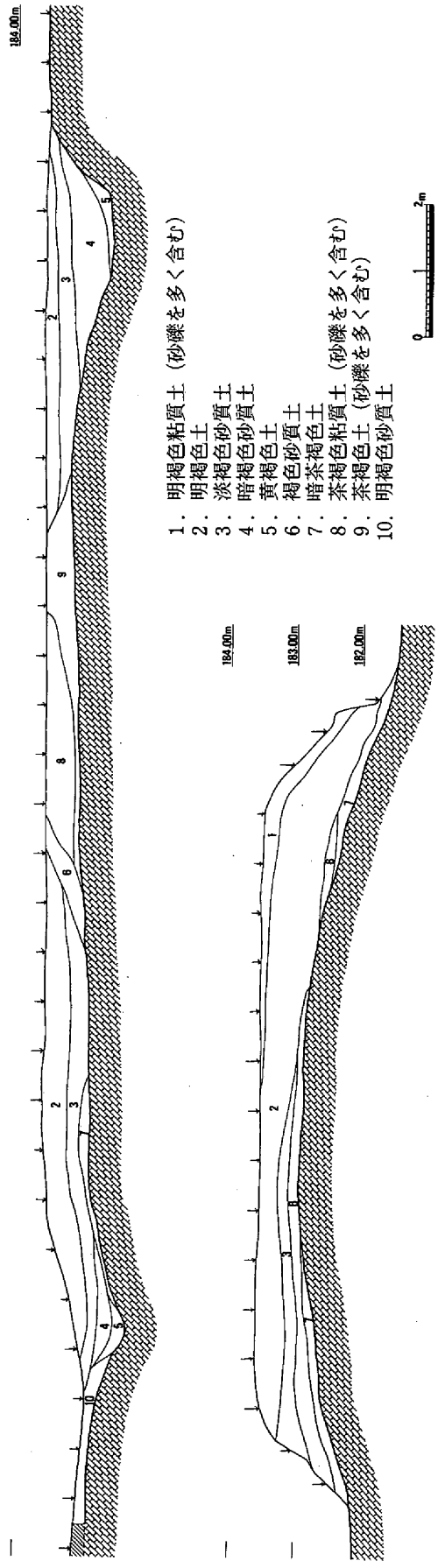
石材が抜き取られた痕跡から、３号墳の埋葬施設であった箱式石棺を可能な限り復元してみると、石棺の内側の計測値は長さ約195㎝、南東側小口幅約50㎝、北西側小口幅約45㎝、床面から天井石までの高さ30～40㎝になり、検出した床面が南東側から北西側に向かって緩やかに傾斜していたから、埋葬されていた遺体の頭位は小口幅の広い南東側であったと推定される。小口部分の石材は両側とも１枚で、両側壁の端部に据えられた石材は、その端の位置がいずれも小口部分の石材の面までになっていたと推定され、天井石を取り除いた箱式石棺の平面形は、長方形の箱形になると考えられた。

遺物出土状況

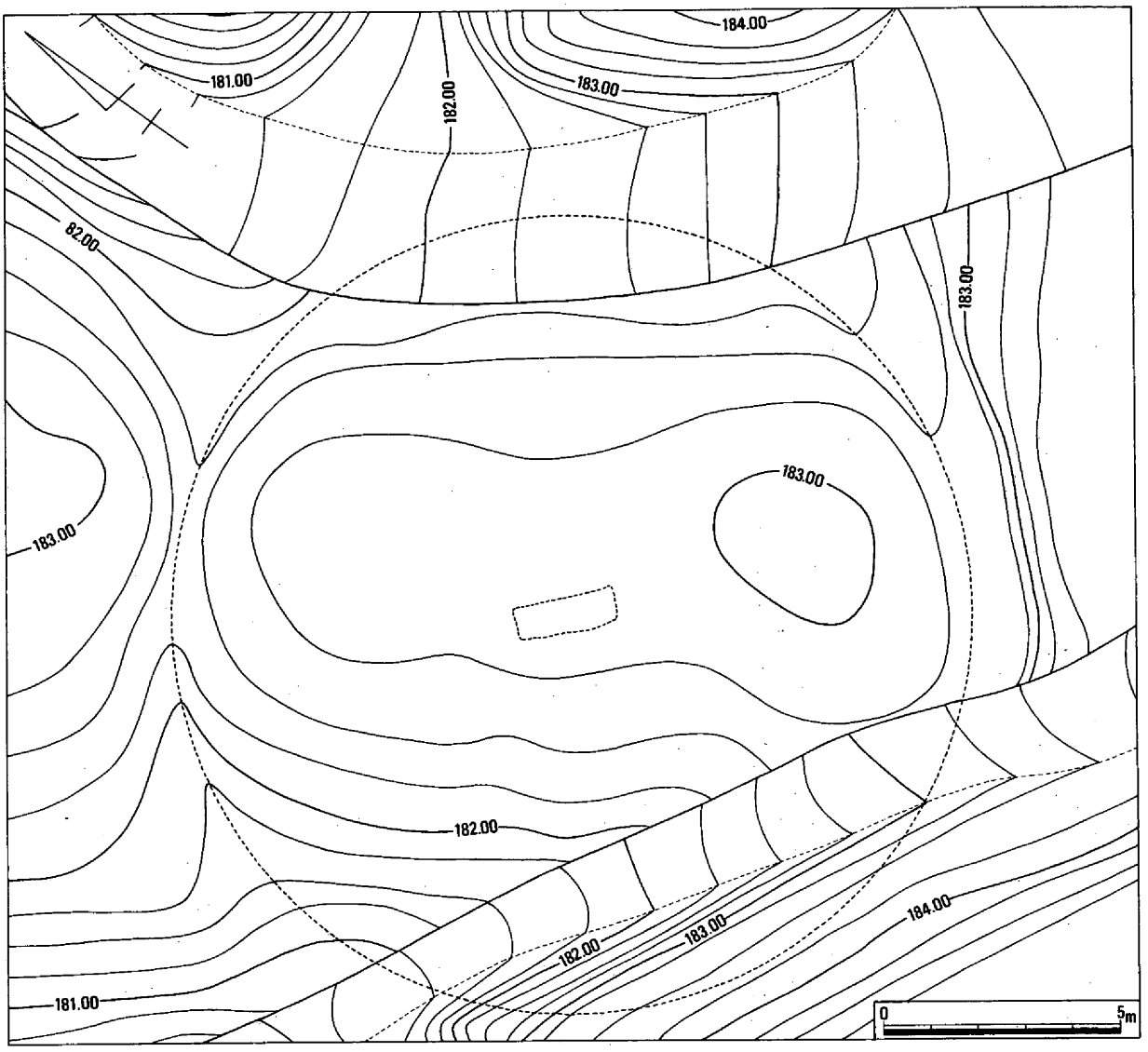
丘陵の尾根上で２号墳に面する北西方向の周溝内から、鉄鏃が１か所に固まって出土した。

鏃身の先端がいずれも北の方向になるように、乱れることなく揃えて置かれていた。それらを取り上げたところ、上方に尖根の鉄鏃が認められ、下方に細身の柳葉形鉄鏃が存在した。

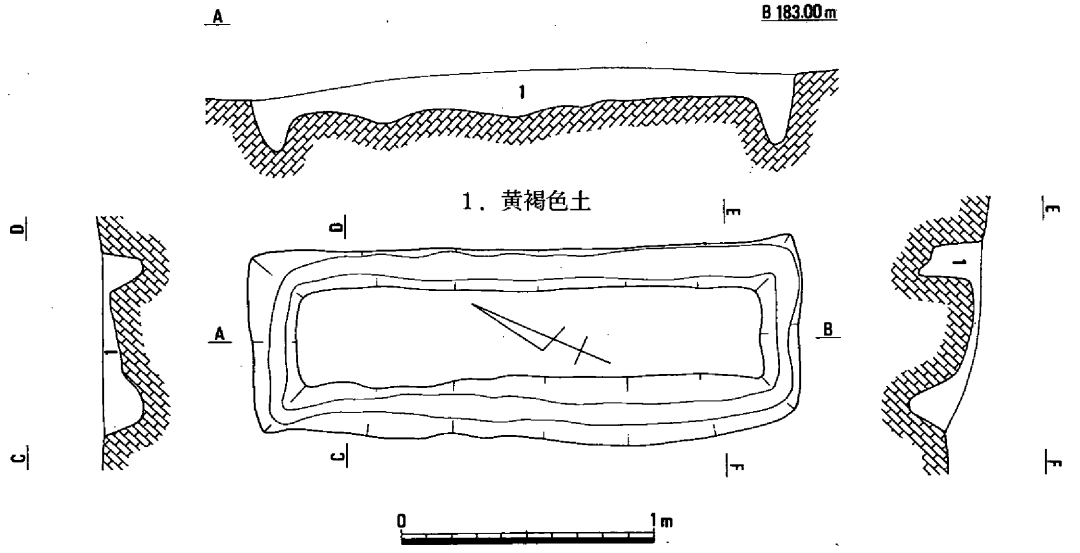
これらの鉄鏃は、盛矢具（胡禄）に入れた状態で置かれていたのかもしれない。



第12図　３号墳墳丘土層断面（1／100）



第13図　３号墳調査後周辺地形測量図（1／150）



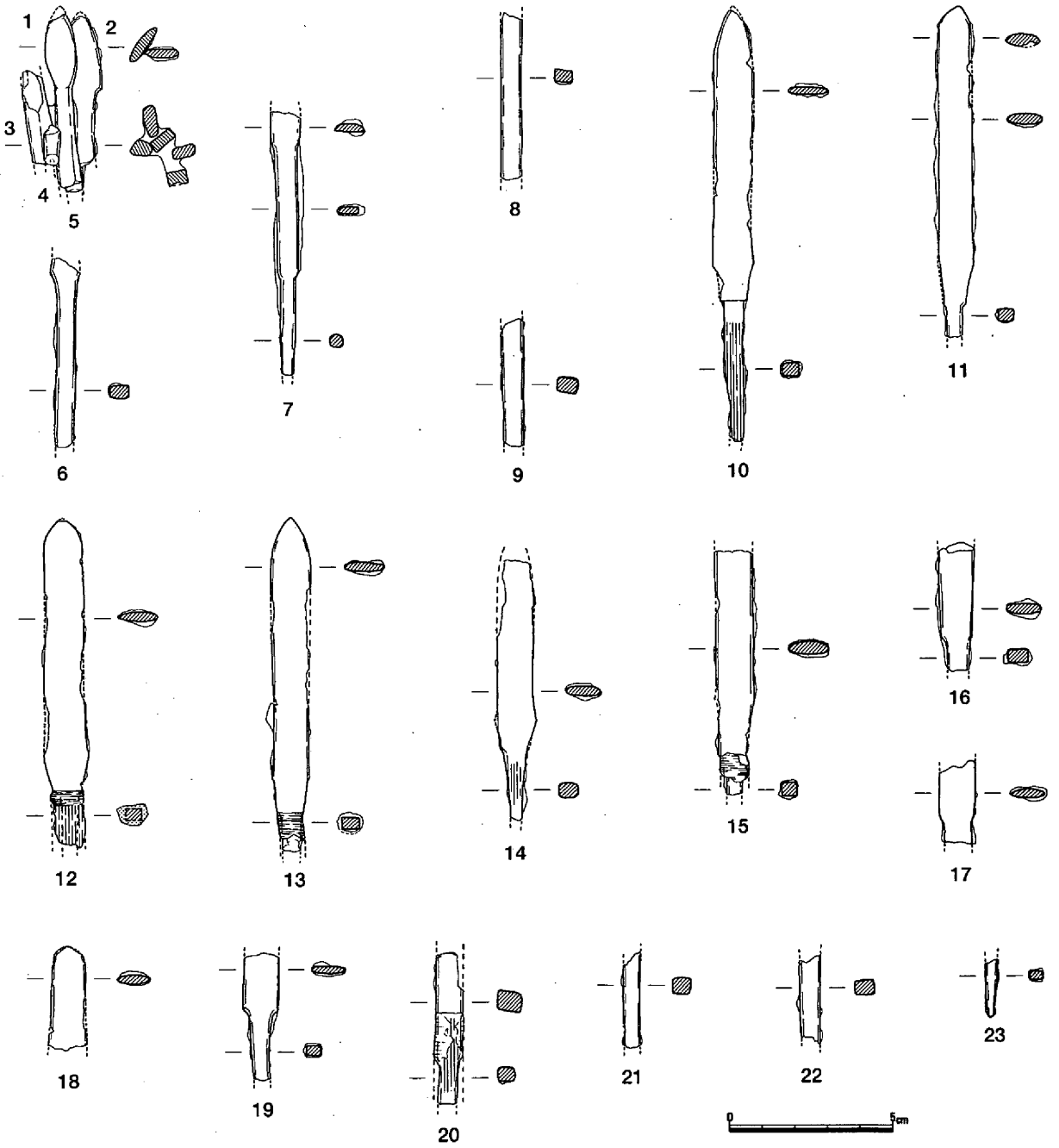
第14図　３号墳埋葬施設実測図（1／30）

出土遺物（第15図、図版67）

旦山3号墳から出土した遺物は、北西方向の周溝内から固まって検出した鉄鏃だけである。

1～9は、長い頸部を有する尖根の鉄鏃である。1～5は錆びついており、鏃身部はややずんぐりした形態をなし、両丸造である。刃部は鈍く、明瞭な刃が研ぎ出されていない感じを受ける。頸部の断面形は長方形を呈し、茎部の断面形は正方形である。10～19は細身の柳葉形鉄鏃であるが、10は茎部の先端を欠損しているものの、ほぼ完成品に近い形態を呈している。細長い鏃身部は両丸造で、関に棘状突起を有しない。関には糸巻き痕跡が認められ、茎部には木質が付着しているものが多い。20は頸部から茎部にかけての破片、21と22は頸部の破片、23は茎部の先端の破片である。

これらの鉄鏃の形態的特徴から、旦山3号墳は5世紀中葉前後の時期に属するであろう。



第15図　3号墳出土遺物（1／2）

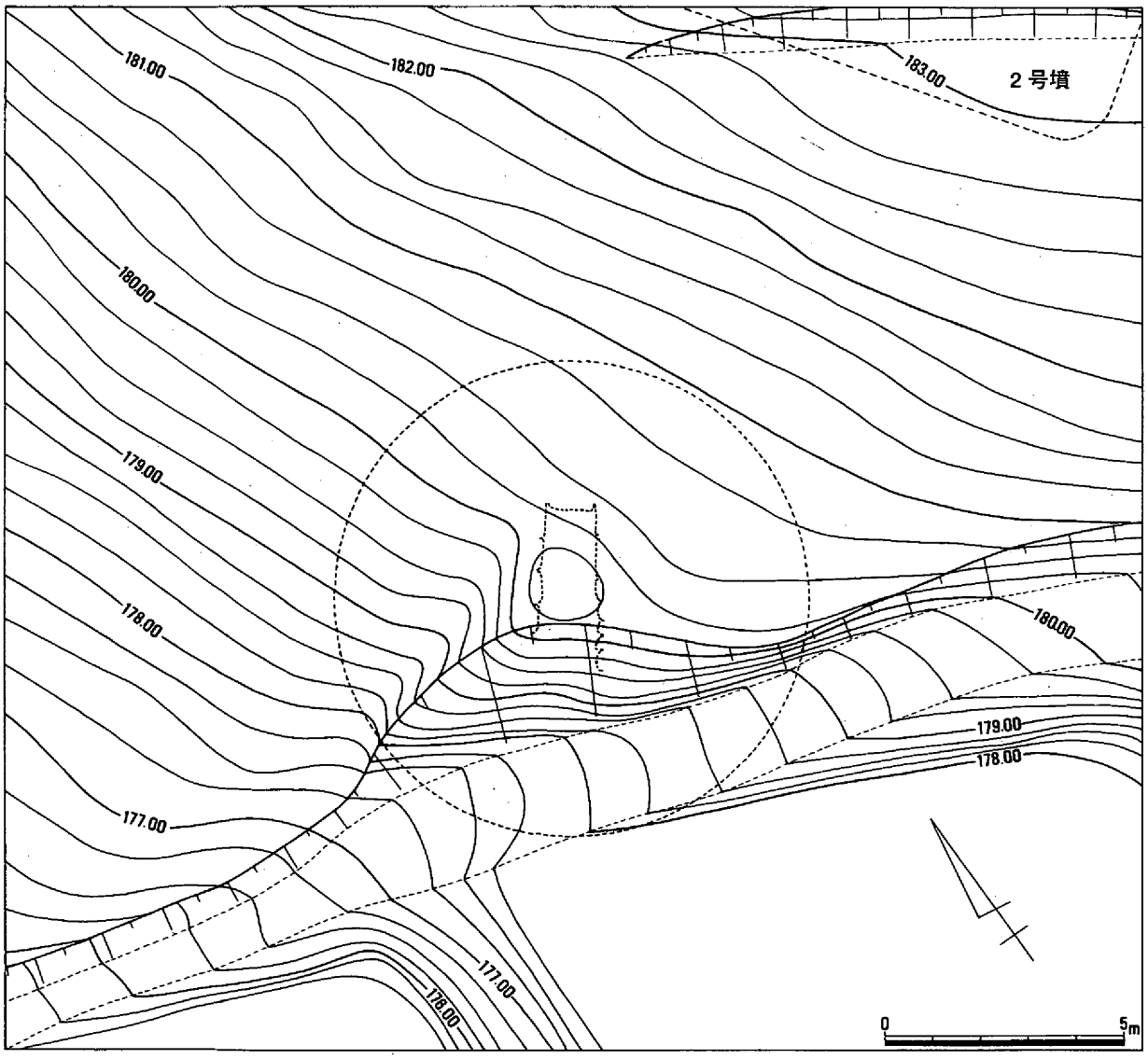
(4) ４号墳

調査前の状況（第１・16図）

岡山県北流通センターの進入路部分に位置した旦山古墳群の所在する丘陵は、目木川流域に展開する沖積平野に向かって舌状に張り出していたこともあって、その先端の尾根上に古墳が存在することが、古くから知られていた。

発掘調査に着手して丘陵全体の竹藪を伐採したところ、南方向の狭い谷地形に面した斜面に、不自然な高まりが認められた。この丘陵には尾根上にだけ古墳が存在するであろうという勝手な先入観があったので、確認した当初は、この高まりは後世の砂防工事によるものと考えていた。

念のためにトレンチを設定して確認調査を行ったところ、版築状を呈して縞模様になった墳丘の盛土と思われる土層や、埋葬施設の石室と推定される石組みを検出した。さらに農作業用の小道の法面をスコップで削ってみると、天井石のない横穴式石室の断面が出現したので、「旦山４号墳」と命名して全面調査を実施した。



第16図　４号墳調査前周辺地形測量図（1／150）

墳丘と周溝（第１・２・16～18図）

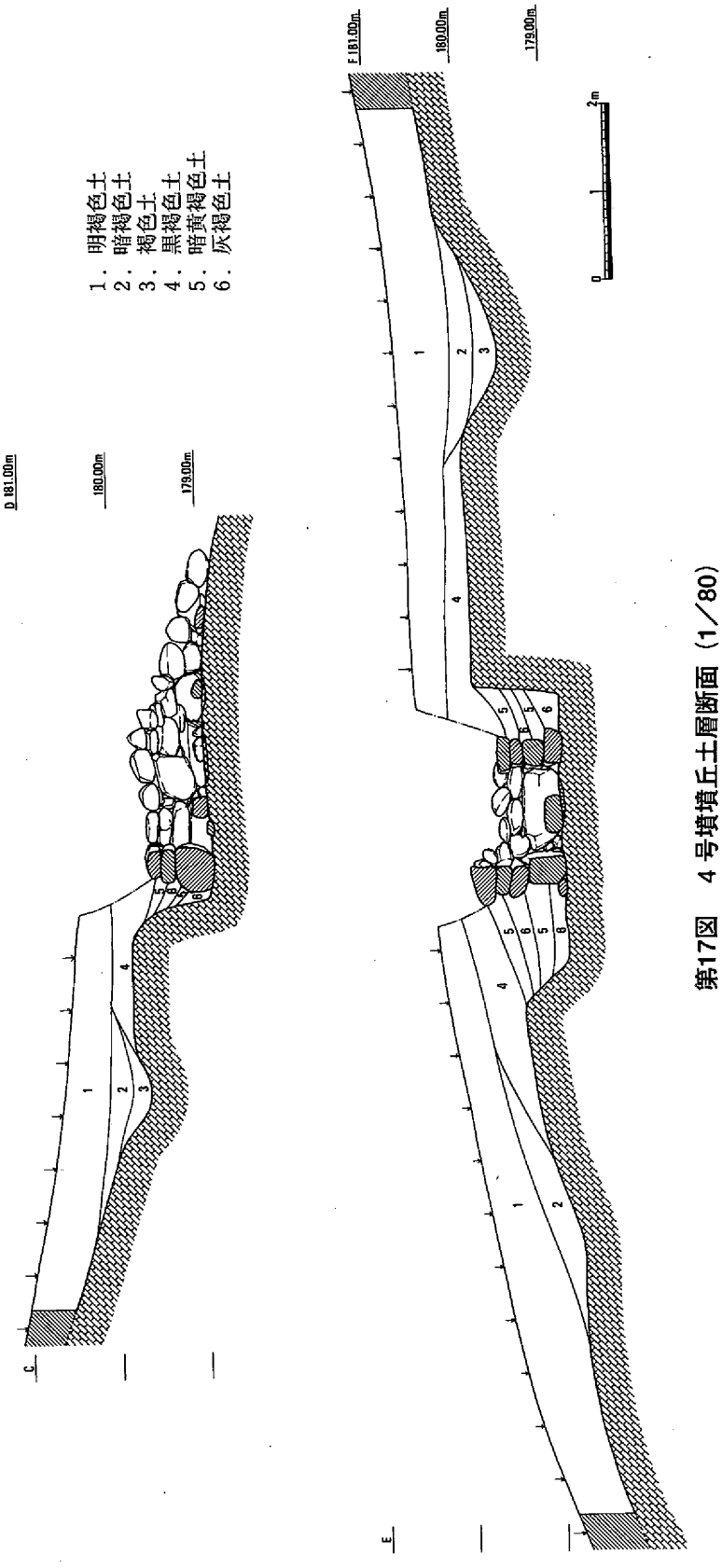
この旦山古墳群の発掘調査に着手して、まず最初に丘陵全体の竹薮を伐採したところ、南方向の狭い谷地形に面した斜面に、不自然な高まりが認められた。この高まりは、後世の砂防工事によって生じたと思われたが、念のためにトレンチを設定して確認調査を実施したところ、版築状を呈して縞模様になった墳丘の盛土や、埋葬施設の天井石がない横穴式石室を検出したのである。

４号墳が所在した地点は、比較的急勾配に下降する丘陵の斜面であったから、墳丘の盛土である黒褐色土（第17図４）の残存状態は悪かった。横穴式石室の天井石がすべて持ち去られていたので、墳丘の中央部分がわずかに陥没していた。さらに石室の入口に面した南西方向の墳丘は、農作業用の小道によって削平されていた。

この旦山４号墳の墳丘は、直径10ｍの円墳である。残存する墳丘の高さは、地形の低い南西側に面した石室入口の床面から150㎝、石室奥壁の床面から120㎝、地形の高い北東側に面した墳端の周溝底部から55㎝になっていた。

地形の低い横穴式石室の入口に面した南西側を除いて、墳丘の端部に周溝が存在した。石室の奥壁に面した北東側の周溝は、検出面での幅が狭いだけでなく底部のレベルが高く、内部に暗褐色土と褐色土（第17図２と３）が堆積していた。西側の周溝は、痕跡がかすかに認められるだけで、部分的に後世の削平が行われていた。

周溝内を精査したが、遺物は何も出土しなかった。

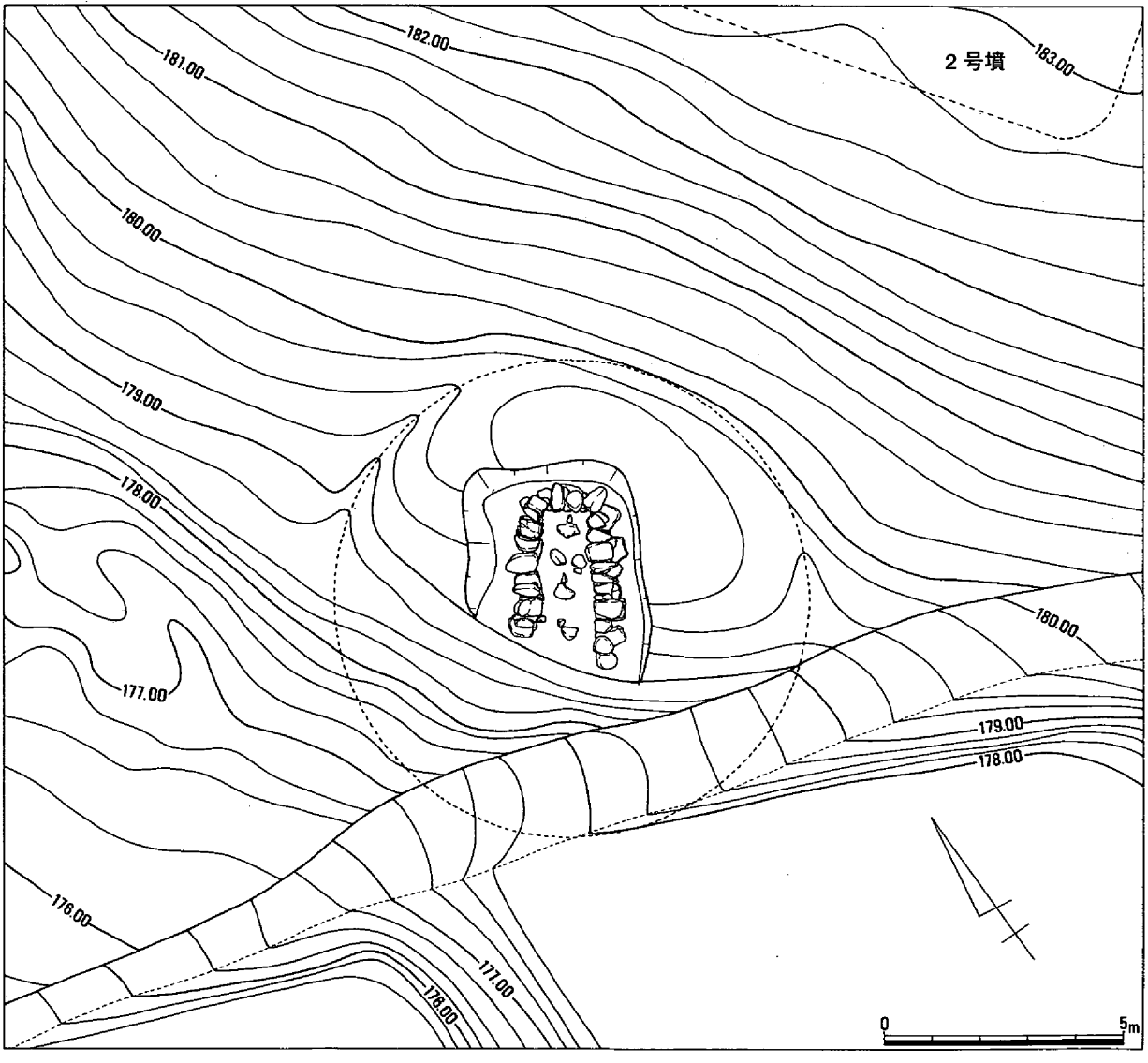


第17図　４号墳墳丘土層断面（1／80）

埋葬施設（第19・20図、図版65－１）

この旦山４号墳の埋葬施設は、無袖の横穴式石室である。この古墳が所在した丘陵の眼下に、北から南に向かって緩やかに流れる目木川から運び上げたと考える、河原石を使用した珍しい構造の横穴式石室になっていた。

埋葬施設の横穴式石室は、斜面をまえもって平坦にした範囲に、地形の高い部分を平面形が「コ」字状になるように掘り窪めた掘り方の中に、河原石を使って築造していた。掘り方の奥壁に面した検出面での幅は約350cmを測り、石室の長軸方向の長さは南東側で約450cm、北西側で約300cmになっていたが、等高線の179.00ｍのラインより地形の低い部分は、掘り方そのものの痕跡を確認することができなかった。掘り方の底部の幅は、奥壁に面した部分で約300cmを測り、入口に面した方向へ移行するにしたがって広くなっていた。掘り方の底部から検出面までの高さは、奥壁に面した部分が約90cm、左側壁に面した南東側が約100cm、右側壁に面した北西側が約50cmになっていた。掘り方の底部は、中間地点のレベルが最も高く、奥壁に面した部分と入口に面した部分の両側へ移行するにしたがって、全体が緩やかに傾斜していた。



第18図　４号墳調査後周辺地形測量図（1／150）

４号墳の横穴式石室は、掘り方の南東側の壁面に片寄って築造されていた。そのために、掘り方の南東側の壁面と石室の左側壁の石組みとの間が狭く、北西側の壁面と石室の右側壁の石組みとの間には、比較的広い空間が存在していた。また掘り方の南東側の壁面と石室の左側壁の石組みの方向が、ほぼ平行する状態になっていたので、側壁の築造は地形の高い部分に位置した左側壁から行われたのではなかろうか。なお石室の裏込め部分となる掘り方の壁面と石室の石組みとの空間には、暗黄褐色土と灰褐色土（第17図５と６）とが互層になって埋められていたが、土砂だけが存在するだけで石材は認められなかった。

墳丘の中央部分がわずかに陥没していたこともあって、天井石が１枚も残存しなかったから、奥壁や両側壁の石組みも部分的に崩壊した状態になっていた。また丘陵の裾部分に農作業用の小道が造られていたので、石室の入口付近が削平されていた。

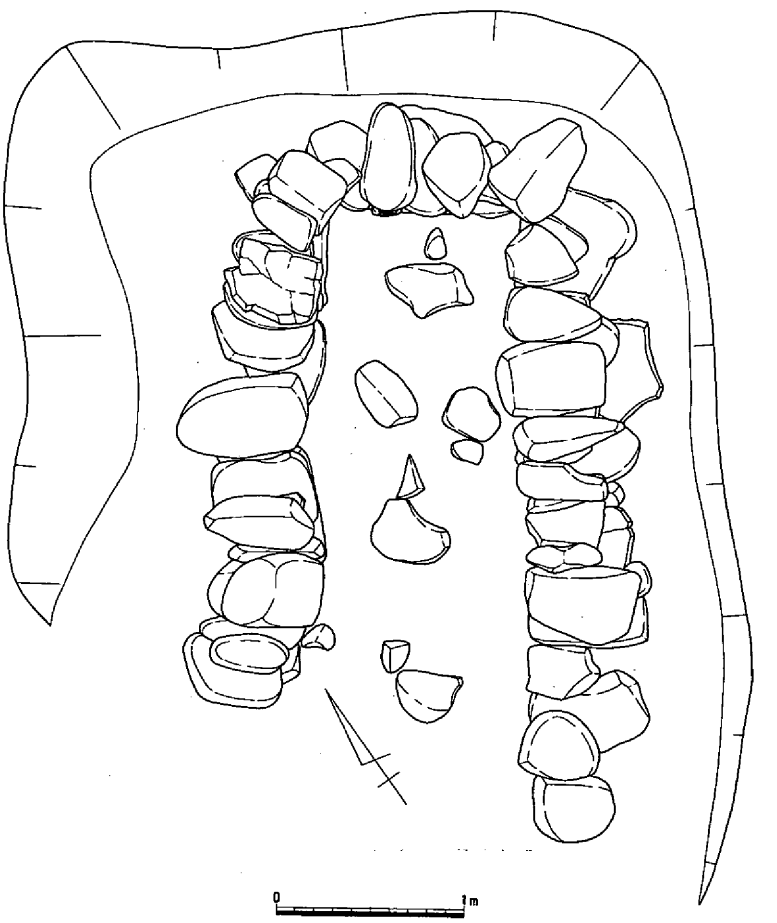
奥壁の底部には、奥壁幅ぎりぎりの大きくて安定した石を据え、右側壁と接する部分に生じた透き間には、３個の小さな石を詰めていた。この底部の大きな石の上面には、３個から４個の石を横に並べて２段に積み上げていたが、それより上位の部分は石が残存しなかった。

左側壁の底部には、奥壁と接する部分に細長くて安定した１個の石を据え、それ以外の部分の底部は、入口側から奥壁方向へ向かって順番に石を並べ、最後に奥壁と接する部分に据えた石との間に生じた空間に、１個の小さな石を詰めていた。この左側壁の底部に据えられた石は、入口に面した部分のものは比較的小さく、奥壁に近い位置の２段目には大きな石も使われていたので、壁面全体の石組み状態が不安定に感じられた。

右側壁の底部には、奥壁側から入口方向へ向かって順番に大きくて安定した石を並べ、奥壁に近い部分には天井石の近くまで壁面が残存していた。ところが入口に近い部分は、上位の石組みだけでなく底部の石も存在せず、中間部分の壁面では、３段目以上の石組みが崩壊して石材が確認できなかった。

石室内の床面には、上面が扁平な棺台と思われる石が、数多く存在した。

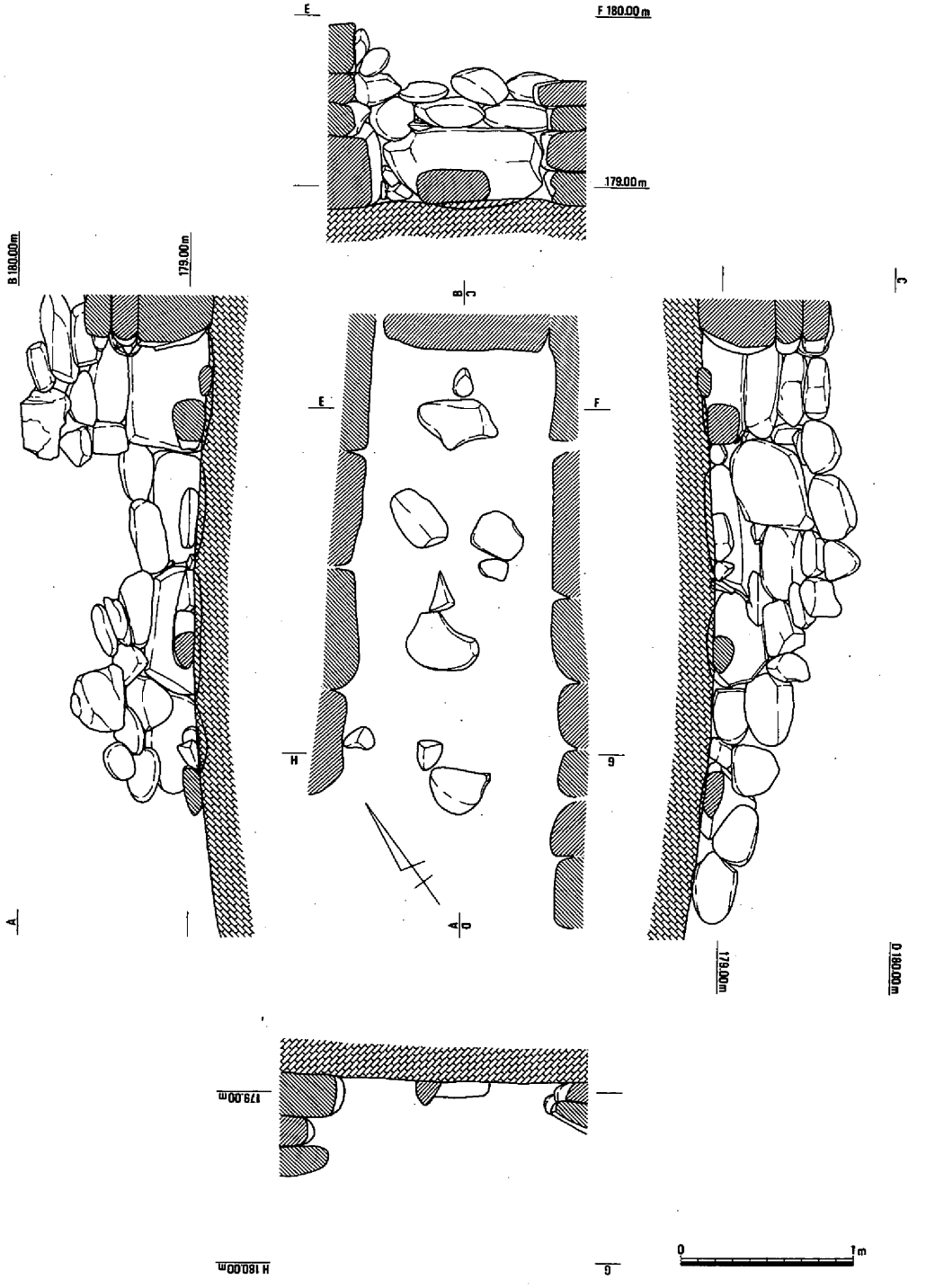
４号墳の埋葬施設である横穴式石室の計測値は、全長330㎝以上、奥壁幅105㎝、残存した右側壁端部での最大幅128㎝を測り、床面から天井石までの高さは、奥壁に近い部分で105㎝以上になるであろう。



第19図　４号墳石室上面実測図（1／40）

遺物出土状況（第21図、図版65－１・２）

石室内の木棺痕跡を追求するために、土層断面観察用の畦を残して調査を行ったが、棺台に使ったと思われる上面が扁平な河原石を検出したものの、木棺痕跡そのものは確認できなかった。出土遺物としては、平瓶と高杯の須恵器以外に、刀子と釘の鉄器が存在する。これらの須恵器や鉄器は、床面から浮いた状態で出土したものが多く、２本の釘（**34・39**）は離れた地点の破片が接合できた。また須恵器は２点だけで点数が少なく、釘の出土した位置も奥壁に近接した位置と中央部付近に片寄っていたから、石室内は盗掘を受けて攪乱され、一部の遺物は持ち出されていると推定された。



第20図　４号墳石室実測図（1／40）

出土遺物（第22・23図、図版67・68）

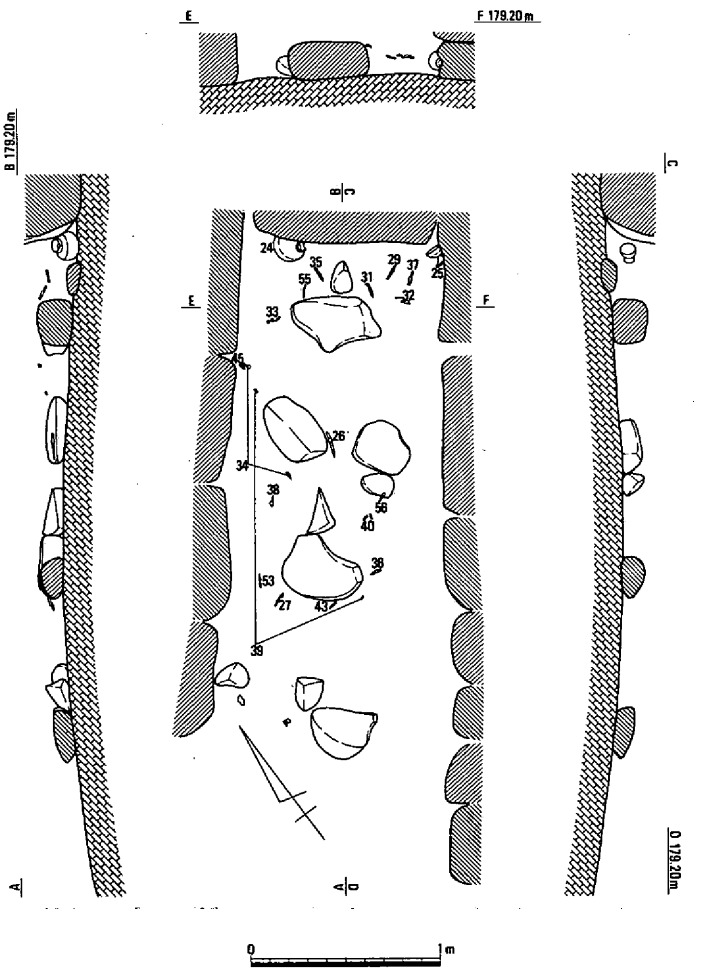
24は須恵器の平瓶である。口縁端部を欠損しているが、頸部径5.2cm、胴部径18.0cmを測り、底部から頸部までの高さは12.0cmである。手で持ち上げると比較的重いと感じるから、頸部から底部にかけての全体の器壁が厚いと推定される。胴部の断面形は球形に近い扁平な形態を呈し、器高が高くなっている。口縁部から頸部にかけては内外面ともヨコナデを行っているが、内面の胴部から底部にかけては調整手法が観察できなくて不明である。外面の胴部の上位から中位にかけては全体にヨコナデを行い、外面の胴部の下位は回転方向が右のヘラケズリを施している。外面の底部は、ヘラ切り未調整である。胎土中には砂粒が少なく、焼成は良好で、内外面とも灰白色を呈している。外面の口縁部から胴部にかけては、自然釉が付着している。

25は須恵器の短脚無蓋高杯である。口径9.2cm、器高8.1cm、脚上部径2.2cm、脚端部径7.4cmを測る完形品で、全体が歪んだ形態を呈している。外面の杯部では、屈曲した体部と口縁部の境目に稜線が認められ、外面の脚部下位には、１条の凹線が存在する。口縁部は斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。脚端部は器壁が薄くなって屈曲し、外側に中央部が浅く窪んだ面が存在する。内外面とも全体にヨコナデを行い、杯部の内面には仕上げナデを施している。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で、全体に灰白色を呈している。

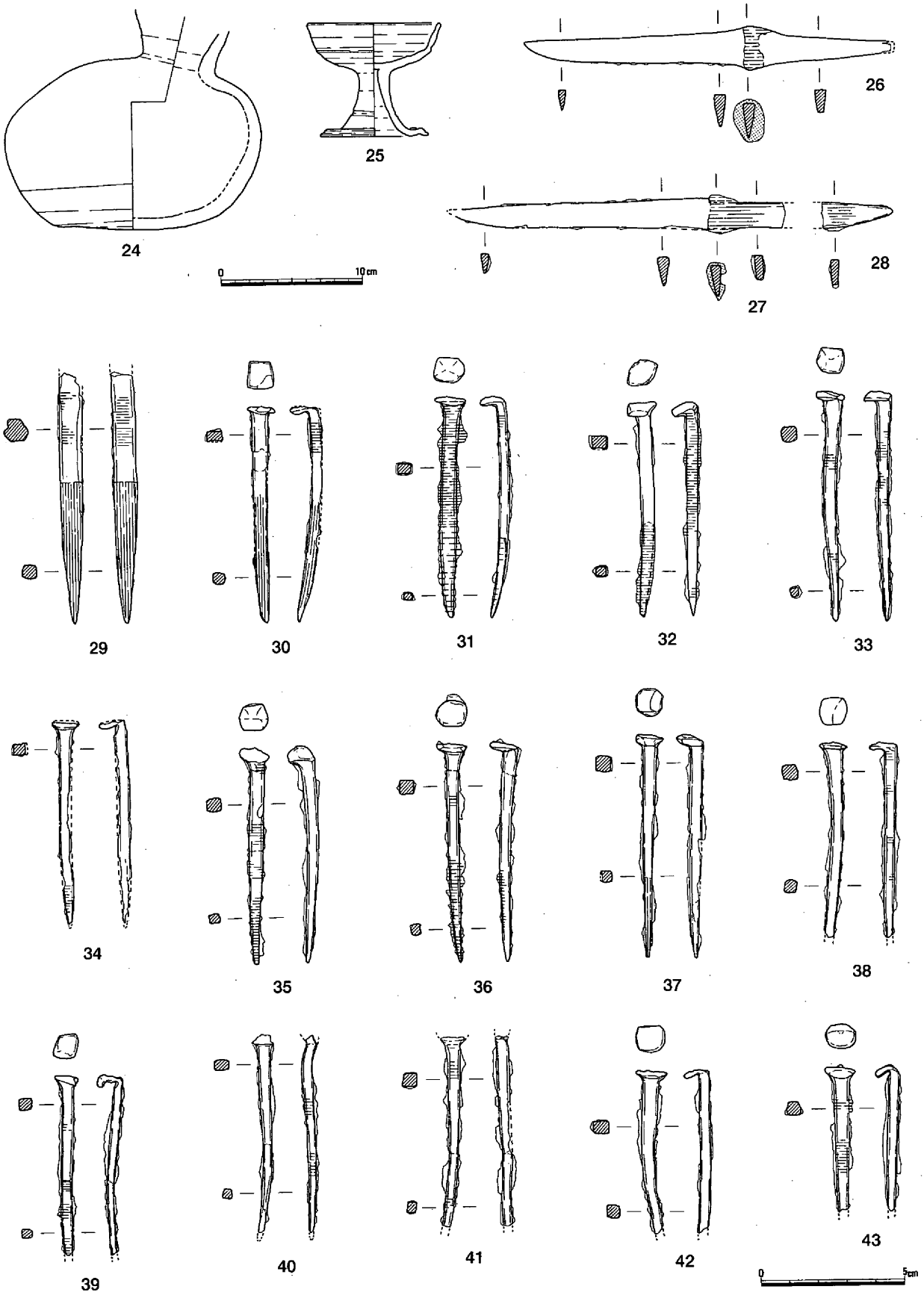
26は茎部の端部をわずかに欠損した刀子である。長さ7.7cmの刀身は関に向かって幅が広くなり、関には木質が残存して両側とも段は認められない。**27**と**28**は同一個体の刀子と推定される。刀身の先端部分や茎部の中間部分を欠損している。全体が細身の刀身は関へ移行するにしたがって幅が広くなり、関の片側には段が認められる。断面形が長方形に近い形態を呈する茎部は、全体に木質が付着している。

29は頭部を欠損した幅の広い釘で、この１本だけが出土している。先端部の断面形は正方形に近い形態を呈し、中位より頭部にかけては横方向の、中位より先端部にかけては縦方向の木質がそれぞれ残存している。

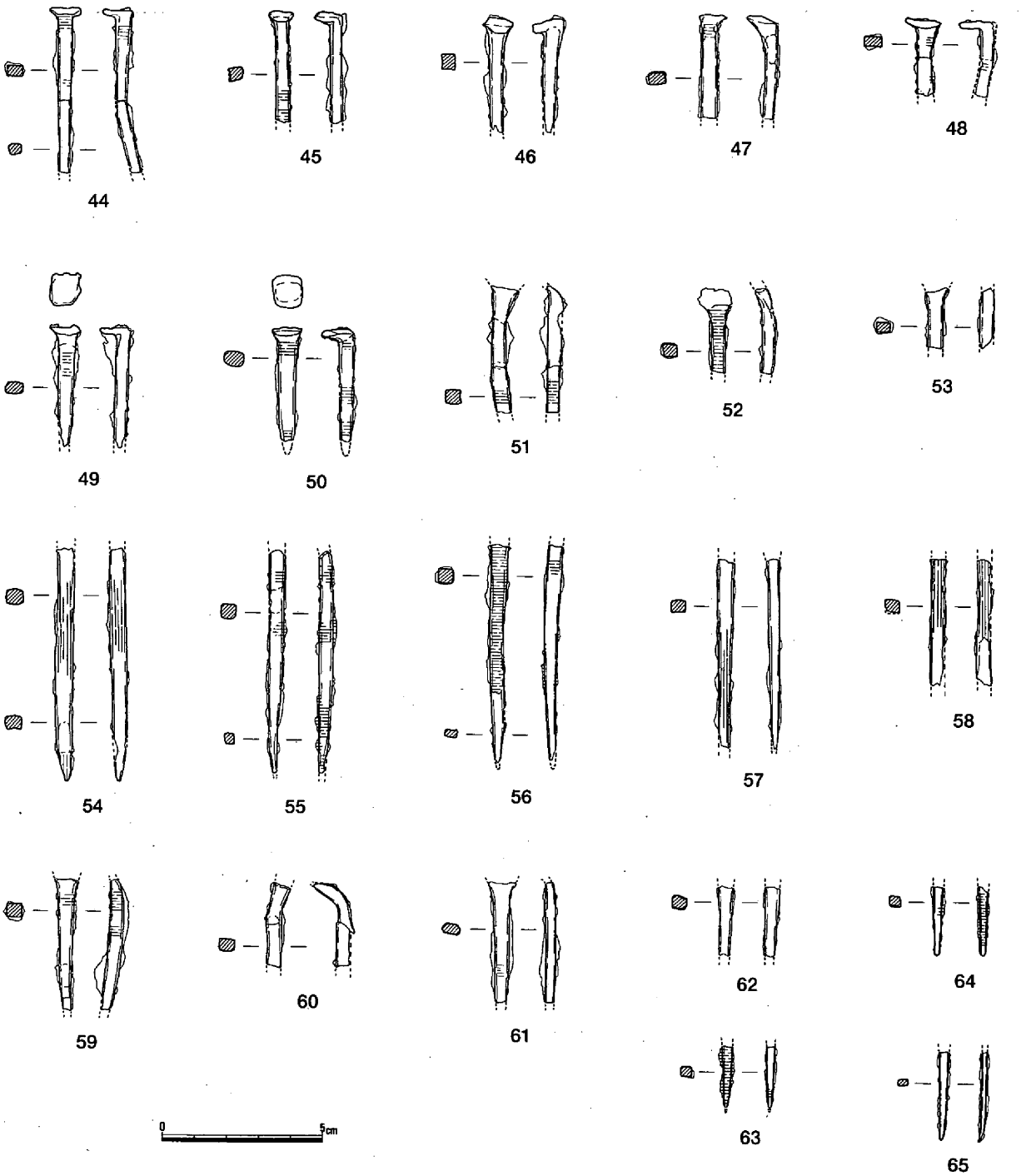
30～65はほぼ似た形態の釘である。頭部は、いずれも打ち延ばして逆「L」字状に折り曲げている。頭部の形状は不整形なものが多いが、方形に近い形態が一般的である。頭部に近い部分も先端部分も、断面形は長方形または正方形を呈している。完形品である**31**の計測値は、長さ7.8cm、幅0.7cm、厚さ 0.5cmで、全体



第21図　４号墳石室内遺物出土状況（1／40）



第22図　４号墳出土遺物（1）（1／4、1／2）



第23図　４号墳出土遺物（2）（1／2）

が緩やかに湾曲している。また全面に横方向の木質が付着しているが、先端部分の木目は頭部に近い部分のものより幅が広くなっている。同じように**32**は、長さ7.6cm、幅0.7cm、厚さ0.5cm、また**33**は、長さ8.1cm、幅0.7cm、厚さ0.6cm、**35**は、長さ7.7cm、幅0.7cm、厚さ0.5cm、**36**は、長さ7.8cm、幅0.6cm、厚さ0.5cmをそれぞれ測り、**32**は曲がっていないが、それ以外はいずれもわずかに湾曲し、全体に横方向の木質が付着している。

このように、横穴式石室から出土した須恵器の形態的特徴や調整手法と、釘の形態的特徴や大きさなどから、旦山４号墳は７世紀前葉から中葉にかけての時期に属するであろう。

(5) ５号墳

調査前の状況

この旦山５号墳は、１号墳から４号墳までの４基の古墳が所在した丘陵とは離れた、旦山遺跡の端部に検出した古墳である。旦山遺跡は、牧草が植えられた平坦な畑地になっていたから、まさか古墳が存在するとは、とても想像できなかった。

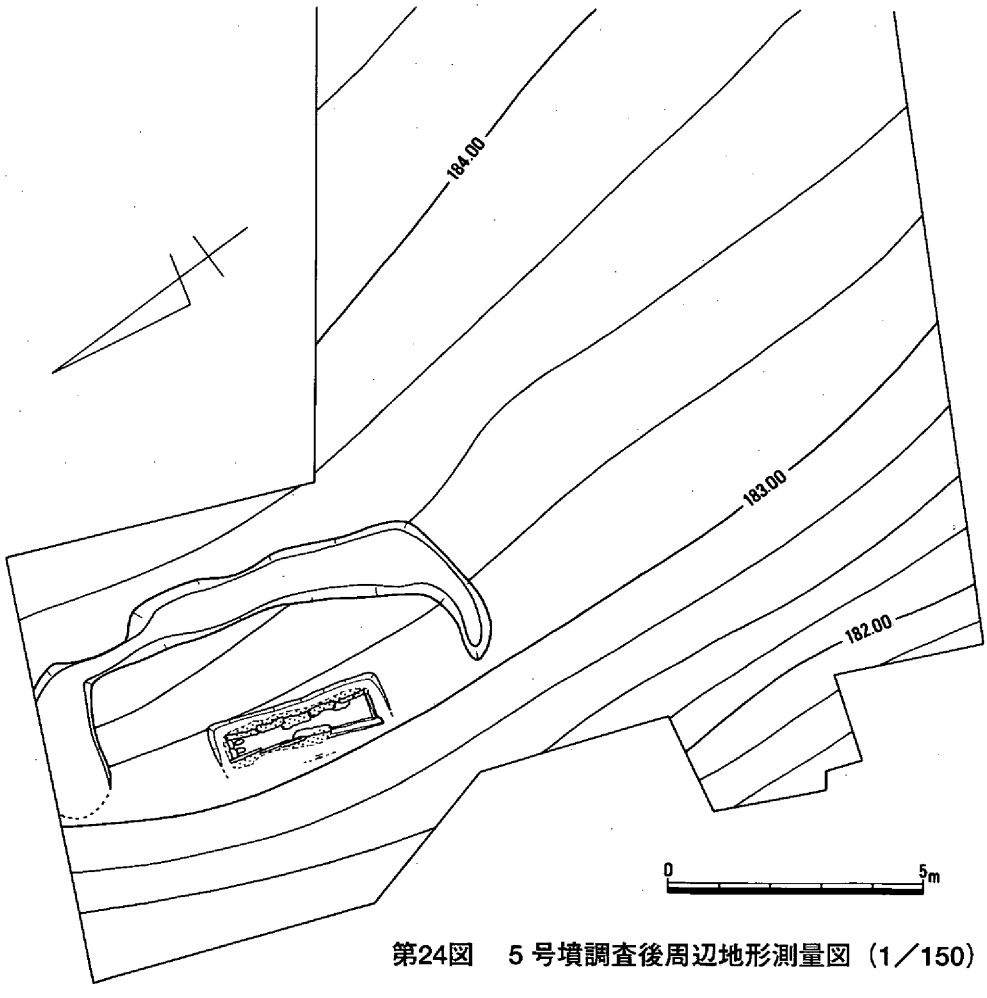
墳丘と周溝（第24図）

先にも記したように、この古墳が検出された地点は、牧草が植えられた平坦な畑地になっていたから、墳丘は削平されて存在しなかった。

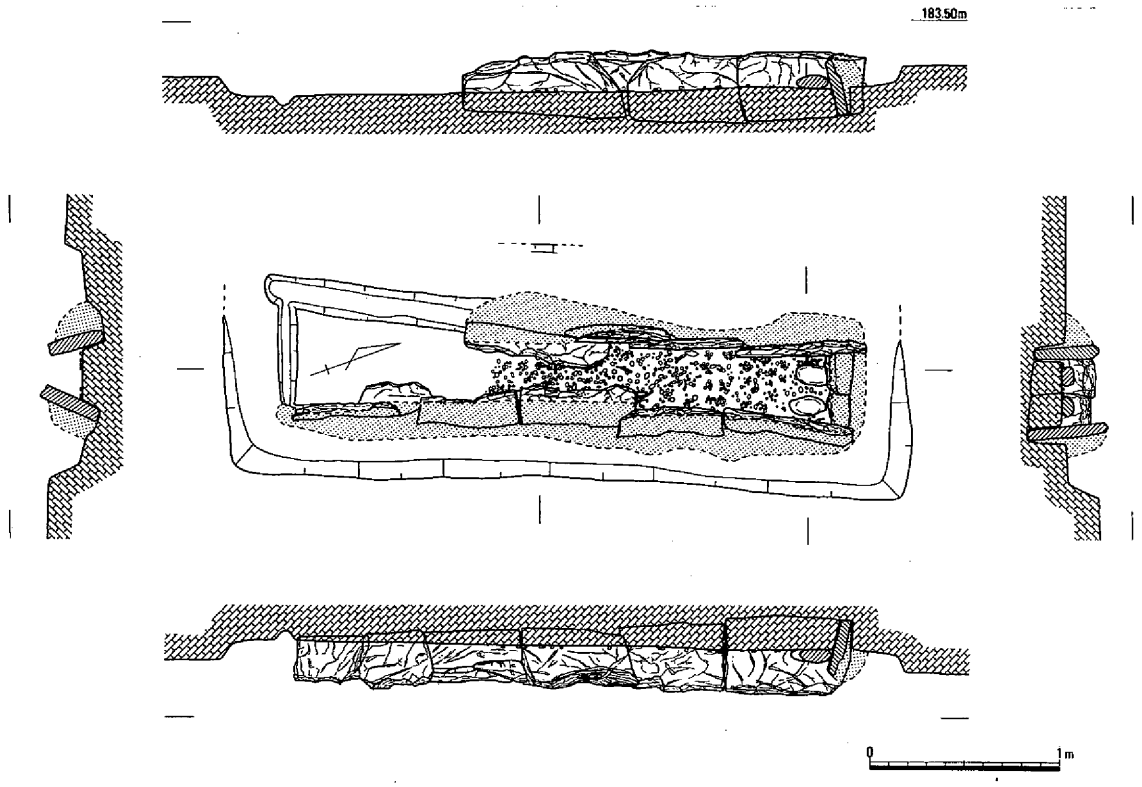
埋葬施設の箱式石棺を確認したので、その周辺部を精査したところ、地形の高い東側に面した部分に、「コ」字状を呈する周溝の一部を検出した。その結果、旦山５号墳は１辺９ｍの方墳であることが判明した。このわずかに残存した周溝の検出面での最大幅は140㎝を測り、検出面から最も深い地点で25㎝になっていた。溝内には黒褐色土が堆積し、断面形は浅い「U」字形を呈していた。

埋葬施設（第25図、図版66－１）

この旦山５号墳の埋葬施設は、箱式石棺である。墳丘中央部の地山面を、隅丸長方形になるように２段に掘り窪め、内法が長径280㎝、短径40～50㎝、高さ20～25㎝の石棺を造っていたが、上面が削平されて天井石は１枚も残存しなかった。また北西側の側壁の一部と南西側の小口部分も破壊され、石材が確認できなかった。南東側の側壁には６枚の板石を使用し、北東側の小口には２枚の板石が存在した。床面には砂利が敷かれ、北東から南西に向かってわずかに傾斜していた。北東側の小口部分には、２個の河原石による枕石が認められた。この５号墳の箱式石棺には粘土が施され、側壁や小口の石材に付着していた。



第24図　５号墳調査後周辺地形測量図（1／150）

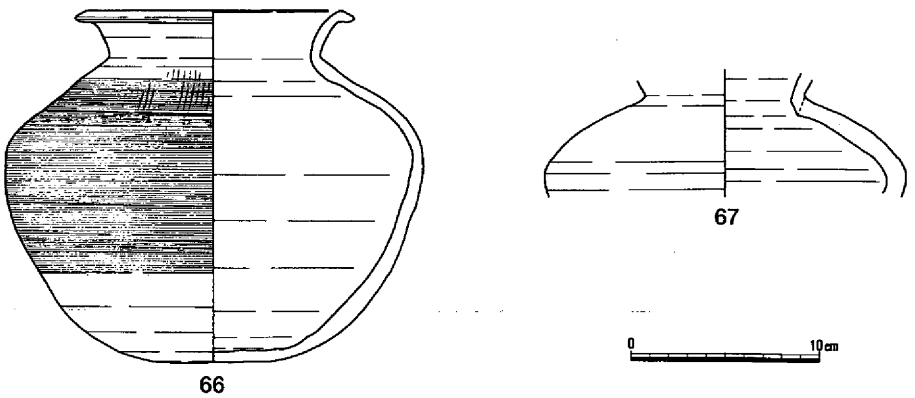


第25図　５号墳埋葬施設実測図（1／40）

第４節　丘陵斜面出土土器

66は１号墳の南西方向の丘陵斜面から出土した須恵器の壺である。推定口径13.4cm、推定器高18.5cm、頸部径11.2cm、胴部径21.8cmを測る。底部から頸部にかけて内湾して立ち上がり、頸部で外反すると口縁部へ移行する。口縁端部は斜め下方へ拡張し、外側に中央部がわずかに窪んだ面が認められる。胴部の最大径は、中位より上方の肩部に存在する。口縁部から頸部にかけては内外面とも全体にヨコナデを行い、外面の頸部下方にはタタキ痕跡が残存している。内面の胴部は全体にヨコナデを行い、外面の胴部上位にはカキメが認められ、外面の胴部下位はヘラケズリを施している。この須恵器の壺は、その形態的特徴や調整手法から、新しくても６世紀中葉の時期に属するであろう。

67は砂防工事で表土が削平された部分より出土した須恵器の壺である。頸部から胴部にかけての小破片で、内外面ともヨコナデを行っているが、６世紀後葉の時期に属するのではなかろうか。



第26図　丘陵斜面出土土器（1／4）

第５節　小　　結

発掘調査に着手する以前の段階では、旦山古墳群には１基の古墳が知られているだけであった。ところが、地元の人々の話によると、農作業を行っていた時に１振の大刀が出土し、米来小学校へ持参したということであるから、埋葬施設が破壊された別の古墳が存在する可能性が考えられた。

旦山古墳群の所在する丘陵全体の立木や竹薮の伐採作業を行って全面調査を実施したところ、丘陵の尾根上に３基、丘陵の斜面に１基の古墳を検出した。さらに翌年に全面発掘調査が行われた旦山遺跡で、破壊されて埋葬施設と周溝の一部が辛うじて残存した１基の古墳を発見したから、旦山古墳群に所在した古墳は全部で５基になり、見つけた順番に「旦山１号墳」から「旦山５号墳」とした。

旦山１号墳は、目木川流域の沖積平野に向かって、舌状に張り出していた丘陵の先端部に位置した１辺12ｍの方墳で、墳丘上には河原石を使用した葺石が認められた。埋葬施設は長大な木棺直葬の土壙であるが、遺物は出土しなかった。

旦山２号墳は、丘陵の尾根上に所在した１辺10ｍの方墳で、埋葬施設は削平されて確認することができなかった。この古墳に伴う遺物は、精査したにもかかわらず出土しなかった。

旦山３号墳は、丘陵の尾根上に所在した直径17ｍの円墳である。埋葬施設は長軸が尾根方向に平行する箱式石棺と推定されるが、石材がすべて抜き取られた痕跡が残存しただけである。出土遺物として、周溝内に固まった状態で検出した、尖根の鉄鏃と細身の柳葉形鉄鏃がある。

旦山４号墳は、丘陵の斜面に所在した直径10ｍの円墳で、埋葬施設は河原石を使用した無袖の横穴式石室である。石室には天井石が１枚もなく、奥壁や側壁の石材も部分的に残存しなかった。この４号墳に伴う遺物として、石室内から出土した平瓶や高杯の須恵器と刀子や釘の鉄器がある。

旦山５号墳は、丘陵から離れた旦山遺跡に所在した１辺９ｍの方墳である。埋葬施設は長大な箱式石棺で、天井石は１枚も残存しなかった。床面には砂利が敷かれ、小口部分には２個の河原石による枕石が認められたが、遺物は存在しなかった。

この旦山古墳群に所在した５基の古墳について、築造された時期を考えてみたい。

丘陵の斜面に存在した旦山４号墳は、埋葬施設が無袖の横穴式石室であるから、古墳の立地状況と埋葬施設が、残る４基の古墳とは著しく異なっていた。横穴式石室の中から出土した須恵器の形態的特徴や調整手法と、釘の形態的特徴や大きさなどから、旦山４号墳は７世紀前葉から中葉にかけての時期に築造され、遺体の埋葬が行われたのであろう。

丘陵の尾根上に所在した３号墳は、埋葬施設が箱式石棺で、周溝内から５世紀中葉前後と思われる鉄鏃が出土した。４号墳を除く旦山古墳群の各古墳と同じように、丘陵の先端部や尾根上に低平な墳丘を有する方墳や円墳が数多く築造されていた古墳群として、米子自動車道久世インターチェンジの建設に伴って発掘調査が実施された中原古墳群[1]がある。この古墳群は旦山古墳群と近接した位置にあり、埋葬施設はいずれも箱式石棺であった。その調査結果によると、古墳が造られたのは５世紀中葉とされているから、旦山古墳群の４基の古墳もその時期に築造されたのではなかろうか。　　（福田）

註

（１）福田正継・山磨康平「中原古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』93　1995年

表－１　３号墳出土鉄器観察表

番号	器種	法量（cm）			重量（g）	残存状態
		長さ	幅	厚み		
1	鏃	5.30	1.10	0.45		欠損品
2	鏃	4.60	1.30	0.50		欠損品
3	鏃	2.90	0.60	0.50	17.68	欠損品
4	鏃	1.20	0.95	0.40		欠損品
5	鏃	2.90	0.65	0.40		欠損品
6	鏃	5.70	0.85	0.55	4.47	欠損品
7	鏃	8.05	0.95	0.55	6.66	欠損品
8	鏃	5.10	0.60	0.40	4.01	欠損品
9	鏃	3.90	0.70	0.50	3.12	欠損品
10	鏃	13.20	1.25	0.55	13.06	ほぼ完形
11	鏃	10.15	1.10	0.50	12.17	欠損品
12	鏃	10.00	1.15	0.50	14.50	欠損品

番号	器種	法量（cm）			重量（g）	残存状態
		長さ	幅	厚み		
13	鏃	10.20	1.25	0.45	11.22	欠損品
14	鏃	7.90	1.10	0.55	7.67	欠損品
15	鏃	7.50	1.20	0.60	9.95	欠損品
16	鏃	3.90	1.10	0.60	4.55	欠損品
17	鏃	2.55	1.15	0.50	2.49	欠損品
18	鏃	3.20	1.10	0.60	3.19	欠損品
19	鏃	3.90	1.10	0.50	3.82	欠損品
20	鏃	4.60	0.75	0.60	4.90	欠損品
21	鏃	2.90	0.60	0.50	1.80	欠損品
22	鏃	2.70	0.65	0.50	2.17	欠損品
23	鏃	1.75	0.45	0.40	0.59	欠損品

表－２　４号墳石室内出土須恵器観察表

平　瓶

番号	口径	器高	頸部径	胴部径	技法	色調	回転方向	残存率	備考
24	－	－	5.2	18.0	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ 外面底部ヘラ切り未調整	内　灰白色 外　灰白色	右	約１／８	焼成は極めて良好である 外面全体に自然釉が付着している

短脚無蓋高杯

番号	口径	器高	頸部径	胴部径	技法	色調	回転方向	残存率	備考
25	9.2	8.1	2.2	7.4	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヨコナデ	内　灰白色 外　灰白色	右	完形	杯部と脚部に１条の凹線が存在している 全体に自然釉が付着している

表－３　４号墳石室内出土鉄器観察表

番号	器種	法量（cm）			重量（g）	残存状態
		長さ	幅	厚み		
26	刀子	12.80	1.65	0.45	12.28	ほぼ完形
27	刀子	11.60	1.15	0.50	11.34	欠損品
28	刀子	2.50	0.90	0.30	1.31	欠損品
29	釘	8.85	0.95	0.80	11.73	欠損品
30	釘	7.60	0.65	0.45	4.03	ほぼ完形
31	釘	7.80	0.65	0.48	5.67	完形品
32	釘	7.58	0.65	0.49	4.78	完形品
33	釘	8.13	0.65	0.58	4.95	完形品
34	釘	7.10	0.55	0.42	2.74	ほぼ完形
35	釘	7.65	0.65	0.50	5.01	完形品
36	釘	7.80	0.58	0.50	4.73	完形品
37	釘	7.90	0.60	0.50	4.97	ほぼ完形
38	釘	6.85	0.55	0.55	3.92	欠損品
39	釘	6.30	0.45	0.45	3.81	欠損品
40	釘	6.90	0.50	0.45	3.16	欠損品
41	釘	6.70	0.52	0.50	4.44	欠損品
42	釘	5.80	0.60	0.50	4.04	欠損品
43	釘	5.13	0.62	0.50	3.88	欠損品
44	釘	5.25	0.60	0.50	3.48	欠損品
45	釘	3.52	0.41	0.40	2.51	欠損品

番号	器種	法量（cm）			重量（g）	残存状態
		長さ	幅	厚み		
46	釘	3.70	0.60	0.60	2.36	欠損品
47	釘	3.25	0.60	0.40	2.11	欠損品
48	釘	2.40	0.70	0.50	2.01	欠損品
49	釘	3.90	0.60	0.40	2.70	欠損品
50	釘	4.,60	0.65	0.50	2.65	欠損品
51	釘	4.02	0.78	0.72	3.01	欠損品
52	釘	2.70	0.55	0.50	1.73	欠損品
53	釘	1.90	0.60	0.55	0.96	欠損品
54	釘	7.40	0.60	0.60	5.96	欠損品
55	釘	7.08	0.60	0.53	3.91	欠損品
56	釘	6.82	0.55	0.55	4.22	欠損品
57	釘	5.95	0.55	0.50	3.23	欠損品
58	釘	4.00	0.45	0.45	2.26	欠損品
59	釘	4.10	0.60	0.60	3.00	欠損品
60	釘	2.70	0.50	0.40	1.55	欠損品
61	釘	3.80	0.90	0.40	2.34	欠損品
62	釘	2.20	0.50	0.50	1.20	欠損品
63	釘	1.90	0.40	0.40	0.56	欠損品
64	釘	2.20	0.40	0.40	0.61	欠損品
65	釘	2.80	0.40	0.20	0.64	欠損品

表－４　丘陵斜面出土須恵器壺観察表

番号	口径	器高	頸部径	胴部径	技法	色調	回転方向	残存率	備考
66	(13.4)	(18.5)	11.2	21.8	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ カキメ	内　灰色 外　灰色	右	約１／２	外面肩部にタタキ痕跡が存在している 胎土中に砂粒が少ない
67	－	－	(8.6)	19.2	内　ヨコナデ 外　ヨコナデ	内　灰色 外　灰色	右	約１／８	外面肩部に指頭圧痕が残存している 頸部に接合痕跡が存在している

第８章　奥田古墳

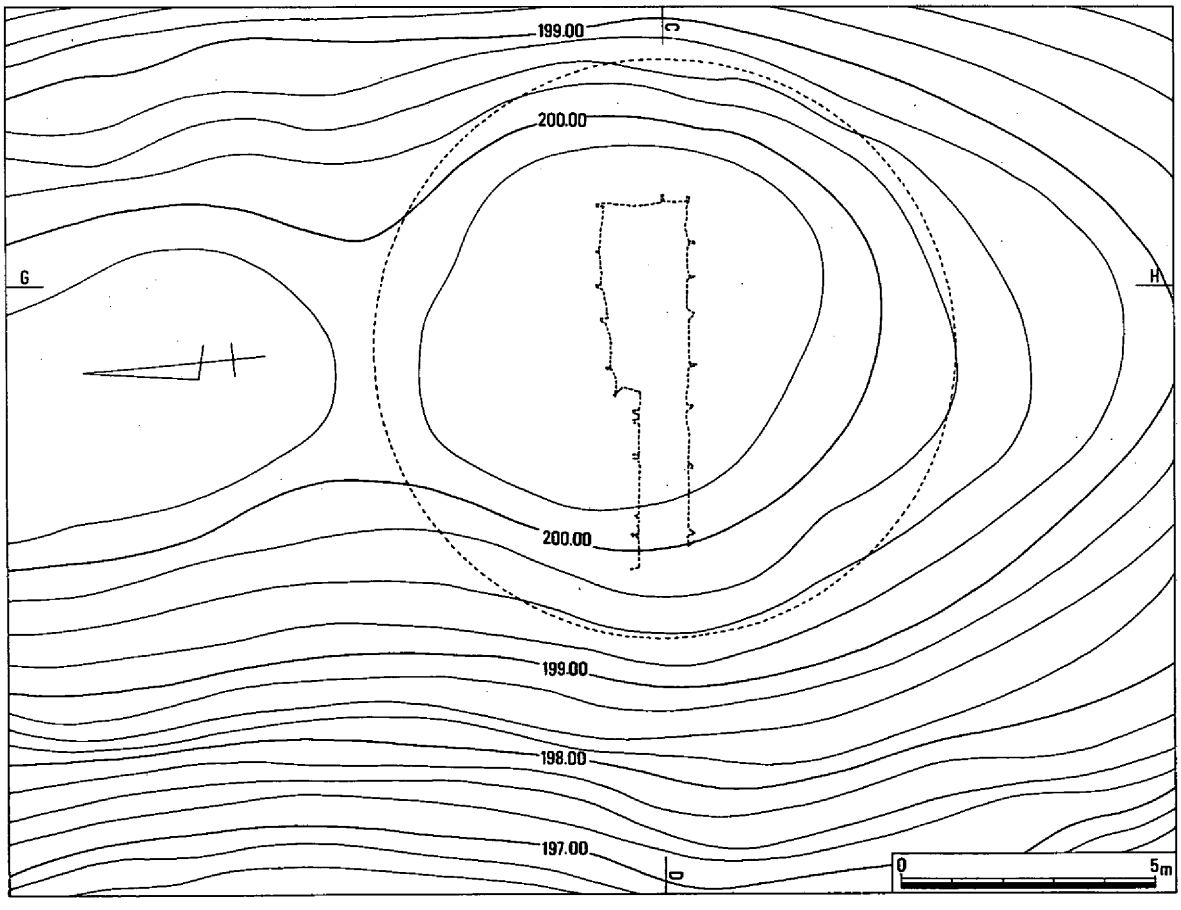
第１節　調査の経過

奥田古墳は、平成元年３月31日に久世町教育委員会から発行された『久世町埋蔵文化財分布地図』には掲載されていなかったが、平成５年10月６日に岡山県教育庁文化課が県北流通センター建設予定地の久世町中原地区（南区域）内の遺跡分布調査を行って、その所在が明らかになったのである。

発見された当時は、周辺全体に雑木が生い茂って地表面が観察できない状態であったから、丘陵の尾根上に３基の古墳が並んで所在すると推定され、古墳１基につき400㎡の合計1200㎡が発掘調査の対象面積になった。

12月１日から野辺張遺跡の発掘調査を実施していたが、遺跡の所在地が北側に面した場所であったので、12月中旬に降り積もった雪が根雪となって残り、発掘作業ができなくなった。そのために、正月が明けるとすぐに、野辺張遺跡の調査に並行して、３か所の高まりの発掘調査に着手した。

尾根上にトレンチを設定して、３基の古墳と思われる高まりの確認調査を行ったところ、古墳は１基だけで、残る２か所は、盗掘された時の土砂の山と墓地造成の残土の山であることが判明した。



第１図　調査前周辺地形測量図（1／150）

第２節　調査の概要

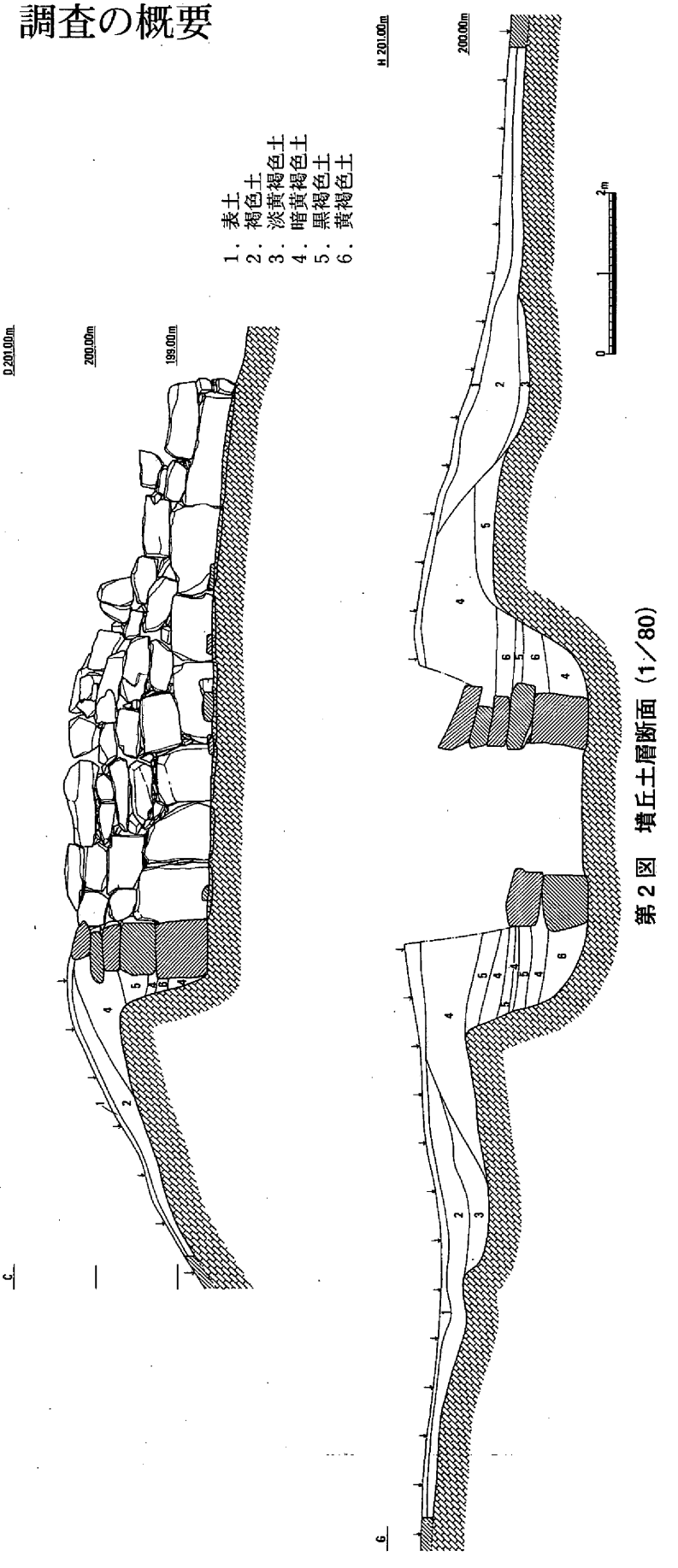
岡山県北流通センター建設予定地内の遺跡分布調査によって、その所在が発見された時には、丘陵の尾根上に３基の古墳が並んで築造されていると思われ、埋葬施設は旦山古墳群の各古墳と同様の、箱式石棺か木棺直葬の土壙と考えられていた。

ところが発掘調査を進めると、古墳は１基だけが単独で築造されており、埋葬施設は以外にも右片袖を有する横穴式石室であることが判明した。

この古墳は、所在地の小字名から「奥田古墳」と命名したが、墳丘は直径11ｍの円墳である。墳丘の盛土は、盗掘を受けていたこともあって、残存しなかった。

埋葬施設は、右片袖を有する横穴式石室であるが、天井石は１枚も存在しなかった。石室の計測値は、玄室長350㎝、羨道長350㎝の全長700㎝で、玄室と羨道の長さが１：１の比率になっていた。玄室の幅は、奥壁で160㎝、羨道に面した部分で140㎝であった。羨道の幅は、玄室に面した部分で90㎝、石室入口で100㎝になっていた。石室の床面からの高さは、奥壁部分で180㎝かそれ以上になり、床面には棺台と思われる扁平な石が存在した。

石室内は、埋葬された当時の状態が良好に残存して、多数の須恵器、鉄器、装身具が出土した。



第２図　墳丘土層断面（1／80）

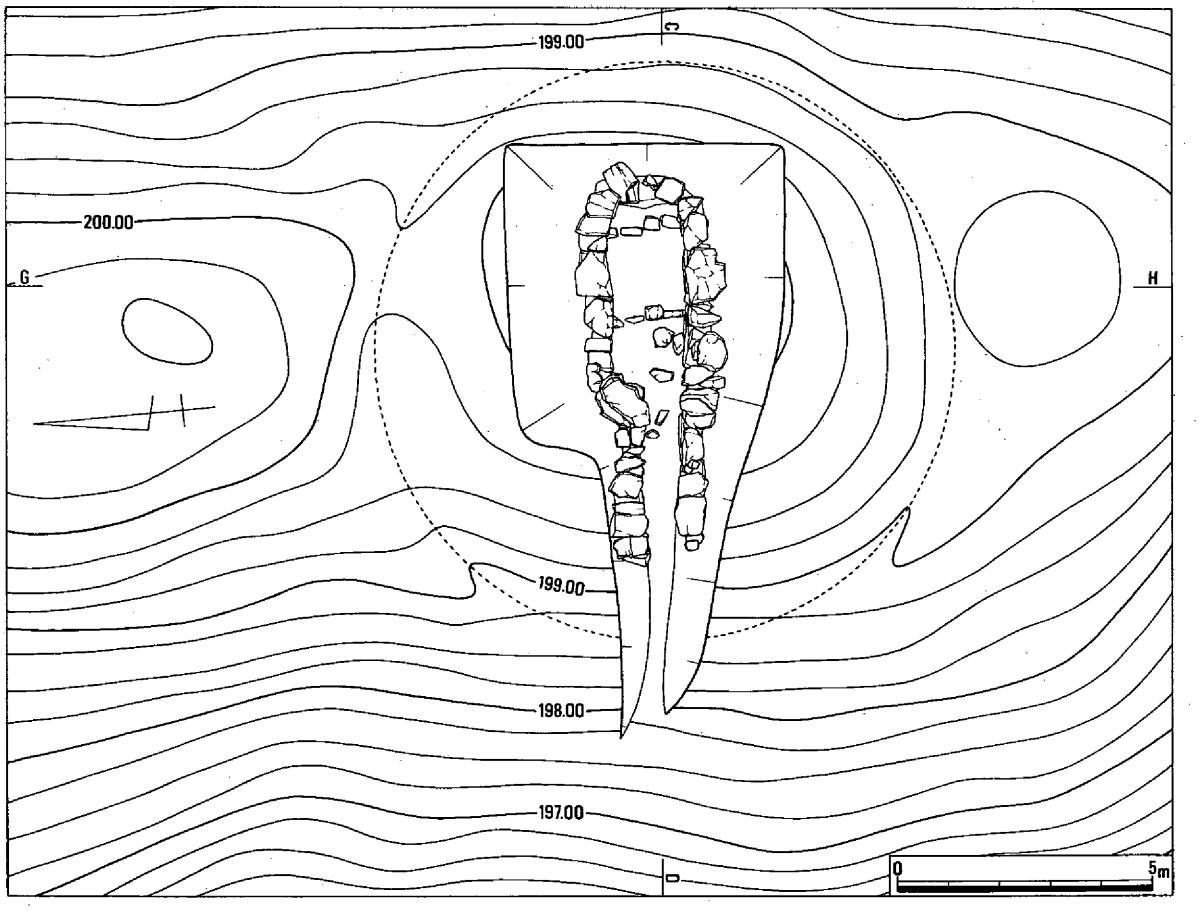
第３節　古墳の調査

調査前の状況（第１図）

野辺張遺跡や先旦山遺跡が所在した低丘陵と、惣台遺跡が所在した緩斜面とに挟まれた細長い谷地形の奥まった所に、近隣の水田へ水を送る池ノ谷池が造られていた。奥田古墳は、その小さな池を望む東側の低丘陵上に位置し、周辺部が高い山に囲まれているから、眺望は悪くなっていた。

平成元年３月31日に久世町教育委員会から発行された『久世町埋蔵文化財分布地図』には、この古墳は掲載されていなかったが、平成５年10月６日に岡山県教育庁文化課が岡山県北流通センター建設予定地の久世町中原地区（南区域）の遺跡分布調査を行って、その所在が明らかになったのである。発見された当時は、周辺全体に雑木が生い茂って地表面観察ができない状態であったから、丘陵の尾根上に３基の古墳が並んで所在すると推定されていた。

発掘調査に着手して丘陵全体の立木を伐採したところ、尾根上に３か所の高まりが確認された。中間に位置した高まりは、中央部の表土が深く陥没して割り石が並んでいるのが認められ、東側の丘陵の斜面には天井石と思われる比較的大きな石が横たわり、その周囲に割り石が散乱していた。このような状況から、中間部分の高まりは、埋葬施設が横穴式石室の古墳であると考えられた。尾根上にトレンチを設定して、残る２か所の高まりの確認調査も行ったが、南側のものは古墳が盗掘された時の土砂の山であり、北側のものは隣接した墓地が造成された時の残土の山であることが判明した。



第３図　調査後周辺地形測量図（1／150）

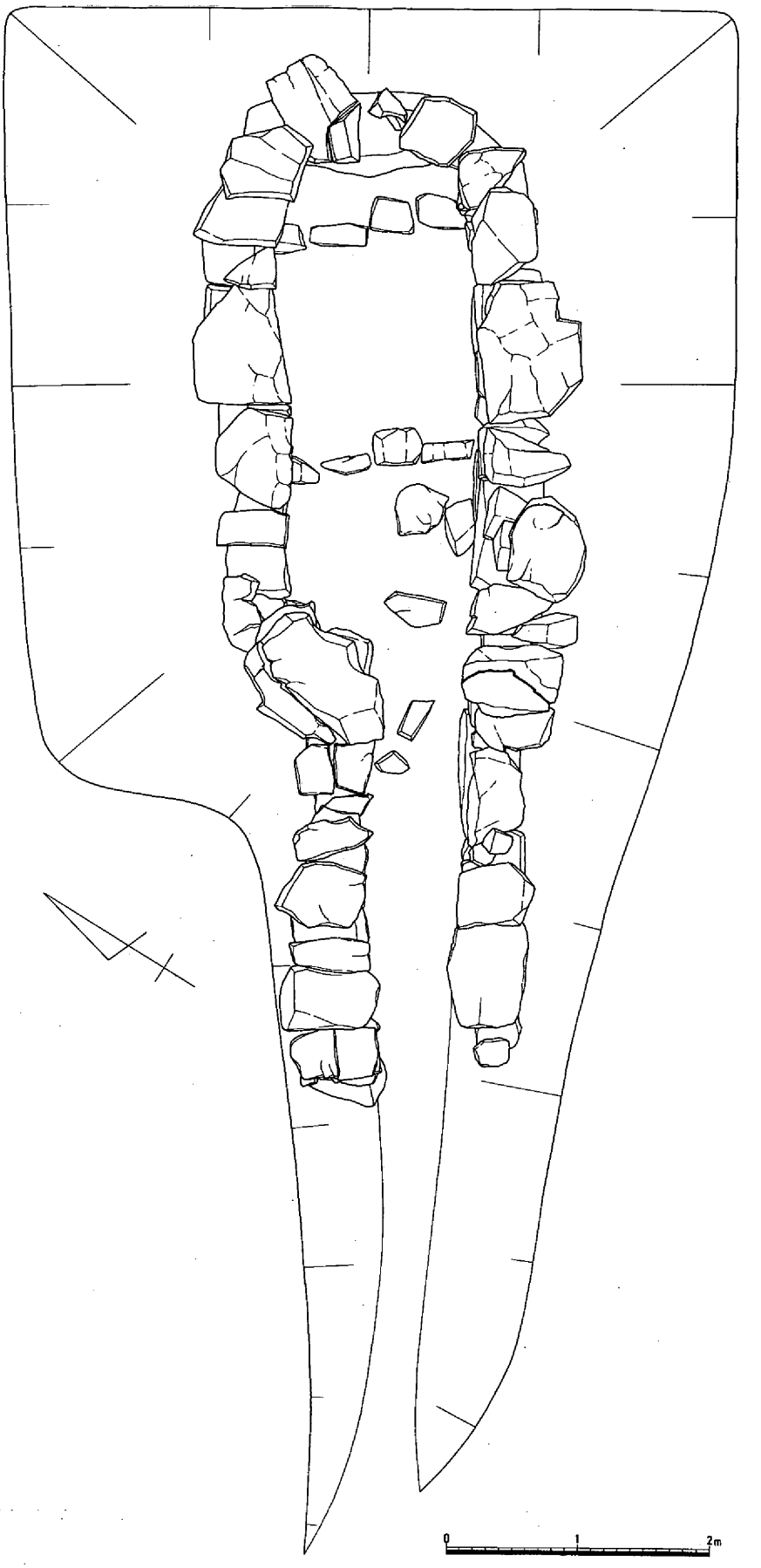
墳丘と周溝

（第２・３図）

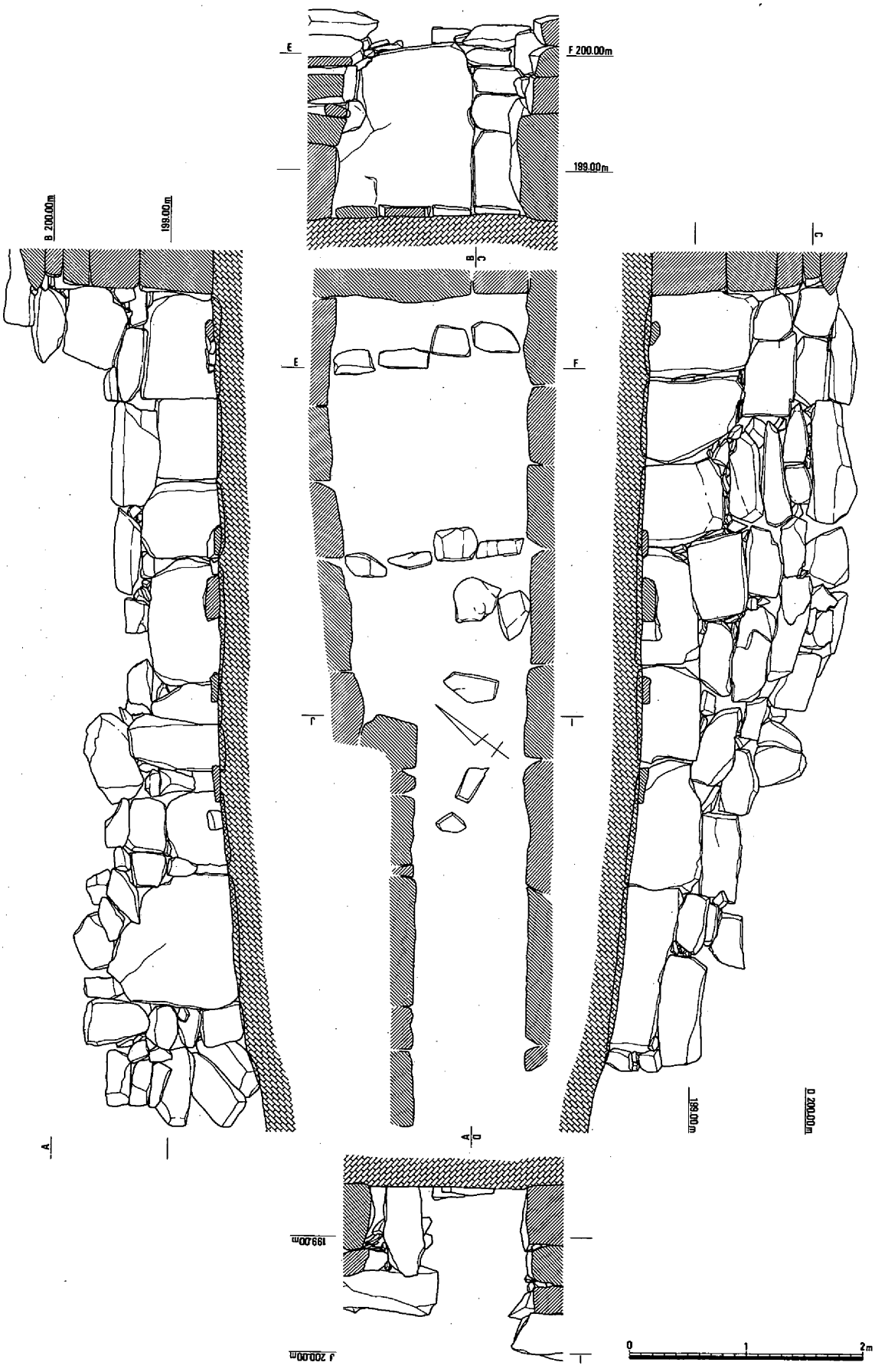
この古墳の埋葬施設である右片袖を有する横穴式石室には、天井石が１枚も残存しなかったこともあって、墳丘の中央部は陥没して盛土が認められなかった。また横穴式石室の古墳の所在地点としては珍しく、尾根の頂部に尾根方向と直交するように築造されていたから、古墳が造られた当時より墳丘の盛土が少なかったのかもしれない。盛土には暗黄褐色土（第２図４）が使用され、この土は石室の掘り方の裏込めにも、黒褐色土や黄褐色土とともにサンドイッチの状態で検出された。

奥田古墳の墳丘は、直径11ｍの円墳である。残存した高さは、尾根頂部の北側周溝の底部から90㎝、南側周溝の底部から140㎝になっていた。

この古墳の周溝は、地形の高い南北両方向の尾根部分に弧を描いて認められたが、低部のレベルは北方向が高くなっていた。両方向の周溝は地山面を掘り窪めたもので、断面形は「Ｕ」字形を呈し、淡黄褐色土と褐色土が堆積していた。



第４図　石室上面実測図（1／50）



第５図　石室実測図（1／50）

埋葬施設（第４・５図、図版69－１・70－１）

奥田古墳の埋葬施設は、右片袖を有する横穴式石室であるが、天井石は１枚も残存しなかった。

丘陵の尾根上に築造されていたため、尾根方向に直交する石室の掘り方は、最も深い地点で床面から150cmになっていた。掘り方の平面形は鉞のような形態を呈し、石室の袖の部分が屈曲して、刃部と柄の境目に酷似していた。地形が低い西側斜面の石室入口に面した墓道部分は、断面形が逆台形になるように地山を掘り下げていた。掘り方の東方向に面した部分は、法面との間に透き間が生じないように近接して奥壁の石を据えていた。南北両方向の掘り方法面と玄室側壁の石組みとの間には、80～120cmの間隔が認められたが、袖を有する北側が南側よりもやや広くなっていた。ところが、羨道部分になると、掘り方そのものが西方向へ移行すると墓道になっていたこともあって、玄室部分とは逆に、南側が北側よりも広くなっていた。また掘り方の内部に築造された石室の側面を見ると、南側の玄室から羨道にかけての壁面は直線的になっていたが、北側の玄室壁面は緩やかに湾曲していた。

このような掘り方とその内部に築造された石室との状況から、丘陵の尾根上に掘り方が掘り窪められると、まず奥壁部分の鏡石となる大きくて安定した石を立てて据え、南側の玄室から羨道の基底部の石を直線的に並べてから、北側の袖部分に玄門となる直方体に近い石を立てて置き、その石を基準点に玄室と羨道の基底部に大きな石を据えているようである。

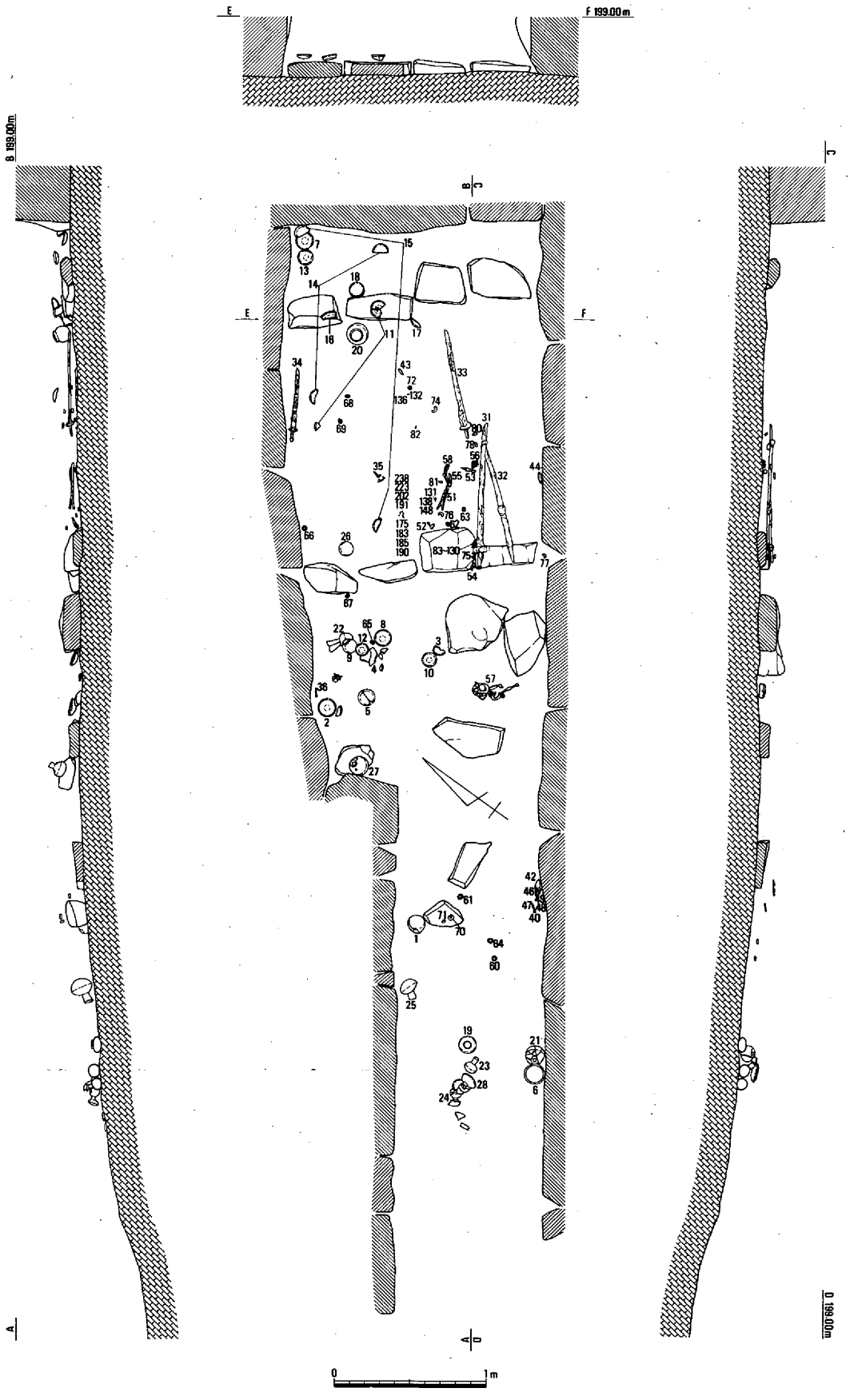
奥壁には、右側壁に接して鏡石の大きくて安定した石を立てて据え、左側壁との間に生じたやや広い空間に、比較的小さな石を５段以上に積み上げていた。鏡石の上位にも、透き間を埋める小さな石が詰められていたと思われるが、天井石がなかったこともあって、石そのものは認められなかった。

玄室と羨道の区別がなく直線的に延びた左側壁は、奥壁に近い部分の残存状態が良好である。基底部の石は、奥壁側から入口に向かって順番に据えられていたが、奥壁に近い３個の石は立てて並べ、それ以外の部分はいずれも横口の状態に置かれていた。基底部に据えられた石の上面の高さが不揃いで、２段目より上位に積み上げられた石も不規則な状態になっていたから、横方向と縦方向の目地のラインが乱れて、壁面全体が不安定な様相を呈していた。

右側壁の中間地点には直方体に近い形の石が立てて据えられ、袖部分の玄門となって壁面を玄室と羨道に分離していた。玄室の壁面は残存状態が悪く、天井石の高さまで石材が残っていたのは、奥壁に隣接する部分だけであった。玄室の基底部の石は、奥壁側からと袖石側からそれぞれ石室内の表面が長方形になる横口の状態に２個の石が据えられ、最後になって中間地点の空間に石を立てて挿入していた。基底部に据えられた石の表面は緩やかに湾曲し、「胴張り」の状況を呈していた。２段目に積み上げられた石の上面のレベルはほぼ揃い、横方向の目地のラインが直線的になっていた。羨道部分は、中間に大きな石が立てて置かれていた。その石と袖石との間には、１個の石が据えられていたが、それぞれの石の間に広い透き間が存在した。羨道部分は玄室部分よりも残存状態が良好であるものの、石の大きさが不揃いで透き間が多く、入口に面した地点も小さな石を乱雑に積み上げていた。

地山を掘り窪めただけの床面は、奥壁と石室入口で50cmの高低差があり、玄室から入口に向かって傾斜していた。玄門付近から奥壁にかけての床面には、棺台と思われる上面の扁平な石が存在した。

Ｎ－54°－Ｅの方向を示す横穴式石室の計測値は、玄室長350cm、羨道長350cmの全長700cmになっていた。玄室の幅は、奥壁で160cm、羨道に面した部分で140cmであった。羨道の幅は、玄門部分で90cm、石室入口で100cmを測り、玄室から石室入口へ移行するにしたがって幅が広くなっていた。石室の床面からの高さは、奥壁部分で180cmかそれ以上になると思われる。



第６図　石室内遺物出土状況（1／40）

遺物出土状況（第６図、巻頭図版３、図版69・70）

この古墳の埋葬施設である横穴式石室は、天井石が１枚も残存しなかったので墳丘の中央部が陥没していたが、以外にも石室内は撹乱されることなく、繰り返し遺体が埋葬された当時の様相を、良好な状態で留めていた。

奥壁の右側壁に寄った部分には、追葬によって片付けられたと思われる須恵器が存在し、破片になって分散しているものも認められた。また玄室の右側壁側で袖に面した位置からは、長頸壺や平瓶を含む須恵器がまとまって出土した。羨道の入口に近い地点にも、各器種の須恵器が確認された。しかしながら、なぜか玄室の左側壁に寄った位置には、須恵器が検出できなかったのである。

鉄器のうち大刀は、３振が玄室中央部の左側壁へ寄った地点から出土し、残る１振は右側壁に近接して確認された。これらの大刀は、いずれも主軸方向にほぼ平行するように置かれ、刀身部が奥壁側で茎部が入口側になっていた。馬具の轡は、玄室の左側壁へ寄った玄門近くに単独で出土し、鐙金具は玄室の中心部に轡と離れて存在した。また刀子は、玄室の中心部よりやや左側壁へ寄った、大刀と鐙金具の中間部分から出土し、鉄鏃は玄室と羨道の広い範囲で散発的に確認された。

玉類のうちでも勾玉や管玉などの大型のものは、玄室の中心部からやや左側壁へ寄った、大刀と鐙金具の周辺に認められたが、黒色または黒褐色を呈する土製の練玉は、最も規模が大きい大刀の関部分に近接して集中的に数多く出土した。ガラス製の小玉は玄室の中心部に存在したが、大多数のものは石室内の土砂を水洗いして確認されたのである。

耳環は対になると思われる２点が近接した位置に確認されているので、遺体の頭位を知る有力な手掛りになった。出土した14点の形態や重さだけでなく、地金と表面に貼り付けられた素材の比較などを行った結果、６組12点が対になり、残る２点は単品であった。埋葬された遺体のすべてが両耳に耳環を装着していたと仮定するならば、この古墳の石室には少なくとも８体の遺体が入れられていたことになる。耳環の出土位置と棺台に使われた上面が扁平な石との配置から、この石室内に遺体の入った木棺がどのように安置されていたのか、おおよその状態を把握することができた。

なおこの古墳では、墳丘の表土から大型と小型の甕の破片も採集された。

出土遺物

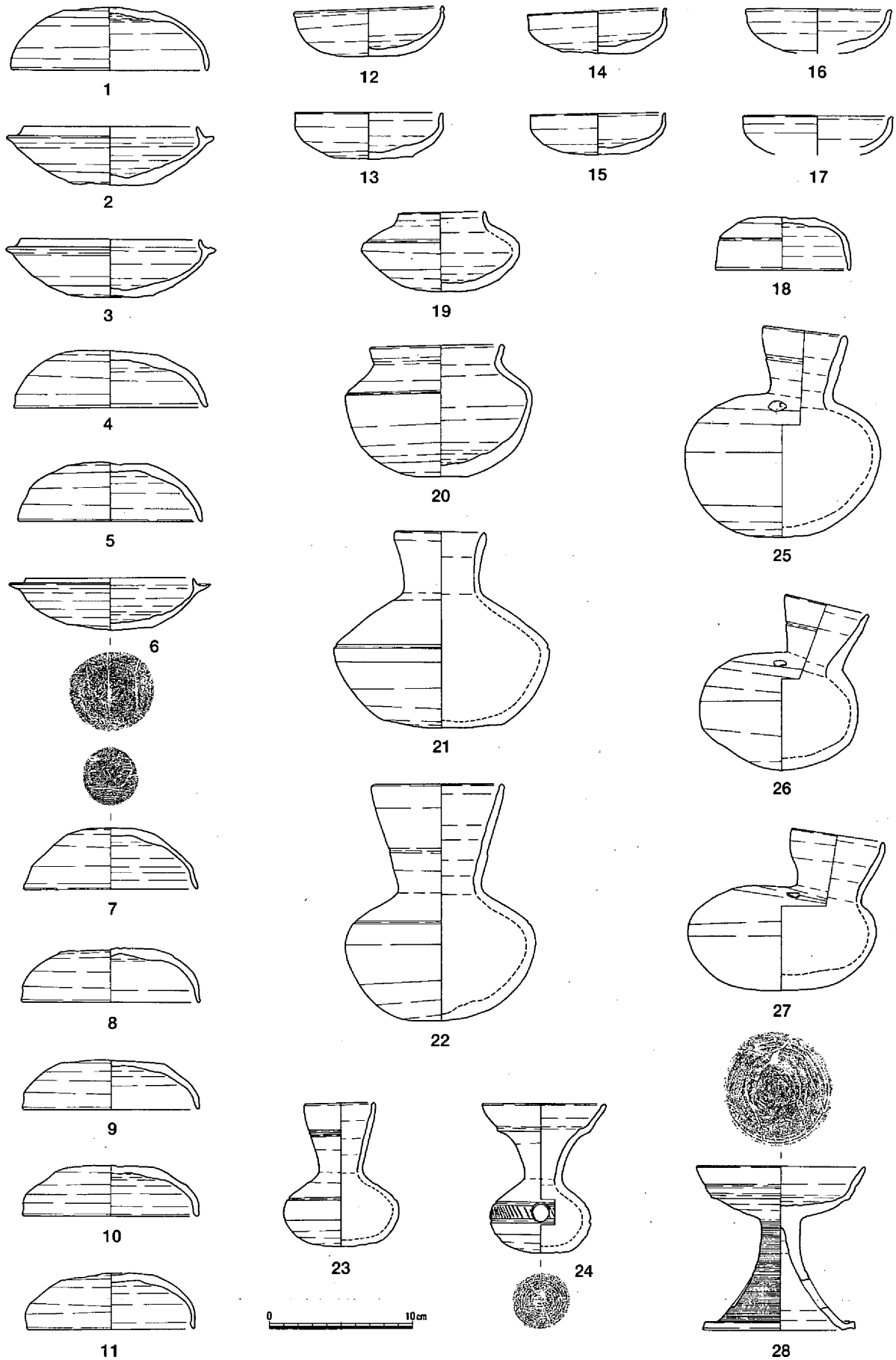
須恵器（第７・８図、図版71～73）

杯身・杯蓋　この古墳の横穴式石室から出土した杯身と杯蓋の法量や色調を精査した結果、１組（**1**と**2**）だけのセット関係が認められた。その杯身は、口径11.7～12.4㎝、器高4.2㎝を測り、口縁端部は内傾して短く立ち上がっている。外面の口縁部から体部にかけてはヨコナデを行い、底部の体部に近い部分は回転方向が左のヘラケズリを施している。外面の底部中央付近は、ヘラ切り未調整のままである。内面は全体にヨコナデを行い、底部には仕上げナデを加えている。この杯身の器形は歪んでおり、焼成は著しく不良で灰白色を呈している。また杯蓋は、口径13.7㎝、器高4.6㎝を測り、口縁端部は丸く仕上げている。外面の口縁部から体部にかけてはヨコナデを行い、天井部の体部に近い部分は回転方向が左のヘラケズリを施している。外面の天井部中央付近は、ヘラ切り未調整のままである。内面は全体にヨコナデを行い、天井部には仕上げナデを加えている。この杯蓋も器形が歪んでおり、焼成も著しく不良で灰白色を呈している。なお第７図の**3**～**11**は、セット関係が不明の杯身と杯蓋で、法量の大きいものから順番に並べている。**3**の杯身から**5**の杯蓋までは、外面の底部や天井部にヘラケズリを施した部分が認められるが、**6**の杯身と**7**以下の杯蓋では、ヘラケズリの痕跡はなく、

ヘラ切り未調整のままである。完形品である **8** の杯蓋の計測値は、口径11.2～13.1cm、器高3.9cmで、全体の器形が著しく歪んでいる。また**10**の杯蓋の計測値は、口径12.1cm、器高3.6cmである。**12～17**の６点は、口径や器高が極端に小さい。これらはいずれも杯身として図示したが、本来は杯蓋になるのかもしれない。この器種とセットになる身または蓋が見当たらなかったので、容器として副葬された使用目的を考慮し、全体の器形は蓋の可能性が強いものの、あえて身にしたのである。緩やかに内湾して立ち上がった体部は、口縁部との境目に鈍い稜を有して上方へ屈曲する。口縁部は短く外反し、端部は丸く仕上げている。外面の口縁部から体部にかけてはヨコナデを行い、底部はヘラ切り未調整のままである。内面は全体にヨコナデを行い、底部に仕上げナデを加えているものも存在する。胎土中には砂粒が多いものと少ないものが認められ、焼成は良好で、自然釉が付着しているものや、歪んだものがある。完形品である**12**の計測値は、口径10.0～10.5cm、器高4.7cmである。

壺蓋　**18**の壺蓋は完形品で、口径9.5cm、器高3.8cmを測る。天井部から体部にかけては内湾して下がり、外面の境目には１条の凹線が認められる。口縁部は「ハ」字状にわずかに開き、端部は丸く仕上げている。外面の口縁部はヨコナデを行い、天井部と体部の境目付近は回転方向が左のヘラケズリを施している。外面の天井部はヘラ切り未調整のままで、内面は全体にヨコナデを行っている。

壺　**19**の短頸壺は完形品で、口径6.0cm、器高5.6cm、頸部径6.8cm、胴部径11.0cmを測る。胴部は算盤玉のように扁平になって中位が横方向へ張り出し、外面の肩部に１条の凹線が存在する。口縁部は内傾して短く立ち上がり、端部は器壁が薄くなって丸く仕上げている。底部は丸底で、器壁が厚くなっている。外面の口縁部から胴部にかけてはヨコナデを行い、底部は回転方向が右のヘラケズリを施している。内面は全体にヨコナデを行い、器表面には凹凸が認められる。胎土中には大きな砂粒を多く含み、焼成は良好で、全体に灰色を呈している。**20**も短頸壺であるが、口縁部は「く」字状に外反して斜め上方へ短く張り出している。口径9.1cm、器高9.4cm、頸部径9.1cm、胴部径13.1cmで、胴部の最大径は肩部にあって、外面には１条の凹線が認められる。底部の器壁は、口縁部や胴部よりも著しく厚くて安定している。外面の底部は、胴部に近い部分がヘラケズリを施し、接地部分の中心部はヘラ切り未調整である。**21**の直口壺は、口径6.2cm、器高18.9cm、頸部径5.4cm、胴部径15.2cmを測る。口縁部は緩やかに外湾して斜め上方へ立ち上がり、端部は器壁が厚くなって丸く仕上げている。胴部の最大径を有する部分の外面には、１条の凹線が存在する。外面の胴部下位から底部にかけてはヘラケズリを施し、それ以外の部分は全体にヨコナデを行っている。外面の器表面には自然釉が付着し、外面の底部には重ね焼きの痕跡が認められる。**22**の直口壺は、口径9.0cm、器高16.8cm、頸部径5.9cm、胴部径13.4cmを測る。口縁部はラッパ状に開き、胴部の最大径は中位よりやや上方に存在する。外面の口縁部と肩部には、それぞれ１条の凹線が認められる。底部は丸底で、斜め上方へ立ち上がった口縁の端部は丸く仕上げている。外面の口縁部から胴部下位までと内面全体はヨコナデを行い、外面の底部はヘラ切り未調整のままである。この直口壺は焼成が著しく不良で、器表面全体が磨滅している。**23**の小型の直口壺は、口径4.8cm、器高10.2cm、頸部径3.1cm、胴部径8.1cmを測る完形品である。口縁部は前述した**22**の直口壺と同様にラッパ状に開き、端部は短く内湾して丸く仕上げている。胴部の断面形は楕円形に近い形態を呈し、最大径は中位に存在する。外面の口縁部の中位には２条の凹線を巡らせ、外面の肩部にも１条の凹線が認められる。外面の口縁部から胴部下位にかけてはヨコナデを行い、外面の底部は回転方向が右のヘラケズリを施している。内面の口縁部から頸部にかけてはヨコナデを行っているが、内面の胴部は調整手法を観察することができなかった。



第7図　石室内出土土器（1／4）

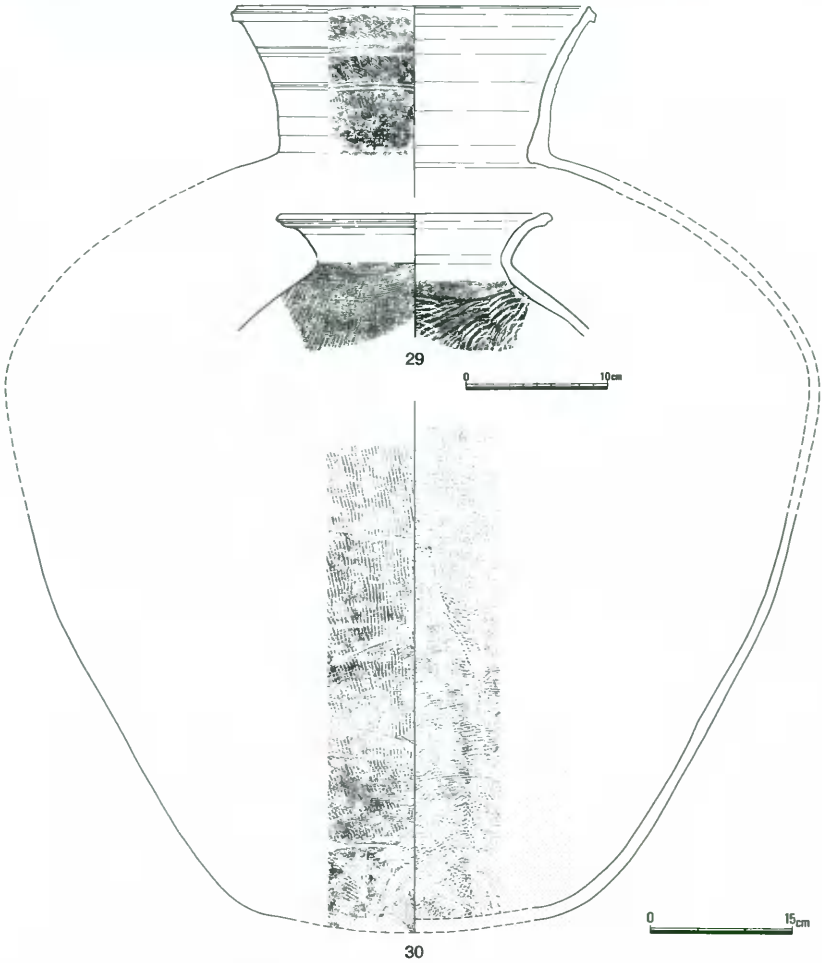
甕　**24**の小型の甕は、口径8.7cm、器高10.6cm、頸部径2.7cm、胴部径7.1cmを測る。頸部から口縁部にかけては緩やかに外湾してラッパ状に開き、口縁部と頸部の境目には鈍い稜を有する段が認められる。口縁部は斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。頸部は細く、口縁端部は上方へ長く延びている。胴部はやや扁平で楕円形に近い形になり、最大径は中位に存在する。胴部の外面には２条の凹線が認められ、その間にはクシ描列点文を巡らせた文様帯が存在する。外面の口縁部から胴部下位にかけてはヨコナデを行い、外面の底部は回転方向が右のヘラケズリを施している。内面は全体にヨコナデを行い、外面の底部にはヘラ記号が存在する。胎土中には砂粒が比較的少なく、焼成は良好で灰白色を呈している。この甕と前述した**23**の直口壺は、全体の器形が小型であるから、古墳へ副葬する目的に作られたミニチュア品の可能性が強い。

平瓶　この奥田古墳から３点の平瓶が出土したが、いずれも完形品である。**25**の計測値は、口径5.7cm、器高15.1cm、頸部径4.5cm、胴部径13.8cmを測る。口縁部は漏斗状になって上方へ開き、胴部上面の中心から外れた部分に接合している。口縁部の器壁は直線的に立ち上がり、端部は丸く仕上げている。外面の口縁部の中位には、１条の凹線が存在する。胴部は球形に近い形態を呈し、最大径は中位よりやや上方に存在する。外面の肩部には、円錐形の粘土粒が認められる。外面の口縁部から胴部下位にかけてと内面は、全体にヨコナデを行っている。外面の胴部下位から底部にかけては、回転方向が右のヘラケズリを施している。外面の底部中央は、ヘラ切り未調整のままである。胎土中には砂粒を多く含み、焼成は良好で、内外面とも全体に灰色を呈している。**26**の計測値は、口径5.6cm、器高12.5cm、頸部径3.1cm、胴部径11.3cmを測り、前述した**25**よりも全体の規模が小さくなっている。この土器の口縁部も漏斗状になって上方へ開き、外面の中位には１条の凹線を巡らせている。胴部に接続する頸部の器壁は厚いが、口縁端部は器壁が薄くなって丸く仕上げている。胴部は球形に近いがやや扁平な形態を呈し、最大径は中位に認められる。外面の肩部には、２個の円板が存在している。外面の口縁部から胴部中位にかけてはヨコナデを行い、外面の胴部下位は回転方向が右のヘラケズリを施している。外面の底部はヘラ切り未調整のままで、内面は全体にヨコナデを行っている。焼成は良好で灰色を呈し、外面全体に自然釉が付着している。**27**の計測値は、口径6.5cm、器高11.5cm、頸部径4.7cm、胴部径13.4cmを測り、全体の器形が扁平で低くなっている。頸部から口縁部にかけて斜め上方へ立ち上がり、口縁端部は短く内湾して漏斗状に上方へ開いている。前述した**25**と**26**の口縁部の外面中位には１条の凹線が存在したが、この土器には凹線が認められなかった。胴部の断面形は楕円形に似た扁平な形態を呈し、最大径は中位よりやや上方に存在する。外面の肩部には、２個の円板が認められる。外面の底部はヘラ切り未調整であるが、それ以外の部分の内外面とも全体にヨコナデを行っている。胎土中には砂粒が少なく、焼成は良好で、内外面とも灰白色を呈している。

高杯　**28**の高杯は長脚無蓋高杯で、口径11.8cm、器高11.6cm、脚上部2.7cm、脚端部11.1cmを測る。杯部は浅く、口縁部は斜め上方へ開いて端部を丸く仕上げている。口縁部と杯底部の境目には、わずかに突出した鈍い稜が認められる。外面の口縁部中位には、凹線状の浅い窪みが認められる。脚部は長く延び、裾部は大きく広がっている。脚部外面の筒部と裾部との境目には、２条の凹線が巡らされている。脚部の下位には、２個の細長い台形を呈する透かし窓が存在する。脚端部は横方向へ短く屈曲し、端面が上下に拡張して外側に段が存在する。杯部は内外面ともヨコナデを行い、内面の底部には仕上げナデを加えているが、タタキの痕跡が残存している。脚部の外面にはカキメが施され、端部と内面全体はヨコナデを行っている。

甕　この奥田古墳では、墳丘の表土から２点の甕の破片が出土している。29の小型の甕は、口縁部から胴部上位にかけての破片で、推定口径18.6㎝、推定頸部径13.6㎝を測る。頸部で「く」字状に外反した口縁部は、緩やかに外湾して斜め上方へ立ち上がり、端部が瘤状に肥厚して丸く仕上げている。口縁部から頸部にかけては内外面ともヨコナデを行い、内面の胴部には同心円のタタキ痕跡が認められる。外面の胴部には、平行タタキ痕跡とカキメが存在する。30の大型の甕は、口縁部と胴部下位の破片で、口径36.2㎝、頸部径26.0㎝を測る。斜め上方へ外湾して立ち上がった口縁の端部は、上下に拡張して稜が認められる。外面の口縁部には、２条の凹線によって区画された部分に、クシ描きの波状文や刺突文の文様帯が存在する。内面の口縁部はヨコナデを行い、内面の胴部には同心円のタタキ痕跡が認められる。外面の胴部には、平行タタキ痕跡とカキメが存在する。

以上の須恵器の形態的特徴や調整手法から、奥田古墳は７世紀前葉から中葉に属するであろう。



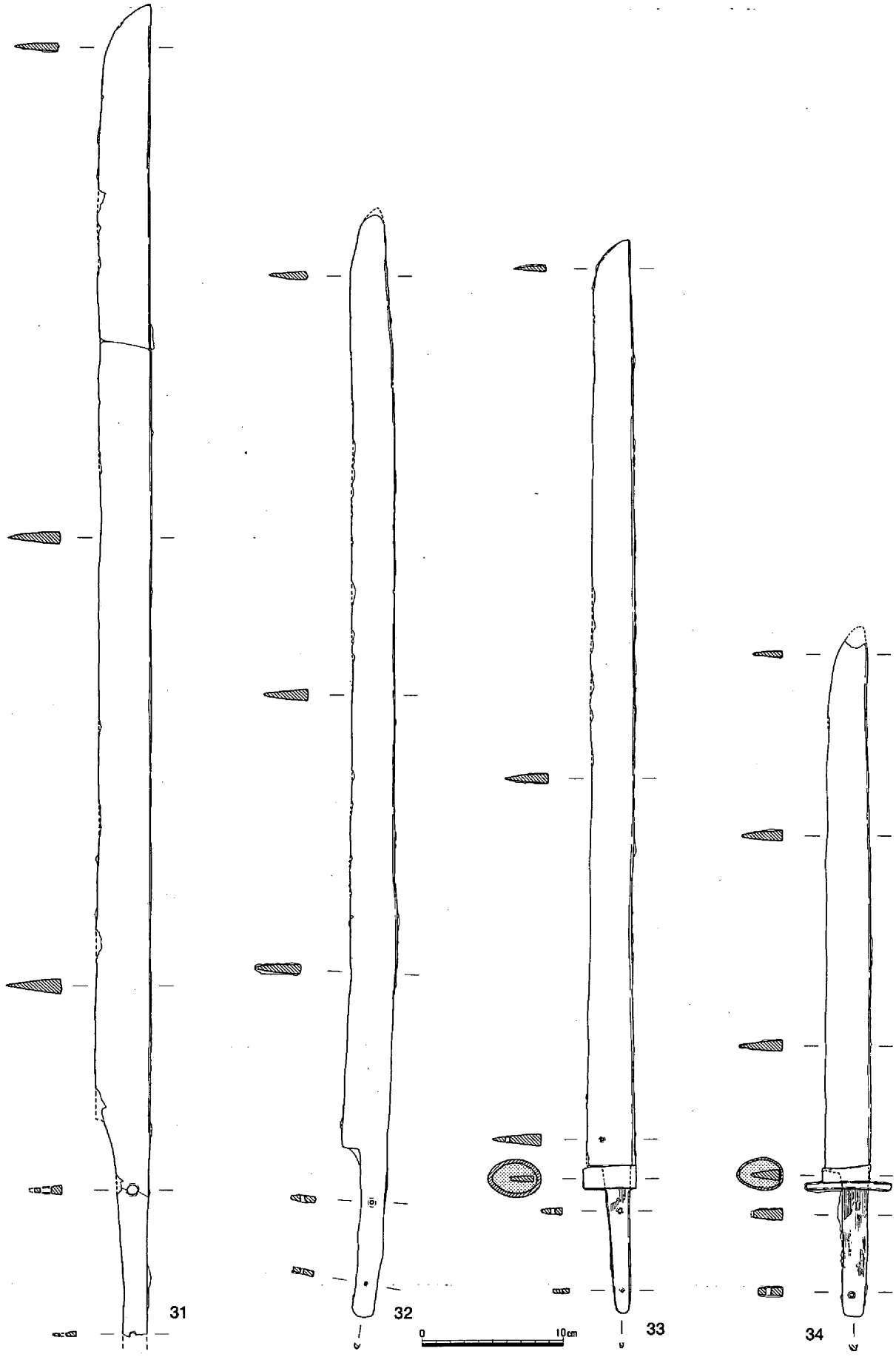
第８図　墳丘表土出土土器（1／4、1／6）

鉄器（第９～13図、図版74～76）

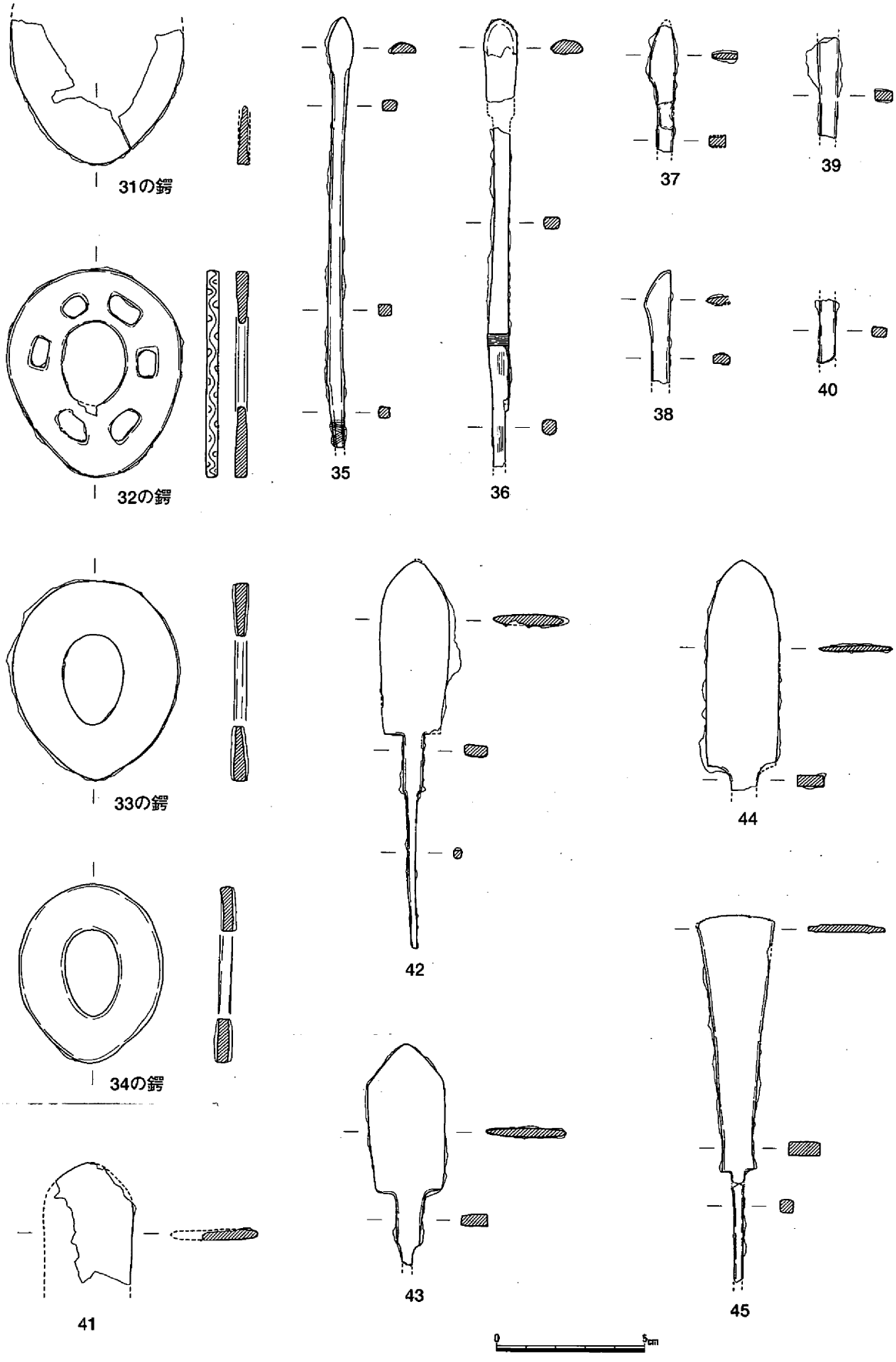
大刀　31の大刀は、推定全長95.9cm、推定刀身長79.4cmを測る長大なもので、茎は端部を欠損している。関部分も欠損するが、片側のみに段を有すると考えられる。刀身最大幅4.0cm、茎最大幅3.2cmで、茎の２か所に目釘穴が認められる。32の大刀は、推定全長78.7cm、推定刀身長66.8cm、茎長11.9cmを測り、刀身全体がわずかに内湾している。関付近での刀身幅3.3cm、茎幅2.0cmで、関は片側のみに段を有する。茎尻は若干細くなり、やや丸く仕上げられている。茎の２か所に目釘穴が認められるが、穴そのものの径が異なっている。この大刀は切先部分が丸くなっているから、先端がわずかに欠損しているようである。33の大刀は、全長76.7cm、刀身長65.6cm、茎長11.1cmで、関の部分に錏が存在する。関付近での刀身幅3.3cm、茎幅2.0cmを測り、関は両側に段を有すると思われる。茎尻は細くなり、端部は丸くなっている。茎の２か所に目釘穴が存在し、木質が付着している。なおこの大刀には、関に近接した刀身部に、目釘穴に似た穴が認められる。34の大刀は、玄室の右側壁に近い地点から、前述した３振の大刀と離れて出土した。切先部分を欠損しているが、推定全長49.3cm、推定刀身長39.3cm、茎長10.0cmを測る。刀身最大幅3.3cm、茎最大幅2.0cmであるが、関部分には錏が存在する。鍔を外そうと努力したが、結局のところ外すことができなかった。関は片側のみに段を有すると考えられる。茎尻はわずかに細くなり、やや斜めに直線的に切り落された形状になっている。茎尻に寄った位置に１か所の目釘穴が存在し、全体に木質が付着している。

鍔　31の鍔は、錆び付いて破損している。平面形は倒卵形を呈し、無窓であるが、全容は明らかではない。短径5.9cm、厚さ0.5cmを測り、残存する重さは15.6ｇである。32の鍔は、平面形が倒卵形を呈している。長径7.0cm、短径6.0cm、厚さ0.4cm、重さ39.8ｇを測り、六窓の透かしが存在する。この鍔には、耳のみに銀象嵌が施されている。その文様は「波状Ｃ字状文」で、波状文を中心として左右交互にＣ字状文が連続している。33の鍔は、平面形が倒卵形を呈し、長径6.8cm、短径5.9cm、厚さ0.7cm、重さ61.5ｇを測り、無窓である。34の鍔は、刀身から外そうとしたが、錆び付いていて外れなかった。平面形は倒卵形を呈し、長径6.1cm、短径4.9cm、厚さ0.4cmを測り、無窓である。

鉄鏃　35の鉄鏃は、長頸の柳葉式鉄鏃である。鏃身の造りは片切刃造で、断面形が蒲鉾に似た半月形を呈している。鏃身関部は退化しており、緩やかな曲線を描いて鏃身部から頸部へ移行している。頸部の断面形は正方形に近い長方形で、全体がわずかに湾曲している。頸部と茎との境の関部は、段が存在するだけである。茎の断面形は正方形を呈し、糸巻きの痕跡が認められる。36の鉄鏃も長頸の柳葉式鉄鏃であるが、鏃身関部の部分を欠損している。鏃身部は片切刃造で、鏃身先端部が丸くなっている。頸部は中間部分の幅が狭く、断面形は長方形を呈している。関部は幅が広くなって糸巻きの痕跡が存在し、茎は断面形が正方形で木質が付着している。37と38の鉄鏃は、長頸の片刃箭式鉄鏃の鏃身部から頸部にかけての破片である。鏃身部の片側のみに刃部を有し、刀子状の形態を呈している。鏃身関部は段が退化して境が不明瞭になり、緩やかな曲線を描いて断面形が長方形の頸部へ移行している。39と40は長頸式鉄鏃の頸部破片で、断面形が長方形を呈している。41～43の３点は平根の鉄鏃で、長三角形式の刃部が張った形態になっている。鏃身部は両丸造で、断面形がレンズ形を呈している。鏃身関部はほぼ直角の段を有し、頸部の断面形は長方形である。42の茎は細くて長い形態で、断面形は正方形に近い形を呈している。44は平根の柳葉式鉄鏃で、頸部から茎の部分を欠損している。鏃身関部は湾曲する弧を描いて、断面形が長方形の頸部へ移行している。45は平根の方頭式鉄鏃である。細身の鏃身部を有し、関部には直角の段が認められる。46～49は鉄鏃の茎の破片と推定される。



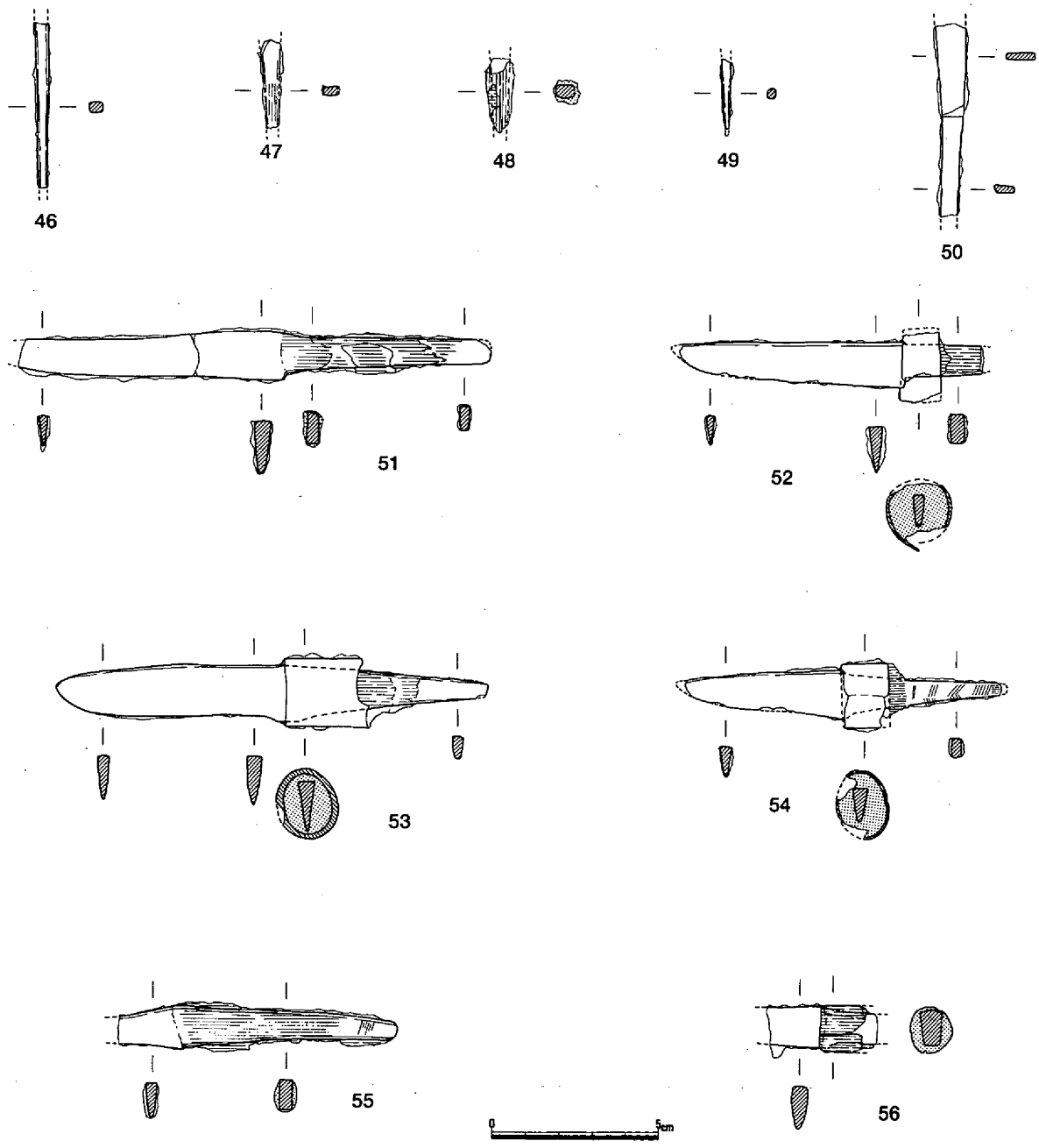
第９図　鉄器（1）（1／4）



第10図　鉄器（2）（1／2）

不明鉄器　50は両端を欠損した不明鉄器である。断面形が扁平な長方形を呈しているので、鉇になるのかもしれないが、この奥田古墳から出土した鉄器の種類に、鉇は１点も存在しなかった。

刀子　51～56は刀子であるが、52～54には関部分に鏁が存在する。刀身部の先端を欠損する51は、細身の刀身を有し、茎は尻に向かって太さが変わらない。関の部分は片側に段が存在し、茎尻は丸く仕上げている。52は刀身先端の一部と茎を欠損する。刀身長は7.0cmで、関には両側に段が存在する。鏁の断面形は倒卵形を呈し、茎には木質が付着している。53は刀身長7.2cm、茎長5.6cmを測るが、関部分に段が存在しない。54は小型の刀子で、関の部分が著しく太くなっている。鏁の断面形は楕円形を呈し、茎には糸巻き痕跡と木質の付着が認められる。55は関から茎にかけての破片で、関には段がなく、茎尻は丸くなっている。56は片側に段を有する関部分の破片で、木質が付着している。



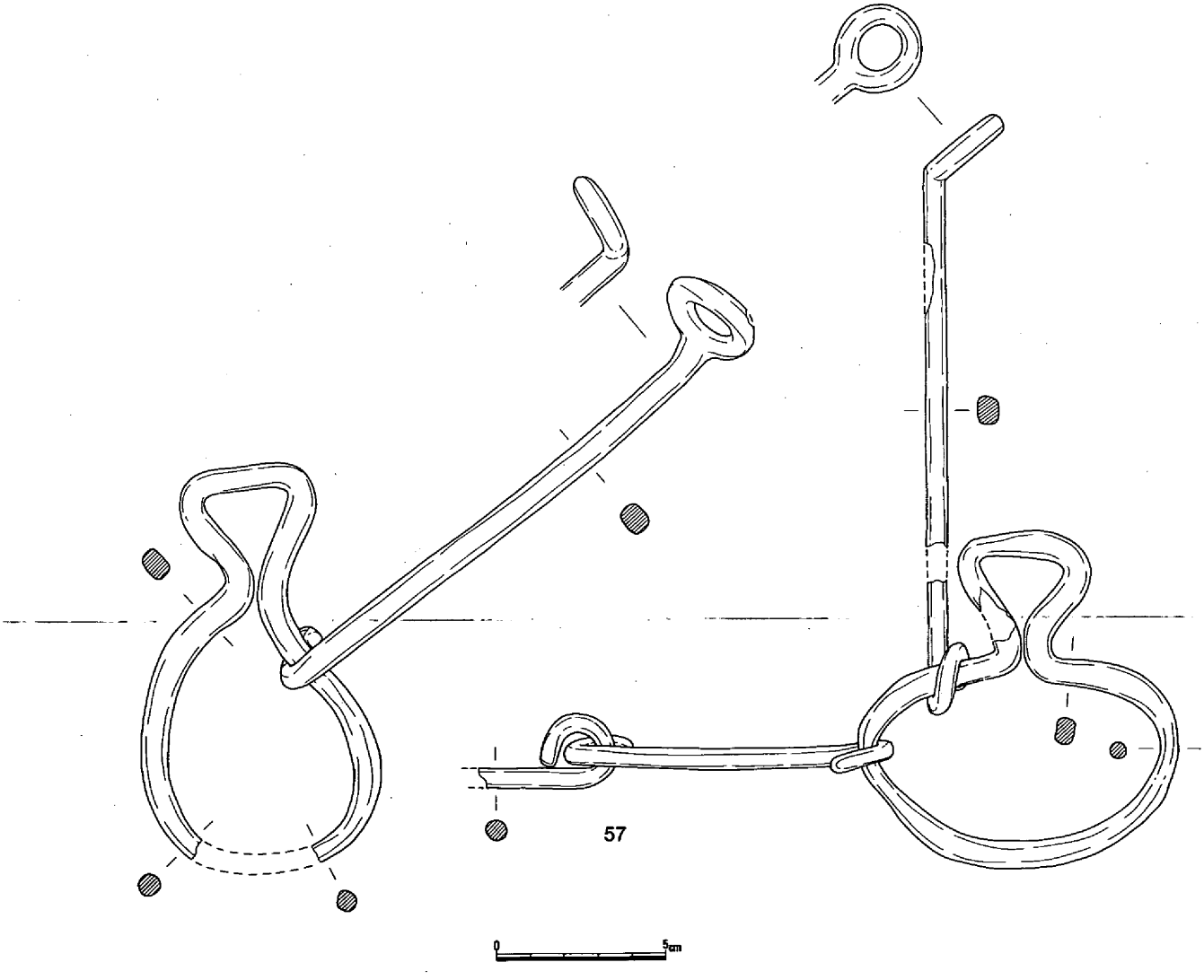
第11図　鉄器（3）（1／2）

57～59は馬具である。

轡　57の轡は、環状の鏡板を有する円環轡である。鏡板は鉄棒を曲げて瓢形に形成しており、上方へ突出した部分を立聞として使用する型式である。左側の鏡板で最大幅7.0cm、推定の高さ12.0cm、右側の鏡板で最大幅9.4cm、高さ9.9cmを測る。

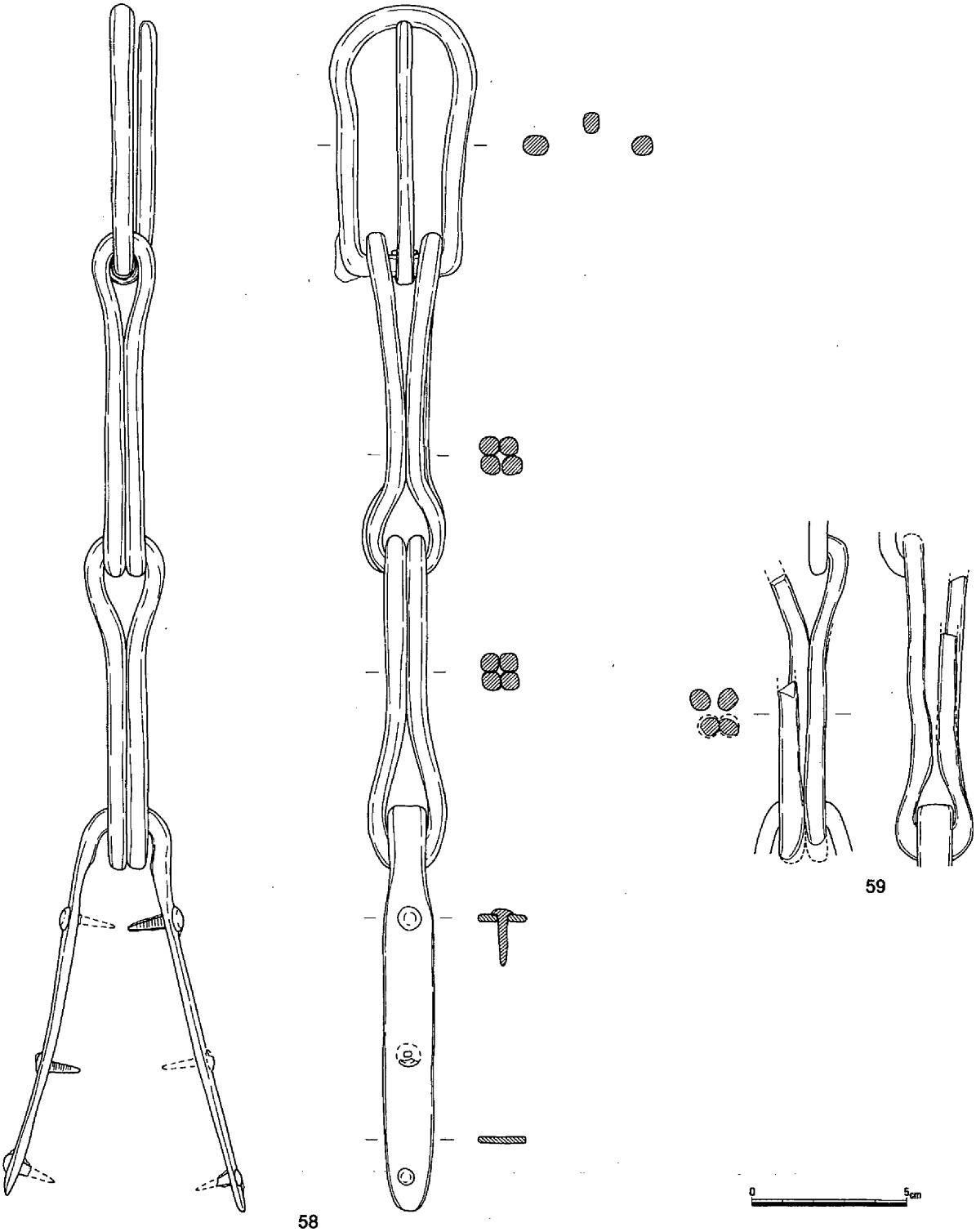
銜と引手は、それぞれを別々に鏡板に連結している。銜は二連式のものである。銜の中央に位置する喞部の環や、銜と引手が鏡板に連結する部分は、鉄棒を曲げて形成しただけで、鍛接などの処理は行っていない。いわゆる「蕨手技法」によるものである。引手の端部に存在する環は、鍛接処理が行われたものである。引手は、断面形が隅丸長方形の鉄棒を使用し、左側の引手長17.5cm、右側の推定引手長17.6cmを測る。左右両側の引手とも、先端を「く」字形に折り曲げている。

鐙金具　58と59は鐙金具で、59は兵庫鎖だけの破片である。三角錐を呈する木製壺鐙に付属するものと考えられる。58の完形品の鐙金具によると、鐙を吊るための鉸具と兵庫鎖および壺鐙の縁を装飾する鉄製金具からなる。鉸具は、兵庫鎖に連結する部分は直線的になっているものの、上端は曲線を描いて丸くなり、刺金が付属する。兵庫鎖は二連である。鐙本体に付属する金具は、幅1.6cmの帯金を用いて縁を装飾するものである。踏込部の金具および鳩胸金具はない。側縁がわずかに内湾する二等



第12図　鉄器（4）（1／2）

辺三角形を呈し、下端部は直線的に延びるだけで折り曲げてはいない。兵庫鎖の端部から約６㎝だけの長さであるから、踏込部まで到達していなかったと考える。帯金には笠釘が打たれている。約５㎝と３㎝の間隔で、片側に３か所だけ認められる。釘の長さは1.5㎝前後で、残存するものには木目が付着している。この木目の在り方から推定して、縦位の木目の木材を刳り貫いて鐙本体を形成していたと思われる。



第13図　鉄器（5）（1／2）

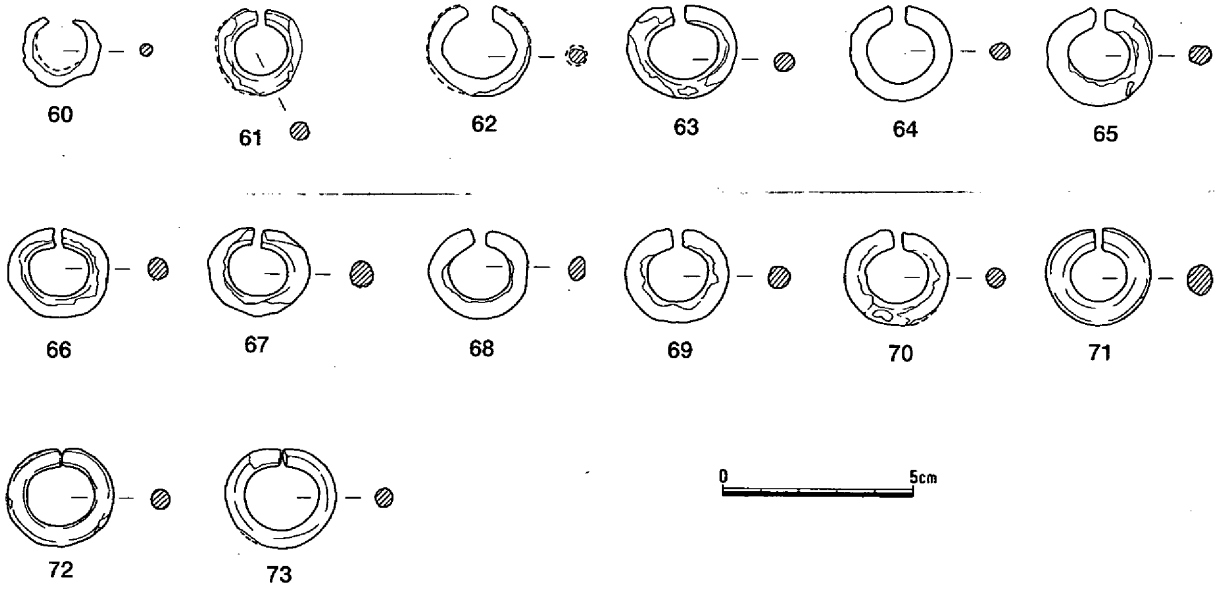
装身具（第14～17図、図版77・78）

耳環　奥田古墳から出土した14点の耳環は、石室の入口付近を除く広い範囲から、須恵器や鉄器に混在して出土した。この出土状態によると、遺体とともに石室内へ副葬された当時から動いていないと推定されるものもあったが、繰り返し追葬が行われたために場所を移動していると考えられるものも存在した。これらの耳環は、石室内で出土した位置と全体の形態や重さなどから、**60**と**61**、**62**と**63**、**64**と**65**、**66**と**67**、**68**と**69**、**70**と**71**がセットになると判断でき、**72**と**73**は精査したにもかかわらず片方を見つけることができなかった。埋葬された遺体のすべてが両耳に耳環を装着していたと推定するならば、この石室には少なくとも８体の遺体が入れられていたことになる。

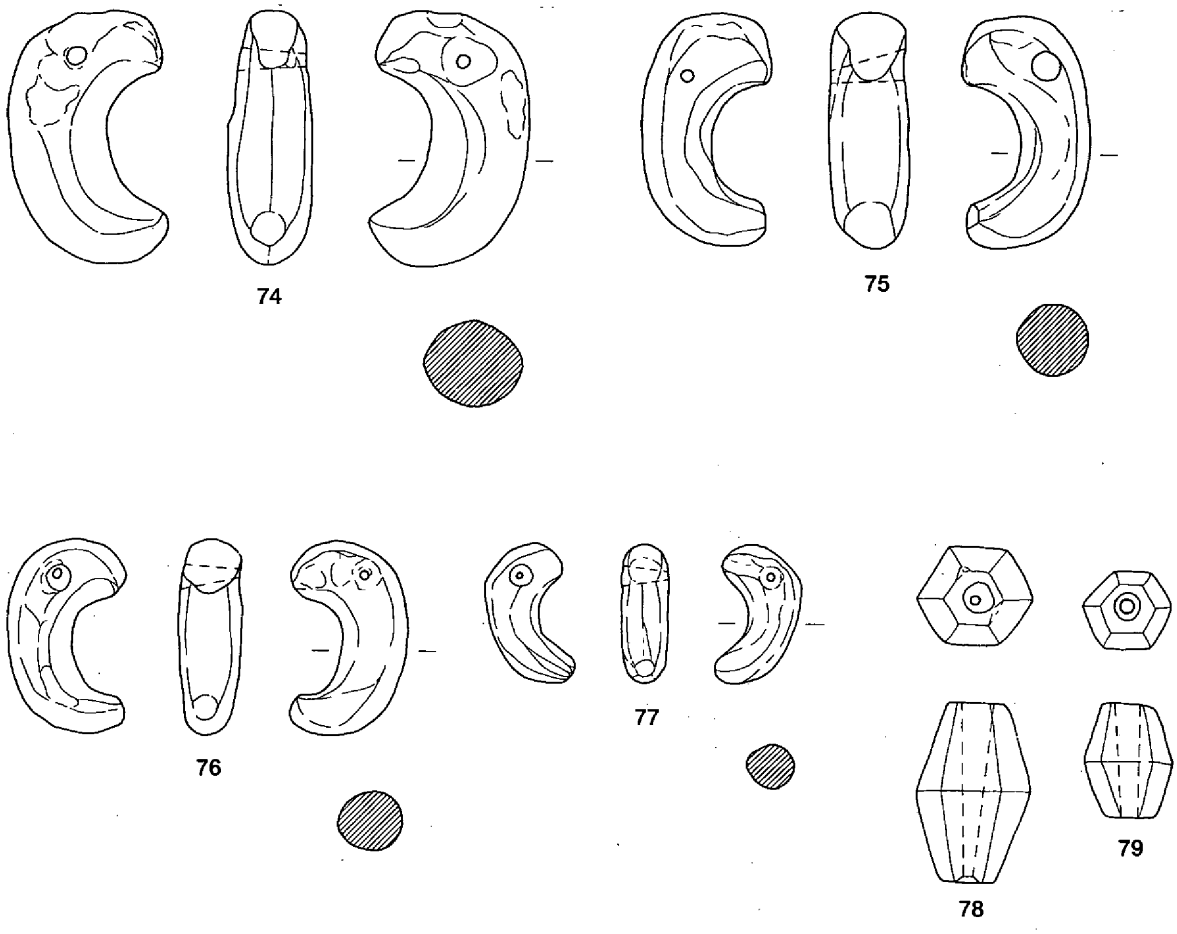
60は外径18.0～20.3㎜、内径13.8～14.4㎜、断面径0.34～0.35㎜、切れ目幅0.69㎜、重さ1.15ｇを測り、鉄地銀貼であるが、全体が著しく破損して表面の銀箔が存在しない。**61**は外径22.3～22.4㎜、内径12.9～14.3㎜、断面径4.6～5.1㎜、切れ目幅0.22㎜、重さ4.74ｇを測り、鉄地銀貼で、表面の銀箔は約半分の面積が剥離している。**62**と**63**も前述した**61**に酷似しているが、全体の形態が２点ともわずかに大きくなり、金銅製で、表面全体の金箔の残存状態が悪い。**64**と**65**は銅地銀貼の耳環で、**64**の銀箔は確認できない。**66**と**67**は金銅製の耳環で、約半分の面積で金箔が剥離している。**68**と**69**の耳環は、**60**と**61**と同様の鉄地銀貼である。**70**と**71**は金銅製の耳環だが、**71**の残存状態は極めて良好である。**72**は外径25.9～28.3㎜、内径15.8～17.4㎜、断面径5.3～5.6㎜、切れ目幅0.09㎜、重さ10.65ｇを測り、銅地銀貼で、残存状態は比較的良好である。**73**は外径25.7～29.0㎜、内径16.1～19.2㎜、断面径4.9～5.0㎜、切れ目幅0.12㎜、重さ7.77ｇを測り、鉄地銀貼である。

玉類　**74**～**77**は勾玉である。材質はいずれも瑪瑙で、片面穿孔が行われた完形品である。最も大きい**74**の計測値は、長さ33.8㎜、幅13.6㎜、孔径上2.5㎜、孔径下1.6㎜、重さ8.74ｇで、にぶい黄褐色を呈している。最も小さい**77**の計測値は、長さ18.1㎜、幅7.9㎜、孔径上2.7㎜、孔径下1.1㎜、重さ1.59ｇで、全体に赤褐色を呈している。

78と**79**は水晶製の切子玉で、６面加工が施されて透明になっている。前者は、長さ23.5㎜、最大径14.2㎜、孔径上3.8㎜、孔径下1.3㎜、重さ5.63ｇを測り、中央の円孔は片面穿孔で、反対側には若干の

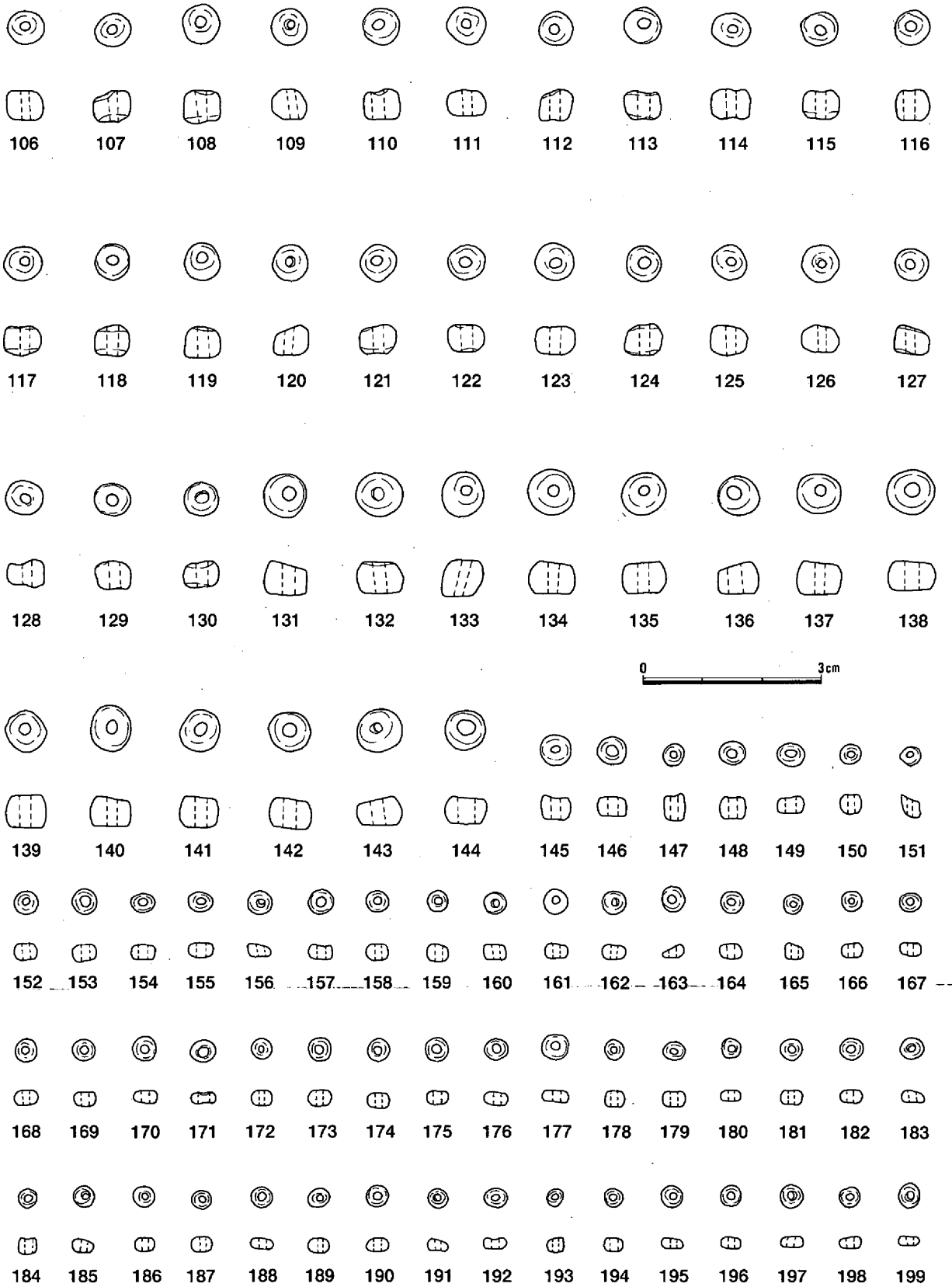


第14図　耳環（1／2）

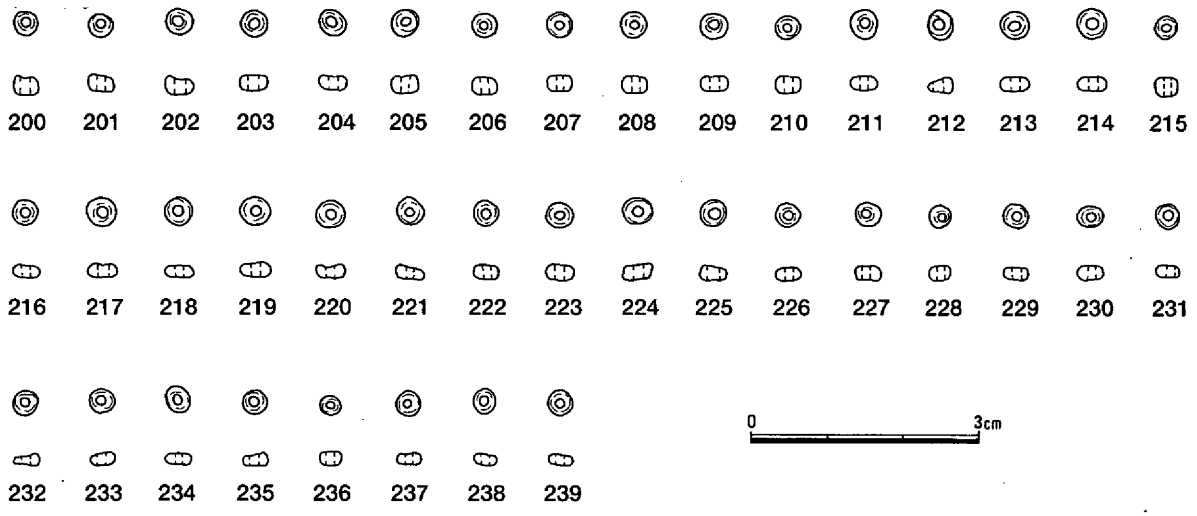

74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
0
3cm

第15図　玉類（1）（1／1）

抉りが存在する。後者の規模が小さいものは、長さ14.5㎜、最大径12.0㎜、孔径上3.2㎜、孔径下1.1㎜、重さ8.11ｇを測る。



第16図　玉類（2）（1／1）



第17図　玉類（3）（1／1）

80～82は管玉である。80と81は碧玉製で、暗緑色または濃緑色を呈している。82は緑色凝灰岩製の欠損品で、明緑灰色を呈している。80の計測値は、長さ31.5㎜、最大径12.0㎜、孔径上3.2㎜、孔径下1.1㎜、重さ8.11ｇを測り、大型の管玉である。81の計測値は、長さ17.7㎜、最大径8.4㎜、孔径上3.6㎜、孔径下1.2㎜、重さ2.07ｇである。

83～130は練玉とも呼ばれる土製の小玉で、黒色または黒褐色を呈している。この土製の小玉は、31の大刀の鍔の部分に固まって出土したもので、石室内の堆積土を篩に掛けて精査したが、別の地点には認められなかった。82は２個の小玉が密着しており、切り離すことができなかった。法量が最大である84の計測値は、高さ5.5㎜、径7.1㎜、孔径1.4㎜、重さ0.26ｇである。出土した土製の小玉で平均的な法量を有する107の計測値は、高さ5.0㎜、径6.1㎜、孔径1.6㎜、重さ0.15ｇを測る。法量が最小の130の土製小玉は、高さ3.9㎜、径5.9㎜、孔径1.6㎜、重さ0.14ｇの計測値である。

131～239はガラス製の小玉である。131・135・137・138・144は濃紺色または紺色を呈している。133・136・140・143は藍色を呈している。132・134・139・141・142・160・170・182・214は群青色または青色を呈している。147・149・184・187・215・230は青緑色を呈している。150・155・156・165・173・179・189・193・194・206・207は透明または半透明な緑色を呈している。157・158・164・166～169・172・174・178・181・203・226は濁った緑色を呈している。161・177・201・219は黄色を呈している。204と218の２点は黄緑色を呈している。残るガラス製小玉はいずれも水色を呈するもので、出土したガラス製小玉の半分以上の点数になっている。131の計測値は、高さ5.3㎜、径7.7㎜、孔径1.7㎜、重さ0.48ｇを測る。141の計測値は、高さ5.1㎜、径7.0㎜、孔径2.0㎜、重さ0.32ｇを測る。151の計測値は、高さ3.7㎜、径3.2㎜、孔径1.0㎜、重さ0.04ｇを測る。161の計測値は、高さ2.5㎜、径3.9㎜、孔径0.9㎜、重さ0.05ｇを測る。171の計測値は、高さ1.9㎜、径4.3㎜、孔径1.5㎜、重さ0.04ｇを測る。平均的な法量を有する181の計測値は、高さ2.3㎜、径3.6㎜、孔径1.2㎜、重さ0.03ｇを測る。191の計測値は、高さ2.0㎜、径3.7㎜、孔径1.4㎜、重さ0.04ｇを測る。201の計測値は、高さ2.3㎜、径3.2㎜、孔径1.1㎜、重さ0.03ｇを測る。211の計測値は、高さ1.9㎜、径3.4㎜、孔径1.0㎜、重さ0.03ｇを測る。221の計測値は、高さ1.5㎜、径3.7㎜、孔径1.2㎜、重さ0.03ｇを測る。231の計測値は、高さ1.5㎜、径3.4㎜、孔径1.1㎜、重さ0.02ｇを測る。

第４節　小　　結

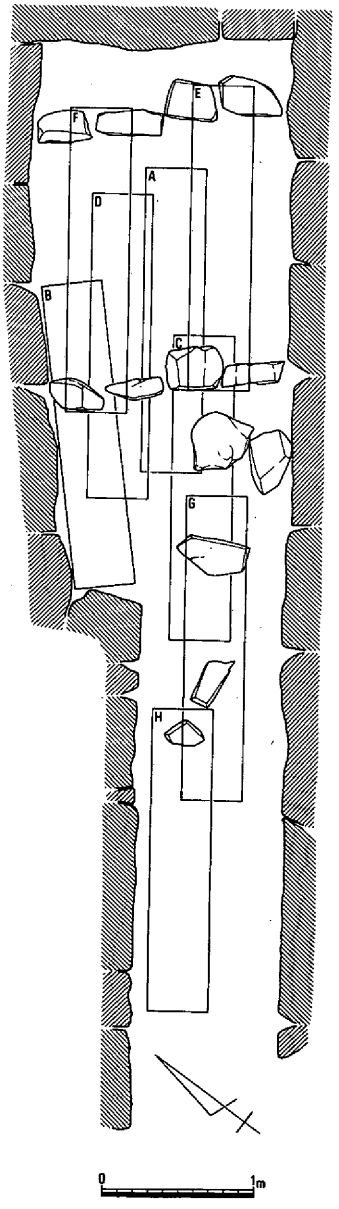
奥田古墳は、岡山県真庭郡久世町中原に所在した古墳で、久世町中心部の沖積平野を望む目木川左岸の丘陵上に位置していたが、細長い谷地形の奥まった所だから、眺望は悪くなっていた。古墳は低い丘陵の尾根上に築造され、この奥田古墳の１基だけが単独で存在した。

古墳の大きさは直径11ｍの円墳で、盗掘を受けていたこともあって、墳丘の盛土はほとんど存在しなかった。埋葬施設は右片袖を有する横穴式石室であるが、天井石は１枚も残存しなかった。石室の計測値は、玄室長350㎝、羨道長350㎝の全長700㎝で、玄室と羨道の長さが１：１の比率になっていた。玄室の幅は、奥壁部分で160㎝、羨道に面した部分で140㎝であった。羨道の幅は、玄室に面した部分で90㎝、石室入口部分で100㎝になっていた。石室の床面からの高さは、奥壁部分で180㎝かそれ以上になり、玄室の床面はほぼ水平であるが、羨道の床面は入口に向かって緩やかに傾斜していた。

石室の築造過程を観察すれば、丘陵の尾根上に掘り方が掘り窪められると、まず奥壁部分の鏡石となる大きくて安定した石を立てて据え置き、左側壁の玄室から羨道にかけての基底部の石を直線的に並べてから、右側壁の袖部分に玄室となる直方体に近い石を立てて置き、その石を基準にして玄室と羨道の基底部に大きな石を据えているようである。左側壁は玄室から羨道にかけて歪んでいないが、右側壁の玄室部分は石の表面が緩やかに湾曲して「胴張り」の状況になっていた。

出土遺物としては、杯身、杯蓋、壺蓋、壺、鏃、平瓶、高杯の須恵器以外に、大刀、鉄鏃、轡、鐙金具の鉄器や耳環と玉類の装身具が存在し、大刀の鍔には、「波状Ｃ字状文」の銀象嵌を施した珍しいものも含まれ、この古墳は７世紀前葉から中葉の時期に属するであろう。

この奥田古墳は、天井石が１枚も残存しなかったが、偶然にも石室の床面に近い部分は撹乱を受けておらず、埋葬された当時のままの状態で保持され、大量の遺物が出土しただけでなく、埋葬の方法や人数なども特定できる貴重な資料を得ることができた。出土した耳環の位置やセット関係を拠り所に、木棺の大きさを長さ200㎝、幅40㎝と仮定して、遺体が埋葬された場所を推定したのが第18図である。古墳が築造されて最初に石室に埋葬が行われたのは、玄室の中央部のＡ棺と思われる。その後はＡ棺と交差しないように、袖と右側壁に接する状態でＢ棺が置かれている。さらに一部が羨道部に出てＣ棺が入れられると、右側壁に寄った地点にＤ棺が置かれている。その後は棺台となる扁平な石を床面に並べ、奥壁に近い部分にＥ棺とＦ棺が入れられている。続いて玄室と羨道の間にＧ棺を置き、最後は入口に近い羨道部で右側壁へ寄った地点にＨ棺を入れているようである。このように、奥田古墳には８体の遺体が埋葬されていたと思われる。　　（福田）



第18図　埋葬位置推定図
(1／50)

表－１　須恵器観察表

杯身・杯蓋

番号	口径	器高	技法	色調	回転方向	残存率	備考
1	13.7	4.6	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ 天井部ヘラ切り未調整	内　灰白色 外　灰白色	左	復元完形	焼成は著しく不良である ２とセットになる
2	11.7 ～ 12.4	4.2	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ 底部ヘラ切り未調整	内　灰白色 外　灰白色	左	完　形	器形が歪んでいる １とセットになる
3	12.5	4.2	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ 底部ヘラ切り未調整	内　灰白色 外　灰白色	左	約２／３	焼成は著しく不良である 外面全体が磨滅している
4	13.4	4.1	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ 天井部ヘラ切り未調整	内　灰白色 外　灰白色	左	ほぼ完形	焼成は不良である 胎土中に大きな砂粒を多く含んでいる
5	12.8	4.3	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ 天井部ヘラ切り未調整	内　灰白色 外　灰白色	右	復元完形	外面の一部が磨滅している 胎土中に大きな砂粒を多く含んでいる
6	11.7	3.7	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヨコナデ　底部ヘラ切り未調整	内　灰色 外　灰色	右	復元完形	口縁部の立ち上がりは低くなっている 外面底部にヘラ記号が存在している
7	12.1 ～ 12.4	4.4	内　ヨコナデ 外　ヨコナデ　天井部ヘラ切り未調整	内　灰白色 外　灰色	左	ほぼ完形	器形が歪んでいる 外面天井部にヘラ切り痕跡が存在している
8	12.0 ～ 13.1	3.9	内　ヨコナデ 外　ヨコナデ　天井部ヘラ切り未調整	内　灰白色 外　灰白色	右	完　形	器形が著しく歪んでいる 胎土中に大きな砂粒を多く含んでいる
9	12.2 ～ 12.7	3.5	内　ヨコナデ 外　ヨコナデ　天井部ヘラ切り未調整	内　灰白色 外　灰白色	右	復元完形	内面天井部に指頭圧痕が残存している 内部全体に自然釉が付着している
10	12.1	3.6	内　ヨコナデ 外　ヨコナデ　天井部ヘラ切り未調整	内　灰白色 外　灰白色	右	完　形	焼成は良好である 胎土中に大きな砂粒を多く含んでいる
11	11.6	4.0	内　ヨコナデ 外　ヨコナデ　天井部ヘラ切り未調整	内　灰色 外　灰色	右	復元完形	焼成は極めて良好である 内面の一部に自然釉が付着している
12	10.0 ～ 10.5	4.2 ～ 4.7	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヨコナデ　底部ヘラ切り未調整	内　灰白色 外　灰白色	右	完　形	器形が著しく歪んでいる 外面全体に自然釉が付着している
13	10.0 ～ 10.5	4.2 ～ 4.7	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヨコナデ　底部ヘラ切り未調整	内　灰色 外　灰白色	左	ほぼ完形	器形が著しく歪んでいる 胎土中に大きな砂粒を多く含んでいる
14	9.7 ～ 10.1	2.8 ～ 3.3	内　ヨコナデ 外　ヨコナデ　底部ヘラ切り未調整	内　灰色 外　灰色	右	復元完形	器形が著しく歪んでいる 外面全体に自然釉が付着している
15	9.5	2.8 ～ 3.1	内　ヨコナデ 外　ヨコナデ　底部ヘラ切り未調整	内　灰色 外　灰色	左	ほぼ完形	焼成は極めて良好である 外面全体に自然釉が付着している
16	(10.2)	—	内　ヨコナデ 外　ヨコナデ　底部ヘラ切り未調整	内　灰色 外　灰色	右	約１／２	焼成は極めて良好である 胎土中に砂粒が少ない
17	(10.4)	—	内　ヨコナデ 外　ヨコナデ　底部ヘラ切り未調整	内　灰白色 外　灰白色	左	約１／４	焼成は極めて良好である 内外面とも自然釉が付着している

壺蓋

番号	口径	器高	技法	色調	回転方向	残存率	備考
18	9.5	3.8	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ 天井部ヘラ切り未調整	内　灰白色 外　灰白色	左	完　形	外面の天井部と体部の境に稜が存在している この蓋に伴う壺は検出できなかった

壺

番号	口径	器高	頸部径	胴部径	技法	色調	回転方向	残存率	備考
19	6.0	5.6	6.8	11.0	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　灰色 外　灰色	右	完　形	外面肩部に１条の凹線が存在している 胎土中に大きな砂粒を多く含んでいる
20	9.1	9.2 ～ 9.4	9.1	13.1	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ 外面底部ヘラ切り未調整	内　灰白色 外　灰白色	右	完　形	外面肩部に１条の凹線が存在している 外面頸部に２条の凹線が存在している
21	6.2	18.9	5.4	15.2	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　灰白色 外　灰白色	右	復元完形	外面底部に重ね焼き痕跡が存在している 外面全体に自然釉が付着している
22	9.0	16.8	5.9	13.4	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ 外面底部ヘラ切り未調整	内　灰色 外　灰色	右	復元完形	焼成は著しく不良である 外面全体が磨滅している
23	4.8	10.2	3.1	8.1	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　灰色 外　灰色	右	完　形	ミニチュア品である可能性が強い 焼成は極めて良好である

甕

番号	口径	器高	頸部径	胴部径	技法	色調	回転方向	残存率	備考
24	8.7	10.6	2.7	7.1	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　灰白色 外　灰白色	右	復元完形	胴部と口縁部に凹線が存在している 外面底部にヘラ記号が存在している

平瓶

番号	口径	器高	頸部径	胴部径	技法	色調	回転方向	残存率	備考
25	5.7	151.	4.5	13.8	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ 外面底部ヘラ切り未調整	内　灰色 外　灰色	右	完　形	肩部に円錐形の粘土粒が存在している 外面口縁部に１条の凹線が存在している
26	5.6	12.5	3.1	11.3	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ 外面底部ヘラ切り未調整	内　灰色 外　灰色	右	完　形	肩部に２個の円板が存在している 外面全体に自然釉が付着している
27	6.5	11.5	4.7	13.4	内　ヨコナデ 外　ヨコナデ 底部ヘラ切り未調整	内　灰白色 外　灰白色	右	完　形	肩部に２個の円板が存在している 全体の器形が扁平で低くなっている

長脚無蓋高杯

番号	口径	器高	脚上部	脚端部	技法	色調	回転方向	残存率	備考
28	11.8	11.6	2.7	11.1	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヨコナデ　カキメ	内　灰色 外　灰白色	右	復元完形	透かし窓は台形で２個だけである 内面杯部にタタキ痕跡が存在している

甕

番号	口径	器高	頸部径	胴部径	技法	色調	回転方向	残存率	備考
29	(18.6)	—	(13.6)	—	内　同心円タタキ　ヨコナデ 外　平行タタキ　カキメ ヨコナデ	内　灰色 外　灰色	右	約１／10	焼成は良好である 胎土中に砂粒が少ない
30	36.2	—	26.0	(85.6)	内　同心円タタキ　ヨコナデ 外　平行タタキ　波状文 カキメ　ヨコナデ	内　灰白色 外　灰白色	右	約１／10	口縁部に４条の凹線が存在している 口縁部にクシ描波状文が存在している

表－２　鉄器観察表

番号	器種	法量（cm） 長さ	幅	厚み	重量（g）	残存状態
31	大刀	95.90	3.95	1.09	942.71	茎を欠損
32	大刀	78.70	3.30	0.85	488.70	ほぼ完形
33	大刀	76.65	3.50	0.90	652.75	ほぼ完形
34	大刀	49.25	3.25	0.80	420.69	ほぼ完形
31の鍔	鍔	－	5.91	0.48	15.63	欠損品
32の鍔	鍔	7.00	6.00	0.40	39.77	完形品
33の鍔	鍔	6.77	5.90	0.67	61.53	完形品
34の鍔	鍔	6.10	4.90	0.40	－	完形品
35	鏃	14.84	0.97	0.56	9.63	完形品
36	鏃	(15.35)	1.15	0.75	11.85	欠損品
37	鏃	4.30	0.84	0.43	2.90	欠損品
38	鏃	3.83	0.90	0.40	2.19	欠損品
39	鏃	3.45	1.22	0.63	3.40	欠損品
40	鏃	2.20	0.80	0.35	0.77	欠損品
41	鏃	4.10	2.40	0.25	4.24	欠損品
42	鏃	13.50	2.45	0.42	12.12	完形品
43	鏃	7.69	2.68	0.59	13.82	欠損品
44	鏃	7.83	2.52	0.40	14.00	欠損品
45	鏃	12.60	2.58	0.52	18.04	欠損品
46	鏃	4.95	0.41	0.38	1.84	欠損品
47	鏃	2.65	0.65	0.31	0.79	欠損品
48	鏃	2.20	0.89	0.70	1.56	欠損品
49	鏃	2.12	0.30	0.30	0.35	欠損品
50	不明鉄器	5.85	1.03	0.25	2.82	欠損品
51	刀子	13.98	1.69	0.51	21.54	欠損品
52	刀子	9.20	1.40	0.58	15.30	欠損品
53	刀子	12.82	1.72	0.43	30.94	欠損品
54	刀子	9.55	1.48	0.50	14.68	欠損品
55	刀子	8.28	1.37	0.80	13.28	欠損品
56	刀子	3.32	1.34	0.69	6.08	欠損品
57	鑿	22.20	31.35	0.83	115.39	欠損品
58	鏡	38.80	7.75	0.60	293.60	完形品
59	鏡	11.20	3.23	0.70	92.64	欠損品

表－３　耳環観察表

番号	外径（㎜）（上下）×（左右）		内径（㎜）（上下）×（左右）		断面径（㎜）（上下）×（左右）		切れ目幅（㎜）	重量（g）	備考	
60	18.0	20.3	13.8	14.4	3.4	3.5	0.69	1.15	鉄地銀貼	61と対
61	22.3	22.4	12.9	14.3	4.6	5.1	0.22	4.74	鉄地銀貼	60と対
62	23.7	27.2	16.9	19.5	4.4	4.5	0.58	4.07	金銅製	63と対
63	24.4	28.5	15.0	18.1	5.3	5.2	0.38	7.06	金銅製	62と対
64	24.8	26.5	15.3	17.5	4.3	4.9	0.42	7.77	銅地銀貼	65と対
65	25.4	27.5	12.9	16.4	5.8	5.7	0.26	10.46	銅地銀貼	64と対
66	22.9	26.7	12.9	15.4	6.1	5.9	0.22	9.63	金銅製	67と対
67	23.0	26.6	13.1	15.9	6.6	5.7	0.23	10.03	金銅製	66と対
68	23.9	26.3	14.5	16.8	5.9	4.9	0.28	10.68	鉄地銀貼	69と対
69	24.6	27.2	14.0	15.8	6.8	5.8	0.23	12.07	鉄地銀貼	68と対
70	25.4	27.2	14.3	16.7	5.3	5.8	0.25	9.04	金銅製	71と対
71	25.5	27.3	13.9	14.8	7.6	6.3	0.23	14.59	金銅製	70と対
72	25.9	28.3	15.8	17.4	5.6	5.3	0.09	10.65	銅地銀貼	
73	25.7	29.0	16.1	19.2	5.0	4.9	0.12	7.77	鉄地銀貼	

表－４　玉類計測表

番号	種類	長さ(㎜)	径（㎜）	孔径(g)	重量(g)	材質	色調	備考
74	勾玉	33.8	13.6	上2.5　下1.6	8.74	瑪瑙	にぶい黄褐色	片面穿孔
75	勾玉	30.5	12.0	上3.7　下1.5	6.88	瑪瑙	明褐色・淡黄色	片面穿孔
76	勾玉	25.5	9.9	上2.7　下1.2	3.81	瑪瑙	透明な灰白色	片面穿孔
77	勾玉	18.1	7.9	上2.7　下1.1	1.59	瑪瑙	赤褐色	片面穿孔
78	切子玉	23.5	14.2	上3.8　下1.3	5.63	水晶	透明	片面穿孔　反対側若干の抉り
79	切子玉	14.5	12.0	上3.1　下1.9	2.31	水晶	透明	片面穿孔
80	管玉	31.5	12.0	上3.2　下1.1	8.11	碧玉	暗緑色	片面穿孔
81	管玉	17.7	8.4	上3.6　下1.2	2.07	碧玉	濃緑色	片面穿孔
82	管玉	－	9.1	上1.9　下1.3	2.43	緑色凝灰岩	明緑灰色	約半分が欠損
83	練玉	9.4	6.1	1.5	0.36	土	黒色	２個が密着
84	練玉	5.5	7.1	1.4	0.26	土	黒褐色	
85	練玉	6.3	6.1	1.8	0.20	土	黒色	
86	練玉	5.8	6.5	1.4	0.22	土	黒色	
87	練玉	5.3	6.9	1.3	0.23	土	黒褐色	
88	練玉	5.5	6.6	1.5	0.21	土	黒褐色	
89	練玉	5.8	6.0	2.2	0.21	土	黒褐色	
90	練玉	5.2	6.6	1.5	0.24	土	黒褐色	
91	練玉	4.4	6.4	1.5	0.18	土	黒色	
92	練玉	5.2	6.5	1.9	0.21	土	黒褐色	
93	練玉	5.2	6.3	1.4	0.19	土	黒褐色	
94	練玉	5.1	6.4	1.7	0.23	土	黒色	
95	練玉	4.6	6.9	1.4	0.21	土	黒色	
96	練玉	5.3	6.1	2.1	0.21	土	黒褐色	
97	練玉	5.0	6.4	1.4	0.18	土	黒褐色	
98	練玉	4.6	6.8	1.8	0.17	土	黒褐色	一部を欠損
99	練玉	5.0	6.3	1.8	0.22	土	黒色	
100	練玉	5.0	6.3	1.8	0.18	土	黒褐色	
101	練玉	4.8	6.5	1.8	0.18	土	黒褐色	
102	練玉	4.8	6.5	1.6	0.21	土	黒色	
103	練玉	5.3	5.9	1.9	0.19	土	黒色	
104	練玉	5.0	6.2	1.6	0.21	土	黒褐色	
105	練玉	4.9	6.3	1.4	0.19	土	黒色	
106	練玉	4.9	6.3	1.4	0.18	土	黒褐色	
107	練玉	5.0	6.1	1.6	0.15	土	黒色	
108	練玉	5.0	6.1	1.5	0.20	土	黒褐色	
109	練玉	4.9	6.2	1.8	0.19	土	黒色	
110	練玉	4.9	6.1	1.8	0.17	土	黒色	
111	練玉	4.5	6.5	1.7	0.19	土	黒色	
112	練玉	5.2	5.7	1.5	0.15	土	黒色	
113	練玉	5.0	5.9	2.0	0.18	土	黒色	
114	練玉	4.7	6.2	1.7	0.18	土	黒色	
115	練玉	4.6	6.3	1.5	0.17	土	黒色	
116	練玉	4.9	5.9	1.5	0.18	土	黒色	
117	練玉	4.7	6.1	1.5	0.18	土	黒褐色	
118	練玉	4.9	5.8	1.5	0.17	土	黒褐色	
119	練玉	4.7	6.0	1.6	0.19	土	黒褐色	
120	練玉	4.6	6.3	1.6	0.18	土	黒褐色	
121	練玉	4.4	6.3	1.6	0.18	土	黒色	
122	練玉	4.4	6.3	1.5	0.15	土	黒色	
123	練玉	4.3	6.3	1.8	0.18	土	黒褐色	
124	練玉	4.9	5.6	1.8	0.18	土	黒色	
125	練玉	4.8	5.7	1.4	0.17	土	黒色	
126	練玉	4.5	6.0	1.4	0.17	土	黒色	
127	練玉	4.5	6.0	1.7	0.16	土	黒褐色	
128	練玉	4.2	6.2	1.7	0.17	土	黒色	
129	練玉	4.5	5.7	1.5	0.15	土	黒褐色	
130	練玉	3.9	5.9	1.6	0.14	土	黒色	
131	小玉	5.3	7.7	1.7	0.48	ガラス	濃紺色	
132	小玉	5.6	7.6	2.2	0.44	ガラス	群青色	
133	小玉	5.1	8.1	1.8	0.41	ガラス	藍色	
134	小玉	5.9	7.2	1.6	0.37	ガラス	黒い青色	

番号	種　類	長さ(㎜)	径 (㎜)	孔 径(g)	重量(g)	材　質	色　調	備　考
135	小玉	5.2	7.7	1.5	0.46	ガラス	紺色	
136	小玉	5.6	7.1	2.5	0.33	ガラス	藍色	
137	小玉	5.2	7.3	1.5	0.38	ガラス	濃紺色	
138	小玉	4.4	8.1	2.2	0.41	ガラス	濃紺色	
139	小玉	5.5	6.9	1.8	0.35	ガラス	群青色	
140	小玉	5.0	7.4	1.9	0.39	ガラス	藍色	
141	小玉	5.1	7.0	2.0	0.32	ガラス	青色	
142	小玉	4.7	7.2	2.0	0.35	ガラス	群青色	
143	小玉	4.3	7.6	1.9	0.34	ガラス	藍色	
144	小玉	4.4	7.1	2.5	0.28	ガラス	濃紺色	
145	小玉	3.4	5.3	1.3	0.13	ガラス	透明で暗い水色	
146	小玉	3.4	4.8	1.4	0.11	ガラス	濁った水色	
147	小玉	4.2	3.6	1.3	0.09	ガラス	濁った青緑色	
148	小玉	3.5	4.3	1.5	0.07	ガラス	透明な水色	
149	小玉	3.0	4.8	1.8	0.08	ガラス	濁った青緑色	
150	小玉	3.4	3.7	1.1	0.06	ガラス	半透明で薄い緑色	
151	小玉	3.7	3.2	1.0	0.04	ガラス	透明な水色	
152	小玉	2.7	4.2	1.1	0.06	ガラス	透明で暗い水色	
153	小玉	2.6	4.3	1.5	0.06	ガラス	濁った水色	
154	小玉	2.5	4.4	1.4	0.06	ガラス	透明な水色	
155	小玉	2.6	4.2	1.3	0.06	ガラス	透明で薄い緑色	
156	小玉	2.4	4.4	1.5	0.05	ガラス	半透明な緑色	
157	小玉	2.3	4.3	1.5	0.05	ガラス	濁った緑色	
158	小玉	2.6	3.9	1.1	0.06	ガラス	濁った緑色	
159	小玉	2.7	3.7	1.2	0.05	ガラス	澄んだ水色	
160	小玉	2.5	3.9	1.5	0.05	ガラス	群青色	
161	小玉	2.5	3.9	0.9	0.05	ガラス	黄色	
162	小玉	2.3	4.1	1.3	0.05	ガラス	透明な水色	
163	小玉	2.0	4.4	1.3	0.04	ガラス	透明な水色	
164	小玉	2.5	3.8	1.2	0.05	ガラス	濁った緑色	
165	小玉	2.6	3.6	0.9	0.04	ガラス	透明な濃い緑色	
166	小玉	2.5	3.7	0.9	0.04	ガラス	濁った緑色	
167	小玉	2.3	3.9	1.2	0.04	ガラス	濁った緑色	
168	小玉	2.3	3.9	0.9	0.04	ガラス	濁った緑色	
169	小玉	2.2	3.9	1.1	0.04	ガラス	濁った緑色	
170	小玉	2.1	4.1	1.2	0.05	ガラス	群青色	
171	小玉	1.9	4.3	1.5	0.04	ガラス	透明な水色	
172	小玉	2.4	3.7	0.9	0.04	ガラス	濁った緑色	
173	小玉	2.3	3.8	1.6	0.05	ガラス	透明で薄い緑色	
174	小玉	2.3	3.8	1.1	0.04	ガラス	濁った緑色	
175	小玉	2.3	3.8	1.5	0.05	ガラス	透明な水色	
176	小玉	2.1	4.0	1.3	0.05	ガラス	澄んだ水色	
177	小玉	2.0	4.1	1.4	0.05	ガラス	ややくすんだ黄色	
178	小玉	2.6	3.4	1.1	0.04	ガラス	濁った緑色	
179	小玉	2.4	3.6	1.0	0.04	ガラス	透明で薄い緑色	
180	小玉	2.2	3.8	1.2	0.03	ガラス	緑がかった水色	
181	小玉	2.3	3.6	1.2	0.03	ガラス	濁った緑色	
182	小玉	2.1	3.8	1.5	0.04	ガラス	透明で薄い青色	
183	小玉	2.0	3.9	1.3	0.03	ガラス	透明な水色	
184	小玉	2.5	3.3	1.1	0.04	ガラス	濁った青緑色	
185	小玉	2.3	3.5	1.1	0.04	ガラス	透明で濃い水色	
186	小玉	2.3	3.5	1.0	0.03	ガラス	透明で暗い水色	
187	小玉	2.3	3.5	0.8	0.04	ガラス	透明な青緑色	
188	小玉	1.9	3.9	1.2	0.03	ガラス	濁った水色	
189	小玉	2.3	3.4	0.9	0.05	ガラス	半透明な緑色	
190	小玉	2.0	3.7	1.5	0.04	ガラス	透明な水色	
191	小玉	2.0	3.7	1.4	0.04	ガラス	透明な水色	
192	小玉	1.8	3.9	1.4	0.04	ガラス	透明な水色	
193	小玉	2.4	3.2	0.9	0.03	ガラス	透明で薄い緑色	
194	小玉	2.3	3.3	0.9	0.02	ガラス	透明な緑色	
195	小玉	2.0	3.6	1.1	0.04	ガラス	透明な水色	
196	小玉	2.0	3.6	1.1	0.03	ガラス	透明な水色	
197	小玉	1.8	3.8	1.3	0.03	ガラス	透明な水色	
198	小玉	1.8	3.8	1.1	0.03	ガラス	透明で濃い水色	
199	小玉	1.7	3.9	1.3	0.04	ガラス	透明な水色	
200	小玉	2.5	3.0	1.3	0.02	ガラス	透明で濃い水色	
201	小玉	2.3	3.2	1.1	0.03	ガラス	黄色	
202	小玉	2.0	3.5	1.4	0.03	ガラス	透明な水色	
203	小玉	2.0	3.5	1.2	0.02	ガラス	濁った緑色	
204	小玉	1.9	3.6	1.3	0.03	ガラス	濁った黄緑色	
205	小玉	1.9	3.6	1.0	0.03	ガラス	透明で濃い水色	
206	小玉	2.3	3.1	0.9	0.03	ガラス	透明な緑色	
207	小玉	2.1	3.3	1.1	0.03	ガラス	透明な緑色	
208	小玉	2.0	3.4	1.2	0.03	ガラス	澄んだ水色	
209	小玉	1.9	3.5	1.2	0.04	ガラス	透明な水色	
210	小玉	2.1	3.2	1.0	0.03	ガラス	透明で濃い水色	
211	小玉	1.9	3.4	1.0	0.03	ガラス	透明な水色	
212	小玉	1.8	3.5	1.2	0.02	ガラス	透明な水色	
213	小玉	1.7	3.6	1.2	0.03	ガラス	透明な水色	
214	小玉	1.6	3.7	1.4	0.03	ガラス	澄んだ青色	
215	小玉	2.4	2.8	1.1	0.03	ガラス	透明で薄い青緑色	
216	小玉	1.8	3.4	1.2	0.04	ガラス	透明な水色	
217	小玉	1.7	3.7	1.3	0.03	ガラス	透明な水色	
218	小玉	1.6	3.6	1.2	0.03	ガラス	半透明な黄緑色	
219	小玉	1.6	3.6	1.1	0.03	ガラス	黄色	
220	小玉	1.5	3.7	1.3	0.02	ガラス	透明な水色	
221	小玉	1.5	3.7	1.2	0.03	ガラス	透明な水色	
222	小玉	1.8	3.3	1.2	0.02	ガラス	澄んだ水色	
223	小玉	1.7	3.4	1.5	0.03	ガラス	透明な水色	
224	小玉	1.7	3.4	1.3	0.03	ガラス	透明な水色	
225	小玉	1.5	3.6	1.5	0.02	ガラス	透明で明るい水色	
226	小玉	1.7	3.3	1.2	0.02	ガラス	濁った緑色	
227	小玉	1.7	3.3	1.1	0.03	ガラス	透明な水色	
228	小玉	2.0	2.9	0.9	0.03	ガラス	透明で薄い水色	
229	小玉	1.6	3.3	1.0	0.02	ガラス	透明で濃い水色	
230	小玉	1.6	3.3	0.9	0.02	ガラス	濁った青緑色	
231	小玉	1.5	3.4	1.1	0.02	ガラス	透明な水色	
232	小玉	1.6	3.2	1.2	0.02	ガラス	透明な水色	
233	小玉	1.6	3.2	1.1	0.01	ガラス	透明な水色	
234	小玉	1.4	3.4	1.1	0.02	ガラス	透明な水色	
235	小玉	1.4	3.2	1.3	0.02	ガラス	透明な水色	
236	小玉	1.9	3.6	1.0	0.03	ガラス	透明で濃い水色	
237	小玉	1.4	3.1	1.0	0.02	ガラス	透明な水色	
238	小玉	1.3	3.2	1.4	0.02	ガラス	透明な水色	
239	小玉	1.2	3.2	0.9	0.01	ガラス	透明な水色	

第９章　水神ヶ峪遺跡

第１節　調査の経過

水神ヶ峪遺跡は、真庭郡久世町中原に所在する。圃場整備の完了した谷水田の南東隅で、年中日光が当たらない陰地に存在した近世の無縁墓地である。発掘調査前の現状は檜林であった（第１図）。

調査は、平成７年度の最後の第４四半期である平成８年３月に実施した。

まず第一番目には、墓石をすべて地表に現すことから始めた。その結果、16基以上の墓石を認めることができた。写真撮影の後、１ｍの方眼枠を水糸で張り、実測した（第２図）。

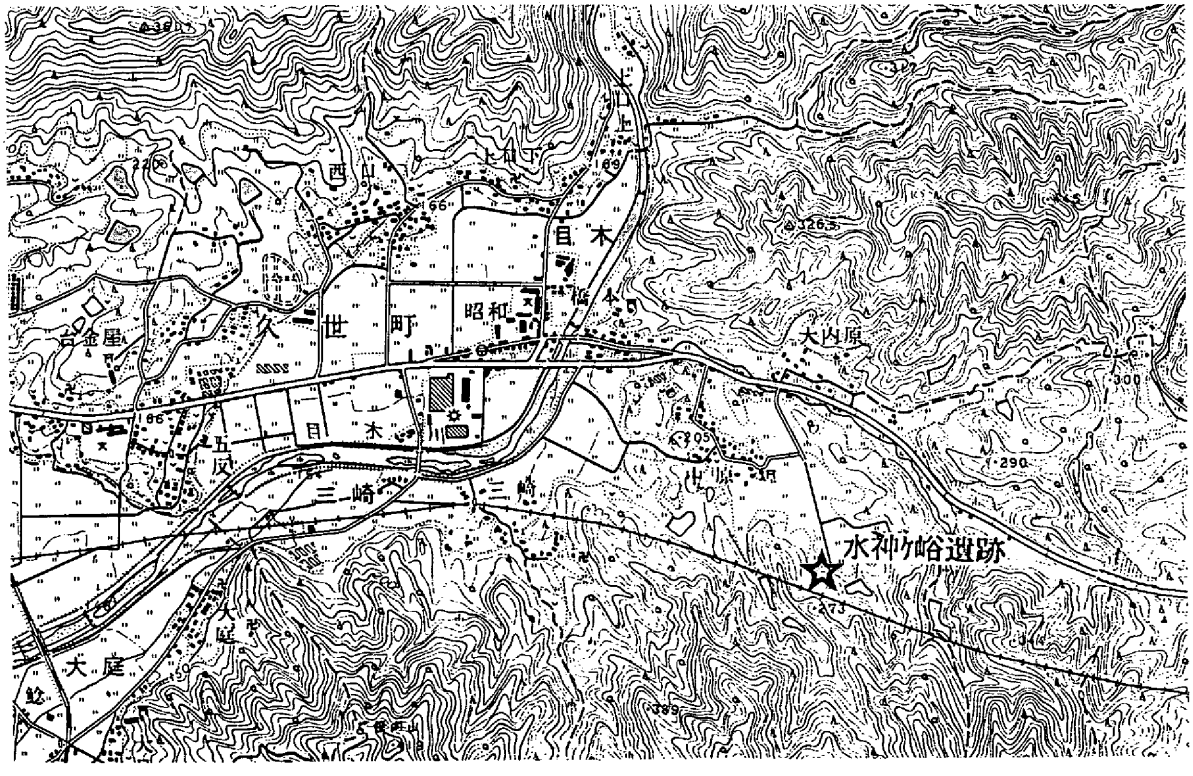
次に、墓石をすべて除去して、その下層に存在するであろう木棺を埋葬した墓穴の検出を行った。その結果、土壙墓20基と溝３条を検出した（第３図）。

遺構はすべて半割し、土層断面の観察、線引き、写真撮影、実測を行った後に、全掘削している。

墓石16基と土壙墓20基は、いくらかの対応関係が認められるが、数基は非対応である。例えば、墓石16と土壙墓15は対応し、墓石15と土壙墓20は非対応である。また、溝は基本的に墓地の区画か墓道を示している。

遺物は、地表から陶磁器、一文銭、鉄釘、鉄滓など、土壙墓内から人骨のほかに数珠玉、きせる、一文銭、毛抜き、はさみ、鉄釘などが出土している。

なお人骨は、そのまま地元の中原公会堂脇の公共墓地に埋葬していただいた。



第１図　遺跡位置図（1／10,000）

第２節　調査の概要

(1) 遺構

墓石１（第２図）

調査区の南東隅にある120×160㎝の石囲いの中央に、石塔が建っている。石塔には、何も文字は彫り込まれていない。この下に土壙墓12・13が検出できた。

墓石２（第２図）

墓石１の西にある120×130㎝の崩れた石囲いの中央に、平石が置かれている。平石には、文字は彫り込まれていない。この下に土壙墓11が検出できた。

墓石３（第２図）

墓石２の西にある３個の角石が放射状に配石されたものである。崩れが著しく、石の範囲が特定できない。西の端には、平石が沈み込んでいる。この下に土壙墓10が検出できた。

墓石４（第２図）

墓石３の西にある３個の平石の上に、１個の平石が乗ったものである。上に乗った石は、本来石塔としていたものである。この下では、土壙墓９を検出した。

墓石５（第２図）

墓石４の西にある４個の小さめの角石の上に、平石が乗ったものである。上に乗った石は、本来石塔としていたものである。この下では、土壙墓７・８を検出した。

墓石６（第２図）

墓石５の西にある３個の小さめの角石と数個の拳大の石が集積したものである。この下には、土壙墓５・６が検出できた。

墓石７（第２図）

調査区の東端にある６個の小さめの角石で囲い、中央に平石を乗せたものである。この下には、土壙墓１が検出できた。

墓石８（第２図）

墓石７の北にある５個の角石で囲い、中央に平石を乗せたものである。上に乗った石は、本来石塔としていたものである。この下には、土壙墓４が検出できた。

墓石９（第２図）

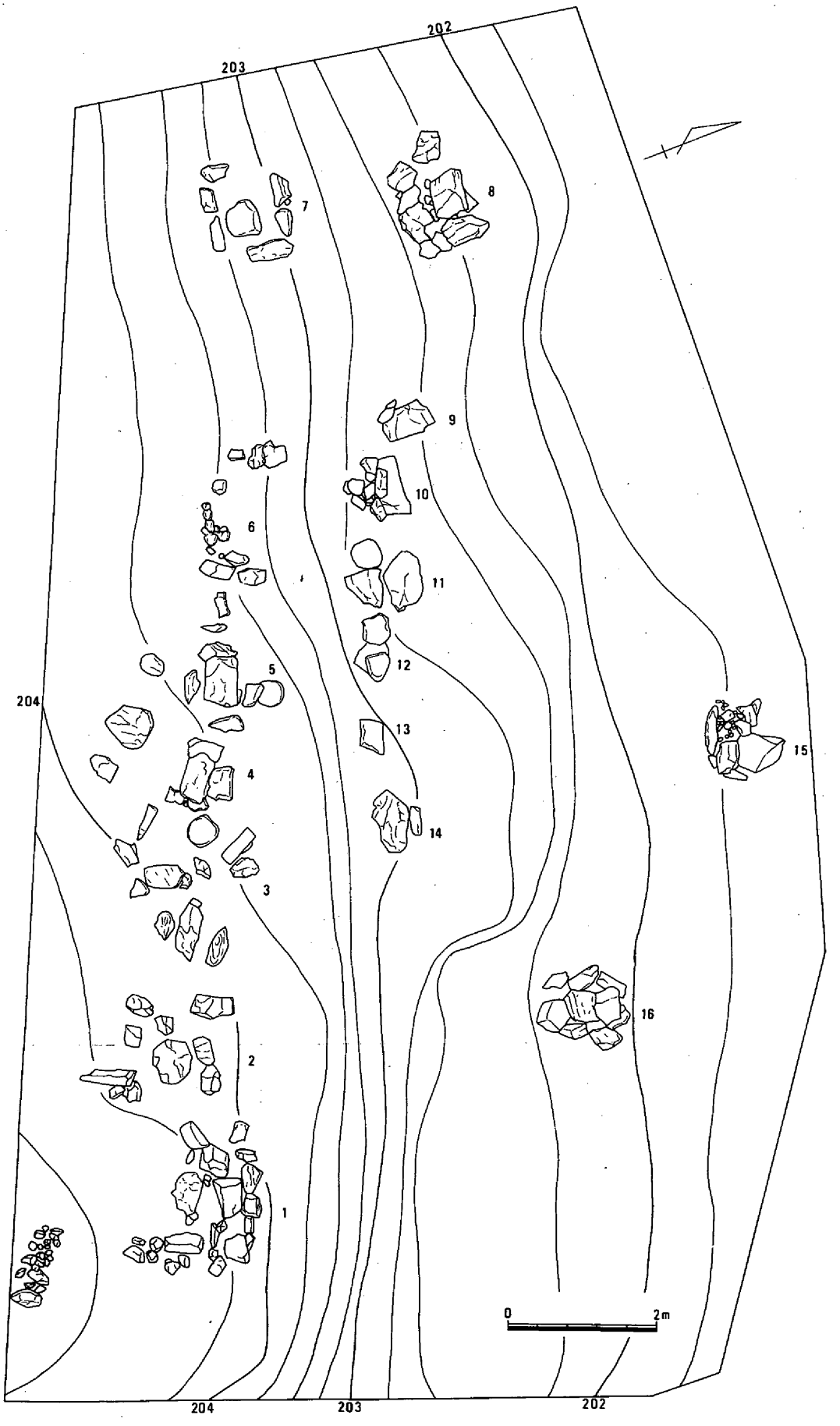
墓石８の東にある１個の平石と１個の小石で構成したものである。この下には、土壙墓21が検出できた。

墓石10（第２図、図版79－２）

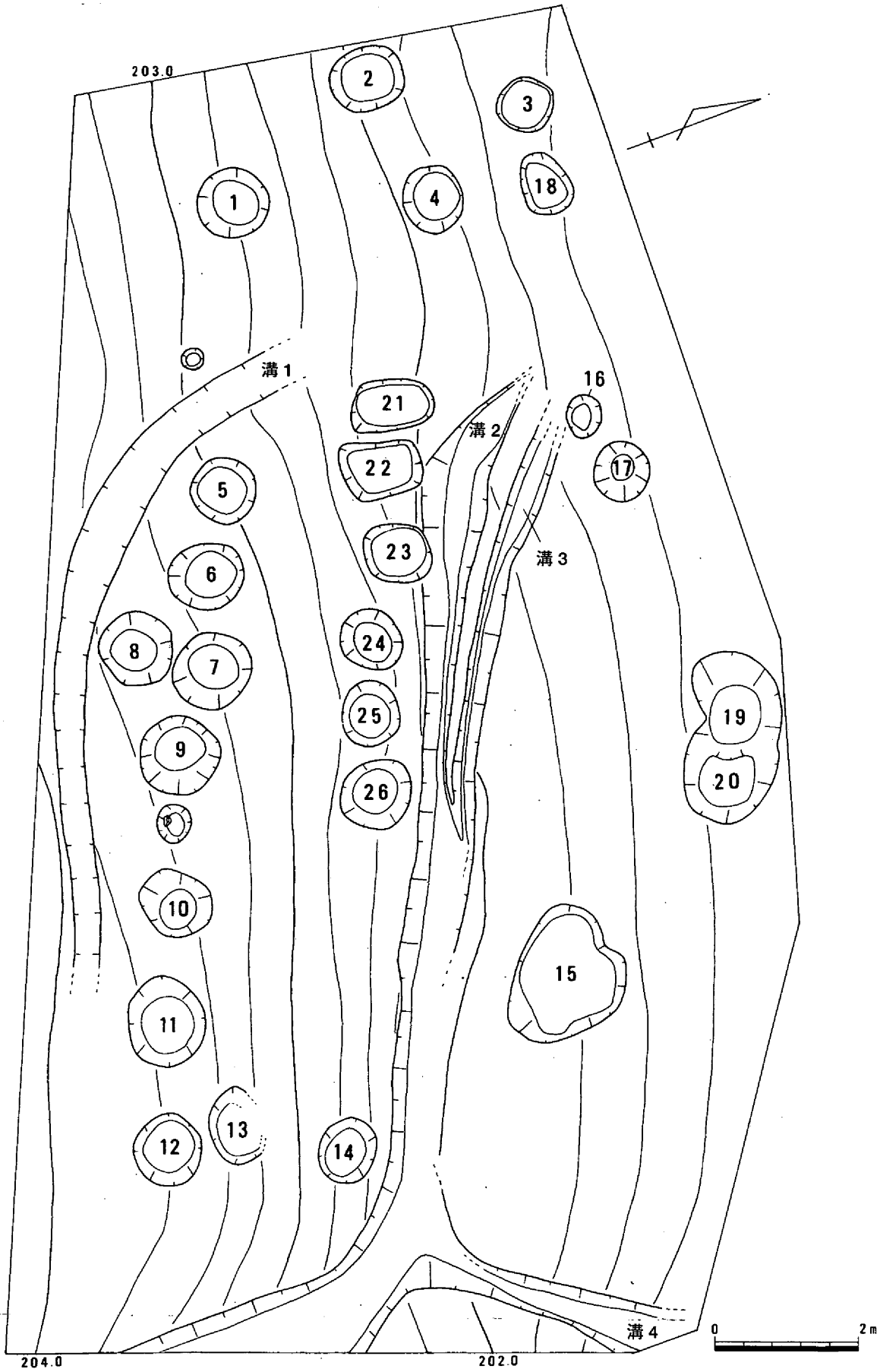
墓石９の東にある１個の平石と数個の小石で構成したものである。この下には、土壙墓22が検出できた。

墓石11（第２図、図版79－２）

墓石10の東にある３個の平石で構成したものである。この下には、土壙墓23が検出できた。



第２図　水神ケ峪遺跡墓石配置図（1／80）



第３図　水神ケ峪遺跡土壙墓配置図（1／80）

墓石12（第２図）

墓石11の東にある３個の平石で構成したものである。この下には、土壙墓24が検出できた。

墓石13（第２図）

墓石12の東にある１個の平石だけで構成したものである。この下には、土壙墓は25が検出できた。

墓石14（第２図）

墓石13の東にある１個の平石と１個の角石だけで構成したものである。土壙墓26が検出できた。

墓石15（第２図）

墓石14の北にある３個の角石で囲った中に、１個の石塔を建てたものである。土壙墓19がこれに対応するものであろう。

墓石16（第２図）

墓石15の南東にある数個の角石で囲った中に、１個の石塔を建てたものである。土壙墓15がこれに対応する。

土壙墓１（第３・４図）

調査区の南西隅で検出した土壙墓である。円形で上幅の直径は100cm、下幅は楕円形を呈し、長径は70cm、短径は60cmを測る。

きせるが出土している。

土壙墓２（第３・５図）

調査区の西隅で検出した楕円形土壙墓である。上幅の長径は100cm、短径は90cm、下幅も楕円形を呈し、長径は70cm、短径は65cmを測る。

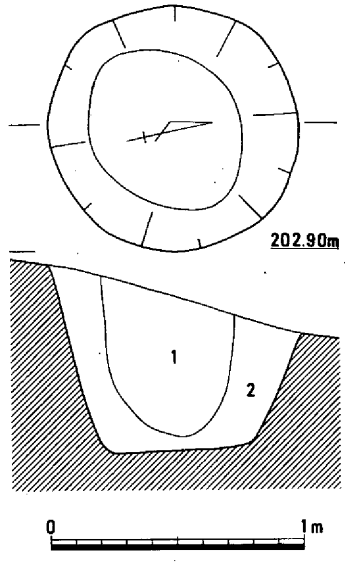
土壙墓３（第３・６図）

調査区の北西隅で検出した円形土壙墓である。上幅の直径は80cm、下幅の直径は65cmを測る。

きせるが出土している。

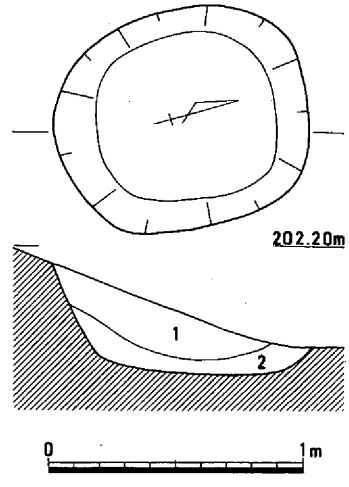
土壙墓４（第３・７図）

土壙墓２の東で検出した楕円形土壙墓である。上幅の長径は160cm、短径は140cm、下幅は円形を呈し、直径は100cmを測る。



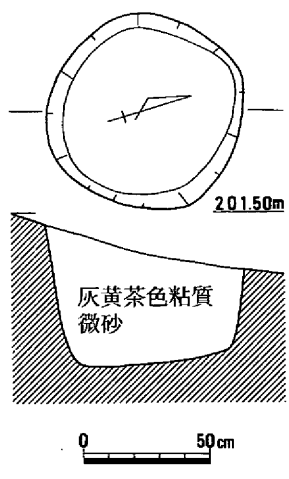
1．灰黄茶色粘質微砂
2．淡灰黄茶色粘性微砂

第４図　土壙墓１（1／30）

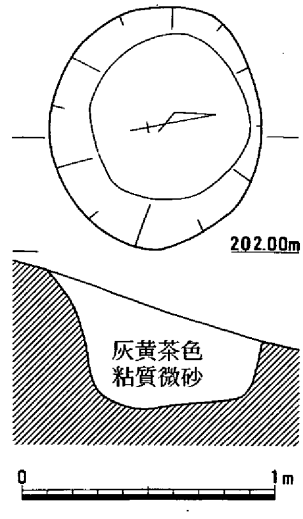


1．灰黄茶色粘質微砂
2．淡灰黄茶色粘質微砂

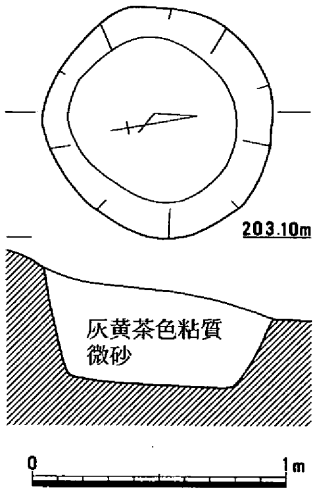
第５図　土壙墓２（1／30）



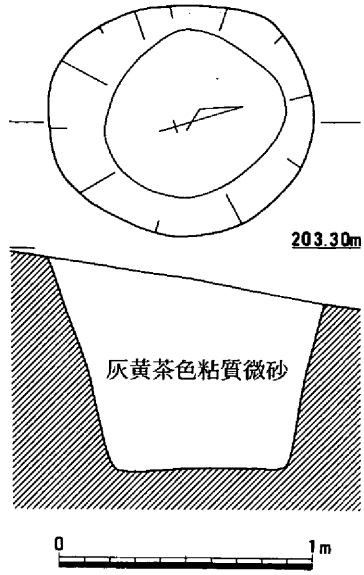
第６図　土壙墓３（1／30）



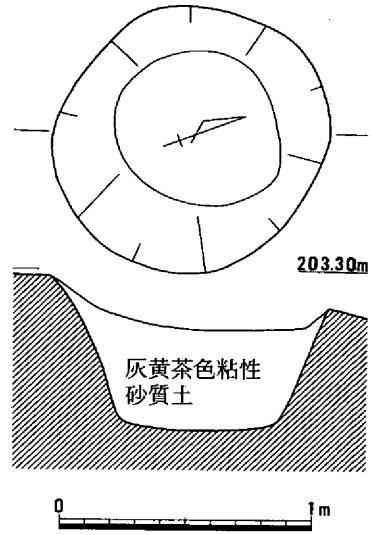
第７図　土壙墓４（1／30）



第８図　土壙墓５（1／30）



第９図　土壙墓６（1／30）



第10図　土壙墓７（1／30）

土壙墓５（第３・８図）

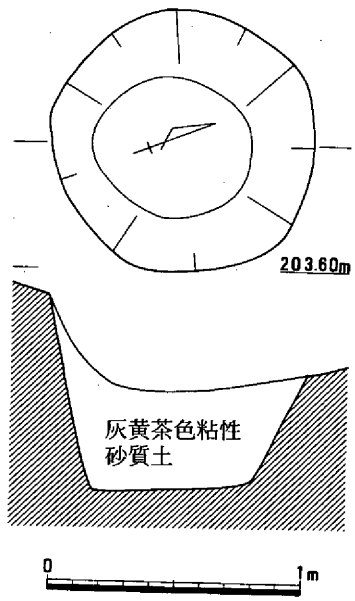
土壙墓１の東で検出した円形土壙墓である。上幅の直径は90㎝、下幅の直径は65㎝を測る。

一文銭（寛永通寶）が出土している。

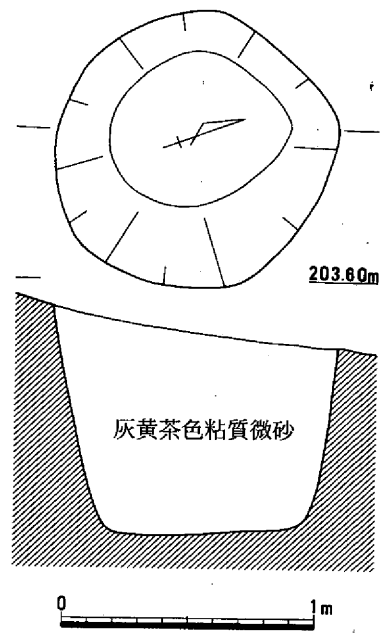
土壙墓６（第３・９図）

土壙墓５の東で検出した楕円形土壙墓である。上幅の長径は105㎝、短径は90㎝、下幅は円形を呈し、直径は60㎝を測る。

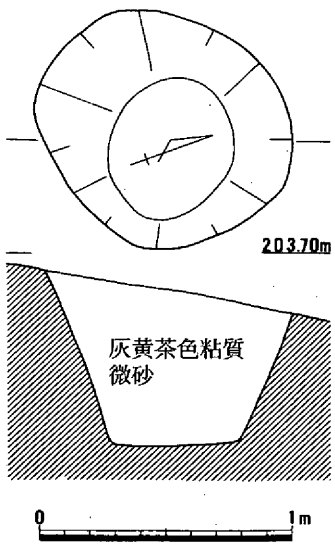
一文銭（寛永通寶）が５枚と毛抜きが出土している。



第11図　土壙墓８（1／30）



第12図　土壙墓９（1／30）



第13図　土壙墓10（1／30）

土壙墓７（第３・10図）

土壙墓６の東で検出した楕円形土壙墓である。上幅の長径は110㎝、短径は100㎝、下幅は円形を呈し、直径は60㎝を測る。

土壙墓８（第３・11図）

土壙墓７の南で検出した円形土壙墓である。上幅の直径は100㎝、下幅の直径は60㎝を測る。この土壙墓の上面には、１辺56㎝の平石が置かれていた。

土壙墓９（第３・12図）

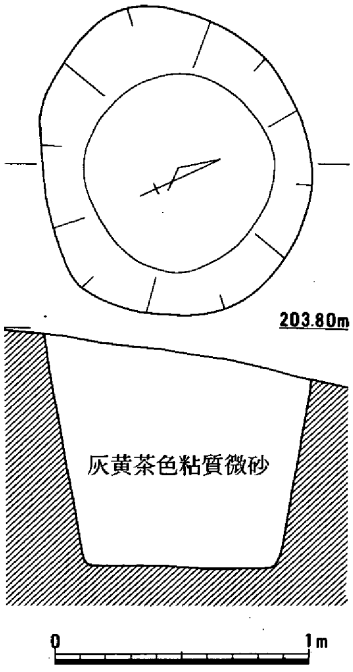
土壙墓７の東で検出した円形土壙墓である。上幅の直径は110cm、下幅は楕円形を呈し、長径70cm、短径60cmを測る。上面には墓石４が置かれていた。

土壙墓10（第３・13図）

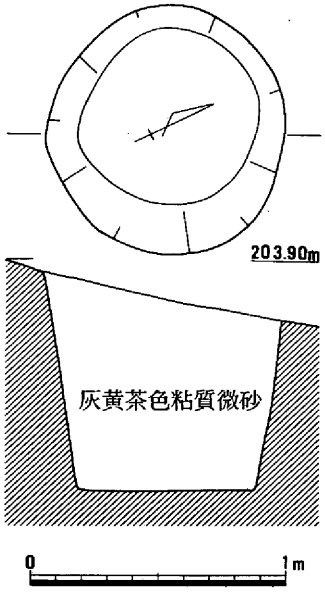
土壙墓９の東で検出した楕円形土壙墓である。上幅の長径105cm、短径90cm、下幅も楕円形を呈し、長径60cm、短径50cmを測る。

土壙墓11（第３・14図）

土壙墓10の東で検出した楕円形土壙墓である。上幅の長径は120cm、短径は105cm、下幅は円形を呈し、直径は75cmを測る。墓石２と対応する。



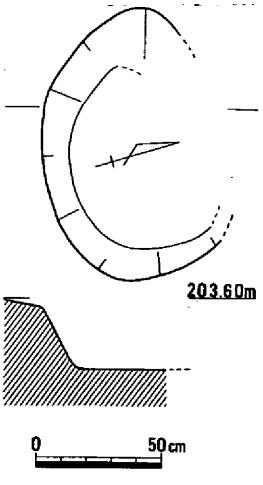
第14図　土壙墓11（1／30）



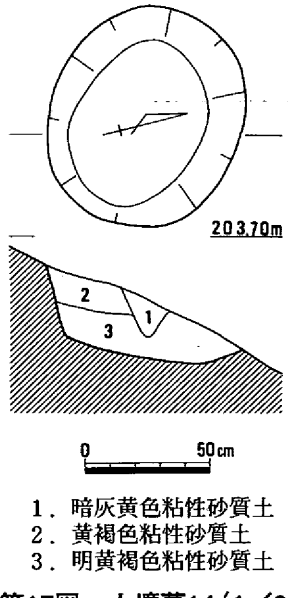
第15図　土壙墓12（1／30）

土壙墓12（第３・15図）

土壙墓11の東で検出した円形土壙墓である。上幅の直径は100cm、下幅は直径70cmを測る。この土壙墓の上面には墓石１が置かれていた。床面から上方に30cmを測るあたりから、水晶製と考えられる数珠玉が出土したため、慎重に掘り下げを行いながら土をふるいにかけて精査したところ、59点も採集した。毛抜きも出土している。

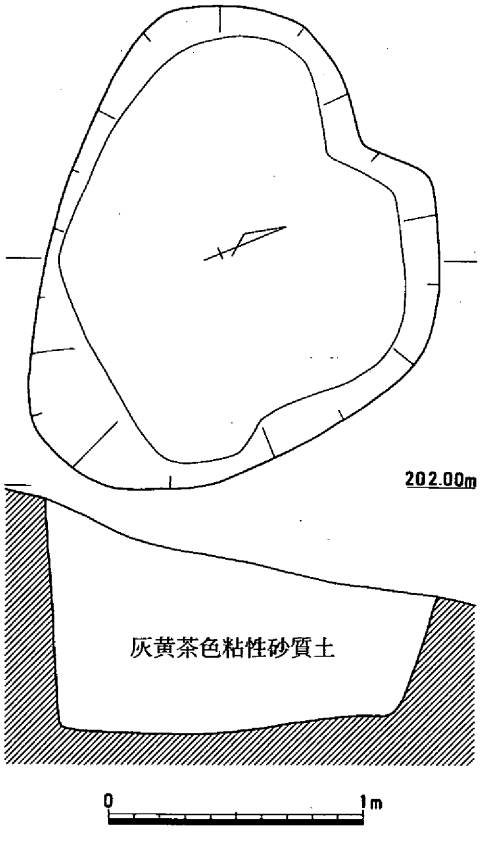


第16図　土壙墓13（1／30）



1．暗灰黄色粘性砂質土
2．黄褐色粘性砂質土
3．明黄褐色粘性砂質土

第17図　土壙墓14（1／30）



第18図　土壙墓15（1／30）

土壙墓13（第３・16図）

土壙墓12の北で検出した楕円形土壙墓である。北側は検出が困難な急斜面のため、削平してしまつた。上幅の長径105cm、短径約80cmである。下幅も楕円形を呈し、長径70cm、短径約60cmを測る。

土壙墓14（第３・17図）

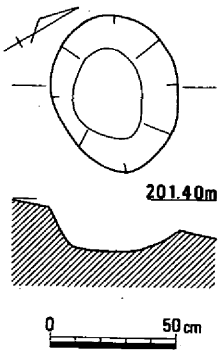
土壙墓13の北で検出した楕円形土壙墓である。急斜面のため、浅い。上幅の長径90cm、短径約75cmである。下幅も楕円形を呈し、長径65cm、短径約50cmを測る。きせるが出土している。

土壙墓15（第３・18図）

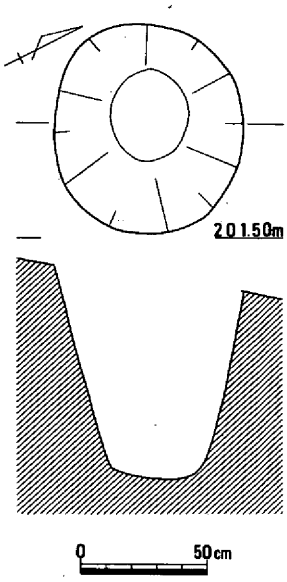
土壙墓14の北で検出した不整楕円形土壙墓である。墓石16と対応する。２基が切り合っている。上幅の長径200cm、短径150cmである。下幅も不整形を呈し、長径170cm、短径135cmを測る。

土壙墓16（第３・19図）

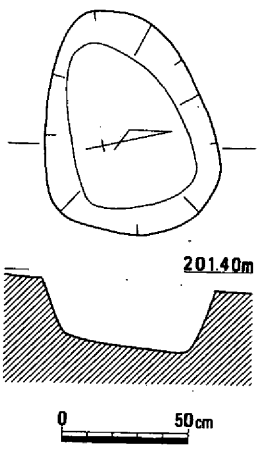
土壙墓５の北４mで検出した楕円形土壙墓である。上幅の長径60cm、短径50cmである。下幅も楕円形を呈し、長径35cm、短径30cmを測る。小児用の墓であろう。



第19図　土壙墓16（1／30）



第20図　土壙墓17（1／30）



第21図　土壙墓18（1／30）

土壙墓17（第３・20図）

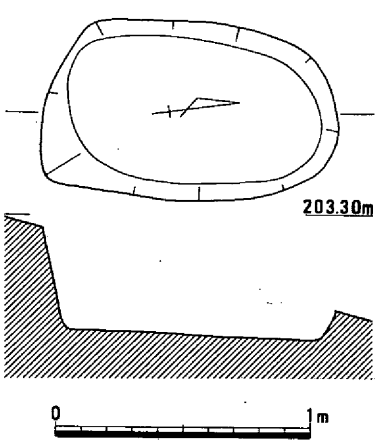
土壙墓16の東で検出した円形土壙墓である。上幅の直径は80cmである。下幅は楕円形を呈し、長径35cm、短径30cmを測る。

土壙墓18（第３・21図）

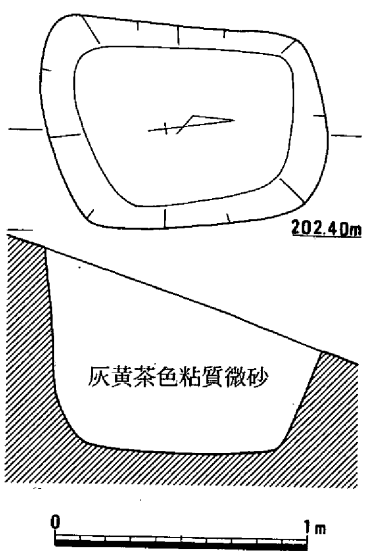
土壙墓３の東で検出した卵形土壙墓である。上幅の長径は90cm、短径は70cmである。下幅も卵形を呈し、長径は65cm、短径は50cmを測る。

土壙墓19（第３・24図）

土壙墓17の東で検出した楕円形土壙墓である。土壙墓20と接している。新旧は不明である。墓石15が対応する。



第22図　土壙墓21（1／30）



第23図　土壙墓22（1／30）

土壙墓20（第３・24図）

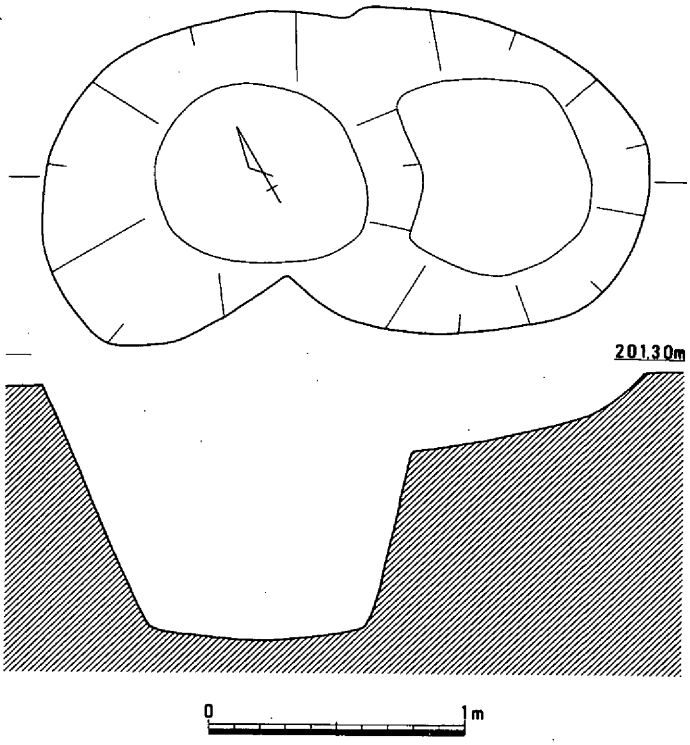
土壙墓19の東で検出した楕円形土壙墓である。土壙墓19と接し、それよりも浅い。新旧は不明である。墓石15と位置はずれるが、対応する。

土壙墓21（第３・22図）

土壙墓５の北、土壙墓16の南で検出した長楕円形土壙墓である。上幅の長径は120㎝、短径は70㎝である。下幅も長楕円形を呈し、長径は100㎝、短径は55㎝を測る。一文銭７枚、きせる、銅線、鉄釘が出土している。

土壙墓22（第３・23図）

土壙墓21東で検出した長方形土壙墓である。上幅の長辺は110㎝、短辺は80㎝である。下幅も長方形を呈し、長辺は90㎝、短辺は60㎝を測る。棺釘が出土している。



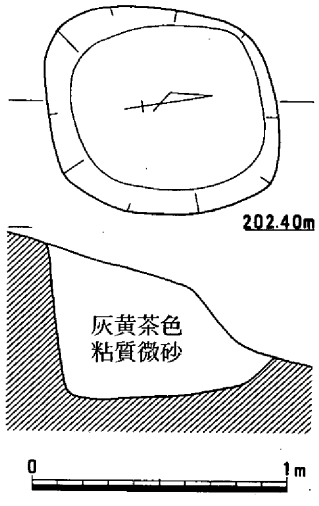
第24図　土壙墓19・20（1／30）

土壙墓23（第３・25図）

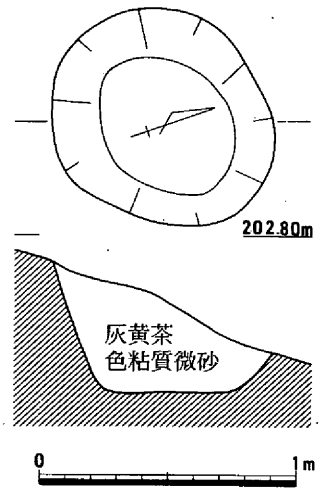
土壙墓22の東で検出した隅丸方形土壙墓である。上幅の長辺は90㎝、短径は80㎝である。下幅も長辺は75㎝、短辺は55㎝を測る。一文銭７枚、きせる、はさみ、鉄釘が出土している。

土壙墓24（第３・26図）

土壙墓23の東で検出した楕円形土壙墓である。上幅の長径90㎝、短径80㎝である。下幅は、長径60㎝、短径50㎝を測る。検出面からの深さは50㎝を測る。



第25図　土壙墓23（1／30）



第26図　土壙墓24（1／30）

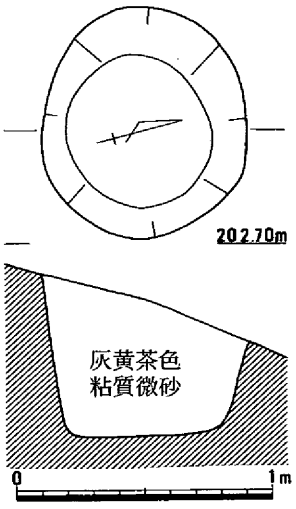
土壙墓25（第３・27図）

土壙墓24の東で検出した楕円形土壙墓である。上幅の長径90㎝、短径80㎝である。下幅は円形を呈し、直径58㎝を測る。検出面からの深さは65㎝を測る。上面には墓石13が位置する。一文銭３枚が出土している。

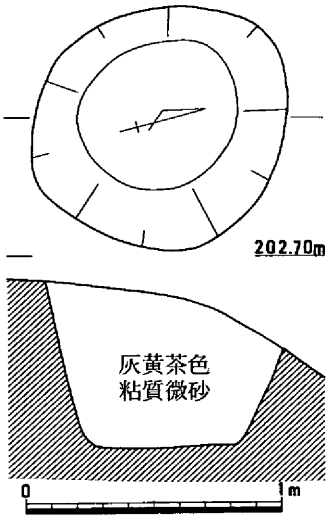
土壙墓26（第３・28図）

土壙墓25の東で検出した楕円形土壙墓である。上幅の長径110㎝、短径95㎝である。下幅も楕円形を呈し、長径65㎝、短径55㎝を測る。検出面からの深さは65㎝を測る。上面には墓石14がある。

一文銭10枚、きせる、毛抜き、鉄釘が出土している。



第27図　土壙墓25（1／30）



第28図　土壙墓26（1／30）

溝１（第３図）

調査区の南端で検出した緩やかにカーブした溝である。検出面の標高は、202.50mから204.00mまでである。土壙墓５から土壙墓11までの上方を囲むようにカーブしていた。深さは20cmと浅い。

溝２（第３図）

調査区の中央で検出した緩やかに「く」字状を呈してカーブした溝である。検出面の標高は、201.50mから202.25mまでである。土壙墓21から土壙墓26までの下方に位置していた。深さは20cmと浅い。

溝３（第３図）

溝２の北でそれとほぼ平行に検出した直線的な溝である。検出面の標高は、201.50mから202.25mまでである。溝２との切り合いは不明である。深さは20cmと浅い。

溝４（第３図）

調査区の東端で検出した「く」字状にカーブした溝である。検出面の標高は、201.00mから203.75mまでである。深さは20cmと浅い。墓地の東境界を表示する溝である。

(2) 遺物

陶磁器

表土を除去している時に、10数点の陶磁器が採集できた。備前焼すり鉢、肥前陶器片口鉢、肥前磁器染付碗、同小杯、瀬戸焼天目茶碗、亀山焼甕などが存在する。

一文銭

表土から１枚、土壙墓から32枚出土している。すべて寛永通寶である。１枚、３枚、７枚、10枚という出土枚数である。２枚が癒着している例が４例あり、３枚のものが１例、７枚のものが１例ある。裏に「元」と浮き彫りされているものが２枚、「文」とあるのが１枚認められる。

きせる

すべて土壙墓から出土した。２本を持っていたものはない。吸口と雁首で１本である。土壙墓１・３・14・21・23・26の６基に入れられていた。

はさみ

交差形のはさみである。土壙墓23だけに入っていた。

毛抜き

３基に１本ずつ入れられていた。

鉄釘

棺釘であるからすべての土壙墓に伴うかと思われたが、大変少ない。３基にしか出土していない。

その他

その他、用途不明の銅製の針金、鉄製金具、布、残滓などが出土している。

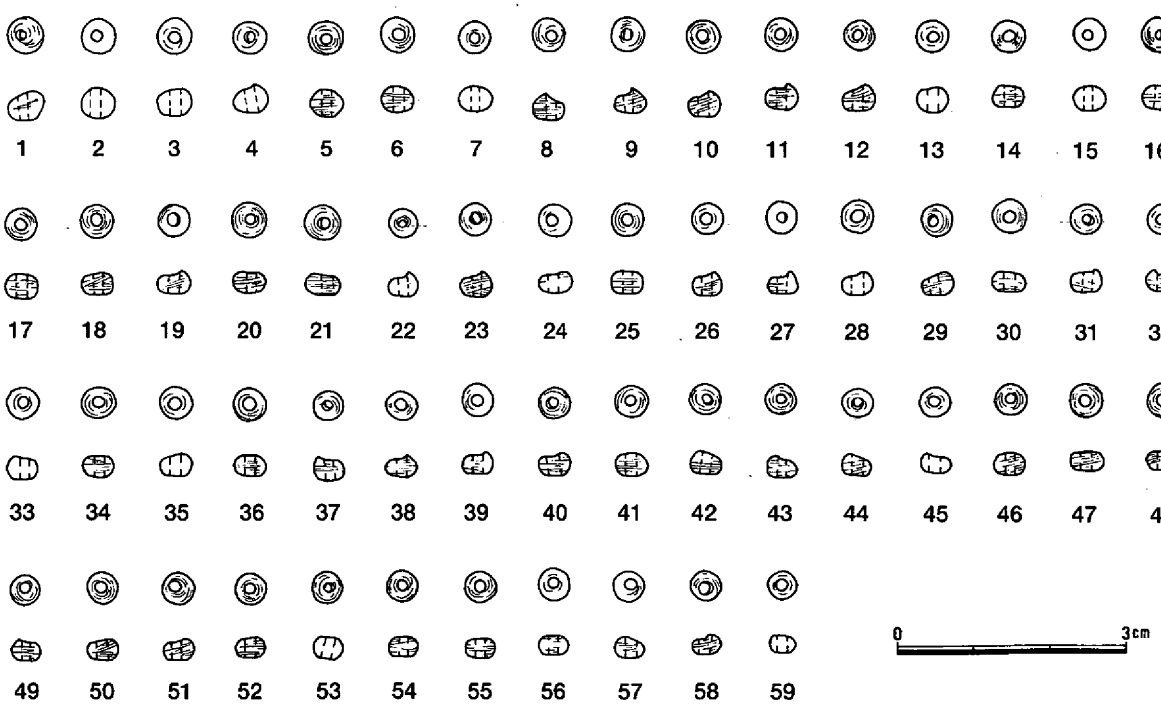
数珠玉

土壙墓12から出土した59点の玉類は、ガラス質で透明なものと不透明で白色のものが混在している。透明なものは１点しかない。半透明と白色がほぼ半分ずつある。以下、表にして示す。

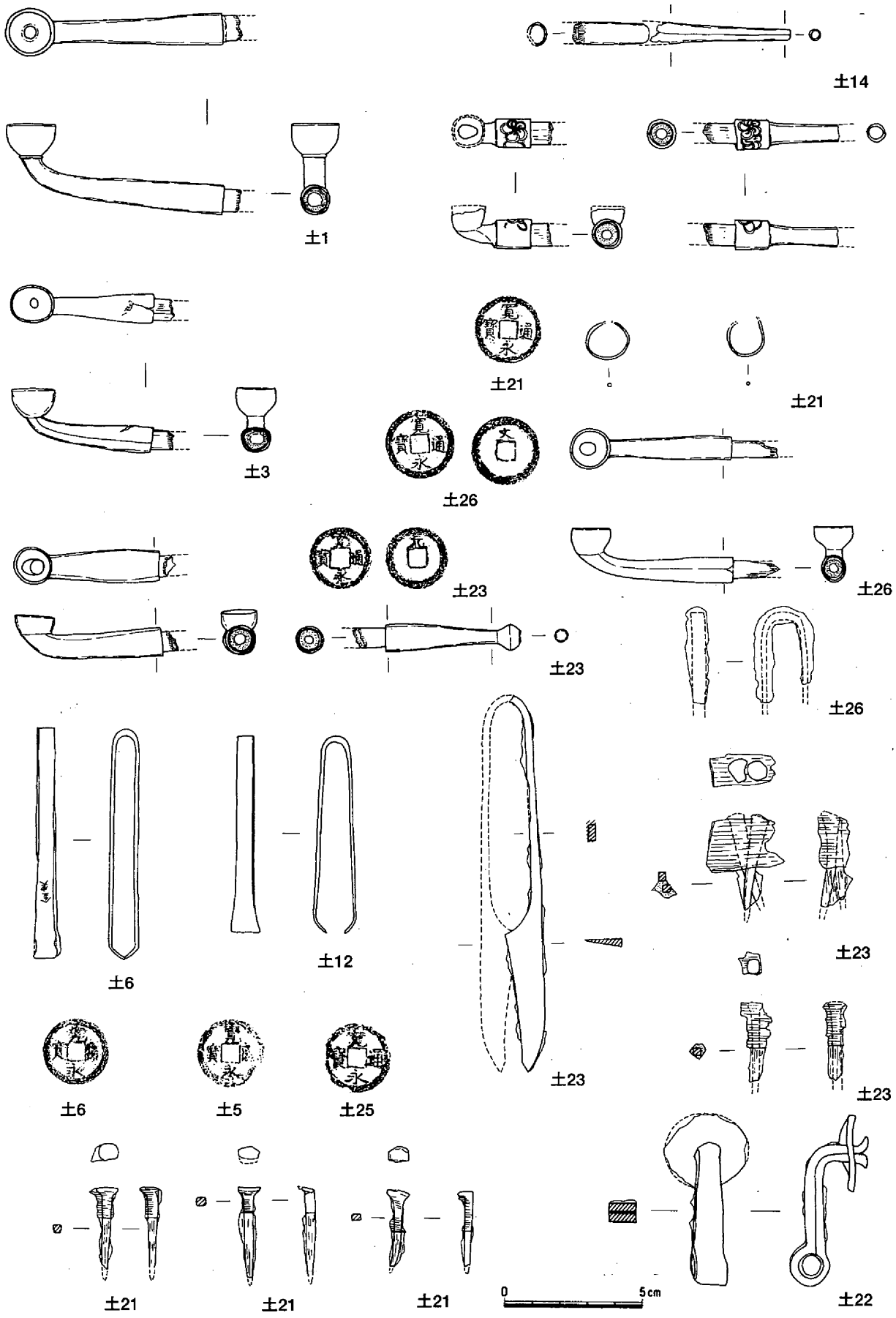
表－１　水神ケ峪遺跡出土玉類一覧表

挿入番号	実測番号	長　さ	直　径	孔　径	重　さ	色　　調
1	46	3.7	4.5	1.2	0.11	半透明
2	15	3.6	4.4	1.1	0.12	半透明
3	8	3.4	4.4	1.3	0.10	半透明
4	6	3.3	4.4	1.4	0.09	半透明
5	42	3.1	4.3	1.2	0.08	半透明
6	32	3.2	4.3	1.3	0.08	白色
7	39	3.0	4.3	1.2	0.09	透明黄褐色
8	53	3.2	4.0	1.3	0.06	白色
9	5	3.2	4.0	1.2	0.09	濁白色
10	4	3.1	4.1	1.3	0.08	濁白色
11	28	3.1	4.1	1.2	0.07	半透明
12	44	3.1	4.0	1.3	0.06	白色
13	23	3.0	4.0	1.1	0.09	半透明
14	18	2.9	4.1	1.5	0.08	半透明
15	41	2.9	4.1	1.2	0.08	白色
16	34	2.8	4.2	1.0	0.10	半透明
17	31	2.9	4.0	1.3	0.07	白色
18	14	2.8	4.1	1.6	0.08	濁白色
19	56	2.8	4.1	1.4	0.07	半透明
20	1	2.8	4.1	1.2	0.07	白色
21	22	2.6	4.3	1.4	0.09	白色
22	2	3.1	3.7	1.2	0.05	透明
23	3	2.9	3.9	1.4	0.07	濁白色
24	30	2.7	4.1	1.2	0.07	白色
25	47	2.8	3.9	1.1	0.06	白色
26	59	2.8	3.9	1.2	0.06	半透明
27	50	2.8	3.9	1.2	0.07	半透明
28	7	2.7	4.0	1.3	0.07	半透明
29	16	2.7	4.0	1.3	0.07	濁白色
30	27	2.5	4.2	1.4	0.07	黄白色

挿入番号	実測番号	長　さ	直　径	孔　径	重　さ	色　　調
31	52	2.7	3.9	1.3	0.07	半透明
32	55	2.7	3.9	1.2	0.06	半透明
33	29	2.7	3.9	1.2	0.06	半透明
34	43	2.6	4.0	1.2	0.07	白色
35	12	2.6	4.0	1.2	0.06	半透明
36	20	2.5	4.1	1.4	0.06	濁白色
37	49	2.8	3.7	1.3	0.06	白色
38	37	2.7	3.8	1.1	0.05	白色
39	51	2.6	3.9	1.5	0.06	半透明
40	40	2.6	3.9	1.3	0.05	黄白色
41	54	2.5	4.0	1.4	0.07	白色
42	26	2.5	4.0	1.2	0.07	白色
43	48	2.7	3.7	1.1	0.05	白色
44	25	2.6	3.8	1.3	0.05	白色
45	19	2.5	3.9	1.3	0.05	半透明
46	17	2.4	4.0	1.2	0.07	白色
47	13	2.3	4.1	1.5	0.06	濁白色
48	10	2.2	4.1	1.4	0.08	濁白色
49	45	2.5	3.7	1.2	0.05	白色
50	24	2.4	3.8	1.4	0.05	濁白色
51	58	2.4	3.8	1.3	0.06	白色
52	38	2.4	3.8	1.2	0.05	黄白色
53	35	2.5	3.6	1.1	0.05	白色
54	9	2.4	3.7	1.2	0.06	白色
55	33	2.3	3.8	1.3	0.06	白色
56	21	2.1	4.0	1.3	0.05	白色
57	57	2.4	3.6	1.2	0.05	白色
58	11	2.2	3.7	1.5	0.02	白色
59	36	1.9	3.4	1.3	0.03	白色



第29図　土壙墓12出土数珠玉（1／1）


土14
土1
土21
土21
土3
土26
土23
土26
土23
土26
土12
土6
土23
土6
土5
土25
土23
土21
土21
土21
0
5cm
土22

第30図　出土遺物（1／2）

第３節　小　　結

本遺跡の墓石と下層に検出した土壙墓は、位置的にも数的にもずれていた。しかし、おおむね４か所のまとまりが認められる。上層の墓石でグループ分けしてみると、１から６までの第１グループ、９から14までの第２グループ、８と９の第３グループ、そして15と16の第４グループである。これに対応するのが次の土壙墓群である。第１は５から13に、第２は21から26に、第３は１から４と18に、そして第４は15と19・20である。

時期については、出土遺物から考えて近世と思われる。墓碑銘を彫り込む前段階の石塔群である。

（浅倉）

表－２　水神ケ峪遺跡土壙墓一覧表

土壙墓名	長　さ	幅	深　さ	平面形	断面形	出　土　遺　物
土壙墓１	70	60	75	楕円形	Ａｂ	きせる
土壙墓２	70	65	40	楕円形	Ａｂ	
土壙墓３	65	65	56	円形	Ａｂ	きせる
土壙墓４	65	65	52	円形	Ａｂ	
土壙墓５	65	65	42	円形	Ａｂ	銭１
土壙墓６	60	60	85	円形	Ａｂ	銭５　毛抜き
土壙墓７	60	60	58	円形	Ａｂ	
土壙墓８	60	60	76	円形	Ａｂ	
土壙墓９	70	60	90	楕円形	Ａｂ	
土壙墓10	60	50	68	楕円形	Ａｂ	
土壙墓11	75	75	92	円形	Ａｂ	
土壙墓12	70	70	84	円形	Ａｂ	数珠玉　毛抜き
土壙墓13	65	50	25	楕円形	Ａｂ	
土壙墓14	64	55	38	円形	Ａｂ	きせる
土壙墓15	70	135	90	不整形	Ａｂ	
土壙墓16	35	30	18	楕円形	Ａｂ	
土壙墓17	35	30	84	円形	Ａｂ	
土壙墓18	65	50	30	卵形	Ａｂ	
土壙墓19	76	70	100	楕円形	Ａｂ	
土壙墓20	76	65	30	不整形	Ａｂ	
土壙墓21	100	55	44	楕円形	Ａｂ	きせる　銭７　釘
土壙墓22	90	60	80	長方形	Ａｂ	釘　金具
土壙墓23	75	55	60	長方形	Ａｂ	きせる　銭７　釘
土壙墓24	60	50	50	楕円形	Ａｂ	
土壙墓25	58	58	65	円形	Ａｂ	銭３
土壙墓26	65	55	68	楕円形	Ａｂ	きせる　銭10　毛抜き　釘

※平面形は、底面形を表す。
※断面形は、壁面が外傾するものをＡ、垂直なものをＢ、内傾するものをＣとし、底面の中央が窪むものをａ、平坦なものをｂ、中央が盛り上がるものをｃとする。

表－3　水神ケ峪遺跡出土金属器一覧表

No.	器　種	材　質	調査時遺構名	報告書遺構名	時　期	備　　考
1	きせる	銅	No.1土壙	土壙墓1	近世	
2	きせる	銅	No.3土壙	土壙墓3	近世	
3	銭	銅	No.5土壙	土壙墓5	近世	布あり　寛永通寶
4	銭	銅	No.6土壙	土壙墓6	近世	寛永通寶　癒着
5	銭	銅	No.6土壙	土壙墓6	近世	寛永通寶　癒着
6	銭	銅	No.6土壙	土壙墓6	近世	寛永通寶　癒着
7	銭	銅	No.6土壙	土壙墓6	近世	布あり　寛永通寶
8	銭	銅	No.6土壙	土壙墓6	近世	布あり
9	毛抜き	鉄	No.6土壙	土壙墓6	近世	
10	毛抜き	鉄	No.12土壙	土壙墓12	近世	
11	きせる	銅	No.14土壙	土壙墓14	近世	
12	銭	銅	集石A9	土壙墓21	近世	寛永通寶
13	銭	銅	集石A9	土壙墓21	近世	寛永通寶　癒着
14	銭	銅	集石A9	土壙墓21	近世	寛永通寶　癒着
15	銭	銅	集石A9	土壙墓21	近世	寛永通寶
16	銭	銅	集石A9	土壙墓21	近世	寛永通寶
17	銭	銅	集石A9	土壙墓21	近世	寛永通寶
18	銭	銅	集石A9	土壙墓21	近世	
19	きせる	銅	集石A9	土壙墓21	近世	
20	線	銅	集石A9	土壙墓21	近世	
21	釘	鉄	集石A9	土壙墓21	近世	多数
22	釘	鉄	集石B10	土壙墓22	近世	
23	はさみ	鉄	集石C11	土壙墓23	近世	
24	釘	鉄	集石C11	土壙墓23	近世	
25	きせる	銅	集石C11	土壙墓23	近世	
26	銭	銅	集石C11	土壙墓23	近世	寛永通寶　裏「元」　癒着
27	銭	銅	集石C11	土壙墓23	近世	寛永通寶　裏「元」　癒着
28	銭	銅	集石C11	土壙墓23	近世	寛永通寶　癒着
29	銭	銅	集石C11	土壙墓23	近世	寛永通寶　癒着
30	銭	銅	集石C11	土壙墓23	近世	寛永通寶　癒着
31	銭	銅	集石C11	土壙墓23	近世	寛永通寶　癒着
32	銭	銅	集石C11	土壙墓23	近世	寛永通寶　癒着
33	銭	銅	集石E13	土壙墓25	近世	寛永通寶
34	銭	銅	集石E13	土壙墓25	近世	寛永通寶　癒着
35	銭	銅	集石E13	土壙墓25	近世	寛永通寶　癒着
36	銭	銅	集石F14	土壙墓26	近世	寛永通寶　癒着
37	銭	銅	集石F14	土壙墓26	近世	寛永通寶　癒着
38	銭	銅	集石F14	土壙墓26	近世	寛永通寶　裏「文」
39	釘	鉄	集石F14	土壙墓26	近世	
40	銭	銅	集石F14	土壙墓26	近世	寛永通寶　癒着
41	銭	銅	集石F14	土壙墓26	近世	寛永通寶　癒着
42	銭	銅	集石F14	土壙墓26	近世	寛永通寶
43	銭	銅	集石F14	土壙墓26	近世	寛永通寶
44	銭	銅	集石F14	土壙墓26	近世	寛永通寶
45	銭	銅	集石F14	土壙墓26	近世	寛永通寶
46	きせる	銅	集石F14	土壙墓26	近世	
	毛抜き	鉄	集石F14	土壙墓26	近世	
47	銭	銅	集石F14	土壙墓26	近世	
48	?	鉄	集石I17	墓石17	近世	
49	銭	銅	表土	表土	近世	寛永通寶
50	釘	鉄	表土	表土	近世	
51	鉄滓	残滓	表土	表土	近世	

第10章　結　　語

第１節　流通センター建設予定地内に所在した遺跡の変遷について

岡山県北流通センターは、真庭郡久世町大内原・落合町西谷地区（北区域）と久世町中原地区（南区域）に整備することが決定したのであるが、現地踏査による遺跡分布調査やトレンチを掘り下げて遺構確認調査を実施したところ、北区域には遺跡が存在しないことが明らかになった。流通センターの建設予定地内で遺跡が所在したのは、いずれも南区域であった。

南区域は久世町中原地区が大部分の面積を占めていたので、中原地区に確認された遺跡は多く、旦山遺跡、野辺張遺跡、先旦山遺跡、旦山古墳群、奥田古墳、水神ヶ峪遺跡が所在していたが、久世町三崎地区には惣台遺跡が検出されただけである。

旦山遺跡は、久世町の市街地が所在する沖積平野を望む目木川左岸の台地上に位置し、発掘調査に着手する以前から、岡山県北部地域における弥生時代の著名な集落遺跡として周知されていた。ところが今度の岡山県北流通センターの建設に伴う発掘調査によって、縄文時代晩期の深鉢形土器が出土した落とし穴が検出され、旦山遺跡に先人が足跡を残した年代が遡ることが判明した。しかもこの落とし穴は65基も存在することが確認され、平面形は楕円形または長方形になって埋土が火山灰の風化した腐植土である「黒ぼこ」で、底部に逆茂木を埋め込む深い柱穴状の穴を有するものと、平面形は円形を呈して埋土が黒ぼこの下層に堆積している「灰色火山灰」で、底部が尖り底になって柱穴状の穴のないものとが認められた。この形態のみならず内部に存在した土砂が異なる２種類のタイプの落とし穴が、旦山遺跡の発掘調査で切り合っているものを検出し、前者が新しくて後者が古いことを確認した。さらに弥生時代の遺構や遺物については、発掘調査に着手する以前に想像していた以上に、遺跡全体の規模が大きいだけでなく、検出した遺構の密度が濃くて竪穴住居や土壙などの数が多く、出土した土器や石器が膨大な量になるとともに、鉄器や玉類も少なからず認められた。ちなみに旦山遺跡で検出した弥生時代の竪穴住居は、最低でも109軒は存在したことになり、同じ場所で何度も建て替えが行われ、径が10ｍ前後にもなる大型のものも比較的多く認められた。また貯蔵する目的に造られたと思われる土壙は160基にも達するが、掘立柱建物は１棟も検出されなかった。古墳時代になると、古墳は造られているが竪穴住居や土壙などはなく、集落全体が別の地点へ移動していた。古代から中世にかけては、掘立柱建物や土壙が存在するが、遺構は散在的に認められただけであった。

野辺張遺跡は、目木川流域の沖積平野に向かって舌状に張り出した丘陵の頂部が平坦になっていたので、地元の人々が篠向山城に関係した砦跡が存在すると考えていた地点である。発掘調査によって竪穴住居34軒と土壙34基が検出され、弥生時代後期の集落跡であることが判明し、篠向山城が築造された中世の遺構や遺物は何も存在しなかった。竪穴住居には同じ場所に何度も建て替えが行われたものが多く、建て替えが行われるたびに竪穴住居そのものの規模が大きくなるもの以外に、建て替えが行われるたびに竪穴住居そのものの規模が小さくなるものや、建て替えが行われるたびに竪穴住居そ

のものの規模が大きくなっていたものが、途中の段階で突然に竪穴住居の規模が小さくなるものも認められた。また貯蔵穴の機能を有していたと推定される土壙には、底部の壁面に沿った場所に3か所の柱穴が存在するものや、底部の中央部に上屋構造を支える柱が立っていたと思われる柱穴が認められるものを検出したが、急勾配の斜面に位置して底部まで深かった土壙については、雨水を処理する上屋構造がどのようになっていたのか、理解することができなかった。この野辺張遺跡では、江戸時代になって2基の近世土壙墓が造られていたが、それ以降は遺構が存在しないのである。

先旦山遺跡では、畑地で検出した弥生時代後期に属する9軒の竪穴住居と5基の土壙が、周囲を排水溝と思われる溝に囲まれていた。溝に囲まれた中心部分の6軒の竪穴住居は、中央部を横断する土層断面を精査したところ、同じ場所で何度も建て替えが行われるたびに、竪穴住居そのものの規模が小さくなっていた。古墳時代後期になると、竪穴住居のみならず掘立柱建物や土壙も造られていた。ところで丘陵の尾根上で検出した弥生時代後期と古墳時代後期に属する2軒の大型の竪穴住居は、西方向に展開する久世町内の沖積平野を望むことができる地点に所在し、竪穴住居そのものの規模が大きくて単独で確認されたから、それぞれの時代における集落の見張台のような役割を果たしていたのではなかろうか。9世紀前葉の時期と推定される土師器や須恵器が、鉄製品や鉄滓と混在して多く出土した。遺構の存在は確認できなかったものの、周辺部分に平安時代の鉄生産に関係した工房のようなものがあったのかもしれない。江戸時代になると、大型の掘立柱建物や土壙が造られていた。大型の掘立柱建物に近接して検出された2基の土壙は、建物に付属する便所ではないかと推定された。丘陵上に検出した9基の土壙は近世土壙墓で、肥前陶磁器とともに寛永通寶や煙管などが出土した。

旦山古墳群は、方墳3基と円墳2基からなる古墳群で、目木川流域の沖積平野に向かって突き出した尾根上に所在した。1号墳は1辺12mの方墳で、木棺直葬と思われる埋葬施設が確認され、河原石を用いた葺石が存在した。2号墳は1辺10mの方墳で、埋葬施設は削平されて残存しなかった。3号墳は径が17mの円墳で、埋葬施設は箱式石棺であるが、盗掘を受けて石材が存在しなかった。墳端の周溝内から、鉄鏃がまとまって出土した。径が10mの円墳である4号墳は、河原石を使用した無袖の横穴式石室を有し、須恵器や鉄器が出土した。1辺が9mの方墳の5号墳は、埋葬施設がやや大きい箱式石棺で、遺物は出土しなかった。各古墳が造られた時期については、出土した須恵器から、4号墳が7世紀前葉から中葉と推定され、それ以外の4基の古墳は、3号墳の鉄鏃の形態などから、5世紀中葉前後になるのではなかろうか。

奥田古墳は、丘陵の尾根上に単独に所在した径11mの円墳である。埋葬施設は右片袖を有する横穴式石室で、天井石は1枚も残存しなかった。石室の計測値によると、玄室長350cm、羨道長350cmの全長700cmで、玄室と羨道の長さが1：1の比率になっていた。玄室の幅は、奥壁部分で160cm、羨道に面した部分で140cmであった。羨道の幅は、玄室に面した部分で90cm、石室入口部分で100cmになっていた。石室の床面からの高さは、奥壁部分で180cmかそれ以上になり、玄室の床面はほぼ水平であるが、羨道の床面は入口に向かって緩やかに傾斜していた。出土遺物としては、須恵器以外に鉄器や装身具が認められ、大刀の鍔に「波状C字状文」の銀象嵌を施した珍しいものも存在する。石室の床面に近い部分は撹乱を受けておらず、埋葬された当時のままの状態で保持され、埋葬の方法や遺体の数なども特定できる貴重な資料を得ることができた。

水神ヶ峪遺跡は、目木川流域の沖積平野から東方向へ遠く離れた丘陵の斜面に所在し、近世土壙墓が26基も検出された。地形の等高線に沿って墓石が3条または4条に列をなして並び、その墓石の下

には断面径が「U」字形を呈する土壙墓が存在した。遺物が伴うものは1基だけで、59点にもおよぶ数珠玉が出土した。水神ヶ峪遺跡で検出した近世土壙墓は、土壙墓そのものの形態や立地状況から、先旦山遺跡で検出した近世土壙墓よりも著しく新しい時期に属すると思われた。

三崎地区に所在した唯一の遺跡である惣台遺跡は、目木川流域の沖積平野を望む丘陵の斜面に所在し、竪穴住居25軒、段状遺構30基、掘立柱建物4棟、土壙25基、溝4条を検出したが、土壙と溝を除くほとんどの遺構が複雑に重なり合っていた。土壙のうち3基は、縄文時代晩期の時期と推定される落とし穴で、底部に柱穴状の窪みが認められ、サヌカイト製で抉りの深い石鏃が出土した。弥生時代になると、中期末葉の時期から竪穴住居、段状遺構、土壙などを造りはじめ、弥生時代後期全般にわたって集落を形成していた。竪穴住居には、同じ場所で何度も建て替えが行われていたものと、1軒の竪穴住居が単独で検出されたものが認められた。貯蔵穴と思われる土壙は、断面形が袋状を呈していたものが多く、西方向へ寄った地点の尾根状に少し高くなった狭い部分に、集中して存在した。古墳時代に入ると前期の段階には集落が消滅するが、後期の6世紀後葉には方形で4本柱を有する竪穴住居や4棟の掘立柱建物が造られ、再び集落が誕生していた。竪穴住居の中には、造り付けのカマドが存在して、端部に人頭大の石が並べられていたものも認められた。段状遺構では、土師器の大型カマドを含む多くの土器が出土したものを検出している。この遺構は、途中で竪穴住居を造ることを断念して、その中へ不用になった土器を捨てていたと思われた。4棟の掘立柱建物のうち1棟は、桁行2間、梁行2間の総柱の構造になっていた。古墳時代後期以降の時期に属する遺構は存在しなかったから、6世紀後葉に再び誕生した集落は、短期間で消滅していたのである。

このような各遺跡の調査結果に基づいて、岡山県北流通センター建設予定地内に所在した遺跡の変遷について考えてみたい。

岡山県北部の真庭郡久世町中原地区と三崎地区にまたがって建設される岡山県北流通センター南区域予定地に、人間が初めて足跡を残したのは、縄文時代の時期にまで遡ることが確認された。旦山遺跡と惣台遺跡で多くの落とし穴が検出され、その落とし穴の埋土の中から縄文時代晩期の深鉢形土器や抉りの深い石鏃が出土したのである。

弥生時代中期末葉の時期になると、旦山遺跡と惣台遺跡に竪穴住居が造られ、集落が形成されるようになる。弥生時代後期前葉には、竪穴住居のみならず段状遺構や貯蔵穴として使ったと思われる土壙が数多く出現し、集落が最盛期を迎えることになる。旦山遺跡と惣台遺跡だけでなく、野辺張遺跡や先旦山遺跡にも集落が拡大し、野辺張遺跡を除く3遺跡は弥生時代後期後葉まで継続している。

古墳時代になると、突如として集落が消滅している。5世紀中葉前後には、旦山古墳群に4基の古墳が築造される。また古墳時代後期の6世紀後葉の時期には、惣台遺跡と先旦山遺跡に竪穴住居や土壙が造られ、再び集落が誕生している。その集落で生活を営んでいた人達の墓が、奥田古墳と旦山4号墳の横穴式石室を有する古墳ではないかと推定される。

古代の平安時代になると、旦山遺跡に2棟の掘立柱建物が建てられている。また先旦山遺跡では、9世紀前葉の時期に属する土師器や須恵器が、鉄製品や鉄滓に混在して数多く出土している。

中世に入ると、旦山遺跡に4棟の掘立柱建物と6基の土壙が存在し、備前焼などが出土している。

17世紀中葉の近世になると、先旦山遺跡に9基の近世土壙墓と1棟の大型の掘立柱建物が造られている。さらに野辺張遺跡にも2基の近世土壙墓が確認され、相当の年代を経てから、地表面に等高線に沿って帯状に並ぶ墓石が伴う26基の近世土壙墓が、水神ヶ峪遺跡に出現しているのである。

第２節　縄文時代の遺構と遺物について

今度の岡山県北流通センターの建設に伴う発掘調査によって検出した縄文時代の遺構は、旦山遺跡と惣台遺跡で確認された落とし穴だけである。

惣台遺跡には３基が存在したにすぎないが、旦山遺跡では65基にもおよぶ多くのものが発見されたのである。しかも旦山遺跡の落とし穴には、平面形は楕円形または長方形になって埋土が火山灰の風化した腐植土である「黒ぼこ」で、底部に逆茂木を埋め込む深い柱穴状の穴を有するものと、平面形は円形を呈して埋土が黒ぼこの下層に堆積している「灰色火山灰」で、底部が尖り底になって柱穴状の穴がないものとの、２種類のタイプが存在することが確認され、前者が33基、後者が24基、どちらのタイプにも属さないものが８基となっていた。旦山遺跡では、２か所の地点で２種類のタイプの落とし穴が切り合っているのが認められ、どちらも前者が後者を切っていたので、前者が新しくて後者が古いことが判明した。

前者の落とし穴の埋土である黒ぼこからは、３点の深鉢形土器の破片が出土している。これらの土器片は、突帯文土器が出現する直前の資料として著名な、上房郡北房町上水田に所在した谷尻遺跡のNo.130土壙内から出土した一括土器[1]に酷似しているから、縄文時代晩期の中葉に属すると思われる。前者の落とし穴の時期が縄文時代晩期中葉であるならば、それに切られている後者の落とし穴は、縄文時代晩期中葉と同時期かそれよりも遡る古い時期が考えられる。

ところが旦山遺跡では、後者の落とし穴が24基も検出されたにもかかわらず、いずれも遺物は共伴していない。惣台遺跡に存在した後者のタイプと思われる落とし穴から、抉りの深いサヌカイト製の石鏃が１点だけ出土しているが、弥生時代には見られない形態の石鏃であると考えられるだけで、この石鏃が製作された確実な時期を特定することができない。

旦山遺跡の遺構に伴わない縄文土器として、３点が図示されている（第３章の第75図）。これらの土器片はいずれも深鉢形土器の口縁部で、同心円の沈線文や磨消縄文が施されているから、中津式土器の直前の時期に属する倉敷市矢部に所在した矢部奥田遺跡（矢部貝塚）のⅥ類の土器[2]や、備前市西片上の岡山県立備前高等学校の校内に所在する長縄手遺跡から出土した縄文土器[3]に酷似している。これらの両遺跡から出土した縄文土器は、縄文時代中期末葉の時期が与えられているから、旦山遺跡で検出した後者の落とし穴の時期が、縄文時代中期末葉まで遡って古くなる可能性は考えられる。

一方、中国横断自動車道の建設に伴って発掘調査が行われた蒜山地域の中山西遺跡、城山東遺跡、下郷原和田遺跡、下郷原田代遺跡でも、落とし穴が検出されて考察が試みられている。これらの遺跡に存在した落とし穴は、いずれも出土遺物がなかったので時期が不明であったが、落とし穴の内部の埋土から４種類のタイプに分類し、最も古い段階に位置するタイプのものを、縄文時代の枠のなかに留まるのか、あるいは遡って岩宿時代（旧石器時代）になるのか、判断しがたいとしている[4]。

この旦山遺跡の発掘調査によって、埋土が黒ぼこで底部に逆茂木を埋め込む深い柱穴状の穴を有する落とし穴の時期が、出土した土器によって縄文時代晩期中葉であることが判明した。それより古い埋土が火山灰で底部が尖り底になった落とし穴は、蒜山地域の最も古い段階に位置するタイプと同じもので、旧石器時代の遺跡が数多く確認されている中国山地の周辺では、旧石器時代まで遡っても不思議ではないが、久世町や津山市の地域では、縄文時代を越えて古くなることはないであろう。

第３節　弥生時代の遺構と遺物について

弥生時代の遺構としては、竪穴住居、段遺遺構、土壙などが存在するが、建物は１棟も検出できなかった。このことは、久世町近隣の岡山県北部地域における弥生時代の調査例を参考にすれば、岡山県北流通センター建設予定地内の弥生時代に属する遺跡に建物が造られていなかったのではなく、種々の不利な条件が重なって偶然に見つけられなかったと考えている。

先旦山遺跡の１区に所在した、周囲を排水溝と思われる溝によって囲まれた９軒の竪穴住居と５基の土壙の検出状態は、近藤義郎氏が「単位集団」[5]という集落分析の概念を提示される切っ掛けになった著名な遺跡で、竪穴住居や掘立柱建物が復元されて市民の憩いの場となっている、津山市沼の沼遺跡[6]を想起させる。先旦山遺跡には掘立柱建物は検出されなかったが、溝に囲まれた内部に何軒の竪穴住居が同時期に存在したのであろうか。重複した竪穴住居１～６の６軒の竪穴住居と竪穴住居７・８の２軒の竪穴住居は、検出した位置が極めて近接していたから、同時期に２軒の竪穴住居が存在することは不可能である。また竪穴住居７・８の２軒の竪穴住居と建て替えが行われていない竪穴住居９も、検出した位置が極めて近接していたから、同時期に２軒の竪穴住居が存在することは不可能である。それでは２軒の竪穴住居が存在した可能性があるのは、竪穴住居９が機能していた時に、竪穴住居１～６の地点に竪穴住居が建てられていた時だけということになる。このように考えるならば、溝に囲まれた広い範囲に竪穴住居が存在したのはせいぜい１軒だけで、偶然に２軒が存在した可能性があるのは、竪穴住居９が機能していた弥生時代後期前葉の短期間だけだということになる。

岡山県北流通センター建設予定地内の遺跡で検出した弥生時代に属する竪穴住居には、同じ場所に何度も建て替えが行われていたものが多く確認され、１軒の竪穴住居が単独で存在したのは極めて少なかった。重複していた竪穴住居を精査したところ、野辺張遺跡の竪穴住居７～９や竪穴住居17～19のように、建て替えが行われるたびに竪穴住居そのものの規模が大きくなるもの以外に、野辺張遺跡の竪穴住居23～28や先旦山遺跡の竪穴住居１～６のように、建て替えが行われるたびに竪穴住居そのものの規模が小さくなるものや、野辺張遺跡の竪穴住居29～33のように、建て替えが行われるたびに竪穴住居そのものの規模が大きくなっていたものが、途中の段階で突然に竪穴住居の規模が小さくなるものも認められた。なお１軒の竪穴住居が単独で存在したのは、惣台遺跡の竪穴住居４～６、野辺張遺跡の竪穴住居22・34、先旦山遺跡の竪穴住居９・12などがある。

竪穴住居と貯蔵穴に使用したと推定される土壙の分布状況を見ると、竪穴住居と土壙が近接して存在していたものと、竪穴住居と土壙が離れた地点に検出したものとが認められた。前者は旦山遺跡、野辺張遺跡、先旦山遺跡で、久世町樫西に所在した上野遺跡[7]に類例を求めることができる。野辺張遺跡の竪穴住居７～９の３軒の竪穴住居には、近接した地点に土壙９～11の３基の土壙が存在し、それぞれの遺構から出土した土器の観察結果などから、竪穴住居７に伴う貯蔵穴が土壙11、竪穴住居８に伴う貯蔵穴が土壙10、竪穴住居９に伴う貯蔵穴が土壙９にそれぞれなるのではないかと推定された。旦山遺跡と野辺張遺跡は約100ｍの近距離にあって、両遺跡からそれぞれの遺跡を眺望することは可能な位置である。発掘調査によって野辺張遺跡は、弥生時代後期前葉の短期間に竪穴住居や土壙が造られた集落遺跡であることが判明している。したがって野辺張遺跡は、旦山遺跡が最盛期を迎えた弥生時代後期前葉の時期に、旦山遺跡に新しく竪穴住居や土壙を造るスペースがなくなったために、旦

山遺跡から移住してきた人々によって形成されたのではないかと思われた。後者は惣台遺跡だけで、久世町と境を接する久米町戸脇に所在した釜田遺跡[8]の遺構分布に酷似している。惣台遺跡の土壙は、調査範囲の西方向へ寄った尾根状を呈して少し高い部分に集中して存在したのである。

気掛かりな遺構として、野辺張遺跡の竪穴住居23～28や土壙１・26がある。これらの竪穴住居や土壙は急勾配の斜面に造られていたため、残存していた壁体や壁面の立ち上がりが異状に高くなっていた。だから雨が降るたびに、竪穴住居や土壙の内部へ雨水が斜面に沿って流入するのは必至で、その雨水を処理する上屋構造がどのようになっていたのか、理解することができなかった。

先旦山遺跡の２区の丘陵上で検出した竪穴住居12からは、西方向に展開する久世町内の沖積平野を広く望むことができる。この竪穴住居は規模が比較的大きくて、周辺に同時期の遺構が存在しないことから、竪穴住居12は集落における見張台の役割を果たしていたのではなかろうか。

竪穴住居の規模について考えてみると、旦山遺跡や惣台遺跡には、弥生時代中期末葉に遡る竪穴住居が検出されているが、いずれも径が比較的小さいものばかりである。弥生時代後期前葉の時期になると、先旦山遺跡の１区に排水溝と思われる溝に囲まれた、長径10.60ｍ、短径9.80ｍの楕円形に近い形態を呈する大型の竪穴住居が出現している。この竪穴住居は建て替えが行われるたびに規模が小さくなり、同じ場所に弥生時代後期後葉の時期まで繰り返し竪穴住居が造られていた。惣台遺跡や野辺張遺跡についても先旦山遺跡と同じ状況で、弥生時代後期前葉の時期になって、遺跡範囲のほぼ中央部に大型の竪穴住居が構築されているのである。ところが、旦山遺跡の調査結果は異なっていた。すなわち、弥生時代後期前葉の段階では、弥生時代中期末葉と同様に竪穴住居の規模が比較的小さいが、弥生時代後期中葉から後葉にかけての時期になってから、数多くの大型の竪穴住居が出現し、同じ場所で何度も建て替えが行われていたのである。

竪穴住居の構造についても、少しだけ記してみたい。旦山遺跡の竪穴住居26や野辺張遺跡の竪穴住居31のような大型の竪穴住居では、柱構造が９本柱または10本柱になって、中央穴の周囲に上屋を支えると推定される小規模な４か所の柱穴が存在した。中型や小型の竪穴住居になると、旦山遺跡の竪穴住居１や惣台遺跡の竪穴住居５のように、柱構造が４本柱または６本柱になって、中央穴を挟んだ２か所に小規模な柱穴を有するものが認められた。旦山遺跡の竪穴住居36や竪穴住居30のような小型の竪穴住居では、柱構造が２本柱で中央穴が存在しないものや、竪穴住居の床面に柱穴や中央穴がないものも検出された。また惣台遺跡の竪穴住居10・16や野辺張遺跡の竪穴住居20・34のように、丘陵緩斜面に造られた竪穴住居では、地形の高い部分にテラスを有するものも確認した。

出土遺物の弥生土器は、遺構に伴って比較的多く採集されたものの、完形品で全体の器形を把握できるものは極めて少なかった。また完形品の弥生土器でも器表面の磨滅が著しく、調整手法を観察することが困難であった。圧倒的に多いのは弥生時代後期前葉に属するもので、弥生時代中期末葉や後期中葉以降の弥生土器は著しく少なかったことは事実であり、山陰地方の影響を受けて土器の形態が変化するのは、弥生時代後期中葉になってからであるという印象を受けた。

出土遺物で注目されるのは、旦山遺跡の比較的大型の竪穴住居から出土した、鉄鏃や鉇などの鉄器と碧玉製管玉やガラス製小玉の装身具である。鉄器の１点だけが偶然に発見されることはあっても、竪穴住居19や竪穴住居35のように複数の点数が出土するのは珍しいことである。竪穴住居７では鉄鏃と石鏃が共伴しているから、武器の石器から鉄器への過渡期の様相を呈していると思われた。大型の竪穴住居から出土した装身具は、そこに居住する人間の優位性を物語るシンボルなのかもしれない。

第４節　古墳時代の遺構と遺物について

古墳時代の遺構としては、惣台遺跡や先旦山遺跡の集落跡で検出した竪穴住居、段状遺構、掘立柱建物、土壙、溝以外に、旦山古墳群に所在した５基の古墳と奥田古墳がある。旦山遺跡においては、弥生時代中期末葉から後期後葉にかけて栄えていた集落が、継続して維持されることなく突如として消滅し、古墳時代の遺構は何も存在しなかった。

惣台遺跡や先旦山遺跡で検出した古墳時代後期の時期の竪穴住居では、平面形が方形または長方形を呈し、柱構造は４本柱で、カマドを有しないのが一般的である。ところが、惣台遺跡の竪穴住居19の形態は、北西方向に面した壁面に造り付けのカマドが存在した。検出したカマドの平面形は楕円形に近い形で、西側端部には人頭大の石が並べられ、カマドの中心部は「Ｕ」字形に浅く窪んで、赤褐色の焼土の上面に炭化物を多く含んだ黒褐色土が堆積していた。さらにこの竪穴住居の床面中央部には、焼土に覆われた浅い柱穴状の窪みも認められ、特殊な構造になっていた。

先旦山遺跡の２区の丘陵上には、弥生時代後期前葉に属する竪穴住居の窪地を利用して、比較的大きな竪穴住居17が造られていた。この竪穴住居が所在した丘陵上からは、西方向に展開する久世町内の沖積平野を広く望むことができ、周辺に同時期の遺構が存在しないことから、竪穴住居17は集落における見張台の役割を果たしていたのではなかろうか。

惣台遺跡で検出した段状遺構30は、地形の低い北東方向を除いて「Ｃ」字形に似た形態の壁体が確認されたが、柱穴や壁体溝は存在しなかった。この段状遺構の床面は、約半分の範囲が黒色を呈する軟弱な火山灰になっていたため、竪穴住居を造ろうと思って地山を掘り下げたものの、床面が不安定だったから、途中で竪穴住居を造ることを断念したのではないかと考えられた。なおこの段状遺構からは、多くの土師器や須恵器が出土したが、６世紀後葉の時期に属する良好な一括資料である。

古墳時代の掘立柱建物は、惣台遺跡で４棟が検出されたが、いずれも２間×２間の小規模な形態のもので、そのうち１棟は総柱の掘立柱建物になっていた。

古墳時代後期の時期と思われる土壙で特異なものに、惣台遺跡に存在した３基の土壙がある。土壙23と土壙24は、断面形が浅い「Ｕ」字形を呈して全体に火を受け、底部には炭化物が堆積していた。また土壙25は、平面形が長方形で断面形が逆台形を呈し、側面は火を受けて赤褐色になり、内部には炭化物が認められた。前者は鉄生産に関係した炉跡と推定され、後者は鉄生産に伴って必要な白炭を作るための土壙になると思われた。

旦山古墳群は、方墳３基と円墳２基からなる古墳群で、目木川流域の沖積平野に向かって突き出した丘陵の尾根上や斜面と、旦山遺跡の端部に所在した。１号墳は１辺12ｍの方墳で、木棺直葬と思われる埋葬施設が確認され、河原石を用いた葺石が存在した。２号墳は１辺10ｍの方墳で、埋葬施設は削平されて残存しなかった。３号墳は径が17ｍの円墳で、埋葬施設は箱式石棺であるが、盗掘を受けて石材が存在しなかった。墳端の周溝内から、鉄鏃がまとまって出土した。径が10ｍの円墳である４号墳は、河原石を使用した無袖の横穴式石室を有し、須恵器や鉄器が出土した。１辺が９ｍの方墳である５号墳は、埋葬施設がやや大きい箱式石棺で、遺物は存在しなかった。

この旦山古墳群に所在した５基の古墳について、築造された時期を考えてみたい。丘陵の斜面に存在した４号墳は、埋葬施設が無袖の横穴式石室であるから、古墳の立地状況と埋葬施設が、残る４基

の古墳とは著しく異なっていた。横穴式石室の中から出土した須恵器の形態的特徴や調整手法と、釘の形態的特徴や大きさなどから、4号墳は7世紀前葉から中葉にかけての時期に築造され、遺体の埋葬が行われたのであろう。丘陵の尾根上に所在した3号墳は、埋葬施設が箱式石棺で、周溝内から5世紀中葉前後と思われる鉄鏃が出土した。4号墳を除く旦山古墳群の各古墳と同じように、丘陵の先端部や尾根上に低平な墳丘を有する方墳や円墳が数多く築造されていた古墳群として、米子自動車道久世インターチェンジの建設に伴って発掘調査が実施された中原古墳群[9]がある。この古墳群は旦山古墳群と近接した位置にあり、古墳の埋葬施設はいずれも箱式石棺であった。その調査結果によると、周溝内から出土した初期須恵器の形態的特徴や調整手法から、古墳が造られたのは5世紀中葉とされているから、旦山3号墳の周溝内から出土した鉄鏃の時期と一致する。このようなことから、旦山古墳群の4基の古墳も、5世紀中葉前後の時期に築造されたのではなかろうか。

奥田古墳は、細長い谷地形の奥まった所に位置した低い丘陵の尾根上に、1基だけが単独で存在した。古墳の大きさは径11mの円墳で、埋葬施設は右片袖を有する横穴式石室であったが、天井石は1枚も残存していなかった。石室の計測値によると、玄室長350cm、羨道長350cmの全長700cmで、玄室と羨道の長さが1：1の比率になっていた。玄室の幅は、奥壁部分で160cm、羨道に面した部分で140cmであった。羨道の幅は、玄室に面した部分で90cm、石室入口部分で100cmになっていた。石室の床面からの長さは、奥壁部分で180cmかそれ以上になり、玄室の床面はほぼ水平であったが、羨道の床面は入口に向かって緩やかに傾斜していた。

この奥田古墳は、天井石が1枚も残存しなかったが、偶然にも石室の床面に近い部分は撹乱を受けておらず、埋葬された当時のままの状態で保持され、大量の遺物が出土しただけでなく、埋葬の方法や人数なども特定できる貴重な資料を得ることができ、8体の遺体が埋葬されていたようである。

奥田古墳から出土した遺物の大刀32の鍔には、耳のみに銀象嵌の装飾が施されているものが1点だけ存在した。この鍔は、平面形が倒卵形を呈し、長径7.0cm、短径6.0cm、厚さ0.4cm、重さ39.8gを測り、六窓の透かしが存在する。この透かしは長方形に近い形であるが、形態が不揃いで大きさも若干異なっている。銀象嵌の文様は、波状文を中心として左右交互に「C」字状文が連続している「波状C字状文[10]」と呼ばれるもので、残存状態は極めて良好である。

この奥田古墳出土の文様に似たものを岡山県内の古墳に求めれば、英田郡大原町川戸の川戸2号墳[11]がある。また2条の線の間に「C」字形の文様を並べた「直線C字状文[12]」と呼ばれるものが、岡山市平瀬の平瀬2号墳[13]と岡山市栢谷の西山2号墳[14]から出土している。さらに津山市瓜生原の柳谷古墳[15]と総社市上林の緑山17号墳[16]からは、柄頭をはじめとする各所に複雑な銀象嵌装飾が存在するものも出土している。これらの古墳は、奥田古墳も含めて6世紀後葉から7世紀前葉にかけての時期に属する。

このように奥田古墳から出土した銀象嵌装飾を施した大刀の鍔は、上記した5基の古墳の類例とともに、古墳や出土遺物を研究するうえで、非常に重要な資料になると思われる。

奥田古墳から出土した12～17の6点の須恵器は、口径や器高が極端に小さい。これらはいずれも杯身として図示したが、本来は杯蓋になるのかもしれない。この機種とセットになる身または蓋が見当たらなかったので、容器として副葬されていた使用目的を考慮し、全体の器形は蓋の可能性が強いものの、あえて身にしたのであるが、直口壺23や甕24のようにミニチュア品になるのかもしれない。

なお奥田古墳が所在した地点からは、惣台遺跡と先旦山遺跡を望むことができるので、両遺跡に住んでいた人々が、奥田古墳に埋葬された可能性は強いと考える。

第５節　古代の遺構と遺物について

古代に属する遺構としては、旦山遺跡で検出した建物１と建物２がある。

建物１は、３間×２間のほぼ正方形に近い形態を呈する特殊な構造の掘立柱建物で、内部の２か所に側面の柱穴よりもやや小規模な柱穴が確認され、貼付高台を有する須恵器の杯身が出土している。また建物２は、３間×２間の長方形の形態を呈する掘立柱建物で、側柱だけの簡単な構造であった。この２棟の建物は約85ｍも離れた位置に存在し、棟方向も異なっていたので、個別に時期が異なって造られたものであると判断した。

旦山遺跡の西方向約1500ｍの地点には、岡山県北部地域で最古の白鳳時代に建立された五反廃寺[17]があり、北西方向約100ｍの地点には、10数点の墨書土器とともに陶製円面硯や獣足壺の脚部が出土して、郡衙推定地にされている西口遺跡[18]が存在する。これらの遺跡は旦山遺跡に近い位置で、旦山遺跡から望むことができるから、その関係が注目される。

先旦山遺跡の１区に位置する調査範囲の南端部分では、弥生時代後期に属する竪穴住居１から竪穴住居６までの６軒の竪穴住居が所在した地点の上面より、９世紀前葉の平安時代の時期と思われる比較的多くの土師器や須恵器の土器片が、鉄滓のみならず各種類の鉄製品や土錘に混在して出土した。土師器の中には、１点だけであるが耳皿が採集されている。耳皿は「箸置き」に使われるものであるから、先旦山遺跡で日常の食生活が営まれていたのは明らかである。そのために、周辺部分の地形が高くなった広い範囲を精査したが、遺構は何も確認できなかった。９世紀前葉の時期には、近接した地域のどこかに、平安時代の鉄生産に関係した工房のようなものがあったのかもしれない。

ところで、先旦山遺跡から出土した平安時代の土器に酷似したものに、落合町西河内に所在した荒神風呂遺跡[19]の土器がある。溝状遺構から須恵器を主体にして数多くの土器が出土したもので、ヘラ描きの文字を有するものや、先旦山遺跡と同じ内面に格子目のタタキ痕跡が認められる壺の破片も存在する。また中国縦貫自動車道の落合インターチェンジの建設に伴って発掘調査が実施された、落合町下市瀬に所在した下市瀬遺跡[20]では、１棟の瓦葺き礎石建物のみならず数棟の掘立柱建物や１基の井戸が検出され、多くの土器だけでなく木器も出土している。さらに落合町西河内に所在するズリ窯跡[21]出土の資料は、林道を敷設した時に土器片が数多く散布していたものを採集したもので、先旦山遺跡から出土した土器と同時期であるものの、ズリ窯跡で生産された土器が直接に先旦山遺跡へ搬入されたとは断定できない。湯原町豊栄のゴルフ場建設予定地で、内面に格子目のタタキ痕跡を有する壺の破片を採集したという話[22]も聞いているので、先旦山遺跡で出土した土器は、久世町周辺の真庭郡内にズリ窯跡以外の未発見の窯跡が存在して、そこで生産されたものが搬入されたのかもしれないが、土師器の出土量が異常に多いという事実は、気になるところである。

第６節　中世の遺構と遺物について

中世の遺構としては、旦山遺跡で検出した４棟の建物、６基の土壙、１条の溝がある。

そのうち建物５と建物６は、大型の掘立柱建物で近接した位置に検出され、宅地の大規模な造成工事が行われていた。前者は６間×２間の大規模な構造で、柱穴内から鉄釘と明国製の青磁碗の破片が

出土した。後者は5間×2間の建物5に続く大きさで、宋銭や国産陶器片も採集している。残る2棟の建物は2間×1間の小規模なもので、備前焼の破片や土師質土器の小皿が出土している。

6基の土壙の平面形は、長方形や楕円形のみならず不整形なものまである。内部に河原石や炭と灰が存在するものも認められ、備前焼の破片や「永楽通寶」「太平通寶」「熙寧元寶」「天聖元寶」などの古銭が出土したものも確認したが、それらの土壙の性格は不明である。

1条の溝は、建物5と建物6の大型の掘立柱建物の北側に面した地形の高い部分に存在し、陶磁器や鉄釘が出土している。この溝は、大型の掘立柱建物に伴う排水溝であった可能性が強い。

これらの旦山遺跡で検出した遺構は、建物5と建物6の大型の掘立柱建物が近接していたものの、棟方向が異なるので、同時期に存在したとは考えられなかった。また3基の土壙は、大型の掘立柱建物の内部で確認されたから、それらの土壙が大型の掘立柱建物と並存することは不可能である。さらに残る小規模な掘立柱建物や土壙は、広い範囲に散在している状態だったので、中世の時期に旦山遺跡で人間が日常の生活を行って集落が維持されていたかどうか、あまりにも検出された遺構が少ないから、疑問が残るのである。

中世に属する遺構に伴わない遺物として注目されるのは、旦山遺跡から出土した瓦製円盤や火打金以外に、惣台遺跡で採集された勝間田焼の捏鉢や亀山焼の甕がある。

第7節　近世の遺構と遺物について

近世の遺構としては、先旦山遺跡の1区で検出した1棟の建物と2基の土壙、2区の丘陵部に存在した9基の近世土壙墓、野辺張遺跡の2基の近世土壙墓、水神ヶ峪遺跡の墓石を伴う26基の近世土壙墓と4条の溝がある。

先旦山遺跡の1区で検出した1棟の建物は、5間×3間の大型掘立柱建物で、柱穴内から肥前磁器の染付皿と思われる小破片が出土した。2基の土壙は、大型の掘立柱建物に近接した位置に検出されたので、建物に付属する屋外の便所ではないかと考えられたが、小皿や鉄釘などの遺物が出土したものの、土壙の周辺に柱穴などが存在しなかったので、確証は得られなかった。

先旦山遺跡の2区で検出した9基の近世土壙墓は、平面形が楕円形に近いものや隅丸長方形に似たものがあり、出土遺物にも肥前磁器の小坏、肥前陶器の皿と片口、土鈴、寛永通寶、煙管、鉄釘など各種のものが存在した。その中でも肥前磁器の小坏や肥前磁器の皿と片口は、17世紀中葉に属すると推定される。また2枚の寛永通寶の背面には、内郭の上に「文」の1字が鋳込まれているから、この寛永通寶は後西・霊元両天皇の時の年号である寛文年代（1661～1673年）に鋳造されたことが判明している。このような出土遺物から、先旦山遺跡の2区の丘陵上に9基の近世土壙墓が造られたのは、17世紀の中葉から後葉にかけての時期と考えられる。

野辺張遺跡で検出した2基の近世土壙墓は、どちらも内部に人骨片が存在したものの、副葬品が何も出土しなかったから、詳細な造られた時期は不明である。

水神ヶ峪遺跡で検出した26基の近世土壙墓は、地表面に等高線に沿って帯状に並ぶ墓石が伴っており、その配列状況から4グループに分けることが可能であった。出土遺物としては、寛永通寶、毛抜き、煙管、鋏、鉄釘などが認められるが、1基の近世土壙墓の内部に59点の数珠玉が存在した珍しいものも確認された。

今度の岡山県北流通センターの建設に伴う発掘調査では、先旦山遺跡の２区の丘陵上や水神ヶ峪遺跡などで、比較的多くの近世土壙墓を検出した。

近接した地域で、先旦山遺跡や水神ヶ峪遺跡と同じように、近世土壙墓が群集する状態で確認された遺跡として、中国横断自動車道の建設に伴って発掘調査が実施された、久世町目木の木谷遺跡[23]がある。この遺跡で検出された近世土壙墓は、調査範囲の４か所に大きく分散して数基から約70基がまとまって存在した。これらの近世土壙墓が群集していた周辺からは、備前陶器の壺、肥前陶器の皿、瀬戸美濃陶器の皿、中国製白磁の皿、須恵質土器の壺、瓦質土器の羽釜が出土している。備前陶器の壺は、間壁忠彦氏の備前焼編年[24]によるとⅣ期のもので、出土した古いものから新しいものまで15世紀代におさまるであろう。肥前陶器の皿で口縁部が内湾しているものは、天正13年以後に出現する17世紀前後の製品である。端反り状に短く外傾して３か所に胎土目が認められるものも、17世紀前後の製品である[25]。瀬戸美濃陶器の皿は大窯の製品で、16世紀の第３四半期のものである[26]。中国製白磁の皿は、「白磁Ｃ類」と呼ばれて15世紀末葉から17世紀頃に属する[27]。このように木谷遺跡の近世土壙墓群は、出土した遺物から、中世の後葉から近世の前葉にかけての時期に造られたことが知られるのである。

さらに、中国横断自動車道の建設に伴って発掘調査が実施された、上房郡賀陽町上竹に所在した大村遺跡[28]では、広大な面積に集石墓や土壙墓からなる大規模な墳墓群が形成され、備前焼や亀山焼以外に、土師質土器や近世陶磁器などが大量に出土している。これらの数多くの遺物から、大村遺跡は中世中葉の13世紀代から近世末葉の19世紀代までの長期間にわたって、造墓活動が盛んに行なわれたことがわかるのである。

岡山県南部の倉敷市粒江に所在した城が端遺跡[29]でも、調査が実施された範囲に約60基の近世土壙墓が検出され、土師質土器の皿や近世陶磁器以外に、剃刀、鋏、毛抜き、刀子などの遺物や、北宋銭や寛永通寶などの古銭が数多く出土した。この遺跡で検出された近世土壙墓は、いずれも密集した状態で確認され、出土遺物から16世紀代から18世紀代の近世中葉の時期に造られたことが判明している。

水神ヶ峪遺跡で存在した近世土壙墓は、先旦山遺跡の丘陵上で検出したものよりかなり新しい時期に造られたという感触を得ているので、時期の異なる木谷遺跡、大村遺跡、城が端遺跡のそれぞれの調査成果を参考にして、この地域における中世から近世にかけての土壙墓の変遷を概観すれば、以下のようになるのではなかろうか。

14世紀中葉から16世紀中葉にかけての室町時代には、火葬骨が入れられた備前焼の壺や亀山焼の甕が伴う集石墓と、混在した状態で土壙墓が検出されることが多いが、17世紀初頭の江戸時代に入った早期の段階になると、集石墓が消滅して墳墓は土壙墓だけになり、火葬墓から土壙墓への転換が確実に行われている。この墓制の変化がいかなる要因によって生じたのか、明確な回答を見つけることができないが、その当時の社会背景と死生観に基づく思想や慣習が変わったのではないかと思われる。17世紀になれば、数基の土壙墓が不規則に散在した状態のものが存在するが、時代がさらに新しくなると、地形の等高線に沿って帯状に整然と列をなして並ぶ集団墓が形成され、土壙墓の地表面に墓石が伴うものも出現する。そして江戸時代の後半には竿墓も確認されるようになり、集団墓とは離れた位置に隔絶された状態で、造成面を有する大規模なものも造られるのである。　（福田）

註

（１）高畑知功ほか「谷尻遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』11　1976年

（2）高畑知功ほか「矢部奥田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』82　1993年
（3）亀山行雄「岡山県備前市長縄手遺跡」『日本考古学年報』46（1993年度版）1995年
（4）下澤公明「蒜山地域の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』93　1995年
（5）近藤義郎「共同体と単位集団」『考古学研究』第6巻1号　考古学研究会　1959年
（6）近藤義郎・渋谷泰彦編『津山弥生住居址群の研究』津山市・津山郷土館　1957年
（7）山磨康平「上野遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』91　1994年
（8）村上幸雄「釜田遺跡」『稼山遺跡群』1　久米開発事業に伴う文化財調査委員会　1979年
（9）福田正継・山磨康平「中原古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』93　1995年
（10）瀧瀬芳之・野中　仁「埼玉県内出土象嵌遺物の研究―埼玉県の象嵌装大刀―」『研究紀要』第12号　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1996年
（11）宇垣匡雅『川戸古墳群発掘調査報告書』岡山県大原町教育委員会　1995年
（12）註10に同じ。
（13）葛原克人「平瀬古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』83　1993年
（14）福田正継「西山古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』109　1996年
（15）保田義治「柳谷古墳」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第24集　1988年
（16）村上幸雄「緑山17号墳」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』1　1984年
（17）池上　博「五反廃寺」『久世町埋蔵文化財発掘調査報告』2　1997年
（18）松本和男・船津昭雄「久世の夜明け」『久世町史』1975年
（19）平井泰男「荒神風呂遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』76　1990年
（20）新東晃一・田仲満雄「下市瀬遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』3　1973年
（21）森田友子「ズリ窯跡」『西河内遺跡』落合町教育委員会　1986年
（22）岡山県古代吉備文化財センター職員の宇垣匡雅氏のご教示による。
（23）福田正継「木谷古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』93　1995年
（24）間壁忠彦『備前焼』ニュー・サイエンス社　1991年
（25）大橋康二『肥前陶磁』ニュー・サイエンス社　1993年
（26）愛知県陶磁資料館職員の井上喜久男氏のご教示による。
（27）横田賢次郎・森田　勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4　九州歴史資料館　1978年
（28）江見正己・柴田英樹・井上　弘・大橋雅也ほか「大村遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』113　1996年
（29）間壁葭子「倉敷市城が端遺跡」『倉敷考古館研究集報』第18号　1984年

1．旦山遺跡遠景
（篠向山城から）

2．旦山遺跡 1 区
（東から）

3．旦山遺跡 2 区
（東から）

図版２

１．旦山遺跡遠景
（目木橋から）

２．旦山古墳群近景
（旦山遺跡から）

３．目木平野を望む
（旦山遺跡から）

１．土壙15土層断面
（南から）

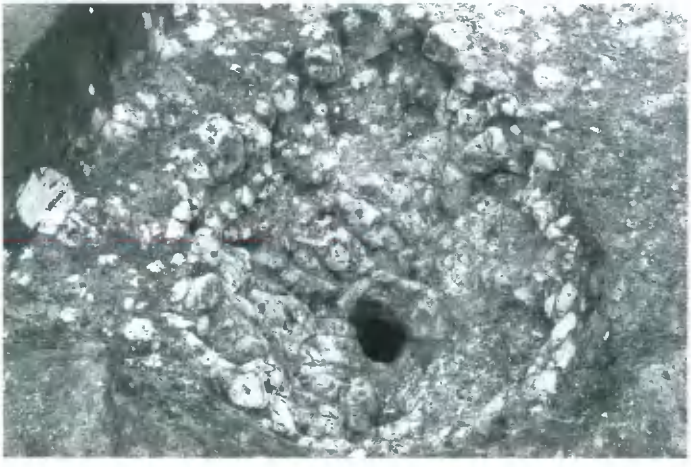
２．土壙15（南から）

３．土壙51土層断面
（西から）

図版 4

1．土壙３（右）
（西から）

2．土壙25（南から）



3．土壙28（東から）

1．土壙 2（北から）

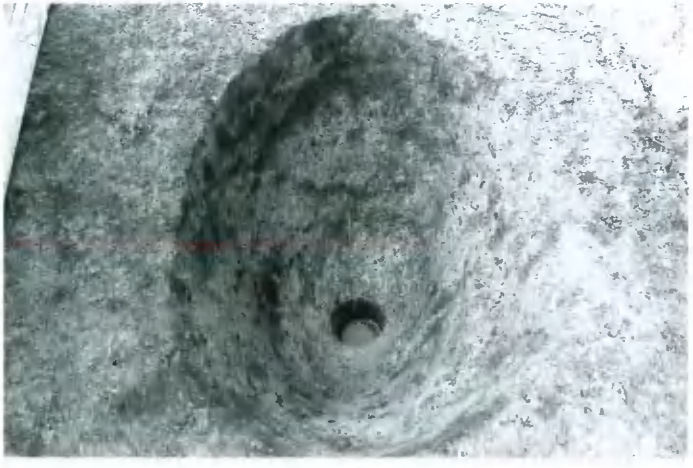
2．土壙35（北から）

3．土壙34（右）
（西から）

図版 6

1．土壙 8（北から）

2．土壙36（東から）



3．土壙44（東から）

1．1区西方
竪穴住居群
（南から）

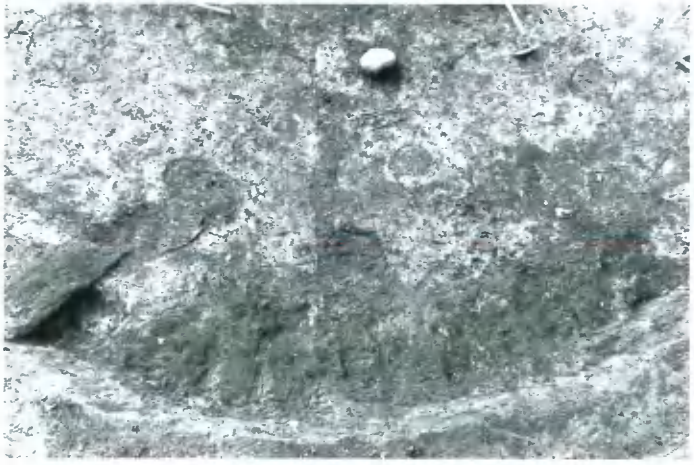
2．1区南方
竪穴住居群
（西から）

3．2区南方
竪穴住居群
（西から）

図版 8

1．焼失竪穴住居28
（北から）

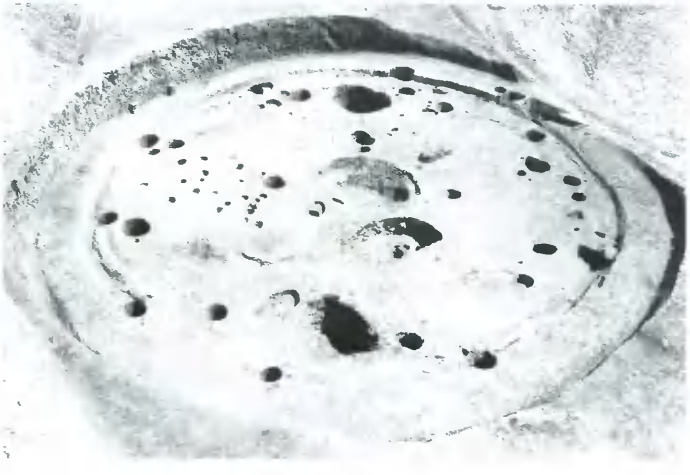
2．焼失竪穴住居26
（北から）



3．焼失竪穴住居20
（西から）

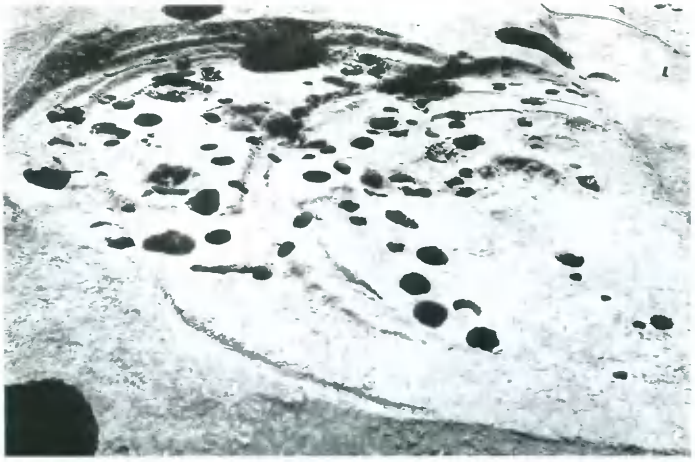
1．竪穴住居 1
（南から）

2．竪穴住居 5
（北から）



3．竪穴住居 7
（西から）

図版10



1．竪穴住居９・14・24（西から）

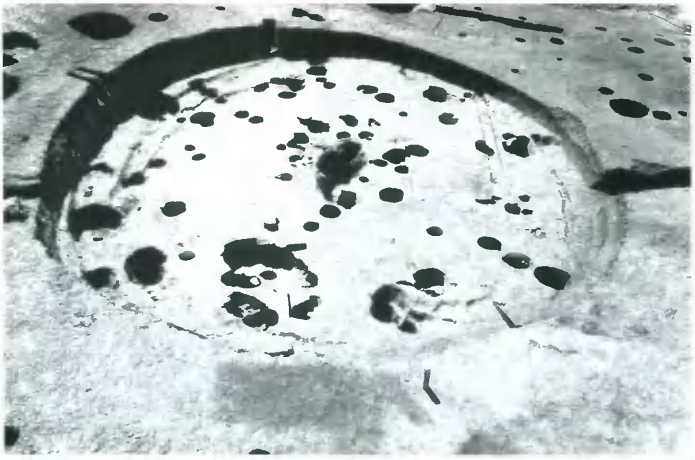
2．竪穴住居８（北から）

3．竪穴住居12（北から）

1．竪穴住居13
（北から）

2．竪穴住居15・17
（北から）

3．竪穴住居18
（南から）

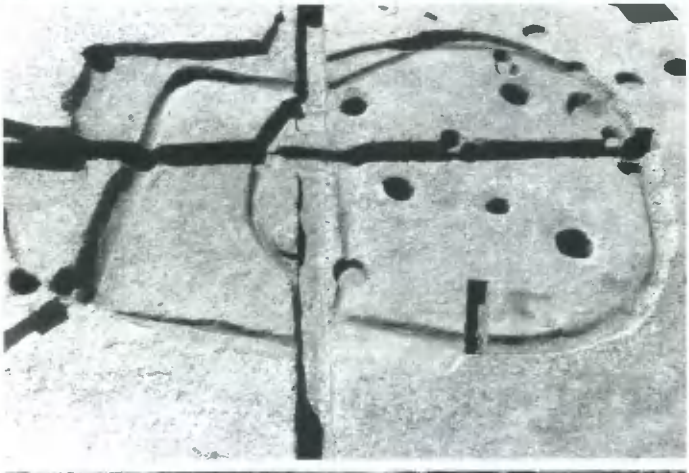


1．竪穴住居19
（北から）

2．竪穴住居20
（北から）

3．竪穴住居21・23
（西から）

1．竪穴住居22
（北から）



2．竪穴住居２・25
（北から）

3．竪穴住居26
（東から）

図版14

1．竪穴住居28・29
（北から）

2．竪穴住居30
（北から）

3．竪穴住居34
（北から）

1．竪穴住居27
（北から）

2．竪穴住居35
（北から）

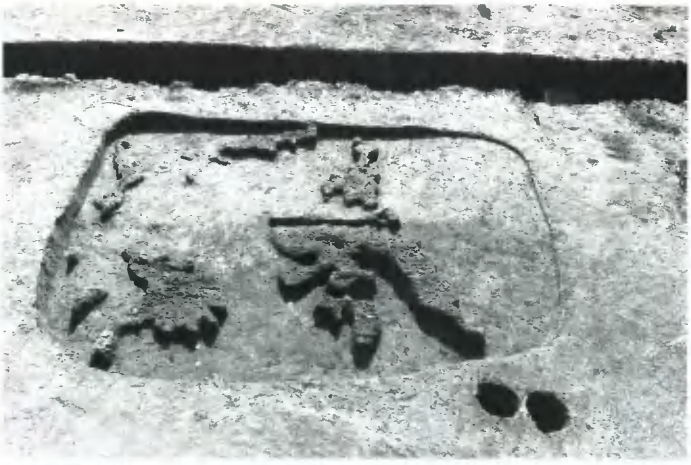
3．竪穴住居37
（北から）

図版16

1．竪穴住居32・33
（北から）

2．竪穴住居36
（北から）

3．段状遺構10
（西から）



1．段状遺構13
（北から）

2．段状遺構11
（北から）

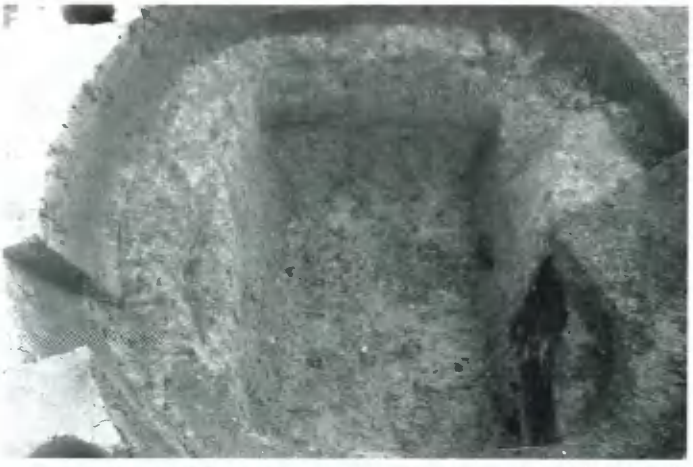
3．段状遺構１・５・
６（北から）

図版18

1．土壙153土層断面
（東から）

2．土壙268土層断面
（東から）

3．土壙286土層断面
（南から）



1．土壙202（北から）

2．土壙125（西から）

3．土壙107・149
（南から）

図版20

1．土壙142（南から）

2．土壙209（東から）

3．土壙201（東から）

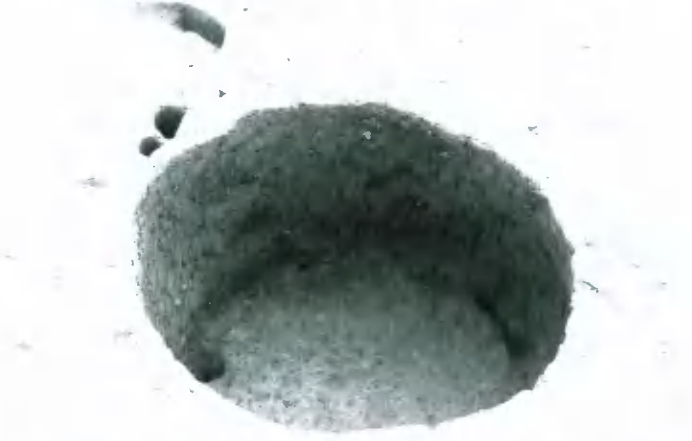
1．土壙240（南から）

2．土壙241（西から）

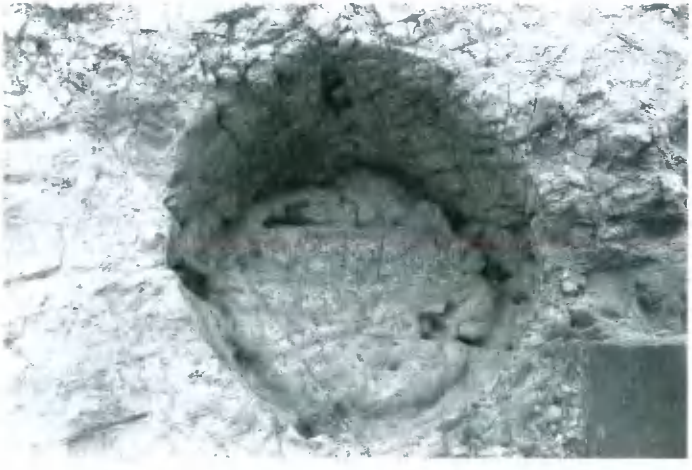
3．土壙128（西から）

図版22

1．掘り道具痕の残る
土壙110（北から）



2．土壙138（東から）



3．土壙133（南から）

1．土壙234（東から）

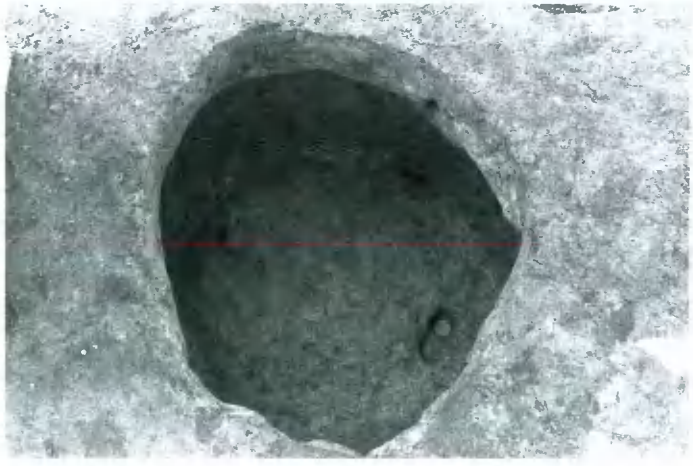
2．土壙286（北東から）

3．土壙308（北西から）

図版24

1．土壙116（南から）

2．土壙207（南から）



3．土壙278（東から）

1．土壙253～255
（西から）

2．土壙257（西から）

3．土壙273（北から）

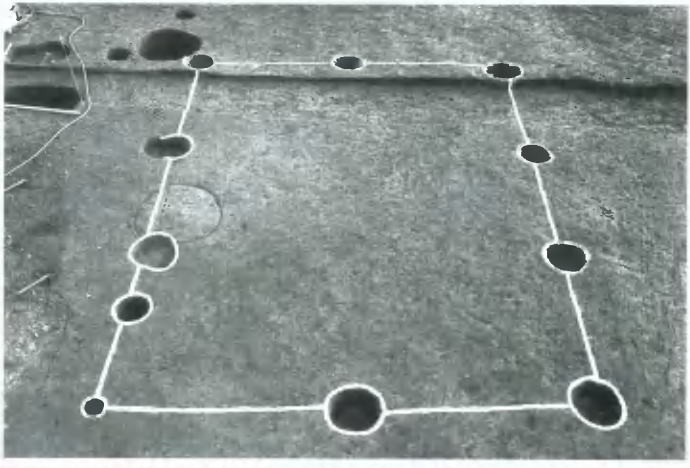
図版26

1．土壙308（東から）

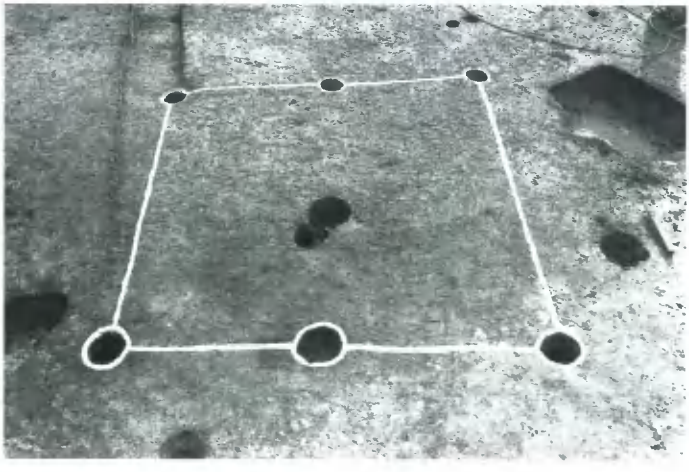
2．土壙308（西から）

3．土壙227（西から）

1．建物４（北から）

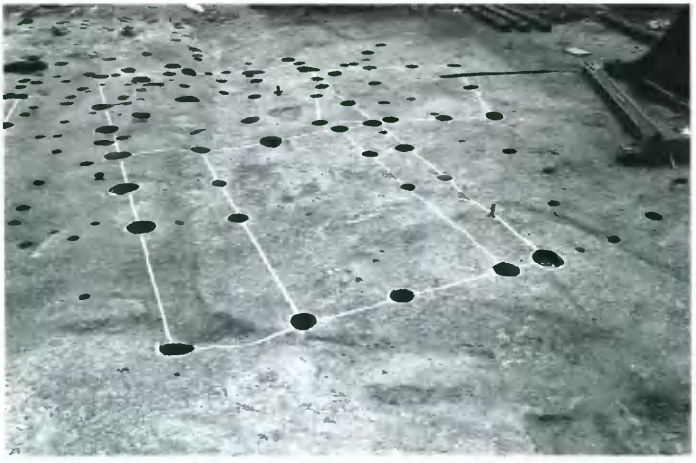


2．建物２（北から）



3．建物３（西から）

図版28



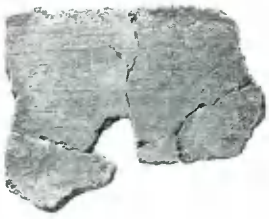
1．建物１・５
（西から）

2．建物１・５・６
（北から）

3．土壙406（東から）

4

6



1

2

3

S1

S6

S9

S5

S4

S2

S3

縄文時代の土器（1／2、1／4、1／6）・石器（1／2、1／3）

10

15

11

12

14

13

弥生時代の土器（竪穴住居 2 出土）（1／4）

35

101

121

152

140

125

157

153

163

164

165

132

170

183

171

174

189

弥生時代の土器（竪穴住居出土）（1／4）

203

208

209

211

221

223

229

315

330

386

弥生時代の土器（竪穴住居・土壙出土）（1／4）

376

374

377

390

404

416

弥生時代の土器（土壙出土）（1／4）

419

423

427

424

429

428

弥生時代の土器（土壙出土）（1／4）

465

469

504

487

486

507

510

515

536

529

530

弥生時代の土器（土壙出土）（1／4）

543

548

550

555

559

558

581

582

584

弥生時代の土器（土壙出土）（1／4）

572

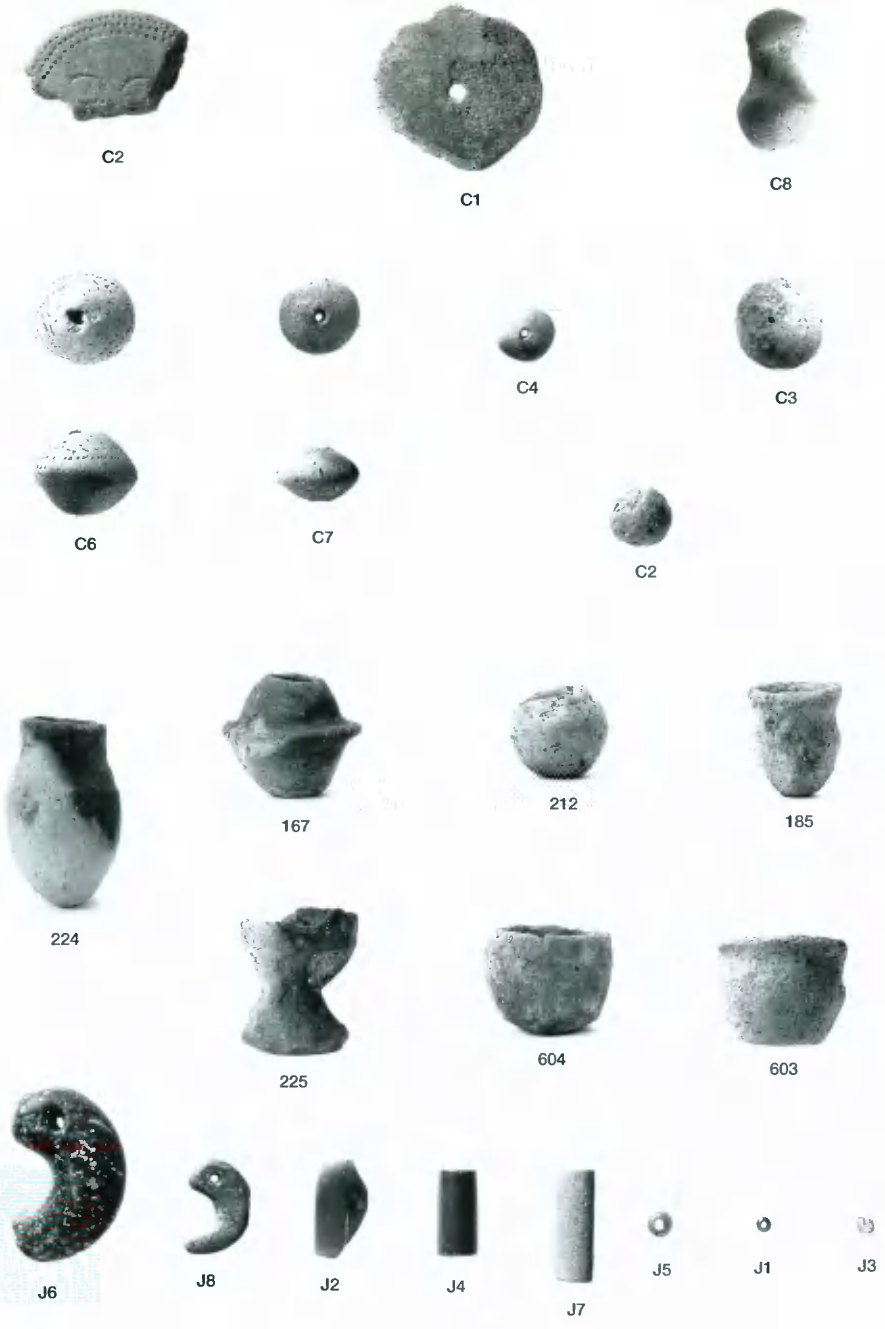
576

574

577

弥生時代の土器（土壙出土）（1／4）

図版38



弥生時代の土製品・小型土器・玉類（1／2）

M15

M8

M9

M7

M20

M19

M12

M13

M14

M18

M1

M11

M3

M4

M5

M10

M17

S34

S16

S65

S13

S35

S66

S33

弥生時代の鉄器・石器（1／2）

S44

S23

S78

S20

S11

S79

S82

S62

S42

S25

弥生時代の石包丁（1／2）

S68

S52

S85

S51

S83

S84

S71

S10

S38

S26

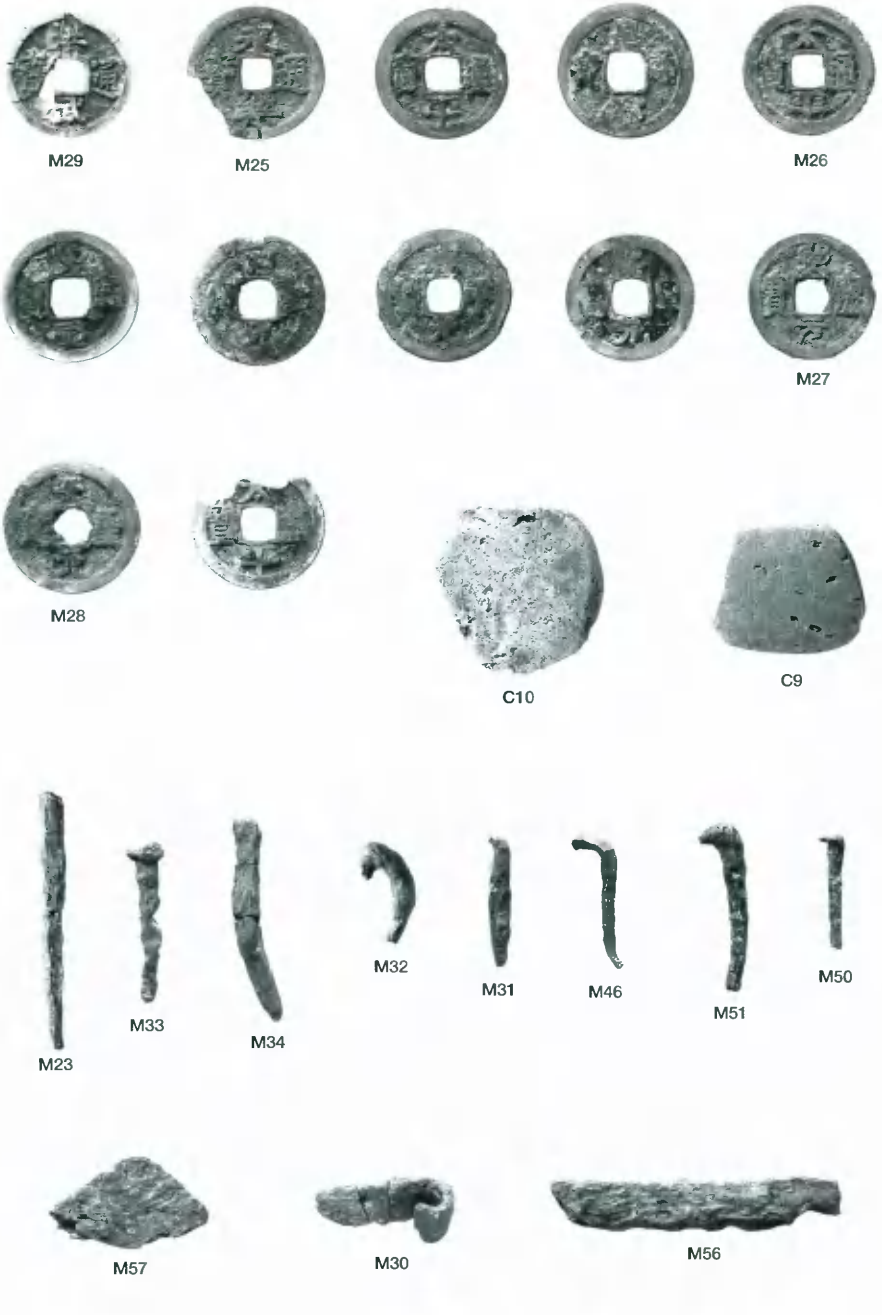
S61

S46

S29

弥生時代の石器（1／2、1／3）

図版42



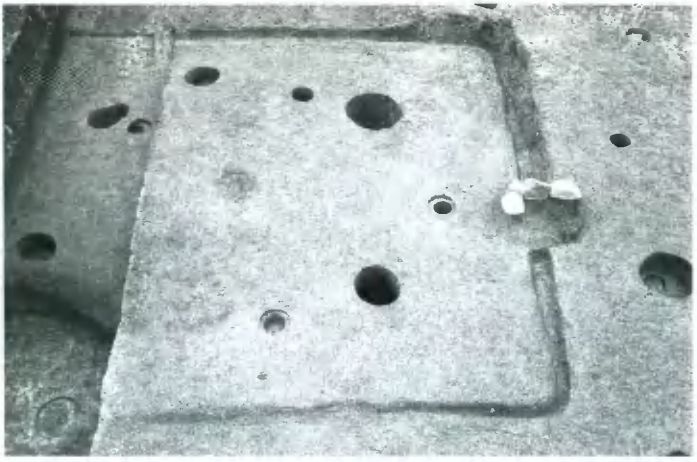
中世の渡来銭・鉄器（1／2）

1．竪穴住居７～10・20（西から）

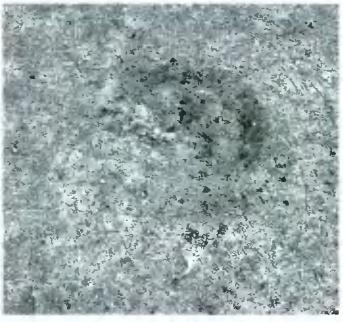
2．竪穴住居11～15・22（東から）

3．竪穴住居16（東から）

図版44

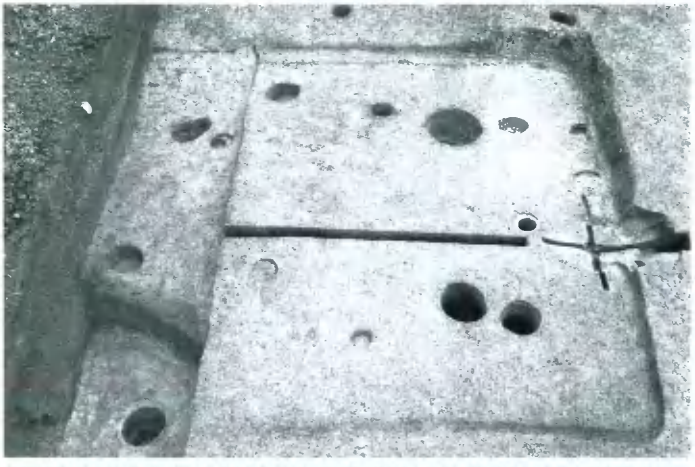


1．竪穴住居19
（北から）



2．竪穴住居19カマド
（東から）

3．竪穴住居19炉跡
（北から）



4．竪穴住居18・19
（北から）

5．竪穴住居18・19の2区調査部分検出状況
（西から）

1．土壙３（北から）

2．段状遺構30
（北から）

3．土壙25（北から）

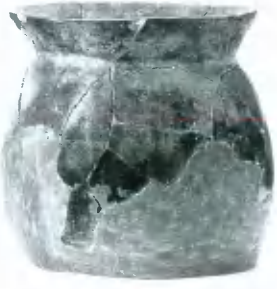
207

211

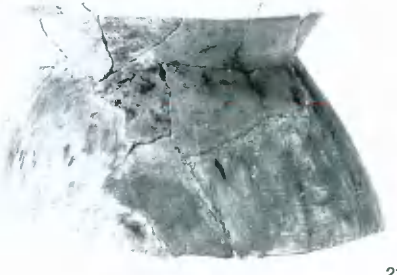
208

210

212



214



215

惣台遺跡段状遺構30出土土器（1）（1／4）

213

216

223

217

224

218

227

惣台遺跡段状遺構30出土土器（2）（1／4）

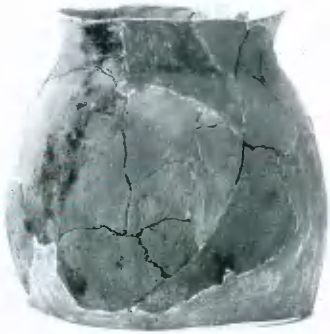
219

228

225

229

226



234

惣台遺跡段状遺構30出土土器（3）（1／4）

235

236

237

238

239

244

物台遺跡段状遺構30出土土器（4）（1／4）

245

246

247

247

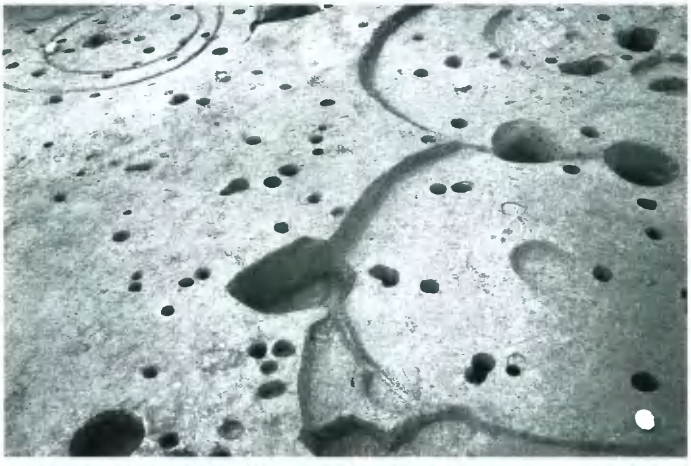
惣台遺跡段状遺構30出土土器（5）（1／3、1／6）

1．野辺張遺跡・惣台遺跡遠景（北西から）

2．野辺張遺跡遠景（南西から）

3．野辺張遺跡全景（北から）

1．野辺張遺跡西側
平坦部全景（東から）



2．野辺張遺跡西側
平坦部近景（東から）

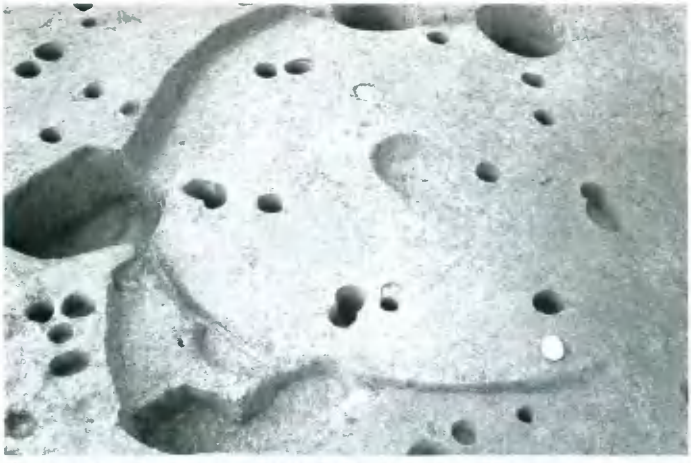
3．野辺張遺跡北側
斜面部全景（東から）

1．竪穴住居１～６、
土壙１～８(西から)

2．竪穴住居７～９、
土壙９～11(南から)

3．竪穴住居10～12、
土壙11～17(東から)

図版54



1．竪穴住居13～16、
土壙16～20(東から)

2．竪穴住居17～19
（北西から）

3．竪穴住居20・21
（北から）

1．竪穴住居22
（北から）

2．竪穴住居23～28
（北から）

3．竪穴住居23～28
土層断面（東から）

1．竪穴住居29～33、
土壙28～30(西から)

2．竪穴住居34、
土壙31（北から）

3．竪穴住居34
土層断面(北西から)

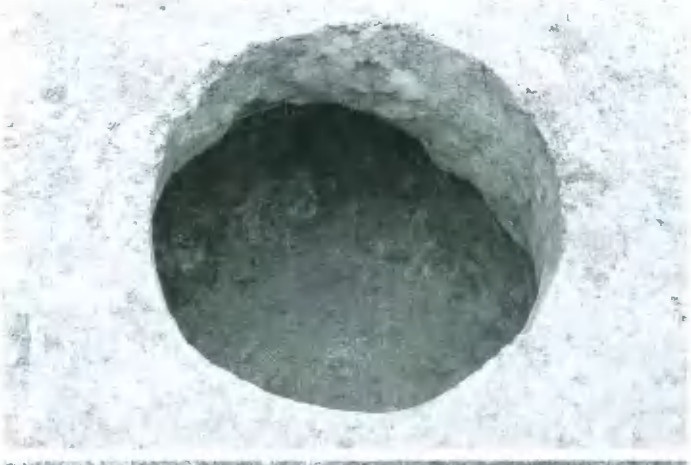
1．先旦山遺跡
1区全景（東から）

2．先旦山遺跡1区の
溝に囲まれた部分
（東から）

3．竪穴住居1～9、
土壙1、溝4
（南から）

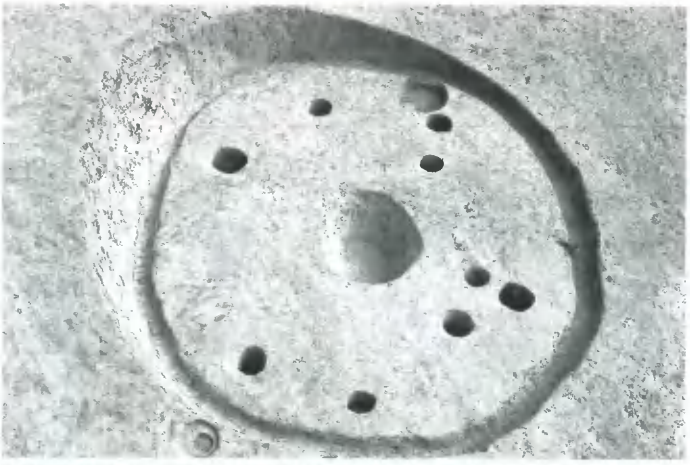
図版58

1．土壙４（西から）



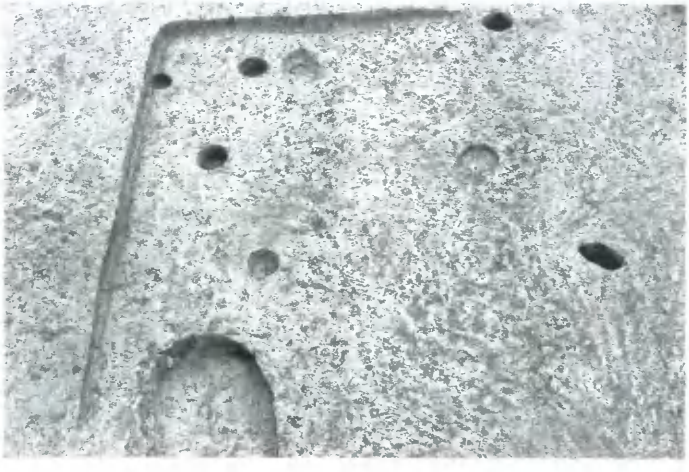
2．土壙５（西から）

3．土壙10（西から）

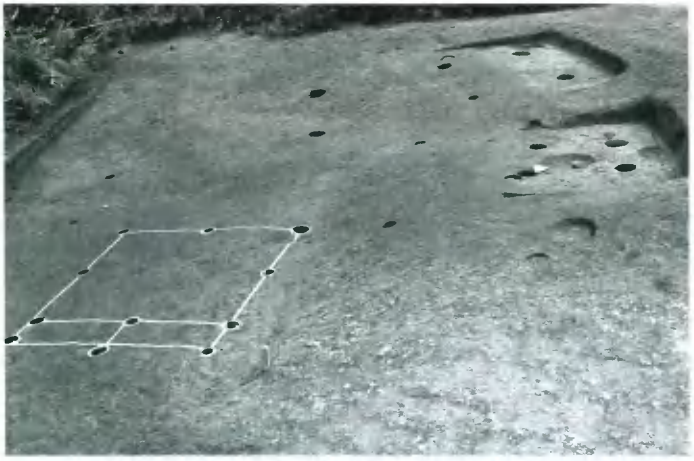


1．竪穴住居９（西から）

2．竪穴住居10・11、
土壙６（北西から）



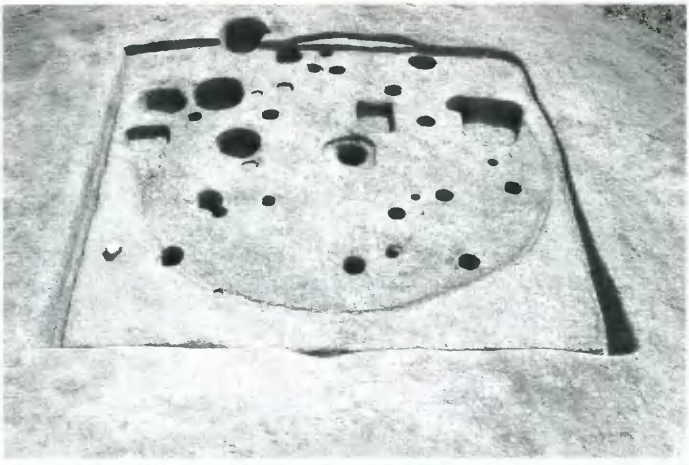
3．竪穴住居14、土壙２
（南西から）



1．竪穴住居15・16、建物1、土壙9・10・25（西から）

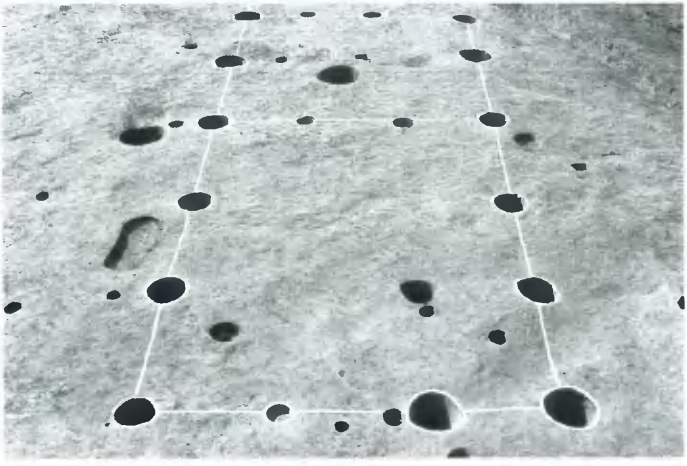
2．竪穴住居13（北西から）

3．竪穴住居15、土壙9・25（北から）



1．先旦山遺跡
2区検出遺構全景
（北から）

2．竪穴住居1～6
上面土器溜まり遺物
出土状況（南から）



3．建物2、土壙8・22
（東から）

図版62

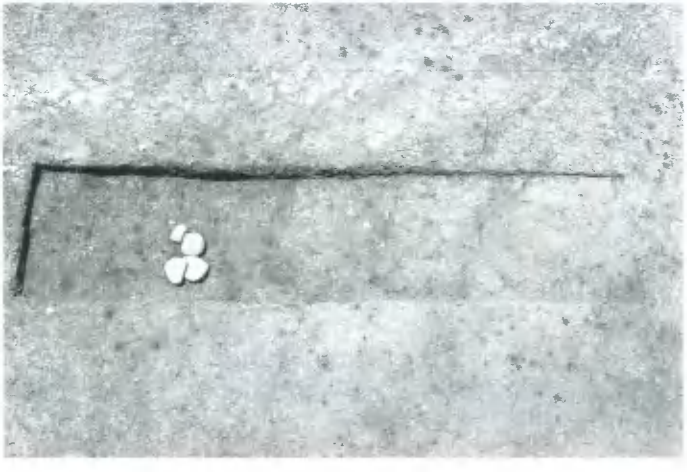
1．先旦山遺跡作業風景（西から）

2．先旦山遺跡作業風景（東から）

3．先旦山遺跡作業風景（北西から）

1．旦山古墳群遠景
（東から）

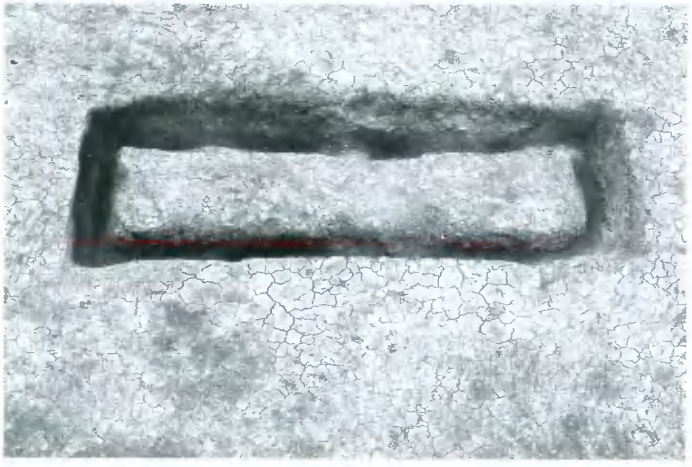
2．旦山１号墳全景
（南西から）



3．旦山１号墳
埋葬施設（北東から）

1．旦山２号墳全景
（北西から）

2．旦山３号墳全景
（北西から）

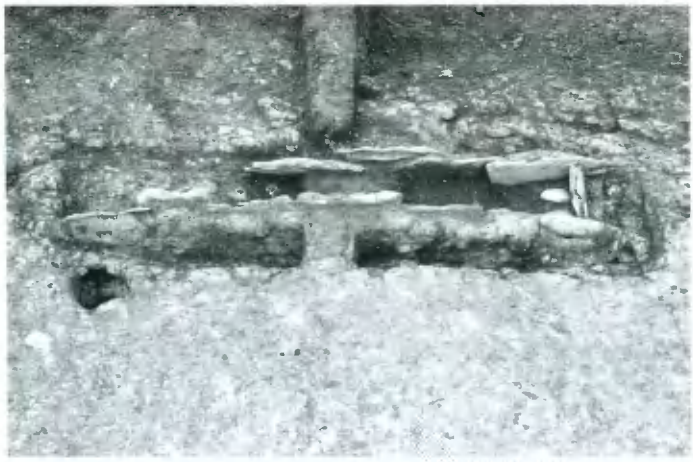


3．旦山３号墳埋葬施
設（北東から）

1．旦山４号墳石室内遺物出土状況（南西から）

2．旦山４号墳奥壁部分遺物出土状況（南西から）

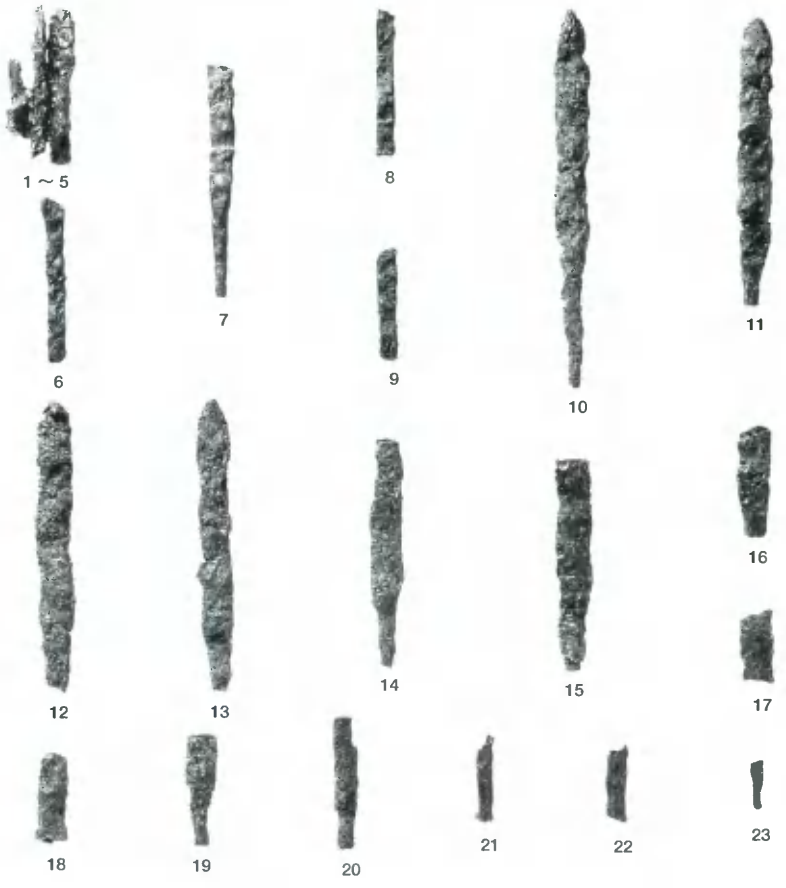
図版66



1．旦山５号墳検出状況（東から）

2．旦山古墳群作業風景（南西から）

3．旦山古墳群から久世町市街地を望む（東から）



24

25

旦山３号墳出鉄器（1／2）、旦山４号墳出土土器（1／3）

旦山４号墳出土鉄器（1／2）、旦山古墳群丘陵斜出土土器（1／3）

1．石室内遺物出土状況（西から）

2．轡出土状況（西から）

1．石室内遺物出土状況（西から）

2．鐙・装身具出土状況（北から）

1

3

2

4

5

6

7

8

9

10

11

12

奥田古墳出土土器（1）（1／3）

図版72

13

14

15

18

19

20

23

24

27

28

奥田古墳出土土器（2）（1／3）

21

22

25

26

30

奥田古墳出土土器（3）（1／3）

図版74

奥田古墳出土鉄器（1）（1／4）

31の鍔

32の鍔

33の鍔

35

36

37

38

42

43

44

45

51

52

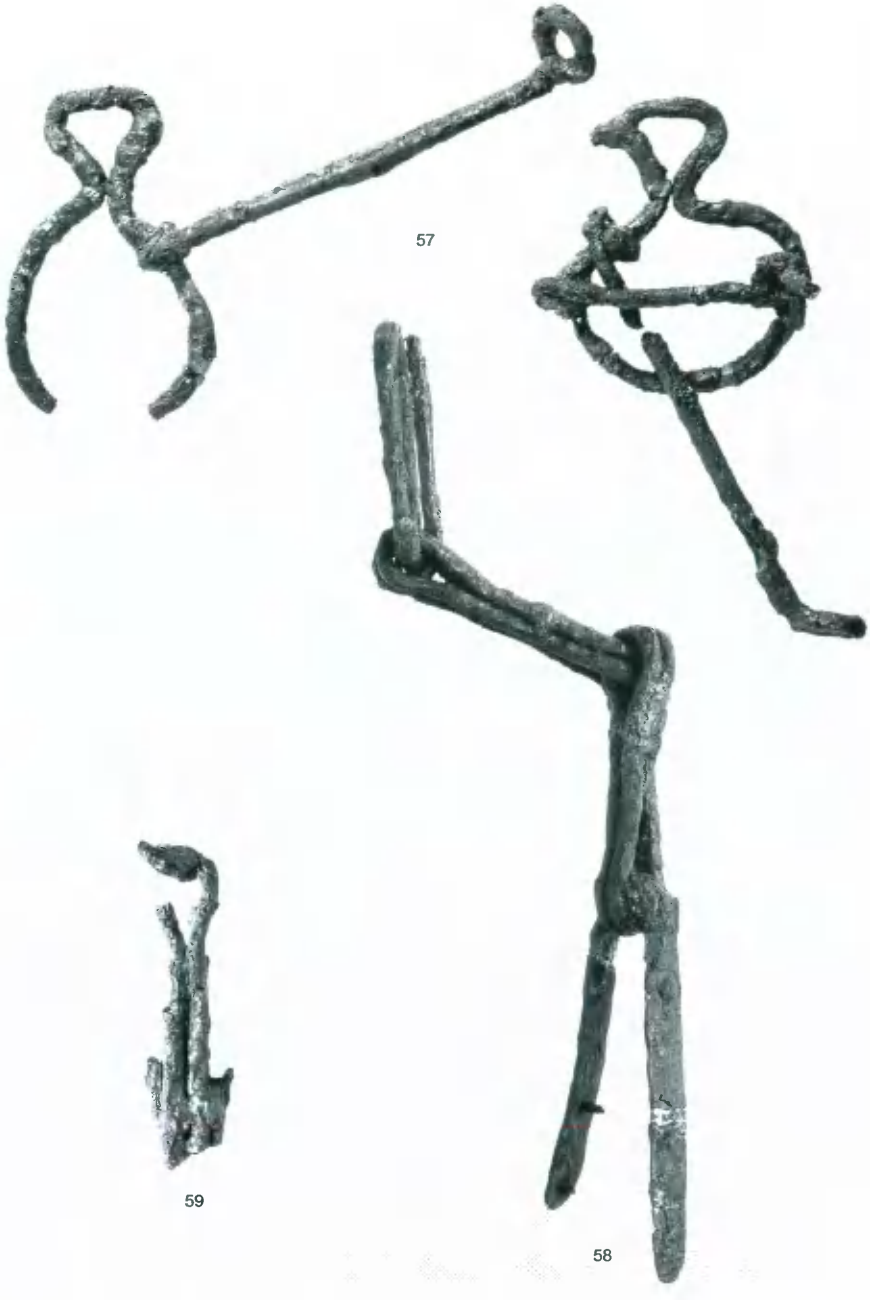
53

54

55

56

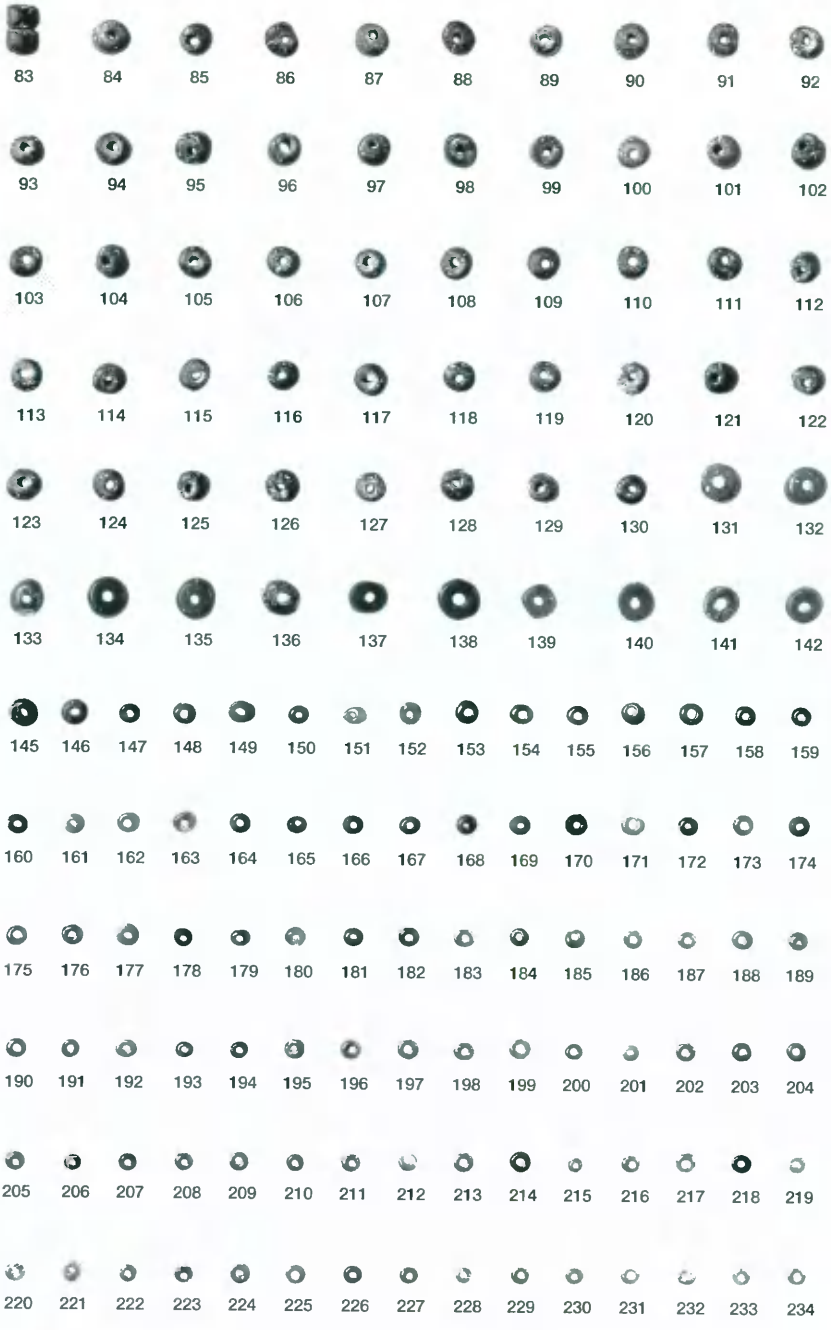
奥田古墳出土鉄器（2）（1／2）



奥田古墳出土鉄器（3）（1／2）

奥田古墳出土装身具（1）（1／1）

図版78



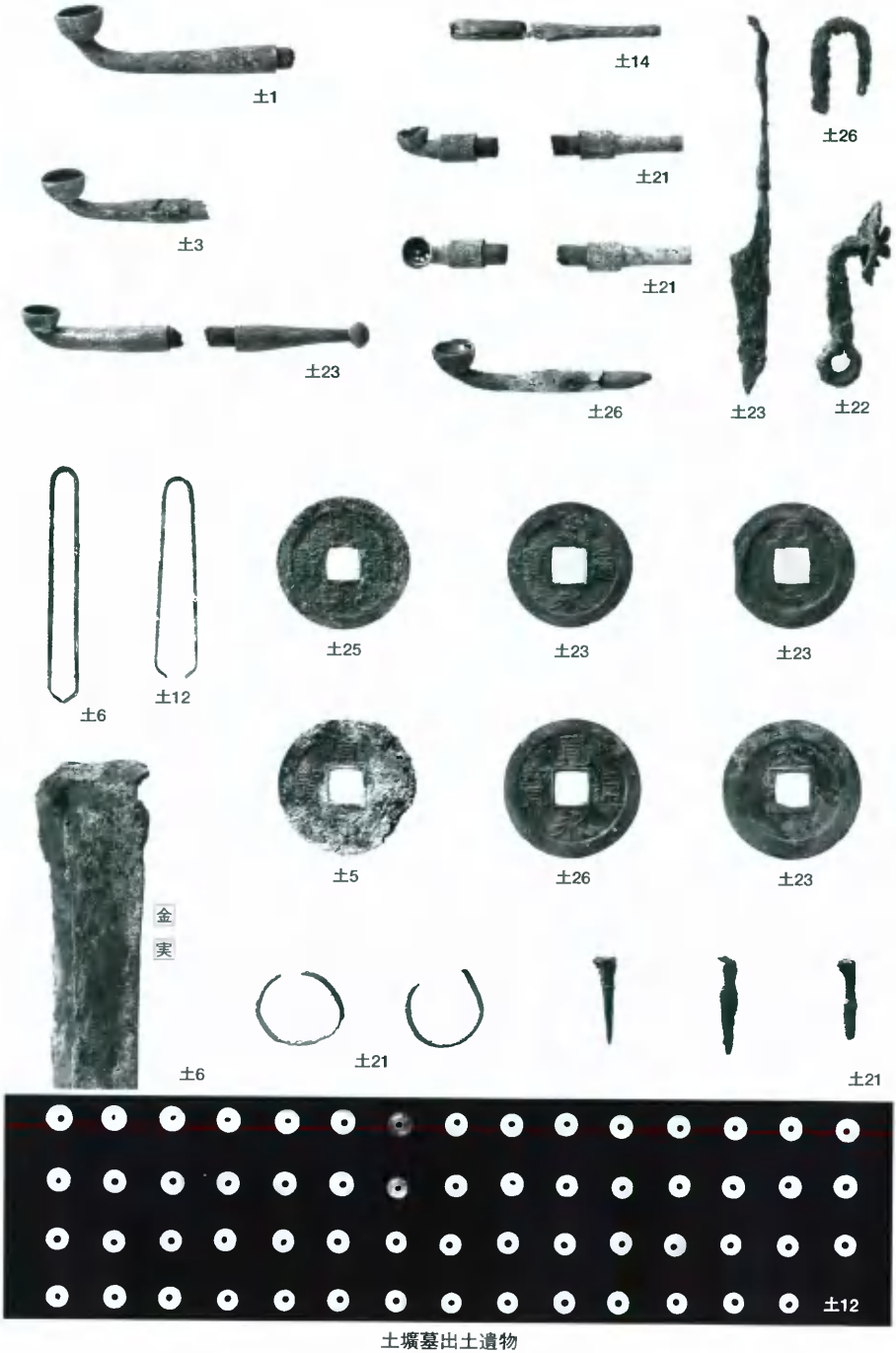
奥田古墳出土装身具（2）（1／1）

1．表土除去後
墓地全景
（北東から）

2．墓石10・11
（北から）

3．土壙墓全景
（東から）

図版80



土壙墓出土遺物

報告書抄録

ふりがな	だんやまいせき　そうだいいせき　のべはりいせき　さきだんやまいせき　だんやまこふんぐん　おくだこふん　すいじんがさこいせき
書名	旦山遺跡　惣台遺跡　野辺張遺跡　先旦山遺跡　旦山古墳群　奥田古墳　水神ケ峪遺跡
副書名	岡山県北流通センター建設に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	136
編著者名	福田正継　浅倉秀昭
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701−0136　岡山県岡山市西花尻1325−3　TEL086−293−3211
発行機関	岡山県教育委員会
所在地	〒700−8570　岡山県岡山市内山下2−4−6　TEL086−224−2111
発行年月日	1999年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
だんやまいせき 旦山遺跡	まにわぐん 真庭郡 くせちょうなかばら 久世町中原	335843	Ⅰ−47	35° 4′ 22″	133° 47′ 10″	H8. 4. 1〜 H9. 11. 31	7,400	岡山県北流通センター建設に伴う発掘調査
そうだいいせき 惣台遺跡	まにわぐん 真庭郡 くせちょうみさき 久世町三崎	335843		35° 4′ 10″	133° 47′ 4″	H6.11.1〜H7.3.31 H7. 7.1〜H7.8.16	2,980	
のべはりいせき 野辺張遺跡	まにわぐん 真庭郡 くせちょうなかばら 久世町中原	335843		35° 4′ 16″	133° 47′ 10″	H7. 10. 1〜 H7. 11. 15	1,000	
さきだんやまいせき 先旦山遺跡	まにわぐん 真庭郡 くせちょうなかばら 久世町中原	335843		35° 4′ 10″	133° 47′ 14″	H7. 8. 17〜 H7. 9. 30	4,100	
だんやまこふんぐん 旦山古墳群	まにわぐん 真庭郡 くせちょうなかばら 久世町中原	335843	Ⅰ−46	35° 4′ 30″	133° 47′ 8″	H7. 4. 1〜 H7. 6. 30	7,400	
おくだこふん 奥田古墳	まにわぐん 真庭郡 くせちょうなかばら 久世町中原	335843		35° 4′ 8″	133° 47′ 18″	H7. 11. 16〜 H8. 1. 15	1,200	
すいじんがさこいせき 水神ケ峪遺跡	まにわぐん 真庭郡 くせちょうなかばら 久世町中原	335843		35° 4′ 56″	133° 47′ 32″	H8. 3. 1〜 H8. 3. 31	300	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
旦山遺跡	集落	縄文時代 弥生時代 古代 中世	竪穴住居・段状遺構 建物・土壙・溝	縄文土器 弥生土器 石器・鉄器・玉類 分銅形土製品	縄文時代の落とし穴 弥生時代の大型竪穴住居 弥生時代の貯蔵穴 弥生時代の鉄器
惣台遺跡	集落	縄文時代 弥生時代後期 古墳時代後期	竪穴住居・段状遺構 建物・土壙・溝	弥生土器・土師器 須恵器・石器 鉄器	墳丘の緩斜面に、弥生時代後期と古墳時代後期の集落が、重複した状態で所在
野辺張遺跡	集落 墓地	弥生時代後期 江戸時代	竪穴住居・土壙 近世土壙墓	弥生土器 石器	帯状を呈する狭い緩斜面に、弥生時代後期の集落が所在
先旦山遺跡	集落 墓地	弥生時代後期 古墳時代後期 平安時代後期 江戸時代	竪穴住居・段状遺構 建物・土壙・溝 近世土壙墓	弥生土器・土師器 須恵器・石器 鉄器 近世陶磁器	溝に囲まれた竪穴住居群で、貯蔵穴を伴う 丘陵上には見張台と思われる竪穴住居を検出
旦山古墳群 旦山1号墳 旦山2号墳 旦山3号墳 旦山4号墳 旦山5号墳	古墳	 時期不明 時期不明 5世紀中頃 古墳時代後期 時期不明	 木棺直葬の主体部 墳丘だけで主体部不明 箱式石器の主体部 無袖の横穴式石室 箱式石棺の主体部	 鉄器 須恵器・鉄器 	沖積平野へ向かって舌状に張り出した丘陵の尾根上と斜面に確認された古墳群 1号墳には河原石を用いた葺石が存在
奥田古墳	古墳	古墳時代後期	右片袖の横穴式石室	須恵器・鉄器 耳環・玉類	7世紀前葉から中葉にかけての横穴式石室を有する古墳 銀象嵌を施した大刀の鍔が出土
水神ケ峪遺跡	墓地	江戸時代	近世土壙墓	玉類	

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 136

旦山遺跡
惣台遺跡
野辺張遺跡
先旦山遺跡
旦山古墳群
奥田古墳
水神ケ峪遺跡

岡山県北流通センター
建設に伴う発掘調査

1999年2月26日　印刷
1999年3月31日　発行

編　集　岡山県古代吉備文化財センター
　　岡山市西花尻1325−3
発　行　岡山県教育委員会
　　岡山市内山下2−4−6
印　刷　西尾総合印刷株式会社
　　岡山市津高651